
ドラえもん のび太とスーパーロボット軍団

909

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもん のび太とスーパーロボット軍団

【Nコード】

N3060M

【作者名】

909

【あらすじ】

【本編】ネコ型ロボット「ドラえもん」と4人の仲間は未来の世界で因縁の相手「鉄人兵団」との二度目の戦いに挑む。そして未来世界で出会った少女は「御坂美琴」と名乗った……。彼女と共に未来世界の戦いに臨む。そして人知れず世界を守っていた10人の男達も新たな仲間を加えて新たな戦いを挑む。

一方、時空管理局、の若きエース「高町なのは」は任務の途上で謎の巨大ロボットに撃墜される。現地の軍に保護された彼女は世界

の現状を知り、戦いを終わらすために現地の軍に志願した。彼女は
その純粹無垢な瞳で何を見るのか？地球連邦宇宙軍少尉となった彼
女の運命は変化を始め、戦いに身を投じていく。ドラえもん達は学
園都市の能力者達と。なのは後々に自分の部下となり、教え子と
なるはずの人物や師と仰ぐ、別世界の日本陸軍航空隊のエースと共
に。

【間章】 ネウロイと呼ばれる脅威が人類を脅かす世界の1944
年に軍事介入を行った地球連邦軍は現地の魔女－ウィッチーとの共
同作戦に臨む。

そんな中、第502統合戦闘航空団に所属するウィッチ、菅野直枝
、大尉は501統合戦闘航空団への出向を命じられ、扶桑に帰国
していた、かつての教官、坂本美緒 のもとを訪れる。直枝は美緒
と共に、軍事介入した、義勇軍、一地球連邦軍一の戦闘空母
「赤城」に乗り込む。そこで彼女たちは世界を混乱させる新たな脅
威の正体を知る。

その名も『ティターンズ』……。彼らはウィッチたちを、本来の戦
争の形、人類同士の争いに誘う。

この物語はスーパーロボット大戦のような世界にドラえもんやリリ
カルなのは、ストライクウィッチーズなどがもし参戦して、戦争に
深く関わったら？これはそんな、もしもの少し不思議な仮想戦記で
す。

★更新は一週間に一、二回程度を目安としていますが、日ごとに更
新する場合があります。7月1日で連載一周年を迎えました。今後
ともよろしくお願いいたします。

第1話「クロース・エンカウンター」(前書き)

初めまして。909と申します。この度初めてこのサイトに投稿させてもらいます。無謀にもスーパーロボット大戦ものに手を出した愚か者です(笑)

この小説はドラえもとスーパーロボット大戦などのクロス小説で、原作崩壊の要素ありな小説です。悪ノリあり、ネタありのギャグ要素もあるストーリーです。元々はドラえもんがスーパーロボット大戦に参戦したら……という仮定で書き始めました。

ガンダムやら仮面ライダーやら色々な作品が絡みます。彼等なりの戦いも始まります。更新は不定期になりますがよろしくお願いいたします。

第1話「クロース・エンカウンター」

― 時に2199年。

地球は日本を中心とした科学技術の急激な発展により、宇宙へ進出し、22世紀中盤頃には宇宙でも有数の科学力を誇るようになっていた。だが、宇宙に進出するようになっても人類同士の争いは絶えることはなかった。22世紀も終盤に入った西暦2191年。コロニー群の1つ「サイド3」が「ジオン公国」を名乗り、地球連邦政府に戦争を起こした。

戦争は人型機動兵器「モビルスーツ」を有するジオン側が優位に立っていたが、

戦争の中盤に地球連邦軍がMS「ガンダム」を開発したことで状況が一変、ガンダムとその量産型MS群の活躍で戦局は地球連邦優位に傾き、翌年1月に終戦合意がなされる。

しかしその戦乱も、今日の戦争への序曲でしかなかったのだ。

2年後のデラーズ紛争、4年後に起こった軍内部の内乱「グリプス紛争」、それに続くジオン残党の蜂起「ネオ・ジオン戦争」。これら長き戦いで失われた人口は軽く60億を超える。

そして、2197年に起こった宇宙文明国家「白色彗星帝国」との戦争。この戦いで払った犠牲は大きかった。

白色彗星帝国の最終兵器たる「超巨大戦艦」の前に、当時の連邦宇宙軍の総旗艦「アンドロメダ」を初めとする連邦宇宙軍艦隊の半数

以上が失われ、さらに戦争終盤、マジンガーZなどの軍団もZは大破、ゲッターロボはパイロットの一人「巴武蔵」が戦死するという打撃を受ける。しかし、人類は絶体絶命の状況を打破すべく切り札を投入した。そしてグレートマシンガーやゲッターロボGなどの各種人型機動兵器の働きもあり、大帝を討ち取る事に成功し、戦争は連邦軍の勝利に終わる。

一方、ミッドチルダ新暦67年。「プレシア・テストロッサ事件」、「闇の書事件」という、2つの大きな事件から数年の時が経過し、2つの事件において、事件を解決した立役者の一人である、第97管理外世界、地球、出身の魔導士「高町なのは」は異世界を管理・統制する時空管理局に正式に入局する一方、地球での平凡な小学生生活も続け、平穏な日々を送っていた。

―この物語はそんな、決してお互いに知りえないはずのない世界の人物たちから始まる。

―西暦1999年12月 日本 東京都練馬区

「ドラえもん!!」

彼の名は野比のび太。一見するとどこでもいそうな小学生である。彼には他の小学生とは違うところがいくつか存在する。

未来のロボットが家にいること、それと――

「今日はまたどうしたのさ、泣いてちゃわかんないよ」

のび太は目から涙を流し、鼻に鼻提灯を作って、部屋で漫画雑誌を読んでいた青く丸い頭で短足な姿の猫とも狸とも取れる姿のロボット――

彼の子孫が一族の暗い運命を変えるために22世紀の野比家から送り込まれた存在――

名は「ドラえもん」――に抱きつく。

ただひたすら泣きじゃくるのび太。彼等にとって、このような光景はもはやおなじみとなっていると言っている。

それがもう一つの普通の小学生とは異なる点――地域の小学校に通う学生の身分を長く続けている――であった。

「うぐっうぐっ……ねえ、僕本当にしずちゃんと結婚できるんだよね!?!」

涙目になりながらも凄まじい勢いでドラえもんに詰め寄る。

完璧に自分が将来結婚するはずのクラスメイトの女の子「源静香」との未来に疑心暗鬼になっていた。これをいさめるのも大変な苦勞である。ドラえもんの苦勞はいかほどか。

長年の付き合いからか、ドラえもんののび太の扱い方は慣れたものである。

諭すように言い聞かせてのび太を落ち着かせる。だがこれで事が済

めば良いのだが、
そうは問屋が卸さない。

「だってしずかちゃん、最近出木杉とばっか話してるんだもん！僕と話をしてくれな〜い！！」

ここで言う出木杉とは、クラス一の秀才である容姿端麗かつ文武両道な少年。まったく驕らない気さくな態度から女子からの人気も高い。

射撃とあやとり以外の何をやらせても人並み以下な自分と殆ど正反對な出木杉を恋のライバル視しているもの、純粹に彼の友情を感じている面もある、実に微妙な関係である。

「当たり前だよ。出木杉君と話すほうが断然面白いし。静香ちゃんの気持ちもわからんわけでもない。」

ドラえもんは冷静にのび太の心に突き刺さる一言を何気なく発する。子守りロボットとして造られた割には白けた態度だが、これがドラえもんの意外な一面であり、現実主義者的な側面を見せた。

「酷いよドラえもん〜！！あ〜ん！！」

のび太は通常ではありえないほどの涙を流して泣き叫ぶ。

「要は君としずかちゃんの結婚風景を見れば安心するんでしょ？」

「そうそう。その通り！！」

「だったらタイムテレビで見ればいいじゃないか。」

ドラえもんはポケットからタイムテレビを取り出し、スイッチを入れる。

そこに映し出されたのは未来の風景だった。

「あ、間違えてダイヤルを22世紀の終わりがごろに合わせちゃった」

「へえ、22世紀の終わり。面白そうじゃない。見ようよ。ね、いいでしょ？」

「うん。僕もここまで未来は見たことはないしね。」

ドラえもんとのび太はその風景に見入った。しかし。ここでドラえもんはある違和感を覚えた。

目の前に映し出された風景は西暦2199年頃で、ドラえもんのいた2125年よりも80年以上未来のはず。

しかし未来的な建物等はなく、風景もほとんど現在と変わらないのだ。交通機関も21世紀初頭とそんなに代わり映えしない。しかし自分達の時代とは違う点が一つだけ存在した。それは4階建てのビルほどもある武器を持った巨大ロボットが街を闊歩しているのが写ったのである。

それも戦闘中のように大砲を撃つような音が断続的に響いている。爆発の閃光が時々瞬き、20mの巨体同士が剣などを持って騎士のように斬り合いをする。

彼等の常識からは考えられないが、明らかに起こっている出来事である。

「……」

ドラえもんは絶句して二の句が告げないようだ。だが、2人をさらに驚愕させる物が場面に現れた。

「あ、あの空に浮かんでる黒い斑点のような大群はなんだろう？」
「待って。拡大してみる」

ドラえもんはテレビのダイヤルを操作し、場面をロボット同士の戦いから切り替える。

「そ、そんな馬鹿な!？」

のび太は思わず叫んでいた。目の前に写っているのは彼らと因縁の深い敵であり、最も苦戦させられた組織の1つだった「鉄人兵団」と呼ばれた異星人の軍隊だった。

―見間違えるはずもない。あの黒いボディ―、あの一つ目。そして中央を飛ぶ金色の図体をした指揮官ロボ。それらが『22世紀終盤の世界にいる』

この光景は2人を唖然とさせるのには十分すぎた。

かつて自分達の手で歴史から消し去ったはずのモノが未来に存在するのである。しかも自分達と戦った時同様に地球に襲来した。これで平静を保てと言う方が無理である。

「ドラえもん、これって戦争だね? しかも地球と鉄人兵団の……」
のび太はあまりにも凄い光景についてこれずに唖然とした表情を浮かべている。

「あ、あ……、馬鹿な……!？」

ドラえもんもまた動揺していた。自分の時代より未来に鉄人兵団が復活している。それも地球と戦争を繰り広げている。その事実がドラえもんの心を激しく揺さぶっていた。

「ドラえもん、落ち着いて！」

「あ、ああ……すまない」

「これはどういうこと？」

「見ての通りさ。鉄人兵団が復活したのさ。200年遅れでね」

「なんだって……！？それじゃあの時僕たちがしたことは……！？」

「鉄人兵団の侵攻を遅らせただけさ。歴史を変えてもどこかで流れが元に戻ると言う話を聞いたことがある。つまり進化の過程で鉄人兵団が出現するのは歴史上の必然だったのさ」

ドラえもんの言う、この現象は「どこかの時代の流れを変えたとしても」、「結局は同じような結果に至るといふもので、SFのタイムトラベルを行う作品で多く見られるケースである。

例として挙げれば「もし、第2次世界大戦で日本やドイツを勝たせたとしても、戦闘で得た資源の分配や体制の違いから結局は対立していき、冷戦と同じ事になる」などだが、彼らが目にした光景はまさにこの現象そのものであった。歴史の流れをどこかで変えても結局はどこかで同じような事柄が起こるといふ。

ドラえもんのび太は例えようのない空しさに襲われていた。

「鉄人兵団は歴史上で必要な進化だっていうの……！！？」

「……たぶんね。でも何故こうなってしまったんだ？皆目見当が付かない」

ドラえもんは深刻な表情でタイムテレビの場面を見ている。

「原因はわからないの？ほら、前に西遊記の主役になって妖怪達と戦った時みたいにさ」

のび太は過去に一度、妖が人間を支配した歴史に改変されたのを元に修正した事件を思い出し、懐かしそうな声を出した。しかし今回はそう単純ではない。

「あの時みたいにな代が特定できればいいんだけど、今回はどの年代でこうなったかまったくわからない。この時代に行けばわかると思うんだけど…」

「西暦2199年、とんでもない未来だけど…行けば何かがわかるかも知れない。僕はとりあえずみんなに電話してくる！」

そういうとのび太は階段を駆け下りていった。冒険になると、のび太は普段の性格が鳴りを潜め、ここぞという時に勇ましさを感じさせる性格になる。この一面はドラえもんが関心させられるところでもある。

「のび太くんたら、こういうことになるかと急にかっこよくなるんだから…」

ドラえもんもとりあえず何故兵団が復活したかを探るべく、タイムテレビを操作する。

「未来に何があったんだ!? くっ…」

タイムテレビを凝視しながらドラえもんは戸惑う。

のび太が電話機に走ってから30分ほどで彼の親友達が野比家に集合した。皆、のび太やドラえもんと長き年月を共にしてきたかけがえの無い仲間である。のび太から電話があるや否や、すぐさまそれぞれ家を飛び出し、駆けつけたのである。

「…と言う訳」

「そ、そんな…鉄人兵団が…」

「復活したって言うのかよ!？」

メンバーの内の紅一点「源しずか」と、かれこれ何十年とこの町
のガキ大将に君臨し続ける、永遠のガキ大将「剛田武」(通称ジ
ヤイアン)が信じられないと言った声を出す。

すぐさま、のび太が普段の彼からはとても想像できないほどに冷静
な声でその疑問に答えた。

「ああ、僕達も信じられなかったよ。だけど…これは事実だよ」

「のび太ってこういうことになるのかっこよくなるなあ…」

メンバーの最後の1人の小柄な少年「骨川スネ夫」がのび太に感心
するようなそぶりを見せた。のび太もその事は自覚していたのか、
苦笑を浮かべる。

「20 回以上も大冒険してればこうなるさ。それに今回のこの
事は、僕達が守った地球がまた奴らにメチャクチャにされかねない
んだ」

「けど未来の地球には軍隊だってあるんだろ?それに宇宙戦争なん
か始めて僕達が勝てるはずない!」

そこまで言った時、ジャイアンが呆れた声でスネ夫に言い放った。

「その台詞、ピシアと戦った時も言ってたよな。あの時も勝ってたん
だ!今回も勝つ!」

「2人とも、今はそんなことで言い合ってる場合じゃない!」

「そう。あの戦いで友達になれたと思っていた敵側のロボットの美少女「リルル」と言う大きな犠牲を払って兵団の存在を抹消したと言うのに、

何故、彼らが復活し、今また未来の地球の平和を脅かしているのか。

「ねえ…ドラちゃん。何のためにリルルは消滅したの？これじゃ無駄死にじゃない…！あたし達がやった事は何だったの！？」

この出来事にしずかは取り乱し、目に涙を浮かべて号泣する。

「無駄じゃなかった。君がやってくれたことで地球は救われた。ザンダクロス達はいないけど、僕達がケリをつければいいだけだ」

ドラえもんは自らの決意を表すようにしずかに優しく微笑む。のび太も同様の気持ちだろうか、凜とした表情を浮かべた。

「よしこれで話は決まったあ！さっそく未来の世界へ殴りこみだ！！」

「おう！」

「しょうがない…こうなったら…おおおっ！」

スネ夫もやけくそになって叫ぶ。ジャイアンが仕切る格好で5人は矢次にのび太の机の引き出しに隠されているタイムマシンに乗り込む。

年代もののタイムマシンではあるが、幾度かの改良により性能は上がっている。2125年以降の未来へのタイムトラベルにも十分耐えうるはずとドラえもんはタイムマシンのスイッチを入れ、エンジンを開始させる。「いざ未来の世界へ！！」

5人は意気揚々と未来へのタイムトラベルを敢行した。これが新たな冒険の幕開けであった

―西暦2199年 地球 地球連邦軍極東支部

「ブライト、今度の敵はどこの異星人だ？」

「ああ。なんでも別の銀河の軍隊で、『鉄人兵団』と言うらしい。

その一部隊が日本近海に接近中だ。そこで我々に出動要請が出されたわけだ」

基地の通路で話をしている彼らはこの時代の地球圏を統治する国家にして、人類の悲願であった全ての国家の統一を成し得た「地球連邦政府」の保有する軍隊であり、

20世紀頃に構想された国連常設軍の流れを汲む「地球連邦軍」の中でも

数多の戦乱を地球側の勝利に導いた「連邦軍最強」を謳われる艦隊『ロンド・ベル』の指揮官「ブライト・ノア」と、彼の長年の戦友であり、部下でもある連邦宇宙軍きつてのエースパイロット「アムロ・レイ」である。

今回の事態に対しての対応として彼らが召集されたのである。

「科学要塞研究所と新・早乙女研究所からは鉄也くんとゲッターチームが召集に応じてくれた。じきにこの基地に到着するはずだ」この時代には日本列島などで多くの未知の資源やエネルギーが発見されており、その研究が盛んに行われている。しかし必然か、そのエネルギーを悪事に利用しようとする輩も多い。そこで強大な力を持つ機体―俗に言う「スーパードロボ」―が造られた。

多くが実戦に投入されたが、白色彗星帝国との戦いで一部を除いた機体は皆、戦闘不能状態に追い込まれていた。

今回、援軍として派遣されてきたのは即応で動ける状態にある2機であった。一機はスーパードロボの始祖的存在「マジンガーZ」の正当な後継機「グレートマジンガー」、同じく戦闘用に開発された合体型スーパードロボ「ゲッターロボG」である。

元々ゲッターロボは宇宙開発用として造られたが、強力になっていく敵に対抗するために純然たる戦闘用の新型機の開発が行われた。その成果が「ゲッターロボ G」なのである。

「……やはり甲児君の怪我は治っていないのか？」

「鉄也君の話だと、まだショックから立ち直れていないらしい……」

ブライトはかつての仲間の一人の事が気がかりだった。

それは悪の野望から地球を守る為に戦い、陥落した黒鋼の城。その操縦者「兜甲児」。前大戦で失われた犠牲は大きかった事を示す事例の一つである。マジンガーZの敗北は全ての人々に衝撃を与えた事件であったと同時に、当時の戦線の情勢すら変えてしまった重大な出来事であったからだ。

「しかし…、ああも無残に破壊されてしまったとは未だに信じられん」

「甲児君、立ち直ってくればいいんだが…。あいつらは何と言っている？」

あいつらとは、エースとして多くの戦争で部隊の戦線を支えた人物。ガンダム系の高性能機を駆って、戦線で名を馳せ、戦局を左右するとまで言われた者達。

「2人とも準備が出来次第、こちらに向かうと連絡が入った」

「本当か？」

「なんでもたまたま一緒のところでお出くわして、その関係らしい」

「あいつ等らしいな」

会話を交わしていく内にジェットエンジンの轟音が響いてきた。どうやらグレートマジンガー達が到着したようだ。

「…来たか。たしか外に出るにはこのドアだったな」

ブライトとアムロは最寄のドアを開けて外に出る。

それぞれのパイロット達が機体から降りてブライトとアムロに敬礼する。ゲッターロボGの「流竜馬」、「神隼人」、「車弁慶」。それにグレートマジンガーの「剣鉄也」。いずれも血気盛んな10代後半の若者ばかりだが、

侮れない事に彼らは先の戦乱で人類に勝利をもたらした、英雄、なのだ。一癖ありそうな面構えと言っても過言ではない顔つきは彼等の持つ勇ましさを表していた。

「うむ、みんなよく来てくれた。積る話もあるだろうが、君達にはさっそく作戦会議に入ってもらおう」

「了解。相変わらず人使い荒いですね」

鉄也が諦めたように言う。やれやれとため息をついている。

「こればかりは治してほしいなあ」

弁慶もここぞといわんばかりに呟く。

「2人ともグダグダ言うのは後にするんだ」

「わかってる」

竜馬の言葉でこの場は収まったが、2人ともブライトの人使いの荒さにまいていそうさ。

かく言う竜馬もトホホとため息をつきながら作戦会議室に向かう。それをブライトは気付いているのだろうか。

― 同時刻 日本 某所

「何かの反応が？」

「ああ。反応があった地点から一番近いのは高町、お前だ。行ってくれるか？」

「了解！」

この、通信に答えた11歳ほどの少女の名は高町なのは。地球人では珍しく、類まれな魔法を扱う、天部の才能の持ち主であり、2つの事件を解決に導いた『時空管理局』きっての若きエースの一人。

ちなみに時空管理局とは、多くの平行世界を傘下に収めている機構であり、軍隊と警察、裁判所の3つを合体させたような組織である。彼女はそこに属していた。

そして地球では「平凡な小学5年生の少女」である。笑顔を絶やさない明るい性格であるが、軍隊に近い性質を持つ組織に所属しているせいか、最近は凛々しさも感じさせるようになったと言う、魔法が使える以外は普通の女の子である。彼女は、思いがけないエネルギー反応の調査を命じられた。しかしこの時、彼女の運命は思いもよらない方向に暗転していた。

「あれをテストの相手になさるのですか？」

男と女の半身が合体した様な容姿の人物が彼より上位に位置する地位を持つ巨人に話しかける。巨人は玉座から腰を上げると同時に答えた。

「うむ……、ゲッターロボ號のテストにちょうど良い。調子はどうか？」

「機体は問題ありませんが、パイロットはいかがしますか？」

「まだ奴らの洗脳は終わっていないのだろうか？ クローンの、巴武蔵、を使う」

「ハッ！ しかし管理局にこの場所を知られる事に…」

「かまわん。知ったところで何もできんよ。あの連中にはな」

「わかりました」

とある場所に隠された基地から3つの発進口が開放される。

どうやら司令官らしき人物は管理局を蔑視しているようで、無然とした声で命令を発した。

「ゲッター1、2、3、発進準備完了！」

その場にいた兵士から発進準備完了の報告がなされる。

「発進させろ！」

‘彼’の号令で3機の戦闘機が発進する。その姿はかの‘ゲットマシン’に酷似している。3機は音速を遥かに超える速度でなのはに迫った。

「ふえ！？ な、何なの！？」

突如襲撃してきた3機の戦闘機と思しき兵器はミサイルやバルカン砲などで攻撃してくる。牽制とはいえ、こちらの砲撃を容易く回避したところを見ると、奇抜な見かけによらず機動性は良いようだ。ミサイルを放ったとおもうと、戦闘機の編隊は上空に向けて上昇を始めた。

―その次の瞬間、なのは己が目を疑った。3機編隊の戦闘機がそれぞれロボットと思しき形態に変形していくのだ。先頭の蒼い機体から順に合体していく様は敵ながら壮観であった。

『チエエエエンジ！！ゲッターアアアア………號！！』

その叫びと共に一機の巨大ロボットがなのはの前に姿を現した。その名もゲッターロボ號、かのゲッターロボやゲッタードラゴンの流れを汲む、3機合体型スーパーロボットであるが、初代やGとは違い、ゲッター線と呼ばれるエネルギーを動力には用いていないが、そのポテンシャルは高い。

「嘘お！？き、巨大ロボットに合体した！？」

驚きを隠ししれない様子で彼女はそのロボットを見上げる。

（こんな物が存在しているなんて！）

青を基調としたカラーリングはまるでSFの主人公メカのような印象を与えている。大きさも並のビルくらいはある。

「ナックルボンバー！！」

不意にゲッター號の拳の部分が音速以上の速さで撃ち出された。俗に言う「ブーストナックル」や「ロケットパンチ」の類である。なのははとっさに防御魔法のプロテクションを展開したが、高速で、大質量の兵器を生身の身体に食らえば無事ではすまない。それにあれだけの質量では防御は意味をなさないだろう。防御を諦め、回避に専念した。

しかしこの瞬間、彼女は自分の体の異常に気付いた。

（そんな……体が思うように動かないッ!?!）

彼女は9歳の時から魔導師として事件に関わってきた。しかしその幼すぎる年齢ゆえに自分自身の肉体にかかる膨大な負担に気付かなかった。

それが今最悪の形で現れているのであった。

「こんな時に……! でも……こんなことで負けるわけにはいかないの!」

ゲッターロボ號の脚部より鋭利な刃が展開され、なのはに向けてその凶刃を奮う。彼女は完璧な体調ではないもの、小回りが効く機動でなんとかレッグブレードの刃を避けていく。

（どうということなの!?! このロボット……どう考えても今の地球の科学じゃ造れないはず……それに何で日本語が……）

―そう。この巨大ロボットから発せられている言語はどう聞いても彼女の故郷の世界の母国「日本」で使われている言語―日本語―であつたからだ。

戸惑いつつも魔法で攻撃を仕掛けるが、よほど堅牢な素材を装甲に用いているのか、こちらの攻撃にもさほど堪えた様子は見られない。

「いくよレイジングハート！」

‘ All right ’ と応えるのは彼女の愛杖であり、常になのはをサポートしてきた「レイジングハート・エクセリオン」。なのはは魔力増幅用のカートリッジ（見かけは弾丸に近い）を装填すると、自身の最も得意とする攻撃―魔力による砲撃―の体勢に入った。

「ディバイイイン…」

なのはが動きを見せると同時に、ゲッター號のコックピットで操縦者であるクローン体の「巴武蔵」は不敵な笑みを浮かべた。その笑みは彼の生気のない瞳と相まって不気味ささえ感じさせる物だった。「チャージなどせん」と言わんばかりにさらなる動きを見せた。

両腕の拳を組み合わせると同時に、拳にプラズマを帯びたエネルギーと竜巻を発生させ、それを一つに併せる。瞬時に臨界状態になったエネルギーをなのはが砲撃を放つよりも早く、一気に解き放った。

「マグフォースサンダーアアッ！！」

叫びと組み合わせた両腕から竜巻を伴った高圧電流を撃ち出す。この技はゲッターロボ號の持つ兵器の一つで、竜巻の射線軸にいるすべてを薙ぎ払う。要するに対人用にはあまりにも威力過剰な

代物なのだ。

マグフォースサンダーは凄まじい大きさの竜巻となってなのはを襲った。

竜巻に飲まれたなのはの身体を轟音と共に烈風がカマイタチのように切り刻んでいき、斬られた傷から鮮血が噴出し、彼女のジャケツトを赤く染めてゆく。悲鳴を上げる暇すらないほどに 加速的に増大していく出血のせいで意識が薄れていくのが自分でも理解できる。視界がぼやけ、手足の感覚もだんだんと無くなって行く。自分はこのまま死んで行くのだろうか。

次の瞬間、彼女をとどめの何万ボルトもの高圧電流が直撃し、自覚する前に意識を消失させた。

(み……ごめ…)

仮にもエースである自分が未確認とは言え、大して反撃する間も与えられぬまま、管理局が、魔法に劣る前時代の遺物、だと嘯く質量兵器に落とされた。

彼女にとって初めてのことだった。現に同僚からも「なのはが質量兵器などに後れを取るなど、万に一つもありえない」と評されていたし、自分もそれを当然としていたし、自負してもいた。

―これは幼いうちに強大な力を持ってしまい、その力に溺れた彼女への罰なのだろうか。 やがて膨大な電流の負荷に耐えきれなく

なったレイジングハートが激しい爆発を起こし、爆炎が上がる。ゲッター號はなのはの撃墜を確認すると、その力を誇示するかのよう
に再び戦闘機に分離し、悠々と大空へ消えていった。

この、短い戦闘が管理局によって「なのは撃墜事件」と呼ばれる事件の顛末である。

現場に時空管理局の救援部隊が到着した時、現場には膨大な血痕と、何かが発射した形跡が残されているだけで、武装隊を動員しての必死の捜索にも関わらずなのはの姿はどこにも確認されなかった。

救援に駆けつけたなのはの同僚「ヴィータ」はこの凄惨な現場の状況に愕然とした表情を見せた。辺り一面を赤く染める血の跡。どう考えても生存しているのか怪しい状況だった。

そして彼女が持っていたデバイス「レイジングハート・エクセリオン」の一部分らしき残骸が転がっているなど、まさに生存は絶望的な状況だった。

隊員の一人が促すように彼女の肩に手をかける。

「嘘だッ！！アイツが落とされるわけねえ！！こんなことが……！」

ヴィータは事実を受け入れられず、時より体を震わせて涙を拭おうともせずにふらふらと歩きだす。

「気持ち分かる。だがこれは事実だ！」

「……てめえ、なのはは死んだっていうのか!？」

ヴィータは隊員のバリアジャケットを荒々しく掴んで怒りを露わにするが、顔には涙を浮かべている。戦友が死んだことを信じられず、ただ泣くことしかできない。

「俺だって信じたくは無い！だがこの状況から言ってそうとしか考えられん！」

「く、くううう……くっそおおおおおおお！！！！あたしが、あたしがついてれば……ちくしょおおお！！！！」

それは戦友を失ったというやり場の無い悲しみの発露でもあった。地面に拳を何度も叩きつけて、感情のままに慟哭の叫びをあげた。

もちろん彼女だけでなく、救援に当たっている全員が悲しみを抑えるような悲痛な表情で現場を見つめている。

こうしてこの日は歴史に「管理局にとって最大の損失を出した日」として記録される事になった。彼女の事を知る誰もがこの悲報を信じられないと口を揃えたが、行方不明となったのが未知の管轄外世界だったがため、表立っての搜索は不可能に近く、周囲の搜索は続けられたもの、手掛かりを掴むことも叶わず、なのはの消息の調査は打ち切られてしまった。

第1話「クロース・エンカウンター」(後書き)

なのは撃墜をオーバーにしてみました。相手がスーパーロボットならこのくらいになるとの予測で。ヴィータにはかわいそうですが：

第2話「魔道対超・科学」(前書き)

フエイト・テストロッサ&ヴィータ対ジオン軍名機群です。

パワーバランスはMS側にやや有利です。

第2話「魔道対超・科学」

撃墜されたはずのなのは、一体どこに消えたのか。

実は彼女はたまたま近くを飛行中だった連邦空軍のディッシュ連絡機の乗員によって保護されていたのである。爆発を観測したパイロットが機体向かわせてみると、重傷を負った一人の少女が倒れているのを乗員の一人が発見、着陸して直ちに保護したのである。

―第二話

連絡機の機内では重傷患者の応急処置に負われていた。考えられるかぎりの処置でどうか一命を取り留めるには至ったが、まだ安心できない状況であった。

「この子はいったい何故あんなところに？」

「さあ？ 身分証明書らしきものを見てみたが、どうやら名前からして日本人のようだが、‘時空管理局’なる組織など聞いたこともない。それに彼女が持っていた杖には高度な人工知能が搭載されているようだ」

「何のために？」

「わからん。とにかく近くを航行中の海軍か宇宙軍の艦船はないのか？ この機の設備では応急処置が精一杯なんだぞ」

「まあ落ち着きたまえ。君達がうろたえてどうする？」

「こ、これは中将閣下！」

少女の治療に当たっている兵士から「中将」と呼ばれた彼の名は「ミスマル・コウイチロウ」。

地球連邦宇宙軍第3地球軌道艦隊司令長官を努める連邦軍の誇る「名将」の一人。欠点は超がつくほどの親バカ。大学を出たばかりの娘を溺愛しており、娘のことになるとなりふり構わず行動してしまう点が玉にキズであった。しかし一度、仕事モードに入れば、名将の普通の有能ぶりを発揮する。

彼は対鉄人兵団の太平洋方面戦線の指揮を執るべく、この機体で極東支部に向かっていたが、機が直面したこの事態にうろたえる兵士達を落ち着けるため、医務施設があるこの一角に足を運んだのである。

「この子の容態はどうなのかね？」

「応急処置ではありますが、治療用ナノマシンの注入を行った事でどうか安定しましたが、やはりちゃんとした施設のある艦船でないといこれ以上は…」

「あいわかった。極東支部にラー・カイラムが寄港しているはずだ。彼らにこの子を託す。直ちに連絡をとってくれたまえ」

「了解！」

コウイチロウは連絡要員の兵士が去ったこの一室で少女が助かる事を心から願い、自身も治療の手伝い（と、言っても包帯などを巻く簡単な作業だが）に当たった。

見たところ小学生ほどだろうか。まだこんなに幼い少女が何故こんなにも痛々しい傷を負っていたのか？疑問が頭に浮かぶが、今はそれどころではない。彼らを乗せた機は日本の上空に到達しつつあった。

―同時刻 日本

「この次元世界でなのはが消息を絶ったんだね？」

「ああ。くそっ！あたしがあいつの傍にいていれば…」

「ヴィータのせいじゃないよ。気づいてあげられなかったのは私も同じだよ」

「……すまねえな。お前にまで迷惑かけちゃって」

ヴィータと会話をしているこの小学生程度の年のころの金髪の少女は「フェイト・T・ハラオウン」。消息を絶ったのは一番の親友であり、戦友でもある11歳の小学5年生である。

彼女は親友の悲報を知らされるも、戦死の可能性を断固として否定、執務官である義理の兄「クロノ・ハラオウン」や提督を務め、管理局本局内でも高い発言力を持つ義理の母「リンディ・ハラオウン」の計らいもあって、独自になのはの搜索に乗り出したのである。

2人はこの世界の首都と思しきこの町を散策していたが、町並みなどの風景にある一種の既視感を感じていた。

「ねえヴィータ。さっきから思ってたんだけど、ここってどう見ても日本…それも東京だよね？」

フェイトは先ほどより覚えていた既視感をヴィータに問いかける。するとすぐに

「どう見たって東京だな…。あそこに都庁のビルも見えるし」との答えが返ってきた。

腕にはコンビニで買ったと思しき新聞を持っている。

「お、おいテストタロツサ…、これを見てみる！」

フェイトはヴィータに促されるように、新聞記事に目を通す。そこには信じがたい事実が書かれていた。

新聞の日付は「西暦2199年6月」と記されており、新聞の記事には『地球連邦政府、宇宙軍の増強を正式決定。サイド2、フロンティアサイド駐留部隊には新型可変戦闘機配備の模様。新マクロス級、アレクシオンの建造が急がれる…』と大きく報じられていた。

「これは… 冗談じゃないよね？」

思わず疑問を声に出すが、エイプリルフルはとっくのとうに終わっているし、辺りを行きかう人々の様子から真実と判断するしかなかった。

「あたしも一瞬何のジョークだと思ったぜ。けど本物……らしいな」
「じゃあなのははこの世界の軍隊か何かに保護されたっていうの？」
「たぶん。見たところ日常関係以外の技術は凄く発達してるようだし」

ヴィータはこの世界を一目見た感想を率直に言う。その言葉は実能的を得ていた。ただしあることを除けばだが。

彼女らは街を闊歩しつつ、どう考えても日本としか思えない光景の広がるこの世界に驚きを隠しきれなかった。ビル、山々・そして道路を行き交う人々。何もかが地球とまったく同じなのだ。驚かないはずがなかった。

しばらく歩いていると「ズン」という地響きと共に見たこともないような、彼女たちの常識から見ても「非常識」な巨大な人型ロボットが現れた。一つ目を輝かせ、銃や斧で武装した、如何にも兵器然

とした姿に啞然とさせられてしまう。

彼女たちは知る由もないが、それらは、過去の戦争に敗れ去ってもなお、連邦に抵抗を続ける者達、。

彼らの物言いを借りるならば、「宇宙移民者の地球からの呪縛を解き放すための正義の剣」とでも言うべき存在。

その名も「ジオン公国軍」。彼らはその生き残りなのだ。

「ザク？F2」、「ドム・トローパー」など、かつての戦争で使われた名機で構成される部隊。

この時代では旧式化した兵器ばかりだが、並の連邦軍の部隊では到底太刀打ちできない老練さを持つ彼らはちょうど近くの駐屯地を襲う途中だったのである。もちろん迎撃に出た敵を蹴散らしながら。

「お、おい。あれって……ロボットだよな」

「う、うん。だけどあんな物……」

呆然と見つめる彼女たちの前に現れたロボットたちによって繰り広げられる戦闘。守る側であろう白いゴングルアイの方のロボットは何かの刃が欠けるように次々と破壊されたり、行動不能にされていく。このような事態を静観するフェイトでは無かった。

「お、おいテストタロッサ！お前……」

「バルディッシュ・アサルト、セーットアップ！！」

ヴィータが制止する間もなく、すでにフェイトは戦闘態勢に入っていた。

街が破壊されて行く光景を目にしては、黙ってはいられなかったのだろう。これには諦めがついたらしく、ヴィータも援護に入った。

2人はちょうど防衛側の白いロボット―地球連邦地上軍主力機「ヌーベルジム?」が蹴散らされるのと入れ違う形で介入した。この2人の介入者に己の目を疑ったのはジオン残党軍の方だった。

「隊長、俺達は夢を見てるんですかね」

「センサーにしっかり反応がある。まるで昔のアニメを見ている気分だ。だからといって、引き下がるわけにはいかん」

残党軍の小隊長は自機―「ドム・フუნフ」の外部スピーカーのスイッチを入れた。

『何のつもりだね、お嬢ちゃん達』

穏やかな口調で目の前に立ちふさがる少女たちに話しかける。彼としては子供を戦場に巻き込む事は避けたいようだ。

「あなた達をこれ以上進ませるわけにはいきません。ここであなた方を拘束します」

幼さを感じさせる外見に見合わない落ち着きを見せる金髪の少女。腕にはエネルギーで刀身が形成される（グフのヒートサーベルのようなものか?）サーベルのようなものが握られている。もう一人の方はハンマーである。なんとも物騒である。

「どうして……どうしてこんな事すんだよっ……答えろ!」

―もう一人の赤紙のお下げの髪形の少女の問いに私はこう答えた。

それは宇宙移民者「スペースノイド」の理想、我々が戦い続ける理由でもあった。

『我々は理想のために戦っている。宇宙移民者―スペースノイドの地球からの開放を実現するために』

―そう。これこそジオン公国が掲げた「理想」であり、宇宙移民者達の悲願。彼らはこのために軍に生命を捧げたのだ。

フェイト達には信じられなかった。

太それが理想を掲げて、行っているのはたんなるテロ行為ではないか。このために何も関係のない人々を巻き込んだというのか。

「こんな事間違ってる……あなたたちのかってな理想のために多くの人が死んで行くなんて……ッ！」

金髪の少女の怒りは理解出来る。確かに私たちが行っているのは、体制側から見ればテロの一言で片付けられる行為である。だが、戦争というのは単純に「正義」や「悪」で分けられるほど甘くはないのだ。

『……では、君たちに聞くが、どうして争いが起きる？ どうして無くならないと思う？』

「え……？」

『簡単な事だ。理由など、怨恨、生存権を得るため、資源のため……などいくらでも考えつく事だ。そしてどちらにもそれなりの正義がある……過去の戦争を見てもそうだ。百年戦争、日本の戦国時代、WWⅡなど、例を挙げればきりが無いほどにな』

フェイト達は彼に反論できなかった。これこそが戦争の真理である。彼女たちは管理局の掲げる理想を信じきっていただけになおさらシヨックであった。それこそ「勢い良く殴られたような」衝撃だった。「たしかにそうかもしれない。だけど……私は……あなた達を止めるッ……！」

フェイトは猛然とデバイス「バルディッシュ・アサルト」を構えながら自身の優に10倍はあろうドム・フュンフに突っ込む。

『いいだろう。ならば止めてみせろ、魔法使い、のお嬢さん！』

私は魔法使いと言った。彼女たちの姿はそう呼ぶにふさわしかった。

愛機にヒートサーベルを持たせ、黒いマントを羽織った少女を迎え撃った。

人と機械―大きさにして約17mほども差がある戦い。しかし、フ
ェイトやヴィータにはその差を覆し得る力を持っている。不思議と
負けるという考えは思い浮かばない。彼女らはこの地において初め
て「人型兵器対魔道士」の戦いを行った。

「はあああああっ!!」

猛然とドム・フェンフに突っ込むフェイト。音速のスピードを持
ってして一気に目の前のロボットを切り裂くつもりだろう。

しかしその目論見は彼女の想像を超える俊敏さと柔軟性を備えた「
モビルスーツ」の前に外れる事となった。

彼女のデバイス「バルディッシュ・アサルト」の出力はMSの持つ
ビーム・サーベルと比較しても引け取らない。

しかしジオン系MSがビーム兵器の開発に到るまでに装備していた
ヒート系装備もビーム・サーベルとの切り結びが可能なのである。

どういうわけかその原理はデバイスの魔力とも当てはまり、鎌状のバルディッシュの魔力の金色の刃とヒートサーベルがぶつかり合い、火花を散らす。

「凄い力だ……ッ！」

グイグイとドムの腕部の力がフェイトにかかる。さしもの彼女も核融合炉の生み出すパワーの前には押し切れず、一進一退の状態が続く。他所でザクを相手に優位に持ち込んでいるヴィータを比べ、苦戦を強いられている感は否めない。

『ほう。少しは楽しませてくれる』

ドム・フェンフの胸部の砲口が眩いばかりの閃光を発する。拡散ビーム砲である。出力は低く、目くらましにしかならないがその場からの離脱などには役に立つ。閃光でフェイトを怯ませると、すぐさまホバーで離脱。僚機と合流する。

「隊長、あの嬢ちゃん達けっこうやりますね」

「ああ。ラケーケンバズを装備している機は直ちに掃射！あのハンマーの嬢ちゃんを黙らせろ」

小隊長の指令はすぐさまドム・トローパーンのパイロット達に伝えられ、直ちに掃射が開始された。MS用のバズーカは大口径の大砲

を放つと同じ意味を持つ。これにはザクを愛機「グラーフアイゼン」でタコ殴りにしていたヴィータも「冗談じゃない」と言わんばかりに防御、もしくは回避に移させるほどの威力だった。

「ドオオオオン!!」という轟音とともにドム系特有の大口徑バズーカ砲による攻撃が開始される。その光景は壮観であり、往時に連邦軍を恐怖させた火力はヴィータに牙を抜き、凄まじい爆炎で彼女の姿を覆い尽くした。艦船すらも轟沈させる破壊力から魔力による防壁で身を守ったが、完全ではなく、ヴィータの防護服―彼女らの言うところのバリアジャケットの上層を完全に焼き尽くし、彼女が大事にしていた帽子をも跡形もなく吹き飛ばした。

「……ッ!! テメエらあああッ!!」

帽子（これには主の八神はやてからもらった人形「のろいうさぎ」がデザインされており、ヴィータはとても大切にしていた）を吹き飛ばされたヴィータは瞳の色が変わるほどに激怒し、突進した。

近くにいたザク？F2の頭部を吹き飛ばし、本命、であるドム・トローパーのみに照準を合わせる。これにはドム・トローパーのパイロット達も肝を冷やした。

何せロケット推進のついたハンマーを持った少女が突進してくるのだ。これにはある意味で恐怖を覚えてしまう。

「……正気か!？」

一人のパイロットが思わず焦りの表情と声を出す。

ヴィータの捨て身の突撃は鬼気迫る勢いであり、訓練された軍人である彼らをして

かすかに恐怖を覚えた。人など簡単に粉碎せしめる弾丸の火線が飛び交う中をボロボロの衣服のままでハンマーを構えた少女が突撃してくるのだ。かつての戦争で日本兵が得意とした白兵戦の光景の再現のように彼らジオン兵には思えた。

「うおおおおおおあああッ!!」

既にハンマーは突撃に最適な形状——ラケーケンフォームに変形を完了していた。

かなりのスピードが出ている状態で攻撃を食らえば比較的装甲の厚いドムと言えど、ただですむとは思えない。MSの照準能力では人のような小さいものに攻撃を当てるのは至難の業だ。迎撃の火線はヴィータの機動により回避され、もはや攻撃の回避はできない。

「ぶち抜けえええっ!!」

ヴィータはドム・トローパーの胸部にラケーケンハンマーを当てた。普通ならこれで大概相手の装甲を貫けるはずであり、実際なのはと敵対していた当時には彼女のバリアを粉碎した。だがこのは火力にドムの超硬スチール合金製の装甲は辛うじて耐えて見せた。ビーム攻撃以外の攻撃なら並のMS用火器では決定打を与えられない

強度の賜物だが、大きく凹み、もう一度は耐えれない事を示していた。だが、これだけで攻撃は終わるわけではない。

「撃ち抜け、雷神!! はあああっ!!」

そこに追い打ちのフェイトのザンバーの打ち下ろしをくらい、一機が破壊された。

「魔道士によるMS撃破の初記録」であった。

「ヴィータ、まだ戦える?」

「おう! こんくらいで参るアタシじゃねえ。テメエこそアイツらにやられんじゃねえぞ」

「うん!」

2人は互いを鼓舞しながらなお戦闘を継続した。

「ノーベルジム? が旧式機に手も無く(と、言ってもジム? と言えど、この頃は旧型に分類されているが) 捻られたという報告がなされた地球連邦軍は実戦経験豊富な宇宙軍が―この時代の連邦軍は改革派が息を吹き返し、軍の統合運用が進められていた。

旧式機が多い（空軍を除くが）地上軍は2線級の戦力であり、必然的に最新装備を持つ宇宙軍に白羽の矢がたった―迎撃の任を引き継ぎ、機動性で圧倒するために可変機と中型機で臨時部隊が編成された。連邦軍の可変MSはこの頃にはかつての戦乱で悪名高い「ティターンズ」が採用していた機種は殆どが政治的理由で退役に追い込まれており、その代わりに「官軍」側のエウーゴが開発したZガンダムとその派生・量産型が大半を占めていた。当然ながら攻撃部隊の機体もZガンダム系列の可変機で編成されていた。かつてのカラバが用い、その後正規軍が正式採用したZプラスを主力に、現行主力機の「ジェガン」に変わる宇宙軍の次期主力機として配備され始めた「ジャベリン」も数機ほど含まれていた。

「大尉、Zプラスの受け取りに来ていきなり実戦ですか」

ああ。まあ冷や飯食わされて来た俺達が重宝されるようになったのは嬉しいが、こうも頻繁に駆り出されると疲れる」

大尉と呼ばれた男―アムロ・レイは母艦の入港地に程近い宇宙軍基地に呼び出されるなり、いきなり実戦に駆り出されるのに愚痴をこぼした。彼は連邦軍きつてのエースであり、連邦で唯一、戦後も正規軍に残った『人類の革新』―ニュータイプとして覚醒を遂げた者である。（最もこれしか食い口が無かったためと、彼の存在を軍が手放さないだけの話だが）

「確かにそうですね」

「ゼータプラスの調整は済んでいるな？」

「ハッ。整備班からの報告によればいつでも発進できますとの事です」

「よし、今すぐ発進出来るものはすぐに出てくれ。上空で編隊を組みしだい、目的地に向かう」

この時期、連邦軍には佐官クラスの軍人が不足していた。度重なる戦乱で佐官クラスの大半が戦死しており、そのかわりに戦功を立てて尉官に上り詰めた人間が多数を占めており、本来ならば佐官レベル以上の仕事である出撃命令も尉官が下すという有様だった。なので、連邦軍は規則の「士官学校未卒の軍人は佐官以上に昇進不可能」の項目を削除するかの検討が始まっていた。

―余談はここまでにして、アムロは自身のパーソナルマークがマーキングされたZプラスに乗り込み、僚機と共にウェイブライダー形態で目的地に向かった。

不意にゴウンゴウン……とジェット機のエンジン音のように甲高い音が響き、遠くの空に胡麻粒の様な点が現れ、近づいてくる。それは高度を下げてグングンと急降下してくる。

一見するとジェット戦闘機のように思える。しかしこのようなロボットに戦闘機で対抗できるのだろうか？2人がそう思った瞬間、戦闘機がおもむろに人型ロボットへ変形した。

その間、0・何秒。あっという間との表現が相応しいだろう。

フェイトとヴィータの前にオレンジと白のツートンカラーで塗装されたスタイリッシュな外見の機体が姿を表したのである。そして肩にはパイロットのパーソナルマークと思しきAの文字をモチーフにした文字が確認出来た。

『君たち下がるんだ。戦闘に巻き込まれたいのか!』

戦場から下がるように促す声が響き、そのロボットは残党軍と戦闘を開始する。

人間のようなツインアイとシャープな顔立ちなど、フェイト達が先程まで戦った機体とは全く異なる形状である。モノアイの機体と敵対している事から、ゴークルの機体と同じ組織の所属であることは容易に想像出来る。

「連邦の新手か!」

ドム・フェンフを駆る小隊長は汎用機のジム系より高性能な第3世代機―可変MSが投入された事実にも狼狽えることは無かった。

それは現在の連邦軍には一年戦争末期のジオン軍並に熟練兵が不足しており、最新・高性能の機体を持て余している事をこれまでの活動で熟知していた。

―そこに旧式機を駆る自分たちの付け入る隙があると考えた。―だが、目の前の機体を駆るパイロットは熟練した腕に加え、ニュータイプのような力を持っている事に彼らが気づくのにそう時間は掛からなかった。

―被弾を最低限に抑え、なおかつ正確な攻撃が出来、反応速度は常人のそれを超越している。これらの事実を照らし合わせると、自ずとそう結論づけるしかなかった。

瞬く間にドム・トロopenが撃破され、無残な姿を晒す。そして神業的な機動で自分らの攻撃を回避する芸当などがそれを裏付けている。

「……まさか本物に出くわすとは。しかしアレと言えど万能ではない」

ゼータプラスがわずかに見せた隙を彼は見逃さなかった。死角に回り込み、比較的装甲の薄い箇所である頭部に向けて弾速のあるサブマシンガンに火器を持ち替え、連射した。

「何っ!?!」

さすがのアムロもこれには対応が遅れてしまい、回避は無理だった。シールドは本来の目的には使えない（Zプラスのシールドに当たる箇所には電子機器が内蔵されているのでシールドとしてではなく、変形用のユニット扱いである）ので被弾が確実かと覚悟を決めた。

―だが。その直前で弾丸は咄嗟の判断で行動したフェイトが辛うじて防いだ。

彼女の持つスピードが有効に働いたのである。

「!?!?!」

この摩訶不思議な出来事に連邦軍将兵の誰もが目が点になり、我が目を疑う。

『人間が魔法でMSの攻撃を防いだ』。中世の伝説でもここまで分かりやすく魔法と分かるような現象は余り見ないし、せいぜい日本のアニメで目にした程度だった。それが目の前で起こったのだ。思わず少女に目がいつてしまう。

「君はさっきの……!?!」

アムロはゼータプラスの外部スピーカーで自身への攻撃を魔法で防いだ少女に話しかけた。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。その力はいったい？」

「それは後でお話します。私たちに協力してくれるんですか？」

「そうだ。恩を返させてもらうよ。だが君たちばかりにやらせてはいられない。ここは任せてくれ」

フェイトの前に複数の連邦軍側のMSが降り立つ。パイロットの誰もが「女の子だけにいい格好はさせないぜ」と言わんばかりに鼻息を荒くしている。なんとも現金なものだ。

遅れて最新鋭のジャベリンも到着し、これで残党軍を掃討する準備は整った。

「各機、準備はいいな？」

「何時でもOKです。魔法使い、の嬢ちゃんもいいか？」

「は、はい。（あれ――？この人達、魔法なんて見たこと無いはずなのになんでこんなに順応してるのおく？）」

ありえないほどにノリノリな連邦軍将兵たちに思わず閉口するフェイトとヴィータであった。

――場所が変わって、東京

「ここが2199年の東京？」

「そうだよ。そうだみんな、念のためにホンヤク・コンニャクを食べておいて。時代的に日本語が使われているか怪しいから」

「それもそうだな。おいドラえもん、お味噌味はあるのか？」

未来につくならのジャイアンの要求にドラえもんは「トホホ」と呆れ顔をする。

「しょうがないなあ…この味高いんだよ？」

ドラえもんはしぶしぶとジャイアンにホンヤク・コンニャクお味噌味を手渡す。

「おお心の友よう！」

オーバーアクション気味に踊りながらジャイアンは素早くたいあげる。他のメンバーもコンニャクを食する。

「ねえドラちゃん、これからどうするの？」

とりあえずの疑問をしずかが聞く。それに答えるようにドラえもんはこれからの計画をのび太らに告げた。

「とりあえずこの時代の情報を集めなくちゃ。国会図書館に行って歴史とかを調べたりするよ。僕の道具でもわからない事が多いからね。」

ドラえもんの言葉通り、国会図書館を訪れた5人は兵団がいつ確認されたのかなどを調べた。すると2198年末の新聞ニュースに「謎のロボット集団、ハワイ基地を強襲！連邦軍は対応が遅れ、基地の放棄を余儀なくされた模様」との一面記事が大きく載っていた。

「兵団が来たのはここだな？それでどうなった？スネ夫、この日からのニュースを追ってくれ」
「がってん！」

彼らは兵団の動きがわかる記事を係員に頼み込んで印刷してもらい、一つにまとめた。それによると兵団はハワイ真珠湾くミッドウエーを拠点に地球の軍隊と戦火を交えているらしい。ここでのび太が一つのことに気づいた。

「待って！そういえばリルルの姿が写ってないよ？」

そう。どの日付を見ても彼女と工作用ロボット「ジュード」（ドラえもん達はザンダクロスと読んでいる）の姿が見られないのだ。のび太が疑問に持つのも当然である。

「そういえば……リルルが転生して、同様に作られていれば兵団と一緒にいるはずだね」

「それがないつつう事は……」

「リルルは別の道を辿ったと言えるよ。のび太君が学校で見たリルルがそれを裏付けている」

そう。それが唯一、彼らの戦いで好転したと言える事実。しずかがリルルとの別れ際に告げたように天使に生まれ変わったのかもしれない……。彼らはそう信じていた。それがあの戦いで得られた彼女

の幸福なのだから。

いや、信じずにはいられなかった。彼女はその身を犠牲にして地球を救ってくれた。たとえ転生したとしても、その心は決して悪に染まる事は無いと……。

第3話「only my railgun」(前書き)

御坂美琴の登場です。

第3話「only my railgun」

—西暦2199年 一日本

「ハア…… ハア……」

一人、学校の制服姿で東京の街をさまよっているのは、まだ中学生ほどに見える、あどけなさを残す風貌の少女だった。彼女の名は「御坂美琴」。年齢は14歳。年齢の割には大人びた面と純情さ、少女趣味な一面を持つ中学2年生で、日本にある、特殊な街、かつて科学の最先端の塊とも言われた学園都市の出身。その能力から、「常盤台の超電磁砲」の異名を持つ、電気を操る超能力者である。彼女は今、前代未聞の事態に直面していた

—どういうわけか空間転移&タイムスリップの2つが同時に彼女を襲ったのだ—

「ど……、どうなってんのおおおく!?」

この一言が彼女の第一声であった。携帯電話は圏外（この時代では携帯電話はミノフスキー粒子の台頭により姿を消しており、前時代の骨董品扱いである）、持ちあわせていた財布に入っていた金は古銭扱いされ、換金を薦め

られる始末。

訳が分からず、街をうろついていたところ、拾った新聞の日付を見るととんでもない事実を認識せざるを得なかった。『自分は少なくとも100年後の未来に飛ばされた』と。

頭がどうにかなりそうだったが、ポジティブ思考で、なんとか平静を保った。その後、有無曲折を経てどうにか東京にたどりついたのである。

意気消沈して、図書館の前を通り過ぎたところ、彼女は凄い人物を目撃した。それは彼女もよく知るネコ型ロボットだったからである。後ろからでもはっきり分かる、愛くるしい胴長短足の丸い身体と顔は間違いなくドラえもんそのものだった。

「うん？」

「どうしたのドラえもん」

「いや……なんか誰かにつけられている様な……気のせいかな」

「後をつけられてる？ドラえもんがあ？プークスクス……。猫じゃないのお？」

「失礼な！！こう見えても未来の世界じゃ……」

美琴はドラえもんとは一緒にいる少年――野比のび太の会話に思わず心弾ませた。

まさかドラえもんが本当に存在していて、しかもマンガ通りに野比のび太と一緒にいるとは。これほど千載一遇のチャンスは無かった。こう見えてもファンシー系のキャラに目が無い彼女はキャラクターグッズなどを集めていた。そしてそれはドラえもんであっても例外ではなかった。

いきなり話しかけるのも悪いので、彼らに気付かれないようにこっそりと後をつけた。

しかし、ここで一つの疑問が浮かんた。この2190年代は彼らが本来いるべき時代でないし、自分とて、死んでから100年以上のつまりとつくのとうに死んでいる人間である。最もこの年代でも学園都市が存続しているかも怪しい。

―あの戦争の後に学園都市の暗部がどうなったのか？自分はどのような人生を送ったのだろうか。「妹達」は？「アイツ」は？様々な思いが美琴の心に去来する。（私の時代から優に100年過ぎてるこの時代……。まさかね……）

美琴のこの想いは後に意外な形で中する事となるが、それはまだ語られるべきではないだろう。

一人、彷徨いていた美琴は逆にドラえもん達から話しかけられる事になった。（うわの空でポカンとなっていたのがドラえもんやのび太の目に止まったのだろう。）

「あの……大丈夫ですか？」
「うわあっ!？」

予想外の出来事に思わずドキンとなり、飛び上がりそうになる。まさか向こうから来るとは。（心の準備くらいさせてよね……）

「ずうっと空を見たままボーっとしてたから気になって……」

「ちよっと考え事してたの。君、名前は？」

「僕、野比のび太です。それで僕の隣にいるのが……」

「こんにちは。ぼくドラえもんです」

「私は御坂美琴。よろしくね」

ドラえもん、のび太と美琴は公園の一角で話しあった。美琴はドラえもんがこの時代にいる理由を問い、彼女も自身がここに來た経緯を説明し、ドラえもんに聞く。

「美琴さんが巻き込まれたのは多分……時空乱流だと思います」

「時空乱流？」

ドラえもんは美琴にその単語についての説明を始めた。彼によれば時間の流れには時々大きな穴が開き、極稀に人を飲み込んでしまうという。

「のび太くん、前に7万年前の日本に行った時を覚えてるかい？」

「うん。あの時説明した奴だね」

「そう。昔からよく伝承に残ってる神かくしというのはこの現象。

例として上げると1939年頃に当時の中国軍の部隊がまるごと行方不明になったとか、1910年代位に有名な作家が行方不明になったとかの事件の原因はこれじゃないかと言われてます」

ドラえもんは自分の時代まで言い伝えられていたいくつかの伝承を

例にして説明した。

確証は無いが、美琴が100年ほどの時間を飛び越えたのもおそらくこの現象によるものだと告げた。

「まさか自分がそんな目にあうなんて考えもしなかった。で、これからどうするの？」

「僕たちは兵団と戦います。そのために僕たちはこの時代に来たんです」

「兵団？それってもしかして……」

ドラえもんはここで美琴に自らの目的を告げた。「鉄人兵団と闘う事」それが最大にして、唯一の目的である。

美琴もその単語については知っていた。ドラえもんたちが幾度となく繰り広げた冒険の内でも激戦が起こったとされる冒険。彼らが死地に赴き、自らの手で地球を救った戦い。

美琴はその性格ゆえに自分達だけで軍団に挑もうとするドラえもん達を放っておけなかった。何故このような選択をしたのか。

それには、彼女が知らず知らずのうちに恋心を抱くようになった一人の高校生の少年の行動が頭の中にあっただからであった。その少年は自分のクローン人間を使った実験を学園都市最強の超能力者に挑んでまで文字どおりの命がけで止めてくれた。「妹達」を救ってくれた。そして『ボロボロになっても誰かのために戦い、守ろうとする』彼の行動。

そんな彼に美琴は心惹かれていった。そして日に日に彼に対する想いは強まり、美琴は彼の力になれないことを悔やんでいた。

そして今、ドラえもんたちが多勢に無勢な戦いを挑もうとしている。自分よりも年下の子供たちが、自分が解決してきた出来事より遥かに危険な事を自分たちだけで解決しようとしている。

――放っておける訳がなかった――

「悪いけど、その戦い…私も参加させてもらうわ」

「え……ええええええっ!?!」

美琴の一言にドラえもんは思わず腰を抜かしながら驚く。目の前の中学生ほどの女の子が共に兵団に戦いを挑むのを宣言したのに目を白黒させる。そんなドラえもんのび太を尻目に論より証拠という訳で、美琴はたまたま公園の前を通りかかった、警察官に追跡されている泥棒の前に立塞がった。

「待ちなさい!?!」

美琴はそれだけ言って無然と構える。泥棒は歯牙にもかけず、突破しようと出刃包丁を構えて突撃してくる。

「ええと……」

「慌てると駄目な奴だなあ」

ドラえもんは慌てて道具を出そうとするが、まるで関係の無いものを出す始末であった。（日常用品や食品など）のび太にまでため息をついて呆れられてしまう。

―その時だった。不意に美琴が腕を伸ばし何かを撃ち出す態勢に入る。彼女の身体には紫電の輝きが迸り、まるで電気をその身で操っているようにドラえもんには思えた。

「ドラえもん……あれって……？」

「僕にもわからない」

「美夜子さんみたいな魔法……？」

「……いや、その類じゃない。魔法を使うにはなにかかしらの呪文が必要なはず……。だけどあの人にはそれがない……」

ドラえもんは美琴が扱う能力がなんであるか分からなかった。

ただ、かつて満月美夜子がいた魔法の世界で目撃した魔法とも違う。それだけは理解出来た。息を吞んで見守るしか無かった。

「な、なんだ!？」

泥棒も少女が何をしようとしているか最初は理解できなかった。

だが、美琴の腕に迸る紫電の光がなんであるか理解した。その力の意味を。

―たしか昔、学園都市にいたレベル5の能力者にこんなのがいた！！
「常盤台の超電磁砲」……まさかこの時代にも同じ能力を持った人間がいるなん……―

そこまで彼の思考は途切れた。次の瞬間には「バシュ」という音と共に、文字どおり音速の4倍の速度で打ち出されたコインがフェイスガードに覆われた彼の額にヒットしていたからだ。

「今のは……？」

ドラえもんはこの光景に啞然とする。見ると、美琴の身体には凄まじい電流が走っている。これが美琴の持つ超能力―電気を操る能力（電撃使い）―であった。

「これが私の能力、電撃使い、よ」

美琴は不敵な笑みで答えた。これが彼女が学園都市で努力を積み重ねて

手に入れた力だった。ドラえもんとおび太は彼女の力にただ圧巻の一言。これが美琴を学園都市第3位の、レベル5、の超能力者たらしめる所以であった。

さて、美琴の能力を目の当たりにしたドラえもんとおび太はしばし言葉を失った。

彼女の見せた力は、魔法を目にした事のあるドラえもんとおび太をして、

しばし言葉を無くすほどの光景だった。

しばらくしてドラえもんが口を開いた。

「美琴さん……今のは……」

「私はある一種の、超能力、を持ってるのよ。後天的に身につけたけど。それで発現したのが電気系統の能力。今のはそれを応用したってわけ」

美琴は自身の能力について多少の説明をする。ドラえもんは「この人は頼りになりそうだ」と安堵し、改めて美琴と握手する。

「これからよろしく」

「こっちもね」

突然の事態にも毅然と振舞う美琴に心強さを感じずにはいられないドラえもんであるが、美琴の元いた時代の事を聞いていない事に気づいた。思い切って聞いてみる。

「美琴さんって元々はいつの時代にいたんですか？」

「西暦で言うところと2010年代以降。平成で言うところと20年を超えてるあたりだけど？」

「僕たちが来た時代とは10年くらい離れてますね。」

「どういう事？」

疑問を口にする美琴にドラえもんはハッキリと告げた。

「僕たちは1999年……平成で言えば10年か11年位から来たんです」

「へ、平成11ねん！？それってまだプレ○テ2も出てない頃だよね」

「え？あれって2が出るんですか？」

ここで世代の相違が出た。のび太達は一応1990年代後半（1995年以降）に10代を迎えた世代、美琴の時代では20代の青年に成長しているであろう世代である。

2000年代末に10代に到達したであろう美琴とは少なくとも数世代の開きが存在する。

たとえばTVゲームにしても、美琴は国内の某大手メーカーのTVゲーム機の第3世代機が出回っているのを知っているが、のび太達はその前の世代が登場するか？というのに心踊らせていた。住んで

いる時代が10年違うだけでもこんなにも違うのかとドラえもんは
関心していた。

「へえ、あれって2が出るんだ」

ただ、浮かれているのび太を除いてだが。そんな純粹さを持つ彼ら
を美琴は微笑ましい気持ちになる。

「とりあえず今日はキャンピングカプセルで寝泊まりします。僕と
のびた君はみんなと別行動を取ったんで」

そういうとドラえもんは公園の一角にこう言った冒険の際にはおな
じみとなった道具を地面に突き刺し、道具を稼働させる。横の立て
看板には『キャンピングカプセルの設営はマナーを守って』と書か
れている。

ドラえもんに促されてカプセルに入るとちょっとしたアパートのよ
うな広さであった。

「うっそ……これがあのカプセルの中……?」

寝具とトイレ、シャワー完備なんて、下手なぼろアパートより断然整っているではないか、と目をキラキラと輝かす美琴。

「風呂がついてないけど、夜露は凌げます。食事はこれで。」

そういうとドラえもんは伝家の宝刀の一つ「グルメテーブルかけ」をポケットから取り出す。ドラえもんが持つ、「全国の大飯ぐらい」の夢を実現させた、なんでも料理が出てくる道具。今回は野戦を想定したのか、持ち合わせていたらしい。

「それじゃ僕はお子様ランチ」

「僕はどら焼きとラーメンにするか。美琴さんは何にします？」

「え、私？それじゃハンバーグステーキに……」

3人が言い終わると同時に、いかにも食欲をそえられる匂いとともに料理が出てくる。しかもご丁寧にハシやフォーク、ナイフ付きだ。

最初に動いたのは美琴である。ゴクリと唾を飲んで、恐る恐るハンバーグにナイフを入れる。肉汁があふれ出し、焼き具合も良さそうだ。

「……な、何これ！うまいじゃないいゝ！」

イレギュラー的な出来事に遭遇したために食事にありつけなかった彼女にとって、

この瞬間はまさに至福そのものであった。しかもその出来栄えは彼女の経験からいっても高いレベルであるために幸せそのもの、といった様子だ。この時、美琴は改めて、心から「ドラえもんに会えてよかった」と至福の時を過ごしていた。

一余談

「お姉さまあああっ！！いったいどこに行かれたんですのおおおお
〜！！」

「お、落ち着いて下さい白井さん！」

「初春ううう！！お姉さまは、お姉さまはどこに消えたんですの
おおおお！！」

黒子は初春の首根っこをつかんで振りまくる。涙目で行っているの
で相当に動揺している。

涙目で美琴の行方を探す「相方」にして、後輩の白井黒子がそこら
かしらで目撃され、さらには彼―「上条当麻」にまで、その理由を
問い詰めたとか。この黒子のなりふりかまわない行動は学園都市の
間でちょっとした話題になり、友人達に慰めてもらったとか。

「うう……お姉さま……黒子は……黒子は……。」

美琴がいなくなつてからと言うもの、夜な夜な黒子のすすり泣く
声が常盤台中学女子寮の一室から響き渡ったとか。

第3話「only my railgun」(後書き)

とある魔術の禁書目録のヒロイン、御坂美琴の登場です。彼女は歴代の大長編ドラえもんにおけるゲストキャラクター的な役割です。

第4話「唯閃」

―フェイト達に加勢した地球連邦宇宙軍。彼らは高性能のMSで馳せ参じたわけである。

古参の猛者に操られる旧・ジオン軍の旧式MSに思わぬ苦戦を強いられたもの、フェイトとヴィータの奮戦に救われた局面もあり、五部五分に持ち込んでいた。

18m以上の巨体が唸りを上げ、ぶつかり合う。

―これまでに見たことの無い光景に2人は圧倒されていた。地球滞在時に目にしたSFアニメをそっくりそのまま再現したように、

巨人の様な兵器が互いの死力を尽くして、戦いを繰り広げる。

「凄い……これがこの世界の戦い……！」

―そう。これがこの世界においてたどり着いた「戦争の形」。戦車などを裏方に追いやった

新世代の万能兵器「モビルスーツ」。スケールの違いこそあれ、次元世界の魔道士同士の戦と似通っている。科学・魔法の違いあれ、やはり最後は「人」の戦いに回帰していくものなのだろう。

フェイトとヴィータに指示を与えているのは白とオレンジのツートンカラーで塗装され、ユニコーンとAがモチーフのエンブレムを持つ隊長機。指揮下の部隊とフェイト達に的確な指示を与え、敵を沈黙させていく。余程の腕利きらしく、フェイトから見ても卓越して

いると分かる空戦戦術を見せている。

フェイトは『彼』の指示に従い、残った一機である敵隊長機―ドム・フェンフの行動を停止にかかった。

18mの巨体でありながらも、MSは超科学の賜物か、フェイトの複雑な空戦機動に対応してみせるが、人という小さな目標に攻撃を当てるのはMSの照準能力では困難を極める。

「チィ……チョコマカと!!」

隊長は思わず舌打ちをするが、懷に飛び込んだフェイトはそのスビードを持ってして、一気にドムの腕を袈裟懸けに切り落とす。

次いで、フェイトが作ったチャンス逃すまいと、追い打ちにZプラスがビームスマートガンを放つ。脚部を打ち抜かれたドム・フェンフは行動不能に陥り、やむなく降伏勧告に応じた。

この時、残党軍の小隊長は無線から聞こえてくる、自分らの事について協議している若い声に「時代は変わったものだ」と自嘲的にため息をついていた。

この時期、連邦軍は深刻な人手不足に陥っていた。幾度となく起る戦乱により若手パイロットや兵士の多くが戦死。急遽、退役していたり、予備役になっていた一年戦争やグリプスの経験者を教官や隊長クラスに添えるなどの措置が取られていたが、限界があった。

一年戦争経験者は当時の少年兵ですら20代後半に差し掛

かる。実戦経験があり、なおかつ、そこそこ若いとなるとさらに人数は限られる。

そこで一部の上層部によって閉職に追いやられていた元エウーゴ出身の将兵の待遇改善や、

タブー視されていた旧・ティターンズ所属兵の正規軍への復帰（思想的に問題なしとされた場合のみだが）も一部認められるようになった。それでも復帰する人数より若手が負傷・退役する人数が上回るのだからたまったものではない。あとは生き残ってきた若手が実戦に適応し、中堅どころに成長するのを待つしかないだろう。

余談はここまでにして、残党軍を沈黙させた連邦宇宙軍とフェイト達はひとまず互いに状況を説明しあうべく、話し合いの場を設けた。宇宙軍側は部隊を代表して、隊長機のパイロット―アムロ・レイがフェイトとの話し合いに応じた。

機体から降り立った長身の若い男―アムロ・レイはメットを脱いで素顔を見せる。

フェイトの彼に対する第一印象は「ずいぶん人当たりのよい優しそうな男性」と表現すればいいのだろうか。フェイトは密かに「良い人そうでよかったあ」と胸を撫で下ろしていた。

「やあ。さっきは助けに来てありがとう。僕は「アムロ・レイ」。

地球連邦軍の大尉だ。よろしく」

その人のよさそうな男性「アムロ・レイ」はニコツと笑って握手を求めてきた。

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

フェイトも差し出された手を握り返す。ここでフェイトは不思議な感覚を覚えた。

温かくて大きい何かに包まれたような……不思議な安心感が広がっていくのを感じ、

『この人は信じられる』。そんな気がするような……。

「早速だが、君たちが見せたあの不思議な力について教えてくれるかい？」

「はい。あれは「魔法」です」

「魔法？」

アムロはフェイトから彼女らが使った力について説明される。

聞いているうちに彼は「彼女らが使う「魔法」は純粋な魔法というよりは科学の応用といった方が正しいかもしれない」と考えた。

それは何故か？ 実のところ、この世界では人為的に超能力者を作ることも可能であり、現に日本には「学園都市」というとてもない地域が存在している。さらに彼には所属部隊の任務の性質上の都合ゆえに、各地域に点在する「魔術」を用いる宗教組織との接触の経験があった。その経験を踏まえると、フェイト達の「魔法」はどちらかと言えば、科学サイドに分類されるのだろう。

「ううむ……別の次元で確立された『科学に近い魔法』……か。」

「…… どういう事ですか？」

「ややこしいんだが、コッチ側には魔法がある。僕も詳しくは知らないんだが……」

アムロはフェイトに自身の知る範囲内だが、この世界の「魔術」についての説明を行う。

地球にはいくつかの宗教があるが、その内の最大勢力を誇る「十字教」が主役に近いこと、水面下で幾度かの分派同士の抗争が起っている事、魔術が行使される光景を一度だけ目にした自分の印象としては、おそらくフェイトの知る魔法とは趣を異にするだろうとも付け加えた。

フェイトは管理外世界とされていたはずのこの世界に「魔法」が存在することに驚きを隠せない。

そんな彼女にアムロは何故、ここにいたのか、ここにいる目的を問う。

フェイトは「友達を探しているんです」といい、一枚の写真を見せる。

それは彼女が組織の同年代の同僚と一緒に写っている写真であった。フェイトの隣に写っている茶髪の小女。おそらくこの子がフェイトの「友達」であろうか。

「…… この子が？」

「はい。任務でこの世界に来ていて……その途中で連絡が……」

「……よし。僕たちと一緒に来るかい？この世界は戦争の真っ只中で、単独で動くのは危険だ。僕たちでよければ君の力になる」

アムロは闘争に満ち溢れている、この世界の危険性から、フェイトに自分たちと共に行動するように提案した。軍や警察のネットワークや情報網を駆使すれば、フェイトの友達を探すのもグンと楽になるだろう。差し出がましいとは思うが、彼生来の優しさからかそう言わずにはいられなかった。

「あ、ありがとうございます！」

フェイトはアムロの提案を飲んだ。彼女もこの世界の危険性は先の戦闘で理解していたし、なによりも見知らずの自分たちにいきなりこう提案してくれたという安心感がアムロからの提案を受け入れる最大の要因であった。そんな彼女の横ではヴィータが部隊の隊員たちに「よっ！ハンマーっ子！」などとからかわれていたりする。一応彼女もアムロへの自己紹介を済ませた。（周りの軍人たちに遊ばれながらだが）

「アレにのってくれ。狭いがちよつとの辛抱だから我慢してくれ」
フェイト達を連れて行くに当たって、アムロが送迎役として指さしたのは複座型の戦闘機「コスモタイガー？」だった。

MSは基本的に1人乗りなので、フェイト達を乗せるには狭すぎる。そこで白羽の矢がたったのが飛来した本機であった。アムロは

基地に無線で送迎役を出来る機体が無いか問い合わせた。すると「連絡機は出払っているが、戦闘機なら出せる」との事で、複座型の機体を2機送ってきたわけである。パイロットに「加速が凄いから防護服を着たままの方がいい」と言われ、念のためにB Jは解除せずそのままで乗り込む。

『加速がものすごい』と言うのはこの戦闘機が恒星間航行可能な艦船の艦載機として開発されているからであり、その瞬発力は旧来のジェット戦闘機―分かりやすく例えると20世紀頃の合衆国で使われていた「F-15Cイーグル」等では比較対象にもなり得ないほどだ。

2機に一人づつ（もちろん後部座席）乗り込むと、パイロットはすぐさまエンジンに火を入れ、飛び立った。目的地は極東支部の駐屯地の一つとなっている厚木基地。この機なら4分もあればたどり着けるだろう。Zプラスが護衛につき、一行は神奈川県に向かった。

コスモタイガーから降り立ったフェイト達は「如何にも軍の基地です」と言う雰囲気にならずに緊張感を感じていた。兵士に伴われて基地のある一室に案内され、事情聴取を受けることになった。

地球連邦政府及び、連邦軍は過去に「イスカンダル」や「ガミラス」、「ゼントラーディ」、「メルランディ」、「白色彗星帝国」など数多の宇宙文明と接してきた経験からか、異世界の住民である彼女らに対する疑念や敵愾心などは無く、すんなりと受け入れられた。軍の将校はフェイトに友人の消息（なのはの事）を伝えた。軍病院で保護されている身元不明の少女がそうではないかと言うことだ。しかしその少女は現在集中治療室にいて、とても確認の取れる状態では無いとも付け加え、その少女の容態が安定次第、情報をフェイトに伝えると確約した。

都合、一時間に及ぶ事情聴取を終えた2人はホッとした気持ちを浮かべるも、基地の司令官に「民間人が戦闘行為を行った場合、戦後に罪に問われる場合もあるので『有志の協力者』と言う風にしておくから、軍の船に乗ってもらう事もあるかも知れない」と告げられた。

「ややこしい事になったな……。でもよ、なんでアタシ達が向こうの都合に合わせないといけねえんだよ」

ヴィータは異世界側の組織にいいように使われるのではないかと

危惧するが、フェイトは「向こうには向こうの都合があるだろうし、こちらの世界では通用しない管理局の法を振りかざすわけにも行かない」と執務官らしい、落ち着いた態度で彼女をなだめた。

極東支部に行くまでには書類が受理される都合上、2日間を要するので臨時の2人用共同部屋が与えられ、生活を送ることになった。

フェイトは部屋の窓から見える3段変形を敢行する可変戦闘機やモビルスーツが闊歩する光景にただただ、驚愕のため息を漏らすばかりだった。

余談だが、この時期の連邦宇宙軍と空軍はオーバーテクノロジーで生み出された可変戦闘機と従来機を並行で運用しているが、軍の予算上の都合で可変戦闘機の大量調達が困難になり、政府に完全な置換えが不可能と判断された。さらに軍が運用していた従来機種が前大戦でほとんど失われ、現場が新型機を欲した等の理由により従来型戦闘機の新規開発が再開されたのである。その成果が大戦中期に量産され始めた「コスモタイガー?」であり、旧式化した「ブラックタイガー」や「TINコッド」、「ジェット・コアブースター」などからの代替機として急ピッチで量産されている。かの「宇宙戦艦ヤマト」に初期生産機がなし崩しに配備されたのを皮切りに空母機動部隊を中心に配備されている。

訓練飛行中のコスモタイガーが作る飛行機雲にフェイトは

改めてかけがえのない友と再び空を駆けたいという思いを浮かべ、
空への思いを新たにしていた。

― 厚木基地内格納庫

フェイトとは別行動で基地の見学をしていたヴィータは「男たちの戦場」と言うべき格納庫に足を踏み入れていた。

ロボットやら戦闘機が多数並んで整備を受けているのはある意味でここが「未来」である事を暗示させる。ロボット用の銃火器も多数並べられ、「何がなにやら分からないけど、とにかく凄いぞこりゃ」と言った雰囲気を持たせている。

「ありゃ？よく見たらZガンダムじゃねえか。色がちよつと違うけど……」

― Z 格納庫で整備を受けている白と紫のスタイリッシュな機体
― Z ガンダムに思わず目を奪われる。

まさかアニメの中のロボットの動く実物を見られるとは、とため息をつく。

彼女のいた地球でもロボットアニメは無論、存在した。ヴ

イータはあまりそういう類は見えていないのだが、ちょうど主の「八神はやて」がハマっているアニメが「機動戦士ガンダム」とその一連のシリーズであったために続編シリーズの主役機の一つとして描かれていたZガンダムの事を覚えていた。それとまったく同一の姿をしたものを見られたのは不思議な感覚だった。それに先ほど戦った機種も良く考えてみれば見覚えあるものばかりだったと思い返してみる。と、なると…あのゴードルの機体はもしかして―

「うん？ なんだいお嬢ちゃんは」

ヴィータの姿を見かけた一人の整備兵が声をかけた。年のころは30の半ば程度であろうか。

おおよその場には不相应な管理局の制服姿のヴィータに気づかないわけはなく、たまたま手が空いていた彼が声をかけた訳である。

「基地を見学してただけど、このロボットってもしかして「モビルスーツ」なのか？」

「ああ。中でもこいつは特別製さ」

20m前後の巨体を持つ白と紫のカラーリングのZガンダム。その肩にはアムロが乗っていた機体と同じパーソナルエンブレムが描かれている。そうするとそれは俗に言う所の

彼専用のZガンダムなのだろうか。

（あの人…：たしかはやてに無理矢理読ませられた小説だとZガンダムを欲しがってたよな）

「モビルスーツやバルキリーがある世界…： まさかマジンガーZ

とかはないよな」

「あるよ」

「何い!？」

ヴィータはまさかそれまでではないだろうとタカを括ったのが、本当にあると答えられて啞然とした。視線を移すと格納庫の一番奥の天上が高い区間にマシンガーZ……では無くグレートマシンガーだ……と3機の戦闘機（デザインが奇抜だ）が整備を受けていたのだから。

昔のアニメで描かれた、とんでもないエネルギーで動き、一騎当千の力を持つスーパーロボットまでも実在するとなればこの世界はいったいどういう技術を誇るのか。それほどに技術を発展させておきながら、魔法もまた存在するとは……。

「何がなにやらどうなってやがるんだあつゝ!？」

次から次に起る出来事についていけなくなりつつあるのか、頭を抱えながら叫んだ。そんな彼女の叫びは格納庫に虚しく木霊した。整備員はヴィータの肩をたたきながら「もう諦めろ」と言わんばかりに「やれやれ」とため息をついていた。

フェイトも別コースで基地を見学していて一人の女性と出会った。その女性とは「神裂火織」。この世界における魔術師であり、神の力の一端を使える、聖人、と呼ばれる特別な人間。彼女は美琴のように偶発的なタイムスリップではなく、政府の施策に基づいて、この時代に連れてこられた、過去の人間、である。この時代ともなると、タイムマシンの軍事的利用も進んでおり、歴史に影響を与えない範囲内でなら過去の人間に協力を依頼する事も良しとされていた。この施策は余程の事態で無ければ実行されないが、人材不足の極地に陥ってしまったていた連邦軍の嘆願により、幾度かに分けて実行に移される運びとなったのである。

その最初の目玉として白羽の矢が立てられたのが、21世紀ごろの天草式十字凄教の女教皇であった「神裂火織」であった。

聖人を連れてくるのには通常的手段では無理なので、かつての米軍の最精鋭特殊部隊「Navy SEALs」や「グリーンベレー」の末裔たる特殊部隊群を動員、殆どスパイ映画並のほとんど拉致に近い方法で連れてきた。彼女への事情説明及び、説得は政府最高級の高官などが担当。これらの懇願に近い、努力の結果、しぶしぶであるが、協力への了承を取り付けたのである。

彼女はタイムスリップした都合上、この時代で行動するための書類の手續きのために厚木基地を訪れていたのだが、そこでフェイトと出会うこととなった。

「あの……すいません。あなたは？」

フェイトの問いにその女性は「神裂火織」という名の日本人であると答え、自己紹介した。長い髪をポニーテールに括り、片方の裾を根元までぶった切ったジーンズが特徴的で、さらに腰のウエスタンベルトには礼刀「七天七刀」を携えるという凄くぶっ飛んだ服装の女性にフェイトは何かを感じたのか、色々と尋ねてみた。

話していくうちにフェイトは自分が魔道士であると告げた。すると彼女も「私はイギリス清教所属の魔術師です」と答えた。この瞬間こそがフェイトと地球の魔術を繋ぎとめた瞬間であると同時に、彼女の運命を大きく変える事になる出会いであった。アムロの言っていたこの世界における魔法とは、いったいどういうものなのか？

そして基地の兵士たちの勧めもあって、基地内にあるトレーニングルームに赴いた。（この時代の軍隊は部署によっては無重力で働く人間も多い。そのため筋力維持のための各種スポーツやエクササイズなどの設備が下手な施設よりも充実している）

こんなひょんなことから魔術師対魔道士の、似て非なるものの、対決、が開始された。

一方はミッドチルダ出身の若き空戦魔道士。一方はイギリス清教所属の魔術師であり、天草十字凄教の女教皇である極東の、聖人。2つの異なる魔法を使う人間はトレーニングルームで対峙

した。はたして空戦のエース対、聖人、の勝負の行方や如何に……。

「あなたの力がどの程度か……確かめてもらいます」

神裂は背中に指していた、優に2 m以上はあろうという太刀が入っている鞘を持つ。フェイトの力に興味を持ったのか、はたまたこの少女の持つ可能性に気付いたのかは定かでないが、その顔にははつきりと笑みが浮かんでいた。

フェイトも自分の持つデバイスのザンバーモードよりも大きい刀を片手で軽々と持つ神裂の姿に「侮ってたら……やられる！」と真剣な表情で武器を構える。

日本刀を持つ敵と対峙するのは初めてだが、細身でありながらも最高級の切れ味を誇るといふ威力に畏怖を感じずにはいられなかった。

トレーニングルームにいた兵士たちも固唾をのんで、美女たちの戦いを見守ろうと視線を向ける。

あッ！！』

い、火花が散る。

『はあああああああああ

両者の剣と刀がぶつかり合

―「魔術師と魔道士」―

正に世紀の対決の幕が開い
た瞬間であった。

『はああああああっ！！』

先手はフェイトが取った。バルディッシュを構えて一気に先手をとるべく、大上段から魔力の刃を持つ鎌を振り下ろした。

―しかしその刃は相手の持つ日本刀の、鞘、の表層を抉る形で受け止められていた。そして次の瞬間。刀を抜くような動作と共に、7つの斬撃、が彼女を襲った。装甲服にあたる機能を持つBJに容易く傷を入れていく衝撃。

しかし神裂は刀で斬るどころか、刀を鞘から抜いてもいなかった。どうということかと焦るフェイトを尻目に、神裂は表情を変えずに平静を保っていた。

その瞬間、その意味をようやく悟ったフェイトは刀からワイヤーが張られている事に気づいた。これが神裂火織の得意とする攻撃の一つ「七閃」である。

「…刀を抜いてもいない…くっ…」

「ええ。ですがこれを潜り抜けたところで、私には切り札があります。何よりも私はまだ、魔法名、を名乗ってもいません。」

「魔法名…?」

「私たちには魔術を使うときに、真名を名乗ってはいけないう因習があります。それを名乗った場合一貴方の命は保障できません」

そう。彼女の最高の一撃を食らえばフェイトはただではすまないダメージを食らうだろう。それは誇張でも何でもない。彼女一神裂火織は21世紀の時点で世界に20人しかいないとされた『聖人』なのだから。

フェイトとて管理局の中でもエースとされる俊英だが、年齢・体格の差などを差し引いて考えても向こう側が有利なのは今の一撃で悟った。

一今の自分では彼女に及ばないかもしれない。だけどここで引き下がってどうする…!!

その思いがフェイトを突き動かした。バルディッシュをザンバーモードに変形させて一太刀でも浴びせるべく、自身の最速の「ソニックフォーム」で一気に突進した。神裂も刀を抜いて最高の一撃を放つ体制に入った。そして自身の魔法名を名乗った。

「……貴方のその想いに答えましょう。私の魔法名はSalvare 000（救われぬ者に救いの手を）」

2人の一撃……、ジェットザンバーと、唯閃、が真っ向から激突した。

一魔導対魔術。似て非なるものの戦いはますます白熱を極め、この日のトレーニングルームは

古代ローマの「コロッセウム」さながらにギャラリーで溢れかえっていた。そして軍の公報にもその戦いについての記事が載ったとか。

外伝「変身！ライダーブラック」(前書き)

突然ですが、本筋とは関係ない話です。仮面ライダー主体の外伝で、昭和最後のライダー主人公の南光太郎が主人公で、BLACK時代の末期頃に遭遇した出来事としています。

外伝「変身！ライダーブラック」

―とある場所

「ハッ！？お菓子を踏んだ…これは！」

と、声を上げるこの青年の名は「南光太郎」。彼は一見、どこにもいそうな青年であるが、その実態は悪の組織「ゴルゴム」に改造された改造人間―全ての悪の元凶であったはずの組織であるバダンや正義を守ってきた側である、歴代の10人の仮面ライダーすらもその存在を知りえなかった真の、歴史上最後の仮面ライダー。いわば ZXに続く11号ライダーとも言うべき存在「仮面ライダーBLACK」なのだ。彼はZXまでの歴代ライダーがバダンとの戦いにひとまずの決着をつけて長き眠りについた後に日本を守っていた人物でもある。しばしの休息を経て、ゴルゴムとの戦いが佳境に入りつつあったこの時、彼は不思議な体験をする事になった。

―とある日、彼は愛車の一つ「ロードセクター」と共に自身の体に埋め込まれた「キングストーン」が偶発的に引き起こした摩訶不思議な現象より姿を消す。

彼はどこに行ってしまったと言うのか？

―彼が元居た地球とは別の西暦2000年代中盤 東京

「…ここはどこだ？」

光太郎は気がついたら見知らぬ地に居る事に気づき、あたりを見回す。

すると、あたりのポスターに「風華」と言う文字が書かれているのが見えた。

「聞いたことが無い地名だな…まさかゴルゴムの仕業か！」

？」

彼は口癖であるこの台詞を発すると、すぐさま辺りの散策に出た。

歩いて行くと学生が多いのがわかった。どうやら自分がいるのは学校の近くのものである。そして町内掲示板に貼られている一枚のポスターに自然に目が行く。

そこには「警備員募集中…ご連絡は風華学園まで」と書かれていた。突然の事なので生活費を持ち合わせていない彼にとってはどうってつけの仕事と言えた。ヒーローと言えども生活費の確保は必須なのである。

手持ちの携帯電話ですぐさま掲示板に書かれている番号に電話をかけた。電話すると、つい tara すぐ面接になるとのことなので、着ている服の襟を直してとりあえず身なりを整えるとロードセクターを駆って面接がある場所―風華学園に向かった。

―風華学園内

「ここか…」

手短な所にロードセクターを止めると、学園の中に入る。見たところのどかな学園の風景が広がっている。腕時計を見ると午後になっているようなので人通りは少ない。とりあえず正門から入ってみる。しばらく歩いていくと、横からなにやら物騒な音がした。

「誰だ…貴様？」

振り返ると銃を持った一人の少女が立っていた。青みがかった長い髪の毛が印象的な美少女であった。

「そういう君は誰だい？学生のようにには見えないが」

「失礼な！それでもこの学園の学生だ。…お前の名前は？」

「南光太郎。警備員のアルバイトの面接を受けに来たんだけど…ところで…頼むからその銃を下ろしてくれ…」

「：おっと。つい癖で。貴様に一つ忠告しておく。ここ
バイトはかなりキツイから覚悟しておけ」

「そ、そう。君の名前を覚えてくれないか」

「久我なつきだ。それじゃ私は用があるからこれで」

「ありがとうなつきちゃん」

光太郎はなつきと別れると、面接の場所である学園敷地内にある
理事長の邸宅に向かった。

（ふう。これで学園内に顔見知りが出来た：ひとまず安心
だ）

彼は安堵の表情を浮かべると、改造人間としての身体能力
を活用して地を駆けた。

10 分ほど走っていると、とんでもなく巨大な洋館が目
の前に現れた。明治かそのくらいに建てられたのだろうか。そんな
威厳と壮麗さをただ寄せている。思わず ‘ 学校の敷地内にこんな
洋館があつていいのか？ ’ と感想が思い浮かぶ。玄関の呼び鈴を鳴
らすとピンクの髪の色をした10代後半ほどに見える「姫野二三」
と名乗るメイドが応対をした。

光太郎は彼女にこの館の主の部屋に案内される。目的地に
着くと、一応ドアは自分で開けた。

「失礼します」

ドアを開けてとりあえず挨拶をすませる。次の瞬間、彼は

驚きの光景を垣間見る事になった。彼を面接する張本人である理事長はまだ小学生ほどにしか見えない少女だったからである。

「初めまして。私がこの学園の理事長を務める、風花真白、です」

「南光太郎です。：あなたがこの学園の：いやあ何と言ったらいいのか：正直驚きました」

真白はそんな光太郎の驚きが新鮮に思えたのか、微笑を浮かべる。

「光太郎さん、さっそくですがアルバイトの条件についてですが：」

「はい」

その後の20分ほどの面接の中で、光太郎は格闘技なら自信があると力説（仮面ライダーなので当然だが）した甲斐もあって、無事採用された。

こうして生活費の確保に成功した南光太郎は風華学園の警備員としての生活をスタートさせ、その日の夜から仕事が始まった。最初の仕事は「高等部の夜の見回り」と言うものだ。警備員室に荷物を置くと、校内の見回りを始めた。

「ここは：っと。よし問題ないな」

彼は懐中電灯を片手に職員室の周辺を見回りしていた。夜なので校内に残っているのは当直の教師くらいだろうが、念に念を重ねるに越したことはない。こうしてゴルゴムの悪事を突き止めたのも一度や二度ではないのだから。

「そうだ。この際だから外も見回りしておくか」

そして校内から外に出る通路から一旦外に出てみると、地響きと轟音が同時に起こった。

「：何だあれは！？」

彼の目に映ったのは何やらSF映画にでも出てきそうな怪物と一人の女性が戦っていると言う、ある意味映画のように奇妙な光景だった。彼は仮面ライダーとしての性が疼いたのか、すぐさま

現場に駆け足で向かった。

光太郎が目撃した、怪物と戦っている女性であるが、彼女の名は「杉浦碧」。この学園の臨時教師として高等部の日本史を担当している。ちなみに年齢は「じゅうななさい」を自称している。

「まったく今日は厄日なの〜!?!?せっかく論文が上手くいったと思ったら、オーファン、がわんさか出るし、パソの調子は悪いし…うわぁっ!」

愚痴を言っている間隙に正面の相手とは別の所から攻撃を受けて吹き飛ばされてしまう。

受け身を取る間もなく地面に叩きつけられるかと思われたその時。一人の男が彼女を救った。

「大丈夫かい?」

その男は服装や髪形などのあらうる点で、1980年代からやってきました。との印象が強く与えていた。しかしその姿に碧はふと不思議な既視感を覚えていた。

「あ、う、うん…。き、君は?」

「南光太郎。アルバイトの警備員ですよ。何なんですかこの怪物は?まるでハリウッド映画だ」

「説明したいけど、今はそれどころじゃないって〜!」

オーファンの攻撃が碧をお姫様だっこしている光太郎に迫る。

「…くっ!」

なんとか攻撃をよけて碧を安全な所に下ろす。

「君、何を…!」

「ここは任せてください!こういうのは俺の役目ですから」「や、役目って…こいつらは君の力でどうにかできるような物じゃな…!?!?」

「大丈夫ですよ。俺はこういう存在には慣れてますから」

そういうと光太郎はいったん、跳躍でちょうどいい場所を確保すると、あるポーズを構る。それは彼の体の改造人間としての機能を

起動させるためのポーズであった。

「そのポーズ：まさか！？いや、そんなまさか」

そのポーズに見覚えがあったらしく、様子を見ていた碧が驚きの声を出す。それかなり驚いているようで、目を白黒させている。

「化け物ども、この学園の平和を脅かす事は断じて許さん！！：変人ん身ッ！！」

ポーズを取り終えると、光太郎の体に機械のベルトが出現し、まばゆい光が彼を包みこむ。

彼が変身する瞬間、碧の心の中に浮かび上がっていた、光太郎への既視感の正体が解明された。まだ年端もいかぬ子供の頃に憧れを抱き、自分の信条にもなっている「正義は勝つ」事を体現した存在の一つ。その名は――

「仮面ライダー：BLACKッ！！」

これが彼にとって、この世界での初めての変身であった。思わぬ出来事であったが、怪物と一人で戦っている女性を放っておける性格ではないと言う事は彼自身も自覚していた。正にイレギュラー的な事態だが、これが風華での光太郎の戦いの記録での初変身であった。

第5話「正気と狂気のDEAD ZONE」(前書き)

ドラえもんに関してHELLSING気味の原作崩壊あります。

第5話「正気と狂気のDEAD ZONE」

西暦2199年某日 ー、日本 神奈川県

「…そうですか。‘奴ら’が…」

「ああ。どうやら復活したのは本当だったらしい。こっちも先輩から聞いて驚いてたところさ」

「筑波さん、そっちはどうですか？」

「まだ怪人やコマンドロイドの類は確認していないが、いずれ現れるだろう。奴らは君に執着を見せていたからその辺には気をつけてくれ」

「…わかりました。それじゃ」

この電話をしている天然パーマが特徴的な青年の名は「村雨良」。世界の歴史上、10番目に確認された「仮面ライダー」であり、‘ZX’の称号を持つパーフェクトサイボークでもある。

彼は一介の大学生であった1984年に、ルポライターであった実の姉「村雨しずか」共々「バダン」と呼ばれたナチス残党の生き残りに拉致された。その際に姉を目の前で処刑され、さらに自らも洗脳された上で戦闘用サイボークとされてしまったのである。その後はZXと名乗るようになり、様々な経緯を経てバダンを抜け、仮面ライダー110号となったのである。

「…奴らめ。まだ俺のボディを欲しがっていると言うのか？…馬鹿な」

良はあれから200年も経とうとしているこの時代においてもバダンが存続しているという事実には驚愕を隠せない。おそらく自分たち同様に長き眠りを経て蘇ったのだろうが、200年もの年月を経てもなお自分のボディ以上の代物は作れていないのか？

考え込んでいてもしょうがないので、彼はひとまず愛車の

ヘルダイバーに乗り、買い物のために町に繰り出した。

前進翼を備えたヘルダイバーは瞬く間に時速600キロに加速していく。このマシンはバダンの装備として作られたのを奪取した物だが、超技術で作られたために600キロでも高い操縦性を持つ。スーパーマーケットまではそんなに時間はかからなかった。15分後には目的地にたどり着き、30分ほどで買い物を終えて外に出ると、1人の少女が地図を見ながら辺りをキョロキョロと見回しているのが見えた。

「あれ？おかしいわね：　もしかして道に迷った？」

このツインテールの髪型の少女の名は「ティアナ・ランスター」。後々に時空管理局に設立される部隊「機動六課」でのなのはの部下。彼女は

任務中にメンバーと別行動を取っていたところ、旧時代の遺跡の誤作動によりこの世界に転送されてしまった。時間軸としては新暦70年代中盤の頃、なのはが19歳になっているであろう未来の人物である。

「どうしたんだい？」

良は少女の事が気になったのか、買い物袋を持ちながら声をかけてみた。

「すみません道に迷ってしまって…」

「この辺は道を知らないで迷うからなあ：よし。俺が案内しよう」

そういうと彼はティアナをヘルダイバーの止めてあるスパーの駐車場に連れて行く。

「これに乗ってくれ。メットは忘れずにつけてくれよ。危ないから」

良は駐車場に止めてあるヘルダイバーの後部座席にティアナを乗せると、ハンドルに下げてあるヘルメットを被るように促す。

「は、はい」

「よし。それじゃ…！」

ヘルダイバーの核融合エンジンが唸りをあげる。そしてクラッチが離されると同時に勢いよく道路に飛び出した。

道路を走るヘルダイバー。時速50キロほどの速さを保って湘南海岸の道をひた走る。

ティアナは道路の横から見える湘南の海に見とれているようで、感嘆のため息を漏らす。

「ところで、まだ名前を聞いてなかったですよ。あたしはティアナ・ランスターって言います」

「俺の名前は村雨良。よろしく。…どうだい夕日と海を眺めながらバイクで走るってのは。」

「綺麗…なんかこう…うまく言えないけど、ロマンがあるって感じですね」

ハタから見るとツーリングをしているカップルのような会話をする2人。

当初の目的を完全に忘れている形のティアナであったが、気さくな良の姿にティアナは

今は亡き兄「ティード」を重ね合わせていた。

「ねえ、兄さん。兄さんが生きていたら、こんな感じになれたのかな…？」

彼女は両親を早くに亡くし、唯一の肉親であった兄も彼女が子供の頃に戦死している。

いわゆる「天涯孤独」である。そして兄の死の際に、上官だった局員が兄を侮辱し、陥れるような発言をした事が管理局に入るきっかけとなったのである。

奇しくもその人生は何人かの歴代ライダーにも当てはまる。しかもZXは彼女と同じように姉をバダンに殺されている。偶然か、必然か、似たもの同士とも言える2人は3時間ほどのツーリングを経てある場所にたどり着いた。

―村雨良の実家

「ここも久しぶりだな…」

「良さん、この家は？」

「俺の実家さ。手入れはしてある。まあ、つくろいでくれ」
そういつて良は家の明かりを入れる。

電気がつくくと広い屋敷だと言う事が良く分かる。グラランドピアノらしき楽器も置いてあるところを見ると裕福な暮らしを送っていたようだ。

「この写真は…？」

ある一つの写真立がティアナの目にとまった。写真には笑顔の村雨と1人の女性が写っていた。

「ああその写真かい？そこに写っている女の人は俺の姉さ

んさ」

村雨が懐かしそうに目を細めながら告げる。

「お姉さんがいるんですか？」

「いや、いた、と言うべきだな」

「いたって…？」

「姉さんは亡くなったよ。もうずいぶん昔になるが…」

良ははぐらかす様に言う。その表情はどこか寂しさを感じさせる物であった。

「…そうですか。すみません、こんなこと聞いちゃって」

「いいさ」

「どんな人だったんですか？」

「姉さんとは年は離れていたが、一言で言えば優しく強い人だったよ」

良はこの質問をきっかけに懐かしそうに自身の過去を語り始めた。早くに両親を亡くし、姉と2人きりになったこと、そして大学生だった時に起こったあの出来事を……

「姉さんは俺の目の前で殺され…、俺自身も記憶を消された上で体を改造されてしまった」

良は話してる内に自然にティアナにこの世界の悪の存在を突きつけた。20世紀末の時点で人体を機械で改造できる技術を持つ組織「バダン」、さらに良はそれら改造人間の中でも最高のスペックを誇る「パーフェクトサイボーク」と呼ぶべき存在である事を簡単に話した。

「…ッ！！」

ティアナはショックを受けたようで、怒りとも悲しみとも取れる表情を浮かべた。フェイトなら憤慨しそうな話である。

「これが奴らのやり口さ。そして俺はその後、バダンを抜けた。記憶が戻った後はいろいろ合ったが、仮面ライダーの一人として戦っ

た」

「仮面ライダー、？」

「俺のように組織に体を改造されたりして、サイボーグになった人達が名乗っている名前さ。みんな仮面を被り、バイク乗りのようなマフラーをしている事から何時しかそう呼ばれるようになった。そして組織を倒すのが歴代ライダーの目的でもあった」

「その中でも俺は：最高の性能を持つ10人目の仮面ライダー。：見せてあげよう」

そういうと良はある一定のポーズを取る。

「変んん身ッ！！ゼクロス！！」

光が晴れると、そこには良の姿は無く、代わりに赤と銀色の体を持った鉄仮面の男が立っていた。

「仮面ライダー：ZX！！」

これがティアナがこの世界に関わるきっかけとなる出来事であった。

‘10人目の仮面ライダー’である仮面ライダーZXとの出会いはティアナの運命を大きく動かしていく事になる。

「その姿があなたの本当の：」

「そうだ。これが俺の真の姿であり、仮面ライダーとしての姿ななさ」

ZXは、変身したその姿をティアナに見せた。仮面を被り、マフラーを首に巻いている風貌は正に‘仮面ライダー’と呼ぶに相応しい物であった。

「でもハタから見ると装甲服を着込んだ人にしか見えませんよ」

「それはよく言われる。今日はゆっくりと休んでくれ。シャワーや風呂は好きに使っていい」

そういうとZXは変身を解き、ソファ―に仰向けになって横になり睡眠に入った。

ティアナはZXの言葉通りに、寝ている彼を尻目に、風呂を沸かし湯船に漬かりながら長い一日の疲れを癒していた。

―改造人間、戦闘機人とは違う形で生まれた存在、仮面ライダー…

そういえばあの姿、何かの虫に似てる……けどカッコいいわよねって何考えてんのあたし!?

湯船に漬かりながら首をブンブンと横に振る。途中から思考が村雨のことに切り替わっていることに気がついたのだろう。照れで顔が赤くなっていた。

「…スバルの奴、今頃何やってんのかしら」

元の世界に残してきた親友の事も気になるが、今は疲れを癒すのが先決だ。湯船に浸かりながら、日本の風呂の心地よさを楽しんでいた。

こうして、思わぬ生活を余儀なくされたティアナ・ランスター。そして、時を越えて復活した改造人間「仮面ライダーZX／村雨良」2人の奇妙な生活は今幕を開けたのである。

翌日もティアナと良は互いの事を話し合った。

「先輩達に聞いていたのとは、体系、の異なる魔法か……」
「どういことですか?」

キョトンとするティアナに村雨良は答える。この世界におけるいわゆる「魔法」の位置づけの物の存在を。地球にも―いや、

この並行世界にもあったと言わべきか。

「この世界にも魔法―いや魔術というほうがいいか―があるというのを前に聞いたことがある。」

実例として、100年ほど前に起こった大きな戦争―「第3次世界大戦」は科学と魔術の対立で引き起こされたといっても、過言ではない。表向き、某国が日本の最先端科学が集まった学園都市とが戦いを始めたのがきっかけであると言われているが、実際は魔術側と科学側の対立が裏で煽られた結果、引き起こされた。彼ら仮面ライダーは、組織、と言う歴史の暗部に関わってきた経験を持つ。そしてその戦争にも少なからず関係していたためにそのような裏事情を知っているのである。

「互いに相容れない同士が戦争したわけですね？でもこうして世界が続いてるってことは……」

「そう。戦争はどっちつかずのまままで終わったのさ。それが果たして良かったかは分からないが、結果的には人類の発展は促進された。……皮肉だよ」

戦争は終わった後の世界はそれ以前よりも飛躍的に発展させる。彼の言うとおり、皮肉な事で、20世紀中盤ごろの有名な映画での台詞には「スイス500年の平和は」なんて一言があるほど科学の進歩は目覚ましいのだ。

WW2でのジェット戦闘機や核兵器、一年戦争ではモビルスーツとモビルアーマー……歴史を紐とけばそのような例はいくらでも存在する

彼もその流れに巻き込まれ、組織の手によって改造され、改造人間として生きてきた。

歴代仮面ライダーは組織の新型強力怪人、あるいは幹部として（対一号ライダー用に作られた2号や救命目的のV3、X、平和目的のスーパー1などがいるが、そこから派生した技術である）改造を施されたという経緯もある。科学の進歩と戦争の関係は因果な関係であると言いか言いようが無い。それを利用したのがショック

ーに始まる歴代の暗黒組織であり、その総本山がZXを生み出した「バダン」である。

「歴代の暗黒組織はそこに潰け込み、世界征服を企んだ。奴等の行動が俺達仮面ライダーの全ての始まりだった…」

そう言いながら村雨はお優を沸かし、食事の準備を始める。彼の言う「ショッカー」とは歴史上最も早く出現した暗黒組織である。城南大学に在籍していた本郷猛を拉致、仮面ライダー一号に改造した事で知られ、ナチスドイツの元軍人も在籍していた事からナチスドイツの生き残りがアドルフ・ヒトラーの意思を継いで組織したと思われる。ショッカーは本郷猛を怪人「バツタ男」とでも呼ぶべきであろう姿に改造したが、脳改造直前に脱走。以後、「仮面ライダー」を名乗り戦いを始めた。これが仮面ライダーの戦いの歴史の始まりであった。村雨は掻い摘んでその後も含めた経緯を説明していく。その間にお湯が湧いたらしく、やかんから煙が噴き出す。やかんの湯を使ってコーヒーを作り、ティアナに作りたてのコーヒーを差し入れる。

「ありがとうございます」

ティアナは村雨からコーヒーを受け取り、飲み始める。しかしコーヒーはブラックだったらしく、一旦口に入れた後に慌てて近くに置いてある砂糖をスプーンですくって入れる。

村雨は「…苦かったかな？」とブラックで入れたことを後悔するが、こうなってしまうては後の祭りであった。

「大丈夫か？」

「な、なんとか…」

ゼイゼイと言いながらコーヒーをなんとか飲み終えたティアナはメインディッシュとばかりに椅子に座り、テーブルに置いてある食事を食べ始めた。調理を終えたレトルト食品が2、3品ほど並んでいるが、ここはカレーを選んだ。スプーンを持ってパクパクと景気よく食べ始める。良はこの時代では古典的と言える某大手メーカーのカップラーメン（シーフード味）をすすっている。シン

ブルだが、彼の「戦い」の性質上致し方ないのだろう。

「ふう。食事も終えた事だし、用意が終わり次第出かけるとするか。君が何故この世界に来たかも探る必要があるからな」

「でも……アテってあるんですか。」

「俺の仲間が今、日本にいる。その人達に聞いてみればヒントが得られるだろう」

5分ほどで用意を済ませ、2人は外に止めてあるヘルダイバーに跨る。（ちなみにティアナは良に言われ、ヘルダイバーの法外な最高速度に耐えるためにBJを展開している。）

「それじゃ行くぞ」

「ヴォオオオオオン」とエンジンが唸りを上げる。そして勢いよくブレーキレバーを離すと、ヘルダイバーは瞬く間に時速600キロに加速していく。

「ち、ちよつと!!速す……!!」

「喋らない方がいい。舌を噛むぞ」

ヘルダイバーは東名高速道路を疾駆し、ZXの仲間がいるであろう場所へ、その進路を向けた。

さて、ドラえもん達は「御坂美琴」という思いがけない強力な援軍を得て勇躍、行動を開始していた。

（いきなり行動を起こしたのは美琴の発案によるもの。ドラはいきなり殴りこむのに躊躇していたが、

美琴が「私に任せなさいって」と太鼓判を押し、他の4人の同意を取り付けた」

行動うを起こすに当たって、ドラえもんはメンバーを2つに分けた。

兵団を直接叩く攻撃メンバーと情報収集に専念、もしくは予備戦力とするメンバーに振り分けた。

攻撃メンバーはかつてのピシアとの戦い同様、ドラえもののび太とジャイアン。それと超能力者としての力を見せつけた事でドラとのび太の信頼を得た美琴。

メンバーは早速、毎度お馴染みとなっている「ショックガン」、「空気砲」などを携えて兵団の前線拠点が置かれているとされるミッドウェー島に足を運んだ。

――ミッドウェー島。

ここ、ミッドウェー島は歴史的にもターニングポイントとなった戦いの舞台ともなった古戦場。

――「ミッドウェー海戦」――太平洋戦争で大日本帝国海軍が劣勢に転じるキッカケともなった

主力四空母が一気に葬り去られた出来事。その骸が未だに眠るこの地は再び血に染まろうとしていた。

80年代までの未来的デザインの建物がずらりと並ぶ駐屯地がここには築かれていた。

それはかつてドラえもんのび太が鏡面世界のススキ原で見た光景をソックリそのまま再現したもののだが、

規模は幾分か小規模になっていた。やはり太平洋の真ん中に浮かぶ島では敷地や資材に余裕が無かったらしく、

幾つかはまだ未完成のまままで放置されているか、地球人の残した施設が流用されていた。

「ん？ あれは」

つくなりのび太が何かを発見した。それは兵団の建設用ロボットの一大団だった。広場に資材を運搬しているようで、

あたりに複数のコンテナが重なる形で置かれている。

「建設用のようだよ……どうするドラえもん」

「かくれマントで姿を消してからタケコプターで尾行して向かおう。武器のセーフティは解除出来てるね？」

「もちろんだよ」

「取り敢えず即席落とし穴を塹壕にして戦おう。それとあらかじめ「改良型山びこ山」をあちらこちらに置いておこう」

――改良型山びこ山とは、かつての戦いで兵団に一人相撲を取らせるためにドラえもんが用意した道具で、

山びこの原理で音をこだまさせる「山びこ山」に光や熱も反射させる機能を加えたもの。

兵団の勢力を減じさせたり、ドラえもん達の反撃を「軍隊の大部隊による要撃」と錯覚させるのに貢献した。

それをドラえもんが周辺の地面に絨毯爆撃のごとく落とし、てゆく。

「一番槍は美琴さん。あなたに任せます」

ドラえもんは古風な言い回しを用いて先陣を切る役割を美琴に一任したので、

美琴は「私は時代劇の騎馬隊かあ！？」と面食らったように言った。

もう少し後の時代の言葉で言って欲しいと愚痴をこぼしつつも了承。

得意の電撃を持ってして攻撃の狼煙をあげた。

美琴が発した電撃の槍が炸裂するのを合図にどこぞの誰かの台詞を借りるならば「戦争、を！一心不乱の大戦争を！！」と形容すべき闘争の幕が開けた。

「なんだ敵の襲撃か！？」

「状況は！状況はどうなっている！？」

「ハッ！敵の攻撃です！！」

「何ッ！！馬鹿な！！この存在は敵には知られていないはずだ」

兵団の駐留部隊の指揮官は対応に追われていた。敵に襲われたのなら応戦すべきだが、突然の襲撃で統制が乱れている現状では下手に動けない。

「：‘C区間’の先任士官を呼び出せ！！襲撃されたのなら敵はまだそこにいるはず。部隊を編成し、迎撃させろ！！」

矢次ぎに命令を発し、基地の機能を發揮させ始める。地球人の残した物の再利用だが、レーダーサイトが索敵を始め、防衛用火砲も動力に火が灯されていく。

幸いにも通信回路は健在のようで、各区間より報告が入る。

「こちら：B区間！敵は一人の女だ」

この報告に彼は自身の集音回路の正常さを疑う。仮にも銀河に覇を唱える兵団が辺境の田舎である地球の

住民に遅れをとるハズはないと思わず聞き返す。

雷鳴にも似た轟音が響きわたる。彼は慌てで「状況は！状況はどうなっている！？」と叫んでいた。

「信じられん！地球人はあのような能力を……クアアアアアアッ！？」

雷が落ちた音のような耳をつんざく音が響くと同時に通信が途絶えた。

呼びかけてもウンともスンとも通じない事からおそらくは

通信回線が寸断されたのだろうか？

状況のつかめぬまま彼は確認のために建物の外に出た。

「ドラえもん！ 空気砲は！！」

「ある！ ただし数はそんなにないから気をつけてくれ」

「わかった」

のび太はドラえもんから空気砲を受けとるとそのまま連射する。ジャイアンもショットガンを乱射する。

「相変わらず撃っても撃っても出てくるぜ！」

悪態について兵団の物量への嫌味とも取れる言葉を言いながらとにかくエネルギーが尽きるまで

撃って美琴の進撃の露払いを行う。

ドラえもんは、もし以前のように工作用ロボットが派遣されているのならと美琴の開いた血路を突き進んだ。

空気砲とショットガンを乱射しながらそれがあるであろう建物に向かう。

兵団はドラえもんの行く手を阻むように弾幕を貼り、建物に近づけんとする。ここで兵団の本領が発揮された。

かつての地球連邦軍のように物量にものを言わせた攻撃が彼らの真骨頂である。

持久戦に持ち込まれたら完全に兵団側が有利であり、かつての戦いでも最終的に彼らの前に膝を尽きかけた。

美琴とて無限に能力を振るえる訳では無い。体力などが尽きれば能力はしばし使えなくなるだろう。

兵団の優位を覆すには工作用ロボットとして派遣されているはずの「ジュード」（ザンダクロス）を奪取しなければならない。

最も前線の駐屯地でしかないここにあれば、だが。

改造は道具でなんともなる。

なんとしても、とひらりマントを片手に突撃を続ける。その台詞というのが実に過激であった。

「小便はすんだか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えながら命乞いをする準備はOK？」

「しかしこういう時にこそあの台詞が言えるってものだ。『sir,

yes sir. My master.』…ってか」

空気砲を乱射し、ハイになっているためか破壊に愉悦すら感じているドラえもん達。

飛び散る機械部品、進撃する人、恐れあまり逃げ出す兵団達。正に戦場は地獄だと言う事を体現する光景だったと後に地球連邦軍に投降した生存者は口を揃えて言ったと言う。

「これで分かったか。我々、人間、は貴様ら兵団などに決して負けん。『さよなら』だ」

と、突撃する3人とも、どこぞのヴァチカン第13課の台詞をパクった口ぶりだった。

そして台詞をパクられた当人達は盛大にクシャミをし、怒り狂っていたとか。

第6話「目覚め」

― 村雨良とティアナ・ランスターは村雨の仲間がいるであろう場所についていた。

彼らを待っていたのは、歴代の仮面ライダーの内の数人：
：2号Ⅱ一文字隼人、仮面ライダーV3Ⅱ風見志郎、仮面ライダーXⅡ神敬介、現在の日本の守り手である11号ライダーの仮面ライダーBLACK RXⅡ南光太郎の4人の歴代仮面ライダーであった。

「村雨、話は本郷から聞いた。その子がそうか？」

ベレー帽を被った男―、一文字隼人が最初に口を開いた。

村雨は一文字の問いにうなづき、ティアナを4人に紹介する。

「ええ。今は俺の家で面倒を見てます。名前は……」

村雨の言葉に続くようにティアナは4人の男たちに自己紹介した。

「ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」

あどけなさを残す少女の自己紹介に一文字隼人達も笑顔で名乗りあう。

村雨曰く、自分が「仮面ライダー」である事は話しているというので、仮面ライダーとして名乗っても問題ないらしいので、4人も人間としての本名と仮面ライダーとしての名を言う形で名乗った。

「仮面ライダー2号Ⅱ一文字隼人だ。よろしく」

「俺は風見志郎、すなわち仮面ライダーV3。」

「神敬介、またの名を仮面ライダーX。」

「南光太郎Ⅱ仮面ライダーBLACK RX。これからよろしく」

村雨から聞いていても到底信じられない話としか思えないが、この4人のいかにも屈強かつ精悍さを感じさせる青年は少なくとも100年以上の歳月を戦ったという。そんな歳月を感じさせない若々しい容姿にティアナは衝撃を感じずにはいられなかった。

「一文字さん。この子が何故この世界に迷い込んだか分かりますか？」

「本郷によれば偶発的に次元に穴が開き、そこに入り込んでしまったせいだというが……俺は文系だからそれ方面はダメでな」

頭を抱える一文字の代わりに風見志郎が答える。どうやらそっち方面の知識は風見の方が詳しいらしい。

「俗に言う所の神隠しみたいなものですよ、一文字さん。前に本郷先輩や結城に聞いたことがあります、人が行方不明になって死体や遺留品が一切出てこないケースがあるでしょう？それみたいなものです」

「なるほど」

「ところで光太郎はともかく、何故先輩たちは日本に？」
村雨の疑問に神敬介が答える。

「クライシス帝国の日本への一大攻勢が行われるという情報が入ってな。バダンの行動が小康状態に入って、手空きだった俺達が日本の援護に駆けつけたのさ」

クライシス帝国とは、かつて地球を恐怖に陥れた暗黒組織「ゴルゴム」が壊滅した後に現れた、異次元帝国である。帝国軍の地球攻撃部隊司令「ジャーク將軍」を筆頭に屈強な軍人で固められ

た組織で、現在は仮面ライダーBLACK RXと死闘を繰り広げている。

仮面ライダー達が現在、対峙している悪はこのクライシス帝国とバダンなのである。バダンはかつての戦いの後も生き残っていた残党だが、クライシスは一国の軍隊が襲来しているのだ。手強いといしか言いようがない。彼らがどのような存在と戦っているのか。ティアナは彼らの会話を聞いていくうちに思わず息を飲む。彼らを改造できるだけの力を持つ組織がもし、次元世界に矛先を向けたのなら……。

考えただけでゾツとしてしまう。彼女は改めて仮面ライダー達の力とそれに対する悪を見定めようと彼らの動きを見守る事にした。

「ところで光太郎。その写真は？」

村雨は南光太郎が片手に持っている、写真屋から持ってきたばかりのような現像仕立ての写真が気になったらしい。光太郎は恥ずかしそうにその写真を村雨に渡す。その写真にはBLACK時代の服装の光太郎が三人の少女と一人の女性と一緒に、笑顔を浮かべているのが映し出されていた。

「クライシスが現れる前……ゴルゴムとの戦いが最末期を迎えていた時に不思議な体験をしたんですよ。俺を囲んでいるのは、その時に知り合った子たちで……」

光太郎は遠い昔を思い出すような、懐かしそうに語り始めた。風華での日々、そして出会った能力者、HiME、達の血で血を洗うような憎しみあいの連鎖を止めるために仮面ライダーとしての力を奮ったことを……

—なののはの身柄は連邦軍の軍病院の集中治療室での治療が一段落
ついでから普通病棟を経て、停泊中の「ラー・カイラム」に移され
た。身元の確認は司令からの言付けで一足先に極東支部を訪れてい
たヴィータが行い、彼女によって、軍が救出した少女がフェイトの
親友、高町なのは、である事が正式に確認された。しかしなのはの
左手にまるで、後から付けたような傷跡があることに気づいた彼女
は医師を問い詰めた。医師はヴィータに告げた。保護されたとき、
すでになのはは左手を失っていた、と。

「どういうことだよ！！なのはが左手を無くしてたって……」

「おそらく至近距離で爆発か何かがあったんだろう。いくら君の言
うバリアジャケットが装甲服の役目をしていても限界はある。その
時の写真がこれだよ」

医師はいささかグロテスクな写真を見せた。そこには手首の部分が
完全に吹っ飛び、手と腕が泣き別れになったなのはの無残な姿があ
った。吹っ飛んだ手には機能停止し、無残な姿を晒す相棒のレイジ
ングハート・エクセリオンが握られていた。

ヴィータはこの事実に愕然。そのような事になったものの、なのはの
命が助かっただけでも

御の字だと医師は告げた。その事実はフェイトには言わないでおい
てくれと念を押すとフェイトに連絡をとった。

フェイトもなのはの無事が確認されたのを知らされると心から安堵
し、厚木基地の司令官の言付けに従ってラー・カイラムに乗艦した。

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

「同じく、ヴィータです」

「少将から話は聞いている。私はブライト・ノア。この「ラー・カ
イラム」の艦長だ。」

さて……君たちは今日から本艦に乗艦することになるが、士官待遇
で対応させてもらうが、
よろしいかな」

「ありがとうございます」

彼らは少尉待遇で迎えられ、フェイトはロンド・ベルの猛者ども
の特訓を見学したり、時に自ら参加する日々をおくりながらなのは
が目覚めるのを待った。それには四日ほどの時間が必要だった。

ラー・カイラムの医務室

「この子が？」

「ああ。倒れていたのを保護したそうだ。提督はこの子の
身柄を俺たちに預けるとの事だが……」

「名前とかは分かっているのか？」

「あの子たちの話を聞くには、この子の名前は『高町なのは』。れっきとした日本人だそうだ。空軍からは理由は分からないが重傷を負って倒れていたのを保護したと聞いている」

基地の医務室のベットで静かに眠るなのはを心配そうに見つめるブライトとアムロ。

「う、ううん……？」

会話をしている2人の声が起爆剤となったのか、なのはの目が開かれる。

彼女は目覚めるなりベットから飛び起きて、考える人、のポーズをとって必死に覚えているかぎりの記憶を辿ってみる。

―エネルギー反応を調査しに行つて、その後あの青い巨大ロボットと戦つて、それで落とされて……。落とされて!? そうだ……。あの時たしかに大けがをしたはずなのに、体に傷がほとんどないなんて……?

体を見てみると所々に包帯が巻かれている。どうやら自分は誰かに助けられたようだ……。?

「無事なのは良かったんだけど……ここは……？」

「おお氣がついたぞ!」

その声に氣付いたのか、なのはは首を声のした方に向ける。そこには軍服姿の男性が2人ほど立っていた。その姿になのはは見覚えがあった。昔、年の離れた兄に見させられたロボットアニメの……

「その顔、その声……もしかして……」

「おっと自己紹介がまだだったね。俺はアムロ・レイ。地球連邦宇宙軍の大尉だ」

そう言つてアムロはニコツと笑顔を浮かべ、手をなのはに差し出す。

なのははアムロに不思議な感覚を思えた。なんだろうか。どこことなく優しさをただ寄せるその笑顔に一種の安堵感を覚えた。なのはも手を握り返す。

「私はブライト・ノア。連邦宇宙軍第13独立部隊「ロンド・ベル」隊の指揮官だ。よろしく」

「高町なのはです。あの…私を助けてくれたんですか？」

「正確に言えば君の身柄を預かったと言うべきだな。君を助けてここまで運んだのは空軍の連絡機の乗員だ。その後はこちらで預かって処置させてもらったよ」

「…ありがとうございます。ところでここは…地球なんですか？」

このなのはの疑問を先読みしていたのか、アムロが答えた。
「確かにここは地球だよ。ただし西暦2199年…のね」
「…ええええええ！？」

この後、なのはとアムロ達はお互いの持つ情報を交換し合った。アムロらの話はなのはにとっては衝撃的としか言いようのない物ばかりだった。別の世界の地球、そこで起こった多くの事件。コロニーや月、火星への宇宙移民の実現、銀河規模にまで広がった移民船団。生命体の天敵たる宇宙怪獣と数多の戦乱だった。特に有名な一年戦争の騒乱、コロニー落としによるオーストラリア大陸の一部水没と被害、グリプス戦役での連邦軍内の内乱などを2人から教えられた。アニメだと思っていた出来事が別の世界では現実となつて起こっていて、数多くの命が失われたという。これらの話はまだ11歳の小学生でしかない彼女には辛い事実であった。しかしそれらの出来事で引き起こされた悲劇は自分の世界でも起こり得る事だ。息を吞んで話に聞き入る。

「たった100年の間にたくさんの戦争があつて、50億以上の人達が死んだ…。そんなことって…」

「他にも一晩で語り切れないほどの話がいくらでもあるさ。ああ、君の処遇に関してはしばらくはウチの部隊にいてもらう事になる。その方がこの世界に留まるのに便宜が効く」

「慣れてるんですねブライトさん」

「まあ君以外にもそういう連中と何度か会った経験あるか

ら、こういうのには慣れてる」

ブライトはなんとも言えない表情をしつつ慣れた手つきで書類を用意する。

本来ならば10歳程度の少女を軍に引き入れるのには抵抗があるし、彼自身2児の父親でもあるのでその辺は凄く複雑である。しかし第一次ネオ・ジオン戦争時にガンダム・チームに当時10歳で戦争を戦ったエルピー・プルという先例もある。

「君が望むのなら軍に入ることもできる。だができれば君のような子供を戦争に巻き込みたくはない……。だが君の事を考えるところということしかできん。すまない」

ここでブライトは子供を戦争に巻き込みたくないという心情を垣間見せた。

しかしなのははあえて軍に入隊する選択をとった。戦乱の世の中を終わらせたい気持ちもあったのだろう。

連邦宇宙軍への志願の手続きの書類を手にとってアムロから筆記用具をもらう。

この事は連邦軍人としての身分を手に入れると同時にこの世界の戦争に身を投じることを意味する。複雑な気持ちになるが、ここまで聞いて大人しくしているのではエースの名が廃るというものだ。

「でもそもそも戸籍がないのに入れるんですか軍隊って」

「戸籍はこちらでなんとかする。戦乱で戸籍表なんて、散逸したり紛失したりしてるからその点は心配ない」

「は、はあ……」

管理局はおそらく自分を戦死判定するだろうし、仲間の元へ戻れる保証がない以上、しばらくはこの世界で生きていくしか無い。決意とすると同時に書類に自分のサインを入れる。元々、職業魔導士だったので、職業軍人になることにはさほど抵抗感は無かった。

（管理局を客観視できるチャンスでもあった事もあるが）

「これでいいんですか？」

「ああ。一応士官学校は出てる事も考えて、階級は少尉になる」

「制服とかはどうするんですか？」

「手配しておく」

「すみません。我儘を言ってしまったて…」

「いいさ。君のことは、あの子、達から聞いている。応援させてもらうよ」

「え…… それっていったい？」

タツタツと足音が響き、ドアが派手に開けられる。なのはは驚愕した。そこにいたのは朦朧とする意識の中でさえ心の拠り所としていた、親友であったからだ。

「なのはあゝー！！」

フェイトはなのはの顔を見るなり、再会出来た嬉しさと安堵感が入り交じった顔で

一気になのはのもとに駆け寄り、そのまま飛びつくような感じで抱きつく。

「ふ、フェイトちゃん！？」

「無事で良かった……本当に……」

親友が生きていた。それだけで本当に嬉しいと言わんばかりのフェイトになのはも久しぶりに笑顔を見せる。フェイトちゃんのことだ。必死に自分を探してくれたのだろう。

始めて出会った「プレシア・テストロッサ事件」の際に自分がフェイトを助けたように、フェイトも自分を助けるために必死で動いてくれたことは容易に想像できるし、フェイトの義理の兄「クロノ・ハラウン」がフェイトが自由に動けるように便宜を図った事もすぐに考えが浮かんだ。一だけど今は再会出来たこの嬉しさを噛みしめていたい。フェイトを慰めながら、なのははそう思った。

「フェイトちゃん、どうしたのその格好」

フェイトはバリアジャケットを着ていたが、あまりにもボロボロに

なっていた。これはこの日は神裂火織に頼んで手合わせをしていたところをなのが目覚めたとの報を聞いて、戦いを切り上げ、慌ててやってきたためである。フェイトは目に涙を浮かべながら一言だけ言った。

「色々あつたんだよ」と。

第7話「天が呼ぶ」

—ミッドウェー島

ここではドラえもん達が兵团相手に戦闘を繰り広げていたもの、苦戦を強いられていた。空気砲の数は不足し、ショットガンなどでは有効な火力とはなりえない。ドラえもんは自らの道具の力不足を痛感していた。

「相変わらず撃っても撃っても出てくるぜ！」

「空気砲のエネルギー……、持つかな」

「わからない。とにかく打撃をあたえるだけ与える！ 撃ちまくれ！」

3人は即席落とし穴で作った塹壕に潜って持久戦に持ち込んだ。格納庫は目の前だが、ここに来て足止めを食らっていた。ドラえものの兵器は少ない。いつもの道具で長期戦に持ち込むが、護身用ではない道具ではやはり火力が絶対的に不足していた。改良型山びこ山のからくりも読まれつつある。正にピンチである。美琴も圧倒的物量を段々と捌き切れなくなってきたらしく、疲労を隠せないようである。

「こんな時、テレビとかだとヒーローか何かが来るんだけどな」

射撃を続けるのび太がこう漏らすとジャイアンは「そう都合がいい事が起きるかよ」と返す。

「そんなバカげたことかね。救いのヒーローをアテにするのは。どこからともなく助けに来てくれる」

ジャイアンはのび太のこの一言に多少の同意は示した。それほどに兵団の物量は圧倒的であり、それをアテにしたくなる気持ちも分らない訳では無かった。そんな彼らの気持ちは思わぬ形で叶う。塹壕を挟んで胎児位していた兵団のロボットが不意に強力な放電を受け、倒れていく。

「な、何だ!？」

驚いた声で思わず当たりを見回す。電撃は明らかに美琴がいる場所とは完全に別方向から放たれたものだ。

―すると一筋の雷鳴と共に一人の男の声が響きわたった。

「変んんっ…身ッ!! ストロンガー!!」

その声はまるで世界に救いをもたらす救世主のようにドラえもんには思えた。まるで本当のTVのヒーローが助けに来てくれたような光明が差し込んだようにも感じた。大げさだが、雷鳴が轟き、電光が当りに散る。そしてその場に不釣り合いな「ブロオオオオッ」と爆音を響かせながら一人の声が戦場に轟いた。その名は――…

「天が呼ぶ…地が呼ぶ…人が呼ぶ…悪を倒せと俺を呼ぶ…」

時代劇のような名乗りが響く。そしてその声の主が姿を現す。

「聞け悪人ども! 俺は正義の戦士…、仮面ライダーストロンガー!」
「!」

彼はこの世界の正義を人知れず守ってきた異形の体となった男達の内の一。その名を「仮面ライダー」。そのなかで唯一、電気力を扱える改造電気人間として改造を受けた7番目の男。その名も「ストロンガー」。彼もまた、眠り、から目覚め、鉄人兵団の基地を

破壊すべく馳せ参じたのである。

「エレクトロファイヤー!!」

ストロンガーは両腕をこすり合わせ、強力な電流を発生させ、地面に右腕を叩きつけて電流を放電する。その威力は兵団の回路をショートさせるには十分である。これがストロンガーの代名詞となっている攻撃。電撃により兵団を蜘蛛の子を散らすかのように蹴散らす。ちなみに彼の放つ攻撃に蓄えられている電気の量は 美琴のそれに比べると、小規模に思えるが、それでも十分に強力である。ちなみに美琴が放てる電撃の最大出力は10億ボルト。この数値はスーパーロボットの代表的なモノである「グレートマジンガー」の必殺技「サンダーブレイク」、「UFOロボグレンダイザー」の「スペースサンダー」をも上回る驚異的なものだが、ストロンガーの最後の切札「超電子ダイナモ」の発する超電子エネルギーには一步及ばない。最も普通の人間でありながら、スーパーロボットよりも強力な攻撃が出来るのは瞳目に値するが。ドラえもんたちにとっては思わぬ援軍であった。

「見たかいジャイアン!!」

「あ、ああ。まさかのび太の言うとおりになるなんてな。神様を信じたくなったぜ……」

ストロンガーの登場に狂喜乱舞するのび太は思わず即席落とし穴から飛び出て、ジャイアンとハイタッチを交わす。ドラえもんは思わぬ援軍に啞然とし、立ち尽くす。

美琴も、自分が放っている以外にも電撃が放たれているのに驚愕した。ドラえもん達からからは遠く離れたはずだし、都合よく軍隊だとかの組織がやってくるわけではない。遠くで爆発が連鎖的に起こり、

雷が進る。そしてその現象を起こしている張本人の姿が見えた。

「な、何よあれ!？」

彼女が目にしたのはまるでどこかの特撮ヒーローのような姿をした一人の男―歴代の仮面ライダーの中でも、美琴に最も近い能力を持つ7人目の仮面ライダーの勇姿であった。雷を背に敵を蹴散らすその姿はまるで古の雷神のようにも思えた。

「ん? あいつは……まさか」

ストロンガーは遠くに見える人影が、彼ら仮面ライダーが過去に、組織、から救出した、能力者、のクローンに酷似する外見をしているのを見抜いた。彼、ストロンガーこと、城茂は主な悪の組織の活動が沈静化したあとは、日本を主な活動場所にしていたため、21世紀初頭頃に学園都市を訪れる機会があった。そこで彼はカエルに似た顔の医者から「学園都市最強の発電能力者の細胞を用いたクローン人間が存在する」と知らされ、調査を行った。資料の多くは散逸、あるいは紛失していたが、医者のもとにいた何人かの個体からの証言もあり、どうにか過去に量産化計画が立てられていたのを知った。その後到大戦が勃発した際に何人かの個体が、組織、の残党の手に移ったが、その時は自分やX、アマゾンなどが救出したはずだと振り返る。

れではあれはいったい誰なのか。あの計画の基になった人物「御坂美琴」はとつくのとうに亡くなっているし、100年たって同等の発電能力を備えた人間が出現したとしても無理がある。ということなのか。ストロンガーは兵団を蹴散らしつつもその少女のもとに足を運んだ。

一軍は付近の海域で哨戒活動を行っていた、情報処理能力を備えた駆逐艦「秋月」の通報によって敵の駐屯地の一つ「ミッドウェー島」で戦闘が勃発したとの情報を入手していた。確認のためにただちに太平洋方面軍のウェーク島に駐留している空軍の空挺部隊に情報が伝えられ、確認のために5機のZガンダムが飛び立った。ちなみにこのゼータ、オリジナルの機体とそう外見は変わらないが、火器が実体弾主体になっている、装甲が一部省略されているなどの細かな違いがあり、より本格的に量産するためにコストダウンがなされた廉価版Zといった趣を呈している。彼等は、ウィングに積んでいる爆弾やミサイルのセーフティを解除。何時でも戦闘に入れるようにした。そして付近にいた空母の艦載機も護衛のために合流。9機ほどの編隊を組んで飛行し、防空圏に差し掛かっていた。

「上は何と言っている？」

「場合によっては爆撃で基地機能を奪えとの事だ。クラスター爆弾の使用も許可されている」

「大げさじゃないか？」

「アレがあれば俺たちが行くまでも無いんだがな……」

「ダブルゼータか。たしかにあればミッドウェーなんか粉砕出来るが……贅沢言うな」

彼等の言うダブルゼータとは、かつての戦争でジュドー・アーシタという少年の駆ったそれではない。「サイコガンダム」と呼ばれる兵器の運用思想を一部取り入れた、要塞攻略を前提に開発された大型化仕様機の事だ。強大な力を持つもの、高コスト機ゆえの弊害で配備数は少ない。このような機体が作られたのは連邦軍の中で根強いガンダムへの信仰の賜物だ。

「こうもガンダムばかりだと飽きるぜ。たまにはギャプランくらい

「寄越せよな…」

彼はZ系が大半を占める可変機の現状に飽きていた。過去にティターンズが配備していた機体はジオン系のような外観が多かったが、性能のいいものも多かったのにとぼやく。

「政治的判断って奴はやだよな。バーザムは結構よかったぜ」

連邦軍の中ではエウーゴ系の機体ばかりが主力に選ばれるMSの選定や配備の現状に不満を持つものも少なくない。彼等もその内の一人だ。今度の会議で司令に意見具申をするかと

ため息をつきつつ、任務を遂行する。それが彼等の役目であった。

第8話「未来の事実」

防空圏に侵入したゼータの編隊はミッドウェー島に差し掛かったところで、彼らはミッドウェー島に一機の兵器が立っているのを視認した。

「ん…おい！あれを見ろ！！」

その機体は白亜のカラーリングで、背中のバックパックが「百式」に酷似している。どういう事かと高度を下げ、確認のために地上に降り立つ。

「ドラえもん、ザンダクロスと同じような形だけど何か違うよね？これ」

「ああ。多分同型の機体が何機かあったんだろう。リルルによれば土木工事用なんだったろう？あの時みたいの一つの駐屯地を作れば事足りるって訳じゃなくなったらしいから、

より多くのロボが駆り出されたっておかしくない」

ドラえもんは自らの推測を話しつつ、仮面ライダーストロンガーの乱入による混乱に乗じ、ザンダクロス（…：と同型の機体。人工知能は搭載前と思われる）と思しき機体を強引に奪取し、以前と同じように脳波コントローラ（奇しくもこの技術はかつてのアクシズが自身のフラッグシップ機の一つ「キュベレイmk-？」に組み込んだサイコ・コントローラに通じる物である）で操縦する。かつて、グリップス戦役でカミーユ・ビダンがガンダムmk-？を奪取したのと同様に格納庫を強引に突き破って、戦場に乱入する。

ズウウンと地響きを立ててザンダクロス（正確には別の機体だが、便宜上こう呼称する）が歩き出す。まるで大魔神の如く唸りを立てて。

「ド、ドラえもん!! ちょっと強引すぎない?」

「強引がどうこういつてる場合かぁ」

口喧嘩しつつドラえもんは外部スピーカーをオンにして日頃のストレスをぶつけるように兵団に向けて叫んだ。

「その兵団!! 一方的に蹴られる痛さと恐怖を教えてやろうか!」

おもむろにザンダクロスの胸部に備えられているビーム砲が火を吹き、兵団をなぎ払う。

「ハハッ!! ざまあないぜ!」

もし、この場にブライト・ノアがいたのなら激しいデジャブに襲われただろう。このドラえもんのはっちゃけた行為はかつて、カミーユ・ビダンが初戦闘でティターンズのMPに対して行った行為と全く同じだったからだ（何の因果か、台詞まで一緒）。のび太は思わず（ねずみにどら焼きを食われたの? 凄い台詞……）と震えてしまう。

それを目撃した美琴も思わず「あんたはどこのZガンダムのパイロットだぁ!!」とツツコミを入れたのは言うまでもない。

そこに連邦軍のZ部隊が到着する。地球におけるスーパーロボットののような図体をしているザンダクロスと違い、空力的に洗練されたスマートな姿をするZはボディビルダーとアスリート位の体格の差があった。

「……敵?」

ビーム砲のボタンを押そうとしたドラえもんを制止する声が響いた。

仮面ライダーストロンガーのものだ。

「待て！あれは地球軍のモビルスーツだ」

「地球の……？」

ストロンガーに言われて、よくよく見てみると飛行機型から人型に変形した機体の肩に地球をモチーフにしたマークと「U・N・T・

SPACY」と書かれたマーキングが記されている。

「ねえドラえもん……あれって、なんて読むの？」

「U・N・T・ SPACY……英語で地球連邦宇宙軍って読むんだ。……」

地球連邦軍……？」

ドラえもんは飛来した量産型Zにマーキングされていた「U・N・T・ SPACY」という文字に驚きを隠せなかった。そしてそれがドラえもん達の旅の第二幕の始まりを告げる福音。この瞬間こそがドラえもん達とこの時代とが交わる事を決定的にした瞬間であった。

ミッドウェー島は炎に包まれた。ドラえもん達がザンダクロスと同型機を奪取した事に加え、御坂美琴と仮面ライダーストロンガーの2面の電撃、さらには偵察に訪れた、連邦空軍の編隊も自らの目的のために、攻撃を加えたために兵団は蜘蛛の子を散らす如く、蹴散らされ、消え失せていった。必死の抵抗をみせたもの、元が土木作業用とは言え、大火力を誇るザンダクロスのビーム砲の一撃に巻き込まれ、いたずらに兵の数を減らすだけであった。そして指揮官と思しきマントを羽織った一体がまだ兵に余裕があるにも関わらず撤退命令を発した。

「総員撤退だ！！ハワイに転進する！！」

「何故です！」

「このままでは敵にいいようにされるだけだ。悔しいが……ハワイ

で戦線を立て直す」

兵团で無事なものは最前線拠点のオワフ島に順次撤退。兵团は思わぬ蹉跌を余儀無くされる事になる。

この敗北は今次大戦における、人類側の反抗の始まりと戦史に刻まれた。ここに「ミッドウェー〜ハワイ間遭遇戦」は地球側の勝利に終わった。

「……逃げたのかな？」

「いや、この駐屯地を放棄しただけだよ。本拠地からの援軍が望めなくなったんだろう」

ザンダクロスのコックピットでドラえもんは普段はあまり見せない冷静な態度で淡々と言った。こちらの戦力が思わぬ援軍のおかげで増強されたためとは言え、わずか数人と数機程度の攻撃でこうもあっさりと兵团が基地を放棄するはずがないからだ。他の戦略的目があるのでは、と感くぐつてしまう。実際、過去の戦いでは主力部隊による猛攻が待ち構えていたのだ。油断は禁物である。コックピットのモニターにザンダクロスを取り囲むように5機の量産型Zが佇んでいるのが見えた。もちろん何時でも火器を放せるように。ドラえもんは敵意が無いことを示すため、ひとまずコックピットのハッチを空けて姿を見せ、白旗を掲げる。

彼等が味方であることは仮面ライダーストロングが説明し、ドラえもんら及び美琴と連邦軍との間を取り持った。過去の人間とはいえ、元々何も変哲もない、ただの民間人であったドラえも

んらはともかく、美琴は仮にも学園都市で7人しかいない、最高レベルの超能力者の一人（クローンが生産されるほどの）として記録が残っており、連邦軍側は当初その可能性を疑った。（この時代に彼女……オリジナルの御坂美琴）が生きているわけではないので）しかし美琴本人が「あんたらねえ……どこからどう見ても本人でしょうが!」と怒ったのと、クローン達とは異なる口調であったのですぐに本人であることが確認された。

「いやあゝすまない。君に関する記録はほとんど残ってなくってね。こちらとしても判断がつかなかったんだ」

小隊長と思しき士官が笑いながら謝意を示す。美琴は若干不満げな顔だ。

「どういう事？」

「第3次大戦が終わってからしばらく経ってから――と言っても60年位間は空いていたが――また戦争があったんだ。『統合戦争』って言う大戦がね。その際のゴタゴタで第3次大戦前の学園都市の資料が散逸してしまったんだ」

「統合戦争？」

――統合戦争。それはかつての資本主義国家陣営が「外宇宙への脅威」に備えるのを名目に連邦政府設立を強固に推し進め、それにロシアなどの共産系勢力が反発して起こった長い戦争。宇宙移民が開始されていたのも統合の一因なのだが、当時修復が進んでいた異星人の宇宙戦艦（後のSDF-1「マクロス」）から得られたオーバーテクノロジーを巡って各国で争いが起こった。そのオーバーテクノロジーは学園都市の科学力の優位性を一気に減退させ、地位を失墜させるのに有効に働いた。日本政府はオーバーテクノロジーを餌

に、学園都市を正式に傘下（と、言うよりは監視下）に収め、戦力を反統合勢力の掃討に使った。その最中に行われた某国の学園都市への特殊弾頭を用いた爆撃によりWW3以前の資料が失われた。学園都市には無論強力な対電磁波対策が施されていたが、それをも凌駕する威力を発揮する爆弾が一発投下された結果、学園都市のデータベースに一部欠損が生じた訳である。

「その後のゴタゴタや戦争で当時のレベル5の能力者がほぼ戦死した影響で、学園都市もガタガタになって21世紀頃ほどの力は奮えなくなったのさ。その証拠に君たちの世代より何世代か後からは強力な超能力者も現れてない。」

「なるほどね……」

美琴は学園都市の衰退をまじまじと聞かされ、なんとなく納得したようにうなづいている。

彼女は既に元の時代で学園都市の暗部の一端を知り、都市そのものに半ば失望していた。それが的を得ていた事への完全なる絶望と「やはりそうだったのか」と言う諦めも多分に含まれているだろう。

「悪いが、君たちには我々と一緒に来てもらう事になると思う。君たちが本当に20～21世紀頃の間人かどうか確かめる必要もあるが……」

彼とは別の兵士の一人がドラえもん達の処遇をどうするかを隊長と話しあっているのが見える。よほどイレギュラーな出来事だったらしく、隊長らしき人物が時頼頭をかいいたり、ため息をついている。それをカブトムシのような仮面を被った男―仮面ライダーストロンガーが慰めているのが見える。

話し合いが終わったらしく、隊長が兵士たちに『基地に大人数が乗れる飛行機を寄こすように連絡するように』と命令し、そ

の指令を受けた兵士が暗号通信でウェーク島に通信を入れる。

それから20分ほどでウェーク島から中型輸送機（一年戦争時に運用されていたミデア輸送機の流れを組む改良機）が送られてきた。軍人たちに促されるように乗り込んだ輸送機のキャビンでドラえもんとのび太はため息をついていた。

ドラえもんはどういうつもりで軍隊が自分たちを保護したのか？と疑ったような気持ちで、

のび太は「僕たち……どうなるんだろう？」と言う気持ちの、そして美琴は。

「どういう事になってもあの子達は守る。なんで私がこの時代に召喚されたのかは分からないけど、人間、何か役目があるのなら……！」

彼女はこの時代での自分の役目を自覚し始めていたのかもしれない。この言葉はドラえもん達を守ることを自らに課した事を意味していた。彼女が史実でどの様な人生を送り、どのようにして死んでいったのか。この時代の人間ならば知っているのかもしれないが、それを抜きにしても、美琴は兵团と命をかけてでも戦うと言ったドラえもん達を放っておく事などできない。それが例え自分の力が軍隊に利用される事になっても、だ。美琴は決意を新たにし、凜とした顔でキャビンから見える空を見つめていた。

その瞳に映るものは何であろうか。近くにいたのび太は不思議そうな顔で美琴の後ろ姿を見つめていた。それは美琴の逞しさがかつて出会った満月美夜子の姿とダブったからか、憧れとも取れる眼差しで見つめていた。それほどに美琴は戦う女性の、強さ、を持っていたからだ。

ミッドウェーでの勝利をきっかけに、地球連邦軍は対鉄人兵団の戦線押し返し初めていた。6月20日に太平洋方面戦線最大の拠点「ハワイ オワフ島」攻略の足がかりとなる「ジョンストン島」を奪取。いよいよ反抗作戦の第一弾が開始されようとしていた。そんな時。驚きの情報が戦線の部隊に渡った。なんと、連邦軍のデータベースに無いガンダムが目撃されるようになったと言うのである。連邦軍に武器を納入しているアナハイム・エレクトロニクス社をして、「このようなガンダムをわが社は開発した覚えがない」と言わしめるものだった。太平洋方面軍の最大拠点「トラック諸島」では、戦線に介入してきたこのガンダムへの対応を協議するための会議が開かれていた。

「山南提督、どうなされますか？」

作戦室で参謀の問いに通常の連邦軍の軍服とは異なる、黒を基調とした軍服を着込んだ

一人の提督がいた。彼の名は「山南」。かつて宇宙戦艦ヤマトの初代艦長を務めた「沖田十三」、白色彗星帝国戦役時の連邦軍本星防衛艦隊総旗艦「アンドロメダ」に座乗していた

「土方竜」の士官学校時代の後輩であり、前大戦時は帝都の士官学校の校長を務めていた人材である。後方任務についていた彼が前線に駆り出されることになった理由は、前大戦時に本星艦隊に艦長として座乗していた佐官以上の人材の大半が未帰還となった事（移民船団には有能な人材が多数いるが、呼び戻すわけにはいかない）による措置である。

「うむ……現地に特殊MS師団を派遣する。、あれ、の配備は済んでいるな？」

「万全です。ですがアレを使うのはいささか時期が速いかと」

特殊MS師団とは、連邦軍が組織した部隊の中でも特殊な機体を運用する部隊を指す。ガンダムタイプの派生型が主に配備されており、連邦軍の持つ最高レベルの、カード、である。山南の言う、アレ、とは、連邦軍が開発したMSの中では、バケモノ、級の火力を持つ「ダブルゼータガンダム」の派生型の一つで、拡大型の「SSMS-010ZZ」。全長は原型機の19mに対し、初代ゲッターロボ並の31m、無論、火力は強力で「移動要塞」と称されるほどの力を持つ。主にジオンなどの残党掃討に回されていたが、兵団を押し返すために何機かが太平洋方面に回されたわけである。

「いや……万全を期す必要がある。ペガサス級は何隻動かせる？」

「ハッ、6番艦と4番艦が太平洋方面に向かっております」

「よし。直ちに行動を開始するように連絡したまえ」

この時期、連邦軍の強襲揚陸艦は空母的な役割を果たしていたが、数は決して多くはなく、

改修されたペガサス級強襲揚陸艦が未だ現役にあるという状況であった。

現地に向かった部隊はそこでGの可能性の一つを目撃することになる。

ーウエーキ島付近

ここでは母艦となるペガサス級より先に部隊が到着しており、ミッドウェー攻略に備えていた。、襲撃者、は連邦軍の都合など考えていないかのように、上空からレーダー網を掻い潜るように

現れた。基地は慌てて迎撃体制に入ったが、警備についていたジム？とネモが一蹴される。基地の狼狽ぶりを見かねた第20特殊MS師団などは自分たちが持ち込んだ機体で敵を迎え撃った。

「馬鹿な…ガンダムだとお!？」

上空から降下してくる機体は赤いウィングからV2のような光の翼を展開し、腕に斬馬刀のような太刀を持つガンダムなど、どのデータの機体にも当てはまらない。一見するとGやWなどのガンダムのような印象を受けるが、どこか違う様な感じでもある。

「邪魔だあああっ!!」

そのガンダムのパイロットらしき声が通信回線から聞こえる。どうやらパイロットは歴代の例に漏れず、10代の少年のような声だった。

「ヤレヤレ…:…:こういうのはお約束ってか？」

量産型Zのパイロットは悪態をつくど、ゼータが腕に持っている火器「スマートガン」を乱射する。命中したかに見えたが、爆炎に包まれたのにも関わらず、傷ひとつ無いどころか塗装が禿げた様子もない。どういう事かと目をこらすと、通常の装甲とは明らかに違う、特殊な金属が使われているとしか思えない様子が見えた。しかし基地守備隊のMSの放つ実体弾を事もなげに受ける一方で、ビーム兵器に対しては明らかに防御や回避行動を取っているのだ。

「どういう事だ？」

パイロット達は一様に首をひね、火器の掃射を続けるが実弾兵器ではダメージを与えられている様子が全くない。射撃系のビーム兵器装備の機体はまだ整備中であるし、今から武装を取りに行く余裕はない。彼らは「切り札」の起動はまだかと待ち焦がれる。

「アレは…:…:アレはまだか!？」

敵のガンダムは如何にも高威力のビーム砲を構えている。およそ高機動型MSには似合わない長砲身に「設計者はいったい何を考えてあんなの持たせたんだ」と首を傾げたくなるが、意外にチャージは早かった。数秒後には青白い閃光が砲口に収束し始めてい

る。

それが臨界点に達しようとした瞬間だった。ピンク色の極太い光芒が未確認のガンダムをかすめ、バランスを崩させる。

そのガンダムのパイロット―「シン・アスカ」はモニターに大寫しになっている一つの機影にその表情を強ばせた。モニター一杯に映る一機の巨大な機体―頭にビーム砲を内蔵し、

、連合軍、のGを思わせる顔―古の魔神が蘇って来たかのようなその威容に息を呑む。彼が元いた世界で遭遇した、殺戮の名を持つ連合軍の大型機にも似た印象を受けるが、それより通常のMSをそのまま大型化させたと言った感じを受ける。

「これがこいつらの……？」

切り札的な兵器なのはすぐに分かった。このような大型機は大抵、戦局を優位に運ぶために投入されるからであり、彼の経験から言って、そううとしか思えなかった。

連邦軍のパイロット達は、それ、の登場に歓喜した。地響きを立てながら華麗に現れたその機体こそが彼らの最強兵器。その名も「ダブルゼータ 大気圏内仕様」。ジオン残党軍などから「ジークフリート」と言われ、各戦線で恐れられた「移動要塞」がその威容を表したのだ。

「さあ、The Walkure's going on horse back（ワルクューレの騎行）と行くか」

ダブルゼータのパイロットは自身を北欧神話の戦乙女に例えるかのように笑みを浮かべ、

（律儀なことに基地の管制官が該当するクラシック音楽を大音量でかけていた。緊張感が無いお遊びとしか言いようの無い行為だが、それは彼らの余裕を示していた。）

ダブルビームライフルとのバックパックのミサイルランチャーのトリガーを引く。

轟音とともに重火器が火を噴き、敵を爆炎に包みこんでし

まう。

かつてサイコガンダムなどが「悪魔」と言われ恐れられたが、それを彷彿とさせる。

当然これはほんの軽い、ジャブ、である。これで倒れたら拍子抜けもいいところだ。

「フフフ……そうこないとな」

爆炎からほぼ無傷の敵が現れたのに関わらず、この余裕である。通信回線越しにこの薄笑いを聞いたのか、敵は怒り心頭。叫び声をあげながら斬馬刀のような太刀を構える。どうやら剣でこちらを叩き斬るつもりだろう。

「甘いな」

ダブルゼータは大型機とは思えない俊敏な動作でハイパービームサーベルを持ち、さらにシールドを構え、防御態勢を取る。ムーバブルフレイムの柔軟性の賜物だ。それと突撃が敢行されるのはほぼ同時だった。

光の翼を展開し、コックピットめがけて突撃してくる敵機。モニターにだんだんと大写しになる敵の刀の切っ先が迫ってくる。ダブルゼータの防御力が高いのは分かっているが、思わず目を閉じて祈りたくなる。ガンダリウム合金の多重空間装甲を貫く貫通力があああの刀にあるかどうかだ。

そして。金属音とともにシールドが刀とぶつかりあう。結果はガンダリウム合金製のシールド兼バインダーに亀裂が走り、一部が碎かれた。

「はあ……はあ……どうだ」

シンは愛機「デステイニー」の攻撃力が敵の防御をわずかでも上回った事に笑みを浮かべ、自分の母艦に増援を要請すると同時にさらなる行動に出る。

「よし………！」

その直後、不意に西の方角よりビームらしき光が飛来する。デステ

イニの母艦からの援護射撃であることは容易に想像出来る。だが、待ってましたと言わんばかりにダブルゼータの瞳に光が走り、額の砲口に光が収束し始める。荒療治な方法だが、戦艦に匹敵するパワーを持つダブルゼータの真骨頂。

「こいつ……まさか!？」

シンは驚愕した。エネルギーにエネルギーをぶつけて相殺しようなどともな奴の考える事ではない。チャージはデステイニーの持つそれ以上の速さで完了、頭部ハイメガキャノンが放たれる。そのビームとデステイニーの母艦「ミネルバ」の放った陽電子砲とがぶつかり合う。一見、戦艦の特装砲とMSの搭載武装とでは威力に差があるように思える。しかし大型機故に数機の大出力ミノフスキー熱核反応炉」が搭載されており、（俗に言う「核融合炉」）の織りなすパワーはオリジナルのダブルゼータガンダムすら凌駕し、ペガサス級などの高性能艦も沈められるほどの威力を誇る。（小型機のV2には次世代の動力「ミノフスキードライブ」が積まれた例があるが、生産コスト故か核融合炉を代換するまでには至っていない）それが陽電子砲とぶつかり合った。威力はわずかにハイメガキャノンが上回り、陽電子砲のエネルギーを飲み込むような形で押し返し、相殺したのだ。

「そんなバカな……こんな……」

目の前の光景に己が目を疑うシンだが、これ以上の単機行動は危険ここはひとまず母艦に戻り、援護に戻るべきと判断したのか、引きかけの駄賃にジム？を一刀両断してから引き上げていった。

「なんだったんだ…アレは」

「この近くに確認された未確認艦の搭載機と思われませんが、詳細は不明です。他にも2機のガンダムが確認されています」

「よし。司令に報告だ。それとジェガンかジャベリンの配備を申請するように上申するように」

「了解しました」

この日、特殊MS師団が交戦した艦船とその搭載機に関する情報は直ちに上層部に伝えられた。即日で戦局に悪影響を及ぼしかねない要素は排除しなければならないと言う決定がなされ、各方面の基地守備隊の配備MSの近代化が急速に進められる事になった。そして、全軍に未確認のガンダムに関する情報が伝えられ、特にデステイニーについてはこう称された。「侮りがたし」と。奇しくもシンが行ったこの行為がこれ以降の連邦軍の戦略に大いに影響を及ぼしたのである。後に歴史家の間で「連邦軍はガンダム神話を盲信していることから、連邦に仇なす、G、の出現に恐れを抱いたのだろう」とまで言われる、戦略の転換点となったのである。

そして連邦軍は対策の一環として、先の大戦で試作段階にあった、「ガンダムF91」の正式量産を決定。

麾下の組織「海軍戦略研究所」通称「サナリイ」にF91の量産型への要求仕様を通達した。

なのはら3人が日本に繋留されているラー・カイラムに乗艦してから4週間が経過していた。この日は3人揃って、この世界の歴史に関する講義を受けていた。戦乱に満ちた時代、崇高なる魂達の輝き――そして国家の大義に殉じた数多の撃墜王達、人類の生き残りをかけた星間戦争……。なのはは話には聞いていたが、改めて目の当たりにした戦争の記録映像（それぞれの戦後に民間の手によって造られた記録フィルム）に息を飲み、フェイトは「別の世界でこんな戦争が起こってたなんて……」と強いショックを受けていた。

ヴィータは自身が造られた古代ベルカ時代（彼女は元々プログラム体であり、古くからの多くの戦争を経験してきた。）の戦乱を彷彿とさせる、映像の数々に嫌気がさしているようである。3人が目を奪われたのは近代の歴史上、有名なターニングポイント。特に現在に繋がる戦乱の幕開けになった一年戦争でのジオン軍総帥「ギレン・ザビ」の演説などだ。

なのはたちはここで、連邦に対し戦いを挑んで敗れ去った者達の執念―ジオンの残光―を目の当たりにした。

『我々は今、一人の英雄を失った。これは敗北を意味するのか？……否！始まりなのだ！！地球連邦に比べ、我がジオン公国の人口は30分の一以下である。今日まで戦い抜いてこられたのは何故か？……諸君！！我がジオン公国の戦争目的が正義だからだ。これは諸君らが一番知っている。我々は地球を追われ、宇宙移民者にさせられた。』

そして、一握りのエリートらが宇宙にまで膨れ上がった地球連邦を支配して50余年、

宇宙に住む我々が自由を要求して何度踏みにじられたか。

ジオン公国の掲げる人類一人一人の自由のための戦いを神が見捨ててはならない。

私の弟！諸君らが愛してくれたガルマ・ザビは死んだ。何故だ！？

新しい時代の覇権を選ばれた国民が得るは、歴史の必然である。

ならば、我らは襟を正し、この戦局を打開しなければならぬ。

我々は過酷な宇宙空間を生活の場としながらも共に苦悩し、錬磨して今日の文化を築き上げてきた。かつて、ジオン・ダイクンは人類の革新は宇宙の民たる我々から始まると言った。しかしながら地球連邦のモグラ共は、自分たちが人類の支配権を有すると増長し我々に抗戦する。諸君の父も、子もその連邦の無思慮な抵抗の前に死んでいったのだ！

この悲しみも怒りも忘れてはならない！それを、ガルマは死をもって我々に示してくれた！我々は今、この怒りを結集し、連邦軍に叩きつけて、初めて真の勝利を得ることができる。この勝利こそ、戦死者全てへの最大の慰めとなる。国民よ立て！悲しみを怒りに変えて、立てよ国民よ！！我らジオン国国民こそ選ばれた民であることを忘れないでほしいのだ！優良種である我らこそ人類を救い得るのである。ジーク・ジオン！！』

まるで、かつて、ドイツを破滅させた独裁者「アドルフ・ヒトラー」を彷彿とさせる、聞いている人々を思わず奮い立せられる劇的かつ勇ましい演説、そして21世紀ごろの政治家では到底持ちい得なかった、圧倒的なまでのカリスマ性。この男「ギレン・ザビ」こそ、今日まで続くアースノイドとスペースノイドの戦いの幕を開いた張

本人。

その手腕から、歴史上最も優れた政治家の一人としても記憶されているらしい。この演説の巧さならジオン軍の構成員達の中に信奉者を出したのも頷けると、映像を見ながらなのは思った。（ちなみにギレンの信奉者として有名なものに当時、特殊部隊「サイクロプス」隊の上司であったキリング中佐、親衛隊の隊長（階級は大佐）であり、後のデラーズフリートの蜂起の首謀者「エギーユ・デラーズ」がいる）。

一演説は人々を熱狂させる。歴史上でもヒトラー率いる「ナチス党」の躍進に一役買った。彼は熱弁を奮い、巧みに国民を魅了した。ギレンもその素養を十二分に持っていたのだろう。

そして画面は切り替わり、デラーズ紛争でのデラーズフリートの行ったガンダム試作2号機による核攻撃が映し出される。（視点は当時、核攻撃をすんでのところで生き延びたペガサス級強襲揚陸艦の一隻からだ）

『再びジオンの理想を掲げるために……星の屑成就のために……！！ソロモンよ！！私は帰ってきたぁー……ッ！！』

（デラーズフリートの反乱は戦後しばらくは当事者と上層部しか知り得ぬ極秘事項に指定されていたが、改革派がティターンズを反政府運動とする歴史認識を作る過程でそのきっかけとなる出来事として歴史表に復活させた）

まばゆい光と共に爆心地にいた全てが飲み込まれ、消滅していく。核弾頭の業火に焼かれていく宇宙戦艦、戦闘機、MS……そして人間。3人はあまりにも凄惨かつ衝撃的な光景に思わず目を背けてしまう。いや、直視できなかったと言ったほうがいい。悲鳴と怒号、罵りなどが入り交じった交信の音声と相まって、言葉に出

来ないほどの悲惨さを醸し出していた。

「グレイファントムには連絡はとれんのか!？」

「ダメです! 応答ありません! ……ちくしょう! ……ジオンめ! ……」

戦艦の艦橋がパニックに陥っているのが一目で分かった。

声が明らかに上ずっていたり、震えているのが大多数を占めていたからだ。コンソールをいじる通信士などは指が震えてうまく操作ができなくなっていた。――核の業火は宇宙でさえこのような地獄を出現させる

のか。爆心地にいた全ての物が消滅し、後に残ったのは威容を誇った大艦隊『だった』物の残骸でしかなかった。その中には連邦軍が『不沈艦』と寛伝していたペガサス級も含まれていた。これが彼等の「崇高なる理想」を実現させるための、犠牲、と言うのか? フェイトはこみ上げてくる感情を抑えきれず、拳を握り締めていた。その姿になのはも心を痛めた。彼女――フェイトがここまで分かりやすく怒りを露にするのは珍しいが、このような光景を目にしてしまったのは、当然であると思える。それだけ残虐な事態が巻き起こったのだから。

「この時に失われた艦艇は少なく見積もっても数十隻、死傷者は数え切れないほどだったとされている。だが……これでもまだ軽いほうさ。前の、大戦、に比べれば……」

解説役のブライトは前大戦に比べればこの程度の事など序の口であると告げた。そう。余りにも大きな犠牲だった、白色彗星帝国との戦いに比べれば……。

第8話「未来の事実」（後書き）

と、言うわけでドラえもん達は保護され、なのは達は未来世界の戦乱を初めて目にしました。ジオン公国ファンの方々、ギレン・ザビファンの方々、一方的に書いて、本当にすいません！！

なのはやフェイト、ヴィータの3人はジオンが行ったコロニー落としなどの行為を絶対に許さないでしょう。純粹ですから。

間章（ストライクウィッチーズ編）その1「ストライクウィッチーズ わたしに

今回はストライクウィッチーズ世界が舞台の小話です。

連邦宇宙軍のある空母機動部隊とウィッチーズの出会いです。これも続くかどうかは分かりませんが……とりあえず。

リリカルなのはの時空管理局への若干のアンチ要素があります。間章はストライクウィッチーズの架空戦記編となります。

連邦政府はなのはやフェイトからもたらされた「時空管理局」という組織の情報を入手。その存在を認知し、平和的な共存を目指して彼等の痕跡を探索した。

—そして7月の中頃、管理局側の新鋭艦であるXV級次元航行艦の一隻が補給物資を現地の局員に届けるべく、衛星軌道に出現したのを、処女航海中だった、連邦の中でも強力な部類に入る、波動エンジン搭載艦の中でも、最新鋭のできたてホヤホヤの戦艦「アンドロメダ？級一番艦 メネシス」

（かつての本星防衛艦隊旗艦であった、宇宙戦艦アンドロメダの改良型。本来は同級の同型艦の一つとして、対白色彗星帝国の本土決戦に備えて建造されたが、完成率80%の状態で終戦を迎えた。その後、建造段階であった本艦は波動砲を拡散式から収束式に直すなどの改良が行われた上で、2199年4月に就役した）が接触。ここに管理局との正式な接触が行われたのである。

「あなた方はいたいこの世界に何をお望みなのです？」

「一言で言うなら科学兵器を一切放棄し、我々の管理下に入るの

す。さすればこの世界を我々が守りましょう」

このXV級の艦長は出会い頭にこう言った。この一言は後にリンデイ・ハラオウンを始めとする、穏健派をして「我々の最大の失態」とも言わしめるファーストコンタクトであったと記録される。当然、地球側の彼等への第一印象は最悪そのもの。この後、管理局はこの世界との関係改善に躍起になるのだが、それはまた別の機会に語る。時空管理局の問題点は上層部にさえ国粋主義的な極右思想が少なからずあることで、時空管理局の内部の間でも管理世界とのトラブルを招く要因であると問題視されていたが、ここでそれが表に出てしまったのである。

事実、この航行艦の艦長は「科学兵器の放棄」を自分達と対等に接する条件として平然と突きつけた。これが局員の総意でないにしても、危険な香りが漂っているのを連邦宇宙軍側は感じ取った。

「なるほど。それがあなた方の‘未開の地’に対する考え方か。勘違いも甚だしいですな」

ため息をつきながら「メネシス」艦長はおどけた動作を見せた。こういう態度は自分が一番だと思いがった国々によく見られた傾向で、ベトナム戦争前の米国もこのような傾向があったと、艦長は苦笑する

「ほう？それはどういうことですか」

「あなたはどうぞ、歪んだ選民意識をお持ちのようだ……。多くの脅威と戦ってきた我々の力を甘く見ないでもらいたい。それを今ご覧に入れましょう」

彼は窓に映っているメネシスに視線を移す。―すると。「メネシス」の艦首の二つの砲門からまばゆい青色の光が収束していくのが見える。目標はこの艦の近くで漂っている、100年ほど前の某国の廃棄衛星である。砲門から溢れんばかりのエネルギーが充填されたと思った瞬間。2つの閃光が発射され、直撃された廃棄衛星は塵一つ残さず消滅した。

「これが我々の持つ力の一端、波動砲、です」

彼は勝ち誇るように微笑を浮かべ、「あれはまだ三分の一程度。最大出力なら惑星をも破壊できる」とも付け加えた。

これはまさしく、連邦軍による砲艦外交とも言えるものだった。強力な戦艦を用いて相手を恫喝…とまではいかないものの、相手側に重大な衝撃を与える事に成功し、連邦側と管理局側が対等に交渉を行えるところにまで持ち込んだのである。

「さあ交渉を再開しましょう」

ニヤリと笑いながら「メネシス」艦長は何事も無かったかのように振舞う。それは管理局側にはかえって恐怖心を煽られる形となったという。この後の交渉はすんなりと進み、やがて政府間の交渉に写った。相互の防衛を分担する「安全保障条約」の締結と、通商の開始、連絡機関を置くことが合意され、第120管理外世界は観測指定世界へその分類を変えられた。そして7月19日を持って双方の国交が開始されたのだ。

―後日 日本 地球連邦軍 時空連絡局（管理局との外交を担当する所轄。条約に基づいて設立）

「局長、管理局より通達が」

「何？で、内容は」

「ハッ、『我、並行時空の地球を発見』だそうです。」

「ううむ。たしかロンド・ベルにガンダムタイプを運搬している艦隊がいたな？」

「第一航空艦隊ですか」

第一航空艦隊。それは白色彗星帝国との戦いで損傷し、帰還したもの、大破状態のままだった波動エンジン搭載型航空母艦を戦後に修理、今後の反攻作戦に合わせる形で急ぎ、再就役させた艦船で構成されている艦隊。現在の連邦軍の体制下ではほぼ唯一の純粹な空母機動部隊と言える。

「今の旗艦は「赤城」だったな？」

「はい。艦隊司令に電話が繋がっています」

「分かった」

局長は電話を取り、しばらく話をする苦々しい表情を浮かべて受話器を置いた。

「管理局と共同調査だそうだが、はたしてどうなることやら」

「奴らの動きしだいですか」

「そうらしい。まあ下手に我々がしゃべるわけにはいかん。しかし大いに役立つぞ。何せ赤城には例の機体があるのだからな」

「ああ、ガンダムF91の量産試作機にダブルゼータですか？あれなら奴らも我々をなめることはないだろう。君、その世界の詳細は

掴めているのか？」

「通達と共に送られてきた書類によれば、どうやら、ネウロイ、という脅威のせいで、WW2が起きずに世界規模で戦闘状態にあるようです。目的地はこの世界における「日本」に当たる国家――「扶桑皇国」だそうです」

「縁起が悪い名前だ。扶桑はたしか真つ二つに折れて瞬時に轟沈した戦艦だろ」

「ですかそれとは裏腹に国力はこちらの帝政時代の日本を超越しており、20世紀終わりごろの日本にも引けを取りません。どうやら鎖国が行われずに積極的な海外進出が行われた結果のようです。大英帝国並ですよこれは」

「それはすごい物だな」

「艦隊は既に現地に向けて出発したとのことです。果たしてどうなる事やら」

「さあな。後は天命を待つのみだ」

現地に派遣された第一航空艦隊はかつての大日本帝国海軍の栄光ある「第一航空艦隊」の名を受け継いだ精鋭部隊だ。そう簡単にやられるハズはない。彼はそう思いながら政府へ報告書を提出した。

「第一航空艦隊、出征ス」と。

物語はここから始まる。行き先は微妙に違う歴史を辿り、国の名前も「ブリタニア連邦」、「帝政カールスランド」など、何となく似てるけど、どこかが違う、世界。国の組み合わせはこちらとほぼ同じ。日本は扶桑と言われているらしい。そんな世界に派遣されたのは空母6隻を基幹とする一大機動艦隊。彼等は異なる世界で如何なる活躍をするのであろうか。

一並行時空の1940年代 扶桑皇国領海 第一航空艦隊旗艦
空母「赤城」

「司令、転移は成功です。僚艦は全艦とも本艦の周囲にて待機中です」

「御苦労。さっそく各艦長を集めて今後についての会議を行う。通達を」

「了解」

艦隊司令兼、赤城の艦長を努めている、この老境に差し掛かった一人の男―「エイパー・シナプス」は副官の報告に頷き、直ちに行動を起こした。彼は一年戦争以前の戦歴を持つベテラン艦長で、デラーズ紛争の際に、ペガサス級強襲揚陸艦の7番艦「アルビオン」の艦長を務めていた。しかし当時はティターンズに代表されるようなタカ派が跳梁跋扈していて、改革派に属していた彼の立場は危うい物だった。戦後は独自行動を理由に極刑が下される予定だったが、だが、その直前で、改革派が裏で支援していた半政府運動、エウーゴ、の台頭に伴うグリプス戦役の勃発で先送りされ、死刑囚同様の扱いで数年の時を過ごした。しかし第2次ネオ・ジオン戦争―彗星帝国戦役の際に人材不足に陥った連邦軍の判断で現役に復帰させられた。その際に過去からの帰還者（偶発的に未来にタイムスリップ

した人間の総称）である、レベル大将（一年戦争当時の総大将であった関係で、未来に来た後では宇宙軍司令長官の任に付いていた）の参謀に抜擢され、現在は連邦軍改革派の中樞を担っている。

会議は赤城の作戦室で取り行なわれ、シナプスは扶桑皇国が自分たちの存在を掴むのには時間はそうかからないとし、自分たちの方から動かなくても向こうのほうから接触してくるだろうと説いた。各艦の艦長たちもこれには同意を示した。

「しかし司令、この世界の脅威―「ネウロイ」にはどのようにに対応なさるのですか？」

「我々に攻撃してくるのであれば全力で排除するが、場合によっては現地の軍と共同戦線を張ることもあると考えていてくれたまえ」

「資料によると、WW2の戦闘機が実物に加え、同名の魔法を用いた推進機もあるとのことですが、我らの知識でこれらの開発を促進させるつもりですか」

と別の士官が声を上げる。護衛艦の一つの「夕雲」の艦長だ。

「援助を持ちかけられた場合はそれに対応するしか無かるう。我々の技術はこの時代から見れば理解不能なほどに高度すぎる。ビーム兵器は論外と言っているいいし、ミサイルがやっとなれるようになる時代になっているさえも怪しい。それでもジェット機の登場を早めるのなら可能だろう」

「確かに史実ではメッサーシュミットがシュワルベを造っていますからね」

知識を与えるのはこの世界の科学を発展させるのに役立つだろう。連邦にしても初代マクロスやイスクンダルから得た知識の存在が現在の繁栄の礎を築いたので、必須とまではいなくても知識の存在は大きいのである。この世界にオーバーテクノロジーをもたらすことは善行なのかは分からない。しかしネウロイを完全に倒

すには技術革新を促すしか無い。たとえそれがどの様なことを招くにしても。大戦が起ったら自分達の手で終わらせるしかない。

「とりあえず皆、向こう側からの接触待ちと言う事でよろしいな？
下手にこの世界の人間を敵には回したくはない」

「かまいません」

ほぼ全員がこれに同意し、艦隊の行動指針は定まった。しかし問題は向こうがこっちを見つけてくれないと行動が起こせない事にある。この後、シナプスは事の進展が上手くいくことを願い、艦内神社にお参りしたという。

―同じころ、扶桑皇国でも訓練航海中の戦艦「日向」によって「謎の空中戦艦出現す」との電文が打たれ、本国はこの対応に追われていた。

「何、空中に浮いてる戦艦？」

「ハッ、海上からの写真を解析したところ、ネウロイではなさそうですが現在、我が国を初めとしてこのような物を作る国などどこにも存在しません」

「フム。我が海軍で手が空いている部隊は？」

「新型ストライカーユニット「零式艦上戦闘脚二二型甲」の受け取りの為に一時的に召還した遣欧艦隊（本来は物資を前線に輸送すれば済むのだが、このところ頻発して目撃されている「機械の巨人」の襲撃を考慮して潜水艦でわざわざ人員を本国に戻しての受領となった）の人員です」

「よし、直ちに偵察に出る様に要請してくれ」

「ハッ」

軍令部より命令が通達され、呉の航空基地より一人の士官が出撃した。名を「坂本美緒」。

扶桑皇国海軍所属の女性士官で、この世界における‘魔法使い’と形容すればいいのだろうか―の力を持つ。彼女はこの世界の大戦における海軍のエースとして名高く、それもあって今回の任務に抜擢されたのである。

「調査にわざわざ私が駆り出されるとは…まあいい。新型ストライカーズユニットの慣らしにはちょうどいいかな」

彼女は一人、単騎で調査に行かされることに不満を覚えるが、新型の慣らし運転にはちょうどいいと自分を納得させ、目的地に向かった。

―護衛艦「秋月」艦橋

「レーダーに反応…あれ？」

「どうした？別世界だからって昼寝でもしてたのか？それともエロい事でも考えてたのか？」

「レーダーの反応ですが、航空機にしては小さすぎますし、鳥にしては大きすぎます…これはどうやら人間サイズのです。スピードは零戦二二型相当の時速540kmほどです。魔力らしきエネルギー反応も出ています」

「航空戦隊に通達し、偵察機の出動要請を」

「了解」

護衛艦から空母に偵察機の発進要請がなされ、空母「蒼龍」に配備されていた偵察型のRVF-171「ナイトメアプラス」が確認のために発艦した。

「こちら‘彩雲1’。目標をレーダーに捕捉。これより接触に移る」「了解。接触の際には十分に注意せよ」

ナイトメアプラスはその性能をもってして瞬く間に超音速に加速、目標への接触を図った。接触のときにはスピードを落とさなくてはならない（超音速飛行の際には衝撃波が付き物で、人間などひとたまりもない）という制約があるが、それでもこの世界の戦闘機―情報によれば、大戦が起こっていないか、発達スピードが遅いため、史実での九六式艦上戦闘機がまだ最新機らしい―よりは遥かに早い。

4分ほどで目標が視認できる距離になった。

キーンと轟音が響き、物凄い速さでプロペラの無い流線形をした飛行機がこちらに近づいてくる。思うにブリタニア連邦、帝政カールスラントなどの各国が研究していると聞く新式の推進機関の噴流推進式（要するに後の世でいうところのジェット機）の機体だろうか。実用化には至っていないはずだが…。

機種に操縦室らしきものが見えるので「ネウロイ」ではなさそうだが、微かに尾翼に扶桑刀らしきマークが描かれているのが見える。

「いったいどの国があんなものを作っ…な、何!？」

それは、彼女、には信じられない光景だった。先ほどの上部に妙な物をつけた飛行機が自分の目の前であつという間に巨人のような姿に変形したのだ。あいた口が塞がらないとは、まさにこのような事を言うのだろう。

ナイトメアのパイロット達は機体をUターンさせて、彼女の目の前でファイター形態からバトロイド形態への変形を敢行したのである。

「その飛行中のウィッチに告げる。そちらの所属を明らかにせよ」

（連邦側は既にある程度の情報を事前に手に入れていたので、ウィッチを見てもたいして驚かない）

拡声器超しに操縦者の声が響く。どうやらこちらの事をお見通しのようなのだ。美緒はとりあえず自分の身分を、巨人の操縦者に明かした。

「私は扶桑皇国海軍遣欧艦隊第 24 航空戦隊所属、坂本美緒少佐。貴官らはどこの国の所属か？」

「我々は地球連邦宇宙軍第一航空艦隊所属 210 航空隊。貴官をとりあえず我が艦隊の旗艦に案内する。我々に続いてくれ」

短めに告げると、彼等は美緒を艦隊の居る空域に誘導していく。彼女は 540 キロという、零式艦上戦闘脚の出しうる最大速度で追従したが、音速を遥かに超える相手側のあまりの速さに何度も置き去りにされそうになったと後に同僚に語ったが、

これが革新的な飛行機ジェット機とウィッチとの初邂逅であった。

案内された彼女は眼前に空中に浮かぶ大型航空母艦の姿に目が飛び出そうな衝撃を受けた。さらにその艦の構造は彼女の知る空母とは異なっていた。飛行甲板が通常のものに加えて、別の用途に使わ

れると思しき甲板が斜めに配置されていると言う見たことのないものであった。（彼女は知る由無いが、それは後の世で発明されるアングルド・デッキと呼ばれる方式の甲板で、大戦後の20世紀中期以降に普及している）

甲板には空母の搭乗員が待機しており、彼等から拡声器による誘導を受ける。

「そのままの速度を維持して…進路を若干修正してください」

「了解」

ここは美緒の技量がものを言った。ベテランだけあって、確かな動きでゆっくりと降下していく。その様子は甲板に出て来たシナプスと副官も確認している。

「あれが噂のウィッチーズですか」

「ああ。無線の報告やあの制服：おそらく日本兵だろう」

「日本海軍ですか。しかしあの恰好はどうにかならんですかね」

双眼鏡で美緒を視認した副官は頭を抱える様な仕草を見せた。何せ情報で知ってはいたものの、ズボンのような下着を一切履いておらず、パンツ丸出しである。目のやり場に困ると言った感じだ。

「この世界での常識はわからんな」

と、シナプスも同意のようだ。2人は出迎えの為に甲板の中央部にまで赴いた。

「君たち、ご苦労だった。後はゆっくり休んでくれたまえ」

「ハッ」

偵察機の乗員が敬礼を返すこの将校こそ、この艦の指揮官だろうと踏んだ美緒は偵察機の乗員の後に続く形でシナプスに敬礼をして自

分の身分を明かした。

「閣下、扶桑皇国海軍所属、坂本美緒少佐であります」

「この艦隊を預かっているエイパー・シナプスだ。少佐、本艦――「赤城」によるこそ」

シナプスと美緒。本来ならば決して出会うはずの無い2人が出会ったこの瞬間、この世界の歴史は新たな可能性を求めて動き出す。そして彼女の母艦と同じ名を持つこの航空母艦との繋がりが始まった

坂本美緒は軍令部より調査を命じられ、乗艦することになった。そのため、シナプスに赤城の艦内を案内されていた。当然のことだが、艦内に置いてあるものはどれもこれも300年近く後の時代の産物のため、彼女には何もが目新しく見える。

――艦内通路

「どうだね少佐。本艦の乗り心地は」

「快適です。しかし自分には未だに信じられません。あなた方が異世界の人間、まして異なる時代の人間などとは」

美緒はシナプスらが異世界の300年近く後の未来人である事に驚きを隠せない。これだけの大艦――この艦の大きさを例としてあげれば、未来の地球でこの時代の世界最大だと言い伝えられている戦艦「大和」を軽く上回る規模を誇る――を空中に浮かべられる推力を軽く捻りだす機関、見たことのない重装備を備えたこの巨艦が自分の母艦である「赤城」の名を受け継ぐことの一応の説明はつく。

「一つ聞いてよろしいでしょうか」

「なんだね？」

「自分の母艦―「赤城」は閣下の世界ではどのような運命を辿ったのでしょうか」

美緒は気になる疑問をぶつけた。異なった道を辿った祖国で自分の乗艦していた空母がどんな道を辿ったのかを。シナプスはこの質問に答えるか窮した。何せ自分の世界では、赤城は空母同士の海戦での敗北者であると同時に、栄光と悲劇を味わった日本海軍航空隊の象徴と記憶されているからである。しかし歴史的事実なのはたしかだ。

「我々の世界では撃沈されたよ。たしか1942年だったな、アメリカ合衆国という国との戦争の重要な海戦「ミッドウェー海戦」で無残な敗北を喫した末に……。この時、同時に出撃していた大型正規空母も全艦失われている。これを境に帝国海軍は坂を転がり落ちるように敗北を重ねていく」

「：！」

美緒にはこの事実はショックとしか言いようがなかった。

まさか赤城が異世界でそのような最期を迎えるとは……

「あくまでこちら側の記録での事だよ。この世界でそうなのとは限らん。この艦が赤城の名を継いだのは、進水式に立ち会っていた武官が日本人だったせいで、その戦歴に肖る形で名付けられたと聞いている」

シナプスは赤城の運命が自分達の世界のようになるとは限らないと説明する。そして改めて機動兵器の格納庫部に案内した。

格納庫にはおよそ、この時代からは想像のつかない兵器が数多く収容されていた。

美緒を驚かせた人型に変形するプロペラの無い飛行機、それとは別の種類の戦闘機、さらには人型の大型ロボットなど…、SF小説にでも出てきそうなものがズラリと並べられている。

「艦長、その子が日本：じゃなくって扶桑皇国の？」

格納庫で艦載機を整備していた一人の整備士がシナプスに敬礼しながらやって来た。

30代程の年齢の壮年の男性である。

「そうだ。君達にも通達が行くと思うが、当面本艦に乗艦することになった坂本美緒少佐だ」

「おおー！」

シナプスは格納庫にいた整備士達に美緒を紹介したが、彼等は瞬く間に仕事を中断し、美緒の美貌に見惚れつつも自己紹介をちゃっかりと行い始めた。普段女気の少ない現場で働いているのだから、美人の女性に群がるのは無理も無い。しかしこれではキリがない。

「オホン。：諸君の気持ちは分かるが、今日はこれまでにしてくれ」

「そ、そうですね。気を取りなおして：。少佐、我が艦隊の兵器をご覧に入れましょう」

整備士は格納庫にある各種機動兵器についての説明を始めた。最初は戦闘機の「コスモタイガー？」だ。

「こいつは一式艦上戦闘機、コスモタイガー？」。2199年時点での最新機で、宇宙と地上で運用可能な機体です」

「宇宙？宇宙って言うとの？」

この時代には宇宙開発など夢のまた夢の絵空事にすぎない。美緒も以前、休暇中にキネマなどで見たり聞いた事があるくらいの単語である。それをこの艦にいる連中にとっては当たり前な単語らしい。

「そうです。我々の時代には人類は地球だけで維持できるか怪しくなっているので、宇宙にコロニー：分かりやすく言うと、人の住む環境を巨大な箱の中に作ったような物に移住したり、火星とかの他の惑星などにも版図が広がっているので、宇宙を行きかう軍艦が普及しましたが：こいつはその中でも長距離航海艦用の艦載

機として造られています」

コスモタイガーに関する説明に聞き入る美緒。まだプロペラ機が当たり前に飛んでいるこの時代では信じられないが、近い将来にプロペラ機に代わってジェット機が飛行機の主流となるのは歴史的事実である。美緒も軍人なので、軍の飛行機に乗った事は何度かある。

しかし目の前のこの機体は美緒の知るいかなる機体とも隔絶された外観をしている。

「乗ってみるかね？ 少佐」

美緒がいつの間にか乗ったそうな顔をしているのに気がついたのかシナプスが笑みを浮かべながら言った。

「え！？ い、いや自分はその…」

心を見透かれたように大いにうろたえる美緒。どうも彼の方が自分より一枚上手のようだ。

「曹長、整備は終わってるかね」

シナプスは整備士に問いかける。

「万全です。念のために武装も対空戦用を…いいんですか艦長？（艦載機をいじらせて…）」

耳打ちをして疑問を言う整備士。客に艦載機をいじらせる等、前代見聞であるからである。増してや美緒はジェット機の「ジ」の字も微塵も無い時代の人間。いくら軍人でもジェット機に触れた事も無い人間に、いきなり動かせと言うのはいささか無謀ではないか。

「かまわん。（少佐をこちらの味方に引き込んでおくのにちょうどいい機会だ。それにこちらへの印象を良くするのには有効だろう？）

と言う訳で、連邦側の思惑もあっていきなりコスモタイガー？に乗る事になってしまった美緒。ジェット機時代には欠かせない、耐Gスーツとヘルメットを渡される。更衣室を借りて海軍の軍服からスーツに着替える。同じ部隊の同僚たちが見たら面白がるのは間違いないだろうが、音速の世界ではこの装備は当たり前らしい。

「これも時代の流れって奴か。…思ったよりは動きやすいな」

着替え終わると、20分ほどジェット機の動かし方に関する即席講座を受けた。驚く事に、動かし方自体はこの時代のレシプロ機とそんなに大差無かった。

「動かし方自体はそんなに変わらんのだな」

「車とかの仕組みは何百年経っても同じですからね。飛行機もそうですよ。操作法は同じです。エンジンが違うだけで」

との事。納得するといよいよ発進である。

エベレータで格納庫から甲板に運ばれ、エンジンを吹かしながらカタパルトがある位置まで機体をランディングさせる。装着が完了し、甲板員から準備OK合図がなされる。

「少佐、良いフライトを」

通信の声に美緒は「ありがとうございます」と答え、一気にスロットルを引く。

「……！」

射出の瞬間、体がシートに押しつけられる。プロペラ機とは段違いの加速である。その加速はストライカーユニットをつけていても早々味合えないほどに物凄かった。瞬く間に高度10000mに上昇していく。

「ハア……ハア……。な、なんて加速だ……っ！こいつはシャーリーの奴が喜ぶだろうな」

と一人ごちつつ、コスモタイガーを操って周辺空域を飛行する。旋回性能・加速性・上昇力のどれをとっても良く、さらに自分の操縦に機敏に反応してくれる。

「300年分の技術革新という奴か？凄いな」

目の前に広がる青空、雲を眼下に眺める気分は最高だ。仲間にも味あわせたいくらいである。この事を軍の同僚や戦友に言ったらなんと反応が返るだろうか。

特に同じ部隊の部下「シャーロット・E・イエーガー」に至っては、おそらく目を耀やせて「ええっ！？ずるいですよ少佐！私も乗

せてくださいよ」と言ってくるのが目に見えるようだ。

「フフ、アイツらへの自慢の種にはなりそうだ」

彼女は一人満足気に音速の世界に足を踏み入れたことへの興奮に身震いし、自然と笑っていた。これで、美緒は扶桑皇国で初めて音速の世界に足を踏み入れた人間となった。時代相応の形ではないが、致し方ない。コスモタイガー？は未来世界の技術の結晶なのだから、音速超えなど容易い。できればストライカーユニットで音速の世界に足を踏み入れたいが、技術的限界でそれは今のところは無理だ。美緒はちよつと寂しげにコスモタイガー？のコックピットの近未来的な計器を見つめていた……。

間章（ストライクウィッチーズ編）その1「ストライクウィッチーズ わたしに

というわけで坂本美緒少佐にゲスト出演してもらいました。

声が2期でかわったのは驚きです。その内「シャーロット・E・イエーガーIIN、コスモタイガー」を書いてみようかな……。

絶対喜びそう。

今回登場した艦隊は主に宇宙戦艦ヤマト2にて登場した、地球防衛軍空母と機動戦士ガンダムシリーズの艦船で構成されています。白色彗星帝国との戦いで波動エンジン搭載艦は大半が戦没しているのが貴重です

間章その2（ストライクウィッチーズ編）「荒鷲の残光」（前書き）

久しぶりの。更新。ストライクウィッチーズ編その二です。ウィッチ対未来兵器がメインテーマです。

気がついたらアクセス10000超え……嬉しい限りです。これからもうよろしくお願いいたします。

間章その2（ストライクウィッチーズ編）「荒鷲の残光」

—1940年代

第一航空艦隊は主に扶桑皇国に協力する形でストライクウィッチーズ達の戦いに介入することを決定。扶桑皇国の工廠に史実での大戦末期に活躍した「紫電改」を始めとする高性能機の図面と、その実機（タイムマシンで終戦時の各部隊からかつぱらった）サンプルを送った。

そしてそれを彼女達の力にする—ストライカーユニット化する計画も同時に開始された。

「赤城」艦内

扶桑皇国海軍少佐「坂本美緒」は未来空母に乗り込んでから日記をつける習慣を始めていた。与えられた部屋で寝泊まりしつつ、この艦隊をつぶさに観察していた。

X月Y日

私がこの未来空母に乗艦してから早くも一週間が過ぎた。当然だが、どれもこれも真新しく見える。今日は図書室に案内されて歴史書を読んでみたが……驚いたことに、向こうでは「リベリオン合衆国」は存在しないらしい。その代わりにアメリカという国がそれに当たる役割を担ったらしい。異なる歴史の流れを辿った世界というのを目の当たりにした気分は……正直言って言葉も無かった。

日記を書き終えた美緒は一言だけ言った。

「この艦隊には確かに扶桑……いや日本の艦船の名を継いでいるものが多数ある。「赤城」に「加賀」、「蒼龍」、「飛龍」だと？戦前に上層部が考えていたという「空母の集中運用」思想を具現化させ

たような感じだな」

彼女のいるこの世界では、第2次大戦が勃発しなかったために空母の編成もかなり異なっており、第一航空艦隊も設立されていない（そもそも第一航空艦隊は戦争準備の過程で小沢治三郎少将が提案したもので、大英帝国に当たる「ブリタニア連邦」と同盟関係にある扶桑皇国にはリベリオン合衆国と対立する可能性は無い。そのため戦争準備も行われてはいないので、構想だけに終わった）

本国ではこの艦隊から送られたレシプロ機を物にし、制式採用を目論んだとの情報が入ったが、それがモノになるのはどう早く見積もっても45年の夏以降と見積もられている。

ストライカーユニットの改良も早まったようで、今年中には完成したばかりの二二型のさらなる改良機「零式艦上戦闘脚五二型」の実用化に目処がたつようだ。正に第一航空艦隊様々である。その他の各国にも技術支援を行うとの意志を示している。連合軍の構成各国は思わぬ援軍に歓喜。ウィッチの派遣も検討されているとの事だ。

「少佐さん。時間だよ」

部屋に一人の少年が入ってきた。彼の名はジュドー・アーシタ。この艦隊に乗艦している少年パイロットで、未来世界ではトップエースの一人として名を馳せた人物らしい。

正規の軍人ではないが、その力は戦況をも左右したという、にわかには信じがたい逸話の持ち主だ。

「そうか。もうそんな時間か……。」

今日は艦載機の演習に混ざって参加することになっている。未来兵器がどれほどのものか楽しみだ。私にも意地はある。

美緒はジュドーに案内され、赤城の甲板にせり出すストライカーユ

ニットの格納設備（扶桑皇国の一等輸送艦から提供されたもの）に行き、ユニットを装着する。見た感じはレシプロ機の後部をそのまま人間の足につけた様なものか。

「そんじゃ俺も行くか」

ジュードもエレベーターから甲板に出されたGフォートレスに乗り込む。発艦順は美緒の後である。美緒がストライカーユニットで発艦していくのを見届けると、魔法的であり、レシプロ機にも通じる先程までとは違って変わって、現代的な発艦作業が行われる。

カタパルトに接続され、Gフォートレスの巨体の後部ロケットエンジンが唸りを上げる。

合図と共に爆撃機のような形状のGフォートレスが射出され、大空に飛び上がった。

次いで、コスモタイガー？が数機と今回のアグレッサー機の役目を負った「九九式宇宙艦上戦闘機 ブラックタイガー」が相次いで発進していった。

ブラックタイガーの制式塗装は黄色と黒を基調に、機種に顔を描くかつての「P-40戦闘機」などを彷彿とさせる勇ましい物。この機体はコスモタイガー？の配備が進むにつれて一線からは引退しつつあるが、使い勝手の良さからか一部はまだ配備されている。

この時代には有り得ない、ジェット機の発艦の光景だが、どこことなく安心させられる。

「いつの時代もこれだけは変わらんのだな……まあ当たり前か」

空母の発艦の風景に不思議な安心感が湧いたのか、美緒はクスッと笑い、高度4000mに上昇、僚機との合流に備えた。

美緒はこの空戦演習に当たって、第一航空艦隊より、それまで彼女が用いていた13?機銃に代わるものとして、九九式20?二号機銃四型（サンプル用に持ち込んだ紫電改や雷電に搭載されていたものを未来の最新技術でコピーし、大幅な軽量化をされたもの）の提供を受け、この演習で試用していた。13?機銃と形状は同じだが、威力は大幅に上がっていると言う。次世代（美緒から見れば）局地戦闘機の搭載機銃のコピー品というのはいささか変だが、これも過去している時代の違いか。

「さて……行くか。」

300年後の噴流推進機（ジェット機やロケット機）の速度性能や機動性は自分で操縦してみてもよく理解しているつもりだ。僚機はなんでも人型に変形できる「可変MS」という代物だ。変形や合体をこなせる機体を量産するといふのだから、科学の進歩といふのは恐ろしい。

轟音と共にアグレッサー役のブラックタイガーがその姿を見せる。

コスモタイガーに比べ

れば、旧態依然としたズングリムツクリなフォルムだが、鯨にも似た精悍さも感じる。

スピードはこの時代の敵味方の全てを超越しているし、通りすぎる時の衝撃波も凄まじい。

時速540キロ程度の零式では追従するのは困難だ。（ストライカーユニットは偶発的に超音速飛行も可能としたが、戦闘中に出せる速度では無い）。

模擬弾が装填された機銃を（帝国海軍は口径に関係なく機銃と呼称）を撃つが、軽くいなされる。やはり噴流推進機を敵に回すと恐ろしい。

ーそう。ジェット機が何故レシプロ機を駆逐したのか。かつてのナチス・ドイツが生み出したメッサーシュミットの中でも最後期の登場となったジェット機『シュワルベ』はその圧倒的速度で連合軍の爆撃機を撃墜し、レシプロ機の陳腐化が始まった事を世に知らしめ、さらに朝鮮戦争の際には共産国側がmig-15を繰り出し、その火力とスピードの前には大日本帝国を瓦解に追い込んだB-29さえ無力さを露呈、同機を一線から下げられる結果を生んだ。歴史上、この2つの事例がレシプロ機を空中戦から引退させた要因である。

次いで味方のコスモタイガーが姿を見せる。銀を基調としたカラーリングの機体と、扶桑皇国海軍が最近、制式塗装とした濃緑と同じ塗装の機体が見受けられる。

「お先に失礼〜！」

コスモタイガーはこれまた凄まじい速度で通りすぎていく音速を超えた戦いに、はたして自分がついていけるのか。不安をただ寄せながらも美緒は

最大戦速で空中戦に突入した。ウィッチ対未来技術の結晶たる、最新鋭兵器群。

軍杯はどちらに上がるのか。

―同時刻 欧州 ブリタニア連邦領空

レーダーに反応があり、緊急任務に上がったブリタニア連邦空軍の航空隊。今では統合戦闘団にネウロイとの戦いを任せきりにしている感の強い軍だが、防空任務は引き続き行っていた。

「隊長、のどこですねぇ」

「ああ。だが気は抜くな……!？」

轟音と共に編隊の内の一機が突然火に包まれ、落ちていく。

その時、編隊の誰もが己が目を見た。彼らの目の前に現れたのは漆黒の鷲、もしくは鷹か鯨のような姿を持つプロペラの無い戦闘機だった。その編隊は想像もつかない様な速さで襲いかかり、プロペラ機（おそらくホーカー ハリケーンか、スピットファイア）しか存在しないブリタニア機を圧倒した。

「隊長、相手が遅すぎて狙いが…」

「落ち着け。クレ―射撃の的と思えばいい」

その編隊はこの時代には存在しないはずのジェット機―それもただのジェット機では無い。2197年頃まで地球連邦の防空を担っていた九九式宇宙艦上戦闘機「ブラックタイガー」で構成されていた。その垂直尾翼には猛禽類に星をあしらったマークが描かれていた。

一かつて、そのマークを軍旗にしていた軍団がいた。その名も「テイターズ」。

地球至上主義者達の巢窟と揶揄された、未来世界で悪名高い軍隊。その生き残りが何故この世界に存在し、ブリタニア連邦軍をカモにしているのか。

「隊長。ロシア方面に侵攻したMS隊より入電。『我、敵基地を制圧セリ。これより『ハエ』と『ゴキブリ』どもの掃討に移るとのことです』」

「例の変な格好の歩兵達か。捕虜に出来るものは捕虜にしておけと言っつけ。偵察もこれまでか。各機、これ以上の戦闘は無用だ。離脱する」

彼等は隠語を用いていた。ハエ、とは航空型ストライカーユニットを身につけたウィッチ、ゴキブリ、は同じく陸戦用のストライカーユニットを纏うウィッチを示している。これは双方の戦闘力の違いから生じた。この時代の火器ではMSの多重空間装甲を正面から撃ち抜ける可能性は高射砲や艦艇の主砲レベルしか無い。そのため、各地でウィッチ達は絶望的な戦いを強いられ、やがて弾薬が尽きていき、壊滅していった。

一年戦争序盤の連邦軍はザク一機を落とすのに戦車一個中隊分の犠牲を強いられたと言うが、正にその再現であった。ある者はマラサイに踏み潰され、またあるものはビーム・サーベルの直撃を食らい、その熱量の前に何も残さずに蒸発していった。ただしこれは初戦のみで、さすがに彼等も一方的な虐殺は本意でなかったらしく、次第に閃光弾やトリモチランチャーでの捕虜の獲得へ切り替えていった。

そして、現地で防衛戦を戦った第505統合戦闘航空団は幾度かの空中戦における数名の戦死者と多数の捕虜を出した末にテイターズ残党軍に降伏。事実上の解隊に追い込まれたのであった……。

「ウラル方面戦線崩壊!!」

統合戦闘航空団の一つが謎の機械の巨人の前に為す術も無く蹴散らされ、事実上の壊滅に追い込まれたというニュースは各国の新聞の一面を飾った。たまたま戦闘区域に滞在していた記者が移したという写真には全長が20mはあろうかという鋼の巨人が銃火器を用いて写真には地域の防衛に当たっていた陸戦担当のウィッチを虐殺する瞬間の光景がまざまざと映し出されていた。

この日。この世界の人類の誰もが、ネウロイではない新たな脅威の出現を確認した。そしてこの事件は「ウラルの虐殺」として歴史に刻まれ、各国政府はその対応に迫られる事になった。

第一に義勇軍の援助を真っ先に受けた格好の扶桑皇国は建造中の大和型戦艦3番艦「信濃」（史実より航空戦力が充実しているために空母に改造する必要がなかった）、雲龍型正規空母を始めとする各艦に未来技術による「対ビームコーティング仕様装甲」に換装・装備（これは第一航空艦隊に随伴していた工作艦「朝日」の乗員が取り付けを担当）させ、同時に航空戦力の近代化を急いだ。

次いでその恩恵を受けたのはブリタニア連邦。上層部は建造が棚上げされていたライオン級戦艦の復活を宣言するなど息巻くが、現場は航空戦力の充実を懇願したとか。

第一航空艦隊の介入によって変化しつつある世界情勢。そしてティターンズ残党軍の存在。

ウィッチたちの運命や如何に……。

間章その2（ストライクウィッチーズ編）『荒鷲の残光』（後書き）

と、言うわけでウィッチ達の前途へ暗雲です。この時点では宮藤芳佳はまだ入隊してません。第3者のティターンズ残党の存在により、人類は史実より不利な状況に追い込まれてます（汗）。

シャーリーやルッキーニに他国のストライカーユニットを着用させようかな。

（時間軸の矛盾点があったので訂正しました）

間章その3（ストライクウィッチーズ編）「電光の名を持つ者」（前書き）

ストライクウィッチーズ編その3です。原作のIF展開あります。ストライカーユニットについていに模造設定をやってしまいました。紫電改があって何故雷電がないのだ!!

間章その3（ストライクウィッチーズ編） 「電光の名を持つ者」

―第505統合戦闘航空団が壊滅し、その結果、ウラル方面戦線が崩壊したという報は直ちに各国及び、その他の統合戦闘航空団にも伝えられた。

当然、各国では巨人に対抗できる火器の開発が急がれたが、対戦車ライフルやロケットランチャーの砲撃すらも効果が薄く、そして優に砲撃を回避可能な驚異な機動力を誇る敵にどう対抗すれば良いのか？各国の科学者は巨人を覆う金属（第502統合戦闘航空団が回収した破片を調べた結果、超軽量・高高度の金属であると判明）を貫徹できる術を模索し始めていたが、目撃証言のどれもが科学者を絶望させるのには十分だった。

「機関砲の弾が装甲で弾かれる！！」

「対戦車ライフルの弾道を見切られて避けられたんだけど」

「ランチャーを至近距離で撃っても装甲を凹ますだけじゃん！！」
など、ウィッチの敢行可能な銃火器が通用しないという報告が次々に入ってきたからだ。

そしてその脅威は欧州方面にも及んだ。ネウロイの侵攻こそ鈍ったものの、空戦型の巨大兵器（円盤から人型に変形するものなどが確認された）の爆撃に対応した第501統合航空戦闘団も敗退し、一部の隊員が撃墜されたという。そしてその混乱を扶桑付近で停泊していた第一航空艦隊もキャッチしていた。

―赤城 アイランド内部 作戦司令部

「艦長、これを」

「これは……バカな、アッシマー、だと！？」

参謀から手渡された一枚の写真にシナプスは我が目を疑った。調査に赴いた偵察機が撮影したその写真には、この世界には存在しない

はず、の可変モビルスーツ「アッシマー」が写っていたからだ。これでは第2次大戦中の軍隊ではどうにもできない。ビーム兵器標準装備、重装甲と高機動をあわせ持つ可変MSが何故存在しているのか。

「機体に驚と星をあしらったマークが確認されました。おそらくはティターンズの生き残りかと思われます」

連邦正規軍が開発したMSであるアッシマーはその優秀性から一分の機体がティターンズに流れたのは記録に残っている。しかし何ゆえこの世界に……。

「ティターンズ残党か。何故奴らがこの世界にいるのだ……？ 確認されたのはこれだけかね？」

「いえ。他に「ギャプラン」や「マラサイ」などが確認されています。それも複数です」

「かなりの規模だな……グリプスの時の記録には残っていないのか？」

「グリプスの時のティターンズの記録は殆どが破棄されていましたから。上の政治的判断のせいで行方不明として処理された部隊もかなりの数に上ったと聞いていますが、これはその内の一つでしょう」

「この機体を確認されたのは何処だね」

「欧州方面です。おそらく欧州方面軍の内のどこかが太隊／師団規模で転移してきたものと推測されています」

「まずいな。この世界はネウロイに対応するだけでも精一杯なのに、奴らが軍事行動に出ている事でさらなる混乱を招くぞ。偵察機は今どこに？」

「現在中国付近を飛行中。あと1時間ほどで帰還します。」

「分かった。偵察機からは他に何か報告は？」

「ウィッチを一人保護したとの報告があります。気絶していたのを救助したとの事ですが、幸い軽傷のようです」

「それは良かった。医務室に受け入れ準備をさせてくれ。それと緊

急会議を開くように各艦の艦長に通達を。今後の対策を協議する必要がある」

「了解」

参謀は通信を用いてシナプスの命令を各艦に通達する。

—中国付近の上空 「RVF—171EX ナイトメアプラス」

コックピット

「お、気がついたか」

「!?!?!? わ、わわっ!どこだここ!?!?」

パイロットはキャビンの後部に寝かせたウィッチが目を覚めたのに気づき、声をかけた。

大腿部から足にかけてレシプロ機の後部を着けた様なユニットを付け、ウサギの耳を持つこのウィッチの名は「シャーロット・E・イーガー」。階級は大尉で、元はリベリオン合衆国陸軍航空隊所属のウィッチである。現在は第501統合戦闘航空団に所属し、美緒の部下となっている。容貌はもちろん美人である。彼女は同僚のフランチェスカ・ルッキニーとともに偵察に出ていたのだが、任務の途上で謎の、円盤、（アッシマーのMA形態）と交戦し、奮戦空しく、撃墜された。（正確にはビーム・ライフルの高出力ビームを防ぐのに魔力を消費し、気絶。そのまま落下していった。）幸い、落下した場所に木があり、それが衝撃の緩衝剤替わりとなったおかげで、軽傷で済んだ。

「ええと……。取り敢えず大丈夫みたいだな。見りゃ分かると思うが……。ここは飛行機の中だ」

「飛行機い!?!?」

シャーリーは言われるままに周りを見回す。どのレシプロ機とも違う、未来的な雰囲気漂っているのが分かった。計器や操縦桿などの形態も先進各国の機体と比べても洗練されているのが見える。先程からキーンと聞こえてくるこの音はなんだろうか。

「ああ。この音か？ ジェットエンジンの音だよ」

「ジェットエンジン？ なんだそれ」

ここで年代ゆえの知識の差異が出た。この頃、ジェットエンジンはレシプロエンジンに代わる次世代発動機として研究が進められていたもの、実用段階には至っておらず、ブリタニア連邦や帝政カールスラントで実験機が飛行試験を行っている段階に過ぎないので、一士官に過ぎないシャーリーが知るわけではない。一方、未来人にとってはジェット機など普遍化したものの一つに過ぎない。パイロットは一応ジェットエンジンの説明をするついでに、自分は連合軍の援軍に加わった義勇軍（……と第一航空艦隊のことは扶桑皇国などの各国に伝わっている）の将校だと告げ、この機は扶桑付近にいる母艦に帰還する途中であると告げた。

シャーリーは何故自分がこの飛行機に乘せられたのか？ 訳も分からぬまま、そのまま赤城へ連れていかれた（安心したのか、また眠ってしまった）

さらに医務室のベットに運ばれた。（ストライカーユニットは脱いでいる）

それからしばらく経っただろうか。眠ってしまったようで、いつの間にか毛布がかけられている。

「う、ううん……」

「気がついたかシャーリー」

「さ、坂本少佐！？ どうしてここに！？」

ベットの横に美緒が立っていた。彼女は模擬戦が一端休憩に入り、艦に戻った所でウィッチを保護したという報を当直勤務の下士官から聞かされ、確認のために医務室を訪れたのだが、そのウィッチが同じ部隊の、それも部下の一人だった事にさらに驚かせられた。

「話せば長くなるが……、新型の受け取りに戻ったついでに扶桑の上層部からこの艦に乗れと言われてな。義勇軍が現れたという情報は知っているか？」

「乗せられた飛行機の搭乗員から少しは。それじゃここは……？」

「ああ、その義勇軍の空母の中だ。普通の空母とちよつと違うから、その窓から外を見てみる」

シャーリーは美緒に言われるままにベットから降りて部屋の窓を見つめる。すると……。

「へ……？」

空を飛んでいるのだ。しかも航空機で無く、航空母艦が、である。

「く、くく……空母が空飛んでるう！？ 夢だ……そう。これは夢だ。

アハハ」

あまりのびっくりな光景に思わず己が目と正気を疑った。「空母が空をとぶ」なんて3流小説でも見かけないような話が目の前にあるのだ。空母を浮かべられるだけの揚力を発生させられるエンジンなんぞこの世に存在する訳が無い。頭がパニックを起こしそうになる。「信じたくない気持ちはわかるが……これは現実だぞシャーリー」

「で、で、でも少佐！！そ、空飛んでるですよ空！！」

シャーリーは美緒からこの空母―第一航空艦隊の事を教えられた。

この空母は超未来の

とんでも無い技術で造られた「宇宙空母」である事、さらにこの空母の乗員たちは皆、

異なる歴史の流れを辿った平行世界の住民である事を伝えた。証拠として、艦内の図書室から世界地図を持ってきてそれをシャーリーに見せた。

その世界地図は市販されている極当たり前な世界地図だが、シャーリーはすぐに差異に気づいた。何せ彼女の母国「リベリオン合衆国」

および北リベリオン大陸が、無い、のだ。

代わりに「アメリカ大陸」とアメリカ合衆国なる国がその位置に収まっているのだ。

（リベリオンは星のような形をしているのだが、この大陸は全く普通の形なのですぐに分かった）

空飛ぶ空母やさらにこの世界地図を見せられ、さらに美緒が嘘をつくとも思えない。

シャーリーはひとまず美緒の言葉を信じることにした。

「わかりました。少佐を信じます」

「ありがとうございます。……そうだ。お前のPー51なんだが、発動機が損傷しているらしい。扶桑で修理しようにも殆どレストアしないと無理だそうだ」

「ええっ!？」

「何か心当たりはあるか？」

「そう言えばあの時……敵のビームを防いだときに余波で装甲の表面が一部溶けたけど……もしかしてそれで？」

「何、余波だけでストライカーユニットの装甲の表面を溶かすだど？その敵はどんな姿をしていた？」

「円盤みたいな形で……でも物凄く速い奴でした。追うだけで精一杯で……ルッキーニの狙撃を軽く避けたり、機関砲の直撃を弾いて……歯が立たなかった……ッ！」

悔しそうな表情で拳を握り締めるシャーリー。自分達の攻撃がまるで通じないという絶望感、Pー51の快速を以てしても、振り切れないという事実。そしてビームの圧倒的火力。それらを勘案すると……。

「少佐、ちょっといいか？」

医務室に一人の将校が入ってきた。赤城の航空隊の隊長（階級は中佐）だ。

美緒が敬礼を返したのでシャーリーも将校に対して反射的に陸軍式敬礼をした。

「なんででしょうか？」

「扶桑から電話がかかっている。何でも新型の試作機が2機ロールアウトしたとかで……」

「本当ですか！」

「ああ。早く行ったほうがいい。先方は待ちかねてるらしく、催促してる」

「わかりました！」

美緒は駆け足で通信室へ走っていった。中佐には心なしか、その後ろ姿がはしゃいでいるように見えた。

一扶桑皇国 某重工業 航空事業部

「ついに完成したのか。一四試局地戦闘機……」

工場の一角に置かれている真新しいストライカーユニット。その名は「一四試局地戦闘機」

零式艦上戦闘機の後継を欲する扶桑皇国海軍がこの重工業社に資金援助して生み出した

最新鋭ストライカーユニットで、上昇力・速度共に零式を凌駕する。モックアップの完成にこぎつけたのを義勇軍（第一航空艦隊の技術援助）によって早期開発に成功。試作機がロールアウトしたのである。

「はい。試製烈風の開発の遅れを憂慮していた軍が待ち焦がれた新機です。我々は雷電と呼んでいます」

雷電。それは史実でも日本海軍が生み出した名機の一つで、迎撃戦で戦果を上げたことで有名である。彼等は第一航空艦隊が援助の一環として提供した、日本海軍の局地戦闘機「雷電二一型」からそのまま名を頂き、その戦歴に肖ったのだ。機体そのものも雷電二一型をそのままストライカーユニットにした設計だ。

「軍は烈風の開発を諦めたのか？」

「いえ発動機の設計にミスが見つかって、換装を余儀なくされているのです。軍はあれを本命視していたですので、顔面蒼白ですよ」烈風とは、零式艦上戦闘機の正当な後継機として期待された試作戦闘機。史実では発動機選定のミスや遅すぎた完成、完全に逸した登場時期などから「悲運の戦闘機」、「軍の政策の犠牲者となった幻の次期主力戦闘機」ともされる。運に見放されたこの戦闘機はたとえば、大日本帝国より段違いな国力と工業力を誇る扶桑皇国においてストライカーユニット化されても史実同様の運命を辿っていた。そのこともあって「雷電」は烈風の開発の遅れによる零式艦上戦闘機の旧式・陳腐化を救う救世主と目されているのである。試作機は義勇軍に合流した第501統合戦闘航空団の「坂本美緒」少佐用とその予備機として3機が配備される。

「くっくく。見ていろ川崎航空機！！海軍の次期主力戦闘機の座は我社が頂く！！」

彼の意気込みを示すように、海軍の新制式塗装がなされた「雷電」は主を待つかのように、静かに鎮座していた……。

間章その3（ストライクウィッチーズ編）「電光の名を持つ者」（後書き）

雷電をストライカーユニット化してみました。紫電改があるんなら雷電もあったっていいだろう（笑）。

実際に雷電には1943年の段階では次期主力戦闘機としての座が約束されており、実現はしなかったものの、大量生産計画が実在しました。それを踏まえて書きました。

実際に、末期に零戦の後継となった紫電系統のシリーズはそもそも烈風の度重なる開発の遅れや、生産が進まない雷電のさらなる保険的な位置づけで開発されたという逸話もあります。

当時の日本海軍が如何に雷電に期待していたのが分かります。

「雷電の量産の暁には……」といったところでしょいか。

間章その4（ストライクウィッチーズ編）「私の彼女はウィッチ〜菅野デストロ

ストライクウィッチーズ編その四。タイトルの通り菅野直枝、デストロイヤー、大尉の登場です。出典は島田フミカネ先生のホームページに掲載されている「世界の航空歩兵シリーズ」からです。（ただしホームページでは少尉とされていましたが、ここでは菅野直大尉の史実での昇進速度を踏まえて大尉としました）タイトルの元ネタは平野耕太先生の「ドリフターズ」です。

ー地球連邦軍は空母機動部隊で平行世界の地球に介入したが、テイターンズ残党軍が現地にて軍事行動を取っていると報告を受けた連邦軍上層部は万が一に備え、さらなる増援を送ることを決定。

その白羽の矢が経ったのが改アンドロメダ級戦艦一番艦「春蘭」しゅんらんを旗艦とし、新造空母「雲龍」「天城」「葛城」を擁する第2機動艦隊（これは7月末に連邦軍の艦隊命名基準が変わったためである。元は第三艦隊といった。）が新たに送り込まれる手はずとなった。

艦隊の陣容は新鋭艦が揃えられ、アンドロメダ級宇宙戦艦一、ラー・カイラム級機動戦艦二、クラップ級巡洋艦一六、戦闘空母三、駆逐艦三十隻あまりである。

（一航艦も含めて、これだけの艦船を送り込めるようになったのは兵团との戦線が優位になりつつある事によって軍に余裕が生まれた事による）

この事はすぐに一航艦のシナプスにも伝えられ、扶桑皇国の海域にて合流することとなった。

一扶桑皇国 横須賀

「未来の艦隊かあ……」

未来空母「赤城」の飛行甲板でシャーロット・E・イエーガーは複雑そうに空を見つめていた。未来の科学で固められた艦隊の介入によって戦いが楽になればいいが、その技術を不正に入手して悪用し

ようとする輩だって必ず出てくるだろう。どうなることやら……。
(特にブリタリア空軍のマロニー大將は真っ先にそれを実行しそうで、必ず自分達を排除しようとするだろう)

普段明るい性格である彼女も、人類が超科学を悪用しようとする心の闇の闇を危惧していた。その辺は将校としての素質を備えていると言える。そんな彼女は、美緒に案内されて赤城の艦内を見て回ったが、見慣れない飲み物だらけな自動販売機やTVゲーム(この時代にはコンピュータはまだ発明されていないので、シャーリーには何が何だか分からなかったが)ビリヤードにマージャン、卓球などの無駄に遊戯関連が充実した設備の休憩室。さらに温泉完備……軍艦かしらぬ居住性の良さに驚かれた。

「なんでこんなに居住性いいんですかあ! 羨しいいゝ!!」

—そう。この時代の軍艦は武装を強化する代わりに居住性はあまり良くない。(イギリスや米国艦は比較的良い方だが、それでも客船には一歩及ばない。居住性が最悪なのは、特に日本海軍に見られた傾向)

「何でも宇宙を長期に渡って航海するからその関係らしい。それは私も驚いたよ」

そして今日は新たに援軍として「未来」から派遣された艦隊が合流した。戦艦3隻、正規空母3隻を基幹とする有力な編成。巨人の掃討を担当するとのことだ。2つの艦隊の統合運用を円滑に行うための事務作業と業務に時間がかかるため、当分は横須賀に停泊する。

シナプスにとって朗報だったのは、援軍の第2機動部隊には新型の可変戦闘機「VF-25 メサイア」が一個中隊分(9機ほど)搭

載されていた事だった。この機体はマクロス・フロンティア船団（第25次新マクロス級超長距離移民船団）が次世代機として採用した、最新鋭機。

かのVF-19「エクスカリバー」をも凌ぐハイエンド機としての性能を備えていたために、他の試作機を差し置いて、マクロス・フロンティア以外の連邦軍としては初のライセンス獲得による先行量産が行われたのである。シナプスにはこの新型機を含めた航空戦力の弾力的運用が求められていた。彼は上層部からの無茶な指令にため息をつきながら航海日誌に愚痴を書き込んだとか。ちなみにシャリーと美緒の扱いは客員士官とされ、第501統合航空戦闘団での待遇をそのまま当てはめて扱われる。（2人は早くも生活に慣れたらしく、連夜、温泉卓球でしのぎを削っていた。それを教えたのはシナプスら艦の首脳陣）。ブリタリアにいる501統合航空戦闘団には美緒が無電でシャリーの無事を知らせた。司令官のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケは美緒の無電での知らせに安堵し、その他の隊員も仲間の無事に歓喜した。美緒は義勇軍が援軍に加わるが、自分はそれに同行することになってしまったので、それまで待っていてくれと告げた。

軍艦生活が始まって6日ほどが立っていた。この日、美緒は扶桑本土に戻っていた。目的は第一に試作型ストライカーユニットの受け取りで、試製雷電を4機（予定では3機だったが、先行量産型が一機ロールアウトした）ほど。そのうちの一機はP-51を失った

シャーリーに与えるが……。

今日は親友の竹井醇子（リバウの貴婦人の異名を持つエース。史実で言うところの「ラバウルの貴公子」の異名を持った大日本帝国海軍のエースパイロット「笹井醇一」海軍中尉に相当する存在）大尉と会う予定である。なんでも彼女が推薦するウィッチ候補生がいるとの事だが……。はたしてどんな人物なのか？

一 横須賀鎮守府

「久しぶりだな。醇子」

「ええ。義勇軍の調査に行った……というのは本当なのね？」

「上の指示でそうなったんだが、今のところ我々に敵対する意志はなさそうだ。あの艦隊の技術はこの星の全てを遙かに上回っている。敵に回ったらその上無く恐ろしい」

「ええ。だからこそ彼等は味方であって欲しい」

「そうあってもらいたい……。ところであなた知ってる？ 第34 3 航空隊の事」

「ん？ ああ、あの源田の奴が各地からエースを引きぬいて作った防空航空隊だろ？ 何でまた」

一第343海軍航空隊。それは史実では大戦末期に開戦時からの技量劣化が顕著に現れていた大日本帝国海軍航空隊にあって、激戦を生き残ったベテランが比較的多く、防空で勇戦奮闘した部隊。もし笹井醇一などが生きていたら配属されていただろう。

ちなみに美緒が言った「源田」とは第343海軍航空隊を創設した人物で、史実では戦後に航空自衛隊の空将に上り詰めた。しかしながらその手腕には疑問符が付く。そして日本が後世に負の影響を与えた元凶「神風特別攻撃隊」を考案し、悪名高い人間爆弾「桜花」の実用化に関わった。（史実でも坂井三郎は戦後、罵倒や批判をしたが、それ同様に彼のパレールワールドでの存在である美緒も源田の強引さ、見識の狭さを知っていたので、彼を批判している）。

「実はね。直枝があなた達の応援に行くって言ってきたの」

「なっなっ……何い！！؟؟あのデストロイヤー野郎が!？」

直枝とは「菅野直枝」海軍大尉（それまでは中尉だったのだが、第343航空隊配属の際に昇進した）の事。ストライカーユニットを幾度となくぶち壊し、上官にも臆さないで逆に食って掛かる程の豪胆さを持つ事から次第に「菅野デストロイヤー」としてその名が知れ渡っていた。現在は第502統合戦闘航空団に所属しているはずで、美緒もその勇名は耳にしていた。

それに美緒は彼女の元教官で、直枝は教え子の一人である。

—まさか……？

「んで、誰がデストロイヤーだって？」

「おわあっ!？な、直枝!？お前、何でここに!？」

「あんたと同じ理由で急に前線から本国に呼び戻されたんだよ。こ

の俺がだぞ!?!上の指示だからしゃーねーけどさ……」

その当人が姿を見せた。黒髪・ショートカットの美女で、特徴としては後の世で言うところの「ボク少女」に相当する口調で、とんでもなく荒い言葉づかいをする所。使い魔は史実の菅野大尉の異名の一つ「ブルドッグ」。年齢は15歳。階級は史実のこの時点ではまだ少尉だが、この世界では既に大尉へ昇進済みだ。同じ軍に属する関係で、美緒とも面識あり。直枝は美緒の元上官（直枝と同部隊に居た時点での美緒の原隊での実階級は中尉）にあたる。ただ5歳年上である美緒と主にタメ口を聞いてはいるが、軍人なので、タメ口は基本的にプライベートの時や慌てた時に限る。ただしいつの間には年々クセになっていたので、中々徹底出来ていない。それに美緒とは年の差を超えた、友、なせいもあって、ついついタメ口を聞くのだ。美緒の出向先での元上官というせいもあるが。（ちなみに菅野の343航空隊での相棒は後に508統合戦闘航空団へ派遣される松田昌子少尉。彼女とは長い付き合いで、502へ代理にいかせたのも菅野の命によるものだ）

「醇子から話は聞いたろう? テメーを手伝ってやんよ!」

「それは嬉しいが……お前の502統合戦闘航空団は激戦地の部隊のはずだろ? 独自行動をとって良いのか?」

「アレクサンドラさんには許可はもらってある。それに俺の代理に松田の奴を行かせた。奴なら十分にやってくれるさ。……ところで醇子。テメーが言ってた候補生って……」

「この子よ」

醇子一枚の写真を二人に見せた。一人の女学生がそこには写って

いた。彼女の名は「宮藤芳佳」。類稀な魔力を持っていたことを潤子が見抜き、ウィッチ候補生としてスカウトした。現在は教育が無事終わり、部隊への配属を待っている状態。醇子は芳佳を第501統合戦闘航空団に配属させる腹積もりでいるらしい。

「ふうん。コイツが……。醇子が見どころあるって言うんだから相当だろう。まっ、今は候補生に毛が生えたようなもんだろうがな」

直枝は予言とも取れる一言を言った。彼女は醇子の人を見る眼が確かであるのを知っていたからであるが、半ば後の芳佳の奮闘を予見していたかも知れない。本来の流れでは、芳佳と直枝は別々の部隊にいた関係で、相まみえる事は無かった両者だが、歴史が変わった、この世界では出会う事になった。

「ところで美緒、アンタが受け取ったストライカーユニットってどんなんだ？」

「私は局地戦闘脚を4機も受け取ったよ。名前は雷電とか言ったな」「俺は紫電。なんか性能を力説されちゃったよ。まっ、俺にはどうでもいいけどな」

この頃、扶桑皇国では零式戦闘脚を代価する新型ストライカーユニットの開発に血眼となって取り組んでいた。各社はこぞって独自のストライカーユニットを試作しては海軍航空本部の試験に提出。制式採用通知を待つという状況であった。

その中でいち早く採用されたのが宮菱（史実で言うところの三菱重工）の雷電と山西（こちらは川西飛行機に当たる）航空機の紫電。史実でも最重要機種として名が上がった（雷電は零戦の代換機種を本命視され、紫電及び紫電改は事実上の後継）機体だが、ここでも真っ先に量産されるだろう。試作機をエースに重点的に贈るという

のはほぼ制式採用が決定したようなものだからだ。

「んで、そういう事で501に出向する事になったからよろしく頼むぜ、美緒……いや坂本さん」

「ああ。お前の敢闘精神、アテにさせてもらうぞ。」

—2人は固く握手を交わした。直枝が501に出向する事になったのは各国が第505統合戦闘航空団「MIRAGE WITCHES」を殲滅させた、機械の巨人、を恐れているためであり、次に狙われるのが第501統合戦闘航空団「STRIKE WITCHES」（ストライクウィッチーズ）の担当する、ブリタニア方面であるのが分かっていた。

苦肉の策で、各統合戦闘航空団の中から比較的巨人に対して奮闘した人員を選抜し、第501統合戦闘航空団に助っ人として贈る事が決定された。最初に、

謎の円盤を数機落とした実績のある、第502統合戦闘航空団「BRAVE WITCHES」（ブレイブ・ウィッチーズ）に真っ先に白羽の矢が建てられた。そこからさらに選抜された結果、一番敢闘精神があり、「菅野デストロイヤー」の異名を持つエースの直枝が選ばれたわけである。

これも奇妙な運命の巡り合わせというもので、史実でも坂井三郎と菅野直は第343海軍航空隊にて同僚（階級は菅野の方が上）となった。これは世界が違い、さらに性別が変わっても変わらなかった運命であるのだろう。ちなみにこの中の3人の中のパレルワールドの姿—史実での撃墜王達—の中で天寿を全う出来たのは、坂井三郎のみである。笹井醇一はガダルカナル島の戦いにて、米軍海兵隊のエースパイロット「マリオン・カール」大尉との空戦に敗北、戦死。菅野直も終戦間際の8月1日の空戦でMIA（戦闘中行方不

明)となっていた。(その正確な行方は21世紀になっても不明なまま。通説は空戦にて機銃が暴発した影響で墜落、あるいは撃墜。)唯一、坂井三郎のみが平成12年(2000年)まで天寿を全うしている。それを踏まえてみると中々感慨深いものがある。

3人は時間も忘れて談笑した。これから始まる戦いの前に母国との別れを惜しむかのように……。3人の撃墜王達はそれぞれの戦いに身を投じていく。2人はブリタリア連邦を防衛するために、そしてロマーニャをネウロイから守るために。

余談

「少佐はどこで何してんだあゝ!!もう半日経ってるぞ」

「まあまあ、落ち着いてシャーリーさん。コーラでも飲む?」

「ジュードー、お前は気楽でいいよな……。おまけにあんなカッコいいのに乗ってるんだから」

「そりゃ俺、ガンダムのパイロットだし。カッコいいのは当たり前」
「今度アレに乗せろゝ!!どれくらい速いか知りたいんだよおおおゝ!!」

「でも俺のダブルゼータの変形形態は爆撃機だよ?俺としては勧めないよ。ゼータやプラスにしたら?」

「合体変形は漢のロマンなんだよ!!」

「早くも染まってるねえ……」

何時までも美緒が帰ってこないで、シャーリーがジュードーを捕ま

えて暇を潰していた。果たして、スピードを追い求める彼女の夢は叶うのか！？未来世界の超音速機に出会った時、シャーリーの挑戦が始まる……。

間章その4（ストライクウィッチーズ編）「私の彼女はウィッチ」菅野デストロ

宮藤芳佳のウィッチになる経緯は漫画版「天空の乙女」に準じました。菅野直枝の階級は変えてあります。

それと竹井さんの名前が間違っていたので訂正しました。

追記 ストライクウィッチーズ第二期DVDブックリストにて、ストライクウィッチーズ世界の軍需産業の名称が一部判明しましたのでそれに準じて改稿しました。（杉田庄一少尉に当たるウィッチが設定されたのでそれに合わせました）

第9話「邂逅」

ブライトは語り始めた。人類史上最も凄惨かつ生死を問わないで地球の存亡のために全人類が一つになって戦った一つの戦争を。そして地球のために一人の女性が命を投げ出して地球を救った事を……

「アレは今から2年前のことだ……」

彼は当時のことをなのは達に語った。2年前の時点では「ロンド・ベル」は軍閥同士の内乱に打ち勝った派閥「エウーゴ」の面影がまだ色濃い、結成されたばかりの新参部隊だったが、既に悪の軍団をいくつか打ち破って来た事で人類の、切り札、と目されていた。

「ある時、上層部から命令が下った。それは「宇宙戦艦ヤマトと共に白色彗星帝国に最後の戦いを挑め。玉砕も覚悟されたし」という指令だった」

「それって、特攻、じゃないですか!」

なのははすぐさまその指令の内容が特攻であることを見ぬいた。ロンド・ベルの僚艦として名前が上がった「大和」と言う名がその後の内容を暗に示していたからだ。戦艦大和と言う単語は彼女の母国「日本」では特別な意味を持っていた。

—かの有名な、戦艦大和、は米軍の占領した沖縄に向かって、生還の望みなど無い出撃に赴き、その途上で航空攻撃の前に屈した……最強でありながら新時代の兵器たる航空機に葬り去られた悲劇の軍艦。その最期は余りにも有名で、何度も映画で描かれている栄華を誇った大日本帝国海軍のその終焉的一幕。

「なのは、特攻、って？」

フェイトは特攻という聞き慣れない言葉に首をかしげながらなのは尋ねた。

21世紀ごろまでの小学校の歴史の授業は太平洋戦争などに到達できないで終わるか、サラッと流してしまっていたのが常識だった。なのはは以前、家の近所に住んでいた老人達から話を聞いていたので、ピンと来たのだろう。その老人達は皆、太平洋戦争（彼等は大東亜戦争と呼んでいたが）の従軍経験者で、中には戦艦武蔵の乗員の生き残りだとかが含まれていた。その中でも長老は支那事変以来の航空戦を戦った元搭乗員であったとか。彼等は日本軍の快進撃とその悲惨な敗退の様子を目にしていた。そしてそのうちの一人が語った「神風特別攻撃隊」の事を思い出したのだ……。

「特攻っていうのは……飛行機や船で相手に体当たりする事だよ。

乗った人たちは決して生きて帰れない。命と引換えに敵を倒すのが目的の……戦法だよ」

「そ、そんな……!!」

なのはの声のトーンが暗くなった。自身の死をも厭わない戦いなど、戦後民主主義のもとで育ったなのは達の価値観からは特攻は到底受け入れることは出来ないからだ。

彼女はゆっくりと老人たちとの会話を思いだしていった。

『俺達は若い頃、帝国陸海軍の敗退の様子を見てきた。そりゃ悲

惨だったさ……ガ島の転進、マリアナ、レイテの大敗北……。』

『確かに日本軍の負け方は悲惨だったけど……悪いことをしたせいだよ？』

『学校で教えている事は、勝者、の価値観が造り上げた一方的な見方さ。敗者一帝国陸軍のした事は確かに悪いかも知れない。俺達に言わせれば、彼等だって似たような事をしているさ。ドレステン大空襲や名古屋大空襲じゃ国宝級の文化財を躊躇なく破壊してる』

連合国側の戦略爆撃は文化財さえ躊躇なく廃墟とした。その点は断罪されてしかるべきだと、吐き捨てるように言った。

『当事者さえ今の価値観でモノを言うようになってしまった時代だからな……日本が侵略者として弾劾されるのはしょうがない。しかし嬢ちゃん達には覚えておいてもらいたい。

日本ばかりが一方的に悪いと言われるが、彼等だって相応の報復はしてる。当時前線で戦った俺達も44年あたりにはもう気づいていたのさ。戦争に負けることを』

『だったら何で……？』

『陸軍のお偉いさん方は精神論だけで勝てると思ってたし、反対の世論は憲兵や特高警察が封じ込めてしまっていた。何よりも開戦の時には無敵だった帝国海軍航空隊がどうしてマリアナ沖で負けたのか？レイテで不沈戦艦と言われた武蔵が沈んだのか？例を上げるとキリが無い』

当事者、それも当時軍人として戦線に身を投じた者達にしか分からない事。21世紀が始まって10年以上の歳月が経過した時代での貴重な元日本軍人の生き残り達の証言は、当時既に管理局武装隊航空部隊の士官となっていたなのは考え方に影響を与えた。

『戦いで重要なのは勝つことじゃない。とにかく生き残れ』。

なのはにそう教えを伝えた彼等をして、忌み嫌っていたと言う「神風特別攻撃隊」。開戦時からの生き残り兵士も特攻を拒んだという逸話も残っているほど。

『末期になると飛行機の性能も搭乗員の腕の差もどんどん開いていくばかりだった。そこで考え出されたのがアレ……特攻だ。回天、桜花……震洋……そして伏龍……』

彼等から聞かされた特攻の話は思わず、眼を覆いたくなる様な悲壮な物だった。

多くの若者達は家族の未来を守るために、愛する者のために、後世の人間たちに後を託すように作戦に身を遠じ、その若い命を散らしていった。そしてその極めつけが戦艦大和の最期であったという。最後に彼等は『アレは最大にして最悪の愚策だ。だが、そうでもしなければ米軍に一矢報いる事が出来なくなった事が情けない……』と言っていた。

一般に特攻隊第一陣として知られる関行男大尉も「僕には体当たりしなくても敵空母に50番を命中させる自信がある。日本もおしまいだよ、僕のような優秀なパイロットを殺すなんてね。僕は天皇陛下のためとか日本帝国のためとかで行くんじゃないよ。KA（当時の帝国海軍内の隠語。意味は妻）を護るために行くんだ。最愛の者のために死ぬ。どうだ、すばらしいだろう！」と言葉を残している。なのはもフェイトも彼の事を管理局勤めをしている内に知った。――自分は大切なモノの為に死ぬるのか？なのはとフェイトはその事が頭から離れなかった。

そう。国力に絶対的差がある国の軍隊の宿命なのか、1944年～1945年までの日本と同じような経緯でジオン公国も地球連邦政

府に敗北を喫した。

なのははその事や一年戦争の記録映像を思い出し、それと同じ運命を今度は地球連邦が辿ったというのか、と拳を握りしめて感情を露にする。憤激するなのはを落ち着かせるように、ブライトはこうも付け加えた。

「地球には最後にして、最大戦力が残っていた」と。

それは日本が建造していた、錚々たるスーパーロボット達。マジンガーZ、ゲッターロボなど、その他はコン・バトラVやボルテスV、軍が唯一持ったスーパーロボットであったダンクーガ、はるばると宇宙からはせ参じたダンガイオーなど。しかしその最後の切り札たる、スーパーロボット達も敵との戦いで多くが稼働不能に追い込まれたという。それを示すように、映像が映し出される。

「これは終戦直後の映像だ。その時の様子がこれなんだが……心してみてくれ」

映像にはボロボロになった戦艦―ロンド・ベルの当時の旗艦だった「ネエルアーガマ」に搭載機達が帰還してくる様子が映るのだが、無傷で帰ってきたのは「ZZガンダム」や「Zガンダム」、「ゴッドガンダム」など、機動性に優れるとされる機体くらいであった。大火力と重装甲なため、最も過酷な最前線に投入されたスーパーロボットで、ほぼ無傷で帰還できたのはごく少数に過ぎず、軍団の大半が体のどこかしらが破壊されている。最初にカメラに映った機体―コン・バトラVはゲッターロボGに肩を借りて、ようやつと飛行している。悲惨なことに片腕がもげた無残な姿を晒している。よほど十字砲火の激しい前線で戦ったらしく、装甲もボロボロだ。どうにか自力で帰還に成功したのはダンクーガやボルテスV、グレートマジンガーの3体のみ。他には、悲惨なことに、コックピット

ブロックだけが回収された機体もあった。なのはやフェイトさえも一目で見ただけで強そうと思える、超兵器の塊とも言える、スーパーロボット軍団をここまでボロボロに追い込んだ敵とはいったい何者であろうか？

「彼等をここまで追い込んだのは、白色彗星帝国、。恐ろしい奴らだった……」

この時、既に多くの人類同士の戦争を経験済みであったブライトをして、『恐ろしい』と言わしめた白色彗星帝国とは……？

そしてロンド・ベルとともに戦った戦艦、ヤマト、。その姿が映る。それは古典的SFアニメ「宇宙戦艦ヤマト」の主役艦とほぼ同一のものであったのにさらに驚かせられた。

ただしアニメと違う点が多々あった。380mの大きさを持つネェル・アーガマの数倍はあり、下部にも主砲などの武装が備えられているのが最大の違いであった。この宇宙戦艦とロンド・ベルが白色彗星帝国に最後まで抗った連邦軍の部隊の一つであったと聞かされると、妙に納得させられる。

「たしかにヤマトって敢闘精神ありそうだなあ……名前から言っ

て、フェイトがそう言う、なのはもブライトもうなづいた、ヤマトの名を持つ宇宙戦艦はここでも変な威力を発揮していた。」

ドラえもん達はウェーキ島の連邦軍基地にて事情聴取を受けていた。

のび太達や美琴の身元の確認および、ドラえもんの解析作業は3日間かけて行われたが、その過程でドラえもんの持つひみつ道具の内、環境適応用の道具（食用宇宙服や深海用の道具など）のいくつかは地球連邦政府の科学技術庁に送られ、再開発用のサンプルとされた（この時代は技術体系が2125年時点とは抜本的に異なっていたため、再開発の必要が生じていた）。

その中でドラえもんやのび太と連邦軍側の兵士のやり取りは以下の通りである。

「人を余り見ないのは宇宙への移民が相当に進んでいて、地球に住んでいる人間の比率が君たちの時代よりうんと低いせいだよ。スペースコロニーや火星、移民船団などの政策を推し進めたためでもあるが」

「コロニー？ねえドラえもん。コロニーって何？」

「ううん……。そうだ。のび太くんにもわかりやすく言うと、20世紀頃に実験された宇宙ステーションをとてもなく大きくして、街をまるごと中に入れて作ったような感じだよ。だから多くの人が住めるようになってるのが多いんだ」

その例えは正確であった。この世界で標準的なシリンドラー型のコロニー（俗に言うオニールの島3号型）は少なくとも300万以上の人々が生活を営んでいとされ、さらに多くのコロニーが集まり、一つの行政区分として扱われている。いわば宇宙の街みたいなものだ。

「僕の時代じゃまだ試験段階だったのに、50年か60年くらいで実用化に成功してるなんて。」

しかも短期間で多く作られてるっていうのは本当ですか？」

「ああ。コロニーがたくさん集まって、一つの地域みたいに扱われている。我々はそれを、サイド、と呼んでいる」

連邦軍側とのやり取りはドラえもんとおび太にこの時代の現状を知らしめた。宇宙移民が促進され、色々な事件を経て銀河系に版図を広げつつある地球人類だが、その過程が特殊なために軍事関連技術、環境整備技術など、極一部の技術が異常な速さで発達を遂げた、言わば、歪な進化、を遂げてしまい、一般技術は21世紀とそんな変わりないレベルで落ち着いたと言われ、戦争に明け暮れる人類の愚かさのために息をついてしまう。

さらに2人にとって、ショックだったのは、度重なる戦乱で地球環境はボロボロになり、今は復興の過程にある、と聞かされたことだった。

「シドニーが消滅したっていうのは……?」

「ああ。それは本当だよ」

「何か巨大な物の残骸が突き刺さってるのを自家用衛星からの映像で見たんですけど」

「君たちにはショックだが……あれはコロニー落としての遺跡だ」

「コ、コロニー落としいい!?!」

ドラえもん達は驚愕した。コロニー落とという言葉に。そして兵士の口から語られたのは地球人同士の内乱や宇宙戦争の結果、環境破壊の進展が驚くほど進んだ事実。

アフリカ大陸は砂漠化が進み、ダカルさえ砂漠に飲み込まれる寸前であるとか、

チベットのラサは完全にクレーターになっているなど、彼等が冒険で出会った、かつての地球人の別種族の一つ、「天上人」が見たら「それ見た事か」と侮蔑しそうな環境に成り果てたという。

ドラえもんとおび太は虚しさを覚え、落ち込んでしまった。宇宙移民が促進されたのは地球環境の危機のせいであるという側面と、戦

争の結果生み出された宇宙航空技術の発展が無ければ人類の存続は成し得無かった事。さらに宇宙移民者と地球生まれの人間の対立、移民船団同士の闘い……。人類の平和的発展はどこに言ったのかとドラえもんは嘆いた。

のび太に至ってはむせび泣きだ。

「もうこんなのやだよ！！ねえドラえもん、もっと昔に行って歴史を変えようよ！！」

「無駄だよ。歴史を変えようとしたところで、さらなる、並行世界、を生み出すだけだよ」

「どうして！？やってみないと……」

「君の運命を変えるために僕は来た。しかしその事が既に、歴史の一部に組み込まれていたとしたら？」

「え……？」

ドラえもんに続くように、兵士も言った

「そう。君が結婚する女性が変われば、当然子孫の構成も変わる。

もしかしたら君の息子か孫のうちの誰かは結婚しないかも知れない……」

「でもセワシ君は……。」

「生まれた。つまり君がしずちゃんと結婚したとしても、君の息子のノビスケや或いはそのまた息子、そのまた息子―のび太くんの曾孫―つまりセワシ君のパパの内の誰かはジャイアンの子孫と結婚する。最初に君の時代に来たときにセワシくんが言っただろう？、他で釣り合いを取ればいい、と。あれは、君がしずちゃんと結婚する運命に変わる、事態が最初から歴史の中に折り込み済みだったという仮説に基づいてたのさ」

「しかし君が剛田武君の妹と結婚する事も消えた訳ではない。起こり得る可能性の一つとしての並行世界としては存在し続ける。歴史の流れという大河の支流としてね」

「そ、そんな……」

「我々も過去に最近の多くの戦争を歴史から消そうと試みた。しかしどうやっても歴史を変えられなかった」

これはこの時期、既に連邦政府が並行世界の存在を認識していた為に言えたセリフだった。過去に連邦が試みた歴史の改竄はいくつもの並行世界を生んだだけに終わったという事実。これは時空管理局との国交成立後に正式に確認されたもので、中には大日本帝国が戦後も存続した世界さえあったとか。

「つまり……この戦乱の時代が訪れるのは必然だって事さ」

兵士の言葉にドラえもんとのび太は完全に閉口してしまった。自分達は歴史の大河に翻弄されただけだということのか……とただただ、がつくりとかな垂れる2人であった……。

第9話「邂逅」(後書き)

ドラえもんが変えた運命がもし、最初から歴史に組み込まれていたとしたら……？今回はそんな仮説に基づきました。

ヤマトの諸元は史実とは異なり、史実の数倍の大きさと重武装の超弩級戦艦としての威容たっぷりです。史実の263mじゃどう考えてもコスモタイガーを多数搭載出来ないでしょう。

？や「新たなるゝ」じゃ数えるだけで40機以上は積んでいたし……それにラー・カイラムの半分くらいしか無いのにどうやって積むんだ！？……というわけで本編での解釈を考えて、ヤマトのサイズを大きくしました。

間章その5（ストライクウィッチーズ編） 「はやい・かたい・ものすごい」

ストライクウィッチーズ編その5。まさかの…

間章その5（ストライクウィッチーズ編）「はやい・かたい・ものすごい」

―並行時空の1940年代に調査も兼ねて、介入した地球連邦軍は本来の調査任務の他に彼等の世界の住民であった「ティターンズ」残党軍の掃討を行うことになってしまった。

増派された機動部隊は3つの地域に派遣された。シナプス座乗の第一航空戦隊「赤城」と「加賀」はブリタリア（現実世界で言うところのイギリス）方面へ。

第二航空戦隊の「蒼龍」「飛龍」は505統合戦闘航空団の救出のためにウルル方面に、第五航空戦隊の「翔鶴」と「瑞鶴」はカールスランド（こちらはドイツに相当）「奪還の任を負った第502統合戦闘航空団の支援とティターンズ残党軍の本拠地の調査のために赤城と同様に欧州に赴いた。

予備群として扶桑に「雲龍」らを配した。（場合によれば、アフリカ方面に派遣されるらしい）

「……状況は？」

赤城のアイランド（島型艦橋）で副官からの報告を受けたエイパー・シナプスは渋い表情を浮かべた。管理局からの増派は彼等の本国「ミッドチルダ」での会議での決定待ちになるという事で、提督の「リンディ・ハラオウン」から謝意の通信が届いたという。

「やっこさん、だいぶ揉めてるようです。ウィッチの存在がどうも向こうの言うところの

世界の位置づけに引っかかるようで……」

副官はこの期に及んでの管理局上層部の穏健派と強硬派の揉め合いにうんざりしているようで、もうやだ、といったため息を見せている。お詫びに補給物資（食料など）が届けられたもの、どうにも地球在住経験者以外の管理局上層部は地球をまだ信用していないと言った様子だ。

「ところで少佐達の処遇はいかがなさいます」

「うむ……。艦載航空隊付けの客員武官ということになるな。彼女たちのストライカーユニットの発進促進装置の正式な設置は上手くいったか？」

「最後部の第3エベレーターを使う形でどうにか」

「よし……。決まったな。通信班にこの時代のモールスで打電してくれ、第501統合戦闘航空団に援軍として馳せ参じる、との趣旨で」

「分かりました」

副官はシナプスの命令を通信班に伝え、指令は直ちに実行に移された。

通信で暫定的な措置で美緒とシャリーを指揮下に加えてあると伝えられ、501統合戦闘航空団に通達がなされた。

一そして、通信から4日後。扶桑からウィッチの補充要員として「宮藤芳佳」一飛曹（他国で言うところの軍曹）が乗艦。それを期に「赤城」と「加賀」は一路、ブリタリアを目指して発進した。（史実では宮藤芳佳は突発的戦闘の結果、採用された。しかし微妙に異なる歴史の流れを辿ったためか、扶桑本土であらかじめ訓練を積んだ上で採用された）

飛行甲板の上空では、ウィッチ達と航空機の合同訓練が行われていた。コスモタイガー？や歴代の各種可変戦闘機や可変MS達の銀翼の快音が空を華麗に切り裂き、ウィッチ達の時代的なレシプロストライカーがジェット戦闘機達に果敢に挑んでいた。機種は扶桑の試作機である「紫電」と「雷電」。(リベリオン合衆国出身のシャリーは自国製のP-51マスタングD型／H型を希望したのだが、時間的余裕がなかったために扶桑のストライカーユニットを使用している。それと訓練相手が優にマッハを超える速度の戦闘機なのは、今後、超音速のネウロイが出現する可能性を見越して、美緒がシナプスに直接要請したのである)

「くゝあのスピード……羨しいゝ!!」

うさ耳を持つウィッチーシャーロット・E・イエーガーは訓練相手の未来戦闘機の圧倒的な速度に憧れを持っていた。彼女は元々、バイクでリベリオン合衆国(史実のアメリカ合衆国に相当)のボンネビル・ソルトフラッツを300キロ近くでぶっ飛ばした記録を保持しているほどのスピード狂で、趣味が高じて軍人になった。(その辺はロンド・ベルのコウ・ウラキ中尉と似ている)そのため、未来世界から持ち込まれた戦闘機などの乗り物に乗りたがったのは言うまでもない。彼女が今、追尾しているのは後期型コスモタイガー。

パイロットは加賀所属の飛行隊長で、かつて、宇宙戦艦ヤマトでコスモタイガー隊長を務めた経験を持つ坂本茂大佐。最大戦速で追尾しているが、圧倒的なスピードの差によりグングンと引き離されていく。

「イヤッホウ！！どうした嬢ちゃん！！遅い、遅い、遅いぜ！！」
「く、くく……くそお！！負けてたまるかあっ！！」

坂本茂のあからさまな挑発に乗せられた形でコスモタイガーを追うシャーリーだが、ストライカーユニットの性能的限界により、グングンと引き離されていく。しょうが無い事だが、コスモタイガーの性能は純粋な戦闘機としては、2199年現在の最高峰を誇る。（ちなみに前型機のブラックタイガーでさえ、惑星イスカンダルの技術援助の結果、大気圏内速度はマッハ7を優に超える速度を常に維持可能）（これは学園都市が使用していた大型機に若干劣る数値。一般のテクノロジーが学園都市に追いつくには各種オーバーテクノロジーを入手しても、約百年を要したことになる。後継機のコスモタイガー？はさらに上回る速度を発揮可能）超音速飛行をシャーリーの固有魔法と合わせて、やっと可能にするストライカーユニットではコスモタイガーに追いつくのはほぼ不可能だった。

スピードで追いつけないと判断したシャーリーは機銃を撃つが、坂本茂の技量の前に軽くいなされる。

「……………っ！！じっとしてろよ……………ッ！」

模擬弾は巧みな動きで躲かれ、レシプロ機より機体の反応速度もいい。奇襲をかけようと急上昇したその時だった。耳のインカムにさるなる通信が入る。

「嬢ちゃんに見せてやんよ。ジェット戦闘機時代の空中戦闘機動つて奴を」

そう言うとコスモタイガーの機首が上部に上がり、270度以上の角度に向く。この一連の動きこそ、航空機が行える機動の中でも最高峰の難易度を持ち、ジェット戦闘機の中でも機動性に優れる機体のみが行える空中戦闘機動である。発想がなされた20世紀当時は極一部の機体のみが行えた。22世紀終盤においては機動性重視の機種ならばどれも実行可能となっているもの、それをさらに戦闘に活用できるのはエースか、ベテランパイロットに限られている。

坂本茂はかの宇宙戦艦ヤマトに乗艦していた時期に実戦を経験していたのと、元々士官学校の航空部門を首席で卒業した経歴持ちのエースなので実行できたわけである。

この、レシプロ戦闘機時代ではありえない動きの空中機動にシャーリーはど肝を抜かれた。

（いいっ！？嘘だろ！？あんな動きネウロイの奴らだって、やってるの見たこと……！）

その瞬間、コスモタイガーの翼内機関砲10門が火を吹いた。口径はこの時代の航空機関銃と同じ12.7？余り。シャーリーはすんでのところで回避に成功するが、模擬弾とは言え、機関砲の弾幕に囲まれると肝を冷やされてしまう。

「危ないところだったあ……あれが数百年先のジェット戦闘機の機動性かよ……」

やたらと小回りの効くところはストライカーユニットの方が有利であるが、あのような意表をつく空中戦闘機動ができるとは。世代の違いというのは恐ろしい。あれではプリアタリア連邦の試験機で、近々量産配備予定のグロスター・ミーティアや、この時期に母国が開発を始めたであろうP-59エアラコメットなど、まるで子供のおもちゃにしか思えなくなってくる。

「少佐や宮藤、菅野の奴は大丈夫かな？心配になってきたぞ……」

シャーリーは水平飛行に戻るコスモタイガーを尻目に、他の空域で自身同様に未来の兵器と模擬戦を行っているであろう3人の事を心配していた。スコアは今のところゼータタイプの可変機を2機ほど思ったより稼げていない事に悔しさを見せるとコスモタイガーをさらに追尾する。知らず知らずのうちにシャーリーはレシプロ式ストライカーユニットの限界にチャレンジしていた。

（余談であるが、1944年の時点の科学力で作れるジェットエンジンは黎明期というべき、第一世代のターボジェットエンジン。搭載形式もP-80 シューティングスターが先便を付け、後の朝鮮戦争以後に普及した胴体内装式でなく翼にぶら下げる形式などが普通だった。機動性はレシプロ機に及ばず、対戦闘機戦闘は出来ず、爆撃機迎撃用の機体とされていた。この世界においてはストライカーユニットへの搭載はまだ実用試験段階に過ぎない。ジェットエンジンと言葉でしか知らない人間がいきなり20世紀後半以降に考え出されたジェット戦闘機のマニユーバであるプガチョフ・コブラを目にしたのだからその驚きは当然と言えた。）

さて、こちらは菅野直枝。敢闘精神溢れる彼女は主に可変戦闘機の編隊に戦いを挑んでいた。

相手の機種は可変戦闘機の中では旧式化しつつある、普及量産機のVF-11 サンダーボルト。レシプロストライカーユニットを纏っている彼女だが、思い切った戦法でジェット戦闘機の子孫とも言える可変戦闘機達と渡り合っていた。

「好き勝手やりやがって!! ナマイキなんだよコノヤロウ!!」

手に持つ九九式二号4型20?機銃を至近距離で乱射し、サンダーボルトの翼に模擬弾を炸裂させ、赤いペンキをつける。

史実での菅野直はB-24の垂直尾翼に乗機の主翼を引っ掛けて吹き飛ばして撃墜したという逸話を持つが、その並行世界での存在である彼女も同じような事をするのは目に見える。連邦軍側が今回の模擬戦闘で一番恐れているウィッチは彼女であったとか。

「さすがデストロイヤー……。こうも戦うか……」

連邦軍側はただただ菅野の戦いぶりに感心していた。彼女は並行世界の自分が「日本海軍屈指のエースパイロット」として歴史に名を遺したのを聞かされると嬉しそうだった。ただし彼が終戦直前に戦死していることを知ると悔しそうな表情を見せたとか。彼女の奮闘ぶりはデストロイヤーの異名から言ってみしろ当然と言えた。

模擬戦が行われているのと同じ頃。赤城の通信室にウル方面に向かった第5航空戦隊から通信が入っていた。ウル方面といえば、第505統合戦闘航空団が壊滅した後はネウロイとティターンズの小競り合いが行われているはずだが……

「はい。こちら赤城。」

「こちら翔鶴通信班。艦隊司令部に通達。第505統合戦闘航空団の生き残りと思しきウィッチを保護した。繰り返し。第505統合戦闘団の生き残りと思しきウィッチを保護した……」

「それは本当か!？」

「壊滅した基地から飛んできたようだ。ティターンズの、狩り、を免れたウィッチで、官名は原隊は扶桑陸軍航空審査部飛行実験部所属、現在は505統合戦闘航空団所属の黒江綾香大尉だと言っている」

黒江綾香とは、史実での「魔のクロエ」の異名を持ったエースパイロット、黒江保彦少佐に相当するウィッチ。かつては扶桑陸軍としてのエースとして知られたが、年齢が前線で戦うウィッチとしての寿命である20歳に達したために退役していたが、魔力の減衰が遅い体質だったので軍に復帰していたのだが……。

「わかった。直ちに司令に伝える。そちらの状況は？」

「現在、何度かティターンズのMSと交戦し、二個小隊を撃滅した。大尉を保護したのもその過程でだ」

「しかしよくまあティターンズの追撃から生き延びたもんだ」

「彼女も必死だったみたいだ。仮面ライダーアマゾンばりのサバイバル生活を送ってどうにか逃れたとか……」

「大尉の容態はどうだ？」

「医者が通常の治療じゃ間に合わんからとかで、アレを使った。タイムふろしき。それで肉体の状態を若返らせただけど……医者の奴がとんでもなくエロで、もののついでとか言っつて、大尉をローティーン（12〜13歳）の状態にまで若返させちまったんだ」

「……そうか。あのロリコンめ」

「こちらからは以上だ」

「ご苦労様」

通信班長は溜息をつくど、シナプスに以上の内容を伝達した。あまりの内容にシナプスは頭を抱えたとか。

間章その5（ストライクウィッチーズ編）「はやい・かたい・ものすごい」

タイムふろしきの意外な（？）活用法を書きました。

肉体が若返ればウィッチの魔力も戻るのでは？

それとコスモタイガーによる「ブガチヨフ・コブラ」はいかがでしょう？

タイトルを少変更

世界観説明（前書き）

多くの作品が入り乱れているクロスオーバーファンフィクションなので、ここで一端世界観の整理と説明を行います。

世界観説明

世界観説明

・ 基本的な舞台世界は22世紀末の西暦2199年。ドラえものの故郷である時間軸の2125年からはおよそ74年後の世界。その間にガンダムシリーズやマクロスシリーズなどの出来事が起こり、ドラえものの時代とは技術体系が根本的に変化してしまい、軍事分野などが突出して進化した、歪な進化、を遂げた文明圏。人類の進出は銀河一帯に広がっている。

・ ガンダムシリーズの戦争は主に初代とその続編シリーズのもの。短いスパンで起きているため、史実で30年以上の開きがある関係のシリーズが同時期に起っている（例・機動戦士ガンダム 逆襲のシャアと機動戦士ガンダムF91）

・ とある魔術の禁書目録および、とある科学の超電磁砲に登場する学園都市はドラえもん達の町からわりかし近いところ。ドラえもん達の住む町の住民たちも学園都市のことは周知の事実。ただし22世紀頃には多くの戦争の影響である程度衰退している

・ 国連が発展した形の地球連邦政府が学園都市も含めて地球を統治。その盟主は日本と英国。島国だったせいで多くの戦争でもあまり被害は受けていないため、国力が温存されていたための措置。そのため共通言語は両国の言語。

・ 歴代の昭和仮面ライダー達はオーバーテクノロジーの産物。学園都市の衰退の要因の一つは彼等の行動によるもの

- ・地球に魔術は存在する。
- ・リリカルなのはの時空管理局と地球は別々に存在する
- ・地球連邦軍は宇宙軍にバランスが偏重している軍備。宇宙戦艦やマトシリーズの波動エンジンなどを持ち、戦力的にはアンドロメダ銀河までの宇宙文明圏でも有数を誇る。ワープ技術を応用すれば次元を飛び越えられる。間章での介入はこの技術によるもの。

世界観説明（後書き）

大体はこんなものです。各種アニメのものを整理しただけですが、
分り易いと思います。

第10話「Dear My Friend」(前書き)

のび太と、とある科学の超電磁砲のメンバー(佐天除く)の邂逅です。のび太のママにとっては仰天境地な出来事となります(笑)。そしてHELLSING関係が少し出てきます

第10話「Dear My Friend」

事情聴取を終えたドラえもん達は兵士の勧めもあって、兵団の動きが見えないのと

いつ動き出すか不明なために一旦元の世界に戻る（兵団が動いたら知らせるのを条件に承諾）事となった。（ただし美琴は元の時代には戻らず、野比家に寝泊りする）

タイムマシンに6人乗りし、野比家に戻った。

――1999年 野比家

「いったいどこに行ってたの？」

タイムマシンから降りて、4人を見送り、部屋でつくろいでいると
のび太のママ、本名野比玉子……がやってきた。最初に出発した時間から二時間余りが経過していたらしく、様子を見にやって来たのだろう。のび太は「うん、ちょっとね……」と軽く流す。慣れたものだ。流石に何度も冒険を繰り返しているだけあって、この手の言い訳はお手の物である。

玉子がいなくなると、のび太は美琴に何故、元の時代に戻らないのかと疑問を投げかける。

「美琴さんは何で元の時代に戻らないんですか？」

「まずは兵団をどうにかする方が先でしょう？それに、元の時代にはドラえもんがいる限りは何時でも戻れるしね」

とは言うものの、美琴は元の時代に残してきた、相棒、の白井黒子を始めとする面々の事が気懸かりだった。

あのツンツン頭の少年――上条麻一はまた無茶をやらかすだろうし、黒子は自分を探しまわってるだろう。それを考えるとため息が出てしまう。ドラえもんが今、2010年代に美琴の安否を伝えに行っ

ているが、ただで帰れるはずはないだろう。ドラえもんがどのような目に合うかは想像出来る。黒子なら問い詰めて首を絞めることくらいはするだろう。
果たしてどうだろうか。

—その時だった。引き出しが空き、そこからドラえもんが出てくる。
「フヒー、まいったまいった……」

彼はかなりボロボロになっている。行った先で黒子に何かされたのだろうか。まあ、大体想像は付くが。

「お・ね・え・さ・まあ〜！！！」

その声を聞いた美琴の顔色が変わった。ドラえもんが続いて現れたのは彼女の、相棒、にして、寮のルームメイトのツインテールの髪型をした女子中学生……白井黒子^{しらいくろこ}だった。美琴にとっては嬉しいような、嬉しくないような微妙なところな気持ちであったが、久方ぶりに見る黒子の顔に安堵していた。

「ご無事でしたのですね」黒子は、黒子はとっても心配していましたの〜！」

黒子は引き出しから出るといきなり美琴に飛びつく。この余りにも突飛な事態にドラえもんとのび太は啞然としてしまう。黒子にとっ

ては極当たり前な日常風景だが、ドラえもんのび太にとっては口をポカーンと開けたまま固まってしまふようなビックリな光景である。さらに引き出しから間髪入れずにもう一人現れる。頭に花をかたどった髪飾りを大量にしている女子中学生……黒子の、仕事、での同僚にして、友人の初春飾利である。ういはるかざり

「あの……初春さん？説明してもらえるかしら……何がなにやらどうなってるの？」

美琴の問いに初春が答える。初春によれば、突然ドラえもんがやって来て事情を黒子に説明した。それで案の定、黒子が暴走。危うくドラえもんを締め上げそうになったが、何とかそれを制止。事情を知った黒子はドラえもんに無理やりくっついてタイムマシンに乗り、心配なので自分も乗ってこの時代に来たそうだ。

「なるほど……ってどうすんの、のび太君。この家ってまだ部屋あったっけ？」

「隣におばあちゃんが生前に使ってた部屋がありますから、そこを使ってください。一応ウチのママに話を通すんで、とりあえず一階の居間に来て下さい」

一行はのび太に案内されて野比家の一階に赴いた。玉子は突然の来訪者達にど肝を抜かれたようで、口をアングリと開けて呆然とした。

「の、のびちゃん……、この人達は……？」

玉子はのび太がいきなり3人の女子中学生を連れてきた事に咄然としているようだ。しかもいかにも名門女子校のお嬢様と言った感じの子女もいるのだから驚きであった。

「ええと、こちら学園都市から来た中学生の皆さん。ぼくの知り合いなんだけど……しばらくウチに泊まることになったから」

「え、えええええええッ！！」

玉子はますます驚かされた。自分の息子が連れてきたのがあの、学園都市、の生徒だった。そのうちの二人は名門の常盤台中学の生徒ときているから尚更だった。

あまりの出来事にこれ以上の言葉が出てこない。あまりの衝撃に彼女の頭は真っ白になってしまったのだ。学園都市とは人工的に超能力さえも作れ、科学力もズバ向けて優れている、日本でも日本でない、とまで言われるまで権限を持つ超巨大都市であると玉子も理解していたので、驚きに拍車がかかったのだ。

「私は御坂美琴っていいいます。のび太くんとはいろいろあって……。今回はお世話になります」

「わたくし、御坂美琴お姉さまのルームメイトで、白井黒子と申します。よろしくお願いいたします」

「ええと…、初春飾利って言います。どうもお世話になります」

「は、はあ」

その後の話はのび太とドラえもんが進めた。美琴たちを泊めるのを了承させたもの、

条件として、美琴たちも家の手伝いをする事と、食事などは時々ドラえもんの道具を使うことが出された。のび太はその条件を飲み、3人に伝え、美琴たちも了承した。

こうして野比家は新たな住民(?)を迎え、ドタバタぶりをエスカレートさせていく事になる。

時に1999年の夏のことである。異なる時代での知られざる、能力者たちの戦いが今、始まる。

―未来の日本に滞在している一人の少女と言うべきだろうか―？長い髪をポニーテールに括り、片方の裾を根元までぶった切っている改造ジーンズ、腰のウエスタンベルトには七天七刀を携える、特徴的な服装の「神裂火織」。その大人びた外見から、元の世界で関わった「幻想殺し」を持つ少年―上条当麻曰く、「結婚適齢期を過ぎているようにしか見えない」と称されているが、実はまだピチピチの18歳である彼女は未来の地球の混沌とした状況に呆れさえ感じていた。度重なる戦争によって疲弊する経済や人々、そして人間が宇宙に進出してもなお存在する対立……。それでも彼女は戦いに身を投じていた。この未来を少しでもいい方向に持っていくために、

「昭和30年代くらいの未来予想図では22世紀などは「明るく幸福な未来が待ってる」と言われていたと聞いていましたが……随分と闘争に満ち溢れてしまったものですね」

「だが……、これが現実というものだ。人間は、戦いを捨てられな

い生物、とはよく言ったものだ」

神裂はホテルの一室で彼女に仕事の依頼をしてきた地球連邦のとある高官と雑談をしていた。高官が持ち込んだ仕事の依頼は以下の内容で、「王立国教騎士団への援軍として
大英帝国に向かって欲しい」との事。

王立国教騎士団という、聞きなれない単語に首をかしげた彼女であったが、高官からその組織についての説明がなされた。王立国教騎士団とは「元は大英帝国とイギリス清教を半十字教の化物から守るために組織されたもので、連邦政府が出来た現在でもその役目は変わっていない」との事。噂だけは聞いたことはあるが、まさか本当だったとは。

「ヴァチカンも動いている。道中、くれぐれも気をつけてくれ」

「ローマ正教の事ですか？」

「いや……ローマ正教というよりはヴァチカン直属と言うべきか。

ヴァチカンが第1課と持っているのを知っているね？君の障害になり得る存在だ」

「どういう事です？ヴァチカンは直接的な戦力を……」

「、イスカリオテのユダ、……といえば分かるかね？存在しないとされる13番目の課、文字通りにヴァチカンの持つ唯一にして、最大の戦力」

神裂はここで初めてヴァチカンの極秘事項とも言える事実を知った。ヴァチカンが唯一保有する戦力「法王庁特務局第13課」——通称「イスカリオテ」——。旧教の地上における神罰代行者。悪魔、化物、異教、異端の殲滅（絶滅か？）を目的とし、狂信者どもの巣窟でもある。

「奴等の中でも要注意なのがこの男——アレクサンド・アンデルセン」。その名と「首切り判事」などの数多くの異名以外の出自の全てが不明だが、その力は一説には、聖人、すら超えるかも知れぬとされるが、驚いたことに、まったく普通の人間なのだ。……正にヴァチカンの切り札だ」

彼は神裂にヴァチカンの最強戦力―いやもしかすると、全人類の中でも強さは5本の指に入るかも知れない、眼鏡をかけた壮年の男の写真を手渡した。

一見して、普通の温和な神父にも見えるが、その実態はカトリックの狂信者で、「下手な聖人より強いんじゃないかね？」と恐れられるほどの力を持つ男。洗礼処理がなされた銃剣を主な武器とする他は不明。史実でも王立国教騎士団の対化物の切り札、最強の吸血鬼「アーカード」に「宿敵」と言わしめた唯一の人物。

連邦政府の高官も恐れる「イスカリオテのユダ」の名を持つ「第13課」。

神裂はヴァチカンの得体のしれない力に、一抹の不安を覚えつつも、依頼を遂行（その前にこの時代の十字教の協会で七天七刀は改めて対化物用の洗礼処理を受けており、それが手元に戻るのを待った）するために政府がチャーターした航空機に乗って、欧州に飛んだ。

待ち受けているのが、とんでも無い、異端殲滅、のバケモノと最強の、吸血鬼、の闘争だとはこの時の彼女には知る由もなかった。聖人の資質を持つとは言え、まだ10代の若者に過ぎない彼女には辛く、そしてその手をアンデットの血で汚す事になる戦いの握り拳が振り下ろされようとしていた……。そして英国では様々な人間の思惑が交差する事となる。

第10話「Dear My Friend」(後書き)

神裂火織をHELLSINGに放り出してみました。如何に彼女でも人外だらけな
闘争で無事に帰ってこれるか……

第11話「私らしく」（前書き）

機動戦艦ナデシコについて少し触れます。時間軸としてはTVの話より以前になります。……ナデシコのヒロインは誰か？ そりゃユリカでしょう（笑）

第11話「私らしく」

西暦2199年8月始め　一地球連邦軍は民間企業が独自に戦艦を建造しているのを知り、すぐにその諸元を建造元の地球圏有数の企業で、軍にも一定の発言力を持つ「ネルガル重工」に問い合わせた。すると件の会長からは

「火星の遺跡からのテクノロジーを用いた、これまでの核融合炉搭載の内惑星航行用（ガンダムシリーズの艦船）の宇宙戦艦より格段に高性能艦ですよ」と、歯が浮くような文句が並べられた回答が返ってきた。計画では4隻の建造と一番艦は、ナデシコ、と和風の名前が冠されているとの事だ。これを聞かされた極東支部のミスマルコウイチロウ中将は「今は地球が一丸となって戦うべきなのにネルガルは何をしているのだ!!」と憤慨するも、火星付近で、例のアレ、が目撃されたという情報も入ると軍の長老達（レビル將軍すら知りえぬ情報も閲覧可能な権限を持つ、退役大将の一団、の事を差す）が戦闘態勢を命じたのも気になる。

—それにしてもご老人方は何故、この、バツタ、に慌てふためくのだ？何の変哲もない無人兵器では無いか。

彼は報告書の事実に唸りつつも書類に添えられている、建造中の一隻の戦艦の写真に向けてため息を付いていた。彼は後に知ることになる。その戦艦に自身の愛娘「ユリカ」が艦長として乗り込む事。そして

娘が自分と同じ道を歩む運命を辿っていく事を……。ナデシコ、の名を持つ戦艦は静かに胎動を初めていた。

「お父様〜!!」

執務室に一人のうら若き女性が入ってきた。彼女がコウイチロウが溺愛する、一人娘の「ユリカ」。

年齢はもうじき20歳を迎える19歳。大学を卒業したばかりだが、性格は年に似合わぬほどの天真柔操かつ楽天家。しかしそれとは裏腹に在学中に戦略シミュレーションで無敗を誇ったとの逸話を持つ、逸材、で上層部から目をつけられている。

「おお、ユリカ。今日はどうした？」

「今日はお父様に料理を作ってきたんです」

「何？お前が料理を……………」

コウイチロウの顔から血の気が引いていく。彼は男手一つでユリカを育てたために娘のことは大体把握していた。ユリカの最大の欠点は料理の腕がこの世のものとは思えないほどに壊滅的（その腕はジャイアンと同レベル）なのだ。現に弁当箱を開けてみると、中に入っているのは、元がなんだったのかさえも判別不能な物体A、なのだ。ユリカの笑顔の前には受け取るをえなかった。

「今日はどれくらいでお帰りになられるんですか？」

「作戦会議やお偉方の接待で遅くなると思う。午前様になるのだけは勘弁したいよ」

コウイチロウは娘との会話を楽しみつつも、机に置かれた物体をどう処理するか、を必死に探っていた。彼の胃袋はアレを処理できるほど頑丈ではない。どうすればいいのか……。

部下に食わせるか、犬の餌にするか……。いずれも前途多難であった。

同時刻 とある月面都市のレストラン

「オヤジの奴、オレに軍に入ってたか……？わかってるっの。そのうち入るつもりなんだけどなあ……」

この、一人称オレな緑髪で、ショートカットな少女は「スバル・リョーコ」。

軍人の父を持ち、自身もその内、軍に志願するつもり of 17歳。彼女は旅行でこの月面都市を訪れていた。そこで道案内役に頼んだのが、個人的に親交のあった軍人のコウ・ウラキ。彼が愛機のガンダム試作3号機の調整のためにこの月面都市を訪れるのを知り、それに合わせる形で旅行を計画し、実行に移したわけである。

「ところでコウ、オメーまだニンジン食えねえのかよ？」

「あ、ああ。あれだけはどうしても……」

「たっく、軍に入ってたって聞いて少しは変わるかと思ったけど……ホントオメエって情けねえやつだな」

「それは心外だぞ？これでもエースパイロットの端くれなんだ。ニンジンが食えないくらいで……」

「それが大した問題だ！20過ぎてまだニンジンが食えねえなんて、小学生にも笑い飛ばされんぞ」

「な、何をお……」

「んじゃそのドレッシングのニンジンを食ってみろ。そうしたらお前を一人前として認めてやるぜ」

「よ、よおし、呐喊だあ……！」

必死にニンジンに喰らいつくコウ・ウラキを尻目にステーキをたいあげるリョーコ。

（ヤレヤレ……これがあのソロモンの悪夢と対等に戦った連邦宇宙軍きつてのシッフエースかね……）

と呆れつつも数年来の友人が苦手を克服しようと必死になってる様に応援したくなるリョーコであった。

―東京では、なのはのレイジングハート・エクセリオンの改修作業が行われていた。

技術については、管理局所属艦から摂取した物と既存のOTM（オーバーテクノロジーの事）を組み合わせる事で対処したので、作業は予想よりはスムーズだった。ブラックボックスである制御用Aiなどの重要部分に変更は無いが、外装とフレームはバルキリーなどと同じエネルギー変換装甲に、魔力伝達系統にはなんとガンダニウム合金が使用されると言う贅沢ぶりである（いわばミッドチルダと地球の技術のキメラ的存在である）。

これは地球にミッドチルダの固有技術に近い「デバイス」を完全に修復できる技術が無かったのと管理局もそこその設備を提供した代わりに、完全には技術を渡さなかったための緊急的な措置である。一刻も早い実戦への復帰を望んだなのはの願いを叶えるべく、工廠の技術者達が奮闘したおかげで出来上がったのである。その詳細は以下の通りである。

「ガンダリウムはだめか」

「 α 、 β 、 γ の三種を試してみたが、微弱にしか反応は無い」

「超合金と合成鋼Gもだめだ」

実験は試行錯誤の連続であった。時空管理局の魔導士の協力のもとで行われ、

魔力伝達を感知できた装甲材を用いてみたが、どれも微弱

には伝達できるが、とても実戦使用に耐えられるような数値では無かった。そこで試しに可変戦闘機のエネルギー変換装甲を外装とフレームに使ってみた。―すると。

「…成功だ！ 魔力をエネルギーに変換できているぞ！」

「落ち着け、装甲の強度はどうだ」

「使用者の魔力にもありますが…大まかガンダリウムY相当です！ やりました」

この瞬間、一つの課題がクリアされた。しかし、研究に回した伝達系統の部品を地球製の物で補うというのが最後の関門として残されていた。その打開策として選ばれたのが、アナザーガンダムに採用されていたガンダニウム合金であった。

この合金は採用した機体のエネルギーの変換効率を高める特性があったために今回の実験でも注目されたのである。

実験で魔力の伝達が確認されると、早速、サンプルが管理局の技術で最適な加工が施され、レイジングハートの重要個所に組み込まれた。

その後、3日ほどの実用試験の後になのはに手渡された。

他には戦闘力の強化に主眼が置かれた改造が施されたが、元々の内部パーツの一部は研究用に回されたためにどうしても一部が足りなかった。そこで航行艦に保管されていた「バルディッシュ・アサルト」用の予備フレームの一部が流用された。（搭載されていた理由は不明だが、おそらくフェイトのための補給物資だったのだろう）その効果と、改装に関わった、時空管理局員のアイディアで接近戦モードが追加されることになった。「ソードフォーム」と「ハルバードフォーム」である。（修理の責任者が旧スイスの出身で、彼曰く「この形は絶対ハルバードに変形する！ 何故あれの美しさがわからんのだあ！？」との事。ソードについては、ハルバードが使用に適しない時の保険的意味合い。ちなみにエネルギー変換効率が高まったためか、総合的攻撃力は向上した。なのははそれを聞いてビッ

クリ仰天。フェイトとヴィータも啞然としたとか。特にフェイトはバルディッシュの予備パーツの一部がレイジングハートに組み込まれたと聞かされた時には目が点になったとか。

「……その副産物がそれ？」

フェイトの問いに桜色の刀剣の形態を見せるレイジングハートを持ちながらなのはうなづいた。当人は修理の副産物として造られてしまったこの形態に困り果てている。

「どうしようフェイトちゃん……！私、剣なんて使えないよぉ……！！そりゃ家に道場があつて、お兄ちゃんもお姉ちゃんも剣術やつてるけど……」

なのはは実家に伝わる剣術の手ほどきは受けていないし、剣術を継ぐのは兄の役目で、自身は両親が営む喫茶店を継ぐつもりだった。いくら2年ほど管理局で訓練を受けたといっても接近戦は苦手としているのにこの事態となつては……。

「今からでも遅くはない。モノにしなけりゃ宝の持ち腐れだ」

「竜馬さん」

いつの間にかゲッタードラゴンのメインパイロット「流竜馬」がいた。どうやら困り果てた声を聞いて、居ても立ってもいられなかったようだ。

「2人ともトレーニングルームに行こう。まずはそれからだ」

竜馬はなのはとフェイトを引き連れて艦内のトレーニングルームに赴く。彼に言わせれば、戦いに武器が何であるかは関係ない、そうだ。彼はなのは達にどのようなトレーニングを課すのだろうか

第11話「私らしく」（後書き）

レイジングハートが連邦軍に魔改造されます。地球の最先端技術が移植されたレイジングハートの威力は？

PV40000突破記念 小話「なのは、ロイ・フォッカーと模擬空戦す」（前

PV40000突破記念にリリカルなのはとマクロスシリーズが絡む小話です。なのはが連邦軍に入隊し、どのような訓練をしていたかの説明も兼ねています。（小説のタイトルとは裏腹にドラえもんは出てきません）

PV40000突破記念 小話「なのは、ロイ・フォッカーと模擬空戦す」

―とある日 地球連邦軍極東支部

ここでは、可変戦闘機（一般にはバルキリーの名で知られている）の飛行訓練が行われていた。

今日では連邦軍の代表的な兵器の一つに上り詰めた兵器である感じが強い。編隊の多くは主力機である「VF-11 サンダーボルト」で構成されているが、異彩を放つ機体が飛んでいる。前進翼が特徴的な、バルキリー、「VF-19F エクスカリバー」。

主力機として配備が進められている新鋭機である。その内の白を基調とした塗装がなされた一機なのはは乗り込んでいた。彼女は連邦軍への入隊（この世界で暮らす為の大義名分だったが、軍隊である以上、実戦に駆り出されることもありえる）魔道士としての訓練に明け暮れていた。魔道士としての才能はピカイチだったせいか、地球において考えだされた空中戦闘機動を一通りこなせる（彼女は独学で磨いていたが、人型で空戦が可能な兵器が存在するこの世界ではそういう研究が進んでいた。それを身につけるために軍の訓練に参加するようになった。さらになのは近代空戦の感覚を養うために、たまたま地球に立ち寄っていた、ある可変戦闘機部門におけるエースパイロットに誘われる形で、可変戦闘機での空戦訓練に参加したのだ。

所属部隊の関係もあり、訓練用の機体はすぐ実戦に耐えられるようになるため（宇宙では彼女たち魔道士は戦えない。そこで軍が考えたのがこれである）にVF-11が宛がわれた。さすがに戦闘機を用いた空戦の訓練はかつてが違い、過酷だったが、修理を終えたレイジングハートの間接的な補助と彼女自身の多大な努力（天性の才

能があった魔法と違って、兵器を動かすにはすべてを一から学ばなくてはならない）訓練開始から3ヶ月かけてVF-11を一応は使いこなすだけの腕は身につけた。訓練で身につけた空戦センスは自身の元々の分野である、空戦魔道士、でも生かせるためにこの訓練は有意義な物だった。

その訓練の様子は以下の通りである。

「全員注目ッ！！今回は模擬空中戦を行う。ガンポッドはペイント弾を使用。ファストパックは使用可である。時間は30分とするが、それまでに撃墜されれば負けと見なす。なお搭乗機体はVF-11とする：以上だ」

担当将校の説明が終わると、パイロットは一目散に愛機のもとへと向かう。戦闘機を題材とする映画などでよく見る光景である。その中に彼女は混ざっていた。

この日の訓練において、格納庫に駐機されている専用カラーリングが施された（白を基調としているが、翼に入っている線の色がBJと同じになっている）VF-11に乗り込み、エンジンを起動させ、

計器類をチェックする。

「VF-11（なのは機）コックピット

「各部異常なし：熱核タービンエンジンも良好：。武装、安全装置解除」

計器やエンジンに全て異常が無い事を確認すると、滑走路へのランディングに入る。

「スターズ、発進準備よろしいか？」

管制塔からの通信が入る。管理局にいた頃とはやってる事は180度違うのだが、慣れと言うものは恐ろしい。映画でト・クルーズなどがやっていた事を自分がやることになるとはと、ため息をつく。ちなみに彼女は戦闘機での訓練の際のコールサインを、スターズ、としており、このコールサインは奇しくも後々の出来事と一致していた。

「こちらスターズ、発進準備良し」

「スターズ、発進を許可する。貴機の幸運を祈る」

「了解。ティフオフ：！」

スロットルレバーを最大にまで押し、最大加速をかける。

轟音と共にVF-11のエンジンが唸りをあげて機体を真夏の蒼穹の空に押し上げていく。彼女にとってはいつものとは違う形で飛ぶ青空である。体にGの重圧がかかるが、澄み切った青空が目の前に広がっていくこの状況ではむしろ心地よく感じられる。あつという間に高度5000mにまで上昇するとひとまず水平飛行に移るが、レーダーに敵機を捕らえる。

「敵の高度は4000m……行くよレイジングハート」

、All right、

彼女はパイロットスーツは着ておらず、不足の事態に備えてバリアジャケットで訓練に望んでいた。（ただし相棒のレイジングハートは待機状態のまま、彼女を補助していた。この格好は当然、他の軍人たちは一様に難色を示したが、担当将校が防護服と説明するとうにか収まった。）自分はあくまで魔道士であるとの気持ちを示すため、そして……。

彼女は下方にいる標的に向けて急降下、大昔のアメリカ軍よろしく、奇襲からの一撃離脱を猛スピードでかけた。

奇襲をかけられた相手方は即座に戦闘態勢を取り、なのは達を待ち受ける。

「おっと、たぶん25歳になっても魔法少女なんて言ってるような馬鹿のお出ました」

と、嫌味な事をわざと無線を開放してかけると戦闘体制に入った。無論、19歳の下りは彼が考えたことだが、事実、そうなるはずなのであながち間違ってもいない。これにはカチンと来たらしく、未来で言うはずの台詞を8年近くも早く先取りして吐いた。

「……ッ！そのあなた、少し……頭を冷やそうか？」

「やなこったい！19歳になってもペチャパイなのが目に見えるデメエには言われたくないな。少しはフェイトちゃんを見習えよ。ガキンチョ」

「おいコラァ！！どういう意味いそれー！」

すっかり堪忍袋の緒がぶち切れたせいか、怒りに火をついたなのは、サンダーボルトのガンポッドを乱射しつつ、敵機とドックファイトに入ると、機体を回転させる機動で相手の射撃を回避する。決して戦闘機乗りとしてのセオリー通りには行動しないのはは正規の軍人たちには『面白く』見えるようで、入れ替わり立ち替わり

で戦っていた。しかし攻撃を当てられていない。ミサイルのロックを外す機動などは一級のもので、軍人たちをして舌を巻くほどに鋭い。

そのドックファイトの様子を地上で見つめる一人の男がいた。「ロイ・フォッカー」。

基地を訪れていた「最高の可変戦闘機乗り」の名をほしきままにしているパイロットで、階級は少佐。史実ではゼントラーディなどとの星間戦争の際に戦死しているが、この時空では生き残り、存命している。そのため彼は次世代機に乗れたわけである。

「あのVF-11、一見するとメチャメチャだが、いい動きをしているな。誰が乗っている？」

「ハッ、訓練生のタカマチ・ナノハです」

「フム。例の、魔法少女、か。VF-1Sをいつでも発進できるようにスタンバイさせておけ。ちょっと俺も混じりたくなった」

「し、少佐自ら？しかしVF-1では性能差がありますが…？」

「バーロー！戦争してもんは機体の性能で決まるもんじゃねえ。パイロットの腕だ。赤い彗星だってそう吹いてたろうが。さて、魔法少女、さんとやらの実力を確かめてくるとするか」

フォッカーはなのはの空戦に刺激されたのか、好奇心なのか、自ら模擬戦に参加する意志を見せ、出撃した。

「スカルリーダーよりその機へ。こいつの相手は俺がする。お前は別の相手とやってろ」

通信を入れるフォッカー。なのはと戦っていた機はフォッカーにその場を任せ、離脱する。

「了解。気をつけな。教官が来るぜ」

との忠告の一言を残して。

なのはもこの一言の意味を悟ったようで緊張が漲る。

「き、教官って…まさか」

震えるような声を発し、背筋が凍るような感覚を覚える。

―そして。視界に一機の可変戦闘機が現れる。それはこの時点では二世代ほど前の旧式機になっているはずの「VF-1 バルキリー」だった。

「バ、バルキリー！？ でもどこの……あ……あのパーソナルマークはスカル小隊の……？」

その通りだった。VF-1の垂直尾翼とファストパックに描かれている骸骨のマークこそ、かつてのアメリカ海軍より引き継がれし伝統あるマークであり、現時点では連邦宇宙軍の‘誉’と謳われる部隊の物である。

「その通りだ」

と、フォッカーから通信が入る。旧型に乗っているというのに余裕綽々である。

「お嬢ちゃん、俺に一発でも当てられたらこの模擬戦を合格にしてやろう」

「一発でいいんですか？」

「そうだ。ただし30分間持ちこたえたうえでだな。さて、実力を見せてもらおうか」

「それじゃこちらから行きます！」

ファイター形態でフォッカーを潰しにかかった。魔道士として培った空戦機動を活用すれば、いかに最高のエースと言われる彼であろうと対処は難しいと踏んだのだろう。しかしここは歴戦のパイロットである、フォッカーの技量勝ちだった。翼のフラップを用いた巧みな操作で機体をガンボッドの射線からずらす。この戦法

は大昔の大日本帝国の航空隊の熟練パイロットが零式艦上戦闘機（俗に言うゼロ戦）で用いた物で、一定以上の技量と自信がなければ実行できないが、それを可能としているのは彼の類まれな技術と経験による物である。

「そんな攻撃、かすりもせんぞ！」

鼻歌混ざりの声が聞こえる。一見するとふざけている様だが、これも彼一流の鼓舞でもあり、後輩想いな一面を持つ彼ならではの工夫だ。

「くううつ!!」

なのはは空戦魔導士であり、事が流れどおりに運んだのなら、そう遠くない内に‘エースオブエース’と呼ばれるはずの逸材である。その闘争心が疼いたのか、エンジンのスロットルを全開にし、急激な加速によるGになんとか耐えて自分なりの空戦機動を持ってして‘最高のエースパイロット’を相手取った。

（性能的にはVF-1の次々世代機のこっちに優位があるはず…。なのに旧型機であんな凄い事が出来るなんて…。私もあんな風になれば……）

フォッカーに憧れを抱きつつも、なんとか攻撃を当てようと奮闘する。時間差と高度差を利用した攻撃をかける。伊達に管理局のエースで無いというわけだ。

「ブライト艦長も一クセのある奴を拾ったな。久しぶりに面白くなってきた。後で‘アレ’を手配してやるか」

口ごちつつもVF-1の性能を最大限に引き出して、インメルマントーン、‘バレルロール’、さらには上級の‘コブラ’など、あらゆる空戦機動を駆使して攻撃を回避する。無論反撃も忘れていない。ガンボッドを無駄なく連射して圧する。

そしてついに彼がなのはの機動を読み始め、弾道が次第になのはの機体を捕らえる。

「……行くよレイジングハート」

‘All right.’

待機状態のレイジングハート・エクセリオンが主の声に応える。なのはの‘相棒’として実戦を経験してきたこのデバイスは現在でもしっかりとサポートを怠ってはいない。

‘In 30—degree right,’ it is
an enemy.’

「くっ…さすがに早い!!」

デバイスによるサポート付きとはいえ、経験も腕も上なフオッカーが相手では不利であった。いや、よく敢闘しているといつて良いだろう。空戦機動も目を見張るものもある。

(ハア…ハア…)

空戦の時間はたった30分にも満たない。しかし彼女にはもう1時間以上も長く戦っているような感覚さえ感じていた。極限状態に追い込まれると時間がゆっくりに感じるというが、彼女は正にその状況に陥った。必死にミサイルのロックアラートを示す電子音から逃れようとする。彼女は初めて戦闘機乗りとしての恐怖を味わっていた。

こうする間にも時間は流れ、残り4分にまで持ち込んだ所で彼女の命運も尽きた。

‘Attack forward,’ and evasi
on!’

と、レイジングハートから警告を受けるが、とっさの判断が遅れてしまった。

「えっ…!!? これじゃ回避が間に合わない!」

相棒からの警告にハツとなり、操縦桿を動かすも、この距離では別形態に変形して射線から逃れるほどの余裕は無かった。弾丸が命中し、ついに撃墜判定を示すペイントが機体に付く。

「…もうちょっとだったのになあ…」

落ち付きを取り戻し、撃墜判定された事に落胆するも、フオッカー

はフォッカーから奮闘振りを称えられた。

「いや……なかなかよく頑張った。ところで、なのは……だったな？ 今回の戦はなかなか楽しめた。帰ったらあとでコーラでもおごってやる」

「あ、ありがとうございます！」

彼女は魔道士として培った空戦のノウハウがジェット戦闘機相手にも通用する事を喜んだ。この訓練以後はフォッカーの計らいで戦闘機での訓練の他にも空戦魔道士として参加できるようになったとか。

―後日 基地にて。

「高町なのは、入ります」

海軍式敬礼をして駐屯地の司令に入ると司令官の前に立つ。

「うむ。今日は君にいい知らせが来ていると言っておこう」

「何でしょうか？」

「君は本日から新鋭のVF-19F「エクスカリバー」への搭乗が許されることになった。さっそくだが機種転換訓練を受けてもらう」

「ほ、本当ですか？ でも……なんでそんな急に？」

率直な疑問をぶつける。その訳は司令官が話した。

「実は先日模擬戦での君の訓練結果を少佐が高く評価してくれてな。あの後すぐに軍令部に直接掛け合ったそうだ。それで手配が即日中になされ、今朝、新星インダストリー社から直接、機体が届いたばかりだ」

「ありがとうございます。少佐にもよろしくお伝えください」

「うむ。これからも訓練に励んでくれたまえ。それともう一つある。君とフェイト・テストロッサは魔法を使つての訓練参加が許された。明日から君等の腕前、とくと拝見させてもらう」

「はいっ！」

この後、魔道士として訓練に参加する機会にも恵まれるようになった管理局のエース達は
その腕を連邦宇宙軍や空軍相手に振るう事になるが、それは別の機会に語る。

PV40000突破記念 小話「なのは、ロイ・フォッカーと模擬空戦す」（後

高町なのはI N、バルキリーを書いてみました。機種が歴代マクロスシリーズで主役を張った機種でなく、隠れた名機のVF-11サンダーボルトなのは『量産機とエース』な組み合わせを目指した結果です。

なのは専用バルキリー……どうでしょう。

ちなみなのはの腕は新兵以上、ベテランや中堅以下なイメージで書きました。それでも健闘しましたが

第12話「謎のゲッターロボ その名もゲッターロボ號」(前書き)

ここからしばらくリリカルなのはメインで話が進みます。第一話で伏線を張っておいたゲッターロボとなのは達の因縁を書きます。

第12話「謎のゲッターロボ その名もゲッターロボ號」

ーフェイトはロンド・ベルと行動を共にするようになってから、つづさにこの世界を見てきた。決して一枚板ではない「地球連邦政府」、恒星間航行可能な技術体系を持ち、文字通りの「侵略者」と戦い、勝利をもたらすほどに強力な軍備を持つ「地球連邦軍」。そして人類同士の戦いの中で示された「人類の持つ可能性」……歴代のニュータイプ達が示した奇跡……。彼女は記録映像を通して、その奇跡を目の当たりにした。史上最強にして、悲劇のニュータイプ、と言われたカミーユ・ビダンが連邦軍同士の内乱「グリプス戦役」で見せた力。

『分かるまい、戦争を遊びにしているシロッコにはこの俺の体を通して出る力がッ!!!』
Zガンダムが摩訶不思議なオーラを纏って敵を金縛りにして特攻する。

『憎しみは憎しみを呼ぶだけだって……分れ!!!』

またある時はジュドー・アーシタのZZガンダムがオーラを発しながらその特徴的なキャノン砲を放つ。

『たかが石ころ一つ、ガンダムで押出してやるっ!!!』

ニュータイプの気合で隕石を押し返したVガンダムとその操縦者のアムロ・レイ。これを目にしてみると、人間の可能性、を信じたくなる。代表的な例であるこの3つの事例だけでも己が目を見失ってしまうが、奇跡を起こす、とは正にこのようなことを言うので

はないか。

「不可能でも決して諦めない……か。なのはもあの時、同じ気持ちだったのかな……」

かつて自分も母のためと、無茶をしたが、なのははそれを遥かに凌ぐ無茶をやったのけた。9歳の時の、闇の書事件、でなのはが取ったのは実力差が明らかな闇の書の意志（リインフォース？）に突撃をかました（フェイトはその場に居合わせてはいなかったが、後に伝え聞いた）。この世界で地球と交戦した星間国家は、地球人は時として不屈の闘志を見せる、と連邦宇宙軍を恐れたと言うのも頷ける。

「なのはは『元の世界』……ミッドチルダへの早期の帰還を諦めたのか、この管理外世界の軍人の身分を手に入れた。驚いたけど……この世界を平和にしたいって言う気持ちは私にもわかる。それにこれも、地球には違いない。私にとっても第二の故郷である地球を救えるなら、なのはの笑顔を守るためなら……私はこの世界を守るよ……」

これが今のフェイトの心の支えであった。奇しくもこの決意は仮面ライダーZXこと、村雨良がバダンとの戦いで示した決意と似ていた。彼は残留思念になってまで自らを守ってくれた姉のため、そして今の自らを確立させてくれた、仲間、達のために世界を悪の手か

ら守った。彼女もまた、フェイト、としての自我を確立してくれた
(彼女は元々、

プレシア・テストロッサという女性技術者が事故で失った愛娘のア
リシアを黄泉返させろうと狂ったように研究した末に生み出した、
試作品、のクローン人間。なのはとの出会いが今の彼女を形作った)
なのはを大事に思っていた。それが彼女の行動原理となっていた。
彼女は立場上、正規の軍人になったなのはとは違って、地球連邦
軍の民間協力者、として行動していた。その過程でなのはから伝え
聞いた、『なのはを一撃で撃墜した蒼い巨大ロボット』の事が気
にかかっており、その調査を行っていた。

ロンド・ベルの面々も『3機合体のスーパーロボットというと、ゲ
ッターロボの一種としか考えられない』という見解で一致しており、
アムロ・レイや流竜馬と共にゲッターロボGを開発した「新早乙女
研究所」を訪れることになった。

基地からはアムロの運転で基地所有の4人乗りのエレカ(電気自動
車)で向かったが、その道中にフェイトはアムロにジオン残党の事
を尋ねた。

「アムロ大尉、あの人達―ジオン軍の生き残り―はなんで戦争が終
わって何年も経つのに戦いを止めないんですか？」

アムロはフェイトの問いに率直な回答を示した。それは彼女にとっ
てまたしても、頭をガンと殴られた、ようなショックな一言だった。
「それは彼等には彼等なりの、正義、や、理想、があるからだよ。
この世界の統治機構―

、地球連邦政府、は地球から宇宙を支配している。それを嫌ってい
るスペースノイドは星の数ほどいる。過去、連邦政府はスペースノ

イドに対して何の政策も成さなかった。それがジオンの台頭を許す土壌になった」

「でも……だからってあんな事……ッ」

「……一年戦争の時の、ブリティッシュ作戦、か」

アムロはフェイトの憤慨の理由を悟った。一年戦争当時に行われたコロニー落としては広島型原爆「リトルボーイ」約300万発分のエネルギーを一気にオーストラリア大陸などに叩きつけた。結果、オーストラリア最大の都市であったシドニーは消滅。大陸自体にも造山活動を引き起こし、超弩級のクレータを穿った。大陸の16%を消滅させ、23億人もの人々を地獄に追いやった。彼等のこの行為は決して許されざるものだ。

「彼等はスペースノイドの開放という大義を信じてたのさ。それがジオン軍の行動における理念。ギレン・ザビはコロニー落としを、神が放ったメキドの火、と例えたが、彼等にとってあの戦争はスペースノイドの開放のための戦いだったのさ。ザビ家一党はともかくも、大多数のジオン軍人達にとってはね」

「開放……？理想……？だからって地球の人たちを無作為に殺していいはずが無いですよッ……！国家の理想ってだけで罪の無い人たちを戦争に巻き込むなんて……！！」

フェイトは抑えきれない怒りが沸いて出てくるのを感じ、いつの間にか拳を握り締めていた。事件に巻き込まれた人たちを救いたい、その一心で管理局の執務官への道を志した彼女には『国家の大義や理想で個人を犠牲にする』事が許せなかったのだ。しかし彼女の所属する時空管理局として、自らの大義を管理世界の実情を無視して

押し付けるような行為を行っている、言わば、同じ穴のムジナに過ぎない。彼女は純粹であった故にミッドチルダ内部の腐敗をまだ知らなかった。しかし彼女は後にジオン残党軍の軍人やアムロの言った言葉の意味を理解する。それには彼女にとってはあと4年以上の歳月を必要としていた。

―新早乙女研究所

「ここが新早乙女研究所ですか？なんかアニメの通りですね」

「ああ。それはよく言われるそうだ。歴代のゲッターロボはここで造られた。博士に聞けば何か分かるだろう」

研究所を一目見るなり率直な感想を言う。

中に入って管理局のIDを見せるとすぐさま所長室に招かれ、5分ほど待っていると、所長の早乙女博士がやって来た。

「お待ちせしました。私が早乙女です」

「フェイト・テストロッサ・ハラウンです」

「ブライト艦長から話は聞いています。ご友人を襲った謎の巨大ロボットの正体を調べているそうですね」

「はい。話を聞く限りでは3機の戦闘機が合体して一機の巨大ロボットになったそうですが…明らかにゲッターロボ特有の合体の掛け声を叫んでいたそうです」

「そのゲッターの合体の単語は……？」

「、號、です。ゲッター、號……そう叫んでいたそうです」

「ゲッターロボ……《號》だって……!？」

早乙女博士はその號という単語に驚愕した。それは現時点で彼と神

隼人しか知らないはずの単語であつたからだ。

「知っているんですか？」

「知っているも何も……ソイツはまだこの世には存在しえないはずの機体です。この事は私とゲッターチームの神隼人君以外は知らないハズですから」

早乙女博士はフェイトに事実を語った。ゲッターロボ號は技術者を志した隼人が思案した独自の設計で作られるゲッターロボとなるはずのプロトタイプ。まだ非武装の試作品が製造途中の段階のはずだと。しかし現に完全武装され、しかも合体変形機構が組み込まれた機体がなのはを襲い、重傷を負わせた。

設計図が外部に漏れたのか……いやそれにしては武装も完璧に組み込めるはずは無い。早乙女博士はただただ、首を傾げるだけだった。

―そしてどこかで、その話題の主、ゲッターロボ號が不気味に胎動を初めていた……

その大剣を持つ勇者のような姿は皮肉にも人間に向けて刃を向ける事を感じさせない勇壮さをただ寄せていた。その剣の名は「磁甲剣ソードトマホーク」。

第12話「謎のゲッターロボ その名もゲッターロボ號」(後書き)

上手く伏線は回収できたでしょうか。その不安で一杯です。二次創作は

大変だということを実感させられています

登場作品一覧（前書き）

今のところ単語だけでも登場済みの作品のリストです

登場作品一覧

- ・「大長編ドラえもん」
- ・「機動戦士ガンダム0083（スターダストメモリー）」
- ・「機動戦士Zガンダム」（TV版）
- ・「機動戦士ガンダムZZ」
- ・「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」
- ・「機動戦士ガンダムF91」
- ・「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」
- ・「機動戦艦ナデシコ」（TV版）
- ・「マジンガーZ」（TV版）
- ・「グレートマジンガー」（TV版）
- ・「ゲッターロボサガ（他メディアのものも混じってきたので整理）」
- ・「超獣機神ダンクーガ」（今のところ単語のみ）
- ・「破邪大星ダンガイオー」（同上）
- ・「超電磁ロボ コン・バトラー?」（同上）
- ・「超電磁マシーン ボルテス?」（同上）
- ・「超時空要塞マクロス」
- ・「マクロス7」（今のところメカのみ）
- ・「マクロスプラス」
- ・「マクロスフロンティア」（同上）
- ・「仮面ライダー」（1号〜BLACK・RX）
- ・「HELLSING」（存在の示唆）
- ・「とある科学の超電磁砲」
- ・「とある魔術の禁書目録」（神裂火織が登場）
- ・「魔法少女リリカルなのはA、S」（子供なのはとフェイトの出典）
- ・「魔法少女リリカルなのはStrikers」

- ・ 「舞HIME」
- ・ 「ストライクウィッチーズ」
- ・ 「トップをねらえ」
- ・ 「トップをねらえ！ NEXT GENERATION」（グレートガンバスターなどの出典）
- ・ 「仮面ライダーEVEーMASKED RIDER GAI A」
- ・ 「宇宙戦艦ヤマト」

欧州戦線編より

- ・ IS ヘインフィニット・ストラトス◇

以上です。現時点の登場キャラなど出典はこの作品群からです。（更新しました）

登場作品一覧（後書き）

欧州戦線に先立って更新しました。

第13話 「扶桑海の巴御前と次世代の魔法少女 その一」 (前書き)

「ストライクウィッチーズ スオムスいらん子中隊」のキャラとリカルなのはのティアナ・ランスターの出会いです。なのはたちとは別に行動している彼女について触れます。

第13話 「扶桑海の巴御前と次世代の魔法少女 その一」

フェイトがゲッターロボ號についての調査を始めた頃。別の場所
で歴代の仮面ライダー達と出会ったティアナ・ランスターは歴代ラ
イダー達の、敵、との戦いに身を投じていた。

、敵、の名はクライシス帝国。仮面ライダーBLACK RXと死闘
を演じる異次元からの侵略者で、ZXまでの10人を生み出した存
在とは趣を異にする悪の組織。

彼女は時間軸の異なるのはたちとは別に、地球で繰り広げられる
戦いを生き抜こうとしていた。

「……ムウン！ 変んん…身ッ！ ブイスリヤア！！」

「大・変・身！！」

「変……身ッ！！」

日本の守りに付いているRXの援軍として馳せ参じた、歴代の仮面
ライダー達はその歴戦の強さでクライシスやバダンの放つ攻撃を尽
く跳ね返していく。

そんな中、ティアナは戦いに身を投じた。元の世界の戦闘機人より
も遙かに装甲の厚い改造人間に対抗し得る手段は殆ど持ち合わせて
いない。かろうじて通じたのが彼女のデバイスの近接格闘戦用の
「クロスミラージュ」のダガーモードであった。彼女は主に仮面ラ
イダー達の支援を行い、時には怪人と真っ向から戦った。彼女は
ライダー達の力になりたいと、望んで戦いに身を投じ、元の世界の
戦いが幼稚園のお遊戯に思えるほどの激しい実戦を潜り抜けていく。
そんな中、彼女はRXに伝授される形で一つの技を身につけた。

方法はクロスミラージュの魔力刃を相手に突き刺し、そのままゼロ
距離で最大出力の砲撃を放つ。

RXの、リボルクラッシュ、にヒントを得たと後に彼女は同僚に語

る。名前は無いが、たとえ魔導士としては遥かに実力の高いのは達にも対抗しえる手段として帰還後の模擬戦で披露することになる。今回はそんな彼女が出会った一人の、ウィッチ、の物語。ティアナが空への憧れを強くした、ある出来事。

―西暦2199年の8月某日　平行世界に介入した艦隊から本国に向けてある通信が入る。

内容は「ティターンズ残党の行動によりネウロイに対抗できる、ウィッチ、の数が減っている。現役引退した元ウィッチをも投入せざるを得なくなったので、本国にあるタイムフロシキで若返らせる。人員はそちらに贈る」との通信が入った。

その第一陣が補給艦に乗って、この未来世界の日本にやって来た。その第一陣としてやって来たウィッチ達の中で今回の話の重要人物がいた。彼女は、穴拭智子、扶桑陸軍中尉。彼女は第507統合戦闘航空団「サイレント　ウィッチーズ」（前身は1939年に結成されたスオムス義勇独立飛行中隊―スオムスいらん子中隊―）の元隊長で、1937年の扶桑海事変で名を馳せたエース。ウィッチとしてあがりを迎え、一線を退いていたが、505統合戦闘航空団の壊滅により狼狽する連合軍が未来世界よりやって来た地球連邦軍に提案した、ウィッチ若返り作戦、の白羽の矢が建てられた。ちなみに容姿は黒髪長髪の美人。巫女装束を纏っている。

彼女は日本の連邦軍病院でタイムフロシキを被せられ、21歳を超えようとしていた彼女は最盛期である1937～1939年当時よ

り若干若い（14歳ほど）状態にまで若返った。

目覚めると体が10代の時の姿に戻っていたので、智子は狼狽し、医者に詰め寄った。

「先生！！これはどういう訳なんです！！？」

「まあ落ち着いたらどうかね、中尉」

「これが落ち着いていられるかあ！！起きたら体が10代の時に戻ってたなんて、奇天烈な事が……」

「これが連合軍が考えた作戦だ。そうそうウィッチを育成出来るわけではないし、慌てて実戦に出しても戦死者を出すだけだ。そこで君のような実戦経験のある 人材を現役復帰させる措置が取られた。我々の科学力は希望する人間をその人が望む年齢に若返らせる事を可能としている。その結果がその姿だよ。君の肉体年齢はミドルテインの状態に戻っている。肉体の時間そのものをレコードのように巻き戻したから魔力もその時間の量に戻るわけだ」

医者は智子の時代でもある物の表現を使って、説明する。智子は半信半疑で医者の説明を聞いていた。やがて説明が終わると連邦軍の軍人たちにある場所へ連れていかれた。

その場所は厚木基地。彼女は基地のハンガーに見慣れたものがあるのを認め、驚愕した。

それは彼女もよく見慣れたストライカーユニットと発進促進装置だった。

「こ、これは……」

「御覧のとおり、ストライカーユニットですよ」

「で、でも今の私はもうこれには……」

「大丈夫です。その状態ならシールドも問題なく貼れるはずです」

そう。ウィッチは宮藤芳佳の一族などの例外を除くと、20代に戦うウィッチの生命線であるシールドを貼れなくなるケースが大半を絞める。そのため彼女も 19〜20歳に入った頃に一線を退いた。彼女は果たして自分が姿通りの往年の実力を発揮できるのか不安だ

った。ストライカーユニットを纏い、起動させる。
、ブオオオオオオッ、と快調なエンジン音が響く。

（この感覚……間違いない！あの時と同じ……本当に体が扶桑海の頃に戻ってる！！）

力がみなぎるかのような感覚を覚えると連邦軍が元の世界から持ち込んだと思しき、ホ5 20？機関砲と扶桑刀「備前長船」を持ち、ハンガーから発進した。別に戦闘するわけではないが、体が、戻った、かどうか確かめるためにフル装備で発進したのだ。ちなみにストライカーユニットは44年当時最新鋭の四式戦闘 脚「疾風」である。

久しぶりに飛行を楽しむが、ギンギラギンに輝く太陽の暑さに思わず愚痴ってしまう、

「何なのよこの暑さ！！本当にここ未来の扶桑なの……！？」

そう。未来の日本は彼女が未だかつて遭遇したことのない猛暑に襲われていた。この日の気温は35度。この世界では21世紀より少しずつ進んだ温暖化はジオンのコロニー落としによってトドメを刺され、2199年の時点では北海道に到るまで半年以上が常夏の気候に変貌していた。20世紀前半からは想像できない 太陽の放つ紫外線の暑さが彼女を襲ったのである。高高度を飛べるジェット機はともかく、彼女のストライカーユニットは比較的低い高度を飛行していたので暑 さが襲ったのだ。

そんな彼女に基地の管制塔から通信が入る。

「中尉、電探に我々の、敵、が引っかかった。航空機では対処が難しい奴らだ。悪いが、そのまま迎撃に向かってくれ」

「敵？もしかしてネウロイですか？」

「いや違う。人間の手で空を飛べるように体を、改造、された怪人達の群れだ。漫画みたいな話だが、この時代では何でもありだ」

「分かりました！」

智子はそのままコースを変更。直ちに怪人たちの迎撃に向かった。

2号・V3・X・RXのライダー達とティアナは苦戦を強いられていた。バダン残党が繰り出した、過去の組織から選ばれ、蘇った、空飛ぶ怪人軍団、の空襲に逢っていた。

その時の怪人の陣容は以下のとおり

- ・元ショッカー所属 ギルガラス
- ・元ゲルショッカー所属 ガニコウモル
- ・元デストロン ツバサ軍団 火焰コンドル
- ・元ゴッド神話怪人軍団 鳥人イカルス
- ・元ゴッド悪人軍団 コウモリフランケン

これら怪人たちは過去にライダーに葬り去られたが、別個体を改造したりオリジナルを再度作り直したりして蘇らせた空飛ぶ怪人は複

数体で編隊を作り、数で勝 負に出た。一体一体は過去にライダーが倒した怪人なのでその能力は把握しているが、スカイライダーを除くライダーの弱点である、空中戦、に徹する作戦を取 られた上に、複数体で来られてはさしもの歴戦の勇士たちも追い込まれていく。

「クソッ！バダンのヤツら考えたな……」

「ええ。俺達が苦手な土壤に徹するとは奴らも馬鹿じゃないってことですね」

「しかしこのままじゃ廻られますよ」

「こうも波状攻撃で来られたんじゃロボライダーのボルティックシューターで狙う暇ありません。弾幕を張るくらいしか……」

「……タイガーロイドの大砲の技術を応用したな」

そう。今、ライダー達に空襲をかけているコウモリフランケン編隊の大砲の連射間隔は明らかに以前より遥かに短い。そうするとバダンの精鋭怪人であった「タイガーロイド」の次弾装填装置の技術を流用したのだろう。

今はティアナとロボライダーが対空砲火を上げているが、一撃では容易に落とせない。

「もらったあっ!!」

火焰コンドルの中でオリジナルの自我を持つ個体が後ろからロボライダーを捕まえる。

「何っ!？」

「おっと動くなロボライダー。バイオリライダーになろうとしたら俺の火焰が貴様を焼くぞ!!」

彼等はRXの各形態の弱点を把握していた。ロボライダーは強靱な装甲で熱に絶対的に強いがRXより動作が遅い。バイオリライダーは

俊敏だが熱には弱い。そこを突いたのだ。いくらゲル状になろうとも熱に弱いには変わりない。南光太郎は窮地に陥った。
他のライダーもロボライダーを人質に取られ、動きを止める。

「いい気味だなライダー共。さてロボライダーを俺のクチバシでバードンに襲われたウルトラ●ンタロウのようにしてくれるわ!!」
「卑怯な!!それにネタが古いぞ火焰コンドル!!今の子供は誰も知らん!!」

「ええい2号ライダー、卑怯もラッキョウもあるか!!ロボライダーよ死ねい!!」

―その時だった。空中50mほどにいた火焰コンドルに切れ込みが入り、やがて細切れになる。

ライダー達も怪人軍団も固まる。

細切れになった体のすきまから細切れにした張本人の姿が見えた。そこにいたのは巫女装束を身に纏い、プロペラ機の後部を足に着けたような機械を着けた一人のうら若き乙女だった。

「なんだお前は!!」

怪人の言葉に少女は答えた。

「私は扶桑陸軍中尉 穴拭智子」

彼女は淡々といった。大昔の姫武者「巴御前」を彷彿とさせるような凛々しさを感じさせるその姿にライダー達もティアナもただ見惚れていた。

第13話「扶桑海の巴御前と次世代の魔法少女 その一」(後書き)

スオムスいらん子中隊代表の穴拭智子VS仮面ライダーの怪人軍団。
有り得ない組み合わせでの対決です。扶桑海事変の年数を訂正しました。

第14話 「扶桑海の巴御前と次世代の魔法少女 その二」 (前書き)

前回の続きです。

第14話 「扶桑海の巴御前と次世代の魔法少女 その二」

連邦軍の要請に従って、怪人軍団との戦闘に入った「スオムスいらん子中隊」の元隊長の穴拭智子。彼女はかつて、扶桑海の巴御前、と謳われたその腕を久しぶりに（第一線にっていた末期からはおよそ数年ぶりとなる）奮える事に喜びを感じていた。

ウィッチとして、指揮官として経験を積んだ状態で肉体が再び最盛期の状態に戻ったとはなんとも奇妙だけでも受け入れることにした。元部下の迫水ハルカが聞いたら狂喜乱舞しそうなのは目に見えている。

（あの子は絶対に『智子中尉』あの時の姿に戻ったんですってえ！
』とか来そう……）

長年の間にそういう事を考える余裕も生じていた事に智子はかすかな笑みを浮かべると

本格的に怪人達との交戦に入った。

―それは彼女にとって久しぶりの実戦だった。敵はネウロイとはまったく違う、鳥などの特性を機械の体にする事で得た、元々は同じ人間。

（ネウロイに通じた戦法がコイツらに通じないわけない！！）
こう息巻くと魔力によって強化された先祖伝来の扶桑刀「備前長船」を構え、猛然と空中戦に臨んだ。

ティアナは呆然としていたが、相棒の、クロスミラージュ、から智子が手に持っていた刀から魔力反応があることを知らされた。

、The magic reaction can be perceived from that sword and the machine、

「えっ……？それじゃあの子（智子の外見年齢は14歳ほどになっていたためにティアナは、子供、と誤認した）は魔道士だっていうの？」

それは正確には合っているようであっていない。ウィッチは時空管理局の魔道士達と違い、何時までもその力を奮えるわけではなく、大抵は10代の内しか現役にいられない（例外はあるが）し、固有魔法を持つ者以外は魔力を直接攻撃に使わない（弾丸や刀などを媒介にする）点でも異なる。

「どういう事なの……？」

ティアナはただそれだけしか言うことが出来なかった。魔力を感じるということは魔力を扱う人間……。それも管理局の空戦魔道士とは明らかに異種の魔法としか考えようが無かった。

そんなティアナの耳に智子が放つホ5 20？機関砲の銃撃音が届く。

、ズドドド、と明らかに質量兵器特有の発射音としか思えない音が響き渡り、怪人軍団の翼に穴が開いていき、失速して高度を落とす

者が出始める。

「何やってんのそこ！！攻撃しなさい！！」

智子の叱責に我に返ったライダー達は智子を助けるべく、攻撃を開始した。

最初に先陣を切ったのは仮面ライダーX。脚部のハイドロジェットを使って空高くジャンプし、空中で？の文字を描きながら急降下する。翼に穴を穿たれ、失速しながら降下する怪人には逃れる術は無い。

「?!?! 必殺キィーックウッ!!」

―これぞかつてゴッドの秘密警察第一室長「アポロガイスト」にとどめを刺した必殺技「?必殺キック」である。見かけは通常のキックと同じだが、威力を強化しているため、通常時を上回る破壊力を持つ。それを表すように？のピンと伸ばした右足は怪人の装甲を薄紙のように貫き、そのまま吹き飛ばす。

次いで行動を起こしたのはV3。

「?3イきりもみキィーック!!」

きりもみ回転を加えた飛び蹴り一発で相手の装甲を貫き、

「トウ!!」

さらには迫いうちのチョップで相手を両断してみせる。

仮面ライダーの中でも古株に位置し、1号と2号の不在の際にはリ

ーダシップを取る事が多いのでこれくらいは当然と言える。思わぬ援軍の登場により態勢を立て直す事に成功したライダー達。RXもロボライダーから通常形態に戻り、反撃を開始する。こうなると形勢は完全に逆転したと言っているだろう。

「よし……これでよし」

敵の翼を機関砲で狙い撃って、地上の、味方、にも攻撃できる高度にまで降下させる。地上の味方を支援するのも怠らない。その点を中心でているのが智子をエースたらしめている面だ。

「リボルケイン！！」

その甲斐もあって、RXの必殺武器「リボルケイン」が失速し、墜落する鳥人イカルの脇腹を貫く。彼最大の必殺技であるこの攻撃はどんな敵の装甲であろうと貫ける。そしてお決まりのポーズを決める。

ライダー達が反撃を開始した様子を見届けると、

「未来にはなんとも変わった奴がいるわね」と独りごち、なおも空戦を続ける。

「、疾風、は快調……まだまだ行ける！！」

彼女はかつての愛機であったキ44「鍾馗」の直系後継機であるキ84「疾風」の機動力やホ5の大火力に惚れつつ、突撃を敢行する。

ライダーのサポートに徹しつつ、智子の空戦の様子を見ていたティアナはその空戦機動の華麗さに目を奪われた。まるで敵の攻撃を始めから分かっていたかのように最小の動きで攻撃を避けていく。

「あの子……スゴイ。あれだけの攻撃に被弾しないなんて」

そう。ティアナの知る由もないが、智子は1940年代前半における、扶桑（日本）陸軍最高レベルのエースで、その空戦の腕前は管理局で言えば教導隊所属の空戦魔道士にも相当する。

（もしかしたらフェイト隊長やなのはさんよりも……？）

管理局最高レベルのエース達の機動を見慣れたティアナにそう思わせるほどに智子とストライカーユニット「4式戦闘脚 疾風」は空中に綺麗な飛行機雲を描きながら洗練された空中戦闘機動を見せていた。敵の数も半数に減っている。戦局は逆転しつつある。

「このままでは全滅するぞ！各員、離脱だ」

コウモリフランケンの一体が不利を悟り、離脱するように促す。そして残りの怪人達も撤退を始めていく。追撃を行なおうとする智子だったが、軍から、深追いは禁物、だと戒められて渋々と従う。そして地上の味方の無事を確かめるために地面に降り立つ。

「大丈夫でしたか？」

先ほどとは打って変わって敬語を使って話しかける。さすがに軍人なだけあって、TPOを弁えている。

「おかげで助かった。君は？」

いの一番に智子のもとに来たのは2号ライダー、すなわち一文字隼人。彼女の姿を見てすぐに何であるかを悟ったようだ。変身を解除した上で話しかける。

「申し遅れました。私は扶桑陸軍中尉、穴拭智子といいます」

「扶桑陸軍？……そういえば近頃、軍内の資料で、ウィッチ、とか言う単語がよく出ると聞いていたが、君がそうか」

「ウィッチのことを知っているんですか？」

「これでも本職はジャーナリスト方面でね……カメラマンだけど。まあある程度は」

仮面ライダー2号こと、一文字隼人は本職がカメラマンなので、各方面に知り合いがいた。それはこの時代でも変わっておらず、ウィッチの事も友人の軍人から聞き出していた。なのでウィッチのことも理解できたのだ。

智子もまさか初対面にも関わらず、ウィッチの事をすぐに理解できる柔軟性をもった人間がいるとは、と関心する素振りを見せる。

続いてやってきたのはティアナ。智子の事が気になったのか、駆け足である。

「あなたは？軍人には見えないけど」

智子の問いにティアナは「ティアナ・ランスター。時空管理局の魔道士で、2等陸士。よろしく」と自己紹介した。

「私は穴拭智子。扶桑陸軍中尉。よろしく」

智子も自己紹介し返す。智子の、中尉、という言葉にティアナは反

射的に、「し、失礼しました!」と慌てて敬礼する。

「軍隊の常識では兵卒から見れば、中尉、は雲の上の存在」ということを改めて自覚した智子は陸軍式の敬礼をし返すと、「まあ、そう硬くならない。私もあなたとそう年齢は変わらないし、智子でいいわ」（実年齢でなく、外見年齢だが）そう答えてティアナの緊張をほぐしてやる。さすがにこういう事は手馴れている。ティアナも緊張が溶けて落ち着いたのか、親しげに会話を続ける。

「ちょっと待ってティアナ。時空管理局って言ったわよね？」

「そうだけど？」

「説明してくれる？　なんか頭がこんがらがりそう……」

互いにどこがどうなっているのか、理解には時間がかかりそうだと溜息をつく2人。これ以降、智子とティアナは所属組織と階級、時代の差を乗り越えて、親しく付き合う事になる……。これが、凡人、（彼女に才能はあるのだが、周りに才能ある人材が多すぎたために自分に自信が持てないの意味）と自分を卑下していた魔法少女と扶桑陸軍きってのエースと言われたウィッチの接触であった。

第14話「扶桑海の巴御前と次世代の魔法少女 その二」(後書き)

穴拭智子とティアナの友情の始まり。スバルにはライバルの出現かも(笑)

次回はまたフェイトの視点に戻ります。

特別編……らしきもののその一（前書き）

ツツコミどころ満載な特別編です。風邪を引く前に書き終えていたものの一つです。舞台はガンダムSEEDの終盤です。

特別編……らしきもののその一

特別編

これは連邦軍の一方面軍が要塞ごと遭遇した、ある不思議な出来事。彼等の行動がある世界の運命を変えてしまった。

これから語られるのはその世界では決して語られない出来事

—C・E71（デスティニーガンダムらの世界と同じ時空とは限らないが、同一世界かもしれない）
コズミック・イラ

遺伝子操作を受けた人類と、そうでない人々が混在する世界、コズミック・イラ、。この世界は民族紛争や宗教紛争が激化し、なおかつ石油資源の枯渇や環境汚染の深刻化、世界不況が起こり、世界各地で代表勢力による分割が行われ、世界各地でブロック化が起った世界。その結果、5つの大国が生まれ、その大国の主導で宇宙移民が促進された。

ある時、この世界における重要な出来事が起こった。それはこの世界で、天才、として名を馳せていたある一人の男の告白であった、その男の名を「ジョージ・グレン」。彼は理工学やスポーツなど、様々な分野で成功を収め、万能とも称されていた。

彼は木星探査に思ったときに自分が通常の人間よりも能力を遺伝子レベルで強化された人間で有ることを告白。遺伝子強化の方法を地球圏に与えた。これがきっかけで、コーディネーター、と呼ばれる人種が生まれた。ただし問題点も多くあった。やがて人口が増加した、遺伝子操作がなされた人類、コーディネーター、は国家を作った、‘ナチュラル’、と呼び見下している。

それが異世界で言えば、スペースノイドとアースノイドのように対立が生まれた。軍備の面では人型機動兵器を主力としているが、個人ブレイが目立ち、軍隊として未熟な側面を持つ。さらに部隊レベルでの独断専行の虐殺も実行する輩も一部存在するなど規律の徹底が成されていない。それが能力を過信した故がことなのか。地球連邦宇宙軍宇宙要塞ルナツーと駐留していた2個連合艦隊はこの未知の世界に迷い込んでしまったのである。（原因は工廠で開発中の試作型過給器装備の波動エンジンの暴走）

「何？ ナチュラル共の艦隊共が我らの邪魔をしているだど？ 放っておけ。奴らの作った兵器など恐れるに足りん」

「しかし議長閣下…」

議長と呼ばれた壮年の男、パトリック・ザラ、は遺伝子操作がなされた人間―彼らの言葉で言えば「コーディネーター」と呼ぶべき人種の中でもタカ派の急先鋒として知られる人間である。彼等は異世界での戦争が終盤に差し掛かる時期のため、その頃、既に歪んだ選民思想に染まっていた彼にとって、たとえ異世界の住民であろうと地球の人間は排除すべき存在としか映っていなかった。

「諄い！ なら殲滅しろ。場合によっては、アレ、を投入する」

「そうだ。今後の戦況次第で投入するか否かを決める。準備を進め

させておけ」

「ハ、ハッ！」

「ところで、奴らの行方はつかめたのか？」

「基地に逃げこむ姿が確認されました。どうやら政府や軍に働きかけるつもりでしょう」

「そうか。御苦労、下がれ」

「ハッ」

ザフト内部では自分達の出張こそが正義と疑わないタカ派が幅を効かせつつある。

彼等の行動に疑念を持つものも少なくないが、この現状では動きが取れなかった。頼りのハト派は支柱であった前議長が公然と処刑されてから、すっかり鳴りを潜めてしまっている。唯一、前議長の娘が最新鋭艦を奪取して元地球連合軍の軍艦「アークエンジェル」、中立国籍の「クサナギ」と協力してゲリラ的な抵抗を行っているが、情勢は芳しくない。

（頼む…上手くいってくれよ…この計画が最後の望みだ…）

副官は議長室を出ると一目がない場所まで歩くと特殊な改造がなされた電話でどこかに連絡を取った。

「ああ、…：…そうだ。…と言えば分かる」

彼は何をなさそうとしているのか。それはまだ明らかにされるべきではない。いずれ日の目を見る事になる時まで。

「彼等をよろしくお願いいたします。情報はいつもの場所で受け渡します」

「いいのかね。君ほどの立場の者が」

「地位や名誉など、とっくの昔にかなぐり捨てました。国民は平和を望んでいるのです。彼は間違ったことをやろうとしている。それを止めるのが私の役目です」

ザフト軍内部でも現議長に疑問を持つ人間は多く存在している。彼、もまたその一人であり、ザフトの良心はまだ封殺はされていない事を示していた。

「彼等、が護衛しているので暗殺の危険はないと思うが
：君も気をつけてくれ」

受話器越しに聞こえる割と若い男性の声。そしてザフトの未来を憂
慮する一人の将校。

運命の糸は複雑に絡み合いつつある。そしてそれが彼等の未来に
どう作用していくのか。

―同時刻 地球連邦宇宙軍拠点「ルナツー」

コズミック・イラに転移してしまったルナツーは連邦宇宙軍の防衛
拠点として運用されている宇宙要塞である。ここに、この世界の住
民、の船がドックに入っていた。一つは大西洋連邦軍と言う組織に
属していた強襲機動特装艦「アークエンジェル」。さらにオーブと
称する中立国の「クサナギ」、3つ目の赤い彗星も真っ青の派手な
塗装を施されたのがザフトからの脱走艦「エターナル」である。こ
の三隻はいたるところに損傷を受けており、修理を担当する工廠の
造船部の人間を悩ました。連邦の規格に合わないので、装甲板をコ
ピーし、それを改めて生産する必要が生じ、手間がかかるのだ。

3隻の艦載モビルスーツについては、驚きの連続であった。何とほ
とんどがバッテリー駆動で、核動力なのは一部のワンオフで造られ
たガンダムタイプのみだったのである。

ルナツーにおいて今回の件に巻き込まれた、MSの修理を担当するア
ナハイム・エレクトロニクス社のエンジニア達は「何でこれだけの

機体がバッテリーで動くんだ!？」と誰もがびっくり仰天。双方の技術の違いが示された例と言えた。情報収集のための、保護、とは言え、思わぬ成果を得たのだ。

3隻に搭載されていた機体の内、ガンダム系と思わしき高性能機は連邦軍による研究とミノフスキー粒子散布時の戦闘に適応させるための改装に回されている。これらの機体の一部には原子炉が搭載されており、パイロット達は動力源に関するデータの提供を拒んだのだが、この要塞や駐留艦隊の機体は皆、原子炉よりもさらに強力な核融合反応炉か、それ以上の代物で駆動すると知らされると皆が啞然としたそうである。量産機については、艦隊の搭載機では如何せん、小型高性能化が進んだ世界のMSと比べると性能不足が明らかであったのに加えて、ルナツーでの弾薬補給が効かないという観点から連邦軍の制式採用機が工廠から提供された。(種類はジャベリン。彼等を味方に引き込みたい政治的な思惑もあって、軍は敢えて最新鋭に属する機体を提供した。ジャンク屋からの非正規ルートで彼等本来の弾薬を補給するのはあまりにも危険な上に、足をつけられる。それにザフトと連合の高性能機に対抗するには普及量産機では難しいため)

「しかしまあ……違う世界って言っても考える事は同じなんだな」ルナツーの格納庫に配備されている「RGM-122 ジャベリン」の小柄な機体を仰ぎ見る、連邦軍とは違う軍服を着込むこの将校の名は「ムウ・ラ・フラガ」。アークエンジェル乗員の一人である。「でも凄いですよムウさん。この機体、小さいのにストライク以上のパワーを持ってます。ところでこのショットランサーって、実戦で使えるのかな？」

ジャベリンのコックピットにいるこの少年兵は「キラ・ヤマト」。聞く話に居ればこの世界における初のガンダムパイロットだとの事。彼も異世界のMSに興味があるようである。

「OSの調整無しに誰でも動かせる上に、なおかつ整備性はいい……

「、すげえもんだな」

フラガやキラ達パイロットはルナツーでミノフスキー粒子散布下での訓練を受けている最中なのだが、ある程度の基礎があるとはいえ、操縦システムの違いなどで戸惑いがあるのか、意外とてこずっているらしい。彼等の本来の愛機はミノフスキー粒子散布下での戦闘に耐えうるように改装中だ。どうしても出撃しなくてはならない時はここの機体を借りなくてはならないだろう。はたしてこの艦隊の言う、ミノフスキー粒子散布下でも戦闘に自分達が適応できるのだろうか。ムウは前途多難な生活に頭を悩めつつも、自身もジャベリンの隣にあるジェガンのコックピットのハッチを開け、機体を起動させた。

このルナツーでの彼らの処遇は取り決められていないが、首脳陣には地球連邦軍の編成についてのデータベースが一部配布されていた。驚きなのは恒星間航行は当たり前、長距離移民船団も多く銀河に散らばっている事、兵器の各種装備が自分達の世界のそれよりおよそ数世代は先んじている技術で構成されているといった技術面、感心した面としてはキラの愛機「フリーダム」や「ストライク」の様なタイプが代々、軍の象徴として扱われている事である。世界は違っても人の考える事は同じであるらしい。幸いエネルギー以外は自給自足できるだけの設備は備えているそうなので、元の世界に戻れない場合でもMS用のエネルギーを確保する必要があるが、それ以外は大丈夫らしい。

彼等は連邦軍の量産機を使った実戦演習に参加するべく、発進していった。

特別編……らしきもののその一（後書き）

以上です。風邪の経過が良好なのでどうにか書きためたものは出せた次第です。

第15話「ジークハイル!!」(前書き)

仮面ライダーの裏設定に、ショッカー以下の歴代暗黒組織の起源はナチスにある、との事なので、HELLSINGの最後の大隊と絡めました。

「よろしい。ならば戦争だ」
好きな台詞です。

第15話「ジークハイル!!」

「ジークハイル（祖国万歳）!!」

南米のとある地で、かつてのナチスの軍服を着込んだ男達の前でナチス式敬礼を受ける、一人の眼鏡をかけた肥満体の男。彼こそがこの過去より甦りし亡者達の統率者。「少佐」、「大隊指揮官」などの役職を持つ

元ナチス武装親衛隊将校。彼らこそ、ナチス最後の敗残の戦闘団。カンブグルッペ。通称「最後の大隊」。

―戦時中の「総統特秘666号」に基づいて作られ、今では少佐の思うがままに動く軍隊。ナチスの野望は潰えたわけではなかったのである。

彼はただ不気味に敬礼を返す。そして笑みを浮かべる。機は熟したのだ。自らの欲望を満たすために、そしてあの、最強のバケモノ、との因縁の再開を果たすために、そして大英帝国を戦火に焼くために。―アシカは陸へ上がる。かつて祖国が成し得なかった事の成就のために―

何時までも「祖国万歳」が響き渡った。そして今や禁忌となった旗「ハーケンクロイツ」が翻る……。これぞWW?最後の置き土産。一人の独裁者の作り出した狂気の成れの果て。

「楽しそうですね代行」

一人の科学者らしき白衣を来た男が、彼に話しかける。

「ああ楽しいとても楽しい闘争だよ 君考えても見たまえ きつと血みどろの闘争になるに違いない 素敵だろ？ 闘争 闘争だよ」
彼は嬉しそうに答えた。まるで闘争を心待ちにしているかのように。この男の狂気は100年単位で熟成されてきた。闘争に自らの全てを捧げた一人の男と敗残兵達の狂想曲が奏でられようとしている。――
「最後の大隊」――ラスト・バタリオン――はゆっくりと、戦争の狂気、を蓄えながら静かにその胎動の時を待っていた。

――彼等とは別の地下室

「ジークハイル（祖国万歳）――！！」
この時代においてもナチスドイツの残党は南米で力を蓄えていた。その一端がかつて、シヨツカー、よ呼ばれた組織であり、少佐、の一派が吸血鬼やヴェアヴォルフ（人狼）を従えているのに対し、最大勢力のバダン、サイボーグ、を突き進めたわけである。その成果が改造人間であり、歴代の仮面ライダーなのだ。

「御苦労。少佐、達の成果はどうだ？」

「順調のようですが、よろしいのですか、大使、？」

「良い。あの戦争狂は大いに使える。健闘を祈ろうではないか」

大使と呼ばれた軍服を着込んだ壮年の男は不気味な表情で言った。

「それと大使、虫けら、共：仮面ライダーどもに対する対応はいかなされるのですか？」

「奴らに造らせた、無限の欲望、の成果を回す。我らに比べれば未

成熟だが、旧型の戦闘員よりは使える。連絡しろ」

「ハッ！」

男が去った部屋で大使は彼等の中で彼よりも上位に位置する地位の人物へ定時連絡を行った。

「首領、」

「…大使か。首尾はどうだ」

「順調です」

「アレ、はまだなのか？」

「ハッ、時空破断システムですな。今しばらくお待ちを」

「そうか。してゴルゴムの世紀王――11人目の虫けらの行方は掴めたのか？」

「目下調査中です」

「、賢者の石、…か。我としても気になる物だが…計画は順調か」
「順調です」

「そうか。準備出来次第、例の作戦を実行に移す」

彼は仮面ライダーBLACK RXの存在を掴んでいるようである。さらにRXの体に埋め込まれている石を欲しているような口ぶりだ。そもそもはナチスの残党の一派であるバダン。彼等は何をなそうとしているのか。

―フェイトはゲッターロボ號の事について早乙女博士から話を聞き、ますます疑問を深めた。

完成すらしていないはずの機体がなのはを襲った。どういう事なのか？早乙女博士も頭を抱えるほどの

難問。さらに驚かれる事実を知らされたのは早乙女博士のもとを、彼と交流があった、青年科学者、

結城丈二、すわなち、仮面ライダー4号、ライダーマンが訪ねて来た時だった。

（彼は他のライダーと異なりほぼ生身の人間であるが、コールドスリープの効果により往年の容姿を保っていた）

早乙女博士は調査の助けになればと、結城丈二を紹介してくれ、彼と話をする機会をフェイトに与えた。そこで彼女は、千年王国の野望を抱いた国の狂気を知らされた。ゲッターロボ號も彼等と関係あるかも知れないとの推測もした。

「彼等の起源から話そう。かつて、千年王国の野望を抱いて世界に戦いを挑んだ国家があった。彼等、組織はその生き残りだ」

「まさかその国って……！」

「ヒトラードイツ、ナチス第3帝国」

「な、ナチス！？ そんな……第3帝国は第二次世界大戦で壊滅したはずじゃッ！？」

フェイトは悪寒が走る感覚を覚えた。その国は地球の歴史上で、世界大戦を引き起こした元凶であり、アドルフ・ヒトラーという男の作りだした、狂気、であった。小学校の授業でも習った、世界を

戦いに導いた、存在が何故……。とフェイトは狼狽してしまう。
結城丈二はフェイトを落ち着けながら二の句を告げる。

「敗北したと言っても、全部が潰れたわけじゃない。一部の軍人達が敗戦後に親ナチだった南米に地域に逃れていった。奴らはその中でも奴らは特別好戦的な3軍と武装親衛隊の部隊がその母体となっている。ナチスがオカルトじみた研究を行っていたのは有名な話だが、その中でいくつかの研究目的に振り分けられていった。ちなみに当時の連合軍側の機密文書に奴らの当時の名称がこう記されている。『最後の大隊』（ラスト・バタリオン）」と

「……ッ!？」

「その成果で生まれたのが、改造人間。彼等に改造された改造人間の中で唯一人類のために戦ったのが、仮面ライダー、だよ。」

「仮面ライダー……?」

「結城さんの話は嘘みたいだけど、新聞記事の中にも仮面ライダーという単語は出てきていた……」

フェイトはここで仮面ライダーや組織の存在を初めて知った。この時の彼女は知る由もない。まさか彼等に後々に自分の部下となる少女が深く関わっていた事、そして戦いに身を投じていた事を。

「ミッドチルダでも実用化が出来ていないサイボーグをどうしてこの世界が……!？」

フェイトは頭の中でその疑問がグルグルと回るのを自覚し、改めて結城から事情をもっと聞くことにした。

「ナチスが何かを研究していたのは有名であるが、この世界では成功したと言うことだろう。」

「2000年もナチの生き残りが活動してるなんて…信じられませんよ」

「だがこれは事実だ。現に歴代組織の大幹部には元ドイツ軍将校が何人か確認されている」

ナチの生き残りが存在し、未だに世界制覇を目論んでいるなど到底信じ難い。しかしこうして、生き証人がいる以上、結城丈二の話を信じるを得なかった。

「おい洋、どうしたんだその子」

仮面ライダー8号、スカイライダーこと筑波洋は活動を再開し、現在行動を共にしている城茂から背中におんぶしている一人の少女の事を聞かれ、こう返した。

「パトロール中に見つけたんです。行き倒れみたいで……」

背中に背負っている人物の風貌はハチマキを巻いて、ボーイッシュな風貌をしているが、一応女性らしい。見たところ年齢は15、

6だろうか。

「道路に倒れていたのを連れてきたんです。かなり重傷だったんで」

彼等は知る由もないが、その少女はティアナ・ランスターが元の世界に残してきたはずの同僚であり、親友であった人物。そしてなのは達にとっては、後々に自分たちの部下として関わるはずの人物。スバルがどうしてもここにいるのかの説明をしなければならないだろう。

そもそも、新暦70年代中盤のミッドチルダは大規模なテロ事件に見舞われていた。

なのは達はこの時期には長年の戦友であり、ヴィータの主の「八神はやて」に招聘される形で、はやてが設立した「機動六課」の分隊長として活動していた。ティアナが旧時代の遺跡の調査中に行方不明となった事は彼女の親友であったスバル、そして直接の上司であり、二人を育てる立場にいた、なのはにとってショッキングな出来事であった。

そんな中、スバルは首都防衛戦のさなか、倒され、昏倒した状態の姉を目の当たりにし、怒りを爆発させて敵に立ち向かった。しかしながら敵に決定打を与えることは出来ず、痛み分けになってしまった。さらにその状態のまま、建物の崩落と爆発の真っ只中に巻き込まれた。意識を失う直前に発していた言葉は、目の前で敵にさらわれた実の姉を求める悲痛な泣き声だった。デバイスもBJも

破損していたために防御がままならず、そのまま爆発と崩落に巻き込まれた。

「ギン……姉……ごめ……ん」

これが記録上、スバルが最後に発した言葉となった。これが彼女が転移してしまった経緯である。これは奇しくもかつてのなのはと同じ経緯だ。

連絡を受けたなのは必死に助けに行こうとしたが、彼女が到着した頃にはスバルがいたであろう場所は完全に瓦礫で塞がられており、なのははお救出を強行しようとしたが、落盤の危険があつて、ミイラ取りがミイラになると他の局員から止められ、泣く泣く救出を断念した。

こうしてスバルはティアナに続いて、生死不明として処理される事となったが、なのはは不思議とスバルが助かっているような気がしてならなかった。子供時代に彼女もほぼ同じような経緯の出来事を味わい、生還した記憶があるからだ。

（なのはやフェイトが子供時代に体験した出来事はこの時代の管理局員の間で『奇跡の生還』として知られているが、詳細は不明とされている。）

彼女の管理局の制服の襟には、小さいが、管理局の階級章とは明らかに異なる組織のそれとしか思えない、三等空尉の階級章らしきプレートが付けられていた。これが何を意味するのか？関係者の間でも物議を醸すものになっていた。（なのは本人はこの事に関して、雑誌のインタビュー記事でも何も語っていないので有耶無耶になっている。）

—まさかあの時の私みたいに……？

なのは（19歳）は相次ぐ部下の行方不明に動揺を見せつつも、かつて自分が陥った状況に余りにも似ていることに奇妙な感覚を覚えずにはいらなかった。その管理局の制服の襟には

地球連邦軍少尉の階級章が燦然と輝いていた。と、言うことはなのは結局連邦軍を退役せずにミッドチルダに帰還したのだろう。と、言うことは、なのは「管理局の一等空尉であり、地球連邦軍少尉である」複雑な肩書きを持ったまま思春期を過ごした事になる。11歳の時の戦いが彼女のその後の運命を少なからずねじ曲げてしまったのである。

第15話「ジークハイル!!」 (後書き)

フェイトは歴代の仮面ライダーやショッカーなどの歴代暗黒組織の事を知り、呆然とします。彼女が追う対象がまた増えます。

第16話「私はこんなもんじゃない！」（前書き）

一日で更新です。早い気もしますが、思い立ったら…ということなので……。

第16話「私はこんなもんじゃない！」

ードラえもん達が一端戻ってくるより少しだけ前の事。

「あらドラミちゃん。久しぶり」

「お久しぶりです」

来訪者はドラえもんの実妹「ドラミ」であった。黄色を基調としたカラーリングと特徴的なリボン状の耳を持つロボットである。彼女は兄たちに何かが起こった場合に鳴る「虫のしらせアラーム」が鳴り響き、何事かと駆けつけたのだが……。

玉子と取り止めない会話をし終えた後、タイムテレビを取り出した。

「お兄ちゃんたちはいつ頃いなくなっただんですか？」

「そうねえ……2時間くらい前かしら」

兄たちがいなくなった時間を玉子から聞き出したドラミはタイムテレビを取り出し、

その時間の様子を確認する。

タイムテレビには5人が意気往々とタイムマシンに乗り込む様子がその時の音声と共に映し出されていた。

会話から分るのは兄たちが向かった時代は2125年よりもさらに未来—22世紀も世紀末を迎えているであろう2199年である事が分かった。

「なんで未来に行ったのかしら？もう少し前を見てみないと」

タイムマシンに乗り込むまでに至るドラえもんやのび太達の会話が再生される。

『「原因はわからないの？ほら、前に西遊記の主役になって妖怪達と戦った時みたいにか」

のび太が言っているのはおそらく、過去に一度、妖が人間を支配し

た歴史に改変されたのを元に修正した事だろう。しかし今回はそう単純ではない。

「あの時みたいにな代が特定できればいいんだけど、今回はどの年代でこうなったかまったくわからない。この時代に行けばわかると思うんだけど…」

「西暦2199年、とんでもない未来だけど…行けば何かがわかるかも知れない」

タイムマシンに乗り込んで向かった先―2199年に何があるのか。ドラミはさらに調べた。その課程で彼女は驚くべき光景を目にした。

それは2199年より数年前の時点の映像であった。彼女は知る由もないが、この時代は第2次ネオ・ジオン戦争の真っ只中であり、彼女はその内の5thルナ攻防戦を目にしたのである。巨大ロボットが繰り広げる宇宙戦争にドラミはしばし言葉を失った。

『なんでこんなものを地球に落とす！！これでは地球が寒くなって人が住めなくなる！核の冬が来るぞッ……』

『地球に残った者は自分たちの事しか考えていない！だから抹殺すると宣言したッ！』

2人の男性の言い合いのような会話が響く。どうやら巨大ロボットは有人型のようなのだが……自分たちの時代からはとも想像のつかない光景である。ロボットが軍事利用されているなど……それに自分たちのようではなく、純粹に、兵器として扱われているとはどういう事だろうかと疑問が浮かぶ。

そしてタイムテレビは2機のロボットの戦いを写し続ける。光の剣やビームを発射する銃を持ち、尚且つ巨体からは想像のつかないよ

うな俊敏さを発揮する。

『人が人に罰を与えるなど……!!』

『私、シャア・アズナブルが粛清しようと言うのだよ、アムロ!!』

『エゴだよそれは!!』

『地球が持たん時が来ているのだ!!』

ドラミはこれらの光景に息を呑む。あまりにも自分たちの時代とかけ離れている光景。

ロボットを用いた大戦争が現実となっている。そして兄たちはそんな戦乱の時代に自ら向かった。ドラミは信じがたい気持ちでダイアルを操作し、2199年の世界の様子を確かめる。そこで彼女はさらにとんでもない物を目にした。

「えええええっ!!」

彼女が目にしたのは生身の人間が雷級の電撃（美琴がちょうど超電磁砲を撃った瞬間）を放った場面。未来の世界はいったいどうなってしまったというのか。頭がどうにかなりそうになる。

彼女もまた、未来世界の変わり様に驚いていた。一体何が原因でこのような未来が現出したのだろうか。

どこで歴史がどうなったのか。タイムテレビを見ながらドラミはしばし呆然としていた。

ーさて、こちらはなのは。

彼女は修理（と、言うよりは魔改造）を終えたレイジングハート・エクセリオンと共に空軍の招聘を受けて対人型兵器の空戦演習を受けていた。今日はMSが相手だ。

相手はサブフライトシステムに載ったジェガンやジャベリン、Z系統の可変機。

彼女は空戦のカンを取り戻そうと必死だった。フェイトやヴィータに守られてばかりではダメだと意気込んでこの演習に臨んだ。モビルスーツの放つ模擬弾を避けつつチャンスを伺う。

「今だ！！デイベイイイン：バスターアアッ！！」

得意とする砲撃魔法を放つ。遠距離の狙撃はレイジングハートが照準を補正してくれる。闇の書事件の際にヴィータを狙撃した時のようにデイベインバスターの桜色の光は真っ直ぐにRGM-122「ジャベリン」の編隊に向かって行く。

『甘くみるなよお嬢ちゃん。このジャベリンのパワーを』

ジャベリンを駆る兵士の声が外部スピーカーから響く。すると3機編隊のジャベリンは3つのビームシールドを連結させ、展開する。そしてデイベインバスターの砲撃がビームシールドにぶつかる。

、バシユ、とエネルギーがぶつかり合う音がしたと思えば、デイベ

インバスターの砲撃はビームシールドを穿けずにかき消される。

「嘘おっ！？あゝん、ズルイですよおゝその光の盾！！」

「これがビームシールドだ。ガンダムF90以降の小型MSの標準装備で、普通のライフル程度なら防げるんだよ」

そう言われてなのは改めてジャベリンを見てみる。最新鋭らしい小型機で、青を基調としたカラーリング、vガンダムなどと比べると随分小さく感じるボディなど、精悍さを思わせる。

「ザクとかゲルググなら届いたんだけどなあ」

「それ十分怖いから！超高スチールを撃ちぬく人間ってどんだけだよ……」

なのはの魔力による攻撃は完治後の計測の結果、一年戦争当時の第一世代MSならRXシリーズを除く連邦MSや大抵のジオン系MSをほぼ一撃で戦闘不能にできるという、恐るべきポテンシャルを見せた。

しかし装甲が硬くなり、対ビームコーティングが進歩する第二世代以降のMSには貫通力不足であるとの事だ。彼女が目標として目指しているのは、vガンダムのビームライフルやダブルゼータのハイメガキャノンレベルの砲撃らしい。

「さて、今度はこっちの番だ」

ジャベリンの背中にある槍のようなものがせり出し、ドリルのように螺旋を描いて発射される。

これがかつて、クロスボーン・バンガードが用いて連邦宇宙軍を震撼させたランス「ショットランサー」である。レールガンの原理で打ち出されたランスがなのはを襲った。

「ふ、ふえっ!? なんなのあれ!?!」

、It settles down and it master
s it. That is a spear、(落ち着いてくだ
さいマスター。あれは槍です。)

「や、槍!? 槍って音速で飛んでくるもののなの?」

レイジングハートの指摘で落ち着きを取り戻したなのはひとまず
防御魔法のワイドエリアプロテクションを展開。ジャベリンのショ
ットランサーを待ち受ける。

、ギャリリ、……とショットランサーとなのはの防御魔法がぶつか
り合う。ドリルのごとく回転するショットランサーに思わず焦りを
感じる。防御を削られるのだ。ガンダリウム合金レベルの装甲にも
痛打を与えられる威力の武装を防いでいるだけでも賞賛に値するが。

ショットランサーの爆風から身を守ったなのはこの世界の科学力
の高さ、そして兵器を使いこなす巧みさに舌を巻く。(後に彼女が
魔導武装の開発に関わる時に注文をつけるようになるが、それは別
の話)

、They considerably know the th
eory of the fight. It is while
mastering takes advantage tho
ugh it does by……、(彼等は相当に戦いの
セオリーを心得ています。……ですが、マスターの付け入る隙はあ
ります)

「ありがとう、レイジングハート。私だって教導隊を目指してるん
だもん……こんなことで負けられない!!」

―その様子を見ていたヴィータはなのはが自信を取り戻した事を嬉しく思っていた。

「良かった。これでまたあいつは戦える」

「嬉しそうだな」

「鉄也」

ヴィータのそばにはグレートマジンガーの操縦者、剣鉄也、がいた。なのはとヴィータの引率で基地に来ており、劇画のような濃い顔立ちの割には気さくな兄貴分といった一面があるので、ヴィータも結構慕っていた。

「へえ……アイツ、結構いいセンスしてるじゃないか」

「ったりまえだ。なんてたってアイツは、無敵のエース、だかな」

「グレートマジンガーに乗ってる身としては手合わせしてみたいぜ。おっ、今度はインメルマンターンしてる」

双眼鏡を覗きながら鉄也はなのはの空戦センスを褒め称える。戦鬨のプロ、を自認する彼の目から見てもなのはの動きに非凡さを感じ取れるようだ。ヴィータはそれを聞いて誇らしげな顔を見せる。

「ちょっと手合わせしてくる」

なのはの姿に闘争心が疼いたのか、鉄也は双眼鏡をヴィータに渡して、格納庫に駆けていった。

「アイツ……大丈夫かな」

―剣鉄也は格納庫で整備が終わったグレートマジンガーを起動させて、演習に飛び入り参加した。

なのははここで初めて、偉大な勇者の勇姿を目の当たりにする。

『サンダーブレイク!!』

叫びと共に突然雷が走り、なのはは慌てて回避する。暗雲が晴れてその雷を放った主の姿がその姿を見せる。

It is a huge energy reaction forward.
(前方に巨大なエネルギー反応です)

「あ、あれは……」

その巨大な姿になのはは息を飲む。雷を操る黒鉄の巨体、手に持つ剣。どう見てもMSでは無かった。遥かに巨大だ。25m以上はある。

「偉大な勇者……グレートマジンガー……ッ!」

マジンガーZの跡を継ぐ、現時点で最新最強の黒鉄の魔神。この世界が誇る、スーパーロボット、。

なのははグレートマジンガーの巨体を仰ぎみて、思わずそう呟いていた。偉大な勇者と。

第16話「私はこんなもんじゃない！」（後書き）

次回はなのは対グレートマジンガー。果たして管理局のエースオブエースは偉大な勇者に太刀打ちできるのでしょうか。

やっとなスーパーロボットを出せました。

感想、お待ちしております。

登場人物紹介その一（前書き）

主に物語の視点となる主要人物の紹介です。

登場人物紹介その一

ドラえもん

この物語の主要人物で、主人公の一人。

2112年9月3日、トーキョーマツシバロボット工場で製造されたネコ型ロボット。

友達の野比セワシにより、野比家史上の最高に不運な運命をたどる、セワシの高祖父「野比のび太」を幸せにするべく20世紀の日本に来訪。現在、20世紀の野比家の一員として生活中。この物語では事実上の司令塔。イメージは大山のぶ代版＋原作コミック。

野比のび太。

主要人物の一人。ドラえもんが過去に来訪することの発端となった人物で、野比セワシの高祖父。

ドラえもんとは生活することで、人間的に大きく成長。戦いの際には人一倍の勇気を見せる。小学5年生ながら商才がある。特技はあやとりと射撃。特に射撃は驚異的命中精度を誇る。

こちらも同じくイメージは大山のぶ代版＋原作コミック。

高町なのは

主要人物の一人で、この物語での主人公格の一人。未来世界では主に彼女たちの行動が中心となる。

魔法少女リリカルなのはの主人公で、年齢は「魔法少女リリカルなのはA's」と「魔法少女リリカルなのはStrikerS」の間点に当たる11歳。（彼女はちょっとだけ違った流れを辿った平行世界の、高町なのは、であり、「魔法少女リリカルなのはStrikerS」までの本人そのものではない）

私立聖祥大学付属小学校に通う、ごく普通の小学5年生（本人曰く）で、類まれな魔法使いの資質を備えていた事で、小学校3年の時に異世界が発端となった、事件に巻き込まれて魔導師となる。

この物語では、物語の発端となった出来事の一つにてスーパードボット「ゲッターロボ號」に撃墜され、その後は地球連邦軍に保護され、凄惨な戦いを止めるために地球連邦軍に志願する。最新話時点での階級は少尉。フェイト・テスタロッサ（後にフェイト・T・ハラウン）とはかけがえの無い親友であり、戦友。

御坂美琴

主要人物の一人。「とある魔術の禁書目録」のヒロイン。

学園都市内の名門、常盤台中学、の最強のエースに君臨する少女。七人しかいない超能力者（レベル5）の一人で、序列では230万人中、第3位。

学園都市最強の『電撃使い』でもあり、異名も兼ねたその能力は『レベルガン超電磁砲』

この物語では突然のタイムスリップにより、ドラえもんやのび太と出会い、行動を共にする。最新話時点では相棒の白井黒子や初春飾利と共に野比家に来訪している。元の時間軸では自身のクローンを使った絶対能力進化（レベル6シフト）という計画を命がけで止めた（凍結だが）高校生の上条当麻に思いを寄せていた。実験で暗部を目の当たりにしてから、学園都市には絶望しており、未来での学園都市の衰退も予測していた模様

登場人物紹介その一（後書き）

物語の進行上で独自解釈がかなりありますが、ご了承ください。

第17話「夢色チェイサー!!」 (前書き)

高町なのはの訓練編その3。なるべくなのは側のデバイスの発音は翻訳を使って英文で表現しています。

第17話「夢色チェイサー!!」

―物量に押される、厳しい戦況に業を煮やした連邦軍はかねてより進めている、作戦の一環として、軍内で腕利きとされるパイロットを続々と日本に呼び寄せたが、いかんせん到着が遅れていた。敵の妨害にあったり、所属先の戦線の戦況が予断を許さないなどの理由により

日本に行けないパイロットが多いのだ。そんな中、一人のパイロットが日本に到着した。

彼の名は「ケーン・ワカバ」。前大戦の折の戦役の一つ「ギガノス帝国戦」におけるエースパイロットであり、白色彗星帝国との戦いにも参加した腕利きだが、ギガノス戦の終盤でギガノスの元エース「マイヨ・プラート」においていいところを持っていかれた珍事を持つ10代後半の青年である。ちなみに階級は前大戦当時は准尉だったが、功績で中尉に特進した。

「よっ、ブライト艦長。久しぶり!」

「ケーン、よく来てくれた。……ん? タップとライトはどうした? 姿が見えないが」

ブライトの問いにケーンは呆れたように答えた。よほど何か馬鹿をやらかしたらしい。

彼単独で来たのはどういうわけかを。

「実は来る前にタップの奴が悪いもん食っちゃって……その場で倒れて寝こんだんだ。ライトも同じの食べたらしく、酷い下痢になって、とても行ける状態じゃない」

食中毒と下痢によって足止めされている2人の相棒を尻目にたまたま無事だった彼だけが

日本に向かい、到着した訳である。彼らの乗機「ドラグナー」は本来の予定通り、3機が輸送されていたので、軍は思わぬ敵により予定を狂わさせられたのである。

「そ、そうか」

「ほんじゃ俺は司令に挨拶してきますよ。アイツらのことも伝えないと」

ケーンは小走りで基地に入っていった。年齢が上がり、多少の落ち着きは身につけたらしく、一見すると真面目な軍人に見えそうだが、年相応のはちゃけた一面も持ち合わせる。

ブライトはまたまた頼りになるが、一癖も二癖もある人材が部隊に加わるのに安堵すると同時に、部隊の指揮官となった者の宿命――神経性胃炎に悩む日々がまた始まるのである。「胃薬が手放せなくなるな」とぼやいた。その足でブライトは基地の薬店で大量に胃薬を買い占めたためにパートのオバちゃんに「今度はどこに行くの？」と言われたそう。

――演習は思わぬ介入者によってますます凄い状況になっていた。その介入者は「グレートマジンガー」。なのはは、偉大な勇者を前に息を呑む。

『なのはちゃん、悪いが俺と手合わせしてもらおうか』

「ち、ちよっと待ってください！グレートマジンガーって反則です

「よお！」

『実戦じゃそういう事は言えないぜ。あらうる状況に対応しないと生き残れん。敵がまたスーパーロボットで襲って来るかもしれないからな……。』

スーパーロボットはモビルスーツや、メタルアーマー、、バルキリー、などより遥かに強力な力を持つ。それは自分自身が身を持って体験している。演習とはいえ、戦うとなると無事ではすまないだろう。

『グレートタイフーン!!』

グレートマジンガーの、口、のスリットから、暴風、が吹き荒れ、なのはをもにくちに吹き飛ばす。

なのはは必死に態勢を立て直し、グレートマジンガーの攻撃から逃れる。

「ハアハア、目が回った……。ただの、風、なのに、こんな威力があるなんて……」

『これは序の口だぜ。それ、次だ!! ネーブルミサイル!』

グレートマジンガーのへその部分からミサイルが発射される。6発程度だが、異なる方位からなのはを襲って来る。この程度は彼女の空間認識能力なら容易に迎撃できる。

「アクセルシューター、シュート!」

魔力による誘導弾を生成、巧みな誘導でネーブルミサイルを迎撃する（バルキリーのハイマニューバミサイルよりは容易とはいえ、威力は上らしく、凄まじい閃光と爆風が起る）。

（後にこの時の誘導の仕方を目撃した剣鉄也は『なのはちゃんはニユータイプの素養があるんじゃない?』といったそうな）

「今度はこっちの番なの!!! 一気に決める!」

グレートマシンガーの好きにされるのに業を煮やしたのか、レイジングハートにカートリッジをロードさせると一気に最大最強の砲撃を放つ態勢に入る。(グレートマシンガーの超合金ニューZの強度を考慮したらこうなった)

剣鉄也もなのはが全力を尽くすのを悟ったのか、グレートマシンガーの指を天に掲げ、耳から300万ボルトの高出力電流を放電し、雷を起こす。

「全力全開ッ!!! スターライトオオオ!!! ブレイカーアアアアッ!!!」

『サンダーブレークッ!!!』

グレートマシンガーの電撃となのはのスターライトブレイカーがぶつかり合う。当たりに閃光を散らし、電流が迸る。

ヴィータはなのはがスーパーロボットたるグレートマシンガーと渡り合うのに嬉しさをみせる。

「……アイツ、強くなったな。だけどグレートマシンガーはその程度じゃないぜ?」

ヴィータの言うとおり、グレートマシンガーはまだ全力ではない。サンダーブレークに指一本しか使っていない。彼女はグレートマシンガーが両手を使えば、さらに威力が倍化した『ダブルサンダーブレーク』が撃てるのを知っているのだ。ただ指一本でいえば、全力

である。なのはの砲撃のエネルギーを真っ向から相殺できる（逆に言えば不意打ちさえ受けなければ、なのはレベルの才能を持つ魔道士はスーパーロボットの攻撃にもある程度は対処できる事を示している）のは流石だ。

そして閃光が収まり、両者の姿が見えるようになる。

「そんな……スターライトブレイカーを指一本で相殺されるなんて……これがスーパーロボットの力なの……？」

なのはは全力の一撃がグレートマジンガーに届かない事に悔しきを見せつつ、グレートマジンガーの強大さを改めて認識する。そしてその力を存分に扱える技量を持つ剣鉄也の、戦闘のプロ、ぶりに関心する。

『大したもんだよ。このグレートと渡り合うとは』

鉄也もなのはの技量を認めたらしく、嬉しそうな声で素直に賞賛する。そんな鉄也に基地から通信が入る。

『鉄也さん、久しぶり』

『お前、ケーンか？いつの間に日本に来てたんだ？』

『ついさっきだよ。俺だけ先にきたんだけどさ、演習を見てたら面白そうだから俺も混ざるよ』

『そうか。あとは頼んだぜ』

「はいな♪」

ケーンとの通信を終えた鉄也はなのはにねぎらいの言葉を言って、戦いを切り上げて基地に帰還する。

ひとまず安堵するなののだが、休む間もなく、次なる刺客(?)の襲撃を受ける。今度は……

From the west to . . . mastering this high temperature source reaction、(マスター、今度は西から高熱源反応です。)

レイジングハートの新たな警告になのはは思わず、もうやだ、といった感じの声を出す。

「ふえっ!? こ、今度はなんなの! ?」

音速で近づいてくる、敵の姿は一見するとモバイルスーツのようにも見える。

「モバイルスーツ……?」

、It is possible to say, and that is not a movable suit.

It says from the shape of the backpack, and the metal armor.

It is、ドラグナー、……

(いえ、あれはモバイルス

ーツではありません。バックパックの形状から言って、メタルアーマーです。それもドラグナー……)

「ド、ドラグナーって……まさか! ?」

ドラグナーと言えば、白色彗星帝国との戦いで活躍した、連邦軍最強のメタルアーマー。それも主役機然とした洗練されたフォルムから言って、白兵戦用のD-1、それも後期のカスタム型。

なのはそれを駆るパイロットが誰であるかを知っていた。軍人、である以上、戦史の本に目を通す機会があった。その中で、前大戦での功労者の一人、として顔写真付きで載っていたエースパイロット。その名は。

「ケーン・ワカバ、中尉、……！」

D-1カスタムは音速の壁を超えて演習に参加する。白銀の翼で空を切り裂きながら、空を駆ける。

それが前大戦の英雄の一人の帰還を示すサインだった。

『ドラグナーだ！！当たると痛えぞお——ッ！！』

ケーンはそう叫び、愛機をなのはに向けて呐喊させた。

第17話「夢色チェイサー!!」 (後書き)

機甲戦記ドラグナーを出しました。マニアックなので、分かるかな……。

第18話「INFORMATION HIGH ?」(前書き)

第18話目です。涼しくなりましたね……。今回はリリカルなのはから八神はやてが登場します。

ネタを多分に仕込んであります。

第18話「INFORMATION HIGH」?

一時空管理局は、第120管理外世界、（2199年の地球の事）の調査に躍起になっていた。波動エンジンを始めとする、次元を飛び越えられる超エネルギー動力源、の存在。そしてどんな不利な状況であってもひっくり返すほどの力を持つ、スーパーロボット、。管理局の極右勢力はこの「スーパーロボット」に代表される、極限まで発達した科学力を恐れた。その力が自分達にとっての脅威になりかねない事を危惧するあまり、管理外世界との融和路線を進める上層部を糾弾していた。

しかし、魔法が一切存在しない、管理外世界に介入することは、下手をすれば現地の住人全てを敵にまわす危険性を秘めている。極右勢力のやろうとするのは独善としか言いようのない愚行に過ぎないが、彼等がここまで動きを先鋭化させたのはある事件がきっかけだった。

それは、第115管理外世界に偵察任務に派遣された航行艦が現地に派遣した魔道士・執務官が惑星ごと消えて無くなった、という物で、突然地球型惑星が爆発した事例（そもそも爆発はその世界特有の事情によるもの。音声記録に『ガイヤー――！！』との叫び声が残っていた。後に第120管理外世界の艦隊が残骸をその空域から持ち帰り、調査した結果、反陽子、が検出された）となった。この事件を気に時空管理局内の、海、の極右勢力は勢力を強め、管理外世界への臨検、と称する、介入行動への動きを強めていく。

一時空管理局本局の一室で頭を抱える一人の青年がいた。彼の名は「クロノ・ハラオウン」。フェイトの義兄であり、管理局の執務官である。彼は今、これまで管理局が地球は「第97管理外世界」だけに存在するとの認識が覆された事に驚きを隠せなかった。それと彼のもとに舞い込んだのはある管理外世界の視察に訪れた部隊が、その惑星ごと消滅した、との情報がさらに彼を驚愕の渦に落としていた。

「しかし……この報告、信じがたいな……。」

「ええ。しかし自分には信じられません。……本当に惑星が消滅したのですか？」

「ああ。事実だ。……君には気の毒な事だが、上は管理外世界の調査を本格的に行う腹積もりらしい」

「なんですって？馬鹿な、管理外世界への介入は……っ！！」

クロノは両手を「提督」の机に荒々しく叩きつけて憤慨した。管理局は傘下でない世界のへむやみな介入は禁じているはずであり、ましてや今まで未開の世界と扱われていたのに土足で上がりこむ、臨検、は向こうが憤慨して、戦争を起しても文句を言えないような行動だからだ。

「クロノ君。これは下手をすれば管理局の体制が崩れるかもしれない行為だ。場合に拠っては右派に対し非合法的な手段を使うしかない」
非合法手段とはもちろん、政治的・軍事的・諜報などを含めた最後の手段である。

暗殺も視野に入れているのは間違いない。

「閣下、まさか……」

「ああ。やむを得ん……内部の悪い膿は出しきらんといかんのだ」
クロノは提督の策謀にうすら寒さを覚え、顔から血の気が引いていくのを自覚していた。

管理局内部で内ゲバを行うような肅清の嵐が吹き荒れる事を暗示していた。

ーミッドチルダには、先祖が地球人、という、出自のルーツを地球にもつ住人が多く、詳しく調べてみると、かなりの数に登る。

しかし、全てがなのは達の世界出身ではない事は分かってきた、地球、が複数存在する事には驚いたが、よくよく考えてみれば、地球という星は天文学的にはごくごくありふれた星だ。宇宙の中には第97管理外世界と同じ環境で、同じ進化を辿った惑星が複数存在しても可笑しくない。それ程に宇宙は広いのだ。第120管理外世界はそれらの中でも突出して技術が進化した、地球、であり、太陽系、なのだろう。僕はそう認識し、この事を母さんに伝えた。ついでにユーノにも通信で伝えておくとするか……。クロノは航海日誌にこう独白を書き記した。

第120管理外世界の詳細はフェイトからの通信で分かっている。恒星間航行を既に実用化し、地球連邦政府、なる統一政府があるという点では他の、地球、より一步抜きん出た世界だ。その気になれば、ミッドチルダを惑星ごと吹き飛ばせる軍事力を持つとフェイトは言っていたが、手紙に添えられていた写真を見て、思わず納得してしまった。

（フェイトが送ってきたメールには写真が添えられていたが、その写真は第120管理外世界の技術の結晶とも言える兵器達だった。まず、どこことなく見覚えのあるカラーリングの戦闘機が写っている。フェイトによれば、VF-19 エクスカリバーという、飛行機・人型、鳥型に三段変形可能な代物らしい。驚いたことにそのすぐ横になのはの姿があった。どういう事だ？ 続いての二枚目はシンプルな人型兵器で、背中に放熱板らしき物を背負っている。、RX-93 νガンダム、という機体の名前も描かれている。3枚目は紅の翼を持ち、鉄兜のような頭部を持つ機体。これがフェイトが最も驚愕した兵器。その名はグレートマジンガー……。この3枚目に写っている兵器が上を恐怖させるという、スーパーロボットなのか？）

クロノは驚きを隠せぬままその情報を友人の一人で、今は特別捜査官となったのはとフェイトの親友の八神はやてに提供。はやてはすぐに行動を開始。

、地球、がいくつ存在するかを調査する名目で、誕生して間もない、デバイス、リインフォース？を伴って、第120管理外世界に程近い、第105管理外世界「エデン」

（正確にはグロームブリッジ星系の惑星 エデン、という。地球連邦が最初に太陽系外で移民に成功した惑星であり、今や連邦の要所となっている）に降り立った。

「嘘やろ……資料と全然ちがうやんく！！地球人だらけや……」
はやてはエデンに着くなり、カルチャーショックを受けた如く、眼

を点にして当たりの風景を凝視する。地球人らしき人間が多いのだ。資料では、無人、とされていたが、現に人間が多数入植している。

「いったいどういう事なんですか、はやてちゃん」

リインフォース？の問いにはやては困惑中だ。管理局の資料と異なる実情がそこにはあった。

「私にも分からへん……。ただこの世界……。いや、惑星は地球のうちのどれかの住民が移民してたつつう事や。しかもかなり前や……。エデンは地球からの移民が成功して既に何年も経過している。まだ開発途上の段階とは言え、都市もあり、軍事基地も存在するれっきとした、植民地、なのだ。はやてが驚くのも無理ない。

そこで彼女は調査を行う。（本来、こういう事は執務官の役割だが、管理局での縄張り争いで

管理外世界に行ける執務官が割り当てられなかった。そこでクロノが根回しして捜査官のはやてを行かせたわけである。かなり無茶ではあるが）

、資料に描かれていることは古すぎてアテにならない、と愚痴るとエデンの大地を闊歩する。

「地球にそっくりや……。移民したくなる気持ちも分かるで、これは……」

肌に触れる風、太陽の光……。地球と変わりない。はやては不思議な気持ちでリインフォース？とともに街を歩いていた。

、キイイイン、とジェット戦闘機のエンジン音らしき音が響く。そしてはやてとリインフォース？の頭上を一機の戦闘機が通りすぎていく。彼女らの知る由もないが、その機体は「VF-19A エクスカリバー」。連邦宇宙軍の最新主力戦闘機の初期生産型であり、

特務用。

リインフォース？はその姿に「うわあ、カッコいいですー！！」と目を輝せながらウツトリと見つめる。

はやてはその姿に見覚えがあった。クロノに見せられた写真に写っていた、どう見てもなのはが乗っているのしか思えない、戦闘機の同型機。

「あれは……！でもどうしてなのはちゃんが……？」

疑問を募らせながらはやてはエクスカリバーの飛行機雲を見つめていた。

あの戦闘機の同型機に、何故なのはが乗っていたのか……？

それはまだ彼女には分からなかった。そして2人の頭上を飛んでいたその戦闘機のパイロットの名は、イサム・ダイソン、といった……。

これが最後の夜天の書の主、八神はやて、と異世界の可変戦闘機バルキリーとの出会いだった。

はやてはその戦闘機が向かっていった方角に足を運ぶ。そこには一つの航空基地があった。

「ニューエドワーズ基地」（米国にあるエドワーズ基地に肖って名が付けれられ、つい最近まで

「スーパードヴァ計画」の舞台となっていた）。

広大な敷地の土地に点在する基地施設。その近くまで来たはやては思わずあるものに見入ってしまう。それは一機の戦闘機が飛行機に関してはどう素人な彼女から見てもメチャクチャと分かる、とんでも無い機動をしながら飛行している光景だった。

「はやてちゃん、飛行機って……あんな凄い機動ができるんですか……？」

「私の知る限りじゃ、あんな動きはロシアのスホーイでも取れっこないで……。まるでマンガや……。そう。、マクロス、みたいな……」

はやては自分が趣味で見ているSFアニメとの共通点がある事に驚愕する。

Vガンダムが存在から、薄々と感づいてはいたが、あまりにも共通点が多すぎるのだ。

まるで、アニメをそのまま現実にしたような光景は、はやてにカルチャーショックを与えるのには十分に働いていた。目にも留まらぬ速さで飛ぶ戦闘機の姿に2人はただただ、茫然と見上げるだけであった。

第18話「INFORMATION HIGH ?」(後書き)

次回の更新は遅くなります。ドラえもん再登場までしばしお待ちください。

なのは側の主要人物の年齢や階級は判明している範囲内での空白期当時の物としています。11歳当時だとはやては二等陸尉ほどかな？

間章その6（ストライクウィッチーズ編） 「501統合戦闘航空団の危機」 （前

ストライクウィッチーズ編その6。501統合戦闘航空団VSモビルスーツです。

間章その6（ストライクウィッチーズ編） 「501統合戦闘航空団の危機」

—ストライクウィッチという、時空管理局とは異なる体系の魔法を使う乙女たちが存在する世界へ空母機動部隊を派遣している地球連邦軍。そこに出向のような形で航海に同行しているウィッチがいた。

正規兵は「シャーロット・E・イーガー」、「坂本美緒」、「菅野直枝」の3人。そしてウィッチ見習いの「宮藤芳佳」。

彼女等は地球連邦軍の誇る最新鋭兵器群の持つ破壊力に頼もしさを感じつつ、訓練を続けていた。そして美緒は戦友の一人「穴拭智子」が肉体年齢の若返りを果たし、未来世界で訓練を受けているのを知ると、嬉しそうな顔を見せたとか。

そして彼女達は改めて戦艦と空母が合体したような外見の、戦闘空母、を目の当たりにし、目を丸くした。

「初めて甲板に上がったが……何考えてこんなの作っただよ。空母と戦艦を一緒にするなんて」

「何でも平行世界の、大日本帝国海軍、がその末期に伊勢と日向を半戦艦半空母の「航空戦艦」にしたのがその由来。それをさらに推し進めたのがこの戦闘空母らしいが……」

美緒は赤城や加賀の姿に若干疑問を抱く。それぞれ別々に作った方が効率良さそうだが、

未来世界では用途特化型は巡洋艦などの一部除いて廃れ、たとえば戦艦であろうとも、空母と同等の搭載能力を持つ、万能型、が大型軍艦の主流になったという。人型機動兵器の普及故らしい。

「あのコスモタイガー……っただけ？ 中々早い機体だそうだな、美緒」

「ああ。前に乗ってみたが、中々楽しめた。直枝、お前はどんなんだ？」

「オレか？ 噴進式には興味あるぜ？ シャーリーの奴は…って、おいしいー！！」

直枝は呆れたように甲板に駐機されている、一式宇宙艦上戦闘機コスモタイガー？、に擦り寄っていくシャーリーに視線を向ける。どうやらスピード狂であるシャーリーからして、乗りたい、というのは美緒から話を聞いていて知っていたもの、早速行動を起こすとは……。

美緒もヤレヤレといったため息をついている。

「でも、シャーリーさん、凄く嬉しそうですよ」

芳佳は微笑ましそうにシャーリーを見ている。この艦に乗り込んでからはもっぱら訓練と家事手伝いに明け暮れている彼女だが、シャーリーがひたすらスピードを追い求めているのは、本人から聞いていた。この間の訓練でも、雷電、でコスモタイガーを追い回していたし、何よりもこの艦の搭乗員の誰もが体験済みの、音速の世界、に足を踏み入れたい

という気持ちはこの場にいるウィッチの中では一番強いだろう。それを芳佳は悟っていた。

「動かしてみたい……。マッハの世界って奴がどんなのか見てみたい！」

それはスピードを追い求めているシャーリーの羨望とも取れる気持ちの発露だった。ネウロイに超音速のスピードを持つタイプが出た場合、現有のストライカーユニットでは対応出来ない、もしくは追従することさえ困難だろう。しかし開発中のジェットストライカーはカールスラントの技術力を以てしても未だ実験機の域を出ないし、燃費は最悪だという。（初期のジェットエンジンの弱点そのもので、

、燃料、の魔法力の消費率が高い)

コスモタイガーのスピードは美緒が試乗して、絶賛する程に早い。ここでのところの演習でも4人の攻撃を軽く振りきっている。

「乗りたいか、大尉」

「中佐」

何時の間にこの艦の航空隊隊長で、元・宇宙戦艦ヤマトのコスモタイガー隊2番隊隊長であった「山本明」が来ていた。(彼は、別の歴史、では戦死している、宇宙戦艦ヤマト建造当初当時のクルーで、地球圏有数の戦闘機乗り。この歴史では白色彗星帝国との戦いでベイルアウトし、どうにか戦死を免れ、ヤマト艦載機隊のほぼ唯一の生き残りとなった。戦後は戦死を恐れた軍の上層部からの命令で地上任務に付いていたが、赤城の再就役に当たって、航空隊隊長に抜擢された。その際はヤマトの事を、教え子、の一人に託した)

「コイツは製造間もない、できたてホヤホヤ、の機体だ。慣らし運転が必要だから、俺がやろうと思ったんだが……良ければ乗っていいぞ」

「本当ですか!？」

山本はシャーリーがコスモタイガーに乗りたがるのを見抜いていたのか、あっさりと搭乗を許した。隊長の許しを得たので、シャーリーは勇んでそのまま乗り込もうとしたが、流石に山本に「耐Gスーッくらい着ろ」と止められた。(いくらウィッチが魔法で体を保護していると言っても、ジェット戦闘機時代の機動はプロペラ機とはケタ違いのGがかかるため)

装備一式を着込んで、偵察飛行、を兼ねたシャーリーのスピードへの挑戦が始まった。

彼女の知る、どの戦闘機とも違う、流線型の機首、無尾翼デルタに属する外観。ジェット戦闘機の一つの到達点らしい（オーバーテックノロジーが用いられたとは言え、純地球製戦闘機の系譜に属する）洗練された機体に取り込む。

操縦法は、レシプロ機さえ操縦できれば簡単、との事なので一安心だ。思い切って一気にスロットルを引き、カタパルトで一気に射出される。

「おおおおお……！！こ、この加速……、ケタ違いだ！！」

シャーリーは瞬く間に加速していくコスモタイガーでの初感想をこう述べる。プロペラ機とは段違いの加速であるので、体がシートに押しつけられるが、あつという間に艦を離れ、大空を飛翔するスピードを味わえる事が嬉しかった。

艦へ通信を入れようと通信回線を開くとノイズ混ざりだが、声が聞こえてきた。

、……リーネ……さん……対装甲ライフルで……、

、……メです……かない……！！

、う……ああ……！！、

この3つの音声がなんであるか瞬時にシャーリーは理解した。501統合戦闘航空団が敵と戦っているのだ。敵はネウロイではない。そんじょそこらのネウロイに遅れをとるほど、501は烏合の衆ではない。エース級の集まりである統合戦闘航空団を追い込めるのは……ただひとつ、例、の機械の巨人しか有り得ない。つまり艦隊の言う、モビルスーツ、。

「中佐、リーネ、それにルツキーニ……！！……くっそ！何があった

ってんだ……!!」

一気に焦りの表情となった彼女は急いで通信回線の電波発信を最大にして、通信のチャンネルに割り込みをかけた。コスモタイガーの通信設備ならこの程度は余裕だ。

「中佐、ルツキーニ!! 聞こえるか!? おい!!」

返事はすぐに返ってきた。彼女を非常に慕っていた、フランチェスカ・ルツキーニからだ。

「シャーリー!! 無事だったんだね!!」

「心配させたな、ルツキーニ。そっちの状況はどうなってる?」

「巨人が襲ってきたんだ。応戦してるんだけど、リーネのライフルもサーニヤのフリーガーハマーも効かないよ!!」

「……分かった。あたし、達が行くまで何とか持たせろ!! 中佐にも言っとけ!……いいな?」

「うん!!」

ルツキーニとの通信を終えると今度は艦隊へ打電する。内容は、501が敵の攻撃を受けている。至急援軍を派遣されたい、と。

シャーリーからの通信を受けた艦隊は501救援を決意。艦載機動部隊を緊急発進させる事を決定した。

「なんだか慌ただしいぜ」

「本当だな。山本中佐、何があったのですか?」

「君たちには悪い知らせだ。501統合戦闘航空団が、敵の襲撃を受けていると大尉から通信があった」

「何だと……!! それで……それで何と……ミーナは……あいつらは

!？」

「美緒……じゃなくって、坂本さん落ち着け!!……それで？」

詰め寄ろうとする美緒を直枝が抑えつけながら山本に聞く。

美緒は仲間たちの危機と聞いて、完全に感情が高ぶっている。そこで冷静さを保っている直枝が聞いたのだ。因みに本来、階級が上な（直枝が大尉なのに対し、美緒は少佐）美緒を名前で呼んでいるのは、美緒は以前、343海軍航空隊で教官を務めていて、そこで直枝と同僚となった。原隊での階級は直枝の方が上だったので、美緒に色々反抗し、殴り合いになったこともあったとか。その後は打ち解けて、戦友、として接するようになったので、名前で呼んでいるのである。

「俺達を始めとする機動部隊に直ちにスクランブルがかかった。君達にも出てもらう事になる」

「了解しました。でもここからじゃ501が守っているブリタニアへは……」

「この艦が大気圏内の最大戦速で行けば、数時間もあればリベリオン東部、いやブリタリアに行ける。そこで、バルキリーを含めた俺達戦闘機部隊は大気圏ではほぼ無限の航続距離があるから、一番槍として先行するわけだ」

そう。オーバーテクノロジーが組み込まれた22世紀終盤の宇宙戦闘機は大気圏内運用に限って言えば、無限に等しい航続距離を誇る。それを活かすわけである。

「分かりました。オレ達の発進はブリタリアに着いてからですね？」

「そうだ。モビルスーツ隊などと同時に発進してもらう」

「分かりました」

直枝は敬礼し、出撃していく山本を見送った。501の事は今は彼等に任せるしかない。

—ブリタリア とある空域

「……駄目ッ……こっちの攻撃は効果なし……ああっ……ビスマルクが！」

501統合戦闘航空団の隊長であるミーナ・ディートリンデ・ヴィルケは敵の巨人の圧倒的な装甲の前に敢行火器が通じない事に悔しさを顕にした。なんとか苦勞して、円盤状の数機を数機不時着に追い込んだもの、敵はあまりにも巨大で、強大だった。敵の圧倒的火力の前に連合軍のヴィットリオ・ヴェネト級戦艦の「ローマ」は轟沈。カールスラントのビスマルク級戦艦は1番艦「ビスマルク」が3番砲塔喪失の損害を負っている。さらに航空攻撃で「キングジョージ?世」級の「プリンス・オブ・ウェールズ」が爆沈するなど、散々たるものだ。敵との技術力の違いは明らかであった。欧州の最新鋭戦艦群を容易く屠る火力のビームや誘導ロケットなど、どう考えてもどの国も実用化していないし、第一実用化してるのなら、ネウロイなど容易く粉碎できるはず。

『どうする?、フルスト、…いやフルステイン』

彼女が対峙した巨人から声が響く。

「……私を知ってるの？」

『ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ、フルステイン、の異名があるエース。調べていれば分かる。それに君、いや平行時空のヴォルフ・デイトリツヒ・ヴィルケには我が先祖、の借りがある』

バーザムのパイロットはそう言うときツクピットハッチを開けて、その姿を見せる。その瞬間、ミーナは驚愕した。人々が巨人を操っていたのだから。

「そ、そんな……人が……？」

「そうだ。これは、兵器、だよ。人が殺し合うための道具だ」

ミーナは呆然とそのパイロットの言葉を聞いていた。巨人は人間の手によって操られる兵器だった。その事実はそのほどに衝撃的だった。

「我々にはもう、帰る場所、も、生まれ故郷、もない。私は我が先祖の悲願を達成するだけだ」

彼は言った。先祖の悲願と言う単語とヴォルフ・デイトリツヒ・ヴィルケと言う名前。それはミーナの平行世界における、自分に当たる存在。バーザムのパイロットの先祖は、第二次世界大戦中、連合軍の搭乗員として「スーパーマリン スピットファイア Mk. IX」を駆っていた。

ある日の空中戦で一機のFW 190D-9に為す術も無く撃墜された。彼は当時、5機撃墜のエースだったが、生還後に相手は彼を超越した腕を持つ「ドイツ有数の撃墜王」だと聞かされた。再戦を望んでいたが、その前にヴィルケが戦死したため、その望みは

絶たれた。

彼は死の直前までこの望みが果たされなかった事を悔やんでいた。その意志を継いだのが

このパイロットである。転移後はヴォルフの平行世界での姿である、ミーナと戦う事を望み、彼が慕う、方面軍司令の計らいで2個小隊が指揮下に入り、それらを率いて501を襲撃したのである。

「さあ、闘争といこうじゃないか、N a z i f e l l o w、（ナチ野郎）」

彼はそれだけ言って機体を再起動させてミーナに襲いかかる。ただしナチスドイツでは無く、帝政が存続してる世界なのでその単語は通じない。

ミーナも訳も分からぬまま、応戦する。心の中でこう、自問しながら。

（これは……私のせいなの……？）

彼女は自責の念に搦め取られてた。この事態の原因は自分にあるのだろうか……と。

彼が言う、先祖の悲願、とは一体、何か？そして、ヴォルフ・ディートリッヒ・ヴィルケ、とは？

彼女が必死の防戦を行う最中、シャーリーの駆るコスモタイガー？が戦場に向かっていた。

マッハを超えるスピードで、守りたいものを守るために、無敵の勇氣を持って……。

「待ってろよみんな……あたしが行くまでなんとか……！！！」

一空に銀翼の快音が響く。一匹の空を切り裂く、宇宙の虎、が太平洋を駆けていった。

シャーリーは異世界の最新鋭戦闘機にて、501を救おうとしていた。

間章その6（ストライクウィッチーズ編）「501統合戦闘航空団の危機」（後

と、言う訳です。ウィッチにはショックな出来事です。

彼女達はいつの間にか人類同士の殺し合いをしていたのだから……。

改稿しました。シャーリーINコスモタイガーはいかがでしょうか？

第19話「胎動 真ゲッターロボ」(前書き)

とりあえず本編で物語に多少の進展があります。相変わらずタイトル詐欺状態です(笑)

第19話「胎動 真ゲッターロボ」

ウィッチが何故若い期間（10代）しか力を奮えないのか？それは連邦軍の戦闘空母に乗艦した時空管理局の局員がウィッチの身体を検査したことで明らかになった。彼女らは管理局の魔導師と異なり、魔力の供給源である「リンカーコア」が体内に存在せず、体に蓄えた魔力を消費するだけなので、タンクのようにいずれは枯渇する。しかしウィッチの中で未来世界と交わり、時間と空間を飛び越えたことで、体が環境へ適応するために変化を起こした、ゲッター線で体組織が進化した、の諸説が学会で議論されるほどの低確率だが、リンカーコアが体内に生じた例が確認された。現在のところ「翔鶴」に收容され、肉体年齢が13歳に若返った黒江綾香、同じく最盛期（14歳）に若返った穴拭智子の二人にリンカーコアの生成が確認された。この2人は未来世界に在住（訓練のために未来世界へ送られた綾香が現地で智子と再会し、そのまま転がり込んだ）その際の会話は以下のとおり。

「穴拭くお前んちに住まわせてくれえ〜！！お前だけが頼りなんだあ〜！！！」

「ち、ちよつと〜！！いきなり人んちに上がりこんで言う台詞か〜！！」

「本当に頼む〜！！この世界は地理がややこしくなってるし、物価は高いし……そして〜！！一人暮らしは寂しいんだよお〜！！」

「あ、あんたねえ〜」

かつての戦友だったの頼みとあれば、と渋々ながら了承。こうして二人の二二世紀生活が始り、仕事でそれぞれ訓練を受けていた。

綾香と智子は連邦宇宙軍に出向扱いとなったが、その過程で住まい

を横浜市に構える事になり、そこで22世紀での暮らしを享受した。情報化社会が進展した（最盛期から比べれば後退したが）世界は彼女たちから見れば奇異に見えるかもしれないが、意外にもそれなりに順応してみせた。文明の発達とは不思議なもので、リベリオンの主要都市「ニューヨーク」を彷彿とさせる近代的ビルディングが横浜の町に林立する中でも、明治や大正期のレンガ造りの建物が残されているのはどこか安心感を与えてくれる。そんな中、智子はこの世界での友人を綾香に紹介した。

智子は先の戦闘以来、歴代の仮面ライダーやティアナ・ランスターと親しく付き合っていた。栄光のライダー達の中で仕事柄、最も出会う機会が多いのが仮面ライダー2号Ⅱ一文字隼人や仮面ライダーXⅡ神敬介。彼らは元々柔道や空手、剣道などの達人な関係もあって、智子の鍛錬に付き合ってくれている。今日はXライダーこと、神敬介が智子の鍛錬に付き合ってくれるそうだ。

「遅くなってすまない」

バイクのエンジン音が響き、一人の青年が現れる。一見して凛々しさを感ぜさせるこの青年こそ、神敬介。またの名を5人目の仮面ライダー「仮面ライダーX」。

元は水産大学の出身なので、普段は海に関係する仕事をしている。仮面ライダーの中では剣術を得意とし、「ライドル」を駆使する。そんな彼が今回の2人の鍛錬相手だ。

「智子ちゃん、この子は？」

「私の戦友で、黒江綾香大尉です。剣の腕は歴代の日本のウィッチの中でも十指に入る達人で、たぶん私より上です」

智子は戦友である綾香を敬介に紹介した。黒江という名に敬介は聞き覚えがあったらしく、

「へえ、と言った顔をする。そしてこう言った。

「それじゃ君が、魔のクロエ、か」

「ええ。そういう事になります」

これはこの時空における旧・大日本陸軍航空隊のエースパイロットであった「黒江保彦」少佐が戦時中に取った異名であり、ビルマでの戦いぶりからこう呼ばれた。30機撃墜の戦果を挙げている。綾香にとっては、並行時空の自分、に当たる存在でもある。綾香は並行時空の自分が（戦史を調べていくうちにそれぞれ自分達にあたる存在がいる事は認識していた。異なる運命を辿った性別違いの自分の名が戦史に名を遺した事は嬉しく思っていた）こっち側の自分も同じ異名を取っていたとは……と改めて認識させられる。

「中々楽しめそうだ。今日は駐屯地でトレーニングに入るが、いいね？」

「はい。よろしくお願いします」

3人は近くの港の駐屯地まで足を運び、兵士たちの協力の下で鍛錬を開始した。

「さて……行くか。大・変・身!!」

最初に敬介は腰の辺りで腕を組んで、構え、を見せる。これが彼の改造人間としての機能の、スイッチ、となる、一定のポーズ。まばゆい光が走り、智子と綾香は思わず目をつぶる。

―次の瞬間、そこに立っていたのは黒い手袋とマフラーを持った、額にVが輝く銀の仮面の男だった。

「?ライダー!!」

お決まりの名乗りを上げつつベルトから「ライドル」と呼ばれる専用の万能武器を引き抜くと、ボタンを押して細身の剣とも鞭とも取れる形状に変化させる。これが彼の戦闘態勢が整った事を示すっ行為だ。

智子と綾香も持ち込んだ刀を抜いて、Xライダーに立ち向かった。

Xライダーは試しに近くにあった鉄板を?字状に切り裂いて見せると、まずは智子に狙いを定める。

智子も剣の腕には自信があるのだが、Xライダーは彼女以上に多くの修羅場をくぐり抜けている。

ライダーの中でも剣術に長けると言われるだけあって、歴戦かつ、エース級の凄腕を持つ2人を相手しても対等に渡り合う。

「はああああっ!!」

ライドルホイップを振るうXライダーが見せた僅かな隙にすかさず綾香がつけ込む。居合いの要領で扶桑刀を縦一文字に振り下ろす。流石に彼と言えども、これには対応できないだろうと綾香は踏んでいた。しかし。その予想は破られる。しかも思わぬ形で。

「おっと、そうはいかない」

ムチのような形状だったライドルが瞬時に棒に変形する。ライドルの第二形態「ライドルスティック」である。その強度は折り紙付きで、怪力型改造人間のパワーでも曲げることが不可能。過去に破壊できたのはバダンの精鋭怪人であった「タイガーロイド」くらいだ。スティックは見事、刀の切っ先を受け止めてみせる。綾香は力を強めるが、一ミリたりとも動かない。

「……か、硬い……ッ！」

「ライドルロングポール!!！」

Xライダーは巧みにライドルを振るう。スティックを綾香に突き立てると、そのままライドルの第3形態「ロングポール」に変形させ、そのまま伸縮する勢いで吹き飛ばす。その間、僅か数秒。

「し、しまっ……！」

かつて数多くの組織と戦ってきた分、戦いの運び方はXライダーに部がある。その鍛錬の様子を観察していた兵士たちはさっそく、『どっちが勝つか』のトトカルチョを初めていた。

「俺はウィッチの方に賭けるね」

「どうしてだ？」

「かわいいからだ。あの可愛さは正義だろ」

「俺もあの子達だ」

「お前は何でだよ」

「俺はウルト●マン派なんだよ……子供んときにライダーで嫌な思い出があつてな……」

「そ、そうか」

兵士たちの賭けをよそに、扶桑陸軍きつてのエース達が仮面ライダーの、特訓を受け初めてから20分ほどが経過していた……。

―この時期、ゲッターロボGの拠点でもある新早乙女研究所ではドラゴンをも超える、最強の「ゲッターロボの研究開発が進められていた。その名は「真ゲッターロボ」、早乙女博士がさらなる研究を進めて生まれた産物であり、ゲッター線の力を最大限に引き出すために開発が進められている新型機建造プロジェクトであった。

「光子力研究所の「黒鋼の神」計画が思うように行っていないだど？」

早乙女博士は研究員からの連絡に困惑の表情を浮かべた。マジンガ―Z亡き後の光子力研究所は戦いを、科学要塞研究所とグレートマジンガーに委ねる状況にあった。そこで地下勢力対策に新型マジンガーが建造される運びになったのだが…。

「反陽子エネルギーの安定性が問題らしいのです。装甲・フレームは完成したのですが、動力源の出力調整が困難らしく…」

「して完全な実用化は可能なのか？」

「弓博士は『おそらく今次大戦中の実用化は不可能』だと」

「…そうか」

落ち込むような態度を見せる早乙女博士。完成すればゴッドマジンガーとでも呼ばれるべきである機体が今次大戦中に目の目を見ることは無くなった報せに相当落胆している。今次大戦に間に合う機体はこの研究所で開発中の真ゲッターのみになってしまった。

「コン・バトラーVやボルテス？はまだ修理中で、ダンクーガも前の大戦で大打撃を受けてしまっている今、自由に行動できるスーパードロイドは数少ない。だからこそその真ゲッターなのだ」

「博士。真ゲッターというのはそこまで強力なのですか？」

「そうだ。新型ゲッター炉は低出力でもシャインスパークの10倍以上のエネルギーを引き出せる。最大出力での運転を行ったら何がどうなるか、ワシでも見当がつかん」

研究員は絶句した。早乙女博士が作ろうとしているのは「神」に等しい力を持った何かであることに驚きを隠せない。

その時だった。実験でゲッター線の濃度を上げていったのだが、ゲッター線の数値が80を超えた瞬間、真ゲッターロボの目に瞳が現れたのだ。

「ど、どうしたことだこれは……！？」

「分かりません……ゲッター線の指数を上げていたら突然……」

「こいつには……ゲッターに意思があるとでも言うのか……！？」

建造途中の機体を見上げながら早乙女博士はこう呟いた。まるでゲッター線の大きいなる意思が人類を導いているかのように……。

「博士、これは……？」

「建造途中の機体です。、真ゲッターロボ。極秘事項だったので

すが、こうなったら仕方が無い」

「じゃあ……これが新型のゲッターロボなのですか」

格納庫の光景に何事かと駆けつけたフェイトは瞳を宿すゲッターロボを見上げる。

「ええ」

「……真ゲッターロボ……」

―まるで何かに引かれるように、胎動する超エネルギー、ゲッター線、の意志を体現する存在、真ゲッターロボ、。何かに導かれるように真ゲッターは不気味にその炉心を唸らせていた。フェイトは、ゲッターロボに何かの意志があるのだろうか、とただ、真ゲッターを見つめ、一言だけ呟いていた。ゲッター線は何のためにあるのか？宇宙の繁栄のため、それとも地球人類の極限的な進化のためなのか、それはまだ分からない……。

第19話「胎動 真ゲッターロボ」(後書き)

真ゲッターロボの登場です。

登場人物紹介その二（ストライクウィッチーズ編 1）（前書き）

今回は登場済みのウィッチ達を紹介します。（オリジナル要素……もとい摸造設定ありますが）

登場人物紹介その二（ストライクウィッチーズ編 1）

扶桑皇国軍（史実での大日本帝国陸海軍に相当）

みやふじよし
か
宮藤芳佳

ストライクウィッチーズ本編の主人公。この小説ではアニメ版でなく、漫画版「天空の乙女」に近い経緯を辿ったため、竹井醇子にその才能を見出された。その実力は未知数である。ただし史実同様に坂本美緒の事は「坂本さん」と呼んでいる。年齢は15歳。階級は一飛曹（日本での呼称。他国での軍曹に相当）

史実では大日本帝国海軍航空隊で「空の宮本武蔵」との異名を誇ったエースパイロット「武藤金義」少尉。

さかもとみお
坂本美緒

44年現在での扶桑皇国海軍有数のエースウィッチ。彼女の動きが間章の物語の幕開けとなった。

史実同様に芳佳の上官となり、その育成に情熱を注いでいる。並行時空の艦隊と最初に接触したウィッチで、作中では色々おいしい思いをしていたりしていた。史実のように「烈風丸」を造るとは限らず、未来世界の技術で若返ることを羨望中かも……。史実と異なり、菅野直枝とは教官と教え子の関係にあり、501統合戦闘航空団では少佐だが、原隊での階級は中尉なために、直枝にはタメ口を聞かれている。

史実では、大空のサムライ、「坂井三郎」中尉。年齢は19歳。階級は中尉→少佐。

菅野直枝 かんのなおえ

芳佳とは別の部隊に所属していたウィッチで、デストロイヤー、の異名を持つ扶桑皇国海軍のエース。本土防空のために作られた、第343海軍航空隊、の内の、戦闘701飛行隊、維新組、隊長で、502統合戦闘航空団に所属している。階級は大尉（史実では少尉だが、この小説では派遣前にウィッチの武装では撃破困難な謎の敵を数機撃墜した戦功で中尉を経て、大尉に特進している）。年齢は15歳。一人称はオレ。史実では菅野直大尉。

穴拭智子 あなぶきともこ

「ストライクウィッチーズ スオムスいらん子中隊」の主人公で、主に大戦初期～中期に活躍していた陸軍の元エース。国民的知名度を持つ、扶桑海の巴御前、の異名を誇っていた。年齢により魔力を失い、予備役に退いていたが、連合国のゴタゴタで急遽現役に復帰する事になり、未来艦隊の技術により肉体年齢が最盛期の14歳にまで若返り、最新鋭ストライカーユニット「4式戦闘脚 疾風」を纏う。史実では、ビルマの桃太郎、穴吹智曹長。

黒江綾香 くろえあやか

智子と同時期に活動していた陸軍のエースウィッチ。現役時代は、魔のクロエ、の異名で恐れられた。第505統合戦闘航空団に所属

していたが、部隊が壊滅し、サバイバル生活を強いられていたところを保護された。保護された先の医師の独断により正規の手順を経ないで若返りをさせられたため、智子よりも幼い外見（俗に言うロリータの年齢）となってしまう。本人としては屈辱らしい。史実では黒江保彦少佐。

登場人物紹介その二（ストライクウィッチーズ編 1）（後書き）

今回は扶桑皇国に絞りました。アンケート実施中です。詳しくは私の活動報告をご覧ください。

竹井さんは又の機会に……

第20話「神に代わる者・魔神皇帝、そして漆黒のゲッターロボG」(前書き)

マシンカイザーです。ゴットとは別の存在として書きます。

ゲッターロボGのブラックゲッター版があったらという仮定も兼ねています。

第20話「神に代わる者・魔神皇帝、そして漆黒のゲッターロボG」

― アメリカより一人の青年が日本に降り立った。その人物の名は「兜甲児」。前大戦にて活躍したマジンガーZの操縦者として知られている青年である。現在は戦いを剣鉄也とグレートマジンガーに委ね、静養を兼ねたアメリカ留学の最中だが、急遽帰国したのだ。

「何なんだ？ 最後の遺産、つてのは……」

彼を日本に呼び戻したのは光子力研究所所長の弓博士からの一枚の手紙だった。手紙には「遺品を調べている内にある事が分かった」と記されていて、それを調べるために帰国したのだ。

― そもそも自分を米国から呼び戻した原因は弓博士が甲児の祖父「兜十蔵」博士が残した一枚のメモと写真にあった。

メモには余りの邪悪さゆえに封じられたマジンガーの存在などが記されていた。その名は「デビルマジンガー」。あの十蔵博士をして、「恐ろしい機体」と言わしめたほどの邪悪な魔神。その復活を阻止するためにはあらゆる手段を講じなくてはならないと聞かされていた。その強さはZは愚かグレートすら凌駕するやも知れぬという。

―マッドサイエンティストであった祖父すらも心から恐れさせた悪魔。それに対抗する術などあるのだろうか。

（デビルマジンガー……。おじいちゃんを恐れさせたっていうほどの……俺をアメリカから呼び戻すなんて）

悪魔の名を持つ魔神。その恐怖を奮うのを阻止しなくてはならない事への不安か、武者震いをするのを感じた。

マジンガーZを失った今の自分に何が出来ると言うのか。

甲児は戦いをグレートマジンガーに任せきりの自分に悔しさを滲ませ、拳を握りしめる。

―前大戦でZを失ったばかりに最終決戦に参加できず、何人かの戦友を死なせてしまった。

その事を引きずっているのは確かかもしれない。

「鉄也さんに任せているだけじゃだめだ。落ち込んでたら俺の名が傷がつくってもんだ」

余談ではあるが、この世界における甲児と鉄也の関係は史実のようにひたすらギクシャクした物ではなく、幾度かの戦いを共にした戦友として良好な関係を保っている。

鉄也の事をさんづけで呼んでいるのも、甲児が鉄也の年齢をきちんと年上だと認識しているためである。（史実での甲児は鉄也に同年代な風に接していたのでくんづけだった）

そして弓博士からの手紙の最後の部分に記されていた「祖父の最後の遺産」とは何なのか。謎は深まるばかりである。

そして彼は光子力研究所にて新たな力を手にする。

「先生、ゴットは完成が遅れていると聞きましたが……？」

「いや、ゴットではない。、皇帝、だよ、マジンカイザー……それがデビルに対抗できる魔神だよ」

光子力研究所の責任者「弓弦之助」博士は一つの事実を告げた。

「第七格納庫を知っているね」

「はい。事故があつて封印されたという……。でも何でそれを……」
「皇帝はその事故を引き起こした機体なのだ……しかも驚くべきことが分かった。この写真を見たまえ」

写真にはどう見てもグレートを発展させた外見を持つ新型のマジンガーが写っていた。ゴット以上に
強そうな外見をしており、いかにも風格溢れる姿をしている。

「新型……のマジンガー？」

「いや正確にはプロトタイプのマジンガーZがゲッター線で進化した機体……。皇帝はその進化で生まれたのだ」

「ゲッター線？まさかアレは機械も進化させられるのですか……？」
「これを見ると、そう思わずを得ない。早乙女博士に話を聞いてみたが、私の推測を頷けてくれたよ」

―光子力研究所の開かずの格納庫でそれは眠っていた。かつて兜十蔵博士がZの開発過程で生み出したプロトタイプマジンガーの一体がゲッター線を浴びて進化したロボット。

マジンガーZは愚か、グレートマジンガーすらも凌駕する力を得た現時点での最強の魔神。弓博士らはこの機体に「皇帝」の異名を付けたと言う。

Z以前の機体ですらも現行の最新機を超越するほどにまで進化させられるゲッター線。何故この機体を進化させたのか？それは深い謎である。それはゲッター線研究の第一人者たる早乙女博士をしても

未だ未知の領域なのだ……。

さて、甲児は格納庫に案内され、新たな魔神を目にしていた。全てが大きかった。

体や腕の太さなどはグレートマジンガーよりも力強く見えるほどに太く、逞しく感じさせる。大きさもグレートより頭一個分以上大きい。

形状はマジンガーZよりはグレート寄りだ。放熱板の中央部にZのエンブレムが存在する。Zとグレートの双方の血筋の始祖が進化した物とはとも思えない。各部形状はグレートマジンガーと似通っているが、Zの力強さも持ち合わせる印象を甲児に与えていた。

「こいつが…マジンカイザー」

甲児はこの魔神の名を呟いた。

所内で、マジンガーの中のマジンガー、魔神皇帝、とのコードネームで呼ばれていたのを正式にそう名づけられた。進化しただけあって、性能は今までのマジンガーとは次元が異なり、装甲は超合金ニューZをさらに超える強度のニューZα（超合金Zがゲッター線で進化し、ニューZを遥かに超える強度を得たために便宜上名付けられた。エンジン（ゲッター線で進化した反応炉心）出力はZの20倍以上と言うバケモノじみた存在。（後にその力は真ゲッターロボなどと対等と判明）

コックピットとなる小型戦闘機「カイザーパイルダー」は元々プロトタイプであった関係で搭乗メカが存在していなかったのを、弓博士らが新造したらしい。ブレーンコンドルの発展型なのがよく分かる。

パイルダーに乗りこむと甲児は操縦桿を操作して、パイルダーをカイザーとドッキングさせる。

「パイルダーオン!!」

―すごいパワーだ!! Zの10倍なんてもんじゃねえぞ!?

甲児は操縦桿を握っていても伝わってくるカイザーのパワーに身震いするのを感じた。Zの扱いに慣れているはずの自分が震えている事に驚きを感じていた。

―へっ……どんなマシンでも人間の心が合わされば……ってね!

甲児は早速カイザーの機能を検索する。背中にスクランダーが収納されている所を見るとグレートのような内蔵式なのか、それともオプション装備だったものが進化することで機体と融合したのか。

「カイザースクランダー、GO!!」

叫びと共に翼が展開され、テスト飛行を開始する。

Zとは段違いのスピードや上昇力を見せるカイザーはまさに、魔神の降臨、といった威圧感を醸しだしていた。これが魔神皇帝の目覚めだった。これ以後、兜甲児はゴッドマジンガーの代打として、マジンカイザーを駆る事となる。神に代わり、魔神を統べる存在「皇帝」と共に。

―新早乙女研究所では真ゲッターロボの他に一機のゲッターロボが存在した。竜馬達のそれとは別のゲッターG。この機体は研究所の周辺に何故か半壊状態で横たわっていた物を回収した物で、機体の細かな仕様がオリジナルのドラゴンとは異なるのが確認されている。修理の際にストックされていたGの予備パーツを用いた結果、体形が変化した他、塗装が全面的に変更されているなど、今までのゲッターロボとは異なった趣を醸し出している。

「このゲッタードラゴンの改修は何%進んでいるのかね」

「装甲や炉心にまで手を加えましたから：40%ほどです。改造の際に変形機構は廃止しましたが：よろしいですか？」

所員の問いに頷くとドラゴンの傍らに安置されている大型の銃火器に目を引きつけられた。見たところ

オリジナルのゲッタードラゴンが運用している「ゲッターレーザーキャノン」と同型のものに見える。

「ああ、これは「ゲッタービームランチャー」ですよ。敷島博士が試作していたモノだそうで」

「ほう」

彼の言う「敷島博士」とは研究所きってのマッドサイエンティストにして兵器部門の責任者の科学者の事。

竜馬に言わせれば「危ないジジイ」との事で、かつての戦いでは散弾の撃てるリボルバー銃を竜馬に提供したらしい。

その彼が造り出した代物だと言うことに興味を惹かれるようである。担当者の説明によればレーザーキャノンをベースに出力に改良を施

してより重火器寄りに仕上げて製造した物で、本来は竜馬達への補給物資として送られる予定だったのを急遽この機体でテストを行う事になったの事。

「防衛用に改修しといたのが功を奏しましたね」

「リョウ君にあとでテストしてもらおう。伝えといてくれたまえ」
「はい」

漆黒のゲッターロボGと魔神皇帝。2つの新たなスーパーロボットの登場で人類は一気に戦力を増強したかに見えたと、悪の野望はじつくりと進んでいた。

「魔法少女にストライクウィッチーズ……そして新型のマジンガーと真ゲッターロボ……面白いではないか」

「ですが閣下、こちらはまだ態勢を整えておりません……」

「ゲッターロボ號、のGアームライザーや、ゲッタードラゴン、の製造は？」

「順調です。ドラゴンも現在、必要な数、までには到達しておりませんが……あと数ヶ月もあれば」

「ご苦労」

一人の巨人と男と女の半身が合体した様な容姿の人物……かつて、あしゅら男爵、と呼ばれていたその人物はじつくりとその思惑を進めていた。そしてその傍らには何体もの、真紅のゲッターロボG、が並んでいた……。

第20話「神に代わる者・魔神皇帝、そして漆黒のゲッターロボG」(後書き)

今回は以上です。

間章その7（ストライクウィッチーズ編）「SALLY（出撃）」（完全版）

連邦軍艦隊のストライクウィッチーズ世界への本格介入の始まりです。

UC系列の第2、第3世代モビルスーツがたんまりと出ます。機動戦士ガンダムUCからのゲストメカもあります（笑）

さて、連邦軍は本格的にストライクウィッチーズの世界での活動を開始。501統合戦闘航空団を急襲したのは元ティターンズの2個MS部隊。それを撃滅すべく急派された航空部隊。

その先鋒はシャリーの駆るコスモタイガー？。そしてその後を追いかける山本指揮下の航空編隊。それらが出撃していった後は第二陣たる、可変機を含めたモビルスーツ隊と残りのウィッチが発進する。ウィッチ達は自分達がどんなに頑張っても届かないスピードである、音速、（時速1200？以上）を軽くひねり出せる未来兵器の後を追う形で飛行甲板で発進準備を進める。

そこで彼女等は初めてモビルスーツの勇姿を目の当たりにする（坂本除き）

飛行甲板の第二エレベーターから続々と迫り出すモビルスーツ群。機種は通常量産機のヌーベルジム？、ジェガン、ジャベリン、ジェガンの上位機種として作られた最新鋭機の、ジェスタ。さらに量産型ゼータ系統の各種。（ZプラスA型、D型やA/FMSZ-007II、改めて量産開始されたり・ガズイ）さらに……。

そこに真新しい機体がせり出してくる。Zとメタス系統の機体を足して2で割り、さらにジム系の成分を混ぜたような外観の可変モビルスーツ。火器はそれまでのZ系統と同様らしく、Z用のライフルやハイパーメガランチャーを敢行している。

「おっ、新型の可変モビルスーツか？」

「ええ。Zの量産型に当たるRGZ系統の最新型で、試験配備段階

の、リゼル、ですよ」

「リゼル？」

「新型の量産型TMS（可変モビルスーツ）の中でも廉価版みたいな物で、性能的にはジェガンにZとメタスの中間みたいな変形機構をくつつけただけと揶揄されていますが、

新兵でも扱える機体です」

「確かに……高性能を追求すると、どうしても新兵では扱いにくくなるからな」

美緒は整備兵の言葉にうなづく。扶桑のストライカーユニットも新兵では扱いにくい機体が出始めている。他国は、扱いやすさ、と高性能を両立させているのに、扶桑はカタログスペックだけを追い求める傾向が強い。美緒は改めてそれを自覚した。

確かにRGZ-95「リゼル」はそれまでのZ系統の機体の傾向であつた、乗り手を選ぶ、
、ピーキーな操作性、を新式のサポートOSで緩和することに成功し、生産性も良好だ。

その対価に性能が多少低くなつたが、廉価版と考えれば十分なレベルだ。

それら可変モビルスーツの操作性の改善には一説にはオリヴァー・マイという、元ジオン軍の技術中尉だったアナハイム・エレクトロニクスの技術者が関わったという話もあるとか。

リゼルの姿を見て、美緒は、高性能を求めるだけが兵器ではない、と肝に命じた。

因みに、もはや彼女達は艦で生活するうちにモビルスーツも当たり前のように認識していたので、このような会話も普通になされるようになっていた。朱も交われば赤くなるとは正にこの事だ。

「うわぁ〜かつこいい〜!!」

芳佳も甲板に出されていくモビルスーツ群に思わず見とれたような声を出す。

未来の世界では人型機動兵器が、花形、として扱われているのを聞くとは何となく納得してしまうのは、ウィッチ、が活躍しているのが当たり前なためだろうか。

「よう芳佳ちゃん、初陣だって？」

「あ、皆さんどうしたんですか？」

ジェガンやジャベリンのパイロット達が芳佳に話しかける。芳佳が初陣だと言うことを聞いていたのでそれをねぎらうためにやってきたのである。20代〜30代の荒くれ者はそのいかつい顔に似合わぬ気さくな態度で芳佳と雑談を楽しむ。

初陣である芳佳の緊張を解すためではあるが、搭乗員達は死地に赴くとは思えない平静ぶりに芳佳は彼等の優しさに安心感を持つと同時に決意を胸に秘める。

（そうだ。この人たちも守るんだ。私は守りたいからウィッチになったんだ……それをやらなくちゃ!!）

そう意気込むと芳佳はストライカーユニットが備えられた第3格納庫に急ぐ、守りたいものを守るために。

「さて俺達も行くぞ」

「了解!!」

芳佳が走っていったのを見届けた搭乗員達も各自のモビルスーツに

乗り込む。通常型ジェガン、指揮官用の、スタークジェガン、、ジェスタ、のゴーグルアイに光が灯り、動力源の核融合炉がまるで心臓が脈打つように稼動を始める。火器を腕に持ち、何時でも出撃できる態勢を整える。カタパルトに脚部を接続させる。

「こちらアルファ1、発進準備完了。いつでも出れる」

「よし。命令があるまで待機せよ」

「了解」

こちらは直枝。彼女は一足早くストライカーユニットを纏い、いつでも発進できるようにそのまま甲板に出る。

「もう出る準備はできてるってか、ナオちゃん」

「おうよ。オレを誰だと思ってるんだよ？」

「そりゃそうか、デストロイヤーだもんな」

Zプラスの搭乗員が直枝をからかう。因みに直枝は艦の搭乗員から「ナオちゃん」と呼ばれていて、（直枝だから、ナオ、らしい）この時代（連邦軍から見た）としては極めて珍しい強気な性格、その敢闘精神から連邦軍の精鋭たちに一目置かれている。

「俺達に遅れんなよ？」

「ジェットだからって馬鹿にすんな。こう見えてもオレは第343海軍航空隊の、維新組、隊長だ。第二陣の一番槍はオレがやる。いいな？」

「それは別に構わんが……、ナオちゃん、もしかして芳佳ちゃんにいいところ見せたいのか？」

「バ、バカ！！そんなんじゃないって！？」

思わず否定する直枝だが、すっかり照れで顔が赤くなっている。案の定、後輩にいいところを見せたかったらしい。その気持ちは分からないわけでも無いので、搭乗員はからかいつつもフォローしてやる。

「頑張れよ。応援してるぜ」
「か、からかうな!!」

そんな中、ついに発進命令が出される。静寂を破る、戦闘配備の警報が響き、オペレーターの声が艦内の各部スピーカーを通して伝えられる。いよいよ戦いが始まるのだ。

各モビルスーツの射出準備が進められ、大気圏内用に調整されたウェイブライダー形態の可変機にはハードポイントに対空・対艦ミサイルや増槽が取り付けられる。

『各モビルスーツ隊は順次発進。航空部隊と合流しだい、ポイントYに向かわれたし』

指令が出されると同時に各モビルスーツが発進する。先陣を切って可変モビルスーツ群がスラスターを唸らせ、次々に発艦していく。

そしてウィッチ達の発艦の番がやって来る。

魔導エンジンを唸らせ、扶桑海軍制式塗装の濃緑のストライカーユニットを纏った乙女たちが出撃する。機種は「雷電」と「紫電」。

「菅野直枝、出る!!」
「宮藤芳佳、行きます!!」

（芳佳と直枝はモビルスーツ隊などとの交流があったため、すっかりこの台詞を言うのがクセになってしまったとか）
いの一に直枝が魔法陣を展開させ、発艦する。それに続くように美緒と芳佳も発艦し、合流する。

「空域までエスコートする。私達に続いてくれ」

ウィッチ達を導くため、R G Z ー 9 5 リゼル、の一編隊がエスコート役を務める。3人はリゼルのエスコートのもと、空域に向かった。

ードーバー海峡

501統合戦闘航空団のウィッチ達は苦戦を強いられていた。空戦用の可変モビルスーツの圧倒的な機動性に歴戦のウィッチ達も翻弄されていく。それはカールスラントきつてのエースと言われる、ゲルトルート・バルクホルン、エーリカ・ハルトマンの2人も例外ではなく、彼女らは、ギャプラン、や、アッシマー、を相手に必死の防戦を行っていた。（ミーナたちとは別の空域）

、チュイン、と機関砲の弾丸が弾かれ、何一つ損傷を与えられない。

「くそっ!! 何故こちらの攻撃が効かない……!! どういう装甲なんだっ……」

その内の一人、ゲルトルート・バルクホルン――通称は自身トゥルーデが翻弄されるばかりなのに悔しさを顕にする。火器は装甲に阻まれて通じない。ネウロイが相手でもここまで追い込まれたはずはないが、音速のスピードと戦艦を一撃で大火災に追い込むほどのビーム砲を備える相手に対し、生き残っているのは彼女の意地だ。そして自分が倒れたら、妹、はどうなるのか。彼女はかけがえのないものを守りたい一心で防戦に当たっているが……。

一瞬の隙を突かれ、ビーム砲（メガ粒子砲）の一撃が彼女めがけて発射される。

「トゥルーデ、避けて!!」

それを目撃したエーリカは必死にバルクホルンに呼びかける。ネウロイのそれよりも高速で迫るビームを避けられる保証はないが、こうするしかエーリカには出来なかった。

「くそっ……!!」

しかしバルクホルンにはそれを回避できるだけの時間的余裕も長時間の行動によるためか、ビームを防ぐ魔力の余裕もなかった。目の前に迫るビームにバルクホルンは、死、さえ覚悟した。

「トゥルーデええええッ!!」

エーリカは必死に愛機の魔導エンジンを唸らせ、手を伸ばす。

それは普段ののほほんとしている彼女からは想像のつかないほどに感情を顕にした叫びだった。仲間を失いたくないという感情がエーリカを叫ばせていた。その一心で手を伸ばす。ビームがバルクホルンの手前30mほどまで迫った瞬間。エーリカは目を閉じて神に祈った。

—お願い!! 神様でもなんでもいい!! トゥルーデを…助けてえ!

そしてその瞬間。都合よく、バシユ、と音が響き、桜色の光がビームとぶつかり、爆発する。祈りが通じたのだろうか。

バルクホルンもエーリカも何が何だか分からずにキョトンとしてしまふ。

光が走った先には一機のモビルスーツがいた。20mに達するであろう巨体とダブルビーム・ライフルを構え、額にキャノン砲を備えた機体。そして特徴的な人のようなツインアイ。

「へへっ、真打ち登場ってね」

—ジュード・アーシタの駆るZZガンダム（もしくはガンダムZZ）だった。コックピットでジュードはそう言った。坂本美緒の仲間を守るために第一次ネオ・ジオン紛争を終結させた、英雄、はゆつくりとエーリカやバルクホルンを守るように降り立つ。

これがエーリカ・ハルトマン、ゲルトルート・バルクホルンの両名と連邦軍最強のモビルスーツの一つ「ZZガンダム」との邂逅だった。

「何あれ……」

「味方なのか……?」

エーリカとバルクホルンの驚きをよそに、ZZは2人を守るような動きを見せながら、敵に呐喊していった。片腕には、光の剣、ハイパービームサーベルが握られていた。

―そして東の空にはさらに見たことのない飛行機の一団が飛来するのが見えた。その搭乗員達の中にはシャーリーの姿もあった……。

―次回、ウィッチ達は、人類の可能性、と、軍人、達の意地を垣間見る。

「何でそこまで戦うんですか!? こんなの間違ってる!」

「フロイライン、よく見る。戦いとはこういうものだ! ティターンズに栄光あれ――ッ!!」

間章その8「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて」へ……。

間章その7（ストライクウィッチーズ編）「SALLY（出撃）」（完全版）

ダブルゼータガンダム&ジュドー・アーシタとエーリカやバルクホルンを合わせました。

どうでしょうか？（ダブルゼータガンダムの表記をZZに改称しました）

追伸 鶴翼陣形さん。遅れましたがリクエストに答えてオリヴァー・マイを名前だけですが、出しました。

この場を借りて報告させていただきます。

間章その8 | 「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて

地球連邦正規軍対ティターンズ、戦闘開始です。

間章その8 ―「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて

―地球連邦軍のストライクウィッチーズ世界への初めての軍事介入は大規模に行われた。501統合戦闘航空団への救援を行うに当たって、投入されたのはMSや可変・通常戦闘機などが中心の艦載機部隊。そしてエーリカとバルクホルンの前に現れたのはZZガンダム、そしてジュード・アーシタ。

―「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて―

―見るからに逞しそうな、青と白のツートンカラーの鋼の巨体は威圧感たっぷりだった。そして一つ目の機体とは一線画する、人間らしい、ツインアイを持つ機体―ZZガンダム―はエーリカとバルクホルンと守るかのように、敵、の前に立ちふさがる。2人はこの思わぬ、味方、の出現に目を丸くしてしまう。そして同時に、声、が響く。それはこの世界では戦いから遠ざかっているはずの男性、それも自分達と同年代の少年の声だった。

『下がってろ!!』

その声と同時にZZの腕に持つダブルビーム・ライフルが火を噴く。強力な、メガ粒子砲、はエーリカやバルクホルンがどうやっても削るのが精一杯だった敵の装甲を一撃で溶解せしめ、墜落させる。バ

ルクホルンはその圧倒的な火力に絶句し、立ち尽くす。

『あんたら、501統合戦闘航空団の隊員だね？』

「あ、ああ……。それよりお前は何者だ？何故私たちを知っている！？」

『詳しくは坂本少佐やシャーリーさんにでも聞いてくれ。とにかく、俺達は味方だ！今、証拠を見せる！』

ジュードは論より証拠の要領でZZに持たせているハイパービーム・サーベルを振るい、ギャプランを上段袈裟懸け斬りで薙ぎ払う。ガンダリウム合金をも容易に切り裂く光の刃はギャプランを文字通りに一刀両断し、粉碎する。流石にガンダムタイプの面目躍如と言った強さを発揮している。その強さはバルクホルンやエーリカから見ても『一目で分かる』程であった。

「凄い：私たちがあれだけ苦戦した敵をたったの一撃で……！」

『しっかしまあ、よくあれだけの攻撃に持ちこたえられたもんだ』

「どういうことだ？」

『アレを見な』

ジュードはバルクホルンとエーリカが可変モビルスーツの猛攻に持ちこたえられた事に感心し、エーリカ達に基地の惨状を見せた。モビルスーツは大半の通常兵器に対して圧倒的な優位性を誇り、それはこの世界においても同様で、辛うじて機械化航空歩兵や扶桑（日本）の戦艦大和や武蔵がその火力で対抗出来ている状態だった。エース足り得るバルクホルンとエーリカを以てしても撃墜は叶わず、基地上空の制空権は殆ど旧・ティターンズ側に写っていた。それを示すように基地の地面の至る所にクラスター爆弾で開けられた穴が

点在し、さらに格納庫は敵が若干数保有していると言う、ブラックタイガーの機銃掃射による弾痕が確認できる。これだけの打撃を受けてしまった以上、基地を再利用するのは当分無理だろう。

何故、事前の探知ができなかったのか？それはティターンズ側が501統合戦闘航空団側の装備するレーダーを一切無効化する電子戦装備を多数揃えていたのと、サーニャ・V・リトヴァクの固有魔法の「全方位広域探査」やミーナ・ディートリンデ・ヴィルケの「三次元空間把握能力」をも欺瞞するアクティブステルス（現地でティターンズが対ウィッチ用に独自に改良を加えた現地改修型）装備機が空襲を加えたためであった。501が全員でティターンズの迎撃に成功したのは偵察中のルッキニーが幸いにも肉眼でブラックタイガーを確認し、スクランブルしたおかげである。しかし、ネウロイよりも遥かに高速を誇る、ジェット戦闘爆撃機、のスピードの前に全員が空へ飛び上がったと同時に爆撃ポジションの占位を許してしまった。

その瞬間、ミーナとサーニャは敵を探知出来なかった事を悔やんだ。基地は20世紀後半により完全な形で殺戮兵器として洗練された、クラスター爆弾、や地中貫通爆弾の洗礼を受けたのだ。さらに対地ミサイルや誘導500ポンド爆弾など……20世紀後半以降の航空戦術のバーゲンセールといった様相を呈し、たった一回の攻撃で無力化してしまった。

「酷い……こんなになるなんて」

「あのジェット機の爆撃か……！くそっ！！たった一回でこれほどになるだと……！」

エーリカは基地の惨状に思わず落ち込んだ声を出し、バルクホルンは悔しげな表情を見せる。2人は過去にネウロイに故郷を蹂躪され

た経験を持つ。自分達の力が及ばなかったために故郷のカールスラントは炎に包まれた。その凄惨な光景を脳裏にフラッシュバックさせたのかバルクホルンは悔しさを一層強めた。

「お前、ソイツ、に乗っているのならアイツらの事を知っているのだろう？なら教えてくれ。アイツらはいったい何者だ？」

「そうだよ。音速で飛べる飛行機なんて、まだこの国も造れてないはずだし、それにビームを撃つなんて夢のまた夢のはずだよ。それが何で……？」

『それは色々ややこしいんだけど……分かった』

ジュードーはバルクホルンとエーリカにかいつまんで事の概要を説明した。あれらはバルクホルンやエーリカから見れば、優に200年以上先の世界の超技術が生み出した、超兵器、である事。さらにその時代の一勢力が何らかの事故でこの世界に漂着し、軍事行動を起こした事。自分はさらにそれを排除するためにその時代からやって来た艦隊の一員であると。

「つまりアレはとんでも無く未来の兵器だってこと？」

『正確に言えば、こことは微妙に違う歴史を辿った世界の未来だけどね。……おっと自己紹介がまだだった。俺はジュードー・アーシタ。見ての通りパイロットさ』

ジュードーは軽く自己紹介を済ますと、すぐさま愛機を十字砲火の中に突っ込ませる。巧みな動きで敵の航空兵器の砲火を躲し、的確に反撃を返すその姿にエーリカやバルクホルンは思わず唸らせられる。バルクホルンはジュードーも同僚のエイラ・イルマタル・ユーティラ

イネンのように、未来予知、を持っているのでは無いか？と探りを入れる。それほどまでの機動をZZは見せていた。しかも弾丸より遙かに早く、ネウロイのそれよりも高速なビーム兵器を華麗に回避するから余計にその腕の冴えが際立っていた。エーリカもジュードーが相当な技量を持っている事が分かったらしく、目を丸くしている。

『一気にここを片付ける！！行くぞおっ！』

ZZの双眼が輝きを増すと、額のキャノン砲にエネルギーが集束していく。ZZの象徴的武装の、ハイメガキャノン、である。パワー重視だった第4世代モビルスーツ群の中でも最高レベルの火力を誇るZZの真骨頂であり、連邦軍（旧エウーゴ）の力の象徴とされた武器。それに火が灯されたのだ。チャージが完了した瞬間、一気にエネルギーが解き放たれ、空に桜色の光が走った。桜色の光が何者も飲み込み、消滅させる極太いエネルギーの奔流は遠くからでも確認できた。

それはミーナやルツキーニのいる空域でも同様で、ZZガンダムのハイメガキャノンの光が走るのが確認できた。

「な、何……？あの光は……」

ルツキーニがそう呟いた瞬間。轟音が響き、一機のジェット戦闘機が目の前に現れた。濃緑と白で塗り分けられた機体に乗っていたのはシャーリーだった。彼女は通信回線を開き、すぐにルツキーニに通信をかけた。

『ルツキーニ！！』

「シャーリー！！ってどうしたのその飛行機は！？」

シャーリーはいつものストライカーユニットでなく、飛行機を、し

かもジェット機たるコスモタイガー？を駆っていたのだから、ルッキーニでなくても誰でも驚く。しかもジェット戦闘機など、技術大国のカールスラントでも作られていないのだから……。

『それはあとで教える。とにかくここは任せろ。お前は一旦下がって、援軍に合流して補給を受けるんだ』

「援軍って、坂本少佐の言ってた、義勇軍のこと？」

『そうだ。もう来るはず……』

その瞬間、海中から波飛沫を立てて、一個航空戦隊、が現れた。アングルド・デッキを備えた戦闘空母と、何かの発射口、を備えた超弩級戦艦にその護衛艦が海から空へ一直線に上昇していく。このとんでも無い光景にルッキーニは啞然とし、息を呑む。

その超弩級戦艦は『戦略指揮戦艦 改アンドロメダ級一番艦 しゅんらん（春蘭）』。

戦後にアンドロメダ級の改良タイプとして作られた最新鋭艦で、艦首の拡散波動砲が3門に強化され、各種武装も増加された連邦軍太陽系防衛部隊の次期旗艦。その力を発揮する時が来たのである。

「嘘お！？せ、戦艦が空飛んでる……」

啞然としているルッキーニをよそに空母から通信が入る。

『フランチェスカ・ルッキーニ少尉へ。直ちに本艦に着艦して補給を受けられたし』

『え！？なんであたしのこと知ってるの？』

驚きと共にルッキーニはシャーリーや空母の通信に促されて、赤城、への着艦コースを取る。

どういう訳か甲板にはストライカーの着艦受け入れ準備が整えられている。

（これがシャーリーや坂本少佐が言ってた義勇軍？でも…ただの義勇軍にしては凄い装備だよ、これ……。）

彼女は半信半疑で着艦する。不思議な気持ちで赤城の艦容を見つめながら。そしてシャーリーがジェット戦闘機で戦っている事。訳がわからなかった。シャーリーが言うのだから味方には違いないが…。

空には、未来兵器 たるビーム兵器やミサイルが飛び交っている。

「もしかして、敵は人間なの……？」

この時ルッキーニは周囲の様子から薄々と感じていた。敵が自分達と同じ人間同士でないかと。そうでなければこちらの攻撃に機敏に対応できるはずはないし、統制の取れた集団戦闘行動を取れるはずはない。体に、人間同士の殺し合い、をしている事への悪寒が走るのを感じ、ただ震えていた。彼女のような若い少女に本来の戦争の形 は容赦なく重くのしかかっていった。

そして彼女の頭上を一機のガンダムが通りすぎていった。そのガンダムの名は、HⅠーⅤガンダム、。アナハイム・エレクトロニクスにてロールアウトしてから間もない機体だが、赤城の機体の状況を鑑みて、急遽実戦投入されたのだ。本来はロンド・ベルへの補給物資であり、かのアムロ・レイの乗機となるはずのものだ。しかし今動かしているのは、ガンダムF91、のパイロットであった『シーブック・アノー』。彼は愛機でない、ガンダム、を動かすことに抵抗があるが、ニュータイプの素養を備えているためか、それなりに動かしてみせるのは流石である。

「何……アレ」

ルッキ―ニは騎士を思わせるH I―vガンダムの姿に不思議に安心感を覚える。

（なんでだろう……アレを見ると安心感が広がる……それにカッコいいな）

H I―vの青を基調とした、中世の騎士のような流麗なフォームは、これならどうにかしてくれる、という安心感と頼ましさをルッキ―ニに与えていた……。

―続く―

間章その8 | 「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて

と、言うわけで地球連邦軍対ティターンズの本格的戦闘の始まりです。

第20・1話「エースの交錯」(前書き)

高町なのはとストライクウィッチーズの小説版の主人公の穴吹智子の一瞬の出会いのショートショートです。

第20・1話「エースの交錯」

—こちらは2199年。地球連邦軍に出向し、実戦訓練を受けている穴吹智子や黒江綾香はXライダーとの訓練を終えていた。2人がかりで挑んだのに関わらず、いささか彼に翻弄された感が強かった。Xライダーの方が智子や綾香よりも遥かに実戦経験が長く、武術の達人（これは親から仕込まれたとの談）であったせいでもあった。彼はねぎらいの言葉をかけると「調べごとがある」との事で、東京の方に向かっていった。綾香も横須賀鎮守府（この頃の連邦軍は過去数度の宇宙戦争の結果、政府内で改めて実権を諸渥した旧・日本国の手によって一部大日本帝国時代の用語が隠語的に用いられるようになっており、正式名称は地方総監部なのだが、内分の隠語で、鎮守府、と呼ばれていた）に元の世界から持ち込まれた新型ストライカーユニットのテストに駆り出され、軍の車で横須賀に向かっていった。

そのため一人残される形となってしまった智子は渋々ながらも近くの軍港に向かった。

片手にはこの世界で21世紀ごろから普及したデジタルオーディオプレーヤーを持っている。その中に入っている音楽は意外な事だが、現在（22世紀時点）のロックなど。

本人曰く「この時代の音楽も悪くない」との事で、この時点で名が知られているFIRE BOMBERの楽曲などに親しんでいた。よく聞くのは「LIGHT THE LIGHT」や「NEW FRONTIER」、「REMEMBER 16」。彼女がこの時代の雰囲気慣れてきた事を尿実に表示している。因みに彼女の服装は元の世界から持ち込んだ巫女装束と小具足。その替えを2・3着用意してのローテーションである。そのため街を歩いていると神社の巫女に間違えられるとか。

彼女は道中、これらの音楽を聞きながら目的地の軍港へ足を運んだ。

「♪」

—「NEW FRONTIER」を時頼口ぐさみながら。

目的地にはここからは30分〜1時間ほどだろうか。歩いては時間がかかるが、たまにはいいだろう。智子はそう思いながら軍港に歩を進めた。

しばらくして軍港に着いて軍港の司令長官に軍港内での行動許可をもらうと、軍港の上空で模擬戦が行われているのを目にする。それはなのはとD-1の模擬戦で、ハンドレールガンの火線（模擬弾）を避けるなのはの姿が見えた。扶桑海の巴御前、の名を頂いた智子としてはどうしても血が騒いでしまう。別世界のウィッチ（魔導師の事）がどのような物か気になるが、この軍港にはストライカーユニットが配備されていないのが残念だった。この世界と扶桑皇国および連合軍はまだ国交が成立して間もないし、連合軍側もおいそれと渡すわけにはいかないための判断だろうと感ぐった。

「最新のストライカーユニットが私のもとに回されただけでも良しとするしかないか……」

そう自分を納得させると、あの時、の坂本美緒よりも幼い（501 統合戦闘航空団のルッキニーと比べてもさらに幼い）少女が並のウィッチ以上の空戦機動を見せているのに仄かなライバル心を芽生えさせていた。一そして。一瞬であるが、なのはと智子の視線が交錯する。

別世界のエース同士の一瞬の出会い。

一上空を猛スピードで通過するなのは。それを見つめる智子。彼女は後になんとなく、あの子とはまた会うかもしれない、と友人のティアナ・ランスターに独白している。ティアナは智子が目撃したその人物の特徴から大体の察しはついていたらしく、その子、たぶん『あの人』かも、と言った。

因みにその際の会話は以下の通り。後日、智子が村雨邸に泊りに来た時の事である

「あの子の事、知ってるの？」

「ええ。その子は後々に私の、上官、になるはずの人よ。前に本人から話を聞いてはいたけど、まさか本当だったなんて」

「どういう事？」

「実はね……」

ティアナは以前、元の世界でなのはから聞かされた話を智子にした。話によればティアナの上官の、高町なのは、は時空管理局に入局して数年経った時に不思議な体験をして、第120管理外世界…つまりこの世界に一時滞在したことがあると。智子が目撃したのは恐らくその時の、高町なのは、だろう。

「その子……なのはちゃんには会わないの？」

「私はその頃のはさんとは別の時間軸の人間だから会うのには

抵抗あるわ……。ただなのはさんがどんな気持ちで空を翔んだのか……それが気になるの」

「……ふう。素直じゃないわね」

「おたがいさまよ」

「そういえば今度ストライカーユニット……四式でも五式でもいいから、使わしてくれないかしら？ あれだったら私でも飛べるかも……」

「その前に使い魔と契約しないと。武器や戦闘服も用意が必要よ？」

「それは綾香さんに頼んでおくわ」

「ストライカーユニットの方は私がなんとかしとくわ。上も私が言え文句は付けられないから」

「たのんだわよ」

2人はそんな事を言いながら、村雨良の作ったレトルトカレーを舌つつみしていた。

「くか、辛いー！！」

「て、ティアナ！？ む、村雨さんく水うー！！水を早くー！！」

「わ、わかったー！！」

その後、てんやわんやの大騒ぎとなったのは言うまでもない。

第20・1話「エースの交錯」(後書き)

ティアナ・ランスター？穴吹智子です。いかがでしょうか。

マクロスのFIRE BOMBERを名前だけですが出しました。

間章その8 「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて

連邦軍対ティターンズその2です。

一さて、HⅠーVガンダムを投入した地球連邦軍は制空権の奪取に向けての行動を開始。

ブリタリア上空は未来兵器のショールームとも言える状態になった格好となり、ビームやミサイル、戦艦のメガ粒子砲やショックカノンが入り乱れていた。

赤城に着艦したルッキーニは空母先進国である扶桑の空母と比べてもさらに真新しい艦容なのに目が奪われる。飛行甲板と干渉しない配置の艦砲（ビームなので砲撃の排煙を気にする必要がない）、着艦と発艦の役割を分けられた飛行甲板など……小説でも見ないような未来的な艦容に驚くと同時に、上空で物凄いスピードでドックファイトを行う連邦軍のコスモタイガーの姿が目に残る。ストライカーユニットなど論外では無いか、と思わせる程に圧倒的なスピードだ。軽く音速は突破しているだろうか。

「……みんな、大丈夫かな？」

そう呟きながら亜音速〜超音速の戦いが繰り広げられている青い空を見上げる。晴天の澄み切った青空に浮かぶコスモタイガーの太い飛行機雲。

それはルッキーニにここで繰り広げられている戦いが今までとはレベルの違う代物であることを教えていた。

そして彼女の前でまた一機のコスモタイガーが発進態勢に入る。プロペラ機とは比べようがない流線型の機体。そしてどう見ても、扶桑の新型機、にしか見えない塗装（この時期に扶桑出身のウィッチ

に配備され始めていた零式艦上戦闘脚五二型や紫電に用いられた塗装とほぼ一致する塗装）。何がいったいどうなっているのだろうか……。

こちらはミーナ。自分の能力をも阻害するジェット戦闘機の機動性の前に苦戦を強いられていた。音速の壁を容易く突破し、この時代の飛行機からは想像もつかない空中戦闘機動を見せている。その戦闘機の名は九九式宇宙艦上戦闘機「ブラックタイガー」。

この時代の戦闘機とは隔絶した速さを見せてつけるこの機に翻弄され、反撃もままならない。

スピードや特性がプロペラ機の延長線上でしかないレシプロストライカーユニットでは

この時期に実験段階にある第一世代から見ればかなり発達し、洗練されたジェット戦闘機に追従するのは不可能に近かった。BF109（我々の常識で呼ぶならば、メッサーシュミット、というべきか）G型の魔導エンジンを限界まで吹かしても、まるで自分が静止しているかのような錯覚さえ覚えてしまう。

「は、速すぎる……ッ!!」

ブラックタイガーはマッハ7の速度を出すことが可能なエンジン出力とそれに見合うだけの機体構造の頑丈さを持つ。そのためミーナを振りきって連合軍の軍艦に攻撃を加えることも可能なのだが、わざと遊んでいるようにも思える。それとミーナ自身が冷静さを欠いてしまっているせいもあって、すっかり翻弄されている。それもしかたがない。相手は瞬く間に基地を火の海にし、連合軍の戦艦を一発のロケット弾攻撃で大破に追い込める火力を持ち、なおかつこの世のものとは思えない速さを持つものだから。

「……くっ!!」

ブラックタイガーの放った対空ハイマニューバミサイルが彼女めがけて突進する。

サーニャ・V・リトヴァグの手持ち武装「フリーガーハマー」のロケット弾とは次元が違う速さと誘導システムが装備されているロケット弾は必死に回避行動を取る彼女を嘲笑うかのように追跡してくる。」

—いくら速くても急激な回避にはついてこれないはず!!—

ミーナはミサイルがいくら速度が速くても急激な回避行動には追従できないだろうと踏み、

直撃寸前で小回りがきくレシプロ機の特性を生かした機動を取った。そこは、公爵、の異名を取る彼女の機転を効かせた。

しかしミサイルの一機が爆発した。—ミサイルに仕込まれていた近接信管が作動したのだ。

因みに、近接信管、とは、かつて米海軍が第二次世界大戦末期のマ

リアナ沖海戦より用いた兵器で、同海戦での日本海軍の敗北の要因ともなった事で有名。それとは技術的には違うが、原理的には同じ物が炸裂した。

近距離で炸裂したため破片こそシールドで防いだもの、爆風までは防ぎきれ無かった。爆風で吹き飛ばされ、バランスを失って失速してしまい、キリモリしながら高度を落としていく。爆風の衝撃で気を失いかける。

そこへ、声、が響き渡った。それはミーナにとって一番の戦友である一人のウィッチの声だった。

「ミーナアアアアッ！！」

「……美緒ッ！！」

「……クソッ！！間にあええッ！」

一現れたのは大日本帝国海軍の士官服を纏った（正確に言えば扶桑皇国海軍だが）坂本美緒だった。リゼルにエスコートしてもらい、この空域に到着したのだ。纏っているストライカーユニットは「雷電」。美緒は落ちていくミーナをなんとか受け止め、ひとまずその場から離脱する。

「……美緒……？」

「ああ。……間に合って良かった」

美緒の言葉通り、轟音が響く。ウェイブライダー形態のRGZ-95「リゼル」とMSZ-006A1「Zプラス」が美緒とミーナを守るかのように編隊を組んで現れ、2人の目の前で変形を行う。ただしミーナは美緒の顔を見て安心したのか気絶している。

『少佐、援護は私たちに任せてください。そちらのウィッチはリゼ

ルの、ホーク1、コールサインに運ばせます』

「頼む。……では行くぞッ!!」

リゼルの一機がミーナを運んでいくのを見届けると、美緒はZ系モバイルスーツの援護を受けつつ

2個小隊を率いて航空戦の王道とも言えるシュヴァルム戦法（ロツテ戦法とも）でブラックタイガー隊に挑もうとする。

『…少佐!! 回避を!!』

「…何っ!？」

不意に一機から回避を促す通信が入る。すると進行方法から強力なメガ粒子砲がやって来る。

とっさの事だったが、美緒は見事に回避してみせる。しかし不意を突かれての援護射撃に戸惑を見せる。

「長距離射撃だと……?」

一艦船はいないからモバイルスーツだとして、長距離からの射撃にも関わらず正確にこちらを狙撃できる照準機能を持つモバイルスーツと言え……。

美緒はとっさに頭の中で艦隊で見たデータベースを思い出し、記憶を探る。多種多様なモバイルスーツのバリエーションの中でも、狙撃手の役割を負って開発され、そのように運用されたモバイルスーツは主に一年戦争時代に作られている。連邦軍ではジムスナイパー系列。ジオン公国軍はゲルググイエーガーがそれに該当する。ティターンズが元々は連邦軍の特殊部隊だった事や、ゲルググイエーガーが末期の製造だった故に公国軍残党の保有数が希少な事を考えると、やはり前者のほうが合点が行く。しかし初期型の、スナイパー

カスタムは完全に旧式化し、ティターンズも辺境の地の警備にしか使っていないとの事だから、その系列で唯一第一線で活躍している機体……ジムスナイパー？しか無い。

「ジムスナイパー……？か」

その通りだった。美緒を狙い撃ちしたのは専用の狙撃用装備を持ったジムスナイパー？だった。

連邦軍内でも希少とされた、最強の第一世代型ジム、は静かに獲物を待ち受けていた……。旧ティターンズカラーのダークブルーの巨体と盾。

近代化改修の証として狙撃用ライフルが新型かつ小型の物に替えられ、より、狙撃手としての風格を醸し出していた……。

間章その8 —「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて

ジムスナイパー?のカッコよさは異常(笑)。とてもジムとは思えない。

第21話「ティアナ・ランスター、扶桑皇国陸軍に入隊す！」（前書き）

今回はリリカルなのはの中でも隠れがちな逸材で、執務官にはなれたものの、もう一つの、空を飛ぶ、夢をかなえられてはいないティアナ・ランスターがストライクウィッチーズ世界に行って、ウィッチになります。

短いですが、クロスオーバーをお楽しみください。

第21話「ティアナ・ランスター、扶桑皇国陸軍に入隊す！」

一さて、ティアナ・ランスターは、友人のウィッチ「黒江綾香」と「穴拭智子」のツテで、扶桑皇国製の航空ストライカーユニット「五式戦闘脚」を極秘裏に入手。その過程で一度、綾香と共に扶桑皇国を訪れる事となった。（その際に地球連邦軍とのコネクションを得た）現地で数カ月ほど訓練を受ける必要があるが、どうにか使い魔との契約も済ませ、便宜的処置で書類上、扶桑皇国に亡命した外国人、とし、軍曹として、扶桑陸軍に入隊した。（海軍に入らなかった理由は今は陸軍の方が色々と経験つめるため）

綾香が自分に対し、色々便宜を図ってくれたおかげで、どうにか自分の魔道師になった際の、夢、がもう手の届く所にまで着ている。その事を思い、感極まってしまう。

（感動だわ……やっとあたしは……夢を叶えられるんだ！！）

……感極まって、涙を流すほどに感動しているティアナだが、この世界の実情を考えると、そうも言ってもらえない。常識はずれの金属生命体のような異形の敵、ネウロイ、なる敵が跳梁跋扈していて、さらに次元を超えて地球連邦軍の介入が必要になるほどの色々な揉め事も起こっているらしい。幸い扶桑皇国は最前線からは離れているので、そういう事とは無縁なのだが、何時そうなるとも限らないので気は抜けない。因みに今の彼女の服装は管理局の制服ではなく、扶桑皇国陸軍（大日本帝国陸軍に当たる）のウィッチに多い戦闘装束姿。つまり巫女装束と小具足姿である。元の世界の上司のなのはやフェイトが見たら、あまりの仰天の事実が目が点になるだろう。魔道師としては空戦適正と才能が無いとの烙印を押された彼女だったが、ウィッチとしてはどうだろうか。

「いっけえ！！」

そんな彼女は今日もウィッチとしての猛訓練を受けていた。纏っているストライカーユニットは五式戦闘脚。郷に入っては郷に従え、の要領で持っている武器はデバイスの「クロスミラージュ」ではなく、綾香から渡された日本刀とホ5 二式二十耗機関砲である。訓練は辛い、なのはの下で訓練を続けていたおかげでへばる事無くついて行けた。つまりこれは隠れていた才能が魔導師とは似て異なるもの、ウィッチ、として目覚めた事で開花したのだ。彼女の他のウィッチに対する利点は魔力を補給・供給する器官、リンカーコア、が備わっているために魔力減衰を気にする必要が全く無い事。この強みが上層部が彼女に目をつける事になる原因となる。

扶桑（日本）の月月火水木金に例えられる、猛訓練についていける体力があるのは、元の世界ーミッドチルダーでのなのはの猛訓練のおかげだから、これはなのはに感謝しなくてはならないだろう。

そして、そんな彼女が扶桑皇国陸軍で穴吹智子、黒江綾香に次いで友人関係になった

ウィッチがいた。いながきまみ稲垣真美。短髪の少女で、日本人形（扶桑）を思

わせる容貌を持つ第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」所属のウィッ

チ。見かけによらず、88ミリ砲アハトアハトをも難なく持てるほどの怪力の持

ち主。背は現在（2010年）の水準から見ると、とんでもなく低い120cmほどで、下手すれば小学生に間違えられそうだが、れつきとした16歳（！！）である。彼女はアフリカから本国の扶桑皇国の指示で一時帰国していたが、そこでティアナと出会ったのだ。因みに彼女の階級は曹長である。

ティアナは飛行訓練でそこその成績を収め、飛行学生の中では優

秀な部位に入っていた。

模擬戦では、機動六課での経験を活かして、教官の扶桑王国のエース達に一泡吹かせていた（時には砲撃魔法をも用いて）。こうしたこともあって、ティアナが一介の飛行学生にしては妙に、実戦慣れ、している事に疑問に思った真美が基地を訪れていた黒江綾香に聞いたところ、こんな答えが返ってきた。

「ええっ！？ティアナって別の世界のウィッチなんですか！？」

「ああ、私もアイツから一度聞いただけなんだがな。本人曰く実戦経験はそれなりに積んでいるそうだ。ただし向こうじゃ陸戦魔導師だったらしい」

「元々陸戦だったのに、何でまた航空歩兵に志願を？」

「アイツは元々空戦魔導師になりたくって、管理局、に志願したそうだが、色々あって陸戦魔導師として活動していたんだ。心のなかで夢を叶えたい気持ちを燦せながらな：ツイてない奴だよ……。」

綾香はティアナの心情、夢を分かっていた。だから真美に教えたのだろう。空を飛びたいという気持ちと憧れを持ちながら、適正なしと言われたティアナの無念さを。それを自分が晴らしてやりたかったと綾香は言った。管理局のこともこの時期では既に連合軍の間でも知れ渡っているの、このような会話がなされるのだ。（最も、管理局の体制にはいささか疑念は持っている。警察機構と裁判所機能が一緒になっているというのは、三権分立がきちんとなされていないことであり、前近代的に感じてしまう）

「……だから上層部の装備担当者をチョロマカして、あの子に新鋭のストライカーユニットを与えたんですね」

「そうだ。アイツの話を聞けばそうもしたくもなるさ」

「……大尉」

「お前も協力してくれるか、稲垣」

「もちろんです!!」

二人は手を握り合った。これ以後、二人は何かと連絡をとりあって協力関係を結ぶが、それはまた別の話。

「さて、ヒョッ子どもをしごいてやるか」

「あまりいじめないでくださいよ?」

「分かってる」

綾香は実戦のカンを取り戻すべくティアナら飛行学生との模擬戦に臨む。

そして稲垣真美の見守る中、ティアナは空を飛ぶ。あの人……高町なのはに近づくために。空を飛翔する五式戦闘脚。彼女は魔導師としてでは無く、ウィッチとして目覚める事で、自身の悲願を叶えたのだ……。こうなっては、自分の服装に恥ずかしさを感じることは一切無くなっていた。この世界の、常識にすっかり染まりつつある証拠である）後にその格好のままで機動六課へ帰還した際に六課の事情を知らない面々から色々と質問の嵐となったのは言うまでもなかった。

第21話「ティアナ・ランスター、扶桑皇国陸軍に入隊す！」（後書き）

稲垣真美および黒江綾香の出典は漫画「ストライクウィッチーズ
キミとつながる空」からです。是非ご参照下さい。

ティアナ・ランスターINストライクウィッチーズはいかがでしょう。
う。巫女装束を纏って、パンツじゃないから恥ずかしくないもん、
なティアナを見たら、なのはなら気絶しかねない……。

第22話「諸君、私は戦争が好きだ」(前書き)

今回はスバルとティアナがいなくなった後のミッドチルダで何が起ったかを書きます。(HELLSING原作でのナチス残党の強さをそのまま書いていますので、蹂躪気味ですがご了承ください)

第22話「諸君、私は戦争が好きだ」

一新歴75年 ミッドチルダ

ティアナとスバルという2人の若手のエースを失った機動六課はその組織力を大きく減じてしまい、
今や隊長陣自ら前線に立つを得なくなっていた。

そして時空管理局が次元犯罪者「ジェイル・スカリエッティ」のアジトを突き止め、その報を受けた機動六課は残存戦力をつぎ込んでの攻略作戦を実施した。

一だが、彼等はそこで思わぬ蹉跌を余儀なくされる。それは……。

この時代のミッドチルダが最も恐れていた旧時代の遺産「聖王のゆりかご」と呼ばれる宇宙戦艦の目覚めは正に絶望的な物だった。それは管理局の資料で記されていない質量兵器による武装が施されていたためである。元々管理局の保有する下手な艦船より遥かに強力とされていたが、それがさらに強化されていたのだから。

浮上の際には、目覚めの駄賃、とばかりに管理局の最新最強の艦「XV級大型次元航行船」を数隻ほど血祭りに挙げ、その力を示した。月明かりの照らす夜にその艦体は国民に恐怖というものを示していた。

「まだ復活したばかりのはずなのに……なんて事だ」

ある局員は浮上する「聖王のゆりかご」が最新鋭艦を容易く屠る光景に思わずこう呟いたという。その言葉の通り、ゆりかごは誰かの意志のもとにミッドチルダを蹂躪していく。首都クラナガンへの爆

撃に使われたのはかつて、旧・ドイツ軍が用いた「V1飛行爆弾」や「V2ロケット」のマイナーチェンジ版。一そう。高町なのはと八神はやてにとっては故郷で人類が引き起こした忌ましき、世界大戦、の遺物。戦いの元凶「ナチス・ドイツ」第3帝国の用いた兵器だったのだ。

ゆりかごの中でほくそ笑む男たちがいた。それはこの世界にはおよそありえない服装。旧ドイツ国防軍の軍服を纏った男たちだった。

「全くもって、実に面白い。あのクラナガンがこうもあっさりと堕ちるとは」

「中尉殿、もはや管理局の防衛網は無効です。降下猟兵の投入を許可します」

「許可する。少尉、キミが指揮を取りたまえ。機動六課に恐怖というものを教えてやれ」

「ハッ!!」

ジェイル・スカリエッティをも手駒として扱う、元ナチスドイツ武装親衛隊将校。彼等是一个の目的のもとに行動していた。

全ては別次元より中継されたこの演説にあった。一人の肥満体の眼鏡男の奮い立つ演説。

、諸君 私は戦争が好きだ
諸君 私は戦争が好きだ

諸君 私は戦争が大好きだ

殲滅戦が好きだ

電撃戦が好きだ

打撃戦が好きだ

防衛戦が好きだ

包囲戦が好きだ

突破戦が好きだ

退却戦が好きだ

掃討戦が好きだ

撤退戦が好きだ

平原で 街道で

塹壕で 草原で

凍土で 砂漠で

海上で 空中で

泥中で 湿原で

この地上で行われるありとあらゆる戦争行動が大好きだ

戦列をならべた砲兵の一斉発射が轟音と共に敵陣を吹き飛ばすのが好きだ

空中高く放り上げられた敵兵が効力射でばらばらになった時など心がおどる

戦車兵の操るティーゲルの88mmが敵戦車を撃破するのが好きだ
悲鳴を上げて燃えさかる戦車から飛び出してきた敵兵をMGでなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

銃剣先をそろえた歩兵の横隊が敵の戦列を蹂躪するのが好きだ

恐慌状態の新兵が既に息絶えた敵兵を何度も何度も刺突している様など感動すら覚える

敗北主義の逃亡兵達を街灯上に吊るし上げていく様ななどはもうたまらない

泣き叫ぶ捕虜達が私の振り下ろした手の平とともに金切り声を上げるシュマイザーにばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

哀れな抵抗者達が雑多な小火器で健気にも立ち上がってきたのを80cm列車砲の4・8t榴爆弾が都市区画ごと木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

露助の機甲師団に滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に守るはずだった村々が蹂躪され女子供が犯され殺されていく様はととても悲しいものだ

英米の物量に押し潰されて殲滅されるのが好きだ

英米攻撃機に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回るのは屈辱の極みだ

諸君 私は戦争を地獄の様な戦争を望んでいる

諸君 私に付き従う師団戦友諸君

君達は一体何を望んでいる？

更なる戦争を望むか？

情け容赦のない糞の様な戦争を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の鴉を殺す嵐の様な闘争を望むか？
」

『戦争！ 戦争！ 戦争！（クリーク！！クリーク！！クリーク！

！）
』

よろしい ならば戦争だ

我々は渾身の力をこめて今まさに振り降ろさんとする握り拳だ
だがこの暗い闇の底で永き時を堪え続けてきた我々にただの戦争で
はもはや足りない！！

大戦争を！！

一心不乱の大戦争を！！

我らは僅かに、数個師団、数万人に過ぎない敗残兵に過ぎない
だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している
ならば我らは諸君と私で総力100万と1人の軍集団となる

我々を忘却の彼方へと追いやり眠りこけている連中を叩き起こそう
髪の毛をつかんで引きずり降ろし眼を開けさせ思い出させよう
連中に恐怖の味を思い出させてやる

連中に我々の軍靴の音を思い出させてやる

天と地のはざまには奴らの哲学では思いもよらない事があることを
思い出させてやる

、数万人、のあらうる化物の戦闘団で

世界を燃やし尽くしてやる

最後の大隊大隊指揮官よりミッドチルダ方面の全部隊へ
目標首都クラナガン上空！！

第二次ゼーレヴェー作戦第一弾 状況を開始せよ 逝くぞ諸君、

『逝くぞ、前線豚共。しっかり付いて来い』

これがかつての亡霊「ドイツ国防軍」の目覚めであった。ゆりかごからは降下猟兵が次々と射出され、地上に降下していく。ドイツ国防軍の最後の制式小銃「StG44」を携え、対戦車装備のパンツァーファウストなども装備した兵士もいる。その様子をレーダーで確認した時空管理局側は狼狽した。

「し、市街上空から質量兵器を持った兵士が多数降下してきます！
！」

「この地上本部を直接狙うか……どこの馬鹿だ！？」

「こ、これは……そんなバカな！？ベルカ兵です！！」

「バカな……あの国は滅んだはずだ！？」

このミッドチルダで過去存在した国「ベルカ」。大昔のベルカという国はドイツ語が使われるなど、ドイツとの繋がりが指摘され、ある学説では、戦乱期のベルカの軍組織などは管理外世界のナチス時代のドイツとよく似ていた、と言われていた。ミッドチルダで管理外世界を知らない人間がドイツ兵をベルカ兵と見間違えるのも無理はなかった。

かくして役者は全員演壇へと登り、惨劇は幕を上げる。

『諸君、夜が来た』

無敵の敗残兵諸君

最古参の新兵諸君

万願成就の夜が来た 戦争の夜へようこそ!!
『と後の世に形容されるミッドチルダの惨劇が幕を開ける。

、化物、と化したかつてのドイツ降下猟兵の精鋭達は統制の取れた行動で管理局の防衛網を無力化していく。そしてその光景を目にした19歳のなのはとフェイトはこの一言だけ言ったという。

『ここは………地獄だ………』

地獄と呼ぶに相応しい阿鼻叫喚の光景はまるで、ミッドチルダ、が地球の大災害で滅んだ街、ポンペイ、や神話の、ソドムとゴモラ、になったと思わせるほどに赤く燃えていた。

ここにクラナガンは吸血鬼などの人外が跳梁跋扈する、死都に成り果てたのだ。

第22話「諸君、私は戦争が好きだ」（後書き）

もし、ミッドチルダをHELLSINGの最後の大隊、もしくはそれに準じる軍団が襲ったら？それを形にしました。

少佐に通信での演説だけ出てもらいました。場所と部隊規模のころを変えた以外はほとんど原文です。

それとなのはにはよくドイツ語がでくるので、古代ベルカⅡ漂流してきたドイツ人達の子孫、としました。

第23話「約束の空」(前書き)

引き続きティアナ・ランスターINストライクウィッチーズです。

第23話「約束の空」

ーティアナ・ランスターは1944年5月頃には、扶桑陸軍の飛行学校生として扶桑皇国の航空基地に滞在していた。数ヶ月の訓練で、ストライカーユニットの扱いにもだいぶ慣れ、訓練でも五式と特性の違う四式戦闘脚「疾風」も使いこなせる様になっていた。

ちなみに、四式戦闘脚「疾風」は、キ84、のキ番号を持ち、（史実でも日本陸軍が機体の試作順の記号をこう呼んでいた。前線でもよく用いられた）中島飛行脚、（史実での中島飛行機）が、キ44、二式戦闘脚「鍾馗」の直系発展型として開発したストライカーユニットであり、一式戦闘脚、隼、に代わる主力制空戦闘脚である。それを扱えるようになったのと、飛行学校の成績がそこそこ良好なため、ティアナもどこかの独立戦闘航空隊に配属されるだろうとの噂が立っていたが、それは現実になった。

ー飛行訓練を終え、巫女装束姿で翼を休めていたティアナは学校長からの呼び出しが書けられ、そのままの格好で校長室に向かった。

「失礼します」

ロックをし、敬礼しつつ室内に入る。そこには学校長と陸軍参謀本部の武官がいた。なにやらただごとでは無いらしい。最初に校長が切り出した。

「君も第505統合戦闘航空団壊滅の報は聞いているだろう？」

「はい。東部戦線の要だった統合戦闘航空団ですね。たしか、向こう側のティターズズの攻撃で壊滅したと聞いていますが、それが何か？」

「ウム……それが問題になっているのだ」

一校長の言う通り、505統合戦闘航空団の壊滅によって東部戦線は崩壊、オラーシャ（史実でのロシア・ソ連に当たる）連邦の領土は欧州側が徐々にティターンズ側に制圧されていつているのが現状だった。いや、短期間の間に首都へ侵攻させなかった、点では双方の技術格差にして、優に数百年にもなる軍隊相手によく持ちこたえていると言ったほうがいいだろう。

「奴らはアフリカ方面にも部隊を派遣し、第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」……もうじきストームウィッチーズに変わるが……と既に一戦を交えている」

「……!!」

ティアナは仰天した。第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」と言えば、稲垣真美の所属している飛行隊ではないか。その部隊とティターンズが一戦交えたとはどういう事だろうか。

「この写真を見たまえ」

その写真は現地に派遣されていた地球連邦政府の駐在武官が撮影した物で、この時代では珍しいであろう、カラー写真だった。映っているのは2連装砲を持った、明らかにこの時代では有り得ない形状を持つ戦車が陸戦用ストライカーユニットを纏ったウィッチを追い回している様子だった。そしてもう一枚は、アフリカの星、との異名を取り、地球連邦軍側に、ニュータイプ、ではないかの噂も立てられているエース『ハンナ・ユステイナ・マルセイユ』大尉が向こう側製のジェット戦闘機や爆撃機に戦いを挑んでいる。写真に写っているジェット爆撃機……というよりは攻撃機の姿はティアナにもピンと来た。なのはたちの世界でも使われている、米軍の古参機で

あり、近接航空支援で名を馳せた「A-10 サンダーボルト？」
そのものだった。

『そんなッ……サンダーボルト……!？』

ティアナはその攻撃機の名を言った。—A-10 サンダーボルト？。かつてのアメリカ軍がかの、タンクキラー、ハンス・ウルリッヒ・ルーデルの助言を得て開発したと言われる名機。

その力は1990年代の湾岸戦争などの実戦で示され、武装に強力なガトリング砲を装備しているのが特徴である。あの世界では200年経ってもなお現役なのか。（エンジンなどは時代相応の物に変えられてはいるだろうが）

「そうだ。この攻撃機、サンダーボルト、とか言う……未来攻撃機の前に陸戦ウィッチ達は一転して、駆られる側、になってしまい、死傷者も出ている」

校長曰く、強力な戦車部隊に加え、このサンダーボルトの近接航空支援が行われるようになってからは戦線がズタズタにされつつあるの事。武官は深刻な顔で校長の言葉に続いて言う。

「これらの戦力の前にさしもの第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」……いや、「ストームウィッチーズ」と言えども戦線を維持するのが困難となりつつある。無論各方面の部隊も同様だ。我が皇国としては不本意ではあるが、今次学年生を繰り上げ卒業させて各方面に補充要員として派遣することが決定された。君に来てもらったのはその事を直接通達するためだ。君の配属先は追って通達する」

「……分かりました」

ティアナは真剣な顔で武官の言葉を聞いていた。実戦に駆り出され

るのは覚悟していたが、いきなりそれが訪れるとは……。

武官らの説明が終わると、自室に戻り、何時でも出れるように荷造りする。そこで写真立てを四個ほどカバンに入れる。一枚は親友のスバル・ナカジマとの、2枚目は機動六課のメンバー全員との、3枚目はウィッチとしての友である黒江綾香や穴拭智子、稲垣真美との、そして最後の写真は飛行学校の級友達との物だ。数カ月の間という、短い期間であるが

苦楽を共にした仲間達との日々は楽しかった。色々な出来事もあった。それを思い、思わず目に涙が滲んでしまう。ここ数日の内に配属先も決まり、級友達との別れも訪れるだろうから、今は……。

—ティアナは窓に映る夕日の光を浴びて黄昏ていた……。

そして数日後、彼女に正式な辞令が出された。かいつまんで表すと「ティアナ・ランスター、扶桑皇国陸軍軍曹に任ズ。次いで、第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」配属を命じる」というものだった。こうして彼女はアフリカ戦線に贈られる事となったのである。激戦地であるかの地で彼女は如何な活躍をするのであろうか……。

『アフリカ……良いわ。元機動六課のフォワードをなめんじゃ無いわよ』

と心の中で毒づいたのは言うまでもない。これがティアナの運命を変えた瞬間。扶桑陸軍軍人としての第一歩を踏み出した。彼女に取っては第三の人生のターニングポイントとなった。

第23話「約束の空」 (後書き)

いうわけで、ティアナのウィッチとしての初実戦はアフリカ戦線です。次回は多分ハンナ・ユステイナー・マルセイユを出せるかも…。

第24話「Mighty Wings（マイティ・ウイング）」（前書き）

短いです、投稿させていただきます。

第24話「Mighty Wings（マイティ・ウイング）」

ーアフリカ。この、似て非なる、世界においても我々の知る地名と同様の名前で呼ばれる地は1940年以降、人類と、ネウロイ、との激戦地となっていた。その中で第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」はその人類側の反攻を支えていた。しかし偶発的な事故で次元を飛び越えたティターンズ残党軍がこれに介入。戦況は混乱に陥ってしまった。彼等がアフリカ方面に投入したのはティターンズが存在した時期には珍しくなったであろう、通常兵器を主体とする方面軍。部隊の主力は、地球連邦軍最後のMBT（主力戦車）、61式戦車と形式問わずの古新東西のジェット機（時代相応のエンジン・アビオニクスには換装済み）。ティアナを驚愕させたA-10 サンダーボルト？もその配備機材の一つ。その武装の有用性から、就役から百年以上がたっても現役に留まり活躍を続けてきた。この戦いでは61式の近接航空支援を務めるべく、ウィッチたちの前に姿を見せた。ガトリング砲の火力を以てして陸戦ウィッチの緒戦能力を奪ったり、爆撃任務にも活躍を見せていた。「アフリカ」のウィッチ達をして苦戦させられたのはサンダーボルトの防御力である。戦いでは、この時代では飛行機としては重装甲を誇る本機の耐久性がモノを言った。MG34などの火器では元々、23mm徹甲弾などにも耐えるように設計された上に、改修で素材が最新鋭の物にされたサンダーボルト？の装甲を完全に穿つことはできず、ボディを穴ぼこにするのが精一杯だったり、エンジンカウルを吹き飛ばして飛行不能と判断しても、実は帰投可能だった、というケースもあった。

旧・ティターンズ アフリカのとある方面軍基地

この基地の格納庫には、骨董品、とも形容され、外見上は博物館に陳列されるような代物がズラリと並んでいた。主に旧時代の名機で固められ、かつての超大国、アメリカ合衆国、のF-8 クルセイダーやF-14 トムキャットやフランスのミラージュ2000……まるでかつての日本の少年漫画さながらの様相を呈していた

「へえ……よくこんな博物館行きの代物が残ってたもんだ」

一人のパイロットが格納庫に收容されている戦闘機の陣容に関心をもつ。ここにあるのは彼等の常識から言えば、既に退役して久しいはずの旧時代の遺物ばかりだからだ。

「展示飛行用機材として保存されていたのさ。最も、ジェットコアブースター、や、セイバーフィッシュ、最終型の部品を使って現在的高速戦闘に耐えられるように改造してあるがね」

一かつての国々が採用していた戦闘機の数々は大半が戦争博物館行きか、解体される運命を辿った。その中でもこれらは幸運な運命をたどって、展示飛行用に稼働状態でモスボールされていた機体なのだ。なので年代・所属国・形式はてんでバラバラである。

「元は人員に対して不足気味の航空機材を補うための皮肉の策だったんだが、なかなか働いてくれる。流星にご先祖様達が命運を託していただけはある」

老境に差し掛かったこの整備士は満足気にF-14 トムキャットを整備している。自分の曾祖父などが乗ったであろう名機に触れるのがよほど嬉しいらしい。

「機体も大昔に一時代を築いた物だし、それにパイロットは一流だ。」

たとえ乗ってる機体が年代モンだろうが戦ってみせるさ」

ティターNZは経緯はどうであれ、元々は地球連邦軍の特殊部隊であった。通常部隊より平均的な練度が高い事もあり、航空戦でウィッチと交戦しても損失を出していないのである。

「頼もしい限りだよ。ところで例の、魔女、と交戦したんだって？」

「ん？ ああ。爆撃班の奴らが戦車の支援に行ったら出くわしたって。スピードはレシプロ機の延長線なんだけど、小回りは聞くそうさだ。

今度は俺達が偵察も兼ねていつてくる。

取りあえずクルセイダーを使わせてもらうぜ」

「トムキャットとかじゃなくっていいのか？」

「実はというと、俺の先祖がベトナムで使ってたんでね。ご先祖様に肖りたいのさ」

「そうか。先祖に笑い飛ばされるなよ？」

「あいよ」

、彼は格納庫に駐機されているF-8 クルセイダーに乗り、エンジンを開始させる。僚機は整備完了された機体の都合上、攻撃機はA-4 スカイホーク、戦闘機はF-4 ファントム？、F-111 アークバークなどの主に米ソ冷戦の時代（ベトナム戦争当時）に開発された米軍機で固められていた。

これらの機体は直ちに出击。偵察も兼ねた作戦行動を開始した。

一方、第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」でも陸戦ウィッチからの通報でジェット機の接近をキャッチ。直ちに迎撃に出た。そしてその先鋒は、アフリカの星、ハンナ・ユステイーナ・マルセイユであった。ウィッチの例に漏れず、美しき美貌を持ち、人類最高のエースの一人に数えられる。彼女は敵が視認できる距離にまで接近するとその陣容に驚愕した。それらはリベリオン合衆国（実際はアメリカ合衆国）の識別マークを着けた、見たこともない未知のジェット戦闘機だった。

「何だと……！？」

『どうしたのマルセイユ？』

「アフリカ」の隊長である加東圭子少佐への通信にマルセイユは彼女にしては珍しく驚いている声で答えた。

「ジェット戦闘機を確認したんだが、見間違いか？リベリオンの識別マークが見える』

『この近くにリベリオンの通常部隊は展開していないわ。しているとしたら……例の部隊よ』

「噂の、未来の軍隊、とやらか。あいつらには借りがある」

『すぐに増援を向かわせるわ。それまで持ちこたえて』
「了解」

この日から数日前、彼女はティターンズの繰り出した「A-10サンダーボルト？」と交戦していた。

機関砲をこれでもかと撃ちまくったが、サンダーボルト？の重装甲の前に決定打を与えられずに逃走されていた。その時の口惜しさからか、彼女はジェット戦闘機を落とすことに意欲を燃やしている。マルセイユは隊長機であろう、編隊の中央を飛ぶ、変わった形の機

首を持つ機体（インテークの上から前方に突き出した機首コーンを持つF-8 クルセイダー）に対し、攻撃をかけるべくストライカーユニットの魔導エンジンを吹かした。

F-8 クルセイダーのパイロットもマルセイユの姿を視認すると笑みを浮かべ、通信回線のスイッチをオンにする。

『あんたと手合わせできるとは思ってもなかったよ、アフリカの星、マルセイユ』

『……ほう？私のことはご存知なわけか』

『まあな。お手並み拝見と行かせてもらう……各機侮るなよ。アフリカの星のお出ましだ』

短く通信を交わすと両者は交戦に入った。かたや人類最強とも言われるウィッチ。かたやベトナム戦争時において米軍戦闘機隊の栄光を支えた「最後のガンファイター」、「ミグマスター」と呼ばれた戦闘機。

「クルセイダー（十字軍戦士） 1、交戦」
エンゲージ

戦闘機とウィッチの戦いが幕を開けた。ジェットエンジンの快音と銀翼が太陽の光を浴いて空を切り裂く。対するマルセイユは冷静に機関砲を構える。相手がジェット機であろうとも当てる自信があるらしい。だが、クルセイダーの運動性は予想以上に軽快だった。マルセイユの射撃を避けきって見せたばかりでなく、逆に反撃をしてくる。

「……あの時の変な形の攻撃機とは違うということか！」

マルセイユは持ち前の腕前を持って、不意を打って、インメルマンターンで背後をとる。そしてエンジンを狙える絶好の位置をとり、機関砲を撃とうと引き金に指をかける。その瞬間だった。クルセイダーのエンジンの火が一層激しく燃え、機体が急加速する。マルセイユはその衝撃波をモロに喰らって吹き飛ばされる。

これがこの時代のジェットエンジンには無い機構であり、超音速機には必須となった装置、アフターバーナー、である。、米軍の遺産たる超音速機、群は、いくらアフリカの星といえども超音速機を落とすのは容易ではない、と言わんばかりに上空を飛ぶ。吹き飛ばされながらも体制を立て直し、それを追うマルセイユ。

「チイツー！！よくもやってくれたな！！」

ードックファイトはまだ始まったばかりである。時間にして4分と立たないだろう。マルセイユは不思議とこの戦いに今までとは違う、何か、を感じていた。――機械化航空歩兵と20世紀にて活躍した名機の翼が交錯する――！

第25話「Mighty Wings（マイティ・ウイング） 2」（前書き）

前回の続きです。現用戦闘機が地味に頑張ります。

第25話「Mighty Wings（マイティ・ウイング）」 2

ーティターンズはマルセイユと交戦した部隊の他にも航空部隊を派遣していた。連合軍がアフリカ支援のためにリベリオン合衆国のヨークタウン級航空母艦3番艦「ホーネット」とその縮小形と言える「ワスプ」が護衛艦隊を率いてジブラルタル海峡に馳せ参じた事を知らせる無電を傍受し、直ちに現地の臨時基地から攻撃部隊を差し向けた。機種は何の因果か、「F/A-18E/F スーパーホーネット」。対艦ミサイルを敢行し、音速の速さで攻撃に向かった。大戦型空母の持つレーダーの性能は十分にその性能を認知していたし、世界大戦が起こっていないこの世界では1944年でも「F4F、ワイルドキャット、」が最新鋭機で、下手すれば「F2A バッフアロー」しか配備されていないかも知れない。そう知らされた搭乗員達は肩をガツクリと落としたとか。

「何か拍子抜けだぜ。F2A バッフアローじゃこの、スーパーホーネット、の敵じゃないし、

しかも艦船にはVT信管もついてないんだぜ」

「アフリカの星に挑む第2戦闘飛行隊の奴らが羨しいよ。俺らなんてエセックス級ですらない戦間型空母狩りなんだからな。せめて日本海軍と戦いたいよ」

史実における米軍の大戦前の空母搭乗員の練度は決して高いものではなく、猛訓練を積んでいた大日本帝国海軍航空隊の前にはいい鴨でしか無かった。それが逆転するのは1943年以降である。それは大戦が起こった場合で、しかも通常兵器の部隊が戦場の花形では無いこの世界では一九四四年でも練度は低いまま。下手すれば一機

や二機のスーパーホーネットで空母のドテツ腹をぶち抜いてしまう可能性がある。唯一懸念されるのは頑丈な装甲を持つ戦艦の艦砲を含めた対空砲火で、このミサイルでは戦艦の装甲には大した打撃は与えられないからだ。そもそもこのスーパーホーネットが開発された時代には、戦艦、という艦種は無くなっているのだ。

「しかし大物がいないわけじゃない。、魔女、達もいるだろう。それとしばし遊ぶのも余興だ」

「確かに」

彼等はスーパーホーネットのジェットエンジンを吹かして、ヨークタウン級のいる海域へ向かった。、米国の作った航空機が米国の空母を沈めにやって来る。、双方の兵器の生まれを考えるとなんと言う皮肉としか言いようがない出来事であった。

「ヨークタウン級航空母艦「ホーネット」 島型艦橋

「レーダーに感あり、距離50000」

「……ネウロイか!？」

「いえ、通常の戦闘機だと思われますが……とんでも無いスピードです!! 時速950キロを優に超えています!!」

「全艦、戦闘配備!! 対空戦闘用意! 艦載機およびウィッチの発進準備を急げ!!」

ホーネットの飛行甲板では艦載機の発進準備が進められ、先行して直掩に上がっていたF4F、ワイルドキャット、が援護に当たる。しかしハチの一刺しはすぐそこまで迫っていた……。それは彼等ではどうすることも出来ぬ双方の技術力の差の不可抗力であった。

「アドラー（ドイツ語で鷲の意）、1、フォックス3」

スーパーホーネットの翼のパイロンに敢行されていたレーダーホーミング型の対艦ミサイルが発射される。ミサイルは音速を遥かに越えるスピードで護衛艦隊の対空砲火を振りきり、あっという間に空母の土手っ腹に命中した。しかし、この命中弾は彼等の本意では無かったらしく、パイロットは舌打ちをしながら第二弾の準備を始める。

（因みに、フォックスとはミサイルの種別のコードで、20世紀後半以降に普及した軍事用語である。）

「クソったれめ、飛行甲板を外れやがった。ワスプに攻撃を集中！
駄賃だ」

彼としてはミッドウェー海戦における「赤城」「加賀」などのように飛行甲板に命中させて、誘爆撃沈を狙っていただけにミサイルが逸れた、事に落胆した。対空砲火が上がってくるが、この程度ならどうということはない。VT信管でも当てるのが容易ではないジェット機に太平洋戦争開戦時レベルの『下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる』でしか無い時限信管の弾丸を当てるのはよほどの名人でもなければ不可能だからだ。

「全機、空母及び巡洋艦にミサイルを撃て。沈められたら大万歳だ。雑魚の駆逐艦には目もくれるなよ。魔女と遊ぶのもいいが、長くやるには燃料の余裕が無いから程々にしておけ」

「了解」

スーパーホーネットは旧来のホーネットよりは燃料に余裕があるが、基地への帰還を考えると、あまりこの戦いは楽しめないだろう。彼

は部下に、燃料の残量に気をつけるように、と注意を促しながら悠然と「ワस्प」の上空を飛行する。―かつての米軍が誇ったであろう正規空母を同じアメリカの航空機で沈める。史実では大日本帝国海軍のイ号潜水艦によって沈められた「ワस्प」だが、この世界で引導を渡すのは……？

「アドラー4、フォックス3」

スーパーホーネットの4番機の放った対艦ミサイルが艦載機で満杯のワस्पの飛行甲板に命中し、デヴァステイター用の航空魚雷やドントレス用の545kg爆弾が次々とい誘爆し、大爆発を起こす。

―ワस्पの島型艦橋は大パニックに陥っていた。

「甲板の弾薬が誘爆し、火災が発生しております！！」

「消火作業を急げ！！なんとしてもこれ以上の誘爆を避けるんだ！

！可燃物は投棄しても構わん！！彼女たちをなんとしても守れよ！！」

そう。艦船所属のウィッチを失えば大きな損失になる。ここでこれ以上被弾すれば沈没はまぬがれない。何としてもウィッチは守り通すしかない。たとえば無理やり発艦させようとも。

（ワस्पが失れようと彼女たちが無事ならそれでいい……）

火災の火が上がる飛行甲板を見ながら「ワस्प」艦長は独白した。いやいられずにはいらなかった。

自国の識別標識を持ったジェット機に沈められる。これ以上の屈辱があるうか。

彼の前で一人の母艦飛行隊のウィッチがジェット戦闘機の対空ロケット弾によって撃墜される。黒煙をあげながらストライカーユニットが脱落し、意識が失われている。別のウィッチが急いで救出に向かう。

「なんと言うことだ……第31統合戦闘飛行隊に打電！我、敵航空機群と遭遇、誘導機能を持つロケットに気をつけられたし、と」

「了解！！」

―あの様な誘導ロケット弾を持っているとなれば、我らにとって最大の脅威になる！！

そう確信した彼は急いでモールス信号で打電させる。―だが、運命は残酷であった。第二弾のロケット弾が土手っ腹に命中し、艦が傾き始める。

「進退窮まったか……！！」

「艦長！！」

もはやワスプの運命は決した。彼は断腸の思いで最後の指令を出した。

「総員退艦せよ！！飛行中のウィッチはまだ無事なホーネットに迎え！！発艦していないものは急いで内火艇に乗れ！！」

上空で交戦していたワスプ所属のウィッチは母艦が沈み始めたのを目にし、思わず目を覆う。

「ワスプが……沈む……そんなっ……」

―1944年、某日。リベリオン合衆国の空母機動部隊の一翼を担った「ワस्प」は史実より2年ほど遅い最期を遂げた。それも人類同士の戦いで初めて沈んだ空母の汚名を被っての……
せめての抵抗か、完全に横倒しになった状態になってもしばらくは浮き、完全に沈没するには10分を要した。やがてボイラーが水蒸気爆発を起こし、黒煙を上げながらこの世に別れを告げた。
スーパーホーネットのパイロット達もワस्पの沈没する様に思わず敬礼していた。

― 委任統治地域南洋群島近くの上空 二式飛行艇内

「曹長、それに軍曹!!! 大変です!」

武官の慌てように稲垣真美とティアナ・ランスターは何事かと立ち上がる。アフリカへ向かうのに船は危険なので飛行機を使つての渡航になり、そこで航続距離に優れ、防弾も優秀な、史上最高の飛行艇、二式飛行艇が使われ、2人は巫女装束と小具足姿で乗り込んでいた。

「どうしたんですか?」

「リベリオンの空母「ワस्प」が未知のジェット機に撃沈されたと打電がありました」

「そんな……噴流推進式の飛行機はまだ研究段階のはずですよ!？」

真美はその報に驚愕する。噴流推進式はまだどの国でも研究段階で、カールスラントでさえ実験段階に留まっている。ストライカーユニットさえ実験段階なのでジェット機などまだ存在するはずはない。

「…例の、未来の軍隊、ではないかと思われます。そうでなければ実用段階のジェット機を持っているはずがないとの事です」

ティアナは報告を聞いてすぐに合点がいった。505を壊滅に追い込んだ、第120管理外世界、の軍隊……。それがとうとうアフリカに進出したのかと悔しさを露にする。

「未来の軍隊……それってまさか……!」

真美もすぐに同じ結論に至ったようで、思わずティアナと顔を見合わせる。そして同時にうなづく。

「ええ、間違いないわ。ジブラルタル方面に手を伸ばしてきたのよ」

ティアナは一言だけ言う。その軍隊の名を……この世界にはいてはならないはずの荒鷲達の名を。

「ティターンズ……!」

機内は重苦しい雰囲気にも包まれた。彼女たちが対峙していくのほんでも無い敵なのだ。それも同じ人類同士で殺し合う。これ以上無い虚しさをティアナ・ランスターと稲垣真美は感じていた。

間話「ティアナ・ランスター、F-15イーグルとF-14トムキャット対策に

ティアナの乗る2式飛行艇内の出来事になります。ショートショートです。

ティアナは二式飛行艇の中でしばし考えにふけていた。思えば時空管理局では二等陸士として働いていたのに、異世界に飛ばされてからのこの半年ばかりは仮面ライダー達と共に組織と戦ったりした。さらに扶桑皇国（なのは達の常識で言えば大日本帝国と呼ばれるだろうか）でウィッチとしての訓練を積み、今では航空歩兵として、下士官、の任についている。仮面ライダーBLACK RXⅡ南光太郎からの手紙だとスバルも向こうに来ていて、今は自分の代わりにライダーと共に組織と戦っていると言う。

「私の事をなのはさんに聞かせてやりたい。どんな顔するかな？あの人が私をどういう風に育てるつもりだったのか、今なら理解できる……。」

彼女は機動六課で働いていた時が遠い昔の事のように感じてしまうほどの密度の濃い生活を半年以上過ごしていた。それゆえに態度に落ち着きが見られるようになり、一皮剥けた。

それは実戦を切り抜けてきた自負と、いつの間にか身についた自信のせいだろう。

「思えば、自分が強くなった感触が得られない、ばかりに模擬戦で無茶をしてしまった頃の自分が嘘のようだ。まだまだ剣技は、魔のクロエ、の異名を持つ綾香や、扶桑海の巴御前、の智子の足元にも及ばないが、決して付け焼き刃ではないと言えるだけの技量は身につけたつもりだ。」

「アフリカまでまだしばらくかかることだし、敵、の対策でも考

えるのでしょうか」

ティアナは武官に現時点までにアフリカで確認された、敵、航空機群の写真を持ってこさせ、真美にその特徴を教える事にした。第120管理外世界と第97管理外世界は21世紀序盤までは同じ歴史を辿ったようなので、不思議なことに開発された兵器もほぼ同じだった。つまりこの2つの世界に関して言えば、兵器に関する知識が共用できるのだ。

「これがF-4ファントム？。この時代からは10年くらいたった位の時にアメリカ合衆国って言う国がジェット艦戦として作った機体。当初はロケット（ミサイル）攻撃専門に作られたけど、60年代の紛争で

ドックファイトの必要性が痛感されてからは航空機関砲を持つようになった。これは機関砲がついてるから後期タイプのようなね」

「速度は？」

「マッハ2以上。この時代の飛行機じゃどうやっても追いつけないし、下手に全面に出ようならM61の洗礼を浴びるわ」

「あの凄いガトリング砲だね？アレを食らって生き残る自信無いよお」

20世紀後半以降の米軍製航空機関砲のトレンドになったM61バルカンの発射速度は毎分 6,000 発というカタログスペックがある。それを長くの間防衛できる自信は2人にはない。威力もこの時代の航空機関砲とは段違いだし、それにティターンズも弾頭に工夫を施したりして、対ウィッチへの対策は行っているはずだ。シールド（ティアナはさらにデバイスやバリアジャケットなどがある）といえど、決して油断は禁物だ。

「これは50年代の初飛行と、古い部位で、機動性もそこそこだか

ら格闘戦に持ち込めばやりようはある。でも要注意なのは70年代以降の、第4世代。特にF-15 イーグルやF-14 トムキャットは、最強、を謳われた機体。自重をエンジンの推力だけで支えられるだけのパワーがあるから戦闘機動の運動性も凄いのよ。イーグルにドックファイトを挑むなら覚悟がいるし、トムキャットは遠くからでも同時に複数をロックオンできるから遠距離戦は危険」

「ひえゝ30年くらいでそんなになるんだ……」

「特にイーグルは片翼がなくなっても帰ってきた逸話ありよ。日本、も70年代以降はこれを200機も買って主力機にしてたくらい」

「鷲の名は伊達じゃないって事だね……」

真美は流麗なフォルムを持つ後世（1944年現在では30年後の70年代以降）のジェット戦闘機群の姿と当時最高の戦闘能力を發揮したという逸話に驚きを隠せない。特に戦慄させられたのはイーグルの制空戦闘機としての威力。機動性はそれまでのジェット機を確実に上回る。さらに生存性も物凄いとあれば、上層部の一部の言うような「ドックファイトに持ち込めば、ただ早いだけの噴流推進などなんのことがあろうか？逆に返り討ちにしてくれる」と言う楽観視は出来なくなる。

2人はこれから戦う相手がどれほどなのかを頭に叩き込んでいった。敵を知り、己を知れば……、という格言も残っている。ティアナ達はそれをよく頭の中で半復しながら、写真に映るジェット戦闘機群への対策を考えていった。どうやれば名機に対抗できるのか……。それは彼女たち次第である。歴史上で先例が無いわけでは無く、ベトナム戦争時にレシプロ爆撃機のスカイレイダーがミグを撃墜してみせた話が残っている。だが、それは稀な例だ。レシプロ戦闘機が戦争に使われたのは1969年のサッカー戦争が最後であり、70年代以降の世代のジェット機を相手取ったらどの程度のキルレシオ

になるのかは全くの未知数なのだ……。

「気を引き締めなければ落とされるだけ」と自分を律する2人であった。

間話その2「ウィッチとティターズはどのようなファーストコンタクトを行っ

アフリカのウィッチとティターズのファーストコンタクトです。
なにぶん現時点で入手できた資料が少ないので、ライーサ・ペット
ゲンの口調などに差異があればお知らせください。

間話その2「ウィッチとティターンズはどのようなファーストコンタクトを行った

ーアフリカ戦線でのウィッチ達は今や、駆られる側、へその立場を変えていた。それは

ティターンズの機甲師団が、最強のMBT、（主力戦車）61式戦車を戦線へ投入してきたからだ。当初はティターンズのアサルトライフル（連合軍側の記録には自動小銃と記載）装備の兵士がボルトアクションライフルの歩兵を圧倒していた。その現況を打破すべく、連合軍は急遽、戦車、に当たる陸戦ウィッチをぶつける事で解決が図られた。人間同士で戦いあう事にウィッチ達は難色を示したが、連合軍上層部は兵士の犠牲の増加によって戦線が崩壊するのを恐れており、ネウロイに対して待機中であつた陸戦ウィッチで構成される機甲師団を投入する事で戦線の立て直しを測つたと後の記録に記されている。

しかし彼女たちは、陸の戦艦、とも言えるバケモノのような戦車に遭遇する事となった……。これは初めてウィッチ達が現在・近未来兵器群と初めて交戦したウィッチ達の物語である。

、フオオオオオン、と電気自動車特有のエンジン駆動音が響く。連装砲塔の砲身がギリリと輝くこの戦車こそ、地球連邦軍が最後に採用したMBT、61式戦車、である。不整地でさえ時速90キロの快速で突っ走るこの戦車はその性能を遺憾なく発揮していた。滑空砲を轟かせ、ウィッチ達を蹴散らす。61式の主砲の155ミリ口径滑空砲はこの時代の最大級軽巡に装備されている砲に相当（日本で言えば阿賀野型軽巡に相当）する火炮であり、当時の戦車から見れば陸の戦艦の如く見えるのである。それと対峙したウィッチ達の運命は戦う前から決していた。

「ヒヤッハア——！！ホレホレもつと速く逃げろお♪」

「ヒイイイイ〜こ、殺される……」

ブリタニア連邦のマチルダⅠ機械化装甲歩兵を装備するウィッチ達は自分達の持つ40mm（ブリタニアでは砲弾の重量が名称となっているので2ポンドと呼称される）戦車砲が魔力による強化作用を加えても、なお、敵の正面装甲は愚か、比較例装甲厚が薄いはずの側面装甲すら撃ちぬけない事に恐怖していた。ウィッチたちの初弾一斉砲撃をその装甲で防いだ61式はこの時代の軽巡洋艦の主砲に相当する155ミリ滑空砲をこれでもかと撃ち込んだ。いくら航空ウィッチより遥かにシールド強度が高い陸戦ウィッチといえども、軽巡洋艦の主砲相当の火砲を雨霰のように打ち込まれては無傷ではすまなかった。（要するに火砲は61式の装甲の前には、ノックしてもおしもおしく、なドアロッカーに成り果て、シールドは軽巡洋艦レベルの砲撃をそう防ぎ続けられない）に相当する鉄の豪雨に臆し、撤退しようとした一団は最大戦速で逃走したが、敵の快速の前にはカメの如き遅さでしか無かった。時速30キロのマチルダ？の3倍のスピードで迫る61式のキャタピラがウィッチの一人をストライカーユニットごと踏み潰し、単なる肉塊と鉄の残骸へ変える。まさに怪物だ。

「師団長、敵の航空支援が近づいていると報告がありました！」

「各自散開、敵の航空支援を何としても凌ぐんだ……！」

巡洋艦相当の火砲を撃ちまくりながら90キロで疾走する怪物といえども航空支援は侮れないのか、バラバラに逃げていく。ティターンズに対して、初めての、アフリカ、のウィッチ達の航空支援だっ

た。（稲垣真美は本国へ召還途中だったので、この戦いには参戦していない）

「各自、敵戦車に一発、荷物、を食らわせてやれ。機械化航空歩兵の恐ろしさを骨の髄まで染み込ませろ」

「了解！」

ちなみに、荷物、とは500ポンド爆弾のことで、これを喰らえば如何に61式といえどただでは済まない。

このマルセイユらによる航空支援で形勢を逆転したかに見えた（戦車は基本的に天蓋装甲が弱く、61式がザクになぶり殺しにあった要因の一つである）連合軍だが、それもぬか喜びに過ぎなかった。

ティターンズ側が空域の制空権確保のために航空基地より「F-4 ファントム？」が飛来したからだ。この未知のジェット戦闘機の登場にさすがのハンナ・マルセイユといえども泡を食った。

—あの時、聞き慣れ無い金切音と共に現れたのは太い胴体と直線で構成された大型の主翼を持つ、みにくいアヒルの子、のようなぶっ格好な、プロペラを持たず、ロケットで空をかつ飛ぶ、飛行機だった。その飛行機はメッサーが旧時代の複葉機になってしまったかのような錯覚を覚えるほどの猛スピードで私たちの前に迫ってきた……。

「何っ!？」

「そんな……噴流推進機!？」

ファントムは2つのジェットエンジンを唸らせ、マッハ2の猛スピードでマルセイユたちの前に初めてその姿を現した。プロペラ戦闘

機より大型でありながらその2倍以上の速度を優に発揮し、マルセイユの僚機達の機銃掃射を意にも解せず、バルカン砲を一斉射した。車のエンジン音のようなカン高い音を発しながら米軍の制式装備だったM61バルカン砲が火を噴く。慌てて回避するが、帯同していた友軍の戦闘機がその射撃を浴びて火を吹きながら墜落していった。そしてファントムはその図体に見合わぬ機動性を見せつけた。まるで、時代は変わったんだ、オールドタイプは失せろ！！、と言わんばかりに。

動揺する僚機達を落ち着かせ、マルセイユは果敢にファントムに挑んだ。

一時速600キロ余りのメッサーシャルフがまるで静止しているかのような錯覚を覚える……と、言う事は優に倍以上の速度差がある……か。

「いくらスピードがあろうとっ！！」

スピードが緩んだ隙について相手の後ろに付き、機銃を構える。パイロットはこっちのことには気づいていない。絶好の好機だ。トリガーを引こうと指をかける。

不意にインカムに通信が入る。それは敵からのものだった。

『お嬢ちゃん達、死にたくなければそこをどきな』

一20代の後半の男の声だ。恐らくあの飛行機の搭乗員だろう。

『私達に喧嘩を売るつもりか？いい度胸だ』

『芸当を見せてやる』

ファントムの機体が太陽に向けて急上昇する。太陽光に遮られ、マルセイユは敵機を見失ってしまう。

「くそっ……」

敵機を見失い舌打ちをした瞬間だった。上空からロケットが降ってくる。

「あの敵はロケットまで持っているのか。……ならば！」

彼女はメッサーの性能を生かし、旋回して逃れようとする。一だが、そこからがこのロケット（ミサイル）の真骨頂だった。

「何っ?!?!?」

彼女といえどこれには混乱させられた。ロケットが旋回して追尾してくるのだ。ロケットはまるでマルセイユの機動を読み切っているかのように正確に追尾する。

ちなみにこのミサイルはAIM-9「サイドワインダー」の遠い子孫にあたるハイマニューバ可能な発展改良モデルで、20世紀ごろと規格は変わっていないのでティターNZの有する、大昔の機材でも運用できるのだ。

『そんな……大尉―ティナの機動に付いていくなんて……』

マルセイユの列機である、ショートヘアでモズを使い魔とするウィ

ツチ「ライーサ・ペットゲン」がサイドワインダーがマルセイユの機動についていく様に驚愕する。自身も必死に魔導エンジンを吹かして追うが、ミサイルを機銃の射程に捉えられない。

「こうなればイチかバチかだっ!!」

マルセイユは破れかぶれで迫り来るサイドワインダーを機銃で撃つ。無謀にも思えるが、マルセイユの射撃能力から言えばあながちできない事ではない。弾丸はサイドワインダーの弾頭部分に見事命中、迎撃に成功する。

『やりましたね！ティナ』

『ああ……今のは少々肝を冷やしたがな……敵は？』

『航空機は顔見せだったようで、ティナを攻撃した後、友軍に爆撃を加えてすぐに引き上げていきました』

『こちらの損害は？』

『装甲歩兵に数人の戦死者が出た模様です。戦車の砲撃で恐慌状態になっているウィッチもいます』

『……クソッ、なんて様だ……っ!』

マルセイユは自分達が駆けつけながら損害を防ぐことが出来なかった事に悔しさを顕にして左手の拳を握り締める。ライーサはそんなマルセイユの姿に悲しげな顔を見せる。

一ファーストコンタクトは苦い物に終わった。これ以後、アフリカ戦線ではジェット機や戦車の目撃が相次ぎ、その対策を迫まれることになった……。

「……ジェット戦闘機に化物戦車……、巨人、（モビルスーツの事）……これから世界はどうなるの？」

第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」の基地で隊長の加東圭子はウル戦線およびガリア方面で目撃されたティターンズのモビルスーツの写真が添えられた、上層部から送られてきた報告書を沈んだような顔で見っていた。現状の装備ではどうやってもこの巨大兵器には太刀打ち出来ない。もしこれがアフリカに回されてきたら……底しれない恐怖に駆られてしまう。

そんな彼女に、朗報、が舞い込んでくるのはもうしばらく待つ必要があった。それは……。基地に聞きなれない轟音が響く。その音の正体は……

間話その2 「ウィッチとティターNZはどのようなファーストコンタクトを行っ

ストライクウィッチーズ公式コミックアラカルトが入手できたので、それに合わせて改稿しました。

第26話「戦闘第301航空隊 新選組」(前書き)

今回のタイトルは日本海軍の第343航空隊の戦闘飛行隊から取りました。

第26話「戦闘第301航空隊 新選組」

ーティターンズは抵抗を続けるオラーシャ連邦に対し詰めの一撃を敢行した。それは彼等が保有している戦略爆撃機「Bー52ストライトフォートレス」（最終生産型をレストアしたもの）でモスクワなどの都市に戦略爆撃を加えたのだ。オラーシャ連邦は必死の迎撃を行うも、13000m以上の高高度を飛行する怪物級（この時代の最大級戦略爆撃機Bー29が小型に見えるほど）の、怪鳥、であるジェット爆撃機の前には既存の防空網は無力だった。

オラーシャ本土の各航空隊からかき集められたウィッチ達はBー52の迎撃に躍起になり、ついには各国からの援軍も加わったが、現時点で高高度性能がトップレベルのストライカーユニットであるPー51やG55チェンタウロを以てしても迎撃不能であったために出撃が出来なかった。

幸い、ティターンズの目標が軍事施設等だけであつたので無為な犠牲は出てはいなかった（爆撃機隊の司令が東京大空襲やベトナム戦争の枯葉剤作戦のような悪行を嫌っていたおかげでもある）。

現地で行動していた、地球連邦軍 第一航空艦隊及び第二機動艦隊、も各国からの要請に応える形で各戦線に空母と護衛艦をそれぞれ派遣。オラーシャ連邦には「翔鶴」と「瑞鶴」所属の部隊が派遣され、現地で防衛戦を繰り広げ始めた。これでひとまずティターンズがオラーシャを手中に収める可能性は減ったわけである。同様にアフリカ方面にも、主力戦艦改級、戦闘空母「雲龍」と「天城」が派遣された。

艦隊司令長官のエイパー・シナプスは扶桑から第31統合戦闘飛行隊への増員が二式飛行艇で送られている事が通達されると、直ちに先行して護衛機を派遣した。（万が一、ティターンズ航空軍に襲われた場合、この時代の航空機では対応できずに『史実での連合艦隊

司令長官「山本五十六」大將が前線視察中に米軍に襲われ、命を落とした海軍甲事件』の二の舞となってしまうため）

ーアフリカへ向けて飛行を続けている二式飛行艇の前に、地球連邦軍、の護衛機が姿を見せた。機種は地球連邦軍の制式可変モビルスーツの中では数が比較的多い「Zプラス」。

数是一个中隊に当たる9機で、過去の戦訓を基にしての念の入れようであった。

「念の入れようだね」

二式飛行艇の機内では稲垣真美が周りをビッシリと囲んで飛行するウェイブライダー形態のZプラスを見るなりこう言う。扶桑への一時帰国時に映像で見たとはいえ、別世界の未来の技術が創りだした兵器が9機もやってくるというのは少々大袈裟ではないだろうか。

「向こうで起こった、世界大戦、の時に似たような状況で事件が起こったからよ」

「確か……、海軍甲事件、だっけ？」

「そう。日本海軍の大戦中の最大の損失の一つで当時の連合艦隊司令長官だった山本五十六大將が戦死した事件。翌年の古賀大將の乙事件とセットで語られる場合もあるんだけど……その戦訓が身にしみてるのよ」

ティアナは真美の故郷である、日本、の事例を引き合いにしてこの物々しい護衛の理由を説明する。ウィッチはそのくらい、貴重な、人材なのだということを真美は改めて自覚する。（同様の例に一年戦争末期のジオン軍が学徒動員パイロットを基地まで運ぶのに当時

の一個艦隊まで動員していた事がある)

「もうじきアフリカに入るけど……そこからどうするの?」

「Ju 52 に乗り換えて基地まで行くの。飛行艇じゃ着陸できないでしょ」

「確かに」

二式飛行艇は途中何回かの給油を経て、無事アフリカ大陸へ入り、連合軍基地に着水を完了した。護衛のZプラスも6機が着陸し、先行して派遣された人員の手によって補給を行っている。残りの3機はおそらく別の経路で向こうの基地に向かっているのだろう。

「アフリカは熱いわねえ……まいっちゃう」

ラムネと思しき炭酸飲料を飲みながらティアナは愚痴る。強烈な日差しは一発で肌がカラカラになるかと思うほどだ。

「うまいねえ。このラムネ」

「でしょ? 海軍の軍令部の人からチョロマカしという正解だったわ」

ティアナと真美は出発までの短い休息を楽しんでいた。ラムネを飲んでいる美女は飛行機の整備をしている男たちには何よりの眼の保養であったとか。

一 アフリカ大陸 トブルク 第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」
が駐留している航空基地

轟音と共に3機の噴流推進機ウエイブライダーが現れ、ランディングギア（航空機としての運用も一応は考慮されているために装備されている）を出して着陸態勢を取る。

「あれは……？」

加東圭子は上層部から通達のあった援軍の第一陣が飛来する時刻になったので基地の外に出ていた。見たことのない灰色の飛行機だが、上層部の言っていた、援軍、とはアレのことなのだろうか。基地の要員が着陸の指示を無線で伝えている。先方は見事な動作でアプローチを行い、整然と着陸していく。

「ケイ、あれが援軍なの？」

待機中だったライーサ・ペットゲンが圭子のそばにやってきた。加東圭子は扶桑海事変に従軍した経験も持つエースなのだが、今は、あがり、を迎え直接戦闘には参加しないが指揮官としての役割を果たしている。退役時の最終階級は大尉で、その後現役復帰の際に、少佐に任官されている。因みに従軍記者の身分であった際に、ケイ、と呼ばれており、それが定着している。

「ええ、そうらしいわ。それにしても凄いわね」

「大きい……。普通の戦闘機の2倍はありそう」

駐機を終えたZプラスのパイロット達が着任の挨拶を行うべくやってくる。パイロットたちは比較的若めだが、26、7には見える。彼等は圭子に着任の挨拶を済ませると艦隊が得た情報を伝える。

「少佐、私たちは地球連邦宇宙軍戦闘第301航空隊「新選組」であります。」

我が艦隊の司令長官からの命を受けてやって参りました。よろしく
お願いいたします。」

パイロットたちはその後、官名を名乗った。宇宙時代で様々な人種
が混在する地球連邦軍の中では珍しく純粹無垢な日本人らしく、苗
字で「セキ」、「スギタ」、「イソザキ」と名乗った。階級は左か
ら順に大尉・軍曹・大尉である。部隊名や苗字が何処かで聞いたよ
うな名前なのは訳があるらしい。

「他の人員と機材、それと補給物資はあと3時間ほどで到着いたし
ます」

「ありがとうございます」

「早速ですが、少佐。状況はどうなっておりますか」

小隊長の、セキ、大尉が圭子に状況を尋ねる。圭子是一枚の写真を
見せる。それは以前、マルセイユが戦った、みにくいアヒルの子、
と形容した戦闘機―「F-4 ファントム？」であった。

「私たちはこれらの戦闘機に苦戦を強いられています。この戦闘機の
スピードとロケット攻撃に悩まされて、制空権を維持するのも一苦
労で……」

「…コイツは驚いた。こんな古典的な機体がまだ残っていたとは」

「これのことは知っているのですか？大尉」

「ええ。コイツは、F-4 ファントム？。我々の世界でのリベ
リオン合衆国に当たる国家「アメリカ合衆国」が1950年代に採
用した艦載機です」

「……!!」

大尉は圭子に戦闘機の正体を告げた。この戦闘機は一時代を築いた
名機だということを。そしてこれは彼等から見れば、古典的、とき

れる代物である事実を知ることになる……。。

第27話「Mighty Wings（マイティ・ウイング） 3（前書き）」

一 アニメファンとして、故・西崎義展氏のご冥福をお祈りします。

第27話「Mighty Wings（マイティ・ウィング） 3」

ーティターonzの有する戦闘機の殆どは連邦正規軍の装備から見れば、外見は旧式だが、アビオニクスやエンジンが最新レベルの物に換装されているために最新装備の連邦正規軍でも決して侮れない。特にスピードでは現状のストライカーユニットでは対抗するのは極めて困難である。それは人類最強のウィッチの一人「ハンナ・ユステーナ・マルセイユ」を以てしても同様であった。

「クソッ！速さが違いすぎる……！！」

彼女は小回りの良さを以てしてクルセイダーに挑んでいたが、やはり決定的な速度差は否めない。一撃離脱を目論んで作られたメッサーシャルフ（向こう側のメッサーシュミットに当たる）109Gの特徴をことごとく上回るジェット戦闘機の前では複葉機で最新鋭機に挑むのような感覚を覚える。これが真美や圭子が使っている扶桑のストライカーユニットなら、左ひねりこみ、や、木の葉落とし、などの扶桑（日本）機特有の神がかり的な旋回性能を用いたマニユバーを以てして対抗できる（史実でも熟練搭乗員の手にかかれば、一式や零戦でP-51を一方的に捻り潰す事も可能で、実際に赤鼻のエース、若松幸禧、陸軍少佐が中国戦線で示している）のだが、敵が銃の火線に飛び込む、とまで謳われる技量を持つ彼女としても、一撃離脱戦法を主な戦法としているメッサーシャルフ109にとってジェット戦闘機は自身の全てを上回る強敵なのだ。

「行けっ！！」

F-8クルセイダーの航空機関砲であるコルトMk. 12が火を吹き、マルセイユを襲う。彼女は持ち前の空戦技術で回避するが……。

人類最強を謳われる彼女をしても未来のジェット戦闘機の魔手から逃れることは出来なかった。

、ズガガガッ！！、とストライカーユニットの装甲を弾丸が穿つ音が響く。

一馬鹿な……後ろからだと！？

「マルセイユのお嬢ちゃん、これがジェット戦闘機時代の編隊空戦戦術だ」

「何だと……！」

この時期、ティターンズ残党の間でもマルセイユの、アフリカの星、としての勇名は轟いていた。それを落とすための戦術はヨーロツパの基地で、唯一ティターンズが辛うじて保有に成功した可変戦闘機で、後の機体のプロトタイプとなった、VF-0フェニックス、を仮想敵として考え出されていた。彼等はそれを正に実行したのである。

マルセイユは何時の間に周りこまれたのかと思わず後ろを振り返る。そこにはまたまた別の機体—F-14より先に可変翼機として作られた、F-111—アードバーク、—が後ろから航空機関砲の銃撃を浴びせてくるのが見えた。

無線を活用した編隊空戦でティターンズはマルセイユを出し抜いたのだ。

因みに普通の実体弾で、シールド、を後ろから穿つことは可能であ

る。実際に大戦初期に穴吹智子が当時良く確認されたネウロイ、ロス、改に銃撃され、当時の愛機、キ27、を失っている例がある。ティターンズの場合はウル方面戦線で、ウィッチのシールドに火器が防がれたりしたので、タングステン合金製の弾頭に火薬ではなく、タキオン粒子を仕込んだ、波動エネルギー弾、（最も波動エンジンが開発された時にはティターンズは最末期だった。そんな中、波動エネルギーをエンジン以外に利用するのは正にコロンプスの卵的アイディアだった。これは2199年の世界にいる、宇宙戦艦ヤマト技師長、真田志郎、をしても、まだ考えついていない事である）

、M61バルカン、の毎分4000発の発射速度のバルカン砲の徹甲弾はストライカーユニットの最重要部一飛行魔法を発動させる後部を破壊せしめ、マルセイユの片方の素足を露にした。

この時、まだ無事であった片方とのバランスが取れなくなり、失速し。きりもみ回転しながら落下していった。単独行だったのが災いした。援軍が来る前に、アフリカの星、は史実通りに、流星、となつて墜ちていくしか無いのか。（史実でのハンス・ヨアヒム・マルセイユは脱出時にパラシュートが開かず、戦死している）

基地の方から轟音が響き、2機のジェット戦闘機が姿を現す。ティターンズ側はほくそ笑み、こう言った。

「やっど、対等、な相手が来たか」

その戦闘機は彼等の目の前で、変形し、モビルスーツの形態を取る。かつての仇敵、エウゴ、が象徴としていたZガンダムによく似た姿のガンダムタイプだ。これぞティターンズのTMS（可変MS）に対抗すべくカラバがアナハイムエレクトロニクスに作らせ、後に正規軍が制式装備化した、Zプラス、である。一機は通常型の

A1型、もう一機はウェイブライダー形態での空戦を重視したD型である。因みにマルセイユを救出したのはA1型のほうである。

「隊長、マルセイユ大尉は自分が基地まで運びます」

「頼む。どうやらやつこさんもおいでなすったようだ」

レーダーに光点が2つほど映る。エネルギー量からすると、ウィッチだ。どうやら輸送機ではなく、ストライカーユニットで直接やって来たらしい。ここから中間地点の基地まではストライカーユニットで来れない距離ではない。恐らくティターンズの航空軍襲来の報を受けて、慌ててやって来たと見える。一日本陸軍……扶桑皇国陸軍のウィッチらしいのは分かった。遠目からでも巫女装束なのは実に分かりやすい。

一真美とティアナだった。その後、緊急で出撃したので、武装は扶桑刀とティアナは試験装備の「ホ301 40mm機銃」、(史実では二式単座戦闘機「鍾馗」の後期型と二式複座戦闘機「屠龍」に搭載された機銃) 真美はボヨールド(史実でのボフォース社) 40mm機関砲である。

「……マルセイユ大尉!？」

「真美、落ち着いて!」

真美は、飛燕の魔導エンジンを限界まで吹かして、急いでやって来たのだが、ZプラスA1型の手の中で横たわるマルセイユの姿を見て、間に合わなかったのか、と顔面蒼白になる。ZプラスA1型のパイロットは真美に、気絶、しているわけだと説明し、真美はひとまず安堵の表情を見せる。

「君達には急で悪いが、臨時で俺の指揮下に入ってもらおう。アイツらを落とすぞ」

ZプラスD型のパイロットで、この2機編隊長の、イソザキ、大尉は取り急ぎでティアナ・ランスターと稲垣真美を編隊に加え、配下に加えた。事態はそれ程に切迫している。A1型はマルセイユを抱え基地に急がないといけない。さらにウェイブライダー形態での空戦は全く考慮されていないので、アムロ・レイやカミーユ・ビダンのような凄腕のエースパイロットでもなければ、ジェット戦闘機との空戦は無謀である。またにも渡り合える性能のD型は大尉の一機だけ。戦力は多いほうがいい。

「は、はいっ!」

「アイツらとやり合う前に君達の名前を聞いておこう。俺は地球連邦軍 戦闘第301航空隊 新選組所属 イソザキ大尉」

「第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」所属、稲垣真美曹長です」

「同じく、ティアナ・ランスター軍曹です」

「よし、2人とも俺に続けッ!! 奴らをたたき落とす!!」

「了解ッ!!」

ここにティアナ・ランスターのウィッチとしての初陣は幕を開けた。高町なのはやフェイト・テストロッサ・ハラオウンら、機動六課、の面々が見たら仰天するのは間違い無しのティアナのストライクウィッチとしての戦歴が始まった。時に1944年のある日の事である。

第27話「Mighty Wings（マイティ・ウィング） 3」（後書き）

「ホ301」の威力は本当に凄かったようで、上坊良太郎大尉が二式単座戦闘機「鍾馗」で戦果を上げています。B-29に通じた数少ない日本の航空機関砲ですが、色々と欠点が多かったようです。

第28話「チャンスポート社とダグラス・エアクラフト・コーポレーションは母

Fー8クルセイダーが大立ち回りを演じます。

第28話 「チャンスポート社とダグラス・エアクラフト・コーポレーションは母

さて、ティアナは本格的にストライクウィッチとしての初陣を迎えた。戦う相手はストライクウィッチとしての本来の、相手の、ネウロイではなく、我々のよく知る世界各国の現用戦闘機群。試験装備の、ホ301 40mm砲、を携えてZプラスD型に率いられる形で生涯初めての空戦に臨んだ。

、ブロオオオ、とハ45、魔導エンジン（海軍名は誉）を唸らせ、4式戦闘脚は空を疾駆する。他の国のストライカーユニットより旋回性能が遥かにいい（実際に4式戦闘機は日本軍機の例に漏れず、空戦での機動性は良好な部位であった）機体は格闘戦なら下手なジェット機など目ではない。すぐにジェット機の中では比較的旧式な部位に入るF-4 ファントム？を捉える。敵は所詮プロペラ機の延長線上に位置すると侮っている。その鼻をへし折るべく、ティアナはホ301の照準をファントムに向ける。弾丸がロケット弾なため、かなり近接する必要があるが、威力はかのB-29すらたたき落とせるほどである。

「……当たれえっ!!」

40mm砲の鈍い発射音と共にファントムの胴体に40mm砲弾が吸い込まれていく。威力は魔力による強化作用もあって、ファントムの胴体に大穴を開けるほどの破壊力を発揮した。

「くそっ!! 今の攻撃で操縦系がイカレやがった」

「たった二発でか!?! ベイルアウト（脱出）するぞ!! キャノピーに頭ぶつけんなよ」

「分かった!! 救助要請は出しとく」

フロントムに命中した弾丸が内部の電装系を破壊し、HUDが消える。射出座席を司る系統が無事なうちに脱出しなくてはならない。パイロットたちはレバーを引いて射出座席の火を入れ、脱出する。ティアナは脱出した2人のパイロットたちのパラシュートが開くのを確認すると、次の敵に向かう。機動六課で実戦を経験したためにその当たりの動きは手慣れたものだ。

「初陣で……戦果を上げられた。だけど……喜んでいいのか……複雑。

歓喜はするもの、今、自分がやっていることは明らかに、殺し合い、なのだ。決して気分のいい物ではない。ネウロイのように、異形の敵、なら割り切れるのだが……。なのはやフェイトがたとえば半管理局勢力のテロ犯であろうが、人を殺すことを嫌悪しているというのも分かる。（特にフェイトはなのは以上にあの世界でジオン残党軍が行っている、スペースノイドの地球からの開放・自治権獲得、を大義とする悲壮な抵抗戦をその身を持って体験してきた。そのためになのは以上にその傾向がある）

ティアナも向こうにいる時に地球連邦軍の兵士たちが時空管理局の局員や執務官達を、本当の殺し合いをしていない甘っちょろい野郎ども、と陰口を叩くのも幾度か耳にした。

ティアナは真の意味で戦争を行っていたのは、遠い昔の出来事でしかない、時空管理局の現状を考えれば、戦争に対して甘い考えが出てきてしまうのも致し方無いように感じられた。ネウロイとの生存競争を戦うこの世界や、宇宙規模の戦乱が日常茶飯事となっている第120管理外世界に比べると、第一世界、ミッドチルダ、はどちらかと言えば平和だ。しかし、間接的な支配に反目する者達はいくらでもいる。反管理局のテロは各次元世界で絶えないし、ミッドチルダの首都たる、クラナガンにしても廃棄都市区間がいくつも存在

する。戦いはどのような理由であれ、どこでも発生する。それは人間の変えられない性かも知れない……。そんな事を考えつつもティアナは敵に立ち向かう。

一戦いが起こるのなら少しでも速く終わらせて見せる!!

ティアナはその決意を胸に秘めて戦いの空を飛んでいく。これがこの半年間で形造られていった彼女の信念だった。

真美も背後について40mm機関砲を撃ち、ファントムのエンジンを狙い撃った。

「射撃のコツは至極簡単――当たるところまで近づくだけ!!」

40mmという大口徑砲を、魔力による強化作用も加えた弾丸を至近距離から喰らっては、いくらファントム？と言えども持ちこたえられないハズは無く、(40mmは重装甲の戦略爆撃機であったB-29であろうが撃墜可能な威力を持つ。たとえ装甲板の質が大戦時からは比べ物にならないほど向上した時代のものであろうが、40mmの大口徑機関砲に耐えられるように造られた飛行機は存在しないし、ロシア機でも30mm砲までしか搭載していない)。2つのエンジンを同時に破壊されては飛行不能になり、パイロットたちをして機体の放棄を決断させた

瞬く間に2機を失ったティターンズ航空軍は損失にも動じること無く、冷静に戦いを進める。ティアナと真美に残存機他クルセイダーとA-4スカイホークをぶつけた。

F-111ではいくらエンジンを換装したと言っても本格的な空戦は無理なので後方に下がらせた(マルセイユを銃撃できたのは連携の賜物である)結果、実質的に対空戦闘可能なのはクルセイダーと

一機のスカイホークのみとなった。

「こちらクルセイダー1。適当に楽しんだ後は引き揚げろ。機体はいくら損失が出てもいいが、搭乗員は失うわけにはイカンからな」
「了解」

ティアナと真美はZプラスD型の援護を受けつつ、生き残りの戦闘機に挑んだ。スカイホークとクルセイダーは自分たちの空戦機動にも動じずに追従してくる。ファントムよりもさらに旧式でありながらも、持ち前の運動性でウィッチのストライカーユニットの空戦機動にも対応し、機関砲を撃ってくる。ミサイルを使用しないのはパイロットの心意気なのだろうか。あえて機銃のみを用いる、ガンフアイト、のみでの空中戦を楽しんでいるようにも思える。

「くっ、当たらないっ！」

攻撃を巧みな機動で避けるクルセイダーとスカイホークに真美は思わず焦りを感じてしまう。当たるか、紙一重でかわすほどの動きを見せることから、パイロットは余程の手練であるのは容易に分かる。ティターンズが有する20世紀ごろの戦闘機の中でも最古参に位置するであろう時代の物にあえて乗り込むのだから、自身の腕に絶対の自信があるのだろう。

前方に回りこんだクルセイダーの機関砲が火を噴く。真美は螺旋を描きながら旋回し、攻撃を回避し、クルセイダーから見ると半円を描くような機動を見せる。

「ほう。バレルロールで背後を取るつもりか……ガキ共でもドックファイトのセオリーは弁えているな」

クルセイダーのパイロットはその熟練した腕前で真美の機動を読み切り、なかなか背後をとらせない。

「これでどう!？」

ティアナも側面から回りこんで銃撃を加えるもまたしても避けられる。ZプラスD型のビームカノンにしても同様だ。

クルセイダーのパイロットは可変MSとストライクウィッチを向こうに回しての大立ち回りを演じている。彼等が一年戦争以上の激戦となったグリプス戦役をくぐり抜けてきたのは伊達ではなかったのだ。

「こっちはセイバーフィッシュで土台付きのMSを迎撃してた時もある。グリプスの生き残りを甘く見るなよ」

クルセイダーとスカイホークは見事な動きで2人と一機を相手に航空機関砲だけで渡り合う。

この光景を当時の開発者が見たら、あまりの感動にむせび泣くだろう。熟練兵によって限界まで引き出された機体のポテンシャルは200年後の最新モビルスーツや、ジェット機以上に小回りが効くストライカーユニットをまとうストライクウィッチにも通じたのだから、誇っている。

ティアナと真美は実に空戦機動が洗練されているF-8クルセイダーとA-4スカイホークの戦いぶりに舌を巻いていた

第28話 「チャンスボート社とダグラス・エアクラフト・コーポレーションは伊

空中戦です。旧式機でも熟練兵が乗れば……。

間話その3 「白色電光戦闘穴吹、ミッドチルダのエースオブエースと交戦す。

今回は未来世界に残っている、扶桑海の巴御前、穴拭智子が主役です。

間話その3 「白色電光戦闘穴吹、ミッドチルダのエースオブエースと交戦」

—2199年。地球連邦政府は比較的友好的に時空管理局との関係を築いていた。これは対話が出来ない勢力（恐竜帝国、ガミラス帝国や白色彗星帝国など）との生存競争を経験したためで、友好が可能な勢力との接触を国民が求めていたためでもある。

結果、両国間の交流も始まっていた。

そんな中、扶桑皇国から2199年を訪れていた穴拭智子は、地球連邦軍の演習に参加していた。前線への復帰を機にこの世界の、自分、の異名の一つ「白色電光戦闘穴吹（最も彼女は字違いで、穴拭、なのだが、未来世界では担当官のミスで穴吹として記録されていたので連邦軍の書類上ではそう記されている。）を改めて襲名。教導のために訪れた演習場で後に友人のティアナ・ランスターの直属上官となるはずの、高町なのは、と対面することになった。

—私は今、不思議な出来事に遭遇してる。仲間の上官になるはずの女の子が幼い姿で私の前に立ってる。見た感じは歳相応の普通の子なんだけど、ティアナ曰く、此頃にはもう、無敵のエース、としてもう名を馳せていたって言うけど……。可愛いわね。

「あなたが今日の相手？」

「はい。高町なのはって言います。今日はよろしくお願いします！」

「私は穴吹智子。あなたのことは聞いてるわ。お手柔らかに頼むわ」

自己紹介しつつ、なのはは純粹無垢な笑顔を見せる。その笑顔は智子に、自分がああいう風に笑ったのはいつだろうか、と感じさせ、智子は心のなかで自分に苦笑しつつも笑顔で自己紹介を返す。

—この人が別の地球の空戦魔道士……。それも日本陸軍きつてのエースで、扶桑海の巴御前、って呼ばれてるんだよね？そう考えるとシグナムさんみたいだなあ……。

なのはの方もウィッチがいる世界のことは新聞などを読んで知っていたので、幾度か智子の勇名は耳にしている。別の世界の、魔法使い、にて、扶桑海の巴御前、の異名を持つ日本陸軍（正確に言えば扶桑皇国陸軍）のエース。刀を接近戦に使うという点では、ヴィータと同じ守護騎士、ヴォルケンリッター、の烈火の将「シグナム」やフェイトと同様だが、あの2人とはまた違うタイプだ。巴御前という、大昔の武芸で歴史に名を残した姫武者の名を異名として頂くのだから相当な使い手なのは間違いないだろう。

2人はそれぞれ模擬戦の準備をする。智子は扶桑皇国陸軍軍服（未だ来世界で暮らしているうちに式典に出席する機会ができ、正装の必要が生じたので元の世界の参謀本部から改めて取り寄せた）から戦闘時の巫女装束と小具足姿に着替え、なのははバリアジャケットを纏う。

それぞれ出揃ったところで武官からルールの説明がなされる。なのははウィッチが用いている小型無線機を耳に付ける（時空管理局側の魔導師が用いている念話はウィッチ側には未知の概念だということ、その場で飛行魔法を発動できる彼女の方が先に飛び立ち智子が来るのを待ち受ける。ウィッチはストライカーユニットを用いて飛ぶので、通常の飛行機同様に飛び立つのにある程度の滑走距離がいるのだ。地面に出現する、ミッドチルダ、式でも、ベルカ、式の

いずれでも無い魔法陣に新鮮な感覚を覚える。

（この前は大変だったけど、今回は負けないんだから！！）

最新鋭モビルスーツのジャベリンやら、偉大な勇者、グレートマジンガーやら、ドラグナーに喧嘩を吹っかけられた一週間前の模擬戦では多大な苦労を強いられ、その後、3日間ほどの完全休息が必要になるほど消耗してしまった事を思い出し、苦笑いする。

その時はなのはのあまりの消耗ぶりにフェイトが心配のあまり、模擬戦で戦った相手である剣鉄也やら、ケーン・ワカバに戦闘時の格好で事情を聞きに行ったとか（2人が無事で済んだのかは定かでない）。

「待たせたわね」

智子が4式戦闘脚「疾風」を纏って上昇してくる。航空ウィッチの使うストライカーユニットはレシプロ機の後部をそのまま足に着けたようなものだ。世界が違くと飛行魔法の技術も異なる事も妙実に表している。魔力を動力源にしているのは時空管理局の兵器に通じるものがある。何やら物騒な機銃も持っているが、もちろん模擬弾なので安心した。

「それじゃ始めるわよ。せっかくの模擬戦なんだから初太刀で落ちないでよ？」

「そっちこそ。行きますよー！」

智子はなのはと会話するうちに、自分の口調が自然と10代の頃のそれに戻っていることを改めて自覚する。やはり肉体が若返りを果たすと、気まで若くなるらしい。不思議なものだ。

外見年齢14歳、実年齢20代前半の機械化航空歩兵と弱冠11歳の空戦魔導師の2人は空戦を始めた。スピードはなのはに分があるが、空戦機動での小回りの良さなどでは智子の疾風が確実に上回っている。

なのはは火力と防御力重視で、空戦機動時の機動性はあまり高くなく、飛行特性は飛行機で言えば火力での一撃離脱戦法を主とする欧米の戦闘機に近いだろう。

智子が先程から見ても、日本（扶桑）機特有の軽やかな機動を見せる自分に、今一步のところで追従しきれないのが分かる。その点は技量でカバーしているようだが……やはり空戦機動力の差はテクニクだけでは埋めがたいらしい。

「ディバイイイイイン……バスターアアアッ!!」

なのはの初撃は得意とする砲撃魔法からだった。極太いビームの奔流が智子を襲うが、ネウロイとの戦闘でこの手のビーム攻撃は見慣れている。智子はその持ち前の技量で蝶が舞うが如くの神業的な機動で回避する。

「嘘っ、今のを避けられた!?!」

「伊達に扶桑海の巴御前の異名を持つじゃないわよ。狙いは正確なようだけど……それだけで私を落とせると思ったら大間違いよ」

智子是不敵に笑う。扶桑海事変以来、幾多の戦いをくぐり抜けてきたという自負。まだまだ若い連中に遅れは取らないとばかりに、先祖伝来の扶桑刀「備前長船」を悠然と構えていた……。

間話その3 「白色電光戦闘穴吹、ミッドチルダのエースオブエースと交戦」

、扶桑海の巴御前 対、エースオブエース、高町なのはです。

白色電光戦闘穴吹は穴吹智曹長本人が一番気に入っていた異名で、自称でもあります。（名前にミスがありましたので訂正）

第29話「RUNNING TO HORIZON」(前書き)

今回は久しぶりにドラえもん達が登場します。

第29話「RUNNING TO HORIZON」

―加東圭子は戦友のマルセイユが撃墜された報に動揺するも、無事であるのでひとまず安堵していた。マルセイユを落としたのはこの時代より後に造られるはずのジェット戦闘機。ジェットはレシプロの数倍の出力とスピードをたたき出せると聞いていたが……まさかこれほどに強力だとは。

「まさかジェット機がここまで強力だなんて……」

「まだ第3世代機だっただけでも幸いですよ」

「50～60年代の戦闘機か……。これでもまだ彼等にとっては旧式の部類なんですか」

「そういう事です、少佐。しかし油断は禁物です。現にローマーニヤ方面ではこのような機体も確認されていますから」

軍曹は圭子に504統合戦闘航空団が担当しているローマーニヤ方面でこの日より3日前に姿を現した3機の可変翼を持つジェット戦闘機の写真を見せた。機種は「トーネード ADV」。かつて大英^{イギリス}帝国が80年代から防空戦闘機として採用していた機体で、ご丁寧に識別マークも元々の所属国のそのままである。

「ブリタニアの戦闘機……？」

「我々の常識でいうならば、大英帝国、です。トーネード ADV、第4世代ジェット戦闘機に属するものの一つで、基地の防空用に造られています。顔見せ程度ですが、504と交戦したとの報告も我が艦隊に入ってきております」

「504が……？」

「はい」

504とは、第504統合戦闘航空団の事。かの、リバウの貴婦人、の異名を誇る竹井醇子大尉が属している統合戦闘航空団。ローマニア方面の防衛を担当するが、彼等はそこまで進出したのか、

「彼等はいったい何者なんですか？」

「、ティターンズ、。かつてはそう呼ばれていました」

「ティターンズ……？」

「元々は地球連邦軍内部のタカ派・保守派が作った宇宙移民を取締り、コロニー独立戦争の際の敵であった、ジオン公国軍、の残党狩りを推し進めるための特殊部隊でした。その立場を利用して連邦軍での発言力を増大させていったのです」

ティターンズがいつ、どのようにできたのか。そしてその行為がやがて穏健派や改革派の反発を招いていく事、そしてそれはやがて内乱へ発展したことを軍曹は圭子に説明していく。圭子は話の中で出てくるティターンズの行ったという行為に身震いしてしまう。

毒ガスで1500万人の人々を虐殺した、30バンチ事件、……さらに大量破壊兵器、コロニーレーザー、を用いた18バンチコロニーの破壊……。

―宇宙移民というだけで民間人相手にこんな残虐行為を行えたの……ッ！？

圭子は憤慨せずにはいられなかった。ティターンズという組織が行った残虐行為。―民間人を無作為に殺した―それもただ宇宙移民というだけで……前に504の竹井醇子から電話で話に聞いた未来世界の戦争での、コロニー落とし、とて、まだ、宇宙移民者を解放するための腐敗した連邦政府への鉄槌、という大義名分があった。し

かしこれは……。

「これらはティターンズの中のさらにタカ派が独断で行った行為です。戦後の軍事裁判で判明したことです。殆どの構成員は組織全体の行為を知らなかったのです」

「内部の構成員も知らないとはどういう事です？」

「、大本営発表、ですよ」

「大本営発表……」

圭子はその言語に複雑な気持ちを浮かべた。彼等の歴史では、大本営発表、は事実の歪曲・摸造の代名詞として歴史に名を残したという。いったいどれだけの悪行を行えばそこまで言われるのか。圭子には想像しにくい事だった。

そしてティターンズという組織がどのようなモノだったのか。圭子は徐々にその全容にふれつつあった。

――1999年。こちらは野比家。現在は学園都市から3人の学生が訪れている。

正確に言うと10数年後からだ、御坂美琴、白井黒子、初春飾利

の3人が野比家で生活していた。彼女らは学園都市とは全く違う町――昭和40～50年代の面影たっぷりのスキ原でひとまず平和を謳歌していた。――だが各国が喉から手が出るほど欲しがる、能力者を国が放っておくわけはなく、どこからか美琴たちが能力者である事が知られてしまう……。

――夜

闇夜を数機のヘリが飛んでいく。大仰極まりないが、兵員輸送用と戦闘ヘリだ。目的は在日米軍の最新装備で固められたこの小隊で、民家にいると思われる、能力者を確保すること。アサルトライフルや麻酔銃を以てして作戦に当たった。

「A小隊はここだ。B小隊はこの地点。ターゲットを確保次第、撤収する」

「随分簡単ですね」

「馬鹿者、目標を甘く見るな。学園都市、の能力者だぞ。何が来るかわからん……被害は覚悟しておけ」

「ラジャー」

「では作戦を開始する」

彼等は市内では装甲歩兵戦闘車で移動、野比家の背後を突くようにして作戦行動を起こす。

午前2時、町が静かに眠る中、それは始まった。作戦に当たって、周囲の民家には国や区が何かかしらの手で工作し、無人としている。静かに侵入し、目標がいるであろう二階に歩を進めるが……

「やっぱりこう来たか。スネ夫からの連絡は確かだったようだね」
「こんなこともあるのかと、ドラミから護身用にもらっておいて
正解だった」

「確かにね」

長い階段を登り切った先にはリボルバー式の銃（ただし、ひみつ道具である麻酔銃の類だが）を持ったのび太が居た。着替えるほどの時間がなかったのか、寝間着姿のままだ。いくらこの時代の最新装備を来ていようが、22世紀の銃弾を防げる道理はない。躊躇なくのび太は銃の引き金を引いた。

銃声には見合わない可愛らしい、ヒロポロン、という音色が響いた……。

―別働隊が侵入していた隣の部屋では……

「まったく……こんな夜中に侵入するなんて……無粋な連中ですわね」

白井黒子が得意の空間移動能力を駆使した金属矢や体術で大の大人、それも訓練を受けた軍人たちを拘束していく。見事な動きだ。瞬く間に3人を軽くのして行く。こちらも寝間着姿である。美琴は外の連中をのして来るとか言って、外で戦っている。これだけ派手に戦っているのにまったく騒ぎになる様子もない。となると……。

（おかしいですわね……お姉さまがこれだけ派手にやっているというのに全く騒ぎにならないですって……？）

「初春！この人達の装備から何処の輩か分かりましたの？」

「米軍です。それもこの時代にこれだけの装備があるということは……特殊部隊……地理的に、Navy SEALs、だと思われま
す。」

「Navy SEALs……随分と大げさですわね」

米海軍の誇る特殊部隊をたかがこんな民家の制圧に投入したという
のか。目的はだいたいは察しがつくが……幾ら何でもオーバーでは
ないか？黒子はそう思いながら、米軍の精鋭たるNavy SEAL
sと渡り合っていた……。

第30話「フェイト・T・ハラオウン、魔のクロエと出会う」(前書き)

今回は魔のクロエこと、黒江綾香とフェイト・テストロッサ・ハラオウンの出会いです。

第30話「フェイト・T・ハラオウン、魔のクロエと出会う」

―ティアナの、願い、を叶えた、魔のクロエ、黒江綾香は正式に地球連邦軍への協力任務に付き、

再び未来世界へ戻った。それは未来世界の技術でウィッチ達に、今後出現するであろう、高速ネウロイや現地で行動しているティターンズ残党、に対抗出来る力を与えるために、連邦軍が時空管理局や連合軍を抱え込んだの共同プロジェクトを発足させ、連合軍上層部からそのメンバーに選出されたためである。その中には501で勇名を馳せるエーリカ・ハルトマンの双子の妹で、エースの一人であるウルスラ・ハルトマンも含まれていた……。

―2199年 地球連邦軍 百里基地

ここはかつて、民間空港としても使用されたが、いつしか廃止され、元の純粋な航空基地に戻っていた。地球連邦政府の、帝都、として復興を含む日本州（かつての国々の統治地域は、州、として再編されている）の中では過去の戦乱での被害が大きく、基地周辺が無人地帯となったために連邦軍の新兵器実験場の一つとして重宝されていた。そこでウィッチ達はジェットストライカーユニットの実用化に向けて奮闘していた……。

ノイエ・カールスラントから運び込まれた試作機、メッサーシュミット Me262、やりベリオン合衆国の、P-80 シューティングスター、扶桑皇国の、キ201 火龍、などの各国が作り上げていたジェットストライカーの試験が進められていた。

メンバーの一人で、カールスラント空軍出身のヘルマ・レンナルツ曹長は試作機群の、燃費、の悪さにガックリとうな垂れていた。ジェットストライカーは従来のストライカーユニットより遥かに多量の魔力を食うことが動力試験で判明した。これは連邦側の軍需産業や時空管理局から派遣されたエンジニア達が未来の各種ジェットエンジンを参考に、エーテルを圧出する機構を含めた内部構造の設計見直しを提言。プロジェクトの重要事項として、正式に決定された。これは数日前に行われた飛行試験でシュヴァルベの愛称を付けられたMe262の一機が墜落事故を起こした際に、過剰に装着者の魔力を吸収して消耗させる、という欠陥が露呈（史実では実用試験として装着したゲルトルート・バルクホルンが経験する事態）したためである。それを改善すべく技術陣は懸命に知恵を絞り、魔力運用効率を向上させた、改良型の、第二世代エンジンの設計が急がれるが……

「……ジェットストライカーをモノにするのがこんなに大変だななんて……」

彼女はジェットストライカーユニットの実用化には年単位の時間がかかるかも知れないという技術者達の言葉を聞き、激しく落胆していた。

一こうしている間にも、ティターンズ、のジェット戦闘機は同胞達を蹂躪していると言うのに……。

未来世界の援助を以てしてもジェットストライカーユニットの今すぐの完全実用化は無理。

新世代エンジンさえ完成すれば道は開けるのだが……今はエンジンの開発を急ぐエンジニアたちを信じるしか無かった……。

それは綾香もほぼ同様の思いだった。扶桑を立つ前に竹井醇子から電話で聞かされたジェット戦闘機の脅威。「リバウの貴婦人の異名を誇る醇子が全力を尽くしても損傷を与え、一機を撃退するのが精一杯だった」事否応無くジェットの脅威を実感させられたし、この時代の航空兵器の發揮する威力には脱帽させられもした。だからと言って諦めることなど到底出来はしない。、どうしたものか、と彼女は休暇を取り、現地の刀鍛冶から新しい刀を受け取るために長野を訪れていた。奇しくも戦友の穴拭智子が高町なのはと模擬戦を行ったのと同様に、彼女も話に聞く、ティアナの、未来の上官、の一人「フェイト・テストロッサ・ハラオウン」と対面を果たした……。

一新早乙女研究所にて結城丈二から聞かされる形で、バダン、の存在を知ったフェイトは、どうしたらいいのか、と悩んでいた。

「今の私じゃみんなを守れない……もつと強くなりたい……！」

フェイトは、事件、を契機に史実以上に、なのはやみんなを守る！、という気持ちを抱くようになっていた。以前に交戦したジオン残党軍の軍人達の言葉がこの瞬間にも彼女の心に響く。『何故争いは無くならないと思う？』

戦士たちの言葉はまだ子供でしかないフェイトの心に大きな衝撃を与え、戦いとはなんぞや、との問いを彼女に課し、同時に信念や戦う理由を考えるきっかけとなった。同時に自分の力のなさを痛感し、強くなりたい、と思っていた。そんな事を考えながら浅間山を下山し、アムロたちとは別行動を取っての帰り道を歩いていると、一軒のロッジが目にとまった。ロッジの庭で日本刀を素振りして、

何かの特訓に励んでいる一人の少女の姿が目にとまった。その少女はフェイトより2、3歳ほど年上のように見え、巫女装束と小具足を纏った、日本の姫武者、のような姿の女の子だった。

休暇を取り、貸ロッジで剣術の腕を磨いていた、魔のクロエ、黒江綾香大尉はフェイトの姿を視認すると山を妙な格好で歩いている（綾香は知る由もないが、フェイトは飛行魔法を使うためにバリアジャケットを使用していた）少女に声をかけてみた。荷物らしきものも持っていないなど、山を歩くにはあまりの軽装だったためだ。

「危ないじゃないか、こんな所を女の子がウロチョロしてちゃ。遭難したらどうする」

「す、すみません……」

確かにフェイトのバリアジャケットははたから見れば軽装なので、山に詳しい人から注意されるのも至極当然である。フェイトは一言謝ると自分より幾分か年上に見える（現在の綾香の外見年齢は13歳ほどで、実年齢とは10年程度の開きがある）少女に話しかける事にした。事情を話すと納得したようで、中でも驚いたのは時空管理局の事も知っていた事だ。

「どうして管理局の事を知ってるんですか？」

「扶桑皇国、って聞いたことはないか？私はその出身なんだ」

フェイトはハツと思い出した。なのはから連絡のあった異世界の空戦魔導師の、穴拭智子、中尉の出身世界の日本の国号。つまりこの

少女は智子と同じ世界の出なのだ。そして少女は自己紹介も兼ねて自分の官名を名乗った。扶桑皇国陸軍の大尉で、黒江綾香と言う名前らしい。自己紹介を返し、改めて自分の名を名乗る。

「それじゃ綾香さんは穴吹中尉と同じ世界から来たんですか？」

「そういう事になるかな。アイツとは同じ戦場で戦った戦友で、長い付き合いだ」

綾香は智子とは古くからの戦友である事をフェイトに教え、自身も智子同様に異名を持って呼ばれた事もあるエースの一人だということも付け加えた。

「ここでしばらく休むといい。君の出向先には私から電話で断りを入れておくよ。出向してる部隊の名は？」

「ロンド・ベル隊です」

「例の最強部隊か。あの部隊の噂は聞いてるよ」

自分とそう変わらない年齢に見えるのに、それに見合わない落ち着きや豪胆さを見せる綾香。フェイトには彼女の背中がとても大きく見えた……。

一、魔のクロエ、。フェイトが綾香の持つその異名の意味、そしてそれとまったく同じ異名を持って恐れられたビルマ戦線で名を馳せた、かの飛行第64戦隊、通称、加藤隼戦闘隊、所属の大日本帝国陸軍のエースパイロット、黒江保彦、少佐の存在を思い出すのはそれからすぐのことだった……。

第31話「RUNNING TO HORIZON 2」(前書き)

今回はのび太無双です。

第31話「RUNNING TO HORIZON 2」

―ドラえもん達はNavy SEALsと交戦に入っていた。米軍の目的は‘学園都市’の能力者を拉致する事。標的は主に御坂美琴。最強の発電能力者を手に入れ、能力を解析する本国の思惑のもとに派遣された彼らだったが、彼ら以上に射撃能力に優れ、こと銃に対しては稀代の才能を持つ野比のび太の前にあっさりと倒されていた。

「白井さん、伏せて!!」

のび太の声で黒子は地面に伏せる。刹那、銃撃の音と共にSEALsの隊員が地面に倒れていく。ドリームガンの弾丸は切れたらしく、別の実弾銃に持ち替えている（これはかつてのび太が西部開拓時代の米国のモルグ街という町で実戦を経験した事があり、その戦いの際に村長から手渡された回転式拳銃をポケットに入れたのを気づかないまま現在に帰還したため。弾は消費していたのだが、スネ夫の親戚のツテでいざという時のために補充しておいたのだ。無論、普通に考えると銃刀法違反になるが、のび太の母である玉子は机にしまわれていたこの銃を、のび太が新しく買ったモデルガン、だと思っており、そのままにされていた。なので今回使用できたのだ）

「……殺したんですの？」

「いえ、急所は外してあります。」

「それにしても随分と手馴れていますわね」

「実戦の経験がありますから。弾は少なめ、狙いは正確に、が僕のモットーです」

こう自負するとおり、見るからに旧式の回転式拳銃で軍人たちの防

弾チョッキの及ばない部位を的確に狙い撃ち、数発で数人を行動不能に陥らせたのは流石としか言いようがない。学園都市の警備員でここまで鮮やかに制圧できないだろう。黒子は小学生とは思えないほどに戦いなれたのび太に頼もしさと同時に末おそろしさを感じた。

SEALSの隊員たちは米海軍の精鋭の誇りをこれでもかと、ボロクソに潰されていた。厳しい教練を潜りぬけ、世界最強の米軍の中でも精鋭と扱われ、自分たちもそれを誇りとしてきた。それが、今。

―数人の年端も行かない子供と狸型（！！）ロボットに手も無く捻られているのだ。

「ヌオオオオオオ！！なんでSEALSの俺達がJAPジャップごときに……それもジュニアスクールに行ってるようなガキにのされてんだよ！！」

一人の隊員が日本人への侮蔑語である「JAP」を口走りながらM16アサルトライフルを乱射する。彼らは受け入れられないのだ。制圧する側であるはずの自分たちが、制圧される側、に回っている事を。精鋭である自分たちが子供に捻り潰されつつある事を。それもかつて米軍が完膚無きまでにたたき潰したはずの日本人に。

「あなた方に敗因があるとすれば……たった一つ……そう。シンプルな答えですわ……『あなた達は私達を怒らせた』」

黒子はどこぞの某有名少年漫画の往年の名台詞を自分なりにアレンジしつつ言った。兵士を取り押さえながら。実にクサイ台詞だったが、その場の雰囲気で言いたくなかったかもしれない。室内の兵士たちは大体は取り押さえたが、まだ外にもいるはずだ。

不意にプロペラ音が響き渡る。どうやらヘリで強引に室内を制圧するつもりか。

のび太は自室の窓の方に向かう。拳銃で戦闘ヘリに戦いを挑むのか。あまりの無謀さに黒子は制止しようとするが……。

「ドラえもん!!」

「あいよ!!」

ドラえもんは黒光りする一丁の超大型拳銃とその専用弾、スプレーのような物を手渡す。のび太はすぎさまスプレーを体に吹き着け、素早い動作で拳銃に弾を装填する。ヘリは美琴の超電磁砲の射程外から射撃を加えようとしている。

―そうはさせるか。

ヘリの機動から未来位置を予測、銃を構える。映画「ダーティ・ハリー」で主役が取るような、両腕で銃を保持し、足に踏んばりを入れる、大型拳銃特有の射撃体勢である。

「のび太君、どうするつもり!?!」

「耳をふさいで! 鼓膜敗れますよ!」

机から乗り出し、銃を構えるのび太に下から見上げる格好の美琴が

ギョツとする。当然だ。いくらなんでも戦闘へりを拳銃で落とそうなど無謀もいいところ。下手をすれば蜂の巣にされるのは眼に見える。しかしのび太の表情は冷静そのものだった。美琴に耳を塞ぐように促すとのび太は飛来したAH-64「アパッチ」に対して、銃の引き金を引く。

―その瞬間。戦車砲、もしくは艦砲かと見間違うような閃光と轟音が辺りに響き渡った……。美琴も黒子も己が目を疑った。ヘリが拳銃の、銃弾、一つで火達磨になって爆発したのだから。

「ば、化物じゃない……」

美琴は啞然としながらそれだけ言うのが精一杯だった。のび太の持つ銃は艦砲射撃と見間違うごとき威力を発揮し、アパッチを塵に返したのだ。米軍の誇る兵器を一瞬で地獄に堕とした張本人であるのび太は当然と言わんばかりに銃を鮮やかに回転させる。さながら西部開拓時代のガンマンだ。

「なんですの……その銃は……？」

あまりの光景に驚きを隠せない黒子にのび太はこう答えた。一言だが、この銃の力を示す単語を以てして。これぞあまりの殺戮兵器故に、ドラえもんが封印していた人類史上最大最強の拳銃、ジャンボガンだった。

「ジャンボガン。この時代のどんなMBTも……たとえ学園都市製のものであっても一発で吹き飛ばせる、ドラえもんの道具ですよ」
「……!!」

黒子も、この光景を間近で目撃した初春もその単語に絶句する。と

んでもない破壊力を持った超兵器をなぜ一介の子守りロボットが……。黒子は底知れぬドラえもんのもつ道具の力に畏怖さえ感じていた。

第32話「前史 策謀の連邦軍本部」(前書き)

この話の時間軸は本編の数年前になります。

第32話「前史 策謀の連邦軍本部」

―地球連邦軍の総司令官であるレビル將軍は一年戦争時の、戦死者、に数えられていた。

では、何故彼が再び連邦軍の指揮を取る事になったのか。それには理由があった。

ギアナ高地には第二次ネオ・ジオン戦争時に壊滅したラサに代わって連邦軍の本部が置かれている。その基地の一室に2人の人物がいた。一人は連邦軍の將軍の中でも改革派の重鎮とされる「ジョン・コーウェン」中將、そしてもう一人は「レビル」將軍であった。

「あれからもう二年か。早いものだ」

「ハッ」

レビル將軍は、一年戦争を連邦軍の勝利に導いた英傑だが、最終局面で戦死したはずである。では何故戦死したはずの彼がここにいるのか。原因は彼の座乗艦が巻き込まれたソーラレイであった。コロニーレーザーの膨大なエネルギーは瞬間的に次元に亀裂を生じ、偶然にも彼が座乗していたマゼラン級戦艦「フェーベ」を飲み込んだのである。そして一年戦争から数年の時間が経過したそして白色帝国帝国との戦争の最終局面時に、帰還を果たしたのだ。

「…その際には一悶着があった。ここで連邦軍の内輪話に光を当てようと思う」

ジョン・コーウェン中將の日記に記された白色彗星帝国戦役的一幕が紐解かれる……。

―2197年 連邦軍本部 ギアナ高地

「そうか、土方が逝ったか」

執務室で報告書を受け取るのは当時の地球連邦宇宙軍の大將で、宇宙軍司令長官であった

ジーン・コリニー。彼は連邦軍の中では保守派であり、白色彗星帝国との戦闘で全ての戦力を投入するのは懐疑的であり、自分を差し置いて本星防衛艦隊のほぼ全ての戦力を指揮下に収めて戦闘に臨んだ「土方竜」の事を快く感じていなかった。そして自らの配下の艦隊は本土防衛の名目で地球に留まっておいたのだが……。

「アンドロメダが撃沈され、我が軍は総崩れになりつつあります。如何でしょうか提督！」

「戦いたい奴だけ残ればよい」

「はあ……？」

「土方が戦死した以上、奴の命令に従う道理はない。艦隊を離脱させろ」

この言葉は暗に残存艦隊に敵前逃亡させ、従わない輩は、死ぬ、と言うのを示していた。地球の危機になってもこの期に及んで派閥争いをするのか。その場にいた兵士の誰もがそう思っていた。口には出さない。彼に疎んじられたが最後、左遷、もしくは失脚させられるのが運命だからだ。

「提督!!」

一人の将官が物凄い剣幕で怒鳴りこんできた。ジョン・コーウェン中將。ジーン・コリニーの命で待機させられていた地球連邦宇宙軍

第3地球軌道艦隊の司令で、地球連邦軍きつての猛将として知られる黒人系の将官である。

「何故我々に待機を命じられたのです!! 我々の戦力があれば……」

自らの配下にある「ロンド・ベル」を始めとする戦力があればアンドロメダを救えたかも知れない。憤るコーウエンだが、今となっては後の祭りだ。彼は今からでも善処を行おうと動いたのだが……。

「まったく……土方といい、君といい……どうして面倒事を起こすのかね」

「なっ……」

「君には待機を命じたはずだ。とっとと帰るたまえ」

この言葉でコーウエンの怒りは頂点に達した。多くの若者の命が失われ、今また地球が戦場になろうとしているのにあまりにも無責任な発言だった。これが仮にも栄光ある地球連邦軍の宇宙軍司令の言葉か。コーウエンは襟を掴みかからんばかりにコリニーに詰め寄るが……

銃を突きつける音がする。コリニーの傍らにいた元ティターンズ系の少将が銃をコーウエンに突きつけたのだ。

「貴様……!!」

「提督は下がれと言っている!!」

「貴様らはこの事態をなんと心得ているのだ!! 土方司令が戦死なされ、我軍が破れ去れば白色彗星帝国は地球を蹂躪するのだ!! 沖田提督の忘れ形見の、ヤマト、が奮戦しているというのに何もなさないと言うのか!!」

上層部のあまりの楽観主義ぶりに殴りかかりそうな声で怒鳴るが……

「やめろ！！これ以上やると……」

コリニー配下の兵士がコーウェンを取り押さえんと殴りかかる。本気だ。

―これが今の腐敗した上層部なのか。コーウェンは心の中で嘆きながら目を閉じた。

―その時だった。銃声が響き、私を殴ろうとした兵士が鮮血を散らしながら崩れ落ちる。私は何が起こったのか、理解出来なかった。すると提督の顔がまるで幽霊にもあったかのような顔面蒼白のそれになっていたのだ。

「あ、ああ……馬鹿な！？貴様は死んだはずだ！！」

―提督が指を差して震えている。指が指している方角には驚くべき人物が立っていた。それは……

「久しぶりだな。コリニー中将……いや今は提督殿か」

「貴様が何故生きているのだレビル！？」

「……死んでいたさ。だが、神がそう安々と死なせてくれなくてな」

そこには一年戦争で戦死したはずのかつての英雄、レビル、將軍その人が往時の姿そのまま立っていた。手にはコルトパイソンが握られている。

「し、將軍！？生きて……ご無事でおられたのですか！？」

驚きのあまり目が点になるコーウェンにレビルは笑みを浮かべつつ

答えた。コーウェンがこうありたいと願っていた毅然とした武人の態度で。

「タイムスリップという奴だよ、コーウェン。あの時、ジオンの超兵器のエネルギーに巻き込まれたときに艦ごと飛ばされてな。気がついたらこの時代に飛ばされていた。幸いエウーゴの艦隊に保護されてな。半年ほど療養していた」

レビルは自嘲気味に言うところ、コーニーに一つの通達を突きつけた。それはコーニーにとって死の宣告だった。

「ジン・コーニー！！君は只今を持って宇宙軍司令の任を解かれ、更迭となる」

「ふん。エウーゴの奴らとつるんで参謀本郡の藤堂平九郎総長を抱き込んだか。だが……」

しかしレビルが突きつけたその書類は政府決定の正式なものだった。軍の上部の国防省の最高幕僚会議の正式な辞令もセットになっている。

「どういふことだ貴様！！」

「見ての通りだ。只今を持って君はもう司令でも何でもないのだよ。ただの、少将閣下、」

「おのれえゝ！！」

「やれ」

「ハッ、元帥、」

レビル配下の憲兵がコーニーを強引に連れて行く。彼の副官や彼に味方していた人員も拘束され、連行されていく。執務室にはコーウェンとレビルの2人だけが残された。

「状況はマノク陸将補から聞いている。君の第3軌道艦隊を直ちに
出撃させたまえ。私も直接艦で指揮をとる」

「ハ、ハッ!!」

「アーガマ級2番艦の、ペガサス?、を臨時旗艦とする。土方君の
弔い合戦だ」

レベルはその後、持ち前のカリスマ性で直ぐ様連邦軍を掌握。人類
に勝利をもたらした。

コーウェンら連邦軍改革派にとっては何よりも嬉しい事件だった。
これをきっかけに連邦軍は少しずつ腐敗から抜けだしていくことになる。
この時が正に歴史が変わった瞬間だと後の世の軍人たちの間
で有名になる出来事だった。

第32話「前史 策謀の連邦軍本部」(後書き)

と、
いうわけで以前触れた、レビル將軍の生還劇です。

間章その8 ―「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて

今回は久しぶりにストライクウィッチーズ完全メインです。

―別世界の地球の各地で、活動、を行うティターンズ残党軍は方面軍基地内でモスボール保存されていた、国連時代、の各世代ジェット戦闘機の改修を行っていた。

これまでは数の多い第3世代戦闘機が主な改修先だったが、より新しい第4世代や補助機材の確保の為に第2世代機をも近代化改修先に選定した（流石に第一世代は古すぎて無理であった）。

イタリア（ローマ）方面航空軍から本拠地へ派遣された将校は書類に方面軍への新規配備の機材の名を記していく。エースが揃う504統合戦闘航空団を相手取るのにはそれなりの機体は必要だからだ。機材についてはその場で改修が完了した物が自動で当てがれるので、好きな機種を持つていくのは無理である。贅沢は言ってもらえないのが今の彼等であった。エースパイロットが多くいるアフリカ方面の部隊でさえ、まだ第2世代が主力で、第3世代以降の戦闘機の配備はエース専用の少数配備に留まっているのだから。

「ミラージュ2000Cが3機、トーネードADVのF3が3機、それとグリペンが2機……確かに領収した。……凄いじゃ無いか。いいのか、第4世代を一気にこんなに戻して？」

「なんでも504にはラバウルの貴公子がいるって話だから、念には念を入れての措置だ。戦間期程度のレシプロなんぞ物の数ではないが、魔女は厄介だからな」

この、ラバウルの貴公子とは史実の日本海軍のラバウル航空隊エースパイロット、笹井醇一、の異名で、暗に、リバウの貴婦人、竹井醇子の事も示している。彼等は彼女の必死の抵抗により初出撃での、恒久的、な制空権確保を断念させられていた。その結果により現

地の基地司令は「何たる様だ！！WW?の延長線上にすぎん連中を落とせないとは！！」と憤慨したようだ。

これらの第4世代機を駆る増員パイロットは一年戦争（グリプス戦役）の生き残りの飛行時間1000時間以上のベテラン兵が指名されており、司令部のこの方面に対する気の入れようが伺える。他にはモビルスーツは主に主力機のハイザック、マラサイ、ジム・クウエルに、アッシマーやギャプランなどの可変機も含まれている。これらは潜水母艦や空母、輸送船で運び、その護衛には水中MSや自由ガリア軍から摂取し、ある程度の未来装備をつんで完成させたりシユリユー級戦艦の2番艦「ジャン・パール」（建造途中だったので改造の自由が効いた）とティターンズ在籍の水上戦闘艦などの艦船が当たり、万全の態勢を引いた。

504及びヴェネツィア公国軍、ロマーニャ公国軍は超兵器で身を固めたこの艦隊に手出し出来ぬ事を歯噛みして悔しがった。連合軍の通常部隊を尽く蹴散らせる力を見せつけて、

輸送艦隊は悠々自適と補給任務を果たす。現地の防衛を担当する504のメンバーである、リベリオン出身のエースのドミニカ・S・ジェンタイル大尉は偵察飛行中に目撃した、余りにも凄まじい敵艦隊の偉容に「クソツタレめ！」と悪態をついたとか。

―こちらはブリタニア方面。501統合戦闘航空団の救援に駆けつけた地球連邦軍はモビルスーツ戦を展開。戦場は一気に未来戦の様相を呈していた。

赤城で補給を受けているルッキーニが目撃したのはビーム・サーベ

ルを持った連邦軍主力機のRGM-89「ジェガン」が「マラサイ」相手に、チャンバラ、を繰り広げている様だ。

双方の光の剣がぶつかり合い、光があたりを照らす。18m以上ある巨体がまるで人間のような動きで剣をぶつけ合い、時には蹴りやパンチなどの手段も入り混じる。年式はジェガンの方が新式である。グリップス戦役時のから使われている機体であるマラサイで連邦軍の次世代機であるジェガンに勝てというのは酷な話で、やがて地力で負け、一刀両断される。

「うわあゝ凄い、凄過ぎるよ……これ」

自分たちがどうやっても勝てなかった兵器同士の戦いはルツキーニに衝撃を与えていた。

艦隊の人間から聞いた話によれば「この戦いは人間同士の戦いである」という。

巨人は未来の世界の武器で、未来ではアレを使った戦争が日常茶飯事だそうだ。

一人間同士で戦うなんて嫌だよ。だけど……あたし達が戦うしかないんだ。アイツらをやつけないとシャーリーやみんなが……！

ルツキーニは人間同士で血みどろの争いをするのを嫌悪する。嫌と言って戦わないのは楽だ。しかし故郷があれば蹂躪され、友や愛する家族を失ってしまうのは許せない。自分がやっと見つけた居場所一かけがえの無い仲間を守りたいーその気持ちでルツキーニを突き動かした。そして何もせずにただ泣いているよりも、戦って傷つく方が何倍もマシだ。

ーこの艦隊の人は未来からあたしたちを助けるために来てくれた。

だったらあたしも何かしなくちゃ!!

ルッキーニは休息を打ち切り、ファロット G55チェンタウロを纏い、魔導エンジンを再び吹かす。武装は未来のロマーニヤの機関銃、ベレッタ M12、という奴らしい。(無論航空用に改良してある)。

シャーリーを援護すべく、ルッキーニは空へ舞い上がった。

一坂本美緒は菅野直枝と合流し、さらにZプラス隊とともにティターンズのモビルスーツに挑んだ。

美緒は自らのシールドが弱体化しているのを承知していた。モビルスーツのメガ粒子砲を防げないのは自明の理だが、それでも彼女は戦う。かつての自分の師匠「北郷章香」から何を教わったのかを思い出す。宮藤や菅野を教練する立場の者の立場だけではない。

ーウィッチに不可能は無い!!

「うおおおおおおつ!!」

そう決意を心のなかですると、叫びながら刀を抜刀し、立ち塞がるアッシマーに向けて一気に急降下する。

一扶桑海事変から鍛錬を続け、6年の間にモノにした奥義を以てしてガンダリウム合金を斬る!!

「坂本さん、無茶だ!!」

さすがの菅野もこれには思わず叫ぶ。相手は可変モビルスーツだ。今の坂本のシールドではビーム砲を防げない。もし、直前で気づかれ変形されれば坂本の命は無い。それに坂本はネウロイを外殻ごとコアものとも両断するほどの決定的な必殺奥義は身につけていないハズだからだ。

「黒江え!! 技を借りるぞ!!」

美緒はかつての戦友の名を叫ぶと、魔力を刀の切っ先に集中させる。それは魔のクロエこと黒江綾香の持つ秘剣をそのまま再現したものだ。菅野は目を目開いて驚愕した。

「あれは!?!」

—その時、オレは驚いてそれしか言えなかった。あの時、美緒…いや、坂本さんが放ったのはそう。あの魔のクロエの……。

「秘剣!!、うんよう雲耀、おおおっ!!」

それは黒江綾香が得意とし、彼女をエースたらしめた秘剣。坂本も扶桑海事変より特訓を繰り返してはいたが、実戦で使うのはブツケ本番。坂本はこれを以てしてアッシマーに特攻した。ガンダリウム合金の多重空間装甲をこれで切れるかどうかは分からない。だが、やって見なければわからない。超大型ネウロイを斬った剣がいくらこの時代の金属より遥かに強靱な装甲を纏っているとは言え、20mほどでしかないアッシマーに通じないハズはないのだ。

「物理法則無視してないかアレ」

その光景を目の当たりにしたZプラスの搭乗員達は口をそろえてこう言った。それは物の見事に的中していた……。

ウィッチ達や各種機動兵器が入り混じるブリタニア方面は正に混沌とした様相を呈していた。

ブリタニア本土で一人の軍人がティターンズの行動に感動していた。彼はトレヴァー・マロニー。ブリタニア連邦空軍の大將で、戦闘機軍団の指揮官。(因みに史実ではトラフォードという苗字であった。)

「これだ。女どもが跳梁跋扈しないあの軍隊こそ、真の漢達による統制された軍隊！」

これはこの時代の人間が持っていた女性蔑視の風潮に染まった発言であり、戦争は男によって為されるべきという太時代的思想だった。彼はストライクウィッチの台頭を嫌悪し、今回の騒乱でウィッチが不利な戦闘を強いられていることを小躍りして喜んだ。あの軍隊一すわなちティターンズに彼女たちの情報を売り渡した。そして彼の心はブリタニアへの忠誠心よりも野心のほうが優っていた。「ウィッチの軍からの排除」。それが彼の野望であり、そこをティターンズに浸け込まれ、今や彼は完全にティターンズの走狗となった。息のかかった人材をティターンズに派遣したのもその布石。

「見ておれJAPめ」

それは彼にとって扶桑は排除すべき対象としか写っていないことを

示していた。そしてその野望を顕現させる道具が……一未来世界ではすでに失われたはずの悪夢のガンダムー
、RX-78GP02A、の再製造機（ティターンズ強硬派がリバースエンジンアリングによって復元させていた）が静かに核弾頭バズーカを持って佇んでいた。

「Am^{エイメン}en」

彼の強化された野望が顕現するのはもうしばらくの時を待つ事になる。

間章その8 | 「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて

烈風斬ではありません（笑）坂本さんの活躍です。
改稿しました。

間話その4 「戦う隼と日本の血が交じる眷属」 (前書き)

F・16です。今回はこれが主役です。

間話その4「戦う隼と日本の血が交じる眷属」

一ティターンズによってウィッチの数を減らされた連合軍は既にあがりを迎えたハズのウィッチを未来艦隊の力を借りて若返らせ、現役に復帰させる策に出た。扶桑では黒江綾香や穴吹智子がその被験者になったが、その作戦が連合軍からメディアを通して各国に伝えられると、我も我もと、各地に点在する元ウィッチ達はこれに志願した。元・王立フアラウェイランド（史実のカナダ）空軍のウィッチで、501のメンバーである「リネット・ビショップ」の長姉にあたる「ウィルマ・ビショップ」もその一人。階級は軍曹。容姿は妹とそっくりだが、妹が髪を後ろで纏めているのに対し、彼女はストリートロングの髪型である。20歳になって退役し、30歳以上年上の軍の将校と結婚して幸せな新婚生活をおくっていたが、今回の騒乱が元同僚から伝えられると、居ても立ってもいられなかった。

「あたしのわがままを許してください」

夫にこう書き置きを残し、ウィルマは直ぐ様行動に移した。元フアラウェイランド空軍所属の下士官である事を欧州に駐留している地球連邦軍に手紙で連絡。数日後には軍への復帰の手続きを済ませ、連邦軍の駆逐艦「宵月」にて何番目かの妹とほぼ同年代に当たる10代中盤程度へ若返りを果たしたのである。

「……うつそお、凄いじゃないこれ!!」

医者にタイムふろしきを取ってもらい、鏡で自分の姿を確認すると確かに容姿が10代なかばの頃に戻っており、ストライカーユニットを履いてみると、魔力も最盛期の勢いを取り戻している。肉体そのものを若返らせるのではなく、時間を巻き戻したというのが妥当

な表現だろうか。ストライカーユニットも現有の物では最新鋭機に当たるスーパーマリン スパイトフルが支給された。しかしそれでも敵の未来戦闘機の前には圧倒的に性能不足だという。最大速度はリベリオンの新世代型マスターングとほぼ同水準の770?に達しているが、相手の超音速に達する速度に比べればカメの如く遅い。現に敵から鹵獲に成功したという

「ミラージュ 2000・5 Mk 2」との模擬空戦に臨んだ元同僚の一人曰く、『次元が違いすぎる』速度性能を見せつけられたと嘆いていた。

「これも時代の流れかしらね」

ウィルマはレシプロ機やレシプロストライカーユニットが前時代的な物となりつつあることを悟っていた。レシプロ機は速度性能に限界があり、時速800?で頭打ちになるが、ジェット機は速度がどんどん増大し、最終的にはマッハ25（可変戦闘機の数値だが）になっている。実に羨ましい。

しかし今の科学力では音速に届くかというのが限界で、ジェットの試作モデル「グロスター ミーティア」は惨めな性能に終り、その後継機種「ホーカー ハンター」でようやく1000 kmの大台に達したとか。（開発が未来世界の援助で加速され、史実での40年代末期以降の機種を死に物狂いの試行錯誤の末に作ることに成功していた）

ブリタリア本国はハンターを次期主力戦闘脚に指定してきたが、エンジンの信頼性の確保や実用に耐えうるための各種試験が控えているために一年以上は量産に移れない。

当面、スパイトフルは主力戦闘脚の座に留まり続けるだろう。

「ブリタリアは大変なようだけど、敵の戦闘機がどういう威力か身

を持って体験してみます。確かこの基地にはF-16 やF-2が
ありましたね？」

「ちよっと待ってくれ。連中に連絡を取る」

「お願いします」

この時期、地球連邦政府は連合軍との、条約、に基づいて駐留軍を
派遣するようになっていた。各地の連合軍の戦力の急激な減退でネ
ウロイの侵攻が進むのを各国が恐れたからで、

この要請には連邦政府もかなり紛糾したもの、首相の鶴の一声で軍
の派遣が決定（ティターンズの後始末をするハメになったのは愚痴
ったと言われている）され、陸海空宇の4軍の部隊が現地に派遣さ
れた。その指揮系統は第一航空艦隊のエイパー・シナプスを中心
にしたものとされた。（同時に彼は大将に昇進した）ウィルマが来て
いるこの基地には空軍の戦闘機部隊が派遣されており、機種は各種
最新鋭機の他には各国の往年の名機となっている。ティターンズが
旧世代機を現役復帰させて運用しているのを受けた措置で、連邦軍
もそれに習った格好となった。この基地に配備されたのは旧米軍の
F-16ファイティング・ファルコンに日本自衛隊のF-2。それ
ぞれ元の所属国の識別標識のままで運用され、時にはアグレッサ
ー役も務めている。今回ウィルマが対戦するのはこの2機種である。

「模擬戦で数機のジェット戦闘機と対峙したウィルマ・ビショップ。
彼女はブレンデッドウィングボディによる特徴的なF-16ファミ
リーの姿を視認する。同じ姿のように見えるが、微妙に差異がある。

日の丸を付けている大型の方が鮮やかな彩色をしており、乗るんならそっちの方がいいと思いながら空戦に入る。

轟音を立てながらお互いにマニニューバーを駆使してドックファイトに入る。

（ドックファイトの名の由来は互いに背後を取り合う様が犬の喧嘩に似ているから……というが、定かではない。）

模擬弾が入り交じりつつ、ジェットの飛行機雲が空を切り裂く。

一般にジェット戦闘機はプロペラ機より小回りは効かないと言われるが、F・2とF・16はそれを全く感じさせない動きでウィルマを猛追してくる。

「やっぱり速度は向こうのほうが上……か」

彼女はウィッチとしては妹のリネット（リーネ）のように取り留めた特徴は持たない。しかし現役時代を無事5体満足で戦い抜いたのは伊達ではない。

「カンはまだ鈍っちゃいないわよこの野郎ッ!!」

「……面白い。やってみろ」

彼女は吠えた。F・16の空戦機動は確かに見事だが、付け入る隙は十分に入る。下方からの攻撃には流石に対応出来まい。上空にいる敵機に向けて一気に突貫する。だが、彼女の頭にあることが浮かび上がっていないかった。それはジェット戦闘機時代にはレーダーが小型の単座機にも付いているのが当たり前となっている事実。それがすっかり抜けていたのだ。F・16のパイロットはわざと引きつけ、タイミングを合わせるように急旋回でその場を逃れる。そして彼女の背後にはF・2が出現し、M16バルカンを連射してくる。

「チェックメイトだッ!!」

「……誰がっ!!」

ウィルマは足掻いた。「いくら模擬戦といえど、いきなり惨敗するなど……」その気持ちでF・2の射撃から逃れんと頑張る。しかしF・2などの第4世代ジェット戦闘機の機関砲はレーザー照準式で、ずっと外れることは無い。ヨーなどを用いた照準補正でウィルマを確実に捉えた。さながらクモがチョウなどを巣に追い込んで捉えるかのように、赤いペンキの模擬戦がストライカーユニットに炸裂する。

「くっ!! 負けたあ!!」

地団太踏んで悔しがる。良いところをほとんど見せられずに手玉に取られたのだから当然といえば当然だ。

「帰投する。軍曹、基地で会おう」

それなりに楽しめたらしく、パイロット達の声は弾んでいる。

「次はリベンジしてやる!!」

ウィルマはそう意気込むと久しぶりの飛行を楽しむ。そう言えばブリタリア本土で戦っている妹はどうなっているのか。

「間を置かずにいきなり統合戦闘航空団に派遣されたって母さんから聞いたけど……ブリタリアの上は何を考えてるのよ」

彼女は妹が実戦訓練もなしにいきなり最前線に送られた事を聞かされていた。こここのところのブリタリアはきな臭い事になっている。

ベテランを手元に置いて、新人ばかりを送り込むなどどうかしている。

全てはマロリー大將が着任してからだ。あの男によって全ての齒車が狂い始めたのだ。

「あのマロニー大將には氣をつけろ。どうもクサイ」
「でしょうね……リリーネの奴、大丈夫かしら」

F・2のパイロットはウィルマにそう忠告する。それは彼等が連邦軍内部の派閥争いを見てきたからこそ言える台詞だ。

現にブリタリア軍内の派閥はウィッチ排斥派が急激に台頭してきている。親ウィッチ派の

ヒューゴ・ダウディング大將は更迭され、501を始めとする統合戦闘航空団の立場は危うくなっているのだが、サー・ウィンストン・チャーチル首相はその状況を憂っている。

扶桑皇国でもそれは同様で、陸軍の梅津美治郎大將や板垣征四郎大將などの史実で悪行を行った將軍達、海軍は嶋田繁太郎大將に宇垣纏中將や栗田健男中將を始めとする大艦巨砲主義者の提督たちがウィッチに対して悪感情を持っていて、それを小澤治三郎連合艦隊司令長官や山口多聞中將、井上成美大將などの良識派が辛うじて押さえ込んでいる状態に過ぎない。何時暴発するやも知れぬウィッチ排斥派。下手をすれば史実の日本で起こった2・26事件や5・15事件のようなクーデターが起こる。各国軍は同様の火種を抱えている。それを実感しつつ、ウィルマは501で戦う妹の身を案じながら帰途についた。

間章その8 ―「BEYOND THE TIME」メビウスの宇宙を越えて

ZZのスクリーパイールドライバーです（笑）当方、スト?プレイ
経験あります

「秘剣・雲耀 おおおッ！！」

美緒は上段から一気に刀を振り下ろし、敵の装甲を切り裂く。

「坂本美緒の放った秘剣・雲耀は見事にガンダリウム合金の装甲を切り裂き、墜落させる

それはウィッチに不可能はない事を示す一例であり、美緒の信念が具現化した結果だった。

「まったく……無茶しやがるぜ」

菅野直枝はMSをも両断せしめた秘剣雲耀の威力に驚嘆しつつも、美緒の一步間違えば、死にかねないこの行為にハラハラドキドキしていた。自分もデストロイヤーと言われているが、

ここまでやれるかと言われると微妙だと心ごちながら美緒の無事な姿に安堵する。美緒は自分らの予想を遥かに上回る無茶をやったのけ、可変MAの初撃墜を記録した。連邦軍内の記録によれば、この撃墜時刻は、後に2199年の世界で高町なのはがモビルスーツを初撃墜するより1時間ほど速い事が判明し、美緒は史上初の、正式な連邦軍所属、もしくは出向扱いのウィッチによるモビルスーツの撃墜、の名誉に預かる事になった。

「まさかあんたが、雲耀、をモノにしてたなんてな……。驚きだぜ」
「いや正直言って、ブツツケ本番だったんだが……上手くいってよかった」

「オイオイ……マジかよ」

、雲耀、は陸軍のエースであつた黒江綾香の必殺技であり、扶桑に伝わる剣技秘伝の一つ。剣を扱う扶桑のウィッチなら習得を目指す奥義の一つ。それを美緒はブツツケ本番で成功させた。一応鍛錬は行っていただろうが、これは凄いことである。

艦隊を援護するべく降り立つ連邦軍モビルスーツ隊の戦闘も凄まじい。標準量産機のジェガンにしても、中にはかつて接近戦用のモビルスーツとして名を馳せた「ジム・ストライカー」のメイン武装であつたツインビーム・スピアを通常武装の他に敢行する強者もいた。ジェガンが2本のビーム刃を持つ槍を振るい、マラサイを一刀両断する。

これには理由があつた。第2次ネオ・ジオン戦争後に普及型の18m級モビルスーツがジェガンに一本化される課程で過去に開発された専門用途モビルスーツは自然淘汰されていった。戦乱後の軍縮の機運もあり、旧型機は狙撃型と水中型以外は全て退役する手筈になつていた。しかし現場の搭乗員たちの反発が根強く、結局ジェガンの第2次改修型開発と同時に一部旧型機を改修するか、武装をジェガン用に改良して使用可能にする案で落ち着いた。その産物がこのツインビーム・スピアなのだ。

被弾したのか、火災の煙を上げるビスマルクやテイルピッツ、デューク・オブ・ヨークなどの欧州製超弩級戦艦群。勢ぞろいするキング・ジョージ5世級戦艦だが、五隻の内、一隻欠けている。歴史の事実を考えるとプリンス・オブ・ウェールズがティターニズの魔手にかかつて沈没したと考えるべきか。通信の傍受でも裏付けが取れている。

「プリンス・オブ・ウェールズ ……どこまで不運なんだ、あの艦は」

ジエガンのパイロットはそう呟く。平行世界といえど、死神の魔手からは逃れられない事を認識し、残る戦艦の援護に全力を挙げる。上空にはVF・11やVF・17、VF・19などの可変戦闘機バルキリーの姿も見える。どうやらあれらも投入されたようだ。飛行機雲とミサイルの軌跡がハッキリと残っている。撤退する戦艦群の安全を確保するためだろう。大げさだが、万全を尽くすのは越したことはない。

「こちらはHI・Vガンダム。一機で戦局を左右するとまで謳われたRX・78の正当な血統を持つガンダムはその力を以てして、暴れていた。

騎士を思わせるそのいでたちもそうだが、ニュータイプであるシーブツクの腕前も相まって、圧倒的強さを見せる。

「抵抗するんじゃない！ いっちゃえよ！！」

相手の攻撃を避けた間隙をまったく見せない動きでビーム・ライフルを用いて、2機のハイザックを一斉射で撃ちぬく。

「あれがガンダムの……シーブツクさんやジュードーさんの力……」

その様子を目の当たりにした宮藤芳佳は一騎当千の強さを見せつける、ガンダム、そしてそれを操る自分とほぼ同年代の少年たちの力に呆然とする。正に格の違いを見につけるほどの性能差。それに振り回されないで手足のごとく操れるシーブツクの熟練度。どれをとっても一級だ。

そして芳佳のもとにも一機のモビルスーツが襲いかかる。第一世代

の中では最後期に属するジム・クウエルだ。

「ジム・クウエル……！」

、鎮圧、の名を冠するジムシリーズで、ティターンズの象徴的な兵器の一つ。これによってこの世界でどのような事が引き起こされたのか。芳佳は決意を持って迎え撃った。手には対MS用として急遽艦隊の工廠で作られたジム・ライフルのダウンスケール版が握られ、背中には試作型のウィッチ用ジャベリンユニット（俗にいうシヨットランサー）を担いでいる。重装備もいいところだ。

「あなた達なんかには私は負けません！！」

芳佳はジム・ライフルを撃ちまくりながらジム・クウエルに突進した……。

「ジュードーはZZの圧倒的（ダブルゼータのジェネレーター出力はF91をも遥かに越える）パワーで敵を粉碎していく。そのあまりのパワーにバルクホルンやエーリカも絶句する。

「そおれースト●ートファイターの某プロレスラーが使ってた……スクリュー……パアアイルドライブーあ！！！」

ジュードーは巧みな操縦でその技を完全再現した。相手を抱えたままメインスラスタ全開でジャンプし、きりもみ式に回転しながら上昇し、なおかつ回転を維持したまま落ちていく。

「……この技ってどう見てもプロレスだね？」

エーリカは思わず突っ込む。はたして彼女がプロレスの試合を見ていたかは定かでは無いが、ゼータ系列の柔軟なムーバブルフリームならば可能な芸当だ。ジュドーはその操縦テクニクでハイザックを思い切り海面に叩きつけた……。

「よし私もアレを使ってみるか……」

この後、バルクホルンはZZのこの行為をどうやってマネするか思案を重ねるが、それはまた別の機会に語ろう……

間話その3 「白色電光戦闘穴吹、ミッドチルダのエースオブエースと交戦」

穴拭智子となのはの模擬戦の結末とゲッターロボGのゲッタードラ
ゴンの出番です。

間話その3「白色電光戦闘穴吹、ミッドチルダのエースオブエースと交戦」

「高町なのはと穴吹智子の模擬戦は実戦経験に勝る智子の優勢に進んでいた。なのははその圧倒的火力で圧するもの、どれほど強大な火力を誇ろうとも当たらなくては無用の長物に過ぎない。智子の空戦機動はそれをなのはに示していた。これまでただ火力で押してきたなのはには何度目かの、フェイトと初めて対峙した時やヴィータ戦ともまた異なる、圧倒される、戦闘、であった。」

「くうつ、今度こそッ!!」

智子がレイジングハートの射程に入り、魔力のチャージを開始する。しかし此頃のなのはの砲撃魔法はチャージ時間を長く要する物ばかりで、蝶のごとく華麗に舞う智子に命中を望める物では無かった。まして智子なのはを遥かに上回る空戦の熟練者。ワンパターンとも言える砲撃魔法を見きられるのは至極当然であった。拘束魔法をかけようにもその兆候を読まれ、まるで当てられていない始末であった。

智子は自身の切り札とも言える空戦機動戦術を未だ温存していた。扶桑海事変で彼女の名を高めた、ツバメ返し、とその改型、ツバメ返し改。この時、智子なのはの手の内を全て読みきっていた。たとえばスターライトブレイカーをぶち込まれようが備前長船でビームを叩き切れればいいだけの事だ。

「……久しぶりにやってみるか」

智子はストライカーユニットを巧みに操り、両足それぞれ別方向に動かし、瞬間的に推進力を別々の方向に向ける。

なのはに「自分がまだまだ、青二才、である事」を知らしめるため、そして多少うぬぼれ気味な根性を叩き直すべく、ついに必殺とも言える秘技を使った。

「まだまだ甘いわよ、お嬢ちゃん、」

神がかり的な機動で一瞬のうちに背後を取り、備前長船を居合いの要領で振るった。魔力で強化された備前長船は重装甲を誇るはずのバリアジャケットの上着部分を細切れに切り裂いた。これは主にキ27を装備時に用いた初代ツバメ返しである。

「えっ……!？」

余りにも一瞬の出来事だったので何が何やら理解出来ていない。なのはをハッとさせたのは愛機のレイジングハートの、声、だった。

「The shin battle ends. It is : mastering and your defeat though is regrettable.」

(模擬戦は終了です。残念ですが……マスター、あなたの負けです)

ハッとなり、自分の姿を確認する。するとリアクターパージ(現実の装甲で言えばリ・アクティブアーマーのように碎け散ることダメージを最小限度に抑えるようなもの)が起こり、完全に上着を、破壊されているのがはっきりと分かった。あの時(ヴィータとの初戦時)よりも硬いはずのバリアジャケットをこうも簡単に、それにレイジングハートによる防御魔法すら発動させぬほどの素早い一撃で粉碎するとは……。

「もしかして智子中尉の剣技はフェイトちゃんやシグナムさんよりも凄いの？」

その瞬間、なのはは智子の剣技をそう認識したとか。

「うゝ、負けたあゝ!!」

完敗に近かった。スピードはこちらの方が上回っていたものの、機動で完全に及ばなかった上に誘導魔法すら一撃も命中させられなかった。それにしてもなぜ気づかない内に一太刀浴びせられたのか。それが理解出来なかった。

「あなたは少し射撃戦に傾倒しすぎよ。接近戦に持ち込まれた場合も少しは考えなさい？」

智子の言葉に思わずうなづく。確かに今の自分は接近戦に持ち込まれた場合、実に脆い。

ゲッターロボ號（この頃にはフェイトからゲッターロボ號の事は知らされていた）と戦った時にしてもそうだ。瞬く間に必殺技を放たれ、一巻の終りだった。

「はい。けどどうすればいいんですか？」

「後で私の部屋に來なさい。接近戦を乗り切る術を伝授するわ」

「あ、ありがとうございます!!」

智子はニコツと笑う。それはなのはの潜在的な素養に気づき、光る原石、である彼女を磨き上げたくなった気持ちも含まれていた。戦いの中で素養を開花させた例は智子のかつての部下「迫水ハルカ」を始め、いくらでも存在する。智子はこのなほという少女を一人前に育て上げる決意をし、後日、なのはが属する部隊であるロンド・

ベルへの出向を正式に志願する事になる。

「こちらはティアナに遅れること数週間で転移したスバル・ナカジマ。彼女は重傷を追っていたが、仮面ライダー一号Ⅱ本郷猛、ライダーマンⅡ結城丈二、仮面ライダースーパー1Ⅱ沖一也の手によって治療が施され、復活を遂げた。今は鉄人兵団やバダン、クライシス帝国との戦いに身を投じていた。ある日、兵団の兵器工場を襲撃したのだが、そこである者と出会う。」

「ダブルトマホオオクブウウメラン！！」

兵団の工作用ロボットが、何か、にまっ二つにされて四散し、ブーメランのような軌道で上空に戻っていく。雲が晴れ、その張本人が姿を表す

「……何、あれ。巨……大……ロボット……？」

彼女は知る由もないが、この赤を基調とした3色の配色がなされたロボこそスーパーロボットの内の一つ「ゲッターロボG」。その空戦形態の「ゲッタードラゴン」である。兵団の排除任務を追い、白色彗星帝国戦以来、哨戒行動以外で久しぶりに実戦投入されたのだ。これは兵団の太平洋での拠点「ハワイ」攻略の露払いとなるである

う重要な作戦行動だ。

「さて、久しぶりに暴れさせてもらうぜえ!!」

ゲッタードラゴンのメインパイロットである流竜馬はどこからドラゴンが敢行するゲッターロボ用に開発された火器「ゲッタービームランチャー」を取り出し、乱射する。一騎当千、の力を持つスーパーロボットの真骨頂とも言える攻撃である。1000体規模でいた工作用ロボットは見る見るうちに数を減らしていく。

しかし自分たちが到着する前に既に戦闘が行われているようで、一部に破壊の跡が見える。

「リョウ、見ろ。誰かがもうやった跡があるぜ」

「なに? この辺りに、仮面ライダー、が現れたなんて情報は入っていないが?」

どういふことかと見回してみると足元に一人の少女がいるのに気づいた。

「……女の子お? なんでこんなところに?」

「道に迷った……わけじゃなさそうだ。」

「どういふことだ、隼人?」

「見るあの格好を。ありゃあバリアジャケットだ」

「そう言えば……」

流竜馬、神隼人、車弁慶の3人は女の子の^{スバル}服装が、同僚、のなのはやその親友のフェイトが戦闘時に纏う戦闘服と同じようなモノであるのに気づいた。竜馬は意を決し、その女の子に外部スピーカーを使って話しかけた……。

第33話「叶えたい夢、遠いけどいっしょならできるよ 無敵の勇気で」(前編)

フエイトと黒江綾香の絡みです。

第33話「叶えたい夢、遠いけどいっしょならできるよ 無敵の勇気で」

「地球連邦軍の空戦兵器は多種多様を極めるが、コスモタイガーなどの機体はブラックタイガーを始祖とする万能戦闘機であるし、Zプラスなどの可変モビルスーツも空戦兵器と見なせる。その中でかつての大国製軍用機の系譜に属するのは可変戦闘機だけだ。

連邦軍に出向しているウィッチ達や一旦現代へ帰還する前にデータベースを見たドラえもん達から見ても、20世紀との直接的な繋がりが一番分かりやすいと評判である。

「住む世界は違えど、空で戦う者は何かかしら共通点があるのかも知れない。

フェイト・T・ハラOWNは浅間山を下山中に、魔のクロエ、こと黒江綾香と出会った。話に花が咲き、色々な話題が出た。穴拭智子が巴御前の異名で呼ばれる理由と扶桑海事変の事。22世紀の地理の事、お互いの空戦技術談義など……。

フェイトは剣術にある程度は自信があるもの、スピード中心のタイプなので一発あまりの打撃が、軽い。対して綾香はフェイトがまだ持っていない物を多数持ち合わせる。スピードこそ及ばないもの、経験、にパワー、剣術の腕前は遥かに上回っている。試しに竹刀で手合わせをしてみたが、異名の通りに綾香の剣術の腕は達人級であった。才能はあるが、経験があまり無いフェイトは綾香の熟練した腕に苦戦を強いられる。

「素養はあるが、私と戦うにはまだまだだな」

綾香はフェイトが乾坤一擲で放った竹刀を軽くいなす。短い時間の手合わせだが、フェイトの潜在的才能を一目で見抜くのは流石と言うべきか。

「お前がなのはって子を守りたいって言うのはよく分かった。だが、今のままじゃこの世界じゃ生き残れないぞ」

激戦を生き残ってきただけあって綾香の言葉には重みがある。管理局でエースと持て囃され、いささか自惚れがあつた自分が如何に未熟なのかを思い知らせられる。

「……どうしてそんなに力を求める？何のために？」

「大切なモノを守りたいんです。……昔、私は大切な人を救えなかった。もう二度と悲しい思いをするのは嫌なんです」

フェイトはかつて、心の闇に堕ちた実の母親を最期まで救えなかった。たとえ自身が、本当の娘で無くても、本当の子供である「アリシア」の代わりに作られた紛い物であろうとも、親子であるには変りない。心を救えなかった事を心の何処かで悔やみ続けているのだろうか。綾香もそれとなく悟ったらしく「……そうか」と一言だけ言う。

「……だから私は強くなりたいんです。もう二度と失いたく無いから……大切な人達を」

フェイトはなのはという親友のおかげで自分という存在を確立させた。しかし裏を返せば一度でも精神的支柱を失えば脆い事も示している。

同じような例に、Zガンダムのパイロットであったカミーユ・ビダンが当てはまるだろう。カミーユ・ビダンも戦いの中で肉親を失い、さらには心を通わせたティターンズの強化人間「ロザミア・バダム」を自らの手で殺め、そして生涯で最初に愛し、最もかけがえの無い存在であった「フォウ・ムラサメ」をキリマンジャロで失ったのを引き金に精神の崩壊が始まり、パプテマス・シロッコによって止めを刺されてしまった。歴史的に見れば彼の精神崩壊が第二次ネオ・ジオン戦争を引き起こす遠因となった。彼は優しすぎたが、フェイトも今回の事件の報を聞いた際には顔には出さなかったものの、心中では激しく動揺し、狼狽していた。なのはがあのまま死亡していたのなら、彼同様の事態に陥っただろう。それほどに彼女に取って、なのははそれほどに大きい存在なのだ。

「……お前が強くなりたいという気持ちは分かった。だが、急ぎすぎても駄目だ。慌てずにじっくりと考えろ」

綾香は諭すように優しく語りかける。フェイトの心情は痛いほどよく分かる。だが、慌てて付け焼刃の授業を行ってもその場凌ぎに過ぎない。強くなるにはそれ相応の時間が必要だからだ。

「しばらく私と一緒に行動するのもいいが……良く考えろ。自分の答えは自分自身で見つけるんだ」

「はい……」

2日後、フェイトは綾香と行動を共にすることを決意し、その思いを伝えた。綾香もそれを了承し、ロンド：ベルへ断りの電話を入れた。

「黒江大尉、フェイトちゃんの事をよろしく頼む」

「任せてくれ。アイツは私が責任もって面倒をみるよ。そう言えば、この間言ってたH I・Vガンダムってのは完成したのか？」

「完成はしたんだが、こっちに届く前に君の世界への派遣部隊が持って行っちゃったよ。」

向こうにいる俺の戦友からは絶賛されたが……喜んでいいのか微妙なところだよ」

「そりゃご愁傷さま」

電話の相手はアムロ・レイ。綾香は横須賀基地でジェットストライカーユニット「キ201 火龍」のテストを行った際にアムロと出会っていた。

彼はVガンダムの挙動データを技術開発部に手渡すために同基地を訪れており、そこで鉢合わせしたのだ。彼等はお互いに機械オタクの電波を受信したのか、妙に馬があって意気投合した。綾香はそれからブライト・ノアとも出会い、ロンド・ベルと個人的に繋がりが出来た。それ以来お互いに便宜を測り合い、時にはストライカーユニットの開発に協力してもらっているのだ。綾香にとってロンド・ベルは一番信用のおける地球連邦軍の部隊なのである。それにVガンダムはアムロ自身が基本設計を行った機体で、その入れ込みようは半端ではない。ましてやその究極の逸品とも言えるH I・Vガンダムを欲するのは当然の事だ。それがロールアウト後の配達時に急遽別の部隊に持って行かれた事を聞くとガックリと落ち込んだとか。

「そっちにVF-17は届いてるか？」

「ああ。完全装備で3日前に横須賀航空隊から届けられたよ。ご丁寧に64戦隊のマーク入りで。芸が細かいなオイ」

綾香は個人的にバルキリーを軍から提供されていた。プロジェクト

の資料に大昔のF・4やF・15などが提供されたのをついではバ
ルキリーを提供するように頼み込み、軍が苦勞して回したのがVF
・17「ナイトメア」だった。ただしこの機体はVF-171の試
作機に近いのか、各部に改良が施されており、アクティブステル
スシステム完備である。ほか次世代型フォールドブースターのオプ
ション付きである。

ヘルマ・レンナルツがこの機体をひと目見るなり、乗せてくれと言
ってきたが、確かにカッコいい。

しかも陸軍飛行戦隊のマークも入れてくれている。しかも最初の所
属先だった飛行第64戦隊のそれだ。

「そりゃ良かった」

「それと昨日、連合軍から移民船団のジェット機の見学に行けって
命令が出たから最新機があるフロンティア船団に行くことになった。
当分地球には帰れん。部下たちに連絡しないといかんからそんじや
切るぞ」

「向こうじゃ釣りはあまり楽しめないから氣をつけて」

「わかってる」

アムロとの電話を切ると、綾香は部下のうち誰をフロンティア船団
へ連れて行くか真剣に考える。ウルスラは外せないとして、ヘルマ
を連れて行くか？彼女にとっての氣苦勞は大きかった。

第34話「射手座☆午後九時Don't be late」(前書き)

本編からは外れ、マクロスF編です。

第34話「射手座☆午後九時Don't be late」

「地球連邦はかつての第一次星間戦争から延々と続く戦いの連鎖により地球環境破壊が極限に達したのを見かねて宇宙移民を促進させていた。ある者はスペースコロニーへ、また別の者たちは大昔のSFで言うところの、世代宇宙船……、メガロード、や、マクロス、の名を関する超大型移民船団で地球に別れを告げて行った。その内の新マクロス級と呼ばれる最新型の中でも第25番目の移民船団「フロンティア船団」では未知の敵「バジユラ」との戦いが繰り広げられていた。

移民船団の連邦軍は船団が戦闘に陥るケースは極稀であったためと無人戦闘機の登場と普及で練度が低い（ミノフスキー粒子の影響で無人戦闘機に頼れない地球本星は部隊の練度が非常に高いが、逆に移民船団全体の練度はマクロス13やマクロス7などの実戦経験がある船団を覗けば幼稚園のお遊戯レベルでしかないと揶揄されている）ので民間軍事会社が台頭し、軍の任務の一部は彼等が担うようになっていた。

バジユラに太刀打ち出来る機体も少なく、VF-19「エクスカリバー」以降の高性能機でなければ追従すら叶わない。移民船団で一番普及したVF-171「ナイトメアプラス」では振り返ちにされるのが関の山だった。そんな戦時中の状況のフロンティア船団に向かう一隻の正規空母があった。その空母の名は「隼鷹」。波動エンジン搭載型の主力戦艦改級戦闘空母の中では比較的前期に竣工した空母で、先の大戦を稼動状態で生き残った、たった数隻の空母の一つである。（艦名は大日本帝国海軍に在籍していた飛鷹型航空母艦に由来）

その中にフェイトや黒江綾香は居た。名目上は新型ストライカーに繋がるヒントを得るための出向。だが、その実は実戦参加も念頭に置かれている派遣であるのは明白だった。

途中で戦闘になることも考慮されたためにウィッチ達は実戦を覚悟した。しかし問題が生じた。宇宙で戦えるストライカーユニットが存在しないのだ。フェイトにしても同様で、

宇宙空間では人間は活動できないのだ。そこで苦肉の策として、それぞれの代表者がバルキリーの操縦訓練を受けておく策が取られた。機械に詳しい綾香はウィッチを代表して自ら志願した。フェイトもバルキリーに乗る選択をし、2人は訓練を行なっている。

「くううっ！！これが、バルキリー、かつ……流石にストライカーユニットのようにはいかないな……」

魔のクロエと恐れられた彼女も初めて経験する超高速のGに思わず顔を顰める。時速700？台が限界に等しいストライカーユニットでは経験がない超音速と空戦機動を行うのだから当然といえば当然である。フェイトは綾香よりも高速飛行に慣れていたためとバリアジャケットを展開しているのでさほど苦しい表情は見せないが、むしろ複雑怪奇な戦闘機の機械類の前に悪戦苦闘していた。

2人が乗っているのは2機のVF-17「ナイトメア」。完成時は特務機、あるいはエリート・エース用に配備された。古参機に位置し始めた名機で、高いステルス性を備える。

、悪夢、の名を冠するこの機体は旧式になりつつあるもの、未だ需要は高い。系列機のVF-171が限界性能の低さから速くもお払い箱扱いされているのとは大違いだ。

彼女らが飛行しているのは地球からは比較的近距离に位置する惑星「エデン」の近く（エデンより2光年ほど離れているが）の空域である。そこで補充要員が乗艦するとの事なのだが……。

「あんな変な形の飛行機が宇宙を飛ぶなんて……それに見かけがアレなのに疾い……」

艦に乗艦したウィッチの一人で、ロングヘアーが特徴的な「ヘルマ・レンナルツ」は艦の窓から見えるナイトメアの薄く平らな図体がプロペラ機に比べると奇異に見えるとコメントし、さらに大型なのに機敏な動きを見せているのに驚きを見せる。これが熱核バーストタービンエンジンの威力だというのか。

「そりゃバルキリーをナメてるぜ、ヘルマちゃん」

ヘルマのそばには兜甲児が居た。彼は訓練期間を経てマジンカイザーのパイロットとして戦線に復帰した。今回の戦いで切り札として軍の要請を受けて、護衛役として参加したのである。先の大戦での戦いからはしばらくぶりの戦いである。彼は持ち前の明るさですぐにウィッチ達やフェイトとも溶けこみ、気さくな付き合いをしている。

「甲児さん。バルキリーってそんなに凄いですか？」

「ああ。戦車の装甲に飛行機の機動力・歩兵の器用さを併せ持った兵器の一種だからな。前の戦争で地球連邦軍が航空戦でボロ勝ち出来た要因の一つだよ」

甲児はバルキリーの事を説明する。意外にも思えるが、彼は由緒正しき科学者の家系の出である。祖父や父から受け継いだ知的な側面がアメリカ留学の間に発現したのだ。

「北欧神話の戦乙女の名を持つのは伊達じゃないんですね……」
「そういうこと♪」

ヘルマは窓に見えるナイトメアの勇姿に太古の神話の戦乙女の名が代名詞となっている所以を垣間見る。そして写真で見た白銀の翼を持つ白亜の機体―最新鋭のVF-25の流麗な姿に思いを馳せた。救世主、の名を持つ戦乙女との出会いはそう遠くないように思えた……。

そして隼鷹はエデンに近づきつつあった。

第35話「射手座☆午後九時Don't be late」2」

ーバルキリーの旧来の戦闘機に対する利点は3段変形による柔軟性である。これで旧来の戦闘機の殆どが駆逐された。製造コストは下手なモビルスーツ以上ののだが、それを補って余りある汎用性が大量配備を是非とした軍の姿勢に現れている。だが、予算の関係もあり、軍の戦闘機の全てを可変戦闘機で統一するのは到底不可能である。コスモタイガーなどが開発されているのもその為であった。隼鷹の艦載機もモビルスーツの他にはバルキリーとコスモタイガーが半々ずつ搭載され、航空隊を構成している。それはエデンにて合流予定の同型艦「飛鷹」においても同様で、この時期の連邦軍空母部隊では標準的な編成である。

訓練飛行を終えた2機のバルキリー（可変戦闘機）が着艦する。フエイトは食用宇宙服を食べた上でバリアジャケットを着ている（フエイト曰く宇宙服代わりとの事だが、バリアジャケットの宇宙での有用性が不明なことから、宇宙放射線などを考慮して医師が食用宇宙服の服用を薦め、服用した）。綾香の方は次世代のバルキリー用に開発され、配備や対応可能なように機体の改修が進められている新型の耐Gスーツ「EXーギア」を纏っている（これを使えるようになるまでには特訓を重ねた。スーツを着ると使い魔のしっぽや耳が干渉してしまう。それを知った際はさすがの彼女も涙目になったとか。）

EXーギアはパイロットの肉体がVFー19以降の高性能機性能に耐え切れないということが判明したのと、無人戦闘機の普及を嫌った軍人たちの思惑もあって開発された。

これにより肉体的にあまり頑健でない者でもVFー19やVFー22の限界性能を引き出せる様になり、新式の慣性制御システムである「ISC」と相まってVFー25にゴーストに匹敵する機動性を

与えた。ある意味大発明である。

「ふう……」

「大尉、いかがですか？VF-17の乗り心地は」

「いい感じだ。特訓し、いつかはエクスカリバーに乗ってみたいよ」

綾香としてはいつかVF-19に乗りたいらしい。確かにペットネームといい、前進翼の醸し出す雰囲気といい、実に美しい。彼女が、目標、に掲げるのも無理は無いだろう。ただエクスカリバーは本星の連邦軍にもまだそんな数は多く配備されていない。高コストになりすぎて議会の左派が大量生産に難色を示したためで、現有数では従来機を完全に代換出来ない。その内にVF-171が完成し、議会はそちらの方を正式主力機にしろと圧力をかけてきた。こうした事もあってナイトメアプラスは暫定的に主力機の座にいたが、バジュラとの戦闘で力不足を露呈してしまった。こうした事もあってエクスカリバーの大量生産が認められたのである。

「あれはいいですよ。ですがまずはナイトメアを完全に乗りこなせるようにならないと」

「ハハッ、確かにな。フェイト、行くぞ」

「は、はいっ！」

綾香は整備兵と会話を交わすと、フェイトを引き連れて艦内に入る。波動エンジン搭載艦の速度は速く、もうエデンの姿がハッキリと視認できるようになっている。見ると地球にそっくりである。移民船団が移民したのも頷けるほど美しい。「エデン」。そう名づけられたのも納得がいく。エデンはすぐそこまで迫っていた。

ーエデン

エデンに調査にきていた八神はやては管理局が、世界、として認識していた惑星が、地球、の植民地となっていた事、そして当然ながら宇宙は果てしなく広いというのを再確認していた。彼女らの地球は彼等の言う、地球、とはそれぞれ銀河の反対側に位置する事が判明。お互いが言わうる反地球の関係だと言う事実に仰天していた。

「まさか反地球が実在するなんて……驚きや」

「宇宙は広いからな。何があっても別に不思議でも無いぜ」

はやての傍らにいるのは連邦軍きつてのバルキリー乗りのエースである「イサム・ダイソン」大尉。彼はかつて次期主力戦闘機開発計画「スーパードヴァ計画」でYF-19に搭乗した事で名を知られる。ロイ・フォッカー少佐の活躍を湛えて作られた「ロイ・フォッカー勲章」を過去数度受賞したもの、問題行動により剥奪されたという問題児でもあった。だが、人工知能の暴走の危険性を示すシャロン・アップル事件にて親友であったガルド・ゴア・ボーマン（YF-21のテストパイロットでもあった男。ゼントラーディ2世であつたとの記録が残っている）をかの、シャロン・アップルの意志に操られた無人戦闘機「X-9」との交戦で失っていた。それから何年か経過した現在においても彼の命日に墓参りを欠かさず、態度にも幾分かの落ち着きも見られるようになっていた。イサムにしてみれば現在の移民船団の軍の任務がほぼ無人戦闘機に取って代わられた事は胸糞悪い以外の何者でも無かった。

「イサムさん、その花は？」

「今度、地球に行く時にダチの墓に供える奴さ」

彼はあの事件の後から親友であった男を弔う事を片時とも忘れてはいない。あの事件は何だったのかと自問を繰り返し、今でもゴーストが正式装備化された事に疑問を持つ。ある程度自制されたといっても……と。彼はVF-25の試作機が作られた際にはテストパイロットを務めた。噂のS・M・Sがメサイアをどのように扱っているか興味もあるので、この任務に志願したのだ。ちなみに彼はVF-19Aの定期点検でのエンジンテスト後の試験飛行の後にはやてやリインフォース？と出会った。イサムはかつて、ロンド・ベルに属していた経験があるので、こういう時の心当たりということだ。ブライト・ノアに問い合わせた。ブライトから時空管理局という組織の事を聞かされ、(植民惑星まで情報は行き届いていなかったもので初耳であったとの事)、彼等が調査のために人員を送っているという通達があったと告げられた。

はやてから半信半疑で聞いていたもの、ブライトからの裏付けもとれ、彼は時空管理局という組織の存在を認知したのだ。

「……というわけで俺は当分帰れない。友達にはお前のことを伝えとくぜ」

「道中気い付けて」

「この4日間、有難うございました」

「オウ。変な言い方だが、地球には気を付けろ。色々やばいから」

イサムは飛鷹が停泊している宇宙港ではやて達を民間の星間連絡船への搭乗ターミナルまで見送り、自身は飛鷹への着任の挨拶に赴く。

飛行甲板には飛鷹所属の航空隊が新たに受領し、艦に搬入される「VF-25/MF25 メサイア」の銀翼が輝いていた……。

第35話「射手座☆午後九時Don't be late 2」(後書き)

半分マクロスプラスの後日談となっています(笑)

第36話「師と弟子」

ゲッターチームが出会った少女はスバル・ナカジマと名乗った。ゲッターチームは手っ取り早く兵器工場をゲッターポセイダンのストロングミサイルで吹き飛ばしてスバルを回収し、帰還の徒へついた。ちょうど兵団に関しての新情報を提供するために極東支部を訪れていた仮面ライダー一号Ⅱ本郷猛は後輩からの連絡でスバルがゲッタードラゴンに回収されたことを知ると、ブライト・ノアと面会して事情を説明。これによりスバルの事情聴取はスムーズに行われる事になった。

スバルの事情聴取はこの日の非番で自室待機中であつたアムロが中心となつて行つた。

「つまり君は新暦75年のミッドチルダの住民で、なのは君の部下だつたんだね？」

「はい」

アムロの質問にハッキリと答えるスバル。この少女は後になのはの部下となるはずであつたとか。実にややこしい。事前に仮面ライダー一号から連絡が無ければ混乱してしまう所だ。話を聞くに、任務中に次元断層に巻き込まれ、気がついたらこの世界にいたそうである。スバルにしても、いきなり地球連邦軍の戦艦につれてこられて事情を説明することになつてしまったから大変である。30分ほど必死に説明した甲斐もあつて、どうにかなりそうなので安堵の表情を浮かべた。一号の手引きが無ければ今頃どうなつていたか。

アムロの隣には当人一まさか10年後に部下となる人物に会うという摩訶不思議な事態に直面し、絶賛困惑中のなのはが椅子に座つて

いる。彼女の知るかぎりで一番若い姿よりも幼さを感じさせる容姿は不思議な感じがする。さらにはなのはのお目付け役だろうか。地球でその昔あったという大日本帝国陸軍の軍服を着た自分とほぼ同年代の少女が傍らにいる。

（この日は穴吹智子が正式に扶桑皇国陸軍より赴任したばかりであった。とは言え、智子は正式な辞令が出されるより前にロンド・ベルに引越して来ていたので何気なく馴染んでいた。智子もいらんこ中隊にいたためか順応性が上がっていた為である）

「ええと…なんて呼べばいいのかなあ…？」

なのはは困惑した表情で言った。年上のように見える女の子から突然‘なのはさん’と呼ばれれば驚かないはずはない。しかも同じ部隊に属していたと言われればなおさらの事だった。スバルはそんななのはに優しく微笑む。

「スバルでいいですよ。敬語で呼ばれちゃうとなんか変な感じが…」
「じ、じゃ…ス、スバル…？」

なのははぎこちなくスバルの名を言う。スバルはそんな彼女の姿が可愛く思えた。19歳になったなのははこう言った‘少女らしさ’を見せる事は少なく、凛々しさと厳しさを感じさせる印象（彼女の

親友のティアナに対して行った事、時々見せた厳しさなど）が強かったが、奇しくもスバルは子供なのはと会ったことで、なのは本来の少女らしさを垣間見たのである。

（か、可愛いー！未来のなのはさんとはまた違った魅力がある…）

「…未来の私ってどうなってるのかな？」

この質問にスバルは大いに困ったが、大体は教える事にした。ここで会ったという事は自分となのはは何らかの縁があるのだろうかと感じにふける。記憶を無理矢理に繋ぎあわせて、つじつまを合わせて考えると、「数年後の空港火災の時に出会ったときはあえて初対面のように接していて、（自分にとっては文字通り初対面であった）機動六課で再会した時のあの言葉はなのはに取っては長い間会っていなかった友への言葉というニュアンスを含んでいたのだろうか…。それは今となっては分からないが。

「教導隊には入れたと聞いてます。それと、エースオブエースの異名で有名ですよ」

「そうなんだー！じゃあ未来でも全力全開なんだね、私」

そう言って無垢な笑顔を浮かべるなのは。しかしスバルの知る未来では、大人の持つ汚さをも身につけてしまったために、そういった意味での笑顔はめったに見せていない。

（どちらかと言うと全力、全壊、な気が…。まっ、この際それは言うまい）

「ところでなのはさん、その人は？」

「紹介するね。穴拭智子中尉。こことも違う世界の空戦魔導師で、私の空戦の師匠なの」

「……えええっ！！」

なのは傍らにいる智子をスバルに紹介した。後々の史実と付き合わせるような事実が浮かび上がる。彼女に一から魔法を教え、闇の書事件まで側で彼女を支えた、魔法での師がスバルの時代では「時空管理局」「無限書庫」「司書長」という要職に付いているユーノ・スクライアであるように、なのはに教導隊の猛者共とも対等に渡り合える程の空戦の術を仕込んだのは穴拭智子であるという事になる。そしてスバルは後に知るのだが、新暦70年代前半頃のミッドチルダにてその証たる技をなのはは模擬空戦で見せている。

それは、ツバメ返し、。智子必殺の空戦機動を長年に渡る特訓で身につけていたのだ。同様にフェイトも黒江綾香から教えられた、秘剣、雲耀を10年間かけて習得し、実戦で使うのだが、それらはまた別の機会に語ろう……。

「ところでスバル君。君はこれからどうするつもりだい？」

「あたしは……戦います。この世界に来てからバダンやクライシスとか色々な脅威がある事を知って……奴らを倒すまではこの世界にいるつもりです。……それが、あの人、達の助けになると思います」

「歴代の、彼等、のことか。本当にいいのかい？ここに居れば必然的に君は殺し合いをする事になってしまふんだよ？」

「元の世界には戻ればそれでいいのかもしれない。だけど戦う事で救えるものもたくさんあるはずですから……それに守りたい人もいますから」

スバルは短めではあるが、アムロに今の自分の思いを伝えた。元々災害救助を志して入局し、それ部門の部隊に属していた彼女にとって、「どんな危機的状况でも人を助ける手段は必ずある」というのが信条であった。何よりそれを自分に示してくれたのは、大人になったなのはなのだから。

「わかった。ブライトに手配するように頼んでおく。智子君、2人の面倒は任せた」

「分かりました」

そう言ってアムロは部屋を離れ、3人だけが残された。

「この子から大体聞いたとは思うけど、私は穴拭智子。ココとも違う世界の、日本陸軍、航空隊の中尉よ。よろしく」

智子はスバルにも分かりやすく扶桑とは言わず、日本と言った。彼女なりの気遣いだ。

「スバル・ナカジマです。これからよろしく願いします」

第36話「師と弟子」(後書き)

さらなるミスがあつたので修正しました

第37話「機動六課とAVF計画の産物」(前書き)

今回はStrikerS時のなのは達に触れます。

第37話 「機動六課とAVF計画の産物」

—スバルやティアナが消えた後のミッドチルダはただナチス残党軍の前に蹂躪されていた。ドイツ国防軍は対魔法処理を念入りに施されたStG44の火力を持って管理局陸士部隊を圧倒。事実上の地上本部総司令たる「レジアス・ゲイズ」は恐れていた事態が現実となったことに歯噛みして悔しがった。8年ほど前から管理局が進めていた「質量兵器使用解禁」（これはかつてなのだが、あの世界、で見てきた事を帰還後に報告した事、さらにストライクウィッチーズの存在が明らかになった等の背景により極限のカルチャーショックを受けた彼らの派閥が推し進めた事項）が魔法至上主義者の妨害で、まだ携帯火器（拳銃レベル）に留まっている事は残念な事実だ。

「……彼等は分かっているのか？ 自らの怠慢や奢りが今日の腐敗を招いた事を」

燃え盛る地上本部の執務室で彼はいつの間にか魔法の強大な力に溺れ、管理世界に傲慢な支配を敷くようになった時空管理局の現状を嘆いた。黒い噂が絶えなかった彼だが、ミッドチルダを守りたかったという、少年期の頃からの気持ちはこれっぽっちも変わっていなかった。史実ではジェイル・スカリエッティの放った、刺客たるナンバーズに、暗殺、されたレジアスだったが、この世界ではその努力に見合うだけの最期は迎えられていた。

「閣下、早く脱出を!!」

「いや、君は行き給え」

脱出を促す局員にレジアスは首を横に振った。彼は、自らはそれ相

応の報いは受けるべき人間、との遺言が描かれた手紙を託し、かつて、地球、の有名な軍人であったダグラス・マッカーサー元帥の名言「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」との言葉を残し、若者たち以後を託すように炎の中に消えていった。

そして、いたずらに戦死者と俗に言うゾンビの概念に近い、グール、を増やすだけの戦闘が続くことを危惧する一人の士官がいた。19歳に成長した高町なのはである。あの世界での戦いを経て、人間的にも軍人としても一人前に成長した彼女は帰還後、戦死扱いだったため二階級特進で一尉に昇進。今では、管理局の英雄、とも謳われるほどの名声を得ている。彼女はフェイトと共に部下の救出をするべく、一つの秘策を使おうとしていた。飛行魔法が敵の魔法妨害のために使用不能になった状況で頼れるものは……

―六課隊舎 地下 秘密格納庫

ここには明らかに管理局の規則に違反するモノが秘匿されていた。それは二機の戦闘機だった。一機は前進翼を有し、もう一機は一見するとかつての「F-22 ラプター」にも見た印象を受ける機体。機体には、地球連邦宇宙軍、の所属であることを示す、U・N・T、SPACY、のマーキングと2人の指揮する分隊のパーソナルマークが描かれていた。

「バルキリーを隠してたんならなんで私に教えてくれなかったん？
何とでも誤魔化したんやけど」

「にゃはは、ごめんね。まさかはやてちゃんもあの世界に行ってた

なんて知らなかったんだ……」

感心しながらも半ば諦めの交じる声を出すのは八神はやて。彼女はなのは達の、私物、がとんでもない代物なのに初めて気づき、ため息すらついている。それもそのはず。隠されていたのは、バルキリー、との愛称で知られる、あの世界で広く普及している超兵器。それもただのバルキリーではない。はやてが以前、出身世界のアニメで見たVF-1 バルキリーやVF-4 ライトニング？などとは次元の異なる性能を有すると言われる「AVF計画」の産物である高性能機「VF-19 エクスカルバー」（技能との兼ね合いで形式はF型仕様の指揮官機のS型）と「VF-22 シュトゥルムフォーゲルII」だ。あの世界でもそんなに普及していないAVFをどうやってちょろまかしたのか？

「2人ともこんな大層なモン良く隠してたもんやね……。しかもAVFのエクスカリバーとシュトゥルムフォーゲル？！！ここまできると凄いとしか言いようがないわ……。私、自信なくなってきた……」

「あはは……元はあの世界で宇宙空間の戦闘の時に使ってたんだ。せっかくだから、帰るときに山南提督に頼み込んで私たちに回してもらったの」

「そうそう。提督、相当困ってたけど、どうにか許してもらってね」「完全装備な上にファストパックやフォールドブースター込みで？どうやって整備とかしてたんや？」

「しばらくはロングアーチのみんなに任せてたんだけど、手に余るって言われちゃってね。向こうに行って整備の研修受けたんだ。向こうじゃ1年くらいしか経っていなかったから驚いたけど。数ヶ月ビッシリ抗議受けて、VF-11Cを弄って覚えたんだ」

「そ、そうなん……」

「そういう事。さあ行くよフェイトちゃん」

「うん！」

2人はバリアジャケットではなく、連邦軍の次世代可変戦闘機で普及しつつある「EXーギア」を着ている。できるだけ魔力は温存して置きたいのだろう。因みになのは白亜に塗装されたエクスカリバーに、フェイトは黒を基調に金のラインが入る塗装のシュトゥルムフォーゲルIIに乗り込む。すでに機体にはファストパックは装備済みだ。エレベーターで機体が滑走路代わりの道路まで運ばれる。

「二人とも、バルキリーでの実戦は久々だからあんまり無茶しないでくださいよ」

六課の中で秘匿物資の事情を知っているルキノ・リリエから通信が入る。なのはとフェイトは「了解」と心地良く応える。子供の頃はこれが日常であった危機。それだけの事だ。

なのは達はナチ残党から仲間を救出し、安全圏まで脱出させるために、このミッドチルダで禁忌とされた「質量兵器」を使った。懲罰なら後でいくらでも受けよう。一だが、仲間を助けられなかった事を後悔したくは無い。そして今は自分が正しいと思ったことをするだけだ。

機体にそれぞれ搭載される熱核バーストタービンエンジン「FF2550J」と「FFー2450B」が唸りを上げる。そして二人はスロットル全開でアフターバーナーをかけて機体を離陸させる。ミッドチルダの闇の空に舞い上がる、翼。それはナチス残党軍が聖王の揺りかごの技術を解析し、創り上げた（これは改造人間や吸血鬼を作り出せる彼等の超技術が成せる技。これにより時空管理局は空戦魔導師での迎撃が不可能となり、制空権を維持出来なかった。）対飛行魔法用のECMが創り出した結果であり、状況であった。時空管理局にとっては皮肉にも自らが禁じた質量兵器の存在意義を見

直すきっかけとなる出来事であった。

「人間を舐めるなバケモノ。こい、戦ってやる!!」

2人は首都の人間が全て、バケモノ、と成り果て様とも、あくまで人間、として戦い、散る覚悟でかのサー・インテグラル・ファルブルケ・ウインゲーツ・ヘルシング卿が後に吐くであろうのと同様の台詞をいつの間にか呟く。それは彼女達が戦いの中でも己を見失う事はなくなり、確固たる意志を確立させた事を示していた。

第38話「シャドームーン!!」(前書き)

前回の続きです。タイトルはRXで彼が復活した回のタイトルそのままです(笑)

第38話「シャドームーン!!」

一、兵团、との戦いからおよそ7年以上の月日を経たのはたちはナチスドイツの残党軍の魔手から仲間を救うべく、あの世界で受領し、数年間整備をしながら秘匿していたかつての戦いで愛機「VF-19 エクスカリバー」と「VF-22 シュトゥルムフォーゲルII」を使用。救出戦に赴いた。

—2人はこの事が時空管理局の規定や規則に真っ向から違反する行為である事は十分に認識していた。上層部の中にはあの世界との国交が成立してもなお、魔法こそ全て、を公言する至上主義者が多い。これを理由に管理局での地位や名誉を全て剥奪されてもおかしくは無い。だが、2人は後悔などしていなかった。仲間を救う事にリスクを恐れていて何になるのだ。たとえ管理局での地位と名誉を全て失おうとも、守りたいモノのために命をかける事は何ら恥じるものではない。それはあの世界での多くの人々が証明している。ジオン軍にしてもそうだ。彼等はやり方こそ間違っていたが、テロリストの汚名を被ってもなお戦い続けている。それは敵ながら見事だと多くの地球連邦軍の兵士も認めている。

「……通信？」

「よう2人とも。数年ぶりだな」

「し、茂さん！？ どうしてミッドに!？」

2人のバルキリーに通信をかけてきた相手はかつてスバルが共に戦い、そして自分達も世話になった男。栄光の7人ライダーと称される初期ライダーの内の一人「仮面ライダーストロンガーII城茂」だった。仮面ライダー達はクライシス帝国との戦いを続ける傍ら、そ

の活躍の場を次元世界にまで広げていた。彼等はバダンを始めとする歴代暗黒組織の源流となったナチス残党の行動を察知し、数人がミッドチルダに来訪していた。城茂はその内の一人であった。

「ナチ共の行動を調べていたんだが、ビンゴだったようだ。事情は大体聞いてるからそっちに加わる」

「そうですか、ありがとうございます。それで茂さんの他には誰が？」

「洋の奴に村雨、それと光太郎だ。クライシスの動きが怪しいとかで……」

「ジャーク將軍がまた何かを企んでるんですか？」

フェイトはクライシスの最高指揮官の名を言う。あの世界で知った、悪の一端を担う男。

ここ数年ほど追っている暗黒組織の事が気になりなようである。ジエイル・スカリエッティすら比較にもならないほどの圧倒的な存在はフェイトに深く脅威を与えていた。「改造人間」。それが彼女をより強く行動させる要因となっていた。

「それはまだわからん。取り敢えず2人とも市街地の公園に着陸してくれ。そこで落ち合おう」

「了解」

2人はバルキリーを市街地の公園に向かわせ、てっとり速いところにガウオーク形態で着陸する。キャノピーを開放し、降りると4人の仮面ライダーがやって来ていた。ストロンガーにスカイライダー、ライダーZXとRXの4人だ。

「お久しぶりです」

「ああ。君達も元気そうで何よりだ」

4人の仮面ライダー達はそれぞれ2人と握手しあう。ライダー側にとっては1、2年ほどこしか経過していなかったが、別の地球で年月を経たなのはにとっては彼等と別れた時から8年もの月日が経過していた。時間の流れのいたずらが成せる技だが、ライダー達には年月の重さを実感させる光景だった。

「本来なら再会を喜びたいんだが、そうもいなくなってしまった」
「奴らには分別をわきまえてもらわんと。スカイライダー、そっちのほうはどうだった？」

「俺が担当した方はまだV2の爆撃はされてなかったから避難誘導は容易だった。ついでに途中で兵士を数人返り討ちにしてきた。RX、君は？」

「俺も先輩とだいたい同じでした。ただ、気になることがあって……」

「気になること？」

「ええ。途中であの、足音、が響いたのを聞いたんです」

「RXさん、足音って？」

なのはの疑問にRXは答えた。それは彼が改造された当初の姿「仮面ライダーBLACK」であった頃からの因縁であったと。ここで少しだけ過去に遡る。そもそも南光太郎は本来、ゴルゴムという暗黒組織の次期支配者の候補「世紀王」の一人「ブラックサン」として皆既日食の日に改造を受けた。その際にもう一人の男が改造手術で改造された。その男の名は秋月信彦。光太郎と兄弟同然に育ち、光太郎も家族として認識していた男だ。だが、ゴルゴムの改造手術の際に脱出できず、そのまま強化され、彼等の言う「世紀王 シャドームーン」となってしまった。その後はBLACKと幾度と無く戦い、ゴルゴムを事実上率いた。光太郎を一度死に追いやったのもシャドームーンであり、光太郎にとっては最大級の宿敵なのだ。

「だが、シャドームーンは死んだはずだ」

「ええ。奴は確かに俺が……」

RXも半信半疑だった。ゴルゴム神殿の崩壊はシャドームーンを葬ったはずだ。だが、あの特徴的な足音は聞き間違えるはずはない。紛れもなくあれはシャドームーンの足の強化装具、レッグトリガー、が醸し出す音色だ。と言うことなのか。それは光太郎さえ分らない。6人はただただ、疑問が大きくなるばかりであった。

「ここらは首都にある地上本部。その地で機動六課のライトニング分隊副隊長であり、八神はやての守護騎士「ヴォルケンリッター」の、将、「シグナム」はナチス残党軍と戦いを繰り広げていたが、そこで影の王子と対峙した……。

「……貴様……何者だ!」

シグナムは闇夜に光る銀色の体を持つ男にそう言った。シグナムは感じていた。特徴的な足音、そしてバツタを思わせる緑の複眼……。

長い月日を過ごしていた彼女も今までに感じたことの無い凄まじい威圧感をその男は出していた。そして月の光に照らされるその姿は強者としての風格を醸しだしていた。

その男は一言だけ言った。どことなく重く、風格あふれる声で、自らを表すその名を……。仮面ライダーと全く同様の改造人間足り得る男は……

「我が名は……シャドームーン」

BLACK、いやRXの戦いの宿命が再び動き出す。闇夜に銀色の体が不気味に輝いていた。

第39話「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」(前書き)

時間軸が戻ります。読む方はご注意ください。それと新登場の作品は「トップをねらえ」です。

第39話「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」

一時間は戻って、2199年の8月末。ついに兵団の太平洋での拠点「ハワイ」への侵攻が始まった。地球連邦軍はその作戦を「H作戦」と呼称し、海軍艦艇を補給艦含め数十隻、宇宙軍と空軍の太平洋方面軍主力を総動員して、事に当たった。この事は20世紀にて待機中であつたドラえもん達にも伝えられ、ドラえもん達は再度2199年に飛んだ。ドラえもんは御坂美琴ら一行は地球連邦軍遠征艦隊旗艦「主力戦艦級第25番艦、土佐、」に乗艦。その内、ドラえもんは美琴は作戦室にて作戦会議に参加していた。

・土佐 作戦室

「それで、君は兵団がこの方面から侵攻してくると踏んでいるのかね？」

「そうです、山南提督」

この艦隊の指揮を取る山南に堂々と意見を具申するのはドラえもんであつた。兵団と直接交戦したという経験は連邦軍の軍人たちをも納得させるのに十分な働きを示し、連邦軍の将官達も一目置いている。彼は過去の経験則から兵団の取り得る行動を十分に予測する事が可能だった。それがこの作戦で過去から呼ばれた理由だった。

「敵はまず、僕達を物量で押し潰そうとするでしょう。ですから一網打尽にできる火力が必要ですよ」

「物量というと……大体どのくらいなのかね」

一人の高官がドラえもんに尋ねる。ドラえもんはハッキリと答えた。誇張などではない物量を。それは物量戦に慣れた連邦軍でも緊張を

隠せないほどの数字だった。

「軽く見積もっても数十万。下手をすればもっと多数でしょう。僕達が前に戦ったときは文字通り空が青く見えないほどでしたから」
「まるで坊ノ岬沖海戦やカルネアデス計画のようだな」

ポツリと誰かが呟いた。連邦軍は度重なる戦乱の中で圧倒的多数の敵と戦った経験がある。

特に今持つてギネスブックの記録に乗っている天文学的単位の敵と戦った後者は当時の連邦軍太陽系直援艦隊（太陽系を直轄する艦隊。本星防衛艦隊はさらにその一分である）が主力を総動員して臨んだ作戦。8000隻以上の艦隊が向かい、生き残れたのはその半数以下との報告が入ってきていた。移民船団へ入ってきた通信によれば、艦隊はあと数年は帰って来られないとのことだが、これらの戦いを想起させるほどの数だった。

「まさかそれほどまでとは……」

「もちろんこれらはほんの一部に過ぎません。艦隊の火器で落とせる数はどうなのですか？」

「砲塔の拡散弾頭やミサイルを考慮に入れてもそこまではとても落とせないな。機動部隊の攻撃も加えて初撃でどの程度落とせるか」

「とにかく最初の攻撃を凌いで下さい。その後は各個撃破に持ち込めればこっちのものです」

「あいわかった。それで御坂君、君はどうするつもりかね」

「私は揚陸部隊に加わります。奴らとは一度戦っていますから手の内は把握してます」

美琴は最前線で戦うとの意志を示した。この、時間、は『あの馬鹿』
「上条当麻」が命がけで守った結果、生まれた世界だ。ならそれを

守るのが自分の役目だと言わんばかりに。

「元居た時間からそんなに経たないうちに起こったっていう学園都市とロシアとの戦いの中心にアイツは関わった。私はアイツの事を何も知らなかった。アイツが記憶を無くしても守りたかったモノ……それは……」

美琴の心中は複雑だった。自分が本来辿るはずのほんのちょっと後の運命を知ってしまった事。自分がどんな行動を取るのか、そして上条当麻がその戦いで最終的にどうなるのか。大まかにだが、知ってしまった。それを見た瞬間、全身から血の気が引いていくのが分かった。出来るものなら運命を変えたい。だが、そんなことをして、アイツ、が喜ぶのか？

その問答を繰り返す内に一晩明かしてしまった事もあった。そしてたどり着いた答えが

「アイツが守った世界を今度は自分が守る、だった。それが今の自分が出来る事だと決意した。それがこの一言に現れていた。」

「……そうか。これは本来ならばこの時代の人間である我々の仕事だ。だが、過去の人間である君達をこうして戦わすしかない。……すまない」

山南は美琴とドラえもんに頭を下げた。それは今の連邦の窮状が過去の人間ですら戦いに狩りだす始末であることを悔やむ彼の姿勢が妙実に示されていた。これは彼なりの過去の人間を戦いに狩りだしたことへの贖罪だった。ドラえもん達は地球連邦に信頼を置く事を躊躇っていたが、これがきっかけとなって連邦を信頼するようになる。

作戦が決まり、山南から全艦隊への「人類の興廃この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ」と訓示が行われ、全員が覚悟を決める。これに先立って、日本の参謀本部には「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊はただちに出勤これを撃滅せんとす。本日天気晴朗なれども波高し」とかつての大日本帝国海軍同様の一分を打電した。

「全艦、Z旗を掲揚せよ」

この時期より地球連邦軍の各艦隊には大日本帝国海軍色が色濃く現れるようになった。それがZ旗の掲揚であり、各部隊に日本の艦船の名を継ぐ艦船が多いのも連邦政府の実権を日本系勢力が握ったためである。そして軍艦旗は十六条旭日旗に加え、Z旗が掲げられたのもその雰囲気強めていた。そして土佐を初めとする主力戦艦級の40cmショックカノン砲が向きを変えてオワフ島に狙いを定める。

「全艦、一斉砲撃用意！！撃てええええ！！」

オワフ島に青色の閃光が迸った。これがこの長い「ハワイ島海戦」の開始を告げる狼煙だった。美琴には、この戦艦群の艦砲射撃に元の時間で見た記録映像の一コマがだぶって見えていた。

第40話「血のラニカイ・ビーチ」(前書き)

今回は上陸戦と対空戦闘です。

第40話「血のラニカイ・ビーチ」

地球連邦軍はハワイ攻略作戦を開始した。艦砲射撃による援護の後、各地のビーチに上陸部隊の第一陣が揚陸艇で陸揚げされたり、空挺部隊が降下した。挺進連隊や第一特別陸戦隊などの、空の神兵、に加え、降下猟兵との呼称違いの旧・各国出身の精鋭も参加した。

：が、上陸地点の内の、ラニカイ・ビーチ、に上陸した部隊を待っていたのはいきなりの十字砲火だった。兵団の指揮官は連邦軍の裏をかき、手薄に思える地域に陸戦部隊の精鋭を配置していたのだ。さながらノルマンディー上陸作戦での、オマハ・ビーチ、の様相の、血のラニカイ・ビーチ、と化していた。

「司令部応答されたし！！こちら第10歩兵師団！！（海戦に伴い、上陸作戦も開始されていた。このビーチに配置されていた師団は手薄な所を突く手筈だった）敵の激しい十字砲火に晒され、進撃不：グアア！！」

司令部に必死に通信をかけていた彼は爆音と共に吹き飛んだ。爆発を引き起こすレーザー砲の直撃を受けてバラバラに吹き飛んだのだ。上陸艇などに加えられた兵団歩兵軍の猛攻でこの師団はいきなり活動不能、指揮官不在、任務遂行不能状態に陥った。そして兵団の良く統制された射撃は応戦準備の整っていない連邦軍歩兵部隊に大損害を与えることに成功し、連邦軍の艦隊司令部に衝撃を与えた。少数が突破に成功したもの、この地だけでも多くの犠牲を払い、数千人が死亡したとこの作戦から数年後に出版された元兵士の回想録や連邦軍の公式記録には記されている。正に第二の、オマハ・ビーチ、の様相を呈していた。

「情報と全く違うじゃないかよ、クソツタレが」

「少尉、なんとか突破はできるのか？」

「なんとかやってみますが……装備は無事ですか」

「アサルトライフル型のコスモガンがある」

「よし!!」

悪態を突きながら師団の生き残りたちは十字砲火を掻い潜り、どうにかビーチを突破しようと策を練る。大きさは数メートルある兵団の歩兵は手持ちのレーザーガンを乱射し、連邦軍側を圧倒する。かつてのノルマンディー上陸作戦ではドイツ軍はトーチカからの重火器の攻撃で連合軍側に痛撃を与えた。だが、今回の作戦はそんなものはない代わりに一列に並んでの砲撃が彼等の行く道を阻んでいる。艦隊司令部に果たして先程の通信兵の通信は届いたのだろうか。それが気がかりだった。

「全員、俺に続け!!」

「こうなったらヤケクソだ!!」

「おおおお!!!!」

兵士たちはアサルトライフルタイプのコスモガンを乱射しながら兵団に突撃を敢行した。果たして彼らは無事、突破できるのだろうか？

途中で途切れたものの、前線から伝えられた報は艦隊司令部に衝撃が走った。ラニカイ・ビーチに強力な戦力が配備されていた。ある程度予測はされたが、予想以上の戦死率の高さは山南を初めとする首脳部を驚愕させ、急遽、コスモタイガー隊の支援爆撃やジムスナイパー？の狙撃が行われる事となった。

そして、艦隊にも凶報が届く。兵団の空戦部隊の来襲である。問題はその数だ。百万や一千万を超えていたら通常兵器ではとても処理が間に合わず、場合によればスーパーロボットに準じる力を持つ超兵器で、量産型「マシーン兵器」の最高峰に位置する、シズラー、を投入せざるを得なくなる。反応兵器や光子魚雷などの核兵器に準じる兵器の使用は避けたいし、一部の艦に装備されている拡散波動砲では流れ弾が一発でも地上に当たれば大惨事になってしまうので、これまた使用はなるべく自重しなければならぬ。

「こちら駆逐艦、アーレイ・バーク、！！ものすごい数の敵をレーダーが補足した！！肉眼でははっきりとはわからんが……少なくとも数十万は超えている！」

「総員、対空戦闘用意！！モビルスーツは拡散弾のハイパーバズーカを敢行して直掩に当たれ！バルキリー隊及びコスモタイガーは対空多弾頭ミサイルを使用せよ！！各砲は三式弾を装填急げ！！」

艦隊は慌てて迎撃準備を進める。レーダーには後から後から光点が加速度的に増えていくのがはつきりと移っている。刻一刻と報告される状況に、艦隊の誰もが緊張を隠せない。

「敵、我が方の射程まであと40000！」

「全部隊、攻撃準備！！」

各艦の砲撃手の手によって対空戦闘出来るように砲身の角度が最大角度に上げられる。艦載機が出払った空母の甲板には対空砲代わり

のVB-6「ケーニツヒモンスター」が展開される。

ドラえもん達は艦内で情勢を見守る。揚陸艦に移乗し、LCAC（エア・クッション型揚陸艇）で待機中の美琴もこの状況には緊張する。

―そして空戦部隊が全艦の最大射程に入った瞬間。艦隊のあらうる火器が一斉発射され、空に閃光が広がった。人類と鉄人兵団の戦いの最大規模の戦いは始まったばかりであった。

行間「テストタロッサ・レポート、そして15歳の夏。」（前書き）

今回は戦役を体験した事でなのは達のその後の運命にどのような影響が出たか？

それに触れます。

行間「テスタロッサ・レポート、そして15歳の夏。」

「これはフェイトが戦役に従事した後、帰還した後数年間かけて取りまとめられ、彼女が15歳の時に正式に提出した管理局への報告書の一部である。

『観測指定世界に分類が替えられた第120管理外世界は類稀な科学力を持っている。

連邦軍の象徴とされる『マクロス』、『エルトリウム』、『ヤマト』の3種類の艦船は強大で、管理局の全ての艦隊を相手取っても、さらにお釣りが来るほどの力を保有し、ヤマトはミッドチルダが科学全盛の時代でさえ、理論上の存在、机上の空論、とされた超光速の粒子、タキオン、を動力原にしているという。エルトリウムに至っては思考主推進機関という半ば化物じみた動力原を搭載している』

報告書にはフェイトが鉄人兵団との戦いで見てきて、体験した事が事細かに記されていた。あの、地球、がどのような発展を遂げ、凄惨な闘争を経験したのか。そして自分自身が体験し、その一端に触れた事。内容は一貫して、ミッドチルダの上層部の右派や政治家達が吹聴する、ミッドチルダこそ次元世界の中心なのだ、という考え方に警鐘を鳴らす物だった。さらに彼女がマクロス・フロンティア船団に乗船し、その航海の最終地点で「VF-22 シュトゥルムフォーゲルII」を駆って、マクロス・ギャラクシー、と戦った時に目撃した、物、そして、歌、の力を垣間見た事についても触れていた。注釈付きで最後に添えられていた一文だけだが、自分たちの想像を越えた存在が確かに存在する事を認識した上で、飽く迄人類の可能性を信じるなど、彼女の率直な気持ちがこの報告書には現れていた。

地球連邦政府と国交を持った事で激しいカルチャーショックを受け、フェイトのレポートで自分たちが、井の中の蛙、だと知ったレジアス・ゲイズ以下の派閥は、脅威、に備えること、本来であれば人数的に少数派であるはずの魔力素養がある人物が戦力の中心になっている組織に蔓延している人手不足を、兵器を扱える戦闘要員の確保によって補うことを名目にして、それまで強硬に封印され、解禁されることすらタブー視されてきた旧時代の遺産の科学技術の解禁を強硬に推し進めるが、それは魔力の素養と努力で成り上がり、その地位を築いた者達の猛反発を招いていく。それが後々に管理局内の魔力保有者とそうでない者、地球に自らのルーツを持つ者など、お互いの不和を象徴すると、各世界の住人に揶揄される事となる。

そんな派閥争いを尻目に、なのはたちは史実と異なる道を選んだ。それは進学だった。、私立聖祥大附属高等学校、へ進学する道を選び、高校へ進学する。無論、3人は持ち上がりの内部推薦なのだが、問題は中学2年までの文系（理系は完璧なのだが）の成績であった。特になのはとフェイトは内部推薦が取れるか、ギリギリの水準で、3年の一学期の期末試験で全てを決するしか無いという状況だった。しかし親友達に助けを求めるにも、彼女たちも自分たちの方で精一杯であるのは承知していた。そこでかつてのツテを頼る事にした。それは……

なのはとフェイトは仕事で管理局に赴いた時に別世界の日本、扶桑皇国、と数年ぶりに

連絡を取り、それぞれの師であるウィッチの穴拭智子と黒江綾香に助けを求めた。彼女たちは当初、この頼みに困惑したものの、弟子の頼みとあればと快諾。それぞれの自宅に来訪した。（ウィッチ達にとっては数ヶ月ほどしか立っていなかったので、驚きが倍増したそうだが）

・西暦201X年　なのは宅　喫茶店「翠屋」

「お久しぶりです、智子中尉」

「ええ、大きくなったわね。歳はもういくつになったかしら」

「15です」

「そう。月日が経つのも早いものね。それで私に勉強を教えて欲しいと？」

「高校に行けるかギリギリの成績なんですよ……文系苦手で」

「分かったわ。きっちり仕込むわよ。覚悟を決めなさい」

「はいっ!!」

智子はなのはの両親や姉ともひと通りのあいさつを済ませ、ケーキを一個ほうばる（なのはの母の桃子曰く、仕事で末娘が世話になったお礼、との事）と、なのはの自室で勉強を教えにかかった。

「鎌倉幕府が成立したのは何年？」

「ええと……1192年？」

「おおむねそれで正解よ。次は……」

（智子は未来世界滞在時に母国である日本の歴史や文化をひと通り把握していた。そのためなのはに勉強を教えることは容易であった）
苦手な分野を補強してやり、きっちりと教え込んでいく。智子達は

同時に3人の勉強を見ながらしばしなのはの世界に滞在する事となる。

フェイトは自宅で綾香に勉強を見てもらいながら、秘剣、雲耀の習得に全力を尽くしていた。

デバイスを介さないで直接刀剣に魔力を流しこみ、制御する方法はフェイトの才覚を以てしても容易では無く、帰還から4年の時を経ても未だモノに出来ずにいた。

「ハア…ハア……」

刀剣に直接魔力を流しこんで制御する。これだけの事だが、多大な集中力を要する。4年でもうにかここまで形にできた。綾香も感心しつつアドバイスを送る。

「よし、その状態を維持するんだ」

日本刀に光が走っている。バルディッシュの刃と同じ金色の光だ。フェイトはじっくりと自身を鍛えあげていく。それがスバルの居た時代へ繋がっていく。何れ出会うであろう戦友に向けて一言だけ呟く。

「待っててスバル。会ったときに恥ずかしくないように、私は強くなるから……」

その言語が現実となるにはなのは達にとっては後4年の月日を要する。

「入道雲が浮かび、夏の日差しが激しく照る日の事である。」

行間「テストタロッサ・レポート、そして15歳の夏。」（後書き）

一部原作表記に直しました。

物語はなのはとフェイトが主です。

登場勢力相関図（前書き）

現時点までに登場する主な勢力の相関図です。二次創作なので原作を読んでなくても分かりやすいようにしています。

登場勢力相関図

ガンダムシリーズなど
地球連邦政府

イメージ的には宇宙世紀ガンダムでの地球連邦＋マクロスシリーズの統合政府＋トップをねえの地球帝国＋宇宙戦艦ヤマトの地球防衛軍が上手く混ざりあったようなもの)

統合戦争などの多くの戦乱後に日本国と大英帝国の勢力が主体となって、樹立させた議会制民主主義制の星間国家。数多くのオーバーテクノロジーを短期間で手に入れた結果、数十年間で宇宙最強クラスの家国へと変貌を遂げたが、設立から長い年月を経た故に腐敗や官僚主義が蔓延る組織となっている。

過去にはティターンズ等の軍閥が蔓延っており、それらの存在は宇宙移民からは腐敗の象徴のように扱われている。時空管理局には表向き友好的だが、その組織形態を危険視しているために連合軍と共に付き合い方を模索中。

学園都市（とある魔術の禁書目録及びとある科学の超電磁砲より）

東京西部に位置する完全独立教育研究機関。東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、総人口は2010年代時点で約230万人。外部よりも数十年分ぐらい文明が進んでいるのが売りであったが、22世紀ではOTMなどの技術の台頭でその優位性は大きく減退し、連邦政府の意向には逆らえなくなっている。

時空管理局（魔法少女リリカルなのはシリーズより）

いくつもの平行時空の管理・統治機構。しかしその実態は裏を返せば、軍隊と警察・裁判所の3つの機能を混ぜあわせ、それぞれの特徴を中途半端に併せ持つ組織。純粋な機械兵器の保有を禁じ、魔法至上主義が台頭しているが、それは極端に言えば自分たちの都合がよいように世界を統治しやすくするための措置とも捉えかねかねない状態であるので、地球連邦政府などには裏で危険視されている。人手不足気味な状況なので、裏ではそれを解消できるように、魔力の素養によらない戦力を模索中。

メカトピア（ドラえもん のび太の鉄人兵団より）

どこかの銀河系に存在する、ロボットによる国家。人的資源を補うために地球へ侵攻する。その物量による攻撃は脅威。その詳細な国家形態は不明。

ストライクウィッチーズより
連合軍

並行時空の地球で、ネウロイという脅威に対抗するために、各国が連合を組んで対抗している状態の軍を指す。

前線の将兵はともかくも、上層部間は縄張り争い・派閥争いが激しい。主な戦力は機械化航空歩兵及び機械化装甲歩兵。地球連邦軍とは事実上の同盟関係を結んでいる。時空管理局とは地球連邦同様に様子見の状態。

バダン（仮面ライダーZXより）

WW2で敗北したナチスドイツの残党が南米で結成した最初の組織。歴代の暗黒組織を束ねていた。過去に10人の仮面ライダーによって壊滅したとされているが……。

仮面ライダー（一号～ZX）

バダンが指揮していた歴代の暗黒組織やそれと関係していた科学者達によって作られた改造人間^{サイボーグ}。それぞれの組織の最高技術で作られた者もいるが、中には古代のロストテクノロジーで生み出された者もいる。本編には仮面ライダー1号・2号・V3・ライダーマン・X、ストロンガーなどが登場済み。

ゴルゴム（仮面ライダーBLACKより）

太古より暗躍していた暗黒組織。創世王なる存在が統治していた。だが、後継者候補であった世紀王の一人「ブラックサン（仮面ライダーBLACK）」の行動で滅亡した。本編の時系列では登場しない。

仮面ライダーBLACK RX（仮面ライダーBLACK RXより）

仮面ライダーBLACKが進化した姿で、太陽の子。歴代ライダーにはこの形態に進化してから認知され、11号ライダーとして迎えられた。本編ではこのRXが日本の守り手である。

行間その2「グレート・ガンバスターとアレクシオン、そしてある妹達」(前編)

新年明けましておめでとうございます。この場を借りて、新年のあいさつを致します。

今回はトップをねえ！ NEXT GENERATIONでの史実と異なる運命を辿る両者と、御坂美琴のクローン体「妹達」シスターズに触れます。時系列は2199年から2201年までの数年間です。

行間その2「グレート・ガンバスターとアレクシオン、そしてある妹達」

「人類はさらなる星間国家などの脅威に備えるべく、スーパーロボットの再建や新造などを急いでいた。光子力研究所の「ゴットマジンガー」（現在はマシンカイザーがその代理）、新早乙女研究所の「真ゲッターロボ」が新造のロボに当たる。軍も手を拱いていた訳ではなく、軍唯一のスーパーロボット「ダンクーガ」の修復（新造に近い）や、マシン兵器の最強兵器「ガンバスター」の後継機の開発が行われていた。

「地球連邦軍 極東のとある地

「ううむ。ガンバスターII プロトタイプにダメ出しが出されたとは……」

「名前が不味いんじゃない？ リアル系扱いし」

「要求性能はクリアしたはずなんだがなあ……。となりの部署のプランBの方はどうなんだ？」

「グレートマジンガーを参考にしてガンバスターの基本設計をリファインしたモノらしい。」

「なんでもG・GBというコードネームとか……」

「グレートガンバスターねえ。初代の純粋な発展機なのが受けたのか？」

「さあ……」

ガンバスターII プロトタイプが要求性能をクリアしていながらも、何故バスターマシン系の系譜に名を連ねる事が叶わなかったのか？ それはあまりにも基本設計に手を加えすぎたがために元エクセリオン乗員であった、ある軍需担当の武官がそれを知るなり、オオタ・

コウイチロウ元中佐の意志が窺っていないと毛嫌いし、意図的にコンペに落選するように仕組んだとの噂が絶えなかった。実際は単純に初代の血統を受け継いだグレートガンバスターが建造途中段階で予想を遙かに超える高性能（要求性能の10倍以上であったとの噂）を示し、軍も初代ガンバスターとその搭乗者の功績を後世に伝える意味を重視しただけなのだが。

（ガンバスターII プロトタイプのその後の運命は公式記録には殆ど残されていないが、非公式の文献によれば、その後起こった暗黒星団帝国との戦いでテストパイロットの手によって実戦投入され、戦果を挙げたとの記述がなされているが、公式記録との食い違いも見受けられ、真偽は不明）

グレートガンバスターは完成後直ちに軍に採用されたが、軍本部の直轄物として扱われつつ搭乗者が現れるのを待った。それは『あの2人の帰還を待つかのようだ』と扱う人員にはそう言われていた……。

「衛星軌道上の物体でありながらも地上からでも視認できる大きさを誇る建造中の一隻の超弩級戦艦が見える。

「あれは何ですか？ とミサカは質問します」

日本のとある地で組織から仮面ライダー達によって保護された御坂美琴のクローンのうちの一体で、今ではその総称である妹達シスターズと呼ばれることは少なくなった。の数少ない生き残り（何故200年もの間、彼女らが保存されていたのかは仮面ライダー達にも分からない。ただし一号の推測によればその有用性を組織が見込んでいたためか

も知れないとの事」の一人が仮面ライダースーパー1Ⅱ沖一也と会話している。美琴が未来世界で輸送機内で感じた予感はずなからず的中していたのだ。

「あれはアレクシオン。エルトリウム級の2番艦で、連邦軍再建計画の中心的存在だと言う代物だ」

「たしかアレはエスパーとイルカが動かしていたような……とミサカは疑問を口にします」

「そうだ。だが、あれは色々問題を起こした。有無を言わずに戦艦に乗させるを知った訓練中の電脳イルカたちが憤慨して、裁判を起こした。結果、見事に権利が認められて、今では他の職業につけるイルカだっているぞ」

「この時代は夢がありますね。……とミサカは微笑ましく思います」

「ミサカ」は沖一也のVジェットの後部座席に跨りながらツーリングを楽しんでいた。いずれ『お姉さま』とも会いたいのだが、今の段階では仮面ライダー一号に止められている。いずれどこかで会えるだろうと言うが……ストロンガー宛に美琴から送られてきた手紙を自室の机に大事そうに閉まっている彼女としては会う、時、をひたすら待つのはいささか性に合わないが、美琴とは違う時の流れにいる以上は従うしかない。その点は歯痒さを感じていた……。そんな春的一幕はゆっくりと過ぎていった。

行間その3 「新たなる旅立ち」 (前書き)

宇宙戦艦ヤマトの初登場ですが、古代たちはでません(笑) デスラ
ー総統なら出ます。

行間その3「新たな旅立ち」

—無限に広がる大宇宙……。宇宙には愛と戦いが入り乱れている。多くの戦乱を経験した22世紀末の地球人なら宇宙の可能性を信じる上で誰もが持っている認識だ。

ドラえもんものび太も多くの戦いを経験したからそれはよく知っている。ドラえもん達には不思議だったのは何故、かつて地球を去った天上人などの外宇宙勢力が、環境が汚染されきった地球に対し、何ら手立てを打っていない事だった。戦いを終えたのび太達は冬の長期休みの間に兵団が倒された後の地球を訪れていた。

「ねえドラえもん。どうして天上人達はどうしてこんなになった地球をほっといたんだろう？」

「おそらく地球が自分達より遥かに軍事力が上回った事で手を出したくても出せなかったんだろうね」

「どうして？」

「当たり前さ。ノア計画を実行に移そうとすれば、間違いなく地球連邦の逆鱗に触れる。連邦軍のあの軍事力なら天上人程度は物の数じゃないだろうし、逆に滅ぼそうと思えば簡単に出来る。」

「それをしていないのは地球連邦政府の良心だろうよ」

スネ夫もドラえもんに同意している。侵略しないのは地球人がその愚かさを一番よく知っているからだろう。数千年の長きに渡って身内同士で血みどろの争いをしてきた人類の業は自らの手でその代償を支払うしかないのだ。

「美琴さん、元気でやってるかしら？」

「そうだね。あの人ならきつとうまくやってるさ……」

ドラえもんはしずかには美琴のことはぐらかした。美琴を待ち構えている運命が残酷である事はこの時点ですえ本人の他は男性陣しか知らないからだ。

「その通りだった。美琴は元の時間軸で未来を少しでもいい方向に変えようと奮闘している。それは上条当麻と言う一人の高校生が美琴の時代に起こる戦争の中心に関わることで、そして彼がその戦争でどんな結末を迎えるのか。それを知ってしまった事による物である。この事はドラえもん達は美琴本人からの頼みで、しずかへは口止めされている。これはみんなによる、しずかへの配慮だった。」

轟音が響き、ドラえもんたちの迎えがやってきた。軍の極東支部所属の可変モビルスーツ「RGZ-95 リゼル」。大気圏内用に可変式ウィングタイプのバックパックを装備したタイプだ。一個小隊が飛来し、ドラえもん達を乗せる。

「ご苦労様です」

「さっ、提督たちや来賓の方がお待ちです」

「来賓？」

「あなたがたが良く知っている方ですよ。とある惑星の大使だそうです。」

リゼルのパイロットはそれだけいうと、ドラえもん達を乗せて離陸する。大使。ドラえもん達が関わった人物たちの中でそれほど大成した人物はただ一人。ドラえもんとおび太は懐かしい人物との再会に胸踊る気持ちだった。

「地球連邦政府との国交が成立し、ネウロイとの戦いに一段落ついた（ティターンズ残党と戦争は続いているが）世界から未来世界を休暇で訪れた菅野直枝は空戦技能を鍛えるために横須賀基地を訪れていた。扶桑では、気難しい性格、で知られた彼女だが、未来世界の住人達や501の隊員との交流（宮藤芳佳という後輩が出来たことも影響）である程度は改善された。現在は当面、自由行動が許されている（502への復帰は代理人の関係上、まだ先になりそうである）身分だが、体を動かしていないとどうも落ち着かない。

「ん？あれは……？」

直枝は港に停泊している一隻の超弩級戦艦に思わず目を奪われた。その艦容は扶桑皇国海軍軍人ならば誰もが憧れる最新鋭戦艦のそれと酷似していた。その名は大和型戦艦。

「大和……！？んな馬鹿な！？」

艦首の菊花紋章が波動砲（直枝はあの戦いの際にアンドロメダ級超弩級戦艦の拡散波動砲を目にしていたので、波動砲の事は知っていた）に変わっているなど、細かいところが改良されている以外は正しく大和型戦艦の艦容を維持していた。ただしサイズは大きくなっているが……。

「ようナオちゃん、こんなところでなにやってんだ」

「あれ？坂本大佐じゃないスカ。どうしてここに？」

「その後、再度所属先が変わってあの艦に復帰することになったのさ」

「あの戦艦に？」

「ああ。宇宙戦艦、ヤマト、。人類の象徴たる超弩級戦艦だ」

「ヤマト……」

「ああ」

そう。宇宙戦艦ヤマトこそ、強大な星間帝国であったガミラス帝国と白色彗星帝国にも屈しなかった人類の強さの象徴。そして直枝のよく知る大和型戦艦の生まれ変わり。この世界では悲運の最期を遂げた大和を復活させた代物。坂本茂は白色彗星帝国戦後殆どの人員を失ったヤマトの艦載機隊の隊長を努め、一時的に加賀へ移動したが、今回の訓練航海に先立ってヤマトに復帰した。

「地上で訓練もいいが、宇宙での経験もしないとな。根回しはしてある」

「ち、ちょっと待ってくださいよ。あっていきなりオレに宇宙に行く？」

「そういうことだ。それに君をよく知る人物からの推薦もあってな」

「え？ 一体誰に？」

「ラバウル……いや、リバウの魔王、西沢義子飛曹長だ」

「なあにいいいい！？ 姉御が……オレを！？」

西沢義子^{にしざわ よしこ}。史実ではラバウルの魔王と恐れられた大日本帝国海軍のエース「西沢広義」中尉に相当するウィッチ。空戦能力では扶桑の中でも屈指の強さを誇るが、指揮官適性ゼロなのがほぼ唯一の欠点で、501の坂本美緒、504の竹井醇子とは戦友。彼女と直枝が面識があり理由は、直枝の少尉時代にまで遡る。502の基地に義子が立ち寄った際に模擬空戦を行い直枝を完全に圧倒した。その際に、「カンノ」「姉御」と呼び合う仲になった。彼女は直枝が慕っ

ているウィッチの一人だ。彼女の容姿はショートカットの髪形の明るい少女といった感じの容貌である。直枝を推薦したのは何れネウロイが宇宙から襲ってくるだろうという危惧を持っていたからである。

「そうだ。ちょうどコスモタイガーでヤマトに行くところだから付いて来てくれ」

「ちょっと待ってくださいよ、心の準備がまだ……」

「善は急げだ!!」

「うああ!!」

坂本茂は強引に直枝を格納庫に連れて行く。直枝はこの時ばかりは自分の不運を呪った。

「その頃、かつて宇宙戦艦ヤマトと戦い、今やヤマトの好敵手となった元大ガミラス帝国総統「デスラー」率いるガミラス帝国軍残存艦隊は自らの母星たるガミラス星に別れを告げようとしていた……」

そのとなりの青い星「イスカンダル」。地球連邦政府にとって大恩有るこの美しい星は今、新たな戦いの引き金となろうとしていた……。

「総統、まもなくマゼラン星雲のエリアに入ります」

「……そうか。18ヶ月と23日ぶりだな、タラン」

デスラー達は長いさすらいの旅に出る前に一目、母星の姿をみよう

とやって来た。これが母星との今生の別れとなるのだ。将兵の誰もが滅び行く母星の姿に涙を流していた……。

登場勢力相関図2（前書き）

登場勢力相関図その2です。

登場勢力相関図2

ミレニアム

南米に逃れたナチス残党によって結成された組織の一派。バダンの、化物運用、部隊としての側面を持つ。指揮官である「少佐」を除く全ての構成員全てが吸血鬼化した戦闘団^{カンブレルツベ}である。士官の中には「ヴェアヴォルフ」と呼ばれる特殊能力を持った幹部がいる。構成員は数万人ほど（結成時は1000人だが、各次元世界に漂流していた元ナチス・ドイツ軍兵達が続々と合流したため増えた。）

時空管理局最高評議会が地上本部襲撃にも関わらず静観しているのは、元は彼等も若き日はナチスドイツの軍人（階級は尉官レベル）であったため。ジェイル・スカリエッティは彼等の意向を受けて、制作された。

じゅうじきょう
十字教

のび太たちの地球に於ける。世界最大の宗教。^{カトリック プロテスタント}旧教と新教を始めとして様々な教派に分かれている。（史実でのキリスト教に相当する）

イスカリオテ機関（ヴァチカン法王庁特務局第13課）

十字教の大本であるヴァチカンの法王庁特務局第13課、通称「特務機関イスカリオテ」。十字教における、裏切者イスカリオテのユダの名を冠し、ヴァチカンの保有する唯一にして最強の戦力であり、カトリックの地上における神罰の代行者として、悪魔、化物、異教、異端の殲滅を存在目的とする。その力は極めて強大。

現在の主要キャラの動向（前書き）

最新話時点の主な主要キャラの動向です。主に出番が多いキャラも含めています。

現在の主要キャラの動向

ドラえもん一行（ドラえもんら5人）

現時点（2199年時点）では地球連邦軍に協力し、鉄人兵団拠点攻略に参加。前線に出るかはジャイアン次第で、ドラえもんは知恵を絞って兵団への戦略オブザーバー的な役割を果たしている。

御坂美琴

現時点ではドラえもん一行に同行し、その超能力で戦線に直接参加。待機中だが、上陸作戦第一陣には相棒である白井黒子は帯同させずに単独で参加。

高町なのは

11歳時点の2199年現在、連邦宇宙軍少尉。日本で待機中。別世界の日本軍人である穴吹智子を師と仰ぐ。ハワイ攻略戦に参加するかは不明。19歳時点ではナチス残党と絶賛交戦中。地球帰還時に受領していた可変戦闘機バルキリーをフェイト共々秘匿し、使用。現地を訪れた数人の仮面ライダー達と合流。

フェイト・T・ハラオウン

11歳時点の2199年現在はマクロス・フロンティア船団へ向かう空母に乗艦中。19歳時点での動向は高町なのはに準じる。こちららは黒江綾香に弟子入り志願。綾香の秘剣をモノにしようと奮闘中。

穴吹智子

現役復帰したばかり。高町なのはを弟子にし、育てる決心を固めている。その腕前は健在で、なのはをも翻弄できるほどの空戦での力を見せた。

黒江綾香

現役復帰と同時に国家間の利害を超えた新型機の開発に携わる。フエイトを預かり、面倒を見ている。

管野直枝

ティターンズ残党と交戦中。坂本美緒が黒江綾香の必殺技を再現したことに驚愕している。行間時点では休暇中。しかし以前に知り合っていた、コスモタイガー隊の隊長「坂本茂」により、母国の最強の戦艦であった大和型戦艦の生まれ変わり「宇宙戦艦ヤマト」に無理やり連れて行かれてしまう。

行間その4「宇宙戦艦ヤマト」(前書き)

宇宙戦艦ヤマトの話その2です。主に新たな旅立ちがベースですが、P S 2ゲーム版の要素が一部入ります。

行間その4「宇宙戦艦ヤマト」

「地球連邦軍の象徴の一つとして扱われている宇宙戦艦ヤマト。その艦歴は波乱に満ちている。戦艦大和をベースに改造されたのを勘案してもなお凄いものだ。その情報は一部であるが、連邦の友好国家にも伝わっていた。彼等はヤマトを非常に恐れた。単艦で、恒星間国家を滅ぼした、力、はまさに自分たちに取って脅威そのもので、時空管理局をして『第120観測指定（魔術の存在が確認されたため）世界に手を出すな』と言わしめた要因の一つ。」

そのヤマトに無理やり乗り込むはめになった菅野直枝は坂本茂の操縦する『一式宇宙艦上戦闘機、コスモタイガー？、』（通称、コスモタイガー、）の後期型（現場では新コスモタイガーと呼ばれている）三座型の後部座席に乗り込んでいた。ヤマトが訓練航海の為に発進したタイミングで合流する。既に艦載機搭載のための着艦口が開かれている。そこへ着艦するのだ。

「お、おお……あんな狭いところに着艦できんのー!？」

「そうだ。そうでないとヤマトの航空科チーフは務まらんさ」

ヤマトの着艦口は水上艦艇であった大和型戦艦がベースになっている関係上、下部に設置されている。技量がそれなりになれば着艦が難しいと連邦宇宙軍の将兵から陰口を叩かれている。（これは水上艦艇を改装した関係で、下部を格納庫に当てたために生じた事）

『古代艦長代理、聞こえますか？』

『おお、坂本か。よく来てくれた。ひよっ子共のお供は大変だな』

（史実では彼もその一人だったが、この時空では白色彗星帝国との戦いのヤマト帰還直後にヤマトに配属されているために一歩進んだ

立場になっている)

『ええ、まあ可愛いもんですよ。そんなわけで士官学校飛行課程卒業生54名、ヤマト配属を命じられました』

銀色の塗装がなされた複数のコスモタイガーが編隊を組んでヤマトへ着艦する。見事な着艦を行ってヤマト艦内に降り立つ。直枝は改めてヤマトの様子を見る。

以前目にした水上艦艇としての大和だと、どのあたりに当たるのだろうか。たしかアレの場合だと零式水偵か瑞雲が搭載されていたが……。

「元の大和より大きくなってないか……?これ」

「この艦は元はいえ、移民船の一つとして建造されていたからな。途中で宇宙戦艦に変わったけど」

それは真実だった。ヤマトは当初は移民船の一種として建造されていたが、波動エンジンの技術が地球に入ったのを機に軍艦として変更された。これはエルトリウムと経緯を同じとしている。なので図らずしも並の正規空母並の機数が搭載可能となっている。ただしこれらの諸元を実現するために元々のサイズの263mからは2倍を超える、500mを有に超える巨艦へ生まれ変わっている。(改装の際に元々付いていた武装や備品は博物館行きとなった)直枝は不思議な感覚を覚えつつ、坂本と共にヤマトの幹部レベルの乗員に報告をしに行った。

ヤマトの第一艦橋は主だった幹部レベルの乗員の勤務場所となっている。艦長席は最初の航海で初代艦長の「沖田十三」提督が亡くなつてからは空席となり、現在は沖田から引き継ぐ形で戦闘班長の古代進が艦長代理を兼任している。

「坂本、その女の子は一体誰だ？」

「この子は例の、ストライクウィッチ、ですよ。名前は……」

「扶桑皇国海軍所属、菅野直枝大尉であります。宜しくお願い致します」

「そうか。君が……」

ヤマト特有の制服（服や←の色で見分けるので、他の艦の乗員には大昔のSF並だと揶揄されている）を着た一人の男、宇宙戦艦ヤマトの工作班長であり、技師長の真田志郎は直枝の素性を瞬時に理解し、握手する。このようなありえないほどの理解力などから、彼は、こんなこともあるかと、神として軍内で名が轟いているのだ。

「真田さん、この子を知っているんですか？」

第一艦橋の最前列の席の一つに座っていた若い男、艦長代理の古代進がやって来た。坂本が連れてきた女の子の正体が気になるようだ。真田は古代の心情を理解し、直ぐ様説明した。子供でも分かるように噛み砕いて、なおかつ理論的に。

「みんな、平行世界、というのは知っているな？」

「ええ。もしもこうだったらどうなっていたのか、を具現化させたもう一つの現実のようなものでしょう？」

第一艦橋の乗員たちは皆、真田の説明に聞き入っている。それほどまでに彼の言葉は力があるのだ。

「そうだ。昔から物理学的にも天文学からの観念からも存在が指摘され、つい最近に実在が確認された。彼女はその平行世界の住人。それも安土桃山時代以降は大きく異なる歴史を辿った日本から来たのだ。」

そして真田は我々のよく知る歴史で言えば、直枝が誰に相当する存在なのかを告げる。それは第一艦橋の誰もが驚く事だった。

「この子は我々の歴史で言えば、かつて大日本帝国海軍の大戦後期の代表的なエースパイロットだった、菅野直、に相当する存在。デストロイヤー、、ブルドッグ、と言えば分かるな？」

「なっ……この子があの……？」

中でも一番驚いているのは古代だった。彼は戦闘機の搭乗員でもある関係上、かつて名を馳せた撃墜王達の名は諳んじている。その中でも大戦後期の劣勢な大日本帝国海軍航空隊の中でも最末期まで戦果を挙げた部隊「海軍第343航空隊」の編隊長の一人であった男。その可能性の一つがここにいるのだ。古代は感心したような顔で直枝を見る。

「そういうことになるんで、お手柔らかにお願いしますよ。古代艦長代理」

「あ、ああ……」

（あんがとく真田さん。艦長代理を出し抜いてやったぜ！）

いささか驚きが抜けない様子の古代に、直枝は、してやったりと

いった心境で、心のなかでガッツポーズを取った。

噂に聞く、ヤマトの猛者どもに舐められないようにするには第一印象で勝負するしかないと踏んでいた彼女としては、真田志郎に物凄く感謝するしかない。

「ヤマトは間もなくコスモタイガーを全機収容し、地球の大気圏を抜けようとしていた。ひとまずの目的地は火星。そこで同じく訓練航海に出ている数隻の主力戦艦級と新造の戦闘空母型、護衛艦らと合流して訓練を重ねるのだ。（元々のベース艦であった大和型戦艦が連合艦隊旗艦であった関係と、当初の建造目的が移民船であったので、下手な情報処理艦以上に通信設備は充実している。それを活用しない手は無い）

僚艦となる戦艦群は、白色彗星帝国との土星決戦をすんでのところで生き延びた艦もあれば、つい最近に新造されたばかりの性能向上型もいる。空母に至っては航空隊要員こそベテランだが、艦はできただてホヤホヤの新米艦。これらの艦艇は護衛艦と共にヤマトを待ちうけていた。これらの乗員達はあのヤマトと共に訓練できると知り、士気が上がっていたが、精鋭搭乗員ぞろいのヤマトについていけるのだろうか、と不安たっぷりであった。

行間その4 「宇宙戦艦ヤマト」 (後書き)

修正しました。

行間その5 「初代ゲッターロボの最期」 (前書き)

本編の補完で、初代ゲッターの最期です。

行間その5「初代ゲッターロボの最期」

「かつて、初代ゲッターロボは、恐竜帝国、主力の大半を道連れに自爆して果てた。その経緯を少し語ろう。

「そう言えば私たちが来たときには、もうゲッタードラゴンでしたよね？初代はどうなったんですか？」

「初代ゲッターは武蔵―俺達の仲間―と共に果てた。……壮絶な最期だったさ」

23世紀初頭のある日の事。秘匿しているバルキリーの整備研修で久しぶりに未来世界を訪れたなのは現地では流竜馬と数年ぶりに再会。竜馬のおごりで喫茶店に来ていた。そこで竜馬は初代ゲッターの最期を回想し、なのはに語った。それは白色彗星帝国と地球連邦が土星の衛星の一つ「フェーベ」で航空決戦を行っているのと同時期の出来事だったと。（竜馬の服装は実家の道場の道着姿であり、ゲッター操縦時のパイロットスーツ姿かTシャツ姿しか見たことなかったなのはには新鮮だった）

―当時の早乙女研究所では恐竜帝国との決戦を睨んで、極秘裏に新型ゲッター（後のゲッタードラゴン）の建造が進められていた。この計画は研究所幹部しか知りえぬほどのもので、動力に当時最新の理論を基に創りだされたゲッター線増幅炉を使用しているのが画期的であった。その計画が85%に達した時、凶報が届いた。突如として恐竜帝国が決戦を挑んできたのである。

当時のゲッターチームの一員であった巴武蔵はこの報を早乙女博士に伝えようと、極秘の研究室に乗り込んだ。

「あっ!!」

強引に乗り込んだ武蔵がそこで見たのは見たこともない建造中のロボットだった。ゲッターの後継機であるのは3機の戦闘機が合体した姿をし、伸縮式のフレームが見える事から容易に分かった。

「驚いたかね?これが新しいゲッターロボ、ゲッターロボG、だよ」
「これが新しいゲッターロボなんですか……?」

「我が研究所の技術の粋を集めたスーパーロボットだ。今までより10倍の力を発揮できる。……しかしこいつも運が悪い。あと少し時間があれば……」

しかし。決戦を挑まれてきた以上、新型の完成を待つてはいられない。従来機で迎撃するしか無い事実は2人は自然と暗い表情になった。今となっては新型も何の意味をなさない。完成前に破壊されるのがオチだ。

『恐竜帝国空軍、伊豆半島を通過!!後10分もすれば研究所に飛来します!!』

その報を聞いた武蔵はしばしの沈黙の後にこう言った。死を覚悟した顔で。

「……最後の手段です」

「……ムサシくん!!」

「後を頼みます」

そう。武蔵は初代ゲッターと共に死ぬ腹積もりで決死の出撃を決意したのだ。2機のゲットマシンを自動操縦にし、ゲッターにとって

、死、を意味する事を現実にしてまで、ゲッタードラゴンの完成までの時間を稼ぐために。

「あの時、オレはその前の戦闘で記憶を一時的に無くしていた。あの時ほど後悔した事はない。アイツの最期の言葉はオレの記憶を戻してくれたが……それと引換えにダチを地獄に行かせちゃった」

初代ゲッターの最期を語るときの竜馬は悲しげな表情だった。それは親友を失ったという後悔が心に深い傷を残してしまったのだろうか。彼と同じように親友を持つ人にはそう思えてならなかった。

「熱い血潮も……涙も流さねえ冷血野郎のトカゲ共おおおお！！！！
テメエらなんぞに……この地球は渡さんッ！！！！」

傷つき、竜馬の目の前で炉心を取り出し、メルトダウンさせていくゲッター1。血のようにオイルを流しながら高熱に溶けていくゲッター1の姿は終生、竜馬たちの脳裏に焼きついて離れない。そしてその最期の瞬間。

「貴様らの祖先を絶滅させたエネルギーの源だ！もう一度滅びやがれえええ！！！！」

皮肉にも武蔵の今際の叫びが竜馬の記憶を呼び覚まし、竜馬は武蔵の名を叫んだ。だが、彼は、もういない、のだ。

「ムウウウサアアアシイイイイイイ——ッ！！」

その時は叫ぶことしか竜馬には出来無かった。親友を失った以上、記憶が戻っても何になるのだと。そして武蔵の死を賭した行動でゲッタードラゴンが完成し、恐竜帝国を退けたのである。

竜馬から、事の顛末を聞かされたのはは絶句した。ゲッターロボGが恐竜帝国を退けた裏にはこのような出来事があったのだと知り、あまりの壮絶さに言葉も無かった。

「すまん。久しぶりにあったのにこんな話をしちゃって」

「いえ。私こそ場を暗くしちゃってすいません……まさかそんなことがあったなんて」

「アイツは自分を犠牲にして地球を守った……。俺たちはそれ以来、アイツの墓参りは欠かさないのさ」

「竜馬さん……」

ジュースを飲み干しながら竜馬は言った。武蔵を弔う事が彼なりの贖罪なのだ。旧研究所付近に武蔵の墓を立てるに当たって、主導的役割を果たしたのもゲッターチームのメンバーである。現在でも竜馬達は武蔵の遺族の援助を行っている。

「ところで今日はどうして来たんだ？向こうじゃ忙しいんだろう？」

「持って行ったバルキリーの整備の研修ですよ。同僚に、手に余る、って言われちゃって」

「確かにA V Fは他のより整備に気を使うからな。そう言えば、あれからお前を中尉に昇進させるって話が出たんだが」

「え？本当ですか？初耳ですよ」

「だろうな。その話が伝わったのはお前が向こうに帰った後の事だったし、ブライト艦長もその事を上層部に伝えるのに相当苦勞してたしな。結局立ち消えになって数年が経ったって訳だ」

竜馬はその時のゴタゴタを簡単に説明し、その事を知ったのは思わず苦笑いしていた。結局なのはが中尉に昇進するのは、なんだからで19歳以降にずれ込む事になる。

「あれから気になる事があるんです」

「何だ？」

なのはがあれから気になっていること。それはスバルの事だった。あの時、の記憶を持つ状態のスバルはいつに帰還したのか？それが気になっていたのだ。少なくとも自分が19歳になった時代のどこかだというのは容易に想像がつくが……？

「アイツがどこに帰ったのか……それはお前が19歳にならなければわからんと思う。その時になればすべて分かる」

「そういうもんですかね」

―そう。スバルやその親友で、自分の部下となるティアナがどこにいなかったのか。それは19歳の頃に全て判明する。前者も後者も思いがけない出来事で……特に後者に驚愕するハメになるのは言うまでもない。

間章その9「刻の涙」

「地球連邦軍の軍事介入によりひとまずの難を逃れた連合軍第501統合戦闘航空団「STRIKE WITCHES」（ストライクウィッチーズ）。彼女らはそこで別世界の地球が辿った殺戮と欲望に満ちた歴史を知る事になった。Zプラスによって連邦軍の空母に運ばれた「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ」は事情説明の為に医務室を訪れたエイパー・シナプスの口から事の顛末を知らされた。彼女には再び卒倒しかねないほどの衝撃だった。

「そ、そんな……ッ……」

ミーナはネウロイが現れなかった世界の地球では本来この時期は2度目の世界大戦が行われている事、祖国が一人の独裁者によって破滅を迎える事、それらが終わっても争いがさらに続く事。そして遠い未来（20世紀前半頃の人間である彼女には22世紀という時代はそう感じられた）には地球そのものが人間の重みに耐えられなくなる事などを知らされ、強い精神的ショックを見た。そして宇宙移民時代に迎えた破局的一幕、第一次星間大戦、一年戦争、を初めとする宇宙戦争……。

「我々の世界ではこれが真実だ、中佐。残酷だが、これらは我々が辿った道だ」

そうやって彼は部下に命じて映像機材を用意させ、多くの戦乱の一幕をミーナに見せた。（証拠画像も兼ねている。）

まず見せたのは歴史上、外せないギレン・ザビの演説。（連邦軍が保有するギレン・ザビの映像資料の多くはガルマ・ザビの国葬時の

ものだが、今回はジオン軍が最終防衛ラインと言える要塞『ア・バ
オア・クー』まで追い込まれた際の演説で、珍しいケースであった。
」

『我が忠勇なるジオン軍兵士達よ 今や地球連邦軍艦隊の半数が我
がソーラ・レイによって宇宙に消えた。この輝きこそ我等ジオンの
正義の証しである。決定的打撃を受けた地球連邦軍に如何ほどの戦
力が残っているようにも、それは既に形骸である！！ ……敢えて言
おう、カスであると！！！それら軟弱の集団が、このア・バオア・
クーを抜くことは出来ないと私は断言する。 人類は、我等選ばれ
た優良種たるジオン国国民に管理運営されて、初めて永久に生き延
びることが出来る。これ以上戦い続けては、人類そのものの存亡に
関わるのだ。地球連邦の無能なる者どもに思い知らせ、明日の未来
の為に我がジオン国国民は立たねばならのである！！』

誰もが彼の演説を見ると酷い衝撃を受けるが、それはミーナも例外
では無かった。ギレン・ザビの演説は劇的かつ勇ましい。彼等の行
ったという多くの大量殺戮行為は彼女としては決して肯定できない。
だが、彼等に開放の大義を与える結果となった当時の連邦政府の無
策ぶりに憤る宇宙移民の気持ちも理解出来る。だが…それを理由
に多くの人々を戦争の犠牲にしているはずはない。それは彼女の偽
りなき気持ちだった。

続いてはデラーズ・フリートの宣戦布告。ジオン残党軍が引き起こ
した、戦後最初の騒乱の際の演説。『敗北を認めない彼等の行為は
もはやテロに過ぎないはず。なのに何故…？』とミーナは思った。
しかし彼女としては、過去にネウロイに敗れて亡命政権を設立した

「帝政カールスラント」の軍人である以上、どこかで共感できる所もあり、複雑だった。愛する者をネウロイに奪われているから尚更であった。

『地球連邦軍、ならびにジオン公国の戦士に告ぐ。我々はデラーズ・フリート。』

いわゆる、1年戦争と呼ばれたジオン独立戦争の終戦協定が、偽りの物であることは、誰の目にも明かである。何故なら、それはジオン共和国の名を語る売国奴の手によって結ばれたからだ。我々は、いささかも戦いの目的を見失ってはいない。それはまもなく証明されるであろう！ 私は日々想い続けた。3年前のあの日、宇宙市民^{イド}の自治権確立を信じ、あるいは祖国の行く末を案じ、戦いの業火に焼かれていった憂国の士のことを。そして今また、敢えてその火中に飛び入らんとする若者のことを！

宇宙市民の心からの希求である自治権要求に対し、連邦がその強大な軍事力を行使してささやかなるその芽を摘み取ろうとしている意図を、証明するにたる事実を、私は存じておく！ 見よ、これが我々の戦果だ。このRX-78GP02Aは、核攻撃を目的として開発されたものである。南極条約違反のこの機体が、秘かに開発された事実をもってしても、呪わしき連邦の悪意を否定できる者が居ろうか！？……顧みよ！ 何故ジオン独立戦争が勃発したのかを。何故我らが、ジオン・ズム・ダイクンと共にあるのかを！ 思い返して欲しい。我らの目的を。我らの理念を。一人一人の胸に刻まれた、その熱い使命を！我々は3年間待った。もはや、我ら軍団にためらいの吐息を漏らす者はおらん！

今、真の若人の熱き血潮を我が血として、ここに私は、改めて地球連邦政府に宣戦を布告するものである。

かりそめの平和への囁きに惑わされることなく、繰り返し、心に聞こえて来る祖国の名誉のために……。ジーク・ジオン！！』

美辞麗句で飾った裏にどれだけの犠牲を強いたのか。それを考えただけで反吐が出そうだったと、後に一端501が解散となり、祖国奪還の戦いに赴く際にバルクホルンにこう語ったと、後々の戦いの際にエーリカによって連邦軍に伝えられるが、この時、ミーナは理想に託けて殺戮を平然と行う人間の負の側面を垣間見、怒りさえ覚えていたのだ。

「なんて事……！これが未来の可能性の一つだというんですか！？」
「そうだ。全ては連邦政府の無策や宇宙移民への蔑視が招いた結果だ。だが、彼等はそれを理解しようともせず、一年戦争の勝利と共に増長し、今回の騒乱の原因となる集団を生み出すに至るのだ」

「そう。一年戦争とデラーズ紛争の結果に漬け込んで、連邦軍のタカ派が生み出したジオン残党狩りを名目上の存在意義とした特殊部隊「ティターンズ」。彼等こそがこの世界に争いを持ち込んだ集団なのだ。その誕生の瞬間。」

『顧みろ……！ 今回の事件は地球圏の静謐を夢想した一部の楽観論者が招いたのだ。』

デラーズ・フリートの決起などは、その具体的一例に過ぎない！
また先月の13日、北米大陸の穀倉地帯に大打撃を与えた、スペースコロニーの落下事故、を見るまでもなく、我々の地球は絶えずさまざまな危機に晒されているのだ。

地球。この宇宙のシンボルをゆるがせにしないために、我々はここに誕生した！

地球。真の力を再びこの手に取り戻すため、“ティターンズ”は

結成されたのだ!!!」

先のデラーズ達の行為を事故と偽ってまでその存在意義を力説するティターンズ実戦部隊の責任者「バスク・オム」。そしてそれに共感した地球連邦軍の教導隊の名乗った「ニューディサイズ」。

『地球連邦軍本星防衛艦隊、X分遣艦隊の全艦艇将兵諸君に告ぐ。私はブライアン・エイノーである。これより本艦隊は連邦軍総司令部からの命令を変更し、現在、ニューディサイズと名乗る教導団将兵達と合流する。今回の事件に於いて、小官は、義はニューディサイズに有りと見た。彼らの主張する通り、地球圏は飽くまで地球の物であり、地球こそがその中心なのである。先の紛争の混乱に乗じて台頭してきた“宇宙人”にそそのかされ、宇宙人の言いなりとなった政権の、いや、実体は宇宙人どもの傀儡政権が下した命令に地球連邦軍は従うことはない、と小官は判断する。また、地球人である誇りが有るならば、決して従ってはならない。故にこれは地球連邦政府、及び地球連邦軍への抗命ではない。地球連邦軍は地球の為に戦う軍隊なのである。あの「一年戦争」の想起せよ。正義は地球とコロニーのいずれに在ったのか？小官の決定に不服な者は十二時間以内に艦隊より退去せよ。真に地球人たる誇りを持つ者のみ、小官と共に行動せよ。諸君の英断を期待する。地球連邦万歳。以上！』

これら集団の信じた地球至上主義の影響は2199年でも継続しており、未だに連邦地上軍はエウーゴに恭順したりベラル派と飽く迄ティターンズの理想を信ずるネオコン派に分裂した状態なのだ。それが今回の事件の原因となってしまった。

「そもそも我々はこの世界には調査任務のために派遣された。だが、

彼等ティターンズ残党の存在が明らかにされた以上、この世界に留まり、戦うだろう。我々は君たちウィッチと共に戦う事を約束する。」

「いいのですか？」

「ああ。この件はすでに連合軍に伝え、アドルフイーネ・ガランド少将も我々の存在を承認してくれている。」

シナプスはここで連合軍上層部の中で最初に接触した、ウィッチ出身の將軍の名を出した。アドルフイーネ・ガランドはカールスラント空軍の元ウィッチで、カールスラント皇帝フリードリヒ4世（史実の時世を考えると、ヴィルヘルム2世の子のヴィルヘルム・フォン・プロイセン か、その子「ヴィルヘルム・フォン・プロイセン」が祖父、あるいは曾祖父のフリードリヒの号を継いだ事になる）の信任も厚い將軍である。過去にはミーナも美緒も世話になった。彼女はミーナを説得する際には、自分の名を出して良いと言っていた。その効果が発揮されたのだ。

「分かりました。少将閣下同様、小官は501の責任者として、あなた方を受け入れ、歓迎いたします」

「ありがとう。君の体調が回復次第、今後の事について協議しようと思う。よろしいかな？」

「分かりました」

シナプスはこの時、心のなかでガランドに感謝したのは言うまでもない。

そして空母には続々と501の人員が着艦しつつあった。彼女ら

を待ち受けるのは何か？そして残酷な事実を突きつけられるのは間違いない。果たして何人があの殺戮の歴史に持ちこたえられるのだろうか。

「そして。アフリカ戦線では続々と反抗作戦の準備のためにコスモタイガーやバルキリーが次々に基地に飛来していた。

「あれが未来の最新鋭機か？」

「ええ。何でもアイツらに対抗するためだとか」

マルセイユは、続々と基地に飛来するコスモタイガーやバルキリーにちよっぴり羨ましそうな視線を向ける。あのジェットに対抗できるのは今の所、彼等のみだ。ジェットストライカーの登場が待ち遠しい。

「アレに乗ってみたいという気持ちもあるが……、頼むから早く完成してくれよ……ジェットストライカー」

「ティナ……」

それは現在のレシプロストライカーではジェット機には勝てないという悔しさも多分に含まれていた。

「これも時代の流れか……。」

マルセイユはレシプロストライカーの時代がもうじき終焉を迎えるのを予期し、複雑そうにコスモタイガーの勇姿を見つめていた。

「ケイさん、綾香さんから伝言があります」

「え？ 黒江から……？」

こちらはティアナ。着任して早々に途中地点で未来世界にいる綾香から託された伝言を伝えるべく、圭子の部屋に来ていた。その伝言とは。

「ジェットストライカーは実用化の目処がたったと事で、7ヶ月でこちらに実用型を送れるそうです。それともう一つ。本国からです、急ぎ帰還して、例の奴、を受けよ」と

「ジェットストライカーはありがたいけど、まさか私にアレをうける……」

「はい」

「うあゝ！！ロリは勘弁してええゝ！」

圭子は戦友から送られた写真が相当にトラウマになっていた。戦友である黒江綾香が子供に戻ったという精神的衝撃は相当な物で、もし自分が被験者選ばれるなら、せめて外見は14、5になりたいたいの願望を密かに持っているのです、相当に不安なのだ。

「ケイさん、諦めましょうよ♪」

ティアナの笑顔は圭子の不安をさらに増大させ、圭子はその場をの

た打ち回って、ロリに戻るのはいやー！！、と悲痛な叫びを挙げていた。

「果たして加東圭子の明日はどっちだ！？ロリータ系生活、それともミドルティーンの青春を謳歌するのか？それは連邦軍次第であった

間章その9「刻の涙」(後書き)

一部修正しました。

間章その10「戦艦武蔵での会談、そして愛・おぼえていますか？」（前書き）

今回は史実でストライクウィッチーズ第一期の時期の連合艦隊司令長官であつた豊田副武大將がゲストで出ます。

間章その10「戦艦武蔵での会談、そして愛・おぼえていますか？」

「地球連邦軍がストライクウィッチと共に共同戦線を張ることが連合軍に了承され、正式に決定されたのは現地の時間で1944年7月の事である。その事の正式な通達連合軍の司令官の一人「扶桑皇国海軍連合艦隊司令長官」の「豊田副武」（とよたそえむ）よりミーナに届けられた。ただし、臨時の501の司令部を地球連邦軍の戦闘空母「赤城」に置くことが連邦軍側の協力の条件の一つであった。（連邦軍が立場的に危ういウィッチを庇護下に置き史実での愚将の干渉を避けるという目的もあった。此頃の連邦軍は既に505が事実上の壊滅に追い込まれた裏には愚将として戦史にその名を轟かせた、かの牟田口廉也中将が担当した防衛作戦によるモノであることを知っていたからである）

「豊田司令長官、連合艦隊司令長官である貴方がどうして連合艦隊主力を率いて我々に合流したのです？その理由を聞かせていただきたい」

ブリタニアの軍港に停泊中の大和型戦艦2番艦にして、連合艦隊旗艦「武蔵」にてシナプスは第30代連合艦隊司令長官の豊田副武との会談に臨んでいた。彼が何故ブリタニアという遠地まで連合艦隊を率いてやって来たのか。それを聞きたかったのだ。豊田副武はその理由を答えた。

「実は山本五十六海軍大臣の事付によるモノなのです」

「山本五十六？あの……？」

シナプスはその名に驚いた。山本五十六といえば、なんだかんだ言っても日本連合艦隊の最盛期を支えた将である大層な御仁。戦死し

なかったこの世界では海軍大臣になったというのか。

「ほう。山本大臣をご存知なのですか」

「我々の世界では連合艦隊の最盛期を支えた人物として有名なので……」

「それは嬉しい限りですな」

「それで、山本大臣が何故？」

「あなた方の情報網ならもうご存知だとは思いますが、陸軍の馬糞、ケダモノ共の愚策で505統合戦闘航空団を壊滅させてしまった事を憂慮しておられるのです」

豊田副武は陸軍を嫌悪する高官で有名で、隠語辞典が作れるほどにバリエーションがあると知られている。シナプスとの会話からもその一端が垣間見える。彼曰く、山本五十六は牟田口廉也中将の愚行を恥じ、同隊に所属経験がある黒江綾香（ほぼ唯一の505の生き残り）のもとを訪れ、謝罪したとのエピソードも伝えられた。

「それでその後、牟田口中将はどうなったのです？」

「敵前逃亡した事が現地の陸戦ウィッチから告発され、連合軍内の地位が下がることを恐れた政治屋達の迷惑もあって、帰国後に軍法会議にかけられて銃殺刑に処されましたよ」

「そうですか。インパール作戦の報いという奴ですな」

「何です、そのインパール作戦というのは」

「実は……」

史実での日本陸軍の戦後の評判を最悪に陥れた作戦をシナプスは豊田に告げた。思わず涙するほどに悲惨きわまり無い内容であったその作戦を。そして日本がしばらく軍隊アレギーになった原因の一つであるとも伝えられた。道理には適うが、無謀な作戦によって多くの将兵が無駄死をしたのだ。その将兵たちの凄まじいまでの怨念

が彼を別世界で最悪の形で死に追いやったとも言える。

「……やはり陸軍の高官のバカどもは一部除いて無能の集まりですな。秋山好古閣下も草葉の陰で泣いていることでしょう。我々海軍が動いたのは陸軍の汚名返上の為ではありません。自分たちとは関係ない世界を救おうとする、あなた方の行動に共感したからです。」
「それでは宜しくお願い致します」

両者は手を握り合った。それはたとえマロニー大將がなにか仕掛けようとも扶桑皇国が全力を持って阻止すると豊田が確約した証でもあった。

戦闘空母「赤城」のとある一室では、宮藤芳佳の配属や菅野直枝の502からの出向が正式に各隊員達へ伝えられ、2人が挨拶を済ませていた。

「宮藤芳佳です。宜しくお願いします」

「502から出向した菅野直枝だ。これからよろしく頼む」

挨拶が済むと連邦軍側から別世界の歴史の説明映像が流された。まずは彼等の世界ではこの時代がどんな事になっているのか、である。

まずはナチスドイツの総統「アドルフ・ヒトラー」の演説。彼は歴史上の近代で明確な独裁者として、現れた男。バルクホルンやハルトマンも良く知る、第二帝政が崩壊した後の共和制を打倒し、台頭

した第3帝国。その一端がそこには現れていた。

「何だと……これが別世界のカールスラントだということのか!？」

バルクホルンは衝撃映像に思わず声を張り上げて憤慨し、ハルトマンも絶句する。自国民すら迫害したナチスの愚行。そしてその序盤の快進撃と無残な敗北。そして、自分たち、のその後の運命。2人は明暗を分けた、並行時空の自分たちの人生の終幕に絶句した。(ゲルハルト・バルクホルンは自動車事故で長寿を全うできなかったが、エーリヒ・ハルトマンは1993年まで存命していた)。バツの悪そうにハルトマンはバルクホルンと目を見合わせる。そしてさらに悲惨窮まりない大日本帝国の運命。

『一億総特攻!!』などという危ないスローガンがまかり通り、多くの優秀な将兵を無駄死させた愚策。そして神風特別攻撃隊。その第一陣の隊長「関行男」大尉の言葉。

『僕には体当たりしなくても敵空母に50番を命中させる自信がある。日本もおしまいだよ、僕のような優秀なパイロットを殺すなんてね。僕は天皇陛下のためとか日本帝国のためとかで行くんじゃないよ。KAを護るために行くんだ。最愛の者のために死ぬ。どうだ、すばらしいだろう!』

映像を見ていた直枝はこの言葉に涙した。そう。関という名から、すぐに兵学校時代の同期のウィッチの並行時空の姿だと分かったからである。

(関……、お前……)

それは並行時空の自らを含めた多くの搭乗員が無念の死を遂げた太

平洋戦争の悲壮な結末への涙だったかも知れない。坂本美緒も扶桑の戦友達が次々に死に、自分、だけが20世紀末まで生きる事に口惜しさを改めて頭にする。そしてその後も続く戦乱。

「あ……っ」

「ペ、ペリーヌさん！」

フランスにあたる、ガリア共和国、出身のウィッチ「ペリーヌ・クロステルマン（本名ピエレッティアンリエット・クロステルマン）」はあまりのショッキングな映像にその場に倒れこんでしました。一年戦争の惨禍でパリが跡形もなく消滅、湖化した映像は彼女には耐え切れる映像ではなかった。特に近代ガリアの象徴「エッフェル塔」が失われた事はフランス（ガリア）人である彼女には到底受け入れられ無い事だったからだ。

続いてミーナが一足早く見た現在戦史の名演説の数々。今回はグリップス戦役とその後も扱っている。

『閉会するな！この席を借りたい！』

議会の方と、このテレビを見ている連邦国々民の方には、突然の無礼を許して頂きたい。私はエウーゴのクワトロ・バジーナ大尉であります。

話の前に、もう一つ知っておいてもらいたいことがあります。私はかつてシャア・アズナブルという名で呼ばれたこともある男だ。私はこの場を借りて、ジオンの遺志を継ぐものとして語りたい。もちろん、ジオン公国のシャアとしてではなく、ジオン・ダイクンの子としてである。ジオン・ダイクンの遺志は、ザビ家のような欲望に根差したものではない。ジオン・ダイクンがジオン公国を作ったの

では無い。現在ティターンズが地球連邦軍を我が物にしている事實は、ザビ家のやり方より悪質であると気付く。人が宇宙そらに出たのは、地球が人間の重みで沈むのを避ける為だ。そして、宇宙そらに出た人類は、その生活圏を拡大したことによって、人類そのものの力を身に付けたと誤解をして、ザビ家のような勢力をのさばらせてしまった歴史を持つ。それは不幸だ。もうその歴史を繰り返してはならない！！

宇宙そらに出ることによって、人間はその能力を広げることが出来る、何故信じられないのか！？我々は地球を人の手で汚すなど言っている。ティターンズは地球に魂を引かれた人々の集まりで、地球を食いつぶそうとしているのだ。人は長い間、この地球と言う揺り籠の中で戯れてきた。しかし！時はすでに人類を地球から、巢立たせる時が来たのだ。その後に至って何故人類同士が戦い、地球を汚染しなければならないのだ。地球を自然の揺り籠の中に戻し、人間は宇宙そらで自立しなければ、地球は水の惑星では無くなるのだ。このダカールさえ砂漠に飲み込まれようとしている。それほど地球は疲れきっている！！

今、誰もがこの美しい地球を残したいと考えている。ならば自分の欲求を果たす為だけに、地球に寄生虫のようにへばりついていて、良い訳がない！！現にティターンズはこのような時に戦闘を仕掛けてくる。見るが良い、この暴虐な行為を。彼らはかつての地球連邦軍から膨れ上がり、逆らうものは全てを悪と称しているが、それこそ悪であり、人類を衰退させていると言い切れる！テレビを御覧の方々はお分かりになる筈だ。これがティターンズのやり方なのです。我々が議會を武力で制圧したのも悪いのです。しかしティターンズはこの議會に自分達の味方となる議員がいるにも関わらず破壊しようとしている！』

クワトロ・バジーナ。連邦軍大尉というのが表向きの経歴だが、その実はかのシャア・アズナブルの仮の姿であった。彼はカミーユ・ビダンと出会い、カミーユにニュータイプの理想像を見出そうとし

た。だが、ティターンズ第2代総帥「パプテマス・シロッコ」の実際の怨念でカミーユが精神を破壊されてしまった瞬間、その波動を感じ取り、「結局はこんな悲しみが広がり……」と自らの手で地球を粛清しようとする。それは有名な話である。余談だが、ジュドー・アーシタはそのシャアへの悔しさを理解していたようで、第2次ネオ・ジオン戦争の際にシャア・アズナブルと対峙したときにそれに言及している。

そしてそのシャア・アズナブルがネオ・ジオン総帥として舞い戻った際の演説。

『このコロニー、スイートウォーターは、密閉型とオープン型を繋ぎ合わせて建造された極めて不安定なものである。それも、過去の宇宙戦争で生まれた難民のために、急遽、建造されたものだからだ。しかも、地球連邦政府が難民に対して行った施策はここまでで、入れ物さえ作ればよしとして、彼らは地球に引きこもり、我々に地球を開放することはしなかったのである。』

私の父ジオン・ダイクンが、宇宙移民者すなわちスペースノイドの自治権を地球に要求したとき、父ジオンは、ザビ家に暗殺された。そして、そのザビ家一党は、ジオン公国を語り、地球に独立戦争を仕掛けたのである。

その結果は諸君らが知っているとおり、ザビ家の敗北に終わった。それはいい。しかし、その結果、地球連邦政府は増長し、連邦軍の内部は腐敗し、ティターンズのような反連邦政府運動を生み、ザビ家の残党を語るハマーンの跳梁ともなった……これが難民を生んだ歴史である。ここにいたって私は、今後、絶対に戦争を繰り返さないようにすべきだと確信したのである……それが、アクシズを地球に落とす作戦の真の目的である。これによって、地球圏の戦争の源である地球に居続ける人々を粛正する……諸君……！ 自らの道を開くため、難民のための政治を手に入れるために、あと一息、

諸君らの力を私に貸していただきたい。そして私は、父ジオンの許に召されるであろう!!」

「……ふざけるな! 隕石を地球に落としたら、多くの人が死ぬんだぞ! ? それで宇宙移民者が救われるのかよ! ? 何が難民の為の政治だ! !」

501の一員で、世界有数のエースである「エイラ・イルマタル・ユーティライネン」はシャア・アズナブルの演説に怒りを顕にした。無理もないが、それ程に隕石落としては残虐行為だからだ。難民の為という美辞麗句に借りて単に虐殺をしたいだけではないのか。

「いや、あの人はあの人なりに地球を変えようとしたんだよ」

何時の間にかジュドー・アーシタが立っていた。補給のために一端帰還したのだろう。ノーマルスーツ姿のままだ。

「お前は誰だ! ?」

「俺はジュドー・アーシタ、ハマーン・カーンを倒したガンダムのパイロットといえば分かるかい」

ジュドーは自らが第一次ネオ・ジオン戦争に決着を付けたパイロットであると説明し、あの戦いでアムロと共に理解した、シャア・アズナブルの本心を語った。

「あの人は腐っていくだけの連邦政府の実態を嫌った。そして自分の運命を悟って、強引な手段で地球連邦政府を変えようとしたのさ。」

そして連邦軍にいた、アムロさん、宿敵との最後の戦いに臨みたかったんだよ」

そしてタイミングを合わせるように2190年代後半の第二次ネオジオン戦争の一幕が映しだされる。

『なんでこんなものを地球に落とす！！これでは地球が寒くなって人が住めなくなる！核の冬が来るぞッ……』

『地球に残った者は自分たちの事しか考えていない！だから抹殺すると宣言したッ！』

当時のアムロ・レイの乗機「リ・ガズイ」とシャア・アズナブルのサザビーとの剣戟だ。501の面々は皆、この凄まじい光景に目を奪われる。

『人が人に罰を与えるなどと……！』

『私、シャア・アズナブルが粛清しようと言うのだよ、アムロ！！』

『エゴだよそれは！』

『地球が持たん時が来ているのだ！』

シャアの言葉には度重なる戦乱で汚れきった地球への危惧が籠っていた。それは人類を変えていく為には自らがその業を背負わんとばかりに。

アムロも人類を粛正する事を言い放った、生涯の宿敵であり、一度は共に戦った仲間であったシャア対する否定の言葉を叫ぶ。

そしてまるでSF映画のような光景が映し出される。たった一機のガンダムで隕石を押し返そうとするのだ。

『馬鹿な事はやめろ!!』

『貴様ほど急ぎもしなければ、人類に絶望もしちゃいない!!』

『正気か!?!』

『Vガンダムは伊達じゃない!!』

この時起こった、奇跡、はアムロの人類の可能性を愚直までに信じる心が引き起こしたと言われている。501統合戦闘航空団の誰も（芳佳や坂本美緒除き）がこの奇跡に驚愕した。

そして元々歌手志望であったミーナにとって心の救いだったのは、ゼントラーディⅡボドル・ザーとの最終決戦における、リン・ミンメイの「愛・おぼえていますか」であった。歌は宇宙をも救える事を証明した事実。

『リン・ミンメイの歌を聞く全ての者に告げる。我らの敵はただ一つ。ゴルグ・ボドルザーを倒し、再び文化を取り戻すのだ!!』

ミンメイの歌は宇宙人とも分かり合えた地球人の、文化、の力を象徴していた。そしてそれに続き、プロトデビルンに対する熱気バサラのこの一言。

『山よ、銀河よ、俺の歌を聴けえっ!!』

美緒は最近、かつての戦友の穴吹智子がハマったとか言うFIRE BOMBERとはこういうモノかと納得させられる。愛・おぼえていますか、と、TRY AGAIN、という2つのミュージッ

クは未来への希望を思い出させてくれたとミーナやシャーリーは後にこう語ったとか。

間章その10「戦艦武蔵での会談、そして愛・おぼえていますか？」（後書き）

と、言うわけでウィッチ達、戦乱の数々を知るの巻です。以前から書こうと思っていたのですが、やっと形に出来ました。

第41話「異聞 仮面ライダーガイア そしてハワイは鮮血に染まる」(前書き)

今回は本来の仮面ライダー一号が「仮面ライダーEVEーMASK
ED RIDER GAIAー」に至ったパラレルワールドの存在、
並行時空の自分が辿った道を知ります。

第41話「異聞 仮面ライダーガイア そしてハワイは鮮血に染まる」

「仮面ライダー達を生み出した組織「バダン」。多くのナチスドイツ残党軍の中でも最大規模を誇る組織である。ゴルゴムとの関連性は不明であるが、彼等をも裏で操っていたのでは無いかという憶測さえ飛び交うほどに、歴代仮面ライダー達と過去の創世王との共通点が多いということが連邦政府と時空管理局の調査で判明した。鉄人兵団との戦争の最中に判明した事項は仮面ライダー達と、彼等に関わった一部の部隊以外には知られぬ極秘事項とされた。そしてバダンの総統は並行世界でも暗躍。自らの器足り得るサイボーグを並行時空のショッカーに制作させていた事が仮面ライダー一号＝本郷猛に知らされた。

「奴らめ。まさか並行時空でも悪の限りを尽くしていたとはな……」

彼の手には異なる道を歩んだであろう並行時空の仮面ライダーとなった時の自分の写真が握られていた。その姿はこの時空における改造当初の姿に近いもので、報告書によればこの写真の日付はその時空中で、ショッカーライダーによって肉体が死を迎える前とされ、彼としては複雑な心境であった。その後はZXが生まれるまでは同じような経緯を辿ったようであるが、それ以降は明らかに異なると記されていた。つまりその時空はゴルゴムが存在せず、南光太郎が仮面ライダーとならなかったか、存在そのものが無い歴史である。

「並行時空の俺達も同じように戦い、悪を倒していたのか、本郷」

「しかしその時空にはRX……光太郎は存在していない」

「正に並行時空って奴だな……。RXが居ないとなると、仮面ライダー十一号は誰になるんだ？」

「それは連邦政府と時空管理局が目下調査中だ。ただ気になること

がある」

一文字隼人に本郷は別の報告書を見せる。その内容はこうであった。

『1970年代の時点で一号と二号がショッカーの要塞を壊滅させた時、その要塞には首領の器となる新型サイボーグ、ガイボーグ、達の培養カプセルがあり、2000年代になって無事であった個体が復活した模様で、その内の一体は自我を取り戻したらしい』と。

「それじゃその中の誰かが俺達のように？」

「分らん。この事が引かかるから、俺も現地に行って調査に加わる。風見達の事を頼む」

「OKだ」

この時、本郷猛はうすうすと気づいていたかも知れない。RXとは異なる、「仮面ライダー十一号」となる存在を。そしてバダン総統の大きいなる野望と脅威に。

「ハワイの戦いは正に鮮烈を極めていた。艦隊の必死の迎撃で兵団の第一陣に打撃を与えられたもの、弾幕をすり抜けて、艦隊に攻撃が加えられ、被害が出始める。前列に配置された駆逐艦や巡洋艦がその中心であった。艦隊旗艦の土佐の艦橋へは続々と被害報告が入ってくる。さすがに無傷で切り抜けられるとは思っていないが、

予想以上の攻撃であった。

「巡洋艦、シカゴ、炎上!!」

「巡洋艦、ファイジ、砲塔全損、戦闘不能!!」

「駆逐艦、名取、より入電、我、後部弾薬庫誘爆による火災発生!!」

「空母、ホーネット、飛行甲板損傷の模様。艦載機発艦不能!!」

「戦艦、初瀬、補助エンジン大破!! 速力低下します!!」

はつきりと伝わっただけでも前衛の水雷戦隊のおよそ40%が何らかの損害を負った。空母も一隻、戦艦さえ損傷艦が出てきた。これらの悲報にも山南は冷静に指示を飛ばす。今回の作戦に置いて、藤堂参謀本部総長より直々に指揮を任されたのは伊達ではない。先に飛び立った攻撃隊の航空部隊の様子を確認する。

「コスモタイガー、バルキリー及びウィッチ隊はどうか？」

「現在、ハワイ市街地に接近。間もなく接触する頃です」

「良し……。」

この作戦には物量だけでなく、質でも兵团を圧倒すべく連邦軍単独でなく、連合軍の協力も得て、ウィッチも多数参加していた。穴拭智子もその一人。（弟子のなのははスバルと智子の判断で待機させられた）そして今回の智子の僚機は、507統合戦闘航空団（旧・スオムスいらん子中隊）で元・同僚であり、部下であった迫水ハルカ。1944年時点では海軍中尉に昇進し、エースの一人に名を連ねるまでに成長した彼女は智子が未来で戦いに参加している事を知ると2199年への出向を志願。今回の作戦に参加した。（智子と共に生活しているのは対してやきもちを焼いたの言うまでもない。攻撃隊を指揮するのは連邦軍のロイ・フォッカー少佐。彼の乗機は新たに支給されたVF-19A「エクスカリバー」（カラー

リングは過去のロイ・フォッカー・スペシャルに準じる）である。

『スカルリーダーより各部隊へ。間もなくハワイの市街地上空だ。急降下し、敵基地へ雪崩れ込む』

『了解!!』

『嬢ちゃん達、無茶すんなよ？その機体は実用に近いと行ってもまだプロトタイプなんだから』

『分かってます。機体を壊さない範囲で暴れてやります』

智子とハルカが今回装備しているストライカーユニットはフロンティア船団へ行った黒江達がS・M・Sの助言を元に創りだしたジェットストライカーの『キ201 火龍 3型』と『橘花改』。船団から送られたデータを基に各メーカーが必死に創りだした実用に近いプロトタイプだ。無論、エースである彼女らはテストパイロットの役割を負っている。今回の機体は熱核バーストタービンを参考に、航続距離の延伸が計られた機体で、黒江綾香が地球を旅立つ段階のテスト機より性能は格段に上だ。

『市街が見えた!!……全機、続け!!』

フォッカーの指示と共に飛行隊が一斉に市街地に急降下する。智子とハルカも魔導ジェットエンジンを唸らせて追従する。

『行くわよハルカ!!』

『了解です!! 智子中尉!!』

2人は久しぶりに編隊を組んで戦いに臨んだ。それは1939年以来、共に戦ってきた、仲間、として、お互いにパートナーとして臨む久しぶりの戦いだった。対空砲火をくぐり抜けながら航空部隊は一気にワイキキの市街地を乱舞する。目標はただ一つ、兵団の要

塞。

「そしてワイキキビーチに揚陸した陸戦部隊の中にはスバル・ナカ
ジマと御坂美琴の姿があった……」。

第41話「異聞 仮面ライダーガイア そしてハワイは鮮血に染まる」(後書き)

仮面ライダーEVEーMASKED RIDER GAI AーとTV版の世界は互いに並行時空として存在すると言う事を示しました。つまり仮面ライダーに関してはRXに至る歴史と、ガイボーグが作られた歴史の2通りがあると解釈しました。無論、互いの仮面ライダーたちは、別人、です。本文を多少修正しました。

間章その11「アフリカ反抗作戦、開始秒読み開始」(前書き)

今回からはストライクウィッチーズ世界でも大規模戦編に入ります。

間章その11「アフリカ反抗作戦、開始秒読み開始」

2199年のハワイ戦が鮮烈を極めるなか、1944年のアフリカ戦線も一つの転機を迎えようとしていた。テイターンズ残党軍の掃討作戦のために連邦軍の一大戦力が集結していた。主力はRGM-89「ジェガン」D型やR型のさらなるマイナーチェンジ機（現地部隊が独自に後継機のジャベリンのジェネレーターを積んでR型からさらなる改装を施したもの。現時点ではジェガンの最高到達点で、非公式にV型と呼ばれる）及びスタークジェガン、ジャベリン。航空部隊は可変機のリゼルにZプラスと各種バルキリー、コスモタイガー。（最新鋭ガンダムタイプも場合によれば投入される）そして空挺部隊には、小型モビルスーツが登場した時勢では随分とレアな機体となった陸戦型ガンダムの姿も見える。これらモビルスーツ隊の先陣はサブフライトシステムでとある地点で旧式MSに襲われた陸戦ウィッチの救援に赴いた。

「アフリカ」とある地点

陸戦ウィッチ達は今、最大の敵と戦闘に入っていた。それはアフリカ戦線に新たに配備されたテイターンズのモビルスーツ部隊だった。形式は一年戦争（デラーズ紛争時の旧式だが、マラサイやバーザムなどのパーツで近代化が計られている。陣容はアフリカ地域に適応した局地戦用の、RGM-79F、デザートジム、にRGM-79Q、ジム・クウェル、RGC-83、ジム・キャノン？。それらモビルスーツはその重装甲でウィッチ達の火器の一切を避けつけない。

「……ネウロイに通じたモノがどうしてこいつらには通用しない！？」

ブリタニア王国陸軍少佐の、マイルズ、は部下達と共に2ポンド砲を浴びせたもの、弾を逆にはじき返された事に驚愕した。先頭の一機に至近距離からの斉射を浴びせたはずが、装甲を破壊するどころかかすかにカスリ傷が盾に出来ただけに終わったのだから。ネウロイにも対応可能な初速だったはずの弾丸が直撃したのに、敵は全く意にも介さない。

「当然だが、一年戦争後のジム系の装甲と盾が合わさった防御力はザクの120ミリマシンガンを意にも介さないほどに向上した。このような実弾攻撃にはチタン合金セラミック複合材の威力が発揮される。」

『蠅螂の斧というのは正にこの事か。……哀れな奴らだ』

デザートジムのパイロットは哀れみを自分達に対して必死に火砲を撃ち上げて来るウィッチ達へ向けながら、せめての慈悲とばかりに手持ちの火器を構えた。その火器は……。

、バチバチッ、と閃光が砲身に迸る。電気で砲弾を電磁加速させる、レールガン電磁加速砲、である。2199年時点では多少古い技術になるが、威力は実弾系最強を誇る。未来世界では計らずしも御坂美琴によってその実用性が再実証された武器がウィッチに対して牙を抜いたのだ。ビームの如き閃光が、人間、でしかない陸戦ウィッチに向けて超音速で発射され、マイルズの部下達のうち数人は文字通りそれを認識する前に、吹き飛ばされた。肉片一つも残さずに。

「……え？」

シールドさえ張ることも許されずに一瞬で吹き飛んだ部下たち。マイルズは取り乱しそうになるも、軍人としての誇りと指揮官としての自覚がそれを辛うじて食い止めた。前に空想科学読本で見た電磁加速を利用した大砲。その実物を見て、身を持って体験する事となった彼女らは恐怖を感じた。歴戦の彼女らとはいえ、SFに出てくるものが現実になった超未来の兵器（彼女らにも連邦軍からの情報は伝わっていた。しかしその脅威は身を持って体験しなければ理解出来ない）の力は並のネウロイより上という事を認識した。どうせ速度差で逃げられないのなら、せめて一矢報いらんとばかりに残りの火砲を構えた。

「その時。ジェットエンジンの轟音と共に救援が現れた。ただの軍隊ではない。例の義勇軍だった。」

「遅いわよ……まったく」

マイルズはせめて後数分早く……と愚痴りたかった。部下を数人死地に追いやってしまったのは何よりも悔しかった。だが、先方にも都合はあるだろう。今は天国への階段を登りつつある部下達の冥福を祈りつつ、彼等に任せるしかなかった。

『各機、各個に散開し、敵モビルスーツを殲滅せよ』

、RGZ-95、リゼルとスタークジェガン、それぞれの小隊だった。彼等もまたティターンズ同様に一年戦争からの多くの戦乱をくぐり抜けた古参兵が駆っている機体だ。彼等は多くの機体を乗り継いできた。歴代ジムシリーズにネモにリック・ディアス……そして

ジェガン。彼等の部隊にはまだ最新最強のジムの末裔、ジャベリン、は配備されていない。（理由は初期生産機、第2次生産型ではザンスカール帝国の高性能機との戦闘で苦戦が多かったために、さらなる高性能化のアップデートが完了した第3次ロットに生産ラインが切り替えられた影響で満足に前線に行き渡っていないため。苦肉の策で既存のジェガンの最終生産型をさらに大改装する策が取られた）

『了解』

ここからはモビルスーツの独壇場だった。ビームやらミサイルが飛び交い、人型ならばの格闘戦が入り混じる。

『君たち早く腕に乗って！巻き込まれるぞ！！』

「は、はい！！」

リゼルの一機がマイルズ達を腕に乗せて安全圏に退避する。その戦いの様子にマイルズは思わず息を呑んだ……。

『エウーゴの走狗共め！！我らを何回邪魔すれば気が済む！！』

ジム・クウエルのパイロットは思わずジェガンの小隊に毒づく。テイターンズを正規軍という立場から引きずり下ろし、反政府組織、というレッテルを貼ったエウーゴと、自分達を裏切り、あっさりエウーゴに下野した腐敗しきった連邦政府の官僚達への侮蔑。それが彼を突き動かしていた。そして目の前の敵は憎むべきエウーゴの主力、ネモ、の後継機らしきモノ。それがテイターンズとしての彼の闘志を燃やしていた。

『貴様らもいい加減にしろ！！連邦軍内のイザゴザを別世界にまで持ち込んで何になる！？』

スタークジェガンのパイロットもそれに返しながらビームライフルを撃つ。彼は小隊の中で唯一、白色彗星帝国とのフェーベ航空決戦や土星決戦にもヌーベルジム？で参戦した猛者だ。無論、グリプス戦役ではエウーゴの一員として参戦した。あの頃の連邦軍には、ティターンズの掲げた大義を信じた兵士は大勢いたが、その実態に気づいてティターンズを抜けた者も多い。かのティターンズ草創期のエースの一人「ベルナルド・モンシア」も地球至上主義者であったが、その蛮行には加担しないで、ティターンズ解体後は正規軍へ戻った。その際の軍事裁判での台詞は「あんな事をやったってサウス・バニング大尉は喜ばねえ。そう思った。だから俺はG3ガス散布にも、アポロ作戦にも参加していませんよ」であったと伝えられている。

『だからこそだ！この世界も何れはああなる……だから我らが支配し、人類を管理するのだ！』

『それはギレン・ザビが言っていた事と同じだ！！何故それが理解出来ない！！』

『戯言をつ！！』

ジム・クウエルのハイパーバズーカの弾丸がスタークジェガンに直撃する。彼は勝利を確信したが……。

爆煙が晴れると、そこには無傷のジェガンR型（足の追加装甲はついたまま）が立っていた。被弾の瞬間に身に纏っていた増加装甲の一部を任意にパージしたのだ。

「アーマーをパージしただとお！！？フルアーマーオペレーションの完成形だとも！？」

驚く間もなく、ジェガンはそのムーバブルフレームの柔軟性を活かした動きを見せた。

仮面ライダーBLACK RX張りの逆宙返りを披露し、着地と同時にビームサーベルをかつこ良く引き抜く。これまたリボルケインを思わせる動きで。

僚機のジェガンJ型とD型のパイロットは思わず溜息をついてこう言い合った。

「まゝた隊長のアレが始まったよ」

「好きにさせておけよ。隊長の趣味なんだから」

「仮面ライダーのファンだって公言してるからなあ……風見志郎さんや南光太郎さんにサイン貰ったってすごく喜んでたし」

そしてジェガンR型はリボルケインのようにジム・クウエルの脇腹にビーム・サーベルを突き刺す。

『何iiiiiiiiiiiiッ!?!?』

ジム・クウエルのパイロットはこのような形で敗北したのを受け入れられない。一年戦争やグリプス戦役も生き残った自分が無様に機体を失うのかと。かろうじて脱出に成功したが、この上ない屈辱だ。

そしてジェガンR型はビーム・サーベルを引き抜き、決めポーズに「R」の字を描くように振るう。

(……決まったあゝ!?!?)

「RXのリボルクラッシュをモビルスーツでそのまま再現したのだ。

ある意味凄い技量のパイロットである。ゴッドガンダムのようなモビルファイターのようにモビルトレースシステムを積んでいない通常のモビルスーツで行ったからこそ、彼のその技量が際立つのだ。

この行為にマイルズは思わず拍手してしまった。

「アレがモビルスーツ……あんな動きを再現できるなんて……凄い」
「まるでコミックのヒーローネ……しっかり決めポーズとってるシネ」

部下達も口々にジェガンのこの行為に圧倒された感想を言い合っている。戦いはまだ続いているが、マイルズは腕で十字を作る動きをし、亡くなった部下の冥福を祈った。

―そしてコスモタイガー三座型に乗り込んで加東圭子は扶桑へ向かっていった。若返りを果たすためだ。

「あと30分で扶桑へ到着します、少佐」

「ありがとう。（うわああー！！不安になってきたああー！！）」

圭子は態度は平静を保っているように見えても、心臓はバクバク言い、今にも口から飛び出さんばかりに鼓動が早まっている。果たして自分が望む年齢に戻るのか。黒江は不本意な年齢（13歳）になっちゃった事を手紙で愚痴っていたが、自分もそうなのかなのか。手が自然と震えているのを自覚しながら、圭子はハラハラ

ドキドキしながら落ち着こうと必死だった。

―この間にも連邦軍の医療チームの待つ横須賀にコスモタイガーは飛んでいく……。

間章その11「アフリカ反抗作戦、開始秒読み開始」(後書き)

ジェガンに岡元次郎さんアクションを再現させました。モビルスーツも世代が進めば柔軟性も上がるだろうという事で……

第42話「狙え！凍とした視線は狂い無く闇を切り裂く」

「ハワイ攻略戦は今や各地で激戦が行われていた。艦隊司令部には各戦線の様子が刻一刻と入っていく。ドラえもんは司令部に堂々と陣取り、山南にアドバイスを送っていた。

「提督、航空部隊はどうなのです」

「間もなく敵基地へ雪崩れ込む筈だ」

「攻撃目標は兵舎と工場です。これを徹底的に破壊し、敵の前線への補給を断つのです」

「あいわかった」

ドラえもんは戦国時代の軍師のように冷静な判断を下す。多くの冒険を経験したことでこの手の状況は慣れっこなのだ。上陸部隊には陸戦の主力をワイキキビーチに配してある。その主力とは……。

「果たして、ぼくの戦略が兵団を上回るかどうか、だな……」

「ドラえもん君、ここはどうしたらいい？」

「はいはいはい」

ドラえもんは艦隊司令部の士官達に引っ張りだこだった。兵団に対する対抗策をこの地球圏で最も良く熟知している、ネコ型ロボット。ドラえもんは正にでんてこ舞いと言った様子で艦内を行ったり来たりしていた。

「うおおもう我慢できねえ！！俺は歌うぞおおお！！」

「やめろそれだけは！！」

「20世紀のハジ……」

「こんな大事な時に……」

この戦いでまだ活躍をみせていないジャイアンこと剛田武。彼はリン・ミンメイや熱気バサラ、シャロン・アップルなどが見せた、歌の力、にいたく感動し、自分も歌で世界を救おうと息巻いていた。だが、問題があった。ジャイアンの歌声はテレビを通して、大勢の人が倒れ、救急車がてんてこ舞いした、ほどの破壊力を誇るのだ。この事件は歴史上類を見ない『歌を聞いただけで人々をKOさせた放送』としてTV局界限では、知る人ぞ知る怪事件、扱いされ、一時は縁起が悪いとしてマスターテープの処分が検討されたとの記録が残っている。しかし結局そのテープは処分されず、21世紀頃にどこかのバラエティー番組で取り上げられたのを皮切りにたびたびバラエティーに取り上げられ、その原因を突き止めようとする特集が組まれた。その要因の一つが判明するのは歌に関する研究が盛んになった22世紀を待つことになるが、超科学をもってしてもジャイアンの歌の全容は解明しきれないのである。

「なんだよお前ら俺の歌に……!!」

そこまで言いかけたとき、士官の一人が止めに来た。大事な時に揉めあっている場合ではないだろうと。

「やめないか!! 喧嘩している場合じゃないだろう」

「すみません」

「君達には次の第2陣に参加するように陸戦部隊司令からの要請があった。直ちに用意してくれ」

「武器はなんなんですか?」

「M16A2アサルトライフルも一応用意してあるが、君たちが持ち込んだ武器が主体と思っていてくれ。やっと生産ラインが整った」
「分かりました。行くよ2人とも」

「おっ!!」

「キャタピラ音と共に1944年最新鋭の陸戦ストライカーユニット、M4シャーマン、に扶桑の、4式、の先行試作型を纏ったウィッチがハワイを疾駆する。この作戦にウィッチを参加させた連合軍の意図は、連邦軍に恩を売られてばかりなので、ここらでこちらも……、と言うものだ。そのため陸戦部隊の中でも腕っこきが集められ、このハワイ攻略戦に派遣されたのだ。その後には連邦軍の装甲兵員輸送車や61式戦車、歩兵戦闘車が続く。

「75ミリだ！！くらえ！！！」

75ミリ／＼155ミリ砲を振りかざし、ぶっ放して敵を倒していく陸戦部隊。現在はホノルル市の奪還に向けて全力で進撃中だ。

「ここらで一旦停止しよう。補給線が伸びきると不味い」

機甲師団長が全隊に一旦止まるように指示する。補給線が伸びきり、そこを敵に突かれる事を懸念したのだ。この判断は正しかった。後々に補給妨害を意図した攻撃が度々起こり、後続部隊の悩みの種として、尾を引くことになる。このような状況は連邦軍をして、ハワイは手強い、という認識を官僚にいたるまで持つに至る。ハワイ攻略戦の状況を知ったレビル將軍も連合軍から派遣された栗林忠道中将、今村均大将、アイゼンハワー大将（史実では50年代に米大

統領になる)に「ハワイは難攻不落だ。何か手はないものか」と漏らし、4者で策を練りに練る事になる。それほど鉄人兵団は地球連邦軍と連合軍の合同軍にとって手を焼く存在となっていた。

「ワイキキビーチに上陸した部隊は獅子奮迅の勢いだった。攻撃部隊とは別に待機していたコスモタイガー隊(この作戦には連邦軍の太平洋方面のパイロットが動員されてはいたが、正規のパイロットだけではとても人員がまかない切れ無かった。そこで訓練学校生の内、艦載機任務に耐えうると判断された人員が臨時で参加していた。その内の一人に後々にエースとして名を轟かす逸材がいた。『加藤四郎』。かつて宇宙戦艦ヤマトの艦載機隊のチーフとして活躍し、エースパイロットとして知られた加藤三郎の弟であり、兄同様のエースパイロットの才覚がありと見込まれた逸材。小惑星イカルス基地内の訓練学校飛行科きつての俊英である。

教官に率いられ、彼等は後方援護の一環で地上部隊の援護を行う。

それが彼等に課せられた今回の任務であった。

「3番機、攻撃!!」

「了解!!」

加藤四郎の機体は見事な動きで地上部隊を蹴散らす。

「いいぞ、加藤。兄貴も草葉の陰で喜んでるぞ」

「ありがとうございます」

加藤達は教官の指示に従って上陸部隊の援護に徹し、成果を上げていく。一部の訓練生達はぼやいているが、これも立派な仕事だ。

そして援護対象部隊の中には。

「うおおおっ!!」

スバル・ナカジマの姿があった。彼女は今回の作戦に当たって、突破力を活かすべく最前線で戦っていた。弾幕を何とか凌ぎつつ、懷に飛びこむ。

「これでどうだぁ!!一撃必倒お!!ディバイイン……バスター
アアアッ!!」

この魔法はなのはの得意とする砲撃魔法のそれと同じ名を持つが、正確に言えば別種と言うべき代物で、両手で練り上げた魔力で前方に魔力スフィアを形成。左拳でスフィアを保持し、右拳で加速をつけて撃ち出すというプロセスをとる。無論、名の由来はなのはに肖って、その名を頂いた。スバルの特性の近接格闘戦型で使う事に特化されたある意味珍しい砲撃魔法。その名に恥じず、威力も折り紙つきだ。これで倒せない敵などまづいない。(仮面ライダー達も中々の攻撃と賞賛している)これを見た子供時代のなのはは自分も習得すべく特訓中らしい(いい意味で刺激を受けた。智子も接近戦に対する選択肢として、なのはにこの魔法を身につけることを勧めている)

だが、敵は一体だけではない。大勢いるのだ。四方八方から砲撃を

受け、さすがのスバルも判断に窮してしまふ。その一瞬の隙を突かれてしまい、ジェット噴射の加速によるタックルまともに食らい、吹き飛ばされる。

景気よく建物の壁に叩きつけられ、そのダメージで意識が飛びそうになる。

「しまったっ……！くっ、動けないっ！」

体を動かそうとするが、見事に壁にめり込んでしまい、全く身動きがとれない。そしてタックルを仕掛けた主がリーダー砲を構える。一気に片付けるつもりか、最大出力だ。あの祝力では防ぎきれるか微妙だ。スバルはこの時、自らの不覚を恥じた。

だが、その時だった。兵士を電気が迸る一筋の閃光が直撃し、兵士を粉微塵に破壊したのだ。スバルはなにがなんだか理解出来ず、キョトンとしてしまふ。そして50mほど先に電気が走る音と共に一人の少女が立っていた。ショートヘアの髪形に、どこかの学校の制服らしきブレザーを着込んだ、自分より幾分か年下に見える女の子だった。

「女の……子？」

「……なんとか追いついたようね」

「御坂美琴だった。スバルに止めを刺さんとした鉄人兵団兵に向けてとっさに、超電磁砲、を放ち、それを阻止したのだ。」

「そのアンタ、生きてる？」

「なんとか」

「そう。良かった。……悪いけど、この戦い……手え、出させてもらうわよ」

その瞬間、スイッチが入ったように美琴の身体に凄まじい電流が迸る。口より先に体が動くタイプで気が短い彼女ならばの即座の判断だ。

その電撃は以前スバルが見たフェイトのトライデントスマッシュの際の雷撃をも遙かに上回る超強力なものだった。美琴の能力を以てすれば雷を人為的に引き起こすことすら可能なのだ。

(……魔法!?)

スバルはとっさにそう考えた。しかし即座に、相棒、のマツハキヤリバーに 美琴からは魔力は一切感じないと否定される。どういう事なのか。この世界には魔力も無しに電気を操れる能力があるというのか。

それは当たっている。美琴の能力は、超能力、に分類されるべきモノだ。電撃使い（エレクトロマスター）、の中でも最高の逸材にして、学園都市に7人いる、レベル5、の第3位。その力を今、スバルは垣間見ているのだ。

「戦う前にあんたの名前を聞いておくわ。自己紹介する暇もなさそうだし」

「え？ う、うん。あたしはスバル・ナカジマ。」

「あたしは御坂美琴。よろしく」

取りあえずの自己紹介を澄ますと美琴は鉄人兵団のほうに向き直り、戦闘態勢に入る。

「さあ……、始めるわよ!!」

これが御坂美琴とスバル・ナカジマのファーストコンタクトだった。少々荒っぽいのが、非常時なのでやむを得なかった。スバルは美琴の持つ計り知れない力の一端に触れつつあった……。

第43話「二億年前のように静かだね」(前書き)

第38話の続編ですが、まだシャドームーンは戦いません。

また、「超時空要塞マクロスII ―LOVERS AGAIN―」からのゲスト機体が出ます。

第43話「二億年前のように静かだね」

「新暦70年代のミッドチルダを混乱に陥れた、聖王の揺りかご。その艦内に整備された区間が存在した。艦載機格納庫である。大多数は無人のガジェットドローン（一般空戦魔道士よりは強力な機動性を持つ空戦タイプ）？型だが、有人機が存在した。それは連邦軍のバルキリーを見た経験がある人間なら必ず驚愕の渦に叩き込むであろう代物であった。」

「ほう。よくこんなモノ入手できたな。バルキリーなど……」

「ええ。私が漂着した世界で受領し、馳せ参じる時に持ってきた愛機ですよ」

ナチスドイツの軍服を着込んだ20代の男はこう言った。そしてその機体は名機、VF-1バルキリー、をそのまま発展させたような外見を持つ可変戦闘機であった。そしてその横にはそれより一回りほど大きいカナード翼装備の機体が駐機されている。機体には、かつてナチスドイツで初のジェット機部隊として名を残した、コマンド・ノヴォトニー、でヴァルター・ノヴォトニー少佐が駆っていた機体の機番が刻まれていた。そして、バルキリーのパイロットらしきその男はノヴォトニー少佐と全く同じ容貌を持っていた。

『敵機、接近中でえゝす』

「スカリエッツィの奴、何考えて10何人も女の子作ったんだ？まったく……」

「まったくです。あの女フェチめ」

スカリエッツィの作った、ナンバーズ、の一人『クワットロ』から

報告が入る。ナチス軍の一員であった彼等はスカリエッティの、趣味、はといったいどうなってる？と、訝しぶ。だが、敵がこの揺りかごに接近する以上は迎撃する。大抵はガジェットで事足りるが、今回は、敵機、というのだから、通常兵器を、それも戦闘機を持ち出してきたのだろう。地上本部にあった兵器は所詮あの、大戦の時のM4シャーマンらしき兵器が大半を占めていたから、噂の機動六課が独自に調達していた兵器だろう。クワットロが伝えてきた特徴から言って、恐らくは22世紀の世界の可変戦闘機バルキリーだろう。

「部隊を率いて迎撃してくれるかね」

「お任せください」

揺りかごから発進する、エネミーバルキリー、略してEVA。（連邦軍内では敵に奪われた機体、敵がバルキリー同様の運用法で運用する機体などにこのコードネームを適応している）しかしそのコードネームは適当では無い。その機体こそ、「VF-1 バルキリー」のもうひとつの進化形とも言うべき機体。その名を「VF-2 SS バルキリー？」。その銀翼は祖を同じくするバルキリーに向けて牙を抜いた。

「VF-19とVF-22を駆る、大人なのはトフェイト（空戦魔道士である2人にとってこの事はいささか不本意である。しかしさほど抵抗感はない。宇宙では普通に使っていたし、パイロットとしての訓練も受けていた。それ故に取った最後の手段であった。飛行魔法がECMで妨害されている以上は致し方無い）はレーダーの反応と、視認した敵の機影に驚愕した。」

「……えっ！？そ、そんな……なんであんなモノが……！！」

それは立場は違えど、互いにあの戦場を生き残った2人をさえ驚愕の渦に叩き込む敵だった。ギャラクシー船団との戦闘経験を持つフエイト、正規軍に属したなのはさえも見たことが全くない、未知のバルキリー、であったからだ。しかも初弾先制とばかりに、マイクロミサイルを乱射してくる。

「ど、どうする！？」

「ひとまず散開しよう。まずはそれからだよ」

「う、うん！」

2人は敵性バルキリーの放つミサイルに対し、20世紀後半以降のミサイル回避の常套手段、チャフ、及び、フレア、を散布し、急加速しながら急旋回する。それなりに戦闘機乗りのセオリーは弁えているのである。だが、敵はバルキリーの性能だけで勝てるような機動は取っていない。それはミサイルを撃ったと速やかにドックファイトに入れるよう、編隊を解くが、瞬時に出来ることが証明している。地上の降下猟兵をきちんと援護しつつ自分達を攻撃してくる。つまりあの敵機はナチスドイツ残党の味方という事になる。なのは操縦桿を握る手に冷や汗が流れているのを自覚しつつ、敵の姿を確認しようと一旦反転、牽制にガンポッドを一斉射しながら、敵機と交錯する。その時。相手の機体に描かれているマーキングに目を疑った。それは戦史にその名を刻んだ、初のジェット戦闘機運用部隊『コマンド・ノヴォトニー』の部隊長にして、258機を撃墜したドイツ空軍のエースパイロット『ヴァルター・ノヴォトニー』少佐のそれだった。

「……な……ッ。こ、コマンド・ノヴォトニー……！！？」

そのマーキングを持つ部隊の名に戦慄せずにはいられない。戦史にその名を刻んだ伝説のエースが自分達の前に立ちふさがる。なのはとフェイトにとって、これ以上無い強敵だった。

「こちらはヴィータ。彼女もまた防衛戦に参加していた。ナチスドイツの降下猟兵達の武器「StG44」の射撃の前に地上本部の一般魔道士に負傷者が続出し、戦線の維持が難しくなり初めている現況は悔しい以外の何物でも無かった。だが、本局の空戦魔道士達はその翼をもがれたに等しい状態の戦いを余儀なくされている。こうなっては戦技教導隊の猛者たちも宝の持ち腐れに過ぎない。敵ながら、統制され、しかも陸戦の精鋭である降下猟兵達の動きは見事だ。

「ヴィータ三等空尉、地上本部が陥落したそうです！」

「何だと！？くそお、早すぎる！！」

「撤退命令がなされました、ここは退くべきです！」

「ふざけんな！！アタシはまだ戦える！！ここで退いたら、死んで逝った奴らに顔向けできねえ！！」

「しかし、もう戦線はズタズタです！！レジア中将閣下も名誉の戦死を遂げられ、統制が乱れております！！総崩れになりつつある今、もはや防衛は無理です！！」

ヴィータは拳を地面に叩きつけながら、ちくしょう、と叫んだ。守るべき市民も仲間も守れずに、何が時空管理局の空戦魔道士だ。何

が機動六課だ。何がベルカの騎士だ。憤りと悔しさの入り交じった感情で涙を浮かべている。そしてヴィータに撤退を進言した地上本部の魔道士もまた、ナチスドイツの凶弾に倒れる。Kar98k小銃の狙撃仕様を持つ狙撃兵の仕業だった。

その場に倒れこむ魔道士にヴィータは駆け寄る。その魔道士は泣きじゃくるヴィータをなだめるように穏やかな表情をしていた。

「しっかりしろっ……ここで死ぬんじゃ……」

「……私はもう助かりません。最後にこれを……娘に……」

「あ、ああ……ッ」

それは彼がいつも大事にしていた家族との写真だった。それをヴィータに渡した瞬間、彼は事切れた。穏やかな死に顔だった。ヴィータは一人、立ち尽くした。また目の前で仲間が逝った。悲しみや無力感が彼女の心を襲う。心が押しつぶされそうな彼女を救ったのは――。

『諦めるな!!』

バイクの爆音と共に一人の男が現れる。ヴィータは涙を必死にぬぐい、その男の名を呼んだ。

「つ、筑波さん!!」

―その男は筑波洋。仮面ライダー8号、スカイライダー、。RXと共にミッドチルダに来訪していたライダーの一人。バイクを運転しながらヴィータの方へやってくる。そして座席から立ち上がり、一定のポーズを取る。それは彼の改造人間としての機能を目覚めさせるための、スイッチ、だった。

―筑波洋は力の限り叫んだ。その変身コードを。

『スカアアアイツ……変んん……身ッ!!』

スカイライダーとなり、そのままスカイターボを加速させる。

『ライダーアアアアブレイク!!』

これがスカイライダーの得意とするマシンにより体当たり。高震動発生装置を発動させ、そのまま兵士たちへ特攻していった。

第44話「突っ走れ 空を飛べ ブラックサタンを倒すまで」(前書き)

今回は仮面ライダーストロングー及びBLACK RXメインです。

第44話「突っ走れ 空を飛べ ブラックサタンを倒すまで」

「歴代仮面ライダー達の存在は時空管理局も掴んでいた。だが、自分達でさえ実用化を見送った、改造人間、をいくら次元世界で有数の科学力を誇るとはいえ、あの世界が実用化出来ているなど、上層部は一部除いて『与太話』と一笑に付していた。まして、無償で正義の為に戦い、それに殉じるなど、どんな酔狂な奴だ……と。しかし確かに、彼等、は実在した。そしてその証明がここにはあった。ナチスに対し、抵抗すべく六課の指揮をとっていた八神はやての前に現れたのは、ミッドチルダを訪れていた城茂Ⅱ仮面ライダーストロンガーであった。」

「テメエが八神はやてか？」

「そうやけど……あんたは一体何者なん？なんで私の名を知ってるんや？」

「アイツ……なのはからテメエの事は聞いてたからな。ここはもう持たん、早く脱出しろ」

「で、でも……！ここで私たちが逃げたらクラナガンはあいつらの手に落ちるんやで！？」

「バカヤロウ！！なのは達はお前に死なれたくねえんだよ！お前も指揮官の端くれならこの状況がどういふことか解るだろう！！」

男、城茂の言うことは確かだった。もはや首都はナチス残党が跳梁跋扈する、死都、へ成り果てていた。地上本部には忌々しい旗、ハーケンクロイツ、とドイツ軍の軍旗が翻り、

陸戦魔道師の抵抗はもはや散発的にしか見られない。頼みの綱であるはずの管理局本局は、ゆりかご、を恐れるあまり、次元航行艦を出し渋っている。今はなのはとフェイトがバルキリーでエリオとキヤロ、その他の面々の救出に赴いているが、彼等の繰り出した敵性

バルキリーと空戦に入ってしまった。状況は知っていた。だが、自分達なら状況を打開できる。そう思っていた、そう思い込んでいたのかもしれない。しかし決断が遅れば仲間を失うことを意味する。はやてはしばしの沈黙の後、断腸の思いで六課隊舎の放棄を決断した。副官のグリフィス・ロウランらは反対したが、ここで六課が分断されれば、各個撃破されるという最悪の事態になる事は重々承知していたので、はやての説得により応じた。

「……よく決断した。退路の確保は俺にまかせろ」

城茂は重い決断を下し、様々な思いが去来し、憤りに震えるはやてを励ますかのように彼女の肩をポンと叩く。そして不敵な笑みを浮かべ、六課隊舎に侵入してきたナチス残党兵たちの前に立ちふさがった。

「往生際が悪いお嬢さん方だ　いくらあがこうが逃げようが無駄だ　あきらめろ　もはやこの首都に、この死都におまえたちが逃げる所も隠れる所も存在しない　あきらめろ人間!!」

兵士の一人の啖呵を切った台詞に対し、はやては即応戦しようとするが、城茂はそれを制止する。

「なっ……どういふつもりや!？」

「俺にまかせろといったろう? アイツら、バダン、の害虫駆除は俺の役目だ」

城茂はそう言うと、腕にしていた手袋を抜き捨てる。はやて達は驚愕した。男の両手はコイル状の機械になっていたのだから。確かにミッドチルダには戦闘機人は存在したが、アレは機械を最初から受け入れられる肉体であることを前提にしていた。だが、この男の手

は明らかに機械だ。義手のたぐいでないのは一目瞭然だが、一体なののために、と誰もがそう思った。

そして城茂は腕を動かし、ポーズをとりながら両手を擦り合わせた。まるでその身に電気を発生させるかのごとく。そして腕には確かに電光が宿っていた。

『変人……身ッ!! ストロンガー!!』

その瞬間、目くらま閃光が走り、何かの作動音らしき音も同時に響きわたる。そして閃光が晴れると、そこにはカブトムシを思わせる鉄仮面の男が立っていた。胸のS字マークや赤を基調とするスーツ、緑の複眼などはまるで、一昔前のTVの特撮ヒーローだ。そしてその男は声高らかに名乗りを挙げた。

『天が呼ぶ……、地が呼ぶ……、人が呼ぶ……、悪を倒せと俺を呼ぶ!! 俺は正義の戦士……仮面ライダーストロンガー!!』

はやては仮面ライダーという単語にすぐにハッとなった。仮面ライダー。なのはとフェイトが8年前出会って以来、畏敬の念を持っていると言う、あの世界に伝わる伝説の戦士。その一人が今自分の目の前にいる。信じられないといった気持ちでストロンガーの勇姿を見つめていた。

「嘘やろ……仮面ライダーやって……!!?」

ナチス残党はストロンガーの出現にも動じることはなかった。むしろ意気往々としている。まるで裏切り者を始末できることを喜んでいるかのように。

「ほう。貴様が仮面ライダーストロンガーか。貴様の噂は聞いているこの裏切り者の、虫けら（ワーム）、めが」

「ブラックサタンの事か？ あいにくだが、俺は貴様らを倒すために改造手術を受けたんでな」

「大したものだ。だが、貴様が目覚めたとあれば、あのお方、もお喜びになられる」

「何……！？ まさか奴が……！？」

「……さあな。お喋りはこれまでだ」

兵士たちの手に握られるStG44が一斉に火を噴く。ストロンガーの超合金製のボディは物ともしないが、はやてたちに当たれば負傷は免れない。脱出を促し、兵士を蹴散らす。唸る鉄腕、打ち込まれるキック。はやて達はその勇姿に心強さを感じていた。

そしてシャドームーンはシグナムを相手に戦い、その力をもってして優位に戦いを運んでいた。

「ふんっ！」

今のシャドームーンにはかつての得物であり、次期創世王の証であった剣、サタンサーベル、は失われていた。だが、その代わりに以前、BLACKと戦った時よりパワーアップした事示す新たな力、シャドーセイバー、を手にした。その切れ味はレヴァンティンをも凌ぎ、剣士として相当な実力を持つはずのシグナムをも次第に追い詰めていく。

シグナムはスタミナが切れてきて、次第に自身の動きが鈍ってきている事をひしひしと感じていた。

空中機動が取れず、地上での肉弾戦を余儀なくされた事はハンデとも思わない。だが、相手は機械のボディを持つ、改造人間、だ。（改造人間のことはフェイトから知らされていた。そのためシャドームーンがサイボーグの一種であることを察することができた。）圧倒的にスタミナ面での優位なのは明らかであった。それとシャドームーンの繰り出す攻撃一つ一つのダメージがとてつもなく大きい。

「貴様は何故、この世界に現れた！？……答えろ！」

「我が目的はただ一つ。仮面ライダーBLACK RXと戦う事だ」

シグナムはこれでシャドームーンの目的を理解した。この男は仮面ライダーと戦うだけにこの世界へやって来たのだと。仮面ライダーへの闘争本能が彼を突き動かしているのか。そしてシグナムの放った「鞭状連結刃」形態、シュランゲフォルム、のレヴァンティンの攻撃をシャドーセイバーでいなすと、シグナムのバリアジャケットを薄紙のように切り裂く。レヴァンティンを杖替わりにして立ちとうとするが、それまでの攻撃のダメージが祟り、足に力が入らない。足がガクガク震えて立てないのだ。出血のためか、視界もぼやけてきている。

「くそ……っ……！」

そんなシグナムの闘志をシャドームーンは賞賛する。そして敬意を評すると同時に戦士へのせめての慈悲と言わんばかりに、シャドーセイバーを構えた。「その時だった。

『待て!!』

「来たか……太陽のキングストーンを持つもう一人の世紀王……」

その声は南光太郎だった。キングストーンの共鳴などの様々な要因でこの場に急いで駆けつけたのだ。

（やはり生きていたのか……シャドームーン、いや信彦……!!）

南光太郎は複雑な心境でシャドームーンを見据える。そして宿命が再び動き出したことに悔しさを滲じわせながら右腕を天に捧げながら叫んだ。

『変身ッ!!』

彼の変身機能が作動し、ダブルタイフーンを思わせるベルトが光を発しながら彼を、超人、へ変化させる。ZXまでのライダーとは趣を異にする、マフラーを持たない緑と黒のボディーを持つ仮面ライダーへ……。

そしてシグナムを守るかのように、地面に降り立って名乗りを挙げ

「俺は太陽の子!!この世の生、生ける物全てを守る!!仮面ライダーBLACK RX!!」

太陽の子 BLACK RX。彼のその計り知れない力はシャドームーンに通用するのだろうか?それはまだ分からない。

間章その12「小休止」

—各種モビルスーツが集結しつつあるアフリカ トブルク。そこでマルセイユらは異世界で日常的に起こる、モビルスーツ戦、宇宙のどこかで起きる可変・通常戦闘機の制空権争いなどの映像を見させられていた。マイクロミサイルが乱舞し、ビームが飛び交い、人型兵器同士が広大な宇宙を背景にぶつかり合う映像は凄まじいの一言だった。特にジオン残党軍の熟練者達が駆る、AMS-119 ギラ・ドーガと、これまたエースが駆るスタークジェガンのぶつかり合いの様子を撮った映像には、歴戦の猛者であるマルセイユすら唸らせられた。

スタークジェガンのあらうる火器を全て回避し、接近戦を挑むギラ・ドーガ。能動的質量移動による自動姿勢制御（AMBAAC）を駆使して縦横無尽に空間を駆け抜ける両機。ビーム・サーベルによる接近戦。そして僅かな隙が両者の明暗を分ける……。

「……これが私たちの世界では日常的な、戦争、の光景です」

連邦軍の武官が未来の映像機器を駆使して見せた未来世界での戦争の光景は奇しくも自分達ウィッチの戦いに近いものだった。皆、不思議そうな顔をしていた。（未来世界を経由してこの世界に来たティアナは事情を知っているので、説明側に回っている）

「……そういう訳だったとはな。洗練された兵器。ある意味ネウロイより戦いにくいぞ……っ」

マルセイユは人間が操る兵器を破壊することは、人を殺す、事に繋がる事を良く理解していた。ネウロイは怪異であり、あくまで異形

の敵と割り切れる。だが、ティターンズは同じ人間であり、対話だって出来るはず。彼等を相手に戦うことはネウロイが台頭していることでこの世界の人間が忘れている、血みどろの殺し合い、なのだ。戦闘機を相手に空戦していた時はそれほど感じなかったが、こうして改めて事実を突きつけられると、気が重くなる。しかしティターンズはあくまで自分達を排除しようとしている。それは数度の交戦で見にしみて理解している。彼女の心中は複雑だった。

「人を殺すことは軍人として割り切るべきなのか？」

表面上は落ち着き払ってはいるが、まだ10代の少女でしか無いマルセイユには辛い事実だった。

そして、このところ通常部隊のウィッチが消息を絶っている事、理由もティアナから説明がされた。

「アイツが何故、扶桑の軍人でありながら、妙に地球連邦や、時空管理局、の事情に詳しいのか。今度、取っ捕まえて聞き出してやるか……。」

そんな事を思いながらマルセイユはティアナの説明に聞き入っていた。

「ウィッチが消息を絶っていた理由はこれです」

ティアナは先程まで映像が写し出されていたプロジェクターに2枚の写真を掲示し、拡大して写し出す。それはティターンズが主に狙撃任務に用いているモビルスーツの写真であった。1枚目はRMS-106CS、ハイザック・カスタム、。ティターンズの保有する狙撃任務用モビルスーツの中では最新の設計年次の機体だ。もう一

つは設計年次こそ古いが、この手の任務での正確性・確実さでは定評があるRGM-79SP、ジムスナイパー？、だ。実弾系を敢行した際のライフルはカールスラントの制式小銃、Kar98k、をそのまま拡大した物に見える。

「消息を絶ったウィッチはこれらのモビルスーツに狙撃されたものと推測されます」

「ちよつと待て。いくらモビルスーツが高性能とは言え、たった数メートルのものが狙撃できるのか？」

「確かに普通の機体では無理です。ですが、これらの機体は狙撃機能を駆使すれば可能です。ティターンズは連合軍が各戦線への派遣任務に費やせるウィッチの数をおいそれと増やせないことは承知していますからね」

「狙撃兵で人員を秘密裏に撃墜するか……。奴らもうまくこっちの穴を突いてくるものだ」

次いで、武官が次の事柄の説明に入る。それは今後ティターンズが取るであろう行動の一つであった。

「我々が恐れているのは、彼等が占領した地域からウィッチを入隊させ、捕虜にしたウィッチを教官に仕立ててそれ相応の教育をし、それで編成した部隊でこちらを攻撃してくる事なのです」

「まさか、そんな事が……！？」

ティアナと共に説明に入っている武官のこの一言にライーサ・ペットゲンが、まさか、と言った様子で狼狽えた顔を見せた。確かに考えられることではある。しかし費用や時間を考えれば非現実的であるし、第一ウィッチやストライカーユニットに関するノウハウを一切持たない彼等がまともにウィッチ部隊を機能させられるはずが無

い。

「……軍人は常に最悪の事態を考慮に入れなくてはなりません。現に敵は各戦線でウィッチとストライカーユニット関連施設を関係者ごと吸収していると、各戦線へ派遣された我軍の部隊から報告が入っています」

それは兵員数が絶対的に足りないティターンズ残党軍が、使えるものは何でも使え、の理念を20世紀ごろのジェット機だけでなく、ウィッチにまで当てはめ始めるのは時間の問題であることを暗に示していた。

「そこで先手を取るために、敵の橋頭堡となっている臨時の航空基地及びエジプト軍から奪取したと思われる施設を奪還する作戦を実行する事になったのです。作戦開始は偵察部隊の報告や情報収集、敵戦力の分析などが完了する8月を予定しております」

この作戦は奇しくも501によるガリアの奪還作戦実施とほぼ同じ時期に実行に移されることになる。ティアナ・ランスターにとって、ウィッチ転向(?)後初めての大規模な戦いとなるのは間違いない。なかった。

501とティターンズの戦いはZZガンダムとHi-νガンダムの活躍により、501側にひとまずの軍杯が上がり、撃退に成功した。撃退後、直ちに破壊された基地から物資の搬入をすべく、作業用に格下げされて、搭載されていたジム?などを刈り出しての作業が行われていた。そんな中、とあるモビルスーツ大隊長が私的に

調達していたガソリン車時代の名スーパーカー、ブガッティ・ヴェイロン、の存在が上層部にバレ、一悶着起こしていた。

「全くよくこんなモノ手に入れてたもんだぜ」

兵士たちはもの珍しそうに赤城の格納庫に駐車してあるブガッティ・ヴェイロンの姿を見ている。当代最速レベルのスーパーカーであったこの車の事は有名で、時速400キロを最初に突破した世代の代表格である。そんなモノが何故軍艦にあるのかは調達してきた当人に聞かなくてはならないが、手空きだったシャーリーは、最速、を誇ったという車の噂を聞くなり、スピード狂の血が騒いだのか、数日の準備を経て、物資調達を名目にその車を駆って町に繰り出してしまった。

持ち主の、彼、曰く、大英帝国のどこであのパワー出すんだ？との事だが、シャーリーはそんな事お構いなしに未来のスーパーカーのパワーを存分に発揮させていた。

「おおおおー！！こ、このパワー凄いぞ！ぐんぐん加速していくうー！！この感覚、たまんねー！！」

常識的に考えるとメーターの最高速度の時速400キロ余りを出せる所はブリタリアには無い。それは残念だ。

「未来世界のアウトバーンならこいつの最高出力出せんだけだなあ……贅沢言ってられないな」

「物騒なこと言わないでくださいー！！」

助手席には道案内役として、リネット・ビショップが乗っていたが、シャーリーのスピード狂な運転に冷や汗かきっぱなしで、心休まる

暇がない。しかも今乗っているのは、未来世界の超絶までに速い車なのだ。幸い物資を載せるスペースは、連邦軍の軍用車輛が来てくれたので、それに任せるとして、シャーリーの運転の荒さを考える
とハラハラドキドキせずにはいられなかった。

間章その12「小休止」(後書き)

一部誤記があったので修正しました。

第45話「攻防は続く」

―ハワイ攻略戦は予想以上の苦戦を強いられている。四部隊を見抜かれたばかりでなく、偽電も意味を成さなかった。兵団の指揮官はメカトピアが軍事政権下に収まる課程で武功を挙げた名将と誉れ高き、男であり、連邦軍の策を尽く見抜く慧眼の持ち主であった。

「ハワイ 旧地球連邦軍基地司令部（建物をそのまま再利用している）」

「太平洋方面の全勢力は直ちにハワイに集結！敵は必ずここに攻撃してくるだろう」

「何故です？ジョンストン島を攻撃する可能性もあるのですよ？現に敵は3隻の空母を繰り出しています」

「馬鹿者、それは四だ。あそこを攻略するならもっと大部隊で攻め込む。3隻程度の航空戦力で堕ちるような柔い基地で無いことは敵も承知済みだ」

「ハア」

「敵の策略に乗せられた時、我が兵団は太平洋方面から撤退せざるを得なくなるだろう。予測が正しければ、地球連邦軍も総力を上げて攻撃に打って出るだろう……近いうちにな。なんとなくだが、儂は次の戦で死ぬかもしれないな」

「……まさか、閣下ほどのお方があのようなタンパク質と水の塊でしか無い人間どもにやられるなどと」

副官は信じられないといった様子だったが、ハワイの司令部でのこの司令官の予測は見事に的中し、ハワイ諸島のオアフ島では激戦が繰り広げられていた。

市街地に戦車砲の155ミリ滑腔砲や75ミリライフル砲の発射音が響く。ホノルル市内の闘いは今や最高潮を向かえていた。銃撃とビームの閃光が入り交じり、兵士たちの死体が散らばる。

そんな中、進撃を休止し、市街地に駐車されている61式戦車の周りには侵攻部隊の機甲師団の兵士やウィッチが集まっていた。

鉄人兵団兵士の、死体、が転がる光景を尻目に一人の兵士が煙草を口に食われながら、死体を差してこう称した。これぞ未知との遭遇って奴だ、と。彼は一年戦争から数年で予備役に退いた老兵（と、言っても40代後半だが）で、連邦軍の人手不足ぶりが窮まらないことの証拠でもあった。

「未知との遭遇？なんですかそれ」

陸戦ウィッチの一人が？マークを浮かべながら聞く。当然ながら1940年代から来た彼女らはその単語を知らない。兵士は娘に語り聞かせるように単語の意味を話す。

「1944年から来た嬢ちゃん達にも分り易く言うのだな、昔、嬢ちゃん達にとっては33年後の事だが、にそんなタイトルの映画があつてな。その映画では穏やかな形で地球人と宇宙人の初コンタクトが行われたってなってる。……まあ実際の宇宙人とのコンタクトは映画のようにはいかなかったがね……。最も人間タイプじゃない奴らは今回が初めてだ」

彼は機械による生命体とも言える鉄人兵団との遭遇は今回が文字通

りの未知との遭遇と形容すると、くわえていた煙草にライターで火をつける。

「クソツタレ、煙が目にしみるぜ」

それはウィッチ達に戦争の虚しさを暗に示すものだった。だが、人間は闘いによって進化してきた。ゲッター線が人間を選んだ理由が何であるか、学会やタブロイド紙を賑わせている。人類の戦いに明け暮れる進化は神が望んだ物なのか。親と娘くらい年齢が離れているあの子供達の世界で現れるネウロイも宇宙怪獣のような宇宙の免疫なのだろうか？

それは今の人間にとっての謎であると言える。
ただタイムマシンを用いた調査で、神、らしき意思の声らしきものが録音されたと言うが……。

「ちなみにその声は宇宙戦艦ヤマトが自沈した時期の西暦2200年代後半頃に政府の一部の人間に公開された。その際の音声は以下の通り。」

「ビッグバンは成功だ！、時天空、は崩壊している、ビッグバンは時天空を破壊しながら拡大していく」

「しかし時天空は無限だ、いずれビッグバンの爆発力も弱まる」

「原始的だが分子構造体を組み合わせ、時天空を攻撃する生物体を作り出す！」

「遺伝子を次々と組み合わせ、進化する戦闘的な種がいい！！我々のような意識体ではなく、おのれら同士が喰い合う種がいい！」

「喰い合う事によって強くなる、破壊せよ、同胞を殺せ！武器を作り上げる！」

「その中で生き残った種が進化を繰り返し、星々を喰う魔物が生ま

れてもいい!!」

「兵器を使い…宇宙を消滅させる機械の化物でもいい!!」

その声は一体なんなのか。神、と言える彼等をして恐れる、時天空、とは……？そして人類は彼等の言う兵器なのか？その謎を解き明かす境地に人類が至るのはここからさらに1000年を有に超える時を必要とした。そしてその時間の果てでは、人類史上最大最強とその時代で称されるスーパーロボット、ゲッターエンペラー、が蠢めく。人類に敵対する意志を示す生命体を全て宇宙から消し去さんと、その威容を表す……。

『ゲッターエンペラー、チェンジだ!!』

「オワフ島での苦戦が伝えられると、政府は直ちに安全保障会議を招集。レビル將軍は早期決着を焦る政府高官たちの批判の矢面に立たされてしまう。」

「將軍、これはどういう事かね？」

「せっかく生還した君を4軍の總司令に再拔擢したのだ。それなりの働きはして貰いたいものだな」

「前にもお話しましたが、今回の苦戦は早期決着を焦るあなた方の強行な命令によるものです。分析結果を待たないで、スケジュールを無理やり早める必要はなかったはずです」

「それをどうにかするのが君の役目だろう!!」

「やってしまったからしょうが無いだろう!!」

政府高官らはギャアギャアとレベルを批判する。こうする間があれば策の一つも考えろとレベルは心のなかで毒づく。そんなレベル將軍に助け舟を出したのは、かつての政敵であったゴップ連邦議会議長であった。彼は官僚形軍人の中では比較的有能であり、軍での階級は最終的に元帥であった。

レベルが軍に復帰できたのは彼のおかげであり、一年戦争から年月を経た現在では、互いに友情を持ちあわせる関係になった。

「まあまあ、そう捲くし立てられたら將軍も何も言えんだろう」

「しかし議長。彼に何か策があるとでも？」

「あるだろう。スーパードットという最後の切り札が。今がその時なのだよ、キミ」

ゴップ議長は現在、政府によって制限がかけられているスーパードットの実戦運用を自分が議会や大統領を説得させて許可させるとレベルに告げた。（前大戦の終結後、スーパードットの運用には凄まじい制限がかけられ、滅多に実戦運用はできなくなった。しかし現在、宇宙軍がスーパードットを運用できているのは、彼が特例として認めさせたからである。）

「しかし議長！！」

「つべこべ言うな。……將軍、そこに書いてある連絡先に電話したまえ。、獣戦機隊、にコンタクトが取れるはずだ」

「……ありがとうございます、議長」

ゴップはその政治的手腕で最終的に会議をまとめさせた。会議結果は『スーパードットの投入を許可する』。大統領もゴップ議長直々の説得により折れ、晴れてスーパードットの全面的投入が叶ったのだ。

そして日本の何処かでスーパーロボットがその目覚めを待っていた……。その機体は『獣を超え、人を超え、そして今神になる』とも評される代物。その完全リペアが完了していたのだ。その名は……。

『やああってやるぜ!!』

ある一人の男の叫びが木霊する。それは人類の切り札たるスーパーロボットの一つの復活を示す狼煙でもあった。

第45話「攻防は続く」(後書き)

と、いうわけでスーパーロボットを出す理由付けに苦労しましたが、なんとかひねり出しました。

第46話 「血潮が燃えるのなら、ただそれだけで何も要らない」 (前書き)

タイトルのネタは真ゲッターロボからです。

第46話 「血潮が燃えるのなら、ただそれだけで何も要らない」

ーハワイ攻略戦へのスーパーロボットの全面投入が決定された。レビル將軍は直ちに地球圏に存在し、稼働状態にある数体を攻略戦への増援として派遣させた。グレートマシンガーを筆頭に、連絡があった同日に完成し、初陣を迎えた真ゲッターロボ、(ゲッターGは真ゲッターに後を託すかのように実験に回された)そしてダンクーガ。

「よう、久しぶりだなみんな」

「お前は相変わらずだな、藤原」

「あたぼうよ。こちらら前の戦いから鬱憤が溜まってるんだ、たっぷり暴れさせてもらうぜ」

「あまりハメを外すなよ、忍」

「わかってるぜ、亮」

「あんたはすぐに突っ走るからね、それが心配だよ」

「うっせえ!!」

「ハハハ……、変わってないなお前たちは」

ダンクーガのパイロットである、獣戦機隊、はスーパーロボット乗りの例に漏れず、個性的な面々が揃っている。『やああってやるぜ!!』が口癖な藤原忍を筆頭に、強気な性格な紅一点の結城沙羅、格闘技を嗜んでいる参謀役の司馬亮(実は他のメンバーより士官学校の期が一期上)、最年少の式部雅人の四人である。前大戦では最終戦にも参加し、機体が原型を保った状態で帰還できた数少ないメンバーの一人だ。

「ところで竜馬。そのゲットマシンってドラゴンより新型だよな。ゲッタードラゴンはどうしたんだ?」

「ああ、ドラゴンもゲッター線の実験用に回されてな。こいつはその後継のゲッター、真ゲッターロボ、だ」

「真、ねえ……これまた大きく出るじゃねえか。……さっきから気になってたんだけど、お前、雰囲気変わったよな？」

「それは最近良く言われる」

真ゲッターロボはその名は伊達ではなく、ゲッタードラゴンを超越する力を秘める現時点最強のスーパーロボットの一角である。合体した状態ならば光速をも越えられるというテスト結果をたたき出した恐るべき機体。その力を見せるのはお楽しみだ。

「まあ見てろ」

竜馬は笑みを浮かべた。得物を追い求める獣の目で。アムロ・レイに、最近雰囲気変わったよな？ なんかこう……石川賢のアレと言おうか……と指摘されるほどにワイルドになった。その理由は実家の道場を継いだからとの事だが……。

一オワフ島に殴りこんだ航空部隊は遮二無二、敵基地目がけて突っ込んだ。対空砲火を物ともしないその統制のとれた機動で市街地を乱舞する。

そして敵基地に通じると思われるトンネルが見える。

「あの入り口に突っ込む!! 全機、続け!!」

フォッカーの指示で全機がトンネルに向けて突っ込む。無論対空砲火で数機ほど編隊から落伍するが、気にしてる暇はない。狭いトンネルを戦闘機やジェットストライカーで突っ走るといのは相当な技量がいる。一步間違えば墜落は必至だ。

トンネルの明かりを頼りにコスモタイガーやバルキリー、ウィッチが飛ぶ。

(ここを抜ければ……!!)

トンネル潜りなど、ウィッチとして長い戦歴を持つ穴拭智子や迫水ハルカも経験がない。智子はこの未来世界の滞在生活で、同居人の黒江綾香が釣り(未来世界では釣りは気軽にできなくなっている)以外の趣味として開拓した、TVゲーム、の某有名フライトシューティングのシリーズをやっているところを見たことはある。その時は自分もクリアを手伝ったが、その時の感想は『何だって戦闘機のフライトシューティングにこんな面があるのかしら?』だった。しかしいざ自分がそれをやるとはおもわなんだ。

—もう、随分飛んでるように思う。……20分? いやもった?

実際にはまだ5分も立っていないが、智子にはそう感じられた。僅かな明かりを頼りに飛ぶことは相当な度胸のいる事だ。経験がない若いウィッチに良く脱落者がでないのが奇跡的に思える。自分とて、前方に見えるフォッカーのVF-19の熱核バーストタービンの排気炎を半分頼りにしている。怖くないといえば嘘になる。だが、今

のこのメンバーなら必ず成功すると信じ、智子は自分を奮い立たせてトンネルを飛んだ。

一兵団側は航空部隊に隙を突かれた事に狼狽していた。予想外の事に対応が遅れてしまう。

「閣下！！敵機がトンネルから突っ込んできます！！」

「直に通過してきます！！いかがいたしましょう！？」

若い兵士らが一様に狼狽えるのを彼は一喝し、場を鎮める。それは歴戦の兵である彼だからこそ可能なことだ。

「狼狽えるな！！鉄人兵団は狼狽えない！！」

こういうとテキパキと指示を飛ばす。彼は冷静沈着だ。この冷静沈着さが地球圏攻略の尖兵として選ばれた要因なのだ。

「工作用のアレを投入しろ。敵の航空機の攻撃には十分に耐えうる」
「ハッ！」

兵団は工作用だが、兵器に転用が容易な、あの巨体、に火を入れた。それはコスモタイガーやバルキリーの対艦ミサイルをも物ともしない重装甲とビルを崩壊させる熱光線を持つ恐るべきロボットであっ

た。ドラえもん達の知識でそれを呼ぶならこの言葉が似合う。、ザンダクロス、。

「……抜けた！！スカルリーダーより全機へ。各個に攻撃開始！！」

フォッカーはトンネルを向けると無線で全機に攻撃開始を命じ、ミサイルによる爆撃を敢行する。コスモタイガーもVF-11などの各種バルキリー、ウィッチ達も同様だ。攻撃は順調に進むかと思われたが……。

不意に青白い光線が走り、VF-11を数機まとめて粉碎する。全員がその姿に驚愕する。

「くそっ……とんだ隠し玉を用意していたもんだ！」

フォッカーさえ戦慄するそれは兵团で事実上最強のロボと言える、ザンダクロス、タイプ（ドラえもんが便宜的な名をつけたのが全軍に伝わっている）であった。作用と聞いていたが、まさか大々的に投入するとは……。ドラえもん達がかつて搭乗したそれとカラー違いかつ、更に巨大だ。サンダーボルト

がまるで小人に見えるほどだ。

バルキリーやコスモタイガーの攻撃でびくともせず、扶桑出身のウィッチの斬撃でも装甲に傷を入れないという脅威的な装甲とそのパワーで連邦軍に打撃を与えていく。

「きゃああああっ!!」

「智子中尉!!……くうっ!!」

智子も魔力を充填させた扶桑刀で斬りつけるが、多少の傷を入れたところで巨大な腕に振り払われ、吹き飛ばされる。ハルカがなんとか受け止めるが、こうしている間にも損害は拡大していく。

墜落したVF-11をゴキブリを潰すかのように足で踏み潰し、レーザー砲でコスモタイガーを粉碎する複数のザンダクロスタイプ。メインコンピューターとおぼしき声が響く。

『この宇宙に湧いた害虫共が!!』

『一定数の奴隷は確保した今、貴様らに価値はもう無い!!あとは駆除あるのみ!!』

『汚物は消毒だあああ!!ヒヤッハア……!!』

『野蛮な貴様らには動物園に行ってもらおう!!』

この、ザンダクロスタイプのメインコンピューターの粗暴かつ人間をウジ虫以下にしか捉えていない言動に智子は怒りを爆発させた。

『ふざけんじゃないわよ!!さっきから黙って聞いてれば野蛮だの、害虫だのと決め付けて!!そうやって自分達に従わない生物を、野蛮って決め付けるアンタたちこそ野蛮よ!!』

扶桑刀を敵に向けてそう言い放つ。しかし状況は地球連邦軍に不利だ。敵は憮然と智子を嘲ける。

『フン。タンパク質と水の塊でしか無い貴様らに何が出来る？俺に傷の一個でも入れてみる』

そう言ってウィッチの一人を捕まえる。目の前で仲間の死を見せるつもりか。そしてにぎり潰さんと力を入れようとした瞬間だった。何か金属を盛大に断ち切る音が響き、ザンダクロスタイプの一体が断末魔を上げながら真っ二つになって両断される。その張本人の姿が見える。34mはあろうかという大きさの翼を持つ巨人の姿だった。

『……あれはまさか！？』

フォッカーもこの援軍に思わず叫ぶ。あの黒い巨体とあの長大な剣は間違いないと。

『心にて悪しき空間を断つ！……名づけて断・空・剣！！』

―その声は復活の狼煙だった。かつて地球を救ったスーパーロボット、その名をダンクーガ。

『人を超え、神をも超える、それが究極のマシーン、ダンクーガ！行くぜ兵団野郎！！やあああってやるぜ！！』

―そしてその復活を祝福するかのように空には雷が走る。雷をその身で操る紅の翼を持つ鉄の魔神。

『グ、グレートマジンガーか!?!』

ザンダクロスタイプらがうろたえる声を出す。その声に答えるようにグレートマジンガーのパイロット、剣鉄也、は勝ち誇るように応える。

『……そう、偉大な勇者、だ!!!』

―最後は。慣性の法則を無視して舞い降りた悪魔の翼を持つ赤い巨体。槍状の巨大な両刀の戦斧が不気味に輝く。その名を真ゲッターロボ。

「俺達がいる限り地球はテメエらには渡さん!!」

―ここに3大スーパーロボットが集結したのだ。その鋼の勇姿は地球人の確固たる意思を示すようにきらめいていた。

「あれが……スーパーロボット」

智子は初めて目の当たりにした鋼の巨神達の勇姿に息を呑む。未来世界の人々にとって最期の希望であり、どんな敵にも打ち勝つてきた人間の造りしモノ。スーパーロボットの圧倒的な威容に誰もが希望を託していた。

間章その13「小休止 2」(前書き)

今回は501統合戦闘航空団+αの日常の一幕です。

間章その13「小休止 2」

――501統合戦闘航空団は破壊された基地の代わりの臨時基地として、ブリタリアに停泊している、地球連邦軍の戦闘空母にその基地機能を移した。艦内を好きに回っていいとの許可も降りていたので、501の面々はそれぞれ自由行動をしていた。既に艦に住んでいる(?)

坂本美緒などが案内役になっていた。ゲルトルート・バルクホルンはエーリカ・ハルトマンを引き連れ、艦の格納庫に来ていた。

「あれ？バルクホルンさんにエーリカちゃんじゃないの。どうしたの今日は」

「ああ、今日は艦内を見て回ってるんだが……しかし、改めて見ると凄いな、これは」

バルクホルンは格納庫で整備を受けているZZガンダムの姿を見上げる。20mはあろうかという巨体は、いかにも、といった逞しさを感じさせている。この間見た時とは姿が微妙に違う。あの上からさらに装甲を纏っているというのが正解だろうか？武器のラックには手持ちの重火器らしきものもかけられている。

「あれは？」

「フルアーマー化の調整がやっと終わってね。その時に使う武器も届いたのさ」

ジュード・アークシタはあれだけ重装甲に見えるZZがさらに追加装甲と装備を纏う必要があるのか。その理由を話す。ビーム兵器全盛の時代には一部の超合金（一部のガンダムが纏う超高級素材のガンダニウム合金や超合金Zや合成鉍Gなどの素材）でも無ければ装

甲でビーム兵器を完全に防ぐことは不可能であること、それで悩んだ連邦軍がたどり着いた答えは、追加装甲と武装をつけちゃえ!!、という子供みたいな答だったと。(ジュドーは第一次ネオ・ジオン戦争最終決戦時にフルアーマー化されたZZに、このゴテゴテしたのはなんなの!!、と憤慨しているが、今では受け入れた。)

実際、その答えは時世にマッチし、一年戦争末期にファーストガンダムタイプを素体にした数種の試作機が完成していた。時が下り、兵器開発の大口の一つ、アナハイム・エレクトロニクス社、がその考えを性能が向上したいくつかのガンダムタイプの機体に適用させた。その成果の一つがこのフルアーマーZZガンダムであり、その隣に安置されているフルアーマー百式改である。

「ハイパー・メガ・カノンだとかハイパーメガランチャーだとか、舌を噛みそうな名前だね」

ハルトマンが武器の名前が複雑で言いにくいと感想をいう。たしかに語感の良さで付けられている感があるのでジュドーも同意を示す。そして彼女らの前で真新しいモビルスーツ用の武装が搬入される。それはアナハイム・エレクトロニクス社が手持ちライフルで、メガバズーカランチャーと同等以上の威力を実現させる!!、と息巻いて設計した新型のビーム・ライフルだ。名前は、ビームマグナム。本来は今後新造予定の新型ガンダム用の武装として作られていたが、開発過程で他の機体によるデータ収集の必要性が生じ、在来機体で運用可能なように改修されたデータ収集用の試作のものが予備含めて数個ほど回されて来たのである。

「新型の機体や武装が優先的に回されるのはいいんだけどさ。扱う

方も大変なのよ。機体のOSのアップデートだとか整備とかさ」

「それはいつの時代も同じということか……喜んでいいのか、悪いんだか」

バルクホルンもいつの時代も自分達同様の苦労があるということを知り、ジュードと共に溜息をつく。ハルトマンはそんなバルクホルンに気分転換をさせるべく、バルクホルンを強引に食堂に連れて行く。

「お、おいハルトマン!？」

「2人共、暗いことばかり考えると胃に穴開くよ。食事でもして気分切り換えだよ」

「そういや俺も腹減ってたし、ちょうどいいや。ここの食事は上手いよ」

「ミヤフジの奴も手伝ってるって言うし、一度見に行こうよトゥルーデ」

「あ、ああ。確かにいい機会ではあるな……」

ハルトマンはバルクホルンが新入りの宮藤芳佳を妹に重ねて見ている節を知っていた。そして、昨日のネウロイの襲撃の際に宮藤が治療魔法でバルクホルンを救ったことはありがたかった。礼も兼ねて、宮藤芳佳やリーネ（宮藤芳佳とリネット・ビショップは互いの初戦果を共同撃墜という形で挙げたなどの経緯で親友となり、今は2人で食堂などを手伝っている）がどんな食事を作るのか見に行くのだ。ジュードの案内で食堂へ向かった。

「ところでトゥルーデ。ミーナは何してんの？」

「ああ、ミーナは今上層部の提督達やこの艦隊の高級将校と会ってる。なんでも扶桑の連合艦隊司令長官自ら支援に来たとかで……」

「大変だねえ、ミーナさん」

「アイツも色々と苦勞してるからな。マッサージチェアをプレゼントしてやりたいくらいだ。あれって高いのか？」

「いや安いよ」

会話を楽しみながら3人は食堂に向かう。―しかし食堂ではとんでもない光景が広がっていたりしているが、この時の3人は知る由はなかった。

―食堂では菅野直枝がカレーライスやファストフードを食っていた。てっとり早く多くの量を食う特訓で、一週間後の艦内の大食い競争に半分勢いでエントリーしてきたためだ。

「宮藤、福神漬とラッキョウをもってこいー!!」

「は、はい!! そんなに食べて大丈夫なんですか?」

「オレの胃はんなにやわじゃねーよ。まだ5杯しか食ってないしな」

いざ出るからには優勝したいのが心情だ。5杯くらいでへこたれていたらとても優勝など出来ない。せめて今回は10杯は行きたい。ひたすら食事にがつく。

「直枝……お前、何をやってるんだ!？」

「お、坂本さん。今度大食い大会にでるから特訓してんだよ」
「特訓だと……?」

食事にありつこうと食堂にやって来た坂本美緒が菅野の周りに積み上げられた食器の様子に驚く。

既にカレーライスの食器が5杯は積み上げられている。さらに食おうとしているのが不思議なくらいだ。

「実はこれなんですよ坂本さん」
「どれどれ」

そして芳佳が艦内にはられているチラシを坂本に見せる。そしてその商品と賞金は美緒も思わず欲しがるほどの魅力に溢れるものだった。

「……宮藤、この大会のエントリーはどこでできる?」

「広報部のところで受付してますけど……まさか坂本さんも!？」
「善は急げだ!! アイツに負けてたまるか!!」

芳佳は美緒までもが大会にエントリーしに行った事に驚きつつ、菅野の座っているところに福神漬とラッキョウを追加で置いてやる。

よくよくみるとあちらこちらで似たような光景が繰り広げられている。一考える事は皆、一緒らしい。

今日は忙しくなるなと芳佳は微笑ましい表情を浮かべ、厨房に向かった。

第47話「ドワォ!!」 (前書き)

石川賢要素全開です。今回は一般でいう悪の視点です。、ゲッターロボサーガ、の最終章たるゲッターロボアークと真ゲッターロボの原作を呼んでないと理解できません (笑)

第47話「ドウォー!!」

― 日本 とある地

「ブライ大帝、来ました」

「うむ……」

彼らは、百鬼帝国、。現在は冬眠期に入り、マグマに逃げおおせた恐竜帝国に代りゲッターロボと対峙する敵であり、恐竜帝国をすべての点で上回る敵である。彼らはある人物と接触していた。そしてその人物は冬眠期に入ったハズのハ虫人類の特徴を表す、ウロコ、を持っていた。そしてその傍らにはかつてマジンガーZに倒されたはずのあしゅら男爵の姿も見える。

「よく我が百鬼帝国に来てくれた。恐竜帝国帝王と言ったほうがいかな?、カムイ・ショウ、殿、それにあしゅら男爵」

「ハッ」

「……ええ。私の出身時空ではそうです。最もこの世界ではまだ生まれてもいませんが」

彼はこの時空とは別の世界において、ハチュウ人類と人類のハーフとして生まれた人物。そして一度はゲッターロボのパイロットとして戦った男。その名をカムイ・ショウ。彼はタイムスリップしてその時空で行き着く人類、そしてゲッターロボの、おぞましき未来、を目撃。その出現を阻止すべく、敵だったはずの、アンドロメダ流国、から託された最終兵器、バグ、を完成させる。そして、真ドラゴン、との戦いのさなか、自分の時空だけでなく並行時空の『救済』を決意。

真ドラゴンとの戦いを中断し、エンペラーへ繋がる可能性を断ち切るべく、全ての時空の中で最も闘争に満ち溢れ、彼が知るよりも遙かに早く真ゲッターロボが完成したこの時空へ来訪したのだ。彼とブライ大帝との連絡・仲介に尽力したのはミケーネ帝国の、闇の帝王、と、その従者として黄泉がえったあしゅら男爵である。

「私は……我が百鬼帝国は、一度はそなたの父の国を攻撃した。……だがそれは水に流そう。私も、あの瞬間、に垣間見たゲッターロボのおぞましき可能性、『ゲッターエンペラー』。それに繋がる未来の出現を阻止すべく協力しよう」

「ありがとうございます」

両者は手を握り合った。ゲッターロボ、そしてゲッターエンペラーという共通の敵と戦うために。それはゲッター線がこの世界の人類に与えし試練なのだろうか……。

「あしゅら男爵、そなたの言う、計画、の完遂はどうかね」

「間もなくでございます。それにゲッターは何も奴らばかりのものでもありませんから……。この映像をご覧ください」

あしゅら男爵は部屋を暗くさせるように頼み、持ってきた映像機器である映像を映写する。それは彼らの計画の一端が見て取れた。映像に写っているのは、ある格納庫に鎮座するゲッターロボ號や複数のカラーリングや形状がブライ大帝らの知るそれとは違いのあるゲッターロボGの各形態である。1万……いやそれより遙かに多いだろう。

「こんなもの……どうやって入手した？」

「全ては闇の帝王様の、趣味、でしてね。このドラゴン軍団の真の

姿をお見せできる日も近いでしょう」

「、真の姿、だと……!？」

「そうです。フフフ……ご安心ください。その姿の前には真ゲッターロボさえ恐れるに足りぬのですから」

あしゅら男爵は、ドワォ、と効果音が入るのがふさわしい笑いを見せた。そしてその映像では不気味に真紅のゲッターロボGが蠢いていた。カムイも因果応報だと言わんばかりの思いで映像を見ていた。ゲッターロボがゲッターロボに牙を抜く。なんという皮肉だろうか……。

―真ゲッターロボが初陣に飛び立った新早乙女研究所では、ゲッターロボGを使った実験が行われていた。

「どうだ？」

「良好ですが、妙なデータが取れました」

「どういう事だね」

「これを」

それはゲッターGの実験室のゲッター線の濃度が日に日に高まっていて、いるという数値を表す物だった。まるでドラゴンに一刻も早い、進化、を促すかのように。そしてその兆候が最初に現れたのは、真ゲッターロボの完成が間近に迫った時だった。

― 実験室

ドラゴンはここで真ゲッターロボ開発の課程で追加試作された、より効率的、な新型増幅炉心に動力を換装を受け、その起動実験が行われていた。

「ゲッター線数値、40……ドラゴン、起動させます」

ドラゴンの目に光が灯り、実験は成功したかに思えた。だが、早乙女博士は真ゲッターの事例があるので、数値を今のところの限界値までエネルギーを高めるように言う。

だんだんと数値が高まり、現在のドラゴンの装甲材とフレームが耐えられる限界に近づく。

「何だあれは!？」

それに誰もが驚愕する。ドラゴンの目にだんだんと瞳のようなものが現れていくのだ。

「同じだ……この間の真ゲッターと……まったく……」

博士は真ゲッターと同じように、ドラゴンにも瞳が現れた事に目を見開いて息を呑む。そしてエネルギー注入が止むとそれは消えたが、この時から早乙女博士はマシンカイザーの事例と併せてある一つの仮説を立てた、ゲッター線は機械さえ進化させられる、プロトマジンガーをカイザーにまで変貌させたのはゲッター線だと結論づ

け、それと同じことがゲッタードラゴンにも起こり得ると。

そしてそれを示すかのように、ドラゴンはまるで心臓が脈を打つように炉心を静かに唸らせていた。一刻も早く進化をしたいかのよう
に……。

第47話「ドワォ!!」 (後書き)

一部修正しました。

第48話 「大空に呼べばどこまでも必ず助けに来てくれるのさ」 (前書き)

クライシス帝国の登場です。ジャーク將軍の中間管理職の悲哀を描写しております。

第48話「大空に呼べばどこまでも必ず助けに来てくれるのさ」

ーハワイ攻略戦の最中、仮面ライダー達もまた、ある、目的、の為にハワイへ赴いていた。

一つは彼らが保護している御坂美琴のクローンである、妹達、の事を彼女らのオリジナルに当たる美琴に伝えるため。もう一つはクライシス帝国が混乱に乗じてハワイへ一定の戦力を向かわせたためにそれを叩き潰す事だ。

彼らは激戦が行われているハワイにあえて足を踏み入れる。それは漁夫の利を得ろうとするクライシス帝国を探すためだ。

「オアフ島はかなりの激戦のようですね」

「スーパードロイドまでも投入されたというからな。間もなく市街地に入る。気をつけろ」

「了解」

この時期にオアフ島へ足を踏み入れた仮面ライダーは仮面ライダーV3Ⅱ風見志郎、仮面ライダーXⅡ神敬介、仮面ライダーBLACK K R XⅡ南光太郎の3人であった。彼らは上陸時に激戦地から命からがら抜けてきた連邦軍兵士達の援助を行いつつ、クライシスが上陸したと思われる地点に向かった。

3人の上陸はクライシス帝国側もキャッチしていた。とある無人と

なったホテルであった建物の中ではクライシスの幹部らが作戦会議を開いていた。

「何、南光太郎らの姿が？」

「ハッ。南光太郎の他にはライダーV3の風見志郎、Xライダーの神敬介の姿も」

「本郷猛……いや、仮面ライダー一号め……何を考えておるのだ？」

クライシス地球攻撃兵団の最高司令官、ジャーク将軍、は兵団四大隊長の一人の諜報参謀、マリバロン、からの報告に苦々しさを声に出していた。早くも仮面ライダー達に作戦を嗅ぎつけられたという落胆と、この処はRXの援軍として次々に馳せ参じる伝説の、10人ライダー、達に苦杯をなめされ続けている悔しさも多分に含まれていた。そして自分と互いに戦略を読み合う、仮面ライダー達の、始まりの男、本郷猛に今回は出し抜かれたらしい。

「本郷猛は我々の行動を先読みしていたとでもいうのでしょうか」
「……ありえん！！いくら奴がIQ600の天才といっても万能では無いだろう。連邦軍、あるいはCIAなどの系譜を継ぐ諜報組織が嗅ぎつけたのかもしれん……今後は防諜を強化せねばいかな」

ジャーク将軍は場合によっては鉄人兵団と連邦軍との戦いに介入する事を示唆した。11ライダー（イレブンライダー）の行動によってクライシス帝国の戦略基地確保作戦は遅れるばかり。痺れを切らした皇帝からは近々、査察官の派遣がなされると通達があったばかり。ジャーク将軍は焦っていたのだ。査察官が派遣されれば、自分の指揮権に干渉されることは間違いない。皇帝直々の派遣、という権威を振りかざし居丈高に振る舞われるのも想像がつく。また、別の組織である、バダン帝国、に出し抜かれてしまう可能性もある。

—ここらで汚名返上をしなければ……。

そんな彼の危惧は3人ライダーとの対決に耐えうるであろう戦士の選抜を急ぐという形で反映されていた。幹部らはそれぞれの軍団の現時点最強の戦士たちをプレゼンする。

「ジャーク將軍、我が怪魔獣人大隊最強の戦士が作戦参加を申し出ております。ぜひとも作戦には我が大隊を……」

「いいや我が怪魔ロボット大隊こそ此度の作戦にはふさわしいでしょう。私自らが製作しております……」

、機甲隊長、ガテゾーンと、海兵隊長、ボスガンのプレゼンは4大幹部の中でも気合が入っていた。彼らはクライシス帝国の幹部の中でも比較的歴代ライダーと対戦しており、いずれも敗北に追い込まれていた。そのためだろうか。

ジャーク將軍は戦功に焦る部下達に頭を悩ませていた。そして、選抜には時間がかかるな、とため息をついた。

そんな事を知る由もない3人は目的の一つを果たすために、無人の市街地を愛車で疾駆していた。兵団と鉢合わせすることは今の所無

いが、気をつける事にこした事は無い。

情報によれば、御坂美琴はこの戦いに参加している、らしいが……。

「どうします先輩」

「この当たりに連邦軍の機甲師団がいるとは聞いている。間もなく見えるはずだ」

3人はバイクを飛ばしていき、61式戦車が駐車されている区間に止まる。

「あなた方も来ていたのですか」

連邦軍機甲師団の師団長がバイクから降りた3人に気づき、握手を求めてくる。彼ら仮面ライダーは多くの悪の組織と戦ってきた。そのことはこの時代には、伝説、とされ、多くの戦乱で荒んだ地球への10人ライダーの復活は、時代が望んだ、のかも知れない。そしてBLACKの登場、RXへの進化。彼らの宿命はまだ生きているのだ。

「ええ。実はクライシス帝国がハワイに部隊を派遣したという情報を入手しましてね」

「本郷さんの指示で我々がやって来たわけです」

「そうです。奴らは抜け目ないですから」

3人はそれぞれ自分らがやって来た理由を話し、そして御坂美琴の行方を聞く。

「御坂美琴さんの行方は分かりますか？」

「ああ、御坂君ならここより数キロ先で戦ってるはずです。別の部隊から連絡がありました」

「そうですか、ありがとうございます」

風見志郎は師団長に礼を言うと、バイクに跨り、エンジンをかけようとする。

「あ、待ってください。道案内役を付けます」

師団長は陸戦ストライカーユニットの中では比較的快速が出せる、パンター、を纏うウィッチをライダー達の案内役としてつけてくれた。ウィッチを引き連れ、3人は愛車を走らせた。

一しばらく走り、間もなく最前線というところまで来た時、風見志郎は2人と示し合わせて、変身、を敢行した。

「……君、驚かないでくれよ？」

そういうと風見志郎はハンドルから手を放し、一定のポーズを取る。

「……ムウン！変んんッ身ッ！ブイスリャア！！」

神敬介と南光太郎もそれに続く。

「大・変・身！！」

「……変ッ……身ッ！！」

（これが……仮面ライダー……！）

カールスラント出身の若いウィッチはこの世界に伝わる伝説の戦士達の変身を目の当たりにし、思わず感嘆の表情を浮かべる。そしてそれぞれの愛車「ハリケーン」、「クルーザー」、「アクロバッター」（ただしアクロバッターは偽装機能を持っていないのでそのまま）のエンジンを唸らせ、爆音高く、マシンを飛ばし美琴が戦っているであろう戦場へ向かった。

第49話 「マクロス・フロンティア」 (前書き)

今回は短めです。

第49話「マクロス・フロンティア」

一地球で激戦が繰り広げられている頃、フェイトは新マクロス級超長距離移民船団の一つ、マクロス・フロンティア、船団へ足を踏み入れていた。黒江綾香のジェットストライカー開発についていく形で連邦軍の空母に乗り込んだ。フロンティア船団につくまでには戦闘を想定したバルキリーでの訓練を重ね、VF-17「ナイトメア」を扱えるまでに成長した。それは僚艦にエースとして名高い、イサム・ダイソン、が乗り込んでいて、VF-19AやVF-25を駆って躍り出て来るのが毎日だったせいで、エースである彼についていこうと必死になった。その訓練が毎日だった結果、元々魔道師として培ってきた空戦術に磨きがかかった。また、変形機構を有する機体がフェイトの空戦の術を余す所なく再現可能な性能を有していたのもフェイトをパイロット・空戦魔道師の双方として大きく成長させる要因であった。加えて、フェイトの成長の方向性を見定め、叱咤激励できる、師、の存在も大きかった。

「よくやった。今日はメシをおごってやる」

「ありがとうございます！」

「ただしラーメンだな」

「給料、使い込んだんですね……」

「だってさ、釣り竿とかいいのがAmazonとか楽天で入ったんだぞ？頼んじまうしか無いじゃんか」

「……」

フロンティア船団到着前最後の訓練でついにイサム・ダイソンのVF-19Aに追従できるようになったフェイトを褒め、ねぎらう。人心掌握に長けた黒江綾香はこうした事は得意なのだ。食堂でラー

メンを注文し、2人ですする。（フェイトは綾香の釣りキチぶりに
は閉口しているが）

「明日からはフロンティア船団に入る。あそこの連邦軍は、本土、
と違ってペーペーの集まりだから烏合の衆にすぎんが、S・M・S
の連中は相当な腕利きと聞く。奴らを見定めるのも一興だろう」

綾香は最新鋭機を本土以外の正規軍より先に運用しているというS・
M・Sに興味がある素振りを見せ、ラーメンをすすり終わるとすぐ
に自室に戻っていった。

フェイトも自室に戻り、私服に着替えると、地球、にいるなのはや
ヴィータ宛の手紙を書く。訓練直後に撮った写真と、行く前に電話
でヴィータに頼まれていた『FIRE BOMBER』の、LET
'S FIRE、！！や、DYNAMITE FIRE！！、の2
枚のアルバムを同封して。

「宇宙……か。、海、ってこの世界の人達が信じるのも解るなあ……」

手紙を書きながら窓（窓といってもガラスではない）に映る宇宙の
綺麗さにこう呟く。そしてその宇宙に浮かぶ、船、こそが彼女の次
なる戦いの場であった。

そして、格納庫では静かに魔神皇帝がその目覚めの時を待っていた。
そしてこの瞬間にも皇帝は進化を続ける。敵に対抗するために。形
状にも変化が生じる。それは武装にも同じことだった。肩に収納さ
れている、カイザーブレード、が胸の中央エンブレムの部分にも形
成される。それこそが皇帝を操る、真の操縦者、の証、となるであ

ろう。皇帝の意志はたしかにある。物言わぬ機械でありながら意志を持ったのはゲッター線がなせる技であろうか……。

一翌日、空母がフロンティア船団に合流し、フェイト達は居住艦、アイランド1、へ入る手続きを済ませて市街地に足を踏み入れた。

「……これが宇宙船の中？」

フェイトは改めて見る移民船の居住区に驚く。チューブ式リニアモーターカーの窓から見える景色は地球に存在する各都市のそれを再現していた。渋谷にサンフランシスコなどの都市が共存するのはある意味不思議だ。

「とりあえず渋谷に行くぞ」

「……ってなんで渋谷??」

綾香達+フェイトは渋谷エリアに足を運び、娘々という中華料理店に向かった。これが綾香達ウィッチ、護衛の兜甲児、そしてフェイトの運命を変えるきっかけとなるとは、この時の彼女達は知る由もない。そして店員の中には今後の運命の鍵を握る人物がいた。その名は……

「いらっしやいませ」

第50話「フライング・ハイ」(前書き)

マクロス・フロンティア船団編です。

第50話「フライング・ハイ」

―マクロス・フロンティア船団にジェットストライカーへのヒントを得るために来訪したフェイト達はフロンティア船団の居住船「アイランド1」の渋谷を再現した繁華街の中華料理店「娘々」（ニャンニャン）で食事を楽しんでいた。

「……で、中華料理って何ですか？」

「そうか、お前らは知らないんだったな」

中華料理という単語に首をかしげながらヘルマ・レンナルツがいう。ウィッチ達の世界では、中国、に当たる国や大陸は存在しないので、当然そこで発生した文化である、中華料理、は知らない。この中で中華料理に詳しいのは当然ながら兜甲児にフェイト、未来世界滞在時に食した経験がある黒江綾香の3人のみ。3人は他にウィッチ達に中華料理の蒔蓄をしつつ、メニューを頼む。（メニューがどういう料理か分るのがこの3人しかいないため）

「店員さん、お願いしまーす」

「はぁーい」

甲児が注文を頼むために店員を呼ぶ。翡翠色の髪をした若い店員が注文を取りに来る。ゼントラーディの血が混じっている事を窺わせる、10代中盤から後半の少女だった。

「ええとチャーハンの大盛りに、麻婆豆腐、餃子ですね？」

注文を取ると、厨房に戻る。その店員の少女ーランカ・リーーは不思議そうな気持ちで先ほど注文を取った客の服装について考える。

色とりどりの軍服を着ている中学生（？）ほどの女の子達とその付添のいまや化石級に珍しい学ランを着込んだ高校生ほどの青年。

学ランなどはまだ理解できるが、軍服はコスプレかと思わず考えてしまう。大昔の旧日本陸軍の軍服や旧ドイツ空軍のそれを着込んでいるのもこれまた珍しい。思わず考えてしまうが、今はバイト中だ。注文を取りにいけないと。

ランカはせっせとバイトに勤しむ。彼女はもはやこの店の名物アルバイト店員となっている。その事を象徴するかのように常連客らは彼女の行動を微笑ましく見守っていた……。

ーその翌日、フェイトは散歩に出かけた。無論、綾香からの許可は貰ってある。このアイランド1がどういうところか見てみたかった。フェイトにとっては人生初の移民船団。

子供心にワクワクするところがあるのも事実だ。とりあえず渋谷やサンフランシスコを再現した繁華街をブラブラと探索し、なのほらへのみやげものを少々買う。彼女は宇宙船に地球の町を再現する凄さに圧倒されながら、10時にはドールでコーヒーストレイクを楽しみ、サー●イーワンでアイスクリームを注文する。

「美味しい！やっぱりアイスはサー●イーワンだよねっ♪」

一腕時計が午後12時を回ったくらいを指した頃だったかな。艦内

のセントラル・パークで昼食をとろうと足を運んだんだ。途中まで来た時、私にとって大きな出会いがあったんだ……

~~~~~♪

歌が聞こえてきた。それは優しい歌声だった。フェイトは不思議とその歌声に引き付けられ、歌が聞こえてくる方向に向かう。すると、一人の少女が歌っていた。その少女は昨日の中華料理店の店員だった。翡翠色の髪をしているからすぐに分かった。

（昨日の……？）

向こうもこちらに気づいたようだ。歌うのをひとまずやめてフェイトのもとにやってくる。

「あれ？あなた、昨日、店に来てた子だね？歌、聞いててくれたんだ」

「は、はい」

ふた言ほど言い合って、2人は互いに名乗り合う。

「あたしはランカ・リー。よろしくね」

テストロッサ  
「フェイト・T・ハラオウンです」

これがフェイトと後にフロンティア船団の運命を握る事となる、超時空シンデレラ、ランカ・リーの初めての出会いだった。ランカとフェイトはしばしの会話を楽しむ。

「それじゃフェイトちゃんは本星から来たんだ」

「はい。仕事でこの船団に来たんですけど、移民船団は初めてで……」

フェイトはランカに恥ずかしそうに移民船団に初めて来た感想をいう。普段からこの船団に暮らすランカは何かものが新鮮に、目新しく感じられるフェイトをちょっぴりうらやましく思った。

一黒江綾香は連邦軍本星部隊からの指令にしたがって、S・M・Sと接触していた。

初めて間近に見る民間軍事会社という存在に綾香は感嘆の表情を見せる。

「本星の連邦軍直々の要請というのは聞いていたが……こいつは驚いた」

いささか驚きの声を挙げているのはS・M・Sのバルキリー小隊、スカル小隊、のリーダー「オズマ・リー」。かつて地球連邦宇宙軍のエースとして名を残した、腕利きのパイロットである。ランカの兄、だが、血の繋がりは無い。そんな彼の目の前に立っているのは妹よりも幾分若い少女（14歳ほどか）であるという事にいささか動揺している。

「要件は聞いていますね、少佐、」

「ああ。君たちの、ジェットストライカー、のヒントを得るためにウチのバルキリーを見たいというのは聞いている。さっそく格納庫へ案内しよう」

オズマはすぐにスイッチを切り替え、綾香とジェットストライカーの開発に関わっているウルスラを格納庫に案内した。

一巨大な体育館のような空間に無数のバルキリーが整然と並んでいる。サンダーボルトなどの旧世代の機体は無い。戦闘機は全てがAVF計画以降の戦闘機だ。砲撃機のケーニッヒモンスターの姿も見える。

「凄い……これがバルキリー……」

ウルスラ・ハルトマンは初めて間近に見るバルキリーの姿に目を奪われる。自分の世界で実験中の機体とは違う流麗なフォルム、流線形のボディは未来世界というのはどういう事かをウルスラに教えていた。バルキリー乗りとしての側面を持つようになった綾香もこれには感心する。

「VF-25をこんなまとまった数で運用できるとは……。本星でも一航空隊につき一機か二機しか配備されてないっていうのに……クソッ、うらやましい」

綾香はVF-25の姿に思わずため息を付く。そんな綾香にオズマはこういう。

「ウチで試験運用中なのさ。俺たちS・M・Sがな」

「でも、民間の戦力にしては過剰すぎます。しかも最新鋭機をこんなに多く……」

「資本主義って奴だ。金の力は偉大ってことだ」

民間企業の保持する戦力としてはあまりにも過大なことに疑問をもつウルスラにオズマはこう答えた。

それは民間軍事会社が台頭してきた時代の不文律かもしれない。そしてここに来るまでに見た綾香達を思わず落胆させる正規軍の体たらく。無人機に頼り切った軍隊の末路とはどういうものか思い知らせられた。だからこそ彼らが戦力の中樞を担うのだろう。—S・M・Sとはどういうものか。この後、それを垣間見る……。

## 第51話「異聞 1」（前書き）

いきなりですが、仮面ライダーEVEーMASKED RIDER  
G A I Aーに至る原作版世界にTV版の本郷猛が調査に現れる話  
です。（新一号については多くの説がありますが、主流の再改造説  
を取ります）



## 第51話「異聞 1」

一ハワイの激戦の裏側。仮面ライダー一号Ⅱ本郷猛は自身が辿ったもう一つの運命が、歴史、として存在する世界へ、時空管理局の力を借りる形で調査に同行した。

そこは21世紀に入ってまだ間もない頃。また、ショッカーの残党が行動を再開している世界。そこで本郷は自身の恩師と同じ名を持つ老執事と出会う。

「おや、こんな所に来客ですかな」

「あなたは……？」

「ワシは立花藤兵衛、この家に代々仕えてる者ですじゃ。さつ、中にはいってお茶でもいかがですかな」

「それじゃおじゃまさせてもらいます」

本郷はその名に懐かしさを覚えた。一立花藤兵衛は1号からストロングーまでを育て上げ、7人ライダーに父のように慕われた名トレイナーであり、彼らにオートバイの腕を仕込んだ人物。その日々は今や遠い昔に過ぎ去ったが、7人ライダーの心の拠り所となっていた。その人物と同じ名を持つこの老人こそ、立花藤兵衛のありえたもう一つの姿だと本郷は悟った。そして彼が管理しているこの洋館はこの時空の、自分、の家だったのである。

（一そうか。そういう事だったのか……）

本郷猛は複雑な感情を抱いた。この執事はかなりの高齢だが、まだ壮年期までに培ったであろう覇気はいささかも衰えていないのをひしひしと感じた。

そして藤兵衛もまた、この青年―2199年の本郷猛―の持つ雰囲気自分がかつて仕えたこの家の主……この時空の本郷猛―に似ていることを感じ取り、不思議な気持ちであった。

「あなた様の雰囲気はどことなくあの方―猛坊ちゃま―に似ておられる……不思議ですな」

「俺があなたの主に……？」

「ええ。声もよく似ておられる……もう昔の事です……」

藤兵衛が入れた紅茶を口に運びながら本郷は彼の昔話を聞く。それはもう一つの本郷猛と立花藤兵衛の関係とっていいものだった。そして本来なら関係者以外には漏らさぬ秘密もはぐらしながら話した。

「……仮面ライダーですか」

「そうです。彼らは、仮面ライダー、であることで悪を倒そうとなされた……」

（この世界では仮面ライダーの事はTV番組や同様の姿をした超人の都市伝説として語り継がれており、一般人も耳にしていた。藤兵衛は主に、似ている、目の前の青年の正体は分からなかったが、歴代ライダーとなった青年達と、同じ目、をしていることには気づいていた。ライダーの事も話したのはそのためだろう。V3からストロンガーまでは同様に存在するらしいが……

「いやはや長話に付き合わせて申し訳ありませんな」

「いえいえ、お茶まで入れてもらって……ありがとうございました」

本郷猛はひとまず藤兵衛と別れ、時空管理局の調査員達と連絡を取り合った。すると彼らからこの世界で起こった東南海地震で出土し

た『とうの昔に廃墟となった謎の建物』の事を教えられ、すぐに近くの駐車場にとめてある新サイクロンを駆って現地に赴く。

（バダン総統は一体何を考えている……？この世界でも自分の意志を代弁する生命体を操って、何をなさうとする……？）

そう。自分達の世界でのショッカー／＼デルザー軍団の首領は影武者であり、ネオショッカー／＼一端壊滅させたバダンの総統は尖兵だという事は分かっている。バダンに真の総統がいると判明したのは自分達が2190年代に目覚めた後の事で、まだ何も分かっていないのが現状だ。本郷猛は焦りを感じながら新一号へ変身し、新サイクロンの原子力エンジンを吹かした……。

—そして考え込む彼は気付いていないが、その遙か後ろから一人の男が本郷猛を尾行していた。

新サイクロンとほぼ同型のバイクに乗るその男はこの時空での仮面ライダー2号Ⅱ一文字隼人だった。ショッカー残党の暗躍を知り、南米から日本に帰国したのだが、自分とほぼ同型（新一号は体の銀色のラインが二本ある初代仮面ライダー型改造人間の最終強化型なのだが、この時空では再改造された本郷含めて一体も作られていない。本郷が死んでいるためかも知れない）の改造人間に、『またショッカーライダーが現れたのか！？』と驚き、気づかれないようにこっそりとつけている。彼のその姿は手袋とブーツが赤くなる以前の姿をとどめていた。

「奴め……一体何者だ……」

この時の一文字隼人はまだ知らなかった。そのライダーが、体を失わなかった、場合の本郷猛が最終的に得た姿であることを。並行時空の存在を……。

一そもそも元の世界で彼ら10人ライダーが何故眠りに着いたのか。その理由を話そう。

、眠り、についたのは21世紀以降であった。バダン残党の行動が完全に収まり、平和な世の中となったのを見届けた後である。バダン壊滅時にライダーマンがコールドスリープに入ったのを皮切りに、自分達が目覚めること無い事を祈りながら、徐々にコールドスリープに入っていた。

最後まで活動していた仮面ライダーXとストロングアの3人が御坂美琴のクローン体

『妹達』（シスターズ）を保護したのもちようどコールドスリープ

に入るちよつと前のこと。学園都市の一部の企んだ目論見（詳細は不明。一説によれば軍事用改造人間を実用化しようとしていたとされているが……）を潰した後に、最後のバダン残党に囚われていたコールドスリープ状態のシスターズの数体を保護したと神敬介の談。

それから時代が移り変わり、22世紀も終わりが近い頃一ちよつとゴルゴムが表舞台に現れ、BLACKがシャドームーンに敗れた時期一に仮面ライダーを求める人々の祈りが通じたかのように、日本政府から管理を引き継いだ地球連邦政府の手によって、コールドスリープが解かれたわけだ。彼らが南光太郎の存在を知ったのもその頃の事。ただ南光太郎と10人ライダーが出会ったのは、彼がRXへ進化し、クライシス帝国が現れてしばらくたった時である。どのようにして出会ったかは今はまだ語るべき時ではない。いずれは明らかにされるべきことだが……確かなことはある。彼らは人間の、自由、を守るために復活したと。

## 間章その14「FEINT OPERATION」(前書き)

スターファイターについて触れてあります。

## 間章その14「FEINT OPERATION」

—1944年のアフリカ戦線では今日も小競り合いが続いていた。ウィッチ達や連邦正規軍の持ち込んだ最新鋭機とティターンズ残党の戦闘機、モビルスーツが激しくぶつかり合う。その中で戦闘機として意外な猛威を奮っていたのがF-104、スターファイター、である。細長く、尖った機首に向かって先細りになる胴体を持ち、非常に小さい中翼配置とした台形の直線翼を持つこの機体はかつて、先進国の防空戦闘機としてその任を果たしていた。潜在的機動性は熟練度の高い兵士が機体特性を理解した上で操縦すれば後々のターボファンエンジン搭載の機体にも太刀打ち可能ほどであり、思わぬ脅威であった。

機体の仕様は主にイタリア仕様。訓練用に少数の日本仕様もあるが、イタリア仕様のほうが長期運用されていたので戦闘力が高い。この頃、第一線で運用され始めたのは前者である。各戦線から輸送体制が整ったティターンズの整備効率が上がったためだろう。（スターファイターの整備には高度な技術を要するため、熟練整備兵が回された。）

「ライーサさん、どうでした？」

朝の防空の任を終え、基地に着陸したライーサ・ペットゲンを出迎えたのはティアナ・ランスターであった。彼女は基地到着後もマルセイユと彼女の下で飛行訓練を続け、2週間程度前からは第一線での任務が許されていた。（ちなみにタイムスケジュールとしては、昼から夕方は彼女と稲垣真美の担当である）

「敵も整備体制が整ってきたみたい。今までの機体に加えてF3Hや、BAC ライトニング、も混じってきてる。今回はF-100を 2機戦線離脱させたけど、ストライカーに相当無理させちゃったから……」

「そう。初期のジェット機ならいざ知らず、第二世代以降の機体をレシプロ機で撃墜するのは至難の業である。ストライカーユニットは小回りが効くので、なんとか対処できてはいるが、やはり不利なのは否めない。他の部隊では高速を発揮するジェット機とミサイルに戸惑い、ストライカーユニットの損耗率が80%に達した例さえ存在するという。この部隊一改名され「ストームウィッチーズ」になった一や501などに戦死者が出ないのが不思議な位だ。」

「それじゃあとをお願いね。私はストライカーを整備班に届けてからティナに報告してくるから（加東圭子が扶桑へ一時帰国したため、現在の指揮は最先任大尉のマルセイユが代行している）」

「了解です」

「行くわよ真美」

「OK!!」

今回のティアナの敢行武器は、ホ5 20ミリ機関砲、と扶桑刀、愛用のデバイス、クロスミラージュ、である。機関砲が弾切れを起こしても、すぐにデバイスによる戦闘を可能とするためだ。（起動状態のデバイスを初めて見せたときには、あのマルセイユ曰く、目が点になった、と言った程に衝撃を受けたとの事）彼女は、疾風、はやて



をまとって、稲垣真美と共にコスモタイガーやバルキリーの、エクスカリバー、の護衛を受けつつ、この日の防空のローテーションを勤めるべく、所定の飛行に臨んだ。

無線で既に、F-104 スターファイター、に他の部隊が襲われているとの報告も入っている。急がなくては。

一基地の執務室では指揮代行を勤めるマルセイユが愚痴を連邦軍の武官にこぼしていた。上層部との交渉や請求はすべて加東圭子に任せきりだったのを自分が行うハメになったのでゲツソリしている。

「ケイがやってた事がこんなに変だったとは……クソッ、胃に穴が空きそうだ」

「胃薬、飲みました？」

「飲んだよ。最近はりポ●タンDやエプカ●プが手放せん……おかげで昨日はモントゴメリーの奴に小馬鹿にされたぞ」

「あの野郎は無能ですからね」

モントゴメリーとは、バーナード・モントゴメリー、ブリタニア（イギリス）陸軍元帥で、史実ではマーケット・ガーデン作戦を失敗させた事で歴史に名を残した。無能とされている資料も多く、連邦軍が彼に難色を示しているのもマーケット・ガーデン作戦の失敗のせいである。そしてこの武官はマーケット・ガーデン作戦から辛う

じて生還した兵士の遠い子孫にあたり、先祖の戦友を無駄死にさせたモントゴメリーを嫌悪していた。なので事あるごとに、あの豚野郎、などの罵詈雑言でモントゴメリーを罵っていた。（モントゴメリーにしてみれば、起こってもない並行時空の戦いの失敗を棚にあげて罵られるのは心外である。しかし連邦軍から、なんだモントゴメリーの野郎か、と馬鹿にされるほどの低評価を受けているのは落ち込んでいる）

「チキンラー●ンはまだか？」

「卵載つけます？」

「頼む。これがまた美味いんだ」

マルセイユは意外にも未来から持ち込まれた食品などに何ら抵抗感を示すことなく、むしろ積極的に食べていた。未来に行く機会があれば、コンビニに行きたいとの事である。

彼女が近頃ハマっているのは日本の某有名食品加工会社の超ロングセラーインスタントラーメン「チキンラー●ン」。発売以来多くの日本人が魅了されてきたその味はアフリカの星をも、落としたのだ。

ある意味凄いことである。

武官が上手く卵をのつけたどんぶりを机に載せる。マルセイユは待ってましたと言わんばかりにわりばしを上手くわって、麺をすする。その表情は実に幸せそうだ。

「この卵の黄身と麺のハーモニー……ううゝたまらんっ」

一執務が多く出撃できない鬱憤を紛らせているのはある意味連邦軍が持ち込んだ未来食品のおかげかも知れない。マルセイユはそう思

った。

—この世界の歴史は、本来、の流れとは変わりつつある。本来ならば出会うことはない宮藤芳佳と菅野直枝が出会ったのがその最たる例だろう。菅野直枝も本来ならばまだ、少尉、であるべきだが、大尉、であり、坂本美緒と旧知の間柄である事も大きく、ある一つの歴史、からは剥離している。そしてまた彼もそうだった。トレヴァー・マロニー。彼はウィッチ達の排除に躍起になるあまり、ついに超えてはならない一線を超えてしまった。女尊男卑の軍隊への失望と憎悪が彼を大量破壊兵器の保有へ走らせ、彼の秘密格納庫にはRX-78GP02、サイサリス、のレプリカと純粹水爆（その威力は地上で使用すればニューヨークやワシントンなどの大都市を3つ程度クレーターに還元してもまだ余るほどである）の弾頭が隠されていた。そして今日もまた彼のウィッチを貶めるための策略が行われる……。



## 間章その14「FEINT OPERATION」(後書き)

というわけで要望に答えてスターファイターです。

**第52話「アニメじゃない 一夢を忘れた古い地球人よ」 (前書き)**

今回は2199年と1944年の状況にを交互に触れます。

## 第52話「アニメじゃない　一夢を忘れた古い地球人よ」

―2199年。ハワイから米本土の中間地点

モビルスーツは高度な脳神経を持つ遺伝子操作された人間、コードイネーター、でしか手足のごとく扱えない（OSを調整すれば普通の人間でも扱えるが）兵器とされていた。だが、それが普通にモビルスーツが跳梁跋扈する世界―通常の人間が遺伝子操作されたハズの自分達よりモビルスーツを扱える世界―に驚愕していたのはコスミック・イラ73年から偶発的に迷い込んだ一隻の戦艦の面々。情報収集に迫っていたが、自分達の置かれた状況がどういうものか理解し、皆、肩を落としていた。

「並行世界……モビルスーツが普及しきった世界だなんて……」

誰もが落ち込むことだった。しかもモビルスーツの高性能化が極まり、小型化さえ始まっている世界に迷いこんでしまったという事実だった。しかも驚くべきことはこの世界のモビルスーツの動力源は、彼らの世界での常識である、バッテリー、もしくは原子炉よりも世代の進んだ動力源、核融合反応炉、とそれを凌ぐ未知の動力源である事。その威力は、この3日前に襲撃された部隊で思い知らせられた。（地球連邦軍のテスト部隊の一つ。装備は最新鋭機の一つ、F90?Y クラスタガンダム、、RX-104 オデュッセウスガンダム―通称ペネローペー、を中心に、量産機はジェスタやジャベリン、スタークジェガン、）その部隊のモビルスーツは艦所属の機体では最強を誇る、デステイニー、や、レジェンド、すら圧するほどの力を発揮、インパルス、を容易く達磨にして退けた。

その際に見せられたオールレンジ攻撃。

「オデュッセウスの力を思い知れッ！！ファンネルミサイルッ！！」

大型機の大気圏内でオールレンジ攻撃を実現する超小型各攻撃端末。彼らの常識でのオールレンジ攻撃端末、ドラグーン、より機敏に動き、それでいて正確に誘導される。さらに小型機は小型にも関わらず、ビームの速度や収束率さえ自在に操作可能なビームバズーカ砲を装備し、2機のビームシールドをも貫通する火力を見せた。更にデステイニーのそれより完成された残像、それも、質量のある残像、でデステイニーを翻弄した。これは彼らの持つモビルスーツ関連技術は自分達のそれより洗練され、完成されたモノであることを妙実に示していた。

「クソッ、何なんだよアイツら！」

デステイニーのパイロットである、シン・アスカ、は自身と愛機がどこの馬の骨とも知れぬ輩に翻弄された事に憤りを隠さない。しかも自機の武装を全て見切られたのだから当然であった。しかしまさか異世界のモビルスーツがここまで強力だとは誰も予想だにしなかったのだ。

「わからん……だが、この世界にはザフト軍は一切存在していない



のは確かだ。このままでは海賊まがいのことでもしなければ物資を確保できない」

彼一レジェンドのパイロットのレイ・ザ・バレルーの言うとおり、この世界には彼らの国―プラント―は存在していない。彼らの母艦の装甲には敵量産型小型モビルスーツの放った対艦兵器ショットランサーの不発弾が無様にも突き刺さったままだが、それを取り除ける設備のドックに入らない限りはそのままだ。どこかの基地の設備を分捕らない限りは……。そして彼は気づいていた。プラントが3年前の戦時体制の時の報告書に興味深い一文が記されていた事を。そして当時プラントをフリーダム以上に震撼させた、光の翼を持つ、ガンダム、の写真と共に。

「あれはまさに、アニメじゃない、って感じだったな」

シン達はそう形容する。それほどまでに敵は巨大なのだ。彼らは生き延びられるか？

―地球連邦軍の前線司令部では新鋭モビルスーツのテスト部隊から報告が入っていた。前線視察に訪れていた、ジョン・コーウェン、中將は部隊が撮影した敵モビルスーツにある特徴があることに築いた。

「これはもしかしてルナツールの駐留部隊から報告が上がっていた、プラント、の機体ではないか？」

ジョン・コーウェンはルナツールの部隊が遭遇した摩訶不思議な事態のことを知っていた。彼らは試作次世代波動エンジンの暴走で、体感時間にして数か月の間、コスミック・イラと呼ばれた世界に一時的に転移していた。そこで人類同士の戦争を止めるべく、同要塞防衛艦隊が介入。最終的に反応弾や波動砲で恐るべき思惑を打ち碎いたという報告が来ていた。写真のガンダムは当時に敵対していた現地の国家の一つ、プラント、の機体であるのが分る特徴があった。それは当時のプラントのフラッグシップ機、プロヴィデンス、の後継機と容易に分かるものだ。

「プラントですか。しかし彼らはまだ黎明期で、ビームシールド搭載には至っていないはずですが」

「異なる時間軸から来たかもしれないだろう。5年か10年か……」

これは計らずも当たっていた。自分達が遭遇した時よりも未来から来たならビームシールドを実用化できても不思議ではないからだ。しかし実際はその予想の範囲より短い期間の未来であった。予想を上回るスピードでコスミック・イラの技術は進んでいたのだが、その要因の一つが自分達にある事にこの時の連邦軍は気付かなかった。

「閣下、ベルリン付近で未知の超大型モビルスーツを鹵獲したとの報告も入っております」

「何？サイコガンダムの生き残りか？」

「いえ、恐らく、地球連合軍、がルナツールからハッキングしたサイコガンダムのデータを元に作ったと思われる機体との事です。カミ

ーユ・ビダンがZガンダム（レストア機）で沈黙させたようです」

この時期にはカミーユ・ビダンは精神崩壊したが、ファ・ユイリイやジウドー・アーシタ、アムロ・レイの尽力もあって復活し、エウーゴ系の連邦軍部隊へ再入隊していた。彼の復活のきっかけとなったのはハマーン・カーンが倒れた事と、意外にも、かつて剣を交えた元・ティターンズの、ヤザン・ゲーブル、が彼の事を訪れ、再起に一役買った（第一次ネオ・ジオン戦争時よりヤザン・ゲーブルは連邦軍には戻らず、ネオ・ジオンへ籍を写していた。理由はZやZと『互いの腕を競ってのフィジカルな殺し合い』をするためである。）。

「……そうか。彼には辛いことをさせてしまったな」

「いえ、パイロットは無事なようです。サイコガンダムと違い、胸にコックピットがあったおかげだそうです。ただ、相当な強化処理がなされていたようですので治療のためにニュータイプ研究所へ身柄を移送しました」

（この時期の地球連邦軍はネオ・ジオンの先進的な強化人間関連技術を摂取、更に安定性を高める事に成功していた。強化人間を救う研究が行われ始めたのは、多くのニュータイプ及び強化人間の悲劇に憤慨したレビル將軍の勅命によるものとされている）

そのパイロットが誰であるかは後に判明する。それは……。

「了解した」

「対策の方ですが、ハワイ攻略部隊で待機しているロンド・ベルに量産型F91とり・ガズィ・カスタムを配備することにしますが、

よろしいですか」

「ウム。パイロットのほうはどうするのだ？」

「コウ・ウラキ少尉とジュドー・アーシタのつてでエルピー・プルに連絡をとってあります」

「あいわかった」

—この世界の数少ない、救い、の事例の一つ。それはエルピー・プルがエウーゴに合流、戦後も存命した事だ。現在は13〜14歳ほどに成長し、ジュドーの故郷、シャングリラ・コロニー、でジャンク屋をしながら予備役軍人として暮らしている。連絡をとれたのはジュドーが軍に戻ったおかげである。ジョン・コーウェンはため息をつきながら指令を発した。

—1944年では501統合戦闘航空団がスクランブルに入っていた。高速型ネウロイが複数出現したからだ。姿はかつての米軍の高高度偵察機、SR-71 ブラックバード、に酷似していた。

「レーダーにネウロイ反応あり。スピードはマッハ3を超えています

「！！偵察機からの撮映によれば、姿はSR-71 ブラックバードに酷似す！！」

「総員、戦闘配備！！ミーナ中佐と坂本少佐を呼び出せ！！」  
「了解」

シナプスはミーナと美緒を呼び出し、対策を練る。作戦室では連邦軍の高官達が対応を協議している。

「高速型ネウロイが出現したと！？」

「そうだ。マッハ3の速度でこちらへ接近している。……迎撃は可能か？」

「可能です。ウィッチに不可能はありません」

美緒は自信満々に言うと、今回の任務に501の中で適任者の名を言う。

「シャーリー大尉に迎撃させます」

「彼女なら今回の任務に最適です。P-51を装備してますし、何よりも彼女は速いですから」

ミーナもシャーリーの速度を信頼し、推薦する。

「イエーガー大尉にか。グラマラス・シャーリーと言われる彼女なら大丈夫だろう。こちらも念のためストライクZの護衛をつけておこう。ジュードー君に連絡はしてある」

ストライク・ゼータとは、Zガンダム追加試作機に大気圏内用の各種オプションパーツを付けた状態を指す。アナハイム・エレクトロニクス社がZ系の運用法の提案替わりに此度の補給で支給したぜ

いたく品で、テストも予ての出撃だ。

既にジュドーはZで待機中だ。シャーリーも命令が伝達されるとすぐに後部第3エベレータに走り、P-51を纏う。

「ジュドー・アーシタ、ストライクZ行きます!!」

ストライクZがカタパルトから射出され出撃する。負け時とシャーリーもお決まりの台詞をかつこ良いう。

「シャーロット・E・イエーガー、出る!!」

2人はかつこ良く出撃したが、シャーリーが出撃していった甲板に慌ててルッキーニが出てくる。

「シャーリー、まさかあのままで……!?!」

青ざめた顔でそういう。実はこの日の前の日の夜にルッキーニはうつかりシャーリーのP-51を発進促進システムから倒して分解してしまったのである。慌ててガワは元に戻したが、工学的知識がないルッキーニに完全に組み立てられるはずはなく、部品が余ったりした。それに気づいたのはストライカーユニットの整備をしていた連邦軍側のメカニックだ。

「おいこれ……」

「た……大変だ!! 急いで中佐に報告だ!! ルッキーニちゃん、どうしたんだ青ざめた顔して」

何かあったことを察知した整備兵はルッキーニをミーナのもとに連れていく。無論、この後、美緒とミーナが多いに慌てたのは言うま

でもない。

**第53話 「太陽よ 愛に勇気を与えてくれ!!」 (前書き)**

本編を進めます。



### 第53話「太陽よ 愛に勇気を与えてくれ!!」

一御坂美琴はスバル・ナカジマを救い、そのまま彼女に加勢した。そして美琴にはさらなる強力な援軍が到着する。それはV3、X、RXの3大仮面ライダーであった。

「それじゃ自分は部隊に戻ります」

「案内をありがとう。……そうだ。最後に頼みがあるんだが」

V3は思いついたアイディアを実行すべく、ウィッチに頼み事をする。その内容を察したXライダーは溜息をついてRXに愚痴った。

「まゝた風見先輩の悪い癖が始まった」

「何ですそれ？」

「あの人は無駄に目立ちたがり屋でな……派手に登場したいんだよ」

「ハハ……風見先輩らしいですね」

そんな2人の溜息と呆れを他所にV3のアイディアは実行に移されたのである。

内容は7.5 cm KWK 42を撃ってもらい、その爆発を背に3人でカッコよくバイクで現れるというもの。もちろんV3がセンターポジションをとって。(後輩2人はライダーの縦社会の法則で逆らうことはできないので諦めた)

「それじゃ行きますよー!!」

「頼む!」

7.5 cm KWK 42が盛大に炸裂する。その中を3人は突

っ切る。そして愛車ごとジャンプして、彼女、達の元へカッコよく馳せ参じた。

一電撃を迸らせ、兵团を蹴散らす美琴だが、そこにタイミングよく爆発と爆音が響き、思わず振り返ると。盛大に地面が吹き飛ぶのを芝居がかったバイクの音と共に3人の仮面を被った男達が颯爽と現れた。一そう。それは実にそう形容するのが正しいと思える場面だった。3人の、ヒーロー、が爆炎に爆音と共に現れるなどという場面などは1970年代から80年代初頭までに作られた特撮ヒーロー番組を見ない限りはお目にかかれないシーンだ。

しかしここは戦場だ。そんなアホな行為をするなんぞこのバカが……と美琴はそう思ったが、その男達は本当にヒーローだったと認識するのにそう時間は掛からなかった。

「仮面ライダーV3、只今参上!!」

「仮面ライダーX!!」

「俺は太陽の子!! 仮面ライダーBLACK RX!!」

一ご丁寧にポーズを決めての名乗りまであげている。確かに鎌倉時代頃には戦争の際にもそういう習慣があったと聞く。実に太時代的な方法だけど、無駄に迫力はあった。でも見かけだけで戦いができるほど甘くない。

「美琴ちゃん、スバルちゃん! ここは俺たちに任せろ。……トウ!」

「トゥア!」

「っえっ!? ち、ちよっと!! なんで私の名前を!?!」

V3が自分の名を知っている事に驚く美琴のよそに3人の仮面ライダーは地面に降り立つと、その見かけに違わぬ力で続々とやってくる兵団の兵士達をなぎ倒していく。拳や蹴りだけで分厚い装甲を一撃でぶち抜くその破壊力は紛れもなく本物だ。身体能力も通常の間を明らかに超越しているのが見て取れる。

「……っと、アイツらだけに任せておけないわね。私たちも突っ込むわよ!!」

「うん!」

『おおおおおっ!!』

美琴とスバルも3人ライダーに負けじと突っ込む。美琴は電流でアスファルトの砂鉄を剣の形に精製して、スバルはリボルバーナックルを唸らせて、足のデバイス、マッハキャリバー、の車輪をフル回転させながらそれぞれ遮二無二、突っ走った。

美琴の砂鉄の剣が兵団の兵士を派手に切り裂けば、スバルがリボルバーナックルで繰り出す拳やマッハキャリバーを纏った足の蹴りで装甲をぶち抜く。仮面ライダー達も負けてはいない。それぞれの技を見せて派手に決める。

『V3きりもみ反転キィーック!!』

V3の力と技が唸れば、Xがジャンプして高空から急降下し、ライドルスティックで相手を一刀両断に断ち切る。このライドルを駆使した攻撃がXライダーの真骨頂。

『ライドル脳天割り!!』

そして極めつけはRXの高い身体能力を生かした後ろ向きの宙返りの後に繰り出す、ブラックからさらに3倍の破壊力を誇るキック。

『RXキィィィーック!!』

これらの必殺技が唸り、兵団の前線を見るうちに後退させていく。目指すはこのオワフ島の前線防衛陣地。5人はひたすら突っ走る。まさに怒濤の勢いと言っても過言でもない。

彼らの通った後には沈黙させられた兵団兵士の屍が転がるだけだ。

「……答えてくれる?なんでアンタ達は私の名前を知ってるわけ?私はこの時代にはもうとっくに、死んでる、ハズの人間で、学園都市にだって私がいた頃の記録はもう殆ど残ってないはずなのに……なんで?」

走りながら美琴は仮面ライダー達に問う。何故、度重なる大戦の影響で散逸し、記録が殆ど残っていないとされる時期に生きた自分の名を知ってる理由を。名前だけは分かったとしても、どのような容姿をしているのか、どんな能力なのかまでは分からないはずだからだ。しかも一目見て自分を『御坂美琴』と認識した。それは自分を見たことがあるか、何万分の一の偶然で、世界中に散ったはずの自分のクローン体にも会わないかぎりには不可能なはずだからだ。これに銀の仮面と額に輝くVとVの男ー仮面ライダーXーが答えた。

「……それは俺達もそもそはこの時代には、死んでいくべき、人間だからだ」

「どういう事？」

「俺達がこうして生き長えている理由は体を改造され、人間であつて人間ではない、改造人間、になったからだ」

「……そんな！？サイボーグなんて学園都市の技術でも実用化できてないはず……」

「そうだ。サイボーグはこの時代の技術でもようやくと実用化されたばかりとされている。……だが、はるか昔に実用化に至っていた組織があつた。ヒトラードイツ、ナチス第3帝国」

「だ、第3帝国！？そりゃあそこには色々とおカルトじみた技術があつたって噂があるけど……」

美琴は信じられない。第3帝国がそのような超技術を持っていたなら第二次大戦でドイツが敗北するはずがないからだ。むしろ世界に君臨してしかるべきだ。

「戦時中には間に合わなかったが、残党が戦後にこの時代以上の技術を以てして完成させたのさ。その証拠が俺達の体さ」

ライダー達はハッキリと言う。自分達が改造人間であることを。そして自分達の本来過ぎずだった時間を。

「俺とXは信じられないと思うが、元々は1970年代に20代だった世代の人間だ。身体的に最も充実した大学生だった頃に体を改造され、その頃の姿のまま生きてきた。最も俺とXの場合は特殊で、俺はライダー1号と2号に、Xは父親が自分の命と引換えに、それぞれ瀕死から救うために改造された。……知っている人間が老いて死んでいく中、俺達は若い姿のままというのは辛かったがな……」

それは改造された故の悲劇だった。自分達は老いる事はないが、他の人間達はどんな年をとり、死んでいく。友人達や慕っていた人物も……。それを乗り越え、永遠と思えるほどの寿命を得た引換えに負った使命に殉じる事を選んだ彼らに美琴は圧倒された。

「俺達は君のことだけでない。上条当麻の運命についても一部だけが知っている」

一上条当麻。その単語に美琴はピクツと反応した。それは彼女が想いを寄せている男子高校生だ。美琴は元いた時代で彼への想いを日に日に強めていた。そして自分がいた時期から少したった後の時期に起こった戦争の中心に関係する事を知った今となってはそれは最大に高まった。まさか……!?、と感情を抑えきれない。

「君には辛いことだが……いいかい」

V3の言葉に美琴は頷く。V3は上条当麻が辿った運命を告げる。それを聞く美琴の表情は暗い。

「……なんでアイツのことを教えてくれたの?」

思い人の運命を知り、泣きそうになっている美琴だが、何故V3がそれを自分に教えたのか、疑問を持つ。

「上条当麻の運命を知った。その事を活かすも殺すも……たとえ大まかな歴史の流れは変えられずとも、あの少年の運命くらいなら変えられる。それをモノに出来るかは君次第だ」

この時、美琴が知ったのは運命だけでなく、上条当麻がひた隠しに

してきたある一つの事。その全てだ。V3達は世界の暗部に関わった経験を持つので、その事も知っていた。それも教えたのだ。

一御坂美琴はこの日、自分と上条当麻に待ち受ける運命に抗うことを選択した。それが元の時代に戻った後の自分に出来るせめての運命への抵抗だからだ。

「あれは火炎放射器……待ち伏せしていたか」

前方に火炎放射器を持つ兵士の姿が見える。どうやら一斉に火炎放射を放つつもりだろう。V3はすぐにRXに号令を出す。

「RX!!」

「分かってます!!」

その瞬間、RXのベルトがさらなる光を放ち、彼が持つ、この場に最適な姿へ再度の変身をRXにもたらす。

『俺は炎の王子!! RX・ロボライダー!!』

一ロボライダー。いかなる灼熱にも耐えうる装甲を持つ2段変身の一つ。黒と黄色を主体としたボディカラーを特徴とする。ロボライダーが前に出て火炎をその身で防ぎながらエネルギーを吸収する。

「ば、馬鹿な!! 数千度の火炎を受けてなんとも無いはずがない!」

火炎を受けても平然と歩いて来るロボライダーに恐怖した兵士たちは思わず悲鳴を発する。ロボライダーは彼らに言い放つ。お決まりの決め台詞を。

『俺は炎の王子!! 炎の力は……俺のエネルギーだ!!』

一戦いは転換点を迎えようとしていた



## 間章その15「F-104とSu-35」

ーアフリカ戦線での膠着状態が続いて幾日だろうか。ティアナは疾風を纏っての防空任務に就いていた。今回の敵は、F-104 スターファイター、だ。第二世代ジェット機の中では比較的長期運用されていた名機。敵もいよいよ本腰を入れてきたという事か。敵影が視える。だが、そのF-104部隊の機体や尾翼に描かれた、十字軍騎士、のエンブレムは紛れもなく、この間始めて交戦したあのクルセイダーのパイロットのそれだ。

案の定、通信が入る。その声は間違い無くあのパイロットのものだ。

『よう、お嬢ちゃん達。また遊びに来てやったぜ』

『……で、今日はなんの用なの？』

『今日は部隊の機体を新調したから慣らし運転って所だ。マルセイユのお嬢ちゃんにも伝いといてくれ』

気楽な口ぶりとは裏腹に彼は一級の腕を持つパイロットである。この間は見事に弾を切らされて逃亡を許された。彼のような好人物が何故ティターンズにいるのだろうと考えられさせられる。恐らく、まだ右派が実権を握る前の創成期から在籍した古参兵なのだろう。

『伝えとくけど……どう伝えればいいのよ』

『俺のコールサインを言ってくれ。そうすればマルセイユの嬢ちゃんも分るだろう』

彼は自らのコールサインを名乗る。それはエンブレム通りの、クルセイダー、だ。あえて名乗るということは自身の腕によほどの自信を持つのと、自分達に敬意を払っている（大概のティターンズ兵士

はウィッチを侮るあまり、見下しているが、彼を初めとする一部の将兵は敵を見くびらないで敬意を払っている。」のだろう。軍人としては実に有能かつ高潔な人物だ。

「そう。彼と「ストームウィッチーズ」の間には奇妙な友情が芽生え始めていたのだ。不思議なことだが、人間同士は分かり合えるということの証明でもあった。」

『さて、始めるか』

彼一クルセイダー1は新たな愛機、F-104 スターファイター、のエンジンを吹かしてドックファイトに入った。彼の部下達も皆、グリップス戦役を生き残った強者ぞろいだ。無論、ネウロイに遅れを取るような未熟な兵士は一人たりともない。それがティターンズのアフリカ戦線を支える航空部隊と自負する彼らの、誇り、であった。

、キイイイイン、とエンジンの爆音が響き渡る。機体の識別標識は改装前のイタリアのそれだが、主な改良点として機銃が搭載されているのがこの機体の大きな特徴だ。彼らはかつての航空自衛隊が追求した空戦術を駆使し、ティアナと稲垣真美に一泡吹かせる。

「……え!?!」

ティアナは背後を突かれた事に焦りを感じつつも日本（扶桑）機特有の超機動性で背後を取り返そうとするが、彼らの相互に補助しあう機動の巧みさに思惑を潰される。

「やっぱりそうさせてはもらえないかっ!! 真美、40ミリ砲は!」

「こいつは弾は多くないから無駄遣いは避けたいけど……そうは言  
ってられない。私に任せてっ！」

真美はティアナを援護すべく40ミリ砲を発射しようとするが、そ  
うはさせじとスターファイターの一機がミサイルを放つ。見事な援  
護行動だ。射撃体勢を解き、回避に移る。（この時期、ミサイル対  
策の一環として未来世界のジェット機のマニューバーを伝授したり、  
チャフやフレアの開発が急がれていたが、それが開発されたり、完  
全に普及するのは翌年以降となる）。幸い彼女のストライカーユニ  
ットは日本機の中では機動性は低いが、他国よりは小回りが効く、  
飛燕、なのでミサイルの特性を利用するように回避する。味方の、  
エクスカリバー、や、コスモタイガー、も一機たりとも敵を落とせ  
ていない。コスモタイガーにも遅れを取らないスターファイター側  
の戦術の巧みさが光っていた。それは敵ながら見事だとティアナは  
感心していた。

一方、ロマーニャ方面では504に打撃を与えるべく、ティター  
ンズは方面軍指令自ら戦闘機に乗り込んでいた。彼は青年期には戦  
闘機乗りだった人物で、ロシア系の軍人の名家の出。自らが駆る戦  
闘機も自分の、祖国、のそれを選んだ。それもティターンズの持つ  
機体では現時点最強の一角を占める『Su-35』をわざわざ配備  
させていた。彼はその性能を以てして504に立ち向かった。

一雲から突如として出現した敵の新型戦闘機は大口徑機関砲を斉射して504の一人「ジェーン・T・ゴッドフリー」のストライカーユニットを一撃で粉碎、撃墜する。

「ジ、ジェエエーン!!……くそっ!! 敵の新型か!？」

ドミニカ・S・ジェンタイルは敵の新型戦闘機の流麗な姿とその圧倒的な破壊力に戦慄する。そしてその姿に誰かがこう言った。

「そんな……Su-35!？」

そう。これぞ第4世代の中でも最強レベルの戦闘力を誇る機体。米軍機をカモに出来ると評された変態的機動を可能とした旧・ソ連最強の戦闘機系列。

『そうだ。お嬢ちゃん達、コイツに傷を入れられるかな?』

—Su-35の猛威はこれからだ。コックピットで彼はそう微笑み、スロットルを全開に開いた。

マッハの恐怖が504に襲いかかる……。



『ある地球連邦軍軍備管理担当高官の報告』 (前書き)

ストライクウィッチーズ世界への援助を連邦政府がどうやりくりしているか、を描く小話です。

## 『ある地球連邦軍軍備管理担当高官の報告』

一現時点での地球連邦軍による、1944年、への援助報告一

一『ティターンズ残党軍』による行動を鑑みた、先方の科学力を向上させる手法は成功しつつある。ジェットストライカーユニットの生産型の完成は1945年度には間に合う。まだ直線翼機の段階だが、47年までには、F-86、MIG-15、相当の後退翼機への移行も可能となるだろう……。一同盟国の扶桑皇国には既に超大和型戦艦の図案（22世紀には超大和型の3面図と正式な諸元案が発見されており、連邦軍では2210年以降の計画である、ヤマトの後継艦などに応用する予定）を提供しており、同国の主力制空戦闘機はA7M、烈風、及び、N1K2-J、紫電改、キ84、疾風、へ早期移行しつつある。その他はリベリオンへ、F4F、の提供、ブリタリアへはスピットファイアMK-?、カールスラントへBf109Kを提供予定である――

（2199年時点での地球連邦政府は21世紀以降の米国の政策的失敗による失策による混沌、統合戦争当時の敵対国家に対して悪感情を持っており、大統領直々の指令で扶桑・ブリタリア・カールスラントへは大戦後期以降の高性能戦闘機の完成機もしくは図面とエンジンを提供するが、ガリア・オラーシャにはそれより一世代前のものを提供するようにと通達が出されていた。これは未来世界の統合戦争当時に連邦政府樹立を急いだ日本と英国に敵対した国家への嫌味もこめられている）

一陸軍軍備については目下、M1ガーランド及びM1タービンを提供し、各地に機動科のMS師団、機甲科の61式戦車10型及びガンタンク?の機甲師団を派遣予定である。

（61式戦車10型とは、連邦地上軍がエウーゴ系とティターンズ系に2分されている中、エウーゴ系の地上軍が戦力の一環として、もはや退役間近と言われる61式戦車の最終生産型をさらに大規模に改造して生まれ変わらせ、従来型の代替として正式採用した車種。デラーズ紛争までに戦場の花形がモビルスーツを始めとする人型機動兵器へ移った弊害で、旧態依然とした兵器体系である戦車の開発予算が打ち切られた為の苦肉の策。主砲もモビルスーツの重装甲に対抗するために更に強力な200ミリ滑腔砲を装備した）

—また、ティターンズの行動により、ネウロイの進化が懸念されており、その為にも陸・空双方のストライカーユニットの近代化を急がせるべきであり、またアフリカ戦線のティターンズ航空部隊の面々は皆、平時ならアグレッサー部隊に配属されてしかるべき人材であり、我が方もそれと同等の人材の派遣をすべきである—



—これらが書かれた報告書を読む藤堂平九郎参謀本部（軍令部へ改称予定）、総長の表情は険しかった。ティターンズ残党軍・アフリカ戦線を張っている航空部隊の強力な人材の布陣が勇猛果断な彼をして、頭を悩ませていたのだ。

「まさか、彼、がアフリカ戦線にいるとは……」

彼をして悩ませる要因となっているのは、クルセイダー1、の存在。彼はグリプス戦役でネモやリック・ディアスをセイバーフィッシュで、鴨狩、したという逸話を持つほどのエースパイロット。白色彗星帝国との決戦で戦闘機乗りのエースを多く失った正規軍にとっては喉から手が出るほど欲しい人材。地球至上主義にも染まらず、自分の行き方を貫いた稀有な軍人。

彼に対抗出来るのはそうそう今の連邦軍内にいない。こうなっては連絡を取る人材は……

藤堂は彼が知る限りで唯一手空きで、クルセイダー1と対等に戦える腕を持つ一人のパイロットに連絡すべく、電話に手を伸ばす……。

一連邦軍財政課は予算のやり繰りに追われていた。前大統領の任期満了に伴う選挙で勝利した新大統領が議会でぶちまけた、マル5再建計画、が議会に承認される見通しとなった事で、余った前年度予算を使いきらなければならなかったからだ。

『課長！！宇宙軍がジャベリンの配備予算を申請してきてます！！』  
『課長！！空軍が航空基地設備の新調予算を申請してきておりますが……』

『課長！！海軍がアクア・ジムとザク・マリナーの後継機開発予算を申請してきてます！！』

『ええーい、3軍の担当者を待たせておけ。どれを優先するかアミダで決める』

『は、はい！！』

財政課課長である宇宙軍少将は、その禿上がった頭を撫でながら中間管理職の悲哀に男泣きしていた。

そして3軍の予算でどれを最初に執行させるか、担当者呼んでアミダくじをやらせ、買ったほうを優先的に執行する事を決めた。連邦軍財政課の夜は更けていく……。

## 第54話「ソロモンの悪夢」(前書き)

今回はガンダムがメインです。

## 第54話「ソロモンの悪夢」

―第二次・ネオ・ジオン戦争後のジオン残党軍は指導者であったシャア・アズナブルを失って一端、消滅寸前に陥ったが、ジオン公国時代のエース達が合流した事により、その組織を復興させる事に成功していた。その内の一人が「ソロモンの悪夢」と異名をとっていたアナベル・ガトーである。彼はデラーズ紛争当時、当時の愛機「ノイエ・ジール」でサラミス級巡洋艦に特攻したが、奇跡的にコックピットブロックが無事であり、特攻から1時間後に通じかけた民間船に回収された。その民間船の船長がジオンシンパだったおかげもあり、彼は匿われた。負傷が癒えたのが第二次ネオ・ジオン戦争終結時だったので、数度のジオンが絡んだ戦争には馳せ参じる事はできなかった。

―数年前 月面第二の都市「グラナダ」

「こ、これは……」

「AMS-119 ギラ・ドーガ。此度の戦争でネオ・ジオンが主力として用いたモビルスーツです」

「素晴らしい！ジオンの魂を確実に受け継いでいる……」

そう。ギラ・ドーガはザクの基本設計を受け継ぐ汎用量産型モビルスーツであり、ジオン系量産型モビルスーツの集大成なのだ。その性能はこの当時の連邦軍主力である「ジェガン」と比べても遜色なく、名機と呼べる。ガトーは数年の療養で訛った体とカンを取り戻すべく、この機体で訓練を重ねた。

「いかがですか大尉……いえ、少佐」

（一般にはガトーの最終階級は大尉と知られている。デラーズ・フリート所属時の少佐への進級は非公式なものである）

「反応速度、運動性もゲルググとは比べ物にならん……流石はネオ・ジオンの最新鋭機……」

ガトーは僅かな期間で目覚しい進歩を遂げたモビルスーツに感嘆しつつ、すぐに順応。匿ってくれたシンパ達に最大限の謝礼をし、その機体を持ってネオ・ジオン残党軍へ合流。ギラ・ドーガを自らのパーソナルカラーに彩り、自らの復活を以てしてジオンの中興を誓った。

ソロモンの悪夢の復活に色めき立つ一人の男がいた。ガトーが宿敵と認めた連邦軍きつてのエースパイロット「コウ・ウラキ」である。彼はデラーズ紛争後、ティターンズを嫌ってエウーゴに合流し、第二次ネオ・ジオン戦争ではエウーゴ時代の戦友に誘われてロンド・ベルに属した。第二次ネオ・ジオン戦争・白色彗星帝国戦後はその腕を買われ、入隊時同様にテストパイロットに戻って、RGM-122「ジャベリン」のテストパイロットの一人として月面都市「フオン・ブラウン」に赴任していた。その時に目にしたニュースで前線復帰を決意したのだ。

『連邦軍第16水雷戦隊がジオン残党軍の襲撃で壊滅したとの情報が入りました。この戦闘では青と緑のギラ・ドーガが目撃されています。このパーソナルカラーはかつてのエース、ソロモンの悪夢、以外には考えられず、参謀本部を震撼させております……』

「……生きていたのか、ガトー……!」

かつての宿敵の健在に驚きつつもコウはすぐに行動を起こした。ジャベリンが正式採用されてすぐに前線復帰願いを提出。折しも白色彗星帝国戦後の人材不足とレビル將軍の復帰が重なり、すぐに受理された。そしてコーウェン中將の肝いりで小型モビルスーツに用いられる技術で近代化改修されたガンダム試作3号機を受領してジオン残党軍との戦いに臨んだのだ……。

「……という訳です、少佐」

コウは乗り込んでいるハワイ行きに補給船替わりに物資運搬中の強襲揚陸艦「サラブレッド」の休憩室で自分がどのような経緯で前線復帰したのかを、向かい側に座っている旧・日本陸軍の軍服を来たウィッチー加東圭子に話す。

彼女もアフリカ戦線から扶桑に帰還した後、タイムふろしきによる若返りを果たし、前線復帰を決意していた。外見年齢は彼女の希望ギリギリの14歳（ロリータと紙一重だが、なんとか容認の範囲内だった）。すぐにアフリカに戻りたかったが、連邦軍に恩を売る事を画策した上層部の命令で未来世界に派遣されてしまったのだ。

「なるほど。私の場合は上から無理やり言われちゃったんだけどね……」

圭子は自分が未来世界行きを命じられた事に複雑な心中をのぞかせる。元の時代での指揮をマルセイユに任せたいが、私の強いマルセイユが部隊をまとめられているのか、それが心配だった。

「おねーちゃんも大変なんだね」

横でチョコハプエを食べながらエルピー・プルが言う。無邪気なその声は圭子には暖かく感じられ、微笑ましい。自分がアレくらいだった時期はもう、10年、以上昔のことだなあ……と懐かしく思えた……。

一同海域 旧・ジオン公国軍地球方面軍潜水艦隊所属ユーコン級「U-505」

「少佐、ペガサス級を補足しました。形状から言って、初期型と思われるわね」

「ペガサス級強襲揚陸艦……つくづく私も縁があるな。モビルスーツの用意はどうか」

「ハイゴッグ及びズコックE小隊とゲタ付きのドライセンが一機出せます」

「私も出る。ペガサス級ならガンダムタイプが必ず搭載されているは

ずだ」

「ご武運を」

一なんという宿命だろうか。コウ達の乗るサブレットを補足したのはアナベル・ガトーが各地に点在する残党軍と連絡をとるべく乗り込んでいたユーコン級潜水艦だったのだ。彼らは深く、静かに強襲を行った。

格納庫に出たガトーを待ち受けていたのは自らのパーソナルカラーに彩られたドライセンだった。

「整備兵も粹な計らいを……」

ガトーは自分のパーソナルカラーに塗ってくれた整備兵に感謝しつつ、機体に取り込む。

武装その他は開発時のそれとは異なり、ガトーがよく知るMS-09系統とほぼ同様の兵装が装備されている。汎用性を重視したのだろうか。

「アナベル・ガトー、ドライセン、で出る！！」

ハッチから一端水中に出て、それから同じく射出されたドダイ（水中からでも発進可能なように改良した現地改修型）に乗り込む。水中からは水陸両用機部隊が続く。



一水中から出現したミサイルにサラブレッドは慌てて回避行動に入る。

「艦長、ソナーに反応！ユーコン級です！！それとモビルスーツ部隊接近中！！」

「馬鹿者！！何故気付かなかった！！……総員、戦闘配備！！モビルスーツ隊はどうした！！」  
「今出ます！！」

「ウラキ少尉、F91で出ます！！」

左舷カタパルトにはコウ・ウラキの駆る量産型F91が接続され、発進する。右舷からは格納庫に置かれたウィッチ用発進促進システムから加東圭子が発進した。

一2人はこの時、思い知る。ソロモンの悪夢の再来を。

『あ、あれは！？』

視認できた敵モビルスーツにコウは息を呑む。緑と青のカラーを持つ機体は紛れもなく、士官学校時代に現在戦史の授業で見た宿敵一

アナベル・ガトローのそれだったからだ。

『……その声はウラキか。……久しぶりだな』  
『生きていたのか……ガトロー……』

ガトローは宿敵との久しぶりの邂逅に微かに微笑えんだ。そして驚くコウに言い放つ。自らの決意を。

『再びジオンの理想を掲げるために……新たなる星の屑成就のため……私は帰ってきた!!』

『そんな事はさせるものか!!……ジオンやネオ・ジオンは滅びたんだぞ、それでも理想に殉じるというのか!?』

『そうだ。連邦の愚者たちがあるかぎりスペースノイドの解放はなされん!!その為に私は帰ってきた!!』

量産型F91とドライセンが互いにビーム・サーベルを交えあう。それは達人たちの剣を見ている圭子から見ても圧倒されると感じるほどだ。

F91を援護すべく、ZB26を構える。最盛期の魔力を取り戻した今ならこの程度の狙撃は容易だ。モビルスーツの足場となる飛行機をやる。圭子は久しぶりに機関砲の引き金を引く。

、ズキュ、とドダイのエンジンが正確に狙撃され、ガトローはドダイを乗り捨てる。

「……狙撃か!しかしモビルスーツらしき反応はないが……」

ガトーはとっさにレーダーに目をやる。すると鳥よりは大きいが行機よりは小さい反応が一つある。その方向にモノアイを動かし、モニターを拡大する。

「……！？連邦め、人手不足が極まるあまり、面妖なことを……」

歴戦の猛者たるガトーをして目を白黒させるウィッチの衝撃。だが、すぐに固定武装の一つ、トライブレード、を投げて追い払おうとする。

『加東少佐、危ない！！』

コウは圭子に警告を発する。ドライブレードは並のガンダリウム合金なら一刀で切り裂くことが出来る武器だ。だが、圭子は冷静にドライブレードを撃ち落とす。扶桑海事変トップエースであり、アフリカ戦線帰りは伊達ではないのだ。

『……ほう。面白い。だが……邪魔するな！』

ビーム・サーベルを構えて威嚇代わりに圭子に接近し、ビーム・サーベルを振るう。圭子とはっさにシールドを貼って防ぐが、サーベルとシールドがぶつかり合った衝撃で吹き飛ばされる。

『私を敵に回すには君はまだ……未熟！！』

「み、未熟……！？ふざけるなああーっ！！」

圭子はその言語にカチンときた。仮にも自分はアフリカ戦線を生き残ってきて、扶桑海事変でトップエースとなっている。その自分が、未熟、と敵に軽く見られた事はこれ以上なく悔しい。この時、圭子は指揮官としてではなく、一人の、戦士、として初めて激しい感

情を顕にした。

―実際この時期の圭子はネウロイとは違う敵との戦闘はこの日が初めてだった。しかし、対するアナベル・ガトーは彼女以上に多くの修羅場を潜り抜けてきた歴戦のエースパイロット。ウィッチにも動じることなく対処してみせた。これはまさに経験の差だった。

**間章その16 「1944年5月 ブリタリアにて」 (前書き)**

今回はてんこ盛りです。

## 間章その16「1944年5月　ブリタニアにて」

一ジェット戦闘機の登場は皮肉にも1944年の連合軍に技術革新をもたらした。一ジェット戦闘機の前にはどんなエースを以てしても制空権を維持することはできない。その恐怖がジェットストライカーユニットの登場速度を早めたのだ。何れ消え行く宿命であったとはいえ、レシプロストライカーユニットは急激に旧式化していた。必要に駆られたとはいえ因果な運命であった……。

一連合軍司令部は主に欧州（オランダ）方面に出現するジェット戦闘機・爆撃機への対策に追われていた。彼らが誇る大型爆撃機すら凌駕する高高度飛行性能と圧倒的な速度性能、そして大火力。現有のストライカーユニットでは戦闘機には対処は可能だが、16000mを飛ぶ爆撃機の迎撃は不可能であり、各国の緒戦能力は見る見るうちに削られていった。最初にティターンズの軍門に下ったのは彼らが出現した最初の地である、中東の国々であった。旧・ティターンズ中東方面軍は持ち前の機甲・航空戦力で現地の軍を駆逐し、僅か3週間程度で数カ国の政府を屈服させた。当該国家がネウロイとの最前線ではなかった事も災いし、当初は軽く見ていた連合軍だが、最前線の一つ「オランダ」にティターンズの欧州方面軍が出現したことから状況が一変。さらに迅速な生存権確保、のためにティターンズがモビルスーツを投入し始めたことも重なり、連合軍は前線任務の現役ウィッチを急激に損耗した。そしてその破局の一つが第505統合戦闘航空団の事実上の壊滅である。、505、は

現地の防衛戦の指揮官「牟田口廉也」中将の稚拙な指揮も相まって散々な敗北を喫した。統合戦闘航空団の消滅は連合の各国に衝撃を与え、戦線を崩壊させた扶桑陸軍への追求が各国から浴びせられた。これに慌てた杉山元参謀総長は牟田口廉也に全責任を被せて銃殺刑に処した。しかし逃亡の過程で彼と、彼に同調した各列強の指揮官らが小国出身の部隊を捨石として用いたのがマスコミに暴かれると、大国の傲慢、として、小国の不満が爆発寸前に陥り、半分、世界大戦勃発、状態にまでなった。それを落ち着けたのが地球連邦軍の調査艦隊であった。それはシナプスがあげた最初の功績だった。

一宮藤芳佳が入隊するより少し前の1944年の3月末、到着してから2週間程度の期間で、扶桑を中心に磐石な基盤を築いたシナプスは各大国の首脳とヤルタにて会談を行った。

ヤルタ会談の様子の一部は2205年時の地球連邦軍の参謀本部所蔵の記憶媒体に収められていた。一例として、ウィンストン・チャーチルとの会話を記す。

「……つまり、あなた方はこの世界には、調査に訪れたと？」

「そうです。サー・ウィンストン・チャーチル首相閣下」

開口一番に口を開いたウィンストン・チャーチルにシナプスはうなづく。救国の宰相と謳われたこの人物と対等な立場で話をする

事に感慨深いものを感じるが、それを表に見せずに接した。シナプスは会談の中で史実でチャーチルが個人的にバーナード・モントゴメリーに手を焼いていたことを上手く利用し、彼を統合戦闘航空団の処遇に関係する立場から遠ざける事を確約させた。そして先行して調査に訪れていた時空管理局の執務官からもたらされたトレヴァー・マロリーの目論みを告げ、彼の報告を鵜呑みにしないように忠告した。

「あやつは有能だが、野心が見え隠れしおった。まさかな……」  
「そうです。閣下にはお見せしなければならないことがあります。  
……これです」

シナプスはチャーチルに一枚の写真を見せた。それはマロニーの野心と欲望の象徴と言える建造途中の兵器の写真だ。チャーチルは啞然として憤りに打ち震える。

「こ、これは……!!」

「我々の協力者が極秘に撮影した彼の野心の一つ、WR、です」

このWRとはマロニーが極秘で計画を進めさせている無人人型航空兵器の頭文字。ネウロイのコアを利用するという平気だが、それがどうなるか。彼でも容易に想像できる。チャーチルはワナワナと肩を震わせ、怒声を挙げた。

「……あの馬鹿者めが!! 功を焦りおって!!」  
「このWRが完成した場合、我々はいかなる手段を用いても撃墜する所存です。これはあってはならない兵器です」

ウィッチを否定するあまりに一線を越えてしまったマロニーが産み出そうとしている兵器。それはこの世界の人類の自滅を意味すると



シナプスは薄々感づいていた。ネウロイのコアを利用すれば自我に目覚めた場合、WR、そのものがネウロイ化してしまう危険がある（実際、史実ではその危惧は見事に的中している）。

シナプスは未来世界の反応弾・光子魚雷・波動砲などの最強兵器をフルに使ってでも、この事態の出現を阻止する決意をこの時既に固めていたのだ……。

—1944年5月。この時、坂本美緒は既に魔力を失いつつあった。ウィッチとしての寿命である、20歳、は後1年未満にまで迫ってきている。同期や先輩達が未来世界の技術で続々と若返りを果たして、前線に復帰していることは概ね知っていた。だが、彼女は元々の、運命、に必死に抗った。引退したウィッチが復帰するのはいい。だが、美緒は自分はまだ本当の意味での現役ウィッチだとの堅持を見せた。連邦軍からの若返りの誘いを、まだその時ではない、と断ってでも努力を重ねた。それはもはや『あくまで自分は宮藤芳佳を見守っていたい』という妄執にも近い想いだった。その鍛錬の様子を、この世界、では旧知の仲の菅野直枝はコッソリとだが、悲しげに見守っていた。

（坂本さん……アンタって人は……）

美緒の涙苦しい努力は痛いほどよく分る。だが、その運命に抗うには宮藤芳佳のように強大無比な魔力があるか、体内に時空管理局の言う、リンカーコア、という体内器官が無ければ不可能なのだ。枯渴する前に何万分の一の確率でゲッター線との相乗効果で偶発的にリンカーコアが体の中に生じることを祈るしか無い（この幸運な例の一つが未来世界に行った穴拭智子であり、黒江綾香である）……。

「……どうするか？ シーブックさんにでも相談してみるかな」

菅野は居ても立ってもいられなくなり、ひとまず艦隊の機動部隊の、兄貴分、で、自らも慕っている、ガンダムF91のパイロット、シーブック・アノー、に美緒についての相談を持ちかけた。

一艦内 シーブックの私室

「シーブックさん……。もうオレ、坂本さんのこと、見てられないよ……。どんなに努力しても大概のウィッチは魔力をいずれ失っちゃまうんだぜ!？」

「……あの人は芳佳ちゃんを見守っていたいんだろう。たとえば自分が死ぬことになっても……な」

今にも泣きそうな顔をする菅野をシーブックは優しくなだめる。彼はニュータイプである故に、美緒の秘める想いに気づいていた。美緒は必死に隠しているが、ニュータイプであるジュードやシーブックは彼女と触れ合った瞬間に彼女の心の望みを垣間見、美緒の想いを感じとった。今のところ、美緒の真意に気づいているのは美緒と最も多く接しているミーナと、陰ながら鍛錬の様子を見守っていた菅野、それとニュータイプであるジュードやシーブックだけだ。

「宮藤……か。たしか坂本さんは宮藤の親父さんと面識があったって、姉御、（西沢義子の事）から聞いたことが……まさか!？」

ハッとある一つのことを思い出す菅野にシーブックもうなづく。

「たぶん、そのまさかだろうな」

2人は美緒が何故、芳佳に入れ込んでいるのか。その疑問に一つの回答を見出しつつあった。

それは宮藤芳佳の父に関係があることを。

## 一同時刻

エーリカやバルクホルンはモビルスーツ対策の一環で、RGM-96X、ジェスタ、との模擬戦に臨んでいた。

「は、速い!!」

バルクホルンは海上を軽やかに駆けるジェスタに舌を巻く。エースたる彼女をしても、自在に駆けるジェスタに一撃を当てるのは至難

の業だ。

「バルクホルン大尉、ちゃんと対モビルスーツ戦をお勉強してきたのかあ？」

ジェスタのパイロットは余裕満々にこう言うと、模擬弾入りのライフルを牽制がわりに放つ。そこへハルトマンが急降下してくる。

「もらった!!」

エーリカは急降下の利を活かしてジェスタの肩部装甲に一撃をお見舞いする。ジェスタはスラスターを噴射し、すぐにその場から逃れる。エーリカは追いつこうとすぐさま上昇に移るが、ジェットとレシプロの差か、上昇力で明らかに立ち遅れている。

「なんてパワー!? これでもこっちはフルスロットルだっていうのにっ!!」

『ハルトマン、コイツはあたしが抑えるよ!』

上空ではルッキーニがM1919を構えて待ち受ける。だが、そんな事、ジェスタのパイロットはお見通しだ。途中で上昇をやめ、姿勢を変えて急降下に移る。

『……うえっ!?!』

ジェスタは意表をつかれる格好となったエーリカに向けて模擬弾入りライフルを構える……。そして、ライフルから90ミリ模擬弾が放たれる……。エーリカにはそれを防ぐ余裕はなく……。

—その様子を見ていたミーナはこの時、初めて見るモバイルスーツの機動性に驚愕しきっていたのは言うまでもない。

## 第55話「君も将校だろう!!」 (前書き)

アナベル・ガトーさんが管理局のエースオブエースに牙を向き、なのはさんはドラえもんに幻想をぶち殺されます。

## 第55話「君も将校だろう!!」

一なのはは未来世界に来てからというものの、個人の力ではどうしようも無い圧倒的な争いを嫌と言うほど見て、聞かされてきた。一年戦争、グリップス戦役、ネオ・ジオン戦争、など……これらの戦争は既に争いから離れて久しい21世紀の日本で平和な暮らしを享受してきた彼女に計り知れないショックを与えていた。

一個人の力では解決できないことはいくらでもある……か。

幼少期に何かしらのトラウマを作ってしまった彼女は一種の強迫観念からか、家族や周囲の、いい子、であろうと振舞おうとしていた。それは家族すらも気づかない程に自然で、両親がなのはを、芯の強い子に育ったと思い込んでしまうほどだった。しかしそれはそのように自分を取り繕っていただけだとこの世界に来てから自覚するようになった。

自分が小さい頃から続いたその強迫観念から脱却できたと思えるようになったのはこの部隊の人達のおかげだ。

一そう。なのはにとって精神的な父親的な役割を結果的に果たしたブライト・ノア、気さくな付き合いをしてくれるスーパーロボット乗り達やアムロ・レイ。そして、超えたい、と自分に明確な目標を示してくれた、師、である穴吹智子。彼らの存在は結果的になのはを人間的に大きく成長させた。そして自らを、戦士、として自覚させたのは攻略部隊に合流した際に作戦会議に参加した時だった。

「敵に話し合いの余地などありません。とにかく殲滅あるのみです」

「そう。人間なんて、ゴミ、としか思っていない。それが鉄人兵団です」

鉄人兵団への戦闘法について講釈するドラえもんのび太。とにかく殲滅あるのみという彼らになのは反発した。彼女は戦った末に分かり合えた事例を幾度と無く経験してきた。その経験がドラえもん達の言葉への反発として現れたのだ。

「……違うよ！、心、があるのならきつと分かり合えるよ！！お話すれば向こうだって……」

だが、そんななのは幻想とも言える想いはその直後のドラえもんの言葉によってぶち殺された。一跡形も無いほどに。

「それなら争いなんて起きないさ。話し合いで済むんなら過去の全ての戦争は起こっちゃいない。僕達はそれをよく見てきている。……多くの冒険でね」

ドラえもんはなのはに、戦争は何故起こるのか、を自らが戦ってきた多くの大冒険を例に出して説明する。コージャコージャ星の開拓民とガルタイト工業の争い、パウワンコ王国での軍事政権の打倒に自らが関わり、王家の再興の英雄となったこと、ピリカ星での軍事政権へのレジスタンスに加わって政権を倒したことなど……そしてドラえもんは自らの持論を展開する。

「戦争なんてどっちも正しいと思って始めるもんさ。第二次大戦の太平洋戦線なんてその最たる例だよ。日本は植民地の解放と自らの生存圏確立のために、連合国一特に米国は一は自分達に都合のいい戦後秩序を作ろうと目論んで戦争した。負けた国は勝者の思うがま



まにされる。特に日本がそうだよ」

それは勝者の都合で敗者を悪と称して裁き、戦後の敗戦国を自分の思うがままに動かした第二次大戦終結後の連合国を批判していた。その理屈は一年戦争後のジオン共和国の復興を承認した地球連邦にも当てはめられる。なのはグウの音も出ないほどに論破され、その幻想をぶち殺された。さらに軍人としての成長を促されたのはこの後のこと。サラブレッドの救援に彼女本来の魔法で赴き、「ソロモンの悪夢」と対峙した時の事。

「……ええい、連邦の人手不足はどうとうここまで来たか！」

……と、アナベル・ガトーが嘆いたのは無理もない。連邦がとうとう魔法少女をも戦線に出すという普通ならおおよそ有り得ない出来事が目の前に起こっているのだ。歴戦の勇士の彼もこの立て続けの衝撃には啞然としてしまう。

「お待たせしました！高町なのは少尉、これより戦線に加わります  
！！」

「あなたが穴吹の言っていた……。加東圭子少佐です。貴官には私の指揮下に入ってもらいます。いいですね？」

「はいっ！」

なのは圭子に敬礼すると、そのまま戦線に加わった。圭子も扶桑を立つ前に届いた穴拭智子からの手紙を見ていたので、なのはの事をすぐに理解出来たのだ。そしてこの少女が原隊での部下のティアナ・ランスターの、上司、となる人物である事も分かっていった。（ティアナが圭子に、なのはさんによろしく、と言っていたためである）

「……おのれ！！このアナベル・ガトーは幾星霜の年月を待ったのだ、貴様らのような分別のない者共に我々の理想を邪魔されてたまるかッ！！」

ガトーは宿敵であるコウ・ウラキ、そして名も知れぬ連邦軍の戦士達に向けて言い放つ。これが彼を彼たらしめる信念。一年戦争以来彼がひたすら殉じてきた理想を。

「理想……！？」

「我々はスペース・ノイドの真の解放を掴み取るのだ！地球からの悪しき呪縛を我が正義の剣によってな！」

「なっ……！？こんな小さな戦闘の時に何をッ！！」

「君も将校だろう！！ただの兵でないのなら大局的に物を見ろ！！」  
「うっ……」

これはかつて新兵時代のコウ・ウラキが言われたことそのままである。今のなのはは治安維持組織の一員としての素質はあるが、軍人―それも士官―として持つべきである、大局的な判断力、を待ち合わせていなかった。戦いは戦術的決着だけでは片付かない。それを改めて思い知った瞬間であった。

そしてガトーのドライセンはガンダム一機、ウィッチ一人、空戦魔

導士一人に包囲されているが、ガトーが注意しているのはコウ・ウラキの駆るガンダムだけだ。後の2人はどうにでも出来る。

なのはは一気に落とすべく、レイジングハート・エクセリオンにカートリッジをロードする。いくらガンダリウム合金を装甲に用いる第二世代モビルスーツといえども自身最強の砲撃、スターライトブレイカー、を叩き込めばただでは済まないはずだと踏んでいるように、一気に落とすつもりだ。一だが、なのははまだ知らない。対峙しているドムの発展型のモビルスーツを駆っているパイロットが、連邦軍士官学校の教科書にも名を残したジオン屈指のエースパイロットの、ソロモンの悪夢、である事を。

「スターアアライトオ……ブレイカーアアアアッ!!」

「…ぬっ!!」

この計り知れない威力の攻撃にもガトーはMSパイロットとして鍛え上げた反射神経で直ぐ様反応し、操縦桿を巧みに動かし、機体を紙一重で回避させる。正に神業だ。

この時のなのはのミスは気持ちが高ぶっていたせいで動きを封じるための拘束魔法を用意していなかった事だった。未来世界での実戦はこの時が初めてだったので、無理もないが、彼女にしては珍しいミスだった。

「……えっ!?!」

「ぼうっとしてたら落とされるわよ、少尉!」

「分かってます!!」

これには動揺してしまう。自身の必殺技をこうもあっさりと回避されたのだから。そしてガトーは当面の目的であるユーコンの安全を確保するべく、コウたちを自分のところに引き付け続ける。流石はエースであるといった所か。

そして海中から迫る水陸両用モビルスーツ群を迎え撃つべく、サラブレッドから一機の高性能機が発進した。、MSK-100S、陸戦用百式改。この機体は水中でも戦えるように改良がなされた第二期生産ロット機である。パイロットはエルピー・プル。

グリーン系の塗装の機体が水中に潜り、旧式化したジオン系水陸両用機を待ち受ける。

「……いた!!そこだッ!!」

プルは持ち前のニュータイプ能力で敵の気配を感じ取り、その方向へレールガン付ビームライフルを向ける。気配が近づき、射程へ入った瞬間、ライフルについているレールガンを放った……。

## 間章その17「連邦軍の誇る、凶星」

一さて、ロマーニャ方面に出現したS uー35は原型機を凌駕する圧倒的なまでの機動性を魅せつけていた。それまでの第二、第三代機との格の違いを見せつけるように、華麗な飛行でロマーニャを乱舞する。

「フン。魔女共には丁度いい余興だ。少し遊んでやるか」

ティターンズ欧州方面軍司令である彼は若き日に鳴らした戦闘機乗りとしての腕を発揮、ロマーニャの街をS uー35で飛翔する。超低空飛行に移る自分の機体に追従してきているのは日本海軍の軍服を着るウィッチだ。と、なると噂の、ラバウルの貴公子、に当たる魔女か。彼は微笑むと街中を突っ切るようにジェット戦闘機を飛ばす。

「……っ！紫電でついていくのが精一杯なんて……これがジェットの本気!？」

一竹井醇子は扶桑で配備が始まったばかりの最新鋭ストライカーユニット、紫電、の高速を以てしても放されないようについていくのが精一杯な事に歯を噛み締めて悔しさを滲ませる。これが前世代の零式ならあつという間に置いてぼりにされていただろう。

（紫電の最大速度は、戦闘機、として生まれた世界での高オクタン燃料での計測値である650キロあまりで、540キロの零式より圧倒的に速い）650キロで飛ぶ自分が少しも距離を詰められない速さであることから、時速700キロは有に超えているだろうと醇子は目星をつけていた。それでもジェットから言えば、軽いジャブ

、程度の速さでしかない。

Su-35に乗る彼の目的は単にウィッチの数を減らし、制空権を握ることだけではない。対空陣地を叩き、自分達の後に飛び立った、A-10、の近接航空支援を円滑に進め、イタリア（ロマーニャやヴェネツィア）陸軍を叩く事が目的だ。現地には既に攻撃機の中では比較的数量が確保されているA-6、イントルーダー、の編隊と護衛の、グリペン、の部隊が向かい、サンダーボルトのための露払いを行っている。どうせこの時代の防空網では何もできまい。

「さて、後ろのうるさいハエを落とすか」

彼はその操縦桿とスロットルを巧みに動かし、この系列の戦闘機が得意とするマニューバーである、コブラ、を実行する。

水平飛行中に進行方向と高度を変えずに機体姿勢をピッチアップし、迎角を90度近くに変えていく。醇子がSu-35の機首の前に飛び込むのと迎角が90度になるのはほぼ同時だった。

「……しまった!!」

機体に搭載される、GSh-30-1、航空機関砲が火を噴くのと醇子がとっさにシールドを貼ったのはほぼ同時。醇子のシールドは坂本美緒のようにまだ強度の低下は顕著に現れてはいないので、なんとかそれを防ぐ。しかし更に追い打ちをかけるように対空ミサイルが一発発射され、その爆風と衝撃で遠くへ吹きとばされてしまう。

「ストライカーユニットは破壊できなかったか。……まあいい。もはやこちらの事は追えまい」

彼はコブラから機体を水平に戻し、悠然と水平飛行に戻る。そして、ロマーニヤ陸軍及び空軍に痛撃を与えるべく、機体を加速させる……。

—このように各戦線で確認されるジェット戦闘機群の猛威は各軍を終始狼狽させ、ウィッチ達もその高速に追いつけるストライカーユニットの登場を熱望する。そしてそれが今後出現するであろう強力なネウロイへの切り札となるのだから。

—扶桑海軍 第一機動艦隊旗艦「大鳳」

「……うむ。そうか」

ブリタリアに馳せ参じた連合艦隊の主力部隊の内の空母機動部隊「第一機動艦隊」に本土より一つの連絡が入る。それは未来よりさらなる増援が派遣され、補給物資が運ばれてくるという報である。司令部はこの報に歓喜。その補給物資の内容に艦隊司令長官「小沢治三郎」中将は久しぶりの明るい報に嬉しそうな声を出す。

その補給物資とは未来世界で穴吹智子や迫水ハルカがテストしているジェットストライカーや次世代型レシプロストライカーユニットであった。

「そういえば501はどうしているか？」

「ハッ、シャーロット大尉がZガンダムと共に高速型ネウロイを迎

撃に出しております」

「ふむ。彼女たちなら問題あるまい」

小沢は参謀長の古村啓蔵少将の報告に頷く。この時、古村には「鬼瓦」とあだ名をとった小沢の顔が微笑んでいるように見えた。

ブリタリアに補給物資を運んで行くのは連邦軍の主力輸送機「ミデア」の編隊。護衛はリベリオンに駐留し始めた連邦海軍所属の可変翼を有する、F-14Dスーパートムキャット、そのトムキャットのエンブレムは星を象ったもの。そのパイロットは連邦海軍きつてのエースとして名を馳せる男。TACネームはギリシア神話に登場する女神、ネメシス。ティターンズ・アフリカ戦線のエース、クルセイダー1、に対抗するために派遣された人材。

「ネメシス1、もうすぐイギリスです」

「そうか。ご苦労」

彼が守るミデアにはストライカーユニットの新型や試作機が積まれている。扶桑製ジェットストライカーはテストパイロット付きだ。



その内の一人は扶桑で、軍神、と謳われたかつてのエース。そして坂本美緒や竹井醇子が師と仰いだ、大人物。その名は、北郷章香<sup>きたこうふみか</sup>。その容貌は坂本美緒に影響を与えただけあって、ほぼ同じ。

そのミデアの機内では。

「さて……坂本の奴は元気にしてるかな？」

彼女はこの時期には20代終盤に差し掛かっている筈だが、若返りによりその最盛期である15歳ほどの肉体年齢となっていた。しかし若返っても彼女特有の妖艶さはいささかも失われない。むしろ若返ったことで増したというべきか。階級は復帰に伴い大佐へ進級している。

「あいつとも久しぶりだな。ええと……7年ぶりか。山本閣下も粹な事を……」

そう。彼女が派遣されたのは山本五十六の計らいである。この時、ブリタリアにいる宮藤芳佳は思いもなかった。まさか坂本美緒の更に師と会うことになるとは……。



**第56話「想いを必ず貫く この心が叫ぶ限り誰にも邪魔はさせない」(前書き**

御坂美琴メインです。

**第56話「想いを必ず貫く この心が叫ぶ限り誰にも邪魔はさせない」**

―歴代仮面ライダーは学園都市の根幹を揺るがすものを知っていた。素養格付け、。これは各々の素質が事前に分かるというもので、『努力すれば超能力者になれる』と謳う学園都市の根幹を叩き壊す代物。

「じ、じゃあ私のDNAマップを採集した理由は、将来的にレベル5になれる可能性があったから、……？」

「そういう事だ」

御坂美琴は仮面ライダーXから知らされたあまりの衝撃に愕然とする。それは何故その当時は低能力者であったはずの自分のDNAマップが採集されたのか、などの疑問を一気に吹き飛ばす衝撃は彼女を一気に打ちのめすに値するからだ。その事は本来ならば美琴ではなく、スキルアウト（無能力者）かつ学園都市暗部の組織「アイテム」の一員であった男、浜面仕上、と、その彼との因縁があり、アイテムのリーダーであった第4位の超能力者（レベル5）の、麦野沈利、の2人が最初に知るが、時代を飛び越えた事と、時代の暗部、が生み出し存在、である仮面ライダー達との出会いによって、美琴は彼らより先にその事を知ったという事になる。

「……君の時代から半世紀くらい後には地球全体の統合が模索され始め、世界的に戦争が起きていた。学園都市も独自の戦略で動いたようだが、地球連邦の設立を急ぐ資本主義陣営と共産主義陣営の戦争は学園都市の優位を無意味なモノへ変えた」

「どういう事？学園都市は外と30年くらいの科学力の差があったはずよ。それが無意味って？」

「OTM……（オーバーテクノロジーマクロス）。本格的に実用化され、独自の発展を遂げたのはここ20年くらいの話だが、21世紀から徐々に解析して手中にしていた。道具、はその成果の一つだ」

「OTM？」

「南アタリア島に落っこちてきた宇宙船を解析して得たオーバーテクノロジーの事。学園都市の衰退の一因であり、人類全体を星間文明レベルに高めたものの一つだ」

――そう。当時の国際機関の一つ「OTECオーテックによる、初代マクロスの

解析は、ある世界、より時間がかかった。それは科学レベルがそこまで達するまでに随分かったのと、21世紀中盤から22世紀序盤までの数多の紛争・戦争が度々作業を中断させたのだ。21世紀からドラえもんの時代まで日本本土が比較的平和であったのは日本の軍事力が比較的精強だったのと、学園都市、を有するというブラフを政府が活用したからに他ならない（タイムマシンを21世紀中に実用化できた点も大きいが）

ドラえもんなどの22世紀序盤に稼働していたロボットの、体、に関する技術は日本が学園都市の技術を摂取し、更にショッカーなどの組織の残した超小型原子炉等の技術を平和利用して組み合わせて生まれたモノとの噂も残っている。そしてモビルスーツなどの技術的関連性があるとかないとか……。

「……んじゃ、ドラえもん―ネコ型ロボットには―当時の日本の最先端テクノロジーが導入されてた訳？」

「そうだ。あれほど完全なAIはその当時しか作れなかったと聞いている。地球連邦と反統合同盟の統合戦争や宇宙戦争がその生産施設・開発データを全て無に返した結果らしいが」

それは自我を持つロボットの製造段階まで至ったはずの日本がある

年代を境にパタリとそれらを作れなくなった理由にある程度の回答を与えていた。自我の源であるAIの製造が不能になったのなら、体、だけを作れても意味はない。生産ロットを維持する必要も無い。

「その間の学園都市の動向は不明とされている。ただ俺たちの行動や地球に起こった戦火が学園都市から往年の力を奪ったのは確かだ」

「皮肉にも『人類全体の発展を促した』、マクロスの超先進技術や、人類の自由、を守った仮面ライダーの行動が学園都市のアイデンティティーの一つだった、超能力者の存在、や、科学力の優位、を奪い、自分の時代とは逆の立場に学園都市を追い込んだ。美琴はそれを聞いても既に学園都市へ絶望していたせいか、さほど動揺はしない。むしろ薄ら恐ろしい思惑を知れた事に嬉しさすら見せていた。

（……決めた。アイツの望む世界を守る。たとえ学園都市全体を敵に回したっていい。散々アイツが世界を、守ってきた、けど……、今度、くらいは私が……）

「ありがとう。教えてくれて」

「驚かないのか？」

「学園都市の暗部は、あの子、たちと、アクセラレーター一方通行、の実験や、第4位、やその取り巻き達との戦闘でその一端を見たから薄々とは分かってた。だけど……素養格付けだけは絶対に許せない」

それは以前一元の時代の夏に美琴や黒子たちが解決した幻想御手事レベルアップバー件の際に聞いた、上位能力者への劣等感、などの無能力者の心の叫び一友人の一人、佐天涙子、がその当事者となった事で初めて気づけた事。その願いすらを粉微塵に打ち砕く素養格付けは許すわけにはいかないという美琴が持つ正義感、そして知らず知らずのうちに影響を受けた上条当麻への想いが彼女を突き動かしているのだ。そ

れを仮面ライダー達も気づいているようで、次のような一言を言った。

「その意気だ。この時代を救った後でもいい。上条当麻を、救ってやれ、」一と。美琴はそれに頷くと、雷撃の槍を発生させ、それを放つ。それは仮面ライダーストロンガーの、エレクトロファイヤー、をも上回る強力なものだ。

「この世界も……アイツも守って見せる！！その為に私はここにいるんだからああああっ！！」

―それはたとえ世界を敵に回しても上条当麻を運命から救うという想い、そしてこの世界の混沌を晴らすという確かな決意のこめられた叫びだった。

## 第57話「かつての陸の王者の咆哮」(前書き)

戦車にスポットライトが当たります。主に旧ドイツ軍のそれです。  
チラッと現在戦車も出ます。



## 第57話「かつての陸の王者の咆哮」

―地球連邦軍の戦闘車両はモビルスーツやバルキリーの台頭で減勢の一途を辿っていた。今回の攻略作戦に駆りだされた61式戦車も一度退役し、博物館で動体展示されていた車両を世界各地から掻き集めた上で、再度の近代化改修をして無理やり現役復帰させた代物だが、攻略部隊全体で僅か数十両が作戦参加するに留まっており、往年の保有数には程遠い。それを補うためにかつての名車すらも61式の最終世代に準じる改装が施された上で参加していた。中には第二次世界大戦時の中戦車や歩兵戦車すら交じる有様の連邦軍機甲師団であった（大半が人型機動兵器へ転科したために戦車兵の数も足りず、戦車兵の主力は1944年からの増員に頼っている）。その為に国籍もバラバラで、旧・ドイツのV号戦車、パンター、や、ケーニツヒス・ティーガー、があれば、大英帝国のコメット巡航戦車、はたまた米国の、M4シャーマン、1944年から持ち込まれた日本の、4式中戦車チト、や、5式中戦車ホリ、などの22世紀では現存せず、量産すらされていない戦車の姿すらあった。それに加えて21世紀ごろの10式戦車や90式戦車、M1A2にレオパルト2、メルカバなどが61式を補助する役割で数合わせ的に配備されていた。

戦車マニアには、時代を越えたオールスター、の集合に見えるが、運用する側にとっては大変であった。いくら近代化したとはいえ、国柄は愚か、作られた時代も違う戦車をまとめて運用するには多大な手間がかかる。それでもモビルスーツは艦船の防空や直掩に回され、攻勢にはごく少数しか参加していないので、バルキリーやコスモタイガーと共に攻勢を担うのは自分達だと意気軒昂であった。オワフ島東部のカネオヘ付近の戦闘がその一例である。

―駆動音と共に帝政カールスラント陸軍所属の？号戦車の砲塔が回転する。突撃してくる兵団兵に向けて7・5 cm Kw・K・40 L／48の洗礼を浴びさせるためだ。そしてややあって轟音と共に砲弾が放たれ、爆発と共に兵団の小隊が断末魔の悲鳴と残骸を撒き散らしながら吹き飛ぶ。

「これで敵の20%をやっと撃破って所か」

？号戦車の砲撃手は遙かな未来でネウロイとは違う宇宙からの脅威と戦っている自分に不思議な気持ち浮かべながらこう呟く。自分達の時代では裏方に回っていたのに、未来世界ではこうして戦線の矢面に立っている。世界が違えば自分も対オラーシャなどに戦車兵として、戦争に従軍していたかもしれない。それを考えると何かの因果を感じた。

―こうして第二次大戦中の車両をも動員せざるを得なかった連邦軍。奇しくもこの戦闘は自らのモビルスーツなどを重視した軍備整備にこの戦闘は一つの疑問を投げかけることとなった。

時代遅れと揶揄されていた戦闘車両の思わぬ活躍は連邦軍の機甲師団に戦車を復権させるある一つのきっかけとなった。

前線に設けられた臨時陣地のテントでは各陸上部隊を指揮する連邦

軍の将官が前線から入ってくる情報を基に熟考に入っていた。

「本日、敵歩兵師団の20%あまりを撃破するに至りました。敵前線に20キロほど食い込み、なんとか攻勢に出れそうです」

「うむ。しかし3週間近くかけてようやく20%とは……辛いな」

ハワイ州の地図を机に広げながら今後の作戦計画を練る連邦軍将兵。兵団のあまりにも多い物量は連邦軍の連日連夜の攻撃にもよく持ちこたえ、連邦軍は極度の消耗を避けるため、航空部隊やスーパロボットを除いて積極的攻勢には出られず、号砲となった、先の艦砲射撃の日からは3週間近く経過していた。御坂美琴や仮面ライダー達の協力を得てもなおこれだけの日数がかかっているのは連邦軍としては予想外の苦戦である。スーパロボットもオアフ島の市街地を盾にされている以上は積極的に必殺技を放つわけにもいかないのだ、一日当たりの戦果は思ったより少ない。

司令部に轟音が響く。特徴的な飛行音から真ゲッターロボだろう。

ゲッターロボGのそれより遙かに鋭利かつ槍を思わせる、真ゲッタートマホーク、を構え、慣性の法則を全く無視したその動きでザンダクロスの、兄弟、を空中で一刀の元に両断する。その様は実に見事だ。

『ふう……今日は3体か。ゲッタービームや真シャインスパークが

使いりゃ一発で終わるんだがな』

真ゲッター1から、必殺技、を積極的に放てない事をボヤク竜馬の  
声が響く。市街地への被害をなるべく抑えたいために武器の使用を  
制限されている状況に若干不満げだ。彼のワイルドかつ、好戦的な  
一面が伺える。臨時司令部に着陸し、代表で竜馬が報告に向かう。

「今日はザンダクロスを3体ぶっ倒しましたよ。補給や整備の方は  
よろしく」

「ご苦労。整備班に行わせよう。……しかし凄いな君たちの新しい  
ゲッターの再生機能は」

司令官は多少の損傷なら癒してしまう真ゲッターロボの自己再生機  
能に感心したりの様子だ。

「今までのゲッターとは次元が違いますからね真ゲッターは」

「これからもよろしく頼む。飯はバーベキューを用意してある」

「そいつはありがたい。さっそく隼人と弁慶を呼んできます」

バーベキューと聞いて小躍りしながら外に出て行く竜馬。

司令官は「グレートマジンガーとダンクーガの帰還はまだだ。彼ら  
も相当苦勞している筈だ。帰還したらねぎらってやらなければ」と  
漏らしながら口に加えた煙草に火をつける。

―また大砲の炸裂音が響く。前線に馳せ参じたケーニッヒス・ティ  
ーガーの主砲「88 mm KWK 43 L／71」が敵の歩兵  
を塹壕ごと粉碎した音だろうか。―まさか第二次大戦では防衛戦で  
威力を発揮したあれが改装されて、攻勢に貢献するとは。当時のヘ

ンシエル社やポルシェ社の開発スタッフが聞いたら、なんと思うの  
だろう？他には、何でもガンダリウム合金で徹底的に軽量化して作  
ったナチスの遺産、P1500 モンスター、が同じく、現在技術  
、で作ったラートと共に、艦砲射撃より確実に敵の要塞を粉碎する  
べく投入されると聞いたが、戦艦より遙かに強力な80cm砲を主  
砲に添えた化物戦車をよく作ったもんだと『彼』は軍需産業の道楽  
にため息をついていた。窓から見えるかつての名戦車群の勇姿は夜  
空に映えていた。

、戦車、。兵器発達史的に軍馬の子孫とも言える使役馬達は静かに  
その咆哮の時を待っていた。

## 第58話「二人でも傷ついた夢を取り戻すよ」(前書き)

記念すべき100話目です。タイトルには昔懐かしのネタを仕込みましたが、分かりますか？

## 第58話「一人でも傷ついた夢を取り戻すよ」

一地球連邦軍はハワイ攻略に太平洋方面で動員出来るだけの戦力を全て注ぎこんだ。それだけに補給線の維持には気を使っていた。かつての日本海軍がシーレーンを軽視し、国を飢餓に追い込んでしまった戦訓がここで生かされていた。対潜部隊や大西洋方面から回された空母が補給艦の護衛を行いながら弾薬や食料が前線に運ばれていた。

一攻略部隊旗艦「土佐」

「サラブレッドがジオン残党の襲撃を受けたと？」

「ハッ。アナベル・ガトー麾下の部隊と鉢合わせしたようですが、一定時間の交戦の後に彼らが転進したとの事です。現在は航路に復帰し、後3日ほどで到着予定との報告が」

「そうか。それは幸いだっただけだ。奴が本気になれば護衛艦の一隻や二隻の犠牲は覚悟しなくてはならないからな」

ソロモンの悪夢の異名は名将と名高い山南をして心胆を底冷えさせるほどの威力を発揮していた。それはアナベル・ガトーの勇名がこの時期には既に全連邦軍将兵に轟いている事の現れでもあった。

「ジオン残党の行動も活発になってきています。アッツ島付近では、白いスナイパー仕様のリゲルグの姿が確認されたとの報告も上がってきています」

「、白狼、……生きていたのか」

山南をしてそう言わしめた旧ジオン軍のトップエースの一人に数えられる、白狼。かつて宇宙攻撃軍の中でも武人として知られ、サ

イド3の名家の出であった人物。その名をシン・マツナガ。戦時中の階級は大尉である。、ソロモンの悪夢、アナベル・ガトーに続き、彼が加わったのなら、ジオン残党軍も体制を立て直してきたと考えるべきか。

「これは侮れんぞ。背後を突かれる可能性もある」

ジオン残党はザンスカール帝国やクロスボーンがその当初の理想を見失って自然消滅や崩壊した中でもその求心力を維持した。その規模も各種残党の中ではバダン帝国に次いで大きい。練度も連邦軍の平均レベルより上で、連邦軍が恐れる敵の一つでもある。山南は逐次、ジオン残党の動きを見逃さないように情報収集艦群に命じた。

—2199年 9月 前線司令部

—前線司令部となっているテントの周りに戦闘態勢のままでバリアジャケット姿をした高町なのはがいた。彼女はサラブレッド救援の際にアナベル・ガトーと交戦。もはや、戦士、とも呼べるレベルまで達し、大局を読んで行動する彼とは違い、将校、の肩書きを持ちながら兵卒とさほど変わらないレベルでしか行動出来ない自分に大きな差があるのを認識し、士官、として何を成せばいいのかと悩んでいた。

—たしかに管理局や連邦軍でも士官としての教育は受けた。だけど大局を読むってどういう事なんだろう？

、大局を読む。それはそれ相応の地位を持つ軍人ならば学ぶべき



事だ。アムロ・レイやブライト・ノアのように有能な軍人はそれを読んで自軍を優位に運ぶように仕向けられる。古くは米海軍のチェスター・ニミッツ、日本海軍の小沢治三郎やドイツのエルヴィン・ロンメルが備えていたとも言われるこの素養。彼女は今、その領域に足を踏み入れつつあった。そして、その素養を備えた人物が彼女の身近にいた。―そう。ドラえもんである。

「サラブレッドの救援、ご苦労様」

「ドラえもん君」

ドラえもんはその愛くるしい外見とは裏腹に厳格な現実主義者であり、多くの大冒険でもその一端を垣間見せていた。彼は今、前線司令部に詰めて作戦を練っている所だが、休憩のために一端外へ出てきたのだ。

「……『大局を読む』か。何、簡単な事さ。オセロとか将棋とかチェスとかのボードゲームとかトランプをやったことはあるかい？」

「うん、オセロやトランプならやったことはあるよ。……でもそれがどうして？」

「オセロとかトランプだって、自分が置かれた状況で最善の手を出そうと考えるだろう？ 相手がこの先どういう手を出すのかも頭の中で考えておいた上で。大局を読むというのはそういう事さ。例えば囲碁や将棋の名人級になると数十手先を読めるようになるけど、それは軍人だって同じさ。過去の歴史上の有能な軍人達、例えばチェスター・ニミッツやエルヴィン・ロンメルとか、小沢治三郎とかはそれができた」

ドラえもんは分かりやすく説明する。それは彼の、人生経験、の豊富さや実戦で鍛えたカンの現れでもある。なのははそんなドラえもんに羨ましさを感じていた。

「……羨ましいな。ドラえもん君って」

「君だって必ず出来るようになるさ。本来は小守ロボットだった僕でもできたんだ。君もやれるようになる。必ず」

これはドラえもんならばの励ましでもあった。彼の出自を考えれば当然といえば当然だが、彼だからこそ言える事でもあった。

「……私でも誰かを守れるのかな」

うつむきながらそういうなのは。そこには、自分だけでも世の中の裏に関わって欲しくないと、父親の以前の仕事で起こった事件の詳細を自分に内緒していた家族の想いを裏切ってしまい、危険な管理局の仕事をし、そしてさらに地球連邦の軍人となってしまうた自身の行動は正しかったのかと思い悩む一人の少女の姿があった。

「何かを守りたいって気持ちがあるなら、君だけが守れるモノがどこにあるさ」

そこへ、もう一人の声が響く。野比のび太だ。コルト・パイソン357を右腕に持って階段の上に立っている。その眼差しは彼の優しさを表すように穏やかだが、確かな意志が感じられる。大冒険になると普段からは想像のつかないかっこよさを見せる。

「私だけが守れるモノ……?」

一なのはが彼らの言葉の意味を知るにはもうしばらくの時間を必要とする。



第59話「嵐に舞う花びら 雨になるよ 風になるよ いつしか……！」（前

またまたタイトルに大昔ネタを仕込みました。前回より余計に分かりにくいです。

第59話「嵐に舞う花びら 雨になるよ 風になるよ いつしか……！」

一ハワイを巡っての戦闘は目立った動きのないままに3週間が経過した。戦車隊や航空隊、仮面ライダーらの敢闘は目覚ましいものがあるが、戦局全体を動かすには至らず、第一次世界大戦さながらの塹壕戦の様相を呈していた。

一対鉄人兵団との前線

「これが……戦場……！」

魔法少女として戦ってきたのはには映像ではない、本物の戦場、は息を呑む光景そのものだった。負傷した兵士を治療するための野戦病院（病院と言ってもテントだが）、遺体を運ぶ担架……仲間  
の墓標を立てる兵士……硝煙の匂いが鼻につくこの光景こそ、戦場  
なのだ。管理局の仕事について数年になるが、これほど凄惨な光景  
は今まで見たことはない。

かつて出会った元日本兵の老人たちもこのような光景を見てきたの  
だろうか。

「そう。戦場ってのはこういうもんだよ」

なのはの側にはドラえもんとびたがいた。彼らは多くの大冒険で  
このような修羅場を見てきたので、平然と構えている。これが戦場  
だとなのはに見せつけているかのように落ち着き払っている。

「こんな光景は近代戦じゃ当たり前さ。人が死なない戦争なんて無  
い。、殺るか殺られるのか、が戦いの真理さ」

古代より不変の真理を説明しながらドラえもんは足を進める。なのはもそれに続く。

道路に無残な姿になったコスモタイガーが安置されている。敵の対空砲火の餌食となったらしく、コスモタイガーの流麗な姿を形作る翼の片方が失われている。胴体も穴だらけで、操縦席には搭乗員のものらしき血がべっとりとついている。

「コックピットを中心に攻撃したか……兵団め」

ドラえもんは吐き捨てるように言う。情け容赦なく殺戮を行う鉄人兵団を嫌悪しているのだろう。犠牲となった搭乗員を弔ってからその場を離れ、前線で戦っている機甲師団の元を訪れることにした。

「この地区は扶桑陸軍の担当だから戦車隊がいるはずだけど……あれだ」

市街地に整然と並んでいるのは日の丸が輝く栄光の日本（扶桑）陸軍の制式戦車の中では最新鋭の「四式中戦車 チト」と「五式中戦車 チリ」だ。それを装備するのは史実で大日本帝国陸軍の精鋭であり、占守島の戦いで奮戦した栄光の戦車第11連隊であった。

「おお、よく来てくれた。君たちが司令部から派遣された人員だね」「はい。早速ですが、状況を把握したいのですが」

「うむ。まずはこっちに来てくれ」

3人はテントに入って第一一戦車連隊の司令部へ挨拶を済ますと状

況の説明を受ける。

「現在、わが連隊はリベリオンの第1機甲師団、カールスラントの第2装甲軍と共に戦闘に入っている。この作戦の開始当初に九七式中戦車装備の部隊が突撃を敢行したが、敢え無く撃破されてしまった。そこでわが連隊が急遽派遣され、戦列に加わった。今のところは戦線の維持に全力を尽くしている。撃破数は多いんだが、ゴキブリのように湧いて出てくる」

精鋭とされ、『士魂』精神を後の世に伝えた彼らをして、撃破を重ねても現状維持が精一杯であるというのは状況の厳しさを物語っていた。五式中戦車などには排気のススや灼け、傷などが見受けられる。彼らの戦歴を感じさせるその情景は底知れない迫力を匂わせる。

「物量が奴らの強みです。隙を見せたら一気に落とされます。畳み掛けなければ」

「それは分かっているが、四式と五式だけでは火力が足りなくてな」

「それは心配に及びません。司令部は、七糎半対戦車自走砲 ナト、と、五式砲戦車 ホリ、を回すと言っています」

「おお！！では完成したのか！？」

連隊長の声のトーンが明るくなる。それらは史実では間に合わなかった日本の戦局打開への秘密兵器の一つ。強力な連合軍戦車に対抗するために計画したもの、配備に至ることなく歴史の闇に葬り去られた存在。1944年、では強力なネウロイへ対抗するため、ウィッチの補助的役割を期待されて開発され、量産に成功していた。この第一次生産分が部隊定数に達し、配備が決定されたのだ。

「ええ。後二日もあれば届けられます」

「それはありがたい！！これで要塞にも十分に火力を発揮できる！！」

四式や五式は戦前・戦中の日本最優秀戦車だが、火力は第二次大戦後半以降の戦車としては標準的で、同じ75ミリでも貫通力に優れるパンサー、第2次大戦型では最強と名高いケーニッツヒステイガーを有する帝政カールスラントの部隊に比べると霞んでしまう。兵団のトーチカや陣地粉碎に活躍するのは、かの国の兵器ばかりだと憤慨する扶桑出身部隊にはこの上ない朗報だ。

「なのはちゃん、パトロールする第2中隊の護衛をお願い。のび太くんは中隊の指揮車の砲手を」

「うん！」

「分かった」

2人はドラえもんの頼みを引き受け、それぞれの中隊に合流する。それを見送る連隊長は訝しげな表情だ。

「あの子達に任して本当に大丈夫かね？」

「何、大丈夫ですよ。なのはちゃんは時空管理局の、エースオブエース、と謳われる俊英であり、のび太くんは射撃なら誰よりも一そう。誰よりもエキスパートですよー」

ドラえもんは不敵に笑いながら答えた。それはかの大英帝国の吸血鬼殲滅機関「ヘルシング機関」（英国国教騎士団）の長であるインテグラル・ファルブルケ・ウィングेट・ヘルシング卿を彷彿とさせる笑みだった。なのはの空戦能力やのび太の射撃の精度への絶対の信頼が彼をそうさせていた。



「全たぁーい、前進！！」

四式中戦車の三菱（1944年で正確に言えば宮菱だが）AL 四式 4ストロークV型12気筒エンジンと五式中戦車の液冷V型12気筒ガソリンが唸りを上げ、隊列を取って前進する。それは史実では実現しなかった光景であり、大日本帝国陸軍戦車隊の悲願が違った形で実現した。相手は連合国ではなく、宇宙の脅威。

ーそう。それはかつての怪獣映画の名BGMがちょうど合うだろう。戦車隊の勇ましい行進は空から支援するなのにも心強く感じられる。昔の戦争映画での光景も的外れでは無いのだ。

この日の戦闘の号砲となる第一射目はのび太が乗り込む五式中戦車の射撃だ。

「敵発見！！距離15000」

「了解」

乗員の一人からの報告にのび太は答えるといきなり攻撃を敢行すると車長に告げると、いきなりカンで主砲の仰角、向きを最適化する。改修である程度未来技術が導入されているが、これほどの行為は熟練兵でも行うのは困難だが、のび太の天賦の才がそれを可能としていた。

そしてのび太はトリガーを引き、砲撃を行った。砲弾はのび太の狙い通りの地点へ着弾。兵団の歩兵連隊を混乱に陥れる。これには空中にいるなのも「す、すごぉい……」と感嘆の声を出す。まさ

にのび太の面目躍如であった。

（すげえ……こんな人材、我が軍に欲しい！！）

……中隊長をしてこう言わしめるほどの驚異的命中精度であった。

「隊長たちにつづけ！！データの共有は出来てるな？」

「OKです！！」

これは戦車がミノフスキー粒子で滅じられた利点の復活だった。ミノフスキー粒子散布下でもある程度精度が保証された新式のデータリンクシステムを搭載された事で、四式中戦車及び五式中戦車の命中精度は製造当初より遙かに良い。データが全車両に行き渡り、そのデータを元に仰角の修正を行い、射撃を行う。土魂部隊の戦いはこれからだ。

一五式と四式の五式75mm戦車砲が火を噴く。砲弾が新たに装備された自動装填装置を通して装填され、3度ほど一斉砲撃を行う。兵団は遠距離からいきなり砲撃を加えられ、狼狽するばかり。人類が培ってきた砲技術は伊達ではないのだ。戦車隊の空中援護の役割を負ったのも先行して、かつての急降下爆撃機、Ju 87、のG型（かのハンス・ウルリッヒ・ルーデルが乗った地上掃射型）よろしく、レイジングハートを構えて掃射準備にかかる。花形である空中でのHit and awayや、巴戦（ドックファイトの日本での言い方。師である穴吹智子がそう言っているのです、なのはもそう言うようになっていた）ばかりが空中にいる者の仕事では無い。援護を行うのも大事である。WW?で、戦闘爆撃機、が産声をあげたのは何の為か？

日頃から穴拭智子にそう教えを受けて来た。それを今、実践すべき

だとなのはは「ジェリコのラッパ」を想起させる急降下爆撃を敢行した……。

第59話「嵐に舞う花びら 雨になるよ 風になるよ いつしか……!」(後妻

ラストに加筆を加えました。

## 第60話「ジオン残党軍の暗躍」(前書き)

連邦がハワイ戦に全力を尽くす裏で、ジオン公国軍残党及びジオン共和国が何をしているのかを触れます。

## 第60話「ジオン残党軍の暗躍」

—現在の所、ジオン残党は第二次ネオ・ジオン戦争までの軍備を保有していた。そして連邦議会右派がジオン共和国解体を目論んでいる事を察知した共和国軍、かつてのクロスボーンやザンスカール帝国の生き残りの強力な協力もあり、その規模は一年戦争当時と遜色ない規模にまで膨れ上がった。（階級や軍制度は概ね公国軍時代のもものを使用）中でも驚くべきものが彼らの手にあった。

— サイド3 ジオン共和国軍 第7ドック

「おお、まさかこれが秘匿されているとは……」

ネオ・ジオン残党軍へ合流した「白狼」の異名を持つ壮年のエースパイロット、シン・マツナガ、大尉は連邦軍内の内通者の手引きで残党軍の戦力向上の為に、物資、の受け取りのために宇宙へ上がっていた。目的地のドックに秘匿されていた一隻の巨大空母に思わず目を奪われる。それは共和国軍右派が極秘に近代化した上で秘匿していた旧ジオン軍の切り札「ドロス級大型空母」である。しかし、公式にはドロスは2番艦までしか就役しなかったはずだが……。

「しかしこんな艦が今までよくばれなかったものだ。偽装も施されているようだ……」

「正式な完成及び、就役前に終戦を迎えましたから旧軍の公式記録には載っていません。戦後に大型化するモビルスーツに対応するために、貨物船、という名目で新マクロス級に使われる資材を一部横流しし、拡大改良しましたから戦闘力はマクロス級にも引けは取りません」

一現在の大型化したモビルスーツは一番艦「ドロス」のサイズをしても多数搭載は難しい。それに対応するために艦を大型化した結果、要塞級の大きさとなってしまった。

「私の旧い友人にアナハイム・エレクトロニクスのモビルスーツ製造部門の重役が居ましてね。搭載機はそいつに工面してもらいました」

共和国国軍将校はシン・マツナガを艦内の格納庫に案内される。そこにはジオン系・連邦系問わずモノアイ方式のモビルスーツが搭載されていた。次世代機として作られながらも戦役には間に合わなかった、AMS-129、ギラ・ズール、連邦製ながらMS-Xプロジェクトの流れをくむ機体「ゼクシリーズ」（ゼク・アイン、ゼク・ツヴァイ）、やマラサイ、ハイザックの姿も見える。

「これは驚いたな。ゼクシリーズはペズンが無くなってもう現存しないと聞いていたが……」

「ペズンの乱の時に押収された開発データを元にリバースエンジンアリングして再度建造した代物だそうです。連邦とジオン系の技術混合研究も兼ねて生産していたものを回してもらっています」

シン・マツナガは市井に身を潜めていた際にペズンの反乱の事を耳にしていた。連邦軍が軍の反乱を恐れるあまりに第一次ネオ・ジオン戦争への介入が遅れた原因の一つ。

それで使われた旧ジオン軍の流れを組む機体がそのジオン系勢力の手に渡る。なんとも皮肉な運命だろうかと思わす。しかし自分達残党軍の未だに一年戦争当時のザク、ドム、ゲルググなどの旧型を手駒としている現状（ギラ・ドーガなどの第二次戦争以降の新型は宇宙に多く回されているので、地上の残党は第一次戦争以前の旧型を

中心にした行動を取らざるをえない」を鑑みると、最新機ではないが、グリプス戦役後期レベルの機体を複数手に入れられるのは嬉しい。

「それでこの艦をどう運ぶのだ？」

「心配に及びません。連邦には貨物船扱いで登録してありますので、絶対に怪しません。クルーも民間人の格好をしていますし。大尉は念のために部屋に入っていてください」

「わかった。この格好ではいかにも怪しいからな」

「今の連邦はハワイに全力を傾けてますから我々のことなど気にもとめませんと思いますが、臨検されると厄介ですから」

シン・マツナガは新生ネオ・ジオンの軍服を着ている。着替えるという手もあるが、あいにくだが服に余裕が無いそうなので、部屋に隠れることにした。

「出発前にこの艦の名を聞いておきたいのだが」

「ミドロです。そう名付けられる筈でした。実は起工順はドロワより先でしたので、本来は二番艦として生を受けるのは本艦でしたがね」

—ミドロ。それがこの空母が本来持つべき名であり、本来の役目。ミドロはゆつくりとサイド3を離れる。ジオンの志を忘れない戦士たちのもとへ剣を届けるために。



一月面　グラナダ　アナハイムエレクトロニクス社

「…そうか行ったか。近いうちに例のアレが完成する。上手く誤魔化すから頼む」

彼はこのグラナダでのアナハイムエレクトロニクスのモビルスーツ工場の長。サイコフレームを用いた新型モビルスーツの事を話しているのだろうか。彼らは連邦軍との大口取引を行いながら反連邦勢力にも最新兵器を売り渡す、死の商人、ぶりを発揮していた。今はサナリイなどの新興勢力に若干押され気味であるが、技術力はほぼ同等に追いついた。シルエットフォーミュラプロジェクトのおかげだ。

「シルエットフォーミュラプロジェクトのおかげで追いついたが…  
…あの屈辱は忘れんぞサナリイめ」

彼ら「アナハイム・エレクトロニクス」は第二次ネオ・ジオン戦争終結までは、モビルスーツ市場を独占していた。だが、海軍戦略研究所（通称サナリイ）がその牙城を崩壊させた。一次期主力機のコンペティションで、自分達が創り上げた「MSA-0120」がサナリイの「F90」に完敗を喫したのだ――

アナハイムエレクトロニクスがF90及びその発展機のF91から受けたショックは尋常でなく、彼らを子供のように怯えさせた。連邦軍の小型モビルスーツにおける、ガンダムタイプ、のスタンダードをサナリイ製のFシリーズが確立させてしまい、対抗馬として作ったネオガンダムもコスモ・バビロニア建国戦争を勝利に導いたF91の前には霞んでしまって、採用はされたが、ロンド・ベルは愚か、特殊モビルスーツ師団にも配備されないままだ。大型機だけではない、モビルスーツ市場の完全独占を目論む彼らの策謀は静かに進

んでいった。

—そんな事も知る由も無い地球連邦軍はハワイ攻略を続けていた……。ジオンの再動を気づけぬままに……そしてモビルスーツ開発の闘争が見えないところで行われている事を。

そして、グラナダのモビルスーツ工場では一機のモビルスーツが建造されていた。今は亡き赤い彗星を想起させる、真紅の装甲を持つ機体。ジオン系と分るモノアイを持つその機体はなんのために作られているのか？それはわからない。

**第61話「スツーカー大佐、2199年に着任ス」(前書き)**

今回はストライクウィッチーズ世界でのルーデル大佐の出番です。

## 第61話「スツーカー、大佐、2199年に着任ス」

一のび太達が通称、士魂連隊、扶桑陸軍の誇る精鋭である戦車第11連隊と共に戦闘開始した頃、後方の地点では現地で戦車を簡易的に改修するための簡易工場が仮設され、骨川スネ夫はそこにメカニックとして従事していた。前線で銃弾が飛び交うばかりが戦争ではない。兵器の安定的な供給や補給こそ戦場で戦う将兵を支えるのだ。

「74式戦車の改装はどうします？」

「第二世代型MBTだから大昔の大戦型よりはやり易いかな……」

工場に運ばれてくるのは古今東西の戦車。彼らが今、改修を行っているのはかつての日本自衛隊が30年以上に渡って運用した第二世代型MBT、74式戦車。これも日本地区で稼働展示状態で保存されていたものを引っ張り出してきた代物だ。状態は良好そのもの。各種電子装置も大戦型より多く詰め込めるだろう。さっそく各所担当のメカニックが各種工業機械で作業を開始する。まずは車体と砲塔を分離させ、装甲を取り外す。

「ほう、君、中々筋がいいな」

「ありがとうございます。戦車はプラモとかをよく作ってましたし、大冒険でメカニック担当だった時もありますからこのくらいは」

壮年のベテランメカニックをしてそう言わしめるほどスネ夫の工業機械の操作は手馴れていた。彼はスネ夫が自己紹介で話した「何回か前の大冒険の後に猛勉強して覚えた」というのはまんざらでもないらしいと感心しつつ装甲板を最新型へ換装していく。スネ夫はエンジンルームを開けて、機械を使って慎重に各配線の接続を切る。

最新のエンジンと交換するためだ。機械が役目を終えたエンジンを取り出し、小型高出力の61式戦車用エンジンへ換装する。これで開発当初のネックの一つ、航続距離の短さ、も解消されるだろう。火力は現在の技術で作直したより高性能の同口径砲に載せ換えて強化するとして……。

「サスペンションはどうします？」

「ちょっと待て。俺が見よう」

一前線の将兵同様に彼らの戦いも始まったばかりだ。これも戦線を支える立派な仕事なのだ。兵器を安定的に供給・整備してこそ軍隊は機能するのだ。それを感じさせる一幕だ。

一戦車隊や制空隊単独での攻勢は難しく、急降下爆撃などの近接航空支援を要すると判断した地球連邦軍はティターンズ残党同様にA-10 サンダーボルト？の近代化を急ぐとともに、連合軍のその方面の精鋭を呼び寄せた。その中核を担うのは……

「よく来てくれた。ハンナ・U・ルーデル大佐」

「ハッ！只今着任いたしました、提督」

その将校は鼻の当たりに傷を持つ美女だった。歴戦の猛者の風格たつぷりのこの人物こそ史実で、ソ連最大の敵、として対地攻撃で名

を馳せた、スツーカー大佐、ハンス・ウルリッヒ・ルーデルに当たる存在。史実では彼は片足を失ったが、彼女の場合はまだ五体満足であった。山南に敬礼をすると、その不敵な面構えを覗かせる。

「君のその力、アテにさせてもらう。ところであの世界では大変だったそうだね」

「ええ、制空権が維持できないというのを理由にスーツカ隊は出撃禁止を上から申しつけられましたから。まあそれでも自分は危急存亡の時に何いつてるのかとFw190 Dやスーツカで出撃しましたかね。書類も偽装して」

その行動はまさしく史実のルーデルそのものだった。命令に背いてまで出撃したとか、負傷した際も病院からこっそり抜け出しては出撃していたという逸話はあの世界にも当てはまるのかと山南は感心した。

「出来る限り休暇を減らして出撃回数を増やすよう上司に嘆願し、その為に書類を偽造したというのは本当かね」

「ええ。私がウィッチになって間もない頃に、当時の上官との折り合いが悪く技量未熟だと決めつけられて度重なる意見具申にもかかわらず戦闘には参加させてもらえなかったので、それで」

ルーデルはその時の境遇を思い出したのか、ホロリと涙を浮かべる。よほど悔しかったのだろう。史実でも著書の中で「男泣きに泣いた」と記しているが、それ同様の悔しさを味わったのだろう。実際彼女のスコアはどう考えても、史実同様の事やって稼いだとは思えないものだ。宝剣付柏葉騎士鉄十字章も史実同様に受賞している。

「ティターンズには散々にしてやられましたよ。何度も撃墜されて捕虜になりました」

「軍用犬に追われたのかね」

「はい。それにしても勘のにぶい軍用犬でしたがね」

、ここまで史実同様、とは。山南は思わず閉口してしまう。ルーデルの扱いには苦勞しそうだと心の中でため息をついた。

「失礼します」

山南の副官が艦長室に入ってきた。時計を見ると定時報告の時間になっていた。

「提督、偵察機から映像が入っています。ご覧になりますか」  
「頼む」

副官は偵察機からリアルタイムで送られてくる戦車第11連隊と兵団の戦闘の様子を映像機器に映しだす。四式中戦車や五式中戦車の5式75ミリ戦車砲が火を噴き、兵団側のレーザー兵器と火線が入り乱れる。なのはの急降下爆撃による支援も映っている。

「ン、あの娘……青いな。まるでなっちゃいない、上昇タイミングも危ない」

ルーデルはなのはの急降下爆撃がすぐに練度が低い事を気づいた。急降下爆撃に対する恐怖というものが感じられるやり方だ。新兵なのだろうが、あれでは効果が薄い。上昇するタイミングも下手したら対空砲火の餌食になりかねないほどにつかめていない。

「……ええい、もう見ておられんっ!!」

居ても立っても居られなくなったルーデルはすぐに出撃しようと意

気軒昂だ。着いて間もないはずなのにこの始末である。さすがはルーデルである。

「休養などはとってられない。小官はすぐに出撃します!!」

ルーデルは敬礼するとすぐに格納庫に走っていった。ああなると、もう誰にも止められない。

山南は苦笑しつつ、彼女の後ろ姿を見送った。たしかにあの人物は、ルーデル、だ。山南はそうルーデルの後ろ姿を見てそう思った。



## 行間その6 「再び始まるドラマのために生きる 1」 (前書き)

本編の準備の合間の骨休みの小話です。時間軸は本編の後（気が早いですが）です。

## 行間その6「再び始まるドラマのために生きる 1」

―2201年。前年まで続いた、メカトピア戦役、は人類側の一応の勝利という形で決着し、地球圏は一応の安息の時を迎えていた。ドラえもん達はあの戦いを見届けた後に1999年へ戻っていき、なのは達もミッドチルダ、そして自らの故郷である、もう一つの地球、へ帰還した。あの戦いは彼らに何をもたらしたのだろうか。

―あの戦争に巻き込まれたのは本当に偶然だった。たまたま訓練に訪れた管理外世界はもう一つの地球。後で思ったけど、管理局の調査はいい加減だったのかな。れっきとした文明や魔法文化があるのに……。でもあの時……。ゲッターロボ號、に撃墜されたのが全ての始まりだった―

―時間の流れが未来世界とは違う、故郷の地球で高校生となったなのはは時空管理局航空隊の教導隊へ配属されていた。少女時代に穴吹智子を初めとするエース達の薫陶を受けた事が手助けしたのか、中学1年の春に教導隊から指名される形でそれまでの部隊から転属。教導隊の若きポープの一人として期待されるようになった。ただし『自分の技術は他人に教えられるほどの物では無い』と謙虚な態度を取り、教導隊の隊員の中には一般局員に慇懃無礼な態度を取る者もいる中、対等に接してくれるなのはの一般局員からの評判は良好であった。

「なのはちゃん、あの世界に行ってからなんか変わったよね」  
「にゃはは……そうかな」

確かに帰還後のなのはには変化が生じていた。軍人であったせいか、毅然とした態度を見せることがあるのだ。

「ああ〜もう羨ましい!!」

「ふえ? 何で?」

「羨ましいわよ。なにせ本物のアムロ・レイに会って、しかも部下になったんでしょ」

「うん。確かにアムロ大尉の部下だったけど……優しい人だよ」

高校からの帰り道、フェイトやはやて同様の親友で、付き合いはあの2人より古い「月村すずか」と「アリサ・バニングス」と一緒に下校していた（フェイトとはやては中間前の範囲の詰め込み勉強で遅くなるとの事）。アリサは自分の親友が有名なSFの主人公の部下だったことに羨ましさを見せている。当然といえば当然だ。

「そういえばプレゼントは何にしたの?」

「もう随分お兄ちゃんと会ってないけど、喜ぶと思ってガンブラをお兄ちゃんの自宅に送ったよ」

「ガンブラ? でもただのガンブラじゃないんでしょう?」

「もちろん、あの世界で買ったいた『アナハイム・エレクトロニクスと地球連邦軍監修 1/60スケール、PG、Zガンダム』だよ。高かったんだから」

「実在する世界でのプラモねえ。確かにファンなら喉から手が出る代物だわ」

アリサに兄へのプレゼントがあの世界での高級ガンブラであるという、ため息とつく。そのプラモには最大の難点があるのだ。高級ガンブラにありがちな問題が。22世紀でも相変わらずそれは変わっていないのだ。

「それはそうなんだけど……問題があるんだ」

「……問題ってまさか」

「あれ、恐ろしく部品が多いんだ。有に千個超えてるから立体パズルみたいなの」

「うわぁ……そんなの送って大丈夫？」

「大丈夫だよ……たぶん」

なのはは希望的憶測を言った。プラモに慣れてる兄なら多分数日かかるだろうが完成できるだろう。親友たちと会話を楽しみつつ、家への帰り道を歩いて行った。

# ――私立聖祥大学付属高等学校

「フェイトちゃん、あの秘剣はモノに出来たん？」

「うん。5年かかったけど、ようやく」

「私もようやく指揮官つてのがなんなのか分かってきた……これもイサムさんのおかげや」

「イサムって……あのイサム・ダイソン？」

「イサムさんのこと知ってるん？」

「知ってるも何も……あの人はロイ・フォッカー勲章を取りまくったエースだよ？」

「ほえ、そんなにスゴイ人なん？」

「うん」

勉強の合間の会話でフェイトとはやては互いの成長を確かめ合った。はやてはイサム・ダイソンと出会ったことで成長を促されたが、フェイトは高校入学後によりやく自らの師、黒江綾香、が用いた必殺の秘剣を習得するに至った。その証拠に手にその努力の跡が見て取れる。フェイトはなのはとまた違う出会いと戦いで精神的に大きく成長したが、その一端が垣間見れる。ふと、視線を写し、教室の窓に映る夕焼けにかつての戦いを思い出す。

「……今頃どうなってるんだろう」

―宇宙の方舟を守るために共に戦った多くの仲間、それを助けた2人の歌姫の事をすこしづづ思い出していく。歌が銀河を救える事の証明だった、いつかあの『大海原』で聞いたあの歌を―

「シェリル・ノーム、ランカ・リー……かあ。歌で銀河を救った、歌姫。私も会ってみたい……いつか」

はやてはフェイトから聞かされた、歌姫に思いを馳せる。『歌は銀河を救える』そう信じたくなる。未来の歌姫「シェリル・ノーム」と「ランカ・リー」の歌は思わぬところまで影響を与えていた。

それはフェイトの義理の兄「クロノ・ハラオウン」も同じだった。乗艦の艦長室で、妹が提出した報告書の写しを手にとりながらこう呟く。

「……、歌姫、か。上層部はなんと思うのだろう」

彼は時空管理局の一部の人間が見せる国粹主義に呆れていた。自分達の管理下でない世界を見下す傾向のある右派は今や管理局の大半の人間に取って侮蔑の対象である。確かに管理局のもたらした平和もあるが、人類は自らの手で平和を勝ち取るべきだ。そうあの世界は言ってきた。なのはやフェイトも地球にいる人間として、「自らの手で平和を掴みとることが世界の在るべき姿だ」と意見を持っている。クロノも同じ想いだ。彼は内部から時空管理局を変えようとしている。それは彼が持った偽らない気持ちであった。向こう、はもう2201年を迎えたという。23世紀となった世界。妹が世話になった事への礼も兼ねて、一度家族を連れて行きたい。そしてこの目でどんな世界か確かめたい。それがクロノ・ハラオウン個人としての思いだった。

行間その6 「再び始まるドラマのために生きる 1」 (後書き)

原作とは大分剥離してしまいましたが、高校生なのは描いてみた  
いので……。

**第62話「カールスラントの悪魔、管理局のエースオブエースと邂逅ス」(前編)**

本編です。ハンナ・ルーデルがなのはと出会います。



## 第62話「カールスラントの悪魔、管理局のエースオブエースと邂逅ス」

ーハワイ沖海戦に参戦したハンナ・ルーデル。この時の相棒は初代のアーデルハイド（史実での初代後部機銃手のアルフレート・シヤルノヴスキー）、二代目のヘンシエル、三代目のロートマンの後任（このロートマンは精神的にルーデルについて行けなかった）として、ガーデルマン、が着任していた。このガーデルマンは初代の相棒「アーデルハイド」にも劣らぬ美貌と実力を持つウィッチで、高位治癒魔法を使えるために「シュトウーカ・ドクトル」の異名を持つ。また、歴史上で最も有名なルーデルの相棒として未来世界の軍人達にも知られていた。

「行くぞガーデルマン、出撃だ!!」

出撃しようと意気込むルーデルだが、問題があった。自分達のストライカーユニットの調整がまだ終わっていないのだ。未来世界の整備員はストライカーユニットに不慣れなので、しょうが無いといえましょうが無いのだが、ルーデルは無然とすると格納庫の戦闘機かバルキリーを分捕るつもりだろうか、格納庫を物色する。整備兵の一人を取っ捕まえて。

「私たちに乗れる機体は無いのか？ モビルスーツはまだ訓練中だから、戦闘機やバルキリーがいい。あれなら扶桑で教育を受けているから使えるんだが……」

「そうですね……今は作戦中でほとんど航空戦力は出払っているんですが、一部は予備戦力として取っといったはずです」

ルーデルとガーデルマンは未来世界に行くに当たって、扶桑に停泊した連邦軍戦闘空母で未来兵器の操縦訓練を受けた。急速促成なの

で期間は短いのだが、内容が実に濃いので操縦法は頭に入っている。元々航空科である関係で最も違和感無く扱えるのはバルキリーなどの航空兵器だ。土佐の格納庫の機体は殆ど出払っているが、予備戦力の一つとして二機の最新型のバルキリーが置かれていた。流麗なその機体の名はメサイア（救世主）。

「あつた。これだ」

整備兵はエンジンやアビオニクスの調整に入る。そして最新型バルキリーには付き物の装備「E X－ギア」を装着するように促す。

「通常機は新型・旧型問わず防空に回されているんですが、バルキリーの中でもコイツは最新型だから地上での空母運用のテスト用に二機だけ搭載されてたんですよ」

「テスト前の機体をいきなり実戦投入か？いくら戦時中だからって無茶だぞ」

「いやあ、こちらじゃよくある事ですよ。宇宙では既に実戦運用に耐えています。それにアムロ・レイ大尉のVガンダムなんかいきなり投入でしたから……それ以上の無茶してる大佐が言う事じゃありませんよ？」

「……確かに」

整備兵の言葉に頷くガールデルマンにルーデルは狼狽えた様子で「こちらそこお！！納得するんじゃない！！！」と珍しく赤面した顔を見せる。どうやら図星のようである。史実では副官のヘルムート・フイッケル少尉らを救助するために、降下↓そのまま地表を滑走↓救助、乗載↓再離陸なんて無茶をやらかしたが、あの世界で性別やモノが変わっても、同じことを実行したに違いないと整備兵は目星を付けた。

「調整完了です」

「ご苦労」

ルーデル達はEX-ギアを装着し、F-14 トムキャットとSU-27 フランカーを掛け合わせたような外観のバルキリーに乗り込む。手際のいいことか、整備兵はルーデル達が着替えている間に機体のカラーリングなどを旧ドイツ軍の迷彩に塗り替え、史実でルーデルが使ったスーツカと同じ部隊の番号と機番を書き込んでいた。即乾タイプのモノなのでペンキが服に付く心配は要らない。

「基本は教練で使ったVF-11、サンダーボルト、と同じだ。…  
…行ける。」

各種計器に異常が無いことを確認し、格納庫のハッチが開けられる。今の土佐は空中戦に備えて離陸しているので、ハッチの外は青空だ。雲ひとつ無い。出撃にはグッドコンディションといい。武装も完全装備だ。

「ルーデル大佐、幸運を祈る」

山南はルーデルらの出撃を了承し、映像通信を通して敬礼する。

「ありがとうございます、提督。……ハンナ・ルーデルだ。メサイアバルキリー、出るぞ!!」

ルーデルはVF-25のエンジンをフルスロットルで吹かし、アフターバーナーをかけて出撃していった。ガーデルマンもそれに続く。青空を2機のバルキリーが超音速で駆け抜けていった。

一士魂連隊の航空支援を行っているのはだったが、急降下爆撃の技量はまだ未熟であり、中々戦果を挙げれずにいた。

、Do you be safe or master it?、  
(大丈夫ですか、マスター?)

「うん。私は大丈夫。こんな事でへこたれてたらこの先戦えないよ」

慣れない急降下爆撃を敢行するのはを氣遣うレイジングハート。実際、なのはは砲撃で敵を薙ぎ払う事には慣れているのだが、味方の後方支援はまだ経験は浅い。いつものように単純な任務では無いせいか、疲労の度合いが大きい。味方に気を配る必要があるからだろうか? なにせ戦車は航空攻撃には脆い。それはWW?などの実戦が証明している。彼女は対空砲火にも臆せずに第3弾を行う。

レイジングハートが最適なタイミングを測り、なのはに教える。急降下爆撃の肝は、如何にして正確に目標に攻撃を当て、うまく離脱するか、である。第二次大戦開戦時の大日本帝国海軍航空隊はこの名人が多く存在した。特に艦爆の神様と謳われた江草隆繁<sup>えくさたかしげ</sup>少佐の正

確無比な爆撃術は有名だ。なのははそんな偉大な先人達の事はもちろん知っていた。そしてその手での名人の一人であるハンス・ルーデルの事も。『彼らのようにになりたい』。自分の本分は大火力による戦場の制圧にある。だが、味方の支援をこなせなければ集団戦に向いてないことになる。

—この分野でも頑張らなきゃ。敵兵に砲撃を食らわせ、離脱に移る。しかし、そうは問屋は卸さないとばかりに近接信管入りの対空砲の衝撃を受け、バランスを崩し、失速してしまう。

「し、しまっ……!!」

なのはは失速し、錐揉み状態で地面へ落下していく。士魂連隊の兵士たちも思わず戦車から身を乗り出して悲鳴をあげる。

—スピードが急すぎる……立て直せ……!!

『捕まれ!!』

一機のバルキリーがガウオーク形態で突っ込んでくる。ルーデルの機体だ。彼女は身を乗り出し、手を伸ばす。それが功を奏し、なのははせめてあのバルキリーに、と軌道を精一杯修正し、ルーデルのメサイアに落下してくる。ルーデルはうまく落下してくるなのはを受け止める。流石というべきか。

「あ、ありがとうございます……」

ホッと一息ついてルーデルの膝の上に座るのは。目立った怪我は無いようだ。ルーデルは安堵する。

よく見ると女の子の肩が震えている。怖かったのだろう。死の恐怖を味わったのだから当然だ。ルーデルは優しく抱きしめてやる。

「え……？」

赤面してルーデルの胸の感覚に戸惑うのは。

「もう大丈夫だ。大丈夫だから」

短くだが、ルーデルは正面から女の子一なのは一を抱きしめてやる。

—そういえば昔、私も母さんにこうやってもらったな……。

今や遠い昔になった幼い日に自分の母が教えてくれた温もりをルーデルは思い出す。その何分の一でもこの少女に与えられれば。ルーデルはぎこちない抱擁でなのはを落ち着かせる。

この一瞬が、スツーカーの悪魔、と謳われるウィッチ「ハンナ・ルーデル」と管理局のエースオブエース「高町なのは」の出会いだった……

## 第63話「新コスモタイガー」(前書き)

宇宙戦艦ヤマトメインです。新た〜以降のあのBGM推奨です(笑)

### 第63話「新コスモタイガー」

―地球連邦軍のハワイ攻略戦の苦境は、かの、宇宙戦艦ヤマト、にも伝えられていた。艦長代理の古代進は艦を率いて参陣したかったが、白色彗星帝国との戦いの傷が癒えぬ（あまりにも損害を被ったためと、ワンオフ艦のために莫大な費用がかかるヤマトの修理工事は進まず、7月現在で60%に留まっている）今の状況では無理だった。

「クソッ！地球が全力を挙げて兵団と戦っているというのに、俺は何もできないのか！！」

憤慨する古代だが、ヤマトはまだ工事中であるし、自身の駆った『零式宇宙艦上戦闘機、コスモゼロ、』も失われている。抽出すべき艦載航空隊も殆どの人員が戦死。数少ない生き残りの山本明は他の艦に転属命令が出されてしまったし、機体も残存機数は予備機の6機だけ。これでは焼き石に水で、作戦参加は認められないだろう。戦後に配属された坂本茂も今は別任務についている。

「そう落ち込む必要はないぞ、古代」

「真田さん」

ヤマト工作班班長で、ヤマトの知恵袋、と連邦軍内であだ名される逸材「真田志郎」が古代をなだめる。彼は藤堂総長（史実では彼が地球防衛軍司令長官である）からの、プレゼント、を運んできたのだ。

「参謀本部からヤマトにうれしい物が届けられたぞ」  
「何です？」



「まあとにかく格納庫に来てみる」

真田に促されて古代は今は殆どがらんど同然の格納庫に足を運ぶ。  
そこには……。

「こ、これは……」

―真新たらしい機体が置かれていた。生産が始まって間もないコスモタイガーの第二次生産ロット機である。以前のそれと比べると、全長などは同じだが、鋭角さが増してシャープになり、搭載量も増している。エンジンノズルも微妙に形状が変わっている。

「今年から生産され始めたコスモタイガーのマイナーチェンジ型だよ。装甲の強化、エンジンの新型への換装、ハードポイントの増加などの細かな所を改良され、以前の機体の数機分の戦力を発揮できる」

その機体は俗に、新コスモタイガー、と呼ばれるものだった。塗装こそ従来機同様だが、性能は以前とは別物に近い。近衛航空隊や過酷な任務に従事する部隊へ優先的に回され始めた代物だが、ヤマトが今後直面するであろう事態に対応するに当たって、彼が自らの権限で配備させたのだ。

「これで作戦に参加されたしとの通達が出された。無論、航空隊としてだ」

「しかし真田さん。機体はともかくも、人員はどうするんです？」

「コスモタイガー隊の生き残りが15人ほど退院して復帰したから、奴らが付いて行ってくれる。飛行中隊としては丁度いい数だ」

真田は激戦を生き延び、宇宙有数の腕を誇ったヤマト航空隊の人員

を遊ばせて置くのはもったいないという藤堂の意思もあるが、前回の航海で軍規違反を犯したヤマトを擁護する彼の立場を危うくさせようとする保守派を黙らせるためにも働きを示す必要があると告げる。

「そういう事だそうだ、古代」

「コスモゼロは回して貰えなかったんですか？」

「あれは俺からも頼んだんだが、マルチロールで無いことがネックになってあの型は生産打ち切りになったらしい。専用部品も多いこともマイナスだったようだ。南部重工業公社はベテランからの要望でこのコスモタイガーと共通部品を使った新型コスモゼロの開発を始めたそうだが……」

コスモゼロで古代が乗っていた型は生産打ち切りになってしまったことを残念そうに報告する真田。古代の部下の南部は公社の御曹司なので、こういうことは会長である親に掛けあって交渉してくれるが、流石にコスモゼロを確保するのは出来なかったもので、その代りに古代用にチューンナップした新コスモタイガーを送ったそうだ。

「俺専用か……南部には苦劳かけたな。」

「さあ出撃だぞ古代」

「真田さんですか？」

「人員の足しにはなるだろう」

真田は工作班でありながらコスモタイガーを操縦出来る。フェーベ航空決戦で勝利に貢献した彼であるが、実は並の飛行科の奴らより操縦が上手いのだ。彼の万能ぶりはスゴイの一言である。

古代達は整備員にハッチを開けてもらい、エンジンを全開にする。

「艦長代理、腕はなまっちゃいないですよね？」  
「バカモン、当たり前だ」

通信越しにからかう飛行科の部下にそう返すと、古代は新たな愛機  
「新コスモタイガー」で発進する。彼の機体は垂直尾翼が赤く塗ら  
れ、エンブレムが描かれている。

『コスモタイガー、発進！！』

古代はいつものカタパルトからでなく、格納庫からの発進（ヤマト  
は全箇所の修理のためドックに入っていたが、ガンドリークレーン  
で船体全体を持ち上げての作業に入っていたので発進口を開くこと  
が可能であった）に新鮮味を感じつつ、出撃した。発進後すぐに機  
体を反転させ、ハワイの方角に進路を向けた。

―土佐 艦橋

「……そうか！それはありがたい！！」

ハワイ攻略司令部となっている土佐の艦橋は歓喜に湧きかえった。

日本から藤堂参謀本部総長直々の肝いりで、ヤマト、艦載航空隊が参陣してくれるのだ。これほど心強い援軍はスーパーロボット以来だ。

通信兵は小躍りしながら喜ぶ。

「聞きましたか、提督!!」

「ウム。確か古代達は沖田先輩や土方先輩の教え子だったな……先輩方の忘れ形見か」

山南は自身が若かりし頃の士官学校時代の偉大な先輩達の忘れ形見とも言える逸材を自らが扱うことになることに因果のようなものを感じ、目を細める。今や若輩と言われた自分が次期連邦宇宙軍本星防衛艦隊司令の有力候補と言われるようになり、自身の世代が若者を導く番になった。提督の世代交代も進む事を改めて実感した。

（見てますか先輩方）

彼は地球連邦軍を率い、ヤマトに殉じた沖田十三、アンドロメダと共に壮絶な戦死を遂げた土方竜の肖像画に祈る。人類の勝利と自由を。

「敵海上戦力、接近!!」

「スタークジェガン隊とジャベリン隊、コスモタイガーを向かわせろ!! 何としてもハワイへの補給物資到着を阻止しろ!!」

敵の補給隊の接近に艦内は慌ただしさを増す。補給物資が到着すれば敵は攻勢に出るかも知れない。それは何としても阻止せねばならない。直掩部隊の一部が分離して攻撃に向かう。

―ここに均衡状態は終りを告げ、海戦の第二幕が切って落とされた。  
生か死か。気を抜くことは許されない。負ければ人類の総奴隷化に  
一歩近づくからだ。

### 第63話「新コスモタイガー」(後書き)

注・今回のコスモタイガーは「ヤマトよ永遠に」以降の仕様です。

## 第64話「名もなき兵士の奮闘」(前書き)

今回は連邦軍の一般モビルスーツの活躍に触れます。今回はジムの末裔RGM-122ジャベリンの番です。

## 第64話「名もなき兵士の奮闘」

―地球連邦軍のハワイ攻略の第二幕が開始された。ハワイに物資を届けようとする兵団、それを阻止しようとする連邦。オアフ島沖の海上での戦いが始まった。

コスモタイガーの編隊が敵補給船に対して対艦ミサイルを放つ。遠距離からの攻撃だが、相手にはミサイルの誘導を妨害する、電子戦、の概念は無い。狙い通りにミサイルは相手の土手っ腹を派手にぶち抜き、火柱を上げる。ファーストストライクは成功だと言って良いだろう。

「よし、上出来だ。あとは敵歩兵の襲撃に備えろ」

歩兵は飛行能力を備えている。そうなれば航空機は練度が高いパイロットでもなければ不利である。戦闘機は一撃離脱に徹するしか無いだろう。歩兵との白兵戦はモビルスーツに任せるのが今の部隊の練度から考えると妥当だろう。（ヤマトの航空隊のように、常に大戦果を上げられるのは搭乗員の練度の高さによるものである）

コスモタイガーの前にスタークジェガンとジャベリンが出る。対艦・白兵戦を同時にこなせる高い汎用性からガンダムタイプ（派生・完全量産型含む）以外の普及機の中では重宝されている両機種。この両機種は正確に言えば運用試験機の発展型だったり、初期生産機を高性能化した第二次生産型である。スラスターを吹かしてそれぞれの武器を構える。

スタークジェガンは拡散弾が装備されたハイパーバスターカを発射し、



ジャベリンは対艦用のショットランサーを放つ。これで打撃を与え、あとは生き残った兵士を掃討する。一見すると楽な任務に見えるが、実に難しい。モビルスーツより小型の兵士相手に白兵戦を行うのは相当に熟練がいるからだ。（この頃の連邦軍のモビルスーツパイロットの平均的練度は低い。それは一部の熟練者やエースと一般兵の差が大きい事が要因。それは国民にも周知の事実で、2198年頃に一般に公開された過去の各戦乱のドキュメンタリー映画に連邦軍が一方的になぶられる場面が多く見られたのは低練度のパイロットが多い部隊が熟練者に相対するハメに陥った場面を重点的に放送していたためである）

「来たぞ。数は数十程度。レーザーのサーベルやクレイモア、フランベルジェを持ってる」

「そうなるどジェガンじゃ小回りが効かん。ここはお前らに任す」  
「へへ、そうこないと」

ジェガンは18m程度で、モビルスーツとしては普通の大きさだ。しかしガンダムタイプのように小型の敵に対応可能な機動性や運動性は持ちあわせていない。ここは小型機のジャベリンに任せるしかない。ジャベリン隊は意気軒昂とスタークジェガン隊の更に前にでしゃばり、ランサーをせり出したり手持ちに切り替える。

「行くぞ野郎ども」

ジャベリン隊は、この戦場の主役は自分達だ、と言わんばかりに遮二無二、かつてのハルバードやランスを持った騎兵のように突撃を敢行した。かつてのクロスボーン・バンガードは個別にショットラッサーを用いていたが、地球連邦には有史以来人類が培ってきた槍の扱い方のノウハウの全てが受け継がれている。ランスの要領で敵をまとめて串刺しにしていく者もいれば、先端部分の重量でかち割るように振り下ろす者もいる。扱いかたはパイロットの出身地によってまちまちである。中には敵とビーム・サーベルで斬り合いになっている光景も見受けられる。中には日本に伝わる剣術の流派「二天一流」の要領で二刀のビーム・サーベルを巧みに操る猛者もいる。（この時期、連邦軍は白兵戦における戦術の模索のため、操縦時間が長い熟練兵やエースの特権として、機体のOSに自分の好みの動きを反映させる事を許容していた。その動きは熟練兵やエースの間で広まり、自分達の好みの剣術及び武術などの動きを続々と組み込んでいった。競技用のモビルファイターのノウハウも取り入れられた結果、連邦軍のモビルスーツは格闘戦も人間並みにこなせる柔軟性を手に入れた。その成果の一つが二天一流の完全再現に成功しているジャベリンである）。

「ふっ!!」

このジャベリンのパイロットは匠に機体を操り、自分が10代の頃から10年近く習っている二天一流の剣術を再現する。敵は二刀流に戸惑い、まともに反撃もできない。左右で受けと攻撃を使い分ける剣術に驚いているのだ。

「宮本武蔵は相手の意表を付けと五輪書に書いたと聞く。それに俺は成功したらしい。」

「刀ってのはこうやって使うんだ!!」

ジャベリンは右手のサーベルで一刀のもとに切り裂く。兵団は地球の武術を研究しているようだが、所詮付け焼刃。手慣れた自分達の敵では無い。

他にも機体によって千差万別の攻撃法が見られる。彼のように剣術を扱うものもいれば、槍術のエキスパートもいる。中には柔道や合気道などの体術を用いて沈黙させるなど、スゴイ動きを見せる機体も見られる。このようにして連邦軍は白兵戦でもって優位に立ち始めていた。正に「柔よく剛を制す」であった。

一オワフ島に数台の超弩級戦車と自走砲が空輸されてきた。旧ドイツ軍の計画を実現させた「モンスター」と「ラーテ」である。これに砲兵代わりの180ミリ砲装備の陸戦型ガンダムを加えた砲撃部隊で

定時砲撃を加えるのだ。敵の要塞の超合金による強固な防御をブチ破るには最も最短の方法である。

開始時刻は9月12日の早朝。それから時間帯を3つに分けて定時に砲撃を行うのだ。砲兵達は人類史上最強のカノン砲の咆哮を心踊る気持ちで待ちわびる。一80センチ砲の砲身が不気味に光を放つ。ナチスの遺産が本当の意味で咆哮する時は近い。

「80cm砲で奴らのいる区間を地図から消してくれる」

人類史上最強のカノン砲を備えた自走砲はその砲身を天に向けていた。人類が創り出したカノン砲という、矛がメカトピア最強の、盾で構築された要塞と対決する日は間近に迫っていた。

## 行間その7「宇宙戦艦ヤマト 2」(前書き)

序盤に帰還後のなのはへの上層部の設問に触れますが、大体は宇宙戦艦ヤマトの動向です。

## 行間その7「宇宙戦艦ヤマト 2」

一時空管理局出身の魔道師が1944年と2199年の双方の戦いに参戦していた事が判明したのはミッドチルダ新暦で70年代に入ってからであった。管理局にとって、なのはの2199年での行動の詳細が明らかになったのは当人への上層部の設問による物だった。この設問とフェイトの報告書が管理局の上層部に衝撃を与えたのは云うまでもない。

一新暦71～72年頃

「一等空尉、君はあの世界の戦乱に深く関わったというが、本当かね？」

「はい、閣下。私はあの世界の地球連邦軍の一員として戦いに参戦していました」

当時、14歳で一等空尉になっていたのはは淡々と上層部の高官達の質問に答えていく。ただし当時行動を共にしていた陸戦魔道師スバルのことのことにについては一部除いて、お答えできません、で通す意志の固さを見せた。（これは上層部にスバルの存在を知られる事で歴史がさらに大きく変容することを恐れたからである。スバルの運命をこれ以上ねじ曲げたくなかった彼女のせめての抵抗だった）（ただし彼女の知らないところで、好転を誰かが望んだ運命は多少であるが、好転していた。ノイエ・カールスラント（カールスラントが南リベリオン大陸に築いた亡命政府）にスバルの母の10代の頃の姿と同じ容姿と同じファーストネームを名乗る少女がいることがわかったからだ。その少女は1942年の段階で10歳程度の、孤児、で、現地を放浪していたところを空軍のエース、アドルフイーネ・ガラ

ンド、に引き取られ、彼女の手で育てられたという。1944年の段階ではカールスラント軍の一ウィッチとして戦っている。この思いも寄らない事実はここから1年後、なのはが穴拭智子と再会したときにノイエ・カールスラントで話題に上がった話として伝えられる。智子が持ってきた写真に写っていた少女は明らかにスバルやその姉、ギンガ、とよく似ていた事から、フェイトが高校入学後の夏休みにその確認のために現地に赴くことになるのだが、ここで語るべき話ではないだろう)

「彼らについて君はどう思う？」

「彼らは自分達の手で平和を勝ちとってきました。今更管理局がどうこう言ったところで彼らは自分達の手で地球を守りますよ。万が一……敵に回したが最後、波動砲やマクロスキャノンで惑星ごと吹き飛ばされるのがオチですよ。そうなれば私は迷わず地球人として戦いますかね」

それは管理局上層部への当てつけとも言える発言だった。あの世界はほっといても自分たちの手で世界を守る。それを管理局がいきなり「自分達を守る」と入り込んできたら、いたずらに現地の反発を招くだけだ。他の多くの世界での右派の失敗がそれを証明している。

上層部に見せた、あの世界との戦争となったら自分は地球側に立って戦う、という決意。それはなのはが自分はミッドチルダ在住の地球人だという自覚をはっきりと持っている事の現れでもあった。その設問の様子を見守っているフェイトやヴィータはこの時、こう思っていた。

—この人達ひとたちに新マクロス級のトランスフォーマーシヨンやゲッターロボの変形合体を見せてやりたい。どんな顔するか？

接触後も時空管理局の上層部に根強く燦る、征地球論、は裏を返せば、23世紀の地球の持つ驚異的までの超科学力がいずれは自分達に取って代わってしまうのではないか、という異質な物への恐怖をミッドチルダ政府が持っている事の現れでもあった。現実的に判断のできる者達は白色彗星帝国と地球の星間戦争で用いられた、潜宙艦、などの特殊艦艇を見て、『あの世界だって宇宙全体で見ると新興国に過ぎないが、それなりに頑張ってるというのに』と溜息をつくばかり。右派は自分達こそが頂点だとのぼせ上がっているのがよく分る。

一現実を雁首揃えてよく見ろ。昔の国々はそうやって滅んでいったのに。

ヴィータはそう言いたくなる衝動に駆られた。驕り高ぶる者は例外なく滅びの道を歩んでいく。地球の例をみても、古代ローマ帝国、アレキサンダー大王死後のマケドニア、モンゴル帝国、清王朝……大日本帝国とドイツ第三帝国。それらは一時は大帝国を築きながらも、驕り高ぶる一部の者の愚行で滅んだ国々だ。ミッドチルダがそうだった、滅び、に直面したのはもう100年以上昔の事。そうやってしまうのも仕方が無いのだろう。質量兵器の廃絶という一見崇高な理念や管理世界への要請は自らの体制を永続させるための手段と取られても仕方が無い。現行の管理局が生き続けなければいずれ反感が吹きでてくる。それを顕現させる前に諫められる人材の出現を祈るしかないだろう。

設問を受けるのはも同様の気持ちで数年前まで管理外世界であった、あの観測指定世界となった未来の地球の事を侮蔑している高官らに呆れつつも、設問に事務的に答えていった。



一西暦2201年。宇宙戦艦ヤマトは訓練航海のために火星付近で友軍艦隊と合流し、訓練に励んでいた。ヤマトの新たな旅立ちである。

「第一、第二主砲は右舷のダミー艦を狙え。コスモタイガー隊は対艦攻撃訓練を行い、練度の向上に努めろ」

この時期のヤマトの乗員の殆どは有望な者が多いとは言え、これが初の艦隊任務である若者が大半を占めていた。コスモタイガー隊を率いているのは事実上の隊長格「坂本茂」。そして艦橋には士官学校を首席で卒業した俊英「北野哲」が勤務している。そんなヤマトにおいて、来客、扱いになっている菅野直枝は艦内からコスモタイガーの訓練の様子を見ていた。コスモタイガーの対艦攻撃の標的艦は地球連邦軍が退役させた旧型のサラミス級巡洋艦やM-2174 1式宇宙戦艦（ヤマト登場以前に作られていた惑星間航行用の戦艦。沖田提督の指揮艦は日本で記念艦となったが、この艦はアメリカのドックで本土決戦に備えて秘匿されていたものである。旧名は、ノースカロライナ）。波動エンジンの実用化とその搭載艦が順次編入されるに当たって、第一線戦闘艦としての任を解かれ、標的艦としての第二の人生を歩む事になった）である。標的艦は駆逐艦からのリモコン操縦で動き、コスモタイガー隊の練度上昇に一役駆ってい

た。

対空砲火をくぐり抜け、模擬弾を叩き込むコスモタイガー。この頃には新コスモタイガーがヤマトなどの艦船には全面的に配備されていたので、コスモタイガーの新型への機種統一は一応成功している。

「宇宙でも戦えるストライカーユニットがありやな……」

菅野は宇宙戦を行うことができない今のストライカーユニットに齒がゆい思いを持っていた。宇宙でも使えるジェット・ロケット双方のハイブリット式は、3年以上の歳月はかかるだろうし、「扶桑海の巴御前」が使っているものにしても、まだ正式採用前の先行試作の代物に過ぎない。それらは各戦線での支えとなっているエース達に優先的に配備されているが、ジェットへの生産設備の転換に時間がかかり、設備がある扶桑の出身者でもジェットを受け取れたのは数える程度に過ぎない。真田が開発陣に加われれば年単位で時間が縮められると思うのだが……。

「ぼおっとしているワケにもいかねえ。どうしたものか……」

菅野は宇宙で自分の出番はまずないだろうが、何か役に立てないものかとヤマトの艦医である佐渡酒造に相談してみることにした。

「フム。要するにお嬢ちゃんは自分も何かヤマトの役に立ちたいんじゃないな」

「そういう事だよ、佐渡大先生」

禿げ上がった頭と、名は体を表すの要領で無類の酒好きな『名医』  
（実はこの時、人生で一、二番の誤診をやらかしているが、それが  
誰であるか本人すら知らなかった）佐渡酒造は菅野の相談に快く応  
じ、アドバイスを与えた。

「ヤマトは結構忙しいからのお。島の航海班や真田君の工作班はお  
前さんの性には合わんじやろう？」

「ええ」

「と、なると手空きの生活班、飛行科搭乗員が定数には達していな  
い戦闘班になら何とかねじ込めるじやろう。ワシが古代や雪に話つ  
けとくから酒でも飲んどけ」

「オレ、未成年ですよ？」

「心配いらん。この時代、ノンアルコールのビールテイスト飲料つ  
て便利なモンが発明されておる。あれ考えた奴は偉大じゃぞ」

佐渡酒造は冷蔵庫から未成年者用のノンアルコール・ビールテイス  
ト飲料を取り出し、菅野に差し出す。

「キ○ンじゃん！！確かにこれ考えた奴はスゲエ」

佐渡から缶で渡されたビールテイスト飲料を飲み干しながら菅野は  
ヤマトのこの航海での自分の身の振り方に想いを馳せていた……。

この火星基地で訓練を行なっている艦艇はヤマトの他には、戦艦「  
テメレーア」、「ハウ」、「ライオン」、空母「クイーン・エリザ  
ベス」、「インヴィンシブル」、「オーディシヤス」、「イーグル」  
、巡洋艦「高雄」「愛宕」、「摩耶」などの艦艇である。これらは  
修理完了間もなかったり、新造の試験航海故に正規の艦隊編成には

組み込まれていない。連邦軍の上層部はこれらの試験航海をヤマトに同行させてすまそうという思惑があった。ギアナ高地に一つの電報が舞い込んだのはヤマトが火星に着いて三日後のことであった。

「將軍、長距離通信が入ってきました」

「どこからだ？マクロス級、それともメガロイド級か」

「ハッ……それが……旧・ガミラスの、しかもデスラーからなのです」

「何、デスラーから？」

「なんでもイスカンダルの事についてなのですが……」

「デスラーからの通信を部屋の端末に繋ぎ給え。今すぐだ」

レベルはデスラーが直々に地球に通信をかけてくるとは何事か？と通信端末の電源を入れる。

それがヤマトの三度目の航海の幕を切って落とすきっかけになろうとは誰も思いもよらなかった。

## 第65話「若鷲達、決戦の大空へ」(前書き)

今回は前線に配属されたばかりの新兵たちの訓練に触れます。

## 第65話「若鷲達、決戦の大空へ」

—ハワイ攻略戦の戦況は9月現在、五分五分といったところであった。所々で地球連邦軍側が戦線を押し始めたものの、まだまだ兵団側も精鋭部隊が健在であり、采配を一個でも間違えればドミノのようになり、兵団側にミリタリー・バランスが傾きかねない危うい状況でもあった。連邦軍は逐次、航空戦力を増強・補充し、それを担うパイロットの育成を急いでいた。

—2199年9月中旬。戦争報道に力を入れる地球連邦軍はTV局の太平洋戦線の状況についての取材を受けていた。

『見ての通り、我軍は友軍と共にこのハワイを奪還すべく全力を尽くしております。』

地球連邦軍が確保した地帯の後方に設けられた簡易飛行場の一角で艦隊の報道官が駐機されている各種兵器を背景に説明を行なっている。駐機場では主に航空兵器の類が待機している。コスモタイガーやバルキリーなどである。空中では補助機となったブラックタイガーが訓練を行っており、黒と黄色の塗装が鮮やかな機体が飛行機雲を作っている。地上での隊舎の方に目を向けてみると、前線に配属されたばかりと思われる新兵を教官がしごいている。軍隊では極当たり前の光景ではあるが、こういうモノを初めて見る報道関係者達は誰もが目を丸くしている。

『新兵共はまだ肝っ玉が小さいですからな。こうして毎日の訓練で鍛えているわけです』

報道官の言葉は軍隊がどうやってヒョロヒョロの若者を一人前に鍛えあげていくのかを端的に表していた。教官にしごかれている新兵たちの中には、士官学校で訓練を受けた者もいるが、士官学校を経ない課程で士官になった者もいる。意外なことだが、時には後者の方が前者の士官学校出のエリートよりも根性があるところがあるのだ。その隣ではウィッチと思しき女性将校がうら若き乙女たちをしごいている。

『よし、今日は九九式での訓練に入る！全員機に乗り込んで待機！』

教官の号令と共に訓練を受けている新兵たちは格納庫に駐機されている、九九式宇宙艦上戦闘機「ブラックタイガー」、へ乗り込んで行く。腕立て伏せを100回行なってから10分の休憩を挟んでいるとは言え、疲労は隠せないはずだ。それを全く感じさせない動きだ。

『パイロットはいざとなったら、どんな時……どんな状況でもすぐにスクランブル出来るように体と精神を律せねばなりません。敵に青空を侵されないのは彼ら搭乗員の働きあつての事なのです』

「それはモビルスーツなどにも言えることでしょうか？」

「もちろんです。全ての搭乗型兵器に言えることですが、どんなに優れた兵器があつてもその扱いを熟知しなければ何の役にも立ちません。乗員の才能もさることながら、兵器に乗った時間の長さも重要です」

「そうですか……」

一搭乗員の練度が高ければ旧式でも新兵器に乗った新兵を翻弄出来る。それは古くは零戦のエース達がP-51などの高性能機と渡

り合った第二次大戦、新しいところではRGM-79、ジム、で遙かに高性能なMS-14、ゲルググ、をカモにした事例が報告される一年戦争が上げられるだろう。

「あの兵士たちは訓練を終えたらこの戦闘に動員されるのでしょうか？」

『前線は人手不足ですから。猫の手も借りたいくらいに……ね。若者を戦争に駆り出すのは私としても忍びありませんが……このハワイの戦いには地球の命運がかかっています。勝てば太平洋方面が敵に侵される心配はなくなりますが、負ければ帝都が空襲され、太平洋地域の人間が総奴隷化される危険性もはらんでいます。この青い空はいわば、決戦の上空、なのです』

「決戦の上空……。」

日夜激戦が繰り広げられるハワイの空をそう報道官は形容した。パイロットやウィッチなどのうら若き訓練生達はいずれ、荒鷲、となり、命をかけて上空へ羽ばたいていく。それは悲しくもあり、雄々しくもあった。一避けられない戦いならば自分達がその礎とならん——インタビュに答える兵士たちのいずれもその青春と命をかけた決意が妙実に現れていた。それはパイロット・ウィッチのいずれも共通していた。

—この日、彼らが撮ったTV番組は後にドキュメンタリー番組として高い評価を受けるに至る。その番組は主に左翼から戦意高揚のプロパガンダだと批判する者が絶えなかったが、若者達がどんな気持ちで戦争に身を投じて行ったのかを示す資料として、2200年代末に高校・大学の歴史教材に選ばれる事となる……。





## 第66話「GET WILD 1」(前書き)

ハワイ攻略にまさかの風雲急です。

## 第66話「GET WILD 1」

―地球連邦軍上層部はハワイにとんでもない代物が秘匿されているという情報に誰もが目を丸くしていた。それはハワイの鉄人兵団基地には旧世紀のアメリカ海軍が保存していた、歴史上最後に製造した前世代型核兵器、があるというのだ。その威力は現有の反応弾には及ばないが、ハワイを一個まるごと吹き飛ばすには十分だという。情報部が決死の情報戦を行って手に入れた情報であった。最悪、兵団が地球連邦軍を道連れに自爆する危険性が考えられた。

「ううむ……まさか水爆とは……」

レビル將軍は情報部からの報告に深刻な表情を浮かべた。地球連邦軍の保有する旧型の核兵器は第二次ネオ・ジオン戦争までに消費し尽くしていた筈だった。レビルは連邦政府を設立した旧・国際連合最末期の常任理事国が残した最後のツケを自分達が支払うことになった事に愕然としていた。幕僚達も一様に暗い表情だ。

「国連時代・地球連邦設立当初のツケが回ってくるか……歴史の皮肉というべきか」

地球連邦が設立され、現在のような中央政府の座に収まるまでの過程は血の歴史と言って良い。資本主義陣営と共産主義陣営の統合戦争でようやく落ち着いたと思えば、初代大統領がテロ―現在では「ラプラス事件」と呼ばれる―で死亡。その後も連邦政府の性急な設立に反対する国々は多かった。共産主義陣営はもちろん、資本主義陣営の一員であったハズの米国、イスラム教が根つき、独自の文化圏を確立していた国々や石油産業で成り立っていた中東国家群……大国から独立してまだ半世紀も満たない小国……連邦政府設立の最

初の数十年間はそれらとの戦争・紛争で占められている。

「この連邦政府は日本や英国が主導して設立しましたからな。それに反対する国々は当時の政府と軍によって根こそぎ潰された……それが例えアメリカであろうと」

そう。それら紛争を裏で主導し、操っていたのはアメリカ合衆国であった。アメリカは21世紀序盤の遠征の失敗やその後の大統領達の相次ぐ失政により、国際社会への影響力を徐々に喪失していき、とうとう第二次世界大戦後に確保していた超大国としての地位から滑り落ちた。日本が軍備も備えた、大国、に返り咲き、英国も紛争で荒廃した旧植民地を再び配下（建前上はイギリス連邦体制の強化）に収めた事がアメリカの、天下、に幕を下ろした。だが、それを快く思わない旧・アメリカ合衆国は資本主義陣営に属しながら、裏で連邦政府に対立する国々の援助を行っていた。つまり、地球連邦軍にとっての最初の強敵は前時代の盟主であった合衆国だったのだ。

皮肉なことに当時のアメリカ国民は1945年以後に握った『自由民主主義国の盟主の地位』に未だ酔いしれていた。悪く言えば「アメリカこそが自由民主主義の旗振り役であり、アメリカ軍によって世界が維持される」という選民意識が少なからずあった。『世界の盟主であったという慢心によって、かつて自らが、忠犬、、腰巾着、に再教育したはずの日本や英国に敗れ去る結末を産んだ』のはこの時代の人間の共通認識だ。今回の水爆は恐らくその時代に作られ、旧米軍によって何かの目的のために保存されていた物で、鉄人兵団によって発見されたのだろう。と、なると当時の設計図は当てにできない。兵団が何かかしの改造を行っているのは容易に想像できるからである。

「前線部隊への通達は!？」

「既に土佐へ打電済みです。水爆を踏まえた作戦協議のため、山南提督と通信が繋がっております」

「よし……」

モニターに山南が映しだされる。その表情は深刻だ。何しろ水爆の存在が明らかになったのだ。平静を保つ事は難しい。

『……不味い事になりましたな、將軍。まさか旧米軍の置き土産がこのような形で発見されるとは……』

「ああ、まったくだ。米軍も余計な物を置いていったものだ……水爆の詳細はまだ情報部が緊急で当時の資料を根こそぎ調べているが……当時の関係者の手記によれば君たちのいる一帯をクレーターに出来るのは確からしい」

『しかしそんなもの……何故……？』

山南の疑問にレベルは情報部高官の推論を伝えた。それは真実に一番近い理論でもあった。

当時の軍人達の心情を踏まえると、どうしてもそこへ行き着くからだ。

「これは情報部の推測だが、紛争の末期に米軍の右派が帝都を焼き払うために用意していたというのが一番妥当な線らしい」

「何ですって？いくら米国に白人至上主義がまだ信じられていたとはいえ……」

情報部が行き着きつつある結論は「『連邦政府による地球上の紛争のすべての根絶』宣言が出され、米国が連邦政府に降伏する前年に米軍が学園都市を抱える日本地区の州都であり、連邦政府の、帝都、東京を核で焼き払い、戦況の打開を目指した」というものだった。

旧体制の覇者であったプライドが米軍をそうさせたのだろうか。それは今となっては知る由もない。それを突き止めた情報部の人員には何らかの栄誉を与えるとして……

―この後、山南は水爆の存在を全軍に布告。現地の連邦軍は水爆の搜索にも神経を尖らせることになる。兵団の隠し玉は皮肉にも人間が遺棄した旧時代の遺物だったのだ。

全軍への布告は兵士たちに少なからず混乱をもたらした。だが、うっかり80センチ砲か何かで核を起爆させてしまっただけは元も子もない。兵士たちには今まで以上の慎重な行動が求められた。

「そんな危ないものがっ……!」

作戦行動でハワイ市街を飛行中の穴吹智子は、核兵器アリ、の布告に驚きと焦りが入り交じった危惧を見せた。敵がそんな大層な代物を地獄の道づれに使うとするのなら早くそれを見つけ、止めなくてはならない。こんな事で仲間を失うのは真っ平御免だ。

「智子中尉、ここは私に任せてください。中尉は早く核の搜索を！」

「……死ぬんじゃないわよ、ハルカ」

「武運を」

「……ゴメンなさい。せつかく久しぶりにあったのにこんな事に付き合わせて」

「……構いません。智子中尉のためなら私は命を賭けます。……行  
って下さい」

「ハルカ……っ!」

涙腺が崩壊しそうなほどの悲しみを必至に堪えながら智子は編隊を  
解いて、北北西に進路を取った。部下の迫水ハルカの想いを無駄に  
しないために。

そしてハルカは兵団の編隊に向けて、この日にまどっていたストラ  
イカーユニット、零式五二型のエンジンを全開にし、銃と刀を手  
に突貫していった。―そして一つの閃光の花火が空に現れたのはそ  
れからすぐのことだった……果たしてそれは彼女の散華の光なのだ  
ろうか?それとも……

## 第67話「GET WILD 2」

―連邦軍は慎重な行動を取らざるを得なくなっていた。水爆の存在が明らかになったせいで迂闊な行動を取れなくなったのだ。全軍の攻勢にも影響を及ぼし、モンスターやラーテによる砲撃も中止命令が出されてしまった。そして連邦軍は水爆の所在を搜索すべく、それまで防空の任に就いていたモビルスーツを援護に振り向けると同時に、確保に成功した地域は直ちに兵士たちによる搜索が行われた。

「こちらカイルア方面。水爆は発見できず」

前日にカールスラント軍機甲師団の奮戦で奪還に成功した旧ホノルル群・カイルアから前線司令部に報告が入る。この地域はカールスラント軍の重戦車大隊とグロースドイッチュラント師団が敵兵力を電撃戦によって参戦より4日で撃破、奪還に成功していた。同師団は全兵力で民間人が住んでいた住宅までも徹底的に搜索を行ったが、水爆の影も形も発見できなかった。これでカイルアはシロである事は判明したが、まだまだ予断を許さないことには変りない。

―最大の激戦地であり、かつてのハワイ最大都市であったホノルルでは銃弾とビームが飛び交う中、穴吹智子が市街地をひた走っていた。前線のトーチカでストライカーユニットを脱ぎ、陸戦態勢に入ったうえで市街地を必死に探し回っているのだ。

「……ッ、どこよ水爆はッ!!!」

無人のビルに入って全ての階の部屋を捜し回る。一階、二階……は



たまた元は警備室であつた部屋も。監視カメラシステムを統括するコンピュータも作動させて通路や階段に至るまで全て調べつくしたが、このビルには影も形もない。

―この時、智子の焦燥は大きく膨らんでいた。もし陸上の最大戦力が集中しているこの地で爆発すれば作戦の失敗と連邦軍太平洋方面戦力の壊滅を意味する。更に前線司令部に仮面ライダーたちから入ったメールによれば、この地でクライシス帝国が暗躍しているという。焦りも次第に大きくなるのも当然であつた。

（クライシスまで来てるなら漁夫の利を狙っているはず……ジャーク將軍はなかなかの戦略家だから）

智子はこの世界で行動するうちに仮面ライダー達との面識が出来ていた。そしてバダンやクライシス帝国とも刃を交えている。栄光の11人ライダー相手によく戦い、帝国攻撃兵団を統率している「ジャーク將軍」を彼女は軍人として高く評価していた。連邦軍と鉄人兵団の争いをよそに、クライシスの目的は何であろうか。

ビルを出て、大通りに差し掛かるところで、どこからかレーザーの射撃を受ける。智子はとっさに備前長船則光を鞘から抜きに魔力を宿して振るい、レーザーを逸らす。

「……何者？出てきなさいよ、いることはわかってる」

『随分と血気盛んな小娘だ。……いいぜ、出てきてやろう』

「その声は……アンタだったのね」

「ほう。貴様……この前の……」

智子の前に立ち塞がったのはモノアイの頭部と革ジャン姿が特徴的なロボットであり、クライシス帝国の幹部、機甲隊長ガテゾーン、

だった。彼は一匹狼的な性格だが、攻撃兵団参謀のマリバロンとは比較的良好な仲で、単独行動を取っているのは彼女の頼みによるものだ。

「どういう事？機甲隊長のアンタともあろう者が怪魔ロボットも引き連れずに何でこんなところをうろついてるんのよ」

「さあな。……連邦軍は大変なようだな」

「あんたらに言われるまでもない。今度は何を企んでいるっていうのよ」

「オレがここに以上はわかるだろう。それにボスガンの奴は漁夫の利を狙っているようだが、それは俺の性には合わん」

彼はロボットであり、生粋のクライシス人ではない。それ故に同僚の海兵隊長ボスガンとはいまいち反りが合わない。ボスガンはクライシス帝国の名家の出身で、俗にいう貴族だ。地球でも使われている功労者への称号としての騎士の称号を持つもの、出世に執着を持つために卑劣な手段を取る事も多い。その上、生粋のクライシス人でない者を見下す傾向がある。それがガデゾーンをして「反りが合わない」点なのだ。

「あの男にRX打倒のチャンスでも掠め取られたの？」

「そうだ。ここの処はアイツにプレゼンで負け続きなんだよ、自信あつたのに」

うんざりしている声でそう言うとガデゾーンは、敵に塩を送る、かのように一つのメモを残して愛車のバイク「ストームダガー」でその場を離れた。そのメモには兵団が水爆をどこへ運んだのかの会話内容が書かれていた。

「これって……どういう事？」

智子は何故クライシスが水爆がどこに運ばれつつあるのかをわざわざ自分達に教えたのか疑問を持つ。

ジャーク将軍が自分たちの手でRX達を倒す事を悲願としていることは知っているが、何故敵に利する情報を意図的に流すような真似をしたのだろうか。彼の真意は何であろうか……？

―とりあえずこの事を司令部に伝えなくては。

「いたぞ地球人だ！！捕らえろ！！」

「……ッ！邪魔だあああッ！！！！」

彼女は鉄人兵団の兵士を備前長船則光で片っ端から薙ぎ払いながら市街地を駆け抜けていった。

―兵団 司令部 司令官執務室

「閣下、第59歩兵連隊が壊滅いたしました！如何がいたしましたしょう！？」

兵団司令はカネオへ地区駐屯部隊が敵戦車大隊と交戦し、壊滅に追い込まれたという報にも動じる事なく、若い参謀を叱責した。

「馬鹿者、この程度のことでは狼狽えるな。底が知れるぞ」

「ハッ、申し訳ありません」

「……敵戦車中隊の指揮官の名はなんという？」

「ハッ、第502重戦車大隊きつての戦車兵「オットー・カリウス」であります」

「カリウスか……いずれ会い見える事もあるう。それより、第59歩兵連隊のアイツ……、ザスリッチ、は何をしている！？」

「少将は只今ワイカネで態勢の立て直し中とのことですが……」

「ええい、あの無能めが！悔りおって……」

この時期、兵団の地球遠征軍の司令官級の将官や士官などには、占領地域の地球人に対する施策やプロパガンダの一環として、地球名を名乗ることが義務付けられていた。それは彼らが最初に派遣された占領地域の風習に沿っているのだが、それを示す例として、ハワイ基地には地球人の常識で言えば、ロシア人名を持つ将官が多く配属されていた。彼が先ほど言ったザスリッチという名もその一例だ。

「閣下、ワイアラエに新たな敵部隊が！！」

「何っ！」

兵団ハワイ基地は慌ただしさを増す。この戦は兵団にとっても地球連邦にとっても負けられぬ一戦だ。

結果がどうなろうとも自分は軍人としての責務を果たすだけだとハワイ基地司令『ミシチェンコ』はメカトピアに残してきた家族に祈るように執務室を後にし、作戦室に向かった。

## 第67話「GET WILD 2」(後書き)

今回の鉄人兵団の将官の名については日露戦争当時のロシア帝国軍の軍人から頂きました。

「2199年 ギアナ高地にて」 (前書き)

作戦の裏での連邦軍の行動です。

## 「2199年 ギアナ高地にて」

―2199年 8月

この時期、地球連邦の本星たる、地球、は深刻な人材不足に陥っていた。防衛艦隊の主力の大半を銀河殴りこみ艦隊へ抽出したところに、更に白色彗星帝国の侵略で多くを失ったがために、本星防衛艦隊の艦艇は銀河殴りこみ艦隊遠征直前の9000隻以上から2199年時点では300隻程度まで減っていた。新造艦の建造は無人艦艇の建造がシャロン・アップル事件の影響で禁止された以上は有人艦で補填する以外に方法はなく、一度は建造が中止された波動エンジン搭載型主力戦艦級を、後期生産型、と称して第37番艦（彗星帝国戦時、36隻が就役済みであったため）以降の計画が再開されていた。此度のハワイ決戦に駆り出された「土佐」、「敷島」はその計画で生み出された第一次建造分の戦艦である。ギアナ高地ではそれら計画の下で生み出される艦艇の建造が進んでいた。

「アンドロメダ級に変わる次期主力艦ねえ……」

艦艇整備担当者らは軍の高官から提出された整備計画に頭を悩めていた。それらは白色彗星帝国戦当時の艦艇のリファインなどではなく、その発展型などであった。中にはガミラス残党が用いた戦闘空母の影響を受けた空母や宇宙戦艦ヤマトの名を継ぐであろう、二代ヤマト、となるはずの案も含まれていた。

「アンドロメダ級もこれで打ち止めか。なにせメネシスは2号・3号・5号艦の無事だった部品を繋ぎあわせて作ったニコイチの船体に新型の機器とエンジンに収束型波動砲を載っただけだし、し



ゆんらん、にしても所詮は新造パーツの割合を多くしただけに過ぎないからな」

それは彼が抱いているアンドロメダの、遅れてきた姉妹、「メネシス」及び「しゅんらん」への評価だった。彼はヤマトの技師長「真田志郎」の後輩で、同様にアンドロメダの過度なオートメーション化に疑問を持っていた人間である。実際オートメーション化の盲点にはアンドロメダ戦没直前の航海コンピュータの記録（戦後に残骸を調査して回収された）で露呈された。それによれば、被弾時に操艦用電子回路が損傷し、暴走。コントロール不能に陥り、そのまま特攻のような形で散華したとのこと。その盲点は戦後、用兵側の不信が物凄く、建造を送らせてまでヤマト型に順じた改良が施される事になった原因である。

彼が手に持っている計画書の一部は以下の通り。

、次期主力戦闘空母、仮称BN型

予定諸元 全長600m（キロメートル級以上） 波動エンジン搭載  
今後開発予定の新型波動砲搭載 艦載機数は少なくとも70機（  
90機（一式宇宙艦上戦闘機、コスモタイガー？、もしくはその後  
継機などを基準に） 砲撃能力においてもアンドロメダに劣らぬ能力  
を……。

、次期各州艦隊旗艦、

アンドロメダの設計を基準に各州独自技術を取り入れての設計に留める。ただし波動砲の有無や収束・拡散の選択は自由とする……。

「大艦巨砲主義の謗りと言われるのも無理は無いな……だが今は数より質で対抗する他は無いか」

2199年当時の連邦軍は過去の戦乱の戦訓から戦艦・空母双方の働きが可能な戦闘空母の整備に力を入れていた。要因はガミラス帝国が戦乱で戦闘空母などの艦種を用いた事で連邦軍が衝撃を受けた事による。艦船の質と乗組員の練度の充実を進めたい連邦軍であるが、現実はどううまく行かない。第一線の任に耐えうる練度を持つ乗組員はそうそう育成出来るものでも無い。それが軍の悩みの種であった。

「それはモビルスーツの機種転換も同じさ」

「お前、いつ来たんだ」

「今さ。アナハイムから新型機を運ぶ任が終わってな」

、彼の同僚で、モビルスーツ整備・調達担当武官が話しかけてきた。モビルスーツの技術的发展は凄まじく、今では強力な兵装も多数開発されている。今年にルナツー守備隊が遭遇した事件においてもそれが大いに有効に働いたのは云うまでもない。

「俺が乗ってきた艦でルナツー守備隊が鹵獲していた「GAT-01A1ダガー」や「ストライクダガー」の解析作業が終わったが、技術的には一年戦争当時のモビルスーツに中途半端に第二世代のエッセンスをふりかけた感じだった。バッテリー駆動というのだけは凄いいんだが、後は一年戦争後期の機体と辛うじて戦えるか程度の性能で……動力伝達機構しか見るべきものがない」

それは誕生間もないコズミック・イラ歴のモビルスーツはまだ方向性が定まっているとは言いがたい事を示していた。あの世界では、モビルスーツのポテンシャル、を存分に発揮できるのはコーディネーターであり、普通の人間ではOSの助けでようやく対等になる程度、という固定観念が蔓延っていたが、ルナツーの部隊は高性能機と高練度パイロットでそれを打ち破った。(これはモビルスーツなどの人型機動兵器の運用経験が長く、運用ノウハウもすっかり確立された地球連邦軍が持つ誕生間もないコズミック・イラ歴の勢力に対するアドバンテージによる)

「それはご苦労さん。しかしそれはガツクリしたな」

「何、アナハイムやサナリイの連中は参考になったとか言ってたから何かは掴んだんだろう。そうそう新型のことだが、百式の可変タ イプなんだよ」

「じゃ、ついにデルタガンダムになったのか？」

「そうだ。ただしプラス化だがな」

「デルタガンダム。それはグリプス戦役初期に置いて試作されていた初の可変ガンダムの名前である。当時の技術では変形時にフレームにかかる負荷が大きく、歪みが生じてしまう問題を解決できなかったために再設計と開発資産を再利用したのが百式系列であるが、初志を数年越しで実現させたのだろうか。ゼータ系列で培ってきた技術の応用だろうか……ゼータプラスに肖ったのだろうか。」

「ただハワイ決戦に駆り出すにはまだ早いから現地部隊にはリ・ガズイのカスタムタイプを贈るらしい」

「上は総力戦だな」

「太平洋方面はこれで決着つくからな。何ヶ月かかろうが落とすとレビル將軍は意気込んでおられるが……準備不足も相まって苦戦し

「ているらしい」

「ハワイの敵は名将だからな……」

ハワイ攻略戦の膠着状態に溜息をつく武官ら。無茶な決行指令を発してギヤアギヤ騒ぐ政府高官らは連邦軍にとつての内なる敵であった……。彼らは内なる敵に打ち勝ち、戦いに勝利を収める事が出来るのだろうか。

## 第68話「GET WILD 3」(前書き)

私たち家族一同、今回の地震での政権の無能ぶりには落胆させられています。

## 第68話「GET WILD 3」

―かくして出会ったハンナ・ルーデルと高町なのは。ルーデルはなのはをVF-25の後部座席に乗つけてそのまま戦闘を続行した。戦闘中なので、自己紹介はそこそこにすませ、直ぐ様近接航空支援に加わった。

「ル、ルーデル大佐、どうするんですか!？」

「知れた事!このまま突っ込むだけだ!!」

ルーデルはメサイアを突っ込ませて、ド派手にガンポッドやマイクロミサイルをぶっ放つ。近接航空支援とはこういうものだ、と言わんばかりに。それはあまりにも危険かつ華麗であった。超低空でミサイルなどを放てば一歩間違えば爆風に巻き込まれてもおかしくはない。紙一重で爆風を見極めるルーデルの爆撃術や飛び方に、なのはは感心させられるばかりだ。流石はスーツカの悪魔である。

「貴官も、管理局、の空戦魔道士の端くれなら覚えておけ。これが近接航空支援というものだ」

「え?管理局の事を知ってるんですか?」

「知り合いに、前に時空管理局にいた、という扶桑のウィッチがいてな。こっちに行く前にそこから色々聞いておいたのさ。……お前のこともな。高町なのは空尉」

「ふえっ?」

なのははルーデルが自分の事を時空管理局での役職を付けて呼んだ事に驚きを顕にする。向こうの世界は時空管理局は連邦を通しての接触はあるが、正式な国交はまだ無いと聞いている。何故ルーデル

が一応連邦の一士官という事になっている自分の、管理局、での役職を知っているのだろうか。

「そう言えば智子中尉も私と初めて会った時に『あなたのことは聞いているわ』って……一体誰が……？」

二人に自分のことを教えたのは誰だろうか。なのははその疑問をこの戦役中ずっと持ち続けることになるが、そのことを教えた人物がスバルと並ぶ、もう一人の教え子である事を知るのはこれから何年も経過した後の事である。その時のなのはの心中はいかほどのものか。

ルーデルが爆撃で切り開いていった道を第11連隊の4式中戦車と5式中戦車が無限軌道を唸らせて疾駆する。瓦礫を踏み越えて市街地に赴く。途中でカールスラント軍の第508重戦車大隊も合流し、数十両の中・重戦車は最前線へ進軍していく。

「前線の状況が通達された。M3中戦車装備のリベリオン軍装甲師団が壊滅の危機に陥っている。敵が鹵獲したと思われる、M4中戦車の後期生産型（M4A3E8。博物館に残されていたのを鹵獲して兵団が本国から増員された小柄の砲兵用に改造した）が現れ、出鼻を挫かれたようだ」

「M4A3E8ですか。相手にとって不足はありませんよ」

史実で4式や5式はM4などを想定して作られているが、それは世界が違えど同じであるらしく、指揮戦車に搭乗する戦車兵達是不敵な笑みを浮かべる。

「のび太君、君の射撃の腕、当てにさせてもらおうよ」

「お安い御用ですよ」

隊長はすっかりのび太の腕にご満悦なようだ。他の兵士たちはやれやれとため息をつきながら各々の働きを続行する。

砲撃の硝煙が漂い、あたりにジェットエンジンと無限軌道の音が響く。ホノルル市はかつての賑わいを全く感じさせない静けさと、戦いの爆音が同居する不思議な状況となっていた。現地入りしていた従軍記者の手による、この時の進軍の様子を写した写真は連邦軍の反攻の始まりを示す一枚として歴史に残っていく。この戦役における戦争報道がどういうものなのかは後に語るが、彼らジャーナリストのありのままの報道がこの戦役で人類が一丸になれた影の立役者なのは確かだった。



―後方 攻略部隊 仮根拠地

「ジェガン4機、ジャベリン3機、量産型ガンダムF91にアंकシャ5機、陸戦用百式改が支給か。確かに領収した」

「では、我々はマーカスに戻ります」

根拠地に艦船から運ばれたモビルスーツと弾薬・食料が臨時格納庫に運ばれていく。補給の重要性が再認識出来る一コマである。ちなみにアंकシャというのはグリプス戦役でエウーゴを苦しめた連邦正規軍の可変モビルスーツ「アッシマー」の直系後継モビルスーツとして開発され、正式採用された機種。マーカス方面から部隊が進出する事に伴って配備されたのである。

「もうすぐ10月か。当初の予定では短期決戦で、今頃は凱旋しているはずだったんだぜ……？」

「恨むんならもうじき大統領選なのを考えて決行させた今の政権を恨め。これで今の大統領の政権は負けるよ」

補給部門の兵士たちは現政権に対しての愚痴を言い合う。『無能な味方ほど恐ろしいものはない』。かのナポレオン・ポナパルトの言葉である。

「俺さ、もうじき子供生まれんだよ。これじゃ女房の出産に立ち会えなくなっちまう」

彼は胸のロケットに仕込んでる妻の写真を友人の兵士に見せながらガツクリと落ち込む。政権が決行させた作戦での損害をこうむったのは一般兵士達も同じであった。

## 第69話「GET WILD 4」(前書き)

ハワイ編も大詰めの第一段階です。

## 第69話「GET WILD 4」

一兵団に突撃した迫水ハルカであったが、彼女は生きていた。玉砕覚悟で最悪、刺し違えるつもりだったが、辛うじてそれは回避された。援護に駆けつけたアムロ・レイの駆るVガンダム（この時は一般にいうところのフルアーマー形態に当たるHWS装備であった）がその重火器で敵を吹き飛ばしたのだ。

「どうにか間に合ったか」

Vガンダムのコックピットでアムロは安堵の表情を浮かべると外部スピーカーをオンにしてハルカに話しかける。もちろん手持ち火器は撃ちまくっている。

「あ、ありがとうございます」

『無事でよかった。迫水ハルカ中尉だね？』

「は、はい」

「智子中尉から話は聞いている。俺はアムロ・レイ大尉。ここは俺が引き受ける。君は智子中尉のところへ応援に行ってくれ。いくら智子中尉でも単独では危険だ」

「分かりました！でも……いくらガンダムでも、たった一機じゃ」

（この時、ウィッチ達には連邦軍の戦線に加わる際に2199年時点で配備・および開発中のモビルスーツの情報が通達されていた。ガンダムタイプもまた然りである）

「大丈夫だ。Vガンダムは伊達じゃない」

アムロはVガンダムに絶対の自信を持っているようだ。当然といえ

ば当然である。このνガンダムは彼自身が基本設計を行い、第二次ネオ・ジオン戦争を戦い抜いた精鋭機である。現在では、連邦軍最強の地位こそ直系後継機「HⅠーνガンダム」や新世代小型機「ガンダムF91」に譲ったものの、その優れたポテンシャルは歴代ガンダムで未だトップレベルであり続けている。

「ご武運を、大尉」

「君もな、中尉」

ハルカはアムロに促され、智子の応援へ向かう。アムロはそれを見届けながらνガンダムの特徴的武装であり、大気圏内運用に当たり、最新技術で大気圏内使用可能なように改良されたサイコミュ兵器「フィン・ファンネル」を起動させる。

「行けっ!! フィン・ファンネル!!」

ーフィン・ファンネル。連邦軍が正式採用した唯一のファンネルであり、威力・稼働時間共に大方のジオン系モビルスーツが有したファンネルを遙かに超える。アムロの思念に導かれ、フィン・ファンネルは兵団を片っ端から撃ち落としていく。ガンダムの面目躍如である。

「くそ、あのガンダムはバケモノか!!」

「隊長!! 味方が次々と!! 指示を!!」

兵団小隊長は鬼神の如き強さを発揮するνガンダムを吐き捨てるように叫ぶ。地球連邦軍が抵抗と勝利の象徴だと吹聴する、最強のモビルスーツ『ガンダム』。彼はその武勇伝を連邦軍のプロパガンダだと馬鹿にしていたが、こうも、戦場を支配する、圧倒的強さ、を目の当たりにしてしまうと、心胆を寒からしめられてしまう。

そして逆方面から砲撃が加えられる。あの方面に機甲師団はまだいないはずであるが……。

『大尉、自分達はアッツ島方面より馳せ参じました宇宙軍第102突撃中隊であります！援護します！！』

『……感謝する！頼むぞ！』

アムロの応援に、攻略部隊とは別働隊の空母「ドワイト・D・アイゼンハワー」から発進した、宇宙軍第102突撃中隊、所属のフルアーマーガンダム（素体は最末期に追加試作されていたRX-78-3タイプ。追加装甲の素材などの細かなところが第二世代以降の技術で近代化されたので一年戦争の開発時に見られた、意外に鈍重、な機動性は解消されている）が馳せ参じ、重火器を一斉掃射する。フルアーマーガンダムの大盤振る舞いとも言うべき光景は、一年戦争当時に、ある技術者の提出した、ガンダムの強化案が元となって起草されたFSS計画は予算の無駄などではなかった事の証明であった。

「提督！！アッツ島方面より援軍！！」

「何！アッツ島は陥落できたのか！？」

山南は思わず身を乗り出して部下に確認を取らせる。副官は破顔して報告する。アッツ島方面攻略部隊を率いて出陣している「ジョン・コーウェン」からの通達を嬉しそうに読み上げていく。

「コーウェン中将閣下より入電！！『本日、9月25日世界標準時間午前2時、アッツ島攻略担当艦隊は敵基地を陥落せしめ、予備部隊をハワイ方面へ向かわせた』との事です！！」

「よし！！これで後方の心配はなくなった、水爆の搜索及び敵部隊の殲滅に全力を挙げる！！空挺師団の精鋭を投入し、3日以内に最初の近隣地区「ソルトレイク」と「ハワイカイ」を落とすぞ！！」

「ハッ！！」

連邦軍は中心市街を一気に落とす作戦から、ホノルル市中心地の外堀に当たる近隣地区を順番に落とす作戦に切り替え、温存していた空挺師団の最精鋭部隊を投入する腹積もりを固め、実行に写す。この日までに被った損害は決して小さい物ではない。連邦陸軍将兵はラニカイ・ビーチを中心に、既に5000人近くが戦死、負傷者は10000人を超える。戦車は50両を喪失している。空軍と宇宙軍も戦闘機200機が未帰還、爆撃機10機大破、モビルスーツ30機戦闘不能、バルキリーはVF-11が30機未帰還、VF-17も5機、VF-19が2機。ウィッチも負傷者多数な状況だ。それでも勝つまではやらないといけない。たとえハワイに翻る軍旗が兵たちの血で血塗られろうとも。

## 第70話「フライングハイ 2」(前書き)

久しぶりにマクロス・フロンティア編です。

## 第70話「フライングハイ 2」

「第25次新マクロス級超長距離移民船団「マクロス・フロンティア」船団を訪れていたフェイト。同時に新ストライカーユニットへの道筋を掴むべく民間軍事会社「S・M・S」を訪問している黒江綾香達。それぞれの行動はまだ交わっていなかった。

「随分と可愛いお客さんですね、隊長」

「ミシエルか。見ての通りだ」

オズマは格納庫へやってきた部下の「ミハエル・ブラン」に向けてため息を付く。「客」の中には明らかに子供にしか見えない者もある。しかし、向こう側、ではこれが当たり前らしい。しかも皆、女性というのはまるでゼントラーディの女性部隊のようだ。

「ミハイル・ブランです。よろしく」

「扶桑陸軍大尉、黒江綾香だ。今後ともよろしく」

この時の黒江綾香は外見的には13〜14歳程度。栄養たっぷりな食事や牛乳のおかげもあり、背丈も160cm台に伸びていた。（若返った当初は150cm中盤程度。本人曰く「元の身長にはまだ遠い!!」らしい）。ミハイル・愛称ミシエル・はこの時、女性に優しく、口説く時には口説く性分（ただし本命はただ一人）だが、黒江については外見的には微妙なラインといった所。後に親友の早乙女アルトに語ったところによれば、黒江に関しては実年齢と外見年齢が大きく異なることは聞かされていたの、ややこしい、と思っていたとの事。

ミシエルとの挨拶をすませたところで綾香はオズマからの質問を受



けた。綾香はここにいるウィッチの中では唯一バルキリーの操縦訓練を受け、愛機としてVF・17に乗っている。

その感想を聞きたいのだろう。（この時点で正規のバルキリーの操縦訓練を積んだウィッチは黒江とルーデル他3名のみである）

「ところで大尉。VF・17の乗り心地はどうだった？」

「私としては見かけによらず機敏に動くのが気に入りました。ですが、格闘戦用の武器がないのが残念です。ピンポイントバリアも無いですし」

彼女は刀剣を持たせれば扶桑の歴代エースウィッチの中でも十本の指に入る腕前だ。それを発揮できる武装をVF・17系統は持ち合わせていない。ピンポイントバリアパンチ以外でモビルスーツのような刀剣状の正式な接近戦用武装がついたのはVF・25が初めてである（銃剣を設けたケースはサンダーボルトがあるが、緊急用な要素である）。剣術の腕を生かせるバルキリーが欲しいのだろう。言葉の一つ一つからその思いが感じられた。

「ステレスバルキリーは火力は高いが、格闘戦となると、殴る蹴る、しかできないからな。エクスカリバーならまだピンポイントバリアパンチできるからマシだが……メサイアでようやくナイフがついたが、バルキリーは基本的にモビルスーツとは違う設計思想だからな」

「ですね。他の小隊にはメサイア用のナイフを、カリバーン、に持たせた奴もいますし」

「カリバーン？」

聞いた事のない名に綾香はキョトンとする。それにミシエルが答える。

「カリバーンっていうのはVF-19のモンキーモデルの愛称ですよ。AVFは高性能なんですが、過度な力を移民船団に与えるのを本星の保守派が嫌っていて、輸出を渋ったんです。そこでデータを元に作ったのがカリバーン。名前は同じくエクスカリバーの別名。性能もいいですよ。A型とかほどじゃないですけど」

「へえ。どこも同じようなものか」

彼女の世界でも同じような例がある。旧・スオムスいらん子中隊、現507に当初与えられた機材は正式採用に漏れた機体だったり、一世代前の機体だった。最新兵器を与えたくない思惑はいつの時代のどこの軍も持ち合わせているらしい。

「オズマ少佐、ウチの小隊で余ったVF-19AとVF-22S、どうします？」

「おっ、そうか。わかった」

S・M・Sには花形の、スカル小隊、ピクシー小隊、以外にも小隊が複数存在する。その機種は全てAVF（次世代全領域可変戦闘機）以降の高性能機で固められている。現在は全部隊、VF-25、メサイア、への更新が進められているので、型落ち、となったエクスカリバーやシュトゥルムフォーゲル？は予備機に回されている。余ったのはそのうちの一機である。元は、バーミリオン小隊、所属だったらしく、そのマークが尾翼に描かれている。

「それ、もらっていいですか？」

「……へっ？」

それを横で聞いていたウルスラ・ハルトマンはそれらバルキリーを魔導ジェットエンジンの研究材料として欲しいらしく、ぶっきらぼ

うに言った。オズマはひとまず間を置いてから「ちょっと待ってくれ」といい、母艦、マクロス・クォーター、の艦長「ジェフリー・ワイルダー」に連絡をとり、相談を持ちかけた……。

「アイランド1内　ホテルの一室

「ついついここが宇宙船の中って事、忘れちゃうんだよね……」

綾香と一緒に部屋に泊まっていたフェイトは窓から映るアイランド1の風景を見ていた。一見すると見慣れた地球の風景そのもの。この中にはもはやこの時代の地球には現存しない街の風景も多いという。サンフランシスコなどはその最たる物だ。戦争で失われたモノの大きさを改めて噛み締める。

「今日はたしか、向こう、との定時連絡だっけ」

フェイトは今日はミッドチルダにいる義兄や同僚らとの連絡の日だ  
と思い出し、急いで準備を整える。

ややあって、向こうから通信が来たようで、回線を開く。この後、  
この日の通信には向こう側にいる同僚ら全員が立ち会っていたので、  
フェイトは答えに苦勞したとか。その一分は以下の通り。

『テストロッサ』

『なんですか、シグナム』

『お前が師事しているという、クロエ、という人物……いっぺん手  
合わせしてみたいものだ』

『……そう言うと思いましたよ』

ヴィータと同じ、ヴォルケンリッター、で、その事実上のリーダー  
格「シグナム」との通信である。彼女はフェイトの面倒を見ている  
、軍人、の黒江綾香、に興味を持っているようだ。フェイトをして  
、手練、の剣術の使い手と言わしめたというのが彼女の心を擽った  
らしい。シグナムと黒江綾香。戦ったらどっちが勝つのだろう。  
もちろんフェイトは興味ある。

「空を自由に飛び、そこを舞台に戦う。それは有史以来、人類が常  
に持っている夢だ。ミッドチルダの人々は最終的に、魔法、を選び、  
、1944年、は魔法と機械で動く、ストライカーユニット、を選  
び、この世界は飛行機に加え、それにロボットを融合させた、バル  
キリー、を選んだ。方向は違えど、方法は同じだ。時空管理局には  
「飛行機」を嘲笑する声もあるが、フェイトは、飛行機乗り、、  
空母乗り、をしていてわかったが、あるのは空を飛ぶのに道具を用  
いるのか、魔力を使うのかの違いだけだ。空への憧れはこの世界  
も同じだとフェイトは思った。

第71話「もしも心が2つに割れて、一つを誰かに預けられたら……?」

(妻)

ミスが多かったので書きなおしたものを投稿させてもらいます。

第71話「もしも心が2つに割れて、一つを誰かに預けられたら……?」

一ハワイでの戦いで意外な活躍を見せる装甲車両群。そしてモビルスーツ群。ザンタクロスタイプはもっぱらスーパーロボットが血祭りに上げていくので、対等な相手がいないことをモビルスーツパイロット達は嘆いていた。バルキリーは近接航空支援でこの戦いの活路を見いだしているが、モビルスーツは防空が主だったために不満が続出していた。

「クソツタレ、俺達はいつまで防空をやらなけりゃならんのだ」

「フルアーマーガンダムやヘビーガンダム、砲撃支援機は火力での掃討に回ってるが、俺たち汎用タイプは防空だよ」

「スタークジェガンはどうなんだ?」

「近いうちにフルアーマーガンダムの護衛代わりに駆り出されるらしいが……」

パイロットたちは口々にこう言った愚痴を言い合う。モビルスーツの白兵戦能力を生かせる相手がいないことが残念なのだろう。その対等な相手らは未だに沈黙している。ジオン残党は未だ動きは読めず、その他の残党は組織だった行動はジオンほどできないのか、散発的にテロを起こすだけだ。それに水爆でラーテなどの砲撃を封じられた以上はモビルスーツの出番だと思ふのだが……。彼らは出番を待っていた。その出番はいつ来るかはわからないが……。確保したビーチの海岸ではスタークジェガンが煌く巨体を見せていた……。

一なのはとルーデルはVF-25で市街地を飛んでいた。近接航空支援を行い、一仕事終えた後はなのはの頼みで智子の援護に向かっていた。ルーデルはなのはが、扶桑海の巴御前、の教え子である事に意外な風な態度を見せ、なのはに自分が大尉時代に智子と出会っていた事を教えた。

「大佐は中尉とあった事があるんですか？」

「もう随分と昔の事だ。私がまだ大尉だった頃に任務で中尉の所属先だったスオムスに派遣された。その時に中尉と会ったんだが、まさか貴官のようなちびっ子を弟子にとるとは……ちょっと驚きだ」

ルーデルは今の自分を不動のエース足らした戦術を編み出したスオムスでの戦いの事を話す。その時の智子はまだ中隊長になりたての新米指揮官で、その能力を推し量るためにちよっと『からかった』こと、その時の任務であり出した戦術が自分を今の地位に押し上げた事を。

その時の話に華が咲き、合間の雑談を楽しむが、そのうちになのはは、撃墜された、事を夢に見て時々うなされていると告白する。落ち込んだ声で告白するなのはからは、どんな敵とぶつかっても撃墜されてこなかった人間にとって、初被撃墜は計り知れないショックだった事が伺える。

「……私は今までに20回近く落とされている」

「えっ……？」

「そっちにも、私、に当たる存在はいるのだろうか？その戦記や資料を見たことは？」

「前にお兄ちゃんの部屋にあった本を一回だけ……」

「そっちの私も実際問題、爆撃機乗りだったので30回は撃墜され

ている。日本（ルーデルにとっては扶桑だが、なのはに合わせた）のエース達も傷だらけになって帰還した事は珍しくない。それにそっちじゃ、私、は片足を失ったらしいが、それでも飛んで戦い続けた。

……たかが一、二回程度の撃墜でクヨクヨするな」

それはルーデルなりの激励だった。何回も落とされている彼女だからこそ言える言葉。この時の言葉がなのはの人生観に大きな影響を与えていく事になる。―「スーツカの悪魔」、「白色電光戦闘穴吹」。撃墜王達の薫陶は大きいのだ。

「さて、この当たりには仮面ライダー達がいると聞くが……」

ルーデルはVF-25をガウオーク形態で着陸させると、この地域に上陸した仮面ライダー達の姿を探す。案の定、仮面ライダー達のバイクの爆音が響き、颯爽とバイクを操って現れる。

「ん、君は……」

先頭を走っているハリケーン号の仮面ライダーV3が愛車を止めてルーデルの元に歩み寄る。

「自分はハンナ・U・ルーデル大佐であります。あなたが仮面ライダーですね？」

「正確に言えば、俺は3号、V3だ。よろしく」

とりあえず握手をすると、次いでX、RXも挨拶を済ませる。そして彼らと行動を共にしていたスバルと美琴もそれに続く。

「……まさか、魔法少女、の類が本当にいるなんて。言葉もないわ」



「にやはは……高町なのはって言います」

「御坂美琴よ。よろしくね」

挨拶を済ませると、各人は情報を交換し合い、結果、共に行動することに合意した。

「……水爆の搜索は俺達や美琴ちゃんが引き受ける。、改造人間の俺達や電撃使いの美琴ちゃんならコンピューターのハッキングはお手のものだ。……いいね？」

「OKよ」

「あたしは後方の援護にまわります」

これはRXとV3、美琴が引き受けた。V3とスバルは2人の護衛役だろう。

「お任せする。雑魚の掃除はどうします」

「俺がやろう」

「私もお手伝いします」

「私とガーデルマンは引き続き、航空支援を行います」

「これで決まりだな」

雑魚の掃除にはXとなのはが名乗り出、ルーデル達は引き続き、バ  
ルキリーでの支援を行う事になり、面々は水爆の搜索とついでの智  
子の援護に乗り出し、マシンに乘るものはそれぞれのエンジンを  
唸らせ、突撃を敢行した。

—この時の事はよく覚えてる。、仮面ライダー。私にとってはT

Vの中のヒーローに過ぎなかった存在が本当にいた事への驚き。そして人間ならざるものになっても、人間、で在り続ける生き方を選んだ理由。後で知ったけど、あの人がどんな思いで生きてきたのか。それを理解した時は悲しかったの。だけど、大きくなった今なら分る。彼らの信じたもの……。正義の意味。その言葉の大きさ。私たちとは桁が違う重さの十字架を背よって、あえてそれに殉じる事。私にはとても真似できないと思った……。

この一文は彼女が17歳になった頃にこの時の回想を書き残した手記の一部である。この年に彼らに似た姿と宿命を持つ、別の存在、が明らかになった事を聞き、『ちょうどいい機会』として回想を手記に残していったのである。その手記は後に戦いの中で保護した女の子で、義理の、娘、となる「ヴィヴィオ」が10歳を迎えた時に『なのはの過去はどんなものだったのか、母をエースオブエースに育て上げた、師、は誰なのか』を知る手がかりとして活用される事になる……。

この年にフェイトが次元世界における仮面ライダーとその類の調査の課程で接触したある一人の、仮面ライダー、に似た姿を持つ男は自らをこう称し、天（空）を指し示すポーズをとりながら高いところに立っていた

『天の道を往き、総てを司る男』と。その男は仮面ライダーストロングラーと同じモチーフの姿をしていた……。

「あなたはいったい……？」

「お前の言葉を借りるなら、仮面ライダー、（現地ではマスクドライダーという単語が存在していたとか）の一人かもしれん。俺の

名は……」

「フエイトがこの調査で光速のビジョンを垣間見たのは言うまでもない……。」

第71話「もしも心が2つに割れて、一つを誰かに預けられたら……?」

(妻

修正バージョンです。平成ライダーファンへのファンサービスを兼ねて加筆しました。

行間その8 「放課後オーバーフロウ 1」 (前書き)

骨休みです。

## 行間その8「放課後オーバーフロウ 1」

一新暦72～3年頃

私物としてミッドチルダに、バルキリー、を持ち込んだのは達。無論、管理局の規則に触れるので、自宅の地下に徹底的な管理で隠匿していた。彼女のそれは、聖剣、の名を持つ機体であり、かつての戦いの末期において愛機とした代物。

「指紋認証に暗証番号を入力っと」

彼女はミッドチルダに買った自宅の地下に設けた秘密格納庫に定期的に入入りし、バルキリーの手入れを行っていた。地球での高校生活との兼ね合いもあるので、数ヶ月にいったん程度しか整備は行えないが、向こう、から精度の高いパーツを回してもらって最高のコンディションを維持している。前進翼が特徴的な、VF-19S、。11歳の頃の自分の腕ではA型やP型は乗りこなせなかったのだ、普及型としては最高性能のS型となった経緯がある、向こう、ではメサイアをも凌ぐ機体-VF-19の血統を継ぐ前進翼機だと言う一が試作段階に入ったと聞く。今度はそれをちよろまかしたい。

一戦闘機乗りになって正解だった。これで鳴らした空戦機動で中一の頃は助かったからね。

それは彼女が中学一年の頃、帰還してから間もない時期の事。教導

隊に引きぬかれて、訓練で、先輩、達による教導隊の洗礼を受ける。通常の空戦魔導士と教導隊の者とは大きな壁があり、入隊したての隊員は少なからず挫折を味わうと有名で、はやてやシグナムなどがそれを心配した程だ。一だが、結果は彼女が空戦機動で教導隊の猛者を出し抜き、模擬空戦で勝利を飾った。この時の経緯は以下の通り。

一あの時は『あれ？バルキリー乗りしてたせいかな？誘導弾の動きが……見える！？』って驚いたなあ。まっ、実際問題、あのミサイルの雨に比べればどうってことなかったけどね。

教導隊の猛者が操る誘導弾は確かに一流のものだ。だが、この時のなのはにとつては決して見きれない程の動きというわけではなかった。サイコミュで有機的に動く、Vガンダムフィン・ファンネル、洗練された誘導機能で空や宇宙に華麗な軌道を描く、マイクロミサイル、の雨霰のような攻撃を体で感じ、見て、それらが飛び交う戦いの中を生き残った経験は伊達ではない。わざと引きつけ、当たる直前で意表をつく動きで回避したり、レイジングハートを使った射撃で撃ち落とす。それらはVF-11や19などのバルキリー乗り達が見ればすぐに、セオリー通り、の動きだと分るものだが、彼ら空戦魔道士の定石からは外れていた。動揺し、対処に一瞬遅れが出る。彼女は直ぐ様そこに潰れ込んだ。そしてまだこの時は未完成の域だが、師である穴吹智子の必殺空戦機動「ツバメ返し」を使った。

（すいません、智子中尉。技、借りますっ！）

「うおおおおああああっ！」

この時、なのはは自然と雄叫びを上げていた。師への思い、バルキリー乗りであった性質が彼女をそうさせたかも知れない。腕に握ら

れているレイジングハートが一瞬だけデータベースには載っていない刀剣形態へ変化し、それを智子から教わった、居合、の要領で横一文字に振るった。(レイジングハートが未来世界で修理された時に向こう側の科学者たちによって付与された機構などは管理局非公式の改造なので、あの時に立ち会った本人達しか知らない)

「……なにっ!？」

教導隊隊長と言えどもこれには虚を突かれた形となり、バリアジャケットの上着の一部が切り裂かれる。この時、彼は不思議に思った。砲撃用に特化しているはずのレイジングハートが一瞬だけフェイト・テストロッサ・ハラOWN執務官の「バルディッシュ・アサルト」の刀剣形態に似た姿を取ったのだろうか。

当のなのは本人はあの戦いで智子の動きの見よう見真似とはいえ、ツバメ返し、を使えた事に猛烈に感動していて、彼のことを気にかけていなかったが。

—この時なのはが使った、刀剣形態、の噂は数年後には都市伝説の一つに数えられるようになり、訓練生の間で上がるうわさ話の定番になってしまったとか。

「そんな事もあったなあ……。ええと、このプラグはここで……」



少しだけ昔を思い出し出しながら、VF-19を整備していく。つい2ヶ月前までは友人や知り合いに任せていたのだが、管理局には、戦闘機、の類は無く、輸送用の回転翼機があるだけだ。回転翼機しかいじったことのない人間に固定翼機、それも戦闘機を整備しろと言っても無理がある。やはり自分で覚えなないといけないので、向こうにいつて覚えた。

—その時、不意にインターホンが鳴り、ひとまず応対にでる。すると、訪ねてきたのは彼女が世話になった人物の一人だった。

「久しぶりだな。お前にとっては2年ぶりか？」

「く、黒江大尉！ どうしてミッドチルダに！？」

「いやあ、ジェットストライカーの技術援助への礼を言うためにフエイトのツテを頼ってきたんだが、アイツがいなくてさ。それでお前ん所に……バルキリーの整備してんだろ？ 手伝おうか」

「お願いします」

「それじゃお邪魔するぞ」

バルキリーの格納庫に入れるのはなのはやフエイトの他には、それぞれの師である智子、黒江などの限られた人間だけである。黒江もなのは同様の認証を済ませ、格納庫へ入ってきた。

「精が出るな〜VF-19Sか」

「はい。あの時の奴をそのまま持ってきたんですけど、コンディションは最高にしています」

この日の黒江は管理局への挨拶のためか、陸軍軍服姿である（昭和18年制式軍服。航空胸章、空中勤務者胸章付き。階級は大尉のものでなく、少佐、のそれであり、彼女がジェットストライカーユ

ニット制式化の功で昇進した事を示していた)

「……そうだ。お前あてに穴拭の奴やドラえもん達から手紙を預かってる。後で渡すぞ」

「ありがとうございます。そういえば……昇進されたんですか?」

「ああ。つい一週間ばかり前にな。とはいうもの、なんか落ち着かなくなつてさ。階級章はここに来るときに大尉から変えたばかりなんだよ」

「確かに昇進の時って落ち着かないですよね」

「だろ?」

黒江は軍服を脱いで、なのはは整備向きの服装で、それぞれバルキリーを整備しながら雑談を楽しむ。話題は自然と向こうの情勢の事になる。

「向こうはどうなんですか?」

「……実はな。また雲行きが怪しくなつてきてるんだ。、暗黒星団帝国、つてのが動き出した。、ヤマト、と、ガミラス、の生き残りがガミラスやイスカンドルに送り込んだ艦隊をやっつけたが、このまま黙って引き下がるとは思えないと連邦政府は睨んでる。軍も新星インダストリーとかの尻を打つ叩いて新型機の開発を進めてる。今日はそのテストも兼ねてその新型をストライカーユニットと一緒に持ってきてる」

「それって例の……?」

「ああ。、YF-29 デュランダル、。まだ試作機が数機完成したに過ぎないが、メサイアの、妹、だよ」

ーデュランダル。フランスに伝わる、聖剣、の名であり、VF-19の愛称のエクスカリバーが、ブリテン島の正当な統治者の象徴の

聖剣なのを考えると、対になっている。次はさしずめ、ジュワユーズかアロンドイト（いずれも歴史的な名剣の名前である）だろう。なのはが向こうを離れた時期にはまだ設計打ち合わせの段階でしか無かったのが試作機が完成した段階に進んだらしい。メサイア以上の高性能など想像もつかない。

「たしかもう一機はいるだろう。後で置かせてもらおうぞ」

黒江が持ち込んだYF-29 デュランダルとはどういうバルキリーなのだろうか……。

行間その9「放課後オーバーフロウ 2」(前書き)

黒江綾香 I N ミッドチルダ その2 です。

## 行間その9「放課後オーバーフロー 2」

—YF—29デュランダル。エクスカリバーに続く前進翼機として開発中の2201年（23世紀）時点での最高性能を達成した最新鋭機。黒江は、バジュラ戦役、及びメカトピア戦争にウィッチ及び、バルキリーのパイロットとして従軍。ジェットストライカー（1944年12月に各国で正式採用。扶桑では、火竜、及び、菊花、として量産された）の実用化に尽力し、穴拭智子と共に未来世界との架け橋となった功績で少佐へ昇進した。戦いの後は未来世界と故郷を行き交う日々を送り、2201年に入ってから試作された同機のデータ収集と実用最終テストに携わっている。（これは彼女がテストパイロットとして最良の素養を備えていたためである）

—そういえばアイツはアフリカ戦線で頑張っているな。曰く、この時点でもまだ会ってないらしいから……まだ言わないでおくか。

黒江は1945年を迎えた故郷の世界のアフリカにいる友人であり、隣にいるなのは部下—この時点からでも2年ほど後の事だが—のティアナ・ランスターの事はまだ胸に閉まっておくことにした。19歳になれば必然的に知る事だからである。知ったら知ったで後で詰め寄られそうだが、今は……。

ちなみにティアナ・ランスターは激戦地に身をおいたのが効いたのか、1945年1月現在ではネウロイなどを5機撃墜し、扶桑皇国陸軍エースの末席に名を連ねたと連合軍の公式記録に記されている。黒江は彼女から送られた写真入りの手紙を持っているのだが、その時の写真には同じ釜の飯を食った戦友の加東圭子（黒江が最初に所属した飛行第1戦隊で、穴拭智子などと共に新人当時にエースだった江藤敏子中佐の配下であった）が隊長を務める「STORM W

「ITCHES」の面々が写っていた。共に駐留している地球連邦軍の連中が撮ったらしく、1945年時点ではまだ珍しいであろうカラー写真である。同隊最強のエースのハンナ・ユスティーナ・マルセイユや、巫女装束に小具足を組み合わせた扶桑陸軍では当たり前戦闘服を着た加東圭子、稲垣真美の隣にそれらと同じ服装のティアナがいる。彼女が5機撃墜を達成した日に撮られたのだろうか、嬉しそうに微笑んでいる。

（これ、なのはが見たらどう思うかな？……それはそれで面白いが）  
「……どうかしましたか？」

「いや、何でもない。ところで、熱核バースタービンエンジンは元のままか？」

「ええ。でも、潤滑油とかは最高品質の奴を入れてますから一般的な奴よりパワー出ますよ。エネルギー転換装甲も新型に変えてありますし」

「かなりいいじくったなあ」

「元々そういう方面には興味あったんです。それで覚えたんですよ。向こうに整備研修にいったときに、ちょうどいい機会だったから軍令部の知り合いに頼んで、エンジンとかの部品とかは工面してもらいました」

「へえ……お前がねえ……」

VF-19はその性質上、VF-171よりも数段上の性能を持つ。バジュラ戦で使われたEX型にしても原型機（VF-171は元はと言えばVF-17の焼き直しに過ぎない。モビルスーツで言えばジェガンを焼き直しして、ヘビーガンにしたようなもの）の設計を無視してVF-19Fのエンジンを載っただけに過ぎず、エンジンに見合う強度を持っていたとは言いがたい。扱いやすさを優先した故に多くの犠牲を強いた事への反省からか、2201年では熟練搭乗員への育成が重視され、それに伴って、高性能を持つエクスカ

リバーが再度主力機種へ返り咲き、上位機種としてメサイアの配備が進められているのだが、その辺は黒江が詳しいだろう。

ここで誰もが疑問に思うだろう。なのはが何故バルキリーに独自の改造を施すことができ、潤滑油などの知識を持っていたのか？それはここにいる、なのは、はある並行世界の自分とは多少異なる性質を持っており、機械に関する知識に造詣があった。それがパイロットも整備を手伝うことがあるロンド・ベルで生活することで、より専門的な形で培われたのだろう。

「ここまでしてらって事は……、コイツをいざという時には使うつもりか？」

「……嫌な予感がするんです。今の時空管理局は一年戦争やティターンズの暴走を避けられなかった地球連邦政府と同じです。部隊にいと、一部の人間達が管理局の理念を履き違えて傲慢に振る舞っているのを時々耳にするんです。別の世界の国の国宝をかってに、ロストロギア、と認定して強奪に近い形に持ち帰って、国際問題になったケースもありますから余計に……」

「ティターンズのように反感を作り続けていけば、いずれグリプス戦役のような事が起こるのは確実なのも確かだな。それに魔法といえど、決して万能ではないのは私もよく知っている」

それは一度は、あがり、を迎え、未来世界への移動と若返りの際にはそれとは無縁な体質へ変わったが、戦士としての力を失っていくという怖さ（これは現在、坂本美緒が非常に恐れている事）をよく知っている黒江だから言える事だ。なのはも魔道師は決して無敵では無い事を熟知している。反管理局組織の一部は既に魔法（と言っても本物の魔術と比べれば科学に分類されるが）を阻害・無効化するECMを実用化しているし、大昔のミッドチルダとベルカの

戦乱の遺産との噂があるエクリプスウイルスとそれに伴って起こる「ゼロエフェクト」の存在も明らかになっている。それらを軍事利用されれば魔道師は戦わずして無力化されてしまう。確かに普通の機械は使い方を一歩間違えれば広島や長崎、ソロモン、オーストラリアのような多くの犠牲を伴う悲劇を産んでしまう。だが、正しい事に使えばドラえもんなどのロボットを産み出すことも、歴代仮面ライダーのような者を輩出することもできる。純粋科学の利点はそこなのだ。無論万能と言えるものは存在しない。ドラえもんのひみつ道具でもどこかに欠点は存在するし、御坂美琴が見せた超能力にしてもスタミナを無視して無限に使えるものではない。魔法だって決して万能でもないことはこの時点ではなのはの知り合いの「ヴァイス・グランセニック」が、事件の犯人でなく、人質であった自らの妹を誤射し、結果、片目を失明させてしまった事故が証明している。

「魔法を無効化した上で普通の兵器で攻めこまれたら間違はなく管理局は制圧されます。その時の対抗手段として、エクスカリバー、をとってあるんです」

「それが的中しなければいいが……」

「私もそう思ってます。聖剣は突き刺さったままにしておきたいですから」

それはあの世界で戦乱を経験し、生き残った軍人としての危惧だった。だが、彼女の願いも虚しく、この年より僅か2年で破綻が訪れてしまう。皮肉にも突き刺さった聖剣を引きぬく時こそ火急存亡の時だったのである。





## 行間その10「放課後オーバーフロー 3」(前書き)

今回は時空管理局や軍需産業の暗部に光を当てます。

### 行間その10「放課後オーバーフロー 3」

一訓練さえ受ければ誰でも使える兵器。それはミッドチルダに一度の破滅をもたらし、地球では多くの闘争が引き起こされた。それを忌み嫌うのはミッドチルダ住民ならば当然であった。しかしそれは魔法を無効化された場合に自らの無力を露呈する事の現れでもあった。そのため、実際には裏ルートで拳銃や小銃レベルの兵器は流通していた。アナハイム・エレクトロニクスなどの企業もその一翼を担う、死の商人、であった。

「今日はミッドチルダにネモを卸してきた。奴さんも実際は切羽詰まってるんだな」

「そうだ。魔法とて万能ではない事は熟知している。あの人は聡明さ」

アナハイム・エレクトロニクスは連邦とミッドチルダに国交が出来て以来、極秘に時空管理局の部隊にモビルスーツを納入してきた。だが、それらのラインナップは連邦にとっては、どれも中古のセコハン機ばかりだ。何故、ここで連邦軍の最新鋭機とは性能差がある旧世代機なのか。それは、軍事関連の最新技術の流出に連邦政府の国防族が難色を示したためであり、既に退役した機体でもモビルスーツを売りつきたい同社の政治的思惑が見え隠れしていた。機種は既に退役して久しいジム？やネモとそのサブフライトシステム一式。ジェガンやジャベリンに機種更新を終えた連邦軍から処理を押し付けられ、路頭に迷っていた同社はたまたま、魔法に頼らない戦力を模索していた時空管理局のレジアス・ゲイス中将と接触。彼の一派の黙認のもとに各次元世界に22世紀末の超兵器が流通する事となった。これにL・A・I、新星インダストリーやゼネラル・ギヤラクシーなどの他企業も追従。新歴70年代中盤には人的資源の問題

で、魔道師部隊が編成不能な世界で好んで用いられるようになっていた。ある世界ではその世界に進出した工場で再生産されたVF-5000、スターミラージュ、が現地の軍隊に、クファイル、という名で制式採用されたり、別の世界ではVF-9、カットラス、が採用されるなどの利益を上げていた。管理局は様々な兼ね合いから黙認する姿勢を続けていく。管理世界といえども所詮、全てをミッドチルダの思うがままに動かすのは不可能だ。そんな事をすれば現地政権が傀儡政権との批判を受けてしまい、下手すれば統治が危うくなる。そんな中、敢えて国防を管理局に委ねる所もあれば、独自戦略を展開し、兵器を地球の軍需産業からライセンス生産していく所もまた存在した。

「これは割り切って考えないとやってられないよ……」

フェイトは理想と現実の剥離に改めて直面し、頭を悩ませていたが、『理想はあくまで理想、現実が現実』と割り切ることにした。滞在中の日本にその実例があるからだ。日本は憲法で戦力の放棄を謳ってはいるが、戦後に軍がそれまでに培ってきたマンパワーの喪失を恐れたのと、現実的な防衛上の問題で自衛隊を発足させ、保有している。それを考えると魔道師の確保ができない、もしくは極めて困難な世界が質量兵器を使うのも致し方無い。管理局自身が表立って導入しないのは『大昔の事例の再来』を人々が恐れている為と、メソッド論な政治的理由に過ぎない。

「中将、何故次元世界への質量兵器の流通を中止させないのです」「そうです。これでは理念に反します。大昔のあのベルカ戦乱をお忘れか？」

「かっかっか……」

「何がおかしいのです!？」

「素直な夢のお喋りはそこまでにしたまえと言うことだよ」

会議の場においても理想主義的発言を行う若いエリート提督や将官らをレジアスは一笑に付した。世の中理想通りに事が上手くいくことは絶対にありえない。それを目の前の、若造、共はわかっていないのだ。大昔の戦乱とて当時の政権の思惑通りには運ぶ事は無かったというのに、だ。

一現実には理想通りではない事を目の前の温室育ちのエリート共に示さんと。あれでは反感を育てるだけだ。それではいずれ第120観測指定世界の、ティターンズ、の後を追うだけに終わってしまう。他の世界でもティターンズのような最期を遂げた政権はいくらでも存在するし、150年以上昔に確立されたカビが生えた理念を何時までも信望してはならないのだ。

それは設立から200年近くを数え、時代の変化に伴って様々な矛盾を抱えるに至った時空管理局の姿そのものだった。地球連邦政府などもそうだが、長期に渡って一つの政権が存続すると、どうしてもどこかで疲弊や腐敗が顕現してしまう。そしてなにかしらの外的要因で崩壊への序曲が始まることが多い。（江戸幕府がその最たる物）

「君たちは今の我らに全ての世界を守れるほどの量の人材や戦力があると思ってるのかね？君たちもあの、超兵器の威力は見ただろう」

「はい。ですがあんなモノが空戦魔道師に勝るなど信じられませんな」

「私も同感ですな。あんな鉄の塊など……」

空戦魔道師出身の提督が次元世界に流通しつつあるバルキリーへの

疑念を口にする。鉄の塊を化学反応で無理やりかつ飛ばすなど正気の沙汰とは思えないからだ。

そこでレジアスは地球連邦の軍需産業などから入手していた「愛・おぼえていますか」というあの世界の歴史映画の一幕を映像機器に映しだした。その凄まじい映像はその場にいた右派の若手提督は黙りこみ、既に地球連邦と付き合いのあるリンディ・ハラウンやクロノ・ハラウンなどは以前の接触の際に見て知ってはいたが、それでもあまりの凄まじさに「ヤック・デカルチャー」と心のなかで呟いたという。

行間その11「放課後オーバーフロー 4」(前書き)

120話到達です。

## 行間その11「放課後オーバーフロー 4」

なのはと黒江はバルキリーの整備をしながら雑談をしていた。穴吹智子はあの後、どのような道を歩んだのか。ロンド・ベルの戦友達の事など……色々と話したが、そのうちになのはは仮面ライダー達を形作った技術が何故生まれたのかを黒江に疑問をぶつけた。

「……なんの為にサイボークは作られたんでしょうか」

「あの世界ではインプラントやらが発達してるし、あの人達のように超技術で戦闘用に改造されたのもいる。だがサイボークとて、そもそもは平和目的で研究されていたと聞いている。ダイナマイトもそうだが、元は平和目的で研究されていて、その応用の課程で兵器に変わったモノは歴史上いくらでもある。サイボーク技術もそれから逃れることはできなかったんだろう」

「新しい技術はすぐに戦いに使われるってわけですか……」

「そうだ。残酷だが、これが現実だ」

「それじゃあの人達に使われた技術はどうやって……？」

「仮面ライダー一号……本郷さんを改造した技術は、ショッカー、などが残した書類によれば『ナチス・ドイツが戦中から研究していた技術と1970年代初頭の時点で生化学分野の権威だった緑川弘博士が研究していた技術を組み合わせたものだった』とされている。一文字さん、つまり仮面ライダー二号以降はそこで得られた技術ノウハウを応用して発展させたものと言う事だ」

そう。仮面ライダー一号はそもそも、脳改造の暁には、飛蝗男、とも名付けられるはずであった個体で、元から、仮面ライダー型として改造されたのは彼と同じ姿を持つ改造人間を、仮面ライダー、と呼称する事が当たり前になった二号以降の事である。それに当初



から有名な、体に二本の銀色のラインが走り、鮮やかな緑の仮面、の姿を持っていた訳ではなく、当初は緑の手袋とブーツ、青に近い緑の仮面という姿であった。一説によれば当初の姿でもあれほど孤軍奮闘出来たのは、本郷自身の類まれな能力に加え、元々は次期幹部候補の怪人として改造されたため、それまでの怪人よりハードが格段に優れていたから、とされている。送り込んだ13人の改造人間を屠られたショッカーが考えついた方法が、アイツと同型の改造人間を作って倒せばいいんじゃないか？、というもので、本郷に匹敵する素養を持っていた一文字隼人がそのターゲットとなり、仮面ライダー、の強化型改造人間の素体にされた。無論、それは一号によって阻止されてしまい、仮面ライダー二号が誕生した訳である、二人は戦闘経験を積むことで精強さを増していったが、仮面ライダー一号にはやがて問題が浮上した。身体スペックでショッカーの新人怪人には対抗し難くなり、ライダーキックにも耐え、跳ね返す装甲を持つ怪人が出現するようになったのだ。二号と共同でやっと倒せる怪人の存在、その怪人の一人、スノーマン、に敗北し、捕虜となつて洗脳され、あまつさえ二号と同士討ちを演じてしまう失態を演じてしまった事が彼に限界を悟らせ、苦悩した。そしてたどり着いた答えが、わざと捕まって体を再改造させて最新のショッカー怪人とも一対一で対等に渡り合える力を手に入れる、事だった。二号が南米へ渡つた翌日にそれを実行した。当時のショッカー大幹部「死神博士」は本郷の目的を悟っていたが、敢えて手術を行った。（理由は不明。当時の関係者の証言によれば、後にZXとなる体を作るために技術の蓄積が必要であり、危険を承知で本郷を仮面ライダー型の第三期強化体へパワーアップさせた、とある。ショッカーの残した記録を紐解くと、仮面ライダータイプの改造人間はショッカーの時点でも、本郷たち以外にもそれなりの数が作られていた事が明らかにになった。その科学者の証言によれば、本郷以前にも形式の能力の検証として試作改造されたプロトタイプがいて、試験中に能力に耐え切れずに死んだが、もしかしたらそいつが、仮面ライダー一

号、になった可能性も僅かにあったとの事なので、そのプロトタイプは本郷たちからは、零号、（本郷以前に仮面ライダーと成り得た可能性があった唯一の男という意味合いでそう呼んだ）と呼ばれていた。ショッカーアジトの跡地からはその男のものと思われる仮面の残骸が発見されており、連邦政府がその残骸を一部復元した所、旧一号とほぼ同型のものだったという話も伝わっている。

「そんな……?! 1号と2号を量産……!?!」

「有名な漫画の、サイボーグ009、だって、敵の組織が改造したとなってるだろう? 技術ノウハウがあった以上、別の素体を利用して仮面ライダーと同じタイプの改造人間を量産していても不思議じゃない。現にその一部はゲルショッカーの手に渡って一号達と戦っていたからな」

黒江は未来世界での軍務の折に仮面ライダー一号くストロンガーまでの7人を育てた、立花藤兵衛、が晩年に書き残した回想録を読む機会に恵まれた。そこに記されていたショッカーライダーは、仮面ライダータイプは複数制作されている、事に説得力を与えている。新一号タイプが六人いたとなれば、二号タイプもまた存在するはずだからだ。

「V3やX、ストロンガーとかは技術的にはその延長線上の産物だと考えれば自然だ。V3にしたって、アジトに都合よく風見志郎を、仮面ライダータイプに出来る、資材と素材が置いてあったなんておかしいと思わないか」

「昔、家で再放送見た時はそんなに気にならなかったけど、言われてみれば……」

「村雨の奴……ZXは、もしかしたら自分以前の9人ライダーは自分の体を作る過程でその時々組織が試作していったボディなのかも知れない、と言っていた。ショッカーからドグマまでの組織が何

で仮面ライダーをつくり続けたのかの疑問はこれで大方説明できる。それにこの、戦いに利用される、ジレンマは彼らだけじゃない。スバルのような戦闘機人だって、もしかしたら何処かの世界で平和目的で研究されていた技術の成果かも知れないだろう？……結局戦闘に使われたのは皮肉としか言いようがないな」

「……ですね」

彼女達は歴史上何度も繰り返されたこの事実には皮肉を感じずにはいられなかった。

**第71・5話「滅び行く者のために」(前書き)**

敵側がどうなっているか?の第二弾です。

## 第71・5話「滅び行く者のために」

—ハワイの戦いは次第に連邦優位に傾きつつあった。水爆の存在が明らかになった事で積極攻勢こそ出来なくなったが、鬼気迫る連邦・連合軍将兵の士気の高さ（この時に前線を支えていた熟練連邦軍将兵の殆どは絶望的な戦いをくぐり抜けた者ばかりであり、物量程度では動じない）と兵団前線の指揮官の指揮が稚拙であった事によって、9月25日を境に兵団の前線は一気に縮小し始めた。

### 一兵団 基地司令部

「閣下、残念ながら各地の部隊は敵の機甲師団と航空支援によって撃破されつつ……」

「……分かっている。水爆は奴の手にある。奴が自爆スイッチを押さないことを祈るばかりだよ」

、奴とは兵団内部で彼一地球名「ミシチェンコ」一とは対立する派閥の長の男。本国から派遣されて間もないために正式な地球名はまだ持っていない。兵団と言っても一枚岩でなく、対外進出強硬派・その腰巾着の保守派・穏健・融和派など様々な様相を呈している。現在の本国で実権を握る政権は穏健派の対外融和政策に業を煮やし、クーデターで実権を握った強硬派。深刻な問題となっていた、労働力不足、を他の星の生物を強制連行・奴隷として扱うことで解決しようとする軍事政権であった。水爆のスイッチを握っているのはその強硬派の急先鋒と言われ、穏健派に属するミシチェンコとは対立している男だ。今回の作戦で彼がハワイ基地の基地司令になった時に強硬派が監視として寄越したと、兵たちの間ではもっぱらの噂だ。

（奴なら躊躇なく水爆のスイッチを押しかねん。何とかスイッチを押しても30秒のインターバルが生じるように改造しておいた……解体、もしくは無力化のチャンスを与えただけマシと考えてくれよ）

彼は強硬派の言う、奴隷として他の星の生物を連れてくる、事などこれっぽちも賛同していない。軍人であるので軍務の遂行は行いが、この戦いには国家の言う戦争遂行の大義は無い事は重々承知している。だが、あくまで軍務は果たす。それが彼の軍人としての戦いなのだ。幸い、以前の戦功で家族の身の安全は確保されている。たとえ本国で政変が起こったとしても責任は負えない。

「滅び行く者の為に……」

こう呟いた時、彼は死を覚悟していたかも知れない。兵団は最初こそ優位に戦いを進めたもの、前線指揮官の戦術の稚拙さや補給の軽視が原因で次第に敗北している。小さい地区での初めての敗北が段々と傷口を広げていき、ついには大出血を強いられた。さらにかの、宇宙戦艦ヤマト、所属の航空隊が接近してきているとの情報もある。今の平均練度の低下した兵士たちにはあの2大星間帝国の誇る航空隊を打ち負かした彼らに対抗する術は無い。さらにあの、真ゲッターロボ、……あの赤い戦神は地球の最後の希望というが……こっちのほうが神にすぎりたい程だ。本国に伝わる神話、メカトピアは天国のようになってほしい、と願った神……そしてそれを信じて行動する本国のレジスタンス運動。

「中佐、本当の天国とは何だろうな」

「分かりません。ただ政府の言うようなものでは無いのは確かでしょうな……」

「この星には滅びから救った歌があると聞く。その歌……一度全フリーズを聞いてみたかったよ」

それは彼の本心だったかもしれない。大昔の、プロトカルチャー、  
が創りだした戦闘種族とすら共存に成功した地球人類。そしてその  
原動力となった文化。今の政府は文化的行動を、退廃的、と称して  
いるが、それは間違いである。リン・ミンメイという歌姫の歌はそ  
う感じさせてくれる。彼は生涯最後の戦いへ赴く決心を固め、自ら  
前線で指揮をとると全軍に布告した。

## 間章その18「ブリタリアに降り立つ軍神」(前書き)

ストライクウィッチーズ零の要素入ります。



## 間章その18「ブリタリアに降り立つ軍神」

―航空機はバルキリーなどが配備されている連邦だが、人型兵器の花形であるモビルスーツの高性能化も目覚ましい。そんな世界の援助のもと、ストライカーユニットの近代化も進んでいた。

「本当スタイリッシュだよねえ、このジェガン」

エーリカ・ハルトマンである。彼女はこここの所はのんびんだらりな生活を送っていたが、実はシャーリーに並んで、いち早く未来世界の文化に馴染んだ人間である。そして、名に恥じず、史実でのエーリッヒ・ハルトマン同様の戦果を挙げているエースである。格納庫に鎮座しているジェガンR型（ジェガンは未だ現役であった。繋ぎのヘビーガンを経て、後継となるはずだったジェムズガンが宇宙空間での評判が思わしくなかったために退役したため、宇宙用であったジャベリンが正式に後継機の座を掴んだ。しかしジェガンの配備数は連邦軍歴代の汎用量産機では一位を記録しており、ジャベリンの配備で全てを代換するのは到底不可能な事だった。延命策が施され、ヘビーガンとジェムズガンが消えていく中でも生き残った）を仰ぎ見る。薄い緑色の機体はスタイリッシュさに溢れている。

造形美とはこの事だ。単なる陸戦兵器でないのはこれまでの訓練で見えてきている。

航空兵器は純粋なジェット戦闘機の他に母国語で言うところの、<sup>ワ</sup> Valkyrie、の愛称で呼ばれる3段変形できる凄い戦闘機が配備されているから、制空権の確保はこれらに任せているのだろう。これはかつての同僚のハンナ・ユステイナー・マルセイユがいるアフリカ戦線に行った部隊が用いて戦果を挙げているとか、扶桑や母国のエース達の一部はこの兵器の操縦訓練を志願しているとの噂も

耳にしている。

「バルキリー、か……戦乙女って愛称って誰が考えたのかなあ」

赤城などに配備されているのは任務の必要性からA VF及びVF-17が殆どを占め、普及量産機であるVF-11はむしろ少数である。当初はVF-171が多数の予定であったが、フロンティア船団での散々たる結果を鑑みて、この艦隊には偵察機仕様が配備されるにとどまっている。たまたまこの日は非番であったため、自由行動をしているが、これらを見てると機械の翼も進歩し続けると凄い事になるということを教えられる。今日は扶桑から補給物資が送られてくると聞いているが……。

轟音が響いてくる。物資輸送のための輸送機が着陸するのだろうか。この時代のどの空母より大きいとはいえ、輸送機が着陸出来るのだろうか。それとも瓦礫が撤去された基地の滑走路を使うのだろうか。

轟音が響き、ミデア輸送機が垂直着陸を行う。着陸と同時に基地に各種物資が下ろされる。空母へ運ばれていく物資の中には新型のストライカーユニットがある。扶桑とリベリオンの物だ。そしてそれを届けた人員の中には驚くべき人物がいた。

「久しぶりだな、坂本」

「先生、……、その姿は……？それに……」

「若返った、のさ。軍のウィッチ不足は私のような、老兵、も復帰させないといけなくなったらしくてな……」

彼女の名は北郷章香。坂本美緒や竹井醇子の世代の師であり、黎明

期に於けるエースとして名を馳せた人物である。扶桑海事変へ参戦した世代では最も高齢であった世代なのでブランクも長く、扶桑では最も再訓練を受けた期間が長い。（これは現役時代の機体と最新鋭機とでは性能差が大きい）因みに容貌は坂本美緒とほぼ同じだが、常に海軍士官服の前を開いたままであるのが最大の特徴だ。

「でも先生、どうしてここに？」

坂本美緒は北郷章香を先生と呼ぶが、これは師範代として候補生時代の美緒達を導いてくれたためであり、その点で彼女は坂本美緒の人生を決定づけた人物と言える。

「ああ、山本閣下の計らいで新型を501に回すように言われてな。菅野の奴も使ってる

、N1K1-Jb、「紫電」と、J8M、「秋水」、（史実のそれとは違って航続距離は長い）、菊花だ」

「先生は菅野と面識が？」

「前に松山に行った時にあってな」

一松山には精鋭の評がある第343海軍航空隊の基地がある。菅野は史実では書類上でしか所属していないが、この時空では正式に所属し、欧州からの送還後の一時期に、新撰組、隊長及び、維新組、隊長を歴任している。その時に北郷は菅野と会っていたのだ。

「お久しぶりです、北郷さん」

「ああ。何ヶ月かぶりだな、菅野」

菅野がやってきて、北郷に敬礼をする。菅野は此頃には501にも馴染んでいて、宮藤を半分、舎弟、扱いにしていると。か。（無論、同時にリーネとも仲良くなっている）

「紫電か……私は嫌いです」

「どうしてだ？」

「あんな二流メーカーのでっち上げは……零式の改良型が欲しかったです」

「零式に拘るのは分かるが……受け入れるんだ。この先、零式じゃ立ちゆかん。」

「しかし!!」

駄々をこねるように零式艦上戦闘脚に拘る美緒。それをなだめる北郷。これは史実でも紫電改を嫌い、零式にこだわった彼女の並行時空での存在、坂井三郎、とかぶっていた。しかし時代の流れに零式は置いてけぼりにされつつある。これを受け入れなければならぬ。烈風が遅れている以上は紫電を使うしか無いのだ。

## 間章その19「扶桑型戦艦の悲劇」

一そもそも連合軍は呉越同舟的な側面が強い軍隊であり、内戦経験が豊富な地球連邦軍からはその危うい面が危惧されていた。シナプスの悩みは連合軍内の縄張り争いであり、如何にして、史実の名将の足を引っ張る愚将の手綱を握るかに苦心していた。

そんな彼の苦勞を象徴するかのように、愚将の割合が高いことで有名な扶桑（日本陸軍）陸軍および海軍などとの共同会議が正にそれであった。会議室では大艦巨砲主義者達と航空主兵主義者達が真っ向から対立し、紛糾した事も一度や二度では無かった。シナプスはルウム戦役にも参戦していたため、機動戦力の重要性はよく認識している。しかし戦艦にはそれなりの働き場はある。何度かその場を諫めることもあった。だが、あまりにも旧式化した戦艦は未来兵器やネウロイの前にはただのデカイのである。特にそれを証明していたのが扶桑で最旧式の扶桑型戦艦であった。アフリカ戦線に派遣された同型は航行中にティターンズ所属の近代化された戦艦「ジャンパール」および、これまたクルーゴと試験航海中に拿捕され、「イージスシステムなどを積んだアイオワ級戦艦3番艦「ミズーリ」（地球連邦が記念艦として持っている同艦よりレベルが高い近代化が施された）に補足され、

21世紀以降のレーダー技術を用いたレーダー射撃の洗礼を浴びた。「扶桑」は不運にも初弾が艦橋に命中。その巨大な艦橋は一瞬で崩れ落ちた。次いで、ミズーリの第二弾の40cm砲が弾薬庫付近の装甲を貫徹、誘爆を起こして大炎上の後に艦体は2つに分断され、轟沈。同型2番艦「山城」は熟練将兵の操艦によってアウトレンジを持ちこたえ、撃ちあったものの、撃ち負けて史実同様の最期を遂げてしまったのだ。その後にネウロイの襲撃も重なり、艦隊は駆逐艦「時雨」を残して壊滅した。この結果は折しもレイテ沖海戦での西村艦隊の最期と同様であった。アフリカ戦線を援護するどころか壊

滅させられては本末転倒としか言いようがなく、連邦軍は時雨をモビルスーツ母艦「アーガマ」（かつてブライト・ノアが指揮を取った艦。現在は連邦軍の派遣機動部隊の分遣隊旗艦として運用）の護衛の元、祖国へ返した。

「皆さん方はもうとっくにご存知かと思うが、戦艦扶桑率いる艦隊が壊滅させられた。生存艦は時雨のみで、任を果たせないと判断し、帰路に着いた」

シナプスの開口一番の一言に扶桑海軍将校達はどよめきを隠せない。艦齢30年の老朽艦とはいえ戦艦を含む艦隊がほぼ一方的に屠られたというのだから当然であるが、なにより扶桑は国号を頂いた（扶桑は日本の別名であり、その役割は現在は大和型が継いでいる）艦で、長門などの次世代艦の登場まで象徴として君臨した。それをあっさり失ったのだから。

「やはり扶桑は戦没したか。だからあれほど海軍大臣は大和型を派遣するようにと仰っていたというのに……」

一扶桑型戦艦は弱点が多い艦であった。弾薬庫を含むヴァイタルポイントに被弾すれば沈没する危険性が大いにあった。それが史実の魚雷に次いで、格上の戦艦との打ち合いという形で露呈した。戦艦らしい最期を遂げられたのはある意味幸運かもしれない。提督たちの間では何故最新鋭の大和型や有力艦の長門型戦艦を派遣せずに最旧式の扶桑型戦艦で済ませたのかという軍令部総長への批判が多く上がった。因みに先ほど発言したのは角田覚治中将。空母「雲龍」を旗艦とする第2機動艦隊を率いている猛将である。

「敵はこの2艦を水上打撃戦の中核に据えている。こちらでの、フ

ランス、戦艦で、史上最後の戦艦「ジャンボール」、リベリオンの最新鋭戦艦で、1990年代まで気まぐれのように運用がされたアイオワ級戦艦の「ミズーリ」。両方共21世紀以降の技術で改造されていて、素で立ち向かえば大和型とて危ない」

「強敵ですな」

そうだ。現時点での水上打撃戦での総合戦闘力は大和型を除けば、21世紀以降の水上打撃戦に必要な要素を持ったこの2艦の右に出るものはない。如何に大和型といえども素の状態で立ち向かえばミサイルと21世紀以降の高性能爆薬の弾丸で大破させられるのがオチだ。幸い武蔵は連邦軍の手によってそれらと同等の能力を得たが、大和に関してはまだ工事中。そんな中でも武蔵の派遣が行われたのは米内光政や山本五十六の尽力によるものだ。

空母もそれ相応の強化も行われているが、今は語るべきではないだろう。

「さて、問題はアフリカ戦線をどうやって反攻作戦まで支えるか、だが……」

やがて議題はアフリカ戦線のことに移る。ネウロイやジェット戦闘機との激戦が日夜行われているかの地をどうやって支えていくのか。連合艦隊の首脳陣は雑巾を絞るように、アイデアを練っていく。やがて第一機動部隊司令長官「小沢治三郎」中将がとあるアイデアを提案する。それは彼一流のものであった。

—エイラ・イルマタル・ユーティライネンは援軍の持ち込んだモビルスーツの機動性を肌で感じていた。18 m級の巨体でありながらも軽快に攻撃を回避する様。そして重火器の数々……。正に超兵器だ。エースと散々言われた自分がアレほど苦戦を強いられるなど、今でも信じられない。

「……、ガンダム、か」

エイラは未来世界での戦場でエースパイロットのみが搭乗を許され、幾多の戦場を保有する軍の勝利に導いてきたガンダムと言う名の、最強のモビルスーツ、の伝説にやや信じられない思いだった。だが、ZZのあれほどの戦技無双ぶりを見せつけられては、開いた口がふさがらなかった。さらに格納されているガンダムF91の持つ武勇伝に驚きを隠せなかった。

—たった一機で艦隊を壊滅させた化物を打ち倒したって……？

クロスボーン・バンガードのラフレシアを、質量を持つ残像、で打ち倒したとシーブツクの談。そしてそれを裏付ける超絶的機動性と火力。モビルスーツの最高峰と位置づけられる伝説的存在の名を継ぐ（そもそもは開発スタッフが初代ガンダムに似せて作ったら後から連邦軍に、ガンダム、の名を継ぐに値する機体、と判断され、名を継いだに過ぎないが）機体の威力はこの間の戦闘で存分に見ている。自分はモビルスーツからサーニャを守れるのだろうか。エイラは底知れぬ不安に駆られていた。

格納庫のモビルスーツ群はどの程度のものか。エイラは頼み込んで



模擬戦闘を行うことにした。

## 第72話「兵団、D作戦を執行ス」(前書き)

鉄人兵団の奥の手、発動です。

## 第72話「兵団、D作戦を決行ス」

一時空管理局は質量兵器に寛容を示していた。この度のハワイ沖海戦にも魔道師（連邦軍はそれが誰であるかは明らかにしていない）が参戦していると聞かされていたし、フェイトが行動中であることは周知の事実だったからだ。何故管理局は管理外世界の質量兵器に寛容であったのか。それは後に判明するが、なのはやフェイトが19歳時以降に連邦軍の高官らに語った所によれば「はぐれゼントラーディや星間国家の襲撃を恐れ、管理外世界を防波堤替わりにして本国へのダメージを未然に防ぐ目的で黙認した」との事。彼らは恐れたのだ。あの地球連邦でさえも、一度は滅亡寸前に追いやるほどのゼントラーディの圧倒的物量やガミラス帝国や白色彗星帝国のような一大星間国家の軍事力を。その襲撃を防ぐために地球連邦を利用したのだ。無論、そのような策謀など日頃から行われている連邦が気付いていないはずは無く、お互いに利用しあう形での国交が続いていた。

そして9月末、連邦軍にとって顔面蒼白の事態が巻き起こる――

ーギアナ高地 執務室

「ウム。ハワイの状況は予断を許さないか……」

「目下、全力で捜索を行っておりますが……未だ発見出来ません」

「クライシスが動いているとの仮面ライダー1号からの情報もある。兵団を追い詰め始めたとは言え、奴らの存在は厄介だ。気をつけたまえ」

「承知しております」

レベル將軍は政府からの強引な指示で決行したハワイ攻略作戦が水爆という思わぬファクターで予断を許さない状況になったもの、戦況そのものは好転しつつある事に安堵していた。ただクライシス帝国の存在は厄介だ。彼ら次第では今後の行動に大いに影響が出かねないからである。兵団はハワイを失った場合は欧州方面に残存戦力を結集するであろうことは容易に想像が出来る。来年の欧州方面攻略作戦の為にこの作戦は成功させなくてはならない。

—この時の地球の勢力図は以下の通り。

アジア太平洋方面はほぼ連邦、アフリカ大陸はジオン残党とティターンズ残党の勢力下、北アメリカは再建途上地？で軍関連施設のみ。欧州方面は鉄人兵団の牙城となっていた。地球派遣軍団の本部は旧・ベルギー王国の首都であり、旧・欧州連合の主要都市でもあったブリュッセルに置かれており、開戦時に旧態依然とした防衛装備しか持たぬ地球連邦陸軍を駆逐して拠点とした。そこを奪還するのが今次大戦における連邦軍の最終目的であり、今次大戦での勝利を左右するのだ。

—欧州　ベルギー王国

「閣下、ハワイは後数週間持つかどうか……」  
「そうか……」

副官の報告に鉄人兵団地球遠征軍司令長官、グデリアン、は残念そうな声で答える。彼はハワイ基地司令のミシチェンコが属する派閥の長であり、兵団の緒戦での電撃戦による勝利の立役者でもある。

彼はメカトピアがまだ軍事体制でない、共和体制化時代に軍人であった父の嫡男として生まれ、軍事政権下では新戦術を提唱し、それを見事成功させた名指揮官である。彼はアジア太平洋方面で敗北を重ねる方面軍の指揮を配下のミシチェンコに任せて派遣したのだが、彼を以てしてもアジア太平洋方面の退潮を食い止める事は出来無かったのである。

「欧州はほぼ全てこちらの手にあるとはいえ……ハワイが落ちればあの方面は事実上放棄せざるを得ん。ニューギニアなどの方面軍で生き残っているものは全てハワイに回せ。連邦軍といえどもハワイを落とすと引換にその海軍力を減じれば行動は制限されるはずだ。それと、D作戦、部隊は？」

「只今発進しました。後10分もあれば敵の絶対防空圏内を突破し、敵都市に爆撃が行われます」

「本国の最新鋭アクティブステレス技術の賜物か……」

それはアジア太平洋方面の総力で連邦軍を瀕死に追い込み、例えハワイを制圧しても今後半年間、連邦軍の行動を制限できる事を意図する策だった。既にロシア駐留部隊には敵の重要都市・日本の工業地帯を空襲するように通達を出してある。連邦軍のリーダーを欺瞞できるステレス技術のおかげで完全な奇襲となりそうだ。彼は時計の針が動く音をきしりに気にする。そしてそれからしばらくして……奇襲成功の報が届いたのは云うまでもない。この日、ブリュッセルの本部に久しぶりの歓声が響き渡った。

—D作戦。アメリカ軍が日本に対して大胆な初空襲を行なった故事に因んで名付けられたこの作戦は、鉄人兵団の必勝の策であり、ハワイでの戦いでの敗勢に一矢報いる為の大胆な攻撃である。目標はその由来のとおり日本の4大工業地帯。そこを大部隊を持って空襲、生産力に痛撃を与える。本部直属の精鋭部隊主力を中心に、今

次大戦で名を上げた部隊を掻き集めて参加させたこの作戦に対する鉄人兵団の意気込みは凄まじいものだった。

一日本

「くそつたれ！！何故今まで探知できなかった！！」

「ウィッチからの報告によれば、アクティブステレス技術を応用した追加装甲をまとった部隊のようです！！レーダー反応が殆ど無いハズだ……！！」

「航空隊やモビルスーツ部隊へのスクランブルは出したのか！！」

「もう出しました！！航空隊は松山の343、345が間もなく接敵します！！」

この時期の連邦軍の重要都市である日本地区には最新鋭機が優先して配備されていた。航空機は配備開始間もない新コスモタイガー及び従来型、バルキリーはVF-19A、P型及びVF-22Sで固められている。さらに連合軍の協力で各基地には練度の高い扶桑のウィッチが派遣されているなど、強力な防空体制であった。だが、レーダーを封じられてしまい、敵発見が遅れ、迎撃が遅れてしまった。今は少しでも被害を食い止めなくては。

「ミスマル閣下は？」

「既に防空の指揮を取っておいでです。指揮権は先ほどを持って全面的に閣下に移行しました！」

遅れてきた通報に、慌ただしく迎撃態勢を整える連邦軍。そして迎撃戦に従事するウィッチの中には扶桑皇国のエースでは苦勞人であると言われ、北アフリカ方面の防衛で名を知られた、黒田那佳くろたにか、大尉の姿もあった……。

彼女は扶桑陸軍が誇るアフリカ防衛のエースと名高いウィッチで、穴拭智子よりも上手く、鍾馗を使いこなす事で知られる。その武器は、ホ301、40ミリ機関砲。本来は大型ネウロイ迎撃用に用いる目的で作られた（史実では爆撃機迎撃用）機関砲。彼女は連邦軍の防空網の一角を担う存在であった。

日本にはなのはと別れて別行動を取ったヴィータがいた。彼女はハワイ攻略でのなのはの面倒を穴吹智子に任せ、自身は日本に残った。八神はやてからの連絡があり、彼女がもうじきこの世界にやってくるのを迎えるためだったが、その前にとんでもない事になった。黒田那佳の指揮下に入り、迎撃戦に加わった。

「くそっ！！奴らとんでもないこと考えやがる！！」

赤毛のお下げ頭が特徴的な彼女は兵団の巧妙な作戦に毒づく。ハンマー型のデバイス「グラーフアイゼン」を片手に飛行し、北九州工業地帯の防衛に向かう。

「昔から奇襲は乾坤一擲の手だ。真珠湾奇襲、ドーリットル空襲、桶狭間……歴史上でも例がいくつもある。これほど大規模なのは数える程度だがな……奴さんはドーリットル空襲を再現しようっていうのか……？」

「大変じゃねえか。やられたら人がたくさん死んじゃうじゃねーか！どうするんだよ、くにかさん！！」

「ああ。このままだと不味い……急ぐぞ、ヴィータ！！」

「おうよ！！」

黒田那佳はこの世界の大東亜戦争で行われたドーリットル空襲の再現に悪寒を感じずにはいられない。民間人の大量殺戮を阻止すべく、黒田那佳は配下のウィッチ隊や連邦軍の航空隊などを率いて北九州工業地帯の防衛に向かった。



## 第72話「兵団、D作戦を執行ス」(後書き)

ミリタリー色をまたまた濃くしました。感想などお待ちしています

注 黒田那佳のモデルが確定したのでそれにそって記述を訂正しました。

### 第73話「未来は誰のためにある？」（前書き）

日本本土空襲その2です。ミリタリー路線を突っ走ります。

### 第73話 「未来は誰のためにある？」

一ハワイ攻略が峠を越えようとした矢先の本土空襲。虚を突かれた連邦軍は狼狽した。

「レーダーに反応しない部隊か……どのくらい被害を食い止められるか……」

連邦軍極東支部の厚木基地ではミスマル・コウイチロウがこう漏らす。完全な防空網はありえない事は分かっているが、向こうもアクティブステレスを持っていた事も驚きだが、いくらミノフスキー粒子があるからと言ってもレーダーに全く反応が無かったなどまったくもって信じ難い。既に各工業地？には被害が始めているが、日本の誇る強力なレーダー網を完璧に潜り抜けるほどの高い技術を持っていたなど……。ミスマル以下連邦軍将兵は一様に驚愕を隠せなかった。

さて、迎撃戦を行っているのは各地の航空隊及びモビルスーツ隊であるが、空中戦が主になるためモビルスーツは空戦が可能な可変モビルスーツがかき集められ、迎撃戦に参加していた。機種はMSZ-006A1（D型までのZプラス、NRX-044「アッシマー」、その後継のRAS-96「アंकシャ」などである。ファーストストライクはバルキリーに任せ、彼らはその後の連続攻撃の要だ。

「流石に練度がいいな。マイクロミサイルの雨霰を潜り抜けてくるとは」

迎撃戦に駆りだされたZプラスのパイロットはバルキリー隊の放ったミサイルを避けきった兵団の兵士たちが見慣れぬ追加装甲をパージし、一斉に散る動きが手馴れている事に気づく。あのような追加装甲をパージすれば一瞬の隙が生じるが、彼らはそのタイムラグを自らの技量で補い、隙を無くしている。敵ながら見事だ。おそらく今回の攻撃のために精鋭を選びすぐてきたのだろう。だが、侵略者には死あるのみ。計器やモニターにロックオンを告げるアラームがなった瞬間、コントロールスティックのトリガーを引き、ウェイブライダー形態のままでビームスマートガンを叩き込んだ。メガ粒子の高出力ビームは見事に装甲ごと敵を貫き、空に盛大な花火を上げる。

一彼らにとつては優秀な兵士が失われただろう。だが、こちらは多くの人命がかかっているんだ、悪く思うなよ。

、彼は心のなかで敵兵士に念仏を称えながら次の敵を落とす準備を整える。戦争とは虚しいものだ。だが、平和は戦って勝ち取らなければならない。それが今の地球人の共通認識であった。（これはなのはやフェイト達もそう認識している）

「おらあああつ!!」

一ヴィータは久しぶりに愛用のデバイスで暴れていた。グラーフアイゼンを振りまわして兵団の頭をかち割ったり、胴体をぶち抜いて破壊したりしている。ただし決して無傷ではなく、ビームなどのせいでバリアジャケットの裾などは焼け焦げている。この事はウィッチ達も同様に、乱戦で具足の手甲の片方が破壊され、手が無防備となった者もいる。

「各編隊長は残弾と損害を知らせろ!!」

ヴィータと共に戦っている黒田那佳は無線で同空域にいる航空隊及びモビルスーツ隊に状況確認を呼びかける。乱戦のさなかだからこそ状況確認は大事だ。那佳の呼びかけに各編隊長が応える。

『こちらはブラックナイト1。僚機を4機失った。こちらはそう長く支えられん!! 援護を求む!』

『こちらイーグル1、なんとか民間家屋への爆撃は阻止した。残弾はまだ残ってるから当面は踏ん張る』

『こちらインドラ1。敵は手練だ!! あらうる状況を利用して攻撃してくる!! 残弾僅か、援護を!!』

『コスモタイガー1番隊、これより敵左翼に突撃を敢行する!!』

『こちらデルタ1、敵部隊と交戦中! これより白兵戦闘に移行する、以上!』

『扶桑2番です! 3名負傷しました! ……くっ! 敵が多すぎる!! 弾が……』

松山から発進した部隊は練度が高い部隊である。数的劣勢を補って余るほどの奮戦を見せているが、敵も去る者、巧みな十字砲火でウィッチや戦闘機、可変モビルスーツなどの逃げ場を無くして撃墜に追い込んでいく。

「……状況は厳しいか……っ!!」

彼女はホ301航空機関砲を撃ちながら敵に突撃を敢行する。大威力の賜物か、一、二発で鉄人兵団の兵士を蜂の巣にし、撃墜する。だが、敢行弾数は多くない。カチツカチ、とトリガーを引いても弾が出なくなる。弾が切れたのだ。機関砲を投棄して格闘戦へ移行する。

「おおおおおっ!!」

お叫びを上げて敵に突撃をかける。兵団の兵士は格闘戦を行える武器を持ち合わせていない。それが数の劣る人類側が潰け込む隙なのだ。だが、それを裏切るように兵団側が腕の追加装甲から白兵戦用の剣やら斧、槍を取り出して逆に突撃をかけた。兵団はこう言うことも想定し、この部隊に優先して装備を配備していたのだ。

「格闘戦がお前らの独壇場だと思うなよ。さあ血祭りだぜ、人間、!!」

「ふざけんな! テメーら、どういふつもりなんだよ!!」

怒声を上げるヴィータに兵士の誰かが答える。

「お前らが地球のために戦うように、俺達はメカトピアの為に戦っている。どっちかが生き残り、どっちかが滅ぼされる。それが戦いってものだろうが!!」

「未来は誰のためにあるのだろうか。それは分からない。ただあるのは生き残りたいがために必死に戦うものだけだ。嵐は駆け抜けていく。絶望と共に。」

「この空は……地獄だ……」

兵士の誰かがこういった。鮮血やオイル、各種部品が飛び散る、正に地獄絵図のような戦い。混戦の様相を呈していた。刺し違えてその命の火を消し去るウィッチ。血路を切りひらくために特攻していくコスモタイガー、無言で翼をもがれ、コックピットを撃ちぬかれるバルキリー……空は地獄だった。

—そして九州に向かう一つのオートバイがあった。そのオートバイに乗る男の名は、筑波洋、。またの名を、スカイライダー、。

「……彼女達を守ろうとしてる空か。……いい風だ。これならどこまでも飛べそうだ」

彼は、クスッ、と笑った。人々が命を賭して守ろうとする空。歴代の仮面ライダーの中で、空を飛ぶ、事を能力として持つ、翼、を持つ唯一の男は自らの使命を全うするべく、戦いの空へ舞い上がる。

『スカアアアイツ……変ん……身ッ!!』

—今、戦いの陽は登る。

## 第74話「守りたいもの」(前書き)

高町なのはと御坂美琴の絡みがあります



## 第74話「守りたいもの」

—ハワイ攻略が峠を越えようとした矢先の、帝都、日本への空襲。レビル将軍はこの緊急報告に顔を曇らせた。まさか主力をハワイに向かわせた隙を突かれるなど思いも寄らなかったが、敵の総司令は名将の誉れ高き男であることは百も承知だった。

「奴め……考えおったな」

開口一番にレビルはこう唸った。この攻撃は連邦軍有数の名将と謳われる彼をしてそうさせるほどの、一手、であったからだ。チェスで言えばチェックメイト直前で状況を逆転するほどの一手をやられたような心境だ。

「首都直掩部隊はどうか」

「ハッ。現在、航空隊が交戦に入っていますが、状況は芳しくありません。ただ、スカイライダー、が現地向かっていると報告が入っています」

「、8番目の仮面ライダー、か……彼が来てくれるとしても状況は厳しいな」

この時期、既に地球連邦はかつて数多の暗黒組織を滅ぼした仮面ライダー達の勇名は知っていた。実際かつてのゴルゴムの総攻撃の際に彼らを目覚めさせたのは2代前の連邦政府の政権であり、各地に都市伝説として伝わっている、仮面を被り、マフラーをした男の話は、歴代仮面ライダーの存在を知る者たちが子々孫々に渡って、その活躍を語り継いで来た話が長い年月の間に一分尾ヒレがついた状態で一般に伝わったものというのが判明しているからだ。

「被害のほうほどの程度か」

「各工業地？に爆撃の直接的損害は10%ほどの損害が出ております。ただ京浜の方には火災が発生し、爆撃が行われている状況では消火するのは困難と消防の方から連絡が入っています」

「なんとしてもこれ以上の損害を食い止める！中国戦線の部隊を回してもいい！！」

日本は連邦にとって最重要地区である。学園都市はもちろん、前時代の技術（ドラえもんのみみつ道具などの技術）が眠っている遺跡の発掘が未だ行われている地？も多数存在する。そこを失うわけにはいかない。レビルはロシアを奪還するために中国で活動している航空隊を呼び寄せても日本を守るといふ指令を発した。

「……辛い戦いになるな」

そう言って彼は執務室を後にした。彼が向かった先は……

一ハワイ攻略は峠を越えようとしていた。各地区の搜索も順次完了し、残りは中心市街のみとなり、ひとまず安堵が全軍に広がっていた。ある日の夜、戦車隊の臨時駐屯地で休憩を取っていた仮面ラ

イダーV3Ⅱ風見志郎一行の内、なのはは普段着（……といっても連邦軍から支給された軍服だが）で外に出て、考え込んでいた。力、とは何か？ 守るためのものか、それともただひたすらに敵を討つ為のものなのか。自分は個人ではどうしようもない巨大な、戦争、という力の前に動かされているだけでは無いのか？ と悩んでいた。

「……力って何なのかな。小さいころのお父さんのあの、事故、の時もそうだったけど……」

なのはは此頃になっても、幼少期に父親が、事故、にあい、生死の境をさまよっていた時の、無力感、が尾を引いていた。9歳の時に魔法を得ることに何の躊躇いも無かったのもそれが起因しているが、今回、この世界にきてからというものの、多くの戦争を見てきて改めて自分が如何にちっぽけであるかを認識した。、個人ではどうしようもない、時代の流れ。スペースノイドとアースノイドの対立がやがて地球連邦とジオン公国の対立へ拡大して、一年戦争、を引き起こし、その後も争いの火種は残ったまま。、自らの大義のもとに、争いを起こすことを厭わないジオン軍残党、に、フェイトは憤慨していたが、自分としても争いを起こす彼らは許せない。だが、自分はそれらを止められるほど強くない。

「何かを守りたい気持ちがあればそれだけで何も要らないもんよ」  
「美琴さん」

駐屯地のベンチに座っているなのはの隣にはいつの間にか御坂美琴がいた。彼女はたまたま外の空気吸うために建物の外に出たのだが、そこで偶然なのはを見つけたわけである。（因みに美琴の服装は常盤台中学の制服の夏服である）

「……私も前に無力感に耐え切れなさそうになった時があったね。」

あれはこんな夜の時だった」

美琴は学園都市で有数の超能力者と言われ、常盤台中学のエースとまで謳われている。その彼女をして精神を病む一歩手前までいった出来事があった。それは絶対能力進化（レベル6シフト）と呼ばれる実験。

学園都市第一位の、一方通行、を使って絶対能力を産み出そうとした狂気。その実験で使われた、実験動物、は美琴の体細胞クローンがおよそ20000体。そのうちの一体と出会った事で実験を知り、その実験で他愛もなく人形を壊すかのように殺される自らのクローンを目撃してからは阻止に奔走したという出来事を話した。

「その過程で、第四位、とも戦ったりした。……でも結局自分の力じゃ実験は止められなかった。

第一位、とも戦ったけど結局どうしようもなかった。、常盤台中学のエース、なんで言われている自分が一矢報いることもできずに負けた。……あの時の悔しさは一生忘れられないわ」

美琴は実験のさなか、第一位の、一方通行、と直接交戦していた。目の前で自らの、妹、を殺され、激昂して戦ったもの、その能力の前に決め手の、超電磁砲、を弾かれ、戦意を喪失した。その後、彼女の心は次第に病んでいき、相棒の白井黒子にすらその心を晒さずに実験を止めようと無力感と怒りが交錯するままに行動した。だが、彼女の心は救われた。あの高校生、上条当麻、が実験を止めてくれたためだ。彼はボロボロになりながらも奮戦し、一方通行を、ぶん殴った。それは今でも目に焼き付いている。美琴によって彼は、妹達の命の恩人、でもあり、自分が自分らしく振る舞える、大切な人でもあるのだ。

「アイツが止めてくれなければ、今頃私は暗部に身を落としてたか

もしれない。アイツのおかげで私は救われたし、私もアイツの背中を追いかけているうちに何かを救うために戦った。……いや、戦えた」

レベルアップ！  
幻想御手事件や乱雑開放事件で自らの手で事件に決着をつけたのは自然と上条当麻の背中を追うようになったからかもしれない。今はそう結論づけている。

「……大事なことは仲間を信じることよ。それがあれば力は自然と湧いて出るもんよ」

「仲間を信じる……」

背中を預けられる、白井黒子という仲間がいるから美琴は戦える。穴吹智子にとっての迫水ハルカ、仮面ライダー一号にとっての二号達。ドラえもんとのび太にとっての三人の幼なじみ。自分にとってはフェイトやスバルだろうか……。

「とりあえず飲みものでももらってくるわ。喉乾いたでしょう」

美琴はそう言って立ち上がり、建物にもどって行く。その背中を見送りながらなのは、力、について自分なりに考えてみることにした。

—彼女にとって、この御坂美琴との会話が後々にまで影響を及ぼす事になるが、それはまた別の話。

## 第75話「HEATS」(前書き)

ハワイでの真ゲッターロボの活躍です。

## 第75話「HEATS」

一ハワイ攻略戦直前のこと。ルナツー所属部隊が遭遇した事態の報告が上層部になされた。

それとほぼ同時期にヨーロッパ戦線で回収された大型モビルスーツの解析も行われていた。

一ある日の北米 オーガスタ研究所（連邦軍ニュータイプ研究所としては最古の部類に入る。現在は政府の方針により、主に強化人間の安定性の強化を研究している）

「……カミーユ・ビダンが回収した例の子ですが、容態は安定しました。ネオ・ジオンが

残した研究の成果と結城丈二氏のおかげです。ただ、精神的安定はまだ……」

「致し方無い。過去の我々もそうだが、あの様な強化人間はたいいていそれは付き物だ」

研究員が所長に報告している。それはヨーロッパから運ばれた未知の大型モビルスーツのパイロットの治療の経過についてである。ニュータイプと異なる強化がなされたそのパイロットの体には本来人体には無い物質が検出され、治療に難儀した。幸い、仮面ライダー4号たるライダーマンⅡ結城丈二が治療用に提供した、組織、の技術で作られ、連邦政府のそれよりも世代の進んだナノマシンの威力でその物質を体内から無くす事に成功していた。そのパイロットは未熟な技術による強化が行われたようで、大半の記憶を消されてい

る（この時期、連邦軍も新生ネオ・ジオンから摂取した強化人間の研究成果を応用し、安定性の高い強化人間を作れるようになっていた。そのためにフォウ・ムラサメの時のように、記憶まで操作するというのは既に過去の話となっていた）し、彼らがかつてティターンズに送り込んだ「ロザミア・バダム」の末期を想起させる情緒不安定さを見せていた。

「肉体年齢は15、6程度と思われますが、精神的には遙かに幼く、まるで幼児です」

「……敢えてそうして育てる事で戦闘で成果を上げられると踏んだのだろう。だが、こちららもそれを逆に利用しての治療は容易い。ええと……ああいう類の強化人間は、向こう、では何と言われている？」

「不明です。報告書の奴とは別の方法で強化されたようですので」「そうか」

所長はその治療対象のパイロットの写真を見てそういった。それは回収直後に連邦軍の部隊が撮影した写真だ。金髪ショートカットの髪型の少女の顔がそこにはあった……。

「それと例のサイコガンダムもどきの解析はどうか？」

「こちらは至って順調です。サイコガンダムというよりはジオングにも近い特性を持ち、ビッグ・ザムのできこそないのようなMA形態も確認できました。接近戦では脆く、軍はそこを突いて沈黙させています」

オーガスタ研は機体のOSを解析し、機体の情報を詳細に得つつあった。この時期の彼らは軍改革派への全面的協力と引換に研究予算



を獲得していた。強硬派やティターンズの協力者として、歴史に悪名を刻んでしまったオーガスタ研は生き残りをかけた策として穏健・改革派へ接近した。そのおかげで一部研究内容の転換を余儀無くされたもの、他の研究所の多くが予算を打ち切られ、閉鎖される中でも生き残ったのである。

「……さて、軍はハワイ攻略をどうやって行うのか……」

所長は軍の重要作戦であるハワイ攻略作戦に言及した。彼は前途の不安さを危惧していた。奇しくもその危惧は的中してしまう。それも水爆という最悪の形で、ハワイ、はそれだけ不安要素の高い要所であったからだ、ハワイ、かつてはジオン軍の小さな地方基地で、米軍の重要基地であった。かの地は後者の要素を取り戻しつつあったのは周知の事実であったからだ。この会話がなされた日はハワイ攻略まで2週間を切っていた。彼らも協力の一環として彼らが開発に関わったモビルスーツを軍に納入しているが、それでも不安は拭えなかった。

一ハワイ攻略開始から既に2ヶ月あまり。連日の激しい戦闘で戦死者・負傷者は共に千のオーダーに達していた。そんな中でも人類は奮闘していた。その一幕は。

クライシス帝国から思わぬ情報を得た穴吹智子は水爆があるであろう場所へ全力で向かっていた。息を切らせながらも必死の形相でひた走る。刀で立塞がる敵兵を蹴散らしながら。

「ハア…ハア……」

敵はどんどん現れる。切っても切っても金太郎飴宜しく数が減らない。さしもの彼女もスタミナが切れてとうとう膝をついてしまう。

（ダメ……こんなところで……）

意識が朦朧とし、体が言うことを聞かない。運が尽きてしまったのか。こんなところで自分は死ぬのだろうか？それでも彼女は肉体にムチを打って必死に戦おうとする。

一こんなことじゃ、この戦いで先に、靖国へ逝ってしまった連中に顔向けできない。それに私にはまだやらなくてはならない事がたくさんあるのよ……！

『どけ、俺がプチっと潰す』

智子に立塞がった一体の、ザンタクロス、が足を上にあげて踏み潰す態勢に入る。そのまま足を下ろせば智子は間違ひなく潰される。今の智子にはもはやシールドを張る余力は無いのだから。

「……!!」

思わず目をつぶる。さしもの智子もこの時ばかりは、覚悟、を決めた。一だが、そんな彼女の覚悟が事態の好転を生んだ。別方向からミサイルが飛来し、ザンタクロスのバランスを崩して転倒させたのだ。

「あ、あれは!？」

智子の目に飛び込んできたのは戦闘機の3機編隊だった。赤・白・黄色の3色の機体が朝日に映えている。

『よう。まだ生きてるか?』

インカムに男の声が飛び込んできた。ドスの聞いた、迫力のある声だ。

「え、ええ。あなた達は……?」

『俺達は、ゲッターチーム、。付近の部隊からの通報で急いで来たんだが、ジャストタイミングだったようだ。今からそいつの土手っ腹を搔っ捌く』

そういうと編隊は一端上昇に転じ、赤の機体を先頭に並ぶ。ややあつて叫びが響く。

『チエエエエンジ!!真!!ゲッターアアアアアアアアツ…』

…又ウウワンッ!!」

一合体したのだ、智子も目撃したあの悪魔の翼を持つ赤き戦神へ。

『ゲッタートマホオオオウク!!』

両刃の槍状の斧が肩の突起から射出され、それを片手で持ってそのまま振りかざす。その一連の動きの速さは正に神速と言って良い。空気を切り裂くような音が響き、真ゲッター1は急降下しながらトマホークを振り下ろし、ザンタクロスの足を両断する。そして右腕のパンチで胴体に食い込ませてそのままレザラの切れ味で文字通りに腹を掻っ捌く。正に鬼神と言って良い戦いぶりに智子は息を吞む。

『おおりゃあ!!』

最後に頭部を潰す、情け容赦ない真ゲッター1の動き。此頃の竜馬は19歳の誕生日を迎え、実家の家業を継ぎ、自らを鍛え直した。そのために敵に対して容赦ない熾烈な一面を見せるようになった。(同僚はこの変わり様を、石●賢のあのドウォ!!、と呼んでいるとか。これには隼人及び弁慶にも当てはまる)

「す、すごい……!」

それしか言えない智子。言うそばから真ゲッターがさらなる動きを見せ、陸戦形態である真ゲッター2へ変形する。

『お嬢ちゃんはそこで休んでな。ここの獲物は俺達が狩る。』

……ドリルアーム!!』

真ゲッター2は地上をものすごい速さで駆け抜け、超高速回転する

ドリルを敵に突き立てる。火花と悲鳴が響き渡り、ザンタクロス小隊をドリルで串刺しにしていく。オイルが血のように飛び散り、悲鳴が響き渡る。敵にとっては災厄の悪魔以外の何者でも無いだろう。

（これがゲッターロボ……これがスーパーロボット……!!」

真ゲッターロボのあまりの威力に智子は味方ながら身震いする思いだった。

「穴吹!!」

「ヒ、ヒガシ……あなた……どうして……?」

「上からの命令でこの戦いに参戦したのよ。生きてるわね?」

「……あたりまえよ。それじゃゲッターチームにあたしのことを通報したのは……」

「私よ。あなたのことが、見えて、ね。それで」

「……あり……が……とう……これを上に……ほうこ……」

仲間の姿に、安心したのか、智子は気絶する。

穴吹智子のもとに駆けつけたウィッチは加東圭子であった。彼女はウィッチ隊第二陣の要としてこの日より参戦した。固有魔法の、超視力、により智子を発見し、緊急で付近の部隊に救援を呼びかけた。それに答えたのがゲッターチームであった。ちなみに、ヒガシ、というのは扶桑での彼女のあだ名である。

『少佐はその子を野戦病院へ連れていってくれ。ここは俺達でどうにかなる』

「分かりました」

真ゲッター2の神隼人が外部スピーカーで呼びかける。加東圭子は

それに答え、飛燕のエンジンを吹かして智子をお姫様抱っこして近くの野戦病院につれていく。智子の腕にはガデゾーンがもたらした情報のメモが握られていた……。それが今回の戦いで重要な役割を果たすことになる。

**間章その20「時代の流れに抗しようとする坂本美緒」(前書き)**

ストライクウィッチーズ編。坂本美緒の空戦への思想に触れます。

## 間章その20「時代の流れに抗しようとする坂本美緒」

—2199年の状況は1944年にも伝わっていた。敵拠点を落とすために相当数のウィッチが駆りだされ、戦っていること。それは欧州の501も同様だった。

—1944年 某日 ブリタニア

「何？未来世界でウィッチが戦ってる？」

基地に伝わった話にバルクホルンは驚きを見せる。それは基地を訪れた坂本美緒の師「北郷章香」が伝えたもので、連邦軍の援助と引換の見返りにウィッチを未来世界に送り込むという内容。扶桑がいの一番に乗り出し、既に相当数のウィッチを送り込んでいるという。派遣が取り決められたのは連合軍の政治的理由によるものだが、各国もそれに追従し、今では各国合わせて既に千人程度は送り込まれたとの情報もある。

「ええ。上と地球連邦軍の政治的取り決めらしいわ。既に千人程度が向こうに送り込まれて戦ってるらしいの」

「しかし何故そんな事……」

「大尉、簡単な事だ。こちら側のメンツを立たせるために政治家達が持ちかけたのさ。連邦軍が介入してこの方、向こうさんに助けられてばかりだから軍のお偉方のメンツはあったもんじゃない。だからなのさ」

北郷章香はバルクホルンに連邦軍と連合軍の間で政治的駆け引きが



行われていることを説明する。連邦軍はティターンズ残党の掃討という軍務に加え、調査任務も負っている事から、連合軍の協力が欠かせないし、連合軍はティターンズに対抗するためには連邦軍の援助がなければ戦線の維持も覚束無い。単純な善意では無く、共同戦線は上にとつては双方の思惑の一致の産物であると。

「政治屋どもめ……！」

バルクホルンは政治屋達の駆け引きの材料としてウィッチが利用されたことに憤りを隠さない。ノイエカールスラントでも国王のフリードリヒ？世の下位にいる政治屋達は国王を利用して国政のイニシアチブを握らんと策を練っている。いつの時代でも腐敗した政治屋や官僚は必ずいるものだが、こんな火急存亡の時まで何をやっているのだと、怒りが込み上げてくる。

「いつでもそういうのはいるものですよ」

部屋にシーブック・アノーが入ってきた。彼は歴代ガンダムパイロットの中では比較的落ち着いた性格であり、この艦隊でのツートップエース。その腕はミーナやハルトマンなどからも一目置かれるほどである

「シーブック君」

ミーナ達に一礼するとシーブックは話を続ける。

「僕達の時代でも政治屋達は腐敗しきってますよ。極稀に優秀な奴がポツンと現れても、異端、扱いされ、排除される。だからそんな官僚や政治屋に絶望してテロを起こす輩が絶えないし、決起を起こす勢力もまたしかり」

シーブックは2190年代末で問題となっている連邦政府機構の腐敗と疲弊、テロや決起について説明する。それは多くの勢力がたどる道。たとえば白色彗星帝国だろうがガミラス帝国であろうが同じことだ。

「地球連邦は銀河の移民星や船団、スペースコロニー、月面都市を地球から支配しています。政府の中にはこれを良しとせず、に地方分権を推し進める改革派と中央集権を至上とする守旧派が対立して抗争が絶えません。僕達を派遣した軍の諸提督達は前者の改革派閥に属してますから政府からは、異端、扱いされてます。この状況は、そんなだから一年戦争やネオ・ジオンの決起、ザンスカル戦争は連邦政府の身から出た錆みたいなもの、とスペースノイドは揶揄してます」

「それはいつの時代でも変わらんのか……因果応報か」

バルクホルンはシーブックの言う連邦政府の腐敗ぶりに溜息をつく。ミーナや北郷章香も同じようにうなづく。それは放っておけば連合軍を構成する各国がたどる末路になってしまうという危惧から来るもの。ミーナ達は改めて、余程優秀な御仁以外は政治屋を信用しない、と心に決めた。

「そういえば少佐はどうした？姿が見えんが」

「ああ、坂本ならさっき紫電のテスト飛行をやって発進した」

「例の扶桑の零式に変わる次世代型の？」

「そうだ。あれは零式とは別の思想で作られた奴だからアイツの得意とする巴戦は余り重視されていない。アイツにしてみれば、乗りにくい、ストライカーユニットだろう」

北郷章香は、紫電、をこう評した。現に紫電の形はリベリオン合衆国のF4F、ワイルドキャット、に酷似している。坂本美緒が開口一番に難色を示したのはその零式とは違うぶっ格好な形状と零式ほ

ど旋回性能が期待できないからであり、坂本美緒の性格をミーナよりも把握している彼女は絶対に紫電を嫌うことは想定範囲内であった。

一現に坂本美緒は紫電にブーたれていた。特に旋回性能で零式に及ばない（それでも他国のものよりは格段に小回りは効くが）事に腹を立てていた。

「ええい旋回半径がデカイ！！これだから山西なんぞに陸上ストライカーユニットを作らせるべきではないのに！！ああ、陸軍の疾風が欲しいー！！」

巴戦を至上とする美緒にとって旋回性能が劣るというのは許せるものでは無かった。戦友達が次々に零式から紫電に機種変更を行っていく事は知っているが、彼女は、烈風、までの繋ぎに、旋回性能と速度が両立された陸軍最新鋭の、疾風、を羨望している。

その想いが垣間見える。しかしジェット戦闘機の出現に伴って、巴戦の時代は急速に終息を迎えつつある。それを受け入れられない彼女は、ある意味、時代の流れに抗しようとしたサムライ、なのかも知れない。

「まあ巴戦も消えてないんですけどね。ベトナム戦争でF-4の初期型はミサイルしか無かったからドックファイトで損害を被りましたから」

「ああ、それならここに行くまでに兵から聞いた。それでF-15が作られたんだろう？」

「ええ。その流れは正しく、航空機関砲は2190年代になっても航空兵装の花形であり続けてます」

「詳しいな」

「一応ハイスクール時代は工学方面を専攻してましたし、飛行機も嫌いじゃないんで」

シーブックは北郷にこう返した。モビルスーツのパイロットである彼だが、飛行機へのあこがれは今でも持ち合わせている。意外な一面である。

「アレは……？見たことない飛行機ね」

ミーナは甲板で発信態勢を整えているF-14Dを窓から見てそういった。その尾翼にはエンブレムが描かれている。パーソナルエンブレムであることから、余程の手練が乗っているのだろう。

「トムキャットか……ずいぶんレアな機体を持ち出したな」

「トムキャット？」

「ファントムの後継で、アレも名機ですよ。バルキリーのファイター形態の設計の元ですし」

そう。初代バルキリーのVF-1の飛行形態は旧・ノースロップ・グラマン社に残置していたトムキャットの基本設計を元に考え出されたと言う。可変翼の流麗な姿にミーナは見とれていた。



**間章その20「時代の流れに抗しようとする坂本美緒」（後書き）**

坂本さんが紫電を嫌う理由はイメージモデルの坂井三郎中尉が紫電を嫌っていた史実をもとにしました。

**間章その21「アフリカ戦線の状況と日常」** **(前書き)**

1944年 アフリカの一幕です。

## 間章その21「アフリカ戦線の状況と日常」

—1944年。アフリカ戦線は連日連夜の激戦により消耗を強いられていた。特にジェット戦闘機の猛攻によりレシプロストライカーユニットの稼働率は50%を切っており、新鋭のジェットストライカーユニットの登場が待たれた。

「コイツもだめか……エンジンが逝ってる」

整備員達は基地に配備されているストライカーユニットが次々と失われていくのを嘆いていた。隊長代行のマルセイユも出撃しているが、彼女を以てしてもストライカーユニットの損耗率は増加の一途を辿った。特に欧州系ストライカーユニットの損耗が激しく、BF109は全損の憂き目にあっていった。辛うじて稼働状態なのは運動性のいい扶桑系列の物のみ。それでも3式「飛燕」はその「日本系で一番食いやすい」と敵に評される特性のために破壊され、4式のみが稼働状態であった。

「まいったなあ……飛燕をやられちゃったよ」

稲垣真美は前日の出撃でなんとか帰還したもの、愛機の飛燕を失っていた。飛燕は戦闘機としてもそうだが、日本の機体にしては運動性が平凡で、敵には食いやすいと称されている。高高度性能は高いが、それはレシプロの範囲内の話である。ジェット戦闘機相手には通じず、上空からの一撃をやられてから空戦に入るのが最近の常だ。撃墜数に反比例して損耗率は高くなる一方である。これにはさしものマルセイユも頭をかかえる悩みの種である。



「マルセイユ大尉、敵は2機ほど落としました。ですが、ストライカーユニットへの被弾を防ぎきれなくて……」

「……そうか。よく戻ってきたな」

報告を受け、真美が執務室から出ていくのを確認すると開口一番で漏れたのはため息だった。こここの処は各戦線ともジェット戦闘機に苦戦を強いられていて、欧州では半分蹂躪に近い損耗率を記録しているともつばらの噂だ。ノイエカールスラントで急ピッチにジェットストライカーユニットの開発・配備が進められているのも分る。

「502はともかくも504までも苦戦してるとはな……なんて事だ」

マルセイユは各地の部隊が苦戦を強いれているという報に顔を曇らせる。それほどまでに新時代の空戦に適応したジェット戦闘機は強いのだ。リベリオンの高性能機「B-29」（ティターNZには日本系の人員もいるので、大空襲、の復讐、とばかりに余計に狙われていた。捕虜も乗員は裁判なしで処刑されるケースが多い）もただの『ジュラルミンの棺桶』と言わんばかりに的扱いになっている。唯一なんとか敵に劣らない性能を持つ戦略爆撃機は扶桑が配備を開始したばかりの最新鋭「富嶽」（その性能はB-52には劣るが、B-29よりは圧倒的に高性能である）のみ。稼働数は少なく、戦局に影響は与えていない。考えただけで暗くなる。

「今じゃ飯が唯一の楽しみになった感がある……あとで覚えてろモントゴメリーめ」

今頃厨房では稲垣真美とティアナ・ランスターが食事の用意をしているはずだ。それが完全勝利の凱歌が消えて久しい最近の心のオアシスとなっていた。最近は加東圭子がいなかったために書類仕事まで押し付けられるようになったマルセイユにとって安らぎを得られる数少ない時間だからだ。

「今日はなんだっけか……中華料理か」

マルセイユは食事の献立表を見てこの日の昼食を楽しみにしていた。彼女は未来世界から持ち込まれた様々な料理を吟味してきたが、意外なヒットだったのはこの世界では存在しない、中華料理。ラーメンにチャーハンやシウマイなどの料理が彼女の好みにあったように、飛びつくように食している。今では1週間にいっぺんは必ずラーメンなどを食し、ティアナ達を呆れさせているとか。

一ジュウジュウと何かが煮える音と共に中華鍋に米や具材が景気よく入れられ、火で炙られる。ティアナ・ランスターは時空管理局で特殊な部署である機動六課に配属されていたのと、六課転属以前は災害救出方面部隊に在籍していて食事は出前（ミッドチルダには地

球出身者が多く在住しており、地球の料理が持ち込まれていた）のチャーハンで済ますこともままあり、親友のスバルのために自炊する機会もあった。それらの要因により、ティアナはある程度の料理が作れるのであった。

「手馴れてるね」

「まあね。、向こう、で腐れ縁のルームメイトのために自炊した経験あるし、出前で済ませる事も多かったけど、料理本見て作ってたの。それでおぼえちゃったってわけ」

料理が得意な稲垣真美であるが、中華は初めてなので料理本（2199年現在ベストセラーの本）を片手に作っている。メインディッシュのチャーハンを作っている。ティアナは味付けなどをチェックしている。具材は連邦軍の艦のコック達が提供してくれた物で、鮮度などは最高レベルだ（地球連邦軍は宇宙戦艦ヤマトなどの戦訓で長期間の航海における料理の多様性や旨さを重視している。そのためどの地域の料理でも作れる具材は備蓄している）。

「ベーコンはこのくらいかな？」

「もっと大きくてもいいわ。ベーコンの盛り付けは重要だから」

ティアナは具材の盛り付けに気をつけるように真美に促す。よほどのこだわりがあるのだろう。具材を切る大きさにも留意するように促す。

（まるでどっかの料理マンガみたいね……あたし）

ティアナは料理を作りながらそう独白していた。スバルが見たら何と思うのだろうか。

一基地は今や連邦軍の部隊も駐留しているので大所帯であった。トブルク港には宇宙空母や戦艦までもが入港し、その威容を見せつけていた。そこに陸戦ウィッチ達は集まっていた。

「これが新型の、センチュリオン、？」

マイルズ少佐はアフリカ戦線に回された真新しいストライカーユニットにいささかの驚きを見せた。

そのストライカーユニットは本国で使用されているコメットやチャールよりも最新型のストライカーユニット。見るからに洗練されたフォルム（以前より洗練された設計で、動きやすいような形状）、モビルスーツにも打撃力が期待出来る20ポンド砲が装備として用意されている事に喜ぶ。

「連邦軍がブリタニアに圧力をかけて先行生産されたものを回したものだ。より一層の戦果を期待するぞ、少佐」

「ハッ、ありがとうございます！！」

彼女が敬礼をしているドイツ系のこの将官は「エルヴィン・ロンメル」元帥。史実では機甲師団による電撃戦の名手（近代的電撃戦を考えたのはハインツ・グデーリアン大将）で、戦史に残る名将として勇名を馳せた。もちろん地球連邦軍部隊にとっても彼の指揮下で戦えることは至上の誉であり、敬意を持って接している。彼は

未来世界のモビルスーツなどの戦術・戦略も即座に理解できる数少ない陸軍将官（他には今村均中將やドワイト・アイゼンハワー大將など）で、その評価をさらに高めた。これにより彼の政治的発言力は連合陸軍随一に高まり、アフリカに最新鋭兵器を回させられるほどであった。

「来るべき作戦では彼らとの共同戦線となる。協調訓練を怠らないように」

「了解！」

ロンメルは作戦の方法をこの時すでに考えついていた。それは各種兵器の機動力を生かした電撃戦と言うべきモノだった。

**間章その21「アフリカ戦線の状況と日常」** **（後書き）**

電撃戦の記述について訂正しました。

**間章番外編「再会くサムライハート」 (前書き)**

フェイト (大人) とティアナの再会です。舞台はストライクウィッチーズ世界です。

## 間章番外編「再会くサムライハート」

—地球連邦軍の主力戦闘機はグレードアップし、AVF（VF-19や22）以降の機体が急ピッチで大量生産されていた。これは本星防衛の強化策によるもので、今後予想される暗黒星団帝国の侵攻に備えるためだ。この過度とも言える軍備増強に難色を示した（この時期の地球連邦は既に完全な管理外とは言えず、観測指定であった）時空管理局であるが、星間国家との戦争においてはそれでさえ必要最低限である事は認識していたので、結果的に容認した。軍隊と警察の違いはよく分かっていたからだ。2199年時点のギネスブックに、宇宙一強力な警察、と書かれた管理局であるが、何故階級が軍隊のそれであるのか、などの謎もある。それについてはフェイトは後にレビル将軍と話す機会を得たときに自身の推測を話している。

それによれば「大昔に当時のミッドチルダの体制が崩壊したときに軍隊も解体されたが、そのノウハウやマンパワーの喪失を恐れた人々が管理局の組織を設立した時に人材を一部入隊させて命脈を保ち、階級の規則は旧軍のそれを宛てがったのでは無いか」との推測だ。レビル将軍は「それと仮定すれば、まるで日本の自衛隊のような経緯だ」（自衛隊は治安維持を名目に米軍が旧大日本帝国陸海軍の人材を一部復権させて警察予備隊として設立させ、その後明確な軍事組織として復活させた経緯がある）とコメントし、フェイトも同意した。

ちなみに2199年時点の、バジュラ戦、にフェイトが可変戦闘機（バルキリー乗り）搭乗員として、メカトピア戦争、になのはが一士官として参戦していた事は連邦政府の、配慮、により、しばし伏せられ、公式に公表されるのは地球時間で数年後の西暦2202



年の事であったという。公表時には色々とき空管理局から問い合わせが殺到したとか。

―ティアナは扶桑での原隊を書類上、扶桑陸軍航空隊飛行第64戦隊、とされており、黒江綾香や穴拭智子なども書類上はそこへ復隊したという事になっている。史実では加藤建夫中佐が率い、加藤隼戦闘隊として知られた。多くの撃墜王を輩出した同隊に所属するというのは日本軍航空隊の誉とも言うべきものだった。1945年に入ろうとした時に彼女はかつての上官であるフェイトとアフリカで再会した。（フェイトはミッドチルダの動乱で連邦軍や連合軍に救援を依頼するために訪れた。護衛として、仮面ライダーZXⅡ村雨良が同行している）

1944年12月 トブルク

「お久しぶりです、フェイト隊長」

「うん。まさかティアナが扶桑陸軍に入ってたなんて……驚きだよ」

「はい、色々あって。連邦宇宙軍に入ってたなのはさん（穴拭智子）からののは事は聞いていた」とはこれでおあいこですよ」

「確かに。でもなんでそのことを？」

「スバルや智子……いえ、穴拭中尉から聞いてましたから」

陸軍式敬礼で出迎えるティアナにフェイトはかつて連邦宇宙軍に協力したときの癖か、海軍式敬礼で答えた。フェイトにとってもティアナにとってもしばらくぶりの再会である。積もる話は山ほどある。特にフェイトはある。まず最初にあの時―メカトピア戦争―、お互いに出会わなかったのはどうしてだろうと問いかけた。

「簡単ですよ。ある程度、帳尻あわせ、が働いたんでしょう」

「帳尻合わせ？」

「のび太君の子孫のセワシ君を例にとっても、運命が変わっても生まれてくる事に代わりがないでしょう？それはどこかで剛田家の子孫と結婚するようになるからで、多少どこかが変わっても大きな流れには影響はない。つまり、あたしとフェイトさん達が機動六課ができた時に、出会う、のは歴史の必然みたいなもんです」

ティアナはこの時既に空戦で自信をつけていたせいか、機動六課と別れる前の、どこか強さに焦っている、感じは微塵もなく、態度も凛としており、堂々としている。それをフェイトに指摘されると恥ずかしそうにこう答えた。

「今のあたしが強くなれたのは穴拭中尉や黒江大尉、それとストームウィッチーズの皆さんのおかげです。みんなのおかげであたしは、飛べたし、強くなれた。だからウィッチとしての誇りがあります」

それは陸戦魔道師から航空ウィッチという経歴を辿った彼女が持つウィッチとしての、心、だった。ミッドチルダで、翼を持てなかった、彼女は別世界で機械の翼を得たことで、羽ばたき、戦っている。その事を大切に行っているのだ。フェイトもなのはが19歳となった今でも、穴拭智子に、シゴかれた、日々を大切に思っている事は知っているし、自分も黒江綾香に、仕込まれた、事を誇りに思っている。だから今でも、終戦時に黒江綾香から受け取った日本刀（銘は

虎徹）を持っている。

「それは私も分るよ。私も……綾香さんと一緒に飛んで、強くなれたから」

そう言ってフェイトは日本刀を取り出して机に置く。それは綾香といつか肩を並べて戦う時に使うつもり、虎徹、だった。

「これは……？」

「綾香さんからもらったの。私はあの人達に背中を任せられる強さを持ちたい。だからあの時から特訓を続けてきたの」

それは8年もの間、来る日も来る日も特訓に励んだフェイトの思いだった。

―出会った日から綾香の背中を追いかけて、その強さと心に憧れてきた一途な思い。秘剣をモノにするために努力を重ねた。ある日は竹を添え物切りし、またある日は素振り……。中学と高校では剣道部に入り、大会にも出場した。高校時代の剣道部顧問には、剣に特別な思いを抱いている、と言われた事もある。

「これはその時のために使うつもり、モノなの」

（綾香さん……あなたが蒔いた種は実ってますよ……）

ティアナはフェイトの綾香への憧れに共感し、微笑んだ。それはお互いの思いが重なったことへの嬉しさでもあったかもしれない。

## 扶桑海軍連合艦隊次期長官の航海日記＋α

―これは扶桑海軍で次期連合艦隊司令長官へ内定した小沢治三郎第一機動艦隊司令長官の日記と501＋αの日常である。―

―1944年 7月

『我が連合艦隊は501統合戦闘航空団の援護に馳せ参じた。未来世界の援助により艦載機は本来なら50年代に就役するものと見込まれた次期主力戦闘機や爆撃機、攻撃機に統一し、世界最高レベルの戦力を手にしての派遣であった。国内では栗田や宇垣、南雲などの反対があったが、山本閣下や米内閣下、陸軍の今村くんの尽力で実現した。』

この時の扶桑海軍は史実での1945年以降に日本海軍が手にするはずであった兵器は全て就役させていた。艦上戦闘機「烈風」、艦上攻撃機「流星」、ジェット戦闘機「震電改」など……史実で日本海軍が戦力として運用出来なかった兵器も、日本、と異なる燃料・資源事情で最高のコンディションを発揮してる。この時代としては最高戦力である。艦船にしても大和型戦艦が「武蔵」と後から合流した「信濃」、「甲斐」の3隻を揃え、空母も「大鳳」、「雲龍」、「天城」（雲龍型2番艦）、「葛城」、「笠置」などの新鋭艦が顔を揃えており、日本海軍マニアが見たら感動のあまり失神する陣容であった。

『この日、私はエイパー・シナプス長官と話す機会を得た。彼は今回派遣された連合艦隊の艦船は

彼の世界では戦力化出来なかったり、初陣で沈んだ悲運な艦が多数含まれているという。特に大和型戦艦の3番艦「信濃」や空母「大鳳」は悲運な運命を辿った艦の筆頭格で、信濃は空母になってすぐに沈められ、大鳳は負け戦の象徴として歴史に名を残したという。それを聞いた私は愕然とした』

さしもの小沢もマリアナ沖海戦での大鳳の悲劇には愕然とするしかなかった。初陣で、一発の被弾だけで沈没した大鳳。しかも栄光の海軍航空隊の凋落を敵に知らしめた最悪の負け戦。それを指揮していたのは自分なのだから。そしてシナプスの世界には扶桑を資源大国足らしめた「南洋島」は無い。米軍に敗北したのは自明の理だ。もし、扶桑皇国の国力が大日本帝国にあれば大東亜戦争で敗北することは無かっただろうが、後の祭りだ。

この日、小沢はシナプスに協力を依頼し、ダメージコントロールの訓練を全艦あげて行なった。史実で日本が遅れを取った分野であり、艦船の大量喪失に繋がった。それを小沢は恐れたのだ。

「7月中旬。敵のモビルスーツが501を襲った。我が艦隊にとっては初の戦い（史実の日本海軍のように日清・日露などの人間同士の戦争を経験していない為）であった。武蔵は敵のイージス艦に46cm砲を浴びせ、轟沈せしめた。未来技術の威力、極めて大なり。また、502から臨時で派遣された管野直枝大尉が

正拳突きで敵モビルスーツを沈黙させ、艦内は大いに湧いた」

菅野直枝は圧縮式超硬度防御魔方阵という固有魔法を保有しており、本人曰く「マクロスのピンポイントバリアみたいな芸当ができる」との事で、それをまとった正拳突きでモビルスーツのバックパックを一撃し、地面にたたき落とした。その時の掛け声は「ピンポイントバリアパアンチ!!!」であつたとか。ちなみに彼女、勇猛果敢かつ荒い言動と裏腹に文学少女（史実の菅野直大尉も文学少年であつた）な一面を持っており、すっかり未来空母「赤城」艦内図書室の名物少女（?）になっていた。その時の一幕は以下の通り。

「何やってるんですか、菅野さん」

「……ん、ああ。宮藤か」

宮藤芳佳は何か面白い本は無いかと図書室に足を運んだのだが、ここには先客がいた。菅野直枝である。なにやら推理小説の棚を漁っていて、左手には既に何冊もの本が握られている。しかもそれはこの時期に既に「そして誰もいなくなった」で有名となったアガサ・クリスティーの作品ばかりだ。

「こここのところ本読む機会が無かつたからな。推理小説でも読んで気分転換だ」

「って……そんないっぺんに読めるんですか？」

「アホか。一冊づつに決まってるだろ。大漁だけどな」

ドッサリと本を抱えてひとまず机に置く。それらにはこの時代ではまだ、出版されていない、ものも多数ある。因みに菅野が読み出している本は、かの有名な『オリエント急行殺人事件』である。そし

て傍らには自室で見ると思われる同作品の映画版のDVDも置いてある。

因みにその頃、ある一室ではシャーリーが「ジョジョの奇妙な冒険」を大量に借りて、ハラハラドキドキしていた。

「……うおおお……はたしてどうなるんだこれえ〜！」

コミックを片手にもものすごい展開の数々に思わずこっぴどく漏らしていた（現在読んでいるのは第二部との事）。そして密かにジョジョ立ちの練習を初めていたとか。もちろんあの掛け声付きで。

「何やってるんだ〜おまえ」

……とエイラにつっこまれたのは言うまでもない。

**間章番外編「再会 その2、正義という言葉の意味、」（前書き）**

仮面ライダーの存在意義について触れます。仮面ライダーZXの話には仮面ライダースピリッツの要素が混じっていますので要注意を。



## 間章番外編「再会 その2、正義という言葉の意味、」

―フェイトとティアナの対談は続いていた。歴代ライダーが時空管理局のことを知っていたのは先にティアナと出会い、共に戦ったからなど……フェイトにとっては初耳な事も多かった。

「それじゃ、あの時には知ってたんですか、村雨さん」

「ああ。ティアナの事もあったから君には黙っていた。歴史に影響を与えないように……ね。時には、変えてはいけない運命、もあるのさ」

それは村雨良（仮面ライダーZX）なりの気遣いだった。ティアナの事を言えばフェイトは運命を変えようとするだろう。そうなる歴史に悪影響が出かねない。（ティアナを機動六課に招聘しない、時空管理局に入らないなど……）変えられる運命があるように、変えてはいけない運命、もあるのだ。

「でも……なんで……なんで、あなた方は改造された、運命、を敢えて受け入れたんですか！？タイムマシンがあるならあなた方の運命だって変えられるはずです！」

フェイトは村雨に詰め寄った。それはいくら過ごしている時間が自分の元々の時代ではないとは言え、タイムマシンというものがある世界に生きながら「普通に生きて、幸せに暮らす」事を捨ててまで修羅の道を歩み、異形、である仮面ライダーとして生きる選択をしたのか。自分がどんなに望んでも手に入れられなかった「幸せ」を手に入れられる権利を持ちながら、それを何故捨てたのか。大人になってからその疑念が強まっていたフェイトは想いを村雨にぶつけた。村雨は歴代ライダーが持つ想いを代弁するように答えた。

「……人々は、悪、に対して絶対的な『正義』を求める。本郷さん……仮面ライダーは改造された当初は人間に戻る為の研究をしていたそう。ショッカーを倒した暁にはそうするつもりだった。だが、悪と正義……組織と仮面ライダーの存在が知られるにつれて仮面ライダーを求める声は大きくなった。人々は悪に対抗するための、偶像、を本郷さんに見出し、すがりようになった。組織もそれを逆手にとって仮面ライダー型の改造人間を作った」

「それが二号さん……？」

「そうだ。一文字さんは一号と出会うことで仮面ライダーになることを選んだ。本郷さんの力になるには一悪を打ち倒す一改造された体を受け入れて戦うことだったからなんだ。本郷さんは今でもそのことを、本当に良かったのか、と悔やんでいる」

村雨は今でも本郷猛が後輩達を、地獄の道づれ、にしてしまった事を悔やんでいることを話す。本来なら自分一人で終わらすべき道に10人もの男を道づれにしまった本郷猛の苦悩。そしてその運命を受け入れた男達の過酷な宿命。

「俺達だって最初から崇高な使命感で戦っていたわけじゃない。最初は復讐を行動原理にしていたライダーもいる。俺やV3はその最たる例だ。あの人は目の前で家族を皆殺しにされ、俺は目の前でたった一人の肉親だった姉さんを殺されている」

そう。V3の風見志郎は家族を全員殺されて復讐に走り、怒りと憎悪をダブルライダーに指摘されているし、村雨自身もたった一人の姉を目の前で処刑されている。その事への怒りは100年が経過した今でも忘れられない。だが、村雨は姉の幻影が記憶のなかった自

分をバダンの楔から解き放ってくれた事で仮面ライダーへの第一歩を歩めたといった。

「俺をバダンから本当の意味で解き放ってくれたのは姉さんさ。あの時に見たのは幻影だったかもしれない。だが、アレは紛れもなく姉さんだった。あの時に言った言葉を今でも覚えている。『もう二度と忘れん……バダンの無情、姉さんの無念……、そして俺の……無力を……』……と」

「……!!」

村雨は自身が改造前の記憶を完全に取り戻した時に発した言葉を覚えていた。そしてその瞬間に見た、優しく、いつも自分を守ってくれた姉、の幻影。今でも村雨はあれは姉が自分を助けてくれたと思っている。それが仮面ライダーになるきっかけの一つだと。最後に自分たちの存在意義を告げる。

「人々が仮面ライダーの存在を求め続ける限り仮面ライダーは死なん。……だから俺達は仮面ライダーであり続ける。人間の自由、を守るために」

村雨は自分を含める歴代の11人ライダーが運命を受け入れ、機械の体一人から見れば、異形、としか言いようのない体で生き続ける理由をそう締め括った。フェイトの知る戦闘機人のように先天的に機械の体ではなく、後天的に、しかも本意でなく機械の体となった者が多い彼らがその体で生きることへの決意に触れたフェイトは改めて圧倒され、二の句が告げないほどだった。

一ティアナは既にそれを知っていた。それを知った上で彼らと共に戦ったの……

巫女装束に小具足姿のティアナはそんなフェイトの心中を悟り、無言でうなづく。仮面ライダーの宿命を知る故に、彼らに協力した。さらにネウロイという脅威に立ち向かう為に鋼の翼を手にした。フェイトはティアナが戦いで手にした真っ直ぐな心に触れる事で、心の成長を阻害する殻を破るきっかけを得た。

「……ティアナ、私も戦うよ。ここでただ救援の依頼をするだけで、何もしないわけにはいかないよ」

「……フェイトさんの事だからそういうと思いました」

なんとなくタイミングの良さか、お誂え向きにネウロイが来襲警報が響く。

「ネウロイ……一週間ぶりね」

この所はネウロイの出現速度は緩やかになっていたので、久方ぶりだ。

「フェイトさん、来て下さい」

「え？」

「着替えるんですよ」

「ふ、ふええっ!? わ、私がそれを……!?!」

「バリアジャケットは常に魔力を消費しますし、ここのネウロイは数多いですから……魔力温存のためにも必要ですよ」

「それは分かるけど! ま、まだ心の準備が……」

「敵は待っちゃくれませんよ!! 覚悟決めて!」

「……」

一巫女装束と小具足という、扶桑皇国陸軍で常例となっている服装。まさかそれを19歳になって着ることになるとは。フェイトは嬉し

いような、恥ずかしいような微妙な思いで袖を通した。

「……似合ってるじゃないか」

「からかわないでください！」

村雨からそう言われ、照れるフェイト。しかしこうなってしまった以上はしょうがない。

「行くぞ」

ZXへ変身した村雨と共に、2人は出撃待機しているストームウィッチズのメンバーのもとへ足を運んだ。

## 第76話「新暦70年代 ミッドチルダ」(前書き)

第44話「突っ走れ 空を飛べ ブラックサタンを倒すまで」の続編です。

## 第76話「新暦70年代 ミッドチルダ」

―YF―29デュランダル。VF―25の設計を流用しながらも前進翼の採用と4発のエンジンによって全く異なる印象を与える同機は歴代の可変戦闘機バルキリーを遙かに凌ぐ超高性能を誇り、連邦宇宙軍が最も期待を寄せる次世代機（2201年にはVF―25は現行世代になっている）で、いわゆる、決戦機、的な扱いとなっていた。対バジュラ戦には間に合わなかった（辛うじてVF―25の新型パックスのトルネードパックが投入された程度）が、暗黒星団帝国に対しての絶対的な制空権確保が期待されている。その機体の内試作3号機はミッドチルダにて秘匿されていた。黒江綾香が持ち込み、ミッドチルダ（時空管理局の黙認）で極秘に飛行試験が行われていたからだ。彼女は仮面ライダー・ストロンガーからの連絡で動乱のミッドチルダに足を運び、同機を再起動させた。敵はナチス・ドイツの歴戦の猛者共。いくらあの2人が性能がいいバルキリーに乗っていようが、場数は圧倒的に敵に部があるし、搭乗員としての技量も分が悪く、彼らと渡り合うには未熟だ。

「……撃退くらいなら出来るだろう。さて、行くか」

黒江はなのはの自宅で秘匿していた同機の秘密格納庫のハッチを開放し、同機のスレージ？熱核タービンエンジン（熱核バーストエンジンの発展型）を全開にして音速の速さで飛び立った。それは同機の実質的な初陣といえた。エンジンの排煙が目撃され、音速突破によるソニックブームによる轟音と衝撃波だけが残された。（後で近所から時空管理局への問い合わせが殺到したとか）

—シャドームーンと対峙したRX。かつてより遙かに強くなった彼をしてもシャドームーンは強敵であった。シャドームーンが復活した事でパワーアップを果たした事を悟ったRXは短期決戦に持ち込もうとした。だが、動きを読まれていることも相まって苦戦を強いられていた。

「何故だ、動きを全て読まれている!!」

「無駄だ、既に貴様の命は我が手中にある」

「……何!？」

この時既にシャドームーンはRXの全能力を把握していた。彼とクライシスとの戦いを事前にモニターしていたからだ。例えばRXがバイオライダーになろうともその対策はきっちりできる。ゲル化の瞬間に熱攻撃を加えればいいからだ。

「……くっ、バイオブレード!」

RXは瞬時に青のカラーリングの多段変身形態「バイオライダー」となり、バイオライダー形態での必殺武器「バイオブレード」での剣戟に打って出た。シャドームーンのシャドーセイバーとがぶつかり合い、火花を散らす。その剣戟は実戦慣れしている両者の腕によって凄まじいものとなっている。

そして辛うじて出来た隙に浸け込むように、バイオブレードにエネルギーを充填し、それで袈裟懸けに叩っ斬る。俗にいう、スパークカッター、だ。シャドームーンの強化皮膚硬度を考えればこの程度



の攻撃では到底致命傷には成り得ない。だが、一撃でも加えればいい。そんな思いで南光太郎は剣を振り下ろした。

「……ほう。なかなかの腕だ。流石はRX。楽しめたぞ」

「……待て！それはどういう意味だ、シャドームーン！」

「勝負は預けるぞ、RX」

シャドームーンはRXとの戦いを優勢に運びながらも、わざと生かしたかのように閃光と共に姿を消す。響が削がれたとでもいうのだろうか。

「一体どういうつもりなんだ信彦……」

光太郎は変身を解き、気絶しているシグナムをお姫様抱っこするとその場を立ち去った。この一戦は彼の宿命の再動を意味していた。2人の世紀王の争いという……。

一仮面ライダーストロンガーⅡ城茂はその力で機動六課の残存メンバーの退路を切り開いていった。その戦いぶりは獅子奮迅。群がる敵を粉微塵にしながら奮戦していた。

「エレクトロファイヤー！！」

何百万ボルトの高圧電流にナチスドイツ残党の化物といえども焼かれていく。戦闘用改造人間としてのレベルの高い性能もそうだが、ブラックスATANやデルザー軍団との激しい戦いの経験を生かしたそ

の戦いぶりにはやては開いた口がふさがらない思いだった。

「逃がすかよおっ!!」

機動六課を逃がすまいと、ジェイル・スカリエッティの配下の戦闘  
機人姉妹「ナンバーズ」の9番目の少女「ノーヴェ」がストロンガ  
ーに挑んできた。自身のスペックに絶対の自信があるのだろうか。  
ストロンガーはノーヴェがスバルに顔も声も似ている事を気づいた  
のか。こう独白した。

(……アイツと共通の遺伝子を使った奴か……となると超電子ダイ  
ナモでぶっ殺すわけにはいかないか)

彼は切り札の超電子ダイナモは使わないと決めた。もし、少女がス  
バルと共通の遺伝子を使って作られたのなら、姉妹、になるからだ。  
超電子ダイナモを使った攻撃はキック一発で相手の土手っ腹を貫い  
てしまうからだ。

「でりゃあああ!!」

その容姿のとおりノーヴェはスバルの、ウイングロードに似たモ  
ノ、を発動させ、似たような武器で殴りかかった。だが、ストロン  
ガーは、御見通しだ、と言わんばかりにいなし、脇腹に一発膝蹴り  
を入れる。

(やはり経験は無いようだな。あいつより動きが読みやすい)

拳を体を動かさずに回避すると、お得意の一撃を首もとに食らわ  
す。

「悪いが……てめえにいちいち構ってる時間はねえんだ。ストロンガー……電ショック!!」

高圧電流の電気エネルギーを帯びた手刀をノーヴェに食らわす。改造人間に打撃を与えられるほどの一撃だ。当然彼女は電気エネルギーを直接浴びせる攻撃に耐えられるほどタフではない。脳が揺さぶられるような凄まじいショックに耐えられる訳はなく、気絶させられる。戦闘した時間は僅か一分。一蹴されたというのが正しいだろう。歴戦の猛者たるストロンガーの前に赤子の腕をねじるかのように一蹴された。

ナチス・ドイツはこの少女をどういう風に扱っているのだろうか。

「まさかとは思うが……、ヒトラー・ユーゲントじゃないだろうな……」

その線は薄いだろうが、引っかかる点であるが、とりあえず少女をノーヴェRXの持つマシンの一つ「ライドロン」に手足を縛った上で放り込む。

「ちょっとその車、誰の車やね」

「RXの愛車だよ。次元だって超えられんだぞこれ」

「それじゃ仮面ライダーじゃなくなって仮面ドライバーちゃう……?」

「あ、お前、言っではいけないタブーを……」

……はやてと仮面ライダーストロンガーの2人の会話はもはや漫才と化していた。



**現在の話の動向（ミッドチルダ編）（前書き）**

初見の方にも分かりやすいように、このへんでミッドチルダ編の説  
明を入れます。

## 現在の話の動向（ミッドチルダ編）

### ミッドチルダ編 概要

作品としては魔法少女リリカルなのはStrikersを基にHELLSINGやマクロスシリーズ、昭和仮面ライダーシリーズ、ストライクウィッチーズの要素やキャラ、メカがメインで登場。時系列はこの小説の本編の後に相当。

内容はミッドチルダにHELLSINGのミレニアム（ナチスドイツ残党）の一派がジェイル・スカリエッティ一派を配下として用いる形で侵攻。時空管理局は飛行魔法での迎撃をECMに封じられ、降下猟兵によって地上の中枢を制圧されてしまう。それを良しとしない高町なのはは子供時代の出来事で受領し、そのまま秘匿していた軍の兵器「可変戦闘機」（バルキリー）を起動させる。なのはの所属部隊「機動六課」の救援には彼女と縁があった、仮面ライダーの内、数人が馳せ参じる……というもの。

キャラの動向（かなり独自設定があり）

高町なのは

、本来の歴史、とは異なり、高校まで進学している。高校卒業と同時に独立してミッドチルダへ住まいを移す。子供時代に別世界の戦争に関わった事で、守るために戦う、事を自分が戦う理由として見出している。また戦争時に自分を導いてくれた別世界の軍人「穴吹智子」（出典 ストライクウィッチーズ）を子供時代同様に師として慕っている。また、私的に戦争時に従軍した時の愛機を秘匿し

ていた。

フェイト・テストロッサ・ハラウン

こちらは高校まで進学している以外は、本来の歴史、とはそれほど変わりはないが、一度親友が消息不明になったことで、大切な者を守る、気持ちをより強くしている。彼女もまたなのは同様に戦争時の愛機を秘匿していた。

仮面ライダーストロンガーⅡ城茂

かつて、ブラックサタンやデルザー軍団という悪から日本を守った7番目の改造人間。

本来は別の目的でミッドチルダを訪れていたが、攻撃が、ナチスドイツ、のものであることを知り、数人の後輩達を率いて戦いへ馳せ参じた。性格は好戦的だが、仲間思いである。

## 第7話 「LOVERS AGAIN」 (前書き)

マクロス?メカが出てきます。ご注意を。



## 第77話「LOVERS AGAIN」

ーミッドチルダの動乱へ馳せ参じた4人の仮面ライダー。秘匿していたバルキリーを使用したなのは。ミッドチルダは戦乱の業火に焼かれていた。

「あんたら、本当に改造人間なん？」

「そうだ。戦闘用だったり調査用だったり様々だが、その時々の高技術で俺達の体は改造された。まあRXはそれに進化が加わったから物凄い事になったけどな」

はやては撤退中に仮面ライダーストロンガーに問いかけ、彼は自分が改造人間である事をあっさり認めた。仮面ライダー達は全員が改造人間であり、その能力ははやての知る戦闘機人を遙かに上回る。その上に戦闘機人を一蹴した事実から、なのはやフェイトが過去に語った、彼らが幾多の悪を打ち倒したという武勇伝を裏付けるその強さが頷ける。

「突っ切るぞ！！つかまってる！」

「は、はいな！」

彼の愛車「カブトロ」のエンジンが唸りを上げ、時速300キロの猛速で敵の放火の中を突っ走る。弾丸が飛び交う中をバイクで突破するというある意味無謀な芸当だが、ストロンガーのバイクテクニクはそれを可能としていた。ブラックサタンやデルザー軍団と戦ったときにモトクロス戦を行う機会が多く、その際に鍛えられたからだ。（無論、現役当時のトレーナーである立花藤兵衛の教えもある）

、ジャリリリ……とタイヤが地面を擦る音が響く。見事なテクニックで敵のオートバイ兵の追跡を躲して行くストロンガー。はやては振り落とされないようにストロンガーの背中にしがみつくのに必死だ。

「……！」

はやてのストロンガーの背中に回している腕の力が自然と強まった。無理も無い。人外なナチス・ドイツ残党軍将兵の攻撃は熾烈を極めているが、統制が取れている分、返って恐ろしさを感じさせる。そして、はやての常識ではとっくの昔に滅び去ったはずの軍隊が亡霊のごとく存在するというのは恐怖以外の何物でも無かった。ストロンガーはそんな彼女を勇気づける。

「怖いかな？」

「う、うん……」

「……大丈夫だ。俺を信じろ」

彼の言葉は不思議と安心感が湧き出る。仮面ライダー、という存在であるからという単純なものではない。彼の荒っぽい言動、そして間近に見た強さ、彼らの覚悟。その全てを背負う大きな背中。この時、はやてはストロンガーにどこことなく、幼い頃に亡くした父親の面影を見出していたのかもしれない。

—VF—19、エクスカリバー、を駆って空中戦に臨んだのはだ

ったが、ナチスの誇ったエース「ヴァルター・ノヴォトニー」の前に窮地に陥っていた。

「……捉えきれないっ……！」

必死に操縦桿を操作して敵機の撃ったミサイルを回避する。その手には冷や汗が吹き出ている。一步間違えば撃墜される。実戦の感覚、緊張感は久しぶりだが、ここまで心胆を寒かしめられるのは初めてだ。しかもヴァルター・ノヴォトニーといえば史上初のジェット戦闘機部隊指揮官であり、戦死、までに258機もの撃墜スコアをたたき出した（これはモビルスーツや可変戦闘機の時代が訪れた2190年代でも色褪せないスコアである）凄まじいエースパイロット。機体に性能差（AVFとVF-2SS バルキリー？とでは相当な差があり、しかもバルキリー？は大気圏用に最適化されてはいない設計である）があるのにも関わらず、技量の差か、敵機をガンポットの照準に捉えることが一度足りとも出来ず、逆に翻弄されてしまっている。

「なのはっ！！」

VF-22を駆るフェイトはなのはの援護に向かうが、彼女にも敵機が立ちふさがる。それはバルキリー？とは完全に別世代の可変戦闘機。別世界の2090年代最新最強の可変戦闘機「VA-1SS メタルサイレン」と呼ばれる物。外観は機首が鋭角さを感じさせるもので、SFメカ的な印象をうける。

パイロットはこれまたナチス空軍の誇るエースであった。

「おっと！可愛い、お嬢ちゃん、の相手は俺だ」

「……邪魔をしないで！！私は……！」

「戦いに邪魔も糞もあるか。戦争の腹ワタってのを甘く見ていると

見える。俺はエーリッヒ・ルドルフアー。元ドイツ空軍少佐だ。お嬢ちゃんに空中戦を教えてやる」

ーエーリッヒ・ルドルフアー。彼もかつてのドイツ空軍が誇ったエースパイロット。戦後も存命したエースパイロットの中でも長寿であった男。撃墜スコアは222機。東部戦線で17分間に13機を撃墜した記録を持つ。その彼は別世界で、老い、を捨て、最盛期の肉体を持って戦いの空に舞い戻ることを選択。残党に合流した。その彼がフェイトの前に立ち塞がったのだ。

彼は見事な操縦でフェイトのVF-22を翻弄する。防戦一方のフェイトは反撃さえまもらない。

（くっ！私だってバジュラとの戦いを生き残ったのにっ……！これがWW？の撃墜王の力！？）

ヘッドアップディスプレイの表示する高度に気をつけながらフェイトはシュトゥルムフォーゲル？を必死に操る。やっていることはもはや魔法少女でなく、戦闘機乗り、の所業だ。兄、や、母、が見たらなんというのだろう。ただ言えることは一つ。空をとぶことに魔法の翼か、鋼の翼かどうかは関係ない。ミッドチルダの空に広がるのはそんな光景だった。

ーそして戦場に新たな機体が介入する。

「あ、あれはデュランダル……綾香さん！？」

なのはは思わずそう叫んでいた。彼女の視界に写る「斜矢印」のマークがなされた垂直尾翼のバルキリーこそ「魔のクロエ」として恐れられた彼女らの師の一人の駆る最新鋭可変戦闘機「YF-29 デュランダル」。その試作機の一機。

「下がってろ、なのは!!」

瞬時にバトロイド形態に変形し、彼女専用にお詔えられた武装の、AK/VF-M10、雷切、（バルキリー用に作られた日本刀。アサルトナイフの技術を日本刀に応用して作られていた試作兵器を黒江が工廠の協力で打ち直した。名前は立花道雪の伝説に因むとの事）を構えてメタルサイレーンに突撃する。

「ほう。いいだろうこちらも本気でいかせてもらおう!」

メタルサイレーンも変形し、ガンドロイドモードと呼ばれるものになる。なのは達の常識で言えば、強攻型にあたる形態だ。

一勝負はまだまだこれからだ。

## 第78話「誰がために」(前書き)

久しぶりに本編です。タイトルの元ネタ分かる人、いるかな？

## 第78話「誰がために」

一ハワイでの戦いは佳境を迎えようとしていた。多数の兵器が投入され、激烈な戦闘などは連日連夜の事であった。高性能の兵器が必ず活躍するとは限らず、汎用性の高さが鍵となったケースもあった。

一ハワイ攻略部隊 臨時駐屯地

「今日はZプラスで行く。調整はすんでいるな」

「いいんですか？Vガンダムでなくって」

「こういう時には可変型のZ系の方が一撃離脱をしやすいからな」

アムロ・レイはVガンダムがロールアウトした後も一撃離脱戦法を行い易いZ系に好んで搭乗していた。そのバリエーションの内、最大を誇るのがZplus（通常はカタカナ表記でプラスと表記される）である。元来はZガンダムを基にグリプス戦役時に反連邦組織「カラバ」が大気圏内用に再設計を行って一定数量産したのが始まりとされ、第一次ネオ・ジオン戦争が終結した後にエウーゴが正規軍として連邦軍の実権を握ったのを境に、戦力の立て直しを急に要する連邦軍に正式採用されてさらに量産された。様々なバリエーションが作られ、中には「ハミングバード」なる過激な仕様が計画され、白色彗星帝国との、フェーベ航空決戦、には当時すでに試作されていた5機が投入されたという記録が残っている。

今回はそのZプラスの標準型のA1型で、武装に追加で本来はC1用のビームスマートガンを敢行している。機体の塗装は白を基調としたスプリンター迷彩である。（因みに連邦軍が独自にZの量産型として研究していたのがA/FMSZ-007IIと呼ばれるもの

で、これも一定数が量産された。そしてそれらを経て、コスト削減のために計画されたのがリ・ガズィであり、リゼルである」

彼はハワイ攻略でも戦果を上げ、攻勢に貢献している。そして彼はドラえもんらの援護を上層部から命じられ、早速発進したのである。Ｚの鼓動を継ぐ、機体が空を乱舞する。これもある、戦争、の一幕……。連邦の白い悪魔、と言われるエースは今日もハワイの空へ飛翔していく。

一ハワイ攻略でドラえもん達や仮面ライダーと共に轡を並べて戦う事になったのはだったが、彼らと比べて一歩間違えれば死ぬような、修羅場、に身をおいた経験が少ない（強いて言えば闇の書事件か）ために死への恐怖がどこかにある事を指摘されていた。

「なのはちゃん、君は死ぬことを恐れているね」

「うん。でも、どうしてドラえもん君達はそんなに落ち着いてるの？一歩間違えれば死ぬんだよ？」

なのははドラえもんからのこの一言にうなづき、同時に自分から見れば同じ（正確に言えば異なる。のび太達は同じ地球人という観点から見れば、なのはとは住んでいる時代が20年近い差があり、年代的にはなのはの時代には子持ちになっているであろう世代である）年代の子どものはずののび太達が戦場に身をおいているのにも関わらず、どうして落ち着いているのか疑問を投げかける。ドラえもんととのび太はこう答えた。



「僕たちは地球の運命がかかってるような戦いを何度も生き残っているからね。それに僕自身、特攻して死にかけた事もあった」

「僕も宇宙でレジスタンス活動をやって処刑されなかったり、危うく鍋で焼かれそうにな

った時もあったからね。今となっちゃ怯えてるなんて考えてられないよ」

2人が言っているのはかつての大冒険的一幕である。ドラえもんの場合は、雲の王国、を作ったときの冒険で雲もどしガスのタンクに特攻した時のことを、のび太は歴史を元に戻すための、パラレル西遊記、別の星の、宇宙小戦争、の事を差している。その時の戦いを思えばどうという事はない。さらに前の兵团との戦いではたった4人で兵团に立ち向かっていた。それに比べれば地球の軍隊やヒーローが味方についている今回は楽なものだ。

「君は誰がために戦えるかい？」

「、誰がため、……？」

「そう。誰がために……その意味を理解して初めて、正義、なんて物言いが許される。仮面ライダー達はその為に戦う。僕達もそうさ」

「、誰がため、か……」

なのははそのフレーズに昔、父親が自室で読んでいた「サイボーグ009」という漫画を連想した。その漫画も9人のサイボーグが改造された悲哀などに悩みながらも巨大な敵と戦う内容だった。その彼らの戦う理由について考えた事は無かったが、同じように戦いに身を置いてみて初めて分かるように思える。

「ええ。あたしもその意味についてずいぶん考えました」

「スバル」

スバルは仮面ライダー達に助けられ、共に戦った経験があるので当然、仮面ライダー達と共に戦ったときに同じような疑問に突き当たった。その点ではなのは、先輩、であると言えるが、彼女は持ち前の明るさでそれを乗り切った。そして自分が戦える理由を見いだしている。ちなみに現在は穴吹智子なのは師匠兼保護者のような立ち位置にいるのと同様なのは、姉、的な立ち位置にいる。

「誰がために戦える事はいい事です。守れるモノがあればどこまでも強くなれる。例えどんなにちっぽけでも……」

スバルは今ではあこがれの人を守り、この世界の未来をつかむという心を抱き、その気持ちを原動力に戦っている。なのは頭を撫でて、からかう素振りを見せると、突撃態勢に入った。

「まずは化け物退治としゃれこみましょう！」

「うん！」

意気軒昂と突撃する準備を進める2人。仮面ライダー達や御坂美琴、さらにドラえもんとのび太も同様に

突撃準備を整える。既に先行してルーデルが急降下爆撃を行っており、火の手が上がっている。

「よし！みんな、行くぞー！！」

仮面ライダーV3の号令で各メンバーは各々に突撃していく。兵団を倒すために。美琴の電撃、Xライダーのライドルスティック、RXとV3の拳、のび太とドラえもんの空気砲……なのはディバインバスター、スバルの突撃と兵団の十字砲火とが入り混じる。

（初めて死にそうになった時は怖かった……だけど、今はスバルが……みんながいる。もう何も怖くない。私だって誰かのために戦えるんだ……！）

そんな独白をしながらなのははこの戦いで初めてレイジングハートを紹介しない攻撃を行った。両手で練り上げた魔力で前方に魔力スフィアを形成、左拳でスフィアを保持し、右拳で加速をつけて撃ち出すというプロセスを取るこの攻撃はスバルがぁみ出した砲撃魔法そのものだった。

「スバル、行くよ！！」

「はいっ！！」

『ダブル！！ディバイイイインツ！！バスターアアツ！！』

これはスバルが用いていたモノをなのはが特訓で習得するという、その名の由来を考えると実に痛快な攻撃だった。ダブルというのは仮面ライダー達が必殺技を「ダブル」という形で合体技を繰り出すというのにヒントを得たという。ライダー達は自分たちの攻撃が彼女たちに影響を与えたことに思わず苦笑いしたとか。

## 第78話「誰がために」(後書き)

訂正させて頂きました。

## 番外編 1「進化」(前書き)

番外編です。鉄人兵団戦後の2200年代に起こる事件の一幕です。行間の年代との繋ぎの話も兼ねています。

## 番外編 1「進化」

—ハワイ攻略戦へ投入された真ゲッターロボ。そのスペックは明らかに人智を超えていた。

それは人類がこれまで持ったどのスーパーロボットをも遙かに超え、マジンカイザー同様に神か悪魔かと畏れられる存在であった。

「真ゲッター……あれは神？それとも悪魔？」

ハワイ攻略戦の折にその力を垣間見た加東圭子やその後の戦乱でゲッター線の力を見たフェイトは日誌にこう書き残している。何故ゲッターロボが神か悪魔と形容される力を持ったのか。そして新早乙女研究所で起こるであろう事件、別世界の因縁と戦うべく進化を開始するゲッターロボG……ゲッタードラゴン。それらは近いうちに顕現する未来であった……。

新暦70年前半頃に時空管理局はこのゲッター線の強大すぎる力に恐れをなし、ゲッター線開発技術を取り上げろという議論が巻き起こった。それは強硬派だけでなく、穏健派さえも同調した動きを見せるものだった。

「執務官。君はゲッター線に恐怖を感じんのかね」

「感じません。あれは全ての人類にとって必要なモノです」

「何故だ。強大すぎる力は世界を滅ぼすのだぞ」

「あれはもう単なるエネルギーなどではありません。何かの意志があれを動かしているのです」

「意志？」

「あれはもうエネルギーの範疇を超えています。人智を超えた何か……」

「馬鹿な……あの世界をして、人智を超えた、と……」

フェイトはこの時期にはゲッター線が23世紀の新早乙女研究所に何を起こしたのか把握していた。ゲッターロボGが引き起こしたゲッターエネルギーの暴走、地下で未知の存在に変わりつつあるドラゴンは何を意味するのか。それは誰にも分からない。

「言えることは一つ、ゲッターはある目的のために進化を始めた、。今はそれしかいえません」

フェイトは、向こう、から伝えられた限りの事実を報告する。それは23世紀の人類が掴んでいる限りのゲッター線の所業の一部。久しぶりに向こうに連絡を取った際にゲッターチームの一人「神隼人」から伝えられた事件の顛末はそうとしか表現できないからだ。そしてゲッターに手を出すことは死を意味すると警告し、報告を終えた。

—その時に神隼人は流竜馬が垣間見たという、超巨大なゲットマシンが惑星を押しつぶし、惑星が手のひらサイズに見えるゲッターロボに合体していく光景のことを告げていた。フェイトはこのことは上層部に報告しなかった。『惑星が手のひらサイズに見える』というのがあるにも信じ難く、大きさが非現実的だったからだ。（2201年地球で最大の戦艦「エルトリウム」さえも全長は70キロである）

「惑星が手のひらサイズに見えるほどのゲッター……!？」

「そうだ。俺たちだって未だに信じられん。ゲットマシンの時点で地球型惑星サイズで、合体したら星系サイズのゲッターなんてな……」

隼人はこの時、ゲッターロボの行き着く先を垣間見ていた。、ゲッターエンペラー、……将来的にゲッターロボが行き着く進化形態と思われるその存在。ゲッター線は何故そこまでの力を人に与えたのか、進化とは？それは彼も分からない。ゲッター線は研究の第一人者の早乙女博士すらも全容を解明するには至っていないからだ。

「それでドラゴンは……弁慶さんはどうなったんですか」

「……分らん。最後に確認した際には繭を作っていたが……あれではおそらく弁慶はもう生きてはいないだろう……」

沈痛な顔を見せる隼人。かつての巴武蔵に続いて車弁慶までも死んだという事実に落ち込んでいるのだろう。フェイトもその気持ちは痛いほどわかる。たとえ短い間とは言え、フェイトにとっても車弁慶は戦友だったからだ。

「……隼人さん……」

「……俺に出来ることはゲッター線研究を引き継ぐ事だ。そのほうが博士や武蔵、弁慶も喜ぶ」

「……」

隼人はここで人生の選択をしたことを告白した。ゲッターチームの生き残りの自分がなくてはならないことはなにか。それを悟っていたのだろう。

「竜馬の奴は今回のことで相当堪えた。俺以上に……しばらく実家に隠棲するそうだ」

「竜馬さんが……！？そんな……」

フェイトはあの流竜馬がそこまで精神的にショックを受けた事に逆に衝撃を受けた。竜馬はどんな敵にも臆せずに残酷までに闘志を燃



やす、スーパーロボット乗り、がよく似合う男だった。それがそう  
なってしまうまでに打ちのめされるとは。仲間を失った事は彼にと  
ってこの上なく辛いことなのだろう。

「アイツはああ見えて繊細なところもあるからな。しばらくそつと  
してやるのが一番だろう……」

一昨日、それを心配したなのはが竜馬に会いに行ったが、果たして  
会ってくれるのだろうか？

フェイトは心のなかで実家に隠居したという竜馬のことを心配して  
いた。この時彼女らは17歳。高校生活を満喫している乙女であっ  
た……。

この日の夜に書かれた日誌にはこう書かれていた。

一報告は大変だったけど、ゲッターに手を出すのだけはやめさせた。  
あれを敵に回したらミッドチルダそのものが消し去られる。それに  
ドラゴンに何が起こったのだろうか。隼人さんいわく繭を作って、  
ゲッター核分裂、で進化し始めたっていうけど……。そういえば明  
日はドラえもんやのび太に会いに行く日だったな。色々聞きたいこ  
ともあるけど……。今日はこのへんで終りにしよう。

フェイトは多忙な日々を送りながら執務官としての責務を果たして  
いた。そして23世紀になった向こうの状況が気がかりであった。  
嫌な予感がするのだ。何かとは言えないが……。

その予感のとおり、地球に新たな魔の手が忍び寄りつつあった。それが地球連邦軍最大の恥辱をもたらす相手であるとは、誰もが予想だにしなかった。

## 第79話「GET WILD 5」(前書き)

今回からハワイ攻略編も佳境に入ります。

## 第79話「GET WILD 5」

一相変わらず銃声が響いてくる。ここは戦場だという事を嫌でも思い知らされる。のび太はそう思っていた。この状況にかつてパウワンコ王国で王政の復権クーデターに関わったときの大爆撃の中をみんなで歩み、敵地に乗り込んだ時のことを思い出す。

「あの時のことを思い出すよドラえもん」

「……ペコとの時のあれかい？」

「うん」

あの大冒険の時は初めて生きるか死ぬかの境地を初めて味わった。

「空飛ぶ船」の爆撃＋「火を吐く車」……今考えてみれば実に原始的な兵器だが……の攻勢にひみつ道具を以てしても苦戦させられた。そしてあの剣の名人の前には秘剣電光丸をしても互角に持ち込むのが精一杯だった。まあ最後はマンパワーが勝つというのが人間の道具らしいといえbraらしいが。

「あの時も苦勞したけど、今回は最近の冒険より命がかかってるぜ」  
「ああ。退屈しなさそうだ」

のび太は夢幻三剣士の大冒険以来久しぶりの感覚が蘇ってくるのを感じていた。ここ最近は恐怖こそ味わったが、自ら命を賭ける事は比較的少なくなっていた。直接敵と交戦した事例が段々と少なくなってきたせいもある。5人での直接的な地上での命がけな大規模戦はアニマル惑星の時以来行っていないし、何回も冒険していると経験にバラつきが出てくるものだ。（例えば魔法世界での経験はのび太とドラえもんだけのものだし、宇宙小戦争で敵機動戦力と対等な意味で大規模戦闘したのはしずかとスネ夫のみなど）

のび太は手にもつコルト・パイソン（6インチモデル。のび太曰く、僕は自動拳銃より回転式を信頼する、とこだわりを見せている）を派手にぶっ放つ。威力・反動など、どう考えても小学生に扱える銃ではないが、のび太はひみつ道具で銃の重さなどを軽減している。反動はこれまたグレードアップ液で全身のグレードを上げることですぐ耐えられる。

「357マグナム弾はたんまり確保してるからありったけぶちかませ！！」

「あいよ！」

本人曰く空気砲から一気に実弾を使う拳銃に変えたわけは「そのほうが僕らしい」との事だが、どう考えても普通の小学生とは思えないほどに銃の扱い方が熟練している。瞬時に撃鉄を起こして腰だめで撃つ動作の速さは銃の素人であるのはもちろん、学園都市で、警備員、を見慣れている美琴をしても鮮やかと関心させられるもので、

西部開拓時代のガンマンを思わせる。弾を変える速度は道具を用いていないのに速いの一言。まるでシ〇イーハンターだ。

「にゃっ!？」

なのはは銃声に思わず耳をふさぐ。以前ドラマで聞いた銃声より遙かに重い。何せマグナムの名を冠する銃弾なのだ。当然といえば当然である。仮面ライダー達もこの達人芸な早打ちに感嘆の声を上げる。

「凄いな……俺も以前やったことあるがここまでは早くないぞ」

「あの子、オリンピックに出れますよ」

「拳銃でこれだとすると……狙撃銃を持たせたら恐ろしいですよ。……敵じゃなくなつて良かった」

「お前のロボライダー並の精度だもんな」

その通り。のび太は銃器一般に精通しており、狙撃銃を持たせたら本人曰く「たぶんシモ・ヘイへと同じ位の事は出来る」と豪語している。サブマシンガンやアサルトライフルだろうが、大砲だろうが対応可能なその腕は正に化け物な逸材だ。もし、出ればオリンピックで金は間違いなしだろう。

「V3さん、今です！」

「おおっ!!」

仮面ライダーV3はのび太が敵にマグナム弾を叩き込んだ隙を狙つて空高く舞い上がり、お得意の必殺技の態勢に入る。そして叫ぶ。

『V3フル回転……キイイ——ック!!』

飛び蹴りのバリエーション豊かさが仮面ライダーV3の真価である。そのバリエーションは錐揉みや反転、3段など多岐に渡る。今回は比較的一発あたりの威力を高めたタイプのキックだ。普通のキックとどのへんが違うかは本人しか分からないが……。

V3の右足が敵兵の動力炉をぶち抜き、大爆発を起こす。爆発を背に悠然と立つのは風格あふれるものだ。そしてV3に続けとばかりにXライダーも動きを見せる。

「ライドルホイップ!!」

Xライダーはベルトから万能武器「ライドル」を引き抜き、第一形態のホイップを存分に奮う。正に獅子奮迅の強さである。

「死ねえ!!」

過激な台詞とともにライドルホイップを突き刺し、動力炉を貫く。Xライダーの真骨頂な攻撃である。傍からみると残酷だが、敵は情け容赦なく地球人類を抹殺・あるいは奴隷にしようとする侵略者だ。こちらこそそれ相応の対応をする。それだけだ。

「リボルケイン!!」

RXも本来は斬撃にはあまり使わないリボルケインを生成し、ベルトから引きぬく。貫通力に優れる。切断力はバイオブレードには劣るがそれでも威力は高い部類に入る。彼らも本気なのだろう。

「……さあて、あたしも本気出させてもらおうわよっ!!」

さらに美琴もコインを取り出し、必殺の、超電磁砲、を放つ。なのははこの未知の攻撃に目が点となる。電気を帯びた、雷の如き一筋の閃光が敵を貫く。同時に美琴の周囲には電流が迸っている。

「ふ、ふえっ!?!魔法も無しにビームみたいなのを……!?!」

「あれが美琴さんの、力、だよ。あの人は、学園都市、の能力者。俗にいう超能力の類を持ってる」

「それじゃエスパー……?」

「いや、あれとはちよつと違うけどね。美琴さんの場合は、電気を操る、能力を持ってる。そのパワーはおよそ10億ボルトって聞いている。」

「じ、十億う!?!」

「そう。それを応用したのがあれ。超電磁砲、弾体となる物体に電磁加速を加えて撃ち出す兵器。なのはちゃんの時代だったら米海軍が駆逐艦に積んでるはずの代物だけど……美琴さんはそれを生身で出来る。あの人が持つてるのはそれほどの力なのさ。」

ドラえもんの解説になのはただ咄然とするばかりだ。それまでに強大無比な力を持っているという御坂美琴は見たところ普通の女子中学生といった印象だ。それとは裏腹なまでに強大な力を有するのは。自分も親友たちや同僚に、砲撃魔法の鬼、と言われたことがあるが、それが霞んでしまうほどのインパクトだ。

「VF-25のルーデル大佐から連絡が入った。敵の守りがここから1キロ先から厚くなってるそうだ。状況からいって、例のブツはその当たりがあると推測している。既に軍の前線司令部には打電済みだろうだ」

「通信機も無しにどうやって？」

「俺達の電子頭脳には通信機能が備わっている。テレパシーみたいなものと考えてくれればいいが、それを使って話したのさ」

『上には打電した。私は弾薬を使い果たしたから一端帰還する』

『VFで急降下爆撃するからだ。それでどうするんだ？』

『パックをつけてくる。トルネード、の試作のモノの使用許可が降りたからちよいどいい』

ハンナ・ルーデルは意気軒昂とバルキリーの新型パックで急降下爆撃を行う腹積もりである。V3はあまりの急降下爆撃狂ぶりに半分呆れかえっている。



『ガーデルマンも大変だな』

ルーデルの相棒のガーデルマンはため息をつきながらV3に一言だけ言った。

『もう慣れましたよ』

カールスラントの誇る撃墜王達、歴代の仮面ライダーなどの強力な味方がついてくれるのはいいのだが、はたして自分は彼らに付いて来れるのかとなのは内心ため息をついていた。こうなるとスバルの底抜けの明るさが羨ましい。しかしこうなった以上は覚悟を決めなくては。

彼女は、別の自分、が見たら卒倒間違い無しであろう戦場に身を置いていた。それがどう自分の未来に作用するのだろうか。

「スバルの世界の私が見たら気絶しちゃうよね……だけどこれも私が決めた道なんだ……！」

こうして、なのはは本来なら身を置くことはない大規模戦争の戦場に身を置いていく。

時に2199年のことである。



## ハワイ戦の状況（前書き）

物語の区切りとなるハワイ編の状況説明です

## ハワイ戦の状況

### ハワイ攻略作戦の目的

地球連邦軍必勝の作戦。鉄人兵団の太平洋最大の拠点となったハワイ諸島を奪還するのが目的。しかし準備不足のまま政府に押し切られて実行されたので計画に少なからず綻びが出てしまい、長期化の様相を呈している。

### 参加兵力

地球連邦宇宙軍及び海軍・空軍などの太平洋方面主力部隊と、1944年、からの助っ人部隊が多数。日本のスーパーロボットも一部参加。一大兵力であるが、いささか準備不足が祟り、人員不足が謙虚になり、一部部隊は訓練生をパイロットとして動員している。その他一部の仮面ライダー達も参加。

戦死者は2199年9月までに激戦区だけで既に6000人を超え、負傷者は万の万台に載っている。

### 状況

のび太たちがいるのは激戦区からは少し外れた場所。そこで敵の切り札の水素爆弾の搜索を行っている。戦況自体は好転しつつあり、外堀を埋めるように基地に迫っているが、積極攻勢は行われていない。軍が基地攻撃用に用意した兵器は今のところ咆哮する機会を失

ったまま沈黙している。

なお派遣された1944年における各国の機甲戦力は精鋭であり、  
当時最新の戦車を保有。地味に貢献している。

## 第80話「GET WILD 6」

「VF-25は初代バルキリーからの設計思想を延々と受け継ぐ戦闘機だ。その最新型と言っている。本来はフロンティア船団独自の仕様であったが、暗黒星団帝国の脅威に晒されるであろう地球本土は本土防衛強化を焦った。そこでレビル將軍はこの仕様を急ぎ次期主力戦闘機に選定し、軍としてその方針を定め、それまでの主力であるVF-19シリーズとのハイ・ローミックス運用を想定して量産を開始していた。本来はVF-19Pから転換した3個航空隊の攻略作戦への参加が予定されていたが、作戦が予定より早まってしまったために見送られ、中隊長用として先行配備されていた2機だけが宙に浮いてしまっていた。その2機をハンナ・ルーデルとガールマンは手に入れたのである。」

土佐に帰還したルーデルは再整備とトルネードパックの装着が済むまでの時間を休憩時間として格納庫で待機していた。

「トルネードパックか……ずいぶんゴツイな」

「スーパースティックよりパワーアップ出来てアーマードと同レベルの火力を得られる新型のパックです。さらなる新型機の技術実証も兼ねているそうですよ」

それは自分達の時代にも通じるものだった。既存機のパワーアップ機として配備されたモノは実は新型機を作るための礎を築くためのモノだったというのは良くある。

扶桑のストライカーユニット「紫電一型」はさらなる新型の「紫電二型」への礎だというのは山西飛行機技術陣の言だし、長島飛行機のジェットストライカーユニット「菊花」と「火竜」も同様である。近頃、上層部が狂ったようにジェットストライカーユニットの開発を推進するのは、実戦で嫌というほどジェット機の優位性を

アピールさせられたからだという。これは第一次・第二次大戦が起きなかった世界での帳尻合わせみたいなモノだろうか。

（魔のクロエが扶桑でのジェット導入推進の旗振り役になっていると聞くが、たしかにコイツのスピードに慣れてしまうと、戻れない、よな）

ルーデルは黒江綾香同様にバルキリーの持つスピードに、惚れていた。そう。2199年の、戦史、で日本軍が、本土決戦、最後の切り札として開発を急ぎ、ドイツが最後の希望として技術的欠陥を差し引いて急ぎ量産した事からも頷けるが、それほどまでにジェットは革新的かつ敵に対抗出来る力だったのだ。実際、黒江綾香もフロンティア船団に行くまでにVF-17に乗って以来、バルキリー乗りとしての訓練を受けているし、自分もそれに続いた。

一音速のスピードに慣れてしまうとレシプロが鈍く思えるというのはこの事か。

ルーデルは妙に納得してしまう自分を自嘲しながら、用を済ますものは全て済ませ、メサイアに再度乗り込んだ。

「さて……トルネードがどの程度のものか……テストしてやる」

トルネードパックは旧来のスーパーパックと異なり大気圏内外両用のパックである。推力も火力もスーパーパック装着時以上の数値をたたき出す。旧来のスーパーパックが宇宙用だったのに比べるとスゴイ進歩だ。まだ試作が上がってきたに過ぎないので自分が装着する。

一次世代機の技術実証ならこの私が実証してやる。最高の形でな！

メサイアのステージII熱核タービンエンジンが吠え、ルーデルを再び戦いの場に飛び立たせる。その大推力は別系統の超技術で作られたコスモタイガーにも引けは取らないほどに凄まじいパワーで空を切り裂く。新たな、聖剣、の礎となるように……。

「早速来たな」

レーダーは敵の兵士の反応が複数確認された。本来は畑違いの事だが、ルーデルは不敵に笑い、機体をコントロールする。

「こんなものか？」

コントロールスティックを小刻みに動かし、敵の攻撃を回避する。人形をとれる戦闘機というのは自分たちウィッチには都合が良い兵器だ。自分たちがストライカーユニットで取る機動を違和感無く再現出来、スピードも速い。この戦闘機で培う技能はストライカーユニットでの空戦技術にも応用できるだろう。冷静にマイクロミサイルを放ち、スコアを重ねる。初めてにしては上出来な戦果だろう。

「あいつらのもとに急ぐか」

矢のように機体をつかっ飛ばし、先程の地点へ急行する。所要時間は2分と掛かるまい。ガーデルマンと共に彼女は、戦乙女、として空に君臨していた。トルネードパックはそれほどまでの力を彼女らに与えていた。



一野戦病院では穴拭智子が寝込んでいた。魔力の減衰とは無関係になったとは言え、過剰に魔力を消費すれば疲労し、倒れてしまう事には変りない。看病には加東圭子が付いているが、心配そうに智子に付き添っている。

「無茶し過ぎよ智子。昔からそういうところは変わってないんだから……」

加東圭子はかつて飛行第一戦隊所属時に同僚であった穴拭智子の事を妹分のように見ていた節があるのを思い出した。今はそれぞれ部隊を率いるまでに成長した自分たちだが、昔は戦果や飛行技能を争い、喧嘩になったこともあった。それを当時の上官の江藤敏子中佐に諫められたものだ。自分は部隊の年長者だったので、そういう争いはあまり気にしていなかったが、部隊の中で若輩だった穴吹智子や黒江綾香などはよく争っていたのは覚えている。まあ時には自分も加わったが……。2人の喧嘩を中佐に変わって仲裁することもあったなと述懐する。

（私も年くっただって事かしら……）

この様子を智子が見たら「オバハンになったわねえ」と言われてしまっただろう。いつの間にか老婆心というのが身についてしまった自分に苦笑すると彼女は再び戦場に赴く。戦死した戦友達の志や魂に報いるために。（こういう点は敢闘精神旺盛であった時代の日本人らしい）同期の中にも今回の作戦では戦死者が出ている。仇討というわけではないが、戦うことが先に靖国に逝ってしまった仲間たち

へのせめての供養だ。

「……智子のことを頼むわ」

「わかりました。気をつけてください。死んだら穴拭中尉が泣きますよ」

「分かってる」

看護師として穴拭智子に付き添う源しずかに後のことを託し、彼女は戦う。それが今できる戦友へのせめての供養だ。

敬礼し、戦場へ舞い戻っていく加東圭子をしずかは答礼で見送った。それが、礼儀、というものだ。しずかはいつまでも敬礼をやめなかった……。加東圭子は悲壮な決意で出撃を敢行した。

## 登場人物の動向1 (最新版) (前書き)

主な登場人物の動向の最新版です。その一はドラえもんとりりカル  
なのは編です。

## 登場人物の動向1 (最新版)

「ドラえもん」より

ドラえもん

現時点ではハワイ攻略に参加、前線に赴いている。のび太とのコンビネーションは健在で、息のあった連携でのび太に武器を提供する。

野比のび太

同上。射撃の精度は仮面ライダーV3から「ロボライダー並」と評されるほどの冴えを見せ、戦闘中。

現在は射撃の名手としての側面が強いが、いつかあやとりプロとしての側面も見せるかも(?)

源しずか

同上。戦闘には参加せず、看護師として従軍している。

「魔法少女リリカルなのはシリーズ」より

高町なのは(11歳と10代後半の双方の姿で登場するため双方の

動向を並記。）

## 11歳当時

自称『ごく普通の小学生』。連邦宇宙軍の一士官としてハワイ攻略に従軍。地上では魔道士としての本領が発揮できるため、純粹に空戦魔道士として戦いに参加している。この戦争での従軍の間に連邦宇宙軍で空戦技術の参考替わりに可変戦闘機操縦バルキリーのスキルを身につけた（この時点でもはや普通とは言えない）。訓練の際にはVF-11C「サンダーボルト」を使用していた。なお別世界（本来の流れの歴史）の自分と異なり、明確に師と呼べる人物に出会ったために幼少期から抱えづつけていた、みんなのいい子でいる、と自分をとり繕ろうとする強迫観念を吹っ切ったのか、本来の天真柔操さを完全に取り戻した。

## 10代後半時

時空管理局の教導官に加え地球連邦宇宙軍少尉の肩書きを保有し続けている。（時空管理局では大尉相当の一等空尉に昇進）スバル・ナカジマとの時空を超えた出会いの影響か、高校までは進学した模様。軍人であったためか、次元世界に管理局の長年の統治で生じた矛盾に疑問を持っており、密かに戦争での最終的な愛機「VF-19S エクスカリバー」を持ち込んで整備を続け、いざという時に備えていた。この時期には歴代仮面ライダーとも面識ができていた。

フェイト・T・ハラオウン

## 11歳当時

本来の流れと違い、早々に時空管理局執務官となった。（親友のなのはの調査をすると言って聞かないフェイトのために義母が根回したと思われる）超長距離移民船団の一つ「マクロス・フロンティア」船団に赴き、そこで生活中。なのはとは異なり宇宙空間で戦う為に可変戦闘機の訓練を身につけた。到着時点では「VF-17D ナイトメア」を乗機としていた。なお、後にフロンティア船団の歌姫となるランカ・リーとは此頃に出会っている。

## 10代後半時

彼女の場合は高校生となった以外はあまり運命に変化は生じなかった。フロンティア船団での経験や思い出が彼女に大いに影響しており、歌姫の力を信じている。なお彼女もなのは同様に愛機「VF-22 シュトゥルムフォーゲル？」を秘匿している。歴代仮面ライダーの宿命を改めて知ったときには愕然とした。

## ティアナ・ランスター

今作で最も運命が急転直下したかもしれない苦勞人。任務中に2199年へ飛ばされ、歴代仮面ライダーと出会い、その戦いを定期的に間支援していた。その後は自身の願いを叶えようとした友人の誘いに乗る形で別世界の1944年の地球に赴き、書類を偽装してその世界の日本にあたる「扶桑皇国」の陸軍航空隊へ入隊。アフリカ戦線へ回される。その後はなんだかんだで活躍している模様。階級は扶桑での表記は一飛曹（外国での軍曹相当。）。その結果、ツインテールに巫女装束と日本刀という要素満載な16歳に。

スバル・ナカジマ

11歳当時の上官と出会い、そのお目付け役……というよりは姉的役割を務めている。彼女となのはの出会いは一種のタイムパラドックスであり、未来に影響を与えた張本人。自分の技をなのはに伝授した模様。

**第81話「男の名は仮面ライダー&娘々スペシャルサービスメドレー」(前書き**

本編ですが、一部別編の一部を描きます。



## 第81話「男の名は仮面ライダー&娘々スペシャルサービスメドレー」

—日本本土。兵団の起死回生を賭けたD作戦はその成果を上げていた。4大工業地帯に既に30%の損害と打撃を与え、連邦軍の今後しばらくの大規模活動を封じる（この時期の地球本星は立て直し途上であり、工業地帯の完全復興は日本地区しか済んでいなかった。日本に打撃を与えれば地球連邦軍の行動を制限する事に繋がる）事には成功した。

「大尉、既に各工業地帯は打撃を受け、我軍の今後の行動が制限されてしまう水準の損害をこうむっております!!」

「主力を全てハワイに向かわしたツケが回って来たか……」

黒田那佳は連邦軍の読みが甘かったことを痛感していた。主力がいれば日本は無傷で守れただろうが、いまさら悔しがっても後の祭りだ。なんとしても市街地への侵入は阻止せねば。

『編隊が一つ突破して市街地に向かっている!!』

迎撃の網をくぐり抜けて市街地に侵入しようと兵団の一個小隊が追加装甲のスラスタを全力噴射して低空飛行に写る。バルキリーやコスモタイガーは足止めされ、ウィッチは追従すらできない。モビルスーツが向かうが、援護弾幕に阻まれる。

「そうはさせるか!!」

黒田那佳は、鍾馗の魔導エンジンをフルに吹かして敵を追う。この位置からならたとえレシプロエンジンであろうが急降下のスピードで追いつけるはずだ。瞬く間に急降下速度は時速700キロを超

える（これは扶桑陸軍の設定急降下制限速度を上回るものだが、元々Bf109を目標に設計されているので余裕で設計強度の許容範囲である）。

「頼む、追いついてくれええっ!!」

必死に追う。世界は違えど、ここは、扶桑だ。それを戦火で焼くことは許せるものではない。祈りながら刀を構える。だが、敵の速度は早い。音速超えの時に発生するソニックブームが発生し、吹き飛ばされる。

「……うわあああっ!!」

急降下で追いつくと思われた瞬間、敵がジェット噴射の一部を偏向させてその衝撃波で彼女を吹き飛ばしたのだ。敵も咄嗟の行動であったらしく、速度の多少の低下を承知の上で行った。

安全を確保した兵団は悠然と市街地に侵入する……はずであった。

「大回転……スカアアイキイ——ックッ!!」

——すんでのところで兵団を一筋の、風、が貫いた。それは……。

「あ、あれは、スカイライダー、!？」

誰かがその男の名を言った。『スカイライダー』。11人の歴代仮面ライダーの中で唯一完全な飛行能力を持つ8人目の男。（不完全ながら他に飛行能力を持つのはZX。足のエンジンである程度の空中機動が可能）。彼もその使命を全うすべく馳せ参じたのである。これで再び歴史の表舞台に現れた、仮面ライダー、は現役のRXを除くと7人に達した（表立って行動を起こしたという意味で）

「ほう。空を飛べる仮面ライダーが居たとは……」

「そうだ。俺は空を飛べる仮面ライダー……、スカイライダー、だ  
！！」

スカイライダーは大昔の武者のごとく声高く名乗りを上げ、その飛行能力、セイリングジャンプ、を持って戦闘に参加した。その飛行速度は800キロに達し、存分に力を奮う。

「これ以上は一步足りとも近づけん！！」

兵団の前に立塞がりながら見得を切るスカイライダー。その姿ゆえかどことなく迫力に溢れている。

彼も由緒正しき仮面ライダーの名を継ぐ者と言う事だろう。そしてその華麗な空中機動で兵団を叩きのめす。

「まずはこれだ。99の技の一つ！！スカアイ大旋回キイイイ——  
ツク——！！」

——99の技とは歴代7人ライダーとの特訓でパワーアップしたスカイライダーが身につけた技の数であり、現在の彼の象徴だ。そもそも彼は元から現在の姿でなく、誕生時は暗色系のカラーリングの姿であった。その能力は元から戦闘用改造人間として作られたストロング以前ライダー達に比べると特筆すべき点はない。手術が助命目的であったためだが、仮面ライダー系列の開発資産で作られたので高水準のスペックは確保されていた。やがて当時の組織の強力怪人「グランバザーミー」に一蹴された際に7人ライダーの特訓で生まれ変わり、さらなる強さを手に入れた。現在の姿はその証である。

「すげえ……あの人も仮面ライダーなのか……」

ヴィータは獅子奮迅の強さで奮戦するスカイライダーの勇姿にすっかり釘付けとなっていた。以前、スバルが保護されたときに状況説明の際に仮面ライダー一号こと本郷猛に会って話したことがあったが、

彼は、私以外にも仮面ライダーはいる、と言っていたが、正にその通りだった。彼の登場で士気が落ち込んでいた部隊も動きにキレが戻り始めている。―そしてどこからか、歌 が響いてくる。

~~~~~♪

それは連邦軍の可変戦闘機製造工場にVF-25やYF-29用に貯蔵されていた超空間共振水晶体「フォールド・クォーツ」の起こした奇跡であった。それは遠く離れた銀河の戦場で歌う2人の歌姫の歌。全くの偶然であった。銀河と地球という遠距離で同時に戦闘が行われ、なおかつフォールドクォーツの共振がもたらした奇跡であった……。

「これは……歌だ!」

「間違いない。ランカ・リーとシェリル・ノームの……!」

「そうだ!! あの子達の歌だ……生きてて良かった!!」

兵士たちは口々にその歌声の主の名を言い合い、ヴィータと黒田那佳は顔を見合わせてうなづく。それは正に奇跡と言いがたい出来事だった。

一同時刻。銀河　バジユラ母星付近

「この戦場にいる、すべての兵士に告げる。

バジユラは、我々の真の敵ではない。ギャラクシーが、バジユラの女王を乗っ取ったグレイス・オコナーたちこそが、我らの真の敵だ！己が翼に誇りを持つ者よ、我とともに進め！！」

S・M・S、マクロス・クォーターの艦長「ジェフリー・ワイルダー」の演説が、大海原に響く。その演説に奮い立った連邦軍の可変戦闘機群はS・M・Sと共に突撃を敢行する。その中に黒江綾香とフェイトの姿があった。黒江は雷の模様が描かれたVF-19A「エクスカリバー」に、フェイトはVF-22「シュトゥルムフォーゲル？」に乗り込んでいる。

「……良い歌だ。そう思わないか、フェイト」

「はい。ランカさんとシェリルさんのデュエット……なんか心に響きます」

2人はランカ・リーとシェリル・ノームの歌に乗り、その翼を広げて、真の敵へ突撃する。

『全機、いくぞっ!! 突撃ラブハート!!』

S・M・Sのスカル小隊がリーダー「オズマ・リー」少佐の号令で速度を早める。2人もそれに遅れんとフルスロットルで続いた。

『遅れるなよフェイト!!』

『はいっ!!』

戦場にランカ・リーとシェリル・ノームの歌が響く。かつてのリン・ミンメイを思わせる光景だと彼女を知る者は誰もがそう思っていた。彼女達こそがこの戦いを終わらせる、鍵。黒江綾香とフェイトは敵の可変戦闘機を屠りながらそう思った……。

行間その12「野比家ドタバタ紀 1」(前書き)

骨休みのコメディです。

行間その12「野比家ドタバタ紀 1」

―西暦1999年 夏

ドラえもん達は兵団が倒れたのを見届けると元の生活へ戻っていた。この日は31度の真夏日で、ドラえもんは部屋でアイスを食べていた。

「暑いなあ……寒いのもダメだけど、暑いのもダメなんだよなあ。僕」

部屋の外からはのび太がランランと電話で雑談に興じている声が聞こえている。相手はしずかだろうか。いや、しずかは昨日から家族で旅行に出かけている。それじゃ誰だろう。

『いやあまさか君がこっちに来るなんて……』

『連邦の人に無理言って送ってもらったの。久しぶりに会うからって』

『そう。それでこの子の護衛を私がしてるの』

『その声は少佐ですね？ご苦勞様です』

のび太と雑談に興じている電話の主はフェイト・T・ハラオウンと加東圭子であった。フェイトは時空管理局執務官としての任務を兼ねてのび太達の時代へやって来たのだが、途中で地球連邦の要請で護衛をつけることになった。フェイトは黒江綾香に護衛を依頼したのだが、黒江が『悪い、その日は新型の量産型ジェットストライカーの最終テストで抜けられないんだわ』との事で都合がつかず、黒江がその代わりにと推薦したのが元同僚で、気心も知れてる加東圭子であった。黒江が前もって連絡をしておいてくれたおかげで話

もスムーズに進み、護衛を引き受けてくれたのである。（これは加東圭子自身も未来世界での任で特に配属先は決まっておらず、手空きであったので連邦軍や連合軍も護衛として派遣することに特に異論は無かったせいもある）

『それで2人ともあとどれくらいで家に？』

『前の時に住所聞いておいたから、あと30分もあればそっちに行けると思うよ』

『わかった。それじゃまた』

のび太は電話を切ると慌てて母親の玉子のもとへ走る。客が来るので大慌てだ。

「ママー！」

「なんですのびちゃん、騒々しいわね」

「僕にお客さんが来るからお菓子とか用意したいんだけど、どこにあるっけ」

「台所の戸棚にどら焼きと草餅があるわよ」

「ありがとう」

のび太は慌てて戸棚のお菓子を取りに行き、バタバタと2人を迎える用意を進める。

ドラえもんは「なにやってんの」といったが、のび太が事情を説明するとドラえもんも加わって用意を進めた。玉子はたまたまではあるが、生け花の習い事で家から居なくなった。（ドラえもん曰く何流かは忘れたけど一流の流派との事）

「実は僕もドラミを呼んどいたんだけど、いいかな？」

「いいんじゃない？この際人数が多いほうが」

なんとか30分かけて準備を整え、後は2人が来るのを待つだけだ。

タイミングよく声が来聞こえてくる。フェイトの声だ

「やあ、いらっしやい。大きくなったねフェイトちゃん」

「うん。もう高校生だからね。当たり前だよ」

「ハハっ、それもそうだね。少佐もお久しぶりです」

「そっちも変わらないようね」

「どうしたんですか、グンニヤリしちゃって」

「実はね……」

扶桑陸軍の正式正装である巫女装束と小具足姿の加東圭子は来るまでにグンニヤリする出来事があったといい、その出来事の顛末を説明する。電車を降りて2人で町内を歩いていたのだが、フェイトはともかくも、圭子が持っている得物がまずかった。それは彼女が護身用に持ち込んでいたブルーノZB26軽機関銃であった。この機関銃は故障も少ないなどの利点で、旧・オーストリアハンガリー帝国の工場地帯であったチェコスロバキアが生み出した傑作銃と評価されている。歴史上でも大日本帝国陸軍が「我軍新鋭機銃」と言って支那戦線で鹵獲銃をそのまま利用したり、ナチス・ドイツも排莢不良などの故障が多いMG34の代用品として使用した記録が残っている。それを銃器にうるさいこの時代の日本に持ち込んだのだからただで済むはずはなく、野比家に向かう途中で職務質問されてしまったのだ。

「……ん！？ ちょっと君、何だねその銃は？」

「いや、その……あの……」

「ちょっと交番まで来なさい」

巡回中の警官に交番に連れて行かれ、フェイト共々、ホビー店で買ったよく出来たエアガン、だと必死に誤魔化し、放免になった。だが、来ていきなり職質されてしまったので加東圭子は落ち込んでし

まったのである。

「そりゃそうですよ、どこの世界にZB26を持って街をうろついでる巫女さんがいます？いないでしょ」

「うう……そうだけどさ」

それもそうだ。どこの世界に7.92mm×57弾が装填された軍用機関銃を持って街をうろつく巫女がいるだろうか。ここに正確に言えば巫女ではないが一人いる……。

「まあ、とにかく家へ入ってください。暑いでしょう」

「それじゃお邪魔します」

のび太は2人を家に招き入れ、とりあえず2階に案内する。ドラえもんとも挨拶を済ませ、雑談に興じる。

「へえ〜フェイトちゃんは剣道部に？黒江大尉に憧れてたもんね〜」
「うん。この間の大会でベスト4まではいったんだけどね、最後に一本取られちゃって」

フェイトは中学進学後に剣の達人である穴吹智子や黒江綾香の影響もあって、剣道部に入部。高校進学後は高校一年の夏に学校代表の一人として大会に初出場。実戦で鍛えただけあって、学校をベスト4まで導いた。準決勝戦でまさかの一本負けを喫したものの、相当もつれ込んだので名勝負として記録されたという。のび太はフェイトが負けるとはと意外そうな顔をする。

「今年こそ優勝するつもりだよ」

それは彼女がたどる本来の歴史ならば有り得ない光景。ある意味で

はありえたもう一つの可能性。ここにその流れを辿った場合の彼女がいたら羨ましがるのは間違いないだろう。

「少佐のほうはどうなんです？」

「私は穴吹や黒江ちゃんと違って、特別な任務には付いていないけど、時々扶桑出身のウィッチの教官として厚木や横須賀でヒョッコ共を鍛えてるわ。本当は原隊へ戻りたいけどそうもいなくて」

「ストームウィッチーズですね？スバルさんから噂は聞いてます」

「それじゃ話は速い。実はというと、マルセイユの事が心配なの。あの子にちゃんと部隊運用が出来るのか……機材の補給とか色々」

圭子は元の世界に残してきたストームウィッチーズの面々、特に我が強いハンナ・マルセイユの事が心配であつた。成果はあげるもの、上官には嫌われやすい性格だからだ。（部下には慕われるが）

これは元上官のバルクホルンが「信頼できない部下」との評価を下している事からもわかる。特にモントゴメリーや阿南惟幾などの将官達には軍規違反の常習者と見られている。（誠実な人柄なので阿南惟幾はマルセイユよりだが）それが唯一の心配なのだ。

「まあ向こうには、マレーの虎、の山下奉文大将閣下や牛島満閣下がいるんでしょう？大丈夫ですよ」

「だいいけど」

圭子は草餅をほうばりながらそのことが気かりなことだとドラえもんにいった。その杞憂は図らずしも的中していた。

「おーい、のび太」

「あ、ジャイアン達だ」

のび太は玄関に降りてジャイアン達を応対する。ドタバタはこれか
らが本番だ。

特別編のようなもの……その2（前書き）

行間ですが、以前の特別編の続編です。

特別編のようなもの……その2

—地球連邦軍の軍備は様々な戦乱で飛躍的に強化を遂げ、遂には戦闘機でマッハ20以上の速度を、モビルスーツで、質量を持つ残像、を繰り出すまでに至った。その驚異的技術を恐れるものがあった。一時的に介入した「コズミック・イラ」暦で連邦軍と運悪く相対してしまった勢力である。彼らは自らの争いに突然介入した連邦軍を撃滅すべく、幾度と無く兵力を送り込んできたが、兵器の性能差と搭乗員の練度の差に阻まれて敗北していった。これはその時に連邦軍側が記録したレポートである。

—現地の暦でコズミック・イラ71 9月16日

地球連邦軍ルナツー駐留艦隊はこの1週間前より本格的にコズミック・イラでの生き残りをかけての行動を開始、現地の、協力者、達の手を借りての情報収集に当たった。

『彼ら、協力者、達は自分たちより凡そ世代が3世代ほど違うほどの技術格差に驚愕したが、特に彼らは我が方のモビルスーツが、核融合炉で稼働する、事に腰を抜かしていた。単純なジェネレーター出力では彼らの持ち込んだガンダムタイプ、フリーダム、の方が上だが、旧世代の原子炉とミノフスキー式核反応炉とでは発電効率で隔世の差があり、より効率的なエネルギーの活用ができるということ納得していた』

コズミック・イラの一般的なモビルスーツは超電導バッテリーのよくなもので稼働している。そのためビーム兵器の使用に一定の制約が生じる。しかしルナツー所蔵モビルスーツは核融合炉稼働なのでビームを乱射しても作戦行動時間に影響は受けないし、予備のEパ

ックも敢行することで射撃回数を増やせる。さらに機体によっては強力な兵器を複数敢行可能なのもコズミック・イラ暦の機体に対するアドバンテージであった。

『この日はプラントの部隊と初交戦であったが、A VFのVF-19AとVF-22一個小隊でお釣りがくるほどであった』

この日の連邦軍はモビルスーツを出さなかった。単に出し惜しみしたのではなく、出せなかったのである。転移によって生じた電磁パルスが全部隊の機動兵器のアビオニクスに不具合を生じさせ、その解消に追われていたのだ。一週間かけての復旧作業で真っ先に復旧したのがバルキリーであり、それしか出撃可能に持っていけなかっただけである。しかし熱核バーストタービンエンジンの繰り出すスピードとその火力は戦力差を補って余りあった。

連邦軍のルナツー所属であることを示す迷彩カラーリングのVF-19とVF-22の一個小隊は一撃離脱戦法を駆使し、プラントのモビルスーツと対等に渡り合った。プラント側のパイロット達は、ただのモビルアーマー、に見える（ジオンのモビルアーマーとは概念が根本から異なり、コスモタイガーやブラックタイガーのような宇宙戦闘機の延長線上に位置する汎用戦闘機に過ぎない）機体に翻弄されるという事実を受け入れられずに絶叫する。

『なんで……、何で俺達がナチュラルのモビルアーマーなんぞに圧倒されるんだよおおお！！！』

プラントの主力モビルスーツ「ジン」のあるパイロットはジンの主

力武装の76mm重突撃機銃を乱射しているのに目の前を乱舞する戦闘機に掠りもしない事に苛立ち、叫びを上げる。

自分たちは能力が通常の間人より数段優れた、コーディネーター、であり、その叡智が創り上げた兵器であるジンを駆っているという自尊心が彼らの士気を高揚させている。その自尊心は目の前の戦闘機によって粉々に碎かれていく。戦闘機なら上からの攻撃なら躲すことはできないはずだとなんとか真上に陣取る。絶好の位置からの攻撃だ。トリガーを引こうと指を伸ばすが……。

『バカチンが。このVF-19、エクスカリバー、をただの戦闘機だと思ふなよ』

『!?!』

彼と相対していた前進翼のVF-19は瞬時にバトロイド形態へ変形し、そのスピードでジンの懷に飛び込んで拳を見舞った。ただの拳ではない。ピンポイントバリアシステムを応用した光の拳だ。

『うおりゃあ!!ピンポイントバリアパーンチ!!』

、エクスカリバー、の拳がジンのコックピットを派手にぶち抜き、沈黙させる。相対速度を考えると未熟練者にとっては、死、を招きかねない行為であるが、VF-19のパイロット達はAVFを駆ることを許された熟練者ぞろいである。新兵がシミュレーションで犯すような失敗を犯すほど未熟ではないし、チキンでもなかった。

他を見回すと、シュトゥルムフォーゲル?のマイクロミサイルの火力と機体の機動性に恐れをなして逃げ出すが、圧倒的スピードの追尾から逃れられず、ガンポッドの掃射で落とされる者、または熱核バーストタービンを全開にした両機に追いつこうと無理な加速を行い、機体の設計限界を超えた加速で機体が空中分解する者も居た。

この戦闘でのキルレシオはVF-19及びVF-22が4機撃墜する間にジンは反撃もまもらないので4対0と記録され、バルキリー側の圧倒的勝利に終わった。この戦闘の様子を要塞で、観戦、していた連邦軍の協力者一連邦軍からは3隻同盟と呼ばれる一達はそれぞれの感想を述べる。

「人形に変形する戦闘機ねえ……凄いもんだ。下手な可変モビルスーツより空戦能力あるし、当たり前負けしてねえ」

「こっちのモビルスーツより変形速度も速いし、火力もある。侮れませんよ」

「極限まで鍛えられた、鋼の翼、……あれが彼らの力なのですね」
「ただの戦闘機って甘く見ると痛い目あうな、敵じゃなくってよかったよ」

主要人物一キラ・ヤマトを初めとする面々一は連邦軍がデモストレーションも兼ねて中継したバルキリーの姿に関心が高いようで、その話題に持ちきりとなる。だが、裏をかえせば、敵に回ればいつでも撃沈できるぞ、という無言の圧力でもあった。連邦軍はその点の、プロハガンタ、はお手の物なので、さりげなく頭にすり込むサブリミナル効果で彼らを取り込んでいった。

そしてルナツーに駐留していた「第17機動中隊」の母艦のラー・カイラム級の格納庫には連邦のモビルスーツパイロットの中では指折りのエース「青き閃光」の乗機となる、ロールアウト間もない青い量産型ガンダムF91が静かに鎮座していた……。キラたちはまだ知らない。、本当のガンダム、を……。そして。その青いF91がその一端を彼らに示す事を……。

行間その13「ヤマトよ永遠に 1」(前書き)

暗黒星団帝国襲来のヤマトよ永遠にです。しばらく「宇宙戦艦ヤマト」の原作再現を行います。

行間その13「ヤマトよ永遠に 1」

―西暦2202年。23世紀を迎えた地球は三度、絶体絶命の危機を迎えていた。「ヤマト」が前年に遭遇した「暗黒星団帝国」の艦隊が地球本星に急襲をかけてきたのだ。かつての中性子爆弾の宇宙版「重核子爆弾」が日本に設置され、さらに上陸部隊の奇襲で連邦議会は制圧。爆弾の威力に連邦政府は畏怖し、主要都市が制圧されたという報告に降伏を決意した。だが、大統領自体はあくまで徹底抗戦の意志で固まっており、レビル將軍らに極秘で、指令、を発した。レビル將軍ら軍首脳は歴代仮面ライダーたちの助けもあって辛くも脱出に成功していた。そんな最中、大統領ら政府高官には暗黒星団帝国地球占領軍の設問が待ち構えていた。

「私は暗黒星団帝国地球占領軍司令、カザンである。現時刻を持って地球占領を完了したことをここに通告する」

それは政府行政の中枢を制圧したことを意味する。連邦軍は迎撃指令をだされる前に制圧されたのでどうする事もできなかった。辛うじて戦力が無事なうちにどこかへ脱出するのが精一杯だろう。

「そこで地球連邦政府大統領に対し最初の司令を出す。宇宙戦艦ヤマトの所在を明らかにせよ」

カザンのこの一言に連邦議会議員たちは一応にざわついた。敵の第一声が「ヤマトの所在を明らかにせよ」というある意味？マークが浮かぶほどに理解に苦しむものだったからだ。

「ヤマトだって？」

「馬鹿な、いくら白色彗星帝国やガミラスを倒したと言ってもたか

が戦艦一隻だろう？」

「そうだ。ヤマト以外にもアレクシオンやバトル級とかいくらでもいいものがあるだろうに……何故？」

そう。地球連邦軍にはヤマト以外にもいくらでも強力無比な艦船は存在するのに、なぜ現在となっては旧型になりつつあるヤマトを名指ししてくるのか。連邦議会の議員たちはその点が疑問であった。

「答えられないのか？」

「……何故ヤマトなのだ？ヤマトの所在を知って何になる？」

「質問は許さん」

「怖いのか？ヤマトが！！たかが戦艦一隻、何をそこまで恐れるのだ」

「どこにあるのだ！？ヤマトは！！」

カザンは拳を机に叩きつけて怒鳴る。ヤマトを異常に恐れているのか、小刻みに腕を貧乏揺すりしている。

「私は何とも言えんね。あれは軍の管轄から離れた。探したければご自由に」

それは大統領が咄嗟に思いついた出任せであった。実際白色彗星帝国戦後に艦内設備が旧式化していたヤマトは前年の戦いの後、大改装のために一時的に軍籍から外れていたのは確かだし、あながち嘘ではない。こうして形式上地球連邦政府は暗黒星団帝国に屈した。だが、地球連邦軍の兵士や艦隊はゲリラ化して抵抗を続ける。そして逃げおおせた兵士らは、英雄の丘、に集まっていた。

―英雄の丘とは宇宙戦艦ヤマトの功績を後世に伝えるべく、イスカンダル航海・白色彗星帝国戦での戦死者を祀る施設で、初代艦長の沖田十三の銅像と戦死者達のレリーフが建てられている。そこにはなんとか逃げおおせた兵士達が集合しつつあった。そして同日に地球連邦を訪れていた19歳のフェイトやティアナ・ランスター、スバル・ナカジマらもそこに居た。（ティアナは新型ジェットストライカーのテスト飛行を行うために地球に對在中であったが、フェイトがスバルの帰還を連邦軍に報告するためにスバル共々地球に來訪していたので、図らずしも再会していた。しかし再会を喜ぶ間もないままにこの事態に巻き込まれた）

「地球が……どうしてこんな……あの黒い戦闘爆撃機や兵士たちはどうしてこんなことを……!？」

空襲を受け、炎上する東京に愕然とするフェイト。世界が違えど、ここは地球である。自分の第二の故郷と言える日本の首都が地獄絵図を呈しているのだからフェイトの憤激も当然である。スバルも父親の先祖が地球出身なのでその気持ちは痛いほど分かる。ティアナもスバルと同じ気持ちのようで拳を握りしめて吐き捨てるように悔しさを顕にしている。ましてやティアナの現在の所属先は別世界の日本軍たる、扶桑陸軍なのだ。3人の中では東京を攻撃された悔しさは一番強いだろう（それを示すように、フェイトとスバルが時空管理局の制服を着込んでいるのに対し、ティアナは扶桑陸軍制式戦闘服である巫女装束と小具足姿である）。

「どうして奴らがこんなたいそれた事をやったのか教えてやろうか」「あなたは……?」

フェイトが振り返るとそこには一人の少女がいた。茶色の上着を着て、マフラーをしている小柄な少女こそは菅野直枝であった。彼女はヤマトに乗艦し、暗黒星団帝国と一戦交えた後も未来世界に滞在してその翼を休めていた（佐渡酒造の家に上がりこんでいた）が、今回の事態に巻き込まれたというある意味不運続きな状況であった。

「オレは扶桑皇国海軍及び連合軍第502統合戦闘航空団「BRAVE WATCHES」所属、菅野直枝大尉。お前らは時空管理局のものか？」

「は、はい」

フェイト達は目の前の少女が軍人という事にいささか驚きつつも敬礼する。ティアナは軍内で海軍の菅野デストロイヤーの勇名は耳にしていたので余計に驚いている。

「それじゃあなたがあの、デストロイヤー、……!？」

「そうだ」

答礼しながら菅野は頷く。

「ティアナ、この子のことを知ってるの？」

「はい。軍内では有名なんですよ。勇猛果敢な猛将……ストライカーユニットの壊し屋とか異名が多い海軍のエースの一人ですよ。でも……どうして大尉はここに？」

「オレはチョイと静養中だったんだが、暗黒星団帝国の奴らがここまでたいそれた攻撃をするたあな……驚いたぜ」

「暗黒星団帝国？」

「その辺はオレだとうまく説明できねえから、そこにいる佐渡大先生に聞いてくれ」

菅野は銅像の前でやけ酒をしている医者と思しき、老境に差し掛かった年代の男を紹介する。その男一佐渡酒造一は菅野からの紹介で一礼すると事情を説明する。

「お嬢ちゃん達、宇宙戦艦ヤマトという戦艦を知ってるかね」

「はい。少しは……。たしか坊ノ岬沖海戦で沈んだ戦艦大和を宇宙戦艦に直した艦ですよね？」

「そうじゃ。波動エンジンを積んで生まれ変わったヤマトはこれまで3つの星間国家と事を構えてきた。ガミラス、白色彗星帝国……そして暗黒星団帝国……」

佐渡酒造は自らが乗艦した宇宙戦艦ヤマトの武勇伝を懐かしそうに語る。それは苦闘の歴史であった。

戦いの末に多くの犠牲を払い、帰還を果たすヤマトだが、当初の乗組員はもはや一割に満たないほどに戦死してしまった。そして彼がやけ酒をしていた場所の目の前に堂々と鎮座する軍服姿の老提督の銅像こそ、歴史上の偉大な軍人の一人に数えられる男一宇宙戦艦ヤマトの初代艦長一「沖田十三」の銅像なのだ。辛くも空襲から逃れてきた連邦軍兵士、連合軍ウィッチたちが皆、沖田十三の銅像に対し敬礼をしているのも彼の偉大さをフェイト達に実感させていた。彼はこういった。前年の航海でイスカンダルの救援を行なった際に交戦したのがあの暗黒星団帝国と呼ばれる軍隊であり、その主力艦隊が地球に攻めこんできたのだろうと説明する。

「軍の指揮系統は崩壊したに等しい。じゃが、ワシらは奴らに屈服するわけにはいかんのじゃよ」

「佐渡先生の言うとおりだ」

「おお！山南さん、コーウェン提督、それにレビル將軍！！ご無事で！！」

英雄の丘に脱出に成功していた地球連邦軍の首脳陣の内第一陣の3人がやってきた。彼らは生前の沖田十三と親交があった。それでここに足を運んだのだ。

「仮面ライダー一号からXまでの5人ライダーのおかげでなんとかここまで来れましたよ」

「古代たちもここに向かっている。じきに着くだろう」

「おお、それは良かった」

3人は沖田十三の銅像の前に立って敬礼すると、その場にいる兵士たちに訓示を行う。それは暗黒星団帝国に屈服するわけにはいかなという大統領の意志を自分たちが具現化するのだという内容で、軍の残存戦力を集めてバルチザンを結成し、地下に潜って抵抗を続ける者と宇宙で攻撃をかける部隊に分けるという事だった。宇宙艦の中で動けるものは急ぎイカルス天文台に迎えと電報を打ってあるとの事だ。

「君たちには辛い戦いを強いることになる。だが、私たちも前線で戦い、死ぬ覚悟だ。スマンが諸君の命、この私が預かる！！」

レビル將軍の訓示に歓声が響く。軍の高官でありながら前線で死ぬ覚悟を示したのは腐敗した連邦軍上層部の人間ならまず言わない言葉であり、これが彼が兵士たちから慕われる最大要因なのだ。

「まずは横須賀に無傷の主力戦艦改級戦闘空母やウラガ級護衛宇宙空母が係留されているはずだ。それを奪還する。既に現地で穴拭智子中尉と黒江綾香少佐の率いる部隊が戦闘を開始している。我々は彼女らと合流し、敵を叩く！」

こうして2202年の地球連邦軍は地球人類としての誇りを捨てず、暗黒星団帝国にあくまで戦いを挑むという気概を見せた。フェイトは地球の敢闘精神に改めて感銘を受け、3人ともバルチザンとして戦いに臨む決意を固めた

行間その14「ヤマトよ永遠に 2」

一宇宙戦艦ヤマトがイスカンダルで暗黒星団帝国を撃退した事が今回の事態に繋がったのかも知れないが、今更言っても後の祭りだ。この時、連邦軍兵士たちは皆、そう思っていた。

彼らは暗黒星団帝国に本土を蹂躪されながらもなお闘志を燃やしていた。それはかつての大日本帝国軍航空隊が本土空襲をされても闘志を失わなかったのと同じであり、フェイト達はこの点に本部を制圧されただけで抵抗をやめていった時空管理局地上本部の人員との差をひしひしと感じていた。

「おお、相原、相原じゃないか！よく生きとったなあ……」

佐渡酒造が声を上げる。ヤマトの乗組員の中でいの一に英雄の丘に到着したのは通信班長の相原義一であった。背中には旧型の通信機を背負っている。ついで航海班副長の太田と戦闘班副長の南部も姿を見せる。

「太田、南部も来たか！」

「アア、ユキサントコダイサンダー!!」

佐渡酒造の傍らにいるロボットで、艦内のコメディリーリーフ役のアナライザーが驚いた声を出す。階段からかけてくるのはヤマト艦長代理の古代進とその婚約者で生活班長の森雪だ。

「おーい、みんなー！佐渡先生ー!!」

古代と雪も姿を見せたとあれば、残りは島大介だ。

「おっ、相原、いいものを持ってきたじゃないか」

「こういう時は最新型だと敵に電波妨害されますからね。妨害にあまり気を使っていないだろう周波数を使う旧型を持ってきたんですよ」

「さっそくイカルスの真田さんに連絡を取ってくれ」

「はい」

「ごだいさあ〜ん!! 島さんが……」

この幾分幼さを感じさせる声は機関室勤めで、戦死した元機関長「徳川彦左衛門」の息子の「徳川太助」だ。肩を借りているのは古代の親友で航海班長の島大介である。彼らは防衛用無人艦隊の管制室（完全自立型はシャロン・アップル事件の影響で研究が凍結されたので、人の手が入る余地の残した半自立型として開発することで人的資源を補う形で前年から整備され始めた防衛用の無人艦隊）任務についていたが、敵艦載機の空襲でコントロール室が被弾。その時に島が咄嗟にAIの抑制システムをオフにするスイッチを入れていたのが幸いし、敵艦隊に出血を強いることはできた）

「島! 徳川!!」

「古代! やっぱりここに来ればみんなに会えると思ったよ……」

固く握手を交わし合う古代と島の2人。それは揺るぎない2人の友情を示していた。彼が到着したことで、地球にいるヤマト第一艦橋要員の全員がここに集結した事は明らかになった。佐渡酒造はホッと安堵の溜息をつく。

「皆、よく来た……さすが沖田艦長……あんたの、子、達じゃ……みんな揃っておる……」

（あれがヤマトの……。私とそんなに変わらない年齢に見えるのに……凄い貫禄）

そう。ヤマト幹部たちの大半は忘れられがちだが、まだ20代初めという若齡に過ぎない。これはイスカンダル航海時に16〜17歳だった訓練生を幹部乗組員にした連邦の采配によるもので、数度の航海を経た今でさえまだ21、2歳の若さなのだ。階級も功績相応の地位であり、全員が佐官以上である。古代に至っては戦艦の艦長なので将官である。フェイトは自分は彼らのように誇り高さや確固たる意志を持てるのだろうかと彼らの姿をみてそう自分に問いかけていた。

「古代」

「山南司令、ご無事で」

「レビル將軍からの伝言だ」

山南が古代に話しかけ、レビル將軍の意志を伝えた。それは政府が降伏しようが国民はそれを望まない。軍はゲリラ化しても抵抗を行うというものだ。古代も同じ思いだ。白色彗星帝国やボトルザー機動要塞などにも屈しなかった地球人の底力というものを暗黒星団帝国に教えてやらなくては。

「それで將軍は？」

「既に首都直掩地上部隊や海軍の生き残りを率いて艦艇を奪還すべく横須賀へ向かわれた。ここに残っている面々は地上でのバルチザン活動を行うメンバーだ。各地の部隊にもモールス信号で参加を呼

びかけている」

「そうですか。司令はどうかさるのです」

「うむ。幸いタイタン基地に改アンドロメダ級の「しゅんらん」と第3艦隊、外惑星巡航空母艦隊が待機している。私はコスモタイガーで現地向かい、しゅんらんらを率いて戦うつまりだ。場合によれば君たちに同行する」

「真田さんに通信がつながりました!」

相原の歓喜の声に広場にいる全員が通信機の前に群がる。真田志郎が何故イカルスにいるのか、その理由をしりたかったのだ。

「真田さん、古代です」

「しばらくだな古代」

「そちらの状況は」

「何の被害もない。小惑星だから敵も甘く見ていたんだろう」

真田はイカルスでの状況を説明する。地球本土より一足早く敵をキヤッチしていたが敵の妨害電波で地球に連絡する事が出来無かった事、そして古代はヤマトの所在を問う。前の戦いの後に一時的に軍籍から外れたヤマトの行方は乗組員である古代らさえ知らない。知っているのは真田とレビル將軍のみだ。

「真田さん、ヤマトはどこにあるんですか?どこでどうしているのか……」

「……そうか。実は私もそれを待っていた」

「待っていた?」

「あるんだよ、ヤマトが!!」

「……え？」

「何だって!？」

「ヤマトが!？」

一同がざわめく。ヤマトが小惑星イカルスに秘匿されているというのか。うれしい知らせであるが……。

そこで通信が途切れる。妨害電波の周波数を増やしたのか、それとも電波妨害帯を当たりにミノフスキー粒子のようにばらまいたのか……。

「強力な妨害電波が……ミノフスキー粒子が濃いせいもあってこれ以上は」

「しかし、今はっきり、ここで、といったぞ」

「古代さん、いきましよう! 真田さんのところへ」

「そうだ。ヤマトがある小惑星イカルスに行こう」

「でも古代さん、火星の向こうまでどうやって？」

「それはあたしに任せて。駐屯地の地下に大統領用の高速連絡艇があるはずよ」

「よし行こう」

「みんな、聞いてのとおりだ。俺達はヤマトに乗るためにイカルスに行く! しかし駐屯地には敵兵がいるのは確実だ。俺達はなんとかしてもヤマトにいかなくてはならない。みんなの力を借してくれ!」

古代は広場にいる兵士たちに呼びかける。古代たちを高速連絡艇までまで送り届けるという事に反対するものは誰もいなかった。普通の兵士はもちろん、空間騎兵隊や戦闘機搭乗員、ウィッチなどの様

々な人員が古代に賛同してくれた。フェイト達や菅野もそれに加わった。一同は円陣を組んで互いを鼓舞すると、駐屯地へまっしぐらに向かった。得物は様々で、連邦軍制式のコスモガンやアサルトライフルはもちろん、M16A2、九九式二〇ミリ機銃、二式二十耗固定機関砲（ホ5）、バズーカ砲や日本刀、はたまたGSh-6-30など……。因みにフェイト達はそれぞれのデバイスである。

一人類はまだ屈してはいないのだ。

登場作品の時系列・コラボ 1 (前書き)

要望がありましたので、登場作品の時系列・コラボ表です。まずは最も多く登場する作品からです

登場作品の時系列・コラボ 1

大長編ドラえもん

登場年代は1999年なので、少なくともものび太の南海大冒険以後である。のび太たちは相変わらず小学生。コラボは少なめであるが、「とある魔術の禁書目録」&「とある科学の超電磁砲」と絡みあり。

リリカルなのは

登場年代的には主にリリカルなのはA、SとStrikersの間の空白期間及びStrikers。

ただしなのはやフェイトに関してはThe MOVIE 1stの要素があり、シリーズに必ずしも順序していないので、本編のパラレルワールドのなのは達と解釈してください）ストライクウィッチーズとのコラボが最も多し。

ストライクウィッチーズ

現時点での年代は第一期のブリタニア（イギリス）に501統合戦闘航空団の基地がある頃（1944年）。501他いくつかの部隊が登場。（単語のみ含め）魔法つながりでリリカルなのはとコラボ多し。他、リリカルなのは共々マクロスシリーズとの絡みがあり。

マクロスシリーズ

7及びFが主。メカも7とFがメインだが、プラス以前のキャラも登場。

機動戦士ガンダムシリーズ

初代～Vまでの宇宙世紀メイン。アナザーガンダムは今のところ単語のみの登場。ただし年代に開きがあるシリーズはほぼ同時期として処理。

仮面ライダーシリーズ

メインは「BLACK RX」。「仮面ライダーZX」以前のシリーズと「BLACK」及び「BLACK RX」とは年代の開きが生じていると解釈しております。

「とあるくシリーズ」

現在までに「禁書目録」から神裂火織、御坂美琴&白井黒子、初春飾利が登場済み。

時系列は少なくとも絶対能力進化（レベル6シフト）以後、第3次世界大戦以前。（夏服なので）

行間その15「ヤマトよ永遠に 3」

ーヤマト乗組員達は宇宙戦艦ヤマトへ乗り込むため駐屯地に隠されている大統領用の高速連絡艇を使うことを決意。他の兵士たちの援護のもと駐屯地へ急いでいた。ウィッチを除いても、兵士たちは携帯用のビームガンにあたる「コスモガン」をあまり重視せず、前時代的な実弾銃を持つ者が大半であった。フェイトは何故最新兵器であるコスモガンなどをあまり持たずに旧型の兵器ばかりを使うのかと問うが、空間騎兵隊の生き残りの兵士は率直に答えた。

「そりゃ簡単なこった。人間が弾を防ぐ技術を研究し続けて防弾チヨッキとかが作られたように、宇宙じゃビームガンを防ぐ技術は当たり前にあるだろう。しかし実弾を使う銃を防ぐ技術は向こうにとっては、とっくの昔に廃れた技術だからかえっていいのさ。それにエネルギー補給に専用のカートリッジとかがあるビームガンと違って、実弾銃の弾は規格さえ合えばいくらでも確保できる。ゲリラ戦にはうつけつけだ」

そう。ゲリラ戦には専用のカートリッジや修理施設などを用意しないといけないコスモガンなどはあまり向かない。（この時空ではあまり普及していないので）実弾は『いくらでも銃の換えが効いてどこでも弾が入手可能』という利点があり、実弾銃が全てコスモガンに代換されなかった理由がそこにはあった。

「おい、ガンショップだ。弾を確保しとけ」

「そうだな……あれを物色するか」

一行は無人となった地？にあったガンショップで弾を確保する。この時代においても実弾銃の需要は衰えず、軍用・民間用問わず流通

は続いていた。ガンショップが存在するのもそのためだ。弾はここでいくらでも持って行ける。銃も確保可能だ。

ウィッチ達は扱い易さを理由に、自分たちの時代の扶桑軍制式装備「一四年式拳銃」と8ミリ弾を持って行く者がわりかし多いもの、威力重視でデザートイーグル50AEモデルと50AEマグナム弾を持っていく者もいた。菅野は西部劇を見た影響からか、S&M p; W M 500を持っていった。彼女はひたすら攻撃力重視なよう（ジャンボガンはその稀少性から一般的なガンショップでは置いていない）ある。ウィッチは戦闘時には身体能力を魔力で強化するので反動は気にせずに撃てる利点をよく理解している（此頃には未来世界に行ったウィッチ達の間には、元の世界より多くゲッター線が降り注ぐ未来世界の環境に体が適応したのか、魔力減衰が無い体となっていた者も100人に一人の割合で出現するようになっていたので、あまり扱い易さを気にしなかった者も多い。ゲッター線が何故そのような所業を見せたのかは不明であり、早乙女博士亡き後の今となっては当分説明はできないだろう）

ティアナも魔力増幅用のカートリッジが切れた場合の保険代わりにM92FSを携帯する。

「……ん、9mmパラベラム弾を入れてっ」と

さすが扶桑陸軍で拳銃の訓練を受けていただけあって、弾を装填する動作は手馴れている。そしてセーフティを解除し、いつでも発砲できるようにする。

「フェイトさんにはこれがいいですね」

「あ、ありがとう………」

ティアナは戸惑っているフェイトに銃を手渡す。グロック17だ。フェイトは此頃には戦闘機搭乗員としての知識は身につけていたものの、銃の知識は未だ疎い。それを知らされていたのでティアナは自衛用の銃の選定をしたのだ。（スバルは突進だけでは敵を倒せない事は承知しているので、前の戦いの際に訓練を積んでいた。サイドアームはM1911を選んでいる）

一行は兵科別に最適な携帯火器を持ち出すと予備の弾を持っていくだけ持って行き、航空機関砲などの重火器は対掃討三脚戦車用に極力温存（モビルスーツやバルキリーさえあれば対抗可能だが、今のところモビルスーツなどの機動兵器ごと逃げられた部隊はいるだろうが……連絡のとりようがない）する方針で駐屯地へ急いだ。

途中、パトロール隊と遭遇する事があったが、連絡される前に全滅させた。その時、フェイトは初めて、人を撃った。仕方が無いことなのだが、人を殺すという経験はバジュラなどの生物とはまた違った恐ろしさがある。フェイトは改めて異星人とは言え、人間を殺した事への恐怖を味わった。銃を持つ腕が小刻みに震え、息づかいも荒い。

「ハア……ハア……、ハア……」

「……フェイトさん、フェイトさん！」

「……ス、スバル……」

スバルの声にハツとなり、ようやく落ち着きを取り戻す。この点はその戦いで正規の軍人となっていたのはに遅れる事、8年で味わった恐怖であった。一戦争とはかくも残酷なものである。侵略する側にもそれなりの理由はあるし、守る側にも大義がある。どっちが

善で、どっちが悪などという単純なメガネで図れるほど本当の、戦い、は甘くはない。

フェイトはその事を、分かっていた、つもりだった。だが、これで改めて実感した。生きる為には自ら銃や剣を取って戦わなくてはならない事を。フェイトはこのことを学生時代に何人かいた、日本史で近代に入ったとたんに一方的な歴史の見方で授業をする教師、に教えてやりたいと思った。

一なのはが前の戦いでドラえもんに言われたっていう、「平和を唱えるのはだれだってできる。相手に屈しないで平和を守るためには、やっぱりそれ相応の力を持つしかないんだよ」というのってのはこういう事なの……？

フェイトはこの時、ドラえもんがなのはに言ったという言葉の重さを噛み締め、自身を律して戦いに臨む覚悟を決めたのであった。

一横須賀

ここにはかつてシブヤン海で果てたはずの戦艦武蔵の骸が同地より回収され、展示されていた。他の世界と異なり、武蔵はトリムを保ったままで搭載されていた弾薬の誘爆やボイラーの水蒸気爆発も一切起こさずに沈んだので沈んだ時のままで、その原型を保っていた。

大和がヤマトに改造された関係で武蔵はそのままの形で補修され、記念艦として（位置は三笠よりちょっと離れている）保存されていた。（技術の発展で深海に沈んだ70000トン級の船体であっても引き上げられるクレーンが開発され、武蔵はその実験台になって引き上げられた）。暗黒星団帝国は武蔵をただの鉄屑とみたのかは不明だが、無傷で浮かんでいた。横須賀で蜂起した部隊はそこにいた。

「……さすがに敵もコイツまでは空襲しなかったか。まあ200年落ちの兵器なんてあいつらからみればただの鉄屑だもんな」

黒江綾香は武蔵の古めかしい風体が敵を安心させたのに皮肉を感じつつも檣楼内の第一艦橋にいた。かつてレイテ沖海戦時には猪口敏平艦長が指揮を取っていた場所だ。横須賀で難を逃れたウィッチ達や海軍関係者たちはここで作戦を考案していた。レビル將軍の呼びかけた通信は武蔵に設置されていた当時の通信設備（内装はタイムふろしきで包むことで復元していた）でも傍受可能であったので事情は把握している。

「少佐、どうします？」

「ドックに主力戦艦改級戦闘空母やウラガ級空母が係留されているはずだ。これを奪還する」

「しかし現状の部隊では……」

「やってみなければわからないだろう……！当たって砕けろだ。穴拭、行くぞ」

「ええ、このまま黙ってるんじゃ、巴御前、の名が廃るってもんよ」

「……よし、志願者は30分後までに甲板に集合しろ。共に戦おう」

この後、黒江は志願者で突撃隊を結成。ドック奪還へ奮闘する事になる。時に西暦2202年である。

行間その16「ヤマトよ永遠に 4」

一暗黒星団帝国の攻撃にも人類が屈しない理由の一つにスーパーロボットの存在があった。2202年ではその稼働数をさらに減らしてはいたが、未だダンクーガやグレートマジンガー、マジンカイザーは健在であった。人類は彼らの存在を糧にバルチザンへその持てる力の結集を急いでいた。

一科学要塞研究所

グレートマジンガーの基地である科学要塞研究所ではマジンカイザーから得られたテクノロジーでのグレート改修が行われていた。真ゲッターロボが新早乙女研究所の事故で封印された現状では、グレートとカイザーがほぼ唯一日本地区で稼働可能なスーパーロボットであるからだ。超絶的性能を誇るカイザーはともかく、グレートは元の出自が敵に奪われたという禁断のマジンガー、デビルマジンガー、へのカウンターパートに当たるという、ゴッド・マジンガー、の試作機の中で最も完成に近い機体に過ぎないからだ。そのゴッド・マジンガーは開発期間の短縮のために修復途中のマジンガーZをグレートマジンガーのフレームを流用する形で改造する形で、前の戦いから建造されているが、未だ40%の進行率に留まっている。そのため建造を行っている光子力研究所の所員の中には「封印された早乙女研究所からゲッター炉を拝借して補助動力にしたてあげれば反陽子炉も動力源として安定するんじゃない」という声まで出ている。痺れを切らした連邦政府は前年にグレートの近代化を要求。ミケーネや未だ暗躍する百鬼帝国への対応を焦る兜剣造博士の思惑もあり、グレートの性能アップは進められていた。

「所長。超合金ニューZですが、新技術の応用によりこれまでの3

0%増しの耐熱・耐弾性能と軽量化を達成しました。これと動力伝達機構の改良より出力に余裕が生じ、武装の威力も上がっています」
「そうか。これでグレートもカイザーと共に戦えるだけの性能を手に入れられる。今回の、侵略者、共は手ごわいからな……明後日までにグレートブースターの改修も済ませておこう」

科学要塞研究所所長で、兜甲児の父親の兜剣造は暗黒星団帝国の陸戦兵器が強力であり、陸軍の並の戦車では歯が立たず、モビルスーツなどを投入してようやく撃退可能という事を軍からの一報で知っていた。地上防衛の要であるはずの陸軍自体がリベラル派とネオコン派に分裂している状態では宇宙軍と空海軍しか軍は自由に動けない。今回、その証拠にバルチザンとして決起した連邦軍はその3軍のみだ。

「まったくティターンズ出身者はまだ派閥にこだわっているのか」

彼はティターンズ崩壊から久しいはずの現在でも過去の軍閥に拘る陸軍ネオコン派を侮蔑していた。それはジャミトフ・ハイマンの思惑を履き違えて暴走し、自壊したティターンズの過去の栄光を夢見る陸軍ネオコン派の将兵達は政府に非協力的であり、宇宙軍を敵視している。火急存亡の時だというのに、だ。

「甲児……頼むぞ」

彼は光子力研究所の弓教授共々、自らの実子の甲児をマジンカイザーでバルチザンに合流させるべく送り出していた。

一やれやれ、魔神皇帝は今回も神の代理人を努めそうだ。

兜剣造はそう独白した。ゴットが一向に完成しない状況を自嘲して

いたかもしれない。

一横須賀

横須賀で突撃を敢行した黒江達だったが、敵の機動兵器に出くわし、苦戦を強いられていた。

「くっ、なんなのよあの3本足は!!」

穴拭智子は自分たちを猛攻する3本足の火星人を思わせる黒いボディの兵器―掃討3脚戦車―の掃射に迫り立てられていた。レーザー兵器の威力もさることながら、その重装甲は歩兵用火器を殆ど受け付けない。

「あれが敵の掃射3脚戦車ですよ!!」

「弱点はないの、弱点は!!」

「足の付け根です!!そこさえ破壊すれば無力化できますが……近づけますか!？」

「……援護たのむわよっ!」

智子は掃射3脚戦車に突撃した。目標はあの映画に出てくる宇宙人の兵器のような細い足の付け根。魔力を使った日本刀の攻撃なら十分対抗できる。ウィッチとしての力を行使し、魔力の助けを借りて

近くに落ちていた何かのクッション材の残骸をジャンプ台替りにして（筋力が強化されているので通常の間人より遙かに跳躍可能）飛んだ。

「はあああッ！！」

足のうちの一本に思い切り日本刀を押し当て、そのまま横にたたき斬る。さしもの暗黒星団帝国も、このような攻撃は想定外だったよううで、割と簡単に斬れた。足を破壊されたバランスを崩した三脚戦車は何故かそのまま倒れ、沈黙した。どうやら動力機構か何かが内部で誘爆を起こして乗員を殺傷したらしい。

「やった……！！」

とは言った物、喜ぶ暇は無い。敵の数は圧倒的。対してこっちは少人数で、単位で言えば小隊にも達していない（2〜3個分隊程度）。連邦軍の軍人達はともかく、今回帯同してきたウィッチ達は若く、実戦経験が浅い者ばかりだで、ベテランは自分と黒江位のモノだ。（最も2人とも一度一線を退いているが……）

一体倒せた程度で浮かれていられない。そして案の定、断末魔を聞きつけたらしく、戦車隊がぞろぞろ現れる。

一敵は雑多な火器を持つレジスタンスの掃討にここまで徹底的に行うのか？ いや、狙いはあたしたちじゃない……？

虚空から「声」が当たりに響きわたる。それはまさしく人類の希望の象徴と言える声だった。

『ターボスマッシューパーアアンチー！！』

叫びと共に、拳　が空中から飛来し、ねじ込むように敵の装甲を軽く貫いていく。その攻撃に連邦軍兵士たちは歓喜する。それは彼らが待ち望んだ最強の援軍。人類の心の拠り所。

『やいテメエら！今度はこの俺が相手だ！！』

一夜空に現れた、紅の翼を持つ鉄の巨体こそは人が作りし最強の神。その名は「マジンカイザー」。その鉄のボディはとても逞しく、雄々しい。そしてそれを操縦するは……。

「カイザーだと……もしかして兜か！？」

『わりいな、綾香さん。ちよっち整備に手間取っちゃったが……この兜甲児が来たからにはあいつらを叩きのめしてやるぜ！！』

その声と共にマジンカイザーの胸の放熱板が赤く光り、炎が迸る。マジンガーZのブレストファイヤーの数十倍の威力を持ち、全てを焼き尽くす「ファイヤーブラスター」。それを使うのだ。

『コイツに焼かれなくなったら下がらな！！ファイヤーブラスターアアアア！！』

マジンカイザーの決め技の一つが放たれ、辺りをとてもロボットが放った熱線とは思えないような凄まじい劫火が走る。敵の掃討3脚戦車はそのあまりの高熱にかすただけで溶解していく。

智子はこの光景に思わず「神か、悪魔か……」と味方ながらもカイザーに恐れを抱くように呟いたという。

行間その17「ヤマトよ永遠に 5」(前書き)

150話目です。まだまだ完結は遠いです。

行間その17「ヤマトよ永遠に 5」

一地球連邦軍の誇った精鋭飛行隊は数えて3つほど存在した。一つは、スカル小隊。新マクロス級の艦長などを輩出した同隊は民間軍事会社の精鋭にまでその名を冠される可変戦闘機乗りの誉であった。2つ目は空軍飛行第64戦隊。かつての大日本帝国陸軍航空隊最精鋭部隊の名を受け継ぐ同隊は文字通りに地球連邦空軍の切り札とも称され、一年戦争時はその技量を買われ、宇宙でも戦った経験を持つ。モビルスーツは一年戦争時の宇宙戦でジム・ライトアーマーを、エウーゴ合流後はZプラスを主に運用し、その「赤鷲」と「斜矢印」の部隊マークはジオンやティターンズ、ザンスカール帝国などを震え上がらせたという。最後は宇宙戦艦ヤマト艦載部隊「343航空隊」。同隊は結成当時、訓練生ばかりとは思えない大戦果を上げ続けた事から白色彗星帝国戦で当初の人員をほぼ全員失いつつも存続が許され、慣例として優秀な戦闘機乗りは必ずここに一回は配属されることが続けられていた。それらは三沢基地に集結していた。

一地球連邦軍 三沢基地

地方都市圏に位置していたために敵の奇襲攻撃をまぬがれた同基地は建設当初同様に純粋な軍事基地として運用されていた。これは21世紀後半に当時の日本政府が財政難と乱立した空港の整理を理由に民間空港の数を減らした事が理由で、その頃には自衛隊は国防軍へ改組されていたので在日米軍及び国防軍の航空基地として運用された。連邦政府設立後は連邦軍アジア方面有数の航空基地として機能し、23世紀になってもその役目は変わっていなかった。

「……新型ストライカーユニットの「旭光」の訓練中にまさかね……」

「どうするのだ、少尉？」

「私たちは、合流、します。こんな事で屈服するのは嫌ですから」

この時期、三沢基地に配属されていたウィッチの中には穴吹智子の親友で、元の世界で第一線からは退いていた加藤武子かとうたけこがいた。彼女は第一線を退いた後も教官任務に就いていたが、地球連邦軍が実行した作戦の扶桑での被験者第3陣の筆頭格としてタイムふろしきによる若返りを果たし、扶桑の戦友たちの中では一番の遅参となったわけである。向こうでは1945年を迎えており、アフリカ戦線でティターNZが一泡食わされた以外は戦線では目立った動きはない。501が前年のガリア開放と同時に一旦解散され、メンバー達は各地に散ったが、上層部は新たなネウロイの巢の出現に備え、

開発中であつたりベリオンの次世代型ジェットストライカーユニット「F-86 セイバー」を扶桑がライセンス獲得により生産したのが「旭光」である（これは後退翼・胴体埋め込み式の開発に扶桑が手間取り、技術獲得の狙いでベリオンに話を持ちかけたため）。加藤武子はその装備部隊の隊長として着任していたのだが、その慣熟訓練中に今回の事態と相まった。当初の任務は半ば棚上げ状態となり、連邦軍の指揮系統は半分崩壊したも同然だが、受信した古いモールス信号で首脳陣其の物は健在である事は判明した。彼女は部隊ごとレビル將軍らが組織したバルチザンに合流する事を選択し、その旨を基地司令に告げた。

「実は私もそう考えている。駐留部隊には全て横須賀に向かうように指令を出す。少尉、君は飛行第64戦隊が乗り込んだペガサス級強襲揚陸艦「グロリアス」（戦後に新造されたペガサス級10番

艦。その艦容はかつてのアルビオンの改良タイプと言える）でそのまま現地へ向かえ」

「ありがとうございます」

この時代の地球連邦軍はウィッチをも自らの軍事体系に取り込んでおり、艦艇にはストライカーユニットの発着装置を自らの手で床に格納可能なように改良した物が装備され、連合軍のウィッチ達の一部は連邦軍出向扱いで乗り込んでいた（ネウロイの出現に備えたものと思われる）。それを踏まえた上での発言だ。加藤武子は敬礼を返すと、すぐに同艦へ部隊ごと乗り込み、横須賀へ向かった。

一横須賀

マジンカイザーはその圧倒的な力で暗黒星団帝国を蹴散らしていた。武器がいちいち破滅的とも言える破壊力を持っており、ミサイル一発で前方5 kmがぶっ飛ぶという有様。これは並の宇宙戦艦では到底不可能な破壊力であり、暗黒星団帝国はその力を畏怖した。

「おい兜！！これでまだ本気じゃないだって？」

『それでも神モードは使っていない通常運転なんだよ。それでもマジンガーZの20倍以上、グレートマジンガーの15倍の力を出せるけどな』

兜甲児はマジンカイザーの圧倒的戦力をそう評した。超合金ニューZαの絶対的装甲はどんな攻撃でも傷一つつかず、溶岩や宇宙から

の自由落下さえ耐え、武装は超合金ニューズを一撃粉碎可能と来ている。『マジンガーZが子どものおもちゃのようだ』と言えるその力。

『さて、バツサリといくか。カイザーブレード!!』

これは肩部に仕込まれている二振りの長剣である。その威力は凄まじく、斬れぬものはほぼない。甲児は剣鉄也と違って剣術はあまり用いないが、実戦で鍛えられただけあって彼にも賞賛されるほどの腕前に成長している。カイザーに2振りの西洋剣を持たし、そのまま敵陣へ突っ込んで剣戟を展開した。

『3枚に卸してやるぜ!!』

兜甲児はそう叫びながらマジンカイザーの手に持たせているカイザーブレードを振り回し、2刀流で敵戦車をみじん切りにしていく。その剣戟は穴拭智子をして関心させるほどの鬼気迫るものであった。

「すごいわね。まるで宮本武蔵みたい」

「お前が素直に関心するとはな。変わったな。あの子達のおかげか？」

「……まあね。あんただって同じでしょう？」

「……そうだな」

それは穴拭智子がいらん子中隊にいたおかげで仲間を信頼するようになった事、なのはやスバルの保護者代わりをしたことで、親心、というものを理解した事が大きかった。

彼女も若かれし頃（10代前半）中盤）は単独で戦えると過信し、その慢心を加藤武子に心配され、スオムス行きになるように上層部へ進言された。その時は大変落ち込んだが、今になってみると自分

の慢心を諫めるために仕組んだ事だと考えるようになった。そうすると加藤武子には感謝しなければ。

「……おっとこっちも来たぞ」

「さて行きますか!!」

2人は日本刀を片手に敵兵へ突撃していった。こちらも見事な剣戟で兵士たちを蹴散らしていく。本来なら引退している年齢である自分らが突撃することで、帯同している若いウィッチ達を元気づけるためだ。2人は若い奴らに手本を見せるのにもかねて戦った。

一横須賀に係留されている記念艦「武蔵」にはレイテ沖海戦当時に積み込まれた零式通常弾及び一式徹甲弾や三式弾も合わせて海中から回収され、搭載されていた。タイムふろしきで兵器類は現役当時の状態に復元されているので発砲は可能であり、急ぎ主砲・副砲への揚弾が行われていた。この時代には宇宙戦艦の登場で大口徑砲の砲撃が復興しており、その発砲用意は容易にできた。

「揚弾完了!!」

「できるのか、こんな骨董品で」

「バーロー。俺の先祖は巡洋艦高雄に居たし、俺も「金剛」砲撃手として白色彗星帝国戦を生き延びてるんだ、いつの時代も砲撃の基本は同じだ。……上下角+30度!」

一武蔵の46cm砲が200年の時を超えて目覚めた瞬間だった。目標は試し撃ちも兼ねて上空を飛行している護衛艦だ。弾は相手が昔と異なり宇宙戦艦なので当時のように三式弾ではなく、一式徹甲弾だ。

「うん？あの骨董品のガラクタに動きが…？」

「何？放っておけ。あんなガラクタに何ができる……」

彼らは武蔵を侮っていた。地球から見ても200年落ちの船などおもちやのような存在だと言えるからだ。しかし現実違った。近くの「三笠」が武装などはほぼ後世のレプリカなのに対して、「武蔵」は復元技術と年代が違う関係で現役当時と変わらぬ戦闘力を保持している。これは将来的に宇宙戦艦へ改造することを目論んだ地球連邦軍の差し金であり、表向き記念艦でもその実は海軍の戦闘艦艇なのだ。

「撃てえええ！！」

神の咆哮の如き轟音が響きわたり、200年ぶりに武蔵が吠えた。一式徹甲弾は本来の使用目的とは正反対の対空射撃に用いられたが、暗黒星団帝国の護衛艦の装甲をも貫通して見せた。一射で命中したのは天祐としか言いようがない。大日本帝国海軍の意地が時を超えて発揮されたのだ。

「命中！！」

観測の結果が伝えられ、歓喜する砲撃手達。徹甲弾の火薬だけは最新タキオン粒子を火薬の他に仕込んだものに変えてあるとは言え、一発轟沈とは脆すぎる。仮にも向こうは宇宙戦艦なのに、だ。

「脆すぎる。敵さんは宇宙戦艦だぞ？」

「ああ。もしかして向こうのエンジンや装甲がタキオン粒子に異常に反応するものだったんじゃない？」

「ん！それじゃ敵が波動エンジン搭載艦を異常に恐れる理由は……！直ちに艦長に報告だ！！」

この砲撃手の一言は後に地球連邦軍の勝利を掴むきっかけを生むことになる。これが地球連邦軍の希望の光となるのはここからしばらく後のことである。

行間その18「ヤマトよ永遠に 6」

―暗黒星団帝国と23世紀地球が戦闘に入った事は既に時空管理局にも伝わっていた。

時空管理局は表立った介入は出来ないが、地球に自らの出自を持つ者は独自に戦いに参加するものがぼつぼつと出始めていた。なのはその一人だった。19歳となった彼女は戦いの中で保護し、養女として育てている「ヴィヴィオ」を同僚に預け、かつて取り寄せていた地球連邦軍の軍服を着込んで（17歳当時に取り寄せていたもので、サイズは変わっていないので着れる。階級章は11歳当時の少尉のまま）地球救援に赴いた。

―2202年 東京

「あれが敵の切り札の爆弾……！」

フェイト達に続いて未来世界の地球に赴いたなのは暗黒星団帝国の設置した「重核子爆弾」の威容に息を呑む。あれが爆発すれば地球の人間だけが死に絶えるというその威力は自分たちの時代で言えば「中性子爆弾」のようなものだろう。それにしてもあれだけ巨大な軍事力を持っていた地球連邦をこうもいとも簡単に占領できる暗黒星団帝国とは何者なのだろう。

「君も来たのか」

「……本郷さん。お久しぶりです」

振り向くとそこには11歳の時に世話になった歴代ライダーのリーダー格「仮面ライダー一号」本郷猛」がいた。なのははかるく挨拶すると本郷に事情の説明を求めた。本郷は暗黒星団帝国の巧みな戦術に連邦政府は中枢を制圧され、シビリアンコントロール（文民統制）が一応の原則である連邦軍は動く前に組織だった行動を封じられて無力化したと説明する。フェイト達は暗黒星団帝国に屈服するのをよしとしない有志が作ったバルチザンに合流したようだと告げる。

「それってレジスタンスみたいなものですよね」

「厳密に言えば自由フランスみたいな亡命政権に近いがね。それで今は宇宙戦艦ヤマトへ向かう一派と横須賀で戦う一派に分かれて戦闘中。フェイトちゃん達は前者と一緒だ」

「そうですか。私も行きます。管理局は表立った介入は避けてるから時空管理局の魔道師としては行動出来ないけど、地球連邦軍の軍人としてならこの世界で動けますから」

動乱で指揮系統に混乱を起こしている時空管理局は地球連邦世界への表立った介入ができない状況に追い込まれていて、次元航行艦一隻さえ「管理世界の治安維持」を名目に動かせない。なのははミッドチルダから出る時、理由を「でっちあげて」こっちに来たが、受理されただけ運がいい方だった。そのために時空管理局の制服ではなく、連邦軍軍服を着てきたわけである。

「……そうか。それでその格好か……しかし君もなかなか悪どいな」「一度軍人やるところいうもんは慣れちゃいますよ。ルーデル大佐から教わったんですよ」

「スーツカの悪魔か……えらいこと教わったな」

「ええ、まあ」

「後ろに乗ってくれ、フェイト達の所まで贈る」
「ありがとうございます」

本郷はなのはを新サイクロン号（通常時形態）の後ろに乗せると、常識の範囲内のスピードで破壊の跡が生々しい市街地をひた走る。なのはは久しぶりの、文字通りの実戦、に身震いする気持ちで本郷の背中に掴まる。本郷はこの時、いたいけな少女までを戦場に送り出さねばならない現状を嘆いた。そして自らが強くあらねば…と仮面ライダーとしての自分を叱咤した。

―神奈川県

バルチザンにはせ参じるべく地球連邦軍残存部隊は行動を開始していた。この部隊もその一つ。

「第22MS突撃師団」。最新鋭のRGM-122（後期生産ロット）ジャベリンを装備する部隊であり、財政上の問題でジェガンやヘビーガンなどの旧型が未だ多数存在する地球連邦軍の中では練度・装備共に恵まれている。彼らはバルチザンへの合流を拒む師団長を、修正、し、モビルスーツ部隊指揮官の独断で行動を起こし、部隊の機材まるごとバルチザンへ持ち込む腹積もりである。

「隊長、レビル將軍より入電。我が組織は貴官らの合流を心より歓迎する、との事です」

「合流ポイントは？」

「はっ、東京と横須賀の境目付近だそうです」
「了解」

彼らは警戒しながら合流地点へ進む。ジャベリンのセンサー半径はジェガンより広いのでこういう索敵も楽だ。途中、掃討三脚戦車と何度か出会したがジャベリンの武器を持って破壊した。こういう時にモビルスーツの武装は実に有効だ。

「敵はモビルスーツをどういうふうに見てるのか」

「脅威と見てますよ。、人形の戦車、の一種というのは確かですか」

「デストロイドとかによっぽど手を焼いたと見える。まあモビルスーツはデストロイドなんかより器用だな」

連邦軍の軍備とまともにやりあったら損害を被ると踏んだ暗黒星団帝国は政府を狙う事で損害を避けた。だが、連邦軍は散発的に今なお抵抗を続け、暗黒星団帝国は残党狩りに躍起になっている。そのことをジオン残党狩りに躍起になる自分たちの姿を重ねたのか、彼らは自嘲し、ため息をついた。

ある地点へ差し掛かったとき、本郷猛の姿を捉えた隊長はスピーカーで彼らを呼び止めた。

『本郷さん、何してるんですか』

『ああ。この子を送り届ける為にレビル將軍達のところに行くところだ』

『ちょうど良かった。我々もそこへ行くところなんですよ』

『ソイツは大助かりだ』

彼らはなのはを新サイクロンから降ろして配下の指揮通信車両に乗

せると行進を再開した。その姿は勇ましさと別には敗者の哀愁を感じさせる、ある意味ではもの寂しい姿だ。だが、彼らは敗者であることを良しとしない。そのために決起したのだ。バルチザンは連邦軍全体の規模で言えばささやかとしか言いようがない小さい、意志、だが、その気概は素晴らしい物だった。そう。かつての自由フランスのように。

「なのはちゃん、そのスイッチを押してくれ」
「これですか？」

♪

言われてスイッチを入れるなのは。入れるととてもなく懐かしい音楽がスピーカーから流れてくる。

「これってゴ、ゴ○ラの自衛隊のテーマじゃ……」

「そうだ。こういう時には勇ましい音楽に限る」

「死亡フラグ立てないですね」

「たぶん」

「たぶんって〜!？」

そう。流れてきたのはゴ○ラで聞いた怪獣大戦争マーチそのモノだった。なのはは同シリーズの自衛隊のやられぶりがどうしても目に焼き付いているので不安に駆られてしまう。その不安とは裏腹に連邦軍は意気揚々と進軍を続けた。

行間その19「ヤマトよ永遠に 7」

一連邦軍部隊と合流したなのは。彼女はフェイト達とは別ルートを進んでいたが、途中でさらに強力な援軍と出会う。

「こちらロンド・ベル所属、アムロ・レイ大尉。これよりそちらと合流する」

「アムロ大尉、貴方もバルチザンに？」

「ああ。それでどさくさにまぎれてこいつを持ち出した」

「vガンダムをですか？」

「いやこいつはHi-v。vの後継機さ」

「後継機？（あれ？確か小説だとvと同じ機体だったよね？）

「そうだ。コイツは前の時には完成していたが、上の事情で中々受け取りが出来なくてね」

なのはにとつては前大戦時の上官に当たる「アムロ・レイ」が部隊に合流してきた。彼のこの時期の愛機はRX-93「vガンダム」の完成形であるRX-93v2「Hi-vガンダム」（一般にはHi-vガンダムはvガンダムのもう一つの姿と認識されているし、なのはの世界での小説などでもこの事が小説での公式設定とされていたので彼女が戸惑うのも無理はなかった。しかしこの世界では少なくとも後継機として作られている。その証拠にサイズはvより若干ダウンサイジングされている）だ。彼は前大戦から心待ちにし、この度ようやく受領できたHi-vガンダムのサイコミュを自分用に調整するために日本を訪れたが、その作業が終わった矢先に今回の戦争に出くわした。彼の母艦「ラー・カイルム」はドック入り中に被爆し、行動不能に陥っていたが、幸いなことに艦載モビルスーツは別のところで整備中であつたので辛くも難を逃れていた。Hi-

Vガンダムもその一つ。監視の目を潜りぬけ、発進した所にバルチザンへの参加を呼びかけるモールス信号を傍受した事が合間って彼は合流したわけである。（アムロの搭乗を示すためか、Hi-Vの肩やシールドには1944年の実戦投入時には描かれていなかったパーソナルマークが描かれている）

（第一印象としてはスタイリッシュさとマツシブさが同居してる感じかな？ボリウムもでぶっちょのZZとスタイリッシュなZの間って感じだしねえ。）

これはなのはが歴代ガンダムへ抱いているイメージを織りまぜた感想だった。彼女は親友のフェイトのファイトスタイルがスピード系であるためと自身の技能などの傾向からか、モビルスーツに対しての好みもそれが現れていた。彼女としてはZ系統の機体が好みだが、ダブルゼータ系統は重モビルスーツというイメージが先行してしまい、Zより高機動ができると言われてもどうにも好きにはなれない。でぶっちょ、といったのもその為だ。なのはとしてはよりZの血統を濃く受け継ぐZZガンダムの対抗機「Sガンダム」の系統の方が好きである。それは前大戦の時から変わらない。他にはF91が好きであると友人や兄に語っている。

「君はどうしてここに？ミッドチルダの方で忙しいと聞いていたが……」

「ええ。ナチス残党との戦闘で地上の首都は制圧されちゃいましたし、残った本局のほうも地上のような奇襲攻撃や反管理局組織のテロを恐れて表立った行動を避けてるんで、介入はできないんですが、個人単位の動きなら黙認する傾向があるんで、私はそれを利用したんです」

そう。公式の、交流、公務でここを訪れているフェイトやスバルと

違い、なのは理由をでっちあげてこの世界へ来ている。そのため時空管理局の制服を着用せずに、私服、の地球連邦軍制式軍服を着用して行動している。

「君もなかなかのやり手だな」

「ルーデル大佐から教わったんです。あの人からは色々と教えてもらったんですよ」

アムロはなのはが言ったなにかしらの大義名分を作って行動する行為を第二次ネオ・ジオン戦争時にブライト・ノアがやったという「参謀次官の発言を録音する事」に重ねたのかほくそ笑んだ。それくらいしなければ混乱する時空管理局から了承は得られないだろう、組織にいても行動すべき時は行動する、というロンド・ベルの精神はなのはにも受け継がれていると示された一幕であった。

♪♪

話しているうちにスピーカーから流れる音楽が切り替わる。今度はト○プガンのエンディングテーマ「マイティ・ウィングス」である。選曲のセンスは完全に搭乗員の好みだろうと思うが、暗い雰囲気但至少でも和らげようとする通信車両を操縦する兵士の心使いなのだろう。

「ところで新早乙女研究所の事故って……本当にゲッター線の暴走なんですか？」

「ん？ 竜馬くんから聞いていないのか？」

「前会ったときはあまり教えてくれなくて……それで」

「俺も隼人くんから聞いたただけなんだが、事故の原因はゲッタードラゴンにあるらしい」

「ドラゴンに？」

「ああ。ドラゴン我真ゲッターの完成後はエネルギー増幅装置代わりに使用されていたんだが、敵が襲ってきた時にメルトダウンを起こして弁慶くんと共に地下に沈んでいた。その時のゲッター線で竜馬くんと隼人くんを残して研究所の所員は全滅した」

ゲッタードラゴンがなぜそのような事になったのか。ゲッター線はゲッタードラゴンに何を起こし、研究所の所員を消滅させたのか？その判明の糸口さえつかめないとアムロはいう。ただ隼人の証言によればドラゴンは昆虫のように繭をつくりながら眠りについたという。ゲッター線の性質からすると、

『ゲッタードラゴンは真ゲッタードラゴンへ進化し、いつの日か蘇る可能性がある』というのが最近の学会での主流説なのだ。

「真ゲッタードラゴン……？」

「そうだ。便宜上、学者たちは地下のドラゴンをそう呼んでる。ゲッター線には何者も進化させる性質があるから間違いない」

一真ドラゴン。それは人類にとって希望足りえるのだろうか。車弁慶と共に地下へ眠ったゲッタードラゴンは何を思い、進化の道を選んだのか。それはわからない。

「暗黒星団帝国のパトロール隊を補足！」

「気取られるとまずい。確実に撃破せよ！！」

ジャベリンが前に出て、敵と交戦に入る。4分もあればカタはつくだろう。

（ゲッタードラゴンが繭を……？無機物なのになんで……）

なのははドラゴンの事が気になっていた。なぜそのような事になり、

繭を作ったのか？これもゲッター線のなせる業なのか。ゲッター線とはなんだろうか。その意志はどこにあるのか。度重なる人類の危機は人類に進化を促すためなのか？それはわからない。

—その頃、放棄された新早乙女研究所の地下深くでは3形態の顔が突き出ている形の繭となったゲッタードラゴンが静かに、ドクン、ドクン、と鼓動を刻みながら進化を着実に進めていた。その目に瞳を宿しながら……。

行間その20「ヤマトよ永遠に 8ゝ八神はやての憂鬱ゝ」

—2202年に主要メンバーの殆どが赴いた形となった機動六課。本局で待機を命じられた八神はやてら他の面々は為す術も無く切歯扼腕していた。

「おいはやて！！なんであたし達が向こうにいけねえんだよ！！」

机を激しく叩いて憤慨するヴィータ。なのはやフェイトなどを除いたメンバーでは最も向こうの世界への思いが強い彼女であるが、なのはやフェイトが向こう側に赴いた以上、本局の防衛戦力のこれ以上の弱体化を恐れる上層部によって有力部隊の人員はほとんど幽閉に近い状態に置かれているので、どうしようもなかった。

「うちらを含めた有力な部隊は上にとっては貴重な、駒、……人材のこれ以上の損失を恐れとるんや」

「クソッ！！何が、人材の損失を、……だ！」

「だが、道理に適うのは確かだ」

「でもよ、茂さん！」

ナチス残党による首都制圧後も本郷猛の命で引き続きはやて達の護衛についている、仮面ライダーーストロンガーこと城茂がいきり立つヴィータを諫める。彼はRXが愛車の一つであるライドロンで捕虜（ノーヴェの事）を向こうの世界に送る兼本郷への報告のために元の世界へ帰還した後はスカイライダーⅡ筑波洋やZXⅡ村雨良と共にミッドチルダに留まり、はやてたちの護衛を続けていた。あの戦いでなのはやフェイト達以外のメンバーの大半が負傷・長期療養（StG44による銃撃やGWF4による常識はずれな狙撃などで護衛役を務めたザフィーラは愚か、後方支援及び医者役の役割を持つ

シャルまでもが負傷したので、シャルの不在により六課の医療体制は混乱を起こしていた。またシグナムもシャドームーンとの戦いで負傷した）を強いられており、無傷かつはやての護衛ができるのはヴィータとリインフォース？のコンビしかいなかった（エリオ・モンディアルは貴重な前衛役として温存され、キャロ・ル・ルシエの方は悲惨の一言で、切り札たる竜のヴォルテールは召喚中にナチス兵たちによってパンツァーファウストやパンツァーシュレックなどの対戦車火器の山に加えてV2ロケットの爆撃による集中砲火を浴びせられ、戦闘不能に陥っており、もう一方のフリードリヒもバルキリー？のスーパーパックに備えられたレールガンの精密射撃により、翼に大穴を開けられるなどの重傷を負わせられ、戦力としてはほぼ無力化された）。それを憂慮したストロンガー達は引き続き留まり、護衛役を引き受けたのだ。

ちなみにナチス残党による制圧後のクラナガンはまるでナチス進駐時のフランスを想起させ光景が広がっており、？号戦車や？号戦車などの往年の名戦車が武装親衛隊や国防軍の兵士たちが凱旋パレードをこれ見よがしに行っていた。規律の統制もきちんと取れており、一矢乱れぬ動きで行進している。子の様子は本局にも中継され、はやては敵ながらもこの光景に圧倒され、1930年代のドイツで何故国家社会主義ドイツ労働者党（後の世の蔑称のナチスが有名）が躍進し、当時の人々に支持されたのか、その一端を垣間見たと感じた。

「なのはの奴、そんな状態なのによく向こうに行ったな」

「上層部へ提出する書類を偽装したんや。上手いもんや……私の印鑑を持ち出して判を押した上でコピーしておいた私のサイン貼つけて出したんや。しかも出るための理由をでっちあげて」

「……上手いですね。それっていったい誰から教わったんでしょうか？」

「だいたい想像つく……あの人しかおらんで」
「誰です？」

はやての隣にいる人格型ユニゾンデバイス「リインフォース？」の幼さを感じさせる声にはやてはため息混じりの声で答えた。なのはにそのような、大それた事を教えたのはただ一人。なのはが少女時代に出会ったという、別世界のドイツ軍人で「スーツカの悪魔」とその名を轟かせているエース「ハンナ・ウルリカ・ルーデル」大佐。

「ハンナ・ウルリカ・ルーデル大佐。あの世界のドイツ空軍のエース。なのはちゃんが尊敬しとる軍人さんの一人や」

「ハハン、ルーデルか。コイツは面白いな」

「茂さん、ルーデル大佐ってどういう人なんですか？」

「デメエにも分かりやすく言うのだな、今までの出撃回数2530回・被撃墜回数30回・戦闘による負傷5回・敵にかけられた賞金
が日本円で20億円以上、撃墜スコアは戦車 519輜・装甲車・トラック 800台以上・火砲(100mm口径以上) 150門
以上・陸戦ネウロイも戦車と同数を撃破、 駆逐艦 1隻
・上陸用舟艇 70隻以上・航空機9機・航空ネウロイ9体撃破・
戦艦・駆逐艦も撃沈した史上最強レベルの魔女^{ウィッチ}さ」

「ひやあああゝすごいですううゝ！」

城茂はリインフォース？にも分かりやすくルーデルの凄さを解説す

る。ルーデルのこの常識はずれな戦果はなのはやフェイトの凄さを理解する彼女をしても仰天させられるほどの凄まじいもの。時空管理局にもここまで個人で戦果を上げた者はいないだろう。同郷の通常ウィッチで限定して考えて、ルーデルと肩を並べられるに値するであろう戦果を上げているのはエーリカ・ハルトマン、ゲルトルート・バルクホルン、ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ、ハンナ・ユステイナー・マルセイユなどだが、それにしても扶桑やカールスラントは撃墜王多すぎである。

「その人から軍隊で自分の要求を通すための術を教わったんやて。もうどうなってるんや……」

はやては常識はずれな人材と出会ったことで人外へ足を踏み入れつつある親友に対して遠い目をする。それは彼女の苦労が増えるという証であり、胃薬が手放せない生活が当分続くという事でもあった。

「……話は変わるけどよ、前にテストロッサが話してたスバルやギンガの母ちゃんらしいのがあるって話はどうなったんだ」

「それはノイエ・カールスラントのアドルフイーネ・ガランド少将閣下に確認取った。彼女はフェイトちゃんに、この子は数年前、放浪していた所を私が引き取って育てている。名前以外の記憶が無いと言ってたから多分転移の際に過去の記憶を失ったんだろう、と話してる。その時にフェイトちゃんは本人に会ってるんやけど、本人は凄い戸惑ってたって……」

それは穴吹智子が持ってきた写真から判明した事実。今から2、3年ほど前にフェイトはその真相を確かめるためにノイエ・カールスラントを訪れていた。その時にスバル・ナカジマとギンガ・ナカジマの、母、「クイント・ナカジマ」は生存こそ判明したもの、フェイトにとってはショッキングな事実も多く知らされた。対面したと

きの彼女は容姿が若返ったせいか、ギンガ・ナカジマとほぼ同じ（フェイト曰くギンガよりは幼い印象を受けたとの事）姿であり、当人は引きとってくれたガランドの、娘、として育ててくれた恩に報いる、証として名も「クイント・N・ガランド」と名乗っていたとはやてはヴィータに言う。

「昔の記憶が無い……！？そのことをスバルやギンガは……？」

「既に知っとる。ガランド少将が気を使ってくれて4ヶ月前に会わせてくれたんや。2人は、記憶がなくなってもあたしたちのお母さんにはかわりないですから、と受け入れた。今じゃクイントさんにも少しづつやけど記憶が戻ってきとる。まあハッピーエンドや」

「そりゃ良かった。それでクイントさんは今なにやってんだよ」

「引きとられて一年後に空軍に志願して、その後に叩き上げで少尉になったみたいや」

（これ師匠に言ったらなんて言われるやろか……）

はやてやスバル達はこの事をクイントの夫であったゲンヤ・ナカジマにはまだ言っていない。言ったらショックが大きいだろうからで、ガランド共々いうのに四苦八苦していた。

行間その21「ヤマトよ永遠に 9 〽ゲッターロボサガ!〽」

一暗黒星団帝国が襲来するより2年前。メカトピア戦争終結直後の西暦2200年7月。

新早乙女研究所で未曾有のゲッター線事故が発生した。その事故の被害の詳細は国家機密とされたが、ゲッタードラゴンに関係がある事だけは周囲に知れ渡っていた。そのゲッタードラゴンは急激に進化を起こしていた。まるで何かを急ぐように。

羊水に浸かる胎児のような態勢で地下に沈んでいったゲッタードラゴンは繭を作ったが、その中での変化は此の様なものであった。まずボディの装甲が肩を除きドラゴン特有の形状から真ゲッターと同様に変化して体長が大型化。次にヒゲのような口に当たるパーツがさらに鋭角化し、グレートマジンガーの頭頂部装甲のように変化する。腕のスピンカッターは真ゲッターよりもさらに鋭いレザーへ変貌していく。マッハウイングもより鋭角に、なおかつマントのように変化する。この急激な変化は進化と言っても過言ではなかった。

本来の歴史では数十年の月日を要したであろう進化はこの世界では2年という急激な期間で行われた。何故か？それは百鬼帝国を初めとする一派に別世界の、ゲッター軍団に対抗出来る力、とされる最終兵器「バグ」がもたらされたからである。このバグはこの世界のスーパーロボットの殆どを遙かに超える力を持つという。たとえば真ゲッターロボを以てしても歯が立たない（別世界の後発機、ゲッターロボアーク、をも圧倒したのがその証拠）であろう。バグへ対抗出来るのは生まれ来る、真ゲッタードラゴンー真ゲッターロボGーとも呼ぶべき存在や進化を重ねたマジンカイザーのみであると言っている。その変化を研究者へ転身した神隼人は新基地で捉えていた。

—2年後 日本 某地

新たな基地で新早乙女研究所の元所員であった「橘博士」と共にゲッター線開発が凍結された中でもゲッターと同等の能力を持つ合体型スーパーロボットを開発中の元ゲッターチームの神隼人は奇妙な2人組と出会ったが、そのうちの一人に戦友の流竜馬の面影を見出していた。

「……どういう事だ貴様！」

隼人は珍しく驚きの感情を顔にしながら目の前の流竜馬によく似た青年を問いただす。その青年は態度や立ち振る舞いなどは竜馬を思わせた。そして自らの名を言う。

「あんたが驚くのは無理はねえな、神大佐。俺の名は流拓馬、平行世界での流竜馬の息子だよ」

「竜馬の……子だとおお！？」

その流竜馬によく似た青年は自らの名を流拓馬ながれたくまといい、平行世界での竜馬の子と言った。確かにそう言われてみると顔立ちなどは竜馬にそっくりだし、態度も似ている。DNA鑑定でも完全に親子だと認定され、納得せざるを得なかった。

「俺達は真ドラゴンの導きでここに呼ばれた。ある奴を止めるために」

「真ドラゴン……だと!？」

「そうだ。元の世界で真ドラゴンは俺達に言った、並行時空で奴に人類の進化を絶やさなせないためにはこの方法しかない、と……」

拓馬はある世界でゲッターロボアークを駆って、奴、に戦いを挑んだが、圧倒されて窮地に追い込まれた時に真ドラゴンが現れ、危機を救われた。その時にドラゴンの意志が彼に話しかけたのだ。（彼は知る由もないが、その声はかつてドラゴンと共に眠った車弁慶の声であった）

「……それで俺達はこの世界に来た。ゲッターアークと共に」

彼らが持ち込んだゲッターロボ「ゲッターロボアーク」は早乙女博士が生前に残していた最後の新ゲッターロボの設計図案を具現化したと言っても過言ではない。この世界の技術を加えればこの世界の真ゲッター以上の戦力になるだろう。それでも太刀打ち出来ない敵とはいったい何者だろうか。

「その敵に対抗するためにゲッター線はドラゴンを急激に進化させたというのか」

「そうだと思う」

「……！」

隼人は唸った。それほどまでに強大な敵となれば現在建造中のプラズマが主動力の「ゲッターロボ號」では到底太刀打ちできないからだ。

「いやゲッターロボ號は完成させるんだ」

「どういう事だ、拓馬」

「それが運命だからさ。俺は転移するときゲッターを操ってきた者達を見てきた。親父やあんたを初めとする初代チーム、一文字號、橘翔、大道凱の2代チーム……あんたにはこれから2代目のチームを集める宿命が待ってる」

拓馬は隼人がこれから2代目ゲッターチームとなるであろう面々を集めることは宿命だと言った。そしてこの世界の、父、竜馬を再起させるのは息子の自分の役目だともいった。

「…？　そういえばお前が息子ということは…、あいついつ結婚したんだ？」

「いや籍は入れなかったみたいだ。親父は俺の世界では結婚式も挙げないまま真ゲッターで死んでいったみたいだしな」

これは多少事実と異なる。実際には拓馬の母は竜馬の所に押しかけ女房のような形でやってきて、いつの間にか拓馬を身ごもっていただけである（拓馬の世界の竜馬が聞いたら、！？、と飛び上がるであろが……）

「ゲッターアークの修理は終わるのか？」

「あと少しだ。暗黒星団帝国に対抗するために突貫で行ってるからな」

「2号機のパイロットはどうするんだ？　俺と猥を入れても2人しかないぜ」

「俺がやる」

「大佐が？」

「そうだ。お前らの世界と違って、この俺は現役バリバリのパイロットだからな」

この世界の神隼人は未だ百鬼帝国と交戦中の状態で科学者として転身したので肉体的問題は抱えていない。このことと年齢の違いを並行時空での違いかと感心した。（拓馬達の世界での隼人は拓馬の時代から20年以上前のプロフェッサー・ランドウという敵との最初の戦いでパイロット生命を失っているのと拓馬の時代では隼人は壮年期を迎えていたので、現役当時の青年時代の容姿を拓馬は初めて

目にしたことになる)

「それと教えてくれないか、大佐。暗黒星団帝国とは何者だ？」

「この世界では人類は急激に宇宙に進出してゐるんだが、宇宙と行く
と当然他の星間国家に出会ふだろう？ 暗黒星団帝国は人類が出会つ
た国家としては5つ目（きちんとした国家の体をなしているという
点での事。イスカンダルを含めている）だが、地球は運悪い事に出
会つた国家のぼぼすべてが侵略国家でな。奴らは上手いことに政府
中枢を狙つてきたので、軍は組織だった動きを封じられた。一部の
有志が抵抗運動を続けているのさ。俺はそこに合流するつもりだ」

「なるほど。面白いじゃねえか」

「どこへ行く？」

「アークを動かす前に親父の所へ行く」

「竜馬の所にか」

「そうだ。不拔けてゐるっていう親父を打ん殴ってくる」

「大丈夫か」

「俺の体は不死身なんでね」

拓馬は竜馬を打ん殴ると言つて出かけていった。竜馬は空手の達人
だが、拓馬も鍛えられているので竜馬もただですむまい。隼人は不
思議な次元を超えた親子の出会いに感慨ひとしおであった。

一フェイトとスバルは改めてティアナの、手際の良さ、に関心させ
られていた。アフリカ戦線で、かのトップエースと謳われる「ハン

ナ・ユスティーナ・マルセイユ」と共に戦っていただけあって戦略的・戦術的判断力にさらに磨きがかかっている。他のウィッチから受け取った40mm機関砲をウィッチとしての力を行使して撃ちまくった。

「いつけええっ!!」

当然ながら使い魔の耳と尻尾が出現している状態で撃ちまくっているのも、それを見ているフェイトは目が点となってしまっている。無論彼女にとってウィッチは最早見慣れた存在だが、ミッドで直接でないとはいえ部下（ティアナ・ランスターは機動六課在籍時にはなのはの直接の部下である）であったティアナが魔女^{ウィッチ}へ転身したのを改めて目の当たりにし、開いた口がふさがらない思いであった。弾を撃ち尽くすと瞬く間に弾倉を取り替えていく。

「さすがティア。慣れてるね」

「アフリカ戦線でマルセイユ大尉やライーサさんに色々仕込まれたからね。このくらいは軽いもんよ」

ティアナはスバルにそう返す。それは激戦地であるアフリカ戦線で生き残ってきたティアナの自負であった。転身後は戸惑う所が多かったが、ウィッチとして戦ううちに自分の力に自信もついたし、稲垣真美という相棒と出会うこともできた。

「アフリカに行ったことで自分は、変れた、と思う。行かなければ今頃あたしは相変わらず力を求めて無茶して、なのはさんに徹底的に打ちのめされただろうな。」

闘いながらそう述懐するティアナ。転移前になのはが行った事がよほど堪えているのだろう。最もそれは前大戦時の歴史改変前のこと

であり、今はなのは自身も11歳時の経験で、打ちのめされる怖さと、自分が築きあげてきたものが否定される事、の気持ちを痛いほどよく分かる（なので、なのはには19歳になった今でも、ゲッターロボ號との交戦で負った左手の傷が生々しく残っている）ので、そのような感情に身を任せての懲罰的行為は決してしないだろう。

「私も遅れないよ」

フェイトはバリアジャケットを纏うと戦闘態勢を取る。ただし魔力温存を図っているのか、獲物はバルディッシュ・アサルトではなく、前大戦時に黒江から授かりし日本刀の「虎鉄」である。反りが極めて浅く、武骨な反り浅く伏せごろで小切先詰まる、竹刀に近い姿のこの日本刀は江戸期以降の特徴がよく現れ、一般に「寛文新刀」と呼ばれる。その中でも名刀と謳われ、切れ味鋭い。黒江から教わり、10年かけて形にした魔力の制御法で切先に魔力を宿らせ、敵兵を斬って、斬って、斬りまくった。

「はあああっ!!」

かつて、戦国時代に甲斐姫という、石田三成は愚か、かの真田一族の名将を以てしても打ち破れなかった美貌と武芸に長けた姫武將がいたが、フェイトはそれを想起させる奮闘を見せ、敵を薙倒していた。この時、フェイトにもう、戦いに対する迷いはなかった。

—……そして。

「親父を打ん殴ってきたぜ。さあ、ゲッターロボ発進だ」

拓馬は竜馬の肩を借りて立っている。どうやらそうとう殴り合ったらしく、2人ともボロボロだ。

「竜馬、お前の息子は大した奴だよ」

「ああ、全くだ。どら息子が世話になるぜ、隼人」

「フフ、さあ出撃だ」

「ん？ゲッターのパイロットは3人必要じゃねえのか？」

「心配ない。敷島博士が修復しておいた旧ゲッターをお前好みに改造・ひとり乗りにした、ブラックゲッター、を用意しておいてくれた」

「ふふ、あのジジイには礼を言っとくか」

ゲッターアークとブラックゲッターが格納庫から発進する。ゲッターマシン状態のアークで拓馬は叫ぶ。

『チエエエエンジ！！ゲッターアーク！！』

歴代ゲッターで最もワイルドな戦いを見せる者、アーク。次元を超えてここに見参したのである。

行間その22「ヤマトよ永遠に 10く青く輝く炎でく」

ー未来の地球でゲリラ活動に参加したなのは達。正規軍組織が崩壊した以上、頼れるのは自分達の力のみだった。

（まさか私が、ベトコン、まがいの事やるなんてね……。お母さんやお父さんが聞いたらなんて言われるかな？）

なのははかつてのベトコン張りのゲリラ活動をする事になった事にいささか躊躇いがあった。だが、この世界の人々の事を思うとそうは言ってられないのが現状であった。

時として、戦い、は憎しみの連鎖を生む。幼少時代に起こった、父、の事故（後に父の仕事先の人間を狙ったテロだと知ったが）を起こした人物を憎んだ時は確かにあったし、自分に11歳の時まで植えつけられ続けた強迫観念もその事が原因だった。だが、色々な人たちと出会う事で、戦い、の本質を知ったし、ジオン軍の生き残り達と戦うことで『理想や大義に殉じ続ける崇高な魂』を知った。

ー大事なモノを守るためには戦うしかないんだ……。！

これが10年間の間に行き着いた結論だった。歴代の仮面ライダー達や連邦軍の錚々たるエースたちから学び、自分が選び取った道。本来なら縁が無かったであろう軍服に袖を通してまで歩むと決めた茨の道。

ー今頃歴代の仮面ライダー達は暗黒星団帝国だけじゃなくなって組織とも戦ってるはず。たぶん他のみんなも……

混沌とした状況が続く地球。宇宙規模の戦争が立て続けに起こるなど、多分故郷の世界で言っても信じてもらえないだろう。ジオンやネオ・ジオン、ティターンズ、クロスボーン・バンガード、ザンスカール帝国……近年起こった戦争だけでこれだけの国や組織が蜂起し、地球圏に惨禍をもたらしている。その過程で凄まじい進化を遂げていく兵器。さらに宇宙的脅威……数えるとキリがない。

「……そういえば美琴さん、今頃なにしてるんだろう」

なのははかつて共に戦った御坂美琴の事が気になっていた。この危機を知れば真っ先に駆けつけてくれるだろうが、美琴は前の時に「自分たちの運命を好転させないといけない」と語っていたし、暮らす時代も自分の時代とそう変わらない。出来るものなら美琴が暮らしている時代の、学園都市、に行って知らせたい。だが、今はタイムマシン関係部局も敵に抑えられている以上、それは叶わぬかもしれない願いだ。

「美琴ちゃんの事だ。今頃頑張っているさ」
「そうですよね」

アムロの通信越しの声になのはは頷く。美琴の性格なら無茶してでも戦う道を選ぶだろうし、それにあの能力ならどうにかしてしまうのではないかと思ってしまう。あの時一ハワイ戦いで仮面ライダーV3が美琴に教えた、自分の身に起こる過酷な運命、。それを知った上で行動を起こすのは当然だろう。無茶するのではないか、となのはは心配していた。

「……まずいですよ大尉」

「どうした？」

「ジオンです！！」

通信車両を操縦する兵士がアムロに報告する。どうやら暗黒星団帝国以外の敵影を捉えたようだ。熱量や音響からして旧・ジオン軍のモビルスーツだと兵士は報告する。

「敵の機種はザクの後期型に熱帯仕様のドムに……待ってください。コイツは厄介だ。グフ・カスタムですよ！！」

「チィッ！今は人類同士で争いあう時では無いというのに！」

アムロは混乱に乗じて現れたジオン残党軍をこう罵った。自らの理想や大義に殉じるのはかつてだが、こんな地球全体の危機の時にまで自らの思惑で動くのはエゴに過ぎない。

ジャベリンを率いてHīーヴガンダムが動く。ライフルを構えて迎撃態勢を取る。

『グフは俺が引き受ける！！みんなは他の連中に当たれ！』

『了解！！』

アムロはジオン軍の慣習をよく知っていた。ジオン軍の生き残り達はいいていザクかドムで来るが、グフというのは生産台数はともかくも戦後の残存数から行って希少であり、熟練者及びエースの乗機であったからだ。一年戦争中の自分が戦った「蒼き巨星」ランバ・ラルや、東南アジア戦線の「ノリス・パッカード」の獅子奮迅ぶりは連邦軍に恐怖として身に染みており、旧式ながら連邦軍が最も恐れる機体の一つなのだ。

「大尉、私も行きます！」

「……わかった。無茶はするなよ」

「……ありがとうございます！」

アムロは戦いに参加しようとするのはを止めなかった。彼女の性格をよく知っていたからだろう。こうしてなのはは都合、10年ぶりに実戦の場に立った。

一一年戦争からもう年月が経ったという事を微塵も感じさせないジオン地上軍東アジア方面軍の残党は自らの戦いを始めた。一番旧式のザクは足止め役として、ドムとグフで斬り込む。

ドム・トローパーンの熱核ジェットエンジンによるホバーが唸りを上げて連邦軍の最新鋭機に往年の恐怖を呼び覚ます。ドム系統の真価はシュツルムファウストやバズーカによる火力だけでなく、縦横無尽に地上を駆けるその機動性だ。その機動性は新型機にも十分に通じる。ドムトローパーンは最新鋭のはずのジャベリンを翻弄し、格闘戦に持ち込む。

ヒートサーベルとビーム・サーベルがぶつかり合い、火花を散らす。

こうなると後はパイロットの実力の問題だ。モビルスーツのパイロットの真価が問われるのはこの白兵戦闘の瞬間なのだ。

「おおおおっ！！」

ジャベリンのパイロットは剣戟を行いながらとっておきのショット

ランサーの照準を合わせる。この瞬間が最も緊張させられる。

「いけ！」

ドムのヒートサーベルを足で蹴り飛ばすと、すぐに背中中のショットランサーをせり出し、撃った。いかにドムの重装甲であろうが、ガンダリウム合金さえ貫くショットランサーは防げない。穂先が回転しながらチタン合金製の装甲をぶち抜いていき……。電気系統に深刻なダメージを負ったドム・トローパーはモノアイが消え、糸の切れたあやつり人形のようにその場に倒れ伏す。

「ふう。ショットランサーがあって助かったぜ」

ジャベリンのパイロットは愛機の性能と武装に感謝して次の敵に当たった。

「ほう。噂の、Magical Girl、のお出ましか……ん？
アレは高町か。因果だな」

此頃には3年前のフェイトとヴィータのケースがジオン残党軍に知れ渡っており、時空管理局にいた元ジオン軍兵士が合流するケースが出てきているので、彼らもミッドチルダの事は知っていたし、ミッド・ベルカ式双方の魔法の事も知っていた。なので対策は行われていた。グフ・カスタムを駆るこのパイロットもその一人。一年戦争終結時にミッドチルダに飛ばされ、手に職をつける為に時空管理局に入局した。それから数年後に教導隊に入り、教官をしていた。その時の教え子の一人がなのはであったのだ。

『久しぶりだな高町』

彼は外部スピーカーをオンにして、久しぶりに教え子との対面をした。皮肉にも敵として。

「その声はまさか……、教官、！？なんでここに！？それにどうしてジオン軍のモビルスーツを……！？」

『そもそも俺はジオンの軍人だ。事故でミッドに来たが、ジオン軍人としての志は捨てていない。で、こっちと国交ができたときに帰って復隊した。それだけだ』

なのはは驚愕のあまり声が出なかった。かつての教官の一人が旧ジオン軍の軍人で、モビルスーツのパイロットで、敵として立塞がった。それが心を激しく揺さぶっていた。

「やめて下さい教官！こんな戦いなんて……！！」

『甘いぞ高町！！戦いにあるのは、生、か、死、だ！教えたろう！！』

彼はグフ・カスタムのシールドについている「6銃身75mmガトリング砲」を作動させ、なのはに向けて斉射した。

車のエンジンのような鋭い音と共に弾が打ち出され、葉莢が飛び散る。なのはは咄嗟にプロテクションEXを発動させ、防いだ。と、言っても応急処置的なものなので、モビルスーツレベルの火砲相手では一回が限度だ。

「くっ！！」

なのはは咄嗟に離脱し、ビルの間を塗って飛行するが、グフ・カスタムは実に器用だった。、ヒートワイヤーを使い、三次元的な機動を見せ、なのはを猛追していった。

なのはの弱点を彼は把握していた。、推力はあるが小回りがきかない。その点を熟知しているからこそ彼女の大推力が発揮出来ないであろう場所へ追い込むのだ。

『連邦の白いヤツといえどすぐにはこれまい』

「くっ!!」

なのはは焦りながらも誘導弾の一つ「デイベインシューター」を放つが、グフ・カスタムのヒートサーベルで切り払われてしまう。

『誘導弾の使い方が甘いぞ、高町。これなら空間認識能力の高いパイロットなら新兵でも見杀れる』

そういう、彼はグフ・カスタムの性能を存分に引き出し、なのはを追い詰めていく。最短砲撃魔法程度ならグフ・カスタムのシールドで十分防げるし、スターライトブレイカーやデイベインバスターは一定の時間、隙が生まれるので見切る事は容易い。ジオン軍の誇る白兵戦闘用モビルスーツの面目躍如であった。

一なのははこの時、モビルスーツの威力を改めて実感し、震えていた。

行間その23「ヤマトよ永遠に 11」(前書き)

え〜ここ最近宇宙戦艦ヤマトの原作再現を行っております。ご注意ください

行間その23「ヤマトよ永遠に 11」

―地球連邦軍はゲリラ化し、抵抗運動を続けていた。マシンカイザーの参戦により形勢を有利にした横須賀方面隊はドック内に繋留されていた主力戦艦改級戦闘空母第12番艦「笠置」とウラガ級護衛空母の奪還に成功していた。

―主力戦艦改級戦闘空母第12番艦「笠置」艦内

「波動エンジンのフライホイール始動は？」

「良好です。鯉昇出力まで後3分」

艦長席には横須賀方面隊へ合流に成功したレベイル將軍がいた。艦を指揮できる人材が自分しかないのとおりあえずこの艦を動かす事にした。。

「物資はどうだ？」

「はっ。ミサイルなどは満タンですので問題はありませんが……」

「艦載機か」

「はい。格納庫はカラで、今のところはマシンカイザー一機しか収容しておりません」

「フォン・ブラウン市やグラナダの航空隊に連絡をとってくれ。彼らなら応えてくれるはずだ」

「了解」

そう。本来の所属航空隊が収容されていないこの空母は丸裸も同然な状態なのだ。それにこの主力戦艦改級戦闘空母自体、存在そのものが希少なのだ。ウラガ級護衛空母やグァンタナモ級宇宙空母、ペガサス級強襲揚陸艦が空母戦力の大半を占める中、本来は戦艦とし

て設計された主力戦艦級をアングルドデッキ付きの空母へ改装したものを再設計したのは、波動エンジン搭載艦と共に遠洋航海可能な空母を求めた用兵側の都合によるものだ。初陣のフェーベ航空決戦で成果を上げたが、その後2隻が戦没。修理できた6隻と別働隊の生き残りである2隻が艦隊として1944年で活躍したのは記憶に新しい。この笠置はメカトピア戦争末期のどさくさにまぎれて建造された新造艦。後期生産ロットの建造のために当初からスーパードボットの運用も視野に入れて建造されたので艦の受け入れ態勢は他艦より整っている。だから黒江達も最優先目標に掲げたのだ。

「將軍、メイサー基地方面よりゲッターロボの反応が二体きます」

「何、ゲッターロボだと」

「ハッ……いかなされます」

「取り敢えず着艦を受け入れるように返信したまえ」

「了解」

メイサー基地とは新早乙女研究所亡き後に神隼人が同研究所所員の生き残り「橘博士」と共に連邦の出資で建設した新たな研究所兼基地。そこではゲッタードラゴンや真ゲッターを含む過去のゲッターロボも整備可能かつゲッターロボを新造可能な設備がある。そこではゲッター線を使わないゲッターロボが新造中であるが、レーダーの反応は旧来のゲッターエネルギー駆動のゲッターロボである。

見るとゲットマシン状態の物が一機と初代ゲッター1の改造機が一機近づいてくる。

取り敢えず着艦を受け入れ、パイロットから話を聞くことにしたレビル將軍はそれぞれのパイロットを艦長室に呼び出して事情の説明を求めた。

一艦長室

「君は竜馬くんの別次元での実子……ということになるのかね？」
「そういう事になる。顔だって似てるだろう？」

レベル將軍はゲッターロボアークの操縦者の青年がゲッターチームの流竜馬の、子に当る事にしきりに驚いている。ゲッター線がもたらした奇跡とでもいうのだろうか。そして真ゲッターロボ以上の力を持つという、神の戦士、ゲッターロボアーク。彼らがこの次元に来たのには何か意味があるはずだと隼人が注釈を入れる。

「まいったぜ。これじゃ甲児の奴に何か言われちまう」

「別次元での事だからお前自身には影響は無いが、とんだ災難だな」
「人事だと思って気楽に言ってくれなせ……」

竜馬は兜甲児に何か誤解され、噂を広げられてしまう事を危惧するあまり肩を落としている。甲児の性格は重々承知しているが……それでも女性陣に誤解されると噂をとくのも一苦勞なのだ。竜馬はひたすらそれが心配事だった。

波動エンジンの出力が鯉昇出力に達したらしく、艦が浮き上がる。

ひとまずの航海先は土星のタイタン基地。そこに宇宙軍の新設された第7艦隊や第3艦隊が「アンドロメダ改級戦略指揮戦艦、しゅんらん、」と共に控えている。艦内の廊下の展望室で穴拭智子と黒江綾香は感慨に浸っていた。

「宇宙……か。前の時は地上にいたから初めてよ」

「いいねえ。私なんか宇宙で戦ってたから楽しむ暇なんてなかったぜ。戦闘の度にミサイルの雨霰だったからな」

「そういえばあんた、バルキリー、動かせるんだっけね」

「まーな。私が上にジェットの導入推し進めさせたのはそれが原因なんだ。あのスピードを覚えちまうとレシプロじゃ物足りなくてな……」

それは彼女の偽りなき心であった。マッハのスピードを覚えてしまうとレシプロにはもう戻れない。ノイエ・カールスラントでシュワルベのテスト飛行をしたアドフィーネ・ガランド少将は、まるで天使が後押ししているような、とその加速を称したが、人類が得た翼の中では究極なまでに速い可変戦闘機（Variable Fighter）の感覚を知ってしまうと余計に戻れなくなる。

「武子にジェットストライカーを勧めたのももしかしてあんた？」

「ああ。久しぶりにあったんで、ついな」

「ついて……ああ事故ってないわよね。ジェットとレシプロじゃまるっきり感覚違うんだから」

智子は親友が事故っていないことをひたすら祈った。実はジェットストライカーへの機種転換訓練に智子は苦労したクチで、2、3台ほどぶち壊してしまっていた。巴御前と言われた自分でこれなのだから、いくら同じエース級でもジェットに触れた経験がない加藤武

子に扱えるのだろうかとか心配してしまう。

「それ言ったらお前また辺地に送られちゃうぞ。フジの奴は意外に策略家だから」

「望むところよ。そういえばストライカーって宇宙では使えないわよね？」

「当たり前だろ。宇宙は空気が無い。だからウィッチの中で可変戦闘機とか訓練する奴最近多いんだよ。お前も備えておけよ」

「……へっ!？」

智子は目が点になった。可変戦闘機の訓練を受けることになるうとは……。

黒江はちゃっかりとフォン・ブラウン市の新星インダストリーに連絡をとって自身用に確保していた「VF-29 デュランダル」試作3号機（空洞試験用の機体を完成させたもの。ミッドチルダで使ったのもこの機体）を回すように連絡を取っているが、智子に回す機体は何にするか。黒江は考えを張り巡らしていた。

一戦場は過酷になるだろうから、贅沢だがVF-25Fでも回しておくか？ 若葉マークの穴吹じゃあ、じゃじゃ馬なVF-19系統は無理だしなあ……。アイツはゼネラル・ギャラクシー系は嫌いそうだし。

バルキリーの機種名が自然と出る辺り、しっかりとこの時代の思考回路に染まっている黒江であった。そして艦は月軌道に近づきつつあった。月にはコスモタイガーやVFの練度が高い航空部隊がいるはず。彼らははたして味方についてくれるのだろうか。

一方……1945年

「うわぁーシャーリー、こんなどこで手に入れてきたの？」

「近くに連邦軍の奴らの空軍基地があつてな。余った奴を回してくれたんだよ」

501が解散した後、シャーロット・E・イーガーはフランチェスカ・ルッキーニを連れてアフリカに転戦していた。彼女らは野良猫のように、気ままに各地を転々としていたが、オートバイで行動しているとティターンズに狙われる可能性が強いことから、立ち寄った基地で連邦軍の兵士たちが気を使って可変戦闘機をプレゼントしてくれたのだ。機種は「VF-9 カットラス」。未来ではかのダンシング・スカル隊が使用した事で有名なカナード翼付きの前進翼機である。近代改修により後発機の熱核バーストタービンに換装されているので、性能は製造当初の比ではない。

「しっかり捕まってるルッキーニ！コイツの加速はストライカーユニットより遙かに凄いぞ！！」

「う、うん！！」

新星／P&W／RR熱核バースタービンエンジン「FF2550J」×2の強大な推力が機体を瞬く間に超音速へ押し出す。シャーリーも思わず顔をしかめるほどの加速だ。ルッキーニは「ふにゃあゝ!？」と悲鳴を上げている。1940年代ではまずあり得ない、この光景であるが、未来世界との交流ではこのような奇妙な光景をも生み出していた。

バルキリー。22世紀以降の人類がその力として鍛え上げた鋼の翼は青空を駆けていく。そして彼女らと鉢合わせするものもまた人類が鍛え上げた翼。

「何っ、レーダーに反応……IFFは……敵!？」

シャーリーは咄嗟に機体を横滑りさせて横から飛んできた機銃弾を避ける。敵戦闘機に補足されたようだ。

「ルッキーニ、敵はどんな奴だ!？」

「待つて……カナード（先尾翼）とデルタ翼の組み合わせの奴だよ！ジェットは単発!！」

「単発にカナード翼とデルタ……グリペンか!？マジかよっ!」

シャーリーは舌打ちした。サーブ 39 グリペンといえば第4・5世代ジェット戦闘機の雄と以前「赤城」で見た辞典に記されていた強力なマルチロール・ファイター。とうとうアフリカに配備されたのか。

操縦桿を動かし、必死にミサイルのロックから外そうとシザーズというマニニューバーを取る。空戦機動力は当然ながら可変戦闘機であ

るこちらに部があるはずだが、手慣れたパイロットが操縦しているのか、まるで鳥のように華麗な機動を見せている。

「どうするシャーリー!？」

「いくら機体に差があろうがペーペーなこっちとベテランの向こうじゃ話にならない! なんとかして振り切る!！」

逃げに徹するシャーリーだが、敵はポジションのとり方からいってプロだ。捕まえた獲物は逃がさない性分なのだろう。最高速ではないが、マッハ 1・7の速度でカットラスを追う。一方のシャーリー達は機体ポテンシャルを引き出せていない。そこがミソだ。

『そのカットラス!! スプリットSで逃げろ!! コイツは俺が引き受ける!!』

『あんたは一体!？』

『連邦海軍航空隊のTACネーム、ネメシス、1。お前らの反応を早期警戒管制機がキャッチして俺達に知らせた。今超音速でスクランブルしてきた!! あと数秒もあればお前らと接触出来る!!』

『り、了解っ!!』

ーそれから数秒で通信してきた機体が視認できた。星を象ったエンブレムを中心にした特徴的なマーキングのF-14D、スーパートムキャット、の4機編隊。流麗なフォルムはひとめぼれしそうなほどにカッコイイ。VFA-41というリベリオン式の飛行隊番号がマーキングされている。

『待たせたな、騎兵隊の到着だ』

メネシス1はそう言うシャーリーにサムズアップをしてみせ、すぐにグリペン狩りを開始した。

翼下に敢行した「AIM-54 フェニックス」ミサイルを僚機と共に一斉射撃。、長槍を投げる、要領で追いついていく。

行間その24「ヤマトよ永遠に 12」〈ストライクウィッチーズ〉(前書き)

半分ストライクウィッチーズ第一期最終決戦の原作再現が入りますが、状況がかなり異なります。

行間その24「ヤマトよ永遠に 12 〈ストライクウィッチーズ〉」

一、真^{まこと}。その言葉の意味は真であり、2199年以降では特に真ゲッターロボを指す言葉としての意味合いが強まっていた。その圧倒的な破壊力は敵に恐怖を与え、味方にさえ畏怖を与えるものであった。

一穴吹智子は前の戦いから真ゲッターロボの事が気になっており、ゲッターチームの一人「神隼人」にその事を尋ねた。

「隼人さん、どうして真ゲッターを持ってこなかったんですか？」

「ああ、その事か。君はまだ知らないのか」

「? どういう事です」

「2年前の事故以来、真ゲッターは封印されたんだ。ゲッター線暴走の張本人だと見られてな……政府はこの結果に臆し、ゲッター線開発を禁止している」

隼人は2200年の早乙女研究所での事故の詳細を智子に教える。ゲッタードラゴンのメルトダウン、ゲッター線暴走……そして真ゲッタードラゴン。それらを口で言い表すのは難しいと言う。

確かに早乙女研究所の事故はゲッターの進化のための予定調和のように起こったとしかいいようがない。その裏付け隼人達自身が、ゲッターの行き着く先、を垣間見た事で証明されている。智子はゲッターに纏わるそれらの話を驚きを持って聞き入っていた。

「真ゲッタードラゴン……ゲッターエンペラー……？」

「ああ。それしか俺の口からは言えん」

「……ゲッター線って一体……」

「早乙女博士さえそれを完全に解明は出来無かった。だがその仕事は俺が引き継がねばならん。死んだ仲間達のためにもな」

隼人は死んでいった多くの仲間達の為にもゲッター線研究を引き継がねばならないという使命を語った。無論パイロットとしても、だ。

因みに真ゲッターロボの威力は智子の故郷の世界にも知れ渡っていた。1944年のウォーロックが投入され、暴走した時に連合艦隊の空母「赤城」の船体と融合・合体してウィッチ達を窮地に陥れた時に現れたからだだった。

—1944年

「やっぱりこうなったか!!」

ZZガンダムのコックピットでジュドー・アーシタは呻いた。ブリタリア軍大将「トレヴァー・マロニー」が用意した兵器が暴走を起こす事を感じており、危惧していたからだ。

『いったいどうなっている!?!』

501が解散させられ、扶桑皇国海軍空母「赤城」で帰国の途に就いていた坂本美緒からの通信にジュドー・アーシタは答える。自身の予感が最悪の形で中した事を。

「みりゃ分かるだろ!アイツはもう、ウォーロック、じゃない!別

の何かだ!!」

『別の何かだと!?!』

「そうだ。色がネウロイのそれになってることがその証拠だよ!」

坂本美緒はジュードーに言われてその兵器「ウォーロック」を赤城の甲板から見上げる。確かに装甲が変色し、ネウロイ同様の存在へ変貌した事を表している。この時代の通常兵器

でしかない赤城型空母ではウィッチの機動力とネウロイの火力を持つウォーロックを撃墜することは不可能であった。

「まずいこのままだと間違いなくあの空母沈むぞ」

「俺が行く!!」

シーブック・アノーがF91の機動力で赤城に接舷するといい、実行に移す。このままでは坂本達は間違いなく海の藻屑だ。F91の機動力ならウォーロックの攻撃は軽く避けられるし、回収も容易だ。ビームを掻い潜り、（通常状態。最大稼働はしていないのだが、それでもZZを超える機動力を発揮している）赤城へ接舷する。

『みんな、早く乗れ!!』

「シーブック、お前……」

「で、でも赤城にはまだ人がいるんですよ!?!」

『艦長には既に総員退艦命令を出すように言っている!! アイツが狙いを定める前に早く!!』

既に連合艦隊空母「赤城」は傾斜が10度に達している。対空火器は射撃不能。装甲も融解が進み、止めをさすのは容易にできる。とりあえず負傷している坂本美緒を最優先でF91の腕に乗せ、ペリィヌも同乗する。その直後、赤城は止めの一撃により沈没。その時の爆風で、坂本の車椅子の手すりから手を一瞬手を話していたペリィヌが吹き飛ばされる。

「しまった!!」

「ペリーヌ!!」

「ペリーヌさん!!」

坂本美緒と宮藤芳佳の悲鳴が響く。落下していくペリーヌだったが、間一髪でシャーリーの乗る複葉機「ソードフィッシュ」に救助される。

「シャーリー、お前……」

「なんとなくいやな予感がしたから引き返したんだ。案の定みたいだ。菅野の奴もこっちに向かってる」

シャーリーはソードフィッシュの操縦席でウォロックの機体を改めて見る。前に見たときとは明らかに違う。完全にネウロイ化した印象を受ける。

「こうなれば……宮藤、これを使い!!」

「はいっ!!」

宮藤芳佳は坂本美緒の策で車椅子に隠しておいた自身のストライカーユニット「紫電一型」を使い、戦闘を開始した。

『芳佳ちゃん、大丈夫か?』

ZZを駆るジュードーが芳佳のもとに駆け寄る。芳佳は凜々しい表情で『大丈夫です』と答えるとウォーロックと戦闘を開始した。

—1944年の9月には501の基地も基地機能が復旧し、マロニー大將の、指令で501のストライカーユニットのほとんどはそこに集められていた。ゲルトルート・バルクホルンはいの一番にストライカーユニットを、奪還すべく基地に殴りこみをかけたのだが……。

「どけええっ！私の邪魔をするな！！」

基地には21世紀以降の装備を備えたティターンズ地上部隊が控えていた。マロニーの差し金であろう。バルクホルンは野心に溺れたあの軍人を心のなかで罵った。

「悪いが……こちらとしても、手駒を手放すわけにはいかないんだよ」

アサルトライフルを構えた兵士たちが一斉にバルクホルンにむけて斉射を行う意図をみせる。さしもの彼女も冷や汗が引き出る。

(くそっ！！どうする……！？)

頭の中で選択肢を選びとる。

一宮藤のためにもこの場を引くわけにはいかない!!

バルクホルンは弾雨をくぐり抜ける選択肢をとり、突進する。

アサルトライフルが火を噴かんとした瞬間だった。誰かの声が響き渡る。

『そうはさせるか!!』

「うおおおお……らああああっ!!」

基地の建物の一番高い部分から一人の男がハンガーに飛び降りて現れた。その男は扶桑の空手着を身をまとい、ウィッチをも遙かに凌ぐ身体能力で兵士たちをなぎ倒して行った。撲殺しているといっても過言では無い。拳ひとつで多数の兵士と渡り合い、一方的に薙ぎ倒すのは常人にはとてもできない行為だ。

「馬鹿な……何故お前がここに!？」

ティターンズの分隊長が恐れおろめき、怯えた声で言った。その男をよほど恐れているのか、足はガクガク震え、顔色も土気色になっている。

「、流竜馬、 ああっ!!」

バルクホルンをかばうように立っているその男こそゲッターチームのリーダー「流竜馬」であった。竜馬は得物を追い求めるケモノの

目でファイティングポーズを取っている。目が独特の狂気を発しているのも、バルクホルンも思わず足がすくんでしまったほどの迫力を発揮している。

「真ゲッターが俺達をここへ導いた。何故かは知らんが……関係ねえ世界で跳梁跋扈するだけでなく、核までを使おうとしたてめえらは許せねえ!!」

竜馬はそう言い放ち、兵士をまた一人撲殺する。

「核爆弾だ!!? どういうことだ!!? 説明しろ」

あまりの衝撃発言に驚いたバルクホルンは竜馬に説明を求める。竜馬は答えた。

「この基地の地下に核弾頭バズーカを持つガンダムが秘匿されていた。扶桑艦隊を全て吹き飛ばす威力は充分にある核弾頭が積まれている」

「何っ!!? それじゃマロニーは!!?」

「自分の野望のためには扶桑が邪魔だから501共々吹き飛ばそうとしたんだろう。もし撃ったら広島程度の面積はクレーターだ」

バルクホルンは聞いている内に怒りがこみ上げてくるほどの憤りを感じた。核は都市を吹き飛ばす威力と後の世にも影響をおぼす危険性から使用が制限されたほどの禁断の兵器。それを味方であるはずの部隊に撃とうとしたのか。

「こうなったらあいつをぶちのめさねば気が収まん!! おい私も連れて行ってくれ!!」

「いいぜ。ただしエーリカってお嬢ちゃんが先に向かってるけどな」

「ほう。それは面白いつ!!」

「遅れんなよ？」

「私を誰だと思っている？」

バルクホルンは意を決し、竜馬と共に殴りこみを賭けた。2人の行くところには屍が転がっていく。2人の怒りを表すように。

行間その25「ヤマトよ永遠に　くストライクウィッチーズく」2（前書き）

前回の続きです。

行間その25「ヤマトよ永遠に　くストライクウィッチーズく」2

ー1944年。トレヴァー・マロニー大將がその野心を利用された形で引き起こした、ウォーロック、投入と暴走。ネウロイとも本来の姿とも別の姿となったウォーロックは宮藤芳佳と戦闘を開始した。

ここでウォーロックはジェットエンジンによるスピードで宮藤芳佳を翻弄した。無論、彼女もそれなりの経験はあるし、ジュードやシーブックを始めとする、未来世界の連中に仕込まれたせいか、史実より戦い方は並行世界での自ら……つまり、空の宮本武蔵、『大日本帝国海軍中尉（死後）武藤金義』に近い。それを示すように敢闘精神旺盛な戦い方を見せているが、機銃を中々当てられない。99式20ミリ（未来世界の協力によって13ミリに再改造する意義が薄れ、ジェット機やモビルスーツに対抗するために大火力が求められたたので元に戻された）4号機銃はそれまでの機銃よりも弾道がさらに改善されており、当てやすいのだが、ジェットエンジンの機動力はそれを帳消しにするほどの威力を見せた。

「あ、当たらないっ!!」

『落ちて着け！相手の動きをよく見ろ。殺気を感じろ！』

「は、はいっ!!」

「すごいな。相手の動きに合わせて的確な指示を飛ばせている」

ジュード・アーシタは持ち前の実戦経験の感覚からウォーロックの動きを見切り、宮藤芳佳に無線で指示を飛ばす。芳佳はその指示通りに戦う。F91の手の上から観察している坂本美緒は芳佳に的確な指示を飛ばすジュードに関心したりであった。

「あれがニュータイプの力ですの？」

そう驚くペリーヌにシーブックは補足を入れる。ニュータイプといえども指示を飛ばすのは自然に出来る物ではない。アムロ・レイもそうだが、やはり戦場でのこういう事は経験がモノを言うのだ。

『いやニュータイプの力云々は関係ない。あれはアイツの経験則での判断だろう。あれでもアイツは2度のネオ・ジオン戦争を生き残ったクチで、実戦経験豊富だからな』

「やはり経験というのは大事というわけですね」

『そういう事さ』

シーブックはジュドーをそう称した。ジュドーは歴代のガンダム乗りのの中では古顔に位置し、経験はアムロ・レイに次ぐものを持つ（Zガンダムのカミーユ・ビダンは一線を退いていた期間が長いので、実戦経験という意味では3度以上の戦争を続けて戦ったアムロ・レイやジュドー、シーブックには及ばない）。ペリーヌは歴戦の勇士である彼らに賛辞を送りたいと感じ、芳佳の武運を祈った。

「これならっ!!」

芳佳は180。ロールし、背面飛行に写る。スプリットSだが、それをレシプロ特有の旋回性能で素早く実行し、さらに斜めに行う。スライスバックと呼ばれる機動である。菅野直枝から教わった機動なので思い切り荒いやり方での機動なのだが、紫電の誉エンジンは根をあげなかった。史実の誉エンジンが品質不良や粗製濫造で本来の威力を出し切れなかったのとはエライ違いである。そしてウォーロックの背後をとり、絶好の位置をとり、菅野から貰っておいた

刀を2刀流で取り出した……。

「ちょっとマニアックだけど……言ってみたかったんだよね。『双
おおおええんざあああんっ!!』」

平行世界の1980年代のどこかのアニメの如き叫びを上げながら
魔力を纏った2刀流の太刀を浴びせた。これに坂本美緒はこう反応
した。それはある意味やれやれと言いたくなる気持ちでの一言だっ
た。

「誰だアイツにサムライト○ーパー見せたのは……」

美緒はそうため息を付くが、近い将来自分も同じように扶桑の奥義
をこれでもかところっ恥ずかしいほどの声で叫ぶ事になるのだとはこ
の時は予想だにしなかった。それを現役復帰した戦友や先輩達に半
分ネタにされることも……。後その事で扶桑にて一悶着が起ころの
だが、まだ先の事であった。

基地では流竜馬とバルクホルンが基地司令部に殴りこみをかけてい
た。トレヴァー・マロニーをぶん殴るためだ。兵士をとにかく薙ぎ
倒し、無傷で司令部のドアまでたどり着く。

そこには既にエーリカがいたが、ドアがよほど頑丈に出来ているら

しくぶち破るのに苦勞している。

「あ、トゥルーデ！」

「ハルトマン、どうした？」

「さつきからドアをぶち破ろうとしてるんだけど、やたらと頑丈で……」

「機銃で破壊しろ！」

「それはいまやった。MG42じゃ歯が立たないよお」

「そうか……。ところで貴様、何かいい手は無いか」

「あるにはある。ちよいと乱暴だがな」

「言ってくれ。非常時にいちいち気は使ってられん」

「ずいぶんアバウトになってるねトゥルーデ……。いくら宮藤のためとはいえ」

「ああアイツが心配で……。ってこんな時に何言わすハルトマン！！こらそこお！！笑うんじゃない！！！」

気を取り直して竜馬が言う。

「対戦車用のグレネードランチャーでドアを壁ごとぶち抜く」

「オーバーかも知れないけどあの年寄りにはいい葉だね」

『竜馬、その用意は出来てるぞ！！』

「サンキュー、弁慶！！」

竜馬は旧ロシア軍の制式携帯式対戦車ロケット擲弾発射器「RPG-29」を天井を破壊して穴をあけたばかりの車弁慶から受け取ると、バルクホルンとエーリカを充分に離れさせると自分もドアからある程度の距離を置いて発射した。閃光と轟音が走り、派手に破壊音が響く。煙の向こうから悲鳴が聞こえる。マロニーの声だ。慌てふためき、狼狽している。

「よし、行くぞてめえら!!」

「おう!!」

流竜馬を筆頭に竜馬と合流したゲッターチームのメンバーも加えて阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられた。

いの一番にマロニーに近づいた神隼人は生身でマロニーの護衛兵の眼と耳、鼻をたたき潰したり、引きちぎる。生身で行なうので余計に怖さが引き立つ。しかも耳などが転がるのでそれをモロにみたエーリカは当分食事がのどを通らなかったとか。

「目だ!! 耳だ!! 鼻だ!!」

「ひいっ!!」

マロニーはこの化物の所業に恐れおろめき、年甲斐も無い悲鳴をあげる。次いで、バルクホルンがウォーロックなどという物に、妹のように思っている宮藤が殺されるかも知れないという怒りと憤りで魔力による筋力強化を加えた拳で顔を思い切り打ん殴った。

「キサマあああつ!! よくもおおつ!!」

「ノオオオオオオつ!!」

綺麗に幻の左が決まり、鼻血を盛大に吹出すマロニー。さらにエーリカによる飛び蹴りと竜馬の空手チョップ、弁慶の背負い投げを食らう。彼を嫌っていた兵士たちは拍手喝采でその行為を黙認していた。

行間その26「ヤマトよ永遠に（VF-X）」（前書き）

ゲーム「マクロスVF-X2」の要素が入ります。

なおエイジス・フォッカーとロイ・フォッカーの関係に関して独自設定があります。

行間その26「ヤマトよ永遠に（VF-X）」

一穴拭智子などが乗艦する「笠置」は月で艦載機部隊を多数搭載した。コスモタイガー？後期ロッド機が主力の月面第3航空隊やVF-19とVF-25を装備する部隊、たまたま近代化されたVF-19Aの受領のために太陽系を訪れていた独立部隊の精鋭「VF-Xレイヴンズ」もこれに合流。それなりの規模の空母部隊となって土星を目指した。

格納庫では次々と艦に収納された各種艦載機の整備が行われていた。ヤマトクルーとその一行が敵の包囲網を掻い潜ってイカルスへ向かったという報が入ったからだ。地上部隊からの通報で追撃艦隊が来るのを懸念しての処置だが、念には念を入れるに越したことはない。黒江綾香は「YF-29、デュランダル、」を再度受領したが、穴吹智子に宛てがう機体の選定に苦労していた。真空の宇宙ではストライカーユニットは使えないので、こうして未来の兵器に頼るしかない。彼女は宇宙用のロケットストライカーユニットの研究が立ち遅れている現状を内心嘆いていたが、現状を考えると宇宙での『戦闘機乗り』な状況はしばらく続きそうだ。

「うーん。サンダーボルトじゃもう旧式だし、エクスカリバーの廉価バージョンにするか、メサイアにするか……」

彼女は戦友に充てがう機体の選定に苦労していた。自分はテストパイロットでもある関係で現時点最高峰の機体を手に行っているが、戦友にもなるべくいい機体を回してやりたいというのが心情であった。しかしヒヨッコにいい機体を回すというのは私情とも捉えかねず、

悩んでいた。そこで格納庫で愛機のVF-19Aの調整を手伝っていたレイブンスの隊長の28歳から30歳くらいの佐官……「エイジス・フォッカー」中佐に（連邦宇宙軍きつてのVF乗りとして名高いエースパイロット。ロイ・フォッカーとは本人曰く、物凄く遠い親戚、に当たるといふ。またフロンティア船団にいるオズマ・リ―とはオズマの連邦軍時代の先輩後輩の間柄である）に相談を持ちかけた。

「ダチへ充てがう機体か……少佐、ちょっと待ってろ」

「は、はい」

エイジスはそういうと整備兵や部下に話をし、部下たち共々機体の選定に取り掛かった。部隊の任務の都合上、サンダーボルトやナイトメアプラスではきついので自然と機種はAVFに絞られていく。特務機でないのでエクスカリバー系列の機体だ。しかしA型やP型はエースパイロットでなければ使いこなせないほどの、じゃじゃ馬、なので、20分くらいもめた後、ヒヨッコ仕様の別名、ブレイザーバルキリー、のS型の連邦宇宙軍最新バージョン（メサイアと同規格のエンジンに乗っけてアビオニクスを最新型に換装した代物。なのはが独自に改造していたが、それを連邦宇宙軍が正式に行ったもの）が選ばれた。

「……という訳でブレイザーバルキリーになった」

「ありがとうございます」

エイジスと黒江の横では整備兵達がVF-19Sを穴吹智子仕様に塗装を塗り替えていく。なのはも最終的にこの形式を乗機にしていたなと回想する。師と弟子が最終的に同じ機体に乗るといふのも何かの縁だろう。

「そのダチ……穴拭智子中尉とか言ったな？早速連れてこい。俺が直々に仕込んでやる」

「は、はあ」

意気軒昂と張り切るエイジス。どうやら巴御前と異名を取った智子の空戦技術に興味があるのだろう。黒江は格納庫に備えられた艦内電話で智子に連絡を取り、パイロットスーツ姿で来るようにと伝えた。

10分後、慣れぬパイロットスーツ姿の穴吹智子が格納庫にやってきた。（因みにパイロットスーツはこの時期によく普及したE Xーギアである）エイジスに敬礼をし、早速彼の訓示を受ける。

「いいか中尉。コイツはお前の知るストライカーユニットとは加速性能などは全く違う。乗る前にそれを肝に銘じろ」

「は、はいっ」

「ちょうど無人機に改造された旧型を使った訓練が行われている。操縦法は体で覚えろ、いいな」

エイジスは荒療治だが、智子をパイロットとして速成するには実際に飛ばせた方が速いと判断して実機の訓練を敢行した。

訓練に使われている標的は退役した「VF-1」や「VF-4」などの旧世代機。既に本来の用途からは退いたかつての名機であるが、軍内での第二の人生をたどっていた。部隊の練度維持・向上に役立っている。

ブレイザーバルキリーとの別名で呼ばれる「エクスカリバー」S型に乗り込んだ穴吹智子は月と火星の間の空域でエイジス・フォッカのエクスカリバー（A型）の後を追う形で訓練に励んだ。慣れぬ

電子機器の操作を反復するように頭に叩き込み、武器の管制を覚える。

「レーダーに反応。初代バルキリーね」

レーダーに標的機を捉える。フォッカー曰く序の口の初代バルキリーの「VF-1」。あれが最初の得物だ。智子は戸惑いつつもミサイルの管制を行い、ロックオンする。

「こうなったらカンよカンっ!!」

智子は自らの経験で培ってきたカンでミサイルのトリガーを引いた。ミサイルだろうが機銃だろうが、当てられると判断して撃つのは人間だ。いくら電子制御が発達しようが最後は人間の手で決めるしか無い。絶好の位置と判断したところでミサイルを斉射する。VF-1は自動プログラムにしたがってチャフ散布と機動による離脱を行うが、最新型のハイマニューバミサイルの追尾からは逃れられず、宇宙に閃光を作る。初めてにしては手際良く出来たと思う。

「へえ。ヒョッコにしては手際良く出来たじゃないか。俺もいつちよ……」

エイジスはエクスカリバー（A型）を自分の手足のごとく動かし、標的のVF-4を6機、一瞬で屠る。これくらいの事を軽くできないければエースと言えない。まして彼はVF乗りの中でも指折りのエースパイロット。この程度は朝飯前だ。

「す、凄い……」

智子もウィッチとしては鳴らしたが、ここまでの芸当は中々見たこととはない。前大戦時にアムロ・レイがVガンダムで敵小隊を瞬殺する光景を目にしたが、これはそれ以来の衝撃であった。彼女は華麗に翔ぶエクスカリバーの後を追いつながら自らを鍛えていった。

行間その26「ヤマトよ永遠に（VF-X）」（後書き）

キャラ名に誤りがあったので訂正しました。

行間その27「回想 フェーベ航空決戦 1」(前書き)

一部前日談。本編以前の戦いに触れます。

行間その27「回想 フェーベ航空決戦 1」

―フェーベでかつて行われた航空決戦は凄まじい物であった。勉強替わりに資料映像を見ていた黒江綾香はその規模に驚愕していた。

「うひゃあ……これが、フェーベ航空決戦、か」

黒江が見ている映像には当時の連邦宇宙軍空母部隊の陣容が写っていた。当時まだ少数しか竣工していない「主力戦艦改級戦闘空母」が4隻、ペガサス級強襲揚陸艦が当時稼働していた5隻、太陽系に配備されていたウラガ級護衛空母6隻、グアンタナモ級宇宙空母3隻に加えて、旗艦は色々と逸話もちの宇宙戦艦ヤマトという陣容である。この宇宙戦艦ヤマト―なんでもこちらでは沈没したという「戦艦大和」を宇宙戦艦へ改造したものらしいが……ここまで行くと物好きだと思ってしまうが、ある意味自分の時代との繋がりを感じさせるので安心もする。

「……何々？この当時の地球連邦が動かせる攻撃用空母戦力はこれが最大限だったが、敵―白色彗星帝国の空母部隊は凄まじいもので、空母だけで60隻以上を数えていた……スゲエな」

黒江綾香が見ているドキュメンタリー映画は戦争終結から数年経過したのを機に制作された物で真に迫る描き方から22世紀最後のアカデミー賞を受賞した。実際に写っているのは実機なので余計に迫力がある。それで実際に実際に搭載されていた艦載機の概要がテロップに出る。当時の最新兵器の数々が掻き集められており、試作機なども多数搭載されていた。

「あれが、ハミングバード、……実物初めて見たな。速そうだ」

黒江が特に引きつけられたのはペガサス級強襲揚陸艦9番艦「フリードリヒ・デア・グローセ」に5機が搭載されていたZプラスの『最も過激な』機体「ハミングバード」。これは元々Z計画のガンダム型モビルアーマー「デーパーストライカー」の随伴機として開発されていたが、予算の関係で随伴される方の機体が廃案になった影響もあり一時は開発が中止されかかった。だが、有事の際のファーストストライクを是非とするエウーゴ系の軍人の後押しで開発は続けられ、この当時には5機が試作されていた。それを全て動員してまで奇襲を敢行しようというのが当時の連邦宇宙軍の戦略であった。同機はヤマトのコスモタイガーやバルキリー（この当時はまだVF-11、サンダーボルト、が主力機で、量産開始段階のAVFは近衛艦隊へ少数配備されているだけの存在であった。）隊と共に偵察・奇襲任務に従事した。

―2190年代後半　フェーベ周辺空域　白色彗星帝国　空母機動部隊旗艦　艦橋

「急降下爆撃機隊発進準備完了!!」
「よし、発進60秒前!! いいな合戦の露払いだ、地球艦隊を存分に叩いてこい」

白色彗星帝国の空母機動部隊は帝国の制空権確保のためには必須であり、防空能力に優れる地球連邦軍を叩くには必要不可欠であったが、強力な戦艦を有している彼らは空母機動部隊を軽んじており、前衛という扱いに甘んじさせていた。しかし彼らは空母が前衛とい

う戦術ドクトリンを確固たる物にしていたので、誰もがそれを疑問にしていなかった。司令や艦長級でさえ、だ。彼一艦隊司令の「ゲルン」さえそう思っていた。

そこに彼らに取って最悪の事態が巻き起こる。それはかつて世界最強と謳われた空母機動部隊を一回の戦いで失った大日本帝国海軍と同じ運命を辿った、哀れな者、の証でもあった……

「提督、未確認飛行物体多数!!」

「何っ……まさか!!」

彼の背筋に凄まじい悪寒が走った。地球連邦軍は必勝を期すために艦船への奇襲を敢行し、グッドタイミングで飛来した。弾薬満載の艦載機が多数発進のために待機していた彼らにとっては最悪のタイミングでの敵機襲来であった。

「飛行隊、攻撃開始!!……空母を潰せ!!」

この時期の地球連邦軍戦闘機トップエースであった「加藤三郎」率いる部隊がファーストストライクを行った。敢行しているミサイルは地球連邦軍が同年に正式採用したばかりの空対艦ミサイルで、当時の本星艦隊の主力戦艦として整備されつつあった「スーパーエクセリオン級戦艦」レベルの重装甲を想定した炸薬が使われている、最強の空対艦ミサイル、と謳われた代物。大昔の急降下爆撃機よろしく、【上空】からの急降下爆撃による一撃離脱戦法で奇襲を行った。なお、連邦宇宙軍は既に真田志郎の索敵によって白色彗星帝国空母機動部隊の全容とその位置を把握しており、攻撃は迅速に行われた。まさに白色彗星帝国にとっての、ミッドウェー海戦、と言えた。

加藤三郎のコスモタイガーは対空砲火をそのテクニックで掻い潜り、空母の飛行甲板へ空対艦ミサイルを打ち込む。機動としては急降下し、そこから一気にミサイルを撃ち、機銃掃射しながら上昇という急降下爆撃の常道と言えるもの。ミノフスキー粒子のおかげで一部の戦術が第二次世界大戦へ、先祖帰り、したと揶揄されていたが、この時ばかりはミノフスキー粒子の効果に感謝するべきであると地球連邦軍の誰もが思っていた。

「ち、地球連邦軍の奇襲です!!」

「言わなくとも分かっとなる!! おのれ……考えおったな……!?!」

旗艦のとなりの空母がいきなり遠方からのビーム砲の砲撃で轟沈する。地球連邦軍がこのために投入したハミングバード隊も到着したのだ。ZプラスC1Bs型「ハミングバード」はその圧倒的速度と火力で敵空母の土手っ腹をぶち抜く。その威容に白色彗星帝国空母機動部隊司令「ゲルン」は驚き、目を白黒させる。

「何だあのやたら速い矢のような機体は!!」

「敵の可変モビルスーツです!! 新型のようです」

「あれが音に聞く、ゼータ、というものか……化け物めが。あれに
対空砲火を集中させよ!!」

「ダメです、早すぎます!!」

「迎撃部隊はどうした!!」

「今の攻撃で飛行甲板をやられ、発進不能となった艦が続出!! 既に20番艦までが無力化!!」

「後方の艦に連絡をとれ!! まだ40隻以上無傷の空母が残っとなるのだ!! どうかして迎撃だ!!」

「敵第二派、襲来!! 今度はVF（可変戦闘機）です!!」

「直掩のイータ?は何をしている!! 直ちに空母を守れ!!」

ゲルンは内心、地球連邦軍の取った戦術に舌を巻いた。敵との兵力差を覆すには奇襲は考えつくが、ここまで大胆に行うのは帝国の戦史には太古から考えても例がない。

（そういえば地球にはオダ・ノブナがる武将が少数兵力で大軍を殲滅したという故事があると聞く。奴らはたぶんそれに習ったのだろうが……）

ゲルンは敵の星に伝わる故事を思い出し、自らの惨状と地球連邦軍の乾坤一擲の手の状況を重ね合わせる。そして次々と舞い込む悲報に顔を曇らせる。そして彼の眼前でまた一隻高速中型空母がハミングバードの攻撃によって沈められていく。

「ええい、索敵が遅れたのが仇になったか……」

彼は自らの不手際を恥じた。そしてこの攻撃が白色彗星帝国艦隊敗北の序曲を奏でていく。フェーベ航空決戦の幕開けは地球の大胆不敵な奇襲という、敵に取って予想外の展開で始まった。地球には真珠湾攻撃や桶狭間の合戦などの多くの先例があり、奇襲慣れしている側面があるが、それがいい方向に作用したのだ。そして追い打ちをかけるように第二派の可変戦闘機隊とコスモタイガー隊（ヤマト艦載機の第二部隊）が襲来する。彼らは必死に迎撃態勢をとった。艦上攻撃機の「デスバ・テーター」をも直掩に狩りだして。しかし成果は一向に上がらない。

黒江はこの大慌てで迎撃に躍起になる白色彗星帝国の映像に自分の世界のネウロイに慌てふためく通常部隊の姿に重なったのか、自然と苦笑いを浮かべていた。

第82話「GET WILD 7」(前書き)

久々に本編をちよつと進めます。

第82話「GET WILD 7」

一時間は戻って、2199年のハワイ。戦いはいよいよ大詰めを迎えていた。敵要塞の外堀は根気よく攻勢を続けた人類によって完全に埋められ、いよいよ敵要塞はその無防備な姿を地球連邦軍の前に晒したのだ。

「よし、これで……」

この日もなのはは支援の急降下爆撃を敢行していた。傍らにはストライカーユニットを付けたルーデルもいる。（なのははの護衛任務のためか空対空戦闘用のFW190D型である）なのはは現地で即興的にルーデルの教えを受けて急降下爆撃のノウハウを吸収し、近接航空支援にこの戦いでの活路を見出していた。

「筋は良い。あとは経験だな」

「ありがとうございます、大佐」

（ルーデル大佐か……物凄い人って聞いたけど……）

地上で戦うスバルはルーデルの武勇伝に半信半疑であった。ルーデルの半ば伝説じみた戦果の数々はケタが違い過ぎてピンと来ないのだ。時空管理局の誇るエースでも戦果はルーデルほどでは無いし、戦艦までも沈めたといっても現実感が感じられない。しかし、会ったからのこの3日間でのルーデルの行動や戦果を見ると驚きの連続である。VF-25で出撃した2日前には空対空戦闘だけでなく、

近接航空支援で多数の火炮を沈黙させたし、昨日は自前のストライカーユニットで敵の対空砲火をモノともせずにトーチカを沈黙させている。

「なのはさんが憧れるのも分かるなあ。37ミリ砲のあの火力での支援に冷静な判断力……あれが軍人さんの本分なのかな？」

スバルは37ミリ砲で適切な支援を行い、匠に味方に指示を与えるルーデルの姿に何か感じるものがあるようだった。こうあるべきとばかりに指揮官の姿を表していたルーデルに上司としての理想像を見出していたからかも知れない。

（余談だが、声が似ているからなのか、スバルは無線連絡の際にロマーニヤ出身のウィッチから501のフランチェスカ・ルッキニ少尉に間違えられる事が多いとか。10人中8人まで間違えられたと後々になのはにいったと記録されている。）

「スバルちゃん、下がれ！コイツは俺が引き受ける！」

「は、はいっ」

スバルを守るためにRXが鉄人兵団の前に立ちふさがり、二段変身を行う。そのプロセスは一瞬であり、戦闘機人であるスバルでも視覚できないほどの素早さだった。

「貴様は何者……！」

「俺は炎の王子……RX・ロボライダー……！」

分隊長と思しき兵団の兵士に相對するはRXが二段変身した「RX・ロボライダー」。

ロボライダーはどちらかと言えばパワー型に属し、敏捷性は多少欠けるが、その代わりに物凄いパワーをもたらす。装甲も強化され、並大抵の事では揺らぎもしない。黒と黄色が主体のボディは力強さを感じさせる。ロボライダーは鉄人兵団の兵士を圧倒的な力でねじ伏せる。銃撃を一切寄せ付けず、さらに格闘戦ではパンチ一発で相手を数十メートル吹き飛ばす離れ技を見せる。

「トゥア！」

「ぬああああ……馬鹿なああああああああ！！！」

ロボライダーの重いパンチが兵団の兵士の体にヒビを入れながら数十メートル相手を吹き飛ばす。まさにロボライダーの面目躍如である。とどめとばかりに右太もも付近で光を結晶化させる。必殺武器の「ボルティックシューター」を召喚したのだ。ロボライダーとなった彼にとって有効射程の上限など存在しない。エネルギーを充填し、最大出力で放つ。

「ボルティックシューター！！！」

光線銃から放たれた光は正確に相手を撃ちぬき、大爆発を起こす。もちろん、彼は決めポーズを怠ってはいない。決めポーズを決めてこそヒーローと言うものだ。

「……で、そのポーズに何か意味あんの？」

「特に意味はないが、時代劇とかと一緒に、様式美なんだ」

「そういうもん？」

「ああ」

その様子を見ていた美琴からこういう質問が来るが、ロボライダーは時代劇を例に決めポーズの重要性を説く。

美琴は釈然としないが、自分にも思い当たるフシはあるのでこれ以上突っ込まないことにした。そして自身も道路の砂鉄を利用して、砂鉄の剣、を生成し、縦横無尽に動かし、兵団の兵士を切り裂く。

「もう一丁っ!!」

さらに左手で高压電流を起こし、10億ボルトの高压電流の槍で相手を攻撃する。

電撃を浴びた兵士だけでなく、直接電撃に触れていない者も吹き飛ばされていく。彼女の面目躍如である。もし、この場と同じ電撃系の攻撃を得意とするフェイトがいたら驚くに違いない。美琴の能力はそれほどスバ抜けているのだ。上空からその様子を目にしたなのは改めて美琴に対して心強さを感じずにはいられなかった。

「あれは……Zガンダム!？」

なのはの視界に兵団を蹴散らしながら華麗な機動を見せる一機のウェイブライダーの姿が入ってきた。白を基調としたスプリンター迷彩のボディのウェイブライダーは資料映像で見たZガンダムと殆ど同じであったので、なのはは直感的にZガンダムだと言ったわけである。そのウェイブライダーは瞬時に変形し、その流麗な姿を見せる。

「いや、あれはZの量産型のZプラスだ。よく見てみる、背中がウイング・バインダーになっているだろう」

「あ、本当だ」

なのははややこしいなと変形を終えたZプラスを見てみる。アムロの機体らしく、彼のエンブレムが書かれている。一般にZの量産型

といえば、自分の世界の映画にも登場したり・ガズィだが、この世界では可変機構が評価され、『可変機構を持つZの子孫』が複数あるとは聞いていたが、確かに変形してこそZで、変形しないリ・ガズィは邪道だ。

『こちらアムロ・レイ大尉。これよりそちらを援護します』

「貴官が、連邦の白い悪魔、か。噂は聞いている。アテにさせてもらうぞ」

『了解しました』

（ほえ……やっぱり、大佐、ってえらいんだなあ。）

ルーデルとアムロの会話を聞くと改めて軍隊の上下関係が分かる。尉官にとって佐官以降の軍人は格が違うという事だろうか。（これは下士官までにとつての尉官にも言える）実際、尉官と佐官には権限自体にはそんなに差がないが、佐官とも成れば海軍では戦艦の艦長、陸軍では連隊指揮官の責務を追う場合があるし、空軍では大部隊の前線指揮官になれる。故に連邦軍では士官学校を出ていない軍人は佐官になれない（戦死の二階級特進は除く）という規則があると聞く。（同時に、速成コースであろうが一応士官学校を出ている者ならば、その気に成れば佐官に昇進できることも表している）そんな事を思いながらなのはアムロとルーデルの護衛のこと、近接航空支援を続けるが、そんな彼らに司令部より通信が入る。その通信こそは重大な事実を告げるもの。内容はどこかで蠢く水爆の所在についてのものではあった。

『全部隊に通達！！緊急！！こちら司令部！！繰り返す、全部隊に通達！！水爆の所在が判明した！！敵要塞の奥深くにある。歩兵部隊や陸戦ウィッチは場所の確保を急げ！水爆のスイッチは兵団の強硬派の将官が握っている！！自爆の可能性もある！！迅速な確保を

急げ……』

第83話「GET WILD 8」

ーハワイでの戦いが私にとって本当の、初めての大規模戦闘、だった。無作為に死んでいく人、死に物狂いで戦う鉄人兵団……あれが戦いの本質だと思う。だけど、戦うのは悪いことだとは思わない。それが人間の持つ習性だから。学校じゃ戦争、特に近代戦は悪い事だって教えられたけど、何かのために戦うのを否定する事はできない。私たちの曾祖父さん達の世代はそれで戦争を戦ったんだから。

この一文は後々（なのはが23歳時）に彼女の義娘「ヴィヴィオ」が家で見つけた回想録に書かれているものの一部である。その回想録には実際の戦場に身をおいたものしか分からない事が多々記されており、ルーデルや穴拭智子からの影響も見受けられた。戦いに対しては、戦うことが必要なら全力で戦う、と記し、自分の世界の日本の歴史教育に対しての疑念を書いていた。（これは戦争のはらわたを垣間見たことと、兵士たちとの会話などの様々な要因で、自分の曾祖父世代に当たる大正生まれの人々が青年期に太平洋戦争を戦った本当の理由を理解したためだが、相次ぐ負け戦に焦り、無為無策で若者の多くを死に追いやった戦争末期の軍上層部の大半を占めていた、官僚型軍人、達に対しては批判的である）

ーハワイでは彼女は制空戦闘よりは近接航空支援に従事するケースが多く、火砲や戦車などもそれなりの数を撃破している。防御力や火力が近接航空支援に最適であったためであるが、本人としては空戦をやりたいという気持ちがあった。それをルーデルは制した。

「空戦も大事だが、近接航空支援はもっと重要だ。見ろ」

眼下には要塞に向けて進撃する各国戦車部隊の姿が見える。戦車は基本的に天蓋装甲が弱い。それは21世紀以降の戦車とて同じであり、モビルスーツなどに主役をとって代わられた要因である。それを守るのが自分達の役目なのだ。ルールは説く。そしてまた火砲（21世紀頃に大国の軍隊が使用していた「ラインメタル 120 mm L44」を鉄人兵団が添えつけの野砲として改造した代物。元来が戦車砲なので威力は充分）が火を噴く。滑腔砲から打ち出された砲弾がIV号駆逐戦車や？号戦車J型を撃破する。第二次大戦中の代物とは言え戦車をいとも簡単にスクラップに出来るのだからその威力が分かる。なのははすぐにその砲を沈黙させるべく急降下し、レイジングハートを構える。

「お願いっ！これ以上私たちの邪魔をしないでっ！」

攻撃タイミングはレイジングハートが教えてくれる。要は地面にぶつかる前に離脱すればいい。時速750キロ程度（これは第二次大戦中の戦闘機が急降下中に加速するスピードに相当する。米軍機は大戦初期から耐えられるが、初期型零戦なら分解するレベル）の速度で急降下する。基本的に航空機は急降下の際に水平飛行の速度以上に加速できる。実際に日本軍の3式戦闘機「飛燕」が時速1000キロの速度で急降下した記録も残っている。なのははこの要領で加速し、レイジングハートのカウントを頼りに攻撃タイミングを見計る。

「今っ！！」

最短砲撃魔法を放ち、野砲を沈黙させ、すぐに上昇に写る。このタイミングが一番無防備だが、自身の防御力なら大丈夫である。戦車部隊の安全を確保すると後は制空権確保だ。他の区域から敗退してきた部隊の、落ち武者狩り、を行うべく、上空での敵と戦闘を開始する。スバルは外の部隊と戦闘中だ。

（あとは突入したドラえもん君達に任せるしかないか……）

要塞突入を敢行したドラえもん達がここにいる全ての人間の運命を握っている。あとは彼らに任せるしか無い。なのははルーデルや合流した加東圭子と共に空戦に臨んだ。

一内部に突入したドラえもん・のび太・御坂美琴、その護衛の仮面ライダー達は急ぎ要塞の奥深くへ向かった。穴吹智子がクライシス帝国の幹部「ガテゾーン」から入手したメモによれば水爆はスイッチを押されたら4分以内に解体しなければならないからだ。如何にロボライダーや御坂美琴の能力でも4分で解除するのは難しく、そこが彼らを焦らせる要因であった。兵士たちをドラえもんたちはなぎ倒しながらひたすら奥へ進んだ。それぞれ別行動を取り、別れる。

「たくっ、いい加減にきなさいよっ!!」

美琴はドアを回し蹴りでぶち破る。その部屋には一人の男がいた。歴史上の人物である「ラスプーチン」の名を頂いた鉄人兵団きっての怪人物。

「おお、遂に来たか」

「ついにつて……アンタ何者！」

「私は君たちの常識で言えば、ラスプーチン、と名乗っている男さ」
「ラスプーチン……帝政ロシア時代の怪人物。その名をどうしてアンタが!!」

鉄人兵団の中でも異端的な銀色の外見を持つその男は敵を前にしても平然としている。むしろ楽しんでいるような雰囲気である。

「何、単に外見が異端的なのと私が政権の中枢に意見できる立場だから地球についた際にその地の歴史的人物になぞらえてそう呼ばれただけだ。はじめに言っていこう。今回の戦いは君たちが勝つだろう」

「どういうこと？」

「軍の幹部達はこの基地の司令官「ミシチェンコ」を心良くは思っていない。あまり有能すぎても幹部達に取っては自分の出世を阻む壁でしか無いという事だ。あの男も哀れなものだ」

彼は兵団内部の派閥争いにこの戦いは利用されたのだと告げる。美琴は驚きつつもその男の言葉を聞いていた。彼の言葉にはそのような力があつたからだ。

「でも、この戦いに負けるってことはあんたたちに取っても困るはずよ？ここが落ちたら太平洋戦線は放棄に等しい状態になる……」

「そこがミソだ。君たちも最重要点であるここを……と思っているだろう？軍幹部の中の強硬派は勝敗関係なしに連邦の兵力ものとも自爆をする腹積もりだ。私は政権のある幹部からそれを阻止せよとの極秘指令を帯びた。だから君にこうして話している」

「じゃあクライシスに情報がいったのは……？」

「私がわざと流したのさ。君たちが持ち込んだあの化物自走砲が火を吹けば水爆が吹き飛んでG A M E O V E Rになる。だからクライシスや連邦の情報部に水爆の情報をリークしたのさ。あの時はそうそう焦ったよ」

ラスプーチンは美琴に自身の任務などを話す。そして彼は水爆の詳細を話す。

「ここにある水爆は地球連邦が出来てからの紛争で米国が最後の力を振り絞って作った代物だ」

「え？ちよっと待ってよ、米国は資本主義国家の大家のはずよ。それがどうして？」

「米国は地球連邦を作った日本と英国に反発したのさ。ここに残ってる記録によれば、アメリカ合衆国はその当時、21世紀序盤から相次いだ失政と遠征の失敗で超大国の地位を失い、地位は失墜した。それでも1950年代の繁栄を忘れない国民が右翼の急先鋒の大統領を選んだ。皮肉にも第一次世界大戦の敗北で屈辱にまみれたドイツがアドルフ・ヒトラーを選んだのと同じように」

それは一度は全世界を敵に回しても勝てると謳われた国家の哀れな末路であった。地球連邦政府の設立に多大な影響を行使した日本と英国に対して反発した合衆国国民はかつて自らが倒したアドルフ・ヒトラーと同じ運命を選んだのだ。そして破局を迎えた。美琴はラスプーチンから米国の運命を聞かされ、驚きのあまり二の句が告げなかったという。

そして美琴に話をする彼、ラスプーチンの意図はいつたい？

第84話「GET WILD 9」

—地球連邦軍は兵力を捻出するために各種兵器を色々な戦場へ投入した。その最たる物だったのがハワイでの戦いであった。新旧問わず使いやすい兵器が主で、中には一線級装備ではなくなったジム？やネモなどのモビルスーツ、VF-1やVF-5000などの旧世代の可変戦闘機（VF）群も防衛用戦力として活用されていた。

「旧型も前線に出すんだ……」

「それはそうよ。最新型はたいいてい配備数が少ないから実際は旧型も多く使われてるの。第二次大戦でドイツ軍が大戦中期には旧型になった？号戦車をマイナーチェンジで使い続けたり、日本軍が零戦を使い回し続けたみたいだね。最も両国は事情があったけど」

なのはは地上で作戦行動を取るジム？やネモの部隊や、自分達と共に編隊を組んでいるVF-5000「スターミラージュ」の姿にそう感想を言う。今回の落ち武者がりでの僚機は別部隊からの支援要請で離れたルーデルに代わって、加東圭子である。彼女は兵器に求められる物の一つに扱いやすさをあげる。なのはに話をしているうちに彼女はふと、音に聞いた、穴拭智子がスオムスでの戦いで新型への機種転換に不快感を示した、という話を思い出す。

（そういえば智子も二式への機種転換の時にずいぶん渋ったとか聞いたけど……いつの時代も同じようなもんね）

加東圭子は連邦軍内部でもモビルスーツは新式に属するジェガンやジャベリンが、可変戦闘機（VF）はエクスカリバーは愚か、メサイアが配備されつつある状況でも旧型がなお重宝されている事に時代の共通点を見つけた。兵器というのは扱いやすさも愛され続ける

条件の一つなのだ。自分達の世界でもはや旧型になったストライカーユニットを使い続けている例はいくらでもあるし、坂本美緒も零式にこだわり続け、紫電シリーズへの機種転換をいやいやながら行ったと聞く。

「来たわね。各機散開！」

「了解！」

編隊を解き、各自で空戦に入る。鉄人兵団は規律のとれた編隊行動を取れなくなっているので一対一のドッグファイトに持ち込んで撃墜に追い込む。元々、地球連邦軍はかつての米軍などの流れを組んで編隊空戦を重視していたものの、ミノフスキー粒子の影響である程度巴戦も復権し、空軍パイロットなどはその技能を身につけていた。その技能が役に立ったのだ。

VFなどは火力と機動性を両立できているが、なのは達はその特性がどちらかと言えば Dive and Zoomの一撃離脱戦法である。それはなのは自身、この戦いを通して理解し始めた事で、『推力があり、飛行特性が重いのであれば一撃離脱戦法を行う』。それは智子から常々言われてきた事で、飛行特性を無視して無理やり巴戦を行おうとするのは無茶だと気づいた。なので今ではその範疇での格闘戦にも取り組んでいる。

（これは親友のフェイトがスピード＋格闘戦型だったので、それに合わせようとした事に由来しており、智子はそれを是正させるべくなのはに毎日、火力と防御力・推力を生かした一撃離脱戦法を仕込んでいた）

上空から急降下し、火力で強襲すると大きめのインメルマンターン

で速度を殺さずにＵターンし、再度襲いかかる。圭子はそういう時の指揮はお手のもので、編隊空戦に慣れていない（なのはは単独での空戦が多かったので編隊を維持したままの空戦機動は不慣れであった。そこでベテランである圭子が長機となることでサポートするのだ）なのはを誘導しながら、自身は飛燕に合わせる形で支給された二式二十糎固定機関砲を連射する。弾が軽量なので威力は他の国の20ミリに比べれば低いが、その分扱いやすい。徹甲弾で鉄人兵団兵士の各所をぶち抜いて墜落（戦死）させる。なのはは無駄な魔力消耗を抑えるためにレイジングハートを変形させて剣にする。これはこちら側の科学者達が修復の際に独自に付けた形態であり、管理局非公認（フェイトやヴィータなどしか知らない）の形態なのが、智子への憧れを持つゆえか、割とこの形態を使用する事が多い。

「これ、言ってみたかったんだよね。オー○斬りだあっ！」

「……ダ○バイン？ まったく智子もああいうの好きだからって……まあいいか面白いし、後でいってやる」

なのはは某オーラバ○ラーの如き雄叫びを上げながら一撃離脱戦法の要領で斬る。これを見て、圭子は元同僚が思わぬ所まで影響を与えたのに『後でどうからかってやろうか』と微笑ましく思った。またいっぺん智子の私室を覗いてやろうかとも考えた。きっと面白いものが出てくるだろう。

（後で迫水ハルカ中尉に命じてスパイさせよう）

と、しょうもないことを考えたとか。

『やってるな。俺も手伝いをさせてもらおう！……サンダーブレイク！！』

雷雲が現れ、雷鳴が轟くと同時に何かに導かれるように雷が敵を薙ぎ払う。その正体はすぐに分かった。2人の前に臨戦態勢のグレートマシンガーが現れたからだ。雷を背にする構図は多少大げさだが……。

「鉄也さん！」

『よう』

「ずいぶん派手なご登場ね」

『それはそうだ。スーパードロロボットというのはかつこ良く現れないとな。絵になるだろう？』

ーグレートマシンガー。マシンガーZの後継機だって聞いてたけど改めて見ると大きいわね。

圭子はこの世界に来るに当たって、歴史ドキュメントを多く見させられた。そこには当然ながら在りし日のスーパードロロボット軍団の勇姿も写っており、その中には今は亡きマシンガーZを救うグレートマシンガーの姿もあった。この世界で俗にいうスーパードロロボットは、材質、動力源などに超物質、超エネルギーなどが使用されている、搭乗者が武装を使用する際にその武器、技名等を叫びながら使用する、などが定義となっており、マシンガーZはその元祖的存在である。その正当な後継者がグレートマシンガーであり、初陣ではマシンガーZの4倍とも称される力で敵を薙ぎ払ったという。その力を間近で見る機会が来るとはと、関心が高い素振りを見せた。

因みにグレートマシンガーのサイズが実は大型モビルスーツと同等の25mなのは一般に余り知られておらず、ドキュメントなどではマシンガーZと同等に描かれる場合が多い。実際にはマシンガーZとのサイズ差は大きく、グレートマシンガーが大破したマシンガー

Zを回収した際にはまるで大人と子ども程の差あったと兜甲児は語っている。

『ブレストバーン!!』

グレートマジンガーの胸の放熱板が発光し、5万度の熱線を放つ。(当初は4万度であったが改良で威力が増した) 5万度の高熱に耐えられるはずもなく、瞬く間に溶解して液体になって落ちていく。兵団は慌ててグレートマジンガーに攻撃するが、宇宙有数の強度の超合金ニューZの装甲に掠り傷すら付けられない。レーザー、熱線、ビームなどのどんな攻撃を以てもだ。

『そんな攻撃ではグレート of 装甲はびくともせんよ』

仁王立ちのグレートマジンガーはさらなる動きを見せる。口に当たるスリットから暴風を吹出す。グレートタイフーンと呼ばれる技で、マジンガーZのルストハリケーンと同系の技だ。単に敵を吹き飛ばすだけだが、威力はスゴイ。風速150mの風というのは台風よりも遙かにすごい威力。直撃を受ければジェット噴射でも抗えぬほどの暴風。

「スゴイ風……ストライカーユニットを全開にしてるのに吹き飛ばされないようにするのが精一杯なんて……!」

グレートマジンガーの後ろにいただけでも吹き飛ばされそうな余波を感じる。風向きの問題だろう。

当たりで竜巻に巻き込まれたように渦巻く風に振り回され、死亡する兵士が相次ぐ。とうの剣鉄也は余裕だ。当人曰く『グレートマジンガーには物足りない』らしい

加東圭子は穴拭智子に続いてスーパーロボットの圧倒的な威力を目の当たりにしたのであった。

行間その28「のび太、出木杉の会談」(前書き)

今回は魔法などを見たのび太のその後の物語です。

行間その28「のび太、出木杉の会談」

一戦争から帰還したのび太はある時、クラスメイトの出木杉英才を訪ねた。なぜこの世界で本当の意味の魔法が存在しないのか。その理由を改めて聞くためであった。

「野比くん、魔女狩りというのは知ってるね？」

「うん、前に君が話してくれた奴だよ」

「そう。それまで錬金術とか真面目に研究されていたのがなぜ禁止されたのか？時代は十字軍などが行われていた12、3世紀の頃に遡る。前の時は14世紀って言ったけど、研究の進展でもっと前からあったとなった。当時は十字教を信じる人々の間に十字軍の兵士などが東方から思想を持ち帰ってきたり、古来の文化と融合して悪魔というのが広まった時期で、信じられないがこんな物が400年以上も存続したのさ」

「どうしてそんなに長く続いたの？」

のび太は何百年もそんな思想が続いたことに寒気がした。人間というのは時として集団で狂気に走るが、ヨーロッパでそんな物が延々と行われていた事は今でも信じられないからだ。

「人間というのは自分と毛色が違うものを嫌う性質を少なからず持っている。魔女狩りは17世紀を最後にヨーロッパでは衰退した。諸説あるけど近代的考えが広まった結果、中世の風習を終わらせた方が合理的だったんだろう。だけど、もし今みんなの前で使ったら最初は物珍しさにちやほやされるだろうが、やがて力を恐れる人々から恐られ、妬まれるようになる。それが魔女狩りの実態だよ。前近代的社会では魔女は異端の象徴だったのさ」

「うわあ……改めて聞くと背中がゾクツとするよ」

「他の時代での別の例に西部開拓時代のアメリカの原住民の虐殺が有名だけど、米国の歴史の汚点の一つと言うのは知ってるね？人間というのは時に恐ろしいことを平然とやるのさ」

出木杉は魔女狩りの他にも例を出してのび太に説明する。手に持っているのは全文英語の歴史書で、小学生が読むような本ではない。彼は西部開拓時代の米国で行われた原住民の虐殺も魔女狩りと似たようなものだと言明する。のび太は前にサンドクリークの虐殺を題材にした映画「ソルジャー・ブルー」を見たので飲み込みが早かった。

「うん、前に「ソルジャー・ブルー」で見た。あれは見ていて残酷だったけど、あれが当時の人たちの価値観だったの？」

「当時……今でもかな。白人至上主義が特にひどい時代では黒人や南米の人々などは、野蛮人、みたいに扱われた。ネイティブアメリカン……俗にいうインディアンの人々も白人たちから言えば、異端、として扱われた。その結果がサンドクリークの虐殺やウォシタ川の戦いだよ。最も後者は民族浄化に近いけどね」

出木杉の言葉は小学生と思えないほど思えないほど重いものであった。それは人間の暗黒面が表に出たといったいい歴史の中の出来事。それは古来より形を変えて起こってきた忌むべき出来事。

「近代でのナチス……いや国家社会主義ドイツ労働者党がドイツ国民に嫌われるのは魔女狩りやインディアン虐殺のようなそれを1930年代でやったからだと言うが、いいところも多少はあったのは確かだ」

「本当？」

ここで出木杉はこの時代では既に忘れ去られたナチスの正式名称を言った。現在ヒトラー政権時代を差してナチスというのは戦後に連合国が自らの歴史観を普及させる課程で戦中の蔑称を使ったのがきっかけであり、当事者達はナチスでは無くNSと言っていたのを彼は知っていた。だから正式名称を言ったのだろう。

「現にヒトラーはアウトバーンを作ったりしてドイツ経済を立て直した。まあ稚拙だったとは言われるが、一定の成果は挙げている。メディアの活用と健康政策面では最高レベルのモノだった。それが陽の面。しかしそれをドイツでは言えないのさ」

「なんで？」

「君がいった時代は多少ながら再評価されたというからいいけど、この時代のドイツはナチス時代を、汚点、と考えて葬り去る事が国是に近いからね。可哀想な例が、オリンピア、や、意志の勝利、のレニ・リーフェンシュタール監督だ。彼女なんてあと数年で（死去は2003年なので1999年の4年後）生涯を閉じるけど、ナチの烙印は生涯消えないまま。可哀想な人だよ」

「うん。意志の勝利はプロパガンタ云々は放っておいても素晴らしい作品には違いないけど……作品には罪はないのにね……」

「そう。ナチスにすべての罪を押し付けてるドイツも、アメリカの原住民の虐殺も、日本の戦後直後に特攻隊の生き残りを侮蔑したりした例も魔女狩りと同じ。一旦異端となったら排除されるだけさ」

「普通だと思っていた価値観が何らかの原因で根底から変わった後に旧来の価値観は異端とされてしまい、迫害される。、地球最後の男、という小説などでも描かれるが、そのような例は歴史にもある。敗戦後の日本が最近での例だろう。例えば占領下施政では特攻隊の生き残りは、教師から迫害されたという。彼らから見れば戦中は、学校の誇りだ、と言っていた教師が戦後には、軍服で来るな、と罵倒するのだからたまったものではなかった。そんな例が少なからず

あったらしいのだ。ある意味恐ろしい。

「19世紀以降の魔術は一般に知られる形の魔法と多少異なるしね……あれはあれで色々ややこしいから今回は説明する時間はないよ」
「うん、ありがとう」

「それと君が出会ったって言う女の子達の映像は見させてもらったけど……あれは完全な魔法とはいえないね」

「どうということ？」

「科学的道具を用いている。一部は魔法と言えるが、あれは殆ど魔術に限りなく近く形を変えて普及した科学とも言えるよ」

出木杉はなのはたちの魔法をこう評した。彼から見ればなのはたちが行使する魔法は科学に近いのだろう。一方で天候を操るなどの魔法、らしいのもあるのでこう言ったのだ。のび太はこの時、出木杉君は本当の魔術師を知っていたのだろうか、との思いを抱いたとか。

行間その29 「特務六課とHELLSING」 (前書き)

行間の埋め合わせ話。首都制圧後のミッドチルダの話が入ります。

行間その29「特務六課とHELLSING」

―地球連邦政府の軍備は数年で大きな革新を遂げた。白色彗星帝国戦時の最新鋭機であった「RGM-89、ジェガン、」が相対的に旧世代機に属するようになったのがその証拠だろう。現在―2199年以降は正統後継機の「RGM-122、ジャベリン、」への機種更新を行っている最中だ。そして多くの技術革新で実現した大火力火器がF91のウェスバーであり、その対抗馬として採用されたG-バードであった。地球は外貨獲得手段として、意図的に後者の開発データの一部を次元世界に流した。それを入手し、数年の歳月で自家のモノにしたのが「カレドヴルフ・テクニクス」というある世界のメーカーである。彼らは通常兵器へのアレルギー体質を持つ時空管理局へ卸すに当たって時空管理局向けにそれをアレンジ。数年前のあの、事件、以来、本星首都を失陥した時空管理局は強力な個人への強化策として導入した。

―新暦81年頃

「これがストライクカノンか……明らかに向こうの影響受けてるよ」

―この時なのは達は、25歳（ただしそれは生まれてからの満年齢であり、実際には未来世界での処置や色々な効果で肉体的年齢は19歳である）。若手から中堅どころへ差し掛かった年代になり、それ相応の地位へ付いている（ただし歴史に変化が生じたので、なのははルーデルから教わっておいた手法で昇進の話が来た際に脅しに近い形で前線残留を勝ち取り、そのまま三等空佐へ昇進した）。

なのはは上からの要請で新装備のテストを行っているのだが、レイアウトがどうにも2202年の世界最新鋭のガンダム「ネオガンダ

ム」のGバードの影響が見て取れる事に呆れてるようだ。管制室からその様子を観ているスバルも同じような気持ちらしく、ため息をついている。

「あれどうみてもパクッてますよ。アナハイムの連中、リークしたかな」

「だよねえ……アナハイムの人たちって賢いからね」

「ウェスバーじゃないな。あれはネオのGバードですね」

「Gバードか。あれ確かに手持ち武装としては最強だからね」

フェイトとスバルはなのはがテストしている装備を見ながら会話をしている。話題は自然と装備についてになる。レイアウトなどにアナハイム・エレクトロニクスの影響が見て取れるからだ。

スバルは過去の経験からか、相変わらずなのはの姉のような立ち位置にしている。それは帰還

後でも変わらず、事情を知らない人々からは不思議がられている。フェイトはその事情を知る数少ない人間の一人。なのはに対しての気持ちが生きているので、あの事、の前よりフェイトと会話する事が自然と多くなっていた。フェイトも幼少期の不思議な体験の賜物、スバルと、以前、より打ち解けており、気軽に会話を愉しむまでに進展していた。

「今度の反攻作戦……うまくいきますかね」

「地球連邦にも協力を仰いで、ひとまずの楔を打ち込むのが目的だからね。何でも指揮は王立国教騎士団のヘルシング卿が取るとか」

「あの人ですか？思い切った策を取ったなあ」

ここで二人が名を上げた「ヘルシング卿」とは、旧英国の化物殲滅機関の長で、23世紀でも影響力を持つ、円卓会議、の一人「インテグラル・ファルブルケ・ウィンゲーツ・ヘルシング」の事である。とても女性に見えない風貌と威風堂々な風格を持つ強靱な性格の持ち主。威圧的にも見える態度をとる人物だが、こういう時には最も頼りになる人物の一人だ。あの事件の直後、フェイトは仮面ライダー達の仲介で彼女と面会し、事情を説明。彼女は事情を知ると冷静にこう言った、……遂に動き出したか、と。その時に彼女は王立国教騎士団が化物に襲撃されたことを話した。

「あの時は本当に焦った。何せウチの人員のほぼ全てが全滅し、あまつさえグールにされたんだからな。その時に敵に言われたのがこの一言だ、小便はすませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？、だ。まあそのセリフはウチの執事がそっくりそのまま返したが」

「大丈夫だったんですか」

「ああ。コイツもいたしな」

夜の執務室に入ってきた一人の長身の成人男性「アーカード」と呼ばれる……をインテグラは紹介する。フェイトにアーカードと名乗ったその男性は信じられないが、吸血鬼、であった。

「私に取って容姿はあまり意味はなさない。その気になれば姿は変えられる」

「そ、そうなんですか」

、彼は自分の今の容姿に特に意味はないとも言った。それは過去には少女の姿をしていた事も差しているのかも知れない。吸血鬼の中でも最高の力を持つアーカードとも成れば姿は自在に変えられる。今その場で少女の姿に変身することもできる。だが、彼本来の姿と言えるのはこの姿らしい。

「お前のような小娘がよく生き残ってきたものだ。中々持って見かけによらずたいしたタマだ」

「ち、ちよつとマスター！女の子を前にしていきなりいうセリフじやありませんよそれ〜！！」

アーカードの傍らにいる女性は「セラス・ヴィクトリア」。アーカードの従者のような立ち位置の女吸血鬼。元々は婦警だったので、婦警、との通称が付いている。彼女は死の間際にアーカードに選択を与えられ、吸血鬼となった。人間としての己をいまいち捨て切れない様子が見受けられるが、時に恐るべき素養を垣間見せる。コメディーリリーフ的なこともやる。

「それでたどり着いたのが、ミレニアム、最後の大隊」

「最後の大隊……」

「最も今は師団規模に膨れ上がったようだが……。ナチの生き残りは意外と多く生き延びた。多くは南米に逃れ、再起の時を待った。その内の最大勢力がショッカーから連なる歴代の暗黒組織だが、君たちの世界を襲ったのはそれとは別の一派だろう」

その時にインテグラが話した事は信じ難いが、あの時に襲撃し、首都を制圧したドイツ国防軍は主に夜に活動する事から裏付けは取れる。実際、管理局の局員の中には永遠の命と若さに誘惑され、裏切

った者も多数存在する。誘惑に負けるのは何故であろうか。

「ティアナは？」

「アフリカ戦線から直接こっちに合流するそうです」

「ええっ!？」

「ティアはストームウィッチーズの一員ですからね。加東少佐に了解取ってくるそうです」

ティアナ・ランスターは扶桑陸軍に入隊した都合でミッドチルダよりも、1945年、にいるほうが多くなってしまった。帰国後は執務官試験に合格したが、すぐにアフリカ戦線の反攻作戦のために召還されてしまうなど、不運、続きであった。そのためスバルもミッドチルダ換算でここ2年ほど顔を見ていないのだ。

「それにしても……まさか智子、大尉、とティアナが私たちより先に面識あったなんて……。なのはふくれてたでしょう？」

「ええ、すごい勢いで詰め寄られましたよ。黒江少佐と一緒に落ち着かせるのに苦労しました……」

スバルはその時のなのはのあまりのショックぶりは凄まじく、ヤケクソでスターライトブレイカーを室内で打ちそうになるほどだったと説明する。

「もうヤケクソなののおおー!! スターライトオオオオ……」

ある日、穴拭智子とティアナが親しげに話す様子を遠くから目撃してしまったのはあまりのショック（同じところにいた迫水ハルカに焚き付けられたところもあるが）にスターライトブレイカーで吹き飛ばそうとしたのだ。これに居合わせたスバルと黒江綾香は顔

面蒼白。

「ち、ちよっ待て!! おまつ、落ち着……」

「なのはさん、話を聞いてくだ……」

黒江の言葉は完全に届いていない。半分泣き顔でスターライトブレイカーを順調に撃とうとしている。これではたとえ智子に呼びかけてもあの威力では防御で防ぎきれない。そう踏んだ黒江はスバルと共に荒療治に出た。

「多少荒療治だが……許せよ!!」

そう言うのと日本刀に魔力を通し、オーラを迸らせる。秘剣、雲耀、を使うつもりだろう。スバルも必殺の、デイベインバスター、を撃つつもりだ。そしてスターライトブレイカーが撃たれたのと剣がぶつかったのはその直後だった。黒江の全力の剣はスターライトブレイカーの光を切り裂き、間隙おかずスバルのデイベインバスターが炸裂した。

そんな二人の命がけの行為などつゆ知らぬ智子たちは雑談を楽しみながらアイスをほうばっていたとか。

「あの時は本当に命がけでしたよ」

「ハ、ハハ……」

そう溜息をつくスバルにフェイトはうなづいたとか。

第85話「GET WILD 10」

—地球は何かと戦神に愛されているのか、22世紀末以降は戦いに明け暮れていた。

メカトピア戦争の例もまさにそれであった。その最終局面の一コマはこのような形であったと記録されている。

—2199年　ハワイ

ハワイで戦っているドラえもんたちは遂に敵要塞最深部にたどり着いた。そこにあるのは史上最後の水爆。のび太はそれと対峙していた。

「これが水爆か……」

「そうだ、小僧」

「誰だ!!」

のび太の前に現れた一人の男……というよりはロボットは自らの名を名乗る。彼はロシア赴任経験者が多いこの基地では異例とも言える名だった。主に帝政ロシア時代の偉人や軍人の名を持つ人物が多い中では少数派の米国系の名だった。

「私の名は「ミッチャー」」。この基地の航空部隊の司令だ」

「ミッチャー……ああ、戦艦大和をかってに攻撃した野暮な軍人さんね」

のび太はその名に不快感を示した。日本の象徴であった戦艦大和を

次代の最強兵器でなぶり殺しにし、しかも上官の指令を待たないで攻撃した男の名。それは戦艦大和に興味がある男の子なら知っている事であった。

「それは知っている。私も好きでこの名になったわけでも無いからな。これを見ろ」

彼は自分の手に握られているモノをのび太に見せた。それは正しく水爆の起爆装置を起動させるスイッチであった。作られた年代を考えるとなんともローテクだが、ヘタにハイテクだと当時の最新装備でハッキングされるので、あえて枯れた技術で作られたのだろう。それを示すように水爆は弾頭部だけであるが、構造そのものは単順に作られている。

「それが水爆だね」

「そうだ。私がこれを押せばここは跡形もなく吹き飛ぶ。跡形もなくだ！」

「何故だい？ここが落とされれば太平洋の兵団は旧日本軍と同じ運命を辿る……玉碎だ」

「それもまた一興だ、小僧。これは我々の思惑なのだよ」

「そうか、派閥争いか」

のび太は直感的にそう言った。軍隊で割と見られる光景なのですぐに考えついたのだが、図らずもそれは的中していた。彼は地球に対して強硬に事を運ぶべきと常々言っており、ミシチェンコとは対立している。そのため彼を快く思わない軍の幹部に接近し、彼が死んだ後の軍内での地位を保証させたのだ。

「アイツは軍でいつも私の目の上の瘤だった。出世でもいつも私より一歩先、軍内での評価も上だ。だが、これで変わる。全てだ」

「情けないね、妬みかい」

「そう取ってもらえるのは結構。だが、そのためには小僧、まずお前を始末する」

そういつて彼は銃を構える。のび太を殺すつもりだろう。のび太は身構えるが……次の瞬間、ミツチャーの前に一人の少女が現れた。ツインテールの髪型のその少女は正しく白井黒子であった。

「お待ちなさい。此処から先は私がお相手を致しますの」

「貴様は!？」

「……急いで来たかいましたわね」

「し、白井さん! どうしてここに?」

「初春からの連絡でテレポートを繰り返して急いで来たんですの。この方を取り押さえればよろしいのかしら?」

「フ……なめられたモノだ」

黒子はミツチャーと戦闘を開始した。黒子は空間移動を駆使した体術と金属矢で立ち向かうが、やはり人間を凌駕する反応速度を持つロボット相手では今ひとつ攻めきれない。やがて体力の差で押されていく。

「ハッ!」

ミツチャーの回し蹴りが黒子に炸裂する。咄嗟に鞆で防御したものの、凄まじい衝撃が黒子を襲う。そういう点は伊達に戦闘用ロボットではないと言うことだろう。

「やりますわね」

「フン。貴様のような子どもに遅れをとる作りはしていない」

「面白いですわね」(とはいうもの、持久戦は不利ですわね。相手

は機械なのに対してこちらは生身ですし。一気に決めたほうがよさそうですわね」

「ではこれはどういたします？」

黒子はテレポートで懷に飛び込み、合気道にも似た体術でミツチャーを投げ飛ばし、四肢の関節部に矢を打ち込む。だが、その瞬間、ポチッ、と音が響いた。彼もさる者。投げ飛ばされる瞬間に水爆のスイッチをいれたのだ。

、ピピピ……、

電子音と共に水爆の起爆装置のカウントが開始される。その時間は凡そ4分。いつの間に押したのか。

「あなた……まさか!？」

「そう。そのまさかだ。せいぜい4分間あがくんだな」

ミツチャーはそう言うのと勝ち誇るように高笑いする。勝利を確信した男の笑いだ。だが、それを打ち消すようにのび太はコルト・パイソンを放ち、タイマーの周りのボルトをマグナム弾で外す。黒子は驚愕した。銃で核爆弾を無力化しようとするなどあまりにも無謀だ。

「正気ですよ!?!……下手をすれば……」

「解体の知識が無い以上はこれしか手段はないんですよ。僕の腕はしっているでしょう？」

「……でも、もし失敗すれば……」

のび太は黒子を安心させるために静かに一言だけ言う。「僕を信じ

てください」と。そういうと銃弾の最後の一発を装填し、パイソンを構える。目標はむき出しになった内部のコード。赤と黄色の2つがタイマーと繋がっている。片方を切れば止まるのがこういう時のお約束だ。のび太は迷わずにその一発を撃つ。その場の空気が静まり返ったような感覚をのび太は覚えた。黒子も息を吞んで様子を見守る。そして引き金が引かれ、鈍い銃声と共に一発が放たれる。銃弾はまっすぐに黄色のコードを絶ち切って……。

第86話「プライベート・ライアン」

―水爆は野比のび太の行動によって、無事解体された。のび太の卓越した射撃センスが可能にした出来事であり、まさに彼の才能が発揮された最良の時であった。

「まさか銃で水爆を解体するなんて……ずいぶん無茶をなされましたわね」

「僕としてもイチかバチかだったんですよ。上手く行ってよかった」「でもその銃、とても小学生に扱えるとは思えませんわ。どうやって？」

のび太は自身でもほとんどバクチに近かったという銃をホルダーにしまう。黒子のはのび太が銃を軽々と扱っていることに疑問を持つ。水爆に使われるボルトを外れさせるほどの大口径銃だ。反動などを考えればとても小学生に持てるはずもない。

「実はドラえものの道具の『グレードアップ液』を使ってるんですよ。改良版ですから朝起きたときに吹きかければ効果は当分続くで」

「あのお方、ずいぶん奇天烈な道具をお持ちですわね」

「まあドラえもんですから」

のび太はここで種明かしをする。実は朝起きた時にひみつ道具のひとつで、改良型のグレードアップ液をドラえもんに噴きかけられており、大口径銃でも軽々と扱えるようになっていたとの事。そうでなければクリント・イーストウッドが「ダーティ・ハリー」シリーズで見たようなS & amp; W M 29 同様にマグナム弾を撃てる大口径銃を小学生が片手で撃てるはずはないからだ。

「何故そこまでして大口径銃にこだわるんですの？」

「ロマンですよ、男のロマン。戦艦の主砲だってどんどん大口径になったでしょう？そういうもんですよ」

のび太は強いものに憧れるのはいつの時代も男の共通事項であると言う。黒子も、風紀委員^{ジャッジメント}、の同僚や警備員^{アンチスキル}の中に銃に憧れる男子はいくらでもいたので、それはまあ理解できる。TVの特撮ヒーロー物が何時までも絶えないのもたぶんその為だろう。

「うんじゃ、この糸なし糸電話でドラえもんに連絡しておきます。

……ドラえもん？僕。のび太。水爆は僕が解体したよ」

「ええっ？ドジでのろまな君が水爆を？」

「実に腹のたついいかただな！」

「いやあゴメン。どうも僕は口下手でいけない」

ドラえもんこの一言は何気にひどい発言だが、ドラえもんはネジが一本抜けているせいなのかは分らないが、何故か口下手で時にのび太に追い打ちをかけてしまう。彼の個性なのだが、本来の開発用途を考えるといささか呆れてしまうところだ。黒子も美琴が呼んでいた、彼の漫画でそういう場面があるのは知っていたのでやれやれと呆れてしまっている。

「銃で解体したのさ。コルトパイソンでね」

「こういう時の君の度胸には何時もながら感心するよ。流石だね」

「非常時に奴に立つからね。鍛えてるのさ。それじゃ司令部に打電をお願い」

「あいよ」

連絡を終えると黒子ともどもミツチャーを部屋へ入ってきた仮面ラ

イダーV3とXに引き渡す。彼らものび太が銃で水爆を無力化したのを知らされると驚きつつも、のび太を褒めたたえた。

「まさか銃で無力化したとは。オリンピック選手でも出来なさそうなことだな……すごいよ君は」

「まあ銃の腕は鍛えてますので」

「こいつは俺らに任せておけ。君たちは別のところの救援に行つてやれ」

「了解ですの」

黒子のはのび太を連れてテレポートする。水爆を無力化したとは言え、依然と激しい戦闘が続いているのだ。人類に取ってはここがまさに正念場であった。

一前線では依然として兵团と地球連邦軍の激しい戦闘が続いていた。ホノルル中心部はまさに激戦地。小銃の火線や野砲の砲撃、高射砲などの弾丸が入り交る阿鼻叫喚の地獄絵図はまさに、戦争のはらわた、であった。

「こちら第25歩兵師団！！兵力の三分の一を喪失！！指揮官は主席・次席共に戦死！！至急救援求ム！！」

地球連邦軍の歩兵達は各々に戦った。小銃を片手に銃撃戦を行い、時に白兵戦をも行った。戦車などは陸上戦の花形であるが、歩兵の戦いもまた重要であった。時には先程の部隊のように運が悪いモノも出てくるが、これも現実である。

「中佐！！ウィッチの部隊が航空支援に来てくれるそうです！！」
「聞いたか！各員奮起せよ、これからだぞ！」

地球連邦陸軍第三軍集団。この戦場でスポットライトを浴びる部隊である。地球連邦陸軍の中ではリベラル派に属する部隊で、今回の戦闘に従事している部隊の中では、宇宙軍の空間騎兵隊や空軍の空挺師団を除いては数少ない、正規の陸軍部隊、だ。激戦地で従事している部隊なので戦死者も多く、現在までに部隊定員の六割程度まで兵力をすり潰していた。そんな彼らに天使がやって来た。航空支援だ。陸戦での航空支援というのは大助かりであり、敵にとっては悪魔である。

疲労困憊の彼らの前に姿を見せたのは加東圭子率いる航空ウィッチ部隊。ホ203やホ203などの日本陸軍の大口径航空機関砲を装備した扶桑陸軍ウィッチなどに混じってなのは姿もあった。なのは今回の戦での唯一の、時空管理局の空戦魔道師、であったが、今の地球連邦では魔力増幅用のカートリッジの調達に難がある（時空管理局がフェイトなどがいるのにも関わらず地球へのカートリッジの継続的提供を露骨に渋った。そこでスバル・ナカジマがもたらした『新暦75年の次世代型カートリッジ』を基に連合軍の協力を得て生産に取り掛かったが、モノがモノだけに生産の立ち上がりはいいとは言えない状況であった。なのは達はこの戦闘でのカートリッジの一日辺りの使用量を普段の7割から6割に制限せざるを得なくなっていた）ので、カートリッジの節約を兼ねて、レイジングハート・エクセリオンを刀剣モード（地球連邦軍の技術陣が自らの技術でフェイトのバルディッシュ・アサルトの予備パーツを組み込んだ改造をしてしまったせいで付与されてしまった、いわば、非公式改造モード、の一つ）にしてある。

「こちら、扶桑1番。目標を知らせよ」

「こちら、ブラボー1。あのトーチカを破壊してくれ。アレのせいで進めん」

「了解。これより航空支援に入る」

加東圭子は編隊を巧みに操り、戦場を駆け抜けた。編隊は大口徑砲による掃射を浴びせトーチカを破壊しせめる。空中に上がってきた敵も各自で落としていく。なのはも慣れぬ白兵戦闘ながらも穴枳智子への憧れからか一所懸命に挑んでいる。フェイトが見たらなんというのだろう。

「俺達も援護できんのか!？」

「駄目だ。対空兵器はほとんど使い果たした」

「シット!! なんてこった」

みてることしかできない齒がゆい状況に思わず舌打ちする兵士たち。彼女らに上空を任せながら彼らは前線突破を目指したが、一抹の不安が彼らをよぎる。市街戦の常道といえる姿を見せぬ暗殺者への不安だ。銃器が発達した時代で兵士たちを最も怯えさせるモノの一つ。狙撃手の銃口に怯えながら兵士たちはひたすら進んだ。

行間その30「野比家ドタバタ紀 2」(前書き)

小休止のほのぼのの回です。

行間その30「野比家ドタバタ紀 2」

—1999年 一時の休息を楽しんでいたのび太たちは来訪者たちと共に雑談をしていた。

例えば加東圭子のこの時代での苦労話などだ。

「少佐、どうです？この時代は」

「そうねえ……いろいろ驚いたわよ。芝と赤坂と麻布が合併して一つの区になってるとか、エッフェル塔みたいな塔がデーンと立ってるのか」

加東圭子の故郷の世界では明治期の行政区画が存続しているのと、東京都自体が発足したばかりなので特別区が35区という細かいモノ。それを知っているのが特別区が23区に再編されたこの時代での地理に苦戦しているのだ。（戦中までの知識しか持たない人間が大きく様変わりした後の時代である、90年代に行けば混乱するのは当然である。これはフェイトにしても同じで、フェイトにとっては一昔前にあたる時代なので、フェイトの常識も多少通じない面がある）

ここでのび太の故郷の時代について説明する必要があるだろう。

—1990年代末。当時はバブル崩壊以降の悪い空気が継続し、後の、失われたX0年、の第一期が終わろうとしている頃で、文化的には音楽では、モー〇ング娘 が最盛期を迎え、Jポップが活気がある、時代の最末期に入っていた。漫画雑誌は週刊雑誌のマ〇ジンが黄金期。80年代の熱気を失ったジ〇ンプに代わってこの時代の覇者として君臨し、ミニ四駆のブームは第二次の末期であった。

政治的には相変わらず戦後体制が形を変えながら続いていた（ただし1990年代中期に一度変わっていた）。のび太が暮らしているのはそんな時代だ。

「東京タワーですね？登りました？」

「もちろん。年甲斐もなくはいじゃってね、部下たちには言えないわ」

「少佐、東京タワーみやげ買い込んでましたしね……相当」

「当たり前よ。元の時代じゃ絶対に買えないし……」

そう。加東圭子は1945年時点で25歳を迎えている、れっきとした、大人、だ。肉体こそ若返ったが、その事は自覚している。しかし東京タワーの展望台の景色に思わずはしゃいでしまい、みやげを相当買い込んだ。しかし仲間たちには絶対に見られたく無いと自身が言う程のはしゃぎかたはいっぺん見てみたいものだ。

「それでここに来るまでに他に寄ったところは？」

「そうねえ……。セブンイレオンにローオンとか。からあげオンは最高ね」

「でしよう？僕も好きなんですよ」

ドラえもんはここで意外な嗜好を見せた。ドラえもん達ももちろんコンビニはよく行く方だが、おにぎりなどの味などで店を使い分けている、通、の部類に入る。ドラえもんはどちらかと言えばローオン派らしく、からあげオンが好きなようだ。隠していたドラ焼きを食べながら言う姿は実に愛くるしい。

「本当好きだねえ、ドラえもん。ドラ焼き」

フェイトがドラえもんに言う。もはやフェイトにとっても当たり前となった光景であるが、久々に見ると、あの時、の頃に戻ったような感じになれる。なのでおみやげにドラ焼きを買っていたりする。

「うん。実はこの間商店街のお菓子屋の店主と口論になってね」

「え？何々？詳しく聞かせてくれる？」

「いいですよ。たいした事はないんですけど」

加東圭子に相槌を打つとドラえもんはその事を2人に話す。

「こう見えても僕、ドラ焼きにはこだわってるんです。」

「へえ。どんな？」

「、甘すぎるドラ焼きは邪道、！！これです。小豆の味を活かしていないのを見ると我慢出来ないんです。それで店主に抗議したんです」

ドラえもんのこだわりは、美味し○ぼ、級であり、それはのび太も知るところだが、そのこだわりで商店街のお菓子屋の店主と口論に発展してしまったのだ。

『わしはこのドラ焼きの味に自信がある！長年の勘でつくっておる！！』

『でも小豆の味を生かせてないですよご主人！！僕はドラ焼きを愛してるんです』

『ええい、ロボットなんかはこのわしの苦心の味が分かるか！！』

『ロボットでも分かりますよ！！』

火花が出るような口論に商店街を歩く人々も注目する。

「あら、お菓子屋のご主人ともめてるのって、たしか野比さんちの……」

「ドラちゃんじゃない？あの子ドラ焼き好きだから」

「ご主人も苦心して味を変えたって言ってましたから真っ向からぶつかってますわ」

（あれ〜！？それ以前に疑問に思ってよご主人！）

（つか町の人達もごく自然に接してるし！！）

これにフェイトと加東圭子は思わず突っ込みたい衝動に駆られたとか。

行間その31「野比家ドタバタ紀 3」(前書き)

明日で小説家になろうに登録してから一年になります。皆様、これからよろしくお願いいたします。

行間その31「野比家ドタバタ紀 3」

一さて、野比家を訪れている加東圭子とフェイト・テストロッサ・ハラオウンだが、野比家を訪れるもう一人の人物があった。その人物は扶桑海軍のエースの一人で、リバウの魔王、との異名で知られる西沢義子飛曹長。容姿としてはショートカットに海軍のセーラー服姿の活発な少女といった感じである。ちなみに菅野直枝が姉御と慕っている人物でもある。彼女は2199年のメカトピア戦争末期に最終決戦でのび太らと共に戦った経験があり、今回は私用で野比家を訪れた訳である。

一野比家の玄関前

「あ、西沢飛曹長じゃないですか。どうしたんです？」

「オッス、元気してるか？今日は折角来たからお前んちに遊びに来たぜ。ん？誰かきてんのか？」

「フェイトちゃんと加東少佐が来てるんです」

「そういえばあの人達とも久しぶりだな。で、お前は何やってるだ」

「ジャイアン達と食料調達ですよ。僕は肉担当で……これから行くところですよ」

「おおそいつは面白そうだ。あたしもついてくぞ。食料は鮮度が大事だからな」

西沢はその二つ名の通りにウィッチとしては戦技無双を誇るが、分かりやすい弱点があった。それは胃の弱さである。各地を転戦して来た彼女だが、生来胃が弱いためか、ことさら食品の鮮度に五月蠅いのだ。のび太は西沢を伴って街へ繰り出した。

のび太の街―ススキケ原―は1990年代末という時勢にも関わらず、昭和3〜40年代の高度経済成長期の面影を色濃く残す。それ故に東京都心部の喧騒を嫌った人々が引っ越してくることもあるとか。2人はいつもの空き地を通りすぎ、駅の近くのスーパーに入る。

「うわお……これが未来の店か……まるでリベリオンにいるみたいだ」

西沢は初めて見るスーパーマーケットに驚いている。当然といえば当然。現在の我々が当たり前のように使っているスーパーマーケットの形態は二次世界大戦後に広まったものである。日本で普及したのは1950年代以降の事なので、この光景は西沢には新鮮なのだ。

「肉はつと……」

「待て!! こういう肉は鮮度をよくみるんだよ」

「鮮度を？」

「そうだ。ハライタになったらどうすんだ？ こういうのは重要なんだよ」

「そういうもんですか？」

「ああ。よく見とけよ」

肉のコーナーで肉を選ぶのび太を西沢は制止し、自分で肉を選ぶ。こういう時の西沢の観察眼はピカイチであり、下手な卸売業者以上である。肉を片っ端から鮮度の僅かな違いを見抜き、新鮮なモノをカゴに入れていく。流石だ。次いで彼女が興味を引かれたのはこの時代には出現していたペットボトル入りの飲料。飲み物といえばビンが当たり前な彼女としては、新時代、の象徴を買わないわけにはいかなかった。炭酸飲料を中心に10本ほどカゴに入れる。

「金はあたしが払う。いいだろ？」

「ええ、それはいいですけど、お札、ちゃんと両替してます？」

「もちろんだろ。そうで無いと来ないって」

のび太が心配しているのは西沢の持ち合わせるお金だ。西沢がいる時代と1990年代ではお金の価値がまるで違うのだ。1940年代は銭や倫という単位があったが、1990年代ではそれはない。例としてあげると、大正時代や昭和のはじめでは一桁の円が1990年代などの1000円以上に相当する。それはのび太が以前にもしもボックスで行った実験や過去へのタイムトラベルでよく知っている。西沢はそれを払拭するように財布の中身を見せる。中にはしっかりと1990年代当時に流通していた紙幣が入っている。（2011年の我々の常識で言えば一世代ほど前の紙幣に当たる。記憶に留めている人々も多いだろう。）

「ふう。よかったあ」

「あそこの役所っていい加減だからな。役人の奴、最初は、聖徳太子、とか渡しやがってさ」

「しょうがないですよ。あの時代になるとだいぶ資料も散逸してますから」

連邦政府設立から長い時を経た未来世界では多くの戦争の影響で旧時代の資料も多数が紛失している。それに古銭もだいぶ失われている。たぶん、西沢を応対したタイムトラベル関連の役所の役人はこの時代の紙幣を知らなかったのだろう。変な話だが。

「全部で4000円になります」

代金をレジで支払って、スーパーを後にする。2人の姿は傍から見ると、仲の良い高校生と小学生の姉弟か何かに見える。（西沢は海

軍のセーラー服姿だが、この時代の日本の一般人の間ではセーラー服は軍服としてではなく、学生服という認識が一般的である」

「……さっきからなんか妙に周りの視線が気になるんだけど……なんだ」

「日本海軍制式のセーラー服姿だからですよ。学生服としてのセーラー服とは違いますし」

「確かになあ……あそこの婆さんなんて泣いてるしなあ」

この時代の年配の人達には戦前・戦中の海軍のセーラー服姿の水兵を記憶している人も多いので懐かしそうに見ている老人も多かった。中には自分の青春時代の記憶と重なったのか、懐かしそうにセーラー服を見つめながら西沢に話しかける人もいたとか。結局、2人がジャイアン達と合流できたのは2時間後の事であったとか。

第87話「夢色チェイサー! 2」(前書き)

久しぶりの機甲戦記ドラグナーの登場です。

第87話「夢色チェイサー! 2」

—もはや水爆を失った兵団に連邦軍を止める手立ては無かった。要塞は安全が確認された事で、遂に火を吹いた『モンスター』と『ラーテ』の射撃によってその機能を完全に失った。そして兵団も増援を送ったもの、その殆どは水際で撃墜されていき、ハワイの戦いの大勢は3ヶ月の戦いの末に決した。その戦いの最中の出来事。アツツ島の戦いを終えた第二部隊は続々と部隊を最前線に送り出していったが、その内の一隊が予てから噂になっていた、悪魔のような翼を背負うガンダム、と交戦していた。

「速いぞ!」

「うろたえるな、V2やF91ほどじゃないぞ!」

彼らはRGM-89S「スタークジェガン」の小隊。敵ガンダムの速さは中々のものだが、戦史に名を刻んだガンダムの中の最新の2体と比べればどうという事はない。あの様なアンバランスな武装を積んでいる（対艦用の剣と推進装置を持たない長砲身砲は高機動モビルスーツには合わないだろう）のでは互いの長所を相殺しているとは思えない。散弾のバズーカでバランスを崩させて、スラスタを吹かして飛び上がる。そしてビーム・サーベルを腕の追加装甲から引きぬき、白兵戦に移行する。

ビーム・サーベルと相手の対艦刀がぶつかり合うが、スタークジェガンのビーム・サーベルの方が相手の対艦刀のレーザー部分の出力を上回るようで、ジワジワと刀身を溶かしていく。一応、ジオンのヒート系装備のようにサーベルと反発できているのは装備の優秀さによるものだろう。相手は空中戦が可能なようだが、こちらは所詮スラスタの推力でむりやり飛んでいるに過ぎないので不利だ。

「メタルアーマー、はまだか？」

かつての戦争で、ギガノス帝国、が投入した機動兵器「メタルアーマー」。あれは大気圏内での空戦能力を付加させられる装備が一般的なので空中戦はモビルスーツより有利だ。

まあ連邦軍が相手方の最新鋭機を奪取したというのはガンダム試作2号機関連の不祥事を思い出す。その時とは逆の立場なので痛快だったが。

「Dチームか。まあ、ドラグーン、は練度が低いからな」

このアッツ島の戦いは半分メタルアーマー部隊の練度訓練のような戦いであったが、ガンダムタイプと戦えるほど量産型のドラグーン装備部隊は精強とは言えない。その点、ドラグナー遊撃隊は、蒼き鷹、と張り合える腕を持つので安心出来る。（ちなみに蒼き鷹というのは、前大戦におけるギガノス帝国最高のエースパイロットの、マイヨ・プラート、の異名である）ここは彼らに任せるのが賢明だろう。

そのDチーム……ドラグナー遊撃隊は久しぶりの勇姿を噂のガンダムに存分に見せつける。

自身満々とばかりに。

「ドラグナー遊撃隊、只今到着！！久しぶりの出番だから暴れてやるぜ」

「こらケーン、メタフィクション的セリフを言うんじゃない」

「でも久しぶりののは確かだぜ？俺達なんて下痢だったし」

「それはそうだが、タップ。それ言っちゃ元も子もないぞ」

久しぶりの3機によるコンビネーションを見せつけられると張り切るケーン・ワカバ。D-1カスタムは音速の速さで敵のガンダムに接近するとレーザーソードを構える。スタークジェガン隊が下がるのを確認すると戦闘を開始した。

D-1カスタムは大きめにインメルマントーンを行って相手の背後を取るとそのまま攻撃に移る。相手のガンダムは火力のD-2カスタムを落とそうと躍起になっているようで、背後に気を配っていない。

いわば隙だらけの状態だ。取り敢えず左腕に持ち直して構えている55ミリハンドレールガン撃ってみる。

55ミリ口径の超高速徹甲弾が至近距離で相手の翼に当たり、爆発を起こすが大して傷は負っていない。バランスを崩させたただけだ。

「おいライト！こりゃあどういうことだよ」

ケーンはすぐに部隊の知恵袋であり、こういう時の情報収集などに優れるD-3のライト・ニューマンへ通信をつなげる。するとすぐに答えが返ってきた。

「マギー、ちゃんによるとそのガンダムの装甲は普通の金属じゃなくて、相転移で物理的攻撃への耐性を高めた奴らしい。レーザーソードとかで攻撃しろ」

「了解。ずいぶん嫌な奴だなそれ」

D-3は優れた電子戦能力を発揮する。それがたとえ未知のガンダムの管制OSであっても例外ではなく、

ハッキングして情報を盗む事は容易らしい。これが頭部がレドームなD-3の恐ろしさだ。

「二応OSには細工はしてある。その細工はあと5分で発動するか
ら」

「さすが！こういう時にD-3は頼りになる」

「くそっ、このウィンダムモドキ……チヨコマカと！！」

ドラグナー達の高練度な攻撃に苛立ちを顕にするデスティニーのパイロット「シン・アスカ」。

彼はドラグナーを自分達の世界の地球連合軍主力モビルスーツ「ウィンダム」に似ていたのでこう言った。だが……彼はどこかで見くびっていた。ドラグナーの実力を。そしてドラグナーの3機を駆る者たちが自分以上のエースパイロットであることなど知る由もなかった。

第88話「夢色チェイサー! 3」(前書き)

『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』が本格的に絡みま
す。

第88話「夢色チェイサー! 3」

一さて。アツツ島の戦いにて未知のガンダムと交戦したドラグナー達だが、練度の差で優位に持ち込む事に成功していた。突撃一辺倒の敵ガンダムの動きから行って、かつての自分達と同年代の少年が乗っているのは間違いないと目星を付けていた。

「やれやれこういうのはお約束って奴だなあ」

歴代の歴史に名を刻んだガンダムは一部除いて少年が偶然乗り込むケースが多い。一年戦争のアムロ・レイ、グリプス戦役のカミーユ・ビダン、第一次ネオ・ジオン戦争のジュドー・アーシタしかり。その法則は目の前の機体にも当てはまったようだ。アツツ島方面の主力を担っている自分達もまだ10代なので、いつの時代もなにかしらこういう事は起きるとケーン・ワカバは関心するとD-1カスタムを巧みに操り、ガンダムを匠みに翻弄した。

「ガンダムのOSに仕込んだっていう仕掛けはそろそろ発動するはずだけど……」

そろそろ先程から5分が経過する。D-3の仕掛けが発動するはずだ。どのような仕掛けだろうか。成り行きを見守る。すると敵のガンダムの装甲の色が急激に色褪せてメタリックグレーになっていく。D-3の仕込んだ仕掛けが働いたらしい。

「ケーン、今なら実弾兵器でも通じるはずだ。畳み掛けろ!!」

「アイアイサー!!」

D-3が仕込んだのはある一定の機能をおかしくするコンピュータ

ーウイルス。今回の場合は相手の装甲の機能を働かすアプリケーションを犯し、相転移を停止させたのだ。実に単純なようだが、かつての地球連邦軍教導団が反乱を起こした際、モビルスーツのOSにウイルスを仕込んでおき、当時のエウーゴの降下作戦を失敗に追い込んだ例が存在する。コンピュータウイルスはこの時代でも有効であるのは確かだった。ケーンはここぞとばかりに攻撃を畳み掛けていった。

デステイニーの装甲が機能不全に陥った事はシン・アスカを混乱に追い込んだ。、最新鋭、の機体であるので整備は一番気を使っているハズ。OSの動作も完璧だったのに突然装甲の機能に異常が出たのか。大昔のパソコンのOSにはたまにこういうトラブルが出ていたのは聞いているが、こうも最新鋭のモノででるのだろうか。

「動力伝達機構には問題ないハズだ……何で!？」

武装などには問題は出ていない。何故、装甲の機能だけがダウンしたのか。彼にはわからなかった。電子戦の概念は彼の知る限りでは、前の戦争、で殆ど顧みられることは無くなったはず。前の戦争で在来のリーダーなどを自然に攪乱する装置が投下されたおかげでと一部のテクノロジーを除いて、全般的に技術的に優れる、プラント、のモノがこうも……（電磁パルスなどを応用した兵器はあるが、コストがかかるので投入は前大戦の一度だけ）

プラントの事実上の国軍のザフトの技術はモビルスーツなどの技術的にはコズミック・イラ73年の時点では地球側を凌ぐ。それはビームシールドや核分裂炉の出力向上のためのハイブリッド機関の存

在に寄る物である。シンは知らないが、そのテクノロジーは前の戦争の際に回収したモノ達の解析結果で生み出されたとの噂が政府内部であった。一節によれば地球軍が秘密裏に投入した新型モビルスーツだとかモビルアーマーの残骸、もしくは機体そのものともされ、僅か3年でビームシールドを実用に押し上げた原因は地球側の技術を獲得し、なおかつそれを在来技術と組み合わせたおかげであるとも言われていた。そしてデスティニーの動力はその産物。何故ここまで急激に技術が向上したのか。それは……。

「なんで落ちないんだよ、落ちろおっ!!」

シンは傷があるもの、攻撃力は損なわれていない対艦刀をイチカバチかで目の前にいる機体へ振り下ろす。不意打ちなので対応できないはずだが、次の瞬間。ドラグナー側のケーンはかつてギガノス帝国の大型機「ギルガザムネ」に対して行った方法を取った。

「あの時じゃないけど……必殺!! 真剣白刃取り!!」

D-1カスタムは頭部に当たるかというすんでのところで真剣白刃取りをしたのだ。

「こいつ、アロンドイトを受け止めた!？」

これにシンは驚愕した。モビルスーツ(?)が大昔の時代劇のような行為を行うなど聞いたこと無いからだ。シンは操縦桿を押しこむが押し込めない。が、動かない。腕を動かそうと操縦桿を動かそうとするが、ピクリとも動かず、一向に相手を押し返せないのだ。

これにはメタルアーマーは核融合炉駆動である事が原因であった。いくらデステイニーのハイブリッド機関が膨大な主力を出せると言っても発電効率が違う。メタルアーマーの核融合炉は発生させるエネルギーをほぼ完全に動力へ変換できる。カタログスペックの出力はデステイニーより小さいが、動力伝達機構は洗練されているので、全体へ行き渡るパワーは大きい。その差が現れたのだ。

「ケーン、近くに母艦がいる。増援が出てくるぞ」

「え、マジ？俺いまそれどころじゃないって」

「安心しろ。そっちの増援にSSMS-010ZZの皆さんが行った」

「あゝあ。終わったな」

敵も運がない。全長31m以上のZZの派生型に襲われるというのだから。ケーンは相手の不運を同情しなくなった。

「ち、ちよつと……なんなのよコイツら!？」

デステイニーの応援に派遣された「インパルス」。これもガンダムタイプというべきモノだが、相手はとんでもないもの。巨大戦闘機が合体して超大型モビルスーツになるなど常識はずれだ。しかも以前、相対した地球軍の奴より遥かに俊敏な動きを見せている。この間の小型機といい、常識が全く通用しない。パイロットの赤毛の少女「ルナマリア・ホーク」は敵の威容に思わず息を呑む。

次の瞬間、相手の2連装ビーム・ライフルとおぼしき火器が火を噴

く。危険を感じ、回避するが……

「きゃあっ！！近くを通り過ぎただけなのにこれ……！？反則よ！」

敵の2連装ビームライフルの威力は大きく、近くを通り過ぎただけで機体を大きく揺さぶられ、装甲が一部融解する。

「こんなことなら接近戦用の「ソードシルエット」でいくんだったっ……」

彼女は対MS格闘戦を想定した装備に換装したい気持ちに狩られた。だが、今はそれどころではない。今は現状の装備で対応するしか無い。だが、あの武器を見た後だと心許ないが……。

「……！！」

SSMS-010ZZはZZガンダムを設計母体としているので、その装備は同様だ。バックパックに仕込まれたミサイルランチャーが火を噴く。対艦用の大型弾頭だ。バルキリーのマイクロミサイルの技術を応用して機動性はピカイチ。瞬く間にインパルスを爆炎に包みこんでいき、派手に爆発する……。

行間その32「You can change the future」(前編)

今回は御坂美琴の学園都市帰還後に触れます。セリフ自体は少なめで、殆ど独白と地の文だけの文章ですが……。

行間その32「You can change the future」

一御坂美琴は帰還後、自らのエゴかもしれないが、自分と腐れ縁の上条当麻の未来を変える事が行動指針となり、上条当麻、や自らの運命を変えるために奔走していた。それは未来世界で戦って味わった出来事や見てきた事が美琴に影響を与えていた。

（未来は変えられる……どんなに相手がでかくても人は運命に抗って、未来を勝ちとって来たんだから……あたしだって運命を変えて見せる……！）

これは未来世界で素人目に見ても敗北は必至であるように思えてしまうような、戦争に打ち勝って人類が未来をつかみとるということがこれから150年以内に起こる確固たる歴史として存在（美琴の時代からは一年戦争などは150年以内に当たる）するのを知った上での美琴の独白である。

「……」

ある日を境に、どことなく物憂いな雰囲気を見せるようになった御坂美琴の様子は常盤台中学でも、もっぱらの噂であった。色々な噂が飛び交っていたもの、実際のところは先程の通りである。

「どうしたんです、御坂さん。この前、ちょっといなくなってからずっとあんな調子なんですか？」

「ええ。まあ」

白井黒子は友人の一人の佐天涙子さてんるいこからの問いをはぐらかして答えた。黒子もまた未来世界で自らの遠い子孫の代の人間たちが戦いの中で

掴みとってきたモノや、起こしてきた奇跡、の一端を垣間見てきた。特に黒子が印象に残ったのは第二次ネオ・ジオン戦争の最後にアムロ・レイがVガンダムに組み込まれたサイコフレームで起こした、隕石の押し返し、。

『分かってるよ……だから世界に人の心の光を見せなけりゃならないんだろ!!』

一彼は無茶としか言いようの無いことをやってのけた。たった一機のモビルスーツであんな隕石を押し返した。お姉さまがあの方に対して尊敬の念を抱いているのはあの類人猿一上条さん一を思わせるからでしょうか？

美琴達は何ヶ月も未来世界で過ごしたが、タイムマシンによって、3時間、しか出かけていない事になっていた。なので周りには美琴の急激な変化に驚き、戸惑う人間も多かった。佐天涙子はその最たる例だ。そんな中でも白井黒子は未来世界でも行動を共にしたので、美琴の変化をうすうすと感じていたが、敢えて言わないでいた。相棒としては不本意ではあるが、こういうのは上条当麻の役目であるのは分かっていたからだ。（なので黒子の上条への接し方にも多少の変化が生じた）

黒子はそんなことを思いながら佐天涙子との会話に久しぶりの平穏を見出したのか、美琴の代わりに佐天との雑談に興じた。

—あたしは学園都市の闇と、アイツ、にまつわるこれからの運命を

何もかも知ってしまった。何もかも。仮面ライダーV3が教えた事が事実なら、今年の秋には、ロシア、が学園都市に戦争を挑む。そこでアイツは重要な立ち位置にいる。一そしてあのシスターっ子はあたしたちの知る、世界、とは別の裏の世界一信じがたいが魔術師というのが存在しているらしい一で重要な役割か何かを背負わされているらしい。

（あいつはあの子を守るために今でも体を張ってるはず……記憶が正しければ神の右席とかい^{かみのうせき}う化物みたいな奴の第一陣が近いうちに来る……）

「黒子、ちょっとでかけてくるわよ」

美琴は上条の事が気がかりでしょうがなかった。大覇星祭も終わり、そろそろイタリアからは返ってきている。明日なら会えるはずで、罰ゲームも実行出来るだろうが、それは置いて。これから大きいことが起こるなど、彼も思っていない。それを教えたい衝動に狩られるが、上条のことだから敢えて渦中に飛び込むような無茶をするのは目に見えている。なまじっか、ああしてこれから起こるはずの未来を知ってしまうと、いざどうしたらいいのか分からなくなる。しかし確かなことがある。運命に抗えるのなら神に喧嘩売っても抗う。人間はそうやることで、未来を切り開いていった。過去も、今も、これからの未来も。

一あたしはアイツの行動を放っておけない。行く前の歴史、みにい^にに実はアイツに守られてたなんてのは嫌だ。あたしだってアイツの力になってみせるっ……！

彼女は歩き出す。単なる守られる側から、共に戦う、立場へ。そして何よりも大事な人のために。未来で、人の革新、と言われた者たちが信じ、体現した奇跡を、自らの手で起こすために。たとえば学園都市や世界の闇がなんであろうが、それを受け止めて屈せずに抗えるだけの精神力を身につけた美琴にはもはや絶対能力進化（レベル6シフト）の時に見せた心の弱さは無かった。

一運命だろうが、宿命だろうが、変えられない物はない。自らの力で抗うだけ抗うという確固たる意志がいつの間にか彼と共に心に根づいていたのに美琴が気づくのはここからまだ後のことである。

行間その33「You can change the future 2」

— 実際、御坂美琴が未来を変えおうとするきっかけとなったのは2199年のハワイで仮面ライダーV3達から聞かされた事実である。

『じ、じゃあ私のDNAマップを採集した理由は、将来的にレベル5になれる可能性があったから、……？』

『そういう事だ』

— V3やXライダー曰く、学園都市は何のために存在しているのかは2199年時点でも分からないが、歴史では能力開発を行う前からその生徒の素養が事前に分かっていたながら大義名分を振るって能力者を作り続けたが故に学園都市は、天罰 オーバーテクノロジー・ロジック・マクロス を受けたようにOTMの台頭で地位を失墜したとか……。

美琴は学園都市が未来で衰退した理由や仮面ライダーXから聞かされた『素養格付け』の事を思い出す。彼によれば表沙汰にならなかったのは学園都市の存在意義、超能力を作る意味そのモノが根底から覆されてしまうからで、一部の権力者のみしかその存在を知らなかったというのが……。

「暗部の連中も抗争とか色々合って組織の統廃合も進んだはず。問題は……そういう連中がいるつつう事ね」

これはスクールやアイテムなどと呼称がある複数の暗部に潜む組織の事を指す。、帰還直前、に彼女は暗部と関わった仮面ライダー達からあらかたの詳細は教えられている

「あの、実験、の際に交戦した高校生くらいの女は組織の一つのリーダー格で、超能力者の第4位、麦野沈利、。その気になれば第3位の自分も倒せる（第3位というのは能力の強さの序列とは限らない）ってのが研究者の談で、だけどそれほどのパワーを出せば能力を使う人間の肉体が持たない……か。」

「だからあの時、あたしにスゴイ敵愾心を抱いてたわけか……。恐ろしい話ね」

美琴は以前交戦した能力者達が暗部の一角を担っていた組織の面々である事は、あの時、に知った。未来では学園都市関連の資料も大分失われたが、ひみつ道具、「タイムテレビ」という便利なモノが残っていた。ドラえもんが持っていたモノもあるもののび太やドラえもんに頼み込んで使わせてもらった。その時に、見た、。

「……未来を知ったのは幸運だったのか不運だったかは分からないけど……とにかくやるしかないわね」

運命を好転させられるかという事態は自分に全てが掛かっていることを考えると胃が痛くなりそうなので今は単純にいかなければ。一番驚いたのは第一位の一方通行アクセラレータが自分の、妹達、の最後の個体「打ち止め」（ラストオーダー）の面倒をみている事だ。あの時は冷酷にも思えた一方通行にもどこかに人間としての情が残っていたと思うべきだろうか？それとも当麻がぶん殴ってくれたおかげで、正気、に戻った、のだろうか？それは分からない。

彼もまた学園都市に人生を翻弄された一人であることには変わらない。全てを変えられるほど自分は強くないが、アイツ―上条当麻―が願う幸せ位は守ってやりたい。あの時―絶対能力進化（レベル6

シフト)の時にアイツがそうやったように。拳を握りしめて決意を新たにし、とりあえずコンビニに入って気分を落ち着かせようとコンビニに立ち寄る。

一コンビニに入ると見覚えのある人物がいた。両手に手袋をして大きくSのマークが入っている、70年代だか60年代的な、とんでもなくダサイシャツを着ている人物は……。

「おっ、来たな」

「……って！何でアンタがここにいんの！？つかこの時期は……」

そう。その人物は仮面ライダーストロンガーこと、城茂であった。この時期は確かに活動していたが、学園都市には来ていないはずだが……彼女のことを知っているとすると、あの時間の彼、だろうか。

「タイムマシンで来たんだよ。俺も色々調べもんがあつてな」

「でも同じ時間に2人いるって事にならない？SFとかで見るじゃない」

「その辺は気にしない」

「で、調べもんって？」

「ああ、この時代の学園都市から、奴ら、に流れた技術もあんから、その出所を調べに来たんだよ」

彼が来た理由は学園都市をも己の目的のために利用したと思われるバダンの痕跡を調べるためという。

有史以来人類を裏で操ってきたバダン大首領は学園都市さえも己の目的に利用したという。それで得られた技術が自分達仮面ライダーを始めとする、サイボーク、に使われた可能性があると事なので、

ストロンガーが急遽来訪したのだ。

「ボディーチェックとかよく大丈夫だったわね？」

「大丈夫じゃねえよ。俺は手がコイルだから金属探知機に引っかかるんだよ……言い訳とか大変なんだぞ」

「そりゃあ大変」

ストロンガーは改造超電子人間（パワーアップのための超電子ダイナモが埋め込まれた状態なのでそう呼ばれる場合もある）なので手が発電のためにコイル状である。飛行機などにのる際には他のライダー達と違って、手で金属探知機に引っかかる事が多い。（改造人間は皮膚などをナノマシンで生成しているので通常は引っかかる事はないが、ストロンガーの場合は手がコイルなので引っかかる公算が強い。）

「まあ、どうにか言い訳をどうにか通して来たっうわけ。お前も頑張れよ」

「な、何で知ってんのよ」

「一文字さんからの事付だよ。結構心配性なんだよあの人」

美琴の事情は歴代の仮面ライダーに知られていたようだ、一文字さん、とは、仮面ライダー二号Ⅱ一文字隼人の事。一応彼には帰った後のことを言っておいたのだが、そこから仮面ライダー達に広まったらしい。そうなると既にBLACKRXの南光太郎にまで伝わっていると考えたほうが自然だろう。2人はほしい物を取りあえず買って外に出る。

「んじゃまたな。また連絡するから」

「風紀委員とかに捕まらないでよ？」

「あゝい」

城茂は駐車場にとめてある愛車の「カブトロ」を吹かして走り去る。一見すると一昔前の暴走族の改造バイクにも見える風体。さらに物凄いスピードでかつ飛ばしていったので警備員や風紀委員に何か言われないだろうかと美琴にいらぬ心配を抱かせる。しかしこの間にも彼女にとっての運命の刻は刻々と近づいていた。

一全ての運命が動き出す9月30日まで、後7時間。美琴にとっての歴史改変が始まろうとしていた……

行間その34「魔法少女リリカルなのはVivid 1」

一、高町なのは、は19歳時以降では同じく、魔法少女、となった他の平行世界との違いが顕著に現れていた。11歳当時の経験からか、巫女服+小具足という組み合わせの服装に強い憧れを持っており、ミッドチルダからわざわざ扶桑陸軍へ連絡を取って取り寄せるほどであった。そのためか23歳の時に義理の娘「ヴィヴィオ」にその格好を見られてしまっても動じる事はなかった。

ーミッドチルダ新暦79年前後

この時期のミッドチルダは既に首都がナチス残党軍によって制圧されているため、なのは達はまだ勢力の及んでいない区間に事実上の疎開を強いられていたが、至って平和であった。彼女らと歴代仮面ライダー達の尽力によって難を逃れた市民たちは逞しくも市民生活を営み、今までと変りない生活を送っていた。ナチス残党も兵站面の事情があるのか、地盤を固める意図もあって制圧後はミッドチルダでは目立った行動は避けており、夜に将校レベルが自由行動で市街地に現れる（と、言っても俗にいう吸血鬼のようなことをするわけではない。時空管理局に出来た知り合いに合うなどをする程度）くらいであった。

また、スカリエッティの作った戦闘機人「ナンバーズ」達は4年前、それぞれ仮面ライダーストロンガー・スカイライダー・仮面ライダーZX・仮面ライダーBLACK RXとの交戦の折に4人前後が捕虜となり、その後は人類側につく選択を取った。そのためあくまでスカリエッティに忠誠を誓う姉妹たちとは袂を分かち形となった。ヴィヴィオ達と親交があるのはその4人だ。

この時、なのはの、娘、のヴィヴィオは約10歳。思春期も間近に

控える年頃であった。

「あれ？なのはママ、なにしてるの？それにその格好は？」

「ヴィヴィオ？ああ、これはね……ママが子どもの時に憧れた人たちが着てた服なの」

「前に写真で見た人たちが着てた服だね？それにティアナさんも」
「うん」

「色々あってね。この手の傷とか……」

ヴィヴィオになのはは子どもの時の体験を詳しく話す。ある一定の年齢にヴィヴィオが達したので、全てを話すことにしたのだろう。
(ヴィヴィオはなのはの服装を不思議がっているが)

内容的には以下の通りである。

ある任務で出向いた世界が実は故郷の地球のもうひとつの姿だった事。そこで生死の境を彷徨う負傷を負った事、その地球では平和という言葉が懐かしく思えるように戦争の嵐である事(2203年になって、地球が解放されたと思ったら今度は銀河規模の戦争に巻き込まれたという情報はなのはの耳に入っていた。現在進行形で言ったのはそのため)、まさか帰れるとは思ってなかったところもあるが、戦争を終わらせたかったのもあって向こうの世界の軍隊に士官待遇で入った事……そこで師と言える人物に出会ったこと。

「なんで帰れないと思ったの？」

「あの時、あの観測指定世界とは国交がまだ無かったの。国交が無い以上は管理局も表立って動けない。だから上は調査を打ち切った

の。後からヴィータちゃんから聞いたんだけどね」

「帰れたってことはもしかして……フェイトママが？」

「うん。リンディ提督が手を回してくれてね。執務官になったばかりのフェイトちゃんをいかせてくれたの」

それはほとんど事実だが、一部当時の事情とは異なっていた。当時、フェイトは確かに執務官試験は受けていたが、実はまだ合否判定は出ていなかった（担当官曰く、結果はギリギリ合格）だが、断固としてなのは生存を信じるフェイトの願いに答える形で義母が上を説得する形で仮任官を経て出向いたので、正式な任官は事件の後の事だ。（上も有力な人材を行かせたくなかった面もあるので行ったあとに事後承諾）

「で、向こうの軍隊に入ってからその人にあつたの？」

「そう。強くてカッコ良かった……当時の私にないものを全て持ってたせいもあるかな？とにかくその人に憧れたの。それで弟子になったの。別の世界の日本出身の空戦魔導師でね。今でも連絡取りあつてるの」

「その人の名前は？」

「穴拭智子、陸軍大尉。その時は中尉だったけど……その人はママの世界で伝説になった女戦士（武将という表現はミッドチルダには無かったのでそう表現した）に例えられる異名を持つ空戦のエース。部隊指揮官経験もある一流の逸材。私はその人を目標にしてるの」

なのははこの時ヴィヴィオに初めて自分の目標とする人物の名をはじめて言った。穴拭智子。またの名を扶桑海の巴御前。なのはが1歳から常にその背中を追いつけてきた師匠。ヴィヴィオは「会ってみたいなあ」と漏らす。なんとか自分を救ってくれた、母、がさらに憧れる人とあれば娘としては気になるのだろう。

「あれ？呼び鈴？」

「あ、私が出るよ」

ヴィヴィオは呼び鈴の応対に出る。するとティアナ・ランスターであった。

「ティアナさんですか？お久しぶりです」

「ええ、久しぶりねヴィヴィオ。なのはさんはいる？」

「いますよ。呼んでみましょうか」

「頼むわ」

彼女は今ののと同じく巫女装束＋小具足の扶桑陸軍の一般的戦闘服姿であった。アフリカ戦線から一次的に帰ったらしく、加東圭子と同じようにゴーグルも付けている。ただし髪形は史実ではこの時期は髪をツインテールではなくしていたが、ここでは別世界を行き交っていたために髪形はツインテールのままであり、アフリカにいたせいで色素が薄くなっている。年齢も実質的には10代後半のままだである。

「ティアナ？久しぶりだね。アフリカから帰って来れたんだね」

「休暇を取ってきたんです。ん？その格好は……？」

「扶桑から取り寄せておいたの。綾香さんに無理言ってるね」

「そうですか。それでどうですか、それ」

「始めは恥ずかしいけど、慣れれば動きやすいし良いかも」

「でしょう？扶桑陸軍ではこれ普及してますからね。そうだ、ケイさんからおみやげがあるんです」

「加東少佐から？」

「ええ。ちよつとお邪魔させてもらいます」

ティアナは家に上がって加東圭子からのおみやげをなのはに手渡す。彼女からの手紙も添えられているた。内容は掻い摘んでいくと『ティアナを預からせてもらってるけど、頑張ってるからね』と『智子や黒江ちゃん共々三等空佐昇進のお祝いに行くわよ』というモノ。

なのははこの年に上層部からの誘いに乗る形で佐官へ昇進した。条件は「前線への残留」。デスクワークは性に合わない事は自分自身よく知っていたので、上層部に脅しに近い形で直談判したという。（このやり方はハンナ・ルーデルの常套手段であり、彼女はなのはにその方法を教えていた）その結果、英雄、を求める上層部が応じた。こうして佐官でありながらも前線で戦う事が許されたのだ。その式典とは別に内輪でやるパーティに誘っておいたのだが、来てくれるらしい。特に特別な役職についていない智子や黒江はともかく、前線の要とも言える部隊の指揮官の圭子が来てくれるかというのは思ってもなかったのではは思わずガッツポーズをしたとか。

第89話「AGE OF EMPIRE」(前書き)

77話の続編です。ナチス残党によるミッドチルダ襲撃編。

第89話「AGE OF EMPIRE」

一かつて、第二次大戦で日本・イタリアは主にドイツの千年王国の夢を追いつめる姿に共鳴し、全世界に戦いを挑んだ。尻馬に乗った日本はドイツと共に最後まで戦った形で敗戦を迎え、イタリアは真っ先に敗北し、裏切りに近い形で連合国についた。だが、当時の同盟国が消え、ナチスそのものも滅んだと言われる、1945年4月以降もナチズムは生き続けた。同盟国の大日本帝国が連合国が造った日本国に取って代われ、国民自体もそれを良しとしたのとは対照的にナチスとその思想はその後も延々と続いた。その事を八神はやては歴代の仮面ライダー達から知らされ、愕然としていた。

一新暦75年 ミッドチルダ 某所

「アイツらがナチスの生き残り……!? んなアホな……ナチスは70年近く前に……」

はやてには信じられなかった。第二次大戦は彼女にとっては大昔の事。ナチス自体もはやてから見れば100年近く前に勃興し、滅んだ時からでも70年ほどの歳月が経過している。そんな、過去の亡霊がミッドチルダに現れた事自体、常識はずれだからだ。

「……いいや奴らは滅んじやあいねえ。見ただろ? あの降下猟兵達を」

「なんでや!? たとえナチスの軍人が戦後の追求から逃げおおせたとしても私らの時代にはもうヨボヨボのジイさんになつとるはずや!?!? なんてあんなに若いんや!?!」

「……奴らはもう普通の人間じゃねえのさ。吸血鬼、あるいは改造

人間になつてゐるからな」

「んなつ……！？」

カブトローを運転しながらストロンガーはナチスの亡霊達が何故存在するのか説明する。

彼らはナチスが長年にわたって研究してきた技術によって、人為的な吸血鬼化、を行うか、改造人間となって機械の体を手に入れた。彼らは老い果てた肉体に別れを告げ、最盛期の頃の姿、もしくは氣力がまだ充実していた時代の姿を再び手にした事を意味していた。

一現に襲撃してきたドイツ兵達は、見かけ、の年齢は10代〜30代程度に見えた。実際はそれより遥かに年を取っているんやけど、見事なまでに統制された作戦行動は私らの時代の自衛隊がお遊戯に見える程やった……。これが初めて近代的電撃戦を実践したって言う軍隊なんやな……。

時空管理局はミッドチルダ政府にとっての事実上の国軍的な一面を有する。当然ながら兵法などは目を通す機会があり、はやては指揮官の責務を負うのでその方面の資料は目を通していた。その中には地球の軍隊関連のものもあり、ナチス・ドイツードイツ国防軍ーが何故緒戦で連合国を圧倒する強さを見せたのか、その強さはどこにあるのかは本で見えて知っているつもりであったはやてであったが、実際に相対してみると分かる。兵士たちの服装こそアフリカ戦線・西部戦線・東部戦線や空軍などが入り交じり、てんでバラバラだが、兵士たちの統制は取れているし、火力集中や戦車による戦線突破……ドイツ軍必勝のドクトリン「近代電撃戦」そのものだ。

「あいつらは何をミッドチルダでしようっていうんや……」

「ポーランド侵攻、やフランス侵攻、だろうよ」

「ならこれはダンケルクの戦いやね。さしずめ私らはダイナモ作戦の時の連合国軍やな」

はやてはナチスがミッドチルダ首都を降下猟兵などの電撃的侵攻で制圧しようとするなら、撤退しようとする自分達はダイナモ作戦の時の連合国軍であると言った。そうなれば今は多くの局員を逃がすことが自分の役割だと悟ったのだろう。それを聞いたストロンガーは自身の通信を時空管理局の通信回線に割り込む形で繋ぎ、はやての意志を伝えた。

『今戦っている時空管理局の局員へ。八神はやてから伝言だ。、局員は直ちに撤退し、取り敢えず北部へ向かえ、。繰り返す、北部へ向かえだ！』

今制圧されようとしているのはミッドチルダ中央区間にある首都だ。その他の区間には手は及んでいない。そう感づいたはやてはストロンガーを通して（念話では妨害の可能性もあるので、オーバーテクノロジーである仮面ライダー達のテレパシーに近い通信を介して伝える必要があった）意志を伝える。それは直ちに伝わり、半信半疑ながらも撤退していく局員が始めていた。

「普通に考えればお前のやったことは越権行為だ。だが……こう言う場合はしょうがねえのは事実だ」

「うん。それはわかってる。だけど……佐官以上の士官がほとんどやられた以上、この場で命令できるのは二等陸佐の私だけや。後でどう処罰されようが……今は……」

はやては少しでも多くの命を助けたかったのだ。死した仲間が、ア

ンデッド、リヴィングデッド、とも形容される食屍鬼となり、改造人間の被験体になるのは忍びないし、戦いたくは無かった。だからこれ以上の戦死者を出す前に撤退命令を出したのだ。

一介の二等陸佐（中佐）の権限を考えれば越権行為であり、上層部の逆鱗に触れば懲罰ものだ。だが、それを咎める者は誰もいなかった。生き延びることが最大の目的と化していたからだ。それに上層部そのものが襲撃によりほとんどが死亡し、体をなしていなかった。奇しくもはやてはこの命令により戦後に、英雄、として祭上げられる事になる……。

一方、スカイライダーはヴィータを救出し、ナンバーズの内の一人と交戦していた。

「ち、ちょっと待って、おいしー!!」

「こう言う場合はまたないのがお約束なんだ、悪く思わないでくれないよ」

「お約束ってー!!」

スカリエッティの作り出した「ナンバーズ」の内、6番目の少女「セイン」は戦闘向きとは言えない能力なのでこういう直接交戦には向いていない。だが、相手は、ネオショッカーを打ち倒した、8番目、の改造人間「スカイライダー」。99の技を駆使してセインを圧倒。投げ飛ばされるわ、プロレス技をかけられ、彼女としては最悪であった。

「99の技の一つ!!ライダー^{まんじ}正固め!!」

この技は要するにプロレス技をかけるだけだが、威力は抜群。何かに絡みつくタコのようにスカイライダーは容赦なく畳み掛ける。セインはあまりの痛みに悲鳴をあげることすらままならない。

「~~~~!!」

「降伏しろ!このままだと君の体のフレームがへし折れるぞ!」

スカイライダーの言葉通りにセインの体のフレーム（戦闘機人は基本的に駆動骨格が埋めこまれている）が悲鳴を上げ始める。スカイライダーの発揮するパワーに機械部分が耐え切れないのだ。このままではまずいと青ざめ始め、涙が目のにじんできている。

「わ、わかった!!わかったから降りてくれえゝしぬう……」

スカイライダーはセインの青ざめた表情や声から本気であると悟り、すぐに技を解く。

「はぁ……はぁ……、死ぬかと思った」

「悪いが腕は縛らせてもらうよ」

「あいよ。捕虜は丁重に扱ってくれよ」

「もちろん」

スカイライダーによってセインもまた捕虜となったが、これはまだ幸運なほうであった。もっと悲惨な運命をたどった姉妹達はいた。例えば、ナンバーズの3番目の「トーレ」は仮面ライダーZXと交戦するも……

「ZX!!! イナズマキイイイ——ック!!!」

仮面ライダーZXはRXには及ばないが、歴代仮面ライダーの中では有数のパワーを誇る。その上バダンが最高技術を費やして創り上げた、大首領の器である。鋭い赤い光に包まれたZXは稲妻となつて上空から一気に飛び蹴りを食らわした。凄まじい破壊力にトーレの障壁は発泡スチロールのように碎け、両腕を塵に還元されていく。そして神の怒りのような凄まじい衝撃がトーレを吹き飛ばす。

仮面ライダーZXの最強技である、「ZXイナズマキック」は仮面ライダーストロンガーが超電子ダイナモでようやく実現した「超電稲妻キック」の破壊力と同等のポテンシャルを誇る。それを証明する如く、炸裂の瞬間、赤い稲妻が落ちたような現象が発生する。その破壊力はトーレの肉体内の機械にも重大な破壊をもたらし、彼女の意識を暗闇の底へ落としていった……。彼女は意識が暗闇に沈む瞬間、仮面ライダーの大いなる力に仇なした事を後悔し、仮面ライダーという存在を敵に回したらどうなるか、を思い知った。ナンバーズと仮面ライダー。その違いが現れた戦闘と言えた。

第90話「AGE OF EMPIRE 2」

「なのは達はミッドチルダ攻防戦の折、秘匿していたかつての愛機で空戦に入り、なんとか生き残った。ナチスの誇るエースたちは、軽いウォーニングアップ、代わりになのは・フェイト・黒江綾香の3人をまとめて相手取っても余裕であり、これを退けた。

エーリッヒ・ルドルフアーは黒江綾香の駆るYF-29 デュランダル of 攻撃を退け、制空権を確保した。性能の差を覆すほどに練度の差はやはり大きかったのだ。

「こちらエーリッヒ・ルドルフアー、敵を撤退させた。これより帰還する」

「了解」

彼の「VA-1SS メタルサイレーン」には目立った傷はない。辛うじて白兵戦で「YF-29 デュランダル」の繰り出した日本刀で付けられた掠り傷がある程度だ。彼は久々の空戦を、楽しんだ、事に満足気だ。

「戦後は民間航空会社で飛んで余生を送ったが、やはり戦闘機乗りとして飛ぶに限るよ」

「そうか。俺は若いまままで向こうで飛んでたから分かんが、そうだろうな」

ヴァルター・ノヴォトニーにエーリッヒ・ルドルフアーはこう漏らす。ルドルフアーは20代（容姿的には24、5であった1941〜42年頃の姿。生年月日が1917年なので）の姿に戻るまでは

90代の老人であった。既に隠居した身であり、本人も認めるほどの、ヨボヨボじい、。元ナチ軍人なので祖国であったドイツに戻れば後ろ指を指されかねない状況。彼はナチスそのものは好かなかったが、戦後のドイツの政治的姿勢には嫌悪感を持っていた。当時の国民にはヒトラーやゲッベルスの巧みなプロパガンダがあったとは言え、第二帝政の失墜とワイマル体制への失望がナチスへの期待になったのを知っていた。それを忘れて、悪行、だけを取り上げて、あの当時のことを批判するのに彼は嫌気が指していた。

2010年頃のある日の事。既に余生を送るだけであった彼の元を訪れた一人の男がいた。その男の名は「ヴァルター・クルピンスキー」。日本ではハンス・ルーデルが戦後にトラブルに巻き込んでしまったドイツ連邦軍の高官で有名な人物。彼は戦後も軍人として生きて、彼から見て、もうずいぶん前に死んだはずの人間だ。

「なんの用だね、大尉。あの世から私を迎えに来たのかね」

ルドルフアーはヴァルター・クルピンスキーが往年の若かれし頃の容姿とナチス・ドイツ時代の軍服姿で現れたのでこう言った。彼はクルピンスキーのナチス時代の階級が大尉であったので、大尉と呼んだ。幽霊だろうと思ったのか、天国か地獄のお迎え、に来たのかと問いた。すると彼は否定した。きちんと二本足があるので幽霊ではないと告げて。

「いえ、お迎えに上がったのは確かですが、違いますよ、少佐殿。私は生きています」

「では何故そんな姿なのだ？君とて、生きていれば私同様の年齢のはずだが」

「死は偽装ですよ。元部下たちに命じて私にそっくりな人形を棺桶に入れさせたのです。私はその間に国防軍の生き残りとは合流し、老

いた体を捨てた。それだけですよ」

「ゴシップ誌とかでよく見るネタだが……」

「ええ、私も最初はそう思っていました。私の場合はハインリヒ・エーラー少佐殿からの誘いだったんですがね」

「何、極北のエースだと……戦死したと聞いていたが……」

「彼の場合は突入の瞬間に別の次元に飛ばされたからだとか聞いていますが……私も今の少佐殿と同じ気持ちでした」

それはドイツ国防軍の生き残りの規模の大きさを物語っていた。日本で、シヨツカー、やデストロン、などと言われている組織はその一分である。そして往年の逸材達をその手に収めていたことも。

「私はサイボーグになる形でこの姿に戻りました。どうです少佐殿、そんな老いた体を捨てて空へ戻りませんか。あの時の姿で」

「どうせ残り少い命だと思っていたが……いいだろう」

こうして彼は老い果てた後も心の奥でくすぶっていた、戦闘機乗り、としての血潮を滾らせるようにヴァルター・クルピンスキーの誘いに乗り、残党へ馳せ参じた。彼は若返りの際にサイボーグとなる選択肢（吸血鬼は好かないとの事）をとった。それからしばらくした後、上層部、より今回のミッドチルダ攻撃部隊の空戦部隊の一員として選抜されてここにいる訳である。

「久しぶりに楽しめた。お前だってそうだろう」
「まあな」

2人は、聖王のゆりかご、へ帰還していく。凱歌とともに。そして眼下では1942年以降、久しぶりの勝利に喜ぶ兵たちの姿が見える。ドイツ国旗と国防軍の軍旗が時空管理局地上本部の建物や、機

動六課、隊舎などの重要な建物群に翻っている。時空管理局からかなりの裏切り者が出たのだろう。中には時空管理局の制服を着た連中が一緒に酒を酌み交わす姿もある。ある意味奇妙な光景だ。

「これでミッドチルダの首都は我々の手に墜ちた。さてどう出るかな機動六課」

2人は機動六課の行動を注意しつつ帰途についた。彼らの楽しみとも言える敵との再戦を心待ちにするかのように。

一なのはたちは編隊を組みながら撤退していた。敗北した地上本部所属の魔道師達の列の上を飛びながら敗北の悔しさを噛締めていた。

「くっ……負けた。私たちが……！」

悔しさを顕にし、被弾でファストパックを失ったVF-19を操縦するなのは。一番損傷箇所が多く、機体装甲にはガンポッドの弾丸が命中した弾痕がくつきりある。フェイトの機体もなのはほどでは無いが、被弾の後が残る。ほぼ無傷なのは白兵戦を闘った黒江のデュランダルだけだ。

「負け戦の後っていうのはこういうもんだ……。私も長い軍人生活で何度も味わったが……。悔しさや怒り……。そういう気持ち心が押しつぶしそうになる。堪え切れるもんじゃない」

「綾香さん……」

黒江は感情的になるのはの気持ち肯定する。彼女も長い軍人生活の中で、敗北を味わったのは一度や二度ではない。今のなののように声を荒らげた事も多い。泣きそうになったのも数知れない。部下を守れなかった時やヤケクソで特攻する陸戦部隊を止められなかった時……こうした経験の時の感情が今の言葉となって表れたのだろう。そこに多少なりとも救いとなる知らせが舞い込む。

『こちらZX。機動六課の残りのメンバーを保護した』

『本当ですか!?!』

『ああ。男の子と女の子だ。その子らを乗せて北部へ向かっている』

フェイトにライダーZXからの通信がはいる。それはエリオ・モンドリアルとキャロ・ル・ルシエが無事である事を示していた。フェイトはその知らせに安堵し、なのはたちにも伝える。

『君たちも北部へ向かってくれ。はやての指示で残存部隊が向かっている。そこで落ち合おう』

『了解』

フェイトは今の通信の内容を2人に伝える。2人はその知らせに表情を明るくし、互いに喜び合った。黒江はいざ、撤退する部隊と合流すべく編隊の進路を北部へ向けた。

第90話「AGE OF EMPIRE 2」(後書き)

ナチスによるミッドチルダ襲撃です。

第91話「AGE OF EMPIRE 3」(前書き)

間章番外編「再会〜サムライハート〜」へつながる話です。

第91話「AGE OF EMPIRE 3」

一戦艦大和という、かつて水上打撃艦の頂点に立った船があった。大和はアウトレンジ戦法を行うのを視野にいれて造られていた。では、時空管理局はどうだろうか。基本的に相手の船を視界外からアウトレンジするような艦隊戦は数百年前の旧体制時の最終戦争以来、行っていない。当然ながらそれ以後に建造された艦船は組織が再構築された結果、他国の軍隊にとっては、警備船、か、護衛艦、レベルの武装しか施されていないし、戦闘ノウハウもない。そこがナチス・ドイツの残党に浸け込まれた要因の一つである。なのはとフェイトは、戦艦、という艦種が管理局にあれば……という気持ちであった。

「本局は何をやっている？ 敵はたかが戦艦一隻なんだぞ」

黒江綾香は何ら動きを見せない時空管理局本局を詰った。本土が蹂躪されているというのに何ら手段も講じないというのは、地上を見捨てた以外の何物でもないからだ。それに対し、なのはは本局が動かない要因にナチスが見せた、長距離打撃兵器、であるV1飛行爆弾や、V2ロケット、があると推測した。巡航ミサイルや大陸間弾道ミサイルの祖であるそれらは当然改良が施されているのだろうか、あの様な凄まじい命中精度を発揮した。管理局艦船は一度、アウトレンジされれば脆い。切り札の、アルカンシェル、はチャージに時間がかかる。その間に砲撃なりフリッツXなりを撃ちこまれてはたまらない。

「たぶんV1やV2の威力に怖じ気付いたんでしょう。召喚竜さえ数発で沈黙させられる質量兵器なんて数百年間見てなかったでしょ

うし、艦船はまともなアウトレンジ戦を戦えないとなれは……」

「……要するに本局は腑抜けと言うわけか……これなら長門や大和とかを持ってきたほうがまだ宛になるぞ」

「でしようね」

黒江は管理局が軍隊との艦隊戦を戦えないというならまだ自分達の世界の戦艦を連れてきた方がまだマシだと溜息をつく。

「私の時代の……どの世界でも一度は世界最強と謳われた連合艦隊の名だたる戦艦群なら聖王のゆりかごにも痛打を与えられるだろうが、WW2当時の戦艦なので限界はある。それがあればマシと思えるほどののだろうか？ まったく……」

黒江はそう思わずにはいられなかった。だが、なのははさらにミッドチルダに伝わる伝説も本局を恐れさせるのではないかと付け加えた。

「伝説？」

「私も伝え聞いたことしかありませんが、数百年ほど前の旧体制が崩壊した戦争で、聖王の元、世界を席卷した、というのが伝承に残っています。たぶん本局の上はそれを……」

「そんな代物なら旧体制下の質量兵器に関する資料にあるはずだ。無限書庫、で嚴重に保管されているはずなのに何故調べない？」

無限書庫とは、ミッドチルダの持つデータベースで、巨大な図書館とも言うべき施設。黒江は簡単に言うが、無限書庫は時空管理局もその膨大な情報量に長年持て余す状況が続いたのだ。まともに運用できるようになったのは最近のことだ。

「無理ですよ。無限書庫は最近になってやっとひとまずの運用ができるようになったんですよ？旧体制の機密書類なんてどこにあるかは……」（あるんだろうけど、時間もかかるし……、あと、ユーノ君が過労で死んじゃうよぉ！）

「そ、そうか……。だけどこのままじゃヤバイぞ。どうするつもりだよお偉いさん方」

「今、実権を持つ連中の三分の一は最初から質量兵器を嫌う世代ですからね……。初期に活躍した世代ならいざ知らず……」

「まるで末期の江戸幕府みたいだ。鎖国やってんじゃないんだぞ」

黒江は時空管理局の通常兵器へのアレルギーによる思考の硬直性を例えるのに、多くの世界に存在した、江戸幕府、を引き合いに出した。江戸幕府は結局開府から260年の間の時勢の変化に適応できずに明治政府に取って代わられた。黒江の世界の織田政権が柔軟に近代化、発展したのとはエライ違いだが、江戸幕府にしても、管理局にしても一つの事柄は中々変えられない証明であった。

「ゆりかごを恐れるってのは分からんでもない。23世紀じゃ大和と武蔵の実力は伝説じみて伝わってるからな。だが、弱点もあるはずだ。大和や武蔵とてあったんだ。揺りかごにないはずがない」

23世紀ではかつて栄華を誇った日本連合艦隊の最後にして最強の戦艦「大和型戦艦」は伝説化している。大和を回収・改造した「宇宙戦艦ヤマト」が地球の希望の象徴として君臨しているのがそれに輪をかけている面があるが、ヤマトの活躍はそれの元になった大和

型戦艦の優秀性が忍ばれるとされているが、実際には弱点も多い艦であったのは有名な話。ゆりかごにだって弱点はあるはず。そう黒江は結論付ける。だが、それがわかれば苦労しないのだ。

「たしかあの艦には……ヴィヴィオが……まさか……」

なのははゆりかごに囚われの身となり、おそらくはあの艦の何らかのキーとして利用されているだろう女の子ーヴィヴィオーの事が気がかりだった。あの襲撃のドタバタで拉致されたのは分かるが、何故……と疑問が浮かび上がる。軍人（歴史改変後のなのはは11歳の頃から地球連邦軍人のまま）となって久しい、歴史改変後の今なら臆気ながら理由は分かる。

「たぶんな。だが助けるにはあの人外共の巣窟に入るしか無い。それでもお前は助けに行く。そうだろう？」

「はい」

「そう思うと思った、昔からお前は、思い込んだら突き進むタイプ、だからな」

「でもその前に地上をなんとかしないと……」

「それはそうだけど……」

フェイトはその点多少冷静である。黒江なのはのストッパーのような役割を果たすフェイトに安堵しつつも、指示を伝える。それは彼女の決断でもあった。

「フェイト、動けるようになったらすぐに私の世界に行け。先方への用件は私から伝えておく」

「分かりました。でもどこに？」

「アフリカだ」

「アフリカに？」

「そこに私の戦友のヒガシ……加東圭子がいる。アイツを通せばすぐに地球連邦にも伝わるだろう。それにお前達をよくしってる奴もそこにいる」

「……？それってどういう事ですか？」

「会えば分かる」

その言語通り、フェイトは時空管理局の地上本部の疎開が行われる最中に仮面ライダーZXの護衛のもと、1945年のアフリカに赴く。黒江の言葉の意味もそこで判明した。

—1945年 アフリカ

「黒江ちゃんから話は聞いてるわ。すぐになんとか手配しましょう」
「ありがとうございます少佐。急にこんな事……」

「友人のピンチは放っておけないのが私たちの性質なのよ。任せなさい」

加東圭子はすぐに机に置いてある電話のダイヤルを回し、上層部に事を伝える。迅速な対応にフェイトは嬉しさを見せる。

「失礼します、ケイさん。飲み物をお持ちしました」
「入って」

執務室に入ってきた一人の扶桑皇国陸軍の戦闘服を着るウィッチに

フェイトは驚愕した。そのウィッチは紛れもなく、行方不明のはずのティアナ・ランスターであつたからだ。

「ティアナ……!？」

「フェイトさん……?」

二人はしばしお互いの顔を見合わせ、一時の沈黙の後に「ええええ!？」と驚きあつたのか。これが2人の再会のなれそれである……。

第91話「AGE OF EMPIRE 3」(後書き)

フェイトさん、ティアナの姿に驚愕するの巻。たぶんフェイトでなくとも驚くでしょうね。

行間その34-2「1944年 帝都防空 1」(前書き)

501 解散後の扶桑に触れます。(話数にミスがあったので訂正)

行間その34-2「1944年 帝都防空 1」

―さて、501統合戦闘航空団は1944年での事変終結後に解散されていた。そのメンバーの内、扶桑に帰国していた坂本美緒は師である北郷章香と2度の再会していた。彼女は教官任務につき一方で、若手時代以来の章香の配下となる形で本国飛行隊に着任し、本土防空戦を戦っていた。

何故だろうか。それはオラーシャ方面に展開する旧ティターンズ空軍第301爆撃航空団に所属するB-52やB-2、B-1戦略爆撃機による空襲が行われるようになったためだ。しかし最新鋭のジェットストライカーの、火龍、菊花、でようやく迎撃可能なこの、死の鳥、達の猛攻は凄まじく、既に数個飛行団はその機材ごと基地在地時に屠られていた。16000mの高空から落とされる高性能爆弾は1940年代の基準で作られた施設を破壊することなど容易かった。

「坂本、既に屠龍装備の部隊は殺られた。上もジェット機相手ではあのような複座戦の小手先の戦術は通じないというのをようやく認識した」

「遅い……これで4回目ですよ先生」

屠竜とは二式複座戦闘機の事。仮想敵機にリベリオンのB-17などを想定して運用されている対重爆撃機用戦闘機（史実ではそのような運用法は戦争末期のみだが）。大型ネウロイと同じような考えでウィッチの護衛替わりに出撃させる飛行団は多いが、ウィッチは帰還できても護衛戦闘機のほうが全滅ではお話にもならない。屠竜はやはり未来爆撃機には全く通用しないガラクタにすぎないのだ。

「上もメンツ論で動く連中がおおい。彼らはその犠牲者だよ。ジェ

ットとレシプロ、どっちが強いのか、尋常小学校の子供だってわかるだろうに。菅原のノータリンは……」

北郷は防空担当の陸軍の高官達を皮肉った。いくらこの間の小倉への第一撃で市街地が損害を受け、軍への国民の信頼が揺らいだからと、メンツ論で闇雲に戦闘機への迎撃指令を出し、むやみな犠牲を強いたのは愚策としかいようがない。しかも同時代の兵器と同じ考えで、無意味な精神論をぶちまけた第6航空軍の「菅原道大」中将は更迭されて然るべきだ。だから、ノータリン、と罵ったのだろう。

「地球連邦空軍の日本本土担当の「第3航空団」が緊急で支援に駆けつけてくれたが……こちら側の数は相手より絶対的に足りん」

「まさに、猫の手、も借りたい、ですな」

「そうだ。だからお前の教え子にも声をかけといた。じきに来る」
「宮藤を？　しかし宮藤は陸軍の策略で予備役に追いやられたはずでは……？」

「米内光政閣下や新見中将閣下が手を回してくれた。お上の勅諭もある」

天皇陛下も宮藤の功績を無に返すのはいかんとおもったのだろう。本来なら勲章物の功績を上げた軍人を陸軍が貶めるのを激怒したのだろうが、北郷は軍神としての政治的発言力を生かしたのだろう。

坂本らは史実で陸軍の最精鋭防空部隊と言われた第12飛行師団に陸・海の垣根を超えた増援として着任していた。彼らの装備機材はなるべく最新鋭のものが揃えられていた。日本西部が守られているのは彼女らの功績である。地球連邦軍も本土防空部隊の一部を派遣し、防衛に力を貸している。

そのため現在、航空師団の本拠の小月航空基地には21世紀頃の航空自衛隊主力の「F-15J」、「F-2」、22世紀最新鋭の「コモタイガー?」、「VF-19」を始めとする超兵器が置かれているという奇妙な光景がある。飛行第4戦隊への出向という形で滑走路もジェット機運用のため拡張整備されている。彼女らはそこにいる。死の鳥から扶桑を守るには陸海軍に拘ることなど馬鹿馬鹿しい。

「大佐!!! 電探室より報告! 敵、B-52H、が扶桑海付近に現る!!! 至急迎撃体制を取られたしと!!!」

「了解した! 航空部隊にスクランブルをかける!!!」

北郷は後世で普通に用いられている軍事用語を言った。不思議な光景である。史実のこの時期の日本ではスクランブルとは言われていなかったが、彼女は未来世界の人間たちに合わせたのか、そう言った。

連絡を受け、直ちにパイロット達は配置につく。格納庫ではF-15Jのプラット・アンド・ホイットニー F100の轟音が早くも響く。最速で乗り込んだ者がエンジンを温めているのだろう。北郷は若返った自らの体に闘志が噴出すのを感じ、今や見かけは、年上、になった教え子と共に格納庫へ赴いた。

行間その35「1944年 帝都防空 2」

一扶桑陸海軍の常識を遙かに凌駕する未来爆撃機。一番鈍足のB-52を含めても平均速度で時速1000?の高速を誇り、実際1940年代のどの戦闘機をしても迎撃不能(ロケット戦闘機でも追いつかない)。それに困惑した扶桑海軍航空隊は独自に地球連邦へ増援を依頼。それに答える形で空軍が来援したのである。しかし連邦空軍とて機材とパイロットの確保は難航した。度重なる戦争での損害からの再建途上なために数が足りないのだ。さらに人型機動兵器の台頭で純粋な戦闘機乗りの数が減り、2201年では全体でも最盛期の6割、5割しかない。その上、さらに一通りの空戦を高い水準でこなせる練度となれば更にいないので、高練度であるパイロットたちへ志願を呼びかけた。それに応じたのが日本本土防空の一翼を担う「第3航空団」であった。だが、彼らには機材の問題があった。2年前の兵団のD作戦の際に機材をほとんど喪失しており、2年かけてようやく、新コスモタイガーの2個中隊が動ける程度(連邦軍の工廠能力が落ちたためと政府の復興優先の煽りをうけたため機材調達が遅れた)でしかなかった。そこで数を合わせるために岩国基地で複数が動態保存されていた旧航空自衛隊の20世紀末、21世紀初期頃の戦闘機「F-15J」を急遽改修し、補助機材、の名目で配備させたのであった。

「しかし改めて見ると結構大きいな」

「ジェットエンジンだとか兵装の関係でどんどん大型化していきましたから。こいつはそれが収まった時代のもんです」

北郷章香は格納庫で発進態勢を整える、日の丸をつけたF-15Jの姿に圧倒されていた。1940年代のレシプロ戦闘機は平均して

10 m程度だが、大型化が極まった第4世代ジェット戦闘機はおおよそ20 mである。(F-16でも15 m)。コスモタイガー?もだいたいその程度なので、第4世代ジェット戦闘機はある一種の基準を完全に根付かせたと言える。搭載量も戦闘爆撃機のF-15EでさえB-29をも超える搭載量を誇る。

「この派生型はB-29を超える搭載量を持つんだろう? 技術の進歩ってのは凄いな」

「ええ。アレを投入するんなら、ストライクイーグル、を呼び寄せる方が費用対効果もいいんですよ。空戦もできますから。B-29じゃ人命の無駄です。」

連邦軍所属の整備兵は各所でリベリオンが行っているB-29の爆撃の効果が薄いことをこういった。B-29は1940年代の水準で言えば十分に高性能爆撃機だが、21世紀以降の軍備を持つ者にとっては単なる、ジュラルミンの棺桶、に過ぎない。特に誘導ミサイルを装備する機体は視界外から攻撃可能であるからなおさらである。ただし直接攻撃には危険がある。

かのミグにも防御砲火は一定の効果は発揮したからだが、損害率は高いのには代わりはない。

「橘花の整備は終わってるな?」

「ええ。十分です」

北郷は発着促進装置に備え付けられているジェットストライカー「菊花」を足に纏う。

このストライカーはかのハワイ沖海戦の際に迫水ハルカがテストしていたものの正式生産型。航続距離の延伸などが行われている。敢行武装も重い五式30 mm機銃が選定されており、零式や紫電改以

上の搭載量である。度重なる改良で稼働時の魔力消費率も改善されているので長時間の作戦行動にも耐えうる。だがレシプロストライカーより起動に魔力を食うという技術的課題が残っており、魔力減退が同世代のウィッチの中でも進んでいるだろう坂本美緒にジェットはおそらくきついだろう。そう判断した彼女は坂本美緒にある指示を飛ばした。

「坂本、お前は高高度性能が良い紫電五三型でいけ。ジェットは以前には向かんだろう」

「はいっ！」

これは北郷の計らいであった。従来機よりジェットストライカーは魔力を食う。最盛期へ若返った自分は問題ないが、戦士としての寿命を迎えつつある坂本美緒が使えばその飛ぶ力をレシプロを使い続けるよりも早く減退させてしまう。だからジェットの使用を坂本に限っては義務ではなく、自由、にした。それに美緒の好みや戦術を考えればレシプロのほうが向いている。なのでレシプロストライカーでは最高峰に近い紫電改五を割り振ったのだろう。

二人はそれぞれ別に発進し、F-15Jやコスモタイガーと空中で編隊を組んで空域へ向かった。

「敵は扶桑海から侵攻するつもりか……割と常道な手だな」

「ああ。俺達の世界の中国やロシアがよく使った手だ。敵はストラトフォートレスとその護衛機だ。護衛機の掃討の後、本命を射止める」

「了解。ところで護衛機についての情報は知っているのですか？」

坂本美緒は爆撃機はジェットの獲物だが、戦闘機なら巴戦ならレシ

プロでも渡り合える事は知っていた。だから編隊長に聞いたのだろう。コスモタイガーを駆る編隊長はたった今伝わった情報を言う。

「敵の主力はMiG-29、ラーストチュカ、だ。NATOのコードネームだとファルクラム。本来は迎撃用で、長距離侵攻向けじゃないが、22世紀以降の技術で航続距離を伸ばしたんだろう」

「どういう機体なのですか？」

「うーん、強いて言えば巴戦に強い。スホーイ系統よりはやりやすいが、かつてのソ連邦のF-14とかのカウンターパートには違いない。あそこの戦線はアフリカ並に激戦区だから……比較的新しい機種が多い。気をつけろ」

編隊長は美緒に敵機の特徴を伝える。旧ソ連製の、F-15と同じ世代の戦闘機であり、巴戦を得意とすることを。それを聞いた美緒は俄然、闘志を燃やした。

「面白いっ！」

「熱くなるな少佐。ミサイルがあることを忘れるな。いざとなったらチャフやフレアを使い」

「わかってます」

「よし。各機、聞け。空中管制機から打電。あと数分で接敵する。先制のミサイルを放った後はブレイクし、巴戦に入れ。ウィッチ隊もいいな？」

「了解」

「全機、安全装置を解除！カウントの後に矢を放つ」

編隊長の指示に従い、戦闘機隊が翼に敢行するミサイルの発射態勢に入る。

「9……8……7……」

レーダーに敵編隊が全機補足され、ミサイルの有効射程に入っている。目当てのB-52がミサイルの射程に入るとカウントが終わるのは同時だった。

「2………、1………0!!」

同時にミサイルが発射される。ミノフスキー粒子の影響下なので命中精度はあまり当てにならないが、敵編隊を乱すには役に立つ。各機一発ずつ放っているが、4割当たればいい方だろう。ミサイルは敵機の方角にまっすぐ飛んでいき……。

—B-52H 機内

「ミサイル接近!!」

「来たか!! チャフやフレアで誤魔化せ! 間に合はんものはラダーの動作で避ける!」

彼らは僚機に指示を飛ばすとフラップ動作でわずかに機体をゆるやかに旋回させる。チャフなどでも誤魔化し切れない一発が直進してきたが、かつてほどの終末誘導性能は望めない戦闘機用ミサイルの特性を見抜き、ラダー動作で機体をわずかに首振りさせ、ミサイルを避ける。凄いテクニクである。個々からは護衛機の出番だ。

「戦闘機隊、頼む」

「良し、ストラトスファイア、1より各機。、鷲刈り、だ」

ミグ29がエンジンをふかし、交戦に入る。ドッグファイト巴戦だ。こうなったらあらうる空戦機動を駆使して戦う。そんな中、ある一機は坂本美緒を標的とし、襲いかかる。

「あの塗装は紫電改か零式の後期型ユニット……俺たちもなめられたもんだぜ、あんなポンコツで……」

「くうっ、レシプロだからってなめるな！！扶桑海軍の底力を見せてくれる！！」

ミグ29はインメンタルターンを行い、高度を取るとGSh-301 30mm 機関砲を撃ちながら一撃離脱戦法を行う。美緒はレシプロストライカーの利点を駆使し、火線をバレルロールしながら避け、扶桑（日本）機特有の旋回性能でひねりこみを行う。それはジェット機の常識を超える半径の短さであった。背後を取り、瞬間的に機銃のトリガーを引く。

「とったあ！！」

手に持つ99式20ミリ機銃3型が火を噴くが、バルカン砲にある程度耐えうるように作られた機体の防弾性能の前には効果が薄い。ミグは数発の被弾の後、その燕の名に恥じない俊敏性ですぐに機体を傾け、ラダーと併用してスリップを行い、火線を躲すとアフターバーナーで加速する。そして急上昇。宙返りループの終点で美緒を仕留めようとする。美緒は咄嗟に刀を取り出し、ラストチュカに向けて突進。

「秘剣……雲耀っ！！」

それはそもそも黒江綾香が会得し、得意とした剣技。それを長年かけて美緒も習得していた。実戦で使うのはこれで2度目だ。日本刀が光を帯びて輝く。

扶桑に伝わる秘技はロシアの燕を切り裂くのか？それとも赤軍が産み出した鋼の燕が華麗に美緒を餌食にするのか？次の瞬間、両者の翼が交錯し——……！

行間その35「1944年 帝都防空 2」(後書き)

ミグ29対坂本美緒。勝者は……？

行間その36「1944年 帝都防空 3」

一旧ソ連邦の生み出した戦闘機と空戦を行う坂本美緒。彼女は一瞬だが、若き日の事を思い出していた。

「秘剣、雲耀、おおっ!!」

一私にもっと力を……奴らと戦える力を……

ミグ29と交錯し、日本刀でその翼を切り裂く瞬間に頭を過ぎったのは若き日の戦いでの一瞬。それと状況は同じであった。違うのは成長し、今では師にも誇れるほどの勇名を持つ事。だが、同時に感じるのはこの瞬間にも衰えていくだけの自分の魔力への焦り。それが彼女を無謀な行動へつき動かした。

彼女は今でこそ自他共に認めるエースだが、若き日の1937年頃、駆け出し時代の頃は陸軍のウィッチ達に練度の低さを危惧されるほどであった。当時、同じ基地の陸軍部隊に在籍していた穴拭智子が1944年の暮れに扶桑本土で坂本美緒の弟子の宮藤芳佳に出会った時に言った証言が連邦軍の記録に残っている。

『あの時の坂本達の練度は本当に心配したわ。飛行時間は短すぎ、実戦で飛べるかもは分からない、のが難だった。だから最初はアテにはしていなかったわ』

『そうなんですか、穴拭さん』

『ええ。その時は私たちの部隊だけでどうにもできると思ってたから戦力に数えていなかった。後々の事を考えると……若気の至りっ

て奴よ』

穴拭智子は扶桑海事変当時、既に新進気鋭のエースとして早くも名を馳せていた。それだけに駆け出しのウィッチであった坂本らを出会った当初は、戦力、と見ていなかったと言っている。それ故彼女は独断専行をする事が多く、それを戒めるために事変後、加藤武子が上層部に手を回して、彼女を当時は辺境のスオムス（我々の常識で言えばフィンランド）送りにした。それが智子の精神的成長を促したのは言うまでもない。とにかく、大人になって別世界で、高町なのは、という弟子を取るに至った時点の智子は事変の時の言動や行動を振り返って、若気の至り、であったと述懐し、宮藤に若い頃の坂本は『あなたに似て、信じたら何を犠牲にしてもやり遂げる、信念で行動してた。たぶんそれは今でも変わっていないでしょうね』

と言った。正にその通りだった。

若き日から変わること無く突き進み、戦士として生きてきた美緒は世界の状況が大きく変わり、例えば相手が同じ人類が未来の叡智で作り出した、ジェット戦闘機、であろうが戦う決意を固めていた。そして同時に若手の連中に人間と戦争を戦う事に恐れをなし、除隊する者も出てきているにはある種の責任を感じていた。若手がやめた穴埋めとばかりに本来ならもう引退したはずの世代の人間たちが駆りだされていくのには苦々しい思いだったようで、先輩たちに思いを託された自分たちの責任、だといい、彼女が前線で戦い続ける理由の一つにもなっていた。

「くそ、翼を根元から斬られた！脱出する！」

「よし……次は……っ！」

搭乗員が射出座席で脱出し、堕ちていくミグ29を尻目に美緒は無我夢中で一目散に別の敵へと突っ走る。かつての時とも違う戦い方に北郷章香は、危険な何か、を感じ、止めようとする。

「やめろ坂本お！！お前……死に急ぐつもりか！？」

それは戦士として戦えなくなることへの焦り、弟子の成長を見れなくなることを恐れた美緒の心が行動となって現れた瞬間であった。美緒はB-52Hの編隊へまっすぐに突っ込んでいく。まるで死に急ぐように。北郷は一気に顔から血の気が引き、青ざめながら叫んだ。

「大佐、止めろ！！下手すれば……」

「わかってますっ！あの馬鹿野郎おっ！！」

北郷は編隊長の命令を聞くまでもなく、ジェットストライカーを吹かして坂本を追う。肉体年齢が今の坂本よりも若くなってしまったために心まで若くなったせいか、彼女としては珍しく感情を顕にして叫んだ。紫電改の最高速は時速680？、橘花は時速950キロ。ほぼ300キロ近い速度差はあるが、坂本がいる空域とは離れているので追いつけるかは分からない。だがやるしか無いのだ。

「アイツはもうシールドは張れん……それこそミサイルを喰らえば……！」

一手を伸ばし、追う。それしか私には出来なかった。ジェットを一杯に吹かして、アイツの後を負った。自然とアイツの名を叫びながら。

「さかもとおおおおおつ!!!」

一編隊へまっすぐ飛ぶ坂本は護衛戦闘機から見ればいい鴨だ。ミサイルが当たれば一巻の終わり。早く追いついて止めなくてはっ!

だが、そんな叫びも虚しく、護衛戦闘機であるMiG-29、6機の翼から坂本の撃墜のために複数の旧ロシア連邦時代の装備「R-77ミサイル」が撃ちだされる。坂本はそこに至って無我夢中の状態からようやく我に返り、ミサイルを必死に避けようとする。だが、R-77は同時期の米国のAIM-120を超える機動性を誇り、普通の機動では避けられない。チャフやフレアで幾つかは誤魔化せたようだが、なおも4発が迫っている。美緒に中間指令誘導とアクティブ・レーダー・ホーミングを併用した誘導ミサイルの脅威は確実に迫る。そして終末誘導に入り、命中せんとした瞬間。北郷の祈りが通じたのか、ミサイルが誰かの手で撃墜される。鈍い機銃掃射の音と共に。

「!?!」

美緒は思わずミサイルを撃墜した弾が飛来した上空を見上げる。すると……。

「大丈夫ですか、坂本さん!!!」

「……最高速でかつ飛ばしてきたけど、間に合ったようね」

「ああ、まったくだ」

その声に思わず叫ぶ。それはかつての戦友たちの声。宮藤芳佳、穴

拭智子、黒江綾香がそこはいた。

「宮藤……、穴拭、それに黒江……！？お前らどうして……」

「いやあ久しぶりに帰ったから、宮藤の家にお邪魔してたのさ。そこに軍から連絡がはいってな。宮藤にも招集がかかったからついで来たんだよ」

黒江が大体の事情を説明する。すると驚愕の嵐のようで、

「な、何イ、お前らいつの間にそんな関係に……」

……と腰を抜かしたそうなの。

3人は咄嗟にその場にあったジェットストライカーをつけてきたように、みんな海軍製の橘花を纏っている。ある意味面白い光景である。ようやく追いついた北郷もこれには驚き、「君たちどうしてここに……？」とだけ言った。

「じつはカクカクシカジカで……」

これも黒江が事情を掻い摘んで説明する。すると。

「……そうか、来てくれてありがとう」とだけ言った。その瞳には涙が滲んでいた。

「……あまり大佐を心配させんなよ坂本」

北郷の様子から、それとなく何があったか察した黒江は美緒に言うが、当の美緒は「？」なようで、首を傾げるばかりであった。

行間その37「東の間の休息、そしてティターンズの旗のもとに」(前書き)

宮藤芳佳が何故穴拭智子らと面識があるか？その解答と説明です。
ティターンズに関する説明もあります。

行間その37「東の間の休息、そしてティターNZの旗のもとに」

一なぜ穴拭智子や黒江綾香が宮藤芳佳と面識があるか？それは1944年の11月末頃の事。

2人は扶桑本国へ一端帰国し、航空審査部で新型ジェットストライカーのテストに携わっていた。火龍、と、橘花、の事だ。この二機種は性能面では旧来のレシプロストライカーユニットを遙かに凌駕するが、問題があった。最大の問題は発動機である「ネ130」魔導ジェットエンジンの信頼性が決して高いとは言えないお粗末なものであったのだ。来訪している地球連邦軍が資料代わりに持ち込んだ、後年のジェット戦闘機、のエンジンを基に作り出したものの、魔導エンジンへそれを当てはめるには困難が重なり、扶桑の技術的限界もあつて低信頼性に繋がっていた。それはテスト飛行中に不意に起こった。

、プスン、シュオオオ……、と不吉な音が響く。穴拭智子は嫌な予感がして後ろを振り返ってみる。するとエンジンが停止しているではないか。エンジン内部のタービンブレードの破損か、それともエンジンの焼き付きか。

「嘘お！？まだ基地まではあるってのに……わ、わわっ！」

悲鳴を上げるが、状況が変わるわけではない。エンジンが停止したジェットストライカーはただの鉄の塊に過ぎない。上昇気流に乗ってグライダー飛行をしようにもこの日は無風であつた。地面に向けて一直線に落ちて行く。僚機の黒江綾香のストライカーユニットも同様の事態に陥る。

「わ、私もかゝゝ!?!?」

2人は仲良く落っこちる。幸い2人の肉体は最盛期に若返っている
のでシールドは張れる。急いで最大出力で張る。数秒でどこかの民
家の前に落っこちて、派手に土煙を立てる。

「あいたた……生きてる?」

「なんとかな……まいったな、民家の前に落っこちるなんて……」

盛大に音を立てたので民家の住民が何事かと出てくる。すると。1
5歳前後の少女が出てきた。その顔に黒江綾香は見覚えがあった。
顔の特徴から帰国直後に坂本美緒に見せてもらった写真に美緒と一
緒に写っている少女だとすぐに分かった。

「えっ、う、ウィッチ!?!?」

「あ、ああ……新型のストライカーユニットのテスト中だったんだ
が、発動機がトラブって落っこちた」

「ち、ちよつと黒江!」

「構わん。こいつは坂本の奴の弟子で元501の一員だ」

「と、言うことは……」

「そうだ。初めまして……かな?宮藤芳佳一飛曹」

「は、はい。今は予備役ですけど……もしかしてあなた達は……」

少女に機密事項を話す黒江を智子は咎めるが、黒江に目の前の少女
が坂本美緒が手塩にかけて育てているウィッチで、501の一員で
あった宮藤芳佳であると説明する。その言葉に智子も納得する。黒
江がこうも簡単に一般人に機密事項を喋るはずはないし、それに一
応坂本の部下なら、その辺は教えられているだろう。まあいいかと
納得の表情だ。

宮藤は黒江の隣にいる智子に目を輝かせている。智子の扶桑海での武勇は軍のプロパガンダにもよく使われているので一般にもよく知られているし（芳佳は映画は未見だが、美緒から話自体は聞いていた）、以前501にいた時に赤城の艦長であった杉田大佐から彼女がモデルの日本人形をもらっている。なので、宮藤が目を輝かせるのも当然と言えた。

「ああ、そっちは穴拭智子。陸軍の中尉で、扶桑海の巴御前。んで、私は黒江綾香、魔のクロエ。一応大尉だ」

「坂本さんから話は聞いてます、宮藤芳佳です。よろしくおねがいします！」

「ああ。そこで一つ頼みがある。このストライカーをちょっと君の家まで運んでくれ。こいつは一応機密もんだからな」

「ええっ!？」

「テスト中の新型なのよ。噴流推進式で、一般人に知られるとマズイ代物だしね」

「は、はい！わかりました！」

宮藤は自宅にジェットストライカーを運び、穴拭らを招き入れる。そこで二人は一応治療魔法による治療を受け、宮藤の家族から差し入れられたお茶とお菓子をほうばる。

「んー黒江、ジェットストライカーの方はどう？」

「草餅食いながらいうなよ……。開けてみたけどエンジンが焼きついてる上にタービンブレードが根元からポツキリ折れてやがる」

「まだまだ改善の余地は多いってことね」

「そういうことだ」

「あのー、ジェットってもしかして、コスモタイガーとかバルキリーの発動機になってるあれの事ですか？」

「それなら話は速いわね。そう、アレ。連邦、が持ち込んだり、ティターンズ、が使ってるジェット戦闘機の威力に羨望と恐れを抱いた上の連中がノイエ・カールスラントで研究中だった奴を全世界規模で研究を拡大させてるのよ。私たちが纏ってた奴はその計画の一環の試作機ってわけ」

「一応採用の暁には、キ201、と、J9Y、として採用されるはずなんだが……まだまだ課題が多い。とてもコスモタイガーやバルキリーのようにはいかないのが現状だ」

そう。ジェットストライカーは研究が始まってせいぜい3、4年しか経っていない。それでいて試作機がなんとか作れるまでになったのは連邦軍や時空管理局のエンジンや機体設計技術の援助、アフリカ方面の作戦でティターンズから鹵獲に成功した、F-105 サンダーチーフ、を徹底的に研究したおかげである。

だが、F-105 サンダーチーフは史実ではこの年から11年後の初飛行の機体。運用開始時は15年近く後の時代の戦後第二世代ジェット戦闘機。エンジンをガワだけコピーできても、稼働率を効率化するのは難しい。それは史実の日本がコメートのコピーといえる秋水で同様の事態を起こしているのが証明だ。

コスモタイガーらが100%の稼働率を誇っているのは規格部品の安定供給、エンジン関連技術が成熟されきっていること、整備員の教育がきちんと行き届いているためである。扶桑は同じ時期の、大日本帝国、の数十倍の国力を持つのでその点は大分マシだが、それでもジェットストライカーの魔導エンジンをモノにするのに苦戦中だ。

「でも、ジェット戦闘機を使ってるティターンズって元は連邦軍の一部隊ですよ？ 何で正規軍と戦ってるんですか？」

宮藤の疑問は最もだった。ティターンズは元はといえば、地球連邦軍の特殊部隊、に過ぎないハズ。それがどうして正規軍と刃を交えているのか。いまいち分からぬ面がある。それに智子が答える。

「それはね。彼らにとって今の連邦軍は、スペースノイドの傀儡、にしか思えないからよ。」

「ええっ！？ たったそれだけの理由で！？」

宮藤芳佳は未来艦隊と行動を共にしていたために、スペースノイド、と、アースノイド、の対立、、ニュータイプとオールドタイプ、については知っていた。それだけに余計驚きであった。

「彼らがいた2190年代の後半頃は、地球生まれこそ選ばれたエリート、なんて選民じみた考えが当時の連邦軍の軍人達の間で蔓延ってた。ちょうど、一年戦争、と、デラース紛争、で当時の政府官僚達がジオン残党に脅威を抱いていたのを口実にして、スペースノイドを弾圧しようとするタカ派の軍人達がハト派の衰勢に漬け込む形でティターンズを設立させた。表向きはエリート特殊部隊としてプロパガンダされてたけど本当のエリートは極少数だった」

「当時の関係者の手記によれば、ティターンズの軍人の大多数は慇懃無礼で鼻持ちならない連中。スペースノイドを差別するが、彼らとて実戦や現場の状況を理解できない箱入りの輩でしか無い、とある。それでも有望な連邦軍軍人の多くが志願したのは、入ることがエリートの証、のようにみなされたのと精鋭と認められるからだだった。良識派もいたにはいたが、強硬派の大きな力の前に埋もれていた。彼らがティターンズに居続けたのは装備も最新のものが与えられ、給料も数倍だったからだ」

穴拭智子と黒江綾香はティターンズはそもそも未来世紀で連邦に蔓延った思想が形として具現化した組織であると説明した。特殊部

隊なので装備の優遇などの特権が与えられたが、それはスペースノイドにとっては悪の象徴でしかなかったとも付け加える。そして強硬派の凶行が反連邦組織を結束させていき、対抗勢力としてエウーゴが誕生した事。

「良くも悪くもエウーゴは正規軍の良識派を取り込んで正規軍化してティターンズを打倒した。それを認めない兵力が各地に潜伏した。これは皮肉だが、ジオンと同じ末路だった。その残党の内最大勢力がここに来ちゃった訳。だからエウーゴ系の派閥が支配する連邦正規軍とは根本的に相入れないのさ」

「で、でもなんでそこまでして戦うんですか！？いくら気に入らないからって……同じ人間同士なんですよ！？」

「私たちは忘れてるけど、これが、戦争、の本質なのよ。この世界だってネウロイがいなくなれば……」

穴拭智子は未来世界でそのハラワタを垣間見た。だからティターンズの行いを全否定出来なかった。彼らの行いは、勝者によって否定された者達の足掻き、。ネウロイがいなくなればこの世界も同じように

人間同士の戦争が起こるだろう。世界がまとまっているのは共通の敵がいるからなのだ。それをよく見てきたものしか言えない事だった。

「私もマクロス・フロンティアに行った時にマクロス・ギヤラクシ―と戦った。思想的に相容れない人間同士は結局戦うしか無いのさ」

黒江綾香もこれに続く。宮藤芳佳は戦争という言葉の重みに押しつぶされそうだった。

ストライクウィッチーズ編用語解説（前書き）

取り敢えずストライクウィッチーズ編の用語集です。この編だけでも有に3つ以上の原作が絡むので、初見の方のための補足です。

ストライクウィッチーズ編用語解説

ストライクウィッチーズ編における用語

※ ネウロイ ある世界での1939年に出現した怪異。外形は未知の金属で出来た後の世の航空機や4足歩行型陸上兵器のような姿。第二次世界大戦レベルの通常兵器での撃破は困難であり、ウィッチが対ネウロイの要となっている要因である。

※501 ある世界で、ネウロイ、という怪異に対抗するために世界各国の精鋭を集めて結成された航空団。正式名称は「連合軍第501統合戦闘航空団「STRIKE WITCHES」。だがその指揮権を持つある将官の手で弱体化が図られた。この501の面々はストライクウィッチーズ編での視点の一つ。

※ウィッチ 俗に言う魔女だが、通常と異なる点は10代をピークに年齢と共に魔力を失うことが大多数を占める。

※ストライカーユニット ウィッチが使う機械装置。これはウィッチであれば誰でも身体機能強化・航空型なら飛行能力が付加される。また、防御能力も得られる。我々の世界での航空機と戦車の役割を一部代価している。（無論通常兵器も存在する）

※連合軍第502統合戦闘航空団「BRAVE WITCHES」
2番目の統合戦闘航空団。主に最前線での戦闘を担当する攻撃部隊。菅野直枝は同隊所属である。

※連合軍第505統合戦闘航空団「MIRAGE WITCHES」

5 番目の統合戦闘航空団。作中ではこの編での、敵の最初の犠牲者となる。黒江綾香は同隊へ所属していた。

※第31統合戦闘飛行隊「ストームウィッチーズ」（旧名アフリカ）

アフリカ方面の要となる航空隊。作中で出番多し。ティアナ・ランスターは同隊へ配属された。

人類4大ウィッチの一人「ハンナ・ユステイーナ・マルセイユ」を擁する。

※連合軍

人類がネウロイに対抗するためにまとまった軍隊の姿。だが、無数の派閥抗争が起こりやすく、ウィッチを快く思わない軍人も多数がいる。

※地球連邦軍 作中での主要勢力。とある未来における地球の軍隊である。ウィッチ達と最初に接触したのはこの分遣隊。

※ティターンズ かつて地球連邦軍で猛威を奮った、タカ派の私兵とも言うべき軍閥。精鋭部隊との触れ込みで結成された。過去に連邦軍の内部抗争に敗北し、組織そのものは解体されたもの、戦力自体は未だ健在。

※モビルスーツ 地球連邦軍の世界で普及している人型機動兵器。全長は平均18m。連合軍は当初は、巨人、と認識していたが、ある出来事で兵器という実像が知られる様になる。変形型・合体型・小型タイプなど様々なものが存在する。

行間その38「1944年 帝都防空 4」(前書き)

ミグの見せ場その4。

行間その38「1944年 帝都防空 4」

一と、言うわけで宮藤芳佳は穴拭智子や黒江綾香と共に援護に駆けつけたわけである。

纏っているストライカーユニットは海軍の「橘花」第3次試作型（改良してエンジンの信頼性を高めた）。陸軍軍人である他の2人も同じものを纏っている理由は単に陸軍系ジェットストライカーがその場に無かったこと、橘花があった場所が横須賀に配備されていた空母「大鳳」内部だったためだ。海軍のストライカーユニットの方が洋上作戦を行う都合上、航続距離が長いので洋上での援護には最適だったためだ。

この援軍にもティターンズ側は狼狽えることは無かった。ジェットストライカーといえど第一世代のものでは加速性に問題がある（第一世代のターボジェットエンジンの共通の弱点。低速からの加速性が悪いというのが初期のジェットエンジンの特徴）のは周知の事実である上、一般にターボファン・エンジンを搭載する第4世代ジェット戦闘機はターボジェットエンジンの第3世代までとは隔絶した機動性を誇る。その点を熟知していたからだ。

「君たちは一撃離脱で行け。ジェットはレシプロとはいささか勝手が違う」

「分かりました」

コスモタイガーを駆る編隊長は宮藤達を指揮下に置くとすぐに指示を飛ばす。ジェットストライカーはまだ作られたばかりで、ユニットに慣れていないであろうウィッチ達にすぐに巴戦を行なえというのは無理がある事はわかっていた。だからズームアンドダイブを行うことを指示したのだろう。

彼は西暦2201年以降の制式塗装の濃緑色と明灰白色（俗に言う旧帝国海軍機のそれ）に塗り分けられた機体を駆って、ミグ29を巴戦で圧倒する。コスモタイガーの強みはマルチロールファイターでありながらも、かつての専用に作られた制空戦闘機と同等以上の空戦能力を備えるところである。その機動性は通常型戦闘機としては破格のレベルで、兵装フル装備の過重状態状態でさえ、軽装状態の前任機「ブラックタイガー」を超える機動性を発揮できる。ヘッドアップディスプレイ（21世紀頃に一部の機体で採用されたヘッドマウントディスプレイは結局、高価である、メンテナンスに時間がかかる、などの理由で普及せず、ヘッドアップディスプレイを代換するまでには至らなかった。そのため23世紀でもヘッドアップディスプレイは使われている）に表示される敵機のロックオン情報が表示されるとすぐにミサイルを発射する。最新高機動のミサイルはミグ29を瞬く間に捉え、空に盛大な花火を作る。

「一機撃墜」

「へえ……こうなったら私もっ！」

コスモタイガーのこの鮮やかな空戦に見とれつつもウィッチ達も続く。穴拭智子は橘花の特性をキ44やキ84同様のものとすぐに理解し、一撃離脱戦法を行った。五式30mm機銃で牽制し、すれ違い様に刀で切り裂く。格闘戦が得意である自身とジェットストライカーの特性を組み合わせた見事な戦法だ。

「ツバメ返し、改、っ！！」

智子はこの時期には一撃離脱戦ではツバメ返し改を、巴戦では通常

のツバメ返しを……といった感じで状況とストライカーユニットに
応じて必殺技を使い分けるようになっていた。経験の豊富さが彼女
を成長させたのである。巴戦に傾倒していた若手時代からは想像の
つかない事だ。ミグもこれにはたまらず撃墜される。これは熟練の
ウィッチとなればジェット戦闘機とも戦えることの証明でもある。

「ストラトフォートレスは私に任せろお!!」

黒江綾香は爆撃機に照準を絞り、急上昇し、B-52Hの真上に陣
取ると刀を抜き、魔力を刀の切っ先に集中させ、本家大元の秘剣雲
耀を放つ。技の熟練度は美緒より遙かに上。美緒がせいぜいまだ2
0m程度の物体しか斬れないのに対し、こちらは戦艦大和クラスの
大物であっても一撃で一刀両断できる威力を誇る。14000mの
高空にいるB-52Hに対し、それより1,000m上の高度15
000mから真っ逆さまに急降下し、そのまま縦一文字に切り裂く。
鯨を斬る如く胴体から真っ二つにする。叫びながら。

「これが本家大元の秘剣だあっ!!」

爆発の時にはこう言う時のお約束で決めポーズを決める。黒江の次
は芳佳の番。彼女の場合は特に決まった必殺技はないが、パラレル
ワールドの自分に当たる存在「武藤金義」中尉が、空の宮本武蔵、
の異名を誇っていた事はこの時期には知っていたので刀を使うとき
は二刀流と決めていた。

「久しぶりの実戦だから……今回はアレでいこう」

芳佳は背中に背負う刀を抜き、それを一刀に繋げ、両刀にする。こ
の刀は以前の戦いの際に菅野から渡された物。格闘戦は得意ではな
いが、ここぞという時には使うようにしている。手近のミグ29に

斬りかかり、刀を突き刺す。魔力のエネルギーは破壊エネルギーとなり、刀を一旦抜いてから両刀で薙ぎ払う。これは1980年代の某メタルヒーローと同じ技であった。

「アークインパルスッ!!」

叫びながら技を決める芳佳。これに黒江は思わずほくそ笑み、『コイツに時空戦士スピ○バン見せたのは正解だったなあ。今度は何にするか……』

と……よからぬ事を考えていた。そもそも芳佳にこういう行動を教えたのは連邦軍のとあるアニメ好きな兵士だったが、その噂はいつの間にか黒江にも伝わっていた。なので試しにス○ルバンを見せたらバッチリ再現しちゃったのだ。ある意味では凄い行為である。

「黒江え~~~~~!!」

「な、なんだ坂本？」

黒江は後ろに恐ろしい気配を感じ、ギクッ、としながら振り返る。するといつの間にか坂本美緒がいた。

「宮藤に変なこと教えたのはお前かああ~~~~!!」

「ちょっと待って……なっ」

「待てるかアアアッ!!」

当然ながら黒江は美緒に首根っこ捕まれて激しく揺さぶられたのは言うまでもない。空戦の最中ながらやってることはほとんど漫才であった。

行間その39「野比家ドタバタ紀 4」(前書き)

行間その31の続編ですが、ちょっと重いです。

行間その39「野比家ドタバタ紀 4」

一野比家を訪れたウィッチたち。彼女らは1990年代という時代に驚きの連続であった。

一その一 加東圭子の場合

彼女の場合は1910年代後半生まれ。史実では大正中期～末期に差し掛かる年代の生まれ。彼女がいる1945年とそれから54年が経過した1999年は根本的に違う風景が広がっていた。なぜか？50年の間に日本にあまりのブレイクスルーが起こっていたので彼女の時代の名残はごく僅か。国鉄も分割され、電話の通信事業が民営化されているなどカルチャーショックだらけ。さらにこの時期に普及し始めていた携帯電話に驚く。50年の間に予想が完全的中したのは情報関連テクノロジーだけだが、それでも驚愕に値する。

「50年で変わったって言えるのは携帯電話やパソコンくらいか。それだけでも凄いけど」

「基本的に今の生活基盤とかは1960年代くらいで確立されちゃってるんですよ。だから基本的にやってる事は昭和30年代と変わってませんよ」

と、圭子に言いながらドラえもんは某大手食品産業のインスタントラーメンを作る。これも圭子から見れば十分革新的な食べ物だ。これは本来なら自分が40近くになった時の時代に出現するはずという。この時代には安さや利便性から普及しているという。ドラえもんから渡されたお湯をカップに注ぎ、3分間待つ。

「3分間か……こういう時って長く感じられるのよね」

そう。昭和30年代から延々とラーメンを食べる者にとってこの3分間は十分に長く感じられる。多くの人々が足を踏み入れた、この領域に圭子も達した。3分間という某特撮ヒーローの活動時間と同じ、長いような短いような時間を待ち……。最後に卵をのつける。

「……3分たった？」

「今丁度3分立ちましたよ」

「よし！！」

圭子はここぞとばかりにラーメンをすする。自分の世界では中国や朝鮮半島の区域は荒涼地帯で、大昔に国家のようなものがあっても知れないが、ネウロイに滅ぼし尽くされたかも知れない、記録しか残っていない。なので中華料理という概念そのものが存在しない。この味は正しく未知の味。洋食や和食とは違う旨さはヤミツキになりそうだ。

ラーメンをすすり、スープを飲み終える。この時、圭子は「自分の世界に持って帰りたい」との感想を抱いた。

「この時代は凄いいけど……ちょっと寂しいところもあるわね」

「どんな？」

「私の時代の名残がほとんど残っていないもの。リベリオンみたいにビルがアホのように林立してて大丈夫かと思ったし、日本橋はハイウェイ（高速道路）の下に埋もれてるもの。普通の建物も昔ながらの木造はほとんど消えてるしね」

「しょうがないというのも事実です」

「なんで？」

「この世界の日本は一度、破滅、しました。米国との戦争に完膚な

きまでに叩きのめされて……ね」

ドラえもんはこの世界の日本がなぜこのような町並みへ変貌していったのかを話す。それは圭子から見れば愕然とするもの。それは太平洋で米国を相手に戦争を挑み、資源がない日本は次第に米軍に数で圧倒された末に本土をB-29に蹂躪され、多くの悲劇を生んだ末に終戦を迎えたことを。

「それにこの時代は国民から日本陸軍は航空部隊以外嫌われています。横暴で頑迷、って日露からのイメージと戦後の憲兵などへの憎悪が重なった結果です」

「どおりで道を歩いてるおばあさんとかに汚いものを見る目をされたわけね……」

「サイパンや満州引揚げの時の悲劇……この時代はそういう負のイメージを見てきた世代がいますから……大抵の一般人は旧陸軍を白眼視してます」

それはこの時空で滅んだ大日本帝国陸軍は航空部隊の奮戦で多少同情的に見られてはいるもの、それ以外の負の要素が強すぎた上、戦後メディアの印象操作も相成って国民には嫌われている。それは主に関東軍や憲兵の行いが祟ったもの。さらに1990年代は陸軍悪玉論が権勢を奮っていた最後の時代。加東圭子は風呂に入った後、陸軍軍服姿で外に散歩に出かけた時に道を歩いてたお年寄りに、汚いものを見る目、で見られたのは旧陸軍の軍服がそのおばあさんにとって、何かを思い出すからだろうとドラえもんはいう。

「軍は私たちの世界でも馬鹿が多かったけど……この世界ではそいつらが国を破滅させたのね」

「そういう事です。で、東京も大空襲で半分以上が焼け野原になって……戦後にのび太君のおじいさんたちの世代が頑張って国を立て

直したんです。政策の中心を軍需から経済分野に変えて。けど、8年前にバブル経済が崩壊してからは政策の失敗もあって、ずっと経済は悪いままです」

「軍中心の繁栄がダメになったから今度は経済で……だけどそれも落ち目になりつつある……か。なんて言えいいのかしらね、」

「こういうのは、失われた30年、でしょうね。日本の政治家や官僚は好景気だった時代の旨みを忘れられない輩が多いですし、」

1950年代以降の日本は軍が減んだので、とにかく一金一資本主義の世の中の経済で大国に対抗しようと踏ん張ってきた。その努力の成果は1980年代中盤の、プラザ合意に始まる、バブル経済で繰り広げられた、ある一種の狂騒曲と言える身の丈を超えるほどの繁栄で頂点を極めたが、1990年代初頭にバブル経済が崩壊してからはその経済も斜陽の時代を向かえ、1990年代末はその最初の底に達した時期。ドラえもんは居候する内にその空気を肌で感じてきた。だからそういったのだ。圭子はその言葉に同意した。彼女も幼少期に世界恐慌の騒乱を目にしたが、それとは違う景気の悪さを空気として感じたからだろう。

「ねえ、さっきから思ってたんだけど……話、思い切りずれてない？」

「ですね。まあ経済もあながち戦争と関係無いとは言えませんから」

「まあそれはわかるけどね……特にこの国は」

2人の会話はいつの間にか経済談義に話題がずれていた。だが、もしこの場にサラリーマンであるのび太の父「野比のび助」がいたらなんとコメントするのだろうか。

行間その39「野比家ドタバタ紀 4」(後書き)

経済関連の話が入っています。経済に疎い方は要注意。

行間その40「嵐が巻き起こる時、悪は滅ぶ」(前書き)

行間その25「ヤマトよ永遠に　くストライクウィッチーズ」2
の続編です。

行間その40「嵐が巻き起こる時、悪は滅ぶ」

—1944年にやって来た真ゲッターロボ。その力は正に、圧倒的、といえるものだった。

竜馬達は旧501基地に着陸していた真ゲッターマシンを起動させ、すぐに戦線に馳せ参じた。

「あれは……馬鹿な!？」

バルクホルンは己の眼を疑った。先ほどの宮藤の、なんだかよくわからないけどすごいぞこりゃ、な必殺技で倒されたはずのウォロツクが沈んだ赤城の船体を取り込んで再生したのだ。完全に赤城を取り込んだ証拠に失われたボディを赤城のそれにしている。そしてネウロイ化した事を示す体色になっている。

「あれでは……!!くそっ!FW190の足では……!!」

歯噛みして悔しがるバルクホルン。FW190A-8の速度は時速600キロほどだが、それでは宮藤を助けられない。既にオーバーブーストをかけているが……魔導エンジンへの負担を考えるとこれ以上の使用はできない。隣を編隊で飛ぶ真ゲッターマシンの竜馬はそれを見かねて、自分達が先手を打つと告げる。

『俺たちが先行して先手を打つ』

「しかしいくらそのジェット戦闘機が音速が出せると言っても……」

『バッキヤロー。音速じゃねえ、光速でだ』

「光速……?」

『こういう事だ。……隼人!』

『ああ、行くぞっ！！』

真ゲットマシンは白の真ジャガー号を戦闘にある態勢に入る。それはバルクホルンを更に驚愕させる光景だった。まず黄色の真ベア号と赤の真イーグル号が合体し、人型の下半身に、変形する。どう考えてもおかしいだろうと言いたくなるような変形だ。最後にその状態の2機が真ジャガー号と合体する。

その瞬間、神隼人は叫ぶ、合体コード、を。ゲッターをゲッターたらしめるその言葉を。

「チエエエエンジ!! 真!! ゲッターアアアアアアアアアアツツ
」!!」

一ゲッターチェンジ。ゲッター線がなせる超絶的変形。それをバルクホルンは目の当たりにしたのだ。バルクホルンは目を点にして開いた口がふさがらない。完全に物理法則を無視した変形合体が目の前で展開されては当然だが。

「なっ、なっ……巨大ロボットだとお……!？」

『そう。これが、スーパーロボット、真ゲッターロボ。その第二形態だ!!!』

これぞ白いカラーリングの真ゲッターロボ第二形態「真ゲッター2」。
腕の巨大なドリルを唸らせ、真ゲッター2は慣性の法則を完全に
無視した凄まじいスピードの機動（光速をも超えていた）でバルク
ホルンを置き去りにして、ウォーロックであったモノ、へ呐喊した。

真ゲッター2はものの一瞬で宮藤芳佳の元に駆けつけ、超光速のス
ピードでドリルを突き立てた。あまりの速さなのでその場にいた誰

もが状況を理解出来ない。

「へ……？何、何！？」

宮藤もこの突然の出来事に戸惑い、慌てる。

誰もが同じ気持であった。空母「赤城」の船体を取り込んだので重量が36,500tを超えるウォーロックが軽々と吹き飛ばされたのだ。しかも何か光のようなものが各部装甲を破壊していく。

「え……？このエネルギーは……」

サーニャ・V・リトヴァクの固有魔法の「全方位広域探査」が久しぶりに反応を示した。あの光から魔力でも、ネウロイではない、未知のエネルギー、を感知したのだ。しかもとても大きい大きさの。

「どうしたサーニャ！？」

「あの光からとんでもなく凄いエネルギーを感じるの……」

「何だってえ！？」

エイラ・イルマタル・ユーティライネンはサーニャを心配し、声をかける。するとサーニャはあの光からとてもないエネルギーを感じると告げる。それはゲッターエネルギーの事。サーニャは真ゲッター炉から発しられる超エネルギーを感知したのだ。

一瞬だが、その機影を目撃した美緒やジュードー達はこの状況を理解し、大笑いした。勝利を確信した表情で。

「ははは、ははっ！……そうか、そういう事か！」

「ど、どうしたの美緒」

「ミーナ、この戦、勝ったぞ!!」

「ど、どういふこと?」

「アレを見ろ」

「何なの……? アレは……」

「あれは未来世界で人類が希望と崇める戦神……、スーパーロボット、」

『そう。その名も、ゲッターロボ、』

「ゲッター……ロボ……?」

美緒とジュドーは駆けつけたミーナにその言葉の意味を伝える。宮藤を手に乗せた、赤い戦神いくさがみがそこに敢然とウォーロックの前に立ち塞がっていた。身長はゆうに55mを超え、機械で作られた事を示す装甲、人間のような瞳……さらにコウモリのような翼を持つ赤き巨神一真ゲッター1がいた。右手に巨大な槍状の両刃の戦斧を持ちながら……。

この時、美緒は既に知っていた。目の前の巨大ロボット一真ゲッターロボの力を。扶桑海軍でのおしめで親交がある穴拭智子から手紙でハワイ沖海戦の時の事を知らされていたのだ。手紙に書かれていたのはまるで天変地異をもその手で操るように引き起こすほどのスーパーロボット達の絶対的とも言える力、奇跡を。それでスーパーロボットの事を知っていた。ミーナは美緒がガッツポーズを取るまで喜ぶ理由がああロボットにあるのだろうかとその力を測りかねていた。

（確かに見るからに強そうだけど……いくら未来世界の超兵器でも

ネウロイ化したウォーロックには……)

ミーナがそう思うのも無理は無かった。ZZやF91などはもっぱら同等の相手^{モビルスーツなど}を戦っていて、怪異に対しての力は全くの未知数である。そこに更に強力だと美緒が言うスーパーロボットが現れても同様の不安を抱くのも無理は無かった。だが、そんなミーナの不安を真ゲッターは自らのパワーで吹き飛ばした。戦斧を振るい、ウォーロック(元赤城)の飛行甲板であった部位を薄紙のように切り裂いてみせる。

「え、え、ええっ!?……」

ミーナはそれしか言えない。しかもまるでウォーロックは魔力での攻撃を受けたかのようにボディの再生速度が遅くなっていた。これがスーパーロボットの力だということのか。

「さて、とつとと料理してやるぜ!!」

竜馬は吠えた。その御叫びの通り、真ゲッターロボは人類が持ち得た最大の力。それを象徴する一コマであった。

「ゲッター線の力はネウロイをも凌駕する。同時にこれは大いなる意志の力でもあった。時天空と呼ばれしモノへ対抗するために人類へ与えられし力……そして到達すべき地点から見ればこの真ゲッターとして赤子に過ぎないのだ。その到達点こそは「ゲッターエンペラー」。

ゲッターの頂点に立つ者は静かに真ゲッターロボの戦いぶりを見つめていた。

行間その40「嵐が巻き起こる時、悪は滅ぶ」(後書き)

多少文章を校正しました

行間その41「再び始まるドラマのために生きる 2」(前書き)

今回は高校生なのは達の日常です。

行間その41「再び始まるドラマのために生きる 2」

—1944年末当時、扶桑海事変の従軍世代は皆、退役して然るべき年齢に達していた。最年少であった竹井醇子の世代でさえ18歳になっていて、熟練兵の退役による部隊練度の低下が心配された。軍は連邦の誘いに乗る形で実現した計画でエース級の逸材を長く使うために連絡が取れる限りの人員、軍に残置していた者も含めて若返らせ、現役に復帰させていた。これは戦争の大まかの情勢が対怪異から対人へと変化したことで若手の中に、殺し合いするために軍に入ったのでは無い!、という風潮が広がり、除隊するウィッチたちが続出していた。その穴を埋めるために穴拭智子らは前線に呼び戻されたのである。

—1944年11月末 航空試験部

「若い奴らは今度の戦争に相当ブルってるようね……」

「当然だ。人間同士の戦争なんでもう何百年もやっちゃいないし、今のウィッチはそもそも殺し合いの訓練なんぞ積んじやいない。私たちは今じゃもう、特別、な存在なんだ」

「、特別、ねえ……」

そう。現在のウィッチたちは怪異との戦闘訓練は積んでいても、対人、の訓練は積んでいないし、人間同士の戦争など考えてもいない。それ故に殺し合いに嫌悪感を示すのも無理は無かった。穴拭達はたまたま再訓練を未来世界で行っていたから実戦を経験し、その状況を受け入れられた。だが、その他のウィッチたちはそうはいかないのが現状だ。ティターンズと数度交戦した501も似たような事例である。当初はモビルスーツを巨人と認識していたが、交戦の際にティターンズ側のパイロットがその正体を自ら明かした事で兵器で

あることが判明した。その際にミーナ・ディートリンデ・ヴィルケは激しく動揺し、狼狽した。ベテランウィッチである彼女をしてこれなのだから、若いウィッチたちの心境は如何なものか。

「今じゃ、上がっている、はずの私らがこうして戦っている……なんと云おうか……因果だな」

「ええ。、向こうの第二次世界大戦、で死んでいった人たち同様に対価を支払う日が来たのかもね」

「だったらやってやるまでだ。、日本人、なめんなようティターンズ！」

「言うことはカッコイイけどね、黒江。その姿だと迫力ないわよ」
「うるちゃーい！！これでも結構気にしてんだぞこの姿あつー、頭なでんなく！」

そう。今の二人は外見年齢に若干の差が生じている。穴拭智子が扶桑海事変当時の姿であるのに対して、黒江綾香はローティーン当時の姿。背も今のところ智子より低くなっている。本来の姿から考えるといささか面白い場面である。

「ところでアフリカはどうなってるの」

「ああ、ヒガシの所か。あそこあまり芳しくない。制空権は取れないことは無いんだが……、装甲歩兵のほうはやばい」

「相手はモビルスーツやMBT（主力戦車）だしね。それに引き換えうちの装甲歩兵なんかようやく、センチリオン、や、M26パーシング、、チヌ、だもの。一番強力なケーニヒスティーガーでも、61式、にようやく対抗できるか……」

それは装甲歩兵達の苦難を現していた。それは所謂戦車関連技術が

第二次世界大戦末レベルによく達した所に究極とも言える戦車が敵として現るのだ。発狂する歩兵もかなりいたはずだ。特に装甲歩兵などの関連技術が立ち遅れている扶桑は歩兵支援用の、九七式57mm18・5口径戦車砲、が未だ多くの装甲歩兵の火器として使われている。この砲は今年に四式中戦車に代換されて退役した、九七式中戦車「チハ」、のもの。史実の戦闘を見ても対戦車戦を戦えない(M3軽戦車にすら苦戦している)のは明らか。前線からの懇願に折れた上層部が急いで新型を造った。代換配備も遅れており、四式までの繋ぎの三式がようやく配備されたという状態。しかも火砲は九〇式野砲(史実で活躍した日本軍の高性能野砲。開発は1930年代)を改造して三式75mm戦車砲として採用したもので間に合わせただけだという。

「ああ、装甲歩兵が泣いてんぞお……上はわかってんのかよ……まったく」

「わかってればとっくに対策ねってるわよ」

「くそお……精神論主義者め……お、そうだ、思い出した。昨日、ティアナのやつから手紙が来たんだが、大変だってボヤいてた」

「ティアナから？それで？」

「制空権確保だけじゃなくって強行偵察まで命じられるらしくてな」

「いくらマルセイユ大尉がいるからって……無茶じゃない」

「ああ。胃薬が手放せないらしいぞ奴さん」

黒江はティアナ・ランスターから送られてきた手紙の内容を智子に伝える。エルヴィン・ロンメル將軍は病氣にかかって一時的に前線から離れ、代わりにパットンやモントゴメリーなどが実権を握ったのだが、その2人に無理難題を言われることも多いとの事。

なのでマルセイユは本国へ帰還してしまった加東圭子の代わりに指揮を代行するハメになり、部隊運営の苦勞を思い知り、もっぱら神経性胃炎に悩んでいるとの事。それとマルセイユに対して禁煙(ハ

ンナ・マルセイユは喫煙者で、水タバコ好き）を申し付け、その結果、マルセイユは禁煙中との事。

「マルセイユ大尉に禁煙を？あの子もやるわね」

「マルセイユ大尉、タバコが禁止されたのでみんなの前で大見得はっちゃって後に引けなくなったそうだ。それでそれ以降はみんなで連邦軍が持ち込んだ超合金ニューZ製の金庫にタバコを隠したらしい」

「ずいぶん嚴重ね」

「普通の金庫じゃちよつと頑張れば壊せるからな。その点、超合金ニューZはこの世で有数に硬い合金だ。いくらウィッチが頑張っても怖せない」

手紙の出来事は以下のとおり。ある日、ティアナはマルセイユに禁煙を申し入れた。当然ながらマルセイユは猛烈に反発したのだが、連邦軍兵士が差し入れた禁煙本を読んだばかりだったライーサ・ペットゲンや従卒のマティルダの協力もあってティアナはタバコをすべて没収した。その時のマルセイユの言葉は「頼む、後生だ……見逃してくれえ！！」であったとか。ティアナはそこところはよくわかっていた。タバコの代わりに缶コーヒー（ジョー○アのアイスカフェオレやUC○のミルク&コーヒー）を与え、ニコチン中毒、の代わりにカフェイン中毒、にしておもうという思惑で、コーヒーを与えた。マルセイユも大見得をはってしまった手前、コーヒーを飲むを得なくなったが、諦めたわけではなく、金庫を壊そうと画策した。しかしその金庫は宇宙有数に固い金庫であった。

ある日、我慢の限界が天元突破してしまったマルセイユはMG34

まで持ちだして小さい金庫を破壊しようと奮闘した。ゼロ距離でMG34を弾倉の75発をすべてぶち込み、最後に身体能力を強化した拳でぶん殴った。だが、金庫の素材は普通の金属ではなかった。2199年現在で地球圏で十本の指に入る強度と堅牢性を誇る超合金であった。当然ながらいくら身体能力を強化してもぶち破れるはずはなく……。

「っ、いったあああっ！！何でできてるんだこれええっ！？」

……と悲鳴をあげ、拳を抑えてのた打ち回った。彼女の不運は金庫の素材であった。なんと金庫はマジンガーZの超合金Zのさらに4倍の硬さを誇る合金でできていたからだ。ご存知のとおり、超合金ニューZはグレートマジンガーの装甲材。その堅牢性は小さい一枚板の時点で、たとえ88ミリ砲を高速徹甲弾の文字通りのゼロ距離射撃で撃つてもカスリ傷すらつかないほどである。その強度を見込んだライーサはそれの中に隠す事を提案し、実行された。そしてそれは見事に的中したとか。

「あははっ、それでマルセイユ大尉も諦めたわけ？」

「そういう事」

その時、執務室のドアが開き、兵士が入ってきた。用件は連邦軍の向かえが来たとの事である。

「大尉、迎えのミデアがきました。お乗りください」

「わかった。すぐに行く」

と、旅行カバンを持って出かける用意を完了している黒江。この日は久しぶりなのは達と会う日なのだ。彼女らの世界に行くのである。

るが、一端未来世界へ行き、そこから更に……という手順を踏む。
なので結構時間がかかる。智子も慌ただしく準備を終え、黒江につ
いていった。

一場所は変わって、なのはの故郷の世界

なのはたちはなんとか高校への内部進学の基準成績をクリアし、進
学に成功、高校生となっていた。これは中学2年時になのはが両親
に相談を持ちかけた時に、両親―高町士郎や高町桃子―が、独立す
るのは構わないが、高校を卒業してから考えろと諭し、なのはも了
承したからだ。フェイトもそれに合わせたので2人は高校へ進学す
る事になった。はやてには高校に行く理由はあまり無かったが、な
のは達を見ているのが楽しいのもあるが、イザという時に高卒のほ
うがバイトに役立つかもという現実的問題もあった。そしてこの日
は恩師との再会の日。なのはが張り切るのも無理はなかった。

場所はなのはの実家の喫茶店「翠屋」。そこに面々は集まっていた。

「なのはやテストロッサの恩師か……手合わせしてみたいものだ」
「シグナムのことだからそういうと思うとった。楽しみにしとき」

異名付きで恐れられているエースやから」

はやての守護騎士で、そのリーダー格の「シグナム」は兼ねてからなのは達から聞かされていた穴拭智子や黒江綾香の武勇に体がウズウズしているようである。剣術の使い手として手合わせしてみたいと思うのは当然のこと。

（あの時、なのはが使った空戦機動と技……その方の見よう見真似だとはいっていたが……あの接近戦が苦手なのはをあそこまでにするのだ……只者ではあるまい）

シグナムはなのはと公式に武装隊の行事「戦技披露会」で幾度か刃を交えた。その一番最近の会での事であった。その時の様子を思い出す。

「ツバメ返し、改っ!!」

戦いは全般的にシグナムが有利。接近戦を苦手としているなのははやや不利な状況であったが、一発逆転の策として叫びながら空中で零戦よろしく、とっさに左ひねりこみを敢行。旋回半径を縮めてシグナムの虚を突く。続いてレイジングハートを変形させ、刀剣の状態にする。そしてそのスピードを以てして一撃離脱戦法の要領でバリアジャケットを切り裂く。無論、その瞬間、会場にはどよめきが起こったが、観戦していたヴィータや救護班として待機していたフエイトは喜んだ。なのはがついに智子が使っていた空戦機動と技をモノにしたのを目の当たりにしたのだから。

「ヒャッホー！あいつやりやがった、智子さんの技を……！」

「やったねなのは！中尉の機動を……！」

と、未来世界でその成長を見守っていた身としては嬉しいらしく、ヴィータやフェイトはガッツポーズまでとっていた。シグナムの方はこの技に呆然としていたが、すぐに我に返り、なのはの成長を褒めたたえた。

その時になのはは恩師の存在を初めてシグナムに話した。この時以来、シグナムは会ってみたいとの思いを持っていたのだ。

「ごめんください」

「ああ、これは……いつも娘がお世話になってます」

「私達もお嬢さんにはたすけられていますよ。それにしてもいつ見てもお若いですねえ……お二人とも。羨ましいです」

ドアが開き、なのはの両親に挨拶をしながらその人物達が入ってきた。時代錯誤とも思える旧・大日本帝国陸軍の軍服（素人には分からないが、1943年制式版）を着こみ、胸には航空胸章と空中勤務者胸章が付けられていて、航空関係の軍人である事を示していた。

「初めての人も多いようだから改めて自己紹介をさせてもらいます。私は穴拭智子、扶桑皇国陸軍飛行第64戦隊所属の中尉です」

「同じく、黒江綾香。所属は飛行第64戦隊、階級は大尉。よろしく」

陸軍式敬礼をしながら自己紹介する2人。初対面の面々は智子らの持つオーラに圧倒され、陸軍式、海軍式、その形はどうあれ思わず答礼してしまうメンバーが続出したと言う。

行間その42「永遠のために、君のために……」(前書き)

久しぶりの仮面ライダーメインの話です。

行間その42「永遠のために、君のために……」

―人知れず世界を守ってきた「仮面ライダー」と呼ばれた者達。その内の最も戦いが激しかった時期を生きぬき、世界を悪から守った初期の7人は伝承で「栄光の7人ライダー」と言い伝えられており、後発のスカイライダー（BLACK RX）からも畏敬の念を以て慕われていた。

彼らの目的は復活した、バダン帝国、との決着。クライシス帝国とも戦っているが、7人ライダーにとっての第一目的はバダン帝国との決着であり、クライシス帝国との戦いは副次的なものであった。

―西暦2201年頃　日本

暗黒星団帝国との戦争が起こる一年前の事。復興途上の地球であったが、悪の活動はハ収まることを知らず、11人ライダーが事前に収めていた。仮面ライダー1号（本郷猛）はクライシス帝国との戦いの最中に介入してきた一人の男と対峙していた。

「ぬうつ、貴様何者!?!」

仮面ライダー1号とクライシス帝国の攻撃兵団隊長の一人「ボスガン」の前に現れた一人の男。その姿に1号は見覚えがあった。かつて最も苦戦した組織「デルザー軍団」の主要人物であり、仮面ライダーストロンガー（城茂）の宿敵「ジェネラル・シャドウ」そのものであったからだ。

「我が名はジェネラル・シャドウ。デルザー軍団の幹部」

「デルザー軍団だと!？」

憤慨するボスガンを尻目に一号は驚愕の至りであった。ジェネラル・シャドウはかつて……ストロンガーが現役の時代にストロンガーとの一騎打ちの末に戦死したはずである。バダンが活動を再開したのは知っているが、過去の組織の幹部まで生き返らしたというのか。

「馬鹿な!! 貴様はストロンガーに倒されたはずだ!？」

「そうだ、一号ライダー。確かに俺は超電子の力を使ったストロンガーに敗れた。だが、俺は改造魔人。大首領が存在する限り不滅だ」

「生き返ったというのか、生前同様の力を持って」

「全ては大首領の意思だ。大首領は貴様らを倒し、ゴルゴムの元世紀王であるRXのキングストーンを手に入れるおつもりだ」

「なぜ貴様らがキングストーンを知っている!？」

「大首領は目的のためにキングストーンを求めている」

一号ライダーとジェネラル・シャドウによって完全に無視された格好のボスガンは憤慨のあまり、感情を頭にしてジェネラル・シャドウに剣で斬りかかった。

「ええーい、デルザー軍団だかなんだか知らぬが……RXを倒すのは我らクライシスだ!! 貴様らのようなこの馬の骨とも知れぬ輩には我が敵は渡さぬ!!」

「止せボスガン、貴様の腕ではシャドウには勝てん!!」

「ええいどいつもこいつも馬鹿にしおって!!」

斬りかかるボスガンを思わず止めようとする一号ライダー。それほどジェネラル・シャドウは強いのだ。シャドウはボスガンの剣を同じく剣で迎え撃つと腕の腕の違いを見せつけるかのようにその場から一歩も動かずに攻撃を受け流す。

「これがクライシス攻撃兵団隊長か。底が知れるな」
「黙れ！！」

普段は騎士としての立居振舞を見せるボスガンであるか、この時ばかりは感情に任せての剣であった。時に卑劣な手段をも使う彼の心が垣間見えるが、シャドウは冷静に剣を動かす。

「腕は悪く無いようだが……邪魔をするな、若造。私は一号ライダーと話をしている」

「ぬうううううっ……おのれ……」

勝負は完全にシャドウ優位。ボスガンは全くいい所無しであしらわれ、これ以上ない屈辱を味わい撤退する。ボスガンを若造扱いするところにシャドウの改造魔人としてのキャリアが伺える。邪魔者がいなくなったとばかりに一号ライダーとの話を再開する。

「さて、一号ライダー。ストロンガーに伝えておけ。貴様の命を打ち取るのはクライシスでも暗闇大使でもない、このシャドウだ、とな」

「どういうつもりだ？」

「今の俺は大首領直属の幹部。暗闇大使といえども俺の行動は束縛できん。だが、デルザーの他の連中もじきに蘇る。そうなればこうして自由に動く機会も減るだろう」

「マシーン大元帥か」

「そうだ。大元帥は一応デルザー軍団を束ねる者。俺も奴の命令には従うを得ん……クライシスはじきに敗れるだろう。その時までさらばだ」

シャドウはそれだけ言って去った。この時彼は予期していたのかも

しれない。いずれクライシス帝国は
仮面ライダーBLACK RXに敗れ去る事を。一号ライダーは7
人ライダーにとって最大の敵の黄泉がえりに戦慄を覚え、その場に
立ち尽くしていた……。

—BLACK RX—南光太郎は11人目のライダーとして迎えら
れてから早くも3年目に突入していた。クライシス帝国との戦いは
激しさを増していくが、親戚の家に居候し、叔父の会社のヘリパイ
ロットとして普段の生活を送っていた。

「光太郎、今日は休暇を取るんだって？」

「ええ、おじさん」

「もしかして女の子とデートか？」

「違いますよ、知り合いの子に剣の稽古頼まれてるんですよ」

「剣道か？光太郎、お前剣道やってたっけ」

「学生の頃に少し」

光太郎は自身の表向きの職業のヘリ会社の社長で自身の叔父の佐原
俊吉ゆんきちに休暇をとる理由を説明する。それは半分以上合ってるが、少
しだけ嘘が混じっている。それは、学生時代に剣道をやっていた、
事。彼はBLACK RXとして新生してからは、リボルケインや

バイオブレードなどを駆使してクライシスの怪魔獣人や怪魔ロボットのみならず幹部との剣戟を度々展開し、生き残ってきた。その為か剣術の腕はメキメキと上昇。今ではたとえ達人で知られる穴拭智子や黒江綾香が2人同時にかかるうとも対等に渡り合える腕前。それにその2人といえども、実戦での人間同士の斬り合いの経験はメカトピア戦を経たとは言え、まだまだ浅い。光太郎はRXとして見せた超絶的とも言える実戦的剣戟を2人に見こまれて特訓してほしいと頼み込まれ、呼ばれたのだ。叔父に理由というと、光太郎は私物のバイク（1980年代頃の日本で流通していたRG250Γという車種のレプリカ）で2人が待つ広島の呉鎮守府（総監部から改称された）へ向かった。

一 呉鎮守府

「光太郎さん、すいません。今日はお手数をおかけして」

「いや俺でよければお安い御用だよ。今日は変身して相手すればいいんだね？」

「ええ。そのほうが実戦的でいいんで」

「よしわかった。変身!!」

光太郎は着くなり、穴拭智子の頼みに答える形でRXに変身。トレーニングを始めた。2人は実戦ながらの剣戟を展開する。獲物は智子はいつもの備前長船兼光、RXはとびつきり物騒だが、おなじみの必殺武器「リボルケイン」である。RXに関しては完全に能力の無駄遣いである。それを観戦していたウィッチの中に智子の親友の「加藤武子」の姿があった。この時の彼女は若返りを果たしたばかり。ちょうど再訓練過程の途上で、一時的にしる智子らと共に生

活を送っていた。智子との再会の時には、しばらく会わない内に智子の相方の地位をすっかり黒江綾香に取られたのを聞かされると悔しかったとか。

「あ、あの智子が圧されてる……?」

「そりゃそうだ。あの人は仮面ライダーだ。うちらよりも剣戟の経験は豊富だかな」

「黒江、なんか前あった時より気さくになったっていうか……雰囲気明るくなったわね」

「年くったのと、隊長として経験積んだせいかな。飲むかこれ」
「なにこれ」

「そうか、お前コーラ飲んだ事ないんだっけ。炭酸飲料だよ。リベリオンの代名詞みたいな奴。この世界だとアメリカだけだ」

「へえ……」

ちょうど通りがかりの黒江はコーラを手渡す。加藤はそれを飲んでみる。なんとなくリベリオン人が考えそうな味だ。どこことなく甘い。だが、ほとんど常夏状態のこの時代の日本にはあうかも知れない。よく冷えていておいしい。だが、なんとなく自分にはラムネのほうがいいと思う。

「うまいけど私はやっぱりラムネのほうがいいわね……あのビンが最高に涼しそうでいいのよ」

「そりゃ言えるかもな。コーラを日本人がアホのように飲み始めたのは、戦後だ。戦中の人間のうちらには馴染み薄いから無理もないな。うまいのは確かなんだが。そういえば冷蔵庫にラムネがあったからそれやるよ」

「本当!? ありがとう」

2人の会話の最中にもRXと智子のトレーニングは続く。智子はここぞとばかりに備前長船を横一文字にふるが手応えがない。

—えっ？

RXの姿がない。後ろを振り返ってみると……。いつの間にかゲル化し、攻撃を回避してバイオリダーへ変身していた。

「俺は怒りの王子！！RX・バイオリダー！！」

ご丁寧の名乗りを挙げ、獲物もバイオブレードになっている。ある意味では卑怯とも思える変身である。

「バ、バイオリダーあっ！？ちよつとそれ反則ですよお！」

智子もこれには涙目になる。バイオリダーの猛威(?)が発揮される。

行間その43「ヤマトよ永遠に 13」(前書き)

久しぶりのヤマトよ永遠に編です。

行間その43「ヤマトよ永遠に 13」

一小惑星イカルスへ向かった宇宙戦艦ヤマトのクルー。そして主力戦艦改級戦闘空母を主軸とする残存空母艦隊。双方は各々の思惑で行動。宇宙戦艦ヤマトの復活の時は今であるとばかりにヤマトクルーはイカルスへ向かった。

艦隊の方は土星の衛星「タイタン」で待機していた地球連邦宇宙軍第7艦隊と合流。ヤマトの発進を待ってヤマトとの合流が決定された。その空母の艦内では。

「ヤマトか……海軍のお偉方が大艦巨砲主義で生み出したものが今や地球の希望とはな」

「大和型ってなんでこんなに有名なのよ。でかいだけだと思ったけど。」

「それはな、穴拭。悲劇的な最期を遂げたからかもな。大和も武蔵もこっちの日本じゃ航空機によって、大艦巨砲主義、ものとも葬り去られた日本海軍悲劇の象徴なんだ」

黒江は自室に飾っているタ〇ヤが23世紀になっても販売している350分の一スケールの大和型戦艦のプラモに視線を合わせながら話す。大和型戦艦は自分たちの世界では、長門型戦艦でも対抗できない怪異へ対抗するために作られた、ように、この未来世界では、アメリカの新型戦艦を圧倒するため、に作られたが、空母機動部隊の台頭で戦力的価値を減じ、ついには大和は沖繩のために決死の出击を敢行して果て、武蔵はシブヤン海で大和の身代わりになるかのように航空攻撃の前に立ち往生した。つまりは本来の敵と戦う機会が得られぬまま悲劇的な最期を遂げた事が、世界3大海軍、として栄華を誇った帝国海軍の悲劇として一般に語り継がれたのだ。帝国

陸軍がその伝統を殆ど後世に残せなかった（完全な継承者は現れなかったという意味）のとは対照的に帝国海軍はその後も20世紀後半の「海上自衛隊」、21世紀中盤の「日本自衛海軍」、21世紀後半の「日本国防海軍」と時代時代の正当後継者達の手により伝統が息づき、それは地球連邦軍となっても脈々と受け継がれた。なので扶桑海軍の事を知っている自分たちにとっては、やりやすい、と黒江は言う。

「本来なら陸軍軍人の私たちが、海軍、にいるってのも不思議なんだけどね」

「元は宇宙軍自体が空軍の派生組織みたいなもんだったから陸軍軍人も多くが宇宙軍へ転科したって経緯がある。その内に日本人を中心に、宇宙は大海原である、って考えが広がったから組織は海軍みたいになった。今じゃ宇宙軍は事実上の、海軍、だし、あながち間違っていない。」

宇宙艦艇が当たり前のように存在する宇宙は事実上の海。それで宇宙軍は事実上の海軍と見なされるようになった。実際多くの星間国家は船を浮かべたような形の宇宙艦艇を持つ。

地球連邦もその例にもれない。智子や黒江は本来なら、潮風とは無縁の陸でゼイゼイいう、陸軍軍人だが、連邦宇宙軍へ出向したためにいつからか、海軍軍人氣質も身につけるようになっていた。

『穴拭中尉及び黒江少佐へ。タイタン基地へ出頭されたし。基地司令からの要請です』

「なんだ？うちらを名指しで？」

2人は艦内放送でタイタン基地へ出頭するように指令を受け、食用宇宙服を食べて外へ出て、基地に入った。

―地球連邦軍　土星衛星「タイタン」基地　基地司令室

「穴拭智子、黒江綾香、両名出頭いたしました」

「うむ。君たちに朗報だ。基地の開発部がロケットストライカーを完成させた」

「何ですって！？どうやって実用化したのです？量産を含めればまだ年単位で先と聞いて聞いていましたか……」

「宇宙戦艦ヤマトの真田技師長が骨を折ってくれてな。波動エンジン関連技術などを応用することで改良し、航続距離の問題を解消したと聞いている。名は、秋水、との事だ。ちょうどこの基地に敵艦載機が接近しているから実戦テストを兼ねて使いたまえ」

「了解しました。しかし、なぜわかるんです？」

「レーダーはミノフスキー粒子でごまかしてあるが、基地の位置自体は掴まれている。敵もこうして定時的に空襲に来るのだ」

波動エンジン関連の技術はここ数年でヤマト初航海時とは比較にもならないほど進歩している。裏にイスカンドル救援時のガミラス残党からの技術提供があるとはいえ、そのスピードは急激なもの。技術は他の推進機関にも応用可能であり、今回は魔導ロケットに当てはめた。実は真田志郎はヤマトを管理する傍らで魔導エンジンの開発にもタッチしており、彼の閃きが実用化を早めたのだ。扶桑製のロケットストライカー「キ200、秋水、」はそのの一番に実戦可能な状態に持ってこれたモデル。タイタン基地では極秘にテストが行われていたので、そこに優秀なウィッチである2人で実戦テストをしてしまおうという腹づもりらしい。

格納庫に行くと見かけはジェットストライカーとそんなに変わらない、それがあった。起動してみても感覚的にはほぼ変わらない。

「さて、テストをしてみるか」

2人は暗黒星団帝国の戦闘爆撃機の定時空襲への邀撃をコスモタイガーと共に行った。敢行装備は史実の秋水同様にホ155一?である。宇宙では空の常識にはとられない空戦が起こる。コスモタイガーも宇宙ならばの機動を見せて戦っているし、バルキリーもそうだ。2人はバルキリーの搭乗経験が生かされた空戦術で暗黒星団帝国の戦闘爆撃機と渡り合う。

「あんま弾を無駄遣いすんなよ、穴拭!!」

バルキリー搭乗時同様に同様に敵のミサイルをホ155一?でときたま迎撃しながら黒江は奮戦する。さすがにバルキリーでの空戦を経験しているだけあって、鮮やかである。タイタン基地上空に襲来してくる敵機には一年ほど前に、イスカンドル救援戦でヤマト航空隊が戦った円盤型戦闘機やイモ虫型戦闘機の姿も見えるが、それらはごく少数であり、それと似た形状の新型のほうが多い。敵も機種転換の最中なのだろうと黒江は推測した。

「各機へ通達! 敵は新型機を投入してきている。今までの敵と思つて侮るな!」

「了解」

コスモタイガー隊に新型戦闘機への注意をうながしながら、彼女は空戦を戦う。新型機の行動に注意しつつ、手に持つ刀をイモ虫型戦闘機へ突き刺し、魔力を流し込み爆散させる。BLACKRXの「リボルクラッシュ」の見よう見まねであるが、意外に効果は見込める。

……しかし戦場を見回してみると、暗黒星団帝国は航空機の統合運

用をほとんど考えていない編成である。編隊の中に新旧の機体が入り交じっている編成だと航続距離などの関係で、統一した作戦行動を取れない。この辺は人間同士の空戦が計り知れないほど起こって、豊富な実戦経験がある地球連邦軍の方が戦略・戦術ドクトリンで優位に立てている面と言えた。

行間その44「ヤマトよ永遠に 14」(前書き)

前回に引き続きヤマトよ永遠に編です。

行間その44「ヤマトよ永遠に 14」

一宇宙戦艦ヤマトの発進を待つ地球連邦軍の残存宇宙艦隊。その内の最大勢力であり、結成から間もないために特定の守備範囲を持たなく、自由に攻勢へ打って出れる唯一の艦隊「第7艦隊」は本国から発進した他の部隊などと合流。連合艦隊として敵本星に逆進攻する事が合議決定された。タイタン基地への定時空襲を阻止次第、全力発進を行うとされた。

その間にも暗黒星団帝国航空部隊との空戦は続いていたが、地の利を持つ地球連邦軍の優位に運んでいた。コスモタイガー隊の技量もそうだが、2人の魔女の奮戦も目を見張るものがあり、それぞれ格闘戦と一撃離脱戦法を使い分ける形で戦果を上げていった。、秋水、。日本刀の美称にして、大日本帝国の最後の希望として生まれ出るはずであった戦闘機。それは別の形でその悲願を達成したのだ。空戦そのものは完全に奇襲成功した連邦軍の良いように事が運び、バルキリー（VF-19A）のミサイルの飽和攻撃で編隊の半数を撃墜。その後は一对一の巴戦に強いコスモタイガーが残存敵機を掃討するという手順であった。

VF-19A、エクスカリバー、のミサイルの弾雨が敵機を薙ぎ払えば、コスモタイガーの機首パルスレーザーと翼内装備の実弾兵器の12.7mm機関銃が巴戦で真価を発揮する。巴戦の技量は大日本帝国海軍航空隊の流れを汲む地球連邦宇宙軍第7艦隊航空隊は地球圏有数の腕。（連邦軍の航空隊は艦隊ごとに各国の人員によって気質が異なるが、第7艦隊はとりわけ日本人が多くいたので、大日

本帝国海軍航空隊の氣質が強い）一方的とも言える戦果を以てしてそれを示した。それは智子と黒江も見ていて何処と無く親近感を覚える。

機体上面を濃緑色、下面を明灰白色とする、扶桑皇国海軍色、に塗られているのもそれに輪をかけている。

—そして、2人は最後の仕上げに入る。

「悪いが、この2機は私達がもらったあ！！」

智子と黒江は敵編隊の最後の2機をそれぞれの必殺技で仕留め、コスモタイガー隊と共に空母へ凱旋する。秋水のテストとしては良好だろう。だが、問題はあった。対空はともかく、対艦武装が用意されていないという点ではマルチロールストライカーユニットとして運用は想定されていないという点だ。宇宙で爆弾を落とすというのはナンセンスだし、かといって本来局地戦闘機のような任務を想定されているらしいストライカーユニットで重たい噴進砲を持つというのも空力特性的にマズイ。やはりまだ対艦任務にはバルキリーを使うしかないと思ふ。

「ねえ、黒江。これってやっぱり空対空専用なのよね？」

「ああ。状況に応じてバルキリーと使い分ける方向で使っていこう。特性的に局地戦的で、戦後のジェット戦闘機のように対艦任務に使える専用武装も用意されて無いからな、コイツ」

秋水は基本的に空対空任務において邀撃し、大型ネウロイと戦うためのストライカーユニットである。そもその開発目的から言って、マルチロール機のようなどのような任務もこなせる汎用性は想定されていない。今の範囲内で出来ることはせいぜい近接航空支援に30ミリ砲が使える程度だ。それでも旧来のストライカーユニットよ

り遙かに高速なので、空対空任務には持って来いなのだが、難点をあえて上げるなら多様化する任務への汎用性を実現するための武装が無い所か。

「空母に帰ったら開発部へデータを送っておこう。今後の任務にはタ弾とかみたいな武装が必要だ。ヤマトが合流したら技師長に用意してもらおうぜ」

「あの人って万能なのね」

「なんでも連邦じゃ、真田さんがあと5人いれば宇宙征服できる、って言われるほど箔が付いてるほどらしい。それでどんなものでも一瞬で理解できる……天才だよ」

黒江は航空試験部の人間（実戦としては64戦隊所属であるが、航空試験部にも仮所属扱いとなっている）として連邦に出向してからというもの、真田志郎、の名を耳にしない日は無かった。彼の頭脳明晰さは凄まじく、魔道エンジンなどの理論すら一日で理解してしまったというのだけでも驚きであったが、今回の扶桑の各軍需産業の一流技術者が、年単位、かかると半分匙を投げていたロケットストライカーの実用化を僅か半年で試験運用段階に持って来るのだから物凄い。

飛んでいるとタイタン基地に着陸している宇宙空母が見える。アングルドデッキ付きの姿は自分たちの時代の空母とは違うが、空母は宇宙船でも姿は変わらない、のは安心感を思える。いつの時代も空母への着艦は技量がいる。空母航空隊に所属する事がパイロット達にとって、誇り、になるのも分かる。

智子達は陸軍航空隊出身だが、ここ数年（ただし外見上の年齢は世界を行き交う関係で2199年の従軍時から11年ほどである）は地球連邦軍の都合で空母航空隊での任務につくことが多かったため、

慣れたもの。着艦すると数時間の休息を挟み、レベル將軍と基地司令の双方に戦果報告を行う。基地司令は上機嫌で「これで扶桑の軍需産業の連中も安心するだろう」と言い、黒江から手渡されたデータを満足気に受け取った。

基地司令がいなくなったあと、2人の母艦「笠置」の艦長を兼任する形となったレベル將軍は2人に重要事項を伝える。航空隊の指揮官クラスまでに最初に伝える重要事項である。

「宇宙戦艦ヤマトが無事発進したと山南君から連絡が入った。我が艦隊は直ちに合流、連合艦隊として敵の母星に侵攻する。地球にある重核子爆弾を解除するには本星と地球側の双方を解除しなければならぬ」

「つまりは敵本星へ殴りこみですね」

「そうだ。この艦隊は今後、暗黒星団殴りこみ艦隊、として行動する」

「ネーミングセンスどうにかななかったんですか？」

「他にも色々出たんだが、これで落ち着いた」

「いいんですか？それ！？」

「これでいいのだ。他のウィッチたちにも通達してくれ」

「了解です」

智子と黒江は艦長室を出ると休憩室に待機している飛行64戦隊（黒江は実状として同隊の隊長格であり、智子も戦闘隊長の立ち位置にいる）の面々にレベル將軍からの通達を伝える。中には片足が義足で、加藤武子を姉のように慕うウィッチもいるとか。

「少佐、中尉、自分たちはこのまま敵の星に殴りこみというわけですね」

「そうだ。貴様等も敵本星へ侵攻するからには覚悟を決めておけ。」

基地に残りたい奴は申し出る。あと40分もすれば発進する」

黒江は64戦隊の面々に覚悟を問う。64戦隊は史実同様に精鋭ができるだけ多く配置されているが、若手も少数配置されている。戦争を戦うには生半可な気持ちでは務まらない。だから説いたのだ。しかし64戦隊にはそういった腑抜けはいなかった。全員が艦に残る選択をとった。そして発進前に黒江は智子と盃を一杯交わし合い、部隊とお互いの武運を祈った。

一地球 旧日本国 神奈川 大和市付近

地球では今日も連邦軍残党と暗黒星団帝国の地球占領軍の小競り合いが続いていた。高町なのは少尉として、正式、地球連邦軍へ復帰。加藤武子の指揮下に入って地球連邦軍の地球解放戦線を戦っていた。それら地球のパルチザンを指揮するは、猛将、と謳われたジョン・コーウェン、中将。彼は自ら戦線の矢面に立ち、指揮を行っていた。

「中将閣下、本当に大丈夫ですか？」

心配するなのはコーウェンは不安を払拭するようにかっかっかと笑い飛ばす。

「なあに、これでも若い頃は君たちのように鳴らしたものだ。老いたとは言え、伊達に軍人はやっとならん」

コーウェンはなのは達をコスモガンで援護する。若き日の腕は衰えていないようで、百発百中である。

今回の目的は厚木基地の奪還。合流した61式戦車10型と5型装備の第5装甲師団を主力として実行する。61式の155ミリ滑空砲が火を吹き、モビルスーツの重火器が炸裂する。暗黒星団帝国側もパトロール戦車などで応戦し、火線が入り交じる。

「おい、誰かあの3脚戦車を黙らせてくれ!!」
「任せてください!! いくよ、レイジングハート!!」

陸戦部隊の要請になのはが答える。レイジングハートを構え、すぐにデイベインバスターを放つ。

なのはの火力はパルチザンにとって重要な役割を果たしていた。制空・近接航空支援の双方をこなせる空戦魔導師として一級のものをもつ彼女はハンナ・ルーデルから教えられたすべてを暗黒星団帝国軍へぶつけた。デイベインバスターが戦車を薙ぎ払う。

一厚木基地を一筋の桜色の閃光が舞う。それはある世界とはまったく異なる運命を辿った一人の魔法少女の戦いでもあった……

行間その45「1944年 Valkyrie 作戦」(前書き)

1944年のアフリカ方面反攻作戦に触れます

行間その45「1944年 Valkyrie、作戦」

—地球連邦軍の主力モビルスーツは2202年時点でも未だジェガンシリーズが現役であり続けていた。これは政府の財政危機の影響で、正統後継機であるジャベリンの生産が遅れているためで、間に合わせ的にジェガンに3度目の大規模近代化改修を行う施策がなされた。そのため1944年の、対ティターンズ、アフリカ戦線にも多数が参加していた。

—1944年 8月

アフリカではエルヴィン・ロンメル將軍を指揮官とする対ティターンズ反攻作戦が開始されていた。地球連邦軍側の機体は様々で、古いところでは、RGM-79SP、「ジム・スナイパー?」、新しいところでは砂漠迷彩仕様の、RGM-122、「ジャベリン」が参加していた。

ウィッチ達はこれら兵器が自分たちと共に参加することに驚きを持って迎えた。

「何だこのほかでかい、Kar98k、は?」

ハンナ・ユステイナー・マルセイユは地球連邦軍との打ち合わせのために地球連邦側の駐屯地を訪れていたが、武器弾薬が置かれている倉庫にモビルスーツサイズに拡大したようなKar98k、小銃が置かれていることに驚く。そのまま拡大したと言っていいくらい再現されている。モビルスーツ用の武器だというのが……。

「それですか。ジム・スナイパー?用のライフルですよ」

「モビルスーツ用のライフルだと？ビーム兵器があるそちらでの時勢でも需要あるのか？」

「ええ。ビームはコロニーとかだと使えませんし、大気圏内だと減衰するんです。その点、実弾兵器だと安定した威力が出ますから。狙撃任務にはうってつけです。ただし口径は昔の歩兵戦闘車両用に使われていた75？砲の転用ですがね」

「75ミリが、ライフル、扱いか……モビルスーツというのは凄いな」

「ええ。モビルスーツは昔の戦車砲／＼巡洋艦の艦砲まで手持ちで扱えますからね」

「そういえば今度、陸戦型ガンダムを見せてくれ。渋いからな」

「良いところ突きますね。あれは一番歩兵らしいガンダムですから」

マルセイユは関心したりであつた。モビルスーツの威力は旧来の戦車を遙かに超える。これが一時的にも戦闘車両を退役に追い込んだ未来での花形兵器であるならば確かに倉庫に置かれているモビルスーツ用の武器は物語っていた。

ーウィッチはこの作戦に当たって、出来る限りの最新装備を受領していた。空戦用ではティアナや稲垣真美には扶桑の最新鋭、火龍と橘花が優先的に配備された他、マルセイユにはMe262の後継として採用された第二世代型ジェットストライカー「Ta 183、フッケバイン」が与えられた。陸戦分野ではティーガー装備部隊

に後継の試作型ストライカー「レオパルト1」（ケーニツヒティーガーは本土防衛部隊が優先的に装備していたので未来情報を基にストライカーユニットとして試作した）が配備され、扶桑出身者にも「チト」が「チハ」の代価ストライカーとして配備されていた。

「これがレオパルト？」

「らしいわ。ティーガーの後継的なストライカーとして作られたけど、実質的には、？号、の後継の主力として配備されるらしいわ」「よかった。これであのモビルスーツとも戦える……」

ティーガーは戦車らしいフォルムを残す大型ストライカーユニットであったが、レオパルトは？号までのような形状をしている。火砲は105ミリヘアアップされているのにも関わらず連邦軍側の技術提供によって快速を誇るといふ。カールスラント出身の陸戦ウィッチで、ティーガーを主に使っていたポニーテールの少女「シャーロット」軍曹はレオパルト1でようやくモビルスーツに対応できる火力を得られた事に安堵を見せる。彼女は数カ月前にティーガーでティターンズの誇るモビルスーツ部隊と交戦した経験があった。その時は正に地獄としかいいようのない光景であった。

一あの時は顔から血の気が引くのがわかった。重ストライカーユニットのはずのティーガーでも相手の装甲を全く貫徹できなかった時のショックは……。その時の相手側のモビルスーツは「マラサイ」と「バーザム」という機種。後で聞いたけど、装甲素材はガンダリウムV合金という特殊金属を用いていた。この時代では考えられないほど堅牢な金属で、駆逐艦程度の主砲ではびくともしない強度を誇る。どうりでティーガーの主砲が通じないはずだよ……。

彼女はガンダリウム合金の威力を身を持って体験していた。88ミリ砲の徹甲弾の方が装甲に負けて砕けるという現象まで経験し、火

力に仲間共々半ば蹂躪されてしまうところであった。そこに救援に駆けつけたRGM-89R「ジェガンR型」の部隊がマラサイらを撃退した。さらなる高性能をジェガンが見せつけたわけであるが、ジェガンは度重なる改修で総合性能で言えば、一昔前のガンダムタイプに相当するほどの性能を得ており、マラサイを撃退することは比較的容易であった。ネモ系列の機体をジム系の思想と合流させて生み出された、連邦大型量産モビルスーツ、の集大成的存在は伊達では無いのだ。

「でも今回は私たちだってモビルスーツと戦える！レオパルトは伊達じゃない！！」

……と、どこかで聞いたセリフを言いながら作戦へ並ならぬ意気込みを見せるシャーロットであった。

一作戦室

「よし、3日後をめどに作戦を開始する。各部隊に通達せよ」

「いいのかロンメル。あの様な得体の知れない輩と共同作戦など……」

地球連邦軍に対し、あまり信頼をおけないとばかりに渋い表情を見せるモントゴメリー将軍。彼は連邦軍から、マーケット・ガーデン作戦を失敗させた愚将で、人種差別主義者と嘲笑されている現状に鼻持ちならないようだ。ロンメルが、電撃戦の名手、砂漠の狐、と持て囃されているとは偉い違いである。ロンメルはモントゴメリーを一笑に付しながら言い放つ。

「構わん、敵の敵は味方だ。それに彼らの言うことは信用に値する」
「しかしこの私を、愚将、劣将、と嘲り笑ったのだぞ！！何が
マーケット・ガーデン作戦だ！！」

「そんなだから器が小さいと奴さんから笑われるのさ。パットンを
見習え」

「ぐぬぬ……」

それは自分の軍人としての手腕を歴史によって真っ向から否定され
た哀れな老將軍の姿であった。感情を顕にするモントゴメリーをロ
ンメルは半分哀れんで見ていた。だからある一面の指揮を任せ、
汚名返上の機会を与えたのだ。主力はモビルスーツや精鋭ウィッチ
を集めた自らとパットンの部隊。これで電撃戦を展開するのだ。

「本日を持って今次計画を、ワルキューレ Valkyrie、とする！以上！！」

アフリカは戦線は動き出す。「Valkyrie」作戦。目的に捕
らえられたウィッチ救出も含まれるこの作戦は乾坤一擲のもの。果
たして成功するのであろうか？伝説の名將軍「エルヴィン・ロンメ
ル」はティターンズ残党軍を撃ち破れるのか。奇しくもその作戦秘
匿名は史実での第三帝国總統「アドルフ・ヒトラー」を暗殺しよう
としたクラウス・フォン・シュタウフェンベルク大佐が実行したク
ーデター作戦と同名であった…。

行間その46「ワルキューレの騎行 1」(前書き)

ワルキューレ作戦編に入ります。

行間その46「ワルキューレの騎行 1」

一対するティターンズ側も連合軍と連邦正規軍の行動は察知していた。彼らは転移前に鹵獲に成功していたエウーゴ製高性能機や捕虜となったウィッチをも動員した。

「エウーゴの奴らと連合軍が行動を起こすようです」

「うむ。部隊の再編を急げ。ウィッチ達の教育は充分か？」

「ハッ。各地から摂取した人員を我がティターンズに相応しい人員に再教育致しました。これを航空隊として参加させます」

彼らティターンズは連邦正規軍をエウーゴと言った。その言葉は彼らが、自分たちこそ連邦の正規軍だ、という自覚のもとに発せられていた。実際グリプス2の攻防戦まではティターンズは文字通りに連邦の正規軍として行動していた。それが彼らをそう言わせる理由であった。そして敵であるはずのティターンズに志願したウィッチ達はティターンズに触れることで、連合軍への疑念を強くした結果、袂を分かち、かつての同胞と戦う道を選んだ。それは何百年経とうとも同じ人間同士で争い合う人間の性を理解したがために、若いウィッチ達の大多数は、殺される位なら……、の心情が働いたのだが、自らティターンズへ志願し、同部隊の一員になったウィッチもいた。その中にはカールスラントの空戦のエースたちも複数含まれていた。同国航空隊所属のリーケ・ザクセンベルクやルドルフィン・ミューラーなどがそれであった。彼女らはカールスラントで前世紀以来続く、旧態依然とした皇帝主体の体制に疑問を抱いており、かねてより噂になっていた未来の軍勢である「ティターンズ」に合流した。戦線の予想以上の好調ぶりや人材不足に悩んでいたティターンズはこれを歓迎。元々呉越同舟的色彩の強かった連合軍の無能な指揮官に対しての疑念に潰け込む形でティターンズの残党軍はウィッチ達

に志願を促した。結果は成功。ティターンズは今では錬成途上含めてウィッチの3個航空軍を抱えるまでになっていた。人員は占領地に駐留していた部隊や企業の人材を、機材も製造工場ごと摂取して運用していた。これは奇しくも元は連邦軍部隊を摂取したのが出自のザンスカール帝国軍に似ていた。

「敵の指揮官は誰だね？ モントゴメリーやパットン將軍か？」

「いえ、砂漠の狐、です」

「……ロンメル將軍か」

「彼は電撃戦の名手です。どうでしょう」

「面白いでは無いか。彼も万能ではあるまい。事実、1943年には連合軍に敗北している」

「ですな。どう迎え撃ちましょう」

「ソ連流の戦術で行こう。東部戦線を勝利に導いた將軍達の知恵が役に立つ」

ティターンズの戦略はソ連流の戦略を採用。ドイツ電撃戦の雄を、東部戦線でドイツを打ち破ったソ連の打ち出した機甲戦術で迎え撃つのである。ある意味では独ソ戦のバルバロッサ作戦、バグラチオン作戦の流れの再来とも言えた。そして……ティターンズの軍服を着込んだウィッチ達が待機している格納庫には往年のモビルスーツや戦闘機の名機がいくつも鎮座していた……。

ーアフリカ戦線の動きを察知したティターンズは先手を打ち、モビルスーツ一個中隊をモントゴメリー將軍の担当戦線へ進出させた。ジム系モビルスーツを主体とする部隊ではあるが、240ミリ砲を持つジム・キャノンの火力は脅威であり、モントゴメリーの指揮する部隊に痛撃を与えていた。

「何事だ!？」

「ハッ、敵の攻撃です!!」

「チィッ、先手を打たれたか!! ロンメルに打電!、我、敵部隊と交戦中ナリ、! 復唱はいい!!」

「ハッ!!」

モントゴメリーは汚名返上も兼ねて部隊を応戦させた。戦車・陸戦ウィッチ達在必死に防戦を展開する。だが、情勢は芳しくない。ジム・キャノンの240ミリロケット砲は一昔前の戦艦の艦砲にも相当する。トーチカが粉碎され、爆風で吹き飛ばされた兵士たち、だったモノが、辺りに散らばる。この方面に打ち合わせのために来訪していた王立ブリタニア陸軍第4戦車旅団C中隊長「セシリア・グリーンダ・マイルズ」少佐は急遽「センチュリオン」で応戦し、ティターンズMS部隊に立ち向かった。

「ジム・キャノンのデータは頭に入ってる。240ミリ、もしくは360ミリロケット砲を肩につけている火力支援用モビルスーツ…

「あれをやらないとキツイわね」

マイルズは最優先目標に火力支援を行っている砂漠迷彩仕様の、RGC-80、ジム・キャノン上げた。機によっては扶桑の誇る金剛型戦艦にも匹敵する巨砲を装備する機体。あれを沈黙させ、火力支援を断つ。センチュリオン用の手持ち火器として用意された20ポンド戦車砲を用いてジム・キャノンを狙う。背部バックパックや頭部メインカメラが狙い所。レオパルトほどの火力を持たないセンチュリオンの戦術としてモビルスーツの側面、背後を狙うのが最善の策。マイルズは歴戦の勇士としてそこを見抜いたのだ。

「行けっ!!」

背後に忍び寄り、20ポンド砲を浴びせる。実弾攻撃であるが、魔力強化により弾丸は装甲を貫通、ジム・キャノンはまるで糸の切れた操り人形のように前のめりに倒れる。砲身は倒れる瞬間に折れている。マイルズはここのところマチルダ?で部下ともども敗北続きであったが、ブリタニア最強の、巡航戦車の記号を持つストライカーユニット「センチュリオン」でリベンジを果たしたのだ。

戦場ではモビルスーツ戦も展開されている。旧式のジム改やジム?などが正規軍の持ち込んだ直系後継機のRGM-86R、ヌーベルジム?、と剣戟を展開し、ジムの後継者たる、RGM-89、ジェガンがそれらを薙ぎ倒していく。特に存在感を見せつけたのは、最強のジェガン、と誉れ高き、RGM-89S、スタークジェガン、その性能で先祖といふべきジム系モビルスーツを次々に沈黙させていく。現在の地球連邦軍にとっては後継機のジャベリン、Z系可変機を除けばエースパイロットに与えられる最高峰量産機の地位をかつての、ジム・カスタム、に代わって占めている。つまりスターク

ジェガンに乗れるということは連邦軍モビルスーツパイロットの中では羨望を集める存在として認められた事でもある。実際にこの戦線の参加した搭乗員の中でも搭乗時間が長く、戦歴も一年戦争以来の老練達は皆、その気になれば乙系も軽く乗りこなせる腕の持ち主であるが、操縦性が、素直、なジムの系譜を継ぐこの機体に好んで乗っていた。

「あれがスタークジェガン……凄い」

スタークジェガン達の奮戦はマイルズたちを勇気づける。中にはモビルスーツでサムズアップを試みせるお茶目なパイロットもいて、ウィッチを鼓舞しながら援護する。スタークジェガンの背部追加スラスターの噴射炎が夜空に消えていく。マイルズは彼らに背中を任せながら進撃を続けた。

行間その47「ワルキューレの騎行 2」(前書き)

アフリカ戦線の作戦その2 海戦編です。

行間その47「ワルキューレの騎行 2」

ーアフリカ戦線ではティターンズが先手を打って攻撃を開始した。それは陸軍だけではなく、海軍も同様であった。エジプト付近のティターンズの海軍所属「ニミッツ級航空母艦」（2代目。かつての米軍ニミッツ級航空母艦の直系の子孫で、同級のそれを継いだ）が出港。連合軍所属の空母と決戦に入っていた。相手は扶桑皇国海軍航空母艦の雄「瑞鶴」。指揮官は城島高次少将であった。

ーティターンズ海軍第3空母打撃群旗艦「ロナルド・レーガン」艦橋全長400mはあろうかという超弩級空母が大海原を往く。この1944年という時勢を鑑みるとエセックス級航空母艦は愚か、ミッドウェイ級航空母艦であろうともこの原子力空母たるニミッツ級航空母艦の前には張子の虎に等しい。だが、彼らとて恐れるのはある。それは日本海軍（扶桑海軍）航空隊である。ウィッチを主軸とする航空隊はジェット戦闘機といえども手を焼く相手。加えて正規軍化したエウーゴの護衛艦隊。それなりの損害は覚悟せねばならない。

「艦長、敵艦隊を補足。日本海軍と、米軍の連合艦隊の模様」
「ふん、来たか。注意するのはかの、長槍の酸素魚雷を誇る日本海軍の水雷戦隊とウィッチの母艦の空母だ！米軍の船は雑魚にすぎん。護衛艦の速射砲で蜂の巣にしてやれ！！。陣容は分かるか？」

「日本の翔鶴型航空母艦が旗艦です。スの標記があったので2番艦の瑞鶴かと」

「瑞鶴か……強敵だな」

ロナルド・レーガンの艦長は太平洋戦争で猛威を奮った九三式魚雷と航空用の九一式魚雷、史実の太平洋戦争での戦歴を鑑みると、や

はり有力な航空戦力を搭載しているであろう瑞鶴に注意を払っていた。防御のために、分厚い装甲を纏った第二次大戦型の軍艦を撃沈せしめる威力を誇る酸素魚雷は船体装甲を殆ど持たない戦後型艦船にとつては脅威そのもの。ダメージコントロールで抑えるのにも限界はある。酸素魚雷に注意しつつ艦載機である「F/A-18F」と「F-35C」（このF-35はティターンズのいた歴史では、万能ステルス戦闘機、と謳われたもの、当初の思惑を外れる高価格が仇となって軍縮機運にあった議会の槍玉に上がり、少数生産に終わった。無論、ベストセラーであったF-16シリーズの後継を目指した計画は破綻し、米国凋落の序曲の象徴となった）が発進する。目標は敵艦隊。既に水上艦艇によるミサイルの飽和攻撃も開始されている。いくら米軍がダメコンに優れるといえ、アイオワ級にも一定のダメージを与えられる対艦ミサイルを食らい続ければ駆逐艦程度は沈没は避けられないはず。

空中管制機から通信室に通信が入る。内容は「アレン・M・サムナー級駆逐艦やフレッチャー級駆逐艦が炎上し、隊列から落伍しつつある」というもの。奇襲は上出来だ。

「あとは艦載機の戦果次第だな」

艦長は艦載機の武運を祈ると同時に更なる支持を飛ばす。

一翔鶴型航空母艦2番艦「瑞鶴」艦橋

「駆逐艦、炎上!!」

「先程の噴進弾でか！？馬鹿な……そうやすやすと炎上するはずが……」

「電探室より入電！！」

「敵機か！508に迎撃させろ！！」

「しかし、相手はジェット戦闘機ですぞ！！」

「99式（史実の96式艦戦）や零式をだして犠牲を無暗に出すよりはマシだ！！責任は私が追う！！」

城島高次少将は独断で艦載していたウィッチ隊で、統合戦闘航空団の一つで、空母航空隊である「連合軍第508統合戦闘航空団」MIGHTY WITCHESを出撃させ、直掩に当たらせた。これは彼としては越権行為であった。指揮権は持っていないからだ。彼女らの本来の母艦は「ビッケ」こと、「エンタープライズ」。だが、同艦がドック入り中にF/A-18Cの対艦ミサイルによる空襲に合い、急遽瑞鶴が臨時の母艦になっただけだからだ。奇しくもその判断は的中する事になった。F-35C（希少なのでエースパイロット専用機扱い。改装により完成当時は不可能であったスーパークルーズが可能となっている）が瑞鶴へ襲撃を敢行したからだ。508の戦闘隊長の新藤美枝は急いで邀撃したもの、敵もさるもの、空対艦ミサイルを撃つと思わせておいて、空対空ミサイルを撃ったのだ。ジェット戦闘機ならばのブラフを行ったのだ。

不意打ちで放たれたAIM-120はマッハ4で彼女に突入する。彼女は咄嗟にシールドを張ったが、爆風は彼女を吹き飛ばす。

「くっ……紫電でなければ死んでたな……」

新藤美枝は最新鋭の紫電の出力でなければシールドを突き破られていたと冷や汗をかく。そして瑞鶴の艦上では……。

「無理だ松田！！こんな時に行くな！！」

「いえ行きます！！」

部隊の一員の松田昌子が無理やり発進しようとする。彼女は若手だが、既に100機撃墜を数えるエース。343では菅野の相棒的立場にいた。502にも菅野の代理で出向した経験を持つほどの手練。だが、その行動は奇しくも史実のエースパイロットの杉田庄一兵曹すぎたしやういちの最期と同じものであった……。つまり離陸のところを敵機の銃撃を受け……。

離陸途中のウィッチは格好の獲物とばかりにF-35Cの外部装備のGAU-22/A 25mm機関砲が火を噴き……。瑞鶴の飛行甲板にガトリング砲の掃射による銃撃を浴びせる。

「松田 ああああ——っ！！」

——新藤の絶叫が瑞鶴に木霊する……。それは松田の死を意味するのであろうか？塗料に引火したか、瑞鶴の飛行甲板は炎と煙に包まれ……。消化班が急行し、消火作業を行う。次いで救護班が向かう。果たして彼女の運命は……？

行間その48「ワルキューレの騎行 3」

―508が交戦した報は同時期に解散し、一旦本国に帰還する501+aの面々にも届いていた。

菅野直枝は空母「天城」の艦上で戦友の松田昌子の事を坂本美緒から聞かされると愕然とし、その場にへたりこんでしまった。

「お、おい菅野！しっかりしろ」

「嘘だろ……あいつが……！？それで……？」

「発艦途上で銃撃を受けたらしい。なんとか一命は取り留めたらしいが……意識がまだ戻らんらしい。それと……もう一つお前に悪い知らせが入っている。お前の戦友の関大尉が……戦死した」

「!!!!!!」

菅野は更なる追い打ちをかけられてしまった。戦友の松田昌子の事だけではなく、兵学校同期でその後の親交もあった、関、大尉が戦死した事が伝えられたからだ。美緒によれば彼女はティターンズとの最大の激戦地の一つの海域「大西洋」付近で艦爆型ストライカーユニット「彗星」装備部隊を率いてティターンズ水上打撃艦隊と交戦。だが、イージス艦のファランクスの一斉射撃の前に被弾、負傷。ストライカーユニットの損傷も激しく、帰投不能と判断。500Kg爆弾を抱えたまま敵艦に突入した。その際に部下に言い残した言葉は「私は天皇陛下のためとか皇国のためとかで行くんじゃない。誰かを護るために行くんだ。最愛の者のために死ぬんだ」であったという。

―菅野は人目もはばからず号泣した。

まるで子供のように泣きじゃくる彼女を美緒はただ抱いてやること

しか出来なかった。掛ける言葉も見つからない。黙って小柄な菅野を抱き止める。菅野は普段の勇猛果敢な姿からは想像もつかないほど泣いて、泣いた。かけがえの無い友を失った彼女の沈痛さは表情から察する事ができる。そして美緒から渡された遺品を手に取り、亡き戦友の名を叫んだ。

「関イイイイイ——っ!!」

それは虚しさと悲しみが交錯する叫びであった。関大尉の映る写真には菅野の大粒の涙がこぼれていた……。

関大尉の例を挙げるように、この時期にはウィッチたちも戦争の因果からは逃れられず、戦死するものは増えていた。穴拭智子の若手時代の戦友の一人で、飛行第25戦隊所属であった、尾崎、大尉が僚機を救うために命と引換にガンシップのAC-130を撃墜したという報告も扶桑に入っており、智子はその報に悔しさを顕にしたという。この相次ぐ戦死の報に扶桑陸軍上層部はエース級の人材が失われていくのを恐れ、今後の作戦行動を制限させるという事まで検討した。この時期に陸軍参謀総長の任についたばかりの梅津美治郎大將は航空関係者達の紛糾する議論に収集をつけさせた。それは彼なりの戦死していった者たちへの敬意の表れであった。

―扶桑 陸軍省 とある会議室

「馬鹿者めが!!今はこんな事で揉めてる場合ではなからう!!」
「しかし梅津閣下!!このままでは我が国の国防というものが……」
「航空総監、君は何を言っているのだ。遙かな未来の友邦の戦士や若い乙女たちが今も戦場で命をかけているというのに、君は自国だ

けの国防と寝言を抜かしているのかね!？」

「いえ、その……」

梅津美治郎は航空総監である安田武雄中将にこれでもかと捲し立てた。彼は彼なりに此度の戦争で死んだ兵士たちの事を考えていたのだ。史実ではA級戦犯として裁かれた彼だが、この世界ではそれなりの気骨ある軍人としての姿を見せていた。

「私の権限を以て命ずる。直ちに戦死した者達の遺族のもとへ君自ら慰問に行きたまえ。私も同行する」

「は、はあ」

彼はこの時のこの指令を後に「いささか無茶な指令だったが、後悔はしていない」と述懐。このエピソードが未来世界の軍人達に知られ、2204年以降の未来世界にて彼を再評価する動きが生じるのだが、それはまた別の話。

―トブルク 航空基地

「私にとっては初めての大規模航空戦になるのよね……」

この時期にはストームウィッチーズの一員になっていたティアナ・ランスターは初めての大規模航空戦に4式戦闘脚「疾風」を纏って参戦することになった。入隊以来、コンビを組み、今では相棒と言える稲垣真美と共に空へ舞い上がる。今回は空戦が主な任務なので

2人とも武装は「ホ5」20ミリ機関砲である。

「大丈夫だって。ティアならうまく出来るよ」

「だいいけどね」

―真美にそう言われるのももう何度目かしら？ だけど今ならやる自信がある。昔とは違う。

そうティアナは自分を勇気づけ、翔ぶ。彼女は確実に機械化航空歩兵としての道を歩み出していた。2人の姿が蒼穹の空へ舞い上がり、消えていく。兵士たちは彼女たちを伝統の、帽振れ、でいつまでも見送っていた……。

行間その49「ワルキューレの騎行 4」

ーティアナ達は大空へ舞い上がった。今回はジェットストライカーユニットの調整が間に合わなかったので在来のレシプロストライカーユニットでの出撃となった。共に編隊を組むは地球連邦軍の海軍航空隊所属のVF-19Aの中隊とMSZ-006A1の中隊である。共同作戦である。ティアナと真美はモントゴメリー將軍の担当地域の制空権確保が今回の任務だ。

「制空権の確保か……一見なんでもないように思えるけど重要なんですよ」

「そうだ。俺たちの援護がなければ陸戦部隊なんぞ捻られる。モビルスーツにしてもそうだ。だからこうして可変機が必要があるのさ。歴史上に制空権を持たない側の軍隊が捻られた例なんて腐るくらいある。あの戦艦大和さえも……な」

Zプラス隊の隊長が空戦の世界に足を踏み入れて間もないティアナに空戦の大事さを教える。ティアナは管理局時代にはなのはやフェイト達という空戦での、絶対的な撃墜王、達の傘のもとで戦うことが多かったため、その辺はあまり考えた事は無かった。だが、自分がこうして空戦を行う立場になってみるとその制空権の確保の重要性が改めて良く分かる。敵機との性能の差は技量で補えるのでその辺は問題ない。皆、それくらいの腕は持っている。

「敵機だ。俺たちがミサイルで奇襲をかける。嬢ちゃん達はその後に攻撃しろ」

「了解です」

Zプラスとバルキリーの、エクスカリバー、隊が先手必勝とばかりに、ミサイルによる奇襲を敢行する。アクティブホーミング方式のミサイルである。打ちっ放し能力を持つのでこういう時には最適である。エクスカリバーやZプラスのウェイブライダーの翼下に敢行されている空対空ミサイルが発射される。2199年9月現在の最新鋭のミサイルなので、命中率はミノフスキー粒子散布下でも60%以上を誇る。発見が遅れた敵編隊の内、5機ほどがチャフなどの手段を使うのに間に合わず、ミサイルの餌食となる。この時の敵機の陣容は、隊長機が「F-104J スターファイター」で、隊長機の護衛機が「F-105 サンダーチーフ」。

その他は「F-100 スーパーセイバー」という1950年代に米軍が送り出した「センチュリーシリーズ」の雄達。アフリカのテイターンズは緒戦での反省か、前線では故障してもこの時代の部品で代用が効き、前線での修理も比較的しやすい第二代ジェット戦闘機を主に主力として用いていた。部品の現地調達や工場での生産効率を考えると妥当な判断である。ティアナ達はこのセンチュリーシリーズに果敢に挑む。

「まずは!!」

ティアナは疾風の主要戦法である一撃離脱戦法はジェット戦闘機には通じないことは知っていたので成道ではない、巴戦、に持ち込む戦法を取った。米国製第二代ジェット戦闘機は巴戦に持ち込まれると、その真価を発揮できる機種は限られている。これは、ミサイル万能論、が最も幅を効かせていた時代に作られ、米軍が制空戦闘機というジャンルを最も軽視した頃の機体なためだ。その中でもスパーセイバーやスターファイターなどは比較的巴戦をこなせるだ

けの機動性は持ち合わせている。サンダーチーフも同様だ。

ティアナは実戦で積んだ経験に則り、まずは一番の雑魚と言える「F-100」に攻撃を仕掛ける。

F-100は比較的多数を保有しているためか、割と戦線では姿を見る。攻略法も既に頭に入っている。レシプロストライカーユニットの独壇場と言える旋回性能で後ろをとり、ホ5の射撃を浴びせる。魔力による強化作用のため、機銃としては第二次大戦世代のホ5でも十分に装甲は撃ち抜ける。一斉射でエンジンを停止に追い込み、撃墜する。ただしホ5はベルト給弾式150発あまり。戦闘機としての疾風なら4門搭載なのでそうやすやすと弾切れは起こさないが、ウィッチの場合は一門しか持たないので弾切れを起こすことも多い。その点ティアナは射撃戦での緒戦能力は損なわれない。管理局時代から引き続きクロスミラージュを保有しているためだ。真美も一時帰国の際に黒江から託された刀があるので機銃を失っても一応は戦える。

「っ！！」

ティアナを狙ったサンダーチーフの機銃である「M61 バルカン」の弾丸が偶然にもホ5に命中し、ティアナは早くも機銃を失う。咄嗟に手を離れた上でシールドを展開したので無傷だ。戦場では何が起こるか分からない。

「あゝ！！まだ全弾撃ってないってのに！！もうあったまきた！！行くわよクロスミラージュ！」

彼女としてはこんなに早くデバイスを使うことになったことに腹を立てる。なるべくもっと温存しておくはずだったからだ。カートリッジも新暦75年当時の管理局正規規格の物はあまり多くは持ち合

わけていなかったもので、この分だといずれは連邦軍から仕入れられる魔力の容量や精度の落ちる試作タイプを全面的に使用せざるを得なくなる。

ティアナは予想外の事態に対応を迫られつつもクロスミラージュを二丁拳銃の状態で使用し、銃撃戦に入る。精度は使い魔の補助も入るので、以前より遙かに正確。ストライカーユニットの制御も行う関係で技量が上がったのだ。これにはセンチリーシリーズのパイロット達も仰天。思わぬ効果を上げた。

「おっ、おっ、おっ!？」

「あれはデバイスだ……と言うことは奴さんは……」

「知っているのか？」

「ああ。アイツはおそらく、管理局、の局員か、それだったか……」
「管理局？ ああ、エウーゴとつるんでいる変な組織の事か。それが何故？」

「俺達のように迷い込んだんだろう。次元断層は不意に人間やその場の空間をも飲み込む。それに巻き込まれてきたと思う」

それは的を得ていた。ティアナ・ランスターは彼らの推測とほぼ同じ経緯で、2199年で戦うなのは達の元いた時代のミッドチルダからはおよそ8年後の世界から2199年に飛ばされている。その後、穴拭智子と親交を結んだ事によりこの世界に来訪している。彼らはティアナの服装は扶桑陸軍軍人のそれであるが、髪の色が1940年代当時の日本人ではまず有り得ない事、この時代の技術では作れない、魔力を動力に用いる兵器（この世界では魔力による動力機関は実現しているが、兵器への応用はまだまだである）を使っている事からそう目星をつけたのだ。

クロスミラージュを使うティアナは本来の、得物、を使えているせ

いか、水を得た魚のように戦果を上げ、スーパーセイバーがまた一機彼女の餌食となる。

（まだスターライトブレイカーは使えない。一機づつ確実に落としていくしか無いわね）

「真美、援護、頼むわよ」

「了解、任せといて」

ティアナは扶桑陸軍軍人となつてからも砲撃魔法の習得は独学で続けていた。なのはの切り札として管理局では有名な、集束砲、の魔法一なのはの物言いを借りるなら「スターライトブレイカー」一の習得に全力をあげ、この時期には一応撃てるようになっていた。

これは本来の歴史の流れの史実より速いペースでティアナが成長しているという証でもあった。

「来たわね……」

地上からの対空砲火も打ち始めたようだ。ティターンズは自走式対空砲である、M163対空自走砲やゲパルト自走対空砲なども有していたようで、それらが複数で綿密な弾幕を貼り出す。航空ウィッチといえども、この弾幕は脅威。ここはZプラスなどに掃討してもらうしかないだろう。ZプラスA1型達はすぐに近接航空支援を行い、統制のとれた急降下爆撃を敢行。確実に対空砲火の数を減らしていく。

—この場にいるウィッチは彼女らのみ。護衛する側としては楽だが、完全に地上兵器を掃討するには他の戦線からの援軍（対地攻撃機など）を待つしかないだろう。

Zプラスのパイロット達はそう思った。

行間その50「野比家ドタバタ記 5」(前書き)

今回は前回と時間軸がずれ、休暇中のストームウィッチーズの隊長の加東圭子やりバウの魔王の西沢義子の日常が中心です。

行間その50「野比家ドタバタ記 5」

一加東圭子は休暇がてらで1990年代を楽しんでいた。半世紀の間に扶桑……否、日本がどのように変わったのかを知ろうと奮闘していた。ただし太平洋戦争後の日本はアメリカを模範として成長してきた。例を上げれば、軍亡き後の軍事組織である「自衛隊」の陸戦分野では陸軍の伝統は表立っては伝えられていないのがその証拠である。圭子は若干寂しい気持ちで図書館所蔵の本を閲覧していた。

「太平洋戦争……国を破滅させた戦争か……」

彼女にとって太平洋戦争で敗北していった帝国陸軍は扶桑陸軍のもう一つの姿。戦後の一般市民にとって帝国陸軍は、太平洋戦争を、引き起こした忌むべき存在。俗に云うところの陸軍悪玉論が戦後の日本人にとっての陸軍の価値観を支配して久しいこの時代では太平洋戦争関連の映画などを見ても、暗愚で頑迷で、腐敗した、帝国陸軍の姿が描かれているのが多い。陸軍軍人である彼女にはショッキングな光景であった。確かに陸軍軍人には横暴な者もいたが、高潔な軍人もいる。それを無視して一方的な視線から描くのは間違っていると圭子と思う。

「、東條大將が総理になって戦陣訓が出されて……、か。戦前と戦後は、まるで別の国みたいね……」

圭子の世界にも東條英機はいた。だが優秀な軍の官僚としてであり、総理大臣ではない。この世界での彼の不幸は、日米開戦時の総理大臣であり、体制の統制のために行った政策がこと如く戦局の悪化で裏目に出してしまったこと、だと本には書かれていた。なにより寂しかったのは戦後の人間は戦前の文化を顧みない面があるところだ。

自分が子供の頃に流行っていた流行歌はこの時代ではほぼ忘れ去られている。かろうじて少女画などが戦前の平和だった頃の残光として記憶されている。信じがたいことだが、下手をすれば大学教授までもが戦前の流行歌を知らないため、「ジャズは戦後に入ってきた」と講義している所があるという。

「で、戦後に文化が発達して今に至るってわけね……。なんだか自分の世界とは根本的に歴史が違う事を感じちゃう……。戦国時代からして違うし……」

彼女の世界はある意味では、明治の元老などが実現させようとした富国強兵政策が安土時代の時点で理想的な形で実現した、世界。織田信長が存命し、開放的な幕府体制を作ったという、歴史家が聞いたら小躍りして喜びそうなシチュエーションが本当に起こった事。この世界では信長は本能寺の変でそのまま死亡、羽柴秀吉が後継者として統一するが、関ヶ原で破れた事で徳川家康が開いた江戸幕府に取って代わられた。圭子の世界では両者とも織田幕府の優秀な一役人として生涯を終えたが、異なる運命をたどっていれば双方ともそれなりの施政者として腕を奮ったのがよくわかる。

一結果的に家康の江戸幕府はこの時代の通説、子孫達の功罪、と言える「鎖国」（23世紀頃には研究が進み、ある時期の施策が改革なされずに慣例化してしまっただけという新設が主流だが、20世紀末頃にはこれが通説であった）が日本の発展を遅らせたと書かれているのは時代を感じる。やっぱり時代によって通説は変わっていくのね。

「あれ？少佐じゃないですか」

「その声はスネ夫君？君も来てたの」

圭子はどこかで聞いた声に振り返ってみる。すると骨川スネ夫がいた。

「どうしたんですか今日は？」

「フェイトの護衛って事で一緒にのび太くんの家に厄介になつてるの。君はどうしてここに？」

「夏休みの自由研究に使う本を探しに来たんですよ。これから受付で手続きをするところで……そうだ。ちょうどちに新しいビデオがあるんで一緒に見ませんか？」

圭子はスネ夫と一緒に図書館から借りる本の手続きを済ますと骨川家に立寄り、スネ夫と一緒にビデオを視聴した。それは1958年制作の仏映画「死刑台のエレベーター」であった。この映画はフランスにおけるサスペンス映画の金字塔的作品。出演女優のクールな美しさなどから映画史に名を残した作品。圭子はフランス映画に、戦後に映画の王様として君臨する、ハリウッド、とはまた違った魅力を感じ、ただただ、見とれていた。

「これがフランス映画……ハリウッドもいいけど、別の国の映画もいいわね」

「でしょう？色々あるんで見たかったら遠慮なくどうぞ。英国映画にイタリア映画、フランス映画、ロシア映画に邦画……もちろんハリウッド映画も取り揃えてあります。ただし一部のやつは根気ないと見れませんけど」

「どうして」

「作品によっては時間が馬鹿みたいに長いんです。ドクトル・ジバゴは197分もかかりますから」

「うへえ……。あっ、そうだ。今度暴れん坊將軍の録画ビデオ貸してくれない？昔の同僚に頼まれてて……」

大作のとんでもない長さに啞然としながらも圭子はスネ夫との雑談を楽しんでいた。

一西沢義子の方はのび太と一緒に買い物を楽しんだ後、ジャイアンと合流し、なぜか野球の試合をやることになってしまった。彼女は乗り気。野球のルールは一応知っていたらしく、バッターボックスに意気揚々と立つ。相手ピッチャーはセーラ服姿の西沢に見とれつつも仕事はこなす。

「へへっ、軽〜いぜ！！ほらよつと！！」

相手ピッチャーの投げる玉は西沢にとっては軽〜いジャブみたいなもの。適当に片足を上げて打つ。西沢がこの時取った打法は偶然にも往年の巨人軍の黄金期を支えた打法「一本足打法」。当然ながら大ホームランとなり、場外までかっ飛ばす。

この時、ジャイアン率いるジャイアンズと草試合をしていたのはチラノルズというチーム。ジャイアンズとよく試合をしているチームで、この界隈の少年野球チームリーグでのライバル。ジャイアンズは西沢義子という思わぬ強力な助っ人を得た事で初回から快調。二回の裏の時点で3点をとっている。

「おおくさすがリバウの魔王だぜ！！」

「野球にはあまり関係ないけどね」

と、のび太はジャイアンにツツコミを入れつつ西沢にいいところを見せようと、バッターボックスに立つ。ジャイアンズの他の連中はのび太をあまりアテにしていなくて、中にはのび太の打率を知ってるせいもあって、頭を抱えて絶望のあまり悲鳴を叫ぶ者もいたとか。

ベンチのこの自分を戦力として見ていない状況にさすがに憤慨したのび太はベンチへ帰還した西沢のアイコンタクトにも促される形で勇気を出し、思い切ってバットを振る。結果は……。

第89話「ファイナル・カウントダウン」(前書き)

ハワイ攻略戦の詰め場面ですが、日本人には因縁深い地での戦いです。

第89話「ファイナル・カウントダウン」

—ハワイ攻略戦も峠を超えたかに思えた2199年9月。戦いはまだ終わってはいなかった。

兵団の各部隊は強固に抵抗を続け、連邦軍による掃討戦は長期的サイクルで行われていた。

—ある日のこと。日本から飛来した宇宙戦艦ヤマト所属のコスモタイガー隊は戦線に馳せ参ずると直ちに行動を開始。同隊長で、宇宙戦艦ヤマト艦長代理でもある古代進は直ちに現地の航空隊を指揮下に置き、兵団の脱出手段を断つべく、船舶ドック区間へ集中的に爆撃を敢行した。

「こちら宇宙戦艦ヤマト艦長代理、古代進。これより航空隊の指揮は小官が指揮を取る。全機続け！！」

古代の新コスモタイガーに続き、航空隊は編隊を形作る。そして目標区間に達すると急降下。兵団の必死の対空砲火を物ともせず、目標の艦艇へ爆撃を敢行した。大昔の急降下爆撃機や艦上攻撃機よろしく、低高度で爆弾やらミサイル、あるいは魚雷、機銃掃射が加えられる。艦攻タイプを装備したウィッチたちは主に威力が高い扶桑の九一式魚雷を装備し、一斉に放つ。酸素魚雷の破壊力は兵団が摂取し、運用するこの時代の輸送艦艇にも効果を上げ、浅い海の底に着底させる。ちょうど太平洋戦争開戦劈頭の真珠湾奇襲を再現したような光景が繰り広げられる。ウィッチたちにとっては実戦での初の魚雷攻撃。それを成功させたのは元「赤城」航空隊所属の「村田」中佐の指揮手腕に他ならない。彼女は史実で言えば真珠湾奇襲での雷撃隊隊長の村田重治中佐に相当するウィッチ。彼女は上層部からの指示で極秘に浅沈度魚雷の開発と戦術研究に関わっていた。それ

が実った形であるが、それは扶桑皇国軍上層部が仮想敵国の概念を忘れていないことの現れでもあった。

そしてそれが奇しくも真珠湾で使われ、真珠湾奇襲と同じような戦果を以て示したのは世界を超えた因果を暗に示していた。その光景に因果を最も感じていたのは恐らくは加東圭子や、共にこの攻撃に艦攻隊の護衛として参加していた高町なのはだろう。

「これってまるっきり真珠湾奇襲と同じですよね、少佐……」

「……ええ。同じような場面でしかも戦果も同じ……何かの運命としか思えないわね」

「運命……確かにそうかも知れませんね。日本人だからとかそういうわけじゃないんですけど……」

「たしかにここは帝国海軍の栄光と悲劇の始まりの地であり、次代の勝者の米軍の旭日の地……歴史的に因縁深いのよねここは」

この日は加東圭子の僚機として戦闘に参加していたなのは子供ながらも、真珠湾奇襲をそっくりそのまま再現したような光景に因縁じみた何かを感じたのか、圭子に言う。圭子も同じ、日本人、である関係上、同様の気持ちであるようである。大した抵抗も出来ずに着底していく輸送艦艇。そして練度の高いコスモタイガーにハエのように落とされていく兵団兵士達。艦攻隊は意気往々と引き上げようとするも、そうは問屋がよろさない、とばかりにドックに備え付けられた自立型の地对空ミサイルの砲台が起動する。しかもそれは兵団が本国から取り寄せた最新鋭装備。ミサイルは凄まじい機動力で退避が遅れていた艦攻ウィッチを一人、また一人と餌食とする。しかもそれはコスモタイガーも例外でなく、撃墜機が出始める。

「各機、退避！撃墜可能な戦闘ウィッチは艦攻ウィッチを守することに専念しろ！！」

すぐに古代から指示が飛ぶ。加東圭子はこれにすぐに応じた。自身の固有魔法と射撃の名手として名を馳せた往年の腕をなのはの前で始めて披露した。

「久しぶりにやってみるか……！」

「どうするんですか!？」

「あれを落とす！」

「え!？」

「見てなさい。これでも一応扶桑海のトップエースなんだから」

ミサイルを機銃で迎撃するという芸当を加東圭子はやってのける。なのははルーデルに続き、エースと呼ばれた者の働きを目の辺りにした。超視力と射撃の名手と言われた圭子の腕がなせる技。最低限の動作で最大の働きをする圭子になのはは感銘を受けた。しかしミサイル砲台は確実に圭子を照準に収める。なのはは圭子を守れるのであろうか

第90話「ファイナル・カウントダウン 2」

一ハワイ沖海戦は最後の詰め段階へ入っていた。兵団の脱出手段を奪うために輸送船団を着底させる行動に出た地球連邦軍であったが、兵団の設置したミサイル砲台の前に思わぬ損害を出し、航空隊を指揮する古代進は戦闘ウィッチに艦爆・艦攻型ストライカーユニットを纏うウィッチたちの護衛を命じた。そこで加東圭子は取り戻した往年の射撃の名手としての自分を信じ、援護に打って出た。

「……次っ!!」

機銃を手にミサイルを迎撃していく加東圭子。その技はバルキリー乗り達にも劣らぬ程の技量を以て冴えを見せる。なのはは近接航空支援が主体のルーデルとは違った形のエースをまたまた垣間見た事になるが、圭子から学ぶことはいくらでもある。穴拭智子はどちらかというと戦術的立場で力を発揮する、戦闘隊長、的性格が強い戦士だが、加東圭子は戦略的判断に強いタイプ。圭子は的確に状況を判断し、危険度の高いミサイルから迎撃していく。その背中を守る形でなのははレイジングハートを以て圭子の護衛を行っていく。彼女は史実では教導隊入隊後は自身の腕に比肩しうる人材はいても、自分を完全に超える、人間と出会っていなかったが故に個人の感情の暴走を止める術を教わることが無く、術を持たなかった。だが、智子や圭子、ルーデルはなのはを凌駕する空戦術を持ち、なおかつ隊長として部隊を纏め上げた経験を持つ逸材。彼女らはこの戦いで、幼いなのはを守りつつも、武人、としての立ち振る舞いを教え、他部隊の兵士たちのからかいを諷め、時には厳しくなのはを叱責するなど、3人のウィッチはなのはにとって、保護者、の役割を果たした。彼女にとってその日々は、自信、仲間への信頼、に繋がっていた。―友を、仲間を信じること。それが真の強さ。

「少佐、背中は任せてください！」

「頼む！」

二人は巧みな連携でミサイルを落としていく。コスモタイガーやウィッチたちを退避させるために奮闘するその姿はまさに北欧神話の戦乙女、そのものであった。

「よし、彼女たちの行いを無駄にするな！！続け！！」

古代も護衛のコスモタイガーと共に率先して愛機をミサイルの弾雨に突っ込ませる。ここで逃げたら男じゃないとばかりに呐喊し、見事な機動でミサイル砲台に照準を絞らせない。そして絶妙なタイミングで攻撃していく。彼もまた、勇士、であった。――高町なのは、加東圭子、古代進。三者はそれぞれの最善を尽くして戦っていた。

―それはスバル・ナカジマと御坂美琴も同様であった。彼女らも戦いに臨み、想いを貫くために拳や剣を振るっていた。年齢はスバルの方が上だが、戦いの場においては美琴のほうが実戦の経験が

ある。そのため美琴が指示を飛ばしていた。そして彼女らを守っているのは彼女らも知らなかった存在。人知れず悪と戦ってきた1人の男達、の一翼を担う男たち。

「Xさん今です!!」

「分かっている!!」

スバルが一撃を入れてひるませた相手にXライダーが必殺技の態勢に入る。空中高く飛び上がり、空中で一回転してから飛び蹴りを食らわす。Xライダーは威力を高めるために専用万能武器「ライドル」をホイップ状態で取り出し、取手部分に蹴りを入れながら相手に蹴り込む。

「Xキイイイ——ック!!」

基本的に仮面ライダーは体術で敵を倒す。絶対的な必殺武器を持つ特殊なケースであるRXを除いては。このXライダーもその例にもれず、最後は拳でケリをつける。それを示す一例だ。この場に参戦している仮面ライダーはV3とXであったが、ヒーロー然とした外見に似合う働きを見せていた。

—この人達ってサイボーグなんだよね? だったら体の中の機械を定期的にメンテナンスする必要があるはず。なのにこの人達にはそれがない……。

スバルがそう思うのも無理は無かった。戦闘機人にしても、学園都市が21世紀頃に実験していたサイボーグにしてもそうだが、定期的な大規模なメンテナンスを行う必要がある。内部の精密機械の寿命があるからである。その問題はサイボーグの課題であり、ミッドチルダでは実用化が困難であると諦められ、元から機械を受け入れ

られるように調整された肉体を持つ戦闘機人が作られた。同様の問題を学園都市も抱え、実験を繰り返していた。しかしその問題をバダン帝国（旧・ナチス・ドイツ）はWW?の終戦の時点で超テクノロジを駆使して解決していた。そして地球連邦に先駆けること200年先に実用化したナノマシン技術を組み合わせる事でそれは究極にまで高まった。仮面ライダー達はその集大成的位置づけ。よほどの事態でもなければ外部からの修理はしなくていい。理想的なサイボーグであった。

一なんかあたしいところないなあ……美琴にはおいしい場面持つて行かれるし、あの人は目立ちまくってるし。なのはさんはなのはさんで忙しいし。……ここらで挽回しないと。

スバルは出番がもっぱら無いことにげんりしていた。仮面ライダーⅤ3や御坂美琴など、強烈にアクの強い面々の前に霞んでしまいがちである自分に喝を入れる。果たして彼女の出番的な意味での名誉挽回はあるのか？彼女は今や1944年のアフリカで戦っている親友へ一言言いたい気持ちであった。

一ティア、あたし子供のころのなのはさんと一緒に頑張ってるよ。

……だけど出番がほしいよぉー！！と。

第91話「夢色チェイサー! 4」

ーハワイで連邦が血みどろの戦いを繰り広げている最中、アッツ島周辺では。

「必殺! ドラグナー三枚おろし!!」

ドラグナー遊撃隊とデステイニーは交戦を続けていたが、技量の差でドラグナーに優位であった。双方とも実戦を経験してきたことには違いないが、場数が違った。ドラグナー1型カスタムのパイロットであるケーン・ワカバは最初こそ素人同然であったが、最終的には連邦のメタルアーマー乗りとしては最強と言えるほどのエースパイロットとして頭角を現した。元々偶発的に乗り込んでしまったので正規の訓練課程は踏んでおらず、パイロットとして常道の手段は取らない。それが正規の軍人として訓練を積んできたシン・アスカを翻弄できる要因であった。

「うわあぁっ!?!」

デステイニーのボディにレーザーソードによる突き刺しと多少の切れ込みが入る。フェイズシフトによる守りも無効化された今、デステイニーの防御手段は腕のビーム・シールドのみ。だが、ボディに直接攻撃を加えられては使えない。動作の速さもドラグナーの方が上であったために防御が間に合わなかったのだ。突き刺されたソードが引き抜かれると同時にデステイニーは小爆発を起こし、墜落する。突き刺された場所からのスパークが動力伝達機構と、操縦システムの配線を傷つけたらしく、不意に頭部メインカメラのデュアルアイから光が消えたと思えば、バランスを崩しての墜落であった。様子から察するに操縦不能になったようである。

「ライト、奴さんは落とした。一応近くの回収船に連絡していくれ」

「わかった。もう一機の方は対処中だそうだが、じきに片付くだろう」

「了解。母艦の方はどうする？」

「俺たち単独じゃ危険だ。今日はこの辺で引き上げてハワイに行こう」

「了解」

ケーンはD-3のライトと合議し、戦闘を打ち切って引き上げる。この日の戦闘での彼の戦果は、ガンダムタイプ、一機撃墜。ガンダムタイプの連邦での価値を考えると大金星であった。彼はアッツ島での戦功と合わせて後に勲章を貰い受けることになる。

一そして。もう一機のインパルスの方かというと。

「ガンダムZZ 大気圏内仕様」(原型機の設計を流用し、大型化・単機城塞攻略用に作られた特殊仕様。その全長は30mを超える)のミサイル掃射には耐え切ったもの、ZZ系モビルスーツ特有の武装である、頭部ハイメガキャノンの標的になってしまい……。

「ロールアウト間もないから試し打ち!!! 喰らえい!!!」

この機体の頭部ハイメガキャノンは大気圏内でのビームの減衰作用も考えてもインパルスの下半身を、消滅、させるだけの威力はゆう

に發揮。インパルスのパイロットの「ルナマリア・ホーク」はとっさに残った上半身も切り離し、この世界での常識で言えば「コアファイター」というべき脱出装置を兼ねた飛行機で逃走を図る。敵前逃亡ではなく、態勢を立て直すため、に、だ。

「なんなのよあいつら……バケモノぞろいじゃない……！」

…と、悪態をついてみるが、ここまで絶望的な性能差は中々体験したことはない。士官学校時代に、前大戦、の生き残り達の中に、当時の最新鋭機「ゲイツ」に乗っていたのに旧世代の訓練用に乗っていると錯覚させられたほどの絶対的性能差を持つV字の『光の翼』を持ったガンダムタイプと対峙して……と授業の講演で話す実戦部隊の、赤服、や、白服、（彼女の所属組織のザフトは士官学校卒業時の成績で、着る制服が赤と緑に分かれる。さらに隊長格は白である。コレは後の連邦軍の推測では、階級が存在しないために身分をはっきりさせるため、とされている）の人間達がいたが、その話を当時は敵に臆した兵士の、与太話、と聞き流していたが、この世界の兵器の性能を目の当たりにしてみると、その話もあながち嘘ではないと思えてしまう。

「……ええっ！！今度は戦闘機！？嘘でしょ……、コアスプレnder、は一応飛行機の形をして、空戦は一応できる程度なのに……！」

今度は見るからに流麗なフォルムを持つ重戦闘機コスモタイガーに追われてしまう。しかも火線は信じがたいが、パルスレーザー、と思われるレーザー機関砲が8門と実体弾式が10門。思わず大昔の「ジャグ」、「ヤーボ」と畏れられた、P-47、「サンダーボルト」に狙われた不幸なドイツや日本の戦闘機を連想してしまう。

「なんかあたし悪いことやったあゝ！？なんでこうなるのゝ……！」

敵機の弾の雨に涙目となりながら必死に逃げる。大昔の戦闘機乗りたちが味わった恐怖はルナマリアから正常な判断力を奪っていく。出撃時からの無線の不調（ミノフスキー粒子の影響）がそれに拍車をかける。コスモタイガーのパイロットは所属部隊の思惑のもとに彼女の、コアスプレnder、へ浴びせる火線を利用して、彼の母艦の待機する空域へ巧みに誘導していく。それはアッツ島攻略の指揮官で、連邦の誇る、猛将、「ジョン・コーウェン」中将の策略でもあった。

「こちら、ブルーイーグル、1。目標は順調にそちらへ向かっている。引き続き電子戦による妨害を頼む」
「了解」

この時代における電子戦とはミノフスキー粒子やコンピュータなどを活用してのレーダー、無線の妨害などを指す。「アイザック」など、依然として電子戦専門のモビルスーツも作られているし、D-3もその能力を備えている。そしてそれを超える能力を備えるのは情報収集艦。アッツ島攻略部隊旗艦の戦闘空母「イラストリアス」に随伴している「ブルー・リッジ」（ヤマトのように歴史的に有名な艦の名を継ぐ艦船は連邦軍では多数作られている）は電子戦を行ない、コーウェン中将の作戦を遂行していた。それは順調に進んでいた……。

第92話「パリは燃えているか 序」(前書き)

ハワイ編が一区切りつきそうなので、今回は本編の次章の序章的位置付けです。今は亡き「ガイア・ギア」の設定が入ります。要注意を

第92話「パリは燃えているか（序）」

—2199年での戦いも最終局面を迎えていた。2199年12月には鉄人兵団打倒の布石となる行動の一環でヨーロッパ戦線・旧フランス地域に楔を打ち込むべく戦闘が開始された。

ハワイ攻略後は予算・損害の関係で大規模作戦を行えない連邦軍であるが、小々中規模な行動なら数カ月で可能になり、ヨーロッパ戦線の打開を意図し、行動に移されたわけである。

旧フランス、ヌーボ・パリ、近くパリ湖付近（パリは一年戦争の惨禍で湖化、水没した。その後に新たに旧パリの市街を模した街を周りに再建している途上）

市街地では、RGM-89R「ジェガンR型」がライフルを連射し、兵団の、ザンダクロス、を撃ち倒す。エネルギーパックを交換し、銃撃戦を継続する。隣では61式戦車の150ミリ滑腔砲が火を噴き、トーチカを破壊する。戦闘が行われる、かつてフランスの誇った、花の都、の骸が眠るこの地に三人のウィッチが舞い降りた。未来世界に滞在中の扶桑陸軍「新三羽鳥」の面々の穴拭智子、黒江綾香、加東圭子である。

「ここがフランスのパリ……」

「正確に言えば、昔、パリだったところだ。あの湖がパリの市街があった場所だ」

「ガリアのウィッチが見たら泡吹いて倒れそうな光景な事……特に

あの、青の一番　には見させられないわね」

「……だな。彼女にはきついだろう」

圭子はこのフランス地域の惨状に元の世界での501統合戦闘航空団のメンバーで、ガリア（フランス）への想いが強いペリーヌ・クロステルマンには絶対に見せられないと言った。それはその通りだった。ペリーヌは財産を復興の為に擲つほどの想いを持っている。それにこの世界でのフランス、特にパリの惨状を見たら一瞬で発狂しかねないと目星をつけた。

「今回は私達が先行して派遣されたんでしょう？、この世界、に行くことになった武子はどう思ってるのかしら」

「フジか？アイツヤキモチ焼いてたぜ」

「え、武子が？誰に？」

「私だよ、私。近頃はさ、穴拭、お前の相棒つか、僚機のポジションに落ち着いた感があるだろ？それを電話で話したらさ……」

黒江は2人に道中、電話で話した事を話す。内容は「黒江が加藤武子にヤキモチ焼かれた」というもの。確かに親友の智子と所属が違い、それぞれ別れてから久しい武子にとって黒江が僚機に落ち着いた事は羨ましい以外の何者でも無い。

一近頃はコンビとして定着した2人の関係に羨ましく思うのも当然ね。あの子の気持ち、分からないわけでもないなあ。

加東圭子は以前（扶桑海事変当時）はそこまで親しくなかった黒江と智子が互いに共通点を持ったことで意気投合し、互いに、親友、として接する様になった事に微笑ましく見ていた。圭子はそんな二人の、お姉さん、的ポジションに落ち着き、二人をさらにまとめて

いる。3人はヌーボ・パリの前線司令部に着任の挨拶に赴いた。

「加東圭子少佐、穴拭智子中尉、黒江綾香大尉。以上の3名、ただ今着任いたしました」

「ご苦労。状況は説明するまでもないだろう……おっ、来たな」

「へ？」

3人がキョトンとする間もなく、凄まじい衝撃が司令部を襲う。兵団の砲撃が司令部近くに着弾したのである。

「見てのとおり、敵は140ミリ迫撃砲で定時砲撃を行っている。敵はフランスからオランダまでをベルギーを守る最後の砦としている。……というわけでここは最前線。砲弾が飛び交っている訳だ」

「は、はぁ」

「君たちの力、期待しているぞ」

「はいっ」

3人は挨拶を済ませると、戦場の様子を見て回る。迫撃砲で撃破され、攔坐した「ヌーベルジム？」の残骸や専用運搬車両で運ばれる損傷したモビルスーツ。負傷した兵士を運ぶ担架……、地面に点在する塹壕やトーチカはハワイの時とはまた別の戦場の雰囲気を感じさせている。

「すげえなこれは……」

「……で、どうするの？」

「一応偵察の名目だからな。とりあえず凱旋門へ行こう」

「凱旋門？」

「ああ。レプリカだけど再建されてるからな」

ジープで3人は戦場を通り抜ける。地図によれば再建された「ヌー

ボ・パリ」は意図的にかつての旧パリ市街の周りに位置するように作られている。市街にはエッフェル塔や凱旋門などの嘗てのフランス国家のランドマークのレプリカが、水没したオリジナルを模して再建されたものが立っている。政府はパリ復興のシンボルとして宣伝するつもりであったようだが、今次大戦の開戦によって頓挫。完成の宣伝用の垂れ幕がボロボロになってもまだ垂れ下がるその様は戦争の無常さを嫌でも感じさせる。3人は再建凱旋門を通りぬける。市街の境では連邦欧州方面陸軍の第3機甲師団が戦車戦を行っていた……。

「あそこの部隊に事情をきこう。なにかわかるかも知れない」
「賛成」

黒江はジープを走らせ、同師団に合流。ここから3人のパリでの戦いが始まる……。この日、レビル將軍は欧州方面軍へ一つの電報を打った。パリは燃えているか？、と。それは欧州方面の戦いの激化を見込んでの一報であった。レビル將軍によれば「3人を派遣したのもそれが理由であった」という。後にこの時の連邦軍司令部の幕僚の一人であった「山南」提督は日誌にこの日の事を、パリは燃えているか、と書き残していたという。

第93話「忘れ去られた、友情伝説」(前書き)

記念すべき200話目。今回はハワイ編最終部の一話目です。今は亡き(?)ザ・ドラえもんズが登場します。20代ホイホイであります。

第93話「忘れ去られた、友情伝説、」

ーハワイは2199年10月始めに陥落した。基地司令「ミシチェンコ」は自ら防衛戦を指揮し、その戦いで野比のび太によって討ち取られた。その前日、ドラえもんはある道具の存在を思い出す。

ー2199年 9月末

「こいつがこの世界でどの程度効果を発揮するのか……」

ドラえもんはある道具を出していた。一見すると1990年代末には既に時代遅れとなったテレフォンカードにも見える一枚のカード。絵柄はドラえもんと、彼に似たようなロボットたちが描かれている。

「ドラえもん、それって……!」

「そう。親友テレカだよ。最もこの時代にみんながいるかもわからないけどね」

「ずいぶん懐かしいね。僕もその道具の存在自体忘れてたよ」

「ひどいなそれは」

ドラえもんが取り出したこのテレフォンカードのような道具は「親友テレカ」。超古代から伝わる、伝説のひみつ道具。その力は凄まじく、色々と謎も多い。それを使えるのはドラえもんとその親友たちのみである。のび太もしばらく見ていないので、その存在自体を忘れていたのである。だからそう言ったのだ。

「前に美琴さんにも一回見せたんだけど、そう言われたよ。、あた

しが小さい頃にアニメの声が変わってからはアニメの中での存在が無かった事になってね。いつの間にか忘れ去られてたなあ……、って」

「まあね。けどぼくは忘れていない。友情ってのはそう簡単には消えない。きみがジャイアン達と大人になっても友達でいるようにね」
「まあね。それは奇跡を起こせるんだろう？ だったらそれでみんなを呼べるんじゃない？」

「連絡は取れるはずだから……やってみよう」

ドラえもんは久しぶりに自身の最大の道具「親友テレカ」を使用した。すると……

『ドラえもんか！？ 何やってんだよ teme ー！！』

「うわぁー！！ その声はキッド！？」

『俺はな。これから teme を探そうとしてたところだぞ。どこで油売ってやがる！！ へちゃむくれを心配させんなー！！』

「いやあこれには止むに止まれぬ事情が……」

ドラえもんが連絡をとれたのは親友達の中では、アメリカ人、的性格の持ち主で、彼と最も縁が深いドラ・ザ・キッドであった。（ちなみに尊敬する人はチャック・イーガー氏とのこと）彼の国籍はもちろん米国。普段はタイムパトロールで働いている。性格はドラえもんの妹のドラミから「ガサツ」と評されている。状況から察するにドラミから何か頼まれているようだ。

『事情はあとで聞いてやる。どこの時代にいやがるんだ』
「2199年」

しばし沈黙した後、キッドはこう言った。

『はあ？もういっぺん言ってみろ』

「だから2199年だってば」

『……74年後じゃねえか！？なんでんな未来に来てるんだよ！！』

「しょうがない事情があるって言ったろ。とにかくこっちに来てよ。

今大変なんだから」

『どういう事だ？』

「僕がいる所、戦争の最前線なのよ」

『お前、冗談もたいがい……』

「冗談じゃないって。とにかく事情は後で話すから来てくれ」

「分かった。他のみんなにも連絡とる」

「頼む」

「どう？」

のび太からの問いにドラえもんは答えた。ドラ・ザ・キッドに連絡は取れたと。するとキッドはドラミと共にいたようだドラえもんはいう。のび太は状況を理解したようで、にやついた。

「……鈍いなあドラえもん」

「な、何が」

「ドラミちゃんとキッドは同じ所にいた。つまりドラミちゃんは君がどこに行ったのか分かって、心配でどうしようもない。そこでキッドに連絡とった。キッドはドラミちゃんが気になってるからドラミちゃんの力になろうとしてる。こうさ」

「うぬ！！キッドの奴、いつの間に僕の妹を誘惑して……」

「……ふう。本当に鈍いんだから君は。それに2人とも両思いだからいいじゃない」

「なぬう！！」

のび太は自身はともかくも、他人の恋愛には鋭い。それでドラミの

恋愛に気がついてたのだろう。憤慨するドラえもんを鋭く諭すと戦闘準備を進める。今回の得物はこれまた彼の好みの銃、それも西部劇で見る、コルト・シングル・アクション・アーミー（ピースメーカー）。バントラインスペシャルとも言う）である。こうしてのび太はハワイでの最後の戦いに赴く。弾を装填し、西部劇でよくみるホルダー付きのベルトに銃を入れる。

「さて……基地司令がそろそろ出るはずだ。決着をつけてやる」

そういい、のび太は戦線の最前線に身を投じる。ドラえもんも妹の親友とのロマンスに憤慨しつつも、のび太に続く。そしてドラえもんは、忘れ去られた友情伝説、を再びこの世に起こすために親友テレカを手につく。かつての友情伝説は再現できるのか。それは全て彼の双肩にかかっている。彼はナチスが用いていた拳銃であるルガーP08を自らのサイドアームとし、戦いの場に赴いた。それはこの戦いに一定の区切りをつける戦闘であった。

ドラえもんとその親友達の再会は近い。

第94話「忘れ去られた、友情伝説、2」(前書き)

前回に続き、ザ・ドラえもんズ登場編。今回はドラ・ザ・キッドです。

第94話「忘れ去られた、友情伝説、2」

一ドラえもん達の鉄人兵団との因縁にも一区切りがつこうとしていた。ハワイでの戦いも終焉を迎えようとしている。そんな日の事。

「……伏せて!!」

のび太はこの日のサイドアームである「コルト・シングル・アクション・アーミー」を腰だめで撃ち、敵を倒す。不意打ちをしようとした兵士は頭を頭部を撃ち抜かれて、死亡、した。のび太が救ったのは同日に戦線に復帰したばかりであった穴拭智子であった。

「ありがとう。助かったわ」

「いえいえ。やっと復帰されたんですね」

「恥ずかしい話だけどね。魔法力を限界まで使っちゃって……圭子の奴には礼を言っというたわ」

智子はこの日までおよそ一週間近く療養していた。この日が奇しくも戦線復帰後最初の戦いであった。なので多少勘が鈍ったようだと言う。

「少佐とは知り合いなんですか？」

「昔の同僚よ。若い頃に同じ釜の飯を食べた仲。圭子の方が昇進早かったけどね」

扶桑海事変当時、智子と圭子は同じ飛行第一戦隊所属で、同階級であり、互いに切磋琢磨する仲であった。この時から扶桑陸軍の、三羽鳥、のメンバーに数えられていた両者は戦闘スタイルの差で圭子のほうが怪異ネウロイの撃墜数が多く、昇進も圭子のほうが早かった。だが

戦勝式典で事故で墜落してしまう失態（奇しくも、彼女に相当する史実の加藤正治が関東軍特種演習で航空事故死したのとは一致する。彼女はこの事実に関わり顔面蒼白となったという）を演じてしまったせいで上層部からの、受け、が悪く、軍の宣伝映画（後世の観点から見れば対ネウロイの戦意高揚プロパガンダ映画）たる「扶桑海の閃光」でも戦闘スタイルの見栄えの問題で圭子は映画の主演（トップエースなのにも関わらず）を逃してしまった。（それで中世の姫武者的な容貌と戦闘スタイルを持つ智子が映画の主演に選ばれたのは扶桑陸軍内部では周知の事実）それで若干ながら悔しい思いをしたと圭子は語っている。その後智子はスオムスで戦功を重ね、1943年に第507統合戦闘航空団の隊長を退き、本国勤務となって事実上の引退（その際のスオムスでの便宜上の階級は大尉であったが、本国では中尉）。圭子はストームウィッチーズの指揮官として手腕を奮っていた。今回の騒乱のドタバタは二人に10代中盤程度の肉体と最盛期の力を再度もたらしたわけだが、本来なら決してあり得ない事に最も歓喜したのは実は加東圭子であったという。

「この姿になって一番喜んだのは多分圭子よ。いつもマルセイユ大尉と一緒に戦いたかったって言ってたから」

「そういえば少佐の本当の年って……？」

「20代の半ば。私や黒江よりも年上だったから。手紙にはいつも、もうちょっと若ければマルセイユやみんなと一緒に、飛べた、んだけど、……って描いてあったわ」

智子のはのび太に結果的に、若い姿、に戻れて一番喜んだのはたぶん、加東圭子であると言う。圭子は、早く、生まれすぎた、がためにマルセイユなどの面々と一緒に現役として空を飛ぶ事は叶わないと思

っていた。25歳を迎え、既に飛ぶのが精一杯なほどに魔力が減退していたからだ。そんな経緯で彼女は戦線を地上勤務者として支えてきた。しかし今回の争乱は圭子にある意味福音をもたらした。連邦軍の、若返り、作戦で最盛期の肉体と魔力が再び与えられたからだ。あまり若返りすぎても困る（黒江のように13歳まで若返ると服などで色々と苦労がある）が、運良く14歳頃の肉体年齢であり、満足いく結果となった。智子は「自分が飛べなかったこの一週間あまりは圭子がなのはの長機として面倒を見ているが、圭子ならまた違った意味で勉強になるだろう」と言う。

「圭子と一緒に飛ぶのはあの子にとってプラスになると思うわ。援護とか上手いから圭子は」

「信頼してるんですね」

「ま、まあね。……状況は？」

「敵の司令官がいよいよ出てきました。僕はそれを討ちに行くところですよ。一緒に行きますか？」

「ええ。ちょうどいいわ。リハビリにもなるし」

こうしてのび太は智子と共に基地司令を討ちに行く事になった。のび太と即的でコンビを結成した智子であるが、前途は多難であった。それは……

空に穴が開き、馬とそれに乗った何かが現る。智子は思わず身構えるが、のび太はそれを制する。

「な、何！？敵！？」

「いや待って！！あれは……！！」

のび太はすぐにその正体を悟った。現れたのはドラえもんの親友のドラ・ザ・キッドであった。彼は高所恐怖症であるが、一瞬なら我

慢できるので登場の時だけはかっこよく現れるというのがある意味のお約束。（ただし本人曰く、仕事柄我慢しないといけない局面も多いので低空から現れるようにしているとか）

「ドラ・ザ・キッド、ただ今到着！！久しぶりだなのび太！！」

「久しぶり。高所恐怖症は治ったのかい」

「ば、バーロー、それを言うなよ……今だって腰抜かすほど怖かったんだよ」

「ハハハ、変わってないね」

「うん？なんだよのび太、お前の隣にいるヤマトナデシコな美人さんは？デートかよ？」

「え、ええ！？」

「ち、違うって。今状況説明するから」

この時の智子の服装はいつもの巫女装束と小具足姿。キッドは日本的美人を見たことないのでそう言ったのだ。智子は図らずしも顔を赤らめる。美人さん、と言われた事は初めてらしく、嬉しいのと恥ずかしさが入り交じっている心境だ。のび太は慌てて状況を説明する。

「じつはカクカクシカジカで……」

実に簡単かつ省いた説明だが、キッドはおおよそを理解した。この時代は戦争の方が平和な時期より長い、戦乱に明け暮れる、時代である事。鉄人兵団の事、そして智子の事を。

「……だいたい分かった。要するにそういう事だろう？」

「そういうこと」

……と、どこぞの仮面ライダーのような台詞を吐くキッド。左腕に

はドラ焼きを持っている。すると智子は我が目を疑った。小豆の味と甘みが売りなはずのドラ焼きに事もあるうに、アメリカらしい味のケチャップとマスタードをかけ始めたのだ。これに智子は思わず物申す。

「ち、ちよつと!! 何やってんのよアンタ!!」

「見りゃわかるだろう。ケチャップとマスタードかけてるんだよ」

「んなもん小豆に合わないわよ!! ゲテモノよゲテモノ!! どうしたらそういう結論になるのよ!!」

「るせえ!! これが美味いんだよ!!」

「正気の沙汰じゃないわね!! ドラ焼きを冒瀆してる!!」

「んだとお!!」

と、モメ合う智子とキッド。キッドにはラブコメ属性があるのだからかとのび太は2人のやり取りを見てそう思った。そんな彼らに確実に悪の魔の手が迫りつつあった……。彼らはまだそれに気づいていなかった。

第95話「ジオンの残光」(前書き)

ジオン残党軍にスポットライトがあたります。

第95話「ジオンの残光」

一此度のハワイ沖海戦は主に人類対異星人の様相を呈する戦闘ではあった。だが、その裏では人類同士の血塗られた戦いがあった。それは漁夫の利の要領でテロを行う旧・ジオン公国軍残党であった。

「あれはジオンの……こんな時にっ!!」

加東圭子は焦った。兵団基地のドックへの攻撃途上なのに関わらずジオン軍地上部隊の残党はお構いなしに戦闘を仕掛けてくる。加東圭子は決して彼らの気持ちは分からないわけではない。自分の世界にはノイエ・カールスラントのように国土を喪失してもなお戦いを続ける国家は存在するからだ。だが、もはや自分たちの掲げる大義の名のもとに人々を大量に殺戮しようとする事はテロ行為に等しい。

一そう。ジオン軍はもう、この世には存在しない、軍隊なのだから。

彼らは何のために戦うのか。加東圭子は過去の亡霊たちの執念を垣間見る。

「天佑は我にあり!!^{てんゆう}ぬおおおおおっ!!」

海上から出現したMSM-07「ズゴック」の中隊はまるでかつての旧日本陸軍の如き突撃で、連邦軍のモビルスーツを破壊していく。恐らくは長年地上に潜伏していた潜水艦部隊の艦載機だろう。この時代から見ればずいぶんと旧式となった水陸両用機なのにも関わらず、連邦軍の割と新しい汎用量産機「ヌーベルジム?」を事も無げに薙ぎ倒していく。高練度の兵が乗る「ジェガン」もその老練な業に苦戦している。その動きは正しく、地形を知り尽くしているとい

るとも過言ではない。

「えっ！？は、速い！！ズゴックってこんなに速いの！？」

圭子の護衛に当たっているのはもデイバインバスターやアクセルシューターなどで攻撃を加えるが、百戦錬磨のジオン軍兵士達（海軍の荒くれ者たちの生き残り）は見事な操縦技術でなのはの攻撃を避けていく。頭部240mmミサイルや腕部メガ粒子砲の弾幕を貼る、なのはや圭子に隙を与えない。

「気をつけろ！！奴らはプロだ！！それもここの元守備隊だ！！」

「えっ！？ど、どういう事なんです！？」

「部隊を示すマーキングを見たが……忘れもしない……あれは一年戦争の時に俺が戦った部隊だ。ズゴックに機種転換していたのか……！」

ジェガン部隊を率いる、一年戦争からの軍歴を持つ高級将校の一人が圭子に警告を発する。彼は一年戦争中盤の反攻の第一陣のこの基地の奪還戦に従事していて、その際にその守備隊で試験運用中であつたMS-06M「水中用ザク」の部隊と交戦。所属していた部隊の潜水艦を屠られた経験を持つという。その時の部隊がズゴックで襲撃して来たのだという。

「あの時は、61、（61式戦車の事）の155ミリで陸に上がったところを狩って、やったが……ズゴックじゃそうは問屋がおりさないしな」

その将校（彼曰く、現場からの叩き上げ、とのこと）はズゴックを手ごわい相手だと圭子に言う。連邦軍のシーレーンを幾度となく脅かした、名機で、戦後の評価試験でも連邦軍の急ごしらえで制式

化された「アクア・ジム」を避けつけない強さを見せたとも付け加えて説明した。

「装甲もゴッグほどじゃないが厚い。おまけに隊長機は後継機（連邦軍ではそう認識されている）のズゴックEときている。あれに乗るってことは玄人の証だ。一筋縄ではいかん相手だ。これを聞いて怖気付いたか？少佐」

「いえ、それなら面白い。やってやりますよ中佐、殿」

「威勢のいいお嬢さんだ。お手並み拝見というこう」

そんな間にもヌーベルジム？がまた一機、ズゴックEのバイス・クローに串刺しにされ、沈黙する。ジオン残党兵士達の練度は長年の潜伏のために平均的に連邦軍の一般搭乗員を凌ぐ。新米か経験の少ないパイロットではジオンの水陸両用機の、手、を読めきれないのは明白。高練度のベテラン勢が乗るジェガン隊が相手を引き受け、新米達を下がらせ、ジェガンのショットバレルのビーム・ライフルとズゴッグのメガ粒子砲の火線が入り交じる。その中を加東圭子はくぐり抜けながら近づく。そして、ズゴックの一機の胴体部めがけ魔力を通した日本刀を居合の要領で横一文字に振るった。

「悪い、武子！！技を借りる！！無双神殿流……っ！空の太刀！！」

それは本来なら、扶桑海の隼、を謳われた加藤武子の得意とする必殺技。射撃の名手と謳われた加東圭子なら決して使わないであろう攻撃。だが、そんな事など戦場では気にしてはいられないし、四の五のぬかしてはいられない。圭子はこっそりと未来世界で取り組んでいた特訓の成果をここで見せたのであった。そして1944年ではその主である加藤武子がなぜかくしゃみをしたとか。

「ツクシヨン！！誰かが私の噂でもしてるのかしら……智子かしら」

ジオンと連邦の血みどろの戦いはまだ始まったばかりであった。ジオンから見れば「自分たちの武勇を後世に残さんとする」万歳突撃かつ玉砕覚悟の戦い。一方、体制側である連邦から見れば戦場を混乱させるだけの傍迷惑なテロ行為。この場合、どちらの言い分も一理ある。戦いとはそういうものだ。正義か悪かという単純なものではない。古来から、勝てば官軍、負ければ賊軍、の原理なのだ。そういう結果などは後世の人間に勝手に判断される。日本の戊辰戦争における会津藩や、西南戦争における西郷隆盛、第二次大戦における大日本帝国陸軍のように。後世の人間は自分たちの価値観でその時の事を判断する。それは地球連邦政府の時代であっても変わりはない。ティターンズが敗北した途端に、反逆軍、の汚名を着せられて、反政府組織、のレッテルを貼られたように。なのはと圭子はその一端を垣間見たのだ。

「なんでジオンの人たちは死ぬって分かってるのに戦うの……！？
どうして！？こんなのっておかしいよ！！」

なのはの声は憤りで震えていた。死ぬとわかっていながらなお自分達の信じた事のために戦う事。それは古来より敗北する側の軍隊ではよく見られる光景。日本では、中世の大阪夏の陣で徳川家康にあと一步というところまで肉薄し、家康の心胆を寒からしめた真田信繁（一般には真田幸村という名で有名）、硫黄島の戦いを指揮し、米軍を畏れさせた「栗林忠道」中将の例がある。子供である上に、平和な時代を生きてきて、戦後日本の平和教育を受けてきた彼女には戦場の真の虚しさや戦争特有の無常さは重すぎると言ってもよかった。ドラえもんが言った「平和はただ唱えているだけじゃ何も守れ

ない」という言葉の重み。その言葉からはドラえものの平和に対する持論が垣間見えた……。

第96話「ハワイより愛をこめて」(前書き)

タイトルにパロディのネタを仕込んでいます。(映画好きならわかります)

第96話「ハワイより愛をこめて」

―ジオン軍残党はこの時空では軍団単位で多数が存続していた。何故か？それは相次ぐ異星人との戦争でジオン軍残党狩りを行うどころではなくなった事や、新興国の勃興への対処が急務となった事でジオン軍への対策が一時棚上げになったからである。そのため連邦政府の支配地域は地球全土では無くなり、アフリカ地域は完全に旧・ジオン軍とティターンズ・アクシズ・ネオ・ジオン軍……等々の数多の軍隊の残党が共存する地域であった。連邦議会が東京に置かれたのもそのためであった。ティターンズ残党は今や反体制勢力とされた事で、残存戦力がネオ・ジオンへ合流していた。その数は1944年へ転移した方面軍を差し引いてもなおも多数。ジオン軍の一員となっていた。

―アフリカ ダカール（連邦政府の旧首都。ガミラス戦時に放棄された）

「マラサイの増産は進んでいるな」

「はっ……」

ダカールの元防空基地では元・ジオン軍の軍人「ユーリー・ハスラー」少将が部下とワインを飲み交わしていた。その部下はこの度地球に降りてきた「白狼」シン・マツナガ大尉である。彼らはティターンズ残党がネオ・ジオンに合流するに当たって提供された工廠でジオンの流れをくむ機体が生産されつつある事に満足気な表情である。地上のジオン軍残党らは未だに一年戦争の技術レベルで作られた第一世代の旧型機を未だ現役で使用せざるを得ない状況であったが、ティターンズ残党の合流により技術レベルが飛躍的に進歩した

グリップス戦役時の機体を用い得るようになったのである。その象徴がティターンズをグリップス戦役時、名実ともに一線を支えた「マラサイ」である。装甲のガンダリウム合金はアナハイム・エレクトロニクスから提供されるので潤沢。工廠の備蓄とも合わせると膨大。マラサイは操縦の容易さを買われ、「ザク?」、「ゲルググ」などの旧型機の更新機種として順次配備されていた。

しかしそれでも連邦軍の最新鋭機との性能差は否めない。ギラ・ドーガやギラ・ズールなどの新鋭機は宇宙軍へ優先的に回されているので、しばらくはこれで食い繋ぐしかない。

「マラサイを得られただけでも大漁だったな、大尉」

「はっ。多少旧型ではありますが、ザクやドムを長く使っていた部隊には朗報でありましょう」

「現場では一年戦争時の機体が未だ多数稼動している。ザクでは、ジャベリン、の相手にはならぬし、ジェガンもマイナーチェンジが重ねられている。それを思えばグリップス戦役時の機体ならまだまだ戦える」

「閣下、もう一杯どうです」

「では頂こう」

「何年物だね」

「56年物です」

「銘柄はなんだったかな」

「かなり冗談ふかした銘柄ですよ。ハワイで人工的に作られたから、ハワイより愛をこめて、とか……」

「どこぞの一流諜報員の映画じゃあるまいし」

彼らはアフリカを完全にジオンの支配下に置いた事に満足する。アフリカにはまだまだ貴重な鉱物資源が眠っている。21世紀頃の採掘技術では不可能であった地下奥深くからも資源採取が可能となり、資源再利用技術も進展したのでその点は心配ない。連邦軍を最も悩

らせるジオン軍は着々と近代化を進めていた。それも連邦軍の負の遺産とも言える機体群で……。

一ハワイではその残党軍の介入により戦場は混乱していた。高町なのはジオン残党軍のその玉碎覚悟の万歳突撃を否定できぬまま戦った。自身の祖国である日本の軍隊が行った行為をそのまま再現したかのような死をも恐れぬ突撃は戦争の無常さをこれ以上無く示していた。

「う、うわあああああっ!!」

なのはには耐えられなかったのだ。死を覚悟した上での戦いを行うジオン兵士達を、殺すこと、を。モビルスーツに乗っているとは言え、人々を殺す事には変りはない。レイジングハート・エクセリオンを持つ手が自然と震え、いつの間にか叫んでいた。レイジングハートから砲撃魔法が放たれ、ズゴックを貫く。

「……やった、やったの……!?!」

息を荒くしながら言う。目の前には装甲を貫かれ、倒れ伏すズゴックがあった。加東圭子はなのはを我に返させる。戦場では一瞬の隙が命取りだからだ。

「しっかりしろ!! 敵はまだいるんだぞ。初めて人を殺した気持ちにはよくわかる。……だけど、今は戦闘中だ。こんなことだとお前が死ぬぞ!!」

……と、叱咤する。普段と比べて言葉使いが荒くなっているが、これは少尉時代の時の同僚への言葉使いであり、肉体が若返ったためと、指揮官としてではなく、一兵士として戦う内に気が若くなったためである（どんな人間でもこの傾向はある）。

「は、はい……」

「戦いつてのはこういうものよ。人が死ぬなんてのは当たり前。誰も死なない戦争なんて、まやかし、以外の何者でも無い。私も扶桑海の時に同僚を何人も見送ってきた。だけど彼女たちの死を無駄にほしない。それが私の意志」

「少佐……」

「あなたは何のためにここにいる？」

圭子は若手時代から持つ信念をなのはに話す。管理局では非殺傷設定で戦うこともあるので、こういう人の死を遠い世界のことと認識し始めていたのはにとっては、死の恐怖、を乗り越えて戦うことの大事さを改めて認識した一幕でもあった。

「それは……」

しばしの沈黙の後になのははレイジングハートを構えなおして叫んだ。

「あの人達が死んでも信じようとするもの……なら……、フェイトちゃんやスバル……みんなを守る、！！そのために、あたし、はここにいるんだから！！」

—それは決意。幼い頃の、いい子、を取り繕っていた頃の自分、魔法という力にはしゃぎ、才能に溺れかかっていた、あの日、の自分……それらとの決別の雄叫び。御坂美琴との出会いがもたらした変

化。その言葉の端々からは美琴の影響が見て取れる。一人称をあたしといったのもその為。彼女は自ら変わることを選んだのだ。今まで、良い子、から、自分らしく生きる、ために杖をとり、戦った。

間章その22「マイルズ少佐の奮闘(?)」(前書き)

アフリカ戦線編。マイルズ少佐の奮闘(?)です。

間章その22「マイルズ少佐の奮闘(?)」

—Zガンダムの血統はモビルスーツ開発部門の意地が作り出した名機であった。近年、台頭著しい「可変戦闘機」(Variable Fighter)に対抗する意味合いも含まれてか、この世界ではどれもが量産されていた。その最新制式量産型機として採用され、系統的には廉価版に位置づけられるモビルスーツ「リゼル」は亜流のZZ系列の血統も受け継ぐ機体であり、実際、そのような武装も用意されていた。1944年での作戦ではZZ同様のバックパックを背負った機体も投入され、斬り合いで戦果をあげていた。このユニットを装備した仕様は、本来なら宇宙戦用で飛行機能は無いものZZガンダムから受け継がれた「ハイパービーム・サーベル」の威力は折り紙つきのものだった。マイルズはリゼル部隊の威力を目の当たりにした。

ウイングバインダー仕様のリゼルの持つビーム・サーベルがモビルスーツの重装甲をも容易に切り裂く。マイルズはモビルスーツ同士の斬り合いでは一瞬の隙が生死を容易に分ける事を改めて理解する。陸戦での斬り合いを好むパイロットもいれば、Z系列本来の空中戦を行うことに徹する部隊もある。リゼルはZ系の入門機的位置づけなので、熟練者は隊長機仕様を乗りまわした後はより上位のZプラス系統に乗り換えていくという。

「これがモビルスーツ同士の戦い……」

マイルズは人の形を持つ兵器群の凄まじいぶつかり合いに息を飲む。リゼルは性能的には連邦軍から見れば所詮、「変形したらメタスになれる程度のジェガン」程度なのだが、グリップス戦役レベルのモビルスーツにとっては充分に高性能である。旧式化して久しい、ハイ

ザック程度では相手にもならず倒される。やはりZの血統を継ぐ機体は熟練者が乗って真価を発揮するものだ。

「少佐、大丈夫か？」

「は、はい」

「よし。乗ってくれ。モントゴメリー閣下の受け持つ戦線が苦戦中だ」

「分かりました」

マイルズはストライカーユニットを纏ったままりゼルの全天周囲モニターが備え付けられているコックピットへ入り込み、リニアシートの臨時の複座席へ入る。変形機構の関係で多少狭いが、2人程度なら問題ない。飛行形態へ変形し、すぐに飛び立つ。護衛付きだ。

「もう変形してるんですよね……まるで感じなかった」

「ムーバブルフレームの柔軟性とマグネットコーティングの効果だ。変形所要時間はゼロコンマ秒単位だし、普通は気がつかんさ」

Z系統の変形機構は年々洗練されている。グリプス戦役から第一次ネオ・ジオン戦争で用いられた、最初に製造されたオリジナルのZでさえ0・5秒。後発のZプラスやZZではさらに短縮され、最新鋭機のリゼルではさらに早くなり、ゼロコンマ秒単位。マイルズがあつというまでもない間に変形し、空を駆ける。変形したウェイブライダーは基本的に高速移動に用いられる。……と言っても速度は遷音速ほど（超音速を出せるのはペネローペなどの一部の超高級機のみ）だが、この時代の飛行機よりは高速で移動できる。

下ではシャロット軍曹がレオパルト？で進軍している。このことを知ったら羨望されるだろう。こうして運搬してもらえば魔力の節約にもなる。連邦軍はこうした可変モビルスーツを、空挺師団、の

制式装備として用いているという。陸戦ウィッチもこうした作戦行動ができれば迅速な展開が可能となる。空戦ウィッチたちの活躍が注目されがちな今次大戦では陸軍は軽んじられがちである。

（後で上に陸戦ウィッチの空挺運用を提案してみよう）

マイルズのこの思案は後に各国に取り入れられ、ウィッチの「エアボーン」として一般化する。しかし、今次大戦に間に合ったのは既に通常部隊が運用されていた扶桑陸軍の挺進連隊、カールスラント空軍の降下猟兵による第1降下猟兵軍、リベリオンの第18空挺軍団などの大国群の誇る精鋭達に限られたとか。

「パラシュートはつけたな？」

「はい」

「んじゃ降下！」

「了解」

これが史上初のウィッチによるエアボーンの事例となった。モビルスーツによる手伝いも込みだが、それはOKとなった。マイルズは初めての空挺に緊張しつつも敵の背後に降下。進軍を開始した。

「空挺って、やってみると案外やれるもんね……移動も楽だし、魔力の節約にもなる」

リゼルから降下すると、彼女は単騎ながら敵の補給基地を襲撃した。ディターンズ20ポンド戦車砲と基地の弾薬庫から適当に盗んだ「ベネリ M4 スーペル90」散弾銃（偶然にも、イギリス軍運用モデル）で基地を攪乱する。基地内での移動は脚部を移動時の軌道ではなく、通常時の脚部で行っている。

「う、うおわあああつ!？」

マイルズは敵歩兵の「L85」や「AK-47」、「FN FAL」、「H&K G36」などの古今東西のアサルトライフルから撃ちだされる「5.56mm NATO弾」や「7.62mm NATO弾」による掃射を床を滑りながら必死にくぐり抜ける。これではやってることはほとんどアクション映画でのシルベスター・スターンかアーノルド・シュワルツェンegger、あるいはステイヴン・セーウル、キム・リーブス、トム・クルーズである。

一軍人生活やってもう5年以上だけど、こんな……アクション映画まがいの行動やるハメになるなんて!？

……と心のなかで大泣きつつ、なんとか手持ちの火器で反撃する。室内で戦車砲は危険なので散弾銃だ。ドアをストライカーユニットの重量を用いた蹴りで蹴破るとすぐに部屋に潜り込んで火線から逃れる。

「ハア、ハア……た、助かった……」

部屋は士官室のようで、ティターンズの士官の軍服が置かれ、拳銃(SIG SAUER P228)とその弾薬が置かれていた。絶好の機会だ。

「ラッキー!!これで拳銃を替えられる!!」

彼女の拳銃は「FN ブローニング・ハイパワー」であったが、運悪く装弾不良を起こしていた。それに渡りに船で、銃を弾薬ごと奪う。幸い時代が変わっても弾薬そのものは互換性がある(9mmパ

ラベラム弾は20世紀後半以降のスタンダード弾薬）らしく、手持ちのハイパワー用の弾薬が使えた。ホルダーに仕舞い、拳銃を変えるとひとまず汗を拭う。喉もカラカラだ。冷蔵庫に入っていた炭酸飲料水を物色する。ベットに腰掛け、一瞬の休息を楽しむ。

「さて、これからどうするか……この基地の地図がほしいわね……」

単騎での襲撃故に脱出経路も確保しなくてはいけない。それに留意しつつ、彼女は行動を起こした。近くを通りかかった歩哨を背後から襲い、アサルトナイフを奪った上で気絶させると忍び足で基地内部の散策を始める。監視カメラに写らないように壁に張り付きながら歩くなど、コレは完全に「沈黙の」シリーズか何かであった。

「見つからないように……。まさかストライカーユニットつけたまままで隠密行動を行うことになるなんて……。無限軌道は使えないわね」

そう。陸戦型ストライカーユニットに備えられている無限軌道は駆動音などで敵に見つかる可能性がある。それを考えると脚部を展開したままの方がいいだろうと考えるマイルズ。それは実際、的を得ていた。探知装置が飛躍的に進歩した時代の設備が多数備わっている基地で隠密行動を行うには如何に、敵に察知されないか、が肝なのだ。

「扶桑じゃその昔、にんじゃ忍者、っていうスパイの役割を担ってた集団がいたっていうし……。やってみるさ」

マイルズは忍者を引き合いにして隠密行動を行う。忍者は日本で独自に発達し、隠密・諜報分野を近代に入るまで担っていた集団。1940年代以降では面白おかしく語られる場合が多い（かの白土三平氏の忍者漫画などが戦後日本でのイメージを形成したのだろうか）

が、実際はスパイのような存在であつた事が判明している。彼女は扶桑の人間からそれを聞いていたので、忍者の存在を正しく認識していた。だからそう言ったのだ。

一 隠密行動を行いつつ、彼女は歩を進めた。

間章その22「マイルズ少佐の奮闘(?)」(後書き)

文章を追加し、3000文字以上に伸ばしました。

間章その23「恋しさと せつなさと 心強さと」

一さて、状況的にストライカーユニットによる隠密行動をすることになった「セシリア・グリンダ・マイルズ」少佐。彼女は敵基地に侵入。センチュリオンの静粛性テスト（結果的にだが）を兼ねての行動は緊張感あふれるものであった。敵兵に通信をされないように通信兵を優先的に排除する。（この世界にもティターンズはミノフスキー粒子を散布していたので、無線通信はノイズが混じるため、ある程度は制限されている）。そして魔力を節約するため、隠密行動のために無限軌道の使用はできないという点と室内戦なので20ポンド砲は使えないのが不安要素であった。

「敵から奪っておいたけど……基本的にStG44と同じ……銃の構造ってそんなに変わらないのね」

マイルズは先ほど不意打ちで気絶させた敵から奪ったH&Amp;K G36への感想を言う。この銃はStG44の二世代後の新生ドイツ連邦軍制式小銃。口径は小口径化しているが、威力は弾丸初速の向上や工作精度の進化でさほど変化していない。未来ではStG44に範を発する技術で作られた自動小銃が「アサルトライフル」という名で普及しているという。このような小銃は便利であるので早くブリタニアにも普及してほしいものだ。

「マガジンは30発ほど……奪って調達するしか無いか」

魔力による強化作用を加えると初速はカタログスペックより上がるだろうが、銃身に負担がかかるので多用しないほうがいいだろう。一歩ずつ確実に歩いていくしかない。

だが、そうは問屋が卸さないのが世の常。この時、彼女の知らない

探知装置が最前線基地であるゆえに備え付けられていた。赤外線センサーによる探知装置である。この時代にはまだ存在しない。そこが彼女の1940年代の人間であるゆえの限界であった。センサーが探知し、瞬く間に基地の中枢部に情報が伝達され、付近の分隊に連絡が行く。

「南部通路付近に敵兵発見。熱探によればウィッチと思われる。注意せよ」

「了解。急行する」

アサルトライフル装備兵が分隊単位で駆けつけ、マイルズに向けていきなり発砲する。命令として射殺も許可されているらしく、威嚇ではなく本気で殺しにきている。マイルズは都合、何度目かの対人戦闘を行った。彼女は本来、人殺し、のために軍隊へ入隊したわけではない。初めて人を撃ったときは震えて声も出せなかった。年齢も通常なら学生としてあるべき若輩者に過ぎない彼女には辛い事実ではあった。だが、時世は彼女を容赦なく戦争の現実突き落とした。撃たなくては殺られるという厳しい現実。

一受け入れるしかないのかという絶望の気持ち。敵は憎いが、怪異のような異形の怪物ではなく、同じ人間。話しあえば分かり合えるかもしれないという気持ち。その気持ちを打ち砕く彼らの崇高なる魂。連邦軍がもたらした敵の正体。

「くううつ……異世界に来てまで自分たちの理想に殉じる……なんでそこまで出来る!？」

マイルズはG36を撃ちながら自然と叫んでいた。異世界に来てまでもあくまで信じた理想に殉じて戦い抜く事。そんなティターンズ兵士たちの思想への疑念。だが、ティターンズ兵たちは平然と言っ

てのけた。それは帰るべき場所を失った男たちの覚悟でもあった。

「我々にもう故郷はない。生きるも死ぬも天に預けた！！後は、ジヤミトフ閣下、の理想を実現させるだけだ！！」

彼らは20世紀後半の資源を幣ぼり尽くすだけの大衆を忌み嫌っていた。大衆を正すには

22世紀末の技術を有する自分たちが地球圏を管理すればいいという傲慢。思想では完全に相容れない。故郷を失った彼らは死をも恐れない。守るべき何かはとっくの当に失っている。ならば軍人として最期まで組織に殉じる。奇しくもそれは彼らがかつて撃つべき対象としていたジオン軍残党と同じ思想であった。

「なら私は……あなた達を討つ！！その考えが傲慢だって気づけええっ！！」

「吐かせ！！ユニオンジャックの旗のもとに沈めてくれる！！死んで国王に詫びていろ！！」

彼らはマイルズの資格好からイギリス兵であることは気づいていた。だからユニオンジャックと国王と言ったのだ。史実ではこの時期の大英帝国の国王はジョージ？世（かの有名な退位したエドワード？世の弟で、20世紀後半〜21世紀初頭まで在位したエリザベス？世の父）。ブリタニア連邦でもそれは変わっていない。

互いに5.56mm NATO弾を撃ちあう。マイルズは正確に敵兵を撃つ。2人ほど倒れたところで格闘戦に持ち込む。

「だらしがない奴らめが……いいだろう。こい」

隊長と思われる男がわざわざ服を上半身だけ脱いで己の鍛え上げた

肉体を誇示してマイルズを迎え撃った。その男は元々ティターンズ内でも過酷な任務についていたらしく、引き締まった肉体美を魅せつける。無駄な筋肉は一切ついていない。（よく映画などで見るス○ローンなどの兵士のイメージは誇張が入っている。実際には見かけが細くとも筋肉は付いている）

「おおおおっ！！」

マイルズは先手必勝とばかりにストライカーユニットによる回し蹴りを加えるが、相手はそれを耐え切り、逆に反撃を加える。ボディブローだ。ストライカーユニットを纏った上で身体機能を強化しているウィッチが相手なのだが、彼は意にも介さない。よほど訓練で鍛え上げられた肉体に自信があるのか。

「なめるなよ。小娘。キリストにお祈りは済ませたか？念仏は唱えたか？」

「それはそっちの台詞よ！！」

2人は互いに挑発し合いながらパンチを打ち合う。最もウィッチと対等に戦える、彼のほうが賞賛されるべきだろう。さながらどこぞの格闘漫画か、ハリウッドのアクション映画のような構図が繰り広げられていた。そして2人の放った拳が交錯し……。鈍い打撃音が辺りに響き渡った。

行間その51「1944年 帝都防空 5」(前書き)

行間その38の続編です。往年の人気アニメ「鎧伝サムライトルーパー」へのオマージュも含まれます

行間その51「1944年 帝都防空 5」

一時間軸は変わり、1944年の冬頃。扶桑皇国へのティターンズ空軍の攻撃に対応したウィッチ達。

宮藤芳佳は一気に勝負を決めるべく、両刀状態の日本刀を天に掲げ、魔力で刀身を輝かす。坂本は今度はなんだとハラハラドキドキしながら見つめる。

「行きますよ黒江さん!!」

「おう!!」

宮藤の号令に一言返すと、黒江も日本刀を両手で天に掲げ、魔力を雷が落ちるの如くに迸せ、眩い光が彼女を包む。坂本は思わず叫ぶ。雲耀ではないのはすぐに分かったが、その技が何であるか彼女にはわからなかった。

「お、おい黒江!お前何を!?!」

「宮藤に色々教えちゃった責任をとる!!見てろよ坂本!!穴拭、続け!!」

「はいよ!!」

そう。黒江は宮藤にいろんなモノを見せてしまった責任を取るつもりなのだ。智子も加わって3人で合体攻撃を加えるつもりだ。先陣を切ったのは宮藤だった。技の名を盛大に叫びながら刀を豪快に振りおろし、炎のように魔力を放つ。

「双おとおおえええんざああああんっ!!!!!!」

「雷iiiiiii光おとおおおざああああん!!」

次いで黒江も同様に技を放つ。これも同様に同じ元ネタの出典元の技であった。

「最後はあたしか……。アイツらがあれならこっちは!!」

最後は智子。智子の場合は前者2人の放った技の上位に位置する超必殺技。これもメタフィクション的言い方をすれば、智子の宮藤と並んでの「主役の特権」というべき豪華な内容であると言えた。

「超おおお弾動っ!! 閃煌ざあああんっ!!」

3人が一斉に放った必殺技は一つの『波動』となってB-52Hを複数飲み込み、盛大に爆発を起こし、衝撃波を辺りに散らす。黒煙に包まれて堕ちていく死の鳥達。それは彼女らの、侍、としての心が起こした奇跡と言っても過言ではなかった。

3人はそれぞれ刀を鞘に納め、取り敢えず任務を遂行できたという笑みを浮かべる。

「やれやれ……。アイツらがあんなに意気投合するとはな。思っても見なかった」

坂本は意外な面々が意気投合したという驚きと、宮藤以外にもあのような技を身につけていたのかという感嘆とが入り交じる。ちよっぴりと羨しい気持ちもある。一方、坂本の師である北郷章香はとうと……。

「おおおゝあんな技見たこと無いぞ!! 君たちゝ、どうやったんだ!!? 教えてくれ!! 後で飯おごるから!!」

「せ、先生……」

と、目を輝かせている。軍神と謳われた彼女でも宮藤達の放った技は未知のものだ。古より扶桑に伝わるどの技とも違う。現役復帰の記念に習得してみたいとの気持ちを抑え切れないようだ。坂本はそんな師の姿に微笑ましさを感じ、笑った。

一こちらは連邦軍航空隊。ジェット戦闘機ならばの空戦に明け暮れていた。F-15J「イーグル」は冷戦時代以来の好敵手とも言うべきミグ29とドッグファイトに入っていた。機動性などは同じ第4世代ジェット戦闘機でありながらも、連邦軍の最新技術による近代化改修の効果で現役当時をも超える、有り余るほどの余剰推力を手に入れ、また原型機初飛行時の想定よりも高いGに耐えられるように改修された機体とティターンズ存続時よりもさらに高度かつ、ある程度の訓練を積んでいれば理解できるアビオニクスが戦闘機全体で共通規格化して普及していること、可変戦闘機搭乗員も使う最新の耐Gスーツの威力もあって、イーグルが優位であった。兵装そのものはほぼ同レベルなのだが、この点で差が出たのだ。

エンジンが唸り、イーグルの巨体が空に華麗に舞う。イーグルの真骨頂はドッグファイトの時の格闘性能。ミサイルの発達でミサイルキャリアー的な運用も多くなされた本機ではあったが、（米国などの大国が運用したので、それに対抗できる国が存在しないので、実戦でもドッグファイトはあまり起きなかった）ここにきて、現役当

時に好敵手と目された相手との戦闘でついに設計者たちが想定した格闘性能が発揮されたのである。

「いいぞ……ここだ！」

高度な空戦機動でミグの背後を取ったイーグルのパイロットはヘッドアップディスプレイの照準レティクルと目標が重なる瞬間、操縦桿のトリガーを引き、M61A2 20mmバルカン砲を撃つ。毎分6,600発という速度を誇る機銃は数秒の斉射で相手の翼を穿つ。翼がもぎ取られ、バランスを失ったミグは炎上しながら堕ちていく。ミサイルがあまりアテにならない時代ではこういう巴戦の腕前が戦場での生死を分ける。すぐに別の目標を探し、追尾する。翼の日の丸が太陽の光を浴びて映える。それは嘗ての日本陸軍航空隊の伝統を受け継ぐに値する光景であった。見敵必殺。日本軍航空隊がよく使っていた言葉。そして指揮官先頭の原則。この時代では再び当たり前となった光景。指揮官が後方で喚いているだけで給料がもらえた時代はもはや過去となった。兵たちに認められるには戦略の才能はさるもの、戦術単位でも優れた才覚を見せなければ尊敬に値しないとされる。尊敬を勝ちとるには前線で戦果を挙げることにイーグルのコックピットで航空隊指揮官の少将はそう述懐した……。

第97話「決着」(前書き)

ハワイでの戦いの一つの決着を書きます。

第97話「決着」

一連邦軍・ティターンズの運用する嘗てのジェット戦闘機は第4世代機までが大半で、第5世代は極少数であった。何故か。廉価版を目指したF-35にまつわる計画が失敗に終わり、

第5世代機そのものの意義も第4世代機の大規模改良タイプが能力面で追いついてしまった事、ステルスの過度な追求で維持・保守費用が膨大な金額に登り、その割に成果が疑問視され、冷戦時代再末期に計画され、大規模戦争が起きなかった時代に生まれたがために軍縮気運が大勢を占めた議会の槍玉に上がり、生産数が削減された事が要因である。そのため第5世代ジェット戦闘機は「遅れてきた冷戦時代の落とし子」と揶揄され、実戦でその力を発揮する機会に恵まれぬまま退役していった。その後継が第4世代ジェット戦闘機の改良型で占められたのは運命の皮肉であったとも言われている。そのため連邦軍は第5世代機を入手するのに多大な苦勞を強いられていた。

—2199年 10月中旬 北米 デビスモンサン空軍基地

旧・米軍時代から多くの退役していった機体の保管場所として活用されていたこの基地は今や連邦軍の『補助機材』の供給場所となっていた。その基地の格納庫に眠っていた機体が引っ張り出されている。その名はかつて最強と謳われながらも不遇の運命を辿った「F-22 ラプター」。ステルス性はパッシブステルスからアクティブステルスへ改造された事で飛躍的に向上。塗装はアクティブステルスが搭載されたことでわざわざ旧世代のものを使用する意味はないので、現役時代のレーダー波吸収素材を含んだ塗料からVF-171と同色の通常塗料へ変更されていた。配備場所は激戦地の欧州戦線であるそうだ。

「欧州へ回すのか？」

「ああ。今は一機でも多く機体が欲しいからな。こいつなら第4世代機数機分の戦力になる」

整備兵たちは欧州戦線へF-22が回される理由を話しあう。第4世代機が30機必要な局面でも第5世代機なら少ない機数で同等の戦力になる。それを見込んでの第5世代機の現役復帰であろう。ただしここで動態保存されている機数が少ないので20機ほどしか確保できなかったのは残念だ。

「ほとんど第5世代機は平和だった頃に現れたのが不幸だったみたいなもんだからな。冷戦時代が後10年くらい続けば文字通りに主力になれただろうに……」

「冷戦時代の残滓と惰性で作られたからな」

それは第5世代機の生まれの不幸であった。冷戦時代に『次期主力機』として開発され始めたF-22は就役が遅れた割にはアメリカがステルス技術の独占が失われるのを恐れて輸出されず、配備を国内だけに絞った結果、投資に似合った結果を残せずに終わった。アメリカ軍の贅沢の犠牲と凋落の象徴ともされた第5世代ジェット戦闘機群であるが、数百年越しにその真価を発揮する時がやって来たのだ。議会への名目は「最新鋭機の補助を目的にした補助機材」。バルキリーやコスモタイガーはその高性能と引換に製造コストなどが高騰し、議会には左翼系議員を中心に大量配備を疑問視する輩が多く存在する。追求を躲すべく連邦軍が考えた方法はティターンズが用いた方法を逆輸入した「古典機の近代化改修」という方法。製造当時は高価格であった機体も現在の最新鋭機と比較すればずっと安価な費用で改良可能。そのあたりが軍の秘策であった。エンジンは最新鋭の「ステージ?熱核タービンエンジン」(VF-25以降に

搭載されている次世代型熱核バースタービンエンジン）に、乗っけるアビオニクスは可変戦闘機と共通のモノを使用（可変戦闘機の生産施設を使用して改修する都合上もある）。その為性能は可変戦闘機のファイター形態に引けを取らない。ただし宇宙での運用はまだ考えられていない。

「お偉方はこれと最新鋭機で、ハイ・ローミックス、を考えてるらしい」

「ありがちな思想だが、まあ、ありだろうな」

最新鋭機と旧型機の相互運用はジェット戦闘機の時代になってからよく見られる光景である。旧型機を全て代替できるほど最新鋭機の数が増えなくなってくると、国を問わずこのような運用法が見られた。アメリカも超大国と言われるようになりながらも最新鋭のジェット戦闘機の大量配備が見込めない時世になるとこのような運用法を取った。それは地球連邦の時代が訪れても不変で在り続けた。それは連邦軍のすべての兵器にあてはまる。白色彗星帝国との大戦当時に緊急で大量配備されたジェガンを代替する後継機の開発に手間取り、ようやく配備され始めたジャベリンの登場までにいくつかの失敗作も生んでしまったモビルスーツ分野。製造コストの高騰に悩む可変戦闘機群。傑作機と名高いコスモタイガーに変わりうる戦闘機を作れずにいる航空部門。兵器開発というのは一つの成功の裏に数多の失敗があるという事の証明であった。眠りから寝覚めた米国が誇った、猛禽類、は静かに再び空へ舞い上がる。

一ハワイでの戦いは終わろうとしていた。敵司令官と対峙する野比のび太は拳銃を突きつける。

「あなたがこの基地の司令官か」

「そうだ。最もその肩書は今や無意味になったがね……」

「味方の派閥抗争に利用された気分はどう？」

「私は軍人として優秀だった。だがそれが仇となったようだ……」

ハワイ基地司令「ミシチェンコ」はのび太や智子、ドラ・ザ・キッドと対峙する。連邦軍の砲撃でボロボロになった建物の中で彼は自嘲気味にそう言った。彼の不幸は軍人として優秀すぎたがゆえに幹部から疎まれた事。それを象徴するかのようには彼が本星に送った援軍要請の書類が積まれている。それには受理されなかった事を示す判子が押されている。この数週間の間に彼が本星に送った援軍要請は全て本星の幹部たちに否認され、黙殺されていたことの現れだった。

「降伏して。これ以上無駄な殺生はしたくない……！」

穴拭智子は腰に引っ掛けている日本刀「備前長船兼光」の鞘に手をかけながら言う。彼女もこれ以上の殺生はしなかったのだ。初めて血を血で洗う戦争を経験し、数多の兵士をなぎ倒して来た智子であるが、勝敗が明らかになった以上、これ以上戦っても何もならない。ただ虚しいだけだ。だから彼に呼びかけたのだ。だが、ミシチェンコは軍人として最後まで生きる事を選んだ。あくまで軍人として、雄々しく、死にたいと。すると部屋に「ラスプーチン」が入

ってきた。美琴達を伴って。

「やはりあんたはそれを選ぶか」

「……、ラスプーチン、か。事後のことは頼む」

「カミさんや息子たちに残す言葉はあるか」

「息子たちには、父さんのような生き方はするな、と伝えてくれ。アイツには済まなかったと」

「……分かった」

彼は何を選んだのか。軍人として生きた彼は最期までそれを貫くつもりなのだ。それはのび太に「撃ってくれ」と無言で語りかけているようだった。

「済まないねお嬢さん達。私は最期まで軍人でありたいのだ……。それに私はこうなるまでに人を殺しすぎた……。裁かれるべきなのだ……」

のび太はそれに応え、バントラインスペシャルの引き金を引いた。弾丸は彼を貫く。

「これでよかったのだ……。全て……。地球の若者に倒されるのも……。悪くはないな……」

「……ぼくにあなたは裁けない。安らかに眠ってください」

のび太……。いやその場にいた誰もが無意識の内に「敬礼」の形を取った。皆、不思議と涙は流さなかったが、そこには無言の戦士への敬意と奇妙な友情があった……。

—この時、あたしは不思議な感じがした。……不倶戴天の敵だったはずなのに敬意を払いたくなった。その場にいた誰もが同じ気持ちだったらしい。みんな自然と敬礼をとってた。この時からかな？。戦いつてなんなのか考えるのって……。

その場に居合わせた一人であるスバル・ナカジマは後にこう述懐したという。少なくともこの戦いは管理局で、綺麗な戦争、のぬるま湯に浸かっていたのはやスバルに戦いの実像を思い知らせ、戦いへの姿勢の再考のきっかけを与え、御坂美琴にある一つの決意を抱かせたのは確かであった。

—2199年 10月初旬 一〇〇時 鉄人兵団地球攻撃軍 アジ
ア太平洋方面軍司令「ミシチェンコ」少将、戦死—

— 同日 ベルギー王国

「ハワイ基地からの通信が途絶えました」

「……そうか。全軍に布告。ミシチェンコ少将は名誉の戦死を遂げ

られたと」

「ハッ……」

（奴はそれを選んだか……上層部の派閥抗争が奴を殺したのだ……）

ベルギーの司令室で地球攻撃軍司令は教え子が戦死した事を惜しんだ。それは兵団にとってかけがえのない逸材が失われた事でもある。これから訪れるであろう苦境にため息混じりに部下にこう漏らしたという。「上が派閥抗争などにかまけているから緒戦の優勢を保てないのだ」と。

彼の言うとおり、この日を境に連邦軍は各所で奮闘。鉄人兵団は地球上で最も平穏であった欧州戦線が逆に最大の激戦地になってしまふという、思わぬ誤算を生むことになる。

行間その52「なのは達の日常と戦艦武蔵」(前書き)

ミッドチルダ動乱編の逃げ延びたなのは達に触れます

行間その52「なのは達の日常と戦艦武蔵」

一ある日の事。避難完了した機動六課の宿舎で八神はやては頭を悩ませていた。それは自分が最も『実戦経験』が浅いという点。昨日に、帰還、したスバル・ナカジマからの報告である世界での、事件、と戦争になのはと共に深く関わった陸戦魔導師が実はスバルであったことと、なのはとフェイトとはタイムパドックスなどの関係もあるが、なのは達が11歳時には既に、面識、があり、なのはとは姉妹のような関係を築いていた事などが報告された。さらに帰還時にスバルは、地球連邦軍 特務少尉、（帰還する直前に任官された）の身分を得ていたらしい。加えての、豊富な実戦経験、。経験がなければ実戦で適切な指示を出すことは難しい。その点を先の戦闘で嫌というほど思い知らされた彼女であったが、なのはの師事で徐々に鍛えられていた。

一なのはは先の戦争で数多のエース達に指南を受け、戦略・戦術のイロハを身につけていたが、自然とそうなった、と自認する彼女はルーデルなどから教えられた事をはやてに少しづつ講義していた。例を挙げると地上部隊への支援法の時……。

「はやてちゃん、地上部隊への支援の時はどうすればいい？」

「そりゃ、ラグナロク、で吹き飛ばすか、デアボリック・エミッシヨンで広域攻撃くわええばいいんじゃない？」

「……」

「あ、あれ？なのはちゃん……？」

この回答になのはは思わず頭を抱える。そう。かつての自分自身も

そうだが、3人が幼少期に共通して持っていた認識は、何でもいから吹き飛ばす、というもの。他人の支援などほとんど考えていなかった。「敵を倒せばいい。それが味方の支援につながる」と勘違いしていた。

—あたしの場合はルーデル大佐に言われたっけ……「味方のことを考えて行動しろ」って。フェイトちゃんは綾香さんに、だよ。あの時の事は本当に勉強になったよ……。

なのはは、過去に自分やフェイトがそれぞれ、師に強く戒められた事を思い出す。戦場では単に敵を倒せばいいというモノではない。味方の進攻を助け、時には撤退を援助する。近接航空支援の肝はここにある。

「いい？近接航空支援（Close Air Support,）ってのは近代のナチス・ドイツ空軍が、Ju 87、スツーカーで本格的にやり始めたのがきっかけで航空戦の重要な位置に落ち着いた。ドイツ軍は旧型の急降下爆撃機を転用した攻撃機で戦果を上げ……」

「うん。それはなんかで読んだ」

わざわざ地球連邦軍の軍服をタンスから引っ張りだして着込むという気合の入れよう（？）でなのはは講義を行った。幼少期に数年（士官学校の期間も含めて）軍人として従軍していたおかげか、その方面の知識は十分に持ち合わせている。はやても地球でその方面の本は士官学校時代や指揮官としての研修期間の時に目を通して、が、今では実戦を生き残ってきた猛者達の実体験を聞かされ、なのは同様の経験を積んだスバルにさえ遅れをとっている始末。

「あ、あかん！！これじゃ私の立つ瀬がないやん……指揮官なのに……」

心のなかの焦りが大きくなるのをひしひしと感じるはやて。それを微笑ましい表情で見つめるスバルと黒江。スバルは帰還時からまだ服を着替えていないので、その時に着ていた連邦軍軍服（ロンド・ベル仕様）のままである。フェイトは黒江の発案で1944年へ赴いたので、この場にはいない。

「綾香さんも人が悪いですよ。ティアのことまだ言っていないんですか？」

「どの内わかることだからな。それにアイツも忙しいしな……。何しろアフリカだ」

「たしか「Valkyrie」作戦の最中でしたよね？」

「そうだ。状況はあまり良くない。奴さんもロンメル將軍の戦法をよく研究してきている……はっきり言って押され気味だ」

「ティアって最前線に配置されてるんですね？大丈夫なんですか」

「この間きた郵便には5機目を撃墜したってあった。これで一応エースの末席に名を連ねたことになる」

「エースかぁ。なんか遠いところに行っちゃった感がある……そういえば今のティアの相棒って誰なんですか」

「ああ、名前は稲垣真美。40ミリ砲使いのエースだ。階級は曹長。アイツをよく支えてるよ。料理もうまいし」

「むむっ。会ってみたいなあ……その子に」

スバルは真美にあってみたいという気持ちを芽生えさせた。ティアナのパートナーを自認する身としては気になるからだ。

「連邦軍からの救援は？」

「ブラックRXの光太郎さんのおかげでなのは達に新しいバルキリ

―を送ってもらえそうだ」

「本当ですか？」

「ああ。もうじき到着の見込みだ」

―汽笛のような音が響いてくる。ここは首都から離れているが、軍港に近いこの地にある軍艦が寄港してくる。その軍艦とは。

「黒江さん、海になんか船みたいなものが見えますけど……？」

「……来たか」

エリオ・モンディアルからの報告に黒江は腰をあげる。エリオによれば全長300M近い水上艦であるとのこと。エリオと一緒に行動しているキャロもこれほど巨大な船は中々見たことが無いらしく、オロオロしている。

「安心しろ、ありゃ味方だ」

「え？ 味方？」

「そうだ。私の世界の扶桑海軍連合艦隊の旗艦にして、その象徴、大和型戦艦、。その2番艦の武蔵だ。私が応援を頼んでおいたんだ」

黒江はそう解説する。空にそびえる塔型檣楼と大火力がありそうな三連装砲塔とその凄まじい威圧感を発する巨体。そして扶桑皇国の国章のサクラと海軍旗の十六条旭日旗が翻る。そしてそれに座乗するは聯合艦隊司令長官に着任して間もない、扶桑皇国きっての名将と誉れ高き「小沢治三郎」中将であった。それは時空管理局にとっては予期せぬ来訪者でもあった。

行間その53「第31代聯合艦隊司令長官、ミッドチルダに来訪ス」(前書き)

ストライクウィッチーズ世界の聯合艦隊司令長官とその幕僚達がミッドチルダへ足を踏み入れます。聯合艦隊側の面々は小沢治三郎中将の体制のメンバーです。

行間その53「第31代聯合艦隊司令長官、ミッドチルダに來訪ス」

一軍港にほど近い機動六課臨時隊舎。そこに一隻の超弩級戦艦が寄港してきた。それはなのは達の世界ではとつくのとうにシブヤン海に没したはずの戦艦武蔵であった。

「な、なんですかあの船！？大砲積んでるから戦闘艦ですよね……？」

機動六課のメカ好きツ娘で、オペレーターの任もこなす少女「シャリオ・フィニーノ」が現れた戦艦武蔵の偉容に慌てふためいている。大和型戦艦の誇る世界史上最大口径かつ、最強を誇る「46cm砲」の醸し出す圧倒的威圧感に圧されているのが明らかに見え隠れしている。

それだけ大和型戦艦は長門型戦艦をも超える大艦巨砲主義の精鋭としての威厳を持っていた。

「隊長たちから聞いたことある、。私たちが住んでた国には伝説になって語り継がれてる戦闘艦がある、って……」

「思いだした。そんな事言ってたって。それじゃあれがそうか……」

ルキノ・リリエなどの六課の後方任務担当班の面々が口々に大和型戦艦への感想を言い合う。どれも偉容の前に圧倒されている。かの山本五十六をして、圧倒される程に偉大なものがある、と言わしめたその姿は別世界でも共通であったようだ。

なのはの講義を終えたはやてはその威容を見るなり一言だけ言った。それはその船……否、軍艦がどのような代物か周囲に思い知らせる

言葉でもあった。

「嘘やろ……や、大和や……戦艦大和……動いてる……モノホンや……なんでここに……?」

しかしすぐになのはに訂正される。見るからに対空兵器の艤装が大和とは異なるのがわかるからだ。見てみると片舷に数艇づつ「十二糎二八連装噴進砲」が搭載されている。この武装は一番艦の大和には改装の際に高角砲重視で対空兵器が強化され、沈没の時まで搭載されていない。そうなれば最後の戦であるレイテ沖海戦で搭載されたと証言がある同型艦の武蔵しか無い。

「違うよはやてちゃん。あれは武蔵だよ」

「……って!!同じやろ!!大和も武蔵も!!同じ計画で、同じ時期に作られた同型艦（どうぐたい）やんけ!!どこがどう違うんや!!見分けつかんわ!!」

「対空兵器の艤装が大和と違うんだよ。んゝあれは……れ、聯合艦隊司令長官の旗あ!?!」

「ど、どうしたんや?」

「……はやてちゃん、すぐに準備をさせて」

「わ、わかった!」

はやてはなのはの言葉の意味を理解した。武蔵には扶桑（日本）海軍の花形実戦部隊の総指揮官が座乗している。そうなると相応の準備が必要だ。

「おいなのは!スバルもこい!長官を出迎えだ」

「はいっ!」

—それほどのお偉方がミッドチルダにやってくるとは……。単なる

挨拶では無いということはわかるけど、何でや……？

はやての心にはその疑問が渦巻いていた。黒江はというと、なのはとスバルを引き連れて

武蔵の内火艇を出迎えに行った。その間に準備を行っておかなくては。

「小沢長官、お迎えに上がりました」

「黒江少佐か。君の要請に海軍大臣も動いてくださった。それで第一陣として儂が武蔵で来たのだ」

「ありがとうございます」

内火艇から聯合艦隊司令長官の小沢治三郎中将と矢野志加三参謀長、菊池朝三参謀副長が降りてくる。それを黒江たちは海軍式敬礼で迎える。

一愚将が多いと言われる大東亜戦争期の大日本帝国海軍の中では、誇るべき数少ない名将として評価される小沢治三郎。史実ではマリアナ沖海戦での無残な大敗北が起因し、愚将と見る評もあるが、アメリカでは総じて名将と評価されている軍人である。扶桑皇国の世界では航空分野の成功者と高く評価されている。ちなみに彼は現在、航空畑の人間だが、元来は水雷戦を専攻し、水雷学校校長を務めたほどの水雷戦のプロである。

「奴さんには先刻に通告しておいた。突然なので慌てさせてしまったようだよ」

「でしょうね。実戦部隊の総指揮官たる長官が来られるとあつては大事ですから」

「そうだろう。君たちもご苦労だった。後で武蔵の料理長が君たちにステーキを炙ってくれるそうだ。楽しみにしたまえ」

「ほ、本当ですか!?! ありがとうございます!!」

なのはとスバルは目を輝かせる。元々大和型戦艦は怪異に対抗する名目で、財政上の問題と、空母重視の戦略の結果、破棄を余儀なくされた「八八艦隊」計画の一環で大正末期に作られた長門型の本来の能力向上型たる、「加賀型戦艦」（空母へ改装）、「紀伊型戦艦」（建造検討時がちょうど怪異が収まっていた時期であったのが災いしたのと関東大震災で建造中止）などが出現しなかった影響で、他国に扶桑連合艦隊の戦艦は「ロートルの集まり」と揶揄されるようになった。それを一気に払拭する新型艦を欲した海軍がマル3計画（海軍第3次軍備補完計画の事）で、聯合艦隊の中核を担うべく建造された。

その経緯上、大和型の乗員は既存艦から精鋭と言われる、一流の乗員が集められている。食事を作るシェフたちも元は一流のレストランで働いていた人材が配置されている。そのため旨さは一流で海軍随一。運良くミッドチルダではこの日は海軍カレーが食える金曜日。2人には思わぬ楽しみができたのだ。この時、時空管理局地上臨時本部はこの時期にはミッドチルダ政府と国交が成立していた友好国の扶桑皇国から公的な来訪者の訪問、それも海軍実戦部隊の総指揮官たる、聯合艦隊司令長官とその幕僚達の突然の訪問に慌てふためき、さながらドタバタ劇の様相を呈したりしていたというが、この時のなのはたちは知る由もなかった。戦艦武蔵はその威容を見つけてるかのように、ミッドチルダの軍港にその巨体を入港させた……。武蔵はミッドチルダの一般人からも怪物と言わしめるほどの迫力を発揮、なのはに言わせれば、古き良き大艦巨砲主義、を体現した武蔵は猪口敏平艦長指揮下のもと、錨を下ろし、巨体を休めていた。

第98話「神の救い」(前書き)

今回は以前触れた、ある少女とその正体に触れます。同時にD作戦の顛末も描きます。

第98話「神の救い」

ー北米 ニュータイプ研究所

ニュータイプ研究所は地球連邦軍にとってティターンズ時代の悪しき遺産とされてはいたものの、レビル將軍の命により過去の遺産を整理させるために存続が許されていた。その内の最大規模を持つ「オーガスタ研究所」では。Zガンダムのパイロット「カミーユ・ビダン」が保護し、欧州から送られてきた一人の強化人間の治療が行われていた。ネオ・ジオンから接收した技術と連邦が独自に進めた医療技術は彼女の元の世界では成し得なかった、良好な経過をもたらしていた。

「あの子の様態はどうなんです？」

「だいたい安定した。精神的暗示を解くには相当な苦勞がいたがね」

この時期のオーガスタ研究所の所長はかつてのようなマッドサイエンティストではなく、新ネオ・ジオン出身の穏健派の博士が選ばれ、その指揮をとっていた。そのため面会も許され、カミーユは時々合う事でその子の、寂しさ、を紛らしていた。この日は、その子の、たつての願いで運動代わり（研究所にとってはパイロット能力の優劣を見る目的もある）モビルスーツを動かす事が許可され、動かしていた。

オーガスタ研は連邦軍内での次世代モビルスーツへのモビルスーツの稼働データ集計役も担っていたので、テスト場も備えている。研究所にあるのはモビルスーツの稼働研究を兼ねて配備された一線を退いた旧世代のモビルスーツと一部のテスト機。その内で眼を引く

のはデータ集計用に改修がなされたガンダムMk-1?であった。内容は装甲とフレームが現役時代のチタン合金セラミック複合材から、素材のテストも兼ねて、第三世代型の複合素材で、V2ガンダムなどに使用されたガンダリウム合金スーパーセラミック複合材に換装されている、一部武装がジェガンR型のモノになっている。これはジェガンの近代化改修へのデータ集計の役割をマーク?が担っている事の現れでもあった。

「マーク?は俊敏な動きを見せ、標的機の無人操縦の初代ジムやジム改を落としていく。操縦席ではその話の主の少女が自分の知るモビルスーツの操縦系との違いに戸惑っていた。その少女の名は「ステラ・ルーシェ」。シン・アスカが、救えなかった、事を一生の悔いにしていくはずの少女である。彼女はシンの言葉を借りるなら「フリーダム、のせいで死んだ、」はず（シンはその最期も看取った）であるが、幸か不幸か、その彼女とは、遺伝子工学的には別人、である、パラレルワールドの住人であった。（シンへ好意を抱いているのは同様である）

経緯は史実では最後の出撃となる時に乗機ごと行方不明。（転移）偶然にも、たまたま訓練中であつたカミーユのいた飛行隊の飛行空域へ現れてしまい、交戦。Zのバイオセンサーの発動で動きを拘束（この際に機体の操縦系は機能不全にされた）され、頭部をハイパー・ビームサーベルで破壊されて沈黙。その際にカミーユによって保護されたというわけである。

「このモビルスーツ……なんか落ち着かないよお……360度見れるってのは便利だけど……」

「大丈夫だ、じきに慣れるさ」

「本当……?」

「ああ。僕も乗ってる内に慣れた」

カミーユは研究所の管制室から無線で声をかけ、ステラを安心させてやる。彼はかつて、フォウ・ムラサメの死やロザミア・バダムを自らの手にかけて事を今なお悔やんでおり、そのためか精神が一時的に崩壊した時にもエルピー・プルを導き、死から救ったり、自分の後を担って戦うジュドー・アーシタへ思念を送り援護したりしていた。立ち直った現在は軍に戻り、グリプス戦役以来の因縁がある、戦役中のジェリド・メサとパプテマス・シロッコに変わる宿敵である「ヤザン・ゲイブル」と血みどろの戦いを繰り返しているという。

カミーユは全天周囲モニターとリニアシートに戸惑うのは当然であると思った。話を聞くに、ステラの世界では一年戦争当時の第一代モビルスーツ同様のパネル式分割モニターが主流で、全天周囲モニターはほとんど無い（正確に言えばフリーダムガンダムとジャスティスガンダム系統のモビルスーツに機体システムとの関係で搭載されている程度）という。一年戦争後、多くのパイロットが一年戦争当時の機体からの機種転換で難儀したという全天周囲モニターは別世界の住人たる、ステラ・ルーシェであろうと例外ではなかったらしい。

次いで、ステラが驚いたのはマーク？の持つフレームの柔軟性が実

現する、人間に近い、動き。洗練されたムーバブルフレームは同じように内部骨格を持つコズミック・イラ歴のモビルスーツと比べても歴然とした差があり、その気になればカンフーアクションの真似も可能なほどの柔軟性と冗長性を備えていた。（これは、ガンダムファイト、と呼ばれる競技に使われる、モビルファイター、の技術が軍用のモビルスーツにスピノフされた結果）

「ガイア、より動きが柔らかい……それに高いところから着地しなくてもすぐに動けるなんて……すごい……これが、ガンダム、……」

コズミック・イラのモビルスーツは発展途上にあるため、モビルスーツ単体の性能向上が主眼である。そのためにその他の技術がややおざなりになっており、ショックアブソーバのような技術はまだ大戦中と大差が無かった。そのため高高度からの着地において、衝撃を吸収して動けるまでにごくわずかだが硬直時間が生じる場合がある。だがこの世界では技術が熟成されている上に、一年戦争中に既に初代ガンダムによる例があるので、その後のモビルスーツには必然的にそのような能力が備えられた。マーク？はこの時期には現役を退いて久しい（マーク？はオリジナルのZと共に第一次ネオ・ジオン戦争直後のアクシズから回収された。そこから運命が枝分かれし、Zがその後の技術で作られた兄弟機が現役で稼働中なのと比べると裏方に回ったマーク？は些か不遇ではある。だが、このような裏方の仕事が技術を発展させるのも事実）のだが、それでも高高度からの落下と硬直からの立ち直りはコズミック・イラ歴のモビルスーツより速い。それが彼女を感嘆させる要因であった。マーク？はステラの操縦に敏感に反応してみせ、メインスラスタを吹かして跳躍し、空へ舞い上がった。

一 日本

兵団の「D作戦」は見事に成功。立ち直りかけていた日本の工業地帯に打撃を与え、さしもの精鋭もすべてを守り通すことはできなかった。そしてかの「スカイライダー」を以てしても、だ。戦争という現実にはヴィータは打ちのめされそうになり、嗚咽を漏らす。

「ちくしよお……ちくしよおおおっ!! 守れなかったのかよ……またあたしは……!」

「泣くな。全てが守れなかったわけじゃない」

「そうだ。君たちがやった事は無駄じゃない……必ず今度は守ってみせる」

扶桑陸軍のエースと誉れの高い「黒田那佳」も内心は痛恨の極みであるのは間違いなかった。泣きじゃくるヴィータを抱きかかえてなだめているが、配下のウィッチに戦死者も出ている以上、彼女もまた本来であればこの場で感情のままに叫びたかっただろう。だが「自分は指揮官である」という自覚がそれを押し留めた。戦闘中に流れた歌の力で勝ちましたが、失ったものもまた大きい。スカイライダーこと、筑波洋もそれを自覚しているからこそ、戦死者へのせめての手向けとして敬礼をする。こうして供養してやるのが戦死者の最大の慰め。スカイライダーが敬礼をしたのをきっかけに全員が敬礼を行う。誰かが弔砲代わりに「ホ5 20ミリ機関砲」を空へ向けて撃つ。九州の佐世保基地で防空の陣頭指揮を執っていたレビル將軍も基地の一角で戦死者へ敬礼し、基地には半旗が掲げられた。

ーハワイを巡る戦いは日本にも深い傷跡を残した。だが、これが戦争の現実である。誰も傷つかない戦争などありはしない。むしろ今までの戦いが「甘すぎた」のだ。大昔はそれが当たり前であったのではないか。それをヴィータは深く心に刻むのであった……。

第99話「強力 クライシス帝国対3人ライダー!!」 (前書き)

ハワイ編の後日談その2です。

第99話「強力 クライシス帝国対3人ライダー!!」

一ドラえもん達によって戦いそのものには決着はついたものの、ジオン残党軍との戦闘は続いていた。水陸両用モビルスーツ群を殲滅すべく奮戦する高町なのはと加東圭子。圭子は持ち前の指揮能力で、部隊を巧みに動かす一方で射撃戦の腕前で魔力による強化がなされた弾丸を比較的装甲でカバーしきれない関節部に撃ちこむ事で無力化させていく。(その前に頭部の武装を破壊した上でだが)

一戦争には負けるとわかっているけども戦う時がある。それを地で行くジオン残党軍は玉砕をも辞さぬ戦いを見せる。地獄の道づれとばかりに。なのははそんな彼らの行為に例えようのない悔しさを感じていた。出身地の日本が過去に保有していた軍隊らが取った行動である玉砕。彼女にはそれが許せなかったのだ。

「なんで……なんでそこまでして戦うの!？」

自然となのはは叫んでいた。既にジオン軍は滅んで久しいはず。それなのにあくまで組織に殉じる事は戦後日本の価値観を持つ彼女の理解を超えていた。だが、彼らは最期まで戦い続ける事を是非とする価値観の持ち主。それは戦前の大日本帝国に通じる価値観。なのはの曾祖父世代までの人間ならば誰もが持っていた敢闘精神。戦後の日本人は、争い、に過剰までのアレルギー反応を見せるが、受験戦争、などで結局争い合っている。それは人の本質なのだ。

「誰だって争いは避けたい。だが人間の歴史から戦争は消えない。そうして多くの国々が滅んでいった。必然だよ。どんなに進化した

としても……ニュータイプに覚醒しようと人は所詮、猿に知能がつき、進化した動物だ。……結局人間は争いからは逃れられんのだよ」
「そうじゃない！！人間には心がある！どんな相手とだって分かり合える！！なんでそこまで……！！？」

「青臭い理想論だが……今回ばかりはお嬢ちゃんのほうに理がある。だが、分かり合えても人は結局……」

「あなたは……」

ズゴックEのパイロットはなのはの叫びに答えた。それは人として所詮は猿から進化し、万能の霊長、かつての恐竜族に代わり、地球上の覇者としての称号を得たに過ぎない『動物』という事実。人間は戦争が無くとも受験戦争、就職戦線などの色々な争いがあり、それらに明け暮れている。彼はそれらを内包してそう言ったのだ。それは誰でも否定はできない。そして『軍人』として生きてきた彼の本心であった。

「我々の戦いを後世に伝えんがため……いざ！！」

ズゴックEは歩みを早め、バイス・クローをなのはに突きたてようとする。なのははこの時、覚悟を決めた。

一争いが避けられないのなら、あたしはそれを止めてやる！！それが……あたしの……！！

レイジングハートにエネルギーを充填させ、ほぼゼロ距離射撃で必殺の砲撃を放った。それはこの時点ではスターライトブレイカーに次ぐ威力を誇る砲撃であった。

「エクセリオオオオオンバスターアアア！！」

負傷を覚悟してのゼロ距離射撃。それは勇気が恐怖を上回った事を示す一幕。死への恐怖を乗り越えた者達だけが辿りつく境地。圭子はそれを見て「あの娘もたどり着いたか」と嬉しそうな表情を見せていた。

一兵団は指揮官を失い、指揮権を受け継いだラスプーチンが自らの権限で地球側への投降の通達によって各所で武装解除が進められていたが、まだ敵は残っていた。クライシス帝国である。仮面ライダー達（風見志郎、神敬介、南光太郎）はまだ自分たちの戦いは終わっていないと告げる。すると……

「頃合いか」

「その声は……やはり現れたか……クライシス」

「そうだ、風見志郎。我々は地球人と鉄人共の争いなど眼中にはない。あるのは我々の邪魔となる貴様らの抹殺のみ！！」

「あいつらは……？」

「クライシス帝国。異次元からやって来た帝国で、皇帝の施策で地球に侵攻を行なっている。向こうにも止むに止まれぬ事情はあるが、地球の平和を乱す以上は戦うのみだ」

風見志郎（仮面ライダーV3）はドラえもん達に事の経緯を掻い摘んで説明する。これは生存競争でもあるのだ。地球人とクライシス人の。

一無論、クライシス帝国全てが悪いわけではない。現在の皇帝はどちらかと言えば武断派であり、衰亡が近い怪魔界から地球に強引な形で移民させようと目論む、悪、（ただしジャーク將軍によれば地球侵攻計画は前帝の頃より計画が考えられてはいたが、それを本気で実行するのは無いと思われる）との事で、ジャーク將軍は強引な侵攻を開始した現皇帝の背後にバダンの大首領の影を感じたと言う）。

クライシス帝国の幹部の一人「ボスガン」を前にして南光太郎は叫ぶ。

「ボスガン！！悪に生きる道は無いと思い知れ！」

「そうだ、最後には必ず正義は勝つ！！」

「世界に悪が栄えた試しはないのだ！！………変身だ！！」

『おう！！』

—ムウン………変身・V3ア！！—

タブルタイフーンが出現し、力と技の風車が勢い良く回転し、光を発する。

—大・変・身！！—

次いでXライダーの神敬介。こちらは変身ポーズを取ると変身に用いるアイテムのレッドアイザーとパーフェクターが瞬時に装着される。有名な「セタップ」では自分で装着する必要があったのでその点は大きく改善されている。

—変身！！—

最後は南光太郎。腕を天を掲げ、そこから一定のポーズを取り、V3のダブルタイフーンを思わせるサンライザーが回転し、キングストーンの力と太陽の力を秘めた目映い光を発し、彼を最強の戦士へ変化させる。

—そして次の瞬間。そこにいたのは3人の勇士。

「仮面ライダー、V3 あ!!」

「仮面ライダーX!!」

「俺は太陽の子!! 仮面ライダーBLACK RX!!」

地球を守ってきた3人の男たちはその勇姿を見せる。そしてこれから見せるは大自然の使者たるその力。

「トウア!! RXキーーック!!」

RXは奇襲とばかりに後ろ向きの宙返りの後に繰り出す必殺キックを見舞う。キングストーンと太陽のハイブリッドエネルギーによるパワーはボスガンをも、戦闘員である「チャップ」ごと軽く吹き飛ばし、ビルの窓から盛大に外へ堕ちていく。

「ここからは俺たちの、仕事だ。ここは任せろ!!」

「頼みます!!」

RXはそう言ってドラえもんやスバル達にサムズアップをしてみせると、跳躍してボスガンたちを追う。他の2人のライダーも続く。美琴やスバルなどはここに来るまでにスタミナを消耗しきっており、コレ以上の戦闘継続は不可能。智子とて怪人相手には正面きって戦えるほど魔力とスタミナは残っていないし、のび太も敢行した弾薬は使い果たしている。

「悔しいけどあの人達に任すしか無い、か……」

齒噛みして悔しがる美琴。彼女も出来れば戦いたかったのだろう。だが、スタミナが切れてはどうしようもない。自分はどちらかと言えど能力に依存がちである事を彼らとの交流で改めて認識し、能力に決して依存しない戦い方を模索することを誓った。

「あの人達なら大丈夫よ」

「どうしてそんなにあの人を信じるんですか、中尉」

ドラえもんの疑問に智子は応える。

「あの人達は絶対的な信念で戦ってる。強い気持ちがあればどんなことだって貫き通せる」

「そう。あの人はそれをあたしに教えてくれた。だからあたしは……あの人達を信じる」

スバルも智子に続く。2人は共に戦った経験からか仮面ライダー達を信頼しているのだ。それは彼らが示した『正義を信じる心』の結晶なのだ。3人の仮面ライダー達はそれを地で行く強さを見せる。その様子を見ながらスバルは思った。

―あたし、近い内にスーパー1……一也さんに頼んで北派少林拳の流れを汲む「赤心少林拳」の修行をつもうかな……なのはさんを守れるように。

……と。

ボスガンは持ち前の剣術で仮面ライダーXに挑むが、ライドルホイップでの巧みな剣戟に苦戦する。

「ええい、ちょこまかと!!」

「ボスガン!! 貴様の剣術もこの私には通じん!!」

ボスガンはここの所いいところ無しである。この作戦でもバダンに潰け込まれるのを懸念したジャーク将軍により、結局配下の大隊戦士の出撃は禁じられ、自ら作戦を実行せざるを得ない状況となった。そしてRXより能力が劣ると思われるXにも遅れをとる有様。

「トウ!!」

XはV3による再改造で埋めこまれたマーキュリー回路により初期設計時の想定を超えるパワーと耐久性を得ている。その力はたとえ強力なクライシス帝国とでも決して引けは取らない。回し蹴りを加え、ボスガンの剣を吹き飛ばす。

「おのれXライダー!!」

Xライダーに互角以上に持ち込まれているのに憤激するボスガンだ

が、Xとの戦いに夢中になるあまり、周囲の気くばりを怠っていた。その隙をすぐにV3に潰け込まれる。

「横がガラ空きだぞ！！V3スクリューキイイーック！！」

今度はV3の必殺技が横合いから命中し、度重なる屈辱を味わう。

「ええい私としたことが……一度ならず二度までも……！！」

「バイオブレード！！」

「む、むうっ！？」

今度はバイオライダーの剣術に苦慮する。彼の今回の災難は三人ライダーを敵に回した事に尽きるだろう。最も二発のキックに耐える彼も十分に強者なのだが。形勢不利を悟ると怪魔獣人さえ出撃できれば……と愚痴る。しかし三人ライダーの前ではよほどの強者を動員しなければならぬだろう。そうおもわせるほど、三人ライダーのパワーは絶対的な威力であった。

第99話「強力 クライシス帝国対3人ライダー!!」 (後書き)

RXの変身について感想で指摘ありましたので細かくしました。

第100話「管理局のカノーネンフォーゲル（大砲鳥）の芽生え」（前書き）

ゲストでなのはの兄が出ます。

第100話「管理局のカノーネンフォーゲル（大砲鳥）の芽生え」

一ボスガンと戦いを繰り返す三人ライダー。それを見守るドラえもん達。ボスガンはおめおめと逃げ帰ってはジャーク將軍から厳罰を受けるのを理解していたので死に物狂いで戦っていた。だが、バイオリダーから変身したロボライダーの装甲の前に自慢の攻撃も通じずじまいであった。

「トゥワ!!」

「お、おのれロボライダー!!」

ロボライダーの如何なる灼熱さえ無効化する装甲は当然ながら物理攻撃にも凄まじい耐久性を発揮する。並の剣では傷もつけられない。それを証明するかのようにボスガンのいざという時の切り札であるもう一方の武器のナイフも装甲に触れた途端に刃こぼれする始末。更にXライダーに吹き飛ばされた剣を拾ってロボライダーに攻撃を仕掛けたもの……

「ボスガン、その剣で俺の体を貫けるか!？」

……と言い放たれ、それに乗って剣を一気に振り下ろすが……

「ひおおお!!」

渾身の一撃にも関わらずも無常にもロボライダーの装甲は剣の刃先を肩で受け止め、さらにチョップで剣を叩き折ってしまう。その力の差はまさに無常そのもの。

「しまった、剣が……!!」

「ボルティックシューター!!」

「え、ええい!!」

すぐにロボライダーの誇る必殺武器「ボルティックシューター」が火を噴く。ボスガンもこれには攻撃を諦め、再度のリターンマッチに賭けた。しかし内心ではこれからジャーク將軍による抜け駆けに対する厳罰が待っている事に対する落胆がある。撤退した彼を尻目に三人ライダーは凱旋した。

「逃げたんですか？」

「いや、撤退してリターンマッチするつもりだろう。」

凱旋するロボライダーは智子の問いに答える。あくまでロボライダーは歴戦の経験で冷静に判断する。その点がゴルゴムを倒し、クライシスを苦しめる力の一端なのだろう。

「クライシスは日々手強くなってきている。俺もパワーアップしたりして対抗するしかないのさ。それにたとえクライシスを倒してもまだ敵はいる」

「……バダンですね」

「ああ。たぶん奴らはクライシス以上の強敵だ。先輩達と何百年に渡る因縁を持つというからな……」

それはロボライダーの本音であった。クライシスは日々強力な敵を送り込んでくる。これまでにRXを凌ぐパワーを誇り、ロボライダーへの変身を会得するきっかけとなった怪魔ロボット「デスガロン」などがいる。バイオライダーへの変身などRXもパワーアップを重ねてそれに対抗するという、イタチごっこのような状況が続いてい

る。更に彼をして強敵と言わしめるバダン。過去の10人の仮面ライダー達と長きに渡る因縁を持つ強敵。ロボライダーはクライシスの背後に潜んでいるであろう、影に戦慄を感じていた。

一ボスガンはほうほうの体で逃げ帰ってきたものの、ジャーク將軍に厳しく叱責されていた。

命令を無視した単独行動はジャーク將軍を憤激させるに値し、しかも三人ライダーにいいところ無く打ちのめされたというのが追い打ちをかけていた。

「馬鹿者めが！！この余の命令も無しに行動を起こしおって！」

「ハ、ハッ。申し訳ありません……次こそは必ずや仮面ライダー共の息の目を止めてご覧に入れます……」

「そう言って11人ライダーに負けてきたのは一度や二度ではあるまい！！それにそちの今回の独断専行は目に余るものがある。余としてもこれ以上は許し難い」

「お、お待ちください！！」

「見苦しい！！」

言い訳に終止するボスガンに業を煮やしたジャーク將軍はこの後厳

罰を加え、次はガデゾーンとマリバロンが共同で作戦を実施する運びとなったが、その間にもボスガンはロボライダーの装甲を研究し、それを切り裂ける金属による剣を配下のチャップに研究させ、それは一つの結論に辿り着く。自らの手でRXを倒すための秘密兵器。その名は……

一クライシスが撤退し、ジオン残党軍もある一つの目的を果たしたためか、最後の隊長命令により残存する機体は撤退し、完全にハワイでの戦いは終結した。スーパーロボット達は苦しい現状を支えたとしてその労が讃えられ、ルーデルはその戦果から、カールスラント皇帝からの通達で2度目の宝剣付黄金柏葉騎士鉄十字章を受賞し、智子も生還を果たしたハルカと再会を果たし、さらに長年ぶりにルーデルと対面した。

「久しぶりだな中尉。何年ぶりか？」

「私が16の時ですから7年ぶりですね、大尉……いえ、大佐、あの子が世話になったみたいで……お礼を申し上げます」

「ウム……あの子は確かにいい素材だ。面白い。貴官が目をかけるのもわかるよ」

「あ、ありがとうございます」

「しばらくあの子に、仕込む、が、いいか？」

「構いません。大佐に仕込まれるならあの子もいい勉強になるでし

よう」

「了解した。御目付役のスバルともどもしばらく預からせてもらおうぞ」

なのはの保護者としての権限は現在のところ智子に帰属している。なので智子の同意があればルーデルがさらにあずかってもOKなのだ。その結果はどうなったのか。その一コマは……

一なのはが15歳の頃。庭から何やら物音がするのを気になった、お盆で帰省中の兄の恭也が声をかけに行くと……

庭に置かれている、物騒な代物、を整備しているなのはの姿があった。それはなんと第二次世界大戦中にドイツ軍が用いていた機関砲であった。

「お前……何やってんだ……？」

「お、お兄ちゃん!？」

「む、ムガ!!」

慌ててなのはは恭也の口を塞いだ。そして奥まで引きずる。そして。

「お前なんつーモン持ってんだ……。分解状態だけど」

「あれ?わかるの?」

「ああ。これくらい軍用機に憧れる男子なら知ってるよ。たしかド

イツ空軍の爆撃機のスツーカーの最終型に搭載されてたやつだろう？
だけどもあ……父さんが見たら泡吹くぞ」

「だよね……物騒だし、銃刀法違反だし……」

「あのかな……。つつこんでいいか……。？どうしてんなモンをお前が
持ってるんだ？」

「仕事で使う機会があつてね。それで持って帰ってそのまま隠しと
いたんだ」

「仕事って……大砲をか？父さん達が聞いたら泣くぞ」

「分かってる。お父さんが昔、危ない仕事、してた事、あたしには
そういう事を知って欲しくないってことも今は知ってるよ」

「知っていたのか……」

「今はあたしも仕事の都合で別の世界で、軍人、やってるから……。
それで調べたの。お父さんには言えないけど」

「知ったら心臓とまるかも知れないな……軍人ってのはいつ死ぬか
も知れない職業だ。イラク戦争の米軍見りゃわかる」

なのはは一旦分解し、その状態で37ミリ砲の整備を行なっていた。
それは前の時にルーデルから餞別代わりに貰った37ミリ砲（ウィ
ッチ用として改造されている）であった。庭の奥のほうでばれない
様にこっそりとやりながら兄と話す。なのはは父の過去をこの頃
には完全に知っており、それ故に両親が自分には平穩に暮らして欲し
いと願っている事も知っていた。だが、既にその願いを自分は見事
打ち碎いているから、高校進学を決めたのは両親への贖罪であると
告げる。

「父さんたちはこのことは……？」

「まだ。いづれ話すよ」

「大人になったら話せ。父さんもその頃の年齢なら許してくれるだ

ろう」

「分かった」

と、兄からの忠告を受けるなのは。実際に彼女がすべての事実を両親に告げるのは成人後のことであった。

「お兄ちゃん、これで共犯だからね」

「分かってる。手伝おう」

「できるの機関砲の整備なんて」

「前に知り合いの代わりで自衛隊関係の仕事やった事あるからな」

…という経緯である。ルーデルによって37ミリ砲の撃ち方などをバッチリマスターしてしまったのははワイ戦の次なる戦で名を上げる事になる。それは管理局のカノーネンフォーゲルと後にミッドチルダに跳梁跋扈するナチス残党から恐れられる、彼女のキャリアの始めであった。

一 閉話 ルーデルと智子

「ところで大佐……おいくつですか」

「ん？ ああ。もう20幾つだよ。」

「嘘お！？ 普通なら……」

「私は魔力の減衰とは縁遠い体質でな。まだまだ現役でいくぞ」

「さすがですね……負けそう」

ルーデルのあまりの根性に智子は根負けしそうだった。そして智子はこの後、美琴との共通点「相棒が百合な変態気質の持ち主」にため息をつきあい、互いに愚痴を言い合ったとか。それを見たルーデルはやれやれといったそうなの。

第100話「管理局のカノーネンフォーゲル（大砲鳥）の芽生え」（後書き）

ジャーク將軍の口調を訂正しました。

第101話「平和な日常」(前書き)

ハワイ戦後の地球圏の状況説明とほのぼのを兼ねています。

第101話「平和な日常」

―地球連邦軍は往時であれば有に一万を超える大艦隊を保有していた。その事実は征地球論が蔓延びつつあった時空管理局を大きく揺るがした。銀河中心の遠征から帰還中の「銀河殴りこみ艦隊」の残存艦隊が帰還すれば、連邦軍の艦隊戦力は大きく膨れ上がる。しかもそれは銀河各地の移民船団を含めない上での数である。それが接触以来、交渉の場で地球連邦政府が管理局に強気に接する理由であった。

―『地球連邦政府が号令を出せば、未曾有の大艦隊とその艦載兵器群がいつでも動員できる』―

地球連邦政府は長年の経験で政府間の交渉については一流のものを持つので、銀河殴りこみ艦隊の存在を活用したブラフで、管理局と対等な立場で交渉に持ち込んだ。つまりはかつてドラえもんも雲の王国に対して活用した「力の均衡による抑止力」であった。

―地球連邦政府、第二帝都「ロンドン」 バッキンガム宮殿

かつての大英帝国の繁栄を伝えるこの宮殿で2199年10月、初の公式な時空管理局と地球連邦政府の交渉の場が取り持たれた。管理局は20世紀頃の米国のように確立からわずか180年近くしか経過しておらず、現在の暦へ移行したのは70年いくか行かないかの過去。一方地球連邦政府は嘗ての国々の国連の体制下を含めれば250年を優に超える歴史を誇る。外交関係者達はまず、この時代にも君臨する英国王室の、女王陛下、にも謁見。

「女王陛下、万歳！！」

それは戦乱を経てもなお強大さを誇る地球連邦政府の力と権威を見せつけるために日本の皇室、ヴァチカンなどと並ぶ権威を持つイギリス王室も作戦に乗った、いわば「外交」。連邦政府の旗とその政府の事実上の支配者として君臨する日本とイギリスの国旗である日章旗とユニオンジャックが翻る中での会談。（一応ミッドチルダにも嘗ての戦乱の時代の各国王室の末裔はいるのだが、一市民として暮らしているために連邦政府のような外交作戦には使えない）

会談自体は平穏に進み、軍需も含めた通商条約の締結と互いの外交官の常駐などが正式に取りまとめられた。そのためミッドチルダには地球連邦政府の大使館が立つ事になった。これは管理局ではなく、ミッドチルダ政府としての公式決定である。翌日の地球圏の新聞の一面には、「連邦政府、ミッドチルダ政府と公式に国交を成立す」と大きく報じられた。

ハワイ戦の終結による束の間の平穏に安らぐ地球圏。そのイギリスに足を踏み入れた一人のウィッチがいた。ウィルマ・ビショップ。501で奮闘するリネット・ビショップの長姉である。容姿は妹にそっくりだが、ストレートのロングヘアーで、隠れ巨乳な妹と違って常識的な胸の持ち主。意外にも退役直後に入籍しているので、21歳にして既婚者である。彼女は未来の高度な航空戦の訓練課程を習得する必要がある事から未来に足を運んだ。母国のもう一つの姿であるイギリスに感心したりであった。

「やっぱりどこまで行ってもメシはまずいか……一応ウチらの時代よりは美味いけど」

ウィルマは世界共通でイギリスの飯は不味いことを再認識し、ため息を付く。彼女はカナダ（彼女の世界では王立ファラウェイランド）軍に在籍していたのでその事はよく理解していた。すっかり舌が英国人のそれでは無くなったためか、祖国の料理とは言え、お世辞にも美味いとは言えない。（それでも1940年代よりは格段に美味しい）。彼女は这个世界にはブリタリア連邦海軍最新最強を誇るライオン級戦艦の二番艦「テメレーア」に乗艦して来訪した。、イギリス、の国民と駐留部隊（旧イギリス軍）は自分らが手に入れる事の叶わなかった「ライオン級戦艦」の実物に歓喜。そのフィーバーは女王陛下自ら見に来るほどであった。その為、地球連邦政府は完成したばかりの同級4番艦「サンダラー」をイギリス製の1950年代世代の戦闘機の図面と実物の提供と引き換えに購入。帝都防衛艦隊に近代化改修の上で配備の決定を下したという。

「さて、どうするかな……デパートに行くか」

行動指針は決まっているが、取り敢えずデパートでこの時代のものを買うことにし、足を運んだ。この点は妹とは正反対であり、行動力の塊といえた。

「金は換金してあるし、何買おっかな〜♪」

張り切ってウィルマは英国最大手の百貨店の一つ「ハ〇ツズ」へ足を運んだ。建物自体は自分らの時代とは大きく変わっていないが、売るのは大きく変わっていた。まずは若者向けのファッション売り場（ウィルマ自身も忘れていたが、彼女は普通の年齢区分で言え

ば立派に若者である）で服を見て2着ほど試着してから買う。仮の住まいで使う家電の一分（テレビやビデオ機器など）もここで買い揃えておかなくてはならないので節約をしなくてはならない。

「すみません、TV欲しいんですけど……」

「お客様、こちらでございます」

「う、うええっ!？」

売り場に案内されたウィルマは驚愕した。なにせ種類が多いのだ。英国製、日本製、米国製など……世界各国の会社で作られたTVがところ狭しと置かれているのだ。店員は日本（扶桑）製を薦めてくる。性能もよく、米国製より壊れにくくできているとの事。日本（扶桑）製品といえば高品質の代名詞的存在。どのメーカーを買うか迷う。

「これにしようっと。シ〇ープって響きがいいし」

一目見て、シ〇ープの壁掛けテレビ（かつての液晶テレビの遠い子孫。ドラえもんも保有）を選び、それを買う。最後に娯楽を兼ねて、プレーヤー機能も持つゲーム機とソフトを買う。これで完璧だ。

使った金額は家電の設置代を入れても日本円でおよそ10万。この頃にはテレビやゲーム機は機能と価格のリーズナブル性が両立できているので家計にも優しい。早くも未来に順応している彼女であった。

家具の配置も終わった夜、元の世界から電話がかかってきた。応対してみると相手は501が解散した後はガリアの復興に従事している、妹のリネット（リーネ）であった。

「リーネ？ガリアの復興を手伝ってるって聞いたけど？」

「うん。お姉ちゃんこそ大丈夫？お母さん、心配してるよ」

「母さん……あたしの事信用してないな。一応それでも人妻なんだけどなあ……」

「お姉ちゃん……」

―受話器越しに頭を抱える妹の姿が目に見え浮かぶ。

―それにしてもリーネの奴……しばらく見ない間に変わったなあ。

ウィルマは妹の変化を感じ取っていた。兄弟の中では引込み思案気味なリーネ。8人いる兄弟姉妹たちの中で自分の道を受け継ぎ、501へ配属された。そのせいだろうか、声のトーンも以前より明るい。

―501で友達でもできたのかな？そうウィルマは目星をつけた。

「ところでお姉ちゃん、どうしてそっちに？現役に戻ったって聞いてたけど」

「そーなのよ。それで訓練ってわけ。敵は音速の壁を超えられるジェット戦闘機を使ってるから今までの常識は通じない。だから未来で音速の世界に慣れてこいってわけ」

「大変だね。わたしも凄く苦労したよ」

「あんたが苦労してるってことは相当大変ってことね……」

リーネは姉に501での苦労談を話す。訓練でコスモタイガーやバルキリー相手に狙い打つ苦労。機動性はおろか、スピードも並のスピード型ネウロイより速いからライフルを使うのは不利であることなど……ウィルマはそれを聞き、翌日からの訓練は辛そうだと妹にボヤいたとか。

一翌日 マーハム空軍基地

「総員、傾注！！このユーロファイター タイフーンは諸君の知る戦闘機とは全くちがう……」

ウィルマはイギリスの空軍基地で音速の世界に慣れるための訓練を受けていた。複座タイプの「ユーロファイター タイフーン」を用いて、ジェット戦闘機の機動がどういふものか体で覚えるのだ。ウィッチ達は後部座席に乗り込んでベテランパイロット達の荒々しい機動に耐える。スーパークルーズ性能を備え、21世紀頃の英国を支えた名機を訓練に使うのは時代が時代なら贅沢と言われるところだ。クロスカップルド・デルタ翼を備えた機体が加速する。ここから訓練が始まるのだ――

一空へウィルマ達を乗せたタイフーンの編隊が飛び上がる。

第102話「インフィニティ」(前書き)

本編の予定でしたが、マクロスフロンティア(ちよつと7も)編に変更しました。俺の歌を聞けえゝ！(by熱気バサラ)

第102話「インフィニティ」

一ドラえもん達はハワイ戦の功績もあり、正式に未来世界で軍の要請が出ていない時は自由に行動できるようにとり図られた。これはドラえもん達の行動が今回の戦いにいい方向で作用したためであり、軍も彼らの働きを高く評価したからであった。そんな中、「土佐」を初めとする残存部隊が日本へ帰還する途上でドラえもんは山南提督の呼び出しに応じた。

「なんでしょうか、提督」

「ウム……君たちにはしばらく休んだ後に欧州へ行ってもらいたい」

「欧州に？ 急な話ですね」

「そうだ。欧州は一部除き、今や鉄人兵団の牙城となっている」

「何故です？」

「開戦時の奇襲でベルギーを初めとする領域は兵団の手に堕ちている。陸軍の装備に旧式のものが多かったのもあって物量攻撃に対処できずに各個撃破されていた。今ではフランスのヌーボ・パリが戦線の最前線になっている」

「ヌーボ・パリ？」

「かつての巴里は一年戦争の惨禍で巨大な湖に成り果てた。そこで旧・フランスの出身者たちが中心になって再建しているのがヌーボ・パリ。ご丁寧ランドマークまで復元している町だよ。そこに我々は戦線の司令部を置いている」

フランス地域は連邦軍の欧州での最前線。ロシアからベルギーまでの広い地域は兵団の支配下。かの有名なノイシュヴァンシュタイン城、ディナン城などのかつての各国の城郭にも兵団の司令部が置かれている。その現状を山南は説明する。ドラえもんは固唾を飲んで

彼の説明に聞き入っていた。

「陸軍はなんで攻勢に出ないのですか？」

「装備の大半が旧態依然としたものだからだよ。軍の予算の大半は宇宙軍や海空軍に回されているから更新も滞りがちでね……攻勢に出たくともできないのだ」

それは地球連邦軍の財政危機を示していた。連邦軍の財政は度重なる戦乱でほぼ破綻状態にあり、予算の大半は宇宙からの侵略に対応するために宇宙軍や空海軍関係に優先的に回され、地上軍は今の連邦軍の首脳陣にとっての、敵が多いせいか、あまり顧みる事は無かった。だが、皮肉にもその施策が今次大戦では裏目に出た形となってしまった。モビルスーツ一つとっても、地上軍には未だに旧式になって久しい「RGM-79R ジム？」が残置しているという有様である。なので一部重要都市などは宇宙軍が海兵隊のように防衛任務に付いている。時間を置き、ハワイ戦で装備が更新された部隊の再建を待つて攻勢をかけるのが上層部の思惑なのだ。

「君たちにはまた苦勞をかけるが……幸い一週間ほど間は空いている。ゆっくりと休みたまえ」

「ありがとうございます」

一一週間か……短い気もするけど……戦時中ならしょうがないか。

ドラえもんは軍の行動に付き合っている現状を受け入れていた。鉄人兵団を倒すために来たのだから軍隊に協力してでも達する必要がある。兵団は強大だ。以前の戦いでは弾薬が尽きた後は破れかぶれの突撃しか出来なかった。それを考えると軍隊のバックアップがある分、今回は楽だ。しかし兵団の主力が欧州にいたとなれば軍もただではすまないだろう。ハワイは途中で敵が見捨てたようなものだ

から、比較的損害は軽い。だが、次は主力が待ち構えている。親友テレカも使っても戦う必要がある。そうドラえもんは結論づけ、山南に軍隊での慣例に従って敬礼し、部屋を後にした。

一なのはは自室で軍隊生活というものを考えていた。智子や圭子、ルーデルと共に生活を送る内に色々な事を身につけた。技能の中には普段の生活では絶対に使わないであろう銃の撃ち方やその整備法（古今東西、回転式・オートマチック問わず）まで……。家族が聞いたら泣くのは間違い無だろう。剣術も智子のそれを教わっている。実家に立派な剣術がある身ではあるが、今更実家の剣術をやるわけにはいかないので、智子に教えを請いた。

一中尉に憧れたってのもあるけど……フェイトちゃんと背中を合わせて戦いたい気持ちもあるんだよね……。剣術を始めたのは。

なのははフェイトと一緒に戦いたかったのだ。戦闘スタイルが違うために同じ戦場で戦うことは多くても、背中を任せ合う形で、共に戦った、事は殆ど無い。だからレイジングハートに連邦軍の手で改造が加えられたのを機に剣術を始めるのを考えた。穴拭智子という剣術の達人との出会いは渡りに船であり、彼女に教えを請うことに

したのだ。それはスバルも後押ししてくれた。

「なのはさん、フェイトさんから宅急便が来てますよ」
「本当!？」

ガバツとベットから跳ね起きると、軍服に着替えてドアの向こうにいるスバルを応対する。スバル共々宅急便を開けてみると手紙と数枚の写真、そしてフェイトがヴィータに買ったFIRE BOMB ERのアルバムCDが同梱してあった。

「フェイトちゃん、ヴィータちゃんにCD買ってくれたんだ」

「相変わらずですねフェイトさんは」

「うん。、そっち、でもフェイトちゃんは変わってないの?」

「ええ。なのはさんの訓練は厳しかったんですけど、フェイトさんのほうは変わってないですよ。なのはさんにはあたし達が無茶するのは許してもらえなかったですけど」

「え? あたしが?」

スバルはそういう。大人になったなのはの課した訓練は厳しく、バテそうになったのも一度や二度ではない。おそらく撃墜事件がスバルがいた時間軸の自分の心に強いトラウマを埋めつけてしまい、他人の無茶を許容できなくなったのだろうと子供のなのはは思った。それ自体はスバルとの出会いで、消えた、未来となったが、なのははバツの悪い想いをした。

—スバルがいた時代のあたしにライダーキックでも食わわしてやりたいよ……自慢じゃないけどフェイトちゃんのお母さんの時の戦いや闇の書の時は無茶しまくってたからなあ。それを棚に上げるのはどうかと思う……。

智子などに教えを請い、成長した彼女は無茶ばかりする自分を受け入れた。それが自分のありのままの姿であることを自覚していたからだ。スバルから聞いていると、その歴史の「大人の自分」はどのような成長をしたのだと考えてしまう。

「手紙はどうですか？」

「待って。読むよ」

手紙を開けて読んでみると、マクロスフロンティア船団でのフェイトの生活の様子が記されている。内容は黒江綾香大尉と一緒に生活し、剣術の稽古に励む日々。練度の点で役にたたない臆拔けの正規軍の代わりに、フロンティア船団の防衛を担う「S・M・S」という民間軍事会社の面々（表向きは運送業者を装う）との出会い、そして一人の歌手志望の少女と親しくなった事。名前はランカ・リー。話に聞けばゼントラーディという宇宙人の血が入るクォーターとの事。過保護気味な義理の兄（フェイトはS・M・Sと仕事をする関係上、オズマ・リーとランカ・リーとの関係についてオズマの口から出自を聞く機会があった）の反対を押し切って小さい事務所からデビューのオフアーを受けたとの事。フェイトは応援しているらしい。フェイトはカラオケで歌が好きなのを見せていたので、ランカを応援するのもわかる。写真にフェイトと写っている15、6歳くらいの緑色のショートカットヘアの少女がおそらくランカ・リーだろう。フェイトはうれしそうに笑っている。屈託の無い天真爛漫な笑顔だ。正直言って羨ましい。しかし一方で戦いが過酷であることも告げていた。S・M・Sの誇る最新鋭機「VF-25 メサイア」でようやく撃退が出来る「バジュー」という敵……フェイトが乗る機体である「VF-17 ナイトメア」では生き残るので精一杯であるとフェイトは記している。些か旧式であるので今後はAVFに機種転換する予定だとの事。

「バジュラか……宇宙怪獣といい、プロトデビルンといい……わけがわかりませんよ……」

「うん。フェイトちゃん……大丈夫かな……」

なのはとスバルは自分たち以上に過酷な戦場に身をおいているフェイトの身を案じた。その心配は的中していた。

一地球でハワイ戦が始った頃 銀河中心部 マクロス・フロンティア
ア

「ありがとうみんな!! 愛してる!!」

フロンティアのライブホールで銀河の妖精と謳われる、この時代の新進気鋭のアイドル「シェリル・ノーム」(かつてのマヤン島事件の当事者の一人のマオ・ノームの実の孫。地上と宇宙を行き交う人間達と違い、移民船団にいる人間達には地球圏と、フォールドやワープでも解消しきれない時間差が生じる場合があるため、『地球圏の20代の人のもとにほぼ同年代になった自分の子や孫が現れる』事も珍しいことではない)のライブが行われている。このライブの観客にはランカ・リーも含まれていた。不思議にもランカとシェリルはニュータイプの感応にも似た現象を体験した。それはシェリル

が身につけていたフォールドクォーツの力によるもの。シェリルはランカに「一緒に歌ってほしい」と語りかけ、ランカも無言でうなづいた。

—そして音楽が奏でられる。「二人」の歌声が奏でるハーモニー。戦に疲れる人々を勇気づける歌。その曲名は「インフィニティ」—
……。その歌は不思議と宇宙に響いていた。

「おおおおおっ!!」

—フェイトは柄にもなく、雄叫びをあげていた。マクロス・フロンティア船団を守るために、名機と名高い「VF-17 ナイトメア」を駆ってバジユラと戦っていた。バジユラのミサイルのようなものの雨霰のような弾幕から逃れるために熱核バーストタービンエンジンの大推力から生み出される機動性でバレルロールなどの機動を急激に行ない、回避する。このナイトメアはISCが無い旧来型のバルキリーなので、バリアジャケット（なにげにソニックフォームである）を纏っていても、なおも軽減しきれない（ナイトメアの最高速度はM21.0という凄まじい速さ）高機動モードの高負荷に体がシートに押し付けられ、顔をしかめずにはいられない。戦闘機乗りをしているとこういった事はつきものだ。ヘッドアップディスプレイにミサイルが目標をロックしたという音と表示が出る。（最新鋭機ではヘッドマウントディスプレイの要素も取り入れられたものが装備されているが、旧型機はアビオニクス改善で留められているのでヘッドアップディスプレイのまま）

トリガーを引き、ミサイルを撃ち、そのまま一撃離脱を行う。フェイトの戦闘スタイルが反映された戦い方である。次いでそのままバトロイド形態に変形し、なおも接近する敵弾を迎撃する。出来れば接近戦を行いたい、不運にもVF-17 ナイトメアは火力による制圧が主なので接近戦の装備はない。

「これが後継機のシュトゥルムフォーゲルならピンポイントバリアパンチできるんだけど……あとでもらえないかな……？」

フェイトは後継機で、接近戦にも対応できる「VF-22 シュトゥルムフォーゲル？」を欲していた。その願いは後に運良く叶う。そして、最前線へ突撃をかますS・M・SのVF-25F（カラーリングは白／赤と黒。早乙女アルト機）を援護する。

「アルトさん、援護します！そのまま突っ込んで！！」

「悪い、恩に着る！！って……その格好はどうかできないのか？」

「え、ええ。一応大気圏内の高速戦闘はこれでしてましたから……」
「そ、そうか……」

アルトが通信越しに目のやり場に困っているのがフェイトにも分かった。彼女のソニックフォームは一見すると袖のないレオタード姿とも取れる。どこことなく目のやり場に困るのはわかる（アルトは実家が歌舞伎役者の家系で、自身も天才女形として名を馳せたことがあるのだが、それでも男としての羞恥心は持ち合わせている）。

「……無茶するなよ。お前を死なせたら綾香大尉やランカのやつに申し訳がたたないからな」

「アルトさんも」

「ああ」

それだけ言うと2人はバトロイド越しに敬礼しあう。アルトはシェリルが落としていったフォールドクォーツから聞こえてくる歌（奇しくもこの時の歌は偶然にも場面にあうポップ調の音楽である「インフィニティ」であった）に乗るかのように、ファイター形態でバジュラの大群へ突っ込む。その中心には戦艦型が控えている。

「やめろアルト！！相手はハリネズミのような艦なんだぞ……！！」

ミハエル・ブランが通信越しにアルトを制するが、それでも彼は突っ込んだ。どんなに対空兵装が充実した「艦」であろうが、接近すればその力は存分に発揮できない。それは250年ほど前の坊ノ岬沖海戦における大日本帝国海軍の象徴であった戦艦大和の対空戦闘の戦史で証明されている。目的は敵に捕まったルカ・アンジェローニの救出。それさえ果たせばいい。

アルトはひたすらに叫びながら突っ込んだ。

「ハリネズミだろうがなんだろうが……中に入っちゃえばああ！うおおおおおお！！」

アルトの駆る、スーパーパック装備のVF-25Fが華麗に舞う。バルキリーに乗ってまだ日の浅いフェイトなどとは次元が違うほどの華麗な空戦機動。これぞ戦闘機乗りのプロと言わんばかりの動きでアルトは三段変形を駆使し、バジュラに迫る。そしてそれを見届けたフェイトはマクロス・クォーターの直掩に回る。

（アルトさん……）

アルトの行動が成功に終わるのを祈り、マクロス・クォーターの上
空で待機する。これがフェイトが初めて味わった「バルキリー」に
よる大規模空戦であった……。

—そして。ある星で、一人の男が赤いVF-19のコックピットで、
どこからか聞こえてきた歌に触発されて歌いだす。男の名は「熱気
バサラ」。

「うおおおお!! 俺の歌を聞けえええっ!!」

ロック調の音楽を奏で、彼もまた歌いだす。かつてマクロス7船団
を歌で救ったのと同じように。その音楽はお馴染みのナンバー「突
撃ラブハート」であったというが、彼の存在はまだ誰にも気づかれ
ていなかった。

第103話「偉大な勇者とリバウの魔王」(前書き)

今回はダイナミックプロ系スーパーロボットシリーズ(主にグレートマジンガー&マジンカイザー)とストライクウィッチーズの話です。

第103話「偉大な勇者とリバウの魔王」

一抑止力。それは時としてその時々最強兵器が担う場合がある。20世紀初頭の戦艦。20世紀後半から22世紀後半までの空母と原子力潜水艦。そしてその後の人型機動兵器。

地球連邦政府は改革派の提言により、かつては平時に運用すること自体がタブー視されていた「ガンダム」タイプのモビルスーツ、「高性能の可変戦闘機」、「スーパードロイド」を抑止力として平時でも運用させていた。スーパードロイドは「一機で大軍団を蹴散らす」という力をあえて誇示することで、地球圏のみならず宇宙の星間国家へ地球への侵攻を躊躇せる効果を発揮した。その一角を担う「マジンガー」は今、日本でそれぞれ最終調整を受けていた。

ー日本 光子力研究所

「マジンカイザーの最終調整はもうじき終わる。だが、このカイザーは異端児だ。何故コレをゲッター線は……」

光子力研究所で整備を受けているマジンカイザーは本来のマジンガーの開発系統に属さない。弓弦之助博士はその点でカイザーをゲッター線が産みだした異端児と称したのだ。開発系統で言えばグレートマジンガーが現在最強のマジンガーであるが、マジンカイザーは偶発的にグレートをも超越し、真ゲッターロボと対等の力を持つに至った異端児。先のギャラクシー船団とフロンティア船団の初

の船団間戦争ではバジュラクイーンさえも超合金ニューZαの前に
は傷ひとつ負わせなかったという経緯がある。バジュラの女王を以
てしても衝撃で吹き飛ばすのが精一杯というその性能は魔神を統べ
る者に相応しい。

「先生、カイザーはどうして生まれたんでしょうか」

兜甲児が弓に質問する。彼もマジンカイザーの誕生の秘密が気にな
っているのだ。世間には「グレートマジンガーの発展型」と伝えら
れてはいるが、実際はプロトタイプが進化した姿であるという信じ
がたい事実を。

「ウム。全てはもう何年も前……君のおじいさんがちょうどマジン
ガーZを作り始めた頃の話だ……」

弓弦之助博士は甲児に話す。マジンカイザー誕生の秘密を。彼によ
れば最終的に完成するマジンガーZ以前の複数のプロトタイプのう
ちで最も出力が高く、不安定な挙動を見せた一機があり、それがカ
イザーへ進化した個体だったのではないかという推測も交えて。

「それじゃカイザーはそれが進化した姿だと？」

「確証はない。君のお父さんの創造博士もプロトタイプは複数あっ
たと話しているからね。そのプロトタイプはまだ人の形はしていな
かったはずだったとの事だし、カイザーは武装も含めて、すべてが
完璧な状態で発見されている」

「姿がグレートマジンガーに近くなったのは……？」

「グレートマジンガーの姿がマジンガーの行き着く「ひとつの形」
だったのだろう。マジンガーZに近い姿であった「それ」が年月を
かけて少しずつグレートに近い姿へ変化していったのだろう」

彼はマジンカイザーがZでなく、グレート寄りの姿なのはグレートマジンガー（ひいてはゴッドマジンガー）の姿がマジンガーの行きつくべき姿であり、マジンカイザーがそうなのは当然であり、必然だという。甲児もその説明に納得し、カイザーを仰ぎ見る。

「マジンカイザー……お前は俺に何をさせるつもりなんだ……」

甲児は一人、そう漏らす。バジュラクイーンさえ意にも介さぬほどの強大な力。マジンガーZを作った祖父がもし、いまこの場にいれば「神をも越え、悪魔を倒せる」と称しただろう。ミケーネはまだ帝国そのものは健在であるし、百鬼帝国は暗躍と胎動を続けている。カイザーがここにある理由を甲児は考えていた。そして行方の知れぬデビルマジンガー。かの「デビルガンダム」もそうだが、悪魔の名を冠するマシンは元がなんであれ、災厄をもたらす。

―カイザーはもしかして死んだ祖父がゲッター線の力を介して自分に与えた、人類の最強の「剣」なのかも知れない。

甲児はロボット工学の名家の出である。それ故にカイザーが自分の手に渡った真の理由に薄々と気づいていたのかもしれない。弓弦之助博士はこの時の甲児の様子を後にそう語った。

一 科学要塞研究所

ここ、科学要塞研究所ではグレートマジンガーの整備が行われていた。ハワイ戦では要塞のトーチカや火砲破壊に重宝されたグレートマジンガーであるが、外部装甲に目立った損傷はないが、念のために内部部品のオーバーホールを行う。装甲を一旦取り外し、内部構造を丸出しにして行う。

「ん？鉄也兄ちゃんがないけど、お父さん知らない？」

「ああ、鉄也くんなら買い出しに出かけた。」

「買い出しに？鉄也兄ちゃんまた甘いもの食いまくってくるつもりだな」

兜剣造博士は息子のシローに剣鉄也がこの日何をしているか教える。すると、彼はボヤク。兜博士の息子の一人で、甲児の弟である兜シローは兄とは別々に暮らしている。現在は父親の名乗りをあげた兜剣造博士と共に親子水入らずで科学要塞研究所で暮らしている。彼は剣鉄也が繁華街に買い出しに出かけた目的をあっさりと見破った。子供ながらに鋭い。

彼の言う通り、剣鉄也は戦闘のプロを自認する屈強な戦士であるが、周囲に「劇画顔」、「老けてる」と揶揄される、濃い顔立ちに似合わず、大の甘党という歳相応の側面がある。彼のそんな意外な側面が表に出たのだ。

一 伊豆 とある繁華街

「……ん？」

剣鉄也は喫茶店で特大の宇治金時をほうばっていたのだが、そこで見慣れた扶桑海軍のセーラー服を着た、一人の少女が目に入った。この時、彼は知らなかったが、その少女は西沢義子。扶桑皇国海軍の撃墜王として名を馳せるウィッチであった。一兵卒としては最強レベルを誇るが指揮官としての適性は無きに等しいという欠点を持つ。彼女は生来の自由奔放な性格により、軍が半ば扱いあぐねているために前線任務についていないのと、近頃、引退したはずの軍の同期や先輩達が再度前線に駆り出されているという報が気になり、それを調べる目的もあって未来世界へ来たのである。ちなみに彼女は坂本、竹井の両名と同期であり、史実では坂井三郎や笹井醇一等と共に台南空のエースとして栄光の大日本帝国海軍航空隊の名を後世に知らしめた西沢広義海軍中尉に当たる。（奇しくも彼女らも三羽鳥と称された）

「くそおおおっ！なんで死んだんだよ、太田あ……あたい達はいつも一緒じゃなかったのかよお……！」

彼女は悲しみに暮れていた。未来世界へ来て早々にリバウでの戦友であった「大田」

飛曹長が撃墜され、戦死した事が竹井醇子から電話で知らされたからだ。技能優秀、敢闘精神旺盛な彼女を撃墜したのはF-14D「スーパートムキャット」。これは史実の太田敏夫飛曹長がF4Fに撃墜された事実と一致し、因果が彼女を飲み込んでしまった事を示していた。（同じグラマン社製の戦闘機に撃墜された点でも同じ）因果を乗り越えた形の西沢にとってそれは衝撃的であり、「自分がいれば死なせなかった」という悔いが彼女を自暴自棄に走らせた。た。

（まさか……あの時のアレが最後になるなんて……ッ）

その想いのままにサイダーをやけ飲みする。明るい性格の彼女かしらぬ行為であるが、また靴を並べて戦う事を誓い合った仲間のあっけない幕切れ。無敵・最強を自認する西沢にとってこれ以上のショックは無かった。鉄也はそんな彼女を見かねたのか、席を移動して西沢の隣に移る。

「隣、座っていいかい？」

「あ、ああ。どうぞ」

……と上手く場を作る。その点は長年炎ジュンと共に生活しているのが功を奏したと言っているだろう。鉄也は落ち込んでいる西沢から上手く事情を聞き出し、自己紹介をする。

「自己紹介をしておこう。俺は剣鉄也。スーパーロボット「グレートマジンガー」のパイロットだ」

「グレートマジンガー？ ああ、噂には聞いたことはあるが……あんたがそうか」

「ああ」

「いいよなあんたのマシンは。無敵で……」

「いや世の中に無敵というのは無い。最強というのはあるがな」
「どういう事だよ」

「どんなに強いモノでもどこかに弱点はある。それを補っていくのが世の中の常だ。例えば元祖スーパーロボットのマジンガーZだって最初は空を飛べず、海にも弱かったが、改良を重ねて強くなっていった。それは俺のグレートとて同じだ」

一般にグレートマジンガーは「無敵」として知られているが、ミケ

ーネ帝国との戦いではミケーネの繰りだす戦闘獣相手に苦戦する事もまあり、強力になる戦闘獣に対抗すべく改良を繰り返した。その成果が幾つかの追加武装であり、グレートブースターである。元々ミケーネとの交戦を想定して造られたグレートマシンガーでも改良を重ねていくというのは、正にスーパーロボットといえど「兵器」であると知らしめる事実であった。

「無敵なんてものはどこにもない。力に溺れた歴史上の国々がそう自称し、滅んでいったのがそれを証明してる。俺達の世界の大日本帝国やアメリカ合衆国のようにな」

鉄也は20世紀前半のアジアの覇者であった前者、20世紀後半からしばらく世界の覇者であった後者を例にして西沢に無敵という言葉の意味を説く。前者は保有していた空母機動部隊や航空部隊の一時の栄光に、後者はその高度な軍事力に溺れたが故に破滅の結末を迎えた国々。無敵とは軽々しく口にするべき言葉ではない。あのマシンガーZさえも無敵を具現化するのは無理だったのだから。それを体現できるのは今のところマシンカイザーと真ゲッターロボの両巨頭のみだ。

「……そうかもな。あたしはあんたらの世界で言えば多分ラバウル航空隊にあたる「リバウ航空隊」にいた。場所は全然違うけどな。そこであたい達は無敵って言っていていくらの戦果を上げた。これ以上のモノはないってくらい……。力に溺れてたってのは間違っていない。その時は負けるなんて考えが無かったからな……」

西沢は太田が撃墜されたショックからか、塞ぎこんでいた。ウィッチ達も仲間が死ぬことは経験しないことはないが、西沢の場合は以前の所属部隊が「無敵」とも称されていた事、そこでの戦友があっけないほど簡単に撃墜され、戦死したという事はこれ以上ない衝撃

だったからだ。

「戦争で誰も傷つかない事など無い。俺も戦いの中で多くの者を失い、友の父親であり、親代わりの人をも危うく見殺しにしかけた……」

「え……？」

「俺は孤児なんだ。物心つくかつかない頃に引き取られ、グレートマジンガーのパイロットとして育てられた。それで俺は家族がいるその友達にどこかで嫉妬していた。戦いで人その人を見殺しにしかけたのは俺の罪だ」

それは鉄也の本心だった。ミケーネ帝国との一大決戦を前にして、自身の嫉妬で兜甲児と対立し、戦闘になれば、危うく兜剣造博士を見殺しにしかけた事。孤児ゆえの寂しさが心のどこかに残っていた事が自身の甲児へのコンプレックスとして具現化してしまった事を彼は恥じていた。鉄也はそれを「自分の罪」だと言い、兜甲児らに對して重い十字架を背負って生きている事を暗に西沢に示した。

「戦いの中で誰かが傷つくのなら誰かが守るために戦えばいい。俺、たち、のようにな」

「鉄也さん……」

「また何か悩んだら俺のところに来てくれ。いつでも相談にのる。連絡先はそこに書いてある」

鉄也は最後に戦いが起きるのなら自分が戦うことで何かを守れると言いつ残し、喫茶店を後にする。西沢は鉄也と触れ合うことで何かを感じ取ったのか、鉄也が置いていったメモを

大事に持ち合わせたカバンに入れて、勘定を行なって喫茶店をでる。鉄也と話した事で、心のもやもやが晴れたように晴らかな顔をしていた。そして自分なりに大田を吊うと誓った。

一 翌日 科学要塞研究所

「はい。こちら科学要塞研究所……何！？それは本当かね！？」

電話の会話は深刻であるようだった。通話を終えた兜創造博士は青ざめた表情であった。所員の一人が創造に話しかけてみると……。

「今すぐ光子力研究所へ電話をつなぎ給え。緊急事態だ」

「は、はい！！」

光子力研究所へ電話がつなぐと、出たのは甲児であった。弓弦之助博士はカイザーの最終調整が大詰めに入ったので格納庫に根詰め状態だとのことで、甲児が応対したのだ。

「どうしたんですお父さん」

「甲児、落ち着いて聞いてくれ。欧州であしゅら男爵の姿が目撃された」

「!?!? そんな馬鹿な……あしゅら男爵は……確かにあの時……海底要塞と一緒に」

「あしゅら男爵は元々ミケーネの人間だ。闇の帝王が蘇らせていてもおかしくはない」

甲児は信じられないようだった。自身が討ったはずの祖父の仇であるあしゅら男爵が再びこの世に蘇ったなどと。しかしミケーネの人間という出自を考えると闇の帝王が蘇えさせても別段不思議ではない。

「軍の兵士によればあしゅら男爵は真紅のゲッタードラゴンを率いていたそうだ……」

「ゲッタードラゴンを!?!? あれは新早乙女研究所にある一機しかないはずじゃ」

「わからん。とにかくグレートマシンガーを整備が終わり次第、すぐに発進させる。お前もカイザーを出動させてくれ」

「わかりました」

甲児はあしゅら男爵が蘇っただけでなく、さらにこの世に一機しかないはずのゲッタードラゴンを複数率いていたという未確認情報に動揺しつつもカイザーの最終調整が終わるのを待つ。そしてそれとグレートマシンガーが発進したとの情報が入ったのはすぐの事だった。

一伊豆 上空

『スクランブルダアーッシュ!!』

オーバーホールを終えて早々、科学要塞研究所から勇ましく発進するグレートマジンガー。偉大な勇者の異名を持つグレートの目的地は欧州戦線。そこへ進路を取る。するとリーダーに妙な反応が映る。

『ん?』

グレートをその方角へ向けると……。

「鉄也さん……!!」

『義子ちゃん!? どうしたんだ、こんなところに』

ストライカーユニットを履いた西沢義子がなんとグレートの後を追ってきたのだ。履いているストライカーユニットはロールアウト間もない、扶桑最新鋭かつ最後のレシプロ艦上戦闘脚「十七艦上戦闘脚 烈風」であった。

「あ、あたしも……あたしも連れて行ってくれ!! 頼む!!」
『な、何イ!?!』

鉄也はグレートマジンガー越しに驚き、仰天した。ご丁寧にグレートマジンガーもそのような動作を見せている。やがて懇願する西沢に鉄也も根負けしたのか、グレートについていくことを了承した。

『うゝむ。ついていくはいいが、俺が行くところは欧州だ。そいつじゃ飛べないぞ。それに途中には連邦軍の基地はインドしかない』
「そ、そうかあ………」

『そう落ち込むな。左手に乗ってくれ。それなら問題ない』
「わかった！」

パアツと西沢の顔が明るくなる。烈風の航続距離は零式より短い。
(紫電改よりは長いが) 魔力の節約も兼ねてグレートマジンガーの左手に乗っかり、ひとまずストライカーユニットのエンジンを止める。

こうして、剣鉄也の駆るグレートマジンガーは西沢義子と共に欧州へ向かう。

そして欧州戦線で暗躍する兜家の仇敵、「あしゅら男爵」。それは何を意味するのであろうか……。

第104話「偉大な勇者とリバウの魔王 2」(前書き)

前回の続きですが、最初に今後についての伏線があります。

第104話「偉大な勇者とリバウの魔王 2」

ーグレートマジンガーを追って、光子力研究所から発進したマジンカイザーであったが、日本のとある付近に差し掛かった所で、一瞬、だけ連邦軍のリーダーサイトから消えた後、復帰したが、何故かストライカーユニットとほぼ同じ規模のリーダー反応が「一個」増えていた。連邦軍の担当者は付近のウィッチが合流したのだと（ちやうどウィッチ達が近くの空域で演習中であつたため）思い、気にも留めなかつた。だが実際はウィッチとは全く違う「何か」であつた。兜甲児は思いがけず『連れてきてしまった』、それ、に詫びたという。その何かの正体は何か。少なくとも今は多く語れない。だが、『男性に代わって女性が社会の主導権を握り、それをある兵器が実現させた世界』から兜甲児が連れてきてしまった、パワードスーツを纏った一人の日本人の少女ということだけは確かであつた。何事も無く飛行するマジンカイザーのコックピットで兜甲児は少女の今後について考えを巡らしていた。共に「飛びながら」。

「まいったなあ……どうしよう」

……と、諦めのため息をつく兜甲児。降りたらその少女にいい詰めよられるのは間違いない。どう説明するか、留学途中であつた頭で必死に考えるのであつた。

ーグレートマジンガーはインドのマドラス基地へ向けて飛行していた。中国とロシア地域のほとんどが兵団の手に落ちている以上、同大陸を突っ切って飛行するのは如何にグレートマジンガーとさえど、単機では危険である。回り道をしつつ連邦軍がなんとか食い止めている沿岸地域を通ってインドへ向かう。

「鉄也さん、着いたかあ？」

『今、マカオを通りすぎるところだ。まだまだだぞ』

グレートの手で眠っている西沢義子はストライカーユニットを外しているが、念のためストライカーユニットはロープでグレートの手に固定している。風に飛ばされないように。香港で休憩を挟みながら2人は一路、インドへ向かっていた。

「烈風の航続距離は紫電改よりはマシ、零式より短いからまだ使えねえか……」

『烈風か……こっちじゃ実戦に参加できなかった上に、カタログスペックが完成した時期が戦争再末期なのに1942、3年頃の水準だったから散々に言われてるんだよな』

「国情の違いかねえ。ここじゃ烈風はなんか評価低いが、あたいの世界じゃ零式の正統後継機だって言うんでウィッチから人気高いんだけどなあ」

『まあ、実戦未参加兵器のことなんてどうとでも言えるからな。ジ

オンのモビルスーツなんかによくあるんだよな……マニアの間で』

戦闘機として不遇の運命を辿った烈風であるが、西沢の世界ではウィッチ達が待ち望んだ零式の正統後継機として名を馳せている。西沢に回されたストライカーユニットはその先行量産型のA7M1である。ちなみに501の坂本美緒少佐も配備を熱望している一人で、使用している「紫電」一一型と二一型に不満を持ち、零式の特性を受け継ぎ、最新鋭機らしい速度を機動性と両立している烈風を使いたいと軍上層部に要望書を書いているとか。

2人の眼下にはマカオの風景が広がっている。中国統治時代やポルトガル植民地時代の残滓が残る街並みが広がる。各時代の色々な街が入り交じるこの地を飛ぶグレートマジंगाー。

『もうじきタイに入る。そうしたらタイ料理をおごってやるから、食事はもうちょっと我慢してくれ』

「本当！？いやったあ！！あれ食ってみたかったんだ」

西沢はタイ料理を食べられる事を鉄也から教えられると、うれしそうにはしゃいで破顔した。西沢は未来の人間の目で見ると、言動などから実年齢よりも数歳ほど若く見られるらしく、鉄也も自身より年下なのは間違いないが、多分16歳くらいであろうと見込んでいた。しかし実際は彼とそんなに変わらず、18歳になったばかりである。それを知ったら彼はどのような顔をするのであろうか。

―欧州戦線

「フハハ……ハハハッ！！来るがいい剣鉄也、そして兜甲児……このゲッター軍団で貴様らに地獄を見せてくれる！！」

欧州のとある地でミケーネ帝国の技術により黄泉国から蘇った、兜甲児、いや兜家にとつての仇敵であったドクターヘルの腹心「あしゅら男爵」が暗躍していた。あしゅらは元来のミケーネの臣民として行動しており、今はミケーネ帝国の闇の帝王の配下として行動している。なのはを撃墜したゲッターロボ號も闇の帝王より手渡された手駒である。つまり彼はなのはをこの世界に留ませた原因を作った張本人でもある。

ミケーネ闇の帝王は時空管理局の行動を注視しつつ、百鬼帝国と同盟を結んだ。すべては兜甲児、剣鉄也、流竜馬達の打倒のため。そのために並行時空から様々な兵器を入手し、自らの手中に収めていた。

その内の一つで、流竜馬らの駆る真ゲッターロボを打倒するための切り札は今、あしゅら男爵の手中にある。仁王立ちで無数の本来のゲッターと色違いのゲッターロボGの各形態が鉄人兵団と地球連邦軍を問わず、すべてをゲッタービームやゲッターサイクロンなどの超兵器を使ってなぎ払い、阿鼻叫喚の地獄絵図を出現させる。

「さあ、世界最後の夜明けに懺悔せよ！ぬわあはははははあ……！！」

まるで並行時空で凶氣に堕ちた早乙女博士の如き言いようで、あしゅら男爵は高笑いする。ゲッターを悪に利用する闇の帝王達。それに反応するかのように日本でゲッター炉を唸らせる真ゲッターロボ。そしてそれに呼応するかのように目に瞳が出現する『本来』のゲッタードラゴン。ゲッタードラゴンはまるで何かを急ぐように少しづつ進化を始める。欧州戦線で猛威を奮うゲッターGの本来の姿がいったい何であるか理解しているかのよう……。

欧州の町をまるでかつてのとある有名なアニメのワンシーンのごとく炎に包み、全てを塵に還していく無数の真紅のゲッタードラゴン。人も動物も建物も全てが炎の中に消えていく。文明の破壊者のように闊歩するその姿は現地の人々に絶対的な恐怖を埋めつけ、現地の政府をミケーネに屈しさせた。そこにはかつての「お許し下さい、ドクターヘル」と常に作戦失敗を咎められ、謝るような情けない姿はなかった。今、そこにあるのはミケーネの有能な臣民としての姿であった。この予想外の事態に、開催された地球連邦議会は紛糾したものの、最終的に国防族の「ジョン・バウアー」議員とゴップ議長
の提言でスーパードロボットの全面的投入とロンド・ベル隊を始めとする軍・民間問わず、動かせる実働戦力を準備が整い次第、欧州戦線へ順次派遣することが全会一致で採択された。

―日本 呉

呉に帰港した（2199年当時、ロンド・ベル隊旗艦のラー・カイラムの地球での母港は呉である）ラー・カイラムの格納庫では一機のモビルスーツの整備が進められていた。RX-93「Vガンダム」のフルアーマー形態「FA-93HWS、Vガンダム HWS装備型」である。これは強化型のHi-Vガンダムが1944年に送られて実戦テストを行なっている都合上、受領ができないアムロのためにアナハイム・エレクトロニクス社が既存のVガンダムの強化策としてハワイ戦の途中より行なっているフルアーマープランである。その全武装が全てフォン・ブラウン市より届き、装備が行われていた。

「ようやく来たか……ヘビー・ウェポン・システム……」

アムロ・レイは格納庫に搬入される物資を見るなりそういった。彼はF91などの新型機が登場したことで必然的に起る、Vガンダムの相対的性能低下を懸念しており、そのためアナハイム・エレクトロニクス社の提案したヘビー・ウェポン・システムの導入を了承し、彼による設計の一部見直しを経て配備されたわけである。ハイパー・メガ・ライフルなどの追加武装が格納庫のウェポンラックに置かれる。

「凄いですねあのライフル」

「ああ、圭子君か。あのライフル、一応精密射撃もできるというが……どうもね」

アムロに加東圭子が話しかけてくる。階級は加東圭子の方が一階級上（少佐）であるが、年齢的にアムロのほうが上なのと、実戦経験

もアムロに対し一步譲るので、圭子は普段、アムロに対して年の功の要領でアムロに敬語を使って接していた。(もちろんTPOは理解しているので公の場ではアムロは圭子に対し配下としての言葉遣いになるが)

「どうしてです？」

「精密射撃を行なうと隙が大きい。近頃のモビルスーツ戦じゃビームシールド持つ機体も増えてるし、クロスボーン系列のショットラッサーは厄介だ。果たしてあのライフルでビームシールドをぶち破れるか……」

アムロはコスモ・バビロニア建国時の動乱でビームシールドの威力をまざまざと目撃した一人。その当時に目撃したそこそ強力なはずのヌーベルジムの専用ライフルの攻撃を完璧に防ぐ防御力。ウエスバーやダブルビームライフルなどの強力な火器でなければ撃ちぬけないというのはコスモ・バビロニアの動乱を経験した連邦軍兵士には恐怖として染み付いている。それはアムロも例外ではない。いつもガンダムタイプを使用できるわけでは無いので、軍の制式機の火力アップを上層部に意見具申を行っていた。その結果がウェスバーの制式採用であり、ハイパーメガライフルや「ビームマグナム」の試作となって現れた。

「心配なんですか？」

「ああ。コスモ・バビロニアやザンスカルとの戦争を生き残った兵士は皆、そういう心配をするのさ。俺もそうだ。ビームシールドはあの時、それだけ革新的だったのさ」

「撃ちぬけない恐怖ってのは私もありますね。ネウロイが出てきて、装甲が強化された新型だったときは軽く絶望感味わいました」

「戦いつてのはそういうものさ。終わりのない競争みたいなものにも例えられる。ある兵器が発達すればその兵器に対抗できる……っ

て具合にどんどんエスカレートする」

「人間ってやっぱりそういう生き物なんじゃないか」

「かもな。いくらニュータイプになろうが動物としての本能は変えられないんだろうな……だから戦いは起こり続ける。凝りもせずに」

「でも戦いを止めるために私たちがいる……そういうわけですね」

「ああ」

（シャア……俺はあくまで人類に絶望はしない。あの時の言葉は嘘じゃない）

アムロと圭子は会話を続ける。その時の圭子は少し楽しそうだった。その様子を目撃した穴拭智子はあまりの衝撃に飲んでいたコーヒートを吹き出してしまったとか。

第104話「偉大な勇者とリバウの魔王 2」(後書き)

アムロの天然スケコマシ(笑)な側面を描きました。

アムロらしさがかけている場面があったのでそこを訂正しました。

第105話「FIRE WARS」(前書き)

前回の続きです。

第105話「FIRE WARS」

一兜甲児は最強の魔神、マジンカイザーと共に一時的に並行時空へ転移してしまっていた。その時間は兜甲児の体感時間にして、およそ数ヶ月。その間、甲児は色々と苦勞して生活費を工面していた。マジンカイザーはその世界では世界のパワーバランスを変えうるところか、ある兵器によって変革してそれが安定した社会をも三度変革させ得る力を持つので秘匿し、元の世界に戻る方法を模索しつつ、あくまで一市民として生活していた。その内にある少女と知り合った。その少女の名は篠ノ之箒^{しののの ほうき}。ポニーテールが印象的な少女である。甲児は不可抗力ではあるが、間違つて銭湯の女湯に入ってしまったという失態を犯した。それで旅行中で、銭湯に入りに来ていた彼女に更衣室で竹刀を持って追い回されるという事態に陥った。

「待ってくれ、これは事故なんだああ〜!!せ、せ、せっ……説明するから!!」

「女湯に入る奴のどこが事故だ〜!!待てえ!!」

甲児は伊達にスーパーロボットの搭乗者をしているわけではなく、彼女の竹刀の攻撃を全て見切つて回避する芸当を披露。マジンカイザーの武器には剣が含まれており、剣戟を繰り広げる事もあるので自然に身についたと思われるが、仮にも箒は剣道の全国大会優勝者という経歴の持ち主である。その攻撃を見切る芸当は中々できない。彼女としてもこれには驚き、若干動揺した素振りを見せる。

「はああっ!!」

「そうはさせるかよ!!」

凄まじい速さで振り下ろされる竹刀を甲児は必死の形相で真剣白刃取りで受け止める。甲児の普段の技能がここで生かされた形となった。力はスーパードロボットの重い操縦桿を日頃から動かしている甲児の方が上なので、箒が竹刀を押そうとしてもびくともしない。この時、甲児は祖父がマジンガーZを与えてくれた事を再び心から感謝した。

「あらいけない。出した男湯の案内表示を間違って女湯の方に置いてたわあ」

……との番頭の老婆の声で甲児は身の潔白を証明される事になり、息を大きく吐き出し、安堵した。

「すまないな。追い掛け回してしまって」

「普通に考えりや当然さ。こっちこそごめん。俺は兜甲児。よろしくな」

「ん？どっかで聞いたような名前だな……。まあいい。私は篠ノ之箒。よろしく頼む」

「あ、ああ。それはよく言われるんだよな……」

甲児はそう言って誤魔化したのが、内心は凄く動揺した。自分の戦いが並行時空ではアニメーションとして放映されている事は剣鉄也から伝え聞いていたのでその点を疑ったのだ。その場では言われなかったが、数週間後に箒が某大手中古品ショップで少年漫画の棚で、ある漫画を見たとき、甲児の容姿がその漫画の主人公と全く同じ（文字通りに全てが）姿であることに驚愕。偶然かと思ったが、姿だけでなく名までも全く同じというのはあるはずはない。それで真相を確かめるべく、甲児と再会しようとしたのだが、甲児は生活費を工面すべく各地を転々としていたので、会えぬままであった。

—そして。やがて彼と箒を引き合わせる事件が発生する。

「ミノフスキー粒子は散布したな」

「ハッ。戦闘濃度よりも10%ほど多く散布しました」

「ご苦労。これでレーダーと通信は使えん。闇の帝王の仰せの通りに作戦を実行せよ」

「ハッ」

日本上空に出現した超巨大な爆撃機。1970年代の少年漫画にありがちな悪のメカというのをそのまま「名は体を表す」の要領で体现したその機体は「飛行要塞グール」。戦死したドクターヘルⅡ地獄大元帥のかつての居住地であった地獄城周辺でドクターヘルの遺体を回収する際にミケーネの調査隊に回収されたグールの予備パーツを基にミケーネの技術を加えて新造した機体。それを指揮するはあしゅら男爵と同じく、闇の帝王により蘇生された形のブロッケン伯爵。彼は最早、ドクターヘルの下下ではないためなのか、生前のナチス・ドイツ軍人時代の軍服を着込んでいる。彼らもミノフスキー粒子の有効性は理解していたので、ミノフスキー粒子で、日本各地のレーダーサイトを無効化し、その膨大なペイロードを活かした絨毯爆撃を行った。21世紀頃の戦闘機では絶対に到達不能な高度にとどまった上でだ。

「よろしいのですか伯爵」

「我々の目的は防空網を黙らせ、ISとやらを奪取する事だ。自衛隊や米軍と大げさに事を構えることでは無い。潜入部隊の進行具合は？」

「現在、IS学園のネットワークにハッキングし、防衛設備を掌握した模様。出動不能に追い込むとの事。」

「よろしい」

彼らはまずIS関連施設が揃う日本のIS学園という学校兼関係者育成施設を掌握すべく、事前に警備関連に人員を送り込む手法を取った。作戦開始と共に施設ネットワークを掌握し、学園を封鎖する事が第一目標であった。

そもそも、彼の目的は闇の帝王が興味を持つ、この世界の重要兵器である「IS」（インフィニット・ストラトス）のサンプルの奪取だ。この兵器は元々、次世代型の宇宙服として開発されたパワードスーツなのだが、ある出来事で凄まじいほどに圧倒的ポテンシャルを発揮せしめた事で戦車、戦闘機などの在来兵器に代わる抑止力として世界各国、特に先進国がこぞって抑止力として開発を進めている。開発国は日本で、米国の軍関係者の間では、かつて大日本帝国海軍が航空母艦の有用性を保有する空母機動部隊を以て示した事になぞらえて「JAPの奴らがまた新しい兵器の有用性を示しやがった」と揶揄する声があるとか。

ブロッケンの思惑は付近にいる操縦者を一人でもいいのでエネルギー切れに追い込み、捕獲する事。その為には各地の自衛隊及び在日米軍のリーダーサイトの一切を沈黙させ、更には援護の軍用機の発進を不可能にする必要がある。それで爆撃用に爆弾を積んでいるのだ。

万が一のために艦載機も積んである。闇の帝王の計らいで強力なものを。戦闘獣は数が足りないので動かせない（かつてのミケーネの実戦部隊の7大軍団は既に壊滅しているので、残存している戦闘獣は本土防衛用の近衛師団のみ）が、初代ゲッターロボのコピー機を複数積んでいる。元は宇宙開発用とは言え、この世界の大抵の兵器より遥かに強大だ。パイロットは巴武蔵のクローン人間を用意すればいいので楽だ。

「爆撃を敢行せよ」

「ハッ」

高高度より爆撃を敢行する飛行要塞グール。第一段は非装甲目標に損害を与えるためにクラスター爆弾（改良が重ねられた22世紀型）を使用している。複数散布される子弾が軍事基地の滑走路に火災を起こす。市街地は軍事基地を沈黙させてからの攻撃の予定なので、まだまだ攻撃はしない。

「よし、次弾はバンカーバスターを用意しろ」

「ハッ。バンカーバスターの準備を進めます」

ブロッケンには配下の兵士たちに地中貫通爆弾の用意を命じる。目的は格納庫で待機中の機体の破壊、あるいは地下施設を貫通、破壊せしめるため。発射準備完了の知らせと同時にブロッケンは意気揚々と発射を命じた。次いで艦載機の出撃をも命じた。

「発射準備完了したバンカーバスターは順次発射！！次いで降下しだい艦載機を発進させよ！！攻撃はさせるな。あくまで政府にゲッターロボの威力を誇示するのが目的だからな」

インフイニット・ストラトス

これは自衛隊や在日米軍に対する示威行動でもあった。既にISによって人型兵器への恐怖が軍部に染み付いている以上、全力出動の許可はたとえISを保有したとしてもおいそれと出そうとはしないのはブロッケン伯爵も元はナチス・ドイツ軍人の端くれなので、兵器を温存しようとする軍上層部の考えは理解できる。それ故に人々に恐怖を呼び覚ます為にあえてグールの高度を下げたのだ。グールの偉容は老人たちにはかつての東京大空襲などのB-29に対する恐怖を呼び覚ますだろうし、若者や壮年の年頃の間達にはパニッ

クを誘発させられるだろうという心理効果を狙ったのだ。

「くっ、あの爆撃機……どういうつもりだ!? 一体どの国が……!? ええい!!! 迷ってはいられん!!!」

箒は仲間たちに一切連絡がとれない状況でありながらも迎撃戦に臨む事を選択した。自衛隊や在日米軍は怖気づいたのか、気づいていないのかはわからないが、一向に迎撃に出てくる様子は無い。この場にいるIS操縦者は自分一人。ただの学生の身ではあるが、姉、から与えられた、この力を信じるしか無い。

—あんな敵と刃を交える事への恐怖は無いわけじゃない。ここで私が……、私がやらなくては誰がやるんだ!!!、一夏、を……みんなを……!

拳を握りしめ、決意を固めると待機状態であったISを展開し、迎撃戦に臨む。

孤立無援の中での戦いである。自身とどこまでやれるかわからない。だが、今はやるしかない。

彼女は空へ舞い上がった。

一兜甲児の方も飛行要塞グールの出現に泡を食っていた。一応は平和なこの世界の平穏を打ち破る地獄からの使者。異次元でありながらなぜ飛行要塞が存在するのかはわからないが、グールを食い止めるべく秘匿していたカイザーパイルダーの封印を解く。

「くそっ、こうしゃいられねえ！！カイザーパイルダー、GO！！」

カイザーパイルダーを緊急発進させると、おなじみの叫びで海に隠したマジンカイザーを浮上させる。

「マジーンゴー！！」

カイザーが浮上するのを確認するとカイザーパイルダーを変形させ、カイザーの頭部ヘドッキングを敢行する。

「パイルダーオーンッ！！」

マジンカイザーが目覚めの咆哮をあげる。次いでカイザーの大いなる力―紅の翼―を叫びと共に呼び寄せる。足裏の補助ロケットでジャンプし、空中で紅の翼と十字になる時、カイザーは空を飛ぶ。そして真の力を呼び覚ます。

「スクランダークロオース！！」

―最強の魔神皇帝はこの世界に破滅をもたらすのか、それとも希望をもたらすのか。カイザーの胸の「Z」のエンブレムは彼、兜甲児とカイザーが一つになった証。それは後に語り継がれる魔神^{マシンサーガ}伝説の一幕。

兜甲児と篠ノ之箒の再会は戦闘という、非日常で叶うこととなった。だが、この世界において、本来「存在してはならない」はずのスーパーロボット「マシンカイザー」の出現が彼女一箒一の運命を大きく変えてしまうことになるとは、この時の甲児は思いもよらなかった。

第106話「魔神皇帝!!」(前書き)

魔神皇帝です。

第106話「魔神皇帝!!」

一黄泉国から蘇りし、ブロッケン伯爵はゲッターロボと並ぶ切り札を用意していた。それはAIF-7S「ゴースト」。地球連邦軍の右派が失われた人的資源の補充が容易でないことを名目に配備させた「シャロン・アップル」事件で猛威を奮った無人戦闘機「X-9」の純粋な後継機。その性能は凄まじく、たとえ有人機の中では最新鋭のVF-25「メサイア」であろうとも、落とすのは容易ではない。しかもブロッケンにはゴーストの隠されていた狂気「ユダ・システム」を解放しているほか、各種アップデートも行なっている。そのため速度・機動性は無人戦闘機の特性上、VF-25以降の機体でもなければ撃墜は困難であるほどである。ISの鹵獲にはちょうどいい代物だ。武装もこの時代のミサイルを超越するスピードと機動性を持つハイマニューバミサイル。威力も10発当たれば山を消し飛ばせる。いくらISと言えど、その防御性能はあくまで21世紀の兵器が基準（当たり前だが）となっている。それを一気に飛び越えた技術で造られた22世紀末の兵器は防ぎきれるとは言えない。その点を突くのだ。

「ISと思われる機影を確認。来ます」

「フン。このグールに挑むか。どこのバカだ……」

ブロッケンにはISが迎撃に上がってきたという報告にも鼻で笑い飛ばした。余裕綽々である。

「格納庫を解放しろ。お嬢さんに絶望を教えてやれ」

グールの現在の高度は高度25000m。ゴーストが大気圏内でポテンシャルをフルに発揮できる領域である。耐熱限界を考えると、

本来の速力の半分もでないマッハ6程度が速力の限界だが、それでもISさえも遥かに凌駕する速力、OTMと、極限まで発達した航空技術によって、ISに匹敵しうる機動性を持つ。

ブロッケンに余裕綽々で右腕に持つワインを飲み干すと、艦載機格納庫のハッチを解放。科学が生み出し、恐るべき『怪鳥』である、ゴーストバードに灯を入れる。起動したゴーストはフルチューンされたステージ？熱核タービンエンジンを唸らせ、箒に絶望を思い知らせるべくその機体を飛翔させた。

「な、なんだ!？」

篠ノ乃箒は現在最高性能のISで、姉の束から与えられた「赤椿」を纏っているが、剣道で鍛え上げた動体視力を以てしても軌跡を追うのが精一杯なほどの（鍛えられたVF乗りでも同様）凄まじい速さの何かが自分に攻撃を仕掛けてくる。旋回する一瞬で確認した機影は飛行機、それも無人の、戦闘機、。

（馬鹿な!？無人機はどこかの軍事大国がISに対抗するために開発してるとは聞いていたが、現行機の域は出ないはず……それに対空戦闘用はまだのはずだ!？）

それは21世紀頃の人間なら当然の驚きであった。無人機（UCAV）は2010年代の時点では偵察機が戦場で活用されている程度であり、戦闘機タイプは殆どが研究段階で留まっている。それはあくまで現行機の延長線上に位置する。だが、目の前のモノはその常

識を全て吹き飛ばすに値する凄まじい代物。空戦機動も現行機のそれとは比較にもならない機敏さで彼女を追いつ立てる。

（なっ、ISの機動性についてこれるだど……!?!?）

ゴーストは箒の知るどの航空機よりも限りなく鳥に近い機動で紅椿に追従してくる。しかもミサイルらしきものを撃ち出す準備を行なっている。おそらく同時にプログラムを対戦闘機用から対人用へ切り替えているのだろう。準備完了と同時にとても「ミサイル」とは思えない速さのそれが何十発と打ち出される。

「く、くうっ!!」

箒は赤椿の展開装甲の応用によるスラスターなどを駆使して、モビルスーツの常識で言えば「AMBA C」と呼ばれる姿勢転換を行なう。人ゆえの、人形のゴーストに対する利点。ハイマニューバミサイルを「雨月」、「空裂」との呼称を持つ刀剣武装で斬り払う。ただし全てではない。22世紀最新鋭のミサイルはバジュラや宇宙怪獣のような「異形の化物」にも対応できる機動性を持つ。数機が攻撃を「掻い潜り」、彼女に命中する。IS自慢の防御も絶対では無い。数発で山を消し飛ばす高性能爆薬満載のミサイルは確かにISの装甲を一部でも穿ったのだ。

「ハア…ハア…」

ミサイルの破片が顔に切り傷を作ったのか、箒の左頬からは血が流れていた。「信じられない」と言った表情で武装を構え直す。

—ISが在来兵器を一線からほぼ駆逐した理由。それは機械よりも迅速な思考が可能となり、機銃やミサイル、艦砲などの在来兵器を

避けつけない防御力もそのひとつ。だが、それはあくまで自然の進歩スピードで発達している21世紀頃の兵器と比べた上での話。O T M（オーティーエム、Over Technology of Macro s s）、タキオン粒子関連技術などがもたらされ、自然の進歩スピードなら『一千年、最悪一万年はかかる』進歩をわずかな十年で成し遂げ、更に飛躍した22世紀末の超・軍事技術はI Sの防御力の優位を揺るがしたのである。

「見ろ。あの小娘、目を白黒させておるわ」

「当然でしょう。I S以外にI Sの防御が抜かれたのですから」

グールの司令室でブロッケン伯爵は笑みを浮かべる。それは作戦目的が順調に進行していることへの満足感から来る感情だった。I Sの防御には不可視のシールドがあるが、膨大なエネルギーを消費する。シールドをその火力で消し去った後、稼働時間の限界まで追い込み、鹵獲する。それが作戦の骨子であり、わざわざ異世界に転移してまで成し遂げる最大目的であった。ゴーストはそのユダ・システムによってGなどを考えない超絶的速度と人体に遠慮しない「マシシ・マキシマム」の思想に基づいた超機動性で箒をひたすら翻弄する。

「負けるわけにはいかないんだ……！ここで退けば……コイツらは間違いないこの一帯を焼き払う！だから……！」

箒はその一心で戦った。そして一か八かで左右の斬撃武器のうち、雨月を構えて反転してくるゴーストに突進した。

「おおおあああッ!!」

それは一か八かの破れかぶれな攻撃にも思えた。だが、空戦を行なっている内に箒が見出した「活路」はそれしかなかった。全てを互いにすれ違う一瞬に賭けた。その一瞬を信じて、目一杯の力で剣をゴーストに突き刺す。彼女は一瞬の勝機を必死にたぐり寄せたのである。ゴーストは出力をエンジンに回していた都合上、エネルギー転換装甲は比較的、剣を貫き通しやすい強度であった。ゴーストは箒の乾坤一擲の攻撃で機体を貫かれ、制御を失って黒煙をはきながら墜落していく。

だが、それは箒にとっても致命的な危機を招いた。長時間の空戦の結果、武装が光の粒子となって消えていく。それはエネルギー切れを意味する。そしてそれを好機と見たブロッケンはいよいよ作戦最終段階の開始を号令した。

3機の新手の飛行機がキャタピラー無限軌道一を持つ幾分ずんぐりむっくりした巨大ロボーゲッター3へ『合体』し、両腕を高高度まで伸縮させ、箒を捕獲しようとする手を伸ばしてくる。だが、その秘めた力を発揮しているとは言いがたい紅椿は「エネルギー切れ」を起こしていて、回避がままならない。

一一夏!!

箒は思わず目を閉じて想い人でもある幼なじみの名を心のなかで叫ぶ。だが――

その時、ゲッター3の腕が何かによって断ち切られ、辺りに血のよ
うに油を撒き散らす。箒はその何かの正体に目を見張った。地面に
巨大な剣……一見すると西洋で使われたツーハンドソードに
も思える一が突き刺さっていた。そしてその刀身に反射して、その
剣を投擲した主の姿が写りこんでいた。その姿は悪魔のような紅の
翼を持つ、巨大な漆黒の魔神のようにも思えた。

「魔……神……？」

一言だけそういうのが精一杯だった。その巨大なその魔神は剣を天
空に掲げて、箒が、知る、声で叫んだ。

『やいてめえら！！これ以上はこの俺、兜甲児と魔神皇帝……『マ
ジンカイザー』がいる限り好き勝手はさせねえぜ！！箒ちゃんをい
たぶってくれた礼はたっぷりさせてもらぜ！！』

一魔神皇帝、マジンカイザー。その鋼の勇姿は確かに、この世界に
破滅を齎さんとする者を止めるために現れし、魔神、であった。そ
して自分を名指しして叫ぶその声はたしかに箒の知るあの男のもの
だった。

「甲児……！？まさか……あの魔神には甲児が乗っているのか！？」

箒はその男の名を叫ぶ。魔神皇帝を操りし資格を持った一人の男。
その名は兜甲児。甲児は不敵な笑みを浮かべながら留学時に新調し
た防護服を身に纏って、カイザーパイルダーのコックピットに座っ
ていた…。

第106話「魔神皇帝!!」(後書き)

グレートマジンガー後の兜甲児のグレンダイザーでの防護服Xマジンカイザーです。この防護服はデザイン的に賛美両論ありますが、一応甲児の最終段階の姿なので着させました。

一マジンカイザーはその勇姿を見せつけた。その圧倒的存在感は正に鋼の魔神そのもの。

剣を掲げるその姿からも容易にそれは連想できる。頬から血を滴りさせながらも箒はこの最強の援軍に沈んでいた気持ちを再起させる。

「甲児……、本当に甲児なんだな!？」

『ああ、そうだぜ。箒ちゃん。下がるんだ、後は俺とカイザーに任せてくれ』

箒はカイザーにドッキングしているカイザーパイルダーのコックピットに座っているのは1970年代のSFアニメで見られるセンスのパイロットスーツを着込んでいるが、確かに兜甲児であると確認した。かぶっているヘルメットのバイザーからは甲児の強い眼差しを、正義を守るという、強い意志を秘めた目が確認できた。

一カイザーの登場にブロッケンは闘志を燃やし、カイザーに向けて外部スピーカーをオンにして兜甲児へ再会の挨拶を交わした。

『久しぶりだな、兜甲児。我輩の声はよもや忘れてはいないな?』
『当たり前だ、テメエの声は忘れたくても忘れられねえよ。ブロッケン伯爵。生き返っていたなんて……それも飛行要塞ごと。てめえもミケーネに生き返らせられたのか……なにせドクターヘルを生き返らすくらいだから不思議じゃないけどな』

『フハハ……そうだ。我らはミケーネ閥の帝王様によって蘇った。兜甲児、貴様を地獄へ送るためにな!』

『ヘッ、何度蘇ってもこの俺とカイザーが倒してやるぜ!!』

甲児は高らかに宣言する。たとえ何度蘇ってもマジンカイザーが倒すまでだ。それは箒に敵と甲児との因縁を瞬時に理解させるほどにわかりやすい言葉でもあった。

『先手必勝だ!!ターボスマッシャーパンチ!!』

マジンカイザーが突きだした片腕が猛烈な高速回転を始め、まるでドリルのごとき音を立てながら右腕が凄まじい速さで打ち出される。螺旋のような回転をしながら打ち出されたそれは鋼の鉄拳となって立ち塞がる全てを粉々に撃ち砕いていく。俗に言う「ロケットパンチ」であるが、その威力はオリジナルとは段違いで、超合金Zをも粉々に砕くほどである。

人が避難し、無人になったビルをいくつか綺麗に貫きながらターボスマッシャーパンチはゲッター3のゲッター合金を粉碎しながら胴体部に大穴を開けていく。その間、わずか数秒。乗るパイロットはゲッター3を攻撃した際に確認している。かつての戦友の魂のない『別個体』。甲児はこのような形で蘇らせられた巴武蔵、それを使役するブロッケン伯爵に憤りを隠さない。

『ルストトルネード!!』

カイザーの口のスリットから超合金ニューZほどの強度がなければ為す術もなく原子に還させるほどの凄まじい酸を含む暴風が吹き荒れる。箒はカイザーの後ろに下がっていたが、それでも余波で吹き飛ばれそうになる。何せ技を繰り出しているカイザー自身も吹き飛

びかねないほどの威力をルストトルネードは秘めているのだ。ゲッター合金さえ為す術もなく風化し、塵に返す。

（こ、これが甲児のいうマジンカイザーの力なのか！？まるでデタラメじゃないか……！）

箒は究極の魔神皇帝の力の一端を垣間見、咄然としていた。この世界の全ての兵器を明らかに超える戦略級の凄まじい破壊力と、どんな攻撃でも傷つかない文字通りの絶対的な装甲は正に神と言っている。

―ここでスーパードロボットの圧倒的な力の一端が示されたわけである。スーパードロボットは基本的に味方には神、敵には悪魔に例えられるほどの戦力を誇る。元祖スーパードロボットのマジンガーZにしても、米国最盛期の米国海軍ニミッツ級原子力空母を初めとする空母機動部隊一個分に相当するほどの戦闘力を持っていた。（一般向きの文献では分かりやすく、第7艦隊とされる場合が多い）絶対的派遣を誇った時代の米国にとって空母機動部隊は最も重要な戦略的立ち位置にあった艦隊であり、平時においては、空母機動部隊と原子力潜水艦は米国の力のシンボルでもあった。それに相当するといっただけでも力の一端が垣間見える。裏を返せば、その数十倍の力を持つマジンカイザーは一機で複数の空母機動部隊を一瞬で殲滅する事も、ひいては一瞬で国そのものを滅ぼす事も容易に出来る、最強の魔神なのだ。

ブロッケンはこのカイザーの圧倒的破壊力にも動じる事無く、次の指令を発する。格納庫から赤・白・黄色の三色にそれぞれ彩られたゲットマシンが発進し、彼らの目の前で合体を敢行する。ゲッターロボの基本形態であり、総合的戦闘力に優れた第一形態「ゲッター1」へ。

「アイツら一体何を……!？」

『合体するんだよ』

「合体だと……そんなバカな、漫画じゃあるまいしそんなことが……!？」

『それをいうなら俺がこんなスーパーロボットに乗ってる時点でそんな常識ぶっ飛んでるぜ。それにさっきのゲッター3の合体は見たんだろう?』

「そ、それはそうだけど……」

『よく見ておきな。あれがあのスーパードット……ゲッターロボの本領だ』

甲児のいう通り、ゲットマシンは赤・白・黄の順で並び、後方の2機が最初に合体する。それは21世紀科学の常識を真っ向から打ち破る衝撃の光景であった。

『チェエンジ!!』

ジャガー号とベアー号が合体し、ゲッター1の腕と足がまずフレームで飛び出し、ゲッター合金の装甲がそれをチップ状に覆っていく形でゲッター1の各部分を形成する。そして最後のイーグル号が変形していき、ゲッター1の顔などになり、残りの機体と合体を終える。

『チェエンジ!!ゲッターアアアアアアアアアアッ……又ウ

「ワン！！」

「初代ゲッターロボ。かつて巴武蔵と共に果てたはずのスーパーロボットはその骸から再生された武蔵の器だけの個体と共に黄泉から蘇らせられたのである。箒をさらに驚かせたのは背中からマントが出てそれだけで空を飛んだのだ。摩訶不思議以外の何物でもない。」

ゲッターロボは初代の時点で後継機や強化発展型（真ゲッター1）

らの基本となる武装のベースはほぼ揃っている。肩の突起から片刃の斧が飛び出し、振り下ろす。それをカイザーはカイザーブレードで受け止める。斧と剣がぶつかり合う鈍い音が辺りに響く。甲児は鉄也と違って武器を使って戦う機会はあまりなく、最近ではグレートマジンガーの初陣となった戦いで、ミケーネの先鋒隊の精鋭とグレートのマジンガーブレードを使って戦ったもの、押され気味であった程度である。だが、留学期間中に鍛え上げたせいなのか、それなりに使いこなしてみせる。

「ブ、ブロッケン伯爵！！」

「うろたえるな！！ドイツ軍人はうろたえないッ！！」

現在のクルーのクルーはブロッケンが元々ドイツ国防軍の将校であった関係で、他勢力である、ナチ残党から交流も兼ねて派遣された元空軍と海軍の出身者達である。（ミケーネは軍部の壊滅状態と国民の絶対数が足りないせいもあって、クルーが確保出来なかったゆえの措置で、ブロッケンの生前の人脈を使い、人員を工面してもらった）

「ちょうどいい余興だ、我輩自らあのISのお嬢さんにとどめをさ

してやろう。ハッチを解放せよ」

「ハッ」

ハッチを解放し、ブロッケンはなんといつの間にか空軍の降下猟兵の装備一式に（武器は降下猟兵用制式ライフル「ラインメタルF G 42自動小銃」など）。（武装はバダン及びミレニアムから融通してもらった）着替え、ご丁寧にドイツ軍制式ヘルメットまでかぶって出陣した。

「ハハハ……いい気分だ。地獄が見える」

との一言を残し、カタパルトから打ち出され、一人降下猟兵をしながら箒に迫った。

「くっ、私には黙って見ていることしかできないのか……!？」

―箒は自分のために戦ってくれている甲児に守られている事にこれ以上ない齒がゆさと悔しさをにじませ、拳を再び握りしめる。幼い時に幼なじみに守られ、そして今、甲児に守られている。一度か二度会っただけだというのに、甲児は自らの身の危険を顧みずに自分を守ってくれている。その気持ち彼女にかえって強い意志を持たせた。想い人でもあり、幼なじみでもある「織斑一夏」（おりむらいちか）を今度は自分が守る、守りたいという気持ち。その気持ちに「赤椿」は応えた。展開装甲から粒子が放出され、機体が輝きを増し、ゼロに等しかったはずのエネルギー量も回復していく。

「こ、これは……!？まだ……まだ戦えるというのだな……ならっ

!!」

これが赤椿の秘めた能力「絢爛舞踏」。完全なら無尽蔵のエネルギー供給能力を誇る、赤椿の力。箒の姉「篠ノ之束」が何らかの意図をもって、妹に与えし力。頬から流れる血はあえてぬぐわず、そのまま迫るブロッケン伯爵を迎え撃った。

ブロッケン は地上に降り立つと以前より強化されたサイボーグ体である身体能力で箒に肉薄した。ラインメタルFG42自動小銃を牽制代わりに放つと、跳躍し、携帯していた刀剣（種類はクレイモア）を突き立てる。

「Guten Abend、Frühe in（こんばんは、お嬢さん）!!」

「貴様……よくもっ!!」

一辺りはすっかり日が陰り、夜になりかけている。なので、ブロッケン はドイツ語で挨拶をする。それを剣の攻撃で返す箒。既に箒が交戦を始めてから数時間が経過しているのに関わらず、他のISらの援軍が一切来ないのか。それはIS学園に侵入していた武装親衛隊の人外たちが奮闘しているのと、ミノフスキー粒子が濃い状態が続く、外部との交信が断たれている状態だからであった。

― I S 学園

「全く……手こずらせてくれるものだ、人間、！！」

ドイツ国防軍の軍服を身に纏った下士官が I S 学園の精鋭たちや候補生たちを前にして威風堂々と言い放つ。ブロッケンの配下として派遣された、原隊は「少佐」率いる「ミレニウム」所属の分隊の隊長格の軍人。時代錯誤としか言いようのない軍服とその装備。かつてドイツを破滅に導いてしまった一人の男の狂気が 21 世紀に蘇ったとしか言いようのない姿に、対峙している I S 学園の学生にして、ドイツ連邦軍将校の「ラウラ・ボーデヴィツヒ」（容姿は銀髪ロングにオッドアイ、眼帯持ち）は憤りを隠さなかった。

「そんな姿をよくもこの私の前に晒してくれたな……！ ナチ公どもめ……！」

ラウラはナチス・ドイツ時代とは断絶された、戦後のドイツ人であり、ドイツ連邦軍将校である。戦後ドイツのナチズムを否定する風潮のもとで育った彼女にはナチズムに汚され、プロイセンの誇りも忘れた武装親衛隊は許せなかったのだ。

「フン。連合国の走狗に成り下がった輩の道具にすぎん若造めが……貴様こそ我が大ドイツの誇りを忘れし大馬鹿者にすぎん。戯言を……」

「だ、黙れえええっ!!」

ーラウラは過去の亡霊を前に、普段のクールさは完全に消えていた。戦後ドイツ人にとって最も忌むべきナチス・ドイツ。その亡霊を前にラウラはISのシュヴァルツェア・レーゲンを展開させる。だが：彼女とて、ドイツ連邦軍の遺伝子強化試験体として産み出された試験管ベビー。ある世界で言えば「コーディネーター」などに相当する技術で産み出されている。ドイツ軍は何時の時代も凄まじい研究を行なうという習性があるのだろうか……。ある意味この対決は戦前のナチス・ドイツと、戦後のドイツ連邦共和国の意地のぶつかり合いでもあった。

第107話「魔神見参!!」そして、Guten Abend、Frühe in

文章を校正しました。

第108話「LEGEND of KAISER」(前書き)

マジンカイザーに最新作「SKL」の要素が若干入ります。

第108話「LEGEND of KAISER」

―ブロッケンにはISを纏う箒と対等に渡り合っていた。箒も実家が剣術道場である故に剣道を嗜んでおり、中学時代は全国大会優勝経験もあるのだが、ブロッケンには出自がナチス・ドイツ軍人であり、軍隊で鍛えあげられている上に豊富な実戦経験を持つ。その差が大きく現れていた。ブロッケンは戦場を渡り歩き、さらにドクターヘル軍団を成立させる過程で、各国の伝統ある最大勢力のシンジゲートやマフィアを自らの手で乗っ取り、軍団の資金源とした過去がある。そのため人を殺す事に何ら躊躇いなどない。クレイモアを縦横無尽に振るい、箒を圧倒した。

「フフフ……ハハハッ!! どうした小娘、怖いのか? 我輩を殺すのが!!」

「く、くううつ……だ、誰が!!」

箒は殺し合いは無論、したことはない。日常から剣術は嗜んではいたが、あくまで自らを律するため、自らの心の奥に潜む力への欲求を抑えるためのもので、戦国時代の武将のように「人を殺める」ためにはやってはいない。ISでの戦いは人を殺すというのはまず起さない。なので、真の意味での殺し合いへの恐怖が心の奥にあるのだ。それをブロッケンに見透かれたのである。

―この小娘、剣筋と言おうか、太刀筋と言おうか……に怯えがある。やはりこの時代の日本人の例には漏れんか……。

箒の表情は必死そのものだが、その太刀筋には怯えがある。それを敏感にブロッケンは感じ取り、攻撃を強める。彼の太刀筋には迷い

はなく、油断すると箒の腕の一、二本はもっていきそうな勢いで剣を振るう。

一箒は実家の剣術でもある、自らが習得している篠ノ之流剣術でブロッケンと剣を交えているが、太刀筋に怯えがあるのを自分でも自覚していた。心のどこかに自らの剣一暴力一で人を殺してしまう事への恐怖がある。だが、目の前にいるのは甲児に言わせれば「因縁のある敵」。甲児が既に一度地獄へ送ったという、いわば「墓場から蘇った使者」。平たく言えば甲児は「侵略者には死あるのみ」という心理で戦えというのだ。このナチス・ドイツ軍人に対して。

一しっかりするんだ、篠ノ之箒！！ここでこいつらの暴挙を許したら一夏やみんなが業火に焼かれるかもしれないんだぞ！！

心のなかで自らを叱咤し、奮い立たせる。それは幼なじみの織斑一夏を守るという意志が恐怖心に勝った事の表れでもあった。

「おおおおおっ！！」

ブロッケンのクレイモアを雨月で迎え撃ち、隙を見張らい、もう一方の空裂でエネルギー刃を放出し、ダメージを与える。戦いに対し、腹を決めた事による、迷いのない見事な斬撃。だが、ブロッケンの体はそれに耐えてみせた。切り裂かれた軍服の切れ端からは血と体の機械部分がチラツと確認できる。

「いい攻撃だ、Fr?ulein（お嬢さん）。これならヴァルハラから蘇った甲斐があるというものだ」

ニヤリと薄笑いを浮かべると、凄まじい速さでその場を立ち去り、グールへ跳躍し、戦いを切り上げる。ちなみに彼はドイツ人なので北欧神話の神々の楽園で黄泉国を表現している。首を分離しなかったのは初心者には刺激が強いからである。

「ハア……ッ。か…勝った……いや、勝ちを譲ってくれたのか……？」

箒はなんとか退けることに成功したことに安堵しつつも、自分の内なる恐怖心を敵に見透かれた事実を以って自らを律し、曲がりなりにも自分は剣術の使い手なのだということを自覚する。

「そうだ、甲児は……？」

既にさっきの場所からマジンカイザーの姿は消えている。ゲッターロボと空中で対決しているのだろう。その証拠に空中から甲児と相手が技名を派手に絶叫する声が響いてくる。箒は赤椿（本来なら、紅椿）というべきだが、近くて遠い世界、なので名の表記が異なる。後に箒自身がその違いに気づくのだが、それは後の話である）の背部推進スラスターを吹かし、カイザーらがいる高度へ上がる。

—そこで彼女が目にしたのはスーパーロボットのヘビー級対決とも言うべき光景であった。

『光子力ビーム!!』

『ゲッターアアビイイム!!』

カイザーの光子力ビームとゲッター1のゲッタービームがぶつかり合う。威力はゲッターロボ側が最大出力で放っているので、カイザーが全力を出していないとはいえ、カイザーと互角の出力であり、派手に爆発を起こす。

『さて、カイザーの新技を試すか!』

それは整備の際にグレートマジンガー用の予備パーツが組み込まれたからこそなせる技。グレートマジンガーのように雷を呼び寄せ、その雷を耳に受ける。違うのはグレートマジンガーが指でサンダーブレイクを誘導するのに対し、カイザーはカイザーブレードで雷を誘導する所である。甲児はサンダーブレイクと区別をつけるために別の名をつけた。その名は。

『トールハンマーブレイカー!!』

これはマジンカイザー版サンダーブレイクとも言うべき技である。威力はマジンカイザーの動力伝達機構の耐久性がグレートマジンガーや後のUFOBロブグレンダイザーよりも優れているせいか、グレンダイザーのスペースサンダーをも超える。ゲッター1の装甲を超えてコックピットに電撃が伝わり、パイロットを気絶させたらしく、ゲッター1はバランスを崩し、墜落していく。

『ゲッター……お前はこの時代には存在しちやいけねえ物だ……あの世にいる武蔵の魂の為にも、この俺がここで葬ってやる!!』

甲児はそう叫ぶとカイザーの大技の態勢を取る。胸の放熱板が灼熱に彩られ、カイザーの双眼が輝き、彼はその技名を今一度叫ぶ。

『ファイヤーブラスターアアア!!』

全てを焼き尽くす神の炎はゲッター合金をも瞬時に溶解・融解させ、大爆発を起こす。

ちなみのこの時のゲッターとマジンガーの対決は後に目撃者たちによって「魔神伝説」として語られ、後に都市伝説化するのだが、甲児は無論知る由もない。

同時に上がってきた筈も思わずその爆発の余波にバランスを崩しそうになる。

「う、うわあああっ!!」

ゲッター炉の凄まじい爆発の衝撃波に吹き飛ばされそうになるも、スラスターを全開に吹かし、なんとか態勢を立て直す。そして甲児のもとに駆け寄る。

「甲児!!」

『筈ちゃん! 大丈夫だったかい?』

「あ、ああ。な、なんとかな。あいつらは一体……?」

『俺たちの……いや、人類の敵だよ』

「人類……? 大げさすぎないか」

『誇張や語弊じゃねえさ。俺達はいつらと戦争やってるからな。話すと長くなるけどな』

甲児はブロッケンとの関係をこういった。甲児は人類を守るためにマジンガーZやカイザーを駆って戦った。ブロッケンはかつてはドクターヘルの、現在はミケーネ帝国の兵として彼らの野望に加担し

ている。それは十分に戦争といえる戦い。その戦いのことはそう簡単に語り尽くせるものではない。

『……楽しませてもらったぞ、兜甲児、それと可愛いFr?ulein（お嬢さん）。また会おう』

『てめえ、どういう意味だ!!』

『Fr?ulein、君の学校……IS学園だったか？は吾輩の配下が今まで抑えていた。だが、今やその必要は無くなった』

「な、何っ……!？貴様、まさか……一夏を……みんなを……!？

もしそうなら……今、ここでその爆撃機ごと貴様を叩き斬るっ!!」

『おお、それは怖い。安心しろ。それはない』

ブロッケンはこの言葉に筈は思わず語気を荒らげる。IS学園が制圧されたのなら、友人たちはただでは済まないのは想像できる。筈の刀剣武装を持つ腕が怒りで自然に震えている。ブロッケンには彼かしらぬ飄々とした態度を見せながら無線でそういう。

「伯爵、潜入部隊がISのサンプルを奪取に成功。先ほど帰投を完了しました。ただし第二世代機ですが」

「構わん。闇の帝王様も満足なされるだろう。次元転換装置を作動させよ」

「ハッ」

このグールには闇の帝王の手によって、異世界を行き交うために次元転移を実現させる装置を搭載させていた。だが、試作型であるゆえに欠点があり、装置を内蔵する母艦から半径数百mの物を巻き込んで転移させてしまう。

一グールの周りの空間が歪んでいく。甲児は次元転移してきたため、行きの時の状況と似ていることに気づき、その兆候を察知。とっさ

に叫んだ。

『まずい！！箒ちゃん、カイザーの手の中に入れ！！早く！』

「え！？わ、わかった！！」

箒がカイザーの拳の中に入ると、グールが転移したのとはほぼ同時であった。空間が歪み、光が彼らを包み……2人は意識を失った。

一、チュンチュン、という、小鳥の声で甲児は目覚めた。甲児はあたりの風景を確認する。夜だったはずが、朝になっている。気絶していたにしろ、そんなに時間が経過するはずはない。慌ててカイザーパイルダーの時計を確認してみると、日付が元の世界でのそれに戻っていた。時計では元の世界で転移した時から数秒しか経過していないことになっている。

「元の世界に戻れたのか……奇跡だな」

甲児は息を大きく吐いて、ひとまず安堵する。だが、問題はカイザーの手の中で眠る箒のことだ。図らずしも連れ込んでしまった。あのままであったなら彼女は下手をすると、次元断層に引きずり込まれ、永久に亜空間を彷徨うハメになった可能性が高い。カイザーの中にいたから、それを免れた。事故に近いが、連れ込んでしまったことは後で詫びるとして……。問題は身元引き受けだ。引受人は自分になるとして……どうするべきか。

「う、うん……?」

『気がついたかい?』

「あ、ああ。眠ってしまったのか……ん!? な、なんだこれは!？」

箒は思わず飛び起きてしまった。夜であつたはずの空が太陽がギンギラギンに輝く朝になっている上に、気温が段違いに違う。汗が吹き出そうな凄まじい暑さ。天気予報では涼しいはずだ。それに場所も内陸部だったはずが、いつの間にか海上にいるのだ。驚かないはずはない。

『場所は……地図だと香港近くの海上らしい』

「ほっ、香港うううっ!? 馬鹿な!! 私たちは日本に居たのだぞ! ?それがなぜいきなり香港にいる事になっている!? 説明つかないぞ!？」

『それは……俺の故郷の、世界、だからだよ』

「お前の、世界、……?」

『そうだ。俺はそもそも君の世界の人間じゃない。ゲッターロボやゴーストもこの世界からアイツらが持ち込んだものだ。21世紀頃の科学力じゃあんな兵器は作れない。高度な無人戦闘機はもちろん、合体ロボも……。』

「確かにそうだが……」

箒はいくらISがオーバーテクノロジー気味の兵器だといっても他の兵器は20世紀末とさほど変わりはない事を冷静になって考えてみる。するとやはりカイザーらの存在はどう説明がつくのだろうか。

『俺がいるこの世界は年数で言えば、西暦2199年。22世紀が終わる2年前。色々戦争やら、宇宙からの助けやらがあつて技術があり得ないほど上がったからスーパーロボットが作れるようになった』

たのさ』

「22世紀の終わり……それなら説明つかないことはないが……」

『とにかく香港でいったん休もう。君のこともあるしね』

「あ、ああ。分かった」

箒は半信半疑でカイザーの手から離れ、ISで飛行を再開する。

「今は甲児についていくしかない。何がなんだかわからないが……」。

彼女は香港へ進路を向け、カイザーに追従していった。甲児は前途多難を感じ、ただただため息をつくのみであった。

第109話「小休止 3」

一香港に着いた甲児は、困ったときの相談相手とばかりに黒江綾香へ連絡を取った。黒江とはフロンティア船団での一件以来、何かと気心も知れている関係。すぐに連絡を取った。

「綾香さん？俺だけど」

「おー、兜か。カイザーを欧州まで運んでるって聞いたが、元気そうだな」

「そうなんですけど、実は困ったことが起きちゃって……。こっちに來れます？」

「時と場所によるぞ、今どこだ？」

「香港っす」

「香港か。よし待ってろ、10何分で行く」

「10何分って……今どこにいるんです？」

「新星インダストリーの日本工場だ。エクスカリバーのA型の最新バージョンを受け取りに來てんだが、丁度調整が終わるし、慣らし運転替わりにいい」

黒江綾香はフロンティア船団での一件後もバルキリー乗りとしての訓練を続けており、乗機もVF-17SからVF-19Aへ乗り換えていた。元々機械好きであった関係でウィッチの中では適応性も高く、ウィッチ達の中ではいち早くVF-19 エクスカリバー系列を乗り回している。他には黒江の元上官の江藤敏子大佐（現役時は中佐）が興味を持ち、訓練を受け始めたとの噂が出ている。

「ほんじゃ待ってろ」

「了解っす」

黒江は電話を切るとすぐに調整を終えたVF-19Aに搭乗し、ステージ？熱核タービンエンジンを吹かして香港へ飛び立った。香港への時間はわずか10何分。甲児は電話からそんなに時間が立たない内に早くも轟音が響いてきた事に感心した。

「もう来た……流石にエクスカリバーは速いな」

ホテルの上空に早くも前進翼が特徴的なVF-19Aの機影が現れる。大気圏内の最高速度ですっ飛ばしてきたのだろう。駐車場の上空でガウオーク形態に変形し、着陸する。

甲児が出迎えに向かい、事情を説明する。箒の身元保証人は黒江が引き受けてくれる事になり、甲児が引受人となる形となった。

「お前なあ……ついてないな本当に……」

「今回ばかりは本当に思いましたよ」

「だろうな……この部屋がそうか？」

「ええ。箒ちゃん？俺だけど……お客さんを連れてきたから入っていいかい？」

「甲児か？鍵は開けてある」

「分かった。入るよ」

甲児がドアを開けると、箒は転移時にきていた私服以外の服の持ち合わせが制服しかなかったためか、IS学園の制服を着ていた。甲児が（黒江は今回は普段の扶桑陸軍軍服姿ではなく、フロンティア船団とギャラクシー船団の船団間戦争に纏わる、連邦軍関係の仕事をしていたせいか、連邦宇宙軍の軍服姿である）のほぼ同年代に見える少女を連れてきたので若干膨れたような表情を見せた。甲児は

何が何やらわからなかったが、黒江は同じ女性なのでそういったことに理解は早く、すぐに身分を明かして、箒の身元保証人になってくれるように甲児に頼まれてきたことを告げると、箒は安心した顔を見せた。

「私は黒江綾香。この世界の軍隊―地球連邦軍―の大尉（扶桑での待遇がこのまま適応された）だ。年はこう見えても一応23歳だ」

「ええっ！？に、23！？どう見ても14，5歳にしか……」

「それはよく言われるんだよな」（本当はそれくらいに若返ってるんだけど）

「それであなたが私の身元保証人になってくれると……」

「まあ任しとけ。そういうのは慣れている」

黒江は茶目っ気のあるところを見せ、箒と同年代くらいの見かけとは裏腹な実年齢を告げる。箒は黒江の実年齢より遙かに若い外見と不釣り合いにも見える、歳相応の大人びた一面があることに不思議さを感じた。

（不思議な人だ……私と同じくらいに見えるのに、成人しているなんて……。とても信じられん）

「ところでなんて呼べばいい？」

「もし……私以外にも、家族が来ていると困るので名前をお願いします」

これは姉の束がもし万が一にも来ていた場合、苗字だと混合する可能性がある。その点を勘案したゆえの言葉だった。黒江もその点を見抜いていたので快く了承した。

「……決まったな、箒、これからよろしく頼む」

「こちらこそ」

両者は握手を交わしあい、手を握り合った。この日から箒は黒江という身元保証人ができたおかげでこの世界で生活することが可能となった。その様子を見守っていた甲児は万事上手く言ったことに安堵した。

「ところで、兜。このホテルって竹刀ふるえるような場所あるか？日本からエクスカリバーでぶっ飛ばしてきたから肩がなまっちゃまってな」

「たしか日本の高校が国際大会とかの練習に使う関係上、剣道道場が完備してあるはずっス。宿泊客も使用できるはずなんでフロントに電話します」

「頼む」

甲児が電話をしている間、黒江は箒の体つきから、「何かスポーツやってるか？」と聞いてみる。箒は「はい、一応剣道をやっているんですけど……？」と回答される。黒江はこれに喜び、意気往々と言った。

「私も剣術やっていてな。ちょうどいい機会だ、手合わせ頼む」と。箒もちょうど運動代わりに手合わせを了承。

一道場

「……あちゃあ、綾香さんやる気だよ。箒ちゃん大丈夫か？」

甲児は観戦しながら頭を抱える。黒江は扶桑で10本の腕に入ると謳われる、屈指の使い手である。箒の腕がどの程度かわからないが、

黒江の前には……と悲観的だ。

—なんだ……綾香さんから感じるこの感覚は……！？

箒は竹刀越しに剣術をやっているものにしかわからない殺気を感じ取り、直感的に只者ではないと察し、構える。黒江も箒の構えから「ただの素人ではない」と直感する。—そして両者は剣を交えた。甲児の予想と反対に箒は黒江の最初の攻撃を凌ぎ、対応する。伊達に全国大会優勝経験をもってはいなかった。だが、やはり根底の差である、実戦経験の差が生じ、次第に黒江に圧倒されていく。

「もらったっ！！」

黒江は咄嗟に竹刀を横に振るい、胴を取る。居合の要領での速さをういた見事な一撃。スパーンと小気味よい音があたりに響き、黒江が一本取った事を告げる。

（凄い……私が全く反応できなかった……これがこの人の力……）

—黒江が見せた力的一端に箒は初めて純粹に人に憧れる（父親以外の他人という意味の）という感情が自分に芽生えるのを感じた。

—黒江は笑っていた。有望な若者がいたという喜び。新たな世界からの来訪者を自分が一人前にする。そんな気持ちで黒江は箒を見つめていた。

第110話「パリは燃えているか 1」(前書き)

欧州戦線編開始です。

第110話「パリは燃えているか 1」

一連邦は可変戦闘機との市場の共存性を重視し、なおかつ連邦軍のアナハイム・エレクトロニクス社との関係を考慮する必要もあり、兵たちの受けもいいため、コストが貼るとはいえ、高性能を誇るZ系モビルスーツを敢えて量産していた。そのため空軍の主力モビルスーツは少数のティターンズ系の機体を除けば、その殆どがZ系で占められていた。

— 2200年 1月 欧州戦線

欧州戦線のデイジョンⅡロングヴィック空軍基地では欧州戦線で戦う空軍の戦力がなし崩しに結集していた。可変モビルスーツも多数が配備され、Zプラス系列が待機していた。機体のカラーリングは制式のものだが、部隊マークは旧・フランス空軍の伝統を受け継ぐモノ。（中には旧・アメリカ空軍系列の部隊の機体ではウェイブライダーにノーズアートが描かれていたりする。シャークマウスなど）

欧州戦線はハワイでの連邦の勝利以後、敵との競り合いが激しくなっている。22世紀最後の年を迎えても、戦争はなおも続いていた。ある地域などは無数のゲッターロボGにさながら「炎の七日間」状態にされたという恐ろしい情報も耳に入っている。連邦軍はあしゅら男爵の動向を注視しつつ、鉄人兵団戦線を戦っていた。

そんな中、大気圏内運用テスト代わりに改修・追加生産された、ZプラスC1B^{ハミングバード}st型も大気圏内任務に最適化された装備・武装を以て配備され、基地の攻撃任務に就いていた。大気圏内でもその火力は健在であり、兵団側にもコスモタイガー雷撃型以上の「死の鳥」として恐れられていた。

—その欧州戦線に配置されている部隊の内、旧米軍時代からの伝統のマーキングの他に、美少女のノーズアートが描かれた、空軍第31戦闘攻撃飛行隊の所属のZプラスC1Bst型は欧州の兵団主要航空基地で、オランダの「フォルケル航空基地」の空爆任務についていた。追従可能なように改良されたZプラスD型を護衛機として従え、兵団の迎撃部隊を最大戦速で軽く振りきり、悠然と空爆を開始した。

— オランダ フォルケル航空基地

「てっ、敵機襲来!!」

「迎撃用意!! クソツタレ、迎撃部隊は何をしていた!？」

「軽く振りきられたようです」

「何っ、すると……例の、あれ、か!?! 要撃隊は離陸急げ!! 兵舎にいる内にやられるぞ!!」

基地司令は連邦空軍の攻勢の切り札とも言える、銀翼の怪物「ハミングバード」の猛威をこう形容した。ハミングバードの超高速爆撃は兵団の一般兵ではまず捕捉すら不能、精鋭を以てしても一撃をかけるのが精一杯で、次が続かないという有様。これはB-29に煮え湯を散々飲まされた大日本帝国陸海軍航空隊と似たような状況であった。

—ハミングバードは「落とせるものなら落としてみせろってんだ」と言わんばかりに平然と飛行し、反復攻撃を行なう。その回数は一度や二度ではない。精度の高い急降下爆撃で兵舎などが盛大に破壊

される。絨毯爆撃は誘導爆弾のミノフスキー粒子による精度の低下でおおまかな定時爆撃や大編隊などの攻撃任務、示威行動など以外にはあまり用いられなくなり、少数精鋭部隊などでは急降下爆撃が再び活用されるようになった。ハミングバードは高度な制御技術による急降下爆撃での安全性も確保されている。火力による近接航空支援も行えるのでハミングバード数機で下手な爆撃機中隊以上の活躍が期待できる。なので、ハミングバードは重宝されていた。

「各機、好きに暴れる。ただしやる程度は心得ておけ」
「了解」

一空軍は元々宇宙軍が造った優秀な戦闘爆撃機とも言える、このハミングバードをどうか「地上でも活用できないか」と模索。アナハイム・エレクトロニクス社は空軍の要求に答え、地上用装備に最適化した機体を造った。白色彗星帝国戦を生き延びた試作機をベースに地上で各種テストを行ない、装備を一部地上任務に適したものへ変えて生産された機体が空軍の切り札の一つであった。

「撃て撃て!! アイツを何としても地上にキスさせろ!!」

「無茶言わんでくださいよ!! 速すぎて対空砲じゃ照準が追いつけません!!」

「ならば対空ミサイルは!?!」

「護衛機の対レーダーミサイルや偵察機のハッキングで役に立ちません!! どうしろというんです!!」

「根性だ!! 弾幕を晴れ、下手な鉄砲も数撃ちや当たる、だ!!」
「どうなっても知りませんよ!」

迎撃を行なっている兵団の鹵獲兵器「アベンジャーシステム」が一斉に弾幕とばかりにステインガーミサイルを撃つが、ミサイルの誘導機能は無力化されているので当たる可能性は低い。だが敢えて撃

ちだされる。「もしかしたら近接爆発でダメージは与えられるかもしれない」というわずかな、実に淡い期待をもって。だが、長年の戦争で電子戦などに手馴れた連邦軍はミサイルを逆誘導する芸当で半数近くを回避。残りもあさっての方向に消えていく。

銀翼をきらめかせ、まるで何もなかったように悠然と飛び去っていくハミングバードの編隊は連邦軍の希望をもたらす、日本神話で言うところの「八咫鳥」とも言うべき威力で「ハチドリ」の名に似合わない勇名を馳せていく。この一方的とも言える戦闘の模様はさまざま前線の兵団指揮官に伝えられた。

一兵団前線基地 スイス「シヨン城」

戦線の一つを担当する「シャル」大將は前線で恐れられるこの「ハチドリ」への対応に追われていた。兵たちの中には機影を見ただけで敵前逃亡する者も出る有様。偵察隊が撮影に成功した地上駐機時の同機の写真を手に取る。

「ううゝむ……。いかにも高速爆撃機と言った容貌だな……。エンジンも重装備を同時にドライブさせられる大出力のジェネレーターを積んでいると思われる」

「閣下、この機体が恐ろしいのは、重装備にも関わらず超高速で飛行することです。我が方には今現在追従可能な兵士はおりません」

「誰でも高速飛行可能にする追加ユニットの新規開発は？」

「本国工場で研究中ですが、推進関係に手間取っております……」

「本国の技術班は何をやっているのだ……せめて新型装備を行き渡らせなければ戦線維持もおぼつかないだぞ！」

「わ、分かっております!!!」

シャルはイラツキを隠さずに本国から赴任間もない技術将校に言い放つ。彼はハワイ戦の敗北以後、連邦の攻勢が始まった欧州戦線の苦境を本国に繰り返し通達している。本国の新装備開発の遅延に最も焦っている將軍の一人である彼は報告書を読むなり、対応策の思案に暮れる。兵からの信望の厚い彼は兵士たちの悲鳴をなんとかしようと奮闘しているのだ。だが、物量を売りにする鉄人兵団も次第に連邦軍の手馴れた対物量攻撃戦法の前に敗れ去るケースが増大してきている。その最たる例がハワイ戦である。欧州戦線の安定に温々としていた輩は連邦の反攻の前に敗れ去っていき、今、前線指揮官として配属されているのは以前の戦いで戦功を上げた指揮官たちに全て代替わりしている。

「せめて……接收したゴーストの調整が終われば……マシンになるのだがな」

彼は開戦時に連邦軍から接收した無人戦闘機「ゴースト」の改修が終われば戦況も少しは増しになるとため息をつく。連邦軍の生み出し「怪鳥」というべきゴーストは皮肉にも、鉄人兵団の尖兵となつて、その猛威を振るう日も近い。

一黒江は筈との試合を終えるとすぐに軍上層部から「欧州戦線へ着任されたし」という指令を受け取り、翌日の朝早く、VF-19A

に乗って欧州戦線へ向かった。箒も甲児にくつつく形で欧州戦線へ足を運ぶことになった。ISの事は甲児と黒江の相談で、欧州戦線についてから考えるという事になり、これでなし崩しに箒も民間協力者という形で戦争に関わる事になってしまった。

箒は自らの運命が大きく変わりつつあることを自覚し、元の世界に残してきた幼なじみのことを想い、寂しげにうつむいた。

一一夏……、この戦いが終わればまたお前に会えるのか……？

15歳のうら若き乙女の純情と思慕は異世界という特異な場でも健在であった。幼なじみへの思いを胸に、箒は黒江や兜甲児と共に欧州へ向かった。

第110話「パリは燃えているか 1」（後書き）

今回登場した兵団の将官の名前はフランス軍の軍人からとりました。
日付を明確化しました。欧州編は2200年の初頭の出来事としました。

第111話「パリは燃えているか 2」

一黒江は甲児と箒の2人より一足早く欧州戦線へ合流。現地に派遣された穴拭智子、加東圭子と再会し、ヌーボ・パリで行動を開始していた。ジープで現地を偵察していた所、連邦欧州方面陸軍の第3機甲師団を発見し、事情を聞いていた。

「師団長、宇宙軍から将校が面会を求めています」

「海、さんだあ？珍しいな、こんな所で。通せ」

「ハッ」

師団長は宇宙軍からの面会者と面会を行なう。加東たち3人である。彼が宇宙軍を、海、といったのは宇宙軍が今や事実上の海軍の役目を担っているからだ。圭子が3人を代表して事情を問うと師団長は苦笑混じりに答えた。

「この欧州戦線は攻勢を行なっているが、全てではない。指揮官も有能な奴に配置換えされたらしく、一部地域では膠着状態となっている。空軍も定時爆撃を行なっているが、戦局全体への影響は限定されている。我々は斥候任務を負い、フランス地域をパトロールしていたのだが、今しがた敵と遭遇して戦闘中なのだ」

「そんな状態で我々と面会して大丈夫なのですか」

「ハハッ、戦場では状況は選べんよ。この間など私がトイレ行っている時に戦闘開始の報告を受けたからな」

「凄いですね……」

智子が呆れたような、感心したような声で言う。彼女は航空畑出身なので、陸で戦う兵士たちの苦労は割と気にしてこなかったが、陸戦にも従事したハワイ戦以降はその苦労が身に染みて分かったらし

く、その傾向は薄れている。

「そうだ。流石にトイレ行ってる時に報告を受けたときは焦ったがね」

師団長は呵呵と一笑に付すと、部下からの報告を受ける。敵の分隊を155ミリ滑腔砲

で追い散らしたとの内容だ。そしてレーダーに航空部隊の反応があると告げられる。

「ふむ。敵は航空偵察部隊も出てきたか。空軍へ連絡は？」

「ダメです、ミノフスキー粒子が濃く……」

「動けるものは？」

「おりません。皆、戦闘で疲労困憊であります。車走らせたら事故ります」

「う、ううむ……新兵が多いからな」

……と、通報に回せる兵士がない事に焦る師団長だったが、圭子らに頼み込み、通報を引き受けさせた。智子はお使いに自分らが使われる事に多少不服そうだったが、圭子と黒江に諫められる。

「相変わらずだなお前。あの場合は引き受けるしかないじゃんか」

「そりゃさ、事故っちゃ困るけど……」

「古代ローマじゃないんだから無茶言えないでしょ」

「うう……圭子まで……」

2人の攻勢にすっかりタジタジの智子。3人は以前と比較すると、すっかり戦友として馴染んだようで、会話もどこか砕けた、歳相応の、友達同士で話すような感じとなっていた。これは3人の互いの精神的成長もあるかもしれない。

「見えてきたぞ」

ヌーボ・パリ市内の臨時航空基地司令に機甲師団からの言付けを伝えると、基地司令は直ちに下令。部隊に出撃を命じた。黒江はその場に愛機が無いので、すぐに基地の予備機のVF-25F（最前線なので新型機が運良く配備されていた）で戦列に加わると告げる。圭子はVFの搭乗経験はないもの、アフリカ戦線から召還される前に何度かZ系可変モビルスーツならば訓練と幾度か実戦の搭乗経験があったので、待機中のZプラスC4型（Zプラスの高高度守備用。旧・米軍出身の宇宙軍第103戦闘攻撃飛行隊所属機。スカル小隊のトレードマークである スカル& クロスボーンの元々の持ち主。ロイ・フォッカーは新人時代には同隊に研修替わりに所属した経験がある）を起動させた。智子はまだモビルスーツ、VF双方の訓練課程の途上状態なので地上待機（運悪くストライカーユニットはなかった）となり、智子は2人を見送るハメとなった。

（くうゝあたしだって訓練が終わればVFや可変モビルスーツの一つや二つ……!）

智子は訓練がまだ完了していない己の身を悔やみたい気分だった。戦友らがストライカーユニットが使えない状況でも対応出来る技能を持っている事への羨しさがこの時ばかりは溢れ出んばかりであった。

—それぞれ違う機体で出撃した黒江と圭子は互いになんだかんだ言って連邦軍の機動兵器を動かせるようになってる事に驚きあった。

「……へえ。黒江ちゃんはバルキリー使ってるのね」

「ヒガシ、お前こそなんでZ系なんだよ。じゃじゃ馬なんだぜ、その系統。車で言えばフェラーリのスーパーカーくらいの」

「アフリカから召還される前に何度か動かしてたのよ。じゃじゃ馬の癖は掴まないかね」

「お前なあ……」

2人ともとっさに乗り込んだので、格好はウィッチとしてのそれであるが、動かしているものがものである。ある意味ではとんでもない光景である。しかも高性能機ときている。新兵が乗りたくとも乗れない機体。絶対新兵達からぶーたれられるのは間違いない。

「レーダーに反応があった。高度11200mに反応がある」

「ああ。管制から報告があった。敵はロシア戦線から鹵獲した「An-124」を使って何かを運んでいるらしい」

「ロシア戦線から？それはまた急ね」

「ロシア戦線は奴さんから見れば後方地域だ。大規模な補給基地があるし、兵員なり物資を運んでいるのは間違いない。護衛の姿も見える。師団が捕捉したのはこの護衛隊だろう」

「襲う？」

「たりまえだ。なにかヤバイブツを運ばれたらまた地域が落ちるからね……各機、交戦開始！！」

「了解」

黒江率いるVF隊と圭子率いるウェイブライダー部隊は別々に交戦。手始めに護衛を蹴散らす作戦に打って出た。先制に黒江のVF-25Fから複数のハイマニューバミサイルが放たれ、編隊の出鼻をくじく。

「ちい、敵に補足されました!!」

「低空でいけ!! 如何に敵が大火力をもっていおうが、市街地は撃てんはずだ!」

彼は一か八かの策で超低空飛行に打って出た。一気に急降下し、バルキリーの火力を封じるために飛行コースを変える。

「大尉、敵が急降下を!!」

「何っ!?!」

An-124が巨体を唸らせ、急降下を始める。黒江はこの敵の策の意図を見抜き、単機で後を追った。

「クソッ!! 奴らめ……考えたな!!」

護衛をミサイルで蹴散らし、輸送機編隊の内の、急降下する3機を追う。自身も急降下し、市街地での空戦に持ち込む。

「ちいっ!! あんなに低く飛ばれちゃミサイルが撃てん!!」

バルキリーのミサイルの破壊力は通常の航空機破壊には一発で事足りるほどの破壊力はある。だが、超低空を市街地を半分盾にされるような飛び方をされると、自機が爆風に巻き込まれる可能性がある上に、民間人を巻き込んでしまう。黒江はガンボッドで落とすしかないと踏んで、撃つ。しかし、敵もさる者、ラダー操作を巧みに使い、弾道を反らせる。

「アイツ…手馴れてやがるっ!!」

思わずそう毒づく。バトロイド形態での格闘戦をいどめるほど敵も待ってはくれないだろう。焦りで汗が滴りでて、急激に喉が渇くのを感じる。2機とも見事な機動だ。

—このままでは2機に逃げられる！

焦りが一層大きくなる黒江であったが、不意に上空からZプラスC4型がモビルスーツ形態で降りてきた。

「黒江ちゃん、あとは任せなさい！」

「ヒガシ！？お前、ビームライフルはどうしたんだよ！？」

「替えの弾忘れたから捨てた！」

「ア、アホかー！」

思わず突っ込む。弾というのはEパックのことだが、モビルスーツのペーペーなドライバーである圭子はその敢行を忘れたのだ。しようがないといえばしようがないのだが……。

圭子のZプラスC4型は敵輸送機のエンジンを片側全て、とっさにビーム・サーベルで切り裂いて、一機を不時着に追い込むが、それが限界であった。最後の機は追撃を振りきり、スイス方面へ逃走。輸送機編隊の内およそ半数とちよつとは落とせたものの、数機は黒江らをも手玉に取る形で逃走（彼らにとっては強行突破）に成功。兵団側の戦術的敗北ではあるが、戦略的目的は果たした格好となった。

「やりましたね」

「ああ。俺は開戦時から輸送任務についてるんだ、このくらいはたやすい」

兵団の輸送機パイロットはハイタッチをしあう。彼らは本国の重要

物資輸送の任務を果たすべく、スイスへ機体を向けた。

一籌や甲見らが到着したのはそれからおよそ数日後のことであった。

第112話「パリは燃えているか 3」

―この世界は戦争が続いている。その過程で宇宙戦艦や宇宙戦闘機などの多くの兵器が生み出され、ISのように人の形を成した兵器が花形らしいが……変形・合体、何でもありだな……。

これは篠ノ之箒が欧州戦線へ向かう連邦の輸送機内で見っていた映像資料への彼女の感想である。近代の戦争で最も武勇を上げた兵器は人型機動兵器であり、それが地球圏で最も重要な地位を占めているという事実は自分たちの世界のISに通じる面がある。それに幾つかの少年漫画で見たような兵器群も、本当に実在する、世界。信じがたいが、地球の地形まで変化が生じている事が、根本的に異なる歴史を辿った世界だということを思い知らされる。それに社会構造的に真の意味で男女平等となった世界は多くの人々が夢見た世界。箒の世界ではISの存在が皮肉にも嘗ての男尊女卑の社会を「オセロの駒をひっくり返した」ように裏返しにしただけの女尊男卑を進めてしまった。客観的に自分の世界を見ると、どこか歪な世界となってしまう事がわかる。

―この世界では宇宙レベルの生存競争が幾度か行われた事で、男も女も性別問わず戦いに従事した。戦争が男女平等を推し進めたとは……皮肉だな。

「女性の活躍は、最近では「ネオ・ジオン」のハマーン・カーンが連邦を完全に手玉に取る立ち回りを見せ、女傑と称された……か。この人はなんとも恐ろしいな」

映像の中で勇壮な演説をみせる第一次ネオ・ジオン戦争当時のネオ・ジオン指導者「ハマーン・カーン」。彼女は最終的にダブルゼータ

ガンダムのパイロットのジュード・アーシタに敗死したもの、そのカリスマ性は今なおジオンシンパ達の間では健在である。そして一戦士としての能力も随一であり、グリプス戦役時の機体のキュベレイで第一次ネオ・ジオン戦争当時地球連邦軍（当時はエウーゴ）最新最強を誇ったZZガンダムと対等に渡り合った。彼女が指導者・戦士として名を残したように、リン・ミンメイは当初は若手アイドルに過ぎなかったはずの人間が「人類を歌で救った」事でアイドルが巫女・戦神のように祀り上げられるきっかけを作った。人間、何がどうなるかはわからないという事だ。自分とて、いつの間にか軍隊に協力する事になり、こうして欧州へ向かうことになった。欧州といえばクラスメイトの「シャルロット・デュノア」、「ラウラ・ボーデヴィツヒ」や「セシリア・オルコット」の出身地であるが、今なお連邦の保有する欧州地域で往時の姿を保てた地域はイギリスだけだという。フランスは心の拠り所であったパリを戦火で消失し、地球での地位を大きく減じたと本には記されている。

「シャルが見たらショックで倒れるんじゃないか……？ この光景……」

フランス出身のクラスメイトが見たら失神は確実な光景が窓に映る。ここがとても中世以来、フランスの首都として栄華を極めた「花の都」パリとは思えない。

—あの世界有数の大都市の成れの果てがこの大きい湖とは……。宇宙戦争の惨禍は街をこうも簡単に消し去ってしまうのか……？

栄華を極めたパリの骸は箒に戦争の現実をこれ以上ないくらいに示す。残酷な現実。だが、それはこの世界のパリの行く末であって、自分たちの世界ではそうなるとは限らないが、それでも気分のいいものではない。

(シャルにいつでも信じないだろうな……)

箒はパリの惨状にそう述懐する。たとえこの光景を自分の世界に戻って聞かせても「与太話」と笑われるのが関の山に思える。やはりこういう事は実体験をしなければ分かるものではない。自分たちの世界・時代での授業の一環として行われる、高齢者の戦争体験談のよう。

輸送機は旧・パリの市街地跡の湖(辛うじて水没したエッフェル塔の最上部が確認できることから、ここがかつての、花の都、という事を伝えている)を飛行し、もうじき再建されたヌーボ・パリの軍事基地に着く。箒は自らの前途に待ち構えている過酷な運命に心を曇らせる。

(何はともあれ戦うしかない……戦って、戦い抜いて……もう一度一夏に会うんだ!!)

それが箒のこの世界で生き抜くための決意であった。宇宙戦争というSFでも陳腐でチープな題材となった感がある舞台に身を置くことになった彼女であるが、それでも想い人に会うという希望は捨てていなかった。

一輸送機が軍事基地へ着陸し、タラップを使って降りると、この日は地上待機していた黒江が出迎えてくれた。(箒は今回は黒江からとりあえず渡された、普段着がわりの扶桑陸軍軍服を着込んでいる)

「オッス、ご苦労さん」

「綾香さん」

黒江に案内され、基地の司令官に挨拶をする。軍隊である都合上、敬礼は必須なので、ラウラが転入時にやっていたのを思い出し、ぎこちなくも敬礼を行なう。（大まかな区別で言うならば陸軍式敬礼）

「長旅のところをご苦労だった。君のことは黒江大尉から聞いている。大変だろうが、頑張ってくれ」

「あ、ありがとうございます」

司令官は民間人、それもなし崩しに自分とは全く関係のない世界で戦いに巻き込まれる事になってしまった筈を労い、特別に部屋を工面してくれた（前線であるゆえに浴室は無く、シャワールームのみである）。

「風呂はないのか……まあ贅沢は言ってられんか」

……と、日本人としてはいささか寂しい気持ちになる。風呂はやはり日本人の心なのだ。日本人はシャワーではとても満足できないというが、IS学園でも風呂に入らないと落ち着かなかった。それは正しい。荷物を置き、ひとまず、ベットで一眠りする。

—それからしばらくしただろうか？すっかり眠りこけていたのだが、警報と兵士たちの慌ただしい足音で跳ね起きた。

「なんだ!？」

部屋からでてみると、廊下をパイロットスーツ姿の兵士たちが慌ただしく部屋から見て東の方向へ走っていく。

「綾香さん、これは……!?!」

「敵の襲撃だ。ここところは大人しかったんだが、敵も作戦に打って出たようだ。今この基地の兵力の主力は空爆任務で出払っている……そこを上手く突かれた。私も出る。お前も出られるか?」

「……もちろん」

箒は黒江の言葉にうなづき、共に格納庫に向かう。

基地の防空網は場所柄、そこそこ整備されているが、その対応能力のキャパシティを超える物量での襲来は防衛設備だけでは対処できない。司令官は本来なら温存しておきたい予備戦力である、待機部隊を緊急出動させる事を決定したのだ。黒江はこの日は基地へ持つてきていたVF-19Aを使用して事に当たる事にした。基地に残存している部隊は宇宙軍「第86戦闘攻撃飛行隊、サイドワインダーズ、」（部隊の出自は20世紀中の米軍空母「ニミッツ」の戦闘機隊）が主である。部隊の機体は主に「VF-171 ナイトメアプラス」。それに大隊長の好みでカスタムされた「VF-22 シュトゥルムフォーゲル?」が隊長機として配備されている。そこに黒江のVF-19Aと箒が混じる形となった。

一格納庫

「よし、出撃だ!! 各機、エンジンを温めろ!!」
「了解!!」

如何にバルキリーと言えど、すぐに出撃できるわけではない。エンジンを程良くアイドリングさせて、エンジンを温めてから発進する

のだ。（最初はファイター形態なので）ノーズアートが描かれた機体がそれぞれ「いかにも軍用機」といった風貌を見せている。

「じゃあ箒、お前のISを見せてもらおうか」

「はい」

黒江の言葉に促されるように箒は自身の、世界唯一の完全なる第4世代、IS「赤椿」を展開させる。紅に彩られたその機体は見た感じは「ストライカーユニットを近代化させ、体の各部に装甲を纏った」ような印象を受ける。黒江としては主な武装が刀剣なので、親近感が湧くようで、どこことなく嬉しそうな表情を見せる。

「ほう、二刀流か。二天一流みたいだな」

「宮本武蔵のアレですね？そっち方面もお詳しいんですか？」

「若い頃は道場に行ってたこともあってな。剣術をやってるという
ような流派と剣を交える機会が多いんだよ」

それは宮本武蔵が晩年に完成させた兵法。二刀流の代表的な例だ。
箒は実家が篠ノ之流剣術という流派の剣術道場である関係上、同剣術を習得している。箒はそのため剣術には自身があったが、それ以上の使い手である黒江（魔のクロエと畏れられた）にはあっさりと打ち破られた。黒江は今後、時間があれば自身の剣術を伝授していくと箒に告げる。

「よし、行くぞ」（穴拭のツバメ返しを今度見せておこう。あれは
使えるからな）

と、一人ごちるとバルキリーに搭乗し、ステージ？熱核タービンエンジンを唸らせて飛び立つ。箒もISの推進スラスターに灯を入れ、黒江に続いた。

「VF-19Aはスロットルをそんなに開いていないが、赤椿はほぼ全速に近い。機体の基礎的速力が全く違うのだ。エクスカリバーはA型では大気圏内でも有にマッハ6以上の速力を発揮する。一方のISは小回りの良さで勝負するため、速力は第4世代ジェット戦闘機と比べてそんなに優速ではない。それ故にバルキリーの方がISに合わせるという現象が発生。箒は内心、バルキリーの圧倒的速力に舌を巻いた。」

「大尉、敵を発見した。高度14000、速力は今までより速い、VF-11並だ。どうやら新型飛行ユニットを装備したと思われる」「くっ、この間落とせていれば……!!」

黒江は大隊長機からの連絡に、この間の輸送機隊を一部でも取り逃がした事を悔やんだ。あれは新型飛行ユニットを輸送する部隊だったのだ。一部でも部隊に渡れば前線の工廠で生産体制を整えさせる。兵団の恐ろしさに黒江は思わずキャノピーに拳を打ち付ける。

「大尉、悔やんでいても始まらない。今の俺達の任務は敵を落とすことだ」

「わかってます……!!」

「隣のお嬢ちゃんはこれが初陣だったな？」
「は、はいっ」

箒は突然の通信に思わず声が上ずる。なにせ隊を束ねる高級将校直々の通信なのだ。緊張しないはずはない。

「そう硬くなるな。初陣じゃ誰もがそうだ。生き残る事を第一に考えろ。戦果は二の次だ」

「了解しました」

「良い返事だ。……全機、敵は今までのハエじゃない。だが、落としてみせろ。我々は米軍の伝統を受け継ぐ栄光の「サイドワインダーズ」だ。新型完成記念パーティにしてやろう」

大隊長の訓示は若いパイロットたちを奮い立たせる。それほど言葉の力があつた。米軍時代から受け継がれる精神。それを示す。搭乗員はその気持ちで自らを奮い立たせる。

—そして、大隊長機自らの突撃を皮切りに戦闘が始まる。はたして、箒はこの戦闘を生き残れるか。

第112話「パリは燃えているか 3」(後書き)

ミリタリーネタを仕込んでいます。米空母航空隊を知っていればわかるかと

第113話「パリは燃えているか 4」(前書き)

今回は欧州戦線へ向かうドラえもん達とロンド・ベル隊に触れます。

第113話「パリは燃えているか 4」

—欧州戦線で箒と黒江が戦闘開始した頃、欧州戦線へ向かうラー・カイラムでは。

「お久しぶりです、アムロさん」

「ジュドー、久しぶりだな。1944年じゃずいぶん活躍したそうじゃないか」

「俺よりシーブックさんのほうが目立ってましたけどね。例の質量を持った残像で」

「501のメンバーのど肝を抜いただろう？あれ」

「ええ。ネウロイのビーム避けまくってウェスバーの一斉射撃でぶちぬいて見せたんですよ、シーブックさん。真ゲッター並に目立ってましたよ」

ジュドーは1944年での任務を終え、2199年へ帰還してきたのだが、最後の戦いでシーブック・アノーが怪異をF91で撃墜してみせた事で、ミーナたちにガンダム之力を示してみせた事をアムロに告げる。F91はサナリィが造り上げた「F90V」の発展型にして、小型モビルスーツの完成形。その性能はvガンダムを超え、機動性はV2ガンダムに次ぐ物を持つ。その威力を最後に501の面々に見せつけ、ガンダム之力に対して懐疑的であったミーナ・デイトリンデ・ヴィルケを納得させたという。

「確かにあのMEPEは凄いらな。F91を当代最強にした能力だし、模擬戦で俺も苦労したからな」

アムロはかつてF91がまだ最新鋭機であったコスモ・バビロニア建国戦争時、vガンダムでF91と模擬戦を行なった際にMEPE

を発動させたF91の前に苦戦した経験があり、あの機動性は歴代のガンダムの中でも屈指のものだとアムロは言う

F91とZZの帰還により、ロンド・ベルの戦力は高まったわけだが、これもロンド・ベルの戦力増強を議会が容認し、ガンダム系の全面的運用が解禁されたために実現した光景。アムロ曰く「本当だったらシャアとの戦いで実現させたかった陣容なんだがな」と第二次ネオ・ジオン戦争当時の戦力不足をボヤくと同時に、今次大戦で議会の改革が進んだ事でガンダム系の運用基準が緩和され、本来なら少数生産で終わるはずのZ系などの大量配備が実現したことへのうれしさを同時にみせる。

「あれ、アムロさんってZ好きなんですか？」

「個人的に気に入ってっつてな。専用のZをこさえさせた事もある」

「意外ですね。シンプルなの好きとばかり……」

「俺だって男だ。変形合体は一度は憧れるもんだ」

アムロは第一次ネオ・ジオン戦争当時、アナハイム・エレクトロニクス社にカラバが発注したZガンダムの3号機（ただし、予備パーツで組み上げられた機体を2号機と数えた上での事。新規建造分としてはオリジナルのZに次いで2機目に当たる。丁度仕様が3番目に当たることもあり、3号機と呼ばれる）を自身の専用機として仕上げさせ、Zプラスと使い分けていた事をジュドーに告げる。ジュドーもZとZZを使い分けているのでその辺は理解できる。何気ない会話だが、周りの一般兵士達はそんな2人に羨望の眼差しを向けていた。

「いいねえ……大尉とジュドーのやつは」

「なんですか？」

「そうか、お前はまだ配属されて間もないからな。いいか？ Z系に乗れるのはエースパイロットの証なんだよ。これが言われるようになったのは第一次ネオ・ジオン戦争からなんだが、Z系は操縦難度がピカイチで、ヒョッ子じゃ持て余す事が多かつたし、航空機の操縦技術も持っていないといけないから乗るには苦労が多くて、結構狭き門なんだよ。元・戦闘機畑出身のモビルスーツパイロットの連中が好んで乗ってるし、アムロ大尉とかは言う必要ないくらいの腕だから軽い。だからZに乗れた連中は「Z乗り」とか言って、あこがれの対象なのさ」

「へえ……」

そう。連邦軍のモビルスーツパイロットの間ではジム系に飽きたら上位機種のZ系に乗るのが一種のステイタスになっているのである。Z系の可変機構の廉価版を目指してリゼルが造られた事で幾分、敷居は低くなったが、それでも本物のZに乗るには相応の腕が要る。それらを持つパイロットは「Z乗り」と称され、羨望を集める存在となっている。バルキリーで言えば普及版ではなく、特務タイプのA VFに乗るようなものだ。

そんな兵士達の会話を知ってか知らずか、アムロは欧州戦線に行くにあたって正式に配備させた（扱いとしてはVの予備機）Zガンダム3号機の整備をメカニックらと共に行なう。ジュードはブライト・ノアに帰還の報告を入れるために艦長室へ赴いた。格納庫の陣容も豪華そのものであるが、今はまだ語るべきものではない。

ードラえもん達はハワイ戦後に軍の要請でラー・カイラムへ乗艦していた。その中の射撃訓練室では。

重く、鈍い銃声を響かせながらのび太とドラ・ザ・キッドが射撃訓練に勤しんでいた。それをなのはが観戦している。のび太は長銃身の S & amp; W M 5 0 0 を持っている。ダーティハリーで有名な「44 マグナム」のおよそ3倍の威力のものすごい化物銃で、当然ながらグレードアップ液を使つての訓練である。ちなみにドラ・ザ・キッドの方はこれまた大口径銃のデザートイーグル（50 A E 弾仕様）という凄まじい大口径銃のオンパレードである。のび太は S & amp; W M 5 0 0 を手足のように扱い、遠くの標的の真ん中に全弾させるという芸当を見せ、キッドも負けじと2発をのぞいて真ん中に命中させる。なのははこの2人の命中精度の凄さに圧倒され、言葉もなかった。自身は砲撃魔法の照準補正はレイジングハートに任せてるので、それを天性の感で行なう2人の凄さが分る。

「今回は僕の勝ちだね、キッド」

「く、くそおっ……テメエ…、また腕を上げやがったな」

「キッド、ドリーマーズランド、での事件を知ってるかい」

「お、おう。どうりで……」

「じゃあ横須賀海軍カレー、おごつてよ♪」

「ぐぬぬぬ……」

のび太は過去の銀河超特急での冒険で腕をさらに上げたと言語し、勝ち誇った表情を見せる。これでお昼のランチはキッドのおごりとなった。この訓練は実は昼飯をどっちがおごるか賭けた男同士のいじらしくも切実な戦いであった。なのはは2人を止めようとしたのだが、キッドに引きずられて連れてこまれたのである。その時にしずかに「と、とめないでいいんですかぁ〜!？」と問いかけたが、しずかは「別にいつものことよ。あの2人、張り合ってるのよ。銃

の腕で」と、長い付き合い故の冷めた発言でさほど気にもとめなかったとか。なのははここでしずかの意外にドライな一面を垣間見たという。

「ほえ……凄いな2人とも。あんなに遠いのにな」

「まあね。慣れればこんなもんさ」

「感と度胸。それが秘訣だぜ」

のび太は銃をホルダーに仕舞いながらいう。数十メートル離れた標的にピタリと命中させる凄さ。のび太は非常時にしか使えない特技だというのが、オリンピックに出れば金メダル間違い無しの逸材。これはのび太が西部劇に傾倒していることも大きい、マカロニ・ウェスタンの「荒野の用心棒」、往年の名作「荒野の七人」、「OK牧場の決斗」、「明日に向って撃て!」、「シェーン」などは視聴済み。更に西部開拓時代のタブーに触れた「ソルジャー・ブルー」もカバーしているという徹底ぶり。その為彼はオートマチック式より回転式拳銃を好む傾向が強い。キッドもどの時代の銃も使えるが、西部開拓時代〜20世紀頃のものがいいとの判断を下している。その点で2人は気が合うのだ。

「さて、食事に行くぜ」

「キッド、落ち込んでない?」

「るせえ!」

「も〜、喧嘩はよくないって〜!!」

負けた事にため息をつくキッドを先頭に、食堂へ向かう3人。これからの激戦の前のつかの間の日常であった。

特別編のようなもの……その3（前書き）

特別編の続きです。

特別編のようなもの……その3

—C・E・71年9月。連邦軍要塞「ルナツ―」が遭遇した事件における最初の艦隊戦が行われた。我々の協力者—3隻同盟—が未知の惑星^{ルナツ―}へ逃げ込んだ事を察知した各陣営が艦隊を差し向けてきたが、我々はこれを臨時に第5艦隊旗艦を拝命したアンドロメダ？級戦艦（元々は白色彗星帝国戦時に連邦軍最新鋭であった、アンドロメダ級の二番艦として竣工予定であったのを、当のネームシップが戦闘であっけない幕切れに終わった事を期に改良のために工期延長され、武装は新造し、船体の足りないパーツはドックごと破壊された姉妹艦達の無傷であった資材を流用し、更に船体構造を白色彗星帝国の火炎直撃砲などにも耐えうるように強化した結果、別艦と言える性能向上を果たしたので艦級が変更された）を「ネメシス」を中心にした艦隊で迎え撃った。

—ルナツ―内部では見るからに「超弩級戦艦」である複数の艦艇が出撃準備を整えていた。連邦軍の誇る波動エンジン搭載型戦艦達だ。ネメシスとその廉価版と言える「主力戦艦」級（波動エンジン搭載艦としては安価で数を揃えるべく、短期間で大量配備を見込んだためと、艦容に大昔の超弩級戦艦の面影が残るので各地域行政（旧各国政府）達が想い想いの名で呼びたがるのが見込まれたため、特定の艦級名は冠されていない）である。

この時期にルナツーに駐留していた主力戦艦級は後期生産型の「サウスダコタ」、「マサチューセッツ」、「セント・ジョージ」、前期型の数少ない生き残り「金剛」、「榛名」、「高雄」、「ヴィットリオ・ヴェネト」であった。それらを護衛するは主力戦艦改級戦闘空母第10番艦「コロッセス」、同級13番艦（12番艦に動力系の不具合が出たので先に竣工）「クイーン・エリザベス」、14番艦「蔵馬」である。前衛の巡洋艦と駆逐艦も波動エンジン艦で固められており、外宇宙航行艦で固められたこの臨時編成艦隊は少なくとも砲撃戦では無敵と言える陣容であった。

「空母の護衛付き打撃艦隊か……アレだけで本当に大丈夫かよ」

ルナツーから迎撃のために出港していく臨時編成の第5艦隊の陣容にいささかの不安を見せるのは3隻同盟のメンバーのカガリ・ユラ・アスハだ。数で押し切ろうとする地球連合（ただしこの時はプラントの要塞攻略が控えているので、中規模の分遣隊規模）軍の艦隊、更にそれを討つと同時にルナツーに匿われている脱走艦「エターナル」を奪還せんとするプラントの事実上の国軍「ザフト」。両方合わせてかなりの規模になるが、それをルナツーは戦艦7隻、空母3隻を中心とする比較的小規模な艦隊で迎え撃とうとするのだ。数だけ見れば不利そのもの。カガリの隣にいるラクス・クラインも不安そうに俯く。

「ええ。彼らは本当にあれだけで勝てると思いますのでしょうか……？」

「何、あれだけで十分だ」

「あなたは……？」

「地球連邦軍、月面軌道艦隊旗艦「バトル13」艦長、キム・キャビロフ中将。君たちの事は基地司令から聞いている」

ルナツーにたまたま寄港していたバトル級（新マクロス級の戦闘艦部分の超巨大戦闘空母）の第13番艦「バトル13」。（その偉容は連邦軍のなるべく見せたくない情報に分類されるので、彼女らには一分しか公開していない）その艦長であり、元SDF-1「マクロス」のブリッジオペレーターの一人でもあったキム・キャビロフ中將が軍服姿で現れた。彼女は今や寿退職した同僚らとは対照的にゼントラーディ軍との和解後も軍に残り、異例の若さで将官にまで上り詰め、「キャビロフ学校」なる独自の派閥すら保有するに至り、改革派の発言力回復にも一役買った連邦随一の女傑である。年齢は宇宙勤務故、戸籍上の年齢と肉体的年齢は差があり、肉体的に言えば20代前半頃である。

「あれらは外宇宙航行用に造られた艦艇だ。無論、同等の外宇宙航行用の艦艇を持つ敵の砲撃に耐えられるように造られているから、この世界の兵器ではほぼ勝てん」

「が、外宇宙だあ！？嘘だろ……」

「外宇宙って……冥王星より外なんですか？」

「そう。正確に言えば銀河の外だ。マゼラン星雲やアンドロメダ星雲までだったらおよそ半年もあればいける」

「……」

カガリとラクスはその言葉に思わず絶句する。外宇宙航行は惑星間航行以上に困難を極めるのは如何に素人でもわかる。それ用の船は自分たちの常識では未だどの国でも机上の空論に過ぎない。それを当たり前のようにサラっと言ってのけるキャビロフに、ルナツーが元あった世界は一体どんな世界なんだと、啞然としてしまった。

一第5艦隊はショックカノンによってアウトレンジ攻撃を行なう事になり、射程が長い（40cm～51cm砲）戦艦群の主砲塔が回転し、敵艦隊の方角に砲を向ける。

「敵はこの距離ならまだ攻撃されんと思っとるな。全艦、突撃隊形！！砲・雷撃戦用意！！まずは地球連合とかいう危ない連中の出鼻を挫く！！」

地球連邦軍は保有する優れた情報網で、この世界の地球連合を支配する危険思想の情報を手に入れており、かつてのティターンズより危ない思想が蔓延っている事に危険を感じ、真っ先に排除することにしたのだ。アンドロメダ級と主力戦艦級の大口径ショックカノンの方向が仰角をあわせ……ネメシス艦長がサッと手を振った瞬間、戦艦群の主砲が火を吹いた。同時に空母群はコスモタイガー、VF、モビルスーツなどの艦載機を発進させた。

ショックカノンの光芒は見事に地球連合の艦隊の先頭の駆逐艦を一発でぶち抜き、後ろにいた250M級戦艦（連合軍での名称はネルソン級）をも撃沈せしめた。ミノフスキー粒子を散布したので照準はあまりアテにはならないが、初弾命中は天佑であった。これに連合は焦る。

「敵艦の攻撃です！！」

「馬鹿な……この距離でか！？遠すぎる……奴さんは日本海軍か！？」

連合軍の艦隊司令はこの時代にアウトレンジ戦法をやられるとは思ってもいなかったのか、顔色が見る見るうちに青ざめていく。大昔の大日本帝国海軍が戦艦大和で夢見たアウトレンジ攻撃の再現は戦艦乗りとしては心胆を寒からしられてしまう。

「て、提督！敵機襲来！！戦闘機です！！」

「モビルスーツではないのか！？」

「は、はい！！」

それは一番槍で飛来したコスモタイガー隊であった。単座型と雷撃型が混じった編成ながらも見事な動きで対空砲火を回避し、急降下爆撃を加える。中には敵艦の主砲が真正面から来るのをバレルローで回避し、そのまま砲身にミサイルを撃ちこむ猛者も現れる。

「全機、敵艦隊の先鋒は俺達で料理するぞ！！」

「了解！！」

このコスモタイガー隊の隊長は一年戦争以前の軍歴を持つ、2199年時点で45歳の老兵。一年戦争中は同僚たちが当時の主力機「セイバーフィッシュ」からモビルスーツの「ジム・ライトアーマー」へ兵科そのものを転科していくのを尻目に宇宙戦闘機一筋でいた男。戦闘機復権の立役者である名機「ブラックタイガー」が造られるとすぐに乗り換え、愛機とした。白色彗星帝国戦の際には退役していたが、本土防衛のために復帰させられ、コスモタイガーで奮闘した。白色彗星帝国戦後は再度の退役はせず、前線の戦闘機乗りとして生涯を終えるつもりで空母「コロッサス」の乗組となった。その戦闘機乗り人生の華を咲かせるべく、戦っていた。その所属部

隊の名は「第41戦闘攻撃飛行隊、ブラックエイセス、」。第二大戦中はF4Uで日本軍と戦った歴史を持つ部隊の一つで、竣工もなくまだ固有の戦闘機隊を持たないコロッセアに今回配属されている飛行隊。乗組となった彼が今回の事件にあたり、前の乗艦の部隊をそのまま転属させたのだ。なので、英国名の空母にアメリカ軍系の部隊が艦載機部隊で乗っているという、アンバランスさを生んでいた。

「ハハハ、こりゃいいねえ。まるでおもちゃの船を沈めるみてえだ！」

と、連合軍に悪態をつきながら戦艦の艦橋に一発お見舞いし、そのまま護衛艦を機銃掃射で沈める。

「サイコ野郎どもめ、コスモタイガーの戦闘力を甘くみんなよ」

アメリカ系らしく、わざと敵旗艦とおもしき大型艦の艦橋すれすれに飛び、艦橋から視認できるように中指を立てて、敵を挑発してみせる。その様子を見た連合軍の司令は……

「おのれ、アメ公めが！！ふざけおって！！」

「し、司令、落ち着いて！！」

「これが落ち着いていられるか！！あんなふざけたポーズを取るのは絶対ヤンキー共に決まっとる！！私を侮辱しおって！！」

司令はどういうわけかポーズに過敏までに反応を示し、艦の火砲を全てコスモタイガーに向けるが……。その前に飛び去っていく。コスモタイガーはその性能を示したわけである。

特別編のようなもの……その4「光の翼」

一地球連邦軍はコズミック・イラ71年の戦いへ介入したわけであるが、アンドロメダ？級の最初の餌食となったのは地球連合宇宙軍第3機動艦隊の面々。その艦船のうち戦艦らはらはアンドロメダ？級「ネメシス」と主力戦艦らのアウトレンジ攻撃により蹂躪されていた。

「、テイルピッツ、炎上!!」

「ええいっ……我々がこうも一方的になぶられるだ……それも戦闘機と戦艦に……まだ射程に入らんのか!？」

次々に舞い込んでくる悲報に怒りを積もらせる連合軍艦隊司令。お株を奪われるアウトレンジ攻撃と戦闘機による航空攻撃。モビルスーツによって『過去の遺物』として葬り去られたはずの戦法で甚振られるというのはこれ以上ない屈辱である。

「司令、ようやく射程に入りました!!」

「よし! 一番艦及び二番艦は撃ち方始め!! 三番艦以降は射程に入り次第、砲撃!!」

司令は「戦艦には戦艦で」の法則で砲撃戦に打って出た。空母艦載機群に発進を命じつつ、無傷の戦艦群（艦載機射出後の旗艦のアガムノン級含め）を艦隊から分離させた。砲撃戦を戦う腹つもりであった。、海軍軍人、として砲撃戦を戦うのは昔から誉とされる。彼もそのご多分に漏れなかった。

連邦軍側もそれに応えた。戦艦群を分離させ、砲撃戦に打って出る。海軍のセオリー通りに単純陣での突撃である。

「敵モビルスーツ、我が方のモビルスーツと接敵。交戦中」

「コスモタイガー隊は？」

「コスモタイガー、帰投しました」

「よし……全艦、目標、敵艦隊！砲撃準備！！最初は奴さんに撃たせてやれ」

「分かってますね、艦長」

「うむ。翔るのは気分がいいものではない。正々堂々と砲撃戦で葬ってやらんと彼らも成仏できんだろう」

彼らは地球連合軍との砲撃戦前というのに落ち着いている。自艦の性能に絶対の信頼を持つ故の余裕である。波動エンジン搭載艦はその膨大なエネルギーに耐えうるために装甲は強靱なものを用いている。その性能は、装甲でビームを弾ける、ほど。それは対ガミラス戦での旧型外惑星航行艦とガミラスの駆逐デストロイヤー艦の戦闘で証明されているからだ。

「おっ、来たな」

ネネシスめがけ、敵艦の砲撃の光芒がほとばしる。ネルソン級からの2連装大型ビーム砲の砲撃である。だが、その光はショックカノンやメガ粒子砲と比べてエネルギー量が小さい。この程度は蚊に刺されるようなもの。何発食らおうと装甲で弾ける。横っ腹に当たったものの、破壊エネルギーの光そのものが装甲を貫徹せず、偏向してしまう。

「あの時のガミラスの奴らの余裕が分かったよ」

「ああ、艦長は確かガミラス戦の後期まではM-21741式宇宙戦艦（連邦軍が以前に使用していた外惑星間航行戦艦の一つ。ヤマトの建造が始まってからは旧式化していたが、ガミラス戦時まで外惑星艦隊で使用されていた）で指揮をとっておられましたね」

「ああ。あの時は砲撃戦は勝てず、空母艦隊で持ちこたえていたかな。それが今やこうして余裕でいられるんだから……波動エンジン様々だ」

波動エンジン搭載艦の装甲を撃ちぬく出力を持つビームはこの世界には存在しない。たとえアークエンジェル級の陽電子破城砲を以てしてもアンドロメダ級の船体装甲の前には螻蛄の斧となってしまう。

「艦橋部を狙われてもその前に超合金と硬化テクタイト板の複合装甲の防御シャッターを展開すればいいだけの話。」これは修理を引き受けた際に、艦のデータをコピーした際の技術者達の言葉。連邦は3隻同盟の艦艇の修理を引き受けた裏でルナツーの保有するAI（軍需産業の一つのネルガル重工製）を使用してハッキングを行ったのである。ドラえもんがいた時代の12世紀初期の超AIに迫る処理能力を、取り戻した、ものならばこの程度は容易な事であるが、あくまで情報収集が目的なのでそれ以上は行っていない。友好ができればそれに越したことはないからで、致し方無い事でもあった。

「さて、遊びは終わりだ！！全艦・全砲塔一斉射撃！！奴らを塵に返してやれ！！」

アンドロメダ？級の51cm砲と主力戦艦級の40cm砲が一斉に

シヨックカノン

火を噴く。威力はガミラスの駆逐型デストロイヤー艦を一発でぶち抜く。それが束になって連合軍を襲ったのだ。ネルソン級達はそれぞれ違った最期を遂げる。中央部へ命中したと同時にベニヤ板のように艦体をしなせたとせば中央から裂けて爆発する艦、艦橋部を破壊され、操艦不能となって僚艦と激突して互いに爆発した艦もあれば、主力戦艦級に一矢報らんと炎上しながらも最期の一撃をミサイルと砲撃の一斉射撃で加えて逝く艦もあった。その艦「ロドネイ」は一矢報いた。先頭的主力戦艦級「ヴィットリオ・ヴェネト」の一番砲塔を近距離からの攻撃で炎上させ、自らの命を引換に同艦の戦闘能力を削ぐ。

「被害は！！」

「一番砲塔、損傷！！炎上中！！」

「消化、急げ！！砲塔の可動は！？」

「砲塔の稼働装置に異常！！今すぐの修理は不能！！」

「一矢報いられたな……ちいっ」

「ヴィットリオ・ヴェネト」艦長は舌打ちする。まさか一番砲塔使用不能の損害を受けるとは……と予想外の損害の起きさに思わず驚愕する。

一幸い旗艦と僚艦が敵旗艦以外の艦艇を相手取ってくれているが……この艦級にはまだ改善の余地が多いな。

艦長は主力戦艦級の改良の余地はまだ大きいことを実感し、同艦に戦闘を継続させた。

「モビルスーツは地球連合軍主力機「ストライクダガー」と地球連邦軍側は主に主力機「ジェガン」シリーズとその後継機「ジャベリン」、数合わせのジャベリンに至る前の小型量産試作機「ジェムズガン」の対決となったが、その中に二機だけガンダムタイプが混じっていた。青い「ガンダムF91」の量産仕様機と、ひときわ目立つVの光の翼を持つそのガンダムタイプの名は「V2ガンダム」。

パイロットはウツソ・エヴィン。

「すまんねウツソ君。V2を運びに来てもらっただけだったのにこんなことに巻き込んでしまっただけ」

「いいんです。この世界の争いを止めるのが僕の役目なら……僕はガンダムに乗ります」

スタークジェガンを駆る隊長機からの通信にウツソはこう答えた。彼はかつてリガ・ミリティアを勝利に導いたニュータイプ。年はジュード・アーシタよりも下。彼はかつては不法居住者の集落であった「ポイント・カサレリア」出身で、ザンスカル帝国崩壊後は同地で隠居生活を送っていた。彼の功績により、白色彗星帝国戦後には同地区が連邦から正式に居住区として認められた。ウツソは白色彗星帝国戦後は戦いに戻るつもりはなかったが、同地に放置されていたV2ガンダムの悪用を恐れた政府の要請で、ルナツーにV2を預けるために来訪していた。そこで巻きこまれたわけである。

「ウツソ・エヴィン、V2、行きます!!」

V2は軍による整備と改修を受けたため、ザンスカル帝国戦時を超えるスペックを有する。ミノフスキードライブユニットの有り余

るパワーは歴代ガンダム最速の速度と機動性を与えている。そのスピードはストライクダガー部隊の隊列を一瞬で崩すほどであった。

—V字の光の翼が空間にはためく。次世代型動力源「ミノフスキードライブ」を搭載し、リガ・ミリティアの象徴であったV2にとって、熱核融合炉さえ積んでいないストライクダガーなど木偶の坊に過ぎない。ビームサーベルを使った剣戟で蹴散らしながら道を切り開く。

「お願いだから僕の邪魔をしないでくださいよ！！死にたいんですか！？」

ストライクダガーの一機がビームサーベルで斬りかかるが、逆にV2のビームサーベルにサーベルの光芒ごと機体を切り裂かれる。サーベルを押し切ったように見えるのはV2のサーベルの出力が圧倒的であるゆえにストライクダガーのサーベルのビームをかき消してしまっただけだ。圧倒的パワーと運動性。機体の動きも柔軟かつ俊敏。これにストライクダガー隊のパイロット達は恐怖した。

「なんだよ、なんだよあのガンダムタイプはあああっ！！」

一機がライフルを乱射してくるがビームシールドが弾く。ビームシールド（正確に言えば似たような技術）はこの時代の兵士たちにとって一部の機体にしか（連合軍曰くユーラシア連邦だけの技術との事）搭載されていないはずの最新装備。門外不出であるはずの装備が目の中のガンダムタイプに搭載されている。それはこのストライクダガーを駆る、地球連合軍内のユーラシア連邦兵にとっては恐怖そのもの。

「なんで、なんで……あれがああっ……!?!?」

次の瞬間、彼はV2の光の翼に断ち切られ、戦死した。これが連合・ザフト双方を恐怖の渦に叩き落す光の翼を持つガンダムタイプの伝説の始まりであった……。

一さて、青いガンダムF91のパイロット「ハリソン・マディン」大尉は連邦随一の腕を誇るエースパイロット。連邦には珍しく異名持ちで、「青き閃光」の異名を持つ。ただし、性格に問題がいささかある。それはロリコンであることで、部隊の兵士たちの悩みの種であった。それを除けば優秀な軍人。彼はF91の性能を存分に発揮。連合の背後に控えるザフトのモビルスーツ隊を蹴散らす。

「この程度か……私を満足させられる奴はいなさそうだな……」

敵機はF91の機動性についてこれないようで、面白いくらいに落ちていく。ウェスバーを使わずとも流れ作業的に落とせるというのは退屈その上無い。噂のザフトの誇る新鋭機の姿も見えるが、機種転換中のようで、数は少ない。

「さて、この青い閃光が相手をしてやろう!!」

ハリソンはザフト新鋭機の部隊に向けてF91を呐喊させる。ビームライフルの射線をバレルロールやインメルマンターンなどを使って回避する。AMBAC、と併用したその機動は鋭く、連合と比

べてモビルスーツ戦に慣れているザフトのパイロット達も舌を巻く。

「アイツ、速い!!」

「小型がなんだったんだ!! 小さいだけのナチュラルの人形のくせに……!」

ザフトのパイロット達は口々にF91が小型である事と連合系の機体に見られる特徴を備えていたため、そう罵倒する。だが、F91はその常識を覆す力を持つ。

「もらった!!」

F91はザフト最新鋭の「ゲイツ」以上の小回りの良さで背後を取り、ビームサーベルを突き刺す。それは一瞬の出来事。

F91はその能力でザフトを圧倒する。それはガンダムタイプであるゆえの力。ザフトも連合もその意義に気づくのはまだ先の事であった。

特別編のようなもの……その4 「光の翼」 (後書き)

記述を訂正しました。

行間その54「宇宙戦艦ヤマト 3」(前書き)

「宇宙戦艦ヤマト 新たなる旅立ち」編です。

行間その54「宇宙戦艦ヤマト 3」

—2201年。旧・ガミラス帝国総統「デスラー」から入った通信は地球連邦にとって大恩ある「イスカンダル」が本来の軌道を外れ、暴走を始めたという内容。レビル將軍は直ちに宇宙戦艦ヤマトとその友軍部隊に救援部隊として出立を指令。ヤマトに乗り組んでいた菅野直枝は降りられなくなったのでそのままヤマトに同行することになり、古代進の管轄の戦闘班預かりの身となっていた。

「戦闘班か。佐渡大先生も粹なことをしてくれるぜ。コスモタイガーの訓練でも受けておくかな……」

と、自室でのんびりと漫画を読みながらくつろぐ菅野。本来の所属部隊の502への復帰は代理人員の関係上まだ無理なので、こうしてヤマトにいるわけだが……。そこに驚くべき人物がやってくる。部屋のドアが開き……

「ナ～オ♪」

「むっ、その声はニパ、ニパか！ ひさしぶりだな……ん？ 待て！ お前、どうしてヤマトにいんだあ！？」

「私だけじゃないぞ」

「何？」

「私もいますよ」

「ぶはあ、宮藤！！ てめえもか！？」

菅野が驚くのは無理はなかった。そこにいたのは502での同僚のニッカ・エドワーディン・カタヤイネン（ニパ）と501で共に戦った宮藤芳佳だった。ちなみにニパの容姿はショートカットと金髪で、少年のように見えるのが特徴である。

前線任務についているニパはともかくも、宮藤はガリア解放後は軍の命令違反や規律違反が陸軍や海軍の一部で問題視され、予備役へ編入されたはずであるが……。

「宮藤、なんでお前がヤマトに？」

「は、はい。ニパさんが菅野さんの様子を見に来たんですけど、ちょうど冬休みの観光旅行で私もいたんで、北郷さんが取り計らってくれたんです」

「北郷さんが？へえ、さすが坂本さんのお師匠様だぜ」

宮藤曰く、自分は復学した学校が冬の長期休みに入ったので観光で未来へ来ていたのだが、そこでニパとばったり会った（ニパは菅野とエイラの様子を見に、501を訪ねたことがあるので、宮藤らと面識あり）。

そこに更に訓練中の北郷章香とも再会し、彼女が菅野を追いかけるのにいいだろうと、訓練航海に出た巡洋艦に乗せてくれ、それから更にヤマトに移乗してきたとの事。艦隊には巡洋艦が何隻かいたのでその内のどれかからの移乗だろうと菅野は踏んだ。

「ううゝむ……まさかお前らが来るたあ……考えてなかった」

「それはそうだけど、せっかくだから案内してくれよう宇宙戦艦、それも噂のヤマトに乗れたんだから」

「そういやそうだな。よし行くぞ」

菅野達は3人でヤマト観光ツアーを行なった。元々移民船として造られ始めた経緯があるヤマトは連邦の歴代艦船でも随一の居住性を誇る。それを楽しまないといけない。自分たちは臨時乗組なので、正規の配置にはついていない。その点は楽である。ヤマトの自動通路を使い、各所をみて回った。まずは居住区の娯楽の一つ「映画館」

。丁度往年の名画……と言っても菅野たちにとっては「30年後」の映画だが……の「オリエント急行殺人事件」が上映される。3人で見ることにした。

内容としては、かの有名なアガサ・クリスティーの生んだベルギー人探偵「エルキュール・ポアロ」がオリエント急行で遭遇した事件とその顛末を描いている。豪華キャスト陣演じる登場人物たちの人間模様など……映画ファンとしては見ておきたい作品。こういったものはあまり見たことのない宮藤も圧倒された。

その後は工作室、艦載機格納庫、生活班の炊事室などを見て回った。工作室では扶桑などの各国の依頼で宇宙用ストライカーユニットの開発に勤しむ真田志郎の姿があった。

「真田さん、何してんスカ？」

「ああ、君たちの世界の国々からの依頼でストライカーユニットの開発に協力していてね。その設計中なんだ」

「ふえ、凄いですね」

「これは俺としても初めてのものだったが、一週間でおよその理論は分かった」

「一週間!？」

驚く宮藤とニパを尻目に菅野は言う。

「真田さんだからなあ」と。彼は宇宙一の天才じゃなかろうかという声もちらほら聞かれる。彼ならどんな異星人の超兵器も一発で理解できるとの評判も高く、『真田さんがあと5人いれば宇宙征服も可能』と囁かれている。

「君たちになるべく早く宇宙で戦える力となるこいつを完成させた

いが、エンジンの燃費改善が手間取っていてね……」

「大変ですね」

「何、装甲板用の宇宙合金の生成などに比べれば楽しめるよ」

真田は試作段階のロケットストライカーユニットを3人に見せる。それは後に穴拭智子や黒江綾香が暗黒星団帝国の本格的侵攻の際に使用する「秋水」の試作機。姿は一年後の完成機に近いが、エンジン部が若干大きく、その割に、燃費が悪く、魔力消費量に見合わぬ稼働時間が課題であった。彼を以てしてもその解決に至るのはこれからさらに半年の月日を要し、実戦機の配備には一年を要する事になる。

真田と別れると、次は艦載機格納庫に向かった。そこでは艦載機が整備を受けていた。

格納庫には元々戦闘機用に設計されていた都合上、モビルスーツは可变モビルスーツ（外宇宙航行用に改修済み）の航空機形態、VFもファイター形態で積まれていた。今回の航海以後はこの混成編成だそうである。艦載機の内訳は新コスモタイガー（古代機含め）が20機、Z系可变モビルスーツが10機、VF（AVF以後の高性能機）が15機と軽空母と同様の数を積んでいる。以前は全て戦闘機で固められていたが、白色彗星帝国戦で地球の工廠能力が低下。戦闘機は空母に優先配備されるようになったので、さしもの「英雄」のヤマトもすべては受領できない。そこで真田が発案した編成がこれであったとか。

「わあ……凄いですねこのコスモタイガー……前よりシャープになってますう」

「何でも最新のタイプで、武装強化型らしいぞ」

「へえ、これがこの時代の戦闘機……中々かっこいいじゃないか。痺れるな」

宮藤は501在籍時に見たコスモタイガーよりも更にシャープになった姿に見とれる。機体塗装は塗り替えが進んでいる新制式塗装の機体上面を濃緑色、下面を明灰白色とするカラーリング。

実はというと、このコスモタイガーは2199年当時よりも更に設計に改良が加えられたタイプで、連邦軍内での書類分類は白色彗星帝国戦時を、A型とし、2200年製造分を、B型、生産第3000番代以降の2201年以後製造機体を戦闘機としての決定版の、C型、としている。ヤマトにはそのタイプを装備する将来有望な部隊が配置されたわけである。

「おっ、来てるな」

「古代さん」

菅野達は古代進に敬礼し、古代も応える。古代曰く、自身の愛機のコスモタイガーを整備に来たとのことである。古代は元々、戦闘班畑の出身。初代艦長「沖田十三」の死後はなし崩しに指揮権を受け継いだ、元来は戦闘機乗りでもあるので度々空戦を行なっている。

「菅野、君は戦闘班預かりとなったのは知っているね」

「はい、佐渡大先生から聞いてます」

「暇があればコスモタイガーなどの訓練を行っておいてくれ。いつ敵との交戦があるかわからんからな」

「了解ッス」

「宮藤くん、ニパくん、君たちの処遇も追って決める。数日以内に通達するからそのつもりで」

「了解です」

ヤマトは結構な大所帯であるが、班によっては兼任するケースもあ

る。そのためある意味では人手不足と言えるので実のところは猫の手も借りたいのだ。それを表す一コマであった。

ーヤマトは太陽系を抜けようとしていた。目的は大恩あるイスカandalの救援。そしてデスラーが交戦したという未知の敵の撃滅。だが、このヤマトの行為が一年後に地球圏に三度の危機をもたらすことになってしまう。それは正に運命の皮肉であった。

ーガミラス星跡 宙域

ここ、ガミラス星が、あった、空域ではその原因を作った張本人達
がいた。その正体は遙かなる二重銀河を本拠とする星間帝国「暗黒
星団帝国」。その派遣軍であった。

ー暗黒星団帝国マゼラン方面第一艦隊旗艦「プレアデス」艦橋

「報告いたします。元ガミラスの艦隊がどこかへ通信を行なった模
様」

「うむ。通信は傍受できたのか？」

「はい。それによると銀河系の辺境の太陽系のようです」

「ああ、あのガトランティスが国家中枢を葬られたという場所か……
…侮れん敵だ」

「どういう事です、司令」

「君は知らんのか、あの白色彗星帝国の崩壊を」

「はっ……」

彼らはそれぞれ暗黒星団帝国軍のマゼラン方面第一艦隊司令官の「デューダー」中將とその上司のマゼラン方面総司令官の「メルダーズ」大將。彼らはガミラス残党が太陽系に通信を送った事に危機感を募らせる。太陽系はかのイスカンダルがその技術力を授けたとの噂がある星の所在地。彼らが恐れるタキオン粒子文明をイスカンダルから受け継いだ可能性が高い。暗黒星団帝国が恐れおののいていた白色彗星帝国を崩壊への旅路に追いやったほどの力。かつての一大星間文明の遺産である戦闘種族をも手懐け、共存している恐るべき敵。彼らの危惧と、過剰な機械文明の発達で種としての生命力が衰え、生命体としては末期的な状況を打開しようとする、兼ねてからの民族的希求はこの一年後、この時の国家元首「グレートエンペラー」の後継者で、翌年に即位する「スカルダート」聖総統によって実行された地球侵攻の電撃作戦として現実となる……。

行間その55「宇宙戦艦ヤマト 4」(前書き)

短めです。

行間その55「宇宙戦艦ヤマト 4」

―宇宙戦艦ヤマトは本来の乗員ではない3人を加え、都合、3度目の航海に乗り出した。目標は暴走を始めた「イスカンダル」。そこへたどり着くのがヤマトとその同行艦達の使命であった。

宮藤芳佳は古代進により「基本、生活班・炊事科、預かり。ただし緊急事態には医療班・戦闘に加える場合もある」との通達により、古代の婚約者で、生活班長・リーダー手などを兼任（最近是指揮訓練も受けているとの事）している「森雪」の配下となった。ニパは菅野同様に「戦闘班預かり」となり、熱くなりがちな菅野のお目付け役のような役割を担わされる事になった。そのためなし崩し的にコスモタイガーなどの機動兵器の訓練を受けることになった（予備機は真田が多めに用意してくれるとの事）。菅野とニパはまずコスモタイガーとVFの訓練を毎日数時間ずつ受ける傍ら、一日も早く戦闘機乗りとして促成させるため、数時間の空戦訓練の後に、偵察ローテーションを受け持たされた。と言っても偵察機の護衛機としての役割ではあるが。古代の課す訓練は過酷といっても過言ではなかったが、最前線に身をおくことが多いヤマトにあっては音を上げるわけにはいかないのはわかっていた。帰還すると、2人は真っ先に宮藤のところに行き、宮藤に指圧マッサージ（宮藤は実家が診療所である都合上、その方面の知識も持ち合わせている）をしてもらっていた。

「ふう……楽になったぜ」

「大変ですね」

「そりゃ訓練だけでなく、偵察機（VEF-19D ウォーニングカリバー。偵察用に改修された幾つかのVF-19を真田が貰い受け、ヤマト艦内工廠で更に早期警戒機として仕上げたもの。軍もヤ

マトでの運用結果しだいで制式採用を決定するとの通達を出している。形式番号・愛称は暫定的なもの）の護衛もやらされるからな……キツイぜ」

「宇宙じゃストライカーユニット使えませんしね。戦闘機ってキツイんですね？」

「ああ。特にヤマトに積んであるVFは高性能と引き換えに操縦性は犠牲にしてるエース用の機体だからな……しかも特にじゃじゃ馬の特務用のA型だし……正直、死ぬぜ」

ヤマトは最前線に赴く都合上、必然的に高性能機が必要となってくる。そこで各飛行隊や訓練校から優秀な人材を選んだ上で配属させ、任務に見合う機材を決定していた。今回積んでいるのは主にVF-19A。工廠ではそれをベースにした攻撃型の研究も進んでおり、真田が何機かを改造を行なっているという。

「Z系もZプラスC4型が6機と新型のP型が4機積んでるし……あれを乗りこなすのは根気いるよ」

同じく、苦勞しているニパも同意する。ヤマトに配属された人員は各部隊から選抜されたエースであったり、腕っこきを自認する新人達。特にVF乗り達には地球人だけでなく、メルランディ系のエースも多くいる。今回のヤマト艦載機要員は女性比率が6対4であり、宇宙の他民族との共生が進んでいる時勢を感じさせる。そこに全くド素人の自分たちが混じっているのかと思うときもあるが、彼らは笑って自分たちを受け入れてくれ、鍛えてくれている。そんな彼らの想いに応えたいのだろう。

「よっ、お疲れさん」

「坂本さん」

「お疲れさま。どうですか？」

「俺の番の時も今んとこは異常なし。平和そのものだ。」

ヤマトの艦載機部隊の暫定的なチーフである坂本茂が休憩室に入ってくる。ニパの挨拶に軽く答えると飲み物を一杯飲む。彼は古代が課す訓練を難なくこなしてみせる腕の持ち主で、上層部からはかつてのコスモタイガーでのトップエース「加藤三郎」の後継を期待されているが、当人は「ヤマトの艦載機隊長は士官学校の後輩の加藤さんの弟に継がせたい」との意志を持っており、近いうちに異動を申し出る可能性を示唆している。

「芳佳ちゃん、ヤマト亭の今日の献立はなんだったかな」

「今日は確かカツ丼です」

「おお！あれ旨いんだよ……芳佳ちゃんも手伝ったのか？」

「は、はい。カツの味付けとかチーフに見てもらいました。おいしいですよ」

「そりゃ楽しみだ。先に食堂に行ってるぜ。土星空域を通り過ぎたらワープするから早めに食っておけよ」

坂本茂は舌を鳴らし、食事が何よりの楽しみのようで、勇み足で食堂に向かっていった。ヤマトの食堂「ヤマト亭」の味は連邦軍の中でも旨い部位に入ると評判であり、ヤマト配属後の楽しみの一つでもあるからだ。加えて今日からは501では炊事担当が多かった芳佳が手伝っているとあっては当然であった（坂本は以前、芳佳の料理を食べた経験があるので余計である）。

「ワープか。その前に飯を食っておかねえと……ヤマトは速いから土星なんてすぐに通り過ぎちゃうぜ！」

「そりゃ大変！芳佳、行くぞー！」

「はいっ！」

3人はヤマトが空間跳躍^{ワープ}に入る前に食事を済ますべく、駆け足でヤマト亭へ向かった。その様子を見ていた他のヤマト乗組員たちもワープ前に空腹を満たしておくべく、彼女たちが続いた。ヤマト亭は今日也大忙しであった。

一 工作室

「技師長、VF-19の改造、終わりましたね」

「ああ。2門のレーザー砲塔を下部に追加し、攻撃型に仕上げた。まだ風洞試験は行っていないが、さほど空力特性は変わらんだろう」

「名前はどうします」

「そうだな……さしずめ、アサルトカリバー、だな」

「他の機体の改修はどうします」

「あと一機の改修が済み次第、配備し、それで試験運用を行なうからだな。今回はエクスカリバーの改良を探る目的もあるしな」

真田はVF-19「エクスカリバー」を改造し、同機の可能性を探るべく様々な改造を試験的に行っていた。攻撃型・早期警戒型などのバリエーションが新星インダストリーから提案されているが、今年の連邦軍には、戦後、になった都合上、予算は前年ほど多く配分はされていないので大規模な機体の新造は難しい。そこで連邦軍

は真田志郎に同社からの依頼を受けさせ、ヤマト艦内工廠で既存機からの改造という形で完成させて、そこで試験運用を行う事になった。ヤマトに初めてVFが配備された背景には、実はこういった政治的事情も絡んでいた。

—この時、ヤマトの現在位置は土星に達しつつあった。

行間その56「宇宙戦艦ヤマト 5」(前書き)

今回は菅野を追いかける2人のウィッチと地球で訓練中の一人の元ウィッチに触れます。

行間その56「宇宙戦艦ヤマト 5」

一宇宙戦艦ヤマトに乗り込んだ3人のウィッチたち。それを追いかける一隻の宇宙空母があった。その名は「伊吹」。主力戦艦改級戦艦空母第15番艦に当たり、波動砲を拡散波動砲に次ぐ新型波動砲「拡大波動砲」の試作タイプに換装された、戦中であつた前年度の予算で造られた最後の空母である。その艦に乗り込んでいたのは……。

「バルクホルンの奴……宮藤の様子が気になるからってあたしに頼むなよな」

シャーロット・E・イエーガーであつた。ガリアが解放された事で相棒のフランチェスカ・ルッキーニと共にアフリカに派遣されていたが、ひよんな事から2人は第31統合戦闘飛行隊「ストームウィッチーズ」に在地していた。その原因を作ったのはルッキーニで、助けられた夜に、あろうことか、部隊員達全員の乳を揉んでしまった。それで同隊に在籍していたティアナ・ランスター（元・時空管理局局員）にお仕置きとばかりにスターライトブレイカーの試し打ちの標的にされ、さらにマルセイユによって雑用係にされてしまった。シャーリーは本国の最終型レシプロストライカーユニット「P-51H、マスタング、」（501で使用していたものの最終生産型）と第二世代（正確には戦後第一世代）ジェットストライカーユニット「F-86 セイバー」（1944年冬を持って、陸軍航空隊は空軍として分離独立したので、シャーリーは空軍に横滑りで移籍。空軍初の後退翼主力ジェットストライカーユニットでもあつた）の受領を名目に（ルッキーニは抜け出せる口実が無かつた）、VF-9「カットラス」でリベリオンに帰国。ストライカーユニットを受け取ったのだが……その日の晩のことである。

「なんだよバルクホルン。わざわざ国際電話なんてかけて……なん
か用か？」

「その、なんだ……リベリアン、お前に頼みがある」

「ん？ 珍しいな。頼みって？」

「実は宮藤の様子を見に行 って欲しい」

「うふ、フフフ。なんだそんなことか……」

「そんなことはなんだ！ 宮藤が未来に行ったのだぞ、私は心配で夜
も眠れんのだ……！」

「はいはい、分かってますよ♪。見に行 ってやるから今日はもう寝
ろよ」

バルクホルンは本国奪還戦に従事する傍ら、先の戦いから妹のよう
に思っている宮藤のことが気になって仕方が無いのである。特に一
人で未来へ観光に行ったということが手紙で知らされると柄にも無
く取り乱す有様であった。そこでバルクホルンを心配したシャーリ
ーはこの話を引き受けたわけである。未来へ行くと北郷章香から宮
藤が宇宙戦艦ヤマトを追いかけていった事を知らされた。事情を話
し、北郷と共にヤマト艦隊への増援として派遣される伊吹に乗艦し
たわけである。

「ヤマトは土星からワープしていった。ワープ先の座標は通達され
ているから、そこで合流するという事だ」

「へえ……ワープねえ……SFの世界のものが実現してるってのも
変な話ですね」

「何せここは数百年後だ。何があっても不思議じゃない。乗るVF
は決まったのか？」

「いえ」

「いっておくが、AVFはじゃじゃ馬だからやめておけ。マジで死

ねる」

「ええ……。前にシミュレーターで一回動かしてみたんですけど、扱いきれませんでした」

「だろ？私もそのクチだ。高性能求めるならメサイアだ。あれならEXギアで何とか使えるからな」

「分かってます。今朝、確保しときました」

「速いな」

「乗るんなら速い機体のほうが良いんで」

シャーリーはVFの基本はカットラスで理解したのだが、AVFはその飛行特性から扱いきれないと判断。その後継ながら堅実な作りと、EXギアで操縦性が改善された「VF-25メサイア」を選んだようである。スピードを追い求める彼女にとってAVFと同等以上の速力を持った同機は最高の一品。さっそく前衛型のF型を確保し、パーソナルマークを書きこんでもらったわけである。北郷はまだ決めていないが、指揮官仕様機に乗るのは確実であろう。

「そう言えば手紙受け取ってましたけど、誰からのんです？」

「ああ、陸軍の昔の戦友だよ。隠居してるところを無理やり上に引っ張り出されたからぶーたれてるよ」

北郷はそう言って笑う。彼女の戦友といえば、所属軍は違えど同期であり、穴拭智子達のかつての上官であった「江藤敏子」大佐（1937年時中佐）である。彼女の場合は実家で隠居中のところを陸軍参謀総長「梅津美治郎」大将直々の懇願に押される形で復帰したの経緯を手紙に書いていた。復帰後はミドルティーンに若返った体にまんざらでもないようで、元部下の黒江がVF乗りとして名を上げている事に、ライバル心を芽生えさせたのが、意気揚々とVFの訓練を始めたようである。

「さて、行くぞ大尉。訓練だ。菅野やニパの奴らには負けていられん」

「VFはどうするんです？」

「格納庫にあるのを適当に拝借させてもらう」

「いいんですか、それ」

「いいんだよ。隊長たちには後で説明しとくから」

「……」

「どうした大尉」

「いえ、なんでもないっす」

シャーリーは思わず閉口した。こうして物事を事後承諾させることはどことなく坂本美緒にそっくりである。いや、美緒が北郷に似たというのが正しいだろう。扶桑かどこかに「あの親あって、この子あり」とかいう諺か何かがあるが、この場合は「この師あって、あの弟子あり」というのが正しいだろう。シャーリーはつくづくそう思った。

一地球 日本

「黒江、久しぶりね」

「え、え……、え、江藤隊長！？どうしてここに！？」

黒江は2201年初頭当時、丁度1年前に預かり、それ以来面倒を

見ている篠ノ之箒と共に暮らす傍ら、故郷の世界に戻った弟子の一人のフェイト・T・ハラオウン（2201年時はフェイトはなのはの世界で16歳を迎え、高校生活を送っている）に連絡を取って、箒の故郷の世界を探させていた。それで、フェイトとの連絡を終えて基地の建物から出てきたところを江藤とばったり再会したのだ。

「梅津閣下直々に懇願されて現役に戻ったのよ。それで訓練を受けに来たってわけ。それにしても可愛くなったわね」

「からかわないでくださいよ！！穴拭やヒガシにもそれやられてるんですからあゝ！氣にしてるんですからねっ！」

「ハハ、それは知らなんだ」

江藤のからかいに思わず顔を膨れさせる黒江。2201年当時はやっと外見上の年齢が14歳程度に見えるほどになったが、それでも15、6の外見を持つ戦友達には水を上げられている感があり、3人でカラオケニ行ったら一人だけ子ども料金だったという悔しい思いも経験しているとか。

「ちようどいいところに来た。バルキリーの操縦法教えてくれ」

「はい？」

「もう一回言うぞ。バルキリーの操縦法を教えてください。嫌とは言わせないぞ」

「えっ、ち、ちょ……まっ、待ってくださいよ隊長……！」

「問答無用、隊長命令よ」

江藤は黒江を有無を言わず、格納庫へ連行していった。果たして黒江の運命や如何に？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3060m/>

ドラえもん のび太とスーパーロボット軍団

2011年10月26日14時01分発行